むると退くると。今昔「いかさまにも、これは、わが進退にかからんずるものなめり」 二かけひき。 三たちゐ。ふるまひ。やうす。盛衰記「容貌美麗にして、進退見つべかりければ」 四職務に就くことと、これを去ることと。去就。 五心のままに扱ふこと。枕「小法師ばらのもたぐべくもあらぬ屏風などの高き、いとよく進退し、疊などをうち置くと見れば」

進退これ谷(きはま)る 【句】『詩經の大雅桑柔篇に「人亦有レ言、進退維谷」とあり』如何ともする能はざる窮地に陷る。

しん-たい 心體 【名】 一しんしん(心身)に同じ。 二心象の本體。

しん-だい 新題 【名】 新に課せる題。

しん-だい 審題 【名】 題に對して、文を作る時、まづ題意を審かに辨へて後、筆を取り、稿を起すこと。

しん-だい 寢臺 【名】 ねだい(寢臺)に同じ。

しん-だい 身代 【名】 一『白居易の詩に「早年以二身代一、直赴逍遙篇」とあり』 しんせい(身世)に同じ。 二家の財產。しんしやう。家貲。

身代打つ 【句】 身代をうちこむ。

身代が蒲鉾になる 【句】 身代がゆがむ。

身代が廻(めぐ)る 【句】「身上が廻る」に同じ。

身代の尾が見ゆ 【句】 多かりし財產減じて、人より數へらるるほどになる。心中乃は氷の朔日「病の根を拔き、このやうに身代の尾も見せず」

身代を棒に振る 【句】 あることのために身代を無くなす。

身代を破る 【句】 身代を無くなす。身代限をなす。天の網島「身代破り女夫別れする時は、男ばかりの恥ぢやない」

じん-たい 人體 【名】 一人のからだ。柳樽「人體にとりて琵琶湖は臍の穴」 二にんてい(人體)に同じ。〔仁體〕 謡曲(張良)「あっぱれ、器量の人體かなと思ひながらも」

じん-たい 靱帶 【名】〔動〕『羅 Ligamenta』 關節の骨と骨との間にありて、その兩骨の衝突を防ぐ彈力のある筋、また貝類の殼片を繫ぎとむる、彈力ある筋、卽ち貝の柱の稱。

じん-だい 神代 【名】 かみよ(神代)に同じ。

神代の四弓 【句】 後世、神道家の說に依れば、大日靈(オホヒルメムチ)尊の持ちたまひし坐陣弓、高皇產靈(タカミムスビ)尊の天稚彥(アメワカヒコ)命に賜ひし發向弓、瓊瓊杵(ニニギ)尊に隨從せし諸神の持ちたまひし護持弓、彥火火出見(ホホデミ)尊の持ちたまひし治世弓の倂稱。

しんたい-うかがひ 進退伺 【名】 官吏が過失ありし時、責を引きて、自己の進退を上長官に仰ぐこと、又そのために差出す文書。

じんだい-かうじゆつせう 神代講述抄 【名】〔書〕 出口延佳(ノブヨシ)の講說を聞書せるもの。五卷。山本廣足の編。

じんだい-かうだんしよ 神代講談書 【名】〔書〕 日本書記神代卷を、俚言にて註釋せるもの。十卷。撰者詳かならず。

しんだい-かぎり 身代限 【名】 身代全部を債權者に差出して、債務に充つること。現時の家資分產と破產との倂稱。

じんだい-き 神代紀 【名】〔書〕 日本書紀の神代の卷の稱。

じんだい-きあしかび 神代紀葦芽 【名】〔書〕 日本書紀神代卷を註釋せるもの。三卷。本居大平(オホヒラ)の著。

じんだい-きひかい 神代紀祕解 【名】〔書〕 日本書紀神代卷の上卷を、片假名にて註せるもの。十七卷。源雅胤の著。

じんだい-くけつ 神代口訣 【名】〔書〕 日本書紀神代卷を註釋せるもの。その說、多く佛意を交ふ。五卷。忌部(インベ)正通の著。

しんたい-けい 身體刑 【名】〔法〕 たいけい(體刑)一に同じ。

じんだい-けいづ 神代系圖 【名】〔書〕 天之御中主神より天種子命に至る神代の系圖。一卷。平田篤胤の著。

しんたい-けうせいじゆつ 身體矯正術 【名】 徒手にて、種種の單運動を反復して、惡姿勢を矯正するもの。もと我が國の學校體操の基礎法として行はれしが、今は各箇演習の行はるるにつれ、その必要を見ざるに至れり。矯正術。

しんたい-けん 身體權 【名】〔法〕 人格權の一。人が、不法に、その身體を害せられざる權利。

しんたい-けんさ 身體檢査 【名】 身體をあらためしらぶること。

しんたいけん-もんゐん 新待賢門院 【名】〔人〕 後醍醐天皇の妃。藤原公廉の女。後村上天皇の御母。御名は廉(ヤス)子。興國年中、皇后となり。正平十四年崩ず。

じんだい-さんそ 神代纂疏 【名】〔書〕 にほんぎさんそ(日本紀纂疏)に同じ。

しんたい-し 新體詩 【名】 明治十八九年頃西洋の詩風を參酌して起りたる、從來の歌と形式を異にせる長歌。

じんだい-じ 深大寺 【名】 武藏國北多摩(キタタマ)郡神代村大字深大寺にある眞言宗の古刹。天平五年福滿童子の創建。同國荏原(エバラ)郡世田谷(セタガヤ)なる吉良氏再興し、巨刹たりしが、今は萱葺の小堂を存するのみ。

しんたいし-じん 新體詩人 【名】 新體詩を作る人。

じんだいじ-そば 深大寺蕎麥 【名】 昔、武藏國深大寺の邊の名產なりし蕎麥。

じんだい-じま 神代縞 【名】 織物の縞柄の古代なるもの。

しんだい-しや 寢臺車 【名】 鐵道列車の內部に寢臺の設備をなしたるもの。

じんだい-しやうご 神代正語 【名】〔書〕 神代の事を、古事記にもとづき、その遺漏を日本書紀に取り、假名にて記せるもの。二卷。本居宣長の著。

じんだい-しゆ 神代酒 【名】 にごりざけ(濁酒)に同じ。

じんだい-すぎ 神代杉 【名】 數百年の間、地中に埋もれる杉の材。淡黑色にして、木理美し。

じんたい-せいりがく 人體生理學 【名】 せいりがく(生理學)二に同じ。

じんたい-そくていがく 人體測定學 【名】 人體の尺度・比例及びその他の物質的特性を研究する科學。

しんだい-つきれつしや 寢臺附列車 【名】 寢臺の設備ある鐵道列車。

じんだいのまき-うずの-やまかげ 神代卷髻山蔭 【名】〔書〕 日本書紀神代卷を讀む者の心得をしるせるもの。二卷。本居宣長の著。

じんだいのまき-ひえうせう 神代卷祕要抄 【名】〔書〕 日本書紀撰述の事、舊事記・古事記の事、日本書紀私記の事、日本書紀を講ずる式、竟宴の事などを記せるもの。十二卷。多田義俊の著。

じんだいのまき-ふうえふしふ 神代卷風葉集 【名】〔書〕 日本書紀神代卷につき、種種の書を引きて、專ら自說を述べたるもの。八卷。山崎垂加の著。

じんだい-ひやうちゆう 神代評註 【名】〔書〕 神佛習合の說を記せるもの。四卷。龍(リウ)熙近(ヒロチカ)の著。

しんだいぶつ-じ 新大佛寺 【名】 伊賀國阿山(アヤマ)郡阿波村にある眞言宗の寺。建久七年俊乘坊重源の開基。寺號は神龍寺。

しんだい-むし 寢臺蟲 【名】〔動〕『兵營の寢臺にて、この蟲に苦しめらるること多きよりいふ』 なんきんむし(南京蟲)に同じ。

じん-だいめいし 人代名詞 【名】〔語〕 人の名に代へて用ふる代名詞。自稱(第一人稱)・對稱(第二人稱)・他稱(第三人稱)の三種に分つ。各その條を見よ。人稱代名詞。

じんだい-もじ 神代文字 【名】 神代に用ひたりと言傳ふる文字。卽ち日文(ヒフミ)・秀眞(ホツマ)・天名地鎭(アナイチ)等の總稱。何れも、後人作僞の形跡あるのみならず、字母の配列に止まり、これを用ひて記載せる文書存在せず、容易に信ずるを得ず。かみよもじ。

じんたい-もでる 人體モデル 【名】 人間をモデルとして用ふること。もでる參照。

しん-だいや 新金剛石 【名】 無色・透明なる鋼玉石を、ブリリヤント形に切りしもの。

しん-たいやう 眞太陽 【名】〔天〕『英 True sun』 實際に人の目に映ずる太陽。(平均太陽に對して)

しん-たいやうじ 眞太陽時 【名】〔天〕『英 True solar time』 眞太陽日の二十四分の一。こうせいじ(恒星時)參照。

しん-たいやうじつ 眞太陽日 【名】〔天〕『英 True solar day』 太陽の一南中より次の南中までを、一日二十四時間と定むるもの。地球公轉の結果、吾人の目には、太陽は黃道上を東方に運動するごとく見え、且つその速度、冬速かに夏遲きため、一日の長さ、從って一分・一秒の長さに長短あり。太陽日。眞時。こうせいじつ(恒星日)・へいきんたいやうじつ(平均太陽日)・じさ(時差)參照。

しんだいりん-わかしふ 新題林和歌集 【名】〔書〕 諸歌人の詠を、題によりて類聚したるもの。作者は、大かた新明題和歌集のに同じ。十六卷。撰者詳かならず。

しん-たう 神道 【名】 一我が國に發達せる敬神・尊王を骨子とせる道德思想。かみのみち。かんながらのみち。(儒道・佛道に對して) 二神道教派の一。惟神(カムナガラ)の大道を擴張し、我が國固有の神教を世界に宣揚するを教義とし、その教務を主管する所を神道本局といひ、現時これを東京市麻布區笄町に置く。もと神道事務局と稱せしが、明治十七年に太政官・教導職を廢し、教師の任免・黜陟を管長に委せしより、神道教派の一となり、同十九年に現名に改む。

しん-たう 侵盜 【名】 侵し盜むこと。

しん-たう 震蕩 【名】 怖しきほどふるひうごくこと。ゆりうごかすこと。

しん-たう 宸悼・軫悼 【名】『しんきん(宸襟)を見よ』 天子の哀悼せらるること。

しん-たう 深悼 【名】 深くいたむこと。

しん-たう 新刀 【名】 一新に鍛へたる刀。あらみ。 二慶長以後に鍛へたる刀。時勢漸く泰平に向ひし頃の作なるが故に、次第に實用に遠ざかりて、刀文の美を重んずるに至れり。(古刀に對して)

しん-だう 新道 【名】 新に開きし道路。しんみち。新路。(舊道に對して)

しん-だう 臣道 【名】 人臣たる者の守るべき道。

しん-だう 神道 【名】 一『易經の觀卦象傳に「聖人以二神道一設レ教、而天下服矣」とあり』 靈妙なる道。 二神。神祇。天道。太平記「末代のしるし、王法を神道棄てたまふ事と知るべし」 三しんたう(神道)に同じ。 四墓前に通ずるために開きたる道。墓門。

神道の碑 【句】 しんだうひ(神道碑)に同じ。

じん-だう 人道 【名】 一人の往來すべき道。(車馬道に對して) 二人たる者の行ふべき道。人たる道。人倫。 三とつぎの道。「道。交合の道。

じん-どう 仁道 【名】 仁の道。人のふむべき道。

じん-だう 荏箪 【名】 じんどう(荏箪)を見よ。

しんだう-いつしんりう 神道一心流 【名】 劍法の一派。櫛淵彌兵衞宣根を祖とす。

じんだう-がくは 人道學派 【名】〔哲〕 じんだうしゆぎ(人道主義)に同じ。

しんたう-かた 神道方 【名】 江戸幕府の職制の一。寺社奉行の所管にて、神書を講修し、神祇の故實、祭事の舊典を掌りしもの。吉川惟足(コレタル)の子孫世襲せり。

じんだう-けう 人道教 【名】 じんるゐけう(人類教)に同じ。

しんたう-けうだうしよく 神道教導職 【名】 明治六年神官教導を改稱せしもの。同九年三部に分ち、毎部に管長を置き、次いで四部に改め、同十一年四部の區分を廢し、同十四年神道教導職總裁及び副總裁の職を設け、翌年神官を教導職に兼補する例を廢し、有栖川熾仁(タルヒト)親王總裁に、議官岩下方平副總裁に就職せしが、後任の人を闕き、同十七年廢止す。

しんたうけうだうしよく-そうさい 神道教導職總裁 【名】 前條を見よ。

しんたうけうだうしよく-ふくそうさい 神道教導職副總裁 【名】 前前條を見よ。

しんたう-ごぶしよ 神道五部書 【名】〔書〕 倭姬(ヤマトヒメ)命世紀・天照座(アマテラス)伊勢二所皇太神宮御鎭座次第記・伊勢二所皇太神御鎭座傳記・豐受皇太神宮御鎭座本紀・伊勢二所太神宮寶基本紀の五部の神書。

しんたうごぶしよ-せう 神道五部書抄 【名】〔書〕 神道五部書を、片假名にて註釋せるもの。六卷。岡田正利の著。

しんたうごぶしよ-せつべん 神道五部書說辨 【名】〔書〕 神道五部書の、何れも後世の僞書にして、世俗を惑はすものなる由を說明せるもの。十二卷。吉見幸和(ヨシカズ)の著。

しんたう-しうせいけう 神道修成教 【名】 しうせいけう(修成教)に同じ。

しんたう-しふ 神道集 【名】〔書〕 神道の由來・八幡・鳥居などの事項、五十箇條ほどを記せるもの。八卷。僧聖覺の著。

しんたう-しふがふけう 神道習合教 【名】 しふがふけう(習合教)に同じ。

しんたう-しふせい 神道集成 【名】〔書〕 神道に關する一切を集めたるもの。十二卷。德川光圀の編。

しんたう-じふにぶしよ 神道十二部書 【名】〔書〕 倭姬世紀・御鎭座次第記・御鎭座本紀・御鎭座傳記・寶基本紀・天口事書・古老口實傳・御奉祀記・御鎭座本紀・櫻殿規式帳・心御柱記・神鳳鈔の十二部の神書。十二卷。

しんたう-じむきよく 神道事務局 【名】 しんたう(神道)二を見よ。

しんたう-じや 神道者 【名】 神職又はその類の人。色男十人三文「あの人は神道者か知らん、鈴を落して來たのだらう」

じんだう-しゆぎ 人道主義 【名】 一人道を旨とする主義。 二〔哲〕『英 Humanism』 歐洲の中世紀に、教權の拘束に反對して起りたる主義。卽ち人の理想とする人生の粹は、古典的學科にありとし、これによりて、高尙雅致ある品性を養成するを旨とし、物質的要求を重要視せざりしもの。人文主義。

しん-たうしよ 新唐書 【名】〔書〕 舊(ク)唐書を改修せしもの。二十二卷。卽ち本紀十卷、志五十卷、表十五卷、列傳百五十卷。列傳は宋の宗祁(ソウキ)の作、その他は歐陽修の作。(舊唐書に對して)

しんたう-すゐこでん 神稻水滸傳 【名】〔書〕 しゆんけつしんたうすゐこでん(俊傑神稻水滸傳)を見よ。

しんたう-そうげん 神道宗源 【名】〔書〕 次條に同じ。

しんたう-たいい 神道大意 【名】〔書〕 卜部家神道の大意を、假名にて記せるもの。一卷。卜部兼直の著。一名、神道宗源。

しんたう-どくご 神道獨語 【名】〔書〕 神職に非ずして、神道を弄ぶ人人の心得を論辨せるもの。一卷。伊勢貞丈の著。

じんたう-の-さね 神道札 【名】 わたがみ(綿嚙)に同じ。

しんだう-ひ 神道碑 【名】 神道卽ち墓門に建つる碑。神道の碑。

しんたう-べんわく 神道辨惑 【名】〔書〕 伊勢兩宮・神道五部書、その他、神道に關する、種種の論を記せるもの。二卷。持寶院聖應の著。

しんたう-ほんきよく 神道本局 【名】 しんたう(神道)二を見よ。

しんたう-みやうもくるゐじゆせう 神道名目類聚鈔 【名】〔書〕 宮社・神社・祭器・幣帛・冠履及び社司の職などの事を、分類して記せるもの。三卷。野殿某の著。

しんたう-むねんりう 神道無念流 【名】 劍法の一派。福井兵右衞門嘉平を祖とす。

じんだう-もんだい 人道問題 【名】 人道上の問題。道德上の問題。

しんたう-やへがきでん 神道八重垣傳 【名】〔書〕 天にも地にも、皇帝にも、國司にも、八重垣あることを述べて、百官・農・工・商の教になるべき事どもを記せるもの。五卷。藤原睿延の著。

しんたう-ゆゐいちけう 神道唯一教 【名】 ゆゐいちしんたう(唯一神道)に同じ。

しんたう-りう 新當流 【名】 一劍道の一流。塚原卜傳を祖とす。鹿島新當流。 二馬術の一派。神尾織部を祖とす。

しんたう-りう 神道流 【名】 劍法の一派。飯篠家直を祖とす。

しん-たかね 新高直 【名】〔商〕 今までになき高直。〔取引所の語〕

じんだ-がめ 糂汰瓶・甚太瓶・糝粃瓶・秦太瓶 【名】 糂味噌を入るる瓶。徒然「糂汰瓶なりとも、執心とならんものは捨つべし」

しん-たく 信託 【名】 一信用して委託すること。 二〔法〕 しんたくじげふ(信託事業)に同じ。

あいうえお　かきくけこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの　はひふへほ　まみむめも　やゆよ　らりるれろ　わゐゑを

しん たく 神託【名】神の託宣。おつげ。かみごと。かみよせ。盛衰記「惡ニ神託一驚ニ示現一」

しん-たく 新宅【名】㊀新しく造りたる家。㊁分別。別家。

しんたく-ぐわいしや 信託會社【名】認可を得て、信托業を營む一種の會社。多くは社會上最も信用ある財産家を以て組織す。

しんたく-けいやく 信託契約【名】〔法〕擔保附社債の信託につき、委託會社と受託會社との間に締結したる契約。

しんたく-さうこ 信託倉庫【名】有價證券その他貴重品の特別保護預のために設けたる倉庫。安全倉庫。

しんたく-じげふ 信託事業【名】或會社と信託契約を結び、その債券又は株券の發行に關する事務を取扱ひ、又は擔保品を管理して、債權者のために、債權の辨濟に必要なる處置をなす等の外、信託によりて、個人の財産又は遺産の管理等をなすこと。

しんたく-しや 信託者【名】他人に財産の管理を信託したる人。

しんたく-しようしよ 信託證書【名】信託契約の證書。委託會社並びに受託會社の商號、社債の總額・利率・償還の方法及び期限、各社債の金額等を記載し、委託・受託の兩會社の代表者署名して、各會社に一通づつ保存すべきもの。

しんたく-はふ 信託法【名】たんぽつきしやさいしんたくはふ(擔保附社債信託法)を見よ。

しんたく-びらき 新宅開【名】新築の家の落成祝。

しんたく-よきん 信託預金【名】信託の目的を以て、信託業務を營める個人會社又は銀行になす預金。

しん-だけ 新竹【名】今年生じたる竹。ことしだけ。わかたけ。

しん-たつ 進達【名】㊀人を薦めて出世せしむること。㊁官署への上申を取次ぐこと。

しん-だつ 侵奪【名】侵入して奪ひ取ること。

しんたつ-しよ 進達書【名】㊀官府へ進達する書類。㊁官府への上申書などの添狀。〔江戸時代の語〕

じんだ-みそ 粮粃味噌・甚太味噌・糂粏味噌・秦太味噌【名】じんだ(糂粏)㊀に同じ。

隣の粮粃味噌【句】つまらぬ物にても、他人の物は美しく思はるるが人情なり。〔諺語〕

しん-たん 心膽【名】こころ。きもだま。魂膽。

心膽を寒からしむ【句】ぞっとせしむ。恐怖を懷かしむ。

しん-たん 深潭【名】しんじん(深潭)の誤讀。

しん-たん 薪炭【名】まきと炭と。

しん-たん 震旦・神丹・眞丹・振旦【名】〔地〕しな(支那)に同じ。盛衰記「就中、大唐震旦に於て、天台山長安城の良なり」

しん-だん 宸斷【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天皇の御裁斷。

しん-だん 診斷【名】診察して、病の性質・原因などを判斷すること。

しん-だん 神壇【名】神を祭る壇。かみどこ。かむとこ。祭壇。

しん-だん 眞檀【名】〔植〕せんだん(旃檀)の別稱。

しんたん-しやう 薪炭商【名】薪炭をあきなふ商店、又その商人。

しんだん-しよ 診斷書【名】診斷の旨を書きたる書。

しんだん-しようしよ 診斷證書【名】醫師が診斷の旨を記したる證書。

しんたん-ちきさう 身端直相【名】〔佛〕三十二相の一。身軀端正にて、屈まらざる相。

しんたら-せうしやう 新太郎少將【名】〔人〕『新太郎はその通稱、左近衛少將に任ぜられしによりていふ』いけだみつまさ(池田光政)に同じ。

しんだら-だいしやう 神達羅大將(梵 Cindra)【名】〔佛〕十二神將の一。本地は普賢。十二支中の酉に配せらる。

しん-たる 新樽【名】新しき樽。新酒の樽。堀川波の鼓「新樽の酒ざさんざや」

しん-ち 新地【名】㊀新しく開きたる土地。新開地。㊁『遊廓は、新開の地に設くること多ければなり』くるわ。いろざと。遊廓。例へば京都の祇園新地、大阪の北の新地・南新地等の類。〔關西の方言〕天の網島「新地への御出でか。御せいが出まする」㊂新しき領地。〔新知〕狂言(ひめのり)「この中、御前につめてあれば、新地をくわっと下された。何とめでたい事ではないか」

しん-ち 新知【名】㊀あたらしき知りあひ。(舊知に對して)㊁あらたに受けたる知行。〔新地〕

しん-ち 心地【名】『心の善惡を生ずること、恰も大地の五穀を生ずるが如くなる義』心の狀態。こころもち。心境。

しん-ち 深智【名】ふかき智慧。

しん-ち 眞智・眞知【名】〔佛〕㊀こんぽんち(根本智)に同じ。㊁しやうち(聖智)に同じ。

しん-ち 神智【名】くすしき智慧。

しん-ち 神地【名】神のおはします處。宗廟・山陵・神社などの在る土地。社地。

しん-ち 侵地【名】侵略したる土地。

しん-ぢ 鍼治【名】鍼にて、病をなほすこと。はり療治。

しん-お【名】しんるゐ(親類)を云ふ。〔薩摩國の方言〕

じん-ち 人智・人知【名】人間の知識。

しん-ちう 神廚【名】神饌を調理するくりや。御供所。

しん-ちう 神籌【名】神の如く靈妙なる計略。神謀。神策。

しん-ちう 新鑄【名】しんしゆ(新鑄)の誤讀。

じんち-えうろく 仁智要錄【名】〔書〕箏曲に關せる事を記せるもの。十三卷。藤原師長の著。

しんち-おん-じ 新知恩寺【名】東京市下谷區にある淨土宗の寺。關東十八檀林の一。本尊は阿彌陀如來。一名、幡隨院。

しんち-がよひ 新地通【名】遊廓に通ふこと。くるわがよひ。しんち(新地)㊁參照。天の網島「ぬしの新地がよひも」

しん-ちき 新知己【名】新しき知人。

しん-ちく 新築【名】新に築き造ること、又その築き造りたる物。

しん-ちく 新竹【名】しんだけ(新竹)に同じ。

じん-ちく 人畜【名】㊀人間と畜類と。㊁にんちく(人畜)に同じ。

しんちく-がい 新竹街【名】〔地〕臺灣の北部にある都會。臺北を距ること十七里半餘。淸朝時代には、新竹縣といへり。

しんちくわん-ぎやう 心地觀經【名】〔書〕だいじようほんしやうじんちくわんぎやう(大乘本生心地觀經)の略。盛衰記「心地觀經に悲母恩深如大海と說きたまへるも、今こそ思ひ知られけれ」

しんぢけえと(英 Syndicate)【名】〔經〕企業家が、共同の目的のために結合せる組合團體。その加入組合員の私經濟上の獨立活動を制限して、共同の義務の下に、利益の調和を計り、且つ自由競爭の狀態を避くるを目的とするもの。けふどうきげふ(協同企業)參照。

しんぢ-こ 宍道湖【名】〔地〕出雲國松江市及び八束(ヤツカ)・簸川(ヒカハ)二郡に跨れる淡水湖。大橋川・天神川の兩路によりて東流して、中海(ナカウミ)に通じ、また佐陀川によりて外海に通ず。周回十三里。松江湖。

しん-ちしき 新知識【名】進歩したる新しき知識。

しん-ちちぶ 新秩父【名】秩父縞に似せて織りたる木綿織物。

しん-ちぢり 新松子【名】青きまつかさ。〔大阪の語〕

しん-ぢつ 親昵・親暱【名】したしみむつぶこと。昵懇。方丈記「或は妻子・眷屬のために造り、或は親昵・朋友のために造る」

しん-ちん 深沈【名】㊀おちつきて物事に驚かぬこと。沈著。㊁夜の更けゆくこと。

しん-ちん 新陳【名】新しきとふるきと。さらとひねと。

新陳代謝【句】㊀次第に古き事物は滅び去り、新しき事物の代ること。㊁〔生〕生物が生存する作用の現象、即ち外界より攝取する物質を、自己の體質に同化せしめて、自體の一部となし、一定の生理的作用を呈したる後、分解・排泄する現象。

しん-ちや 新茶【名】㊀新葉を製したる茶。その年に製したる茶。(古茶に對して)㊁

初めての遊女。〔元祿時代の語〕浮世親仁形氣「新茶なれども、門前に、白人・野郎の駕籠絶えず」

しん-ちやう 身長【名】身のたけ。身の長さ。體長。

しん-ちやう 伸長【名】ひきのばすこと。

しん-ちやう 伸張【名】のばし張ること。

しん-ちやう 振張【名】ふるひはること。擴張すること。振起。

しん-ちやう 深長【名】奥深くして、含蓄の多きこと。深奥。

じん-ちやう 腎腸【名】㊀腎臟と大小腸と。㊁心中に思ふこと。

じん-ちやう 人聽【名】じんてい(人聽)に同じ。

じん-ぢやう 訊杖【名】昔、囚人を拷問する時、背又は臀部を打つに用ひし杖。

しん-ちやく 進著【名】進みて著座すること。太平記「殿上には著座したまはで、直ちに御前に進著せらる」

しん-ちやく 新著【名】新に到著すること、又その物。

しん-ちゆう 新註【名】㊀新に註釋すること、又その註釋。㊁宋儒の手に成れる經書の註釋。(古註に對して)

しん-ちゆう 宸衷【名】しんきん(宸襟)に同じ。

しん-ちゆう 臣忠【名】臣下の忠義。盛衰記「各守ニ帝猷一抽ニ臣忠一自今以後、莫レ信ニ浮讒一」

しん-ちゆう 神忠【名】神に忠誠を盡すこと。謡曲(鵜飼)「御神託にまかせて、なほも神忠を致さん。有りがたや」

しん-ちゆう 身中【名】からだのうち。からだぢゆう。

しん-ちゆう 心中【名】心のうち。心底。胸中。盛衰記「忘ニ護法之誓於心中一」

しん-ちゆう 眞鍮・鍮鉐【名】〔鑛〕『もと天然の鍮石をいひ、人造のを假鍮といひしに對せし語なりしが、後に人造をも、一般に呼ぶに至りしものといふ』銅と亞鉛との合金。特種の黄色を呈す。銅の分量は百分の六十乃至七十にして、その分量の㸃すに從ひて、赤色を帶び、亞鉛の分量多きに從ひて、白味を帶ぶ。器械・用器具・裝飾品等の製造に用ふ。黄銅。

しん-ぢゆう 心中【名】㊀心中だてをすること。人に對して義理を立つること。㊁男女の情交の末かけて變らぬことを、證據によりて示すこと。その證としては誓紙・斷指・入墨・放爪・斷髮など行はれたり。あひたいじに。けしずみ「ある男、女へ云ひかけたるには、われを思さば心中をし給へ、女いかにも何事なりとも望み給へといらへければ」㊂情交ある男女の、周圍の事情のために合意的に共に死すること。あひたいじに。情死。

しん-ぢゆう 深重【名】しんちよう(深重)に同じ。

じん-ちゆう 藎忠【名】まごころ。まこと。忠誠。じんしん(藎心)參照。

じん-ちゆう 盡忠【名】眞心を君に捧ぐること。

じん-ちゆう 人中【名】人のなか。

人中の騏驎【句】『南史の徐勉傳に見ゆ』傑出したる人の譬。

人中の獅子【句】『釋氏要覽に引きたる治禪經後序中の語』前條に同じ。

人中の龍【句】『晉書の宋纖傳に見ゆ』非凡にして測るべからざる人の譬。

じん-ちゆう 腎蟲【名】〔動〕寄生蟲の一。線蟲類中の最大なるものにて、雌は長さ三尺に及び、雄はその三分の一に達す。肉食獸、特に魚類を食ふ獸類の腎臟に寄生す。

じん-ぢゆう 淨頭【名】〔佛〕『漢字の宋音』厠の掃除を掌る役。〔禪宗の語〕庭訓往來「淨頭」

しんちゆう-いろ 眞鍮色【名】眞鍮の如き色。かないろ。

しんぢゆう-かさねゐづつ 心中重井筒【名】淨瑠璃の一。養子なる紺屋徳兵衛は、實兄なる重井筒屋藤十郎の抱(カカヘ)おふさに迷ひしが、實兄は二人の間を割かんとして強意見をなし、それらが因となりて、心中せる次第を作りしもの。三齣より成る。近松門左衛門の作。

しんちゆう-くわもんゐん 新中和門院【名】〔人〕中御門天皇の女御。藤原家煕の女。櫻町天皇を生む。御名は尙子(ヒサ)。准三宮。享保五年薨ず。年九十。

しんちゆう-げんじせん 眞鍮元字錢【名】『背孔の上部に、元の字ある故にいふ』寛保の初年に、京都の商人が官に請ひて鑄造せし寛永眞鍮錢。

しんちゆう-ざ 眞鍮座【名】江戸幕府の眞鍮錢を鑄造せし役所。安永元年設置、天明七年廢止。

しんちゆう-しもんせん 眞鍮四文錢【名】くわんえいしんちゆうせん(寛永眞鍮錢)に同じ。

しん-ぢゆうしやう-しゆぎ 新重商主義【名】〔經〕『英 New merchantile system』他國との通商貿易を個人の自由活動に任せず、關稅政策によりて、外國貨物の輸入を妨げ、國內の需要は、他國の給與を待たずして、自辦に依り、生產し得ざるべからずとなす主義。

しんちゆう-せん 眞鍮錢【名】㊀眞鍮にて鑄造したる錢。㊁くわんえいしんちゆうせん(寛永眞鍮錢)の略。

しんぢゆう-だて 心中立【名】人と契りたることを守りとほすこと。俗曲(道成寺)「誰れに見せうとて紅・鐵漿附けよぞ、みんな主への心中だて」

しんぢゆう-てんのあみじま 心中天網島【名】『「天網恢恢疎にして漏さず」の意なる天の網を、地名の網島に言掛けたるもの』淨瑠璃の一。紙屋治兵衛といふ者、蜆川(シジミ)の遊女小さんに迷ひ、女房の苦節、小さんとの義理立などより、終に治兵衛・小さん、網島大長寺にて最後を遂ぐることを作れるもの。近松門左衛門の作。

しんちゆう-ときん-えき 眞鍮鍍金液【名】眞鍮を鍍金するに用ふる溶液。硫酸銅三〇、硫酸亞鉛二六、青化加里六〇、水一〇〇〇より成る。

しんちゆう-ときん 眞鍮鍍金【名】しんちゆうめつき(眞鍮鍍金)に同じ。

しんぢゆう-にまいゑざうし 心中二枚繪雙紙【名】淨瑠璃の一。遊女お島の情夫市郎右衛門は、弟の善次のために、寃罪を受けて、勘當せられて、相思の二人情死せんと約す。かくてお島は、主人天滿屋夫婦にそれとなく死別の意を表するを立聞きしたる善次は、縊然悔いて、心中後、兄の死體を肩に擔ひて立去るといふ筋。近松門左衛門の作。

しんちゆう-はく 眞鍮箔【名】眞鍮を紙の如く薄く展ばしたるもの。金箔に代へ、粗末なる器具に用ふ。

しんぢゆう-ふたつはらおび 心中二腹帶【名】淨瑠璃の一。近松門左衛門の作なる心中宵庚申と同事實を作りしもの。三齣より成る。紀海音の作。

しんちゆう-ぼたん 眞鍮釦【名】㊀眞鍮製の釦。㊁『學生の制服は、眞鍮釦を用ふること多きよりいふ』學生の隱語。

しんぢゆう-まんねんさう 心中萬年草【名】淨瑠璃の一。高野山吉祥院の小姓成田久米之助と、商人雜賀(サイカ)屋與治右衛門の女お梅とが、女人堂にて情死せしことを作りしもの。近松門左衛門の作。

しんちゆう-みがき 眞鍮磨【名】眞鍮を磨くに用ふる調劑。即ち酸化鐵を油にて煉りたるもの。

しんちゆう-めつき 眞鍮鍍金【名】眞鍮を或金屬の上に鍍金すること。

しんぢゆう-やいばはこほりのついたち 心中刃は氷の朔日【名】淨瑠璃の一。鍛冶屋平兵衛と平野屋小勘とが、寶永七年曾根崎の神明の森にて心中せしことを作りしもの。近松門左衛門の作。

しんぢゆう-よし 心中善【名】心意氣よきこと。情の厚きこと。天の網島「心中よし・意氣方よし・床よしの小春どの」

しんぢゆう-よひかうしん 心中宵庚申【名】淨瑠璃の一。侍出口半兵衛は、八百屋伊左衛門の養子となり、不在中に、姑のために妻千代を離別せらる。旅の途中、妻の家に立寄りたる半兵衛は、深く身にたしなまれ、再び妻を連れて、養家に歸る。歸れば養母に苛(サイ)まれ、終に夫妻奈良東大寺の大佛殿の勸進所にて心中することを作れるもの。近松門左衛門の作。

しんちゆう-らふ 眞鍮鑞【名】銅・眞鍮・鐵などの接合に用ふる鑞(ロウ)。眞鍮屑に亞鉛を加へ、或は少量の錫をも加へたるもの。泥狀とし、所要部に塗りたる後、吹管にて

加熱して用ふ。
しん-ちよ 新著【名】あたらしき著書。
しん-ぢよ 神女【名】女性の神。女神。天女。しんによ。
じんちよ【名】〔動〕すいさ(莎雞)を云ふ。〔豊後國の方言〕
しん-ちよう 深重【名】㊀奥ゆかしくおもおもしきこと。どっしりとして輕躁ならぬこと。㊁幾重にも重なれること。
しん-ちよう 愼重【名】つつしみぶかく、おもおもしきこと。
しんちよう-ぐみ 新徴組【名】江戸幕府が、文久三年浪士の才幹ある者を召集して、組織したる警備隊。從來の旗本の士の多くは太平に慣れて、用ふるに足る者稀なるにより、新に編成せしものなりしが、隊士中に、名を攘夷に藉りて、凶暴の行をなす者生ずるに及び、元治元年廢止せり。
しんちようぐみ-しはい 新徴組支配【名】新徴組の頭。
しん-ちよく 眞直【名】少しも曲りてあらぬこと。まっすぐ。
しん-ちよく 神勅【名】しんたく(神託)を一層敬ひていふ語。
しん-ちよく 進捗【名】しんぽ(進捗)を見よ。
しんちよくせんしふ-せう 新勅撰集抄【名】〔書〕新勅撰和歌集の中のある歌の本歌を考へ、同類の歌を擧げ、或は難註を加へたるもの。僧契沖の著。一名、難勅撰、又、新勅撰難註。
しんちよくせん-せう 新勅撰抄【名】〔書〕新勅撰和歌集を註せるもの。二十卷。僧堯眞の著。
しんちよくせん-なんちゆう 新勅撰難註【名】〔書〕しんちよくせんしふせう(新勅撰集抄)に同じ。
しん-ちよくせん-わかしふ 新勅撰和歌集【名】〔書〕二十一代集の一。後堀河天皇の貞永元年、藤原定家の撰進せしもの。二十卷。うぢがはしふ(宇治川集)參照。
しんちよくせんわかしふ-せう 新勅撰和歌集抄【名】〔書〕新勅撰和歌集を註せるもの。難波の神田正業(マサ)の草稿ありしを取捨して、自說を加へたるもの。八卷。僧組能の著。
しん-ちよもんしふ 新著聞集【名】〔書〕忠孝・慈愛・酬恩等の十八門に分ちて、見聞の事どもを記せるもの。十八卷。著者詳かならず。
しん-ちりめん 新縮緬【名】瓦斯絲を交ぜて織りたる縮緬。
しん-つう 身痛【名】身體のいたむこと。
しん-つう 心痛【名】㊀心のいたみ。しんぱい。㊁きようつう(胸痛)に同じ。
しん-つう 心通【名】外部に現れたる狀態にて、内容を神解すること。
じん-づう 神通【名】じんづうりき(神通力)の略。盛衰記「神通自在而、誘二雜化之衆生一」
神通の鏑矢(カブラヤ)【句】じんぞう(神頭)に同じかるべし。
じんづう-がは 神通川【名】〔地〕越中國にありて、富山灣に注ぐ川。飛驒國の宮川と高原川とこれに合流し、流勢急なるがため、舟揖を通ずるは、下流數里のみなれども、その河谷を通ずる道路は、飛驒・越中間の主要なる交通線なり。
じんづう-じよう 神通乘【名】〔佛〕『如來神變の加持力に依りて說きし教なるよりいふ。又人を乘せて、佛果に到達せしむるよりいふ』しんごんけう(眞言教)に同じ。正統記「東寺は、…弘法に賜ひて、永く眞言の寺とす。…この宗を神通乘といふ」
じんづう-りき 神通力【名】神變不可思議なる無碍(ゲ)の作用。神通。ろくじんづう(六神通)參照。
しん-づか 眞束【名】〔建〕小屋組の中央にある束(ツカ)。
しん-づけ 新漬【名】新に漬けたる漬物。
しんづ-しづ 靜靜【副】しづしづ。そろそろ。狂言(ひめのり)「梶原が二度の駈(カケ)と呼ばはって、しんづしづと引いて入りたる」
しん-づな 尻綱【名】しりづな(尻綱)の音便。
しん-つむぎ 新紬【名】綿絲をまぜて織りたる紬。
しん-つゐ 眞椎【名】〔醫〕脊椎の中、頸椎・腰椎のごとく、各別に分離し得べきもの。
しんづ-わ 後輪【名】しづわ(後輪)に同じ。
しん-てい 心體【名】こころざま。こころだて。
しん-てい 心底【名】こころ。心のおく。今國姓爺「但し職人が嫁ひか、心底聞かしや」
しん-てい 審廷【名】はふてい(法廷)に同じ。
しん-てい 眞諦【名】〔佛〕しんたい(眞諦)に同じ。
しん-てい 眞弟【名】實子にて、その法嗣たるもの。眞弟子。
しん-てい 進呈【名】さしあぐること。進上。呈上。
しん-てい 進程【名】進行のみちすぢ。進歩の程度。
しん-てい 新帝【名】新に位に卽かせたまへる天皇。盛衰記「新帝の供奉の人人、つれづれを慰みわづらひ」
しん-てい 新邸【名】新造の邸第。
しん-てい 新定【名】新にさだむること。
しん-てい 新訂【名】新に訂正すること。
しん-てい 新泥【名】㊀雨にて新に生じたるぬかるみ。㊁あらかべ。
しん-てい 深泥【名】どろ深きところ。ぬかるみ。太平記「玉趾を深泥・濕土の黷めるに汚れさせたまひ」
じん-てい 人丁【名】ひとかず。人口。
じん-てい 人定【名】『人定まる、卽ち寢靜まる義』今の八時頃。一說に、今の十時頃なりと。にんぢやう。
じん-てい 人聽【名】人の聽くこと。ひとぎき。
しんてい-きねん 神廷紀年【名】〔書〕天武天皇元年より後桃園天皇の安永七年までの、伊勢兩宮に關せる事柄を、年代順に記せるもの。六卷。石崎文雅の編。
じんてい-けん 人定權【名】〔法〕人定法によりて、定められたる權利。(天賦人權に對して)
じんてい-だうとく 人定道德【名】〔哲〕『英Positive morality』或社會において、現に行はれつつある道德律、現に行はれつつある道德說のごときものの總稱。
しんてい-づく 心底盡【名】相手の心底の如何によりて事を爲すこと。淀鯉出世瀧德「見るから互の心底づくと、きれはなれたる詞の末」
じんてい-てき 人定的【名】人工の加はるさま。人爲的。
しんてい-ばなし 心底話【名】心の底をうちあけての話。若風俗「誰がいふともなく、無用の心底話」
じんてい-はふ 人定法【名】〔法〕『英Positive law』主權者の直接もしくは間接に制定、もしくは承認したる法、卽ち成文法と慣習法との總稱。人爲法。制定法。(自然法に對して)
しん-てう 齔髫【名】『齔は齒の拔けかはること。髫は結髮の後に垂れたる義』をさなき頃。をさなき者。髫齔。
しん-てう 新調【名】㊀新にととのふること、又その物。川中島合戰「褥も新調、御會釋に及ばず御著座あるやうに仰せ上げられい」㊁あたらしき調子。
しん-てう 秦朝【名】支那の秦代の朝廷。しん(秦)參照。
しん-てう 晉朝【名】支那の晉代の朝廷。しん(晉)參照。
しん-てう 清朝【名】㊀支那の清代の朝廷。しん(清)參照。㊁しんてうくわつじ(清朝活字)の略。
じん-てう 晨朝【名】あさ。あした。
しん-でう 信條【名】『英Creed』教會の公認して、一般の信者に信仰せしむる教義。教條。
じん-でう 晨朝【名】〔佛〕㊀朝の勤行(ゴンギャウ)。朝の行。あさじ。謡曲「じんでうのひびきは生滅滅巳」㊁じんてう(晨朝)に同じ。
しんてう-くわつじ 清朝活字【名】漢字の活字の一種。字體は楷書にて、竪の橫細くして、縱太きもの。清朝。
じんでう-げ 晨朝偈【名】〔佛〕朝となふる偈文。
しんてう-たい 清朝體【名】清朝活字の體。(明朝體に對して)
しん-てき 清笛【名】清樂に用ふる笛。その律、明笛より半音づつ高し。
しん-てき 神笛【名】『專ら神樂に用ふるよりいふ』ふさぶえ(太笛)に同じ。
しん-てき 神敵【名】神の敵となるもの。

太平記「これは佛敵・神敵の最たれば」
しん-てき 神鏑【名】神の射たまふかぶらや。不思議のかぶら矢。太平記「神鏑聲を添へて、王城を差して鳴りて行く」
しん-てき 心的【副】『英Mental』心に關するさま。
じん-てき 人的【副】『英Personal』人に關するさま。
しんてき-くわてい 心的過程【名】〔哲〕『英Mental process』意識作用もしくは精神的性向、又はこれらの者の連續的變化。
しんてき-さよう 心的作用【名】〔哲〕『英Mental activity 又 Action』精神・意識の作用。こころの作用。
じんてき-ちえき 人的地役【名】〔法〕ぞくじんちえき(屬人地役)に同じ。
しん-てし 眞弟子【名】しんてい(眞弟)に同じ。
しん-てつ 沁徹【名】しみとほること。滲透。
しん-てふ 申牒【名】官廳の間にて、相互に、或事項を通ずること、又その文書。
しん-てふ 襯貼【名】〔文〕『襯の意はしんく(襯句)を見よ。貼は附著の義』文章上、露骨なる言辭を避けて、婉曲に思想の妙を感ぜしむること。
しん-てん 振天【名】㊀『孔子家語に「子路曰、願得二白羽若レ月赤羽若レ日、鐘鼓之音聲振二於天一旌旗繽紛、下蟠二於地一」とあり』音聲の天空にひびくこと。㊁武名を天下に揚ぐること。
しん-てん 進轉【名】進みゆくこと。進めうつすこと。
しん-てん 進展【名】進歩し、發展すること。
しん-てん 秦篆【名】せうてん(小篆)に同じ。
しん-てん 親展【名】㊀手紙の脇附(ワキヅケ)の一。名宛の人の開封せられんことを請ふ意の語。㊁電報にて、受信人の外、披見すべからざる意を表示するもの。その略符號は、和文はニカ、歐文はCLとす。
しん-てん 神典【名】神事に關する書物。神代の事を記したる書物。
しん-でん 神田【名】神社に附して、その用途に充つる田地。不輸租田の一。おほみだ。神田(ミト)。御戸代(ミトシロ)。社田。盛衰記「宮宮ばらの御領、神田・佛田をいはず」
しん-でん 新田【名】新に開きたる田地。
しん-でん 新殿【名】新に造營したる御殿。
しん-でん 深殿【名】奥ぶかき殿。深宮。
しん-でん 親電【名】天皇の御署名にて發信したまふ電報。
しん-でん 寢殿【名】㊀せいでん(正殿)㊀に同じ。㊁我が國中古の貴族の家の表座敷。寢殿造における邸内の主要なる建物。玄關・床間(トコマ)など無く、床上には疊なく、緣側には雨戸なき等、全く現今の家屋と異なり。母屋(モヤ)の外方に、一段低き廣廂(ヒロビサシ)を設け、その外方に、更に低き簀子緣(スノコ)あり、正面には階あり。その左右と緣先とには勾欄を附し、また廂の周圍には格子及び蔀(シトミ)を設け、四隅に妻戸あり。建築法にて、神社・寺院等のこれに依れるもの多し。源氏「さすがに、寢殿の内ばかりは、ありし御しつらひにかはらず」
しん-でん 神殿【名】㊀神を祀れる殿舍。かみどの。かむどの。㊁宮中にて、舊く八神殿に祭りし八神と天神・地祇とを祀れる所。八神と天神・地祇と別別に鎭坐せしも、明治五年合祀せられたり。しんでんさい(神殿祭)參照。
しん-でん 神傳【名】しんじゆ(神授)に同じ。
じん-でん 人天【名】人と天と。人間と天道と。神人。にんでん。てんじん。平治「沙羅雙樹の下にて、かりに滅度を唱へたまひしかば、人天共に悲しみき」
しんでん-かいほつ 新田開發【名】こんでん(墾田)に同じ。
しんでん-かた 新田方【名】江戸幕府の職制の一。下勘定所の分課、勘定衆の任にして、新田開發吟味、新田地代金の徵收・檢地、石盛(コクモリ)・高入(タカイレ)などの事を掌りしもの。
しんでん-さい 神殿祭【名】春季皇靈祭及び秋季皇靈祭と同日に、舊く八神殿に祀りし八祇と天神・地祇とを祭りたまふこと。春季のを春季神殿祭、秋季のを秋季神殿祭といふ。皇靈祭は夙に親祭なりしが、神殿祭は明治十二年始めて親祭と定まるに至れり。しんでん(神殿)㊁參照。
しん-てんじ 新典侍【名】典侍の下級なるもの。明治二年設置、同四年廢す。
しんてん-しよ 親展書【名】親展の旨を記したる書面。
しんでん-ちだい-きん 新田地代金【名】江戸幕府時代に、私人の開墾せる新田畠に就き、天領・私領の別なく、領主又は地頭に上納すべき地代金。
しんでん-づくり 寢殿造【名】〔建〕㊀中古の貴族の家の建築法。中央に寢殿ありて、その前に庭を造り、左右に、對屋(タイノヤ)を建て、對屋と寢殿との間は、廊ありて、通はるやうにせるもの。宮殿造。しよゐんづくり(書院造)參照。㊁屋根を四阿(アヅマ)の式に造ること。四阿造(アヅマヤヅクリ)。寄棟造(ヨセムネヅクリ)。
しんでん-ぬま 新田沼【名】〔地〕いづぬま(伊豆沼)に同じ。
しんでん-びき 神田引【名】江戸幕府時代に、神社に寄捨せし田畠に對して行ひし地租の免除。
しんてん-ふ 振天府【名】『しんてん(振天)㊀を見よ』宮城内吹上御苑の入口に建設せられ、明治二十七八年役及び臺灣役の戰利品、又は戰死者の寫眞等を藏めたまへる總白木造の御府庫。
しんてん-をう 信天翁【名】〔動〕あはうどり(信天翁)に同じ。
しん-と 新都【名】あたらしき都。新京。方丈記「古郷はすでに荒れて、新都は未だ成らず」
しん-と 新渡【名】㊀あらたに渡來したること、又その物。(古渡(コワタリ)・中渡(ナカワタリ)などに對して) 太平記「新渡の唐物など美を盡して」㊁新に設けたる渡船場。
しん-と 信徒【名】神佛などの信仰者。信者。敎徒。
しん-と 津渡【名】わたし。津頭。渡津。
しん-と 身圖【名】一身上の計畫。
しん-と 神荼【名】うつりつ(鬱壘)を見よ。
しん-と 神都【名】㊀みやこ(都)の尊稱。㊁しんしう(神州)㊀參照。㊂〔地〕うぢやまだ(宇治山田)を見よ。
しん-ど 嗔怒【名】いかること。
しん-ど 震怒【名】『詩經の大雅常武篇に「王奮二其武一如レ震如レ怒」とあるに本づく』天子の腹立。逆鱗。
しん-ど 神怒【名】神のいかり。
しん-ど 神奴【名】神社に隷屬せる賤民。
しん-ど 進度【名】進行の程度。「學課の進度」
しん-ど 眞土【名】〔農〕じやうど(壤土)㊀に同じ。
しん-ど 心土【名】表土の下に在る土層。底土。
しん-ど 伸度【名】〔天〕「月の伸度」を見よ。
しん-ど 信度(梵Sindhu)【名】〔地〕いんど(印度)の古稱。信毒。
しんど【副】『しんどしの語幹』しんどきさま。狂言(粟田口)「はあ、いかにしんどな」
じん-ど 人奴【名】人に使はるる奴。
しんど-いんでん 新渡印傳【名】中渡(ナカワタリ)の莫臥爾(モゴル)に類する、印傳革の一種。
しん-とう 針筒【名】雲水僧などが携ふる裁縫道具を容るる具。
しん-とう 眞痘【名】〔醫〕疱瘡の重きもの。殆ど全身發疹し、初は赤色の斑點を呈し、後には、その頂に水疱を生じ、遂に體熱の加はると共に、膿疱に變ず。
しん-とう 心頭【名】こころ。こころの上。
心頭を滅却すれば、火も亦涼し【句】〔佛〕『唐の杜荀鶴の夏日題悟空上人院の詩に「安禪不三必須二山水一滅二却心頭一火自涼」とあるに本づく』心機を滅すれば、火といへども涼し。
しん-とう 神燈【名】㊀神の照す燈火。㊁神に供ふる燈火。
しん-とう 神統【名】神の系統。
しん-とう 津頭【名】わたしば。わたし。渡頭。渡津。
しん-とう 脣頭・唇頭【名】くちびるのさき。くちさき。ことばのさき。
しん-とう 親等【名】〔法〕親族の間柄の遠近・親疎を示す等級。直系親のは、親族間の世數に依りて定め、傍系親のは、その一人

又はその配偶者より同始祖に遡りたる上、その始祖より、他の一人に下るまでの世數に依りて定む。我が國の民法にては、六親等以內の血族を親族と定む。又或親等に當る親族その者を指しては、何等親といふ。例へば、某と予とは二親等なりといふは、某は予の二等親なりといふと同一なるが如し。**とうしん**(等親)參照。

しん-とう 滲透【名】㊀しみとほること。心徹。㊁〔理〕『英 Osmose』素燒・膀胱の如き、しみとほり易き障壁を隔てたる、異なる二つの液體もしくは氣體の、その障壁を通じて、相混ずるに至る現象。

しん-どう 振動【名】㊀ふるひうごくこと。ふるひうごかすこと。㊁〔理〕『英 Oscillation 又 Vibration』物體が定まれる位置を、週期的に、前後左右に運動すること。振子の運動のごとき、その一例なり。**しんぷく**(振幅)參照。㊂〔理〕**たんいつげんうんどう**(單一弦運動)に同じ。㊃〔數〕一定の規則に從って逐次に算出せらるる數が、或限界を超えざると共に、また敢へて一定の極限に近づかざること。

しん-どう 震動【名】ふるひ動くこと、又ふるひ動かすこと。

六種の震動【句】〔佛〕**ろくしゆしんどう**(六種震動)を見よ。謠曲・第六天「にはかに大空冴えかへり、風雨・雷電肝を消し、六種の震動おびただしや」

しん-どう 神童【名】㊀才智の非常にすぐれたる童。㊁支那の科擧の名目の一。少年にして、奇才ある者。

十歳で神童、十五で才子、二十歳過ぎればただの人【句】十歳にして、神童と稱せられし者も、十五歳になれば單に才子と云はるるに止まり、二十歳を過ぐれば、毫も普通の人と異なるところなきに至る。〔諺語〕

じんとう 神東【名】〔地〕播磨國の舊郡の一。明治廿九年神西郡と合して、神崎郡となる。

じん-とう 人頭【名】㊀人のかしら。人のかうべ。㊁ひとかず。人口。人別。

じん-とう 腎竇【名】〔醫〕腎門と交通せる竇。血管・神經の通路なり。輸尿管。

じん-どう 荏筌【名】細き竹を編みて、河中に立て、魚を追入れて捕ふるもの。

(うどんじ)

じん-どう 神頭・鏃頭・磁頭・矢頭【名】『貫頭の音の轉じたるならん』矢じりの一種。形鏑矢(カブラヤ)に似て、中を刳(ヱ)らず、長さ二寸許、黑漆にて塗る。十訓「じんどうをはげて射おとして侍る、と申しければ」

しんどう-じ 神童寺【名】山城國相樂(サガラ)郡高麗村に在る、眞言宗新義派の寺。北吉野山と號し、金剛藏院とも稱す。本尊は千手觀音。厩戸皇子の草創と傳ふ。行基・眞辨・鑑眞等の高僧修行をここに積めり。

しんどう-すう 振動數【名】〔理〕『英 Frequency』振動體が單位時間中に振動する數。周期の逆數、即ち周期を以て、一を除したる商に等し。また波動をなせる物體にありては、波の長さを波長にて除したる商に等し。

じんとう-ぜい 人頭稅【名】直接人に賦課する租稅。

しんとう-ぶんせき 滲透分析【名】〔理〕とうせき(透析)に同じ。

じん-どうみやく 腎動脈【名】〔醫〕大動脈の枝にて、大動脈を通過する血液の一部を、左右の腎臟に導き入るるためのもの。(腎靜脈に對して)

しんどう-らいでん 震動雷電【名】**しだらでん**を見よ。

しんど-かう 心土耕【名】〔農〕深く心土のみを鋤きて軟かならしめたる耕作法。作土の惡變を妨ぎ、生產物を多からしむるに効あり。

しん-とく 神德【名】神の威德。

しん-とく 信德【名】㊀信心の功德。㊁佛法を信ずる德者。盛衰記「峯高准三是於信德之高二」

しん-とく 眞讀・信讀【名】佛典の文句を省略せずして、全部讀むこと。(轉讀に對して) 平家「八幡に百人の僧を籠めて、眞讀の大般若を、七日讀ませられたりける」

しん-どく 進讀【名】進講すること。貴人の前に進み出でて、讀書すること。

しん-どく 身毒【名】㊀身體にある毒。㊁身體を害する毒物。

しん-どく 愼獨【名】『大學に「所謂誠其意者、毋自欺也、如惡惡臭、如好好色、君子必愼其獨也」とあるに本づく』他人の居らぬ處にても、己れの身を愼しむこと。

しんどく 身毒・信毒【名】〔地〕しんど(信度)に同じ。

じん-とく 仁篤【名】情深く、人情のあつきこと。

じん-とく 人德【名】その人におのづと備はりたる德望。(金德に對して)

じん-とく 仁德【名】仁愛の德。

しんとく-くわん 進德館【名】㊀信濃國伊那郡高遠城内に在りし舊高遠藩の學校。萬延元年藩主內藤賴直の創立。㊁越前國今立(イマダテ)郡鯖江中小路に在りし舊鯖江(サバエ)藩の學校。文化十一年の創設。㊂丹波國何鹿(イカルガ)郡綾部屋敷町に在りし舊綾部藩の學校。正德五年の創立。

しん-とくせん 沈德潛【名】〔人〕支那淸朝の詩人。歸愚と號す。高宗に仕へて、太子太傅(タイフ)・禮部尚書に至る。唐宋八大家文集・古詩源・五朝別裁詩集等の著あり。乾隆三十五年歿す。

しんとく-だう 振德堂【名】丹波國多紀郡篠山(ササ)に在りし舊篠山藩の學校。明和三年藩主青山忠朝の創立。

しんとく-まる 信德丸【名】傳說の一。河內國高安の長者延年の子。癩及び、盲となりて、家を逐はれしが、和泉國蔭山の長者の女に救はれて、その婿となる。その後生家の衰へしを聞きて、大施行を天王寺に行ふ。時に延年は後妻の子を連れ來りて、信德丸に迎へられ、その孝養を受けたりといふ。淨瑠璃「攝州合邦が辻」にては、俊德丸に作れり。

しんとく-ゐん 愼德院【名】〔人〕德川家慶の諡。

しんど-けい 深度計【名】『英 Depth indicator』發射せられし魚形水雷が、進行中、進路の各點に於て、如何なる深さを有せしかを示す裝置。

しんど・し【形二】かひたるし。くたびれたり。〔關西の方言〕 長町女腹切「ああ、しんどうと、腰かけて」 春花五大力「わたしも、年よりの眞似で、しんどうてならぬわい」

しんとにい 同調法(英Syntony)【名】無線電信法にて、相互通信局間に、共鳴的受信裝置を備ふること。

しん-とめ 心止【名】てきしん(摘心)に同じ。

しん-どり 後取【名】㊀古、宮中にて、大酒の人の選ばれて、新年の御齒固(ハガタメ)に何銚し、天盃の餘瀝を飲むことをせし者。 榮花「殿上に、しんどりとかいひて、こちたく醉ひののしりて」㊁じひめ(次姬)に同じ。

しん-とりそ 新鳥蘇【名】〔音〕雅樂の一。高麗(コマ)樂にて、壹越(イチコツ)調に屬す。**ことりそ**(古鳥蘇)參照。 拾芥抄「新鳥蘇」

しん-ない 心內【名】心の中。心中。內心。(心外に對して)

しん-ない 新內【名】しんないぶし(新內節)の略。

しん-ない 脣內・唇內【名】〔語〕次條の略。

しんない-おん 脣內音・唇內音【名】〔語〕柔曇(ジフタン)學の三音の一。脣を用ひて發する音。P・B・Mの類。(舌內音・喉內音に對して)

しんない-ぶし 新內節【名】淨瑠璃の一種。寶曆の頃、富士松薩摩掾(サツマノジョウ)の門人鶴賀新內の語り出だししもの。常盤津の諸分派中、最も新しく、曲節悽惋、語るところ男女の心中を主とし、その流行は、世上に情死者を增加せしめたりといふ。新內。

しん-ないまく 心內膜【名】〔醫〕心臟の內面を被へる膜。

しん-なう 心嚢【名】〔醫〕心臟の外面を被へる二枚の薄くして強靭なる半透明の膜。勁膜の續にして、二枚の中間に心嚢液と稱する水樣液を有し、心臟の運動を容易ならしむ。

しんなう-すゐしゆ 心嚢水腫【名】〔醫〕心嚢の空所に水の溜る病。心臟病或は腎臟

病より起る。

しん-なし 心無し【名】內部の空虚なるもの。しんを入れざるもの。一代女「しんなしの大幅帶」

しんな-ぞめ 親和染【名】しんわぞめ(親和染)を見よ。

しんな-つめん 新七つ面【名】新歌舞伎十八番の一。曾呂利新左衞門七つの面によりて、鄙郷・羅生門・賴政・羽衣・殺生石・碇潜(イカリカヅキ)・葵の上の所作事を演ずるもの。福地櫻痴の作。

しん-なふ 進納【名】すすめ納むること。

しん-なん 信男【名】〔佛〕しんし(信士)㊀に同じ。

しん-なんぴん 沈南蘋【名】〔人〕支那淸朝の畫家。名は詮、字は衡齋。筆法精緻、著色妍麗、花卉・鳥獸を善くす。享保十六年(一說に同六年)長崎に來り、居ること二年にして歸る。爾來我が國の畫風一變せりといふ。

しんなり 嫋【副】たわたわ。しなやか。嫋嫋。

しんなり-づよし 嫋強し【形二】しなやかにして強し。ねばりづよし。

しん-に 嗔恚・瞋恚【名】しんい(瞋恚)を見よ。

しん-に 心耳【名】心と耳と。謠曲([illegible])「その聲心耳をすまし」

しん-に 眞に【副】まことに。じつに。

しん-にしゆきん 新二朱金【名】㊀新に鑄造したる二朱金。㊁まんえんにしゆばんきん(萬延二朱判金)に同じ。

しん-にしゆぎん 新二朱銀【名】㊀新に鑄造したる二朱銀。㊁あんせいにしゆぎん(安政二朱銀)に同じ。

しんにち 信日【名】〔人〕高僧。弘法大師の弟子。紀伊國新宮の人。最も律藏に精し。高野山八傑の一人。祕密傳法中興の祖。德治二年寂す。

しん-にふ 滲入【名】しみこむこと。しみいること。

しん-にふ 侵入【名】㊀無理して入りこむこと。㊁〔天〕『英 Ingress』太陽面又は木星面經過の始。

しん-にふ 浸入【名】ひたり入ること。ひたし入ること。

しん-にふ 進入【名】すすみいること。

しん-にふ 深入【名】深く入ること。ふかいり。

しん-にふ 新入【名】しんいり(新入)に同じ。

しん-にぶきん 新二分金【名】㊀新に鑄造したる二分金。㊁まんえんにぶきん(萬延二分金)の略。

しんにふ-けん 侵入權【名】〔法〕かいにふけん(介入權)に同じ。

しんにふ-せい 新入生【名】新に入學したる生徒。

しん-にぶばんきん 新二分判金【名】㊀新に發行したる二分判金。㊁まんえんにぶきん(萬延二分金)に同じ。

しん-にん 眞人【名】〔佛〕あらかん(阿羅漢)の譯語。

しん-にん 信認【名】信じて疑はぬこと。疑問なしと認むること。

しん-にん 信任【名】その人を信じて、事をまかすること。

しん-にん 新任【名】新に官に任ぜらるること、又その人。

しん-にん 親任【名】㊀親しみて萬事を任ずること。㊁天皇が、御自身にて、親しく官に任じたまふこと。親任式に依る任命。㊂しんにんくわん(親任官)の略。

しん-にん 神人【名】しんじん(神人)に同じ。

しんにん-くわん 親任官【名】勅任官中、何等の機關を經由せず、親任式によりて、天皇の親しく任命したまふもの。官吏中最上級に位し、一般高等官の官等以外に獨立し、天皇に直隸す。內閣總理大臣・各省大臣・宮內大臣・樞密院議長・同副議長・同顧問官・陸海軍大將等、その主なるものなり。

しんにんくわん-たいぐう 親任官待遇【名】親任官にあらずして、親任官と同一の待遇を受くること。親任待遇。

しんにん-しき 親任式【名】親任官を任ずる儀式、即ち天皇親署の後、內閣總理大臣・首座の國務大臣・宮內大臣又は內大臣がこれに副署したる官記によりて任ぜらるるもの。

しんにん-じやう 信任狀【名】『英 Letter of credence 又 Credentials』外交官を派遣する時、派遣國の元首より、駐在國の元首に宛てて送る文書。その外交官の氏名・官職・爵位・勳等及び差遣の目的と權限とを明記して、これを携帶せしむるもの。正副二通を作り、正本は國璽を鈐(ケン)して、元首に捧呈し、副本は捧呈式に先だち、駐在國の外務省に提出す。親書。國書。

しんにん-たいぐう 親任待遇【名】しんにんくわんたいぐう(親任官待遇)に同じ。

しんにん-とうへう 信任投票【名】『英 Vote of confidence』㊀或人を信任すべきや否やを決定するために行ふ投票。㊁議會が、內閣に對する信任の如何を決するために行ふ投票。

しんにん-ほふしんわう 眞仁法親王【名】〔人〕典仁(スケヒト)親王の御子。花園天皇の猶子。時宮と稱す。妙法院の門主、天台の座主たり。文化二年薨ず。年三十九。

しん-にゆう 之繞【名】しんねう(之繞)の訛。

之繞を掛ける【句】事を、實際よりも大げさに言ふ。輪を掛ける。

しん-によ 神女【名】しんぢよ(神女)に同じ。

しん-によ 眞如【名】〔佛〕『梵 Bhūtatathatā』(部多多他多)の譯語。眞實如常の義。宇宙萬有の實體・本性。永劫に變ぜず、平等無差別なる絕對眞理。佛の三身中の法身は、これに名づけたるもの。虛空無爲。實相。涅槃(ネハン)。空性。法性(ホッシャウ)。如來藏。えいち(叡智)參照。謠曲(山姥)「月眞如の光をかかげ」

眞如の月【句】〔佛〕眞如の理が衆生の迷妄を破るを、明月の夜の闇を照すに譬へていふ語。謠曲(班女)「眞如の月はくもらじを、知らでほどへし人心」

眞如の光【句】〔佛〕眞如の理が衆生迷妄の闇を破るを、光に譬へていふ語。

眞如の都【句】〔佛〕眞如は諸佛の證處なるによりて、都に譬へていふ語。

しんによ 眞如【名】〔人〕たかをかしんわう(高岳親王)に同じ。

しん-によ 信女【名】〔佛〕『うばい(優婆夷)の譯語』㊀在家の婦人にして、佛門に入りたるもの。㊁佛式によりて葬られたる婦人の戒名につくる語。(信士に對して)

赤い信女【句】『生前墓石に名を刻む時は、その刻みたる文字に朱を塗りおく習なるよりいふ』夫に先だたれたる女。ごけ。未亡人。 柳樽「摩訶般若赤い信女がまた孕み」

しんによ-いちじき 眞如一色【名】〔佛〕萬物の本體の一如にして、無差別なること。

しんによい-つう 眞如意通【名】〔佛〕しんそくつう(神足通)に同じ。

しんによ-えんぎ 眞如緣起【名】〔佛〕萬有が緣に由りて、眞如より生ずること。(阿賴耶(ヤラ)緣起に對して)

しんによ-じ 眞如寺【名】㊀京都市の北部衣笠(キヌガサ)山の麓にある臨濟宗の寺。相國寺の末寺。十刹の一。無著如大尼のその師佛光國師の爪髮を奉じて、この地に塔所を營みしを、高師直その地に就き、夢窓を請じて、住持とせしもの。後水尾天皇再興し、爾來皇女寶鏡寺尼宮歷代の菩提所となる。㊁上總國君津(キミツ)郡馬來田(マクタ)村大字眞里谷(マリヤツ)にある曹洞宗の寺。本尊は三體彌陀如來。寬正五年城主武田信興の所願、正嚴禪師の開基。

しんによしし-さう 身如師子相【名】〔佛〕三十二相の一。身體平正にして、威儀嚴肅なる相。

しんによ-じつさう 眞如實相【名】〔佛〕眞如が、萬有の眞の本體なること。

しんによ-じやくめつ-さう 眞如寂滅相【名】〔佛〕一切差別の妄想を離れたる眞如のすがた。

しんによ-だう 眞如堂【名】京都市吉田神樂岡(カグラヲカ)にある天台宗の寺。鈴聲山眞正極樂寺と號す。本尊は、慈覺大師の造りたる阿彌陀佛。戒算上人の開基。

しんによ-びやうどう 眞如平等【名】〔佛〕眞如の理の平等にして、衆生の差別的妄想を解脫(ゲダツ)せること。

しんによ-ほふしん 眞如法身【名】〔佛〕佛の本體、即ち法身は、眞如その物なること。

しん-ぬり 眞塗【名】黑漆にて塗ること、又その塗りたる物。

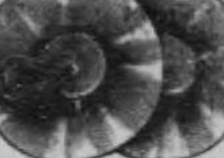
しん-ねう 之繞【名】『しねう(之繞)の音便』漢字の偏の一。迎・迫・逢・遊などの字の左に

ある辶の字。字書にては辵の部に屬す。しねう。
しん-ねこ 眞猫【名】人目をよけて、極めてしめやかに男女の語らふこと。
しん-ねっちたい 新熱地帶【名】〔地〕中央亞米利加以南の西大陸全土の稱。
しん-ねん 新年【名】新しき年。新歲。
新年の加日(ｶﾆﾁ)【句】〔天〕かにち(加日)の條下を見よ。
しん-ねん 深念【名】深く思ふこと。深慮。
しん-ねん 心念【名】㊀おもひ。こころ。㊁〔佛〕心に佛を念ずること。念佛。平家「心念口唱(ｸｼｮｳ)を忘れたまはずば」
しん-ねん 軫念【名】『しんいう(軫憂)を見よ』憂ひ思ふこと。痛念。心配。
しん-ねん 信念【名】㊀宗敎を信ずる心。信仰心。㊁自信の心。
しんねん-えんくわい 新年宴會【名】㊀一月五日新年の祝として、宮中にて、親任官・外國使臣等に賜ふ宴。㊁新年を祝するための宴會。
しんねん-じやう 新年狀【名】ねんがじやう(年賀狀)に同じ。
しん-ねり【貌】粘著力ありて、離れがたきさま。しねしね。
しんねり-むっつり【名】胸中を吐露せず、決斷の鈍きこと、又その人。
しんのう 神農【名】〔人〕支那上古三皇の一。姓は姜。火德の王たりしより、炎帝ともいひ、民に耕作を敎へしより、神農氏といふ。また草木を嘗めて醫藥を製せり。初め陳(今の河南省陳州府)に都し、後、曲阜(今の山東省袞州府曲阜縣)に居り、子孫相傳ふること三代・五百三十年。俳諧「神農の尻は本町(ﾎﾝﾁｮｳ)を通るやう」
しん-のう 親王【名】しんわう(親王)の音便。
しんのう-さい 神農祭【名】漢方醫が醫藥の祖・神農氏を祭りしこと。冬至の日に行ひたり。
しんのう-だ【句】くたびれたり。疲れたり。〔信濃國上田(ｳｴﾀﾞ)の方言〕
しん-の-ざう 心臟【名】しんざう(心臟)に同じ。今國銘鑑「二つの乳の間に心の臟とて、魂のある處」
じん-の-ざう 腎臟【名】じんざう(腎臟)に同じ。
しん-の-だいす 眞臺子【名】たいす(臺子)を見よ。
しん-の-とんぼむすび 眞蜻蜓結【名】緒の結び方の一。輪を三つ作り、中央を結び目とするもの。
しん-の-はしら 心の柱【句】はしら(柱)の條下を見よ。
しん-の-ほうじゆむすび 新寶珠結【名】緒の結び方の一。下の圖を見よ。

(新寶珠結)

しん-の-まはり【名】〔植〕いぬどくさ(犬木賊)に同じ。
しん-ば 神馬【名】㊀しんめ(神馬)に同じ。㊁瑞相を有する馬。しんめ。
しんば 新場【名】〔地〕東京市日本橋なる魚河岸の一部。
新場の犬【句】『新場に居る犬は、常に生魚を食ふため、毛の拔けたるによりていふ』毛の拔けて醜き犬。
しん-ば 新葉【名】新に出でたる葉。しんめ。若葉。
しん-ば 新派【名】㊀舊來の學說・技藝などに慊(ｱｷ)らずして、新に起りたる一派。(舊派に對して) ㊁〔佛〕我が國に流布せる佛敎中、鎌倉以後に勃興せるもの、即ち禪宗・淨土宗・淨土眞宗・法華宗・時宗の稱。㊂しんぱげき(新派劇)、又はしんぱはいいう(新派俳優)の略。(舊派に對して)
しん-ば 枕波【名】額などに印する枕の痕。謠曲「枕波の斜紅の、世に類なき姿かな」
じん-ば 人馬【名】人と馬と。
しんばあ【副】しばらく。暫時。〔土佐國の方言〕
しん-ばい 新醅【名】新に釀したるもろみ酒。
しん-ばい 信牌【名】證據とすべきしるしのふだ。
しん-ばい 心配【名】こころがかり。氣くばり。うれへ。きがかり。焦慮。
しん-ばい 神拜【名】㊀神を拜むこと。天智天皇「思無邪の三字は神拜の元本、毋二不敬一の三字は祭典の至用」㊁國司が、その管內の神社を參拜すること。更級日記「あづまより來り、神拜といふわざして、國の內ありきしに」
しん-はいいう 新俳優【名】しよせいやくしや(書生役者)に同じ。(舊俳優に對して)
しんぱい-がほ 心配顏【名】うれへがほ(憂顏)に同じ。
しんぱい-ごと 心配事【名】心配になる事柄。氣がかりなる事件。
しん-ばう 榛莽【名】亂れしげりたる草木。しんまう。榛蕪。
しん-ばう 寢房【名】ねや。ふしど。寢室。
しん-ばう 深房【名】奧ふかき部屋。內房。
しん-ばう 辛抱【名】㊀こらへしのぶこと。忍耐。㊁勤先を變へず、勤め續くること。
辛抱する木に金がなる【句】『木に氣を通はしていふ』辛抱强きものは、金持になる。〔諺語〕
辛抱の棒が大事【句】『辛抱を、車の輪などの心棒に通はしていふ』物事には、忍耐が大切なること。〔諺語〕
しん-ばう 神寶【名】神聖なる寶物。神社の寶物。かんだから。
三種の神寶【句】「三種の神器」に同じ。
しん-ばう 申報【名】㊀つげしらせ。報告。㊁しんぶん(新聞)に同じ。
しん-ばう 新報【名】㊀新しき知らせ。㊁しんぶん(新聞)に同じ。㊂ざっし(雜誌)に同じ。
しん-ばう 信砲【名】信號の砲聲。號報。
しん-ばう 進報【名】進みて報告すること。知らせ申すこと。盛衰記「縱ひ浪の底に消えうせぬと…後の世を御弔あれかしと思ひければ、進報しけるにこそ」
しん-ばう 新方【名】あたらしき方法。新法。
じん-ばう 人望【名】㊀人人の希望。保元「神慮にも叶ひ、人望にも背かじものを」㊁世人の思ひつき。人に信頼せらるること。人氣。
じん-ばう 尋訪【名】尋ね訪ふこと。
しんぱう-かた 神寶方【名】江戶幕府の職制の一。下勘定所の掛にて、日光・上野の東照宮・增上寺等諸國の名社・大寺の修繕、及び伊勢神宮遷座の際、神寶・諸調度の類を取扱ひしもの。
しん-はうじゆ-むすび 新寶珠結【名】しんのほうじゆむすび(新寶珠結)に同じ。
しんぱう-づよし 辛抱强し【形一】よく辛抱してあり。がまんづよし。
しんぱう-にん 辛抱人【名】辛抱づよき人。
しんぱう-ぶぎやう 神寶奉行【名】鎌倉諸奉行の一。神宮に奉幣ある時、臨時に名家の輩に命じて、奉幣使に副へ、奉納の寶物を沙汰せしめしもの。
しん-はかせ 針博士【名】王朝時代の職制の一。典藥寮に屬し、針生等に鍼術を敎授することを掌りしもの。
じんば-きゆう 人馬宮【名】〔天〕黃道十二宮の一。また星座の名。射手。騎射宮。
しん-ぱく 心搏【名】〔醫〕しんき(心悸)に同じ。
しんば-けい 深波形【名】〔植〕『英Sinuate』葉などの邊緣の內外に彎曲して、强き波狀をなせるもの。
しんぱ-げき 新派劇【名】さうしばゐ(壯士芝居)に同じ。
じんば-さし 人馬指【名】宿場にて、人夫・傳馬の指圖をなしし人。
しん-ばし 新橋【名】〔地〕㊀東京市芝區芝口と京橋區出雲町との間、汐留(ｼｵﾄﾞﾒ)川に架れる橋。㊁同上の橋の南方に在りし汽車驛。鐵道東海道線の起點なりしが、明治四十五年東京驛を設くると同時に本驛を廢し、新に芝區烏森町に同名の驛を置く。
しん-ばしら 心柱・㮊【名】殿堂などの建築の際、最初に立つる、しんとなるべき中央の大柱。しんのはしら。傾城反魂香「政道正しき御家老樣、お屋形の心柱と」
しん-はせでら 新長谷寺【名】㊀美濃國武儀(ﾑｷﾞ)郡吉田(ﾖｼﾀﾞ)村にある眞言宗の寺。金剛院と稱す。本尊は、大和國長谷寺十一面觀世音。㊁相模國鎌倉の長谷(ﾊｾ)にある眞言宗の寺。阪東第四番の札所。本尊は大和國長谷寺の觀音と同木異工の作といふ。十一面觀音。しんちやうこくじ。
しん-ばた 新畑【名】新に開墾したる畑。畑

新田(ｼﾝﾃﾞﾝ)。
しんば-だこ 新場蛸【名】江戶新場に荷揚せし蛸。千紅萬紫「この蛸は新場蛸とは思はれず三河町にて見たやうな顏」
しん-はちでうりう 新八條流【名】馬術の一派。八條流より出でたる關口信重(德川賴房に仕ふ)を祖とす。
しん-はちまん 新八幡【名】ごこくはちまん(護國八幡)を見よ。
しん-ばつ 神罰【名】神のばち。神のとがめ。神譴。
しん-ばつ 侵伐【名】侵し伐つこと。
しん-ぱつ 鬖髮【名】もつれたる髮。もつれがみ。
しん-ぱつ 鬒髮【名】黑くつやよき髮。
しん-ぱつ 進發【名】發足すること。戰爭などに出でたつこと。出發。盛衰記「宜レ待ニ我等進發之告一者」
しん-はつめい 新發明【名】新しき發明。
しん-ばなま 新バナマ【名】たんすゐばなま(淡水バナマ)に同じ。
しん-ばひ 心奪【名】能(ﾉｳ)の狂言の一。大名、冠者を連れて、京都の東山に生花の心(ｼﾝ)を取りに行き、途中にて、他人の携ふる花を奪ひ取ることを作りたるもの。
しん-ぱふ 新法【名】㊀あたらしき法令。㊁あたらしき仕方。新方。
しん-ぱふ 眞法【名】まことの法。
しん-ぱふ 心法【名】心を修練する法。大原問答青葉笛「おお見事なる心法、佛意にかなひ給はんと、彌彌殊勝に覺え候」
じん-ぱふ 人法【名】人間ののっとるべき道。人間の法。浦島年代記「ええ、人法に背きし悴が噂、聞く耳も穢るる」
しん-ばん 新番【名】江戶幕府の職制の一。番組を編成して、營中に勤仕し、將軍出行の時、前驅をなす等の事を掌りしもの。初は四組なりしが、漸次增して八組に至り、各組大抵二人の組頭と一人の番頭とありて統轄し、若年寄に屬したり。近習番。新御番。
しん-ばん 鍼盤【名】らしんばん(羅針盤)の略。
しん-ばん 侵犯【名】㊀をかし入ること。㊁〔法〕自己の權利を超えて、他人の權利內に立入ること。
しん-ぱん 親藩【名】㊀君主と親族の關係ある藩屛、又同族の諸藩。㊁德川時代に、德川家の近親たりし大名、即ち三家と越前家とにて、會津の保科家・甲府家及び館林(ﾀﾃﾊﾞﾔｼ)家も、これに準ぜられたり。
しん-ぱん 審判【名】或事件を審理して、判決又は判斷を下すこと。物事の優劣又は訴訟などの判斷。さばき。
最終の審判【句】㊀しゅうしん(終審)に同じ。㊁〔基〕『英Day of judgement』こうしんぱん(公審判)に同じ。
しん-ぱん 新版【名】新に出版すること、又その物。
しんぱん-うたさいもん 新版歌祭文【名】淨瑠璃の一。大阪東横堀瓦屋橋なる油屋のお染とその丁稚久松との情事を脚色したるもの。菅專助の作なる「染模樣妹背門松(ｿﾒﾓﾖｳｲﾓｾﾉｶﾄﾞﾏﾂ)」より脫化して、野崎村の段、最も有名なり。近松半二の作。
しんばん-がしら 新番頭【名】新番の番頭。新番の各組に一人づつありて、その下に大抵二人づつの新番組頭ありたり。
しんばん-くみがしら 新番組頭【名】新番の組頭。前條參照。
しんぱん-くわん 審判官【名】㊀審判する官吏。㊁次次條に同じ。
しんぱん-じけん 審判事件【名】審判すべき事件。
しんぱん-しや 審判者【名】あんばいやに同じ。
しんぱん-ちやう 審判長【名】審判事件の事務を統ぶる役、又その人。
しんぱん-もの 新版物【名】新版の著作物。
しんばん-ろ 青番羅【名】『番は蕃にて、異國より渡來の品なるを示すなるべしといふ』青地にて、同色の模樣ある舶來のうすもの。庭訓往來「素羅(ｿﾗ)・青番羅…花番羅並黃草布」
しん-ばり 締張・心張【名】しんばりぼう(締張棒)の略。
じん-ばり 腎張【名】淫亂なること、又その人。腎勢の强きもの。
しんばり-ぼう 締張棒・心張棒【名】戶じまりに用ふる棒。せんばりぼう。せんばり。しんばり。しんざし。しんざつぼう。
しんばる(英Cymbal)【名】西洋の樂器の一。金屬にて盤狀に造り、表に革紐を附したるを、二箇一組とせるもの。即ち鐃鈸(ﾆｮｳﾊﾞﾁ)と同樣のものにて、一つづつ兩手に持ち、上より下へ、或は下より上へ向けて打當て、同時に摺合はせて音を發せしむ。一種の噪音を發するにより、管絃樂に用ひて、狂喜の情を表すに適す。大太鼓と共に、一人の奏者によりて奏せらるること多し。



(しんばる)

しん-び 審美【名】美と醜とを識別すること。
しん-び 深微【名】深くして微妙なること。
しん-び 親披【名】しんてん(親展)に同じ。
しん-び 神婢【名】〔基〕『英 Handmaid of God』神僕と同樣にて、女性の死後に用ふる語。
しん-び 心皮【名】〔植〕『英Carpel』複雌蕊を組成せる各箇の雌蕊。
しん-び 眞否【名】まことと、まことならざると。實否。
しん-び 信否【名】信ずべきと、信ずべからざると。
しん-び 眞皮【名】〔動〕『羅 Corium』皮膚の內外二層あるうちの內層。
しん-び 深祕・深秘【名】ふかき祕密。
しん-び 神祕・神秘【名】㊀神事(ｼﾝｼﾞ)として、祕密にすること。持統天皇歌軍法「常陸帶の緣定めとて、鹿島の神の結び給ひし神祕あり」㊁人智にて窺ひ知ること能はざる祕密。㊂〔哲〕『英 Mystery』普通の理論・認識の外に超越したる事柄。
じん-び 信飛【名】〔地〕信濃國と飛驒國と。
じん-び 靱皮【名】〔植〕外皮の下にある柔かなる內皮。
じん-び 秦皮【名】とねりこ、又その皮。
しんび-がく 審美學【名】びがく(美學)に同じ。
じんび-さいはう 靱皮細胞【名】〔植〕細長くして纖維狀をなし、先端の尖れる細胞、即ち靱皮纖維を形成するもの。
しんび-しゆぎ 神祕主義・神秘主義【名】〔哲〕次條に同じ。
しんび-せつ 神祕說・神秘說【名】〔哲〕『英 Mysticism』事物の眞相とこれを支配する大法とは、人智の上に超絕せるを以て、これを會得するには、冥想思索して、神靈の祕密に接觸し、默會するを要すとする學說。即ち現實の智力・形式を用ひず、理性を超絕し、自己と絕對とを接觸する祕密の狀態に進入せんとするもの、また主觀と客觀とを對立せしむることをなさず、直ちに現象の中に實在を發見せんとするもの。
じんび-せんゐ 靱皮纖維【名】〔植〕靱皮細胞の聚合して形成する纖維。篩管及び柔組織と共に、靱皮部の一部をなし、その質强靱なるにより、植物體を强固ならしむ。麻・亞麻・楮・三椏(ﾐﾂﾏﾀ)等、織物又は製紙の原料となる纖維は、即ちこれなり。
しん-びつ 新筆【名】新しくかきたること、又そのもの。當世の人の書きたるもの。傾城反魂香「名筆の繪に魂入って顯れ出でしに極ったり、然も新筆、今是程にかかんず人は…元信ならでは覺束なし」
しん-びつ 親筆【名】自ら筆を執りて認めたる筆蹟。
しん-びつ 眞筆【名】その人自身の筆蹟。眞蹟。正筆(ｼｮｳﾋﾂ)。(僞筆に對して)
しん-びつ 宸筆【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天皇の眞筆。
しんび-てき 審美的【貌】びてき(美的)に同じ。
しんび-てき 神祕的・神秘的【貌】普通の理論又は認識の外に超脫したるさま。
しんびてき-かんどう 審美的感動【名】〔哲〕びてきかんどう(美的感動)に同じ。
しんびてき-へうじゆん 審美的標準【名】びてきへうじゆん(美的標準)に同じ。
しんひはん-せつ 新批判說【名】〔哲〕第十九世紀にカントの批判說の復興したるもの。新批評說。
しんひやう-せつ 新批評說【名】〔哲〕前條に同じ。
じんび-ぶ 靱皮部【名】〔植〕雙子葉植物の維管束の一部。根部においては木質部と交

錯して存し、莖幹においては、木質部及び形成層の外圍、卽ち莖心に遠き周邊部に存し、靭皮纎維・篩管・柔組織の三部より成り、年年その內方に在る形成層より增生せらるるため、年輪を形成すれども、木質部の年輪に比すれば、不分明なるを常とす。

しん-ぴん 神品【名】最もけだかく勝れたる品位、又その品物。

じん-ぴん 人品【名】㊀人の品質。品性。ひとがら。㊁人の風采。なりふり。

しん-ぴよう 信憑【名】信じてたよること。信賴。

しんぴよう-きやう 神憑狂【名】〔哲〕まひようきやう(魔憑狂)を見よ。

しん-ぴろ 新廣【名】紙子を製するに用ひし、一種の厚紙。

しんぴ-ろん 神祕論・神秘論【名】〔哲〕しんぴせつ(神祕說)に同じ。

しん-ぶ 神武【名】神の如く勝れてたけきこと。じんむ。

しん-ぶ 振武【名】『國語に「振二武于外一」とあり』武力を振ひあらはすこと。

しん-ぶ 侵侮【名】おかしあなどること。見下ぐること。

しん-ぶ 榛蕪【名】亂れ茂りたる草木。榛莽。

しん-ぷ 神符【名】神社より出だす守り札。御符。

しん-ぷ 神巫【名】みこ(巫)に同じ。

しん-ぷ 親父【名】ちち。てておや。おやぢ。(親母に對して)

しん-ぷ 親附【名】親しみて附從ふこと。

しん-ぷ 新婦【名】はなよめ。にひよめ。(新郞に對して)

しん-ぷ 新符【名】次條を見よ。

新符括責(カツセキ)【句】無籍の人を官より勸出して、新に戶籍に編入すること。三代實錄「新符括責之報」

しん-ぷ 新附【名】あらたに附從ふこと、又その者。「新附の民」

しん-ぷ 心附【名】しんぷく(心服)に同じ。

しん-ぷ 心腑【名】㊀むねと臟腑と。㊁こころ。心中。盛衰記「今樣朗吟して、心腑に銘ず」

しん-ぷ 心府【名】精神のやどるところ。こころ。靈府。盛衰記「不レ如抽二心府之志一、重欲レ企二斗藪之行一」

しん-ぷ 震怖・振怖【名】ふるひおそるること。震慄。

しん-ぷ 信孚【名】『孚は、信の內に在る者。說文に「孚、卵孚也、一曰信也」とあり』まこと。

じん-ぷ 仁武【名】㊀仁愛と武勇と。㊁仁愛にして、武勇あること。

しん-ぷう 信風【名】〔地〕きこうふう(氣候風)に同じ。

じんふあんでる（英Zinfandel）【名】米國產の赤葡萄酒。甘味なくして、澁味強し。

しん-ぷう 晨風【名】朝吹く風。あさかぜ。

しん-ぷう 秦風【名】㊀支那周の代の秦(今の甘肅省秦州)の地に行はれて、その地固有の風俗のあらはれたる詩。詩經に、その數首を收載せり。新井白石の書簡「秦風に興レ子同レ袍と申すは、この事に候」㊁にしかぜ(西風)に同じ。

しん-ぷう 神風【名】かみかぜ(神風)に同じ。

じん-ぷう 仁風【名】㊀仁惠のあまねく及ぶを、風の吹きわたるに譬へていふ語。盛衰記「この君、仁風率土に覆ひ」㊁『晉書の文苑傳に「袁弘字彥伯、謝安常賞二其機對辯速一　臨レ別執二其手一顧就二左右一取二一扇一而授レ之曰、聊以送レ行、弘應レ聲答曰、輒當下奉二揚仁風一慰中彼黎庶上」とあるに本づく』あふぎ(扇)の異稱。

しんぷう-れん 神風連【名】明治八年の頃、肥後國熊本に起りて、神道を奉じ、泰西の文物・制度を忌みたる、一種の頑固なる黨派。同九年十月大野鐵平(太田黑伴雄)・加屋霽堅(ハルカタ)等、二百餘人熊本の鎭臺及び縣廳を襲ひて、殺傷を逞しくせしが、翌日討平せられたり。敬神黨。

しんふおにい（英Symphony）【名】〔音〕各樂器の特性を保持し、形式美を主として作られたる大管絃樂。

しん-ぷき 新吹【名】新しく鑄造すること。新鑄。艶狩鹽本地「くわっと見出す兩眼は新吹の白銀を研ぎ出せる如くなり」

しんぷき-いちぶぎん 新吹一分銀【名】しんいちぶぎん(新一分銀)に同じ。

しんぷき-いっしゅぎん 新吹一朱銀【名】しんいっしゅぎん(新一朱銀)に同じ。

しん-ぷく 申覆【名】申(カサ)ねてつまびらかにすること。

しん-ぷく 診腹【名】腹部を診察すること。腹診。

しん-ぷく 信服・信伏【名】信じて服從すること。盛衰記「今は信伏して、切って繼ぎたる禮義をかしく」

しん-ぷく 震服【名】おそれて服從すること。

しん-ぷく 心服【名】心から服從すること。心附。

しん-ぷく 心腹【名】㊀こころとはらと。㊁心の中。まごころ。胸中。

心腹に落つ【句】合點がゆく。腑に落つ。國性爺後日合戰「北京を此方へ賜はらんとの文章、肯て以て心腹に落ち難し」

心腹の友【句】胸中をうち明くる友。親密なる友。

心腹の疾【句】心腹にある疾は除き難きもの故に除き難き敵に譬へていふ語。

しん-ぷく 臣服・臣伏【名】臣下となりて服從すること。

しん-ぷく 振幅【名】〔理〕『英 Amplitude』物體が、靜止せる位置より振動を起して、その右又は左の極點に至る距離。

しん-ぷく 震幅【名】〔地〕地震のために、地盤のゆれ動く幅、卽ち地震計の波の幅となりて表はるるもの。

しん-ぷく 神服【名】さいふく(祭服)に同じ。

しんぷく-じ 眞福寺【名】尾張國名古屋市門前町に在る新義眞言宗の寺。僧能信の創立。本尊は正觀音。世に大須の觀音と稱す。次條參照。

しんぷくじ-ぼん 眞福寺本【名】前條の眞福寺に藏せる古典籍。その內、國寶に指定せられし者、漢書食貨志・古事記・將門記(殘缺)・日本靈異記・本朝文粹・和名鈔(殘缺)等二十餘種あり。

しん-ふしいと 新節絲【名】木綿絲を用ひて、節絲織に似せて織りたる織物。

しんぶ-しやう 信部省【名】なかつかさしやう(中務省)に同じ。(淳仁天皇の時、一時改められし名稱)

しんぷ-じやう 新府城【名】武田勝賴、織田信長と長篠に戰ひ、敗れ還りて、甲斐國北巨摩(コマ)郡中田村七里岩の上に築きし城。天正九年城未だ完からざるに、織田氏に攻められて、勝賴出奔し、天目山に死す。

じんぶ-しやう 仁部省【名】にんぶしやう(仁部省)を見よ。

じんふ-しる 准麩汁【名】じゆんぷしる(准麩汁)に同じ。

しんぷ-そちやう 神封租帳【名】稅帳枝文の一。政事要略「神封租帳」

しん-ぶつ 神物【名】靈妙なる物。「天、神物を生ず」

しん-ぶつ 心佛【名】〔佛〕㊀心と佛と。㊁心に依らずして、佛を成(ジャウ)ずる稱。㊂心中に現るる佛。この心、これ卽ち佛なること。

心・佛・衆生(シュジャウ)一體【句】〔佛〕『華嚴經に「心佛及衆生是三無二差別一」とあり』眞如の一心より、萬法を緣起するものなるが故に、その本體より見れば、佛も衆生も、共に差別なきものなり。盛衰記「三界一心と知りぬれば、地獄・天宮外に無し。心・佛・衆生一體と悟りぬれば、始覺・本覺身を離れず」

しん-ぶつ 眞佛【名】〔佛〕㊀ほうしんぶつ(報身佛)に同じ。(化身佛(ケシンブツ)に對して)㊁無相の法身。

しん-ぶつ 信佛【名】佛を信ずること。

しん-ぶつ 神佛【名】㊀かみと佛と。㊁神道と佛教と。

神佛混淆【句】神佛同體說に基きて、神と佛とを配祀すること。例へば奈良の春日神社と興福寺と、京都の淸水寺と地主(ヂシュ)權現との類。明治の初、これを禁じて別つこととせり。

しん-ぶつ 新物【名】新らしきもの。あらもの。今宮心中「昨日今日前髮取って下手代、まだ新物の二郎兵衞、おきさと深き中入の一」

しん-ぶつ 眞物【名】まことの物。僞ならぬ物。ほんもの。

じん-ぶつ 人物【名】㊀『中庸の第二十二章に「能盡二人之性一則能盡二物之性一」とあり』人と物と。人事と萬物と。㊁人の姿。人。(畫などにいふ)㊂ひとがら。人品。人格。㊃才能ある人。人材。

じんぶつ-ぐわ 人物畫【名】〔美〕人間を主として描きたる繪畫。

しんぶつ-どうたい-せつ 神佛同體說【名】我が國の諸神は印度の佛の垂跡(スヰジャク)せるものにて、もと同一體なりといふ說。聖武天皇の代に、僧行基の唱へしもの。本地(ホンヂ)垂跡說。

しんぶつ-みせ 新物店・新物見世【名】衣類を新しく仕立てて商ふ店。〔大阪の語〕今宮心中「本町や新物見世の若衆は、女とも見えず男なりけり、女子交りの針仕事」

しんぶつ-めんびき 神佛免引【名】江戶時代の免租の一。社寺附屬の田畑・森林等の內、三畝もしくは五畝の地租を除きしこと。八幡免・阿彌陀免等の名目ありき。

しんぶね-うはに 新船上荷【名】上荷船の一種。

しん-ぶん 深文【名】深刻なる法文。

しん-ぶん 眞文【名】しんもん(眞文)を見よ。

しん-ぶん 讖文【名】將來を豫言したる文書。しんもん。未來記。

しん-ぶん 新聞【名】㊀新しく聞きたる話。新しき知らせ。新報。㊁しんぶんし(新聞紙)の略。

しん-ぶん 脣吻・唇吻【名】こうふん(口吻)に同じ。

じん-ぶん 仁聞【名】仁德あるきこえ。仁德の名聞。

じん-ぶん 人文【名】㊀『易經の繫辭山火賁に「觀二乎天文一以察二時變一、觀二乎人文一以化二成天下一」とあるに本づく』人倫の序次。㊁人物と文物と。㊂『張懷瓘の文字論に「日月星辰天之文也、五嶽四瀆地之文也、城闕朝議人之文也」とあり』ぶんくわ(文化)に同じ。

じん-ぶん 神分【名】〔佛〕法事の初に、惡魔・邪氣を除き、善神の擁護を請はんがために、般若心經一卷を讀誦すること。大鏡「まづは神分心經、表白のたまひて、鐘打ちたまへりしに」

じん-ぶん 人糞【名】人類の糞。

じんぶん-がくは 人文學派【名】〔哲〕じんだうしゅぎ(人道主義)に同じ。

しんぶん-きしや 新聞記者【名】新聞紙の記事の任に當る人。

しんぶん-し 新聞紙【名】一定の題號を用ひ、社會の新しき出來事、並びに一般の新知識を報道する定期刊行物。日刊を普通とすれど、週刊・半週刊などもあり。新聞。

しん-ぶんじ-ぎん 新文字銀【名】ぶんせいぎん(文政銀)に同じ。

しんぶんし-はふ 新聞紙法【名】新聞紙に關する、保安警察の目的のためにする取締の規定。卽ち新聞發行につきての屆出、保證金の納入、新聞紙の差押、その發行禁止等の事項を定めたるもの。明治四十二年の公布。

しんぶん-しや 新聞社【名】新聞紙を發行する社。

じんぶん-しゅぎ 人文主義【名】〔哲〕じんだうしゅぎ(人道主義)に同じ。

しん-ぶんじきん 眞文字金【名】『添極印の「文」の字、眞字なるによりていふ』げんぶんきん(元文金)に同じ。

しん-ぶんじぎん 眞文字銀【名】げんぶんぎん(元文銀)に同じ。(草文字銀に對して)

しんぶんじ-ぎん 新文字銀【名】しんぶんじちやうぎん(新文字丁銀)としんぶんじまめいたぎん(新文字豆板銀)との總稱。草文字銀。(古文字銀に對して)

しんぶんじ-ちやうぎん 新文字丁銀【名】江戶幕府時代の通貨の一。文政三年より天保八年に亙りて鑄造發行す。縱三寸二分・橫一寸一分五厘あり。

しんぶんじ-まめいたぎん 新文字豆板銀【名】江戶幕府時代の通貨の一。文政三年より天保八年に亙りて鑄造發行す。縱六分五厘・橫七分五厘・重量三匁五分五厘あり。

しん-ぶんすう 眞分數【名】〔數〕『英 Proper fraction』分子が分母より小なる分數。(假分數に對して)

しんぶん-せいりやく 新聞政略【名】新聞紙を利用して行ふ政略。

しんぶん-だね 新聞種【名】新聞紙の記事となるべき材料。殊にその三面記事の材料。

じんぶん-ちり 人文地理【名】『獨 Kulturgeographie』主として、人文の方面、卽ち人種・生業・交通・政治等を敍べたる地理。

しんぶん-でんぱう 新聞電報【名】『英 Press telegram』新聞紙に揭ぐるために、その關係通信者が、新聞社に宛てて發する電報。

しんぶん-にぶきん 眞文二分金【名】しんぶんにぶばんきん(眞文二分判金)の略。

しんぶん-にぶばん 眞文二分判【名】次條の略。

しんぶん-にぶばんきん 眞文二分判金【名】しんじにぶばんきん(眞字二分判金)に同じ。

しんぶん-ぼっく 新聞發句【名】『新派の俳句は、新聞紙を機關として發表すること多かりしよりいふ』新派の俳句を、月並發句の宗匠連の嘲りていひたる語。書生發句。

しんぶん-や 新聞屋【名】㊀新聞を賣る店、又その人。㊁しんぶんきしや(新聞記者)を卑しめていふ稱。〔俚語〕

しん-ぺい 親兵【名】㊀主君に親近して、これを護衞する兵。禁兵。㊁明治四年以後、鹿兒島・山口・高知の三藩より出でし、兵部省にて管轄したる禁衞の兵士。步・騎・砲の三兵種に分れしが、翌年廢せられたり。

しん-ぺい 新兵【名】㊀新に兵士となりたる者。㊁入營より第一期末の檢閱を終はるまでの現役兵の稱。(古兵に對して)

しん-ぺい 新幣【名】しんくわへい(新貨幣)に同じ。

しん-ぺい 神兵【名】神の遣したまふ兵。神の冥護ある兵。盛衰記「神兵の力ありと、緘信を被レ垂ければ」

しんぺい-けうれん 新兵敎練【名】〔兵〕としゆけうれん(徒手敎練)を見よ。

しん-へいみん 新平民【名】明治四年八月以後、あらたに平民籍に列せられたる非人・穢多(エタ)の俗稱。

しん-べう 神妙【名】しんめう(神妙)㊁に同じ。盛衰記「綺羅誠に神妙にして、言語殊に鮮かなり」

しん-べう 神廟【名】㊀神のみたまや。神祠。神社。㊁伊勢の大廟。

しん-べう 寢廟【名】㊀いへ。家屋。㊁みや。宮室。

しん-べき 深碧【名】濃き碧色。紺碧。

しん-べこ 新部子【名】未だ修業中の少年の歌舞伎役者。

しん-べつ 神別【名】我が國古代における氏族類別の一。神代の有勳の臣民、卽ちその族の祖先の、神代の諸神より出でたるもの。例へば藤原氏は、天兒屋(コヤネ)命なるを以て、神別に屬する族人なる類。(皇別・蕃別に對して)

しん-べに 新紅【名】かいりやうべに(改良紅)に同じ。

しん-べん 審辨【名】つまびらかに辨別すること。

しん-べん 脣瓣・唇瓣【名】〔動〕『英 Oral-arm』水母(クラゲ)類の口の周圍に存する長き鬚狀の器官。その數、種類によりて、四箇もしくは八箇あり。口腕。

しん-べん 脣邊・唇邊【名】くちびるのあたり。

しん-べん 針砭・鍼砭【名】㊀『漢書藝文志の顏師古の註に「箴、以二所刺一レ病也。石謂二砭石一、卽古作レ箴、石鍼也。古者攻レ病、則有レ砭、今其術絕矣」とあり』針と石針と。砭針。㊁『針も砭も病を治するに用ふるものなるによりていふ』人を戒めて、その過を正すこと。いましめ。規箴。砭針。

しん-べん 新編【名】新に編纂すること、又その編纂したる書。新著。

しん-べん 新篇【名】新しき詩歌などの作。

しん-べん 神變【名】人間の力にては測り難き變化。じんぺん。

しん-べん 身邊【名】身體のまはり。

じん-べん 神變【名】しんぺん(神變)に同じ。保元「種種の神變を現じ」

しんぺん-かまくらし 新編鎌倉志【名】〔書〕相模國鎌倉及びその附近の地理誌。河井恒久、及び力石忠一の水戶光圀の命を奉じ、實地踏査して編みしもの。八卷。

しんぺん-じゅつ 神變術【名】神變不思議の術。 傾城反魂香「次第に消えて失せけるは神變術ともいひつべし」
しんぺん-たん 神變丹【名】しじんたん(四神丹)に同じ。
しんぺん-つゐか 新編追加【名】〔書〕貞永式目の補遺として、その後の官符・下文・評定書等を集め、神社・佛舍・政所・侍所・雜務の五篇に分類したるもの。二卷。
しんぺん-むさしのくに-ふどきかう 新編武藏國風土記稿【名】〔書〕武藏國の地誌。林衡の幕府に建議し、間宮士信・松崎純庸等をして、文化七年より起稿せしもの。二百六十五卷。
しんぺゑ 新兵衛【名】㊀事をなして敗る者を云ふ。〔大阪の語〕㊁小さくして、小供の用ふる藁靴を云ふ。〔陸奥國津輕の方言〕㊂げんすけ(源助)に同じ。
しんぺゑ-やき 新兵衛燒【名】加藤新兵衛の窯(カマ)にて造りし陶器。新兵衛はじめ瀨戸に住し、のち京都・備前・信樂(シガラキ)等の地に轉住し、所在に窯を開き、子孫業を繼ぎて今に至る。
しん-ぼ 親母【名】養母・繼母などならぬ、まことの母。(親父に對して)
しん-ぼ 宸謨【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天皇のはかりごと。皇謨。宸猷(イウ)。
しん-ぼ 新募【名】新に募集すること。
しん-ぽ 親補【名】天皇親ら官吏に官職を授くること。
しん-ぽ 新甫【名】〔商〕月替りて、新しき期限の先物(サキモノ)が始めて賣買にかけらるること。〔取引所の語〕
しん-ぽ 進歩【名】㊀足を進むること。あゆむこと。㊁物事の次第に善き方に移りゆくこと。(退歩に對して)
しん-ぽ 進捗【名】はかどること。進みゆくこと。しんちょく。
しん-ぽ 新補【名】㊀新に補任すること。㊁承久の亂以後に、幕府が一部の朝臣の領邑を沒收して、戰功の士を、その地頭とせしもの。(本補に對して) 太平記「年來進止の地に於ては：只承久以後新補の率法」

しん-ぼう 深謀【名】深きはかりごと。深きたくみ。遠慮。後勘。
しん-ぼう 神謀【名】㊀神のはかりごと。㊁巧妙なるはかりごと。鬼策。
しん-ぼう 身謀【名】一身上の都合を謀ること。
しん-ぼう 心棒【名】しんぎ(心木)に同じ。
しん-ぼう 進奉【名】たてまつること。まゐらすること。進上。
しん-ぼう 親朋【名】親しき朋友。
しん-ぼく 神木【名】㊀『班固の西都賦に「神木叢生」とあり』不思議なる樹木。㊁神社の境內に在りて、その神社に緣故ある樹木。一社一木を普通とし、常に注連(シメ)を張りなどして、特に敬畏す。かみき。神の木。
神木入洛(ジュラク)【句】次條に同じ。 太平記「神木入洛の事」
神木動座【句】中世以後、奈良の興福寺の衆徒が、春日神社の神人と共に、朝廷に嗷訴する時、春日の神木なる榊を捧持して、京都に入りしこと。神木入洛。
神木の杉【句】かみすぎ(神杉)に同じ。
春日の神木【句】かすが(春日)の條下を見よ。
しん-ぼく 親睦【名】親みて中よくすること。むつまじきこと。
しん-ぼく 臣僕【名】公衆に仕ふる下部と、私家に仕ふる下部と。しもべ。けらい。
しん-ぼく 神僕【名】『英 Servant of God』基督教信徒の男の卑稱。(神婢に對して)
じん-ぼく 人牧【名】地方の人民を治むる者。即ち地方官・諸侯又はその地の豪族など。牧民者。 太平記「遠境の人牧までも、これを聞傳へて」
しんぼく-くわい 親睦會【名】親しみを結ぶための會合。懇親會。
しん-ほくたい 新北帶【名】〔地〕中央亞米利加を除きて北亞米利加全體。
しんぽ-くわん 親補官【名】親補せらるる官。
じん-ほけん 人保險【名】『獨 Personenversicherung』保險の一。偶然の事故により、人體に及ぼす經濟的損害を塡補するを目的とするもの。即ち死亡保險・生存保險・養老保險・產兒保險・傷害保險・徵兵保險などの總稱。(物保險に對して)
しん-ほしだいこん 新干大根【名】十一・二月頃の干大根。
しん-ぼち 新發意【名】〔佛〕『ぼちはほつい(發意)の約轉』㊀發心して、新に佛門に入りたるもの。しぼち。今道心(イマダウシン)。 榮花「この二位の新發意、心をまどはして」㊁四位以下の者の出家。(入道に對して)㊂一寺の住職の子にして、僧となれる若き男子。〔眞宗の語〕
しんぽ-ぢとう 新補地頭【名】承久の亂以後、新に補せられたる地頭。
しんぽつい-ぼさつ 新發意菩薩【名】新に菩薩の證果を得たる人。
しん-ぼとけ 新佛【名】佛葬せられて、未だ日かずの經ぬ人。
しんぽ-はっくわい 新甫發會【名】新甫の立會のはじめ。〔取引所の語〕
しん-ぽふ 眞法【名】〔佛〕眞如・實相の法。
しん-ぽふ 心法【名】〔佛〕一切諸法の內、無質碍にして、緣慮の用あり、又は諸法を緣起する根本たるもの。顯敎にては無色・無形なりとし、密敎にては有色・有形なりとなす。(色法(シキホフ)に對して)
しん-ぽん 新本【名】新しき本。
しん-ぽん 眞本【名】ほんものの本。
しんぼんなう-しやう 心煩惱障【名】〔佛〕三障の一。無明より生ずる煩惱にして、菩提の障となるもの。
しん-ぼり 新堀【名】地を掘りて、新に水を通はしたるところ。新しきほりわり。
しんぼりずむ (英Symbolism)【名】〔文・美〕しやうちようしゆぎ(象徵主義)に同じ。
しんぼる (英Symbol)【名】しやうちよう(象徵)に同じ
しん-ま 心魔【名】〔佛〕ぼんなうま(煩惱魔)に同じ。 孕常盤「惡魔・天魔・邪魔・心魔・四魔の首領の僧正坊」
しん-まい 神米【名】神に供ふる精米。あらひよね。くましね。かしよね。洗米。
しん-まい 新米【名】あたらしき米。今年出來たる米。ことしごめ。ことしまい。(古米に對し)

しん-まい 新前【名】しんまへ(新前)の訛。
しん-まう 榛莽【名】しんばう(榛莽)に同じ。
しんまうじやうみ-さう 身毛上靡相【名】〔佛〕三十二相の一。身毛の頭右旋し、上に向ひて偃伏(エンブク)するもの。
しん-まか 新靺鞨【名】〔音〕雅樂の一。高麗(コマ)樂に屬し、壹越(イチコツ)調の一。 拾芥抄「高麗・壹越調新靺鞨(シンマツカ)」
しん-まく 愼莫・身莫【名】物事の始末をなすこと。身の處置をなすこと。じんまく。みじんまく。 柳樽「裸の子嫉しんまくにしかねてる」
愼莫に終へぬ【句】手のつけやうなし。始末にこまる。 浮世風呂「しばらく取組んで居たが、身が重くて、しんまくにをへなんだを、漸く足を引っ倒して」
じん-まく 愼莫・身莫【名】前條に同じ。
じんま-くわ 蕁麻科【名】〔植〕いらくさくわ(蕁麻科)に同じ。
じんま-しん 蕁麻疹【名】〔醫〕急性なる一種の皮膚病。赤色又は白色の扁き大豆大に發疹し、瘙痒灼熱し、往往浮腫を來すもの。蕁麻(イラクサ)に觸れたる時、蚊・蚤などに螫(サ)されたる時、藥劑の中毒等によりて發す。發斑(ホツハン)。しっしん(濕疹)參照。
しんまち 新町【名】〔地〕㊀伊勢國安濃(アノ)郡にある町。津市の西に接續す。もとその一部たりしが、のち分離せり。郡役所を置く。㊁上野國多野郡にある町。前橋より四里餘。中仙道の一驛。有名なる紡績所あり。㊂大阪市西橫堀川に架れる新町橋の西方にある遊廓地。西區に屬す。寬永中に創始す。今は新町通・新町北通・新町南通・裏新町に分れ、もとは瓢簞町・佐渡島町・吉原町・新橋町・新堀町・九軒町・佐渡屋町に分れゐたり。 淀鯉出世瀧德「新町ばかりが傾城町でもあらばこそ」
しん-まへ 新前【名】新にそのことに從ひて未だ慣れざるもの。

しん-まるさすしゆぎ 新マルサス主義【名】『英 Neo-Malthusianism』〔經〕人工避姙によりて、母體の早老、多產に因りて生ずる生活上の困難を避けんとする主義。西曆一八二二年英人プレエス氏の唱道せるもの。まるさすしゆぎ(マルサス主義)參照。
しん-み 親身【名】㊀極めて近き血統、又その人。㊁最近き親族のごとく親密なること。 生玉心中「涙ぐみたるしんみの詞、更に勤と思はれず」
しん-み 辛味【名】からきあぢ。からみ。
しん-み 新味【名】㊀あらたなるあぢはひ。㊁新規の飲食物。
しん-み 眞味【名】㊀まことのあぢはひ。㊁まことの意味。
しんみ-さう 浸淫瘡【名】熱病などに伴ひて、肌に生ずる、たむしの如き皮膚病。始は、甚だ小さく、痒く痛み、次第に大きくなりて、液出て、全身に廣がる。 和名「浸淫瘡、俗云心美佐宇、風熱發於肌膚也」
しん-みせ 新店【名】新に開きたる店。
しん-みだい 新御臺【名】新に迎へたる御臺所(ミダイドコロ)。
しん-みち 新道【名】㊀新しく開きたる道。しんだう。㊁こうぢ(小路)を云ふ。〔東京の語〕
しん-みつ 縝密【名】つつしみ深きこと。
しん-みつ 愼密【名】心を用ふること細かにして、ぬけめなきこと。
しん-みつ 身密【名】〔佛〕さんみつ(三密)を見よ。
しん-みつ 親密【名】極めて親しきこと。したしみあつきこと。
しん-みつ 深密【名】思慮の深きこと。
しん-みん 神民【名】神社に附屬する民。 盛衰記「旒を棠る神民六人」
しん-みん 臣民【名】統治權の客體としての人民。
しん-みん 新民【名】新に服從せる人民。新附の民。
じん-みん 人民【名】社會を組織する一員。たみ。たみくさ。蒼生。國民。
しんみん-しゆけん 臣民主權【名】臣民を統治する側より見たる國家の主權。(領土主權に對して)

しんみんしゆけん-せつ 臣民主權說【名】〔法〕統治權の主體は臣民にして、君主はその機關に過ぎずとする學說。(領土主權說に對して)
しんみん-せき 臣民籍【名】〔法〕こくせき(國籍)に同じ。
しんみん-とん 新民屯【名】〔地〕支那盛京省の西部、遼河の右岸に在る都會。奉天府の西。關外鐵道支線の終點。商業盛んなり。
しんみん-ぶんげん 臣民分限【名】〔法〕しんみんせき(臣民籍)に同じ。
しん-みやう 針妙【名】しんめう(針妙)の訛。 無名抄「さるほどなるなましんみやうの、きぬぬすみて」
しん-みやう 神名【名】しんめい(神命)に同じ。
しん-みやう 神冥【名】神の冥助。神の加護。冥助。 盛衰記「本朝守護之神冥尙在本宮」
しん-みやう 神明【名】〔佛〕㊀衆生の識性。㊁しんめい(神明)に同じ。
しん-みやう 身命【名】しんめい(身命)に同じ。 盛衰記「暫く身命を繼がんとて」
じんみやう-ちやう 神名帳【名】㊀諸國の神社の名、又は位記などを記したる帳簿。 太平記「神名帳に載する所の三千七百五十餘社」㊁〔書〕えんぎしきじんみやうちやう(延喜式神名帳)の略。
じんみやうちやう-かうしよう 神名帳考證【名】〔書〕㊀延喜式の神名帳を考證したるもの。八卷。度會(ワタラヒ)延經の著。㊁上に同じ。八卷。伴(バン)信友の著。
しん-みやうぶ 新命婦【名】命婦の一。三命婦の下、權命婦の上に位せしもの。明治二年創置、同四年廢止。
しん-みやく 診脈【名】脈搏を診察すること。脈をとること。
じん-みらい 盡未來【名】次條の略。
じん-みらいざい 盡未來際【名】〔佛〕『未來の際限を盡す意』法の永續して、未來永劫に際限なきこと。(盡虛空界に對して) 平家女護島「最後の一念盡未來際、生生世世放れじ退かじ」

しんみり【副】心靜かに落附きたるさま。しめやか。しっぽり。しみじみ。しんめり。
じん-む 神武【名】神の如くたけきこと。この上もなく武勇なること。しんぶ。
神武この方【句】『神武天皇以來の意』昔より。開闢以來。 冥途飛脚「神武この方無いこと」
じんむ-てんわう 神武天皇【名】〔人〕第一代の天皇。御名は狹野(サヌ)尊・若御毛沼(ワカミケヌ)尊・神日本磐余彥(カムヤマトイハレヒコ)尊。彥波瀲武鸕鷀草葺不合(ヒコナギサタケウガヤフキアヘズ)尊の第四の皇子。御母は玉依姬。在位七十六年、空位三年。即位の七十六年崩ず。壽百〇三、一說に百二十七。
じんむてんわう-さい 神武天皇祭【名】皇靈殿にて、神武天皇の神靈を祭り、且つその山陵に奉幣せしめらるる皇室の大祭。崩御の三月十一日を陽曆に改算して、四月三日に行ふ。萬延元年より始まる。
しん-め 新芽【名】新に生じたる芽。わかめ。嫩芽。
しん-め 神馬【名】神の乘用に供する意にて、神社に獻りたる馬。これを獻ること能はざる者は、繪馬(エマ)などを奉納して、これに代ふ。しんば。かみうま。かみこま。神の駒。 盛衰記「御神馬を曳かるること、太神宮・石淸水より嚴島まで、八社」
しん-め 心馬【名】〔佛〕いば(意馬)に同じ。
しん-めい 身命【名】身體と壽命と。しんみやう。軀命。
しん-めい 身名【名】身體と名譽と。
しん-めい 神明【名】㊀神の鏡のごとく明かなる知識。㊁かみ(神)に同じ。 大鏡「この堂に影向(ヤウガウ)したまふらん神明」㊂天照大神を祀れる宮。
神明に橫道なし【句】神は非道を行ふことなし。〔諺語〕
しん-めい 神名【名】神の名。神の稱呼。
しん-めい 神命【名】神のいひつけ。神の命令。神勅。
しん-めい 晨明【名】㊀あけがた。あかつき。㊁「明(ケイ)の明星(ミヤウジヤウ)」に同じ。
しん-めい 申明【名】くりかへし陳べて、明かにすること。

しん-めい 申盟【名】くりかへして固く盟ふこと。
しん-めい 審明【名】つまびらかにすること。あきらかにすること。
じん-めい 人名【名】人の名。
じん-めい 人命【名】人のいのち。
じん-めい 尋盟【名】ふるき盟をあたたむること。舊約を溫むること。
じんめい-かんぢやう 人名勘定【名】〔商〕『英 Personal account』簿記にて、取引先の人名を口座(クチ)として、その者との取引上の貸借を處理すること。借方には、當方の權利、當方より返濟したる高を記入し、貸方には、當方の義務、當方へ返濟し來れる高を記入す。掛金貸借勘定。信用貸借勘定。帳簿貸借勘定。
じんめい-きうじよ-きしやう 人命救助記章【名】自己の危難を顧みずして、人命を救助したる者に賜ふ記章。即ち我が國の紅綬褒章の類。
しんめいだい-わかしふ 新明題和歌集【名】〔書〕後水尾院・御西院・靈元院などの御製を始めとして、その頃の人人の歌を集めたるもの。十卷。撰者詳かならず。しんごめいだいわかしふ(新後明題和歌集)參照。
じんめい-ちやう 人名帳【名】じんめいぼ(人名簿)に同じ。
じんめい-ちやう 神名帳【名】じんみやうちやう(神名帳)に同じ。
じんめいちやう-かうしやう 神名帳考證【名】〔書〕じんみやうちやうかうしやう(神名帳考證)に同じ。
しんめい-づくり 神明造【名】〔建〕神社の建築式の一。すべて白木を用ひ、柱は圓くして、皆堀立(ホッタテ)とし、屋蓋・棟梁皆直線より成り、切妻造(キリヅマヅクリ)にて、千木(チギ)と破風(ハフ)とは、同一直線內に在

(しんめいづくり)

り、屋根は茅葺にして、上に鰹木を置きたるもの。大社造(オホヤシロツクリ)と共に、神社建築の最も古き樣式にして、伊勢の大廟の內外宮及び熱田神宮は、この式の最たるものにして、これを唯一(ユヰイツ)神明造といひ、その他、破格の神明造は、實例甚だ多し。

しんめい-とりゐ 神明鳥居【名】〔建〕鳥居の一種。最も古き簡素なる樣式にて、專ら白木を用ひ、圓柱二本を掘立(ホッタテ)とし、その上に圓き笠木を載せ、その下方に斷面の矩形をなせる貫(ヌキ)を取附け、貫は柱外へは突拔けざるもの。伊勢大廟の鳥居は、この式を用ふ。

じんめい-ぼ 人名簿【名】人名を書留めたる帳簿。人名帳。

じんめい-りやくき 神名略記【名】〔書〕內外二宮を始として、その別宮神社の所在、祭神等を漢文に記したるもの。一卷。一名、伊勢神名略記・二所(ニショ)大神宮神名略記。

しん-めう 針妙【名】縫物を以て奉公する女。おはり。

針妙の片袖【句】針妙の、片袖を縫ふことの容易なるを、事物のたやすく爲し得るに譬へていふ語。〔諺語〕

しん-めう 神妙【名】㊀『神は不測、妙は不可思議の義』人類の智力を超絕したる現象。靈妙。㊁けなげ。しんべう。殊勝。奇特。保元「遠慮のほどこそ神妙なれ」「こと。㊂すなほ。おとなしきこと。

しん-めう 眞妙【名】眞實にして微妙なること。

じん-めう 深妙【名】〔佛〕甚深にして、微妙なること。

じんめ-さう 神馬草【名】〔植〕『ほんだはらの古稱のなのりそを勿騎(ナノリ)の意に解釋し、神馬の字を充てていふ』ほんだはら(馬尾藻)に同じ。

しんめつ-ふずゐしや 身滅不隨者【名】〔佛〕人の死後に伴ふことを得ざるもの。卽ち財寶・名譽・權勢・爵位などの總稱。

じんめ-ぶぎやう 神馬奉行【名】室町幕府の職制の一。日吉(ヒエ)神社に將軍の參拜する日、將士の獻ずる馬を掌りしもの。社司・社僧この役に當る。

じん-めん 仁免【名】あはれみて罪過をゆるすこと。

じん-めん 人面【名】人の顏。

人面・獸身【句】『史記の五帝記の註に「魑魅、人面獸心、四足、好惑レ人」とあり』㊀一種の怪物。㊁『史記の匈奴傳・列子の黃帝篇等に見ゆ』人情なき者を罵りていふ稱。にんめんじうしん。

じんめん-ちく 人面竹【名】〔植〕ほていちく(布袋竹)に同じ。

しん-めんぼく 眞面目【名】次條に同じ。

しん-めんもく 眞面目【名】㊀ありのままのすがた。しんめんぼく。本體。㊁まじめ。ありてい。しんめんぼく。しんめんもく。天眞。

しんめり【副】しんみりに同じ。浮世風呂「しんめりとして、枕丹前(マクラタンゼン)をうたへば」

しん-も 森茂【名】はんも(繁茂)に同じ。

しん-もく 瞋目【名】目をいからすこと。

しん-もく 深目【名】深くくぼめる目。

じん-もく 心目【名】心と目と。

じん-もく 人目【名】㊀人の目。㊁他人の觀ること。人のみるめ。ひとめ。みえ。外見。

しん-もす 新毛斯【名】瓦斯絲にて、モスリンに似せて織りたる織物。

しん-もつ 神物【名】神社の什物。著聞「非二神物一故、只有レ名更無レ術」

しん-もつ 嚫物【名】〔佛〕齋後の供物。

しん-もつ 進物【名】㊀進上する物品。おくりもの。つかひもの。獻上物。㊁天皇・上皇・親王・大臣などに獻上する物品。〔鎌倉時代の語〕

しんもつ-がた 進物方【名】武家にて、進物を扱ふ役、又その人。

しんもつ-ぎって 進物切手【名】てうだつぎって(調達切手)に同じ。

しん-もって 神以て【副】神に誓ひて。かみかけて。膝栗毛「寄通を致せし事、神もって存ぜず」

しんもつ-どころ 進物所【名】古、宮中・院・女院・御所その他貴人の家に附屬して、膳部の調進を掌りし所。宮中のは、月華門外の南掖に在りて、內膳司に屬し、別當・預(アヅカリ)・執事・膳部等の職員ありて、天皇の供御(クゴ)を調進せり。

しんもつ-とりつぎ-ばん 進物取次番【名】江戶幕府の職制の一。留守居の支配にて、諸侯その他よりの獻上物を進達する事を掌りしもの。小普請(コフシン)より補せらるる番頭(バンガシラ)三人ありて、諸員を統べたり。

しんもつ-ばん 進物番【名】江戶幕府の職制の一。大名・旗本などよりの進獻物を周旋し、式によりて布置することを掌り、また賜與物の事にも關係せしもの。若年寄の所管なり。

しんもつ-ぶぎやう 進物奉行【名】鎌倉幕府の諸奉行の一。朝廷又は貴族への進物の事を掌りしもの。

しん-もの 新物【名】新しきもの。今までになき物ごと。今宮心中「桁丈摑ひし死姿、刃に伏すは古手にて、これ心中の新物と聞く人、回向をなしにける」

しん-もん 讖文【名】しんぶん(讖文)に同じ。太平記「不思議なりし讖文なり」

しん-もん 神文【名】神明に對して盟を立つる文。誓文。

しん-もん 眞文【名】梵字の經文。梵文。平治「法華の眞文を講じたまひしかば」

しん-もん 眞門【名】〔佛〕上根の人に對して說く、眞實の法。

しん-もん 審問【名】㊀つまびらかに問ふこと。㊁審理のために問ひただすこと。

じん-もん 尋問【名】たづねとふこと。

じん-もん 訊問【名】㊀問ひ糺すこと。吟味。㊁〔法〕權力的に事實の審査又は糺問をなすこと。とりしらべ。審理。

じん-もん 腎門【名】〔醫〕『英 Hilum』腎臟の內緣の、腰椎(ヨウツイ)の方へ凹みこめるところ。腎動脈の腎臟の實質內に入り、腎靜脈及び輸尿管の腎臟を出づるは、皆この部分においてす。

じんもん-しよ 訊問書【名】訊問及び答辯を記せる書類。

じんもん-じよ 訊問所【名】訊問を行ふために設けたる場所。

しんもん-ぜき 新門跡【名】㊀あらたに門跡號を許されし僧。㊁けうによ(敎如)を見よ。

じんもん-でんぱう 尋問電報【名】課金電報の一。電報の發信者が、その發したる電報に關して、又は受信者が、その受取りたる電報につき、電信局に尋問の請求をなせるに應じて、その局が發する尋問の電報。

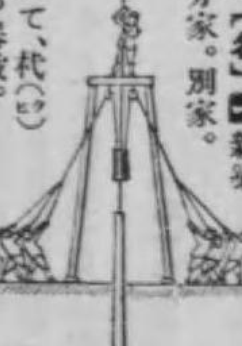
しんもん-りう 眞門流【名】〔佛〕ほんめうほっけじゆう(本妙法華宗)の舊稱。

しん-や 晨夜【名】朝より夜ふけまで。夙夜(シュクヤ)。

しん-や 深夜【名】よふけ。よなか。深更。

しん-や 新家【名】㊀新築の家。㊁分家。別家。しんけ。

しん-や 心矢【名】土木工事にて、杙(クヒ)を打つ一種の器械。


(しんや)

しん-やう 新樣【名】新しき樣式。いまや「う。

しん-やう 新陽【名】新しき春。はつはる。

しんやうめいもんゐん 新陽明門院【名】〔人〕龜山天皇の妃。藤原基平の女。御名は位(ヰ)子。建治元年女御となり、三宮に准ぜられ、のち尼となり、法名を覺陰と稱す。永仁四年薨ず。御年三十五。

しん-やく 神役【名】かんぬし。神官。若風「當社西の御門に、神役の家高き大中井兵部太夫」

しん-やく 神藥【名】不思議の効能ある藥。「靈藥。

しん-やく 神約【名】神の約束。盛衰記「神約なれば、子孫までも守るべし」

しん-やく 信約【名】誓約すること。ちぎり。ちかひ。やくそく。

しん-やく 震厄【名】しんさい(震災)に同じ。

しん-やく 新藥【名】新に發見せし藥。

しん-やく 新譯【名】㊀あたらしき飜譯。㊁漢譯佛經の、唐代以後に譯せられしもの。玄奘・義淨の二人、譯者中において、最も著はる。

しん-やく 新約【名】㊀新しき約束又は條約。㊁〔書〕しんやくぜんしよ(新約全書)の

略。(舊約に對して)

しん-やく 新役【名】あたらしき役目。

しん-やく 針藥・鍼藥【名】針醫の療治と投藥と。

しん-やく 沈約【名】〔人〕支那南北朝の學者。字は休文。梁の武帝に仕ふ。晉書・宋書・齊紀・四聲韻譜の著あり。

じん-やく 腎藥【名】腎勞を强くする藥。腎虛の藥。素人狂言紋切形「それそれお前の後を通る、第一の腎藥。え、と振返るとたんに、夜商人、たまごたまごゥ」

しんやくし-じ 新藥師寺【名】大和國奈良市高畑町に在る華嚴宗の寺。東大寺の末寺。天正中、聖武天皇の眼病平癒を祈り給ふため、光明皇后の御願によりて、行基の開基せしもの。本尊は藥師如來にて、十二神將これに附屬し、共に名作たり。香藥寺。

しんやく-しよ 新約書【名】〔書〕次條の「略。

しんやく-せいしよ 新約聖書【名】〔書〕次條に同じ。(舊約聖書に對して)

しんやく-ぜんしよ 新約全書【名】〔書〕『英 New testament 約とは、神と人との誓約の義』ユダヤ敎の敎徒の每土曜日、敎會に集合して、舊約全書を讀むに倣ひ、キリスト敎徒の間に、キリスト昇天の日を記念せんがために、使徒の書束を讀むこと行はれ、遂にその一書の編成せらるるに至りしもの。西曆第二世紀の終に、大體一書の形をなしたれども、なほ全く今日存するが如き形には至らざりしものの如し。二十七卷より成り、原文はギリシヤ語にて書かれ、福音書四卷と書東二十三卷とに大別するを得。(舊約全書に對して)

しん-やしき 新屋敷【名】㊀新に開きたる屋敷地。膝栗毛「營に馴染もなきや新屋敷」㊁新に築きたる屋敷。

しん-やすね 新安直【名】〔商〕これまでになき安直。〔取引所の語〕

しん-ゆ 新湯【名】㊀新に開設したる浴湯。㊁あらゆ(新湯)に同じ。

じん-ゆう 仁勇【名】㊀仁心と勇氣と。㊁仁心と勇氣とを兼ねたること。

しんよ 眞譽【名】〔人〕眞言宗の高僧。仁和寺の寬恕に學び、持明院を起し、奏して御願寺とす。保延元年金剛・傳法二寺の座主となる。

しん-よ 宸輿【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天皇の召したまふ輿。

じん-よ 神輿【名】みこし(御輿)に同じ。盛衰記「衆徒戴二神輿一企二參洛一」

じん-よ 燼餘【名】もえのこり。もえさし。餘燼。

しん-よう 信用【名】㊀『左傳の宣公十二年の條に「莊王曰、其君能下レ人。必能信二用其民一矣」とあり』信じて任用すること。信任。㊁信じて疑はぬこと。盛衰記「人の讒言に侍るか、信用に及ぶべからず」㊂人より信ぜらるること。㊃〔經〕『英 Credit』將來に於て、義務を必ず履行すべきを信ずること。或人の給付に對し、直ちに現金にて反對給付をなさずとも、若干の時日を隔てて、これが給付をなすべしと約する場合に、その人が必ずその反對給付の約束を守るべしと信認すること。對人信用と對物信用、有期信用と無期信用、短期信用と長期信用等の區別あり。

しんよう-がし 信用貸【名】〔商〕『英 Fiduciary loan』貸主が借主を信用して、無抵當・無保證にて、金錢・物品を貸すこと。(擔保貸・保證貸に對して)

しんよう-かしきん 信用貸金【名】金錢を信用貸に貸すこと、又その金錢。

しんよう-かしつけ 信用貸附【名】信用貸にて貸附くること。

しんよう-きくわん 信用機關【名】〔經〕信用を利用して、金錢の融通をなす機關、卽ち興信所・手形仲買人・銀行・金貸業者・質屋・信用組合など。

しんよう-くみあひ 信用組合【名】〔經〕信用機關の一、また產業組合の一。勞働者その他の細民が相團結して、各小額の資金を醵出し、組合員中に、資本の必要ある際、對人信用によりて、低利に貸附くる組合。

しんよう-けいざい 信用經濟【名】〔經〕全然貨幣の使用を除外したるにあらざれども、主として信用を利用し、帳消法又は小切手・手形等の信用證券によりて、取引の行はるる經濟界の狀態。

しんよう-けいざい-じだい 信用經濟時代【名】〔經〕社會が、貨幣經濟時代より一進步をなし、貨幣を使用するよりも、主に信用によりて、經濟事業を經營する時代。(貨幣經濟時代・實物經濟時代に對して)

しんよう-けん 信用劵【名】〔商〕しんようしようけん(信用證券)に同じ。

しんよう-さい 信用罪【名】〔法〕虛僞の風說を流布し、又は僞計を用ひて、人の信用を毀損したるによりて成立する犯罪。

しんよう-じやう 信用狀【名】〔商〕『英 Letter of credit』銀行又は商人が、その本支店又は取引銀行に宛てて、一定期間內に、一定の金額を限り、これを所持する人の請求に應じて支拂ふべきことを依賴せる書狀。支拂ひたる銀行等は、その都度支拂金額を裏書として記入し、後の支拂者に、その信用殘高を知らしむ。

しんようじやう-つき-てがた 信用狀附手形【名】〔商〕信用狀によって振出さるる手形。專ら外國爲替手形にその例を見る。

しんよう-しゆっし 信用出資【名】〔法〕信用を會社又は組合の出資の目的とすること。(資本出資・勞働出資に對して)

しんよう-じゆんくわんき-せつ 信用循環期說【名】〔經〕次條に同じ。

しんよう-じゆんくわん-せつ 信用循環說【名】〔經〕『英 Theory of credit cycles』經濟界の信用は、十箇年を一期として生滅するものにして、恐慌後三年間は、信用衰へて、事業振はざれども、次の三年間において、漸次回復し、第三次の三年間において、再び隆盛に赴き、貸出盛んに、企業心・投機心の勃興し、信用機關の濫用となり、次の一箇年卽ち十箇年目には恐慌を生じ、かくのごとくにして、恐慌期は十箇年每に到來すといふ說。英人ジョン・ミル(J.Mill)及びジェエムズ・ミル(J.Mill)等の主張せし說。

しんよう-しようけん 信用證券【名】〔商〕後日に債務を履行すべきことを信認して受取る證券、卽ち信用取引に使用する證券。例へば貸借證文・公債證書(以上は、非貨幣的なるもの)・紙幣・諸手形(以上は貨幣的なるもの)などの類。信用劵。

しんよう-たいしやく-かんぢやう 信用貸借勘定【名】〔商〕じんめいかんぢやう(人名勘定)に同じ。

しんよう-てがた 信用手形【名】〔商〕手形の形式によりて發行せらるる信用證券。爲替手形・約束手形・小切手の類。

しんよう-とりひき 信用取引【名】〔商〕一方の給付とその反對給付との間に、相當の時日の猶豫を存する取引。物品を購求して、その代價を後日に拂ひ、勞働者が勞務を提供して、報酬を後日に受取る類、又、信用證券の授受に依る一切の取引、皆これに屬す。

しんよう-ほけん 信用保險【名】〔商〕㊀損害保險の一。使用人又は代理人の不正行爲に基き、主人又は本人が被りたる損害の塡補を目的とするもの。㊁損害保險の一。卸賣商人又は製造業者が、得意先の賣掛代金の不拂、手形の不渡によりて被りたる損害の塡補を目的とするもの。

しんよう-やくそく 信用約束【名】〔法〕他人に信用を與ふる約束。

しんよう-りよかうけん 信用旅行劵【名】旅費及び入用の金員を、銀行に預け置き、旅行先にて、その銀行の取引銀行より、入用だけの金子を受取り得る證券。

じん-よく 人欲・人慾【名】㊀人間の慾心。人の欲望。㊁心の本體をくらます雜念。

しん-よしのおり 新吉野織【名】吉野織に似せて織りたる木綿織物。

しん-よしはら 新吉原・新芳原【名】〔地〕よしはら(吉原)㊂を見よ。

しん-よね 新米【名】米澤(ヨネザハ)絲織に擬して、武藏八王子附近にて製出する織物。地合薄く、品質佳ならざれども、光澤あり。諸絲織の代用に供せらる。

しん-ら 森羅【名】森然として羅列すること。多くならぶこと。

森羅萬象【句】㊀天地の間にありとあ

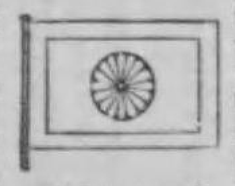
るすべての物。宇宙間に存在するあらゆる現象。㊁〔人〕しんらていばんしやう(森羅亭萬象)㊀㊁㊂に同じ。
しんら 新羅【名】〔地〕しらぎ(新羅)に同じ。
しんらい 新來【名】あらたに來ること。
新來の菩薩【句】〔佛〕極樂に新に往生せる菩薩。(「舊住(くぢう)の菩薩」に對して)
しんらい 信賴【名】信じて依賴すること。
しんらい 親賴【名】親みてたよること。
しんらい 神來【名】『英 Inspiration』不思議なる感興を感得すること。いんすぴれえしよん。靈感。「神來の興に驅らる」
しんらい 神籟【名】㊀神の聲。㊁靈妙なる感興を惹きおこす韻致。(音樂・詩歌などにいふ)
じんらい 人籟〔名〕人の吹きて發する聲、卽ち笛などの聲。(天籟・地籟に對して)
じんらい 迅瀨【名】流のはやき瀨。はやせ。急湍。
じんらい 迅雷【名】烈しきかみなり。疾雷。
迅雷耳を掩ふに暇あらず【句】次條に同じ。〔諺語〕
迅雷耳を掩ふに及ばず【句】『晉書の石勒戰記に「迅雷不ㇾ及ㇾ掩ㇾ耳」とあるに本づく』事あまりに急にして、禦ぐに暇なし。疾雷耳を掩ふに及ばず。〔諺語〕
しんらいはいこう 新禮拜講【名】らいはいこう(禮拜講)を見よ。
しんらう 新郞【名】はなむこ(花婿)に同じ。(新婦に對して)
しんらう 辛勞【名】きぐらう。苦勞。辛苦。
しんらう 心勞【名】心をつかふこと。しんぱい。 金葉「病氣をなんもてはべりて、かしこく心勞しはべるなん」
しんらごと 新羅琴【名】しらぎごと(新羅琴)に同じ。
しんらさぶらう 新羅三郞【名】〔人〕『賴義の第三男にて、新羅明神の社壇にて元服を加へしよりいふ』みなもとよしみつ(源義光)に同じ。
しんらぜんじん 新羅善神【名】しんらみやうじん(新羅明神)に同じ。
しんらつ 辛辣【名】㊀味のひりりとからきこと。㊁極めてきびしきこと。
しんらていばんしやう 森羅亭萬象【名】〔人〕㊀ひらがげんない(平賀源內)に同じ。㊁狂歌師。蘭醫桂川甫周の弟。名は中良、字は虞臣、通稱は萬藏、のち森島氏を繼ぎて、甫齋といふ。桂林と號す。平賀源內に學びて、森羅亭萬象の號を讓られ、また二世風來山人と號す。狂歌を善くし、蘭學にも通ず。文化五年歿す。年五十五。㊂しっちんまんぼう(七珍萬寶)に同じ。
しんらばんしやう 森羅萬象【句】しんら(森羅)の條下を見よ。
しんらまるくせつ 新ラマルク說(英 Neo-Lamarckism)【名】〔生〕てきおうせつ(適應說)を見よ。
しんらみやうじん 新羅明神【名】近江國園城(をんじやう)寺の守護神。園城寺の中興圓珍、唐より歸朝の船中にて、靈夢を感じて祀りしもの。域內、金堂(こんだう)の北方に鎭坐す。東海道名所記「膳所(ぜゝ)…右の方に八幡の宮あり、又、新羅明神の祠あり。この御神は、三井寺の鎭守なり。智證大師入唐して歸朝ありける時に、舟の中に一人の翁あらはれて曰く、我れはこれ新羅國の神なり、佛法守護のために、日本國に渡らんとのたまひけり。大師すなはち三井寺の鎭守としたまへり」
しんらん 進覽【名】觀覽に供するために進上すること。
しんらん 親覽【名】したしく見たまふこと。
しんらん 親鸞【名】〔人〕高僧。淨土眞宗の開祖。日野有範の長子。母は源義親(一說に爲善)の女吉光。幼にして父母を喪ひ、伯父範綱に養はる。九歲の時、慈鎭の門に入り、のち法然に從ひ、名を綽空と改む。僧侶の、肉食・妻帶を禁ずるを患へ、在家往生の實を示さんがために、藤原兼實の季女を娶りて、名を善信(ぜんしん)と改む。師法然の事に坐して越後に流さる。この間、愚禿(ぐとく)と自稱し、名を親鸞と改む。勅免の後、關東に在ること二十年、弘長二年京都西洞院に寂す。年九十。明治九年に見眞大師の諡號を勅賜せらる。

(しんらん)

しんらん 深藍【名】かちいろ(褐色)に同じ。
じんらん 人卵【名】〔生〕成熟せる卵巢より生じ、喇叭管を通りて、子宮內に來るもの。約十箇月間生活す。
しんらんき 親鸞忌【名】ほうおんこう(報恩講)に同じ。
しんり 心裡【名】こころの中。胸裡。
しんり 心理【名】㊀精神界の現象を支配する理法。㊁しんりがく(心理學)の略。
しんり 眞理【名】㊀まことの道理。天理。㊁〔哲〕『英 Truth』想念と事物との契合。(臆見に對して) ㊂〔佛〕無爲の眞如。
眞理の玉【句】〔佛〕眞理の尊く淸きを玉に譬へていふ語。 平家「至極信心の床(ゆか)の上には、眞理の玉を研くらん」
しんり 深理【名】深遠なる道理。 太平記「須ㇾ有ㇾ非㆓一之深理㆒矣」 大鏡冠「この玉は佛法の深理にて、誠の玉の體ありともなしとも終に箱の中拜したる者なし」
しんり 審理【名】㊀道理・理由を審かにすること。㊁〔法〕裁判官が判定に要する取調につきての一切行爲。
しんりう 新柳【名】若葉の萌え出でたる柳。 浦島年代記「風新柳の髮は梳れども、手にも取られぬ九十九髮」
しんりう 進流【名】〔佛〕聲明(しやうみやう)の一流。紀伊國高野山を本山とす。
しんりがく 心理學【名】『英 Psychology 譯語は西周が、明治の初年ヘブン(Hephurn)の斯學の著書を飜譯せし時、始めて用ひしもの』精神の作用を研究する科學。古くは哲學の一部なりしも、近代は獨立せる科學として、研究せらるるに至れり。
しんりき 信力【名】信仰の力。 用明天皇職人鑑「世にほだされぬ信力の佛意にや叶ひけん」
しんりき 神力【名】㊀しんりよく(神力)に同じ。㊁〔植〕しんりきいね(神力稻)の略。
じんりき 神力【名】〔佛〕じんづうりき(神通力)の略。
じんりき 人力【名】㊀じんりよく(人力)に同じ。㊁じんりきしや(人力車)の略。
しんりきいね 神力稻【名】晩稻(おくて)の一種。明治十年兵庫縣人岡尾重次郞の「ほどよし」より選出せしものにて、實は芒無くして、形圓し。しんりき。
じんりきしや 人力車【名】人を乘せ、人の力にて挽く二輪車。一人乘と二人乘とあり。明治の初年、和泉要助・高山幸助・鈴木德次郞等の創製せしもの。くるま。腕車。人車。人力。
じんりきしやふ 人力車夫【名】人力車を挽くを業とする勞働者。車夫。
しんりきよく 審理局【名】明治十四年二月に置かれ、同十月に廢せられし太政官の被官。府知事・縣令と府縣會と法律の見解を異にし、又は權限の爭を生じたる場合に、臨時に委員長委員を特選して、その件を合議裁定せしめし所。
しんりく 神戮【名】神の誅戮。 盛衰記「就中去比、鹿島大明神御上洛之由、神戮不ㇾ空者歟」
しんりけう 神理教【名】神道教派の一。豐前國の人佐野經彥の主唱せしもの。饒速日(にぎはやひ)命の遺教を奉じ、言靈(ことだま)を明かにし、神理の教義を傳ふるを本旨とす。大教廳を福岡縣企救(きく)郡企救町に置く。
しんりしゆぎ 心理主義【名】〔哲〕しんりせつ(心理說)に同じ。
しんりせうせつ 心理小說【名】〔文〕『英 Psychological novel』事件の發展、人物の外面的活動を重んぜず、主として作中の中心人物の心理的經過の解剖をなさんとする小說。
しんりせつ 心理說【名】〔哲〕『英 Psychologism』吾人の內的經驗を以て、あらゆる認識の發足點とし、心理學を哲學及びその各部門の根本學とする主張。心理主義。
しんりつ 震慄・振慄【名】ふるへわななくこと。戰慄。
しんりつ 新律【名】新に制定したる法律。
しんりつ 新立【名】新に設立すること。

しんりつ 森立【名】森然として立てること。いかめしく並び立てること。
じんりつ 人立【名】獸などが、人の如くに立つこと。
しんりつかうれい 新律綱領【名】明治三年頒布せられし刑法。名例(上・下)・職制・戶婚・盜賊・人命(上・下)・鬪毆・罵詈・訴訟・受贓・詐僞・犯姦・捕亡・斷獄の十四編・八圖・百九十二條より成れるもの。かいていりつれい(改定律令)參照。
しんりべうしや 心理描寫【名】〔文〕小說にて、人物を描寫するに、單にその外部にあらはれたる行爲又は會話のみを以てせずして、その人物の心理狀態を描くこと。
しんりん 親臨【名】貴人の親しく臨場せらるること。
しんりん 森林【名】樹木の密生せる所。もり。はやし。
しんりん 深林【名】深きはやし。
しんりん 申稟・申禀【名】『稟の字の音、一にひん』㊀申し上ぐること。稟申。㊁下級の官廳が上級の官廳に對し、また人民が政府に對して、或事項を申し立てて、指令を仰ぐこと。うかがひ。
じんりん 人倫【名】㊀人のともがら。人類。 十訓「六畜は主といふことを辨へねども、あはれを知りてむつる。いはんや心ある人倫をや」 飯山鈔「人倫はなれし山に籠れば」 ㊁人の行ふべき道。
しんりんがく 森林學【名】りんがく(林學)に同じ。
しんりんかんしゆ 森林監守【名】北海道廳の職員の一。上官の指揮を受けて、官林保護に從事する判任待遇のもの。
しんりんきこう 森林氣候【名】森林內に於ける氣候。風速の小なること、雨量の多きこと、濕度の高きこと、年內平均溫度の低きこと、寒暑共に酷烈ならざること等の特徵あり。
しんりんぎやうせい 森林行政【名】〔法〕經濟行政の一。森林の發達・保存・廢滅に關するもの。
しんりんくみあひ 森林組合【名】國土保安のため、森林の荒廢を防止又は回復のため、森林利用上に必要なるため等にて、一定の區域內の森林所有者の連合を必要とする場合に、地方長官の許可を得たる上にて設立して、これらの目的を達するための行爲をなす社團法人。
しんりんくわん 森林官【名】次條に同じ。
しんりんくわんり 森林官吏【名】森林の保管・經營・利用及び監督に直接に當る官吏。林區署長・林務官・林務官補・林務技師など、これなり。森林官。
しんりんけいさつ 森林警察【名】〔法〕行政警察の一。森林に關する危害を防ぐためのもの。
しんりんしよいうしや 森林所有者【名】森林を所有する者、又は森林・竹木を所有せるために、地上權・貸借權、その他、土地に關する使用、若しくは收益の權利を有する者。
しんりんしよくぶつたい 森林植物帶【名】〔地〕各區域內に自生せる特殊の植物を、林業上の樹木に依って區別したる植物帶。熱帶林(榕樹帶)・暖帶林(亞熱帶林又は樫帶)・溫帶林(椈(ぶな)帶)・寒帶林(白檜(しらべ)櫰松(とどまつ)帶)の四帶に分つ。森林帶。
しんりんせったう 森林竊盜【名】森林に入込みて、その產物を竊取すること、又その人。
しんりんせん 森林戰【名】〔兵〕森林中に行はるる戰鬪。多くは小戰鬪に過ぎざれども、不意に敵に遭遇する場合に起り易く、白兵戰往往に行はる。
しんりんたい 森林帶【名】〔地〕しんりんしよくぶつたい(森林植物帶)に同じ。
じんりんばいばい 人倫賣買【名】じんしんばいばい(人身賣買)に同じ。
しんりんはふ 森林法【名】森林に關する一般的規定の法律。明治三十年の公布。
しんりやう 新涼【名】しよりやう(初涼)に同じ。
しんりやう 津梁【名】㊀渡場と橋と。㊁みちびき。てびき。㊂『世說の言語篇に「應公嘗入㆓佛閣㆒見㆓臥佛㆒曰、此子疲㆓於津梁㆒於ㇾ時以爲㆓名言㆒」とあり』さいど(濟度)に同じ。
しんりやう 神領【名】神社に附屬せる領地。 孕常盤「神領・社領・御供領一萬町を寄せ奉り」
しんりやう 斟量【名】しんしやく(斟酌)に同じ。
しんりやうし 仲量嘴【名】彫刻家が、原型を他に擴大して移す時、尺度を伸ばすに必要なる器具。
しんりやく 心略【名】心中の工夫。くふう。智略。
しんりやく 侵略・侵掠【名】侵入して掠めとること。
しんりやく 進略【名】進入して奪ひ取ること。
しんりやくしゆぎ 侵略主義【名】他を侵略して、その領域を擴張する主義。
しんりゆうじ 神龍寺【名】しんだいぶつじ(新大佛寺)に同じ。
しんりよ 臣虜【名】『臣として虜にせらるる義』生捕せられて服從すること。
しんりよ 愼慮【名】つつしみて思慮すること。
しんりよ 宸慮【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天子の御心。叡慮。聖慮。
しんりよ 神慮【名】㊀神の御心。かみごころ。 盛衰記「叶㆓天地之神慮㆒」 ㊁前條に同じ。
しんりよ 心慮【名】おもひ。かんがへ。おもんばかり。
しんりよ 深慮【名】ふかきおもんばかり。深意。
しんりよ 振旅【名】『振は整、旅は軍旅の義』がいぢん(凱陣)に同じ。
しんりよう 神陵【名】みささぎ。陵墓。 太平記「驪山の神陵忽ちに、灰塵と成りしこそ悲しけれ」
しんりよう 眞龍【名】まことの龍。(畫龍などに對して)
眞龍も勢を失へば、蚯蚓(みみず)に同じ【句】英雄も權勢を失へば、凡人と同じなることの譬。〔諺語〕 盛衰記「眞龍失ㇾ勢同㆓蚯蚓㆒といへり。この諺まことなり」
しんりよう 侵凌・侵陵【名】をかししのぐこと。侵りて、恥かしむること。
しんりよく 心力【名】㊀心と體力と。㊁心のはたらき。精神の活動力。
しんりよく 神力【名】神の威力。しんりき。
しんりよく 深綠【名】深きみどり色。ふかみどり。
しんりよく 新綠【名】新に生じたる葉の色。若葉のみどり。わかみどり。
じんりよく 人力【名】人のちから。じんりき。
じんりよく 盡力【名】有りたけ力を出して働くこと。ほねをり。はたらき。
しんりれうはふ 心理療法【名】『英 Mind cure』せいしんれうはふ(精神療法)に同じ。
しんるゐ 親類【名】㊀同じ血統を引きたる一族。血族及び姻族。親戚。親族。㊁男系の血族。僕家。
遠くの親類より近くの他人【句】『韓非子に「遠親不ㇾ如㆓近隣㆒」とあり』㊀遠方にある親類よりも、近所に住める他人の方が、火急の場合に賴となる。㊁疎遠なる親類よりは、親密なる他人の方が、たよりとなる。〔諺語〕
じんるゐ 人類【名】㊀人のたぐひ。(他の動物と區別していふ) ㊁じんしゆ(人種)に同じ。
しんるゐあづけ 親類預【名】江戶幕府時代に、犯人が幼者或は病者なるために、刑に處し難き時、生長又は平癒するまで、その者の親族に預けおきしこと。
しんるゐがき 親類書【名】親類の關係を記したる書類。
じんるゐがく 人類學【名】『英 Anthropology』人種の起原・發達・異同・自然に於ける人類の地位、人類相互の關係などを研究する學問。
じんるゐけう 人類教【名】『英 Religion of humanity』人類のために盡す愛他の情を、根本要義となす宗教。佛人コント(A. Comte)の創唱せしもの。人道教。
しんるゐすぢ 親類筋【名】㊀親類としての關係ある者。㊁藝妓などと、夫婦同樣の馴染を重ねたる情交。
しんるゐだいおちぼしふ 新類題落穗集【名】〔書〕新類題和歌集に、題のみを擧げ

て、歌の缺けたるを補ひたるもの。四卷。撰者詳かならず。
しん-るゐだい-わかしふ 新類題和歌集【名】〔書〕靈元法皇の勅によりて、烏丸光榮(ミツヒデ)・三條西公福(キミトミ)・水無瀨(セ)氏成・高松重季・武者小路實陰の五人の撰みたる歌集。二十卷。
しんるゐ-づきあひ 親類附合【名】㊀親族間の交際。 一代女「しんるゐづきあひ、かれこれ暇なく」 ㊁親類にあらざる他人同士が、互に親族の如き交際をなすこと。
しんるゐ-ながあづけ 親類永預【名】江戶時代に、犯罪人にて、心神を喪失し、本刑に處すること能はざるため、終身間、その親族に附托して、禁錮せしこと。
しんるゐ-ぶん 親類分【名】かりに親類と定めたる門地。
しん-れい 新令【名】あらたに發布せられたる命令又は法令。
しん-れい 新例【名】あたらしき例。
しん-れい 心靈【名】意識の本體。精神の根元。こころ。靈魂。
しん-れい 神靈【名】㊀前條に同じ。㊁神のみたま。靈德。 性盛「風に當り、濕に臥して、病を神靈に訴ふるは」 ㊂靈妙なる智識。
しん-れい 振鈴【名】鈴を振鳴らすこと、又振鳴らす鈴。
しん-れい 臣隷【名】けらひ。臣下。
しん-れい 秦隷【名】れいしよ(隷書)を見よ。
しん-れい 浸禮【名】〔基〕ばぷてすまを見よ。
しんれい-きやう 神靈狂【名】〔哲〕ぜんれいきやう(善靈狂)に同じ。
しんれい-けうくわい 浸禮教會【名】〔基〕浸禮派の教會。ばぷてすと教會。
しんれい-は 浸禮派【名】〔基〕『英 Baptist』基督教の新教の一派。その信徒となる儀式に浸禮を用ふるもの。ばぷてすと。
しんれい-やぐちのわたし 神靈矢口渡【名】淨瑠璃の一。新田義興の歿後、御臺筑波前は一子德壽丸を連れて落人となり、由良兵庫德壽丸の身代に我が子友千代を討つこと、義興の子義峰矢口渡にて、渡守頓兵衛の娘お舟に助けらるることなどを仕組みたるもの。四段目の切(キリ)なる頓兵衛宅の一齣は、殊に名なり。福內鬼外(平賀源內)の作。
しん-れう 臣僚【名】けらひ。臣下。
しん-れう 診療【名】診察と治療と。
しん-れき 新曆【名】㊀新しく制定したる曆。 ㊁たいやうれき(太陽曆)に同じ。(舊曆に對して)
しんれき-かう 新曆考【名】〔書〕我が國、上代の曆法を論じたるもの。一卷。本居宣長の著。
しん-れこおど 新記錄【名】新に出來たるレコオド。
しん-れつ 深裂【名】〔植〕『英 Parted』缺刻の一。葉の殆ど中軸まで深く分裂せること。(淺裂・全裂に對して)
しん-れつ 森列【名】おごそかに列ぶこと。「星晨蒼空に森列す」
しん-れん 心蓮【名】〔佛〕顯教にては自性(ジシヤウ)心の淸淨、密教にては心臟の實形の譬。しやくにくちゆうだい(赤肉中臺)參照。
しん-ろ 新路【名】新に開きたる路。新道。
しん-ろ 進路【名】㊀進みゆく路次。 ㊁進み行くさきの方の路。ゆくて。前途。前程。
進路を開く【句】立身し易きやうにす。立身の便を與ふ。
しん-ろ 神路【名】神社に通ずる道路。
しん-ろ 針路【名】『針は はうしん(方針)の義』船の進むべき路。
しん-ろ【貌】しんぞの轉訛。 生玉心中「さぞ小癖もしんろかろ」
しん-ろう 蜃樓【名】しんきろう(蜃氣樓)に同じ。
しん-ろう 寢陋・梫陋【名】容貌の見にくくして、ひきたたぬこと。
しん-ろう 滲漏【名】もれにじむこと。にじみだすこと。
じん-ろく 甚六【名】㊀おろかなる人。〔俚語〕 ㊁そうりやう(總領)の隱語。
しん-ろくかせん 新六歌仙【名】六歌仙の外に、後世あらたに選みたる六人の歌仙。卽ち後京極攝政藤原良經・慈圓・藤原俊成・同定家・同家隆・西行の總稱。りくかしふ(六家集)參照。
しん-ろっこつ 眞肋骨【名】〔醫〕ろくこつ(肋骨)を見よ。
しん-ろてい 振鷺亭【名】〔人〕江戶の小說家。㊀(初世)。本名は猪刈貞吉、通稱は與兵衞、酒落本・草雙紙の戲作多し。晚年落魄して、東海道川崎在に手習師匠を業とし、文化四年醉ひて玉川の分流に溺死す。㊁(二世)。ためながしゆんすゐ(爲永春水)の初名。
しん-ろん 新論【名】あらたなる議論。
しん-わ 親和【名】しんくわ(親和)に同じ。
しん-わ 神話【名】神代の傳說。神代のいひつたへ。こうひ(口碑)㊀參照。
じん-わ 人和【名】衆人の和合。じんくわ。
しん-わう 親王【名】『唐六典に「皇兄弟・皇子・皆封レ國謂二之親王一」とあり。天皇に最も親しき王の義。王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』皇族の稱號の一。大寶令の制度にては、皇兄弟・姉妹・皇子女を親王・內親王と稱し、淳仁天皇の時より、皇子・皇孫・諸王の何れを問はず、すべて宣賜によりて附する稱號となり、足利時代頃より、茉宮等と稱する世襲の親王家特定せられ、世襲の親王は、必ず天皇の猶子又は養子となりたる上、宣下によりて、親王號を稱せらるるを例とし、德川時代には伏見・桂・有栖川の三家を三親王家とし、寶永七年に新に閑院宮家を加へて、四親王を稱し、大統を繼ぎたまふべき御家柄と定められたり。明治以後は、世襲親王の制廢せられ、皇子より皇玄孫、卽ち四世までの男子の汎稱となり、なほ天皇、支系より入りて大統を承くる時、特にこの稱號を宣賜せられたる皇兄弟の王、及び現在の皇族の五世以下にして、舊制度によりて、この稱號を宣賜せられし場合に限らる。ないしんわう(內親王)・にふだうしんわう(入道親王)・ほふしんわう(法親王)・わう(王)・ぢよわう(女王)參照。
出家の後の親王【句】ほふしんわう(法親王)に同じ。 今鏡「仁和寺に覺行法親王と聞えたまひしは、白河ノ院のみこにおはす。…白河ノ院、內親王といふこともあれば、法親王もなどかなからんとて、はじめて法師の後、親王ときこえたまひしなり。かくて後ぞうちつづきいつにも、出家の後の親王と聞えたまふめる」
しん-わう 神往【名】『精神の往く義』風景などをあくがれ慕ふこと。「神飛び魂馳す」參照。「人として神往に堪へざらしむ」
しん-わう 心王【名】〔佛〕『王は、心の字の韻に引かれて、ナウと發音す』心の主なる作用。對境を悟る心。(心所に對して)
じん-わう 人皇【名】『皇は、人の字の韻に引かれて、ナウと發音す』てんわう(天皇)に同じ。
しんわう-がしら 親王頭【名】『王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』芝居の鬘(カツラ)の一種。皇子の姿を寫せるもの。
しんわう-き 親王旗【名】『王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』親王の儀仗通行の際に擧げらるる旗。內親王・親王妃の御旗も、明治二十二年制定せられたり。


(しんわうき)

しんわう-け 親王家【名】『王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』親王の稱號を許されたる皇族家。
じんわう-しやうとうき 神皇正統紀【名】〔書〕『皇は、神の字の韻に引かれて、ナウと發音す』神武天皇より後村上天皇までの事蹟を記し、吉野朝の正統なる由を陳べたるもの。一卷。北畠親房の著。ぞくじんわうしやうとうき(續神皇正統記)參照。
じんわう-しやうとうろく 神皇正統錄【名】〔書〕『皇は、神の字の韻に引かれて、ナウと發音す』神代より後鳥羽天皇の建久九年までの事を記せるもの。三卷。著者未詳。續群書類從に收む。
しんわう-せんげ 親王宣下【名】『王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』皇兄・皇弟・皇子・皇女・皇孫などに、親王と稱することを許さるる宣旨。しんわう(親王)參照。
しんわう-だい 親王代【名】『王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』古、大禮の日、適當なる人の選ばれて、親王に代りて勤めし臨時の官。

じんわう-はぢんらく 秦王破陣樂【名】『王は、秦の字の韻に引かれて、ナウと發音す』雅樂の一。唐樂・大食(タイシキ)調に屬す。唐制三大舞樂の一。唐の太宗秦王たりし時、劉武周を討つ狀に象りしもの。四人立の舞にて、甲冑を帶し、戟(ホコ)を執りて舞ふ。後世は、舞曲共に絕ゆ。七德の舞。
しんわう-ひ 親王妃【名】『王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』皇族の一。親王の配偶者。その敬稱を殿下とす。
しんわう-もんぜき 親王門跡【名】『王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』伏見・有栖川・桂の三家の親王より繼承する門跡。しんわう(親王)參照。〔德川時代の語〕
しんわ-がく 神話學【名】『英 Mythology』神話を研究する文學。
しん-わかめ 新若布【名】〔植〕あをさ(石蓴)に同じ。
しんわかるゐくしふ 新和歌類句集【名】〔書〕二十一代集の歌を、第一句より第五句に至るまでの何れの句によりても索引し得るやう次第して、集めたるもの。百卷。撰者詳かならず。一名、五句類句。
しんわ-ぞめ 親和染【名】『和は、親の字の韻に引かれて、ナと發音す』寬文の頃流行せし染模樣。唐様(カラヤウ)の書家三井孫之允親和の書を染出ししもの。
しん-わら 新藁【名】㊀刈りたての稻より得たる藁。正月の注連(シメ)輪飾等を作るに用ふ。 芭蕉「しんわらの出そめて早きしぐれかな」 ㊁植附に適するほどに生長したる早苗に熱湯を注ぎて、乾したるもの。淺緣色にして、女の髮を束ぬるに用ふ。
しんわら-うり 新藁賣【名】新藁㊁を賣りあるく女。
しん-わりびき 眞割引【名】〔商〕『英 True discount』手形などを、未だ支拂期日に至らざる以前に支拂ふ時、その時より支拂期日に至る間に於て、現に支拂ふ金高より生ずべき利息の割引を行ふこと。外割引。(銀行割引に對して)
しんわ-りよく 親和力【名】〔化〕くわがくてきしんくわりよく(化學的親和力)に同じ。
しん-ゐ 神威【名】神の威光。 盛衰記「矢ニ神威與佛法ニ」
しん-ゐ 神位【名】㊀しんかい(神階)に同じ。㊁しんしゆ(神主)㊁を見よ。
しん-ゐ 臣位【名】臣下の位階。
しん-ゐ 震位【名】『易(エキ)にて、震は皇太子に配せらるる卦なるよりいふ』東宮の位。
しん-ゐ 身位【名】身分と位地と。
しん-ゐ 讖緯【名】次條を見よ。
讖緯の學【句】『讖は未來の効驗を說くこと、緯は經(經書)に對する語』日蝕・月蝕・地震などの天變・地妖によりて、人間の運命を豫測する說。支那にて、前漢の時代より起り、後世、弊害少なからざりしを以て、禁ぜられたり。
じん-ゐ 人爲【名】人のしわざ。(天然に對して)
じん-ゐ 人位【名】人と人との身分の等級。
しん-ゐき 神域【名】㊀神社の境內。㊁〔佛〕眞證の境界の不可思議なること。
しん-ゐき 畛域【名】㊀田と田とのさかひ。あぜ。さかひ。㊁さかひ。へだて。分界。境界。「畛域を撤す」
しん-ゐき 震域【名】〔地〕地震の際、その震動を感ずる範圍。
じんゐ-たうた 人爲淘汰【名】〔生〕『英 Artificial selection』生物の變異性と遺傳性とを利用し、その幾分の變異を生じたる種を選み、保護を加へて繁殖を遂げしめ、ますますこの特性を發揮せしむること。卽ち人爲によりて、變種を生ぜしむること。ダアヰン(C. Darwin)の自然淘汰說によりて、生物の進化を說明し得るに至りしも、全くこの人爲淘汰の現象を深く研究せし結果なり。(自然淘汰に對して)
じんゐ-てき 人爲的【貌】じんていてき(人定的)に同じ。
じんゐ-はふ 人爲法【名】〔法〕じんていはふ(人定法)に同じ。
じんゐ-ぶんるゐ 人爲分類【名】〔生〕『英 Artificial system of classification』生物分類法の一。自然の關係に依らず、ただ外部の特性に基きて、人爲的に分類すること。例へば鯨を魚類に入れ、蝙蝠(カウモリ)を鳥類に入るる類。(自然分類に對して)
じんゐぶんるゐ-はふ 人爲分類法【名】〔生〕人爲分類の方法。(自然分類法に對して)
しん-ゐん 神韻【名】すぐれたる韻致。
しん-ゐん 新院【名】同時に、上皇の二三人ましいます時、その最後に上皇となりたまひしもの。 增鏡「今おりさせ給へるを新院ときこゆれば、御兄の院を中の院と申し、父御門を本院とぞ聞ゆる」
しん-ゐん 進院【名】〔佛〕しんざんしき(晉山式)に同じ。
じん-ゐん 人員【名】ひとかず。にんず。あたまかず。
じんゐん-きよく 人員局【名】明治十二年より同十四年まで、陸軍省內に設けし一局。將官・參謀・步兵・騎兵・憲兵・輜重兵の各科、及び馬醫部・軍樂部の人員調査を掌りし所。
しんゐんごしよ-とでうもく 新院御所御條目【名】承應四年江戶幕府が、明正上皇の御所のために制定したる法規。五條より成れり。
じん-ゑ 仁惠【名】じんけい(仁惠)に同じ。 平治「民、唐堯・虞舜の仁惠に誇り」
しん-ゑい 親衞【名】㊀天皇の御身邊、又は皇居の守護。このゑ。㊁このゑふ(近衞府)の唐名。
しんゑい-かうゐ 親衞校尉【名】しやうげん(將監)の唐名。
しんゑい-たい 親衞隊【名】親衞の軍隊。
しんゑい-たいしやうぐん 親衞大將軍【名】たいしやう(大將)㊀の唐名。
しんゑい-ちゆうらうしやう 親衞中郎將【名】ちゆうじやう(中將)㊀の唐名。
しんゑい-らうしやう 親衞郎將【名】せうしやう(少將)㊀の唐名。
しんゑい-ろくじ 親衞錄事【名】しやうさう(將曹)の唐名。
しん-ゑつ 心越【名】〔人〕こうちう(興儔)に同じ。
しんゑつ-せん 信越線【名】上野國高崎を起點として、越後國直江津より新潟を連ぬる官線鐵道。
しんゑつ-は 心越派【名】〔佛〕曹洞宗の一派。明僧心越を祖とす。
しん-ゑん 神垣【名】神社のかき。みづがき。
しん-ゑん 深怨【名】深く怨むこと、又その怨。
しん-ゑん 深淵【名】ふかきふち。深潭。
深淵に臨みて、薄氷を踏むが如し【句】恐怖して安んぜざる譬にいふ語。 盛衰記「高きも賤しきも、安き心なし。ただ深淵に臨みて、薄氷を踏むがごとし」
しん-ゑん 神苑【名】神社の境內にある庭園。
しん-ゑん 心猿【名】〔佛〕『心地觀經の八に「心如二猿猴一遊二五欲樹一暫不レ住故」とあり』心の欲情を猿に譬へての稱。
心猿・意馬【句】〔佛〕「意馬・心猿」に同じ。
しん-ゑん 深遠【名】深く遠くして、容易に測り知るべからざること。
じん-ゑん 人猿【名】〔動〕るゐじんゑん(類人猿)に同じ。
じんゑん-どうそ-せつ 人猿同祖說【名】〔生〕人類は猿類と共に靈長類に屬し、猿類と祖先を共にするものなりとする學說。進化論の御唱者ダアヰン(C. Darwin)の主張にして、現今は殆ど定說となれり。
じん-をく 人屋【名】人の住む家屋。いへ。人家。
じんをん-おん 深遠音【名】〔佛〕八音の一。佛の音聲は、遠近の差、音調を妨げず、聽く者遠きにあるも、能くその化を受くるもの。
しめ 標【名】㊀場所を示す等のために、木を立て、又は繩を張りなどして、標(シルシ)とするもの。標識。 萬葉「山高み夕日かくれぬ淺茅原のち見むためにしめゆはましを」 ㊁しめなは(標繩)の略。〔注連・七五三〕
標の內【句】㊀注連(シメ)を引きわたしたる內。神社の域內。 ㊁まつのうち(松內)に同じ。 新勅撰「かぞふれば八十の春になりにけりしめの內なる花をかざして」
標の內人(ウチビト)【句】㊀神社に奉仕する人。 ㊁宮中に奉仕する人。
標の外(ホカ)【句】㊀神社の境內の外。 續[illegible]「たのみずな御垣をせばみ葵葉はしめの外にもありといふなり」 ㊁男女の關係の疎くなりて逢ひ難くなりたること

に譬へていふ語。源氏「身こそかくしめの外なれそのかみの心の中を忘れしもせず」

標の程【句】注連を張れる邊。神社の附近。源氏「たいめしたまふ事などはいと難けれども、近きしめの程にて、おほかたも渡りたまふに」

しめ 坶【名】砂に似て、粘り氣のなき土。濕地を築立つるなどに用ふ。

しめ 締【名】㊀幾つかの數を一つに合はすること。しめだか。こゝじめ。合計。總計。㊁手紙の封じ目に書く〆の字。

しめ 鵑・蠟嘴【名】〔動〕燕雀(エンジャク)類に屬する鳥。形、雀に似て小さく、頭上は淡焦色、その他上面は灰色もしくは焦茶色、眼の前部と喉とは黑く、胸腹は灰色を帶び、翼に大なる白色部あり。腹部は黃色にして、嘴は太く短く、淡肉色を呈し、脚は淡黃色なり。四季共に我が國に居る。

（しめ）

し-め 四目【名】神頭(ジンドウ)の一種。竹の根又は木にて作り、長さ約一寸五分、三箇所に金捲を施し、目三つありて、赤漆又は黑漆にて塗りたるもの。

しめ 占【助數】紙の數を示すに用ふ。束(ソク)の百倍、帖(デフ)の十倍。

じ-め 神馬【名】じんめ(神馬)の略。

神馬の屋(ヤ)【句】神馬をつなぎおく廐(ウマヤ)。

しめ-あけ 締明【名】香のせぬやうに加減をしながら、障子・襖などを明くること。聽女房染分手綱「覗けば、母も、泊人も、すやすや鼾、首尾よしと、障子をそっとしめあけに取出すは、藤まき柄(ヅカ)の大脇指」

し-めい 指命【名】指定して命ずること。

しめい 四明【名】〔地〕㊀『山上に方石あり、四面聰(マド)のごとく、中は日月・星宿の光を通ずるによりて名を得たりといふ』支那浙江省寧波府にある名山。府城の西南に位す。古來道敎にて、靈山の一とし、佛僧も來りて幽棲する者多く、宋初の高僧知禮は、山中に天台の數を講じ、學徒數百に及べりといふ。㊁『支那の四明山に擬して名づくといふ』比叡山の最高峰。山城・近江兩國に跨り、高さ二七二三尺、展望に富む。㊂ひえいざん(比叡山)の異稱。平家「三台・槐門の家を出でて、四明・幽谿の窓に入りしより以來」

四明の敎法【句】〔佛〕天台宗の敎法。平家「四明の敎法を此所に弘めたまひしより以降」

四明の敎【句】〔佛〕前條に同じ。

四明の洞(ホラ)【句】四明㊀にある方石の洞。文武五人男「唐土の天台四萬八千丈の四明の洞をうつし」

し-めい 示命【名】訓示して命令すること。

し-めい 氏名【名】せいめい(姓名)に同じ。

し-めい 指名【名】名をさして、その人を定むること。なざし。

し-めい 使命【名】㊀使者として命ぜられたる用向。使に立つ任務。㊁『宋史の宗景威傳に「性鄙吝、每二使命至一、惟設二肉一器二」とあり』つかひ。使者。

し-めい 司命【名】㊀星の名。㊁權力を握ること。生死の命をつかさどること。

し-めい 師命【名】師匠のいひつけ。

し-めい 詩名【名】詩に長じたる名。

し-めい 詩盟【名】詩人のまじはり。詩人の仲間。

し-めい 司盟【名】盟約をつかさどること、又その役。

し-めい 尸盟【名】『盟を尸(ツカサド)る義』同盟の主席。

し-めい 死命【名】死ぬるいのち。

死命を制す【句】他人の急所を握る。咽喉を扼す。

じ-めい 自明【名】㊀何等の證明を要せず、その物事自身にて、すでに明白なること。㊁直覺に由りて、明白なること。

じ-めい 自鳴【名】おのづから鳴ること。

じ-めい 寺名【名】寺の名。寺號。

じ-めい 辭命【名】ことば。辭令。

じ-めい 耳鳴【名】みみなり(耳鳴)に同じ。

しめい-がく 四明學【名】〔佛〕しめいてんだい(四明天台)に同じ。

しめい-が-たけ 四明嶽【名】〔地〕しめい(四明)㊁に同じ。

じめい-きん 自鳴琴【名】おるごおる㊁に同じ。

しめい-きやうさう 指名競爭【名】指名したる人にのみ競爭せしめて、契約を締結すること。

しめい-け 四明家【名】〔佛〕四明學の系統を嗣ぐ者。山家(サンゲ)。

しめい-けん 氏名權【名】〔法〕人格權の一。人がその氏名の專用を不正に害せられざる權利。

しめい-こくさい 指名國債【名】『英 Registered national bond』權利者の確定せる國債、卽ち權利者の名義を國債帳簿に登錄し、且つその證券にも記入したるもの。記名國債。

しめい-さいけん 指名債權【名】〔法〕特定の人に辨濟すべき債權。記名債權。(無記名債權に對して)

しめい-ざん 四明山【名】〔地〕しめい(四明)に同じ。太平記「四明山の上」

しめい-さんか 指名參加【名】〔法〕第三者の名を以て、物を占有することを主張する者が、その物の占有者として、訴訟の被告となりたる場合に、被告の指名によりて、その第三者が、被告に代りて、訴訟を引受くること。

しめい-しき 指名式【名】〔法〕きめいしき(記名式)に同じ。

じめいじ-やま 慈明寺山【名】うねびやま(畝傍山)の別稱。

じめい-しよう 自鳴鐘【名】『おのづから鳴りて、時を報ずるよりいふ』とけい(時計)に同じ。

しめい-しようけん 指名證券【名】〔法〕きめいしようけん(記名證券)に同じ。

しめい-しようしよ 指名證書【名】〔法〕前條に同じ。

しめい-しよぢにんばらひ-の-さいけん 指名所持人拂債權【名】〔法〕債權の證書に、債權者を指名せるに拘らず、その證書の所持人にも辨濟すべき旨を附記したるもの。仕拂命令の類。

しめ-いた 〆板【名】〔建〕緣側の鴨居上と、軒桁との間を塞ぐ橫羽目板。

しめい-てんこ 氏名點呼【名】氏名を順次に呼上げて行ふ點呼。

しめい-てんだい 四明天台【名】〔佛〕支那宋の代に、四明山に居りし四明尊者知禮法師の系統を引きたる天台學。四明學。(我が國の天台と區別していふ)

しめい-にふさつ 指名入札【名】〔法〕無制限の競爭に附するを不利とする場合に、或適當と認むる數人を選みて、入札せしむること。(公衆入札に對して)

しめいろ-づき しめいろ月【名】陰曆三月の異名なりといふ。〔古語〕

し-めう 至妙【名】至って妙味あること、又その物事。絕妙。

しめ-うり 締賣【名】㊀物を買占め、商利あるべき時に賣出すこと。㊁飽くまで巨利を貪りて賣ること。

しめ-かざり 標飾・注連飾・七五三飾【名】正月などに、標繩を門戶に掛けて飾ること、又その標繩。かざり。

しめ-かす 搾滓【名】魚・胡麻などより油を搾り取りし殘滓。肥料として用ふ。壓搾肥料。

しめ-がね 締金【名】帶・紐などの端に附けて、引締めて止むるに用ふる金具。

しめ-がひ 締買【名】一括して悉く買取ること。かひしめ。

しめ-ぎ 搾木【名】油などを締めて搾り取る機械。回轉する周木二箇を上下に斜列して、僅少の間隙を作り、その隙に材料を挾み、喰合はする裝置。一代男「山崎の…秋の初風はげしく、しめ木にあらそひ、衣打つ槌の音、ものかましう」

しめ-きり 締切【名】しめきること。しめきりたる處。

しめ-きる 締切る【動四他】㊀閉ぐ。鎖す。㊁終結せしむ。しめくくる。とぢむ。

しめ-くぎ 鋲釘【名】材料の接合固著に用ふる鋲・材料の大小・形狀・强度に應じて、その形狀・大小を異にす。

しめ-くくり 締括【名】しめくくること。

しめ-くくる 締括る【動四他】㊀引締めて括る。引締めて鎖す。㊁取締る。支配す。總轄す。㊂しめきる(締切る)㊁に同じ。

しめこ-の-うさうさ 緊子兎・緊子兎【名】次條に同じ。

しめこ-の-うさぎ 緊子兎・緊子兎【名】『兎を狩りて、締殺す意に言ひかけたるもの』「占めたり」に同じ。入代目桜太郎「思ふままに百兩といふ金が出來、よっぽど古いがしめこの兎と喜び」

しめ-ころす 締殺す【動四他】首を締めて殺す。絞死す。

しめ-ごろも 染衣【名】そめたる衣。〔古語〕點「そめきがしるにしめごろもを」

しめ-し 示【名】㊀示すこと。提示。㊁見せしめ。さとし。をしへ。示敎。釋迦如來誕生會「飛鳥懷に入る時は狩人も是れを取らぬとは、情を知れとの世のしめし」

しめ-し 濕【名】㊀ぬらすこと。㊁小供の小便を拭ひ取る布。おしめ。むつき。

しめ-じ【名】なつ(夏)の異名なりといふ。〔古語〕

しめし-あはす 示合はす・諜合はす【動下二他】私かに相談し合ふ。合圖などして知らせ合ふ。話しあふ。謠國物語「四人ながら悦び、しめしあはせて」

しめ-じめ【貌】㊀しめり濕ふさま。じめじめ。順集「しぐれつつうつろふ見れば菊の色をしめじめと降る雨にざりける」㊁しめやかに同じ。源氏「火たきやかすかに光りて、人氣なくしめじめとして」㊂つくづくに同じ。十訓「此の侍從の君をしめじめとけさうしけれども」

じめ-じめ【貌】前條㊀に同じ。

しめ-しや 四馬車【名】支那にて昔用ひし、小さき車。和名「四馬車、論語註云、小車四馬車也」

しめ-す 示す【動四他】㊀あらはして見す。萬葉「しほひなば玉藻苅らさむ家のいもがはまづとこはば何をしめさむ」㊁指して敎ふ。指示す。㊂嚴かに指し示す。續紀「倘これは、大神のいつくし示したまへるものなり」㊃懲らしめに行ふ。みせしめになす。㊄しめしあはす。室町千疊敷「豫てしめし置きたりけん松永彈正突立ち、召人の首水も溜らず打落す」

しめ-す 濕す【動四他】㊀ぬらす。うるほす。㊁火をけす。きやす。けす。

しめす-へん 示偏【名】漢字の偏の一。社・神・新・祝などの字の左にある示の字。

しめ-た 占めた【句】しむ(占む)の條下を見よ。

しめ-だいこ 締太鼓【名】鼓の如く造り、胴は鼓より短く、麻の緖をからみて、兩面の革を締めも弛めも爲しうるやうにしたる太鼓。近世の製作に係り、能樂及び俗樂に用ふ。

しめ-だか 締高【名】締合はせたる結果の數。合計の高。總高。總額。

しめ-だし 締出【名】締出すこと。

しめ-だす 締出す【動四他】人を外に追出だし、戶を締めて入れず。

しめ-たり 占めたり【句】しむ(占む)の條下を見よ。

しめぢ 濕地・占地・玉蕈【名】〔植〕擔子菌(タンシキン)類に屬する菌類。山地に自生す。菌體は絲狀をなし、秋の頃、菌傘と菌柄とを具ふる繁殖體を出す。菌傘は白色又は灰色にして、圓錐狀をなし、菌柄は長さ二三寸に達す。また傘の紫色なる紫濕地(ムラサキシメヂ)、また簇生する千本濕地(センボンシメヂ)等あり。味美なり。

（しめぢ）

しめぢ-が-はら 標茅原【名】〔地〕下野國にありし名所。今、下都賀(シモツガ)郡栃木町の北方なる郊野を白地(シメヂ)ケ原といふは、その訛れるものといふ。伊吹山の麓なるが故に、古歌には艾草に配して詠ず。近江國の伊吹山の麓なりといふ說は誤なりといふ。新古今「なほ賴めしめぢが原のさしもぐさわれ世のなかにあらんかぎりは」夫木「下野やしめぢが原のさしも草おのが思ひに身をこがしつつ」

しめ-ぢから 締力【名】締附くる力。

しめぢ-たけ 濕地茸【名】〔植〕しめぢ(濕地)に同じ。

じ-めつ 自滅【名】㊀自然と滅ぶること。㊁わが所作によりて、自ら滅ぶること。

しめ-つく 締付く【動下二他】束ねて堅く締む。

じめ-つく 濕付く【動四自】じめじめとす。濕氣を感ず。

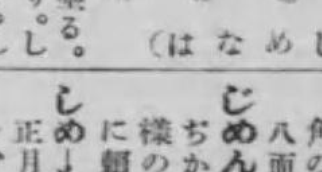
しめつけ-しまだ 締附島田【名】鬢(ビン)を長く出さぬ島田まげ。元祿曾我物語「しめつけ島田は髮先も跡も長み同じ程にして、中程より元結を二筋かけ」

しめ-づな 締綱【名】駄馬に荷物を附くる時、その荷物を締括るに用ふる綱。

しめ-っぽい 濕っぽい【名】『ぽいは接尾語』しめりけあり。

しめ-なき 締泣【名】聲を立てじとつとめつつ泣くこと。夕霧阿波鳴渡「聞えぬ人じゃとしめ泣に、恨み口說くぞ不憫なる」

しめ-なは 標繩・注連繩・七五三繩【名】『しりくめなは(尻久米繩)の略といふ』內外の境界の標として引きわたす藁の繩。特に神前に引延べ、又は新年の飾物として、門戶に張り、穢・災を禦ぎて入らしめぬ意を示す。左捻(ヒダリネヂ)を制とし、三筋・五筋・七筋と順次に藁の莖を捻り放して垂れ、その間間に紙四手(シデ)を垂る。しめ。牛蒡標(ゴバウ)・輪標(ワ)などの種類あり。しめ。萬葉「はふりらがいはふ社の紅葉もしめなはこえて散るといふものを」


（しめなは）

しめ-の 標野・占野【名】きんや(禁野)㊀に同じ。〔古語〕堀太「わがものとしめのに飼ひし春駒の手にもかからず荒れまさるかな」

しめ-の-きぬ 染衣【名】そめぎぬ(染衣)に同じ。〔古語〕紀「綵帛、シメノキヌ」

しめ-の-せきづる しめの關弦【句】せきづる(關弦)の條下を見よ。

しめ-のみ 占飲【名】己れ一人にて占有して、酒を飲むこと。

し-めん 四面【名】㊀よも。四方。四邊。㊁まはり。ぐるり。

四面楚歌【句】『支那楚の項羽が、漢の高祖に、垓下(今の安徽省鳳陽府靈壁縣の南)に圍まれし時、漢軍は、項羽の心を亂さんがために、楚人に眞似て、楚國の歌をうたひしを、項羽果して眞に楚人の歌と思ひ、四面の漢軍中、かく多數の楚人あるに至れるかとて驚きし故事に本づく』孤立して、味方のなきこと。

し-めん 紙面【名】㊀紙のおもて。紙上。㊁てがみ。書面。

し-めん 視面【名】しせん(視線)を見よ。

じ-めん 字面【名】熟語・成句を作る各字の配合の具合。じづら。

しめん-こうげき 四面攻擊【名】㊀四方より敵を圍み擊つこと。㊁或人に對して、諸方面より反對すること。

しめん-さん 四面山【名】〔地〕駿河國富士山の別稱。

しめん-たい 四面體【名】『英 Tetrahedron 又 Tetraedron』㊀〔數〕四つの平面にて局(カギ)られたる立體。三角錐。㊁〔鑛〕正三角の面四箇にて圍みたる形、卽ち等軸晶系八面體の半面體。

じめん-づく 自面盡【名】面と向ふこと。ぢかに應對すること。淀鯉出世瀧德「勝二郎樣の女房になる程の吾妻ぢや、じめんづくに賴むからは、雫もこれに僞はない」

しめ-もらひ 標貰・注連貰・七五三貰【名】正月十五日に、取去りたる門松及び飾の類を、小供等の貰ひ集めて、左義長にて燒くこと。

しめ-や 四目矢【名】四目の鏃(ヤジリ)を用ひたる矢。

しめ-やか【貌】しづかに打沈みたるさま。物靜かなるさま。しめしめ。しっとり。

しめ-やかた 染屋形【名】『從來はそめやかたとも訓じたり』彩色したる屋形船。〔古語〕萬葉「沖つ國しらす君が染屋形黃しめのやかた神のと渡る」

しめ-やき 締燒【名】陶器の素地を固く燒

締めて後、低溫度の釉(ウハグスリ)を施すこと。

しめ-やぐ【動四自】しめやかにあり。しめる。〔古語〕 落窪「など、惟成は、いたらしめやぎたる。物や失ひたるとて笑ひたまふ」

しめ-よす 締寄す【動下二他】㈠締めて、ひとところに寄集む。㈡引締めて、寄添はしむ。だきしむ。しかと抱く。 天の網島「許して下されとだきよすれば、いや、わしゆゑと、しめよせて」

しめら【貌】しみら(繁に)に同じ。〔古語〕 萬葉「この夜すがらにいもねずにけふもしめらに戀ひつつぞをる」

しめらふ 濕らふ【動四自】しめる(濕る)の延。〔古語〕 散木「秋來ては風ひやかなる暮もあるを暑さしめらひむづかしの世や」

しめり 濕【名】㈠うるほひ。しとり。濕氣。 風雅「山陰や夜のまの霧のしめりよりまだ落ちやまぬ木木のしたつゆ」 ㈡雨の降ること。㈢出火の消ゆること。㈣しめりばん(濕半)の略。

しめり-ごゑ 濕聲【名】悲しみのために沈みたる聲。涙にしめりたる聲。 先代萩「え、鈍な子では有るわいと、呵られて、おろおろ涙、しやくりながらのしめり聲」

しめり-たけ 濕茸【名】〔植〕しめぢ(濕地)の類なるべしといふ。

しめり-ちやうす 濕茶臼【名】『重くて廻轉しがたきにつきていふ』うるほひたる茶臼。 丈草子「しめり茶臼に、鮨のおし」

しめり-なき 濕泣【名】ひそひそと泣くこと。めそめそと泣くこと。 傾城酒呑童子「聲を呑んだるしめりなき」

しめり-ばん 濕半【名】出火のしめりを報ずる擊鐘。鎭火を知らする半鐘。しめり。

しめる 濕る【動四自】㈠うるほふ。濡る。しめらふ。 源氏「狩衣姿のいとぬれしめりたるほど」 ㈡火、水に消ゆ。鎭火す。 蜻蛉「火しめりぬめりとて」 日和詣「小川町土屋家に少しかの出火あり、直ちに濕る」 ㈢しめやかになる。衰ふ。しづまる。しめやぐ。 源氏「曉がたに風すこししめりて、村さめのやうに降り出で」 ㈣心陰氣になる。思に沈む。 源氏「うちしめりて、思ふことありがほなり」

しめ-を 締緒【名】物を締むるための緒。 諸國盆踊唱歌「近江の笠は形(ナリ)がようて著よう、しめ緒が長うて著よう御ざる」

しも 下【名】㈠した。すゑ。(上(カミ)に對して) 枕「もからのしもは、ただ厨子ぞある」 ㈡臣民。たみ。 源氏「かみはしもに助けられ、しもはかみになびきて」 ㈢地位の低きこと、又その人。賤しき人。 古今「身はしもながら言の葉をあまつ空まできこえあげ」 ㈣禁中又は貴人の家にて、天皇又は主人の居室を遠ざかり、女房などの詰めをる處。つぼね。 枕「右近ぞ見知りたる、呼べとて、しもなるを、まづとみの事とて召せば」 ㈤召使又はそれらの人の居る所。 五人女「飯焚の梅が、下(シモ)の茶碗にくみて、久七にさし出しければ」 ㈥「下(シモ)の句」に同じ。 ㈦帝都を遠ざかれる土地。地方。 ㈧城下の町の、城に遠き方。 ㈨山の麓の町などにて、山に遠き方。(上(カミ)に對して) ㈩身體の腰部より以下。「下の病」 ⑪便所、また大小便。糞。 ⑫月經。

下が下(モ)【句】身分の最も卑きもの。 源氏「しもがしもの中には、なでふことか聞こしめしどころ侍らん」

下の句【句】短歌の五句の中、第四句と第五句との二句。(「上の句」に對して)

下の御所(ゴ)【句】郊外などに構へたる御所。 諸國物語「隱れて遊びたまひし下の御所なれば」

下の十五日【句】一箇月中にて、第十五日以下の日數十五日。下の半月。(「上の十五日」に對して)

下の十日【句】一箇月の中の、二十一日より月末までの間。下旬。下澣。(「上(カミ)の十日」「中の十日」に對して)

下の町【句】したまち(下町)に同じ。(「上(カミ)の町」に對して) 室町千疊敷「上の町・下の町・中の町の屋並(ナミ)」

下の屋(ヤ)【句】しもざまの者の住む家。しもや。〔古語〕 源氏「物隔たりたるしもの屋にさぶらふ」

しも 霜【名】㈠寒夜、地上の物體の上にあらはるる白色・細小の氷片。その成生の原因はほぼ露と同じく、地上の物體の冷却して、零點下に降る時、その含有せる水蒸氣の急に氷結するに因る。晴夜は、地面の熱の放散甚しきがために、これを生ずること殊に多し。 ㈡白髮に譬へていふ。頭(カシラ)の霜。 新千載「年を經て星をいただく黑かみの人よりしもになりにけるかな」

霜の翁【句】白髮の老人。 謠曲(氷室)「霜の翁のとしどしに氷室の御調守るなり」

霜の衣(コロモ)【句】㈠霜の白くふり敷きたるを、衣を著たるに譬へていふ語。 新拾遺「消えわぶる霜の衣をかへしても見し夜まれなる夢の通路」 ㈡寒き夜の衣。 新千載「長き夜の霜の衣を打ちわびて寢ぬ人しるき淺茅生の宿」

霜の下道(シタミチ)【句】霜におほはれたる道。 新後撰「たのめおく故鄕人の跡もなし深き木の葉の霜の下道」

霜の經(タテ)【句】霜を經絲(イト)に譬へていふ語。 古今「霜のたて露のぬきこそ弱からし山の錦のおればかつ散る」

霜の翼【句】霜のごとく白き翼。

霜の鶴【句】霜のごとき白き鶴。 新千載「和歌の浦や入江の葦の霜の鶴かかる光に逢はんとや見し」

霜の劍【句】霜の草木を枯殺するを劍に譬へていふ語。

霜の花【句】置きたる霜の白く美しきを花に譬へていふ語。「雪の花」參照。 吉薫「ひづち田に霜の花見る朝かな」 也有「飛石や梅に負けじと霜の花」

霜の眉【句】白髮の眉。老人の眉。白眉。

霜の枕【句】霜夜に寢ぬること。 吉薫「藥飲むさらでも霜の枕かな」

霜の蓬(ヨモギ)【句】㈠霜に枯れたる蓬。 ㈡白髮の亂れたるに譬へていふ語。 續後拾遺「見るもうし向ふ鏡の秋の影衰へまさる霜の蓬は」

霜を履んで、堅氷至る【句】『易經の坤卦に「初六、履霜堅氷至」とあるに本づく。なほその象傳に「履霜堅冰、陰始凝也、馴致其道、至堅冰也」とあり』憂患の次第に近づくに譬へていふ語。〔諺語〕 正統記「少しの事も、心にゆるす所あれば、大いに誤る本となる。周易に霜を履んで堅氷至るといふ」

秋の霜【句】㈠しうさう(秋霜)に同じ。 新古今「淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜忘れぬ夢を吹く嵐かな」 太平記「河より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを」 ㈡つるぎ(劍)の異稱。〔古語〕 草廬集「秋の霜かけける松もあるものを結ぶ契の色かはるらん」

し-も【助】强辭のしに感嘆辭のもの添ひたるもの。「折しも」「時しもあれ」

じ-も 字母【名】〔佛〕『諸字を生ずる母の意』悉曇(シツタン)の摩多(マタ)と體文(タイモン)と。

しも-あがた 下縣【名】〔地〕對島國二郡の一。對島上島の全部を占む。

しも-あさ 霜朝【名】霜の降りたる朝。〔古語〕 源氏「寒きしもあさに」

しも-あさふ 下麻生【名】〔地〕美濃國加茂郡にある町。飛驒川の西岸。南は川邊(カハベ)町に接す。舟筏の便あり。

しも-いしづ 下石津【名】〔地〕美濃國の舊郡の一。もと單に石津郡と呼びしを、明治維新後、下の字を加へ、同二十九年海西(カイサイ)郡と相合して、海津(カイヅ)郡を立つ。

しも-いち 下市【名】〔地〕大和國吉野郡にある町。吉野川の南岸。奈良市の南十一里。吉野鮎及び吉野釣を鬻ぐ。かみいち(上市)㈡參照。

しも-いちだん 下一段【名】〔語〕次條に同じ。

しも-いちだん-くわつ 下一段活【名】〔語〕次條の略。

しも-いちだん-くわつよう 下一段活用【名】〔語〕五十音圖のエ列のみに活用する動詞の變化。文語にては「蹴る」の一字あるのみなれども、口語にては、文語における下二段活用は、すべてこの活用に轉ず。下一段活。下一段。

しも-いな 下伊那【名】〔地〕信濃國十六郡の一。郡役所を飯田町に置く。

しもかうべ-ながる 下河邊長流【名】〔人〕國學者。本姓は小嶋、初名は具平、通稱は彥六。大和國宇田の人。古體の和歌を善くし、

また漢籍に精し。萬葉集を註釋せんとして、果さず。貞享三年歿す。年六十三。

しも-がかり 下掛【名】㈠『この三流は、もと奈良に住み、時時召されて上京せしよりいふ』能樂の金春(コンパル)・金剛・喜多の三流。大和がかり。(上掛(カミガカリ)に對して) ㈡しもがかること。

しもがかり-はうしやう 下掛寶生【名】『もと金春(コンパル)より出でて、寶生の座附となりしよりいふ』能樂の脇師の寶生流。脇寶生。

しも-がかる 下掛る【動四自】腰部以下の事物に關す。「下掛った話」

しも-がこひ 霜圍【名】しもよけ(霜除)に同じ。

しも-かぜ 下風【名】婦人の腰下より引く風邪。(多く產後の風邪にいふ)

しも-かぜ 霜風【名】霜氣を帶びたる寒風。

しも-がた 下方【名】下の方。

しも-かないは 下金石【名】〔地〕かないは(金石)を見よ。

しも-かんぢやうしよ 下勘定所【名】江戶幕府の職制の一。二の丸に在りて、組頭・勘定支配等の役員あり。御取箇方(オトリカカタ)・中之間の別ありて、御取箇方を更に差出方・廻米方・御普請方・新田方・道中方・知行割の六局に分ち、中之間を伺方・運上方・御鷹方・帳面調・證文調・林方・國役方以下の十局に分ちたり。

しも-がも 下鴨【名】次條の略。

しもがも-じんじや 下鴨神社【名】かものみおやのじんじや(賀茂御祖神社)の俗稱。

しもがも-しや 下鴨社【名】前條に同じ。

しもから-あけづ【名】〔動〕しほからとんぼ(鹽辛蜻蛉)に同じ。

しも-がる 霜枯る【動下二他】草木霜にあひて枯る。 續古今「何れぞと草のゆかりもとひわびぬしもがれはつる武藏野の原」

しも-がれ 霜枯【名】㈠霜がるること、又その物。 蜻蛉「霜枯の草のゆかりぞあはれなるこま歸りてもなつけてしがな」 ㈡次條の略。

しもがれ-どき 霜枯時【名】㈠草木の霜枯るる時候。草木の凋落する時節。しもがれ。 一茶「人足も霜枯時や王子道」 ㈡景氣の惡しき季節。しもがれ。

しも-きた 下北【名】〔地〕陸奥國九郡の一。斗南半島全部を占め、郡役所を田名部町に置く。

しもきた-はんたう 下北半島【名】〔地〕となみはんたう(斗南半島)に同じ。

しも-ぎやう 下京【名】〔地〕なかぎやう(中京)を見よ。 凡兆「下京や雪積む上の夜の雨」

しもぎやう-もの 下京物【名】京都の下京より製出する物。上京物に比すれば、下品なる傾ありしによりて、特にいへり。

し-もく 四木【名】しぼく(四木)に同じ。

しもく 撞木【名】しゆもく(撞木)に同じ。

しもく 齒木【名】やうじ(楊枝)を云ふ。〔僧侶の語〕

し-もく 指目【名】指して見ること。人目をひくこと。注目。

じ-もく 耳目【名】㈠みみと、めと。㈡聞くと見ると。見聞。視聽。㈢上の意を承け、諸方の事情を知りて告ぐること、又その人。「耳目となる」

耳目見聞【句】耳に聞き、目に見ること。みきき。

耳目の官【句】㈠監察の官。㈡耳は聽を司り、目は視を司りて、各職とする所あること。

耳目の慾【句】耳や目より生ずる慾。

耳目を長うす【句】細心に注意して、視たり聽きたりす。

耳目を屬す【句】耳目を聳てて注意す。

耳目を引く【句】人の注意を惹起す。

しも-ぐさ 霜草【名】〔植〕かるかや(刈萱)に同じ。

しもく-ざめ 撞木鮫【名】〔動〕しゆもくざめ(撞木鮫)に同じ。

しも-ぐち 下口【名】家のうしろにある入口。うらぐち。 平家「女房の局のしもぐち邊にたたずんで」

しも-ぐち 霜朽【名】しもやけ(霜燒)に同じ。〔古語〕 蜻蛉「わらはべ、夜べの姿ながら、しもぐちまじなはんとて」

しも-くづれ 霜頽【名】霜柱の解け消ゆること。

じ-もくてき 自目的【名】〔哲〕じこもくてき(自己目的)に同じ。

しもく-の-つむじ【名】じゆせい(壽星)㈢に同じ。

しもく-ぶが 撞木鱶【名】〔動〕しゆもくざめ(撞木鮫)に同じ。

しも-ぐもり 霜曇【名】霜の降らんとする前に、空の曇ることとなりとも、大いに降霜のありたる曉の空の曇りたることともいふ。〔古語〕 萬葉「しもぐもりせむとにかあらむ久方の夜わたる月の見えぬおもへば」

しも-け【名】きたかぜ(北風)に同じ。(かみけに對して)

しも-げ 下毛【名】〔地〕豐前國六郡の一。高瀨川の流域。郡役所を中津(ナカツ)町に置く。

しも-げいし 下家司【名】家司の下役。武家にては、政所の案主(アンジュ)・知家事(チケジ)など、この職掌に當りたり。下の家司。(かみげいしに對して)〔古語〕 源氏「睦じきしも家司に、殿にも仕うまつるものなり」

しもげる【動下一自】霜氣る。野菜など、寒氣にあひて腐る。

しも-ご 下五【名】俳句の下の五文字。下五文字。

しも-ごえ 下肥【名】人糞を肥料として用ふるもの。こえ。

しも-ごかんぢやうしよ 下御勘定所【名】しもかんぢやうしよ(下勘定所)の敬稱。(內座に對して)

しもこしき-じま 下甑島【名】〔地〕薩摩國の西方にある島。周回二十里餘。薩摩郡に屬す。

しも-ごしよ 下御所【名】『ごしよ(御所)㈥を見よ』將軍家又は大臣家以上の公卿の隱居したるもの、一家に同時に二三人ある時、その最も年若きもの。(上御所・中御所に對して)

しも-ごりやう-しや 下御靈社【名】ごりやうしや(御靈社)を見よ。

しも-ざ 下座【名】下方に位する座席。げざ。(末座・上座に對して) 猿蓑(去來)「振舞や下座になほる去年の雛」

しも-さうぢ 下掃除【名】厠の糞尿をさらひ取ること。さうぢ。

しもさうぢ-や 下掃除屋【名】厠の糞尿をさらひ取る人。おわいや。さうぢや。

しも-さかわ 下賢輪【名】檜の賢輪の、下部にあるもの。

しも-さき 霜先【名】寒くならんとする前。霜の降らんとする頃の始。 一代男「干鮭(カラザケ)は霜先の藥喰ぞかし」

しも-ざと 下里【名】ゐなか。むらざと。邊鄙。 一代男「後は、二人の女も、花園山のしも里に、まことの髮剃りて、世に棄てられ」

しも-ざぶらひ 下侍【名】清涼殿の殿上の南にありて、侍臣の遊宴する處。さぶらひ。

しも-ざま 下方【名】㈠しもかた(下方)に同じ。(上方に對して) 枕「狩衣の前、しもざまにまくり入れて」 ㈡したじた。しもじも。下民。 室町千疊敷「はねのくる蕊の下、下樣ならぬ女の風情」

しも-ざむらい 下侍【名】格式の低き侍。 津國女夫池「味方は纔かお小姓・お茶道・下侍五十騎ばかり」

しも-しぐれ 霜時雨【名】北國にて、冬季霜多く、朝靄(モヤ)の如く立籠むること。

しも-じにん 下神人【名】下役の神職。

しも-じも 下下【名】しただた(下下)に同じ。 薩摩歌「戶を敲き、下下わめけば」

じ-もじり 字綟【名】もじりの一種。「丸かぶり」を題にて、「好きか甜瓜(鋤・鐮・鍬)を持つ土民」といふ類。

し-もじれる 仕綟れる【動下一自】紛糾して終に破る。しこじる。 傾城色三味線「生國は都にて、身代仕もじれ、大阪へ稼ぎのため龍下る」

しも-すがた 下姿【名】㈠直衣(ナホシ)を著たる姿。㈡武家にて、上下(カミシモ)を著たる姿。

しも-すは 下諏訪【名】〔地〕信濃國諏訪郡にある町。諏訪湖の北岸。中仙道甲州路・伊奈路(參州路)の交會點。鐵道中央線の一驛。蠶業及び紡績業のために殷賑なり。溫泉湧出し、諏訪神社の下社あり。

しも-すぼり 下すぼり【名】淫を貪ること、又その人。淫亂。

しもせ-くわやく 下瀨火藥【名】工學博士

下瀨雅允(マサチカ)の發明したる火藥。黄色・微細の結晶をなせる粉末にして、主として彈丸の炸藥に用ひらる。長年月の貯藏を經ても變質せず、水に浸しても、發火に妨なし。日露戰役に用ひて、大いに効力を發揮したり。

しもせ-まさちか 下瀨雅允【名】〔人〕工學博士。廣嶋の人。工科大學を卒へ、印刷局に奉職して、黑色捺色インキを發明し、後、海軍に技師となり、明治二十六年謂はゆる下瀨火藥の發明あり。帝國學士院會員たり。同四十四年卒す。年五十三。

しもだ 下田【名】〔地〕伊豆國賀茂郡にある町。國の極南にして、太平洋に臨み、港を下田港と稱し、水深二十三四尋に及ぶ。横濱及び淸水港へ汽船の便あり。安政元年米國の軍艦この港に來りて、通商を求め、由って開國の端を開く。郡役所を置く。

しも-だい 下代【名】次條の略。

しも-だいくわん 下代官【名】武家の職制の一。代官に次ぎて、年貢のとりたて等を掌りしもの。しもだい。

しも-だいどころ 下臺所【名】貴人の家にて、下下の人の食物を調ふる所。(かみ臺所に對して)

しも-たかゐ 下高井【名】〔地〕信濃國十六郡の一。明治十三年に高井郡を二分し、その北方を以て、この郡を立つ。郡役所を中野町に置く。

しも-だたみ 霜疊【名】霜の一面におきわたせること。

しもだて 下館【名】〔地〕常陸國眞壁(マカベ)郡にある町。石川氏の舊藩地。郡役所を置く。

しも-たていた 下立板【名】牛車(ギッシャ)の箱の側面、前後の袖の間、物見の下なる板の部分。

しもだ-でうやく 下田條約【名】江戸幕府が、安政元年露國の全權委員、プウチャチン(E. Poutiatine)と幕吏筒井肥後守政憲・川路左衞門尉聖謨(アキラ)と訂結せる通好條約、及び安政四年に北米合衆國の全權委員、ハリス(T. Harris)と下田奉行井上信濃守・中村出羽守との間に結びし通商條約の併稱。

しもだて-じやう 下館城【名】常陸國眞壁郡下館町に在りし石川氏の居城。もと藤原秀鄕が城きしものといふ。後に伊佐氏・水谷勝氏ここに居り、德川氏に至りて、數氏を更へて、享保十七年石川總茂の居城となり、子孫に傳へて、明治に至る。

しもだ-ぶぎやう 下田奉行【名】江戸幕府の職制の一。老中の管下にして、伊豆國下田港に駐在して、出入の船舶・貨物を監査し、兼ねて地方の庶政を掌りしもの。元和二年始めて置かれ、定員は一人或は二人。享保五年浦賀奉行の置かるるや、廢せられ、天保・嘉永の間、時に設廢ありしが、六年また設置、萬延元年遂に廢止に歸せり。

しもだ-みなと 下田港【名】〔地〕しもだ(下田)を見よ。

しもた-や【名】『仕舞うた屋の訛』㊀商家の、商をやめたるもの。㊁商業を營まずして、生活せる家。

しもだらひ 下盥【名】身體の腰部以下に著くるもの、即ち、ふんどし・腰卷の類を洗ふに用ふる盥。

しもぢ 下地【名】〔地〕三河國寶飯(ホ)郡にある町。吉田川の北岸。一橋を以て、南岸の豐橋市と接す。

しも-ぢよちゆう 下女中【名】臺所などの用を辨ずる女中。(かみ女中に對して)

しも-つ-え 下枝【名】次條に同じ。〔古語〕 紀「下枝(シヅエ)懸二靑和幣、白和幣一」

しも-つ-えだ 下枝【名】下方の枝。(上つ枝・中つ枝などに對して)

しもつが 下都賀【名】〔地〕下野國八郡の一。明治十二年もとの都賀郡を二分し、その南方の地に、もとの寒川郡を合はせ立てしもの。郡役所を栃木(トチギ)町に置く。

しも-つ-かた 下方【名】㊀しもかた(下方)に同じ。(上方(カミツカタ)に對して) 源氏「しもつかたの京極わたりなれば」 ㊁したじた(下下)に同じ。(上方(カミツカタ)に對して)

しも-づかへ 下仕【名】院・宮・親王家・攝家などの、下ざまの事などを務むる女房。 枕「しもづかへ四人してもて參るめり」

しも-つき 霜月【名】陰曆十一月の異稱。しもふりづき。

しもつき-あれ 霜月荒【名】霜月の二十三日前の暴風雨。

しもつき-びらめ 霜月鮃【名】霜月の頃に捕ふる、大きなるひらめ。

しもつき-ゑ 霜月會【名】山城國比叡山にて、天台大師の正忌、即ち十一月十四日より十日間修する法會。法華經の論議を行ひ、學徒の力を試む。延曆二十年同寺止觀院にて行ひしを始とし、後に大講堂にて行ふこととなり、大同四年以來御齋會(ゴサイヱ)に准ぜらる。十一月會。法華會。山門の大會(ダイヱ)。(六月會に對して)

しも-つけ 繡線菊【名】〔植〕薔薇(サウビ)科に屬する落葉灌木。諸國山地に自生し、又觀賞用として園養せらる。高さ四五尺に達し、葉は長卵形にて鋸齒あり。淡紅又は白色の美花を繖形花序に著く。

(けつもし)

しもつけ 下野【名】〔地〕『もと上野(カミツケ)と相合して、一國を成し、毛野(ケヌ)と呼びしを、仁德天皇の時、上・下に分ち、なほ大化の改新に、那須國(今の那須郡)を下毛野に合し、和銅年間、地名はすべて二字を用ふべき詔下るに及びて、毛の字を省きしもの』東山道に屬する一國。宇都宮市と河內・上都賀(カミツガ)・下都賀・芳賀(ハガ)・鹽谷(シホヤ)・那須・安蘇・足利の八郡に分ち、全國栃木縣の所管たり。野州(ヤシウ)。

しもつけ-さう しもつけ草【名】〔植〕薔薇(サウビ)科に屬する多年生の草。山地に自生し、また觀賞用として園養せらる。莖の高さ約二尺、葉は鋸齒牙を有し、夏日、紅色又は白色なる五出の小花を開く。くさしもつけ。

しもつけぬ 下毛野【名】姓氏の一。崇神天皇の皇子豐城入彥命より出でたるもの。朝臣・君・國造の數氏あり。

しも-つ-せ 下瀨【名】下方に在る瀨。(上つ瀨・中つ瀨に對して) 記「上つ瀨に い杭を打ち、下つせにまくひを打ち」

しも-つ-ひげ 下鬚【名】したひげ(下鬚)に同じ。(上(カミ)つ鬚に對して)〔古語〕 和名「鬚、之毛豆比介、頤下毛也」

しも-つ-ぶくれ 下脹【名】しもぶくれ(下脹)の音便。

しもつま 下妻【名】〔地〕㊀筑後國の舊郡の一。明治二十九年上妻(カウツマ)郡及び生葉(イクハ)郡星野村と合して、八女(ヤメ)郡となる。㊁常陸國眞壁(マカベ)郡にある町。下館(シモダテ)町の南三里半餘。井上氏の舊藩地。

しもつま 下間【名】姓氏の一。源賴政の後孫宗重を祖とす。宗重、親鸞に仕へて、蓮信房と號し、子孫本願寺の執事たり。

しもつま-じやう 下妻城【名】常陸國眞壁(マカベ)郡下妻に在りし城。鎌倉の初小山朝長この地に居り、子孫に傳ふ。のち多賀谷氏ここに居りて、豐臣秀吉に屬す。慶長五年石田三成に黨して、所領を沒收せられ、正德二年井上氏封ぜられて、明治維新に及ぶ。

しもつみち 下道【名】〔地〕古の吉備國の一部。後世の備中國下道(シタミチ)郡の地。下道郡は、明治三十三年賀陽(カヤ)郡と合して、吉備郡となれり。

しもつみち-の-あそみ 下道朝臣【名】〔人〕きびまきび(吉備眞備)に同じ。

しも-つ-やみ 下闇【名】その月の下旬のやみ。くだりやみ。〔古語〕 經政集「かいくだす鵜舟にかかるかがり火の見えぬ夜もなきしもつやみかな」

しも-つ-ゆみはり 下弓張【名】かげん(下弦)に同じ。(上(カミ)つ弓張に對して)

しもつらかす 僞緤らかす【動四他】なしてみだれしむ。

しもづゐ 下津井【名】〔地〕備前國兒島郡にある町。瀨戶內海に臨み、山陽・四國交通の要津たり。

しも-て 下手【名】㊀下の方。しもかた。下位。(上手(カミテ)に對して) ㊁芝居又は能(ノ)の舞臺の、見物人の方より指したる左の方。(上手(カミテ)に對して) ㊂綱の右の方の綱。(上手(カミテ)に對して)

しもと 蘖・楉【名】立木の直くして若き枝。〔古語〕 和名「蘖、之毛止、木細枝也」

蘖の棚【句】しもとを集めて、柳筥(ヤナイバコ)のごとき形に編みたる、高さ二三寸、廣さ二尺の棚。上に薦を敷き、祭祀の際、器物を置くに用ふ。 江次第「東茅一間、立二楉棚一置二祭物一」

しもと 答【名】人などを打つに用ふる杖、むち。 萬葉「しもと取る里長が聲はねやとまで來立ち呼ばひぬ」

しもと-かき 蘖垣・楉垣・蕃【名】しもとを、そのまま結びつけて造れる垣。 名義抄「蕃、シモトカキ」

しもと-づくゑ 蘖机・楉机【名】しもとを結び束ねて造りたる祭祀用の机。

しもとば 下鳥羽【名】〔地〕山城國紀伊郡の村。加茂川を隔てて、上鳥羽の南にあり。古稱、草津(クサツ)。

しもと-ばやし 蘖林・楉林【名】次條に同じ。

しもと-ばら 蘖原・楉原【名】しもとの生ひ茂れる原。 紀「茂林、シモトバラ」

しも-とひや 下問屋【名】取次をする問屋。(かみ問屋に對して)

しも-どほり 下通【名】市街の下の方にある街路。(かみ通に對して)

しもとまつり 蘖祭・楉祭【名】うさかじんじや(鵜坂神社)を見よ。

しもとめ-ひでのしん 下戸米秀之進【名】〔人〕さうまだいさく(相馬大作)を見よ。

しもと-ゆふ 蘖結ふ・楉結ふ【枕】しもとを結ふには、葛(カヅラ)などを用ふるより、かつらぎやま(葛城山)にかけていふ。 古今「しもとゆふかつらぎ山に降る雪の間なく時なく思ほゆるかな」

しも-にし 下西【名】西北より起る風を云ふ。〔越後國の方言〕

しもにた 下仁田【名】〔地〕上野國北甘樂(カンラ)郡にある町。附近、養蠶・製絲の業盛んにして、高崎市より輕便鐵道通ぜり。

しもにた-ねぎ 下仁田葱【名】上野國北甘樂郡下仁田附近より產する葱。良品を以て聞ゆ。一名、上州の一本葱。

しも-にだん 下二段【名】〔語〕次條に同じ。

しも-にだん-くわつ 下二段活【名】〔語〕次條の略。

しも-にだん-くわつよう 下二段活用【名】〔語〕動詞の、五十音圖中のウ列とエ列とにのみ活用するもの。口語にては、すべて下一段活用に轉ず。下二段活。下二段。

しもにひかは 下新川【名】〔地〕越中國九郡の一。明治十三年もとの新川郡を三分し、早月(ハヤツキ)川以北を以て立てしもの。郡役所を魚津(ウオヅ)町に置く。

じもね【名】ぶれい(無禮)を云ふ。〔薩摩國の方言〕

じもの 自物【接尾】名詞の下に添へて、「といふ物」の意を表す。「ししじもの」「いぬじもの」

しも-の-さんよ 下の參與【句】さんよ(參與)の條下を見よ。

しも-の-しま 下島【名】〔地〕對馬國の一部たる島。周回五十里。

しものせき 下關【名】〔地〕長門國の市。豐浦(トヨウラ)郡の南に接し、この國第一の都會たり。豐前國門司と相對して、關門海峽を挾む。もと赤間關と稱し、俗に馬關(バクワン)の稱あり。周防國上(カミノ)關・中ノ關と對稱して、下ノ關と呼ぶ。港は、我が國開港場の一にして、內外船舶の出入頻繁なり。

下關の戰【句】文久三年五月攘夷黨なる長州藩は、米・蘭・佛等の船舶を下關に砲擊せしため、これら諸國及び英國の四箇國は聯合艦隊を作りて、復讐戰を挑み、終に長州藩の諸砲臺を陷れ、陸戰隊を上陸せしむるに至り、長州藩力屈して、和を乞ひ、幕府は償金三百萬弗を支拂ひて、局を結ぶに至りし戰。

しものせき-かいけふ 下關海峽【名】〔地〕『峽の字の音、正しくはかふ』本州と九州との間に通ずる海峽。日本內海の咽喉を扼し、その最狹部なる早鞆瀨戶は、幅員僅かに六百メエトルにて、通航容易ならず。長豐(チヤウホウ)海峽・馬關(バクワン)海峽。

しものせき-でうやく 下關條約【名】ばくわんでうやく(馬關條約)に同じ。

しも-の-たいし 下太子【名】しようぐんじ(勝軍寺)を見よ。

しも-の-へや 下部屋【名】江戸幕府の營中にて、若年寄の事務を執りし室。(上(カミ)の部屋に對して)

しも-の-まち 下の町【句】しも(下)の條下を見よ。

しも-の-みゐ 下御井【名】伊勢の豐受(トヨウケ)宮の傍、下部阪の右にある井。上御井(カミノミヰ)に變りありたる時、神饌調理の用水とす。

しも-の-ゆみはり 下の弓張【句】ゆみはり(弓張)の條下を見よ。

しも-ばしら 霜柱【名】㊀霜の氷りて、柱の如くなり、表土を擡(モタ)げ立ちたるもの。㊁〔植〕『冬、その枯れたる莖裂けて、中に氷柱の結ぶによりていふ』唇形(シンケイ)科に屬する多年生の草。山地に自生す。莖の高さ約二尺に達し、葉は鋸齒を有し、夏日、白色の唇形花を開く。しもばしらさう。ゆきよせさう。

しもばしら-さう 霜柱草【名】〔植〕前條に同じ。

しも-はた 下機【名】布などを織るに用ふる機。 龍鳴集「布織る下機取組みて、庭木の松にもたせかけ」

しもはぶ 下埴生【名】〔地〕下總國の舊郡の一。明治二十九年印旛(インバ)郡に併せらる。

しも-ばら 霜腹【名】霜などの降る寒き夜に催す腹痛。

しもばら-け 霜腹氣【名】霜腹の痛む氣味。

しも-ばれ 霜腫【名】しもやけ(霜燒)に同じ。

しも-びさし 下廂【名】勝手の方にある廂の間(マ)。 落窪「袴引上げて、下廂よりめぐりて、いく」

しも-びと 下人【名】㊀下檣(シヅエ)の人。下男。下女。 源氏「知れるしもびとしてやりけり」 ㊁地下(ヂゲ)の人。(うへ人に對して)

しも-ぶくら 下脹【名】次條に同じ。

しも-ぶくれ 下脹【名】下の方のふくれたること。しもっぷくれ。(多くは、頰などにいふ)

しもふさ 下總【名】〔地〕東海道十五國の一。千葉・印旛(インバ)・東葛飾(ヒガシカツシカ)・香取(カトリ)・海上(カイジャウ)・匝瑳(サウサ)の六郡は、利根川本流以南に位して、千葉縣に屬し、猿島(サシマ)・結城(ユウキ)・北相馬(キタサウマ)の三郡は、その以北に位して、茨城縣に屬す。總州。北總。

しもふさ-ごち 下總東風【名】『下總國は、東京の東方にあたるよりいふ』こち(東風)を云ふ。〔東京の語〕

しも-ふり 霜降【名】㊀霜の降ること。㊁黑・紺もしくは鼠の搔摺(カキスリ)絲を經緯として、白の微塵のごとき細點を織出したるもの。㊂鮭・赤貝などを湯がきて、醬油を附けたる料理。㊃牛肉の白き斑點あるもの。

しもふり-おり 霜降織【名】霜降㊁の織方。又その織方なる織物。

しもふり-かん 霜降燗【名】酒の燗の強くして、ちんちんと泡立つこと。

しもふり-ごえふ 霜降五葉【名】〔植〕はひまつ(這松)に同じ。

しもふり-づき 霜降月【名】しもつき(霜月)に同じ。 藏玉集「風さむみ霜ふり月の空よりや雪げの見えて曇りそむらん」

しもふり-ひば 霜降檜葉【名】〔植〕ひむろに同じ。

しもふり-まつ 霜降松【名】〔植〕しもふりごえふ(霜降五葉)に同じ。

しもふり-らしや 霜降羅紗【名】霜降の模樣を織出したる羅紗。

しも-べ 下邊【名】しもの方。しもつべ。しもて。(かみ邊に對して)〔古語〕 萬葉「しもべには蛙つま呼ぶ」

しも-べ 下部【名】㊀地位の低きこと、又その人。〔古語〕 紀「下客(シモベ)十二人」 ㊁身分低く、雜事に役せらるる者。めしつかひ。下男。奴僕。〔僕〕 源氏「しもべなど遣して、よもぎはらはせ」 ㊂檢非違使(ケビヰシ)に屬して、盜賊を捕へ、獄囚を檢べ、罪人を配所に押送する等の事をなしし低き役。㊃鎌倉幕府の政所(マンドコロ)及び侍所に屬して、雜役に服せし賤しき職。足利時代に、公人(クニン)と呼びしものに當る。

しもへい 下閉伊【名】〔地〕陸中國八郡の一。郡役所を宮古町に置く。

しもべ-そだち 下部育【名】下等のそだち。身許のいやしきそだち。

しも-べや 下部屋【名】召使などの居る部屋。 落窪「これ縫ひたまはずば、下部屋に

籠めたてまつらん」
しも-ぼふし 下法師【名】身分の卑くして、人に使はるる法師。中間(チユウ)法師。下侶(ゲリヨ)。
しも-ましき 下益城【名】〔地〕肥後國十二郡の一。郡役所を松橋(マツバセ)町に置く。
しも-まち 下町【名】「下の町」に同じ。
しも-まはり 下廻【名】船體の下半部。
しもまる 霜丸【名】〔植〕柿の一種。果は細長くして、縦に四條の溝あり。霜の降る頃熟して赤くなり、甘味強し。
しもみ-ぐさ 霜見草【名】〔植〕□きく(菊)□に同じ。□ふゆぎく(冬菊)に同じ。〔古語〕 藻鹽草「霜見草。冬菊。幾世へし松の木かげのしもみぐさ植ゑける時を誰れも知らねば」
しもみのち 下水内【名】〔地〕信濃國十六郡の一。郡役所を飯山町に置く。
しも-む 下無・下无【名】じふにりつ(十二律)を見よ。(かみ無に對して)
しもむ-てう 下無調・下无調【名】下無の調子。かくてう。(かみ無調に對して)
しもん 指紋【名】人の指先の皮膚にある紋様。又これを捺(オ)したるもの。絶對に同一なるものなしといふ。しもんはふ(指紋法)參照。

(しもん)

しもん 市門【名】市の入口にある門。
しもん 支文【名】公文(クモン)□に附帶して上つる帳簿。くもん(公文)□參照。
しもん 識文【名】しぶん(識文)に同じ。
しもん 諮問【名】はかり問ふこと。問ひ尋ぬること。諮詢。
しもん 私門【名】個人の門地。私家。
しもん 四文【名】『四文錢の輕輕しきに譬へたるなるべし。又、四文店の、何でも四文といふより起りしならんともいふ』かるがるしく、何事にも差出づることの譬。 傾城金秤目「それを四文と腰を押す武兵衛さん」 □「わりやあちな所へ四文と出て、さいこさいをいふが」
しもん 四門【名】□眞言陀羅尼の方位として、東を發心(ホツシン)門、南を修業門、西を菩提門、北を涅槃門とすること。葬場の四方の門などに、この名を命ずることあり。□〔佛〕『門は能通の義、この四に依りて、眞性・實相の理に悟入するを得るより、門といふ』一に有(ウ)門とて、一切の現象を空なりと斷じやすき偏執(即ち斷見)を治せんがための法門、二に空門とて、一切の現象を有なりと斷じやすき偏執(即ち常見)を治せんがための法門、三に亦有亦空(ヤクウヤククウ)門とて、斷見と常見との兩偏見を有する者のための法門、四に非有非空(ヒウヒクウ)門とて、非有非空の理を知り、常にこれを觀じ、迷妄を斷破し、眞理を證悟せしむる法門との併稱。〔天台宗の語〕 芭蕉「月かげや四門四宗もただ一つ」
しもん 死門【名】〔佛〕『死はこの世よりあの世への關門なるよりいふ』死去。死。死關。
じもん 耳門【名】〔醫〕耳のあなの入口。
じもん 寺門【名】□寺の門。□近江國園城寺、即ち三井寺の稱。□〔佛〕じもんは(寺門派)の略。(山門に對して) 正鼓記「山門・寺門は、天台をむねとする故にや」
寺門の三門跡【句】〔佛〕寺門派に屬して、門跡たる三箇寺、即ち圓滿院・聖護(シヤウゴ)院・實相院の併稱。(「山門の三門跡」に對して)
じもん 自問【名】われとわが心に問ふこと。
しもん-あん 諮問案【名】決定する前に、或機關に諮問する議案。
しもん-きくわん 諮問機關【名】しじゅんきくわん(諮詢機關)に同じ。
しもん-くわい 諮問會【名】諮問のために開かれたる會合。
じもん-じたふ 自問自答【名】自らの疑問を、わが心にて判斷すること。
しもん-しんか 四門親家【名】親類の親類。またえんじや。
しもん-せん 四文錢【名】□『一箇が當時の通用錢四文に當りし錢』寬永錢の一種。青波錢。即ち寬永錢。明治時代には、二厘に通用せり。□教所の一。青波錢一箇をあらはしたるもの。
じもん-は 寺門派【名】〔佛〕近江國の園城(ヲンジヤウ)寺、即ち三井寺を本山とする天台宗の一派。智證大師を祖とす。寺門。(山門派に對して)
しもん-はふ 指紋法【名】『英Finger prints』人の指紋を類聚して、犯罪人を鑑識するに便する法。西暦一八二〇年獨逸のプウルキンエ博士の發見に係る。しもん(指紋)參照。
しもん-みせ 四文店【名】夾餘に同じ。
しもん-や 四文屋【名】江戸時代の末頃、四文錢一箇にあたひする程の物を賣りし大道商人。しもんみせ。
しもん-ゑ 司門衛【名】ゑもんぶ(衛門府)に同じ。(淳仁天皇の御宇、一時改められし稱呼)
しも-もも 霜桃【名】ふゆもも(冬桃)に同じ。 和名「冬桃、今案、俗云二霜桃一是也」
しも-や 下屋【名】□「下(シモ)の屋」に同じ。〔古語〕 源氏「しもやにぞ繕ひて、やどり侍るを」 □雜物を置き、雜事を執りし所。また此に浴場を設置せることあり。寢殿造の後方に設けたる屋舍。雜舍。
しも-やかた 下屋形・下館【名】しものやかた。夾のやかた。しもやしき。
しも-やけ 霜燒・凍【名】とうしやう(凍傷)に同じ。
しも-やしき 下屋敷【名】上屋敷の控屋敷。したやかた。したやしき。別邸。下館。(かみ屋敷・なか屋敷に對して) 一代女「この勤止めさせて、門前町の御下屋敷に置かれ」
しも-よ 霜夜【名】□名香の名。ちんの一種。香聞かにて冴えたる所あり。雲井よりは濃く、少し若き香あり。□霜の降る寒き夜。霜夜(サウヤ)。
霜夜の鐘【句】霜の強く降りたる夜の鐘。音冴えて遠くに響く。
しも-よけ 霜除【名】草木の霜に傷むを防ぐために、藁などにて作る覆。しもがこひ。 一茶「母親を霜除にして寢たるかな」
しもよのかね-じふじ-の-つじうら 霜夜鐘十字辻占【名】脚本の一。選査の保護・士族の乳貰・按摩の白浪・天狗の生酔・禰公の奇計などの題を與へられたる體にし、三題噺風にまとめたるもの。六浦正三郎なる者、天下のために其の師杉田氏を殺し、その子に仇を討たれんとすることを本筋とす。河竹新七の作。
しもり 沈【名】魚釣に用ふる小さき浮子(ウキ)の上に、青貝を附けて重くし、浮子を沈むやうにせるもの。
しも-ろくろ 下轆轤【名】傘の開閉を自由ならしむるため、その支骨の一端を把束する器具。
しも-わらは 下童【名】雜事に召使ふわらは。〔古語〕 源氏「かしこに侍りけるしもわらはの、ただこの頃の宰相が里に出でまうで來て」
しも-われ 霜割【名】急激なる寒氣のために、樹幹の外部は直ちに收縮するに拘はらず、内部は比較的溫かにして收縮せざるため、つひに中心に向ひて、縱條の割目を生ずること。
しも-ゑちご 下越後【名】〔地〕越後國の阿賀野川の以北、即ち北蒲原・岩船二郡の地域。(上越後・中越後に對して)
しも-をとこ 下男【名】げなん(下男)に同じ。 浮世風呂「洗粉の袋はぷんぷんと匂ひて、下男の鼻をうがち」
しも-をなご 下女子【名】夾餘□に同じ。〔京都・大阪の語〕 天の網島「駕籠の衆、いたう更けたのと、上(カミ)の町から、下女子、迎ひの駕籠も大和屋の」
しも-をんな 下女【名】□階級の低き女官。〔古語〕 枕「主殿司こそなほをかしきものはあれ。しも女のきはは、さばかり美しきものはなし」 □げぢよ(下女)に同じ。(かみ女に對して)
しも-をれ 霜折【名】天氣の曇りて寒きこと。一説に、空曇りて、霜の降らぬことなりと。〔古語〕 新六「今日はまた山の朝けのしもをれに空かき曇り雨は降りつつ」
しや 社【名】□支那にて、土地の神、又その神の祭典。しやじつ(社日)參照。□やしろ。神社。祠社。□古、支那にて、二十五戸を一團とせし部落。□支那にて、五穀を生ずるものとして祭りし土の神。その制、内には、土を積みて、上を平にし、樹木を植ゑ、又は石にて造りし主を立て、これを社壇といひ、外には、木を束ね、土にて塗りたる高き垣(カキ)、又その外に、更に低き土塀を繞らしたり。しやしよく(社稷)參照。□臺灣の行政區劃の最も低く狹きもの。一社もしくは數社に、區長一人を置く。區長は、明治四十二年以前には、社長と呼びたり。□くみあひ。團體。結社。□くわいしや(會社)の略。
社に屋(ヲク)す【句】『禮記の郊特牲篇に「天子大社必受二霜露・風雨一以達二天地之氣一也。是故喪國之社屋レ之、不レ受二天陽一也」とあり。古、支那にて、亡國の社廟には屋根を設けて、天光を受けしめざる習なりしよりいふ』國亡ぶ。
社未だ屋(ヲク)せず【句】『「社に屋す」を見よ』國未だ亡びず。
しや 斜【名】ななめ。はす。すぢかひ。
斜に構ふ【句】□劍術にて、兩手にて、刀の柄を持ち、その切先を上げ、斜にして構ふ。□固く身構をなす。
しや 紗【名】經(タテ)・緯(ヨコ)共に生絲を用ひ、緯絲一本を打込むごとに、經絲を搦ませて織りたる織物、即ち一種の搦織(カラミオリ)。薄くして輕く、帷又は夏羽織などに用ふ。 和名「紗、俗云レ射」
しや 舍【名】□かりのやどり。やど。客舍。□いへ。屋舍。□星のやどり。星座。□昔の支那の軍制にて、軍隊が一日三十里を行軍して宿すること。舍次。
しや 炙【名】火にかざして加熱したる肉。あぶり肉。
しや 瀉【名】げり(下痢)に同じ。
しや 者【名】それしや(夫者)の略。 女殺油地獄「桔梗染の腰繞り、烏繻の帶、しやじやわいの」
しや 射【名】弓射る技。弓術。射術。
しや 蔗【名】〔植〕さたうきび。甘蔗。
倒(サカサ)に蔗を食ふ【句】「蔗境に入る」に同じ。
しや 赦【名】□罪過をゆるして問はざること。□昔、吉凶・禎祥の大變又は功德・追德などのために、罪人を赦すこと。□大赦と特赦との總稱。□特典にて、罪人をゆるすこと。常赦・大赦・非常赦の三種あり。
しや 視野【名】『獨Sehfeld』□頭をも眼をも動かさずして、同時に見得る面積。視界。視場。□望遠鏡・顯微鏡等にて、その中に見ゆる所。
しや 子夜【名】夜の子(ネ)の刻。夜半に中る午後十二時。
しや 四野【名】四方の野。
しや 【感】罵る聲。 宇治「しやくび斬って、犬にかひてん」
じや 蛇【名】□蛇の大なるもの。をろち。□大酒のみ。大酒家。□毎年六月朔日、東京淺草なる淺間神社(俗稱富士)の祭に、蟲除として賣る麥稈製の蛇の形。江戸時代には盛んに行はれたり。 武玉川「江戸は蛇が出て暑い朔日」 淀鯉出世瀧德「どちらへ似ても蛇の子孫」
蛇が蚊【句】次條の略。〔諺語〕
蛇が蚊を呑んだやう【句】飲酒の飽足らずして、更に需むるところある狀。
蛇が出さうで、蚊も出ぬ【句】大袈裟のものが出づるならんと豫想せるに、實は些少の物も出ぬ。〔諺語〕
蛇の鮨(スシ)でも食ふ【句】いかなる物をも食り食ふ。〔諺語〕
蛇の道は蛇(ヘビ)【句】蛇の過ぎたる道は、他の蛇がよく知るごとく、その道に通ぜる人は、能くその道を知る。〔諺語〕
じや 麝【名】〔動〕じやかうじか(麝香鹿)に同じ。
麝あれば香し【句】『金剛經・明心寶鑑等に見ゆ』才智あれば、おのづから世に知らるる譬。〔諺語〕
じや 邪【名】□よこしまなること、又その人。□症惡しき熱病。邪氣。邪熱。
邪は正に勝たず【句】『戰國策の秦國の條に「以レ邪攻レ正者亡」とあり』邪惡は正義に敵するを得ず。〔諺語〕
じ-や 時夜【名】鷄の夜間の時刻を告ぐること。
じ-や 次夜【名】次の夜。
じや 【助動】ちやの誤。
じやあ 【觀】じやあじやあに同じ。
しや-あく 捨惡【名】惡事・惡念を捨去ること。 太平記「今日は佛生日とて…、灌佛の水に心を澄し、供花・燒香に經を翻して、捨惡・修善を事とする習なるに」
じや-あく 邪惡【名】よこしまにして惡しきこと、又そのもの。
しやあ-しやあ 【觀】□水などの流れ落る音、又水を注ぎかくるさま。□恥を恥とも思はぬさま。鐵面皮。
じやあ-じやあ 【觀】前條□を强めていふ語。
しやあ-つく 【名】しやあしやあとせる人を罵りていふ語。恥しらず。鐵面皮。
じやあなりずむ (英Journalism)【名】新聞・雜誌に適合せる方式。
じやあなりずむの文藝【句】新聞・雜誌の雜報記事風の文藝。眞面目なる内心の要求より出でしにあらずして、新聞・雜誌によりて、流行を作らるる文藝。
しやあびん (英Shaping)【名】せえぴんぐまいんの俗稱。 「記號」に同じ。
しやあぶ (英Sharp)【名】〔音〕えいきがう(嬰記號)に同じ。
しや-あん 謝安【名】〔人〕支那晉の政治家。字は安石。司馬となり、後に、太保に進む。高潔を以て稱せらる。太元十年歿す。年六十六。
じやあん 【觀】鐘の音。 狂言(鐘音)「さらば撞いて見よう。じやあん、もん、もん、もん」
しやある-の-ていりつ シヤアルの定律【名】〔理〕『英Charles' law』佛蘭西人シヤアル(J. A. Charles)の發見せる氣體の膨脹に關する法則。即ち氣體の種類如何を問はず、一定の壓力の下に於ては、その膨脹係數は皆等しといふもの。げえりゆさっくの定律。
しや-い 緖衣【名】□赤き色の衣服。□罪人の著る衣服。
しや-い 謝意【名】□感謝の心。□謝罪の心。
しや-い 寫意【名】繪畫にて、形似を主とせず、その内容・主觀を描出すること。 「意志。
じや-い 邪意【名】よこしまなる心。邪心。
しや-いう 社友【名】□同じ組合に屬する仲間。□社員以外にありて、社中の事を助くる徒。社中。 「社の所有。
しや-いう 社有【名】□神社の所有。□會
しや-いう 赦宥【名】しやめん(赦免)に同じ。
しやいう-ほうしよ 赦宥奉書【名】鎌倉時代及び室町時代に奉行(ブギヤウ)の發したる赦令。
じやいな-けう 耆那教・闍伊那教(英Jainism)【名】『耆那は、一切世間苦を超脱せる勝者の義、即ち斯かる聖人の開きし宗教なりとて名づけしもの』佛教より少しく早く印度に起りたる宗教。或は佛教の一支派なりともいふ。教祖跋陀摩那(バルダマナ)は中印度剎帝利(セツテリ)種の出なりし筏駄(?)。
しやいねすとく-こきふけい シヤイネストク呼吸型(獨Cheynestokessches Atmen)【名】〔醫〕呼吸現象の一。腦疾患の固有症にして、動脈腔、腹腔の滲出物又は腫瘍の爲に、壓迫的に息切(イキギレ)をなすこと。
しや-いん 車胤【名】〔人〕支那晉の學者。字は武子。家貧にして、油を得る能はず、螢を集め、その光によりて勉學し、官、吏部尙書より司空に至る。元細の過を奏せんとして、事泄れ、逼られて自裁す。けいせつ(螢雪)參照。
じや-いん 邪淫・邪婬【名】□よこしまにして、禮を失すること。□〔佛〕五戒の一。妻妾又は夫にあらざる者と淫事を行ふこと。邪婬戒。 黑川派の鮭「邪淫の惡鬼は身を攻めて」
じやいん-かい 邪婬戒・邪婬戒【名】〔佛〕前條□に同じ。
じやいん-さう 蛇茵草【名】〔植〕いぬいたどり(犬虎杖)に同じ。
じやい-も 【名】〔植〕かがいも(蘿藦)に同じ。
しやう 莊・庄【名】□城市外の一地區。□しやうゑん(莊園)に同じ。 源氏「領じたまふ御しやう・御牧(ミマキ)」 □莊園の制廢れたる後も、なほその名を存せし土地。□臺灣の行政區劃のうち、街よりは小さく、社よりは大きなるもの。
しやう 牀・床【名】ゆか。とこ。床上。寢臺。

しやう 將【名】(一)軍隊の長。(二)古は近衛府の官名、今は陸・海軍の官名。共に、大・中・少の三等あり。
將に將たり【句】大將分として、人を統ぶる度量技能あり。
しやう 漿【名】(一)味うまき飲み物。こんづ。(二)のみもの。しる。飲料。
漿を請ひて、酒を得【句】望むものより善きものを得。〔諺語〕
しやう 醬【名】ひしほ。味噌。
しやう 牆・墻【名】かき。かきね。
牆に耳あり【句】「垣に耳」を見よ。〔諺語〕
牆に面す【句】『書經の周官篇に「不レ學牆レ面、莅レ事惟煩」、論語の陽貨篇に「人而不レ爲二周南・召南一、其猶二正面牆立一也歟」とあり。牆に對して立てば、一歩も進む能はざるよりいふ』無學の者の世に出でて活動する能はざる譬。〔諺語〕
しやう 檣【名】帆ばしら。
しやう 笙【名】支那及び我が國にて用ふる一種の管樂器。現今我が國にては、雅樂及び祭祀に用ふ。圓筒形なる空匣、即ち匏(ホウ)と稱する物の上に、十三・十七又は十九の竹管を圓形に立てて插入し、その各脚部、即ち根縦(ネツ)と稱する部分に、響銅(サハリ)の薄片より成る簧(シ)を附し、空匣の側面に一の吹口ありて鳴らすやうにせるもの。匏は桐材にて製し、通常その横側に、時繪を施す。しやうのふえ。さうのふえ。さう。

(しやう)

しやう 生【名】(一)生きて居ること。生存。(二)いのち。生命。徒然「生を貪り、利を求めて」(三)いっしやう。生涯。(四)〔佛〕『梵(Jāti)(惹多)の譯語』有爲法(ウヰホフ)の現起すること。
生ある者は皆死す【句】「生(セイ)ある者は死あり」に同じ。〔諺語〕榮花「一切世間に生ある者は皆死す」
生・住【句】〔佛〕次條の略。
生・住・異・滅【句】〔佛〕「內法の四相」を見よ。徒然「生住異滅のうつりかはるまことの大事は、たけき河の漲り流るるごとし」
生を變ふ【句】うまれかはる(生變る)に同じ。狂言(ぬけがら)「鬼になるならば、生をかへてなりとも、ならいで」
生を引く【句】死にし後までも、この世に執心殘る。太平記「最後の一念に由って、善惡の生を引くといへり」
生を隔つ【句】死にて、あの世の人となる。幽明その界を異にす。平家「まことに存生の時ならば、大納言入道殿こそ如何にとも宣ふべきに、生を隔てたる習ほど恨めしかりけることはなし」
この生【句】この世における生涯。現世の生活。大鏡「この生には、御數珠とらせたまふことはなくて」
しやう 生・老・病・死【句】〔佛〕しく(四苦)を見よ。
しやう 性【名】(一)うまれつき。性分。天稟。資稟。(二)物のたち。しやうあひ。性質。鎌田兵衛名所盃「見たらばちやっと氣を通し、外づさう外づさうと思ふたが、性になりはて、扱餘り早まって」(三)しやうね(性根)に同じ。(四)〔佛〕萬有の原因。本體。(五)陰陽家にて、人の生れたる年・月・日の干支を十二宮・二十八宿・九曜・五行等に配し、相剋(サウコク)相生(サウシャウ)の理に由りて、禍福・吉凶などを定むるもの。
性も懲も無し【句】不注意のために同じ過失を繰返す。心(シン)も懲も無し。
しやう 姓【名】せい(姓)に同じ。〔古語〕枕「こと人の子になりて、平などいへど、ただもとの姓を、若き人人ことぐさにて笑ふ」
しやう 省【名】(一)『支那漢の元帝、その皇后の父の名を禁といひしより、禁中を改めて、省とせし由、漢書の註に見ゆ』禁中。禁裡。(二)『支那にて、禁中に設置せられしよりいふ』中央官署の名。例へば、六朝の梁・陳及び唐・宋時代の尙書・門下・中書の三省、我が國中古の八省、中務(ナカツカサ)・式部・治部・民部・兵部・刑部・大藏・宮內、現制の十一省(宮內・內務・外務・陸軍・海軍・大藏・司法・文部・農商務・遞信・鐵道)の類。(三)『支那の元の代に、宋代の三省中、尙書・門下の二者を廢し、中書省をして、政務を統一せしめ、行中書省(略して行省)即ち中書省の出張所の如きものを地方に十箇所設け、中書本省の官を以て、出でて地方の行政を分掌せしめしに本づく』支那最高の行政區劃。
しやう 症【名】『この字、康熙字典に載せざれども、五雜俎・溫疫論・水滸傳等に見えたれば、新井白石の同文通考に、和字の部に收めたるは誤なり』病氣の質。病性。源氏冷泉節「法眼かぶりを振って、いやいや輕き症にてなし」
しやう 賞【名】褒美として賜ふ物。褒美。
しやう 史生【名】ししやう(史生)に同じ。和名「史生、俗二音如レ省」
しやう 章【名】(一)文章の中の大なる段落。(二)文章。文詞。(三)おしで。印。印章。(四)しるし。表識。徽章。(五)あや。いろどり。かざり。文飾。文采。(六)漢文の文體の一。天子に對して、謝恩又は慶賀を表するもの。漢代に行はれ、唐以後に廢れたり。(七)〔天〕めとんじゅんくわんき(メトン循環期)に同じ。
章を斷ち、義を取る【句】「斷章取義」を見よ。
しやう 商【名】(一)『商(ハカ)る義。孟堅子に「商之爲レ言、商二其遠近一、度二其有亡一、通二四方之物一、故謂二之商一也」とあり』あきなひ。商業。商人。(二)〔數〕被除數を除數にて除したる結果の稱。(三)〔音〕五音または七音の一。(四)星宿の一。西方に位す。即ち二十八宿中の心(ナカゴ)の別稱。商星。しんしゆう(參商)參照。(五)『もと祖先契(セツ)が、唐虞の代に、商即ち今の陝西(センセイ)省商州に封ぜられしによりていふ』いん(殷)の舊稱。
しやう 正【名】(一)少しも違はぬこと。そのままなること。いきうつし。浮世風呂「その中にある姑婆の口眞似は、あの婆に正だよ」(二)中古及び明治初年の諸司の長官。明治初年には、正の下に權正(ゴンノシャウ)をも置き、共に奏任としたり。
しやう 相【名】(一)相(タス)くる者。輔佐。(二)宰相。大臣。
しやう 祥【名】(一)めでたきしるし。吉祥。瑞祥。(二)周忌と二周忌との稱。
しやう 匠【名】たくみ。職人。工匠。
しやう 殤【名】丁年に充たずして死ぬこと。夭死。
しやう 觴【名】さかづき(酒杯)に同じ。
しやう 償【名】ばいしやう(賠償)に同じ。
しやう 娼【名】しやうぎ(娼妓)に同じ。
しやう 象【名】(一)すがた。かたち。(二)易占にあらはれたるかたち。うらかた。
しやう 請【名】請ひ招くこと。賀古敎信七墓廻「されば、若君は閻魔王の請によりて、黃泉に到り給ひしこと」
しやう 掌【名】(一)手のひら。たなごころ。(二)明治の初、各官署に置き、佚人を通じ、書疏を達し、使部を撿することを掌りし判任官。同十年廢せらる。「省掌」「官掌」「坊掌」
掌を反(カヘ)す【句】「掌(タナゴコロ)を返す」を見よ。
掌を指(サ)す【句】「掌(タナゴコロ)を指す」を見よ。
しやう 鉦【名】雅樂用の鉦鼓より出でたる金屬製の擊樂器。形ふせがねに似、緒にて吊して、左の手に持ち、右手にせる撞形の桴(バチ)にて、すり、又は叩きて鳴らす。馬鹿囃子・芝居の囃子などに用ふ。かね。
しやう 唱【名】〔文〕古詩より出でたる漢詩の一體。
しやう 尙【名】姓氏の一。舊琉球藩王家の姓。琉球の王統はもと天孫氏なりしが、姓を易ふること五度、永享二年支那明宣宗より、尙姓を贈られ、始めて尙氏を稱す。明治維新後、侯爵を授けらる。
し-やう 紫陽【名】『しやうしよゐん(紫陽書院)を見よ』しゆしがく(朱子學)の異稱。「その學、紫陽を主とす」
し-やう 厮養【名】馬飼の如き賤しき身分の者。こもの。廝徒。
し-やう 仕樣【名】しかた。方法。藤屋敷「泣かずに言はうと思へども、如何も涙がとめられぬ、出來た仕樣ぢやござんすまい」
仕樣・模樣【句】『意味も似、語路も同樣なる語を重ねてあやなしたるもの』前條に同じ。日本振袖始「仕樣・模樣もありさうな事」
し-やう 飼養【名】かひやしなふこと。畜養。飼育。
しやう 章【助數】支那の古代の曆法にて、十九年づつを一期として年月を數ふるに

いふ語。しやうどう(章動)參照
しやう 正【接頭】(一)『神の位には、濁りて、じやうと唱へ、人の位には、清みて、しやうと唱ふる舊慣あり』位の各階を上・下に分ちたる、その上級のもの。(從に對して)(二)正しく、その時刻に當れること。生寫朝顏話「いかさま、明日は、しやう七つの出立」御摂勧進帳「人は武士正九つに女郎を買ひ」
じやう 上【名】(一)かみ。うへ。上等。(二)『支那にて、司馬遷の用ひはじめしもの』天皇。主上。(三)天皇に歌など奉るとき、作者の名の下に、やや片よせて、小さく書く文字。增鏡「制に應ずと、じやう文字載せられたるも、內宴のためしとかや」(四)上書などする時の包紙の上に記す敬語。(五)書翰文の初、又は封皮に記す文字。(六)〔語〕じやうしやう(上聲)の略。「平・上・去・入」
上の上【句】最も上等なること。(「下の下」に對して)
じやう 常【名】(一)長さの單位。支那にては尋の二倍、即ち一丈六尺、我が國にては一丈三尺なりといふ。(二)ちやう(定)を見よ。
じやう 情【名】(一)物事に感じて、心の動くこと。感動する心。感情。(二)なさけ。情愛。(三)男女間の情愛。(四)まごころ。誠意。(五)慾。情慾。(六)ことわり。條理。(七)まこと。事實。事情。情況。情勢。(八)おもむき。
情強(ガウ)し【句】情を張ること甚し。強情(ガウジャウ)なり。
情を賣る【句】「情(ナサケ)を賣る」に同じ。
情を情に立つ【句】情を張り通す。
情を立てる【句】人情をつくす。
情を通ず【句】(一)樣子を通知す。心を通はす。內通す。(二)男女ひそかに心を通はす。私通す。
情を張る【句】『じやうばり(情張)を見よ』意地を張りとほす。我意を曲げず。
じやう 狀【名】(一)ありさま。やうす。狀況。事狀。(二)事狀を具して上申する文書。陳情書。(三)ふみ。てがみ。書簡。虫賣「狀見れば江戶も降りけり春の雨」
じやう 鎖【名】銅・鐵などにて造り、開閉すべき所に用ひて、締(シマ)りとする具。じやうまへ。錠(ヂャウ)。宇治「じやうをねぢて引きぬきて」
鎖を下(オロ)す【句】(一)鎖をさしかたむ。(二)しっかりと心を固む。堅く戒む。
じやう 城【名】しろ(城)に同じ。
じやう 淨【名】〔佛〕清淨。無垢(ク)。
じやう 成【名】次條を見よ。
成・住・壞(エ)・空【句】〔佛〕しごふ(四劫)を見よ。
じ-やう 滋養【名】身體の養となること、又その食物。やしなひ。
じ-やう 侍養【名】かしづき養ふこと。
じ-やう 時樣【名】當世流行のすがた。
じ-やう 辭樣【名】(一)ことばづかひ。いひまはし。(二)しし(詞姿)に同じ。
じやう 上【代】じやうさま(上樣)に同じ。
じやう 正【接頭】しやう(正)を見よ。
しやう-あい 賞愛【名】ほめよろこぶこと。
じやう-あい 情愛【名】なさけ。いつくしみ。愛情。
しやう-あう 商鞅【名】〔人〕支那戰國時代の政治家。秦の王室の疎族にして、また公孫鞅として知らる。刑名の學を好み、秦國を富強ならしめし功多し。商於の十五邑に封ぜらる。惠文王立つに及び、讒せられて車裂せらる。しやうし(商子)參照。
商鞅木を徙して、信を立つ【句】『史記の商君傳に見ゆ』商鞅、秦の孝公に用ひられて法律を制し、これを施行するに先だち、民をして己れを信ぜしめんがために、三丈の木を國都の南門に立て、これを北門に徙す者には、三十金を與へんといひしに、民、怪しみて徙す者なかりしかば、更に約するに五十金を以てせし時、これを徙しし者一人あり、直ちに五十金を與へ、欺かざるを明かにせしより、その令よく行はれたりといふ故事。
しやう-あく 掌握【名】『掌(タナゴコロ)に握る義』我が物として自由に扱ふこと。
じやう-あつ-りよく 上壓力【名】〔理〕『英 Upward pressure』液體の上方に壓す力。
しやう-あひ 性合【名】(一)あひしやう(合性)(一)に同じ。(二)しやう(性)(二)に同じ。
じやう-あひ 情合【名】人情の具合。浮世床「どうも情合をうまくいふぜえ」
しやう-あん 正安【名】後伏見天皇の御代の年號(紀元一九五九年—一九六一年)。
じやう-あん 上餡【名】上等なる餡。復讐後祭祀「花魁となると、竹村の上あんでもしきりはでも、まんと食はれるはさ」
しやう-い 傷痍【名】きず。創痍。
しやう-い 尙衣【名】『尙は主(ツカサド)る義』支那にて、天子の御衣を掌りし職。
じやう-い 上意【名】君の御心。君のおぼしめし。傾城島原蛙合戰「殊に上意も何はず、葛西の淸重が娘と緣組の約束し」
じやう-い 攘夷【名】外夷を逐ひはらふこと。外國人を入國せしめぬこと。
じやう-い 情意【名】(一)感情と意思と。(二)こころもち。
じやう-い 常衣【名】常に著る衣。
じやう-い 淨衣【名】じやうえ(淨衣)に同じ。
じやう-い 上衣【名】表に著る衣服。うはぎ。
じやう-い 上醫【名】技術の巧みなる醫者。
上醫は國を醫す【句】上手なる醫者は國家を治す。こくしゆ(國手)參照。〔諺語〕
しやう-い-いちじきん 傷痍一時金【名】臺灣總督府職員の警察事務に從ふ文官判任以下の者が、蕃地內にて、討伐・搜索等のために傷痍せる時、支給せらるる一時金。
しやう-いう 尙友【名】『孟子の萬章下篇に「頌二其詩一、讀二其書一、不レ知二其人一可乎、是以論二其世一也、是尙友也」とあり。尙は上にて、進み上りて、古人を友とする義』書を讀みて、古人を友とすること。
しやう-いう 倡優【名】役者。藝人。俳倡。俳優。
しやう-いう 醬油【名】しやうゆ(醬油)に同じ。
しやう-いう 獎誘【名】すすめいざなふこと。勸誘。
じやう-いう 情由【名】事のわけ。事情。事由。
じやう-いう 上游【名】(一)じやうりう(上流)に同じ。(二)上流に在る地。
じやう-いうせい 上遊星【名】〔天〕ぐわいいうせい(外遊星)に同じ。(下遊星に對して)いうせい(遊星)參照。
しやういう-ろく 尙友錄【名】〔書〕『しやういう(尙友)を見よ』支那周代より明代に至るまでの人名を諸書より載錄し、これに小傳を附したるもの。二十二卷。明の廖用賢(レウヨウケン)の撰。淸の潘遵祁(ハンジュンキ)續集二十二卷を撰せり。
しやうい-きよく 尙衣局【名】ぬひどのれう(縫殿寮)の唐名。
しやう-いく 生育【名】せいいく(生育)に同じ。盛衰記「妾、夫を助けんために、爭でか生育の父を殺させん」
じやうい-ごかし 上意ごかし【名】『ごかしは接尾語』上意をかこつけにすること。律國女夫池「うぬは、能う上意ごかしに打ったなあ」
しやうい-せうかん 尙衣少監【名】縫殿助(ヌヒノスケ)即ち縫殿寮の次官の唐名。
しやういち-き 聖一忌【名】十月十五日に修する、聖一國師の忌。
しやういち-こくし 聖一國師【名】〔人〕べんゑん(辨圓)を見よ。
しやうい-ちよくちやう 尙衣直長【名】縫殿允(ヌヒノジョウ)即ち縫殿寮の次官に次ぐ役の唐名。
じやう-いふ 讓揖【名】いふじやう(揖讓)に同じ。
じやう-いふ 城邑【名】城市。都邑。都會の地。
しやうい-ふじよれう 傷痍扶助料【名】人民にて、巡査同樣の働をなして負傷したる者に給する金。一等傷・二等傷の別あり。前者は自用を辨ずること能はざる終身不具となりし者、後者は用を辨じ得るも、終身不具となりし者。
しやうい-ほけん 傷痍保險【名】しやうがいほけん(傷害保險)に同じ。
しやうい-ほうぎよ 尙衣奉御【名】縫殿頭(ヌヒノカミ)即ち縫殿寮の長官の唐名。
しやう-いん 將印【名】將帥たるしるしの印。
しやう-いん 省印【名】(一)我が國中古の省の印。後紀「以二省印一印レ之」(二)我が國現

制度の各省を代表する印。
しやう-いん 請印【名】少納言が奏上して、太政官に内外印の押捺(ナツ)を請ふこと。
しやう-いん 正因【名】〔佛〕正しく法を生ずる因種。
じやういん-けん 常隱圏【名】〔天〕こういんけん(恆隱圏)に同じ。
じやういん-じやう 請印狀【名】請印の旨を記したる書狀。
しやういん-ぶっしやう 正因佛性【名】〔佛〕さんいんぶっしやう(三因佛性)を見よ。
しやうい-れいし 尙衣令史【名】縫殿屬(ヌヒドノノサクワン)即ち縫殿寮の四部官中の最下位の官の唐名。
しやう-う 瘴雨【名】瘴氣を含める雨。
　瘴雨・蠻烟【句】支那の南方蠻地における瘴氣を含める烟雨。
しやうう-きやう 請雨經【名】〔書〕だいうんしやううきやう(大雲請雨經)の略。
　請雨經の法【句】〔佛〕旱魃の時、請雨經に說ける法により、曼荼羅を建立して、降雨を祈り、五穀成就を求むる密敎の大法。 太平記「請雨經の法行はるるごとに、掲焉(ケチエン)の靈驗なほ絶えず」
しやう-うつし 正寫・生寫【名】いきうつし(生寫)に同じ。 世上洒落見絵圖「狂言は一向に止めにしてしまひ、舞臺で、役者の内を、その儘生寫にして見せければ、大入にて」
しやううつし-あさがほにっき 生寫朝顏日記【名】芝屋芝叟・近松德三等の腹稿により、馬田柳浪の作れる繪本朝顏日記を脚色して、大阪の演芝居にて演ぜし時の外題。駒澤次郎左衞門と深雪(ミユキ)といふ女との情話を中心とせるもの。作者は出來島千助。
しやううつし-あさがほばなし 生寫朝顏話【名】淨瑠璃の一。駒澤次郎左衞門と深雪とのことを作れるもの。山田案山子の作。
しやう-うん 祥雲【名】めでたき雲。
しやう-うん 商運【名】商賣上の運命。
しやう-うん 昌運【名】さかんなる運命。隆運。
じやううん-ぶし 淨雲節【名】淨瑠璃節の一。寬永の頃、薩摩太夫淨雲の語り初めしもの。薩摩節。

しやう-え 唱衣【名】〔佛〕『鬻賣する時、まづ幾許と價を定めて唱呼するよりいふ』こえ(估衣)に同じ。
じやう-え 淨衣【名】㊀白き色の衣服。㊁古、祭事に用ひし衣。白色又稀には黃色の絹又は布にて作り、狩衣に似て、少し約まりたる形に仕立つ。明衣。祭服。 平嵩「大將以下、みな淨衣の上に鎧著」㊂僧の、新請の時、著用する清淨なる衣。修法の種類によりて、色は同じからず。 源氏「僧の布施・淨衣などやうのこまかなるものをさへ奉りたまふ」
　淨衣の袴【句】白き布の袴。
しやう-えい 將營【名】大將の居る陣營。本陣。
しやう-えい 唱詠【名】ぎんえい(吟詠)に同じ。
しやう-えい 觴詠【名】觴(サカヅキ)を擧げて吟詠すること。酒盛をしつつ、詩歌を作ること。
しやう-えい 障翳【名】㊀かざしおほふこと、又その物。㊁かげ。くもり。㊂眼球のくもり。
しやう-えいでん 省營田【名】王朝時代の官田の一。宮内省より、使部等を田司として掌らしめしもの。
しやう-えき 瘴疫【名】瘴氣にあたりて起る熱病。
しやう-えき 正役【名】さいえき(歲役)に同じ。
しやう-えき 漿液【名】〔醫〕漿液膜の分泌する液。極めて透明なり。
しやう-えき 生益【名】出生によりて、戸口の增益すること。 令義解「謂其生益者」
しやうえき-まく 漿液膜【名】〔醫〕體腔の內面と諸內臟の外面とを被ふ膜。この膜は透明なる漿液を畜へて、常に濕度を帶ぶ。
じやう-えつ 上謁【名】『謁は名刺にて、謁を上(タテマツ)る意』名刺を差出して、面會を乞ふこと。
しやう-えん 瘴烟【名】瘴氣を含むもや。
じやう-えん 情緣【名】男女のえにし。男女のなか。
じやう-えん 上演【名】じやうぢやう(上場)に同じ。

しやうえん-じ 生臙脂・猩臙脂【名】㊀古來支那より舶來せる、紫紅・鮮美にして、耐久性に富める染料。綿に染めて乾かしたるものにて、湯に浸し、その汁を絞りて用ふ。我が國にては、繪畫の彩色及び特種の友禪・更紗染などに用ひ、支那人は化粧用に供す。その原料につきては、紅花(ベニ)・蘇枋(スハウ)・花沒藥(ハナモツヤク)など種種の說あれども、實はスチックラックなるが如しといふ。えんじ。胡臙。正味紅。㊁〔植〕あかびゆ(赤莧)に同じ。
しやう-おう 聖應【名】〔佛〕佛陀の感應。 盛衰記「無窮(ムグウ)の聖應、簪の聲に應ずるが如し」
しやう-おう 正應【名】伏見天皇の御代の年號(紀元一九四八年—一九五二年)。
しやう-おう 聖應【名】〔人〕りやうにん(良忍)の諡號。
じやう-おん 淨音【名】きよき音聲。 松風村雨束帶鑑「美妙淨音鮮かに」
じやうおん-く 盛陰苦【名】〔佛〕はっく(八苦)を見よ。
じやうおん-じ 淨恩寺【名】伊勢國三重郡羽津(ハツ)村にある眞宗の寺。西本願寺の末寺。天延二年僧良源の創建。
しやう-か 上下【名】㊀古より今までの間。㊁うへした。㊂あがりさがり。
しやう-か 商家【名】商人のいへ。あきんどみせ。あきうどや。商買。
しやう-か 笙歌【名】笙に合はせて、歌をうたふこと。
しやう-か 唱歌【名】人聲を以て、或節(シフ)を唱ふること、又その歌曲。さうか。聲樂。
しやう-か 娼家【名】ちよらうや(女郎屋)に同じ。
しやう-か 牆下【名】かきのもと。
しやう-か 牀下・床下【名】ゆかの下。ゆかのほとり。
しやう-か 床架【名】ゆかだな。
しやう-か 莊家【名】㊀百姓の家。㊁莊園の事務を取扱ふ家。 太平記「本所の雜掌を六波羅の沙汰として、莊家にしすゑんために」

しやう-か 掌家【名】家のとりしまりをする、頭だちたる人。支配人。
しやう-か 請暇【名】せいか(請暇)に同じ。
しやう-か 將家【名】武將の家柄。武家。將門。
しやうか 正嘉【名】後深草天皇の御代の年號(紀元一九一七年—一九一八年)。
しやう-が 唱歌【名】㊀しやうか(唱歌)に同じ。 曾我物語「只今の歌のしやうが、心なき身も哀知れとは、この重保が事な」㊁譜を吟詠すること。さうが。〔古語〕 源氏「あるひは歌をうたひ、あるひはしやうがをし」 狭衣「いとわりなき聲を、おとしあげ、しやうがするにはやされて」
しやう-が 生薑・生姜・薑【名】㊀〔植〕蘘荷(メウガ)科に屬する多年生の草。原產地は熱帶亞細亞。地下に根莖あり。地上莖は高さ二尺に達し、葉は全緣・披針形にして、平行脈を有し、長鞘を具へて、密に莖を包む。花は蘘荷のに類し、夏秋の交開く。園圃に栽培し、根莖を香味料又は藥用に供す。あなはじかみ。くれのはじかみ。はじかみ。しやうがやう(生薑)參照。㊁癩を病みて、指の墮ちたるもの。しやうがで。㊂吝嗇なる人。あたじけなき人。からき人。 浮世風呂「生姜の節に、金びらながらをいふし」
　生薑の市【句】しやうがいち(生薑市)に同じ。 柳樽「小人島おかは生薑の市で買ひ」
しやう-が 麞牙【名】しやうげ(麞牙)に同じ。
じやう-か 情歌【名】㊀戀情をのべたる歌。こひか。㊁どどいつ(都都逸)に同じ。
じやう-か 城下【名】㊀城の下。城壁の下。㊁大名の居城のある市街。城市。 源氏十二段長生島臺「然らば、それがし二三ケ所、城下を商賣し」㊂『戰國策の楚國の條に「使萬乘之國免其相是城下之事也」とあり』次條の略。
　城下の盟【句】『左傳の桓公十二年の條に見ゆ』敵に都城の下まで侵入せられて、なす降伏の約束。
じやう-か 滋養價【名】えいやうか(榮養價)に同じ。

じやう-が 嫦娥【名】つき(月)の異稱。
しやう-かい 瘴海【名】瘴氣ある海。 太平記「毒霧御身を侵して、瘴海の氣冷まじ」
しやう-かい 詳解【名】つまびらかにときあかすこと。精解。
しやう-かい 裳階【名】〔建〕普通の屋根の下に、小さき屋根を附けて、廂の用をなし、兼ねて建物を保護するもの。大和の藥師寺の三重塔の如きは、每層これを設けて、六層の觀を呈せり。もこし。ゆたづくり。
しやう-かい 商界【名】商業界。商事社會。
しやう-かい 生界【名】生物の仲間。いきものるゐ。
しやう-かい 性戒【名】〔佛〕『自性(ジシヤウ)の戒の義』佛制を待たずして明かなる禁戒。例へば殺生・偸盜の類。
しやうかい 性海【名】〔人〕㊀臨濟宗の僧。建長寺に得度し、圓頓二敎を南都・北嶺に學び、また南禪寺に虎關に從ふ。將軍義詮・義滿に優遇せられ、東福・南禪・天龍の諸名刹に住持す。應永三年寂す。㊁近江國圓照寺の住職。名は慈航。字は無涯。篤學を以て、世に名あり。享保十二年寂す。年八十四。
しやう-かい 性海【名】〔佛〕眞如の理性(リシヤウ)の深廣なるを海に譬へていふ語。
しやう-がい 傷害【名】きずつけそこなふこと。
しやう-がい 戕害【名】きりころすこと。殺害。
しやう-がい 生涯【名】命のかぎり。身を終ふるまでの間。一生。終生。終身。
しやう-がい 生害【名】自ら死ぬること。じがい。じさつ。自刃。 本朝三國誌「よつく武運に盡きたるな、城之介が生害只今」
しやう-がい 障礙・障碍・障害【名】じやま。さまたげ。さはり。しやうげ。
じやう-かい 上界【名】〔佛〕三界の中の、色界(シキカイ)と無色界と。上地。定地(ヂヤウヂ)。〔下界に對して〕 謠曲(楊貴妃)「我れも、そのかみには、上界の諸仙たるが、…假に人界に生れ來て」
じやう-かい 上階【名】㊀上方にある階段。㊁三位以上の位階。 太平記「津守國夏上階して、從三位になさる」

じやう-かい 淨界【名】じやうど(淨土)に同じ。
じやう-かい 淨戒【名】〔佛〕清淨なる戒行(カイギヤウ)。佛戒。
　五支の淨戒【句】〔佛〕『支は支分、卽ち備餘の意』ごかい(五戒)に同じ。
じやうかい 淨海【名】〔人〕たひらきよもり(平淸盛)を見よ。
しやうか-いうぎ 唱歌遊戲【名】唱歌を歌ひつつ、その拍子に足どりを合はせて行ふ、一種の遊戲。
しやうがい-きやうそう 障礙競爭【名】競馬の一。障碍物を設けたる場所にて行ふもの。〔平地競走に對して〕
しやうがい-さい 傷害罪【名】〔法〕他人の身體を傷害したるによりて成立する犯罪。
しやうが-いし 生薑石【名】〔鑛〕形、生薑の如き石。うみしやうが。
しやうがい-せん 障礙線【名】〔兵〕軍隊の行動を困難ならしむる濕地・密林・山嶽・河川等の線。
しやうかい-ち 敞開地【名】〔兵〕かいしやうち(開敞地)に同じ
しやうが-いち 生薑市【名】每年九月十一日より二十一日まで行ふ東京芝區神明町の芝大神宮の祭禮に、境內にて生薑を賣ること。往昔、この附近、生薑畑なりしに基くといふ。また本朝醫方傳に、生薑は穢土を去り、神明に通ずといふ本文あるによりて賣るならんともいふ。この時また千木箱(チギ)をも商ふ。 萬葉千紅「遊生姜市…秋風吹送葉生姜、靈出藤花千木箱、目腐市名無勿蹬、雨晴天照太神光」
じやうかい-ばう 淨海坊【名】〔動〕かげろふ(蜉蝣)に同じ。
しやうがい-ぶつ 障礙物【名】㊀障礙となる物。㊁〔兵〕ふくばうぎよ(副防禦)に同じ。
しやうがいぶつ-きやうそう 障碍物競走【名】陸上運動の競走に、その走りゆく途中に、種種の障碍物を置きて行ふもの。
しやうがい-ほけん 傷害保險【名】〔商〕『獨Unfallversicherung』不慮の災害のために、死亡又は身體の損傷を惹起したる場合に關する保險。災害保險。奇禍保險。傷損保險。怪我保險。

しやう-かう 庠校【名】がくかう(學校)に同じ。
しやう-かう 商較【名】はかりくらぶること。
しやう-かう 商港【名】『英Commercial port』㊀商業の盛んなる港。㊁貨物の積卸及び旅客の昇降をなし得る港。卽ち貿易港・特別輸出港など。〔軍港に對して〕
しやう-かう 將校【名】『校は木格卽ち木製の仕切(シキリ)の義。古、支那にて、軍隊の指揮者は、車の木格內に居て號令せしよりいふとぞ』㊀士卒を指揮する職、又その職にある人。㊁陸・海軍の少尉以上の武官の總稱。
しやう-かう 唱考【名】古、考課に依りて、選敍の次第の定まれる人人を、その所屬官省に案內して引きあはせし作法。引唱。 續紀「冬十月癸未、太政官處分、唱考之日」
しやう-がう 商號【名】〔法〕『英Trade name』商人が、營業上自己を表示するために用ふる名稱。卽ち屋號(ヤガウ)の類。
しやう-がう 莊鄕【名】莊と鄕と。邑里。 太平記「日本國の大田文を作って、庄鄕を分かちて」
じやう-かう 上綱【名】僧綱中の上座の者。卽ち僧官にて僧都以上、僧位にて法眼(ホフゲン)以上をいふなるべしといふ。 東鑑「於御所啒上綱六口被轉讀大般若經」
じやう-かう 上考【名】㊀ちち。父。㊁先生。㊂官吏の能否を稽査して、その最も宜しき者。
じやう-かう 常行【名】平常の行狀。
じやう-かう 常香【名】常に佛前に供ふる香。 一代男「人には無知らずのやうに思はれ、無分別の常香を盛り、つひには消ゆる命」 俳諧新選(素木)「常香を盛って出代る親爺かな」
じやう-かう 情好【名】友情の親密なること。よしみ。
じやう-かう 情交【名】㊀親しき交情。情愛を以てする交際。㊁男女のよしみ。色情のまじはり。

じやう-がう 城濠・城壕【名】城塞のほり。城隍。
しやうかう-えんしふりよかう 將校演習旅行【名】〔兵〕陸軍將校のなす演習旅行。將官演習旅行・參謀演習旅行・幹部演習旅行の三種に分つ。各その條を見よ。
じやうかう-ぐん 常行軍【名】〔兵〕天候・道路等に格段の支障なき限は、每日の行程六里內外、四日ごとに、一日づつの休憩日を與ふる行軍。〔急行軍・強行軍に對して〕
しやうかう-くわん 彰考館【名】『左傳の序に「彰往考來」とあるに本づきて名づく』德川光圀が江戸小石川なる藩邸內に建てし、史籍編輯の館舍。光圀致仕するに及び、水戸に徙り、光圀の薨後、館員の半は江戸に移りしが、文政十二年江戸のは閉鎖せられ、明治三十九年大日本史全部の編輯出版完成するや、水戸のもまた閉鎖せり。
しやうがう-けん 商號權【名】〔法〕財產權の一。商號を專用する權利。商號登記簿に登記するによりて發生し、自由に相續・讓渡することを得。しやうがうとうき(商號登記)參照。
しやうかう-さうたうくわん 將校相等官【名】將校にあらで、將校と同一に取扱はるる陸・海軍の高等武官。軍醫・主計の類。
しやうかう-せいと 將校生徒【名】㊀陸・海軍の學校にて、將校となるべき敎育を受くる生徒。卽ち陸軍士官學校・海軍兵學校などの生徒の類。㊁將校にて生徒たる者。
しやうかう-せきこう 將校斥候【名】〔兵〕將校を斥候長として派遣する斥候。附屬する兵卒は、一小隊に上ることあり。
しやうかう-ていさつ 將校偵察【名】將校が部下を率ゐてなす偵察。
しやうがう-とうき 商號登記【名】〔法〕自己の商號を登記すること。自然人たる商人にありては、ただ商號權を得んとする者のみその登記をなすを要すれども、法人たる商人、卽ち會社にありては、その設立の登記は、當然商號の登記をも包含す。登記を經たる商號に對しては、他人が同一營業のために、同一商號を登記するを排斥し、且

つ不正の競爭の目的を以て、同一又は類似の商號を使用する者に對し、その使用の停止、且つ損害賠償を請求するを得しむ。
しやうがうとうきぼ 商號登記簿【名】〔法〕商號の登記番號、その商號、營業の種類、營業場所、その商號の使用者の氏名及び登記の年月日を記載するために、各市町村(東京市と大阪市とにては各區)に別冊として備ふる帳簿。
じやうかうばん 常香盤【名】常香を焚くに用ふる香爐。 五人女「常香盤の鈴落ちて、ひびきわたることしばらくなり」
しやうかうゐ 商行爲【名】〔法〕『英 Commercial transaction』貨物の運轉を媒介し、又これを補助する營利行爲。絕對的商行爲・相對的商行爲・附屬的商行爲の三種に分つ。各その條を見よ。
しやうかうゐはふ 商行爲法【名】〔法〕商法法典の編纂法の一。商行爲を基礎として、私權關係を定むるもの。我が現行商法は、この方法を採る。
しやうかく 商搉【名】『商ははかる義、搉はひく義』事物を引比べて論ずること。はかりただすこと。商量。
しやうかく 掌客【名】まらうどづかさ(掌客)を見よ。
しやうがく 正覺【名】〔佛〕『梵 Sambohi(三菩提)の譯語』しやうとうがく(正等覺)に同じ。 謠曲(竹生島)「悲願におこして、正覺年久し」
正覺を成ず【句】〔佛〕成佛す。
しやうかく 正覺【名】〔人〕くまわうまる(熊王丸)に同じ。
しやうがく 倡樂【名】倡優又は倡女が音樂を奏すること、又その音樂。
しやうがく 奬學【名】學門を奬勵すること。
じやうかく 城閣【名】城のものみ。
じやうかく 上格【名】高貴なる格式。
じやうかく 上客【名】じやうきやく(上客)に同じ。
じやうかく 常格【名】常なみの格式。
じやうかく 常客【名】じやうきやく(常客)に同じ。
じやうかく 淨覺【名】〔佛〕清淨なる覺悟。

じやうがく 常額【名】㊀一定の數量。㊁一定してある金高。
じやうがく 上腭【名】うはあご。
じやうがくこつ 上顎骨【名】〔醫〕顏面骨の一。口腔の前上壁、鼻腔下部の側壁及び眼窩(ガン)の下壁を形成し、下方に齒槽突起ありて、上齒列を具ふ。
しやうかくし 掌客使・請客使【名】しやうきやくし(掌客使)を見よ。
しやうがくし 商學士【名】商科大學を卒業したる者、又は高等商業學校卒業後、更に同校研究科を卒へたる者の用ふること得る稱號。後者のは、舊稱、商業學士。
しやうがくばう 正覺坊【名】㊀〔動〕あをうみがめ(青海龜)に同じ。㊁大酒を飲む人。大酒家。
しやうがくひ 奬學費【名】奬學に供する費用。
しやうがくくわ 生薑科・生姜科【名】〔植〕めうがくわ(蘘荷科)に同じ。
しやうがくゐん 奬學院【名】平安朝時代の私學校の一。初め在原行平、その子弟教育のため、奏請して設けたるものなりしが、同氏衰ふるに及んで、大學寮の南曹となり、更に應和三年源高明に賜ひ、爾來、源氏の公卿にて、第一たる者、宣旨に依りて管理す。さうがくゐん。
しやうがざけ 生薑酒・生姜酒【名】おろし生姜を混ぜたる酒。熱燗にして、風邪の際などに用ふ。 丹波與作「こよひちぎりの懇風は、生薑酒でも防がれず」
じやうがしま 城島【名】〔地〕相模國三浦郡三崎町の前面に橫たはれる島。周回一里半。西端に燈臺の設あり。
しやうがしやりべつ 生薑舍利別・生姜舍利別【名】生姜丁幾に單舍利別を混和したるもの。
しやうがす 生薑酢・生姜酢【名】おろし生姜を混ぜたる酢。
しやうがせん 生薑煎・生姜煎【名】生薑を煎じ出だせる古の藥。
しやうがたう 生薑湯・生姜湯【名】古の藥の一。生薑を煎じ出だせる湯。 和名抄「生薑湯」

しやうがちんき 生薑丁幾・生姜丁幾【名】生薑を丁幾劑にしたるもの。
しやうがちや 生薑茶・生姜茶【名】おろし生薑を混ぜて煎じたる茶。 重井筒「今も今、ある方で、生薑茶をくれたを」
しやうがづけ 生薑漬・生姜漬【名】生薑の根莖を薄くへぎて、蜜漬にし、衣に砂糖をまぶしたる菓子。
しやうがて 生薑手・生姜手【名】しやうが(生薑)㊁に同じ。 毛吹草「さえかへる頃やしやうがで初蕨」
じやうかどう 上下動【名】〔地〕じやうげどう(上下動)に同じ。
しやうがなます 生薑鱠・生姜鱠【名】雪鱠の如く盛りて、上におろし生薑をかけたる料理。
しやうかふ 閶闔【名】『楚辭の遠遊篇に「命二天閽一其開レ關兮、排二閶闔一而望レ予」とあり』始めて天に上る門。
しやうかぶ 正株【名】〔商〕まことの株券。現在の株券。(空株(カラ)に對して)〔取引所の語〕
じやうがふ 上合【名】〔天〕じゆんがふ(順合)に同じ。(下合に對して)
しやうかふふう 閶闔風【名】『しやうかふ(閶闔)を見よ。支那の地勢は、東方に低く、西方に高きより、西風を天門より吹來るものとしていふ』西方より吹來る風。
しやうがみそ 生薑味噌・生姜味噌【名】生姜を刻み、味噌に交へたる食品。
しやうかん 相看【名】相互にまみゆること。面會。 太平記「主上未だ御相看なき先に、御涙をぞ流させたまひける」
しやうかん 檣竿【名】ほばしら。帆檣。
しやうかん 商鑑【名】いんかん(殷鑑)に同じ。
商鑑遠からず【句】『胡銓の上二高宗一封事に見ゆ』「殷鑑遠からず」に同じ。
しやうかん 傷寒【名】〔醫〕『寒さに傷けられたる疾の意』漢方にて、寒さのために起る重き熱病。今は主として、腸チブスをいふ。
しやうかん 賞鑑【名】書畫・骨董などを賞翫して鑑定すること。

じやうかん 上燗【名】酒の燗の、程よく出來たるもの。
じやうかん 上間【名】佛堂に向ひて、左の室。(下間(ゲ)に對して)
しやうかんか 賞鑑家【名】賞鑑に長じたる人。
じやうかんや 上燗屋【名】おでんかんざけや(御田燗酒屋)を云ふ。〔大阪の語〕
しやうかんろん 傷寒論【名】〔書〕傷寒に對する意見と、その療法とを述べたるもの。十卷。支那後漢の張仲景の著。建安年間傷寒流行して、死者多かりしより著ししものにて、從來漢法醫の金科玉條とせしもの。今傳ふるものは、晉の王叔和の撰次に係ると傳ふれども、唐以後數次の校訂を經て、原著の本意を失せるもののなきにあらず。
しやうかんろんこくじかい 傷寒論國字解【名】〔書〕傷寒論を雲林院了解が和譯・註釋したるもの。六卷。
しやうがゆ 生薑湯・生姜湯【名】㊀生薑をおろし、砂糖をまぜ、熱湯を注ぎて飲むもの。發汗の効あり。㊁しやうがたう(生薑湯)に同じ。
しやうき 正氣【名】心のたしかなること。普通に物事を識別する心。常の精神。ほんき。 用明天皇職人鑑「惡風を吹出し、人の正氣を奪ふ惡虎なり」
しやうき 正忌【名】『正當なる忌日の義』死者の一周忌以後の當月當日。祥月命日。ごしやうき(御正忌)參照。
しやうき 掌記【名】㊀しよき(書記)に同じ。㊁院に置かれ、書記・計算等の事を掌る判任官。大掌記・中掌記・少掌記に分れ、各等更に正・權の二階に分れ、五年に設置、同十年に廢止。㊂修史館の職員の一。事實の分纂校錄・圖書の管理・出納・往復などを扱ひし判任官。一等より八等まであり。
しやうき 祥氣【名】めでたき前兆の氣。陽氣。瑞氣。
しやうき 商機【名】商業上の機會又は機術。
しやうき 匠氣【名】藝術上技巧を弄して、好評を博せんとする心。

しやうき 詳記【名】詳かに記すこと。
しやうき 相器【名】宰相たるに適せる器量。
しやうき 將器【名】將帥(スヰ)たるに適せる器量。
しやうき 牀几・床几【名】支那にて、寢臺と脇息と。
しやうぎ 聖儀【名】〔佛〕そんぎ(尊儀)に同じ。
しやうぎ 象魏【名】㊀もんけつ(門闕)に同じ。㊁『古、支那にて、敎令をここに懸けて示せるよりいふ』けうれい(敎令)に同じ。
しやうぎ 床几・床机・將机・牀几・床木【名】『しやうぎ(牀几)を見よ』㊀古、軍陣・庭上の儀禮などに用ひし腰掛。脚を左右より打違(チガ)へに組み、尻のあたる處には、革を張り、疊みて携帶に便なるやうに作りたるもの。胡床。㊁細長き板の兩端に、やや高き足を著け、數人腰掛け得るやうに造れる臺。

(㊀しやうぎ)

しやうぎ 將棊・象棋・象戲【名】㊀戰陣に擬したる盤面に、駒と稱する小木片を交互に活動せしめて勝敗を決する遊戲。大將棋・中將棋・小將棋等種種あり。今行はるるは小將棋にして、盤面に縱・橫共に九間、卽ち八十一の目を盛り、駒の數は各二十。互に一定の用法を以て相鬪はし、敵の王將を擒にすれば勝つ。この技を行ふをさすといひ、王將を擒にするをつますといふ。㊁次條㊁の略。
將棊の馬【句】次條に同じ。
將棊の駒【句】將棊をさすに用ふる小さき木片。王將(ワウ)・金將(キン)・銀將(ギン)・桂馬(ケイマ)・飛車(ヒシヤ)・角行(カク)・香車(キヤウシヤ)・歩兵(フ)の八種ありて、各その名を漆にて、その表又は表裏に記す。王將・角行・飛車の三種は一箇づつ、金將・銀將・桂馬・香車は二箇づつ、歩兵は九箇づつ二組あり。各その一組づつを分ち、雙方同一なる一定の形に並べおき、一定の制規の下に、交互に移動せしむ。王將は一方のは玉將と記せり。

將棊は早馬、碁は牛の如し【句】勝負の決する遲速は、將棊は奔馬のごとく早く、碁は牛歩のごとく遲し。〔諺語〕
しやうぎ 商議【名】はかり議すること。協議。評議。
しやうぎ 娼妓【名】ぢよらう。うかれめ。遊女。
じやうき 淨几【名】きよらかなる机。
じやうき 上機【名】最上の機根。上根。上機根。(中機・下機に對して) 太平記「上機は、人我(ニン)無相なれば、心に懸ることもなし」
じやうき 上氣【名】㊀のぼせ。けあがり。ぎやくじやう。 當流小栗判官「はつと上氣の紅に、はや男見る目遣ひあり」 ㊁氣のちがふこと。發狂。
じやうき 常軌【名】常に行ふべき道。普通に人の履むべき道。常直。
じやうき 常規【名】通常の規則。常例。 曾我會稽山「鶴が岡の撞鐘を以つて、御番諸役の常規とし」
じやうぎ 上儀【名】朝廷の大禮。大儀。
じやうぎ 情僞【名】まことと、いつはりと。實情とこれを蔽ひ飾ることと。
じやうぎ 常器【名】日用の器物。卽ち椀・茶碗などを云ふ。〔中國・四國の方言〕
じやうぎ 情誼【名】人情の義理。よしみ。交誼。
じやうきう 常久【名】常に久しく續くこと。恒久。
じやうきう 上九【名】易の卦(ケ)にて、陽爻(カウ)の終りに當るもの。
しやうぎがはり 床机替【名】敗軍して、大將先手に出陣する時、その不在の陣中にて、大將に代りて居ること。
しやうぎがへし 床机返【名】敗軍の時、大將の床机の廻に居る人數にて、合戰を盛返し、踏留まること。
じやうきく 上鞠【名】蹴鞠の上手。 禁秘抄「京中上鞠者」
じやうきげん 上機嫌【名】機嫌のよきこと。
じやうきこん 上機根【名】機根のよきこと。 夫子集「上機根にもするは手習(といふ)句に二六十になれど心は若やぎて」

しやうぎさし 將棊指・將棋指・象棋指【名】㊀將棊を指す人。㊁江戶幕府の職制の一。將棊所の部下。十五人扶持乃至十人扶持切米を給せられたり。
しやうきさん 正氣散【名】散藥の一。 源氏冷泉節「おつと肩を正氣散」
しやうぎしや 精義者【名】〔佛〕たんだい(探題)㊀に同じ。
しやうぎせいしゆ 正儀正守【名】謠曲の一。正儀・正守の刑せられんとするに臨みて、その母も、義のために爭ふことを作れるもの。
しやうぎたい 彰義隊【名】慶應四年德川慶喜の水戶に幽せらるるに及び、江戶上野の東叡山に據りて、官軍に抗したる幕臣の一隊。敗れて或は戰死し、或は奧羽に走りたり。
しやうぎだふし 將棊倒・將棋倒・象棋倒・象戲倒【名】㊀將棊の駒を立て並べて、端の一つを推倒せば、悉く次第に倒るること。㊁順次に片端より倒しゆくこと。 當流小栗判官「三郎が首捻切り、殘る奴ばら蹴殺して、將棊倒にせんずもの」 ㊂一方が崩るると共に、全體の崩れ果つること。
しやうぎだふれ 將棊倒・將棋倒・象棋倒・象戲倒【名】將棊だふしの如く倒るること。 傾城色三味線「近所は云合ひし樣に、將棊倒れといふものにかたひしに倒る事、是れ皆傾城狂ひより事起れるなれば」
しやうぎどころ 將棊所・將棋所【名】將棊の技を以て、碁所と相並びて、江戶幕府に仕へし家柄。職員六人ありて、大橋・伊藤の二氏世襲し、二十石・十人扶持を給せられたり。
しやうぎばん 將棊盤・將棋盤・象棋盤・象戲盤【名】將棊をさすに用ふる盤。しやうぎ(將棊)㊀參照。
じやうきふ 上級【名】㊀上位の階級。㊁學校にて、自己の級より上位の級。
じやうきふきくわん 上級機關【名】他の機關に對して、指揮・監督の權ある機關。(下級機關に對して)
じやうきふぎやうせいきくわん 上級行政

機關【名】他の行政機關に對して、指揮・監督の權ある行政機關。(下級行政機關に對して)
じやうきふぎやうせいくわん 上級行政官【名】他の行政官に對して、指揮・監督の權ある行政官。(下級行政官に對して)
じやうきふぎやうせいくわんちやう 上級行政官廳【名】他の行政官廳に對して、指揮・監督の權ある行政官廳。上級行政官府。(下級行政官廳に對して)
じやうきふぎやうせいくわんぶ 上級行政官府【名】前條に同じ。(下級行政官府に對して)
じやうきふぎやうせいちやう 上級行政廳【名】前條に同じ。(下級行政廳に對して)
じやうきふくわんちやう 上級官廳【名】他の官廳に對して、指揮・監督の權ある官廳。上級官府。(下級官廳に對して)
じやうきふくわんぶ 上級官府【名】前條に同じ。(下級官府に對して)
じやうきふくわんり 上級官吏【名】他の官吏に對して、指揮・監督の權ある官吏。(下級官吏に對して)
じやうきふこうきようだんたい 上級公共團體【名】他の公共團體に對して、指揮・監督の權ある公共團體。(下級公共團體に對して)
じやうきふさいばんしよ 上級裁判所【名】他の裁判所の判決に對する控訴又は上告につきての裁判權を有する裁判所。(下級裁判所に對して)
じやうきふじちたい 上級自治體【名】次條に同じ。
じやうきふじちだんたい 上級自治團體【名】じやうきふこうきようだんたい(上級公共團體)に同じ。
じやうきふしん 上級審【名】〔法〕上級裁判所の訴訟の審理。(下級審に對して)
じやうきふせい 上級生【名】同一學校中の上級の生徒。(下級生に對して)
じやうきふだんたい 上級團體【名】㊀他の團體に對して、指揮・監督の權ある團體。㊁じやうきふこうきようだんたい(上級公共團體)

に同じ。(下級團體に對して)
じやうきふ-ちはうぎやうせいくわんちやう 上級地方行政官廳【名】他の地方行政官廳に對して、指揮·監督の權を有する地方行政官廳。(下級地方行政官廳に對して)
じやうきふ-ちはうぎやうせいちやう 上級地方行政廳【名】前條に同じ。
じやうきふ-ちはうくわんちやう 上級地方官廳【名】他の地方官廳に對して、指揮·監督の權ある地方官廳。(下級地方官廳に對して)
じやうきふ-ちはうこうきようだんたい 上級地方公共團體【名】他の地方公共團體に對して、指揮·監督の權ある地方公共團體。(下級地方公共團體に對して)
じやうきふ-ちはうじちたい 上級地方自治體【名】次條に同じ。(下級地方自治體に對して)
じやうきふ-ちはうじちだんたい 上級地方自治團體【名】他の地方自治團體に對して、指揮·監督の權ある地方自治團體。(下級地方自治團體に對して)
しやうぎ-ぶね 將几船【名】昔の船戰の時、大將の乘りし船。「かね。
しやう-きん 賞金【名】賞與の金。褒美の金。
しやう-きん 償金【名】つぐのひに出だす金。損害の賠償金。
しやう-きん 正金【名】㊀げんきん(現金)に同じ。㊁硬貨、特に金銀の貨幣。正貨。
しやう-ぎん 正銀【名】寶永年間、江戸幕府が外國に與ふるために鑄造せし丁銀。
じやう-きん 上金【名】品質上等の黄金。
じやう-ぎん 上銀【名】㊀品質の上等なる銀。㊁佐州銀の一種。
しやうきん-ぎんかう 正金銀行【名】普通の銀行業の外に、特に外國爲替·外國荷爲替及び貨幣の換算交換等を營み、專ら正金の取引を行ふ銀行。
しやうきん-だくわんしようけん 正金兌換證券【名】大藏省正金兌換證券と開拓使正金兌換證券との總稱。
しやうきん-ばらひ 正金拂【名】〔商〕『英 Specie payment』硬貨又は地金にて支拂ふこと。
しやうきん-ひきかへ-わたし 正金引換渡【名】〔商〕『英 Cash on delivery』正金と引換に、賣買の目的物を買主に引渡すこと。(品物引換渡に對して)
しやうきん-まめいたぎん 正金豆板銀【名】寶永年間、江戸幕府が外國に與ふるために鑄造せし豆板銀。
しやうきん-ゆしゆつてん 正金輸出點【名】〔經〕『英 Export point 輸の音、正しくはしゆ』爲替相場が騰貴して、正金輸出の費用以上に達し、正金の輸出を利とするに至りたる限界。(正金輸入點に對して)
しやうきん-ゆそうてん 正金輸送點【名】〔經〕『輸の音、正しくはしゆ』げんきんゆそうてん(現金輸送點)に同じ。
しやうきん-ゆそうひ 正金輸送費【名】『輸の音、正しくはしゆ』正金を輸送するに際して要する費用、即ちその荷造費·運賃·保險料、その他船積陸揚の諸掛及び輸送期間の利子の類。
しやうきん-ゆにふてん 正金輸入點【名】〔經〕『英 Import point 輸の音、正しくはしゆ』爲替相場が下落して、正金輸入の費用以上に達し、正金の輸入を利とするに至りたる限界。(正金輸出點に對して)
しやう-きやう 商況·商兄【名】商業取引の狀況。うれゆき。
しやう-きやう 猖狂【名】たけりくるふこと。
しやう-きやう 粧鏡【名】假粧(ケシヤウ)に用ふる鏡。
しやう-きやう 生薑·生姜【名】生薑(シヤウガ)の根を乾固めたる藥物。芳香性健胃劑とす。
しやう-きやう 聲境【名】〔佛〕五境の一。外物の耳に入りて、これを識別する境界。
しやう-きやう 惝怳【貌】㊀喪心せるさま。うっとり。㊁失望又は失意せるさま。
しやう-ぎやう 正行【名】〔佛〕㊀正しき行。佛道に從ふ修行。(雜行(ザフギヤウ)に對して)㊁あじやり(阿闍梨)の譯語。
しやう-ぎやう 聖經【名】〔佛〕ぶっきやう(佛經)に同じ。平家「聖經に値遇(チグ)せし違緣」
じやう-きやう 常況【名】常に繼續せる狀況。
じやう-きやう 狀況·情況【名】ありさま。やうす。景況。
じやう-きやう 上京【名】京(ミヤコ)へのぼること。きやうのぼり。出京。
じやう-きやう 上卿【名】しやうけい(上卿)㊁に同じ。千載「右大將兼長、春日の祭のじやうきやうに立ちはべりけるに」
じやう-ぎやう 淨行【名】〔佛〕淸淨なる行を修すること。
じやう-ぎやう 上行【名】〔佛〕じやうぎやうぼさつ(上行菩薩)に同じ。
じやう-ぎやう 常行【名】〔佛〕平常の行。不斷の行。
じやうぎやう-こつじき 常行乞食【名】〔佛〕頭陀(ヅダ)の十二行の一。常に食物を乞ひ歩き、與へられし食事に滿足すること。
じやうぎやう-ざんまい 常行三昧【名】〔佛〕常に專ら阿彌陀佛を信じて、その名を唱ふること。狹衣長物語「常行三昧の阿彌陀堂」
じやうぎやう-だう 常行堂【名】『常行三昧を修する堂の義』あみだだう(阿彌陀堂)に同じ。徒然「横川常行堂のうち、龍花院と書ける古き額あり」
じやうぎやう-てん 上行天【名】〔佛〕とうりてん(忉利天)を見よ。
じやうぎやう-ぼさつ 上行菩薩【名】〔佛〕釋迦が靈鷲山(リヤウジユセン)にて、法華經の常不輕品(ジヤウフキヤウボン)を說き終へたる時、大地より涌現して、この經を弘通(グヅウ)せんことを誓ひたりといふ無數の菩薩の中、釋迦よりその宣傳を付囑せられたりといふ四菩薩の上首。日蓮は自らこの菩薩の再生なりと稱して、この宗旨を弘めたり。謠曲(身延)「かく上人の此處に至りたまふは、上行菩薩の御再誕ぞと忝くて」
しやう-きやく 掌客【名】まらうどづかさ(掌客)に同じ。
しやう-きやく 正客【名】㊀正賓(シヤウヒン)の客。㊁茶の湯にて、首席の客。おもなる客。
しやう-きやく 償却【名】つぐのひ返すこと。返濟。償還。
じやう-きやく 上客【名】㊀上座にすわるべき客。貴き客。貴賓。㊁商店にて、優遇すべき客。上華主。「顧客。
じやう-きやく 常客【名】常に來る客、又は
しやうきやく-し 掌客使·請客使【名】王朝時代に、大臣の大饗の時、尊者を迎にゆきて、その前驅などをつとめし使者。
じやう-きよ 常居【名】平常居ること、又そのところ。
しやう-きよく 唱曲【名】歌曲をうたふこと、又そのうた、又そのふし。
じやう-きよく 上局【名】㊀議政官中の一局。議定·參與·史官·書記の職員ありて、政體の創立、法制の制定、機務の決定、三等官以上の銓衡·賞罰、條約の締結、和戰の宣告等を掌りしもの。明治元年閏四月設置、同年九月姑く議政官を止めて、議定·參與·史官を行政官に移し、翌年四月舊制に復し、同五月議政官を廢し、更にこの局と下局とを開きて、議長·副議長·議員の職員を置きしが、同年七月癈せらる。㊁明治七年內務省の翰輸官房の稱。同九年に內局と改稱せり。
じやう-きよく 淨曲【名】じやうるり(淨瑠璃)に同じ。
しやう-ぎゐん 商議員【名】或事項を商議するために設置する委員。
じやう-ぎゐん 常議員【名】常設の議員。
しやうぎゐん-くわい 商議員會【名】商議員のみにて開く會議。
じやうぎゐん-くわい 常議員會【名】常議員のみにて開く會議。
しやうぎ-ゐゐん 商議委員【名】或事項を商議するための委員。
しやうぎゐゐん-くわい 商議委員會【名】商議委員のみにて開く會議。
しやう-く 章句【名】㊀章と句と。㊁文章の句。
章句を尋ぬ【句】學問を活用するを知らず、徒らに字句の穿鑿にのみ拘泥す。
しやう-く 生苦【名】〔佛〕しく(四苦)及びはっく(八苦)を見よ。
しやうく【名】次條を見よ。
しやうくも無い【句】「とてつもない」に同じ。〔遠江國の方言〕膝栗毛「とてつもないといふ詞は、遠州にはしやうく

もないといふ」
しやう-ぐ 聖供【名】三寶を供養する物。神佛の供物。太平記「三千の聖供の運送の道塞がって」
しやう-ぐ 星供【名】〔佛〕本命星(ホンミヤウジヤウ)を供養すること。
しやう-ぐ 餉供【名】〔佛〕佛前又は靈前に食膳を供ふること。
じやう-ぐ 上求【名】〔佛〕じやうぐぼだい(上求菩提)の略。(下化(ゲケ)に對して)
じやう-ぐ 上供【名】佛前又は祖師の靈前に供物を奉ること、又その供物。
しやう-くう 生空【名】〔佛〕がくう(我空)に同じ。
しやう-くう 性空【名】〔佛〕萬有の本性の空無なること。
しやう-くう 性空【名】〔人〕天台宗の高僧。橘善根の子。三十六歲にて出家し、延曆寺に入り、良源の弟子となり、後、霧島山·背振(セフリ)山に苦行し、永延二年播磨國書寫山に登りて、圓敎寺を創建す。圓融上皇その法德を聞きて招きたまひしが、固辭して出でず。京洛の公卿貴女往いて敎を問ふもの多し。晩年通寶山彌勒寺を創して居り、寬弘四年寂す。年九十八。世に書寫上人と稱せらる。
しやう-ぐう 賞遇【名】〔法〕改悛の狀ある囚人に、賞として與ふる待遇。接見及び信書發受の回數、または菜額を增加する類。
じやうぐう-き 上宮記【名】〔書〕聖德太子の國家に對する豫言。今は他書の引文となりて、その一部分の傳はれるのみ。
じやうぐう-しよ 上宮疏【名】上宮太子の法華·維摩(ユイマ)·勝鬘(シヨウマン)の三經に施したまひし義疏。
じやうぐう-たいし 上宮太子【名】〔人〕『用明天皇その聰明を愛して、宮南の上殿に居らしめたまひしより、いふ』しやうとくたいし(聖德太子)に同じ。
じやうぐうたいし-こう 上宮太子講【名】上宮太子の德を講讚する法會。天王寺等にて行はる。
じやうぐう-はふわう 上宮法王【名】〔人〕聖德太子を民間にて、稱へし尊稱。
じやうぐう-わうじ 上宮皇子【名】〔人〕じやうぐうたいし(上宮太子)に同じ。
じやうぐ-ぼだい 上求菩提【名】〔佛〕菩薩の萬行(マンギヤウ)中、自利の方面、即ち上に向ひて、菩提の道を求むること。自身、佛果を求むること。上求本來。(下化衆生(ゲケシユジヤウ)に對して)盛衰記「受戒灌頂と云ふは、上求菩提·下化衆生の祕要なり」
じやうぐ-ほんらい 上求本來【名】〔佛〕『本來は本來の自性(ジシヤウ)即ち衆生の眞性の義』前條に同じ。曲節(西行櫻)「それ春の花は、上求本來の梢にあらはれ」
しやう-くん 賞勳【名】勳功あるものを賞すること。
しやう-くん 湘君【名】〔人〕『湘は即ち湘水。しやうせつ(湘靈)參照』支那の水神。堯の女、名は娥皇。妹女英と共に舜に嫁し、舜の蒼梧に殂するや、妹と共に江·淮の間に殁したりといふ。
しやう-ぐん 晶群【名】〔鑛〕結晶鑛物の雜然と集まれるもの。
しやう-ぐん 將軍【名】㊀一軍を將(ヒキ)ゐる職、又その職にある人。大將。將。㊁王朝時代·武家時代を通じての職制の一。古は臨時の職にて、四道將軍·騎兵大將軍·陸奧鎭東將軍·征越後蝦夷將軍·征狄將軍·左右將軍·撿按兵庫將軍·征西大將軍·征隼人(ハヤト)大將軍·持節大將軍·征西大將軍の如く、その職掌を冠らせて呼び、多くは副將軍と併せ任ぜられ、又、地方軍團の大將軍·將軍·副將軍などもあり、陸奧鎭守將軍に至りて常置職となり、征夷大將軍の名は、源賴朝追討のために平知盛任ぜられ、平氏追討のために源義仲の任ぜられしもの、及び建武中興の際、護良·成良(ナリナガ)兩親王のこの職に任ぜられ、その他征西將軍·征東將軍·鎭守府將軍等の補任あり、これを除けば、鎌倉·室町·江戸の三時代を通じて、武門の主領たる者は、代代征夷大將軍の職名を帶ぶるを例とし、單に將軍とのみ呼ぶこと普通となるに至れり。㊂陸·海軍の將官の人の敬稱。
じやう-ぐん 上郡【名】大寶令の制度における郡の等級の一。十二里以上、十六里以下なるもの、即ち大郡の次、中郡の上に位するもの。(中郡·小郡·下郡に對して)
しやうぐん-おび 將軍帶【名】古の武官が禮服の時に用ひし、金銀にて飾りたる帶。
しやうぐん-かふ 將軍家譜【名】〔書〕京都·鎌倉將軍より、織田信長·豐臣秀吉に至るまで、その世系を、漢文にて記せるもの。七卷。林道春の著。
しやうくん-きよく 賞勳局【名】內閣に直屬する一局。勳位·勳章·年金·記章·褒章等、その他榮典に關する事務及びその銓衡を掌る役所。總裁·書記官·屬の職員を置く。
しやうぐん-け 將軍家【名】㊀征夷大將軍の家柄。㊁征夷大將軍の敬稱。
しやうぐん-しよく 將軍職【名】將軍たる職。
しやうぐん-せんげ 將軍宣下【名】武將が征夷大將軍に任ぜらるるに就きて、朝廷より宣旨を下賜せられしこと。
しやうぐん-づか 將軍塚【名】京都の華頂山上峰にある塚。桓武天皇の御時、平安城主護の神として、八尺の土偶に、鐵甲を裝ひ、弓矢を携へしめて埋めたるもの。事變起らんとする前には、この塚必ず鳴動すといひ傳ふ。保元「はうき星東の方に出で、將軍塚しきりに鳴動す」
しやうぐんづか-さうえい-ゑまき 將軍塚造營繪卷【名】〔書〕將軍塚造營の次第を記したる白描畫の繪卷物。鳥羽僧正の筆と傳ふれども、冷泉爲恭の手に成れるものなるべしといふ。將軍塚繪卷。
しやうぐんづか-ゑまき 將軍塚繪卷【名】〔書〕前條に同じ。
しやうぐん-ぼく 將軍木【名】〔植〕きささげ(梓)に同じ。
しやう-くわ 樟科【名】〔植〕くすくわ(樟科)に同じ。
しやう-くわ 彰化【名】〔地〕臺灣彰化廳の所在地。本島の中部に位し、縱貫鐵道の一要驛たり。
しやう-くわ 漿果【名】〔植〕『英 Berry』閉果の一。外果皮は表皮をなし、內果皮と中果皮とは漿質となれるもの。例へば葡萄·すぐりの實の類。液果。
しやう-くわ 正花【名】〔文〕連俳にて、「花の都」「波の花」などのごとく、譬喩的に用ひたるものならで、眞の花を言ひあらはしたる言葉。
しやう-くわ 唱和【名】しやうわ(唱和)に同じ。
じやう-くわ 上卦【名】六畫の卦の中の、上位にある三つの爻。(下卦(ゲクワ)に對して)
じやう-くわ 情火【名】熱烈なる感情を火に譬へていふ語。
しやう-くわい 商會【名】しやうしや(商社)に同じ。
しやう-ぐわい 象外【名】俗を離れたる境界。常人の居らざる所。塵外。世外。
じやう-くわい 情懷【名】心に思ふこと。おもひ。
じやう-くわい 常會【名】〔法〕毎年又は毎月と、一定して開く會。(臨時會に對して)
じやう-ぐわい 城外【名】㊀城の外。(城內に對して)㊁都を出でて、地方に行くこと。〔古語〕大鏡「ある人、城外やしたまへりしといへば、遠國にはまからず、和泉國にこそ、貫之のぬしの御任に下りて侍り」
しやう-くわう 笙簧【名】笙の笛の舌。
しやう-くわう 聖光【名】〔人〕べんちやう(辨長)に同じ。
じやう-くわう 上皇【名】天皇の讓位後の尊稱。おりゐのみかど。太上皇。太上天皇。
じやう-くわう 城隍·城塩【名】じやうがう(城濠)に同じ。
じやうくわう-でん 常荒田【名】常に荒地として、耕地の中に入れざる田。
じやうくわう-べう 城隍廟【名】支那にて、都邑の鎭守の神を祀れる祠。處處にあり。
じやうくわうみやう-じ 淨光明寺【名】相模國鎌倉郡鎌倉町扇ヶ谷(アフギガヤツ)に在る眞言宗の寺。もとは眞言·天台·律·禪四宗を兼學せり。本尊は足利直義寄付の矢拾地藏。建長三年北條長時の創建。後醍醐天皇の時勅願所となる。
じやう-くわく 城郭·城廓【名】㊀城とくるわと。城と外郭と。㊁城のくるわ。㊂しろ(城)に同じ。
じやう-ぐわし 上菓子【名】品質の上等なる菓子。
じやうぐわし-や 上菓子屋【名】上菓子を製し、又賣る家。
しやう-ぐわち 正月【名】しやうぐわつ(正月)

に同じ。〔古語〕 枕草「頃はしやうぐわち・三ぐわち・四五月」

しやう-くわつ 生活【名】せいくわつ（生活）に同じ。 徒然「生活・人事・伎能・學問等の諸緣を止めよ、とこそ摩訶止觀にも侍れ」

しやう-ぐわつ 正月【名】㊀陰曆にて、年の第一の月。㊁心樂しく遊ぶことの譬。〔俚諺〕「何時も正月」。

正月の三つある時【句】『陰曆にて、閏月ある年は、正月が二度あれども、その三度あることは全く無きによりていふ』永久にその時無き譬。〔諺語〕

唐（から）の正月【句】『せうさい（小歲）を見よ』とうじ（冬至）に同じ。

春（しゅん）王の正月【句】春秋經に見ゆる句。單に正月といふに同じ。

しやうぐわつ-いふく 正月衣服【名】㊀正月に著る衣服。㊁晴の時に用ふる衣服。はれぎ。

しやうぐわつ-がひ 正月買【名】正月の女郎買。 夕霧阿波鳴渡「正月買の大大盡」

しやうぐわつ-ご 正月御【名】せちご（節御）に同じ。

しやうぐわつ-こそで 正月小袖【名】正月に著る小袖。

しやうぐわつ-ことば 正月言葉【名】うはべの上品なる應對のことば。お世辭。 世間女五枚羽子板「折目正して正月詞、嘸御窮屈と存じ」

しやうぐわつ-もの 正月物【名】正月を迎ふる仕度の物品。 浮世床「正月物を拵へたいにも隙がなし」

しやうくわ-の-だい 章華臺【名】『左傳』の昭公七年の條に「楚王成二章華之臺一、願與二諸侯一落レ之」、漢書に「楚起二章花之臺一而黎民散、秦興二阿房之殿一而天下亂」とあり』支那周末に、楚の靈王が營みし王城の臺。東西九町、南北十町、高さ四十丈なりきといふ。章臺。 平家「楚、章華の臺を立てて、黎民散（ち）け、秦、阿房殿を起しては天下亂るといへり」

しやう-くわん 將官【名】陸・海軍の上級の武官、卽ち大將・中將・少將の稱。

しやう-くわん 莊官【名】㊀しやうじ（莊司）に同じ。㊁しやうや（莊屋）に同じ。

しやう-くわん 商館【名】㊀商人の營業を行へる家。㊁外國人の我が國に居住して、貿易を營める家。

しやう-くわん 娼館【名】いうぢよや（遊女屋）に同じ。

しやう-くわん 獎勸【名】くわんしやう（勸獎）に同じ。

しやう-くわん 償還【名】㊀しやうきやく（償却）に同じ。㊁〔法〕債權の目的たる給付をなして、債務を消滅せしむること。

しやう-くわん 掌管【名】くわんしやう（管掌）に同じ。

しやう-ぐわん 賞翫【名】㊀めでもてあそぶこと。めではやすこと。もてはやすこと。㊁あぢはふこと。賞味。翫味。㊂重んずること。尊重。珍重。 太平記「再三感じて賞翫せられ」 ㊃〔哲〕かんしやう（鑑賞）に同じ。

じやう-くわん 上幹・上浣【名】『さんくわん（三澣）を見よ』じやうじゅん（上旬）に同じ。

じやう-くわん 上官【名】上に立つ官人。うはやく。（下官に對して）

じやう-くわん 政官【名】㊀太政官の官人。〔古語〕 源氏「かゝ内記はじやうくわんなれば、おくれてぞ參れる」 ㊁太政官の官人中、辨・少納言・外記（げ）・史生（しじやう）の稱。㊂だじやうくわん（太政官）の略。

じやう-ぐわん 淨官【名】寺院の執事。

じやう-ぐわん 情願【名】情實を申しのべて願ふこと。懇願。嘆願。

しやうくわん-えんしふ 將官演習【名】將校演習旅行の一。參謀總長又は同次長の統裁の下に、高等兵術を實地に講究して、大作戰に關する機務を練習せしむるために、少將及び相當官（時として、大佐及び同相當官を加ふ）を演習員として行ふもの。

しやう-くわんおん 聖觀音【名】〔佛〕『香は、觀の字の韻に引かれて、ノンと發音す』しやうくわんぜおん（聖觀世音）の略。

しやうくわんおん-おけんごま 聖觀音持劍護摩【名】〔佛〕『香は、觀の字の韻に引かれて、ノンと發音す』密教修法の一。

しやうくわんおん-ほふ 聖觀音法【名】〔佛〕『香は、觀の字の韻に引かれて、ノンと發音す』聖觀音を讚講する法會。

しやうくわんおん-ほふ 請觀音法【名】〔佛〕『香は、觀の字の韻に引かれて、ノンと發音す』請觀音經に依りて觀音を祈禱する法。疫病の時行ふ。

しやうくわん-き 將官旗【名】指揮權を帶びたる海軍將官の、軍艦上にある時は檣頭に、陸上にある時は廳下の一艦、又はこの官廳の旗竿に、又公務を帶びて、端艇上にある時は、艇首の旗竿に揭ぐる旗章。大將旗・中將旗・少將旗の三種あり。

しやうくわん-ききん 償還基金【名】公債を起すと同時に、これが償還の準備として特に設定する基金。償還積立金。

しやうくわん-こうさい 償還公債【名】いうきこうさい（有期公債）に同じ。

しやう-くわんしふ 商慣習【名】商業上の慣習。

しやうくわんしふ-はふ 商慣習法【名】〔法〕商業上の習慣法。

しやうくわん-せいきう 償還請求【名】〔法〕手形を所持する者が、その手形を受くる能はざる時、自己にその手形を移轉したる者に對して、その手形の金員の償還を請求すること。

しやう-くわんぜおん 聖觀世音・正觀世音【名】〔佛〕『梵 Āryāvalokiteśvara（阿唎耶婆路枳帝濕縛）の譯語。聖は聖者の義にて、諸觀音の根本なるが故にいふ。又、正は六觀音中、千手・馬頭等の異相なき義といふ』六觀音の一。餓鬼道の能化（げ）にて、左手に、未敷（ふ）蓮花を持ち、右手に大悲施無畏の印を結びて、開ける蓮華の形を示し、一切衆生の妙法蓮華未だ敷（ひら）かざるを、將に敷かんとする意を示せるもの。單に觀世音といふは、これを指す。大慈觀世音。大悲觀世音。聖觀音。 盛衰記「聖觀世音の化身（けしん）なりと云うて隱れぬ」

（しやうくわんおん）

しやうくわん-つみたてきん 償還積立金【名】しやうくわんききん（償還基金）に同じ。

しやうくわんねんがく-きていこうさい 償還年額既定公債【名】〔經〕一定の期限內年年に償還すべき最定額の定まれる公債。

しやうくわんむじゅんび-こうさい 償還無準備公債【名】〔經〕償還の方法定まらず、また償還基金を設けずして募集する公債。

しやう-け 莊家・庄家【名】莊園を支配するため、本主の設置せる事務所。

しやう-け 正化【名】〔佛〕正道を以て、衆生を教化すること。

しやう-げ 象外【名】〔佛〕しやうぐわい（象外）に同じ。 太平記「或は象外の選に當り、俗骨忽ちに蓬萊の香を踏み」

しやう-げ 障礙・障碍【名】〔佛〕しやうがい（障礙）に同じ。 盛衰記「爲二魔王一被二障礙一て、所願成就の者あるべからず」

しやう-げ 生氣【名】『しやうこく（生剋）を見よ』陰陽家にて、十二支を、（正月は子、二月は丑等の順に）十二箇月に配し、八卦の方位にあてて、その人のその年の吉凶を定むる、その吉の方位。

生氣の色【句】生氣の方位に相當する色、卽ち東は青、南は赤の類。ごしき（五色）㊀參照。 公事根源「主上、晝御座（ひのおまし）に出御ありて、生氣の色の御衣を、世のつねの御なほしの上に重ね召さる」

生氣の方（かた）【句】しやうげ（生氣）に同じ。

しやう-げ 蘘牙【名】㊀蘘（かう）の牙（げ）。『形、蘘の牙に似たるよりいふ』しらげたる米。白米。 盛衰記「蘘牙百石」

じやう-げ 淨家【名】〔佛〕じやうどしゅう（淨土宗）に同じ。

じやう-げ 上下【名】㊀うへした。かみしも。又その人。しやうか。 五十年忌歌念佛「蕃國の上下隸もなき貴賤群集に至るまで」 ㊁のぼりと、くだりと。上京と下向と。 冥途飛脚「江戸へも上下三度笠」 ㊂ゆきとかへりと。往返。往復。（片道に對して） ㊃裃（かみ）の肩衣（ぎぬ）と袴と。

しやう-けい 晶形【名】結晶したる形。

しやう-けい 晶系【名】〔鑛〕けっしやうけい（結晶系）に同じ。

しやう-けい 象形【名】㊀かたち。形象。㊁〔語〕しやうけいもんじ（象形文字）の略。

しやう-けい 商計【名】㊀考へ計ること。㊁商業上の計略。商略。

しやう-けい 詳計【名】つまびらかに計ること。

しやう-けい 祥慶【名】めでたきこと。吉祥。

しやう-けい 賞刑【名】褒賞と刑罰と。刑賞。

しやう-けい 上卿【名】㊀支那周の代の王臣中、最上位に在りし卿を、更に二階級に分ちしうちの上位の者。㊁古、禁中の公事（くじ）の時、これを奉行せし官人の上首に位せる者。例へば大臣の奉行する公事ならばその大臣、大納言・中納言の奉行する者ならばその納言。㊂すべて、その日の議事の長者となる者。ないべん（內辨）參照。㊃記錄所の長官。

しやう-けい 祥啓【名】〔人〕けいしよき（啓書記）を見よ。

じやう-けい 上計【名】よきはかりごと。上策。

じやう-けい 上刑【名】おもきしおき。重刑。

じやう-けい 上啓【名】㊀けい（啓）に同じ。㊁古、諸司が、事を錄して、皇太子・皇后・皇太后・太皇太后に呈上せしこと。

じやう-けい 上京【名】じやうきやう（上京）に同じ。

じやう-けい 常經【名】平常從ふべきすぢみち。

じやう-けい 常形【名】定まりたる形。

じやう-けい 情景【名】㊀ありさま。光景。㊁感興と景色と。虛實。

しやうけい-もんじ 象形文字【名】〔語〕『英 Pictograph 又 Hieroglyphic』物の形に象（かた）りたる文字。卽ち意字の一部、繪畫と同樣なるものにて、支那にては六書（りくしょ）の一に數ふ。例へば、☉・☽・馬など。支那の外、エジプト・バビロニヤ・メキシコ等の文字にても、その原始においては、この存在を見たれども、後世に至り、發達して、音字となり了れり。象形。形象。文字。（音標文字に對して）

しやう-げう 聖教【名】〔佛〕『せいけう（聖教）を見よ』㊀佛のをしへ。佛道。㊁佛の教を書きたるもの。經文。 太平記「或は金堂に走り入りて、猛火（みやうくわ）の中に、腹を切りて臥し、或は聖教を抱きて、幽谷に倒れまろぶ」

しやう-げう 正教【名】〔佛〕說く所の正理にかなへる教。

じやう-げう 常曉【名】〔人〕高僧。洛東法琳寺の住職。初、三論宗を學び、後、空海に就きて眞言宗に歸す。承和年中、唐に遊びて密教を受け、阿闍梨となり、歸朝後、朝廷に重んぜらる。傍ら狩野光信に學びて、畫を善くす。貞觀六年權律師に任ぜられ、同八年寂す。

じやうげ-かう 上下向【名】上向と下向と。都へ上り行くことと都より下り行くことと。

じやうげ-しん 上下震【名】〔地〕じやうげどう（上下動）に同じ。（波動震に對して）

しやうげ-せん 障礙山【名】〔佛〕『梵 Vinatāka（毘那怛迦山）の譯語。象鼻山とも譯す』須彌山（しゅみせん）の周圍にありしといふ七金山（しちこんせん）の一。

じやうげ-だな 上下棚【名】四十八棚の一。

しやう-げつ 猖獗【名】㊀たけりくるふこと。猖狂。㊁『猖は披猖の義、獗は蹶に通ず』傾き覆ること。

しやう-げつ 相月【名】しちぐわつ（七月）の異稱。

じやう-けつ 淨潔【名】きよきこと。汚れなきこと。淸淨。

じやう-けつ 城闕【名】㊀支那にて、王城のしるしとして、その門外の兩傍に設け、上に樓觀を作りたる臺。宮闕。㊁みやゐ。宮城。宮闕。

じやうげ-どう 上下動【名】〔地〕『英 Vertical motion』地震の震動する內にて垂直なる部分。水平動よりは一般に微弱なり。上下震。

しやう-げふ 商業【名】『しやう（商）を見よ』㊀財貨の交換を媒介して、需要と供給とを適合せしめ、その價の差額に依りて、利益を收むる業。あきなひ。商法。㊁〔法〕商行物を目的とする業務。

じやう-げふ 常業【名】日常の業務。

しやうげふ-か 商業家【名】商業に從事する人。商人。

しやうげふ-かい 商業界【名】商業の社會。商界。

しやうげふ-がく 商業學【名】商業に關する原理・原則を講究する學問。

しやうげふ-がくかう 商業學校【名】實業學校の一。商業上の智識を養成する學校。高等商業學校・甲種商業學校・乙種商業學校の三種に分つ。

しやうげふ-がくし 商業學士【名】しやうがくし（商學士）を見よ。

しやうげふ-ぎんかう 商業銀行【名】〔商〕商業家の便宜を計るために設立し、主として要求拂の債務を負ひ、短期の資本放下に營業資金を利用する銀行。銀行中の最も普通なるものにて、預金・割引・貸付等を主なる業務とし、爲替・代金取立・公債株券及び地金の賣買・保護預等をも營む。

しやうげふ-くみあひ 商業組合【名】貨物の供給又は生產の人爲的獨占等を目的として組織したる商人の團體。

しやうげふ-くわいぎしよ 商業會議所【名】一定の區域內における特定の商業家の、農商務大臣の認可を得て設立する公法人。議員五十人以下を選擧して、議決機關とし、又議員中より互選せる會頭及び副會頭その他必要なる役員（農商務大臣の認可を要す）及び事務員を置きて、その地方における商工業の發達を圖り、兼ねて商工業上の意見を官廳に開陳し、又その諮問に應答して、經濟行政を補助す。

しやうげふくわいぎしよ-はふ 商業會議所法【名】商業會議所の事項を規定せる法律。明治三十五年の公布。

しやうげふ-けういく 商業教育【名】商業家たるに必須の科目を課し、有爲の商人を養成するを目的とする教育。

しやうげふ-こぎって 商業小切手【名】〔商〕爲替手形と同樣の取引に基きて振出す小切手。必ず一覽拂たるべく、その所持人はその日附より一週間內に呈示して、その支拂を求むるを要する點において、小切手の性質を有し、爲替手形とは同じからず。（銀行小切手に對して）

しやうげふ-さんじゅつ 商業算術【名】商業に關する數の計算法、又はその技術。

しやうげふ-じだい 商業時代【名】〔經〕『英 Commercial age』社會の發達を生產の種類によりて區分したるものの一。農業時代より進步して分業盛んに行はれ、商業ますます發達し、國民の經濟活動が有機的となれる時代。（漁獵時代・農業時代・牧畜時代・工業時代に對して）

しやうげふ-しほん 商業資本【名】商業を營むために用ふる元手。

しやうげふ-しようけん 商業證券【名】〔法〕『英 Commercial paper』有價證券が一の有價物として、商取引の目的物たる場合の稱。

しやうげふ-しようにん 商業使用人【名】〔法〕雇傭契約によりて、主人の商業を補助する支配人・手代・番頭などの類。

しやうげふ-ぜい 商業稅【名】しやうぜい（商稅）に同じ。

しやうげふ-せいさく 商業政策【名】〔經〕『英 Commercial policy』國家又はその他の公共團體が國民經濟の完全なる發達を助成せしめんがため、商業に關して執る方法並びに施設。

しやうげふせいさく-がく 商業政策學【名】〔經〕商業政策を研究する學。

しやうげふ-せいど 商業制度【名】『英 Commercial system』商業・取引に關して設定せられたる一切の制度。

しやうげふ-ちやうぼ 商業帳簿【名】商法の規定により、商人がその財產の狀況を明瞭ならしむるために作成せざるべからざる帳簿。我が國の商法においては、日記帳・財產目錄・貸借對照表の三種とす。

しやうげふ-ちり 商業地理【名】『英 Commercial geography』商業に直接の關係ある地理。卽ち貨物の產出・製造・分配・公換など

の有様を詳かにし、世界各國内又は各國間の交通などを研究するもの。

しやうげふ-つうしん 商業通信【名】〔商〕商業に關して、商人間又は商人と非商人間とに往復する通信。

しやうげふ-てがた 商業手形【名】〔商〕『單に融通のために振出したるものにあらずして、純然たる商取引上の支拂決濟のために振出したるものなる意』こじんてがた（個人手形）に同じ。

しやうげふてき-しよくみんち 商業的植民地・商業的殖民地【名】商業を目的とする植民地。

しやうげふ-とうき 商業登記【名】〔法〕商法の規定によりて登記すべき事項、卽ち商號・未成年者又は妻の商業・後見人の代理商業・商業使用人・支店・會社に關する事を、法定の手續に從ひ、裁判所にて登記すること。商人に關する事項を、一般世人に公示せしむるを目的とするものにして、その手續は非訟事件手續法に定む。

しやうげふ-とうきじよ 商業登記所【名】商業登記を管轄する登記所、卽ち登記の申請をなす者の營業所所在地の區裁判所、又はその出張所。

しやうげふ-とうきぼ 商業登記簿【名】商業登記のために、商業登記所に備へ置く帳簿。商號登記簿・未成年者登記簿・妻登記簿・後見人登記簿・支配人登記簿・合名會社登記簿・合資會社登記簿・株式會社登記簿・株式合資會社登記簿・外國會社登記簿の十種に分つ。

しやうげふ-とし 商業都市【名】商業を以て立つ都市。

しやうげふ-はふ 商業法【名】商法法典を編纂するに、商業を基礎として、商事關係を定むるもの。

しやうげふ-ぼき 商業簿記【名】商業卽ち小賣業・卸賣業・問屋營業等の會計整理に應用したる簿記法。

しやうげふ-ほしふがくかう 商業補習學校【名】實業補習學校の一。商業學校の程度最も低きもの。修身・國語・算術及び商業に關する科目、外國語の類を教授す。

しやうげふ-りよかうにん 商業旅行人【名】〔商〕じゆんくわいはんばいにん（巡回販賣人）に同じ。

しやうげふ-わりびき 商業割引【名】〔商〕ぎんかうわりびき（銀行割引）に同じ。

しやう-けん 商權【名】商業上の權力。商業上の勢力。

しやう-けん 請見【名】謁見を請ふこと。請謁。

しやう-けん 正見【名】〔佛〕八正道の一。苦集滅道の四諦の理に分明なること。

しやう-けん 彰顯【名】けんしやう（顯彰）に同じ。

しやう-けん 聖憲【名】〔人〕眞言宗の學僧。字は定林。和泉國堺の人。紀州根來（ねごろ）山中性院の智喜に密教を學び、後、同院の學頭に推さる。元中九年寂す。年八十六。

しやう-げん 詳言【名】詳かにいふこと。

しやう-げん 象限【名】〔數〕㊀しぶんゑん（四分圓）に同じ。㊁ちよくかく（直角）に同じ。

しやう-げん 莊嚴【名】さうごん（莊嚴）に同じ。 榮花「堂のしやうごん、例のいとめでたし」

しやう-げん 將監【名】近衞府の判官。行幸の時、緌の裝束にて、馬に乘り、弓矢を持ちて、御劍の役に當り、また五月の賭弓（のりゆみ）をも勤めたりといふ。

しやう-げん 正元【名】後深草天皇の御代の年號（紀元一九一九年）。

しやう-げん 昌言【名】盛德の言葉。美言。

しやう-げん 昌原【名】〔地〕朝鮮慶尙南道の東部昌原郡にある都邑。鐵道馬山線の一驛。馬山府の東北五哩餘。肥沃なる一大盆地の中心に位す。

じやう-けん 情見【名】〔佛〕妄情の所見。

じやう-けん 常見【名】〔佛〕二見の一。吾人は今世にて死すれども、後世にまた生き、相續して絕ゆることなしといふ妄見。うけん。（斷見に對して） 愚管記「愚に常見を成じて、怨念（をんねん）を含む」

じやう-けん 常憲【名】定まりたるのり。

じやう-けん 上件【名】前に述べたる事項。前件。

じやう-けん 上肩【名】㊀〔佛〕自分より上位に居る人。（下肩に對して）㊁自己の身の左。（下肩に對して）

じやう-げん 狀元【名】『陔餘叢考に「狀元之名、唐已有レ之、自下武后初試二貢士於殿前一、別中其等第上門下側有二奏狀一、其居レ首者、因曰二狀頭一、亦曰二狀元一」とあり』支那明・淸時代の科擧にて、會試卽ち第二回試驗を通過したる者、更に宮中にて勅題を試みられし上、進士となる時、成績によりて、三等に區別せられし中の、第一等に列せし者。第二等を榜眼、第三等を探花といへり。魁星。

じやう-げん 上弦【名】〔天〕新月後七日ほどにして、月面がその直經を上方に向けて半圓形をなすこと。（下弦に對して）

じやう-げん 上元【名】三元の一。陰曆正月十五日を節日としての稱。この日、小豆粥を煮、庭上の机の上に置きて、天狗を祭るに、その粥凝る時、東方に向ひて再拜長跪して服すれば、年中疫病に罹らずと云傳へたるによりて、古來亥の剋に小豆粥を食ふ風習なり。この日を節日とするは、支那の習俗の移れるなれど、支那には粥の事なし。（中元・下元に對して） げんせう（元宵）・もちがゆ（望粥）・かゆづゑ（粥杖）參照。

じやうげん 淨眼【名】〔佛〕じやうざう（淨藏）㊀を見よ。

しやうげん-ぎ 象限儀【名】しぶんぎ（四分儀）に同じ。

しやうげん-くらまりう 將監鞍馬流【名】くらまりう（鞍馬流）に同じ。

じやうげん-けん 常現圈【名】〔天〕こうけん（恒見圈）に同じ。

しやうげん-さま 將監樣【名】『水軍の總統者向井將監の如く坐り居る意ならんといふ』乘合の釣船などにて、船首の最も前方に坐れるもの。〔德川時代の語〕

じやうげん-じつ 上元日【名】上元の當日。

しやうげん-まい 昌原米【名】朝鮮慶尙南道昌原附近より產する米。

じやうけん-ゐん 常憲院【名】〔人〕とくがはつなよし（德川綱吉）の諡（おくりな）。

しやう-げら【名】『しやうはしやうめんこんがう（靑面金剛）と關係あるか。げらは蜂蛄の義か』庚申の夜、早く寢ぬる者に禍をなすといふ鬼。

じやう-げらふ 上下臈【名】上臈と下臈と。 十訓「ことかきすがきをかくに、拍子ばかりを打ちて、上下臈をいはず、堪能の者に讓りて、かれがうたふを待つなり」

じやうける【動下一自】『じよけるを見よ』たはむる。ふざける。 浮世風呂「こりやこりや、じやうけるな、じやうけるな」

じやうげ-ゐん 淨華院【名】しやうじやうけゐん（淸淨華院）に同じ。

じやうげ-ゑ 上下畫【名】上より見るも下より見るも、同一の形に見ゆる繪畫。囘轉畫。

しやう-こ 庄庫【名】庄園の役所の米庫。鄕遊（きやうゆう） 東鑑「或令レ納二置庄庫一」

しやう-こ 掌固【名】くわじやう（官掌）の唐名。

しやう-こ 掌故【名】古、支那にて、禮樂の故事を掌りし官。

しやう-こ 尙古【名】古の文物をたっとぶこと。

しやう-こ 商賈・商估【名】『周禮の天官大宰に「商賈者通二貨賄一」とありて、鄭玄の註に「行曰レ商、坐曰レ賈」とあり』卽ち行商（ぎやうしやう）と店商（みせあきなひ）となり。あきなふこと、又その人。

しやう-こ 鉦鼓【名】㊀軍中にて用ふる鉦（かね）と太鼓と。㊁雅樂に用ふる樂器の一。多くは靑銅製にて、形圓くして皿の如く、懸垂して打叩くやうにせるもの。 和名「鉦鼓、俗云二常古一」 ㊂佛教のかね。儀式に用ふる靑銅製の樂器。圓形にして、やや深き盆のごとく、臺に吊し、又は座臺を附して、念佛の際叩きて、その調子を取るに用ふ。

（㊂しやうこ）

しやう-こ 彰乎【副】あきらかなるさま。彰。

しやう-ご 正午・晌午【名】『正午は正しき午（うま）の刻の義。晌は晝間の義』晝の十二

時、卽ち正子（しやうし）と次の正子との中央に位する時刻。まひる。うまの時。

しやう-ご 正語【名】〔佛〕はっしやうだう（八正道）を見よ。

しやう-ご 聖語【名】〔佛〕『梵 Āryabhāṣā の譯語』さんすくりっと（梵斯克）に同じ。

じやう-こ 上古【名】㊀おほむかし。太古。 門出入島「物の哀は多けれど、かかる例は上古にも又末代にもあるべからず」㊁歷史上の年代の大體の區分の一。我が國にては、神武天皇より大化の革新まで、西洋にては、有史以後、羅馬帝國の東西分裂まで。

じやう-こ 上戶【名】大寶令の制度における課戶の一。課丁六人以上・八人以下なる戶（こ）。

じやう-こ 城狐【名】次條を見よ。

城狐社鼠【句】『城に棲む狐、社に棲む鼠は、これを除かんとすれば、その城を毀ち、社を損ふに至るがために、人これに手を下さざるよりいふ。韓非子の外儲說右上篇なる桓公と管仲との問答に見え、又、晏子春秋の問上篇、說苑善說篇等にも見ゆ』君側に在る姦邪の臣の譬。

じやう-ご 上戶【名】『經史摘語に世說に上頓、吳志に小戶、白詩に戶大とあるを引きて「按以二飮酒一爲二大小戶一、三國之時語也、今以レ嗜レ酒號二上戶一、以二上頓與一戶大一幷言也」、又、翠雨軒詩話に「唐元稹詩、病瘞酒戶年年減、淸朱彝尊詩、休レ嘲酒戶年來減、勸レ客還能卷二白波一、以上二詩是謂二酒量一也、我俗謂二多飮レ酒者一爲二上戶一、不レ能二多飮一者爲二下戶一、猶下在二漢土一稱中大戶・小戶上也」とあり』酒を好みて飮む人。酒客。酒豪。大戶。（下戶に對して） 豐年間田川「樂み同じ下戶・上戶」

上戶額、盆の前【句】『酒飮の額は熱く、盂蘭盆に近き頃の時候は暑しといふによりていふ』あつきことの譬。〔諺語〕

上戶本性（ほんしやう）違はず【句】「酒飮（さけのみ）本性違はず」に同じ。〔諺語〕

じやう-ご 漏斗【名】㊀金屬又は木などにて製し、上は開き、底は細くすぼまりて管となり、形恰も朝顏の花の如くして、液體を他の器に注入する時、他へ零れ出でぬやうに、注口に差入るる具。㊁穀類を俵に入るるに用ふる器。形は前記のに似、竹などにて編みて造れるもの。

じやう-ご 情語【名】情をふくめたる語。

じやう-ご 常語【名】平常いふ語。

じやう-ご 淨居【名】〔佛〕じやうごてん（淨居天）の略。

しやう-こう 相公【名】さいしやう（宰相）㊀に同じ。 平家「榮盡きて哀來る、と書かれたる江相公の筆の跡」

しやう-こう 商工【名】商業と工業と、又あきうどと職人。

しやう-こう 庄公・莊公【名】莊園と公田と。

しやう-こう 猩紅【名】猩猩緋の色に似たる色。

しやう-こう 症候【名】〔醫〕病氣の際にあらはるる狀態、卽ち熱・痛・腫（はれ）など。これらは、病質によりて大抵一定せる故、診斷上の標準となる。症狀。

じやう-こう 城溝【名】城のほり。城隍。

じやう-こう 成功【名】『事功を成就せしむる意』王朝時代、紀綱廢弛するに及びて、朝廷に造營・造寺など臨事の公用ある場合に、私財を獻じて、これを辨じたる報酬に、官位を授けられしこと。 盛衰記「成功の人を召し附けて、貫主に申しければ」

しやうこう-がくかう 商工學校【名】商業及び工業に關する學科を授くる學校。

しやうこう-きよく 商工局【名】農商務省の一局。商務局と工務局とを合併せられし名稱。各その條を見よ。

しやうこう-くわいぎしよ 商工會議所【名】しやうげふくわいぎしよ（商業會議所）の舊稱。

しやうこう-げふ 商工業【名】商業と工業と。

しやうこうげふ-じだい 商工業時代【名】〔經〕商業時代と工業時代と。商工時代。

じやう-こうし 上工師【名】こうし（工師）を見よ。

じやうこう-じ 淨興寺【名】越後國高田市にある眞宗の寺。歡喜踊躍山と號す。建保五年宗祖親鸞これを常陸國西茨城郡西山内（にしやまうち）村大字稻田に創建せしが、後、兵亂のために信濃國上水内（かみみのち）郡長沼村に移り、また武田・上杉兩氏の戰亂により、越後國春日山麓に移り、慶長中松平忠輝の高田城を築くや、更に今の地に移れり。

しやうこう-じたい 商工時代【名】〔經〕しやうこうげふじだい（商工業時代）の略。

じやうこうじ-は 淨興寺派【名】〔佛〕眞宗の一派。越後國高田市の淨興寺を本山とするもの。もと大谷派に屬せしが、近年故ありて獨立す。

しやうこう-しようじやう 掌工證狀【名】しやうこうれんしふせい（掌工練習生）を見よ。

じやうこう-せい 上工生【名】こうせい（工生）を見よ。

じやうこう-ちやう 上工長【名】こうちやう（工長）を見よ。

しやうこう-ちり 商工地理【名】商工業の方面より記述せられたる地理。

しやうこう-ねつ 猩紅熱【名】〔醫〕傳染病の一。初は突然發熱し、發育期は四日乃至七日なるを常とし、その終頃に至れば、無數の微疹まづ胸部に發して、忽ち全身に擴り、體紅色を呈す。かくて三四日繼續し、癒ゆるに隨ひて、皮膚剝脫す。小兒は最も感染しやし。病毒は、皮膚の碎片等の中に存するものなるが故に、快癒後、第六週に至るまでは、傳染性ありとせらる。

しやうこう-はい 賞功牌【名】しやうはい（賞牌）に同じ。

しやう-こうはふ 商公法【名】〔法〕商法の一。商事に關する公法。卽ち各種の行政法令・刑法・訴訟法中にて、商事に關する法規を一括して呼ぶもの。（商私法に對して）

しやうこう-へい 掌工兵【名】掌工練習生の卒業せる者。

しやうこう-れんしふせい 掌工練習生【名】海軍工機學校の練習生の一。海軍一等乃至三等機關兵及び進級停年を超過したる同四等機關兵にて、規定の資格に適せる者より選拔し、卒業者には掌工證狀を與へて、掌工兵と稱せしむ。

しやうこ-がいしよく-いちらん 尙古鎧色一覽【名】〔書〕鎧の縅毛（をどしげ）を圖說せるもの。二卷。本間百里の著。故實叢書に收む。

しやうこ-がくは 尙古學派【名】〔經〕ちゆうきんは（重金派）に同じ。

しやう-こく 生剋【名】ごぎやう（五行）を見よ。

しやう-こく 生國【名】生れたる本國。

しやう-こく 相國【名】『國政を相（たす）くる人の意』㊀さいしやう（宰相）㊀に同じ。㊁だいじやうだいじん（太政大臣）とさだいじん（左大臣）とうだいじん（右大臣）との唐名。だいしやうこく（大相國）參照。

しやう-ごく 正五九【名】正月と五月と九月と。しやうごくぐわつ（正五九月）參照。

じやう-こく 上刻・上剋【名】昔、一時（いつとき）卽ち今の約二時間を三分したる、その初の時。（中刻・下刻に對して） 丹波與作「刻限は、巳の上刻との定めにて」

じやう-こく 城國【名】㊀城と國と。㊁居城。

じやう-こく 淨國【名】〔佛〕淸淨なる佛國。

じやう-こく 上國【名】㊀邊鄙の地より都の附近を指しての稱。かみがた。近畿。㊁大寶の制にて、國を四等に分ちたる、第二位のもの。山城・攝津などはこれに屬したり。（大國・中國・下國に對して）

じやう-こく 上告【名】㊀上に申し立つること。上申。㊁〔法〕上訴の一。第二審の判決の違法なる點を指摘して、その判決を自己に有利なるやう變更せられんことを、第三審裁判所、卽ち上告裁判所に要求すること。こうそ（控訴）參照。

じやう-こく 讓國【名】じやうゐ（讓位）に同じ。

じやうこく-きかん 上告期間【名】〔法〕上告をなし得る一定の期間。刑事訴訟にては、判決言渡の日より三日間、民事訴訟にては、判決の送達ありし日より一箇月間とす。

しやう-ごくぐわつ 正五九月【名】さんちやうさいげつ（三長齋月）に同じ。 拜擲鑑卯月「正五九月の神參り」

しやう-こくさいはふ 商國際法【名】〔法〕商法の一。商事に關する國際上の法規。

じやうこく-さいばんしよ 上告裁判所【名】上告審の裁判所、卽ち第三審級の裁

判所。控訴院又は大審院。第三審裁判所。

じやうこく-じ 相國寺【名】京都市上京區今出川(ガイマデ)通相國寺門前町に在る臨濟宗の寺。相國寺派の本山。京都五山の第二。永德三年足利義滿の建立に係り、春屋妙葩を開山とす。妙葩その師夢想疎石を第一世とし、自ら第二世となる。爾後しばしば火災に遇ひ、今存するは、天明以後に造立する所なり。七十一番職人歌合「我れ我れも、今朝は相國寺に又めされ候。暮れてぞ歸り候はんずらん」

じやうこく-じ 淨國寺【名】武藏國南埼玉郡柏崎村にある淨土宗の寺。關東十八檀林の一。世に岩槻(イハツキ)の淨國寺と呼ばる。天正十五年總譽淸巖の建立。檀越は岩槻城主太田氏房。本尊は安阿彌作の阿彌陀の三尊。

しやうこくじ-は 相國寺派【名】臨濟宗の一派。春屋妙葩(普明國師)を派祖とし、相國寺を本山とするもの。

じやうこく-しん 上告審【名】〔法〕上告の審判。第三審。(控訴審に對して)

じやうこく-じやう 上告狀【名】上告裁判所に差出す上告の書狀。じやうこくよなふきん(上告豫納金)參照。

じやうこく-しゆいしよ 上告趣意書【名】上告申立人が、その上告の趣意を記して、上告を申し立ててより五日以內に差出すべき文書。

じやうこく-にん 上告人【名】〔法〕民事訴訟の判決に對して、上告をなす人。

じやうこく-まうしたて-しよ 上告申立書【名】上告裁判所が上告をなすため、原裁判所に差出す書狀。

じやうこく-まうしたて-にん 上告申立人【名】〔法〕刑事裁判所の判決に對して、上告の申出をなす人。

じやうこく-よなふきん 上告豫納金【名】〔法〕上告の際、その上告人が、上告狀に添へて、上告裁判所に必ず豫納すべき金。じやうこくじやう(上告狀)參照。

じやうこ-し 上古史【名】上古の事蹟を記せる歷史。

しやうこ-しゆぎ 尙古主義【名】㊀古代の文物を尙び、これに則らんとする主義。㊁〔文・美〕ぎこしゆぎ(擬古主義)に同じ。

じやうご-たけ 上戸茸【名】〔植〕『この茸を盃に持添ふれば、酒悉く茸に吸入れらるるよりいふとぞ』茸の一種。土佐國の山中に產し、形、椎茸(シヒタケ)に似たり。

しやう-こつ 掌骨【名】〔醫〕『羅Ossa metacarpi』腕骨と指骨との間に羅列して、手掌を成す五箇の小骨。

しやうご-つうはう-れう 正午通報料【名】電鈴線を郵便電信局又は電信局に接續して、正午時の通報を受くる者の納むる料金。

じやう-こつじき 常乞食【名】〔佛〕じやうぎやうこつじき(常行乞食)に同じ。

じやうご-てん 淨居天【名】〔佛〕『梵 Śuddhāvāsadeva の譯語』色界(シキカイ)四禪天の一なる第四禪天中の最上に位するもの。欲界第九品の煩惱を解脫(ゲダツ)して、不還果(フゲンクワ)を得たる聖者のみの生ずる處にして、故に不還天の別稱あり。又これに無煩天・無熱天・善見天・善現天・色究竟(シキクキヤウ)天の五等の差別あり。淨居。榮花「淨居天變じて、生・老・病・死を現じて見え奉り」

しやう-こと 仕樣事【名】せうこと(爲事)の訛。膝栗毛「りんきでも始られえ、どうもしやうことがねえはさ」

しやうこ-ねんぺう 尙古年表【名】〔書〕古器・古像・古碑・古文書等の年表。雄略天皇の元年より嘉永二年に及べり。七卷。山本隱倫の著。藤井貞幹・栗原柳庵等の考證を附するを以て、尙古學者に便する所多し。

じやう-ごは 情強【名】ごうじやう(强情)に同じ。狂言(宗論)「きやつは、家例の情ごはでおぢやる。道すがら爭ひませらず」

しやう-ごふ 正業【名】〔佛〕はっしやうだう(八正道)を見よ。

じやう-こふ 成劫【名】〔佛〕しこふ(四劫)を見よ。水鏡「世のはじまる時をば成劫と申して、この中劫と申しつる程を、二十すぐなり」

成劫の世界【句】〔佛〕こふじやうせかい(劫成世界)に同じ。

じやう-ごふ 成業【名】學問を世襲(セシフ)せる家の人。(非成業に對して)〔平安朝時代の語〕名目抄「成業、ジヤウゴフ」

じやう-ごふ 淨業【名】〔佛〕淸淨なる業(ゴフ)。善業(ゼンゴフ)。

しやう-こん 掌根【名】〔植〕『英Palmate root』塊根の更に變形して、恰も掌狀をなせるもの。蘭の種類にこれを認む。

しやう-こん 傷痕【名】傷のあと。きずあと。傷痍。

しやう-ごん 莊嚴【名】さうごん(莊嚴)に同じ。榮花「堂のしやうごん例のいとめでたし」

しやう-ごん 聖言【名】〔佛〕しやうご(聖語)に同じ。

じやう-こん 上根【名】〔佛〕すぐれたる根機。上機根。上機。(下根に對して)

じやう-こん 淨根【名】〔佛〕淸淨なる六根。

じやう-こん 上紺【名】上等の紺色。

じやう-ごん 淨嚴【名】〔人〕眞言宗の僧。俗姓は上田、字は覺彥、瑞雲山人・焉求山人・盧白堂等の號あり。柳澤保明及び將軍綱吉の保護を得、江戸本鄕湯島に靈雲寺を建て、貞享十五年寂す。年六十四。安祥寺流の聖教を書改めて、新說明を加へしにより、世にその流を新安流と稱す。

じやうこんがう-ゐん 淨金剛院【名】てんりゆうじ(天龍寺)を見よ。

しやうごん-ろん 莊嚴論【名】〔書〕だいじようしやうごんろん(大乘莊嚴論)の略。

しやう-こり 性懲【名】懲ること。

性懲も無し【句】少しも懲りず。性(シヤウ)も懲も無し。雙生隅田川「やあ性懲もなきお客達、今度の馳走の獻立見よと、景逸を水の深みへ投込み」

しやうご-ゐん 聖護院【名】『増譽、聖體護持の功勞によりて、白河上皇より住持せしめられし寺なるによりて、この名に改む』京都市上京區聖護院町にある天台宗の寺。同宗寺門派の大本山。世世法親王の住職せし所にて、同派三門跡の一たりき。智證大師の開基。中興の祖なる増譽僧正、白河上皇の熊野行幸に先達を命ぜられ、その賞として、この寺に住持せし以來、代代三井寺の長吏、熊野三山の別當に兼知せられ、また修驗道(シユゲンダウ)を兼ね、天台宗に屬する山伏を司管す。古稱、常光院。俗稱、森御殿。

しやうごゐん-かぶら 聖護院蕪菁【名】京都聖護院町原產の蕪菁。近江蕪菁の改良せられしものにて、根の形扁平・肥大、徑八九寸に及ぶ。羹食・鹽藏共に佳なり。

しやうごゐん-だいこん 聖護院大根【名】京都聖護院町原產の大根。方領大根の改良せられしものにて、根は楕圓形にして、根冠淡綠色を帶び、肉質脆軟にして、甘味に富み、羹食に適す。

しやうごゐん-の-みや 聖護院宮【名】法親王にして、聖護院の住職たりし方。

しやうごゐん-の-もり 聖護院森【名】〔地〕京都聖護院の境內にある森。古木生ひ茂りたり。近頃河原達引「心の內の暇乞、あすの曙となりふりも、やつす姿の女夫(トモ)づれ、名を繪草紙にしやうごゐん森をあてどに辿りゆく」

しやうごゐん-もんぜき 聖護院門跡【名】しやうごゐん(聖護院)を見よ。

しやう-さ 將佐【名】㊀將軍と佐官と。㊁近衞の中將・少將及び衞門佐(ヱモンノスケ)・兵衞佐(ヒヤウヱノスケ)の總稱。

しやう-ざ 商座【名】現代の株式と同一なるもの。起原につきては、諸說あれども、足利時代に、各地の守護、神社・佛閣等に商業の座を設きて專賣を許可し、座外の者には、一般に商業を禁じたるに基けるがごとし。

しやう-ざ 上座【名】じやうざ(上座)㊀に同じ。

じやう-ざ 常坐【名】〔佛〕常に趺坐(フザ)して、橫臥せぬこと。

じやう-ざ 常座【名】能舞臺の仕手柱(シテバシラ)より少し進み出でたる所。仕手の舞臺に入る時、止まりて謠ひ出す場所。

じやう-ざ 上座【名】㊀かみざ。かみくら。上席。(下座に對して)㊁〔佛〕『衆僧の上席を占むるよりいふ。梵 Sthavira(悉替那)の譯語。上に更に人なき意にて、長老とも譯す』三綱の一。多く法臘(ホフラフ)を積みて才ある者任ぜられて、寺主・都維那(ツヰナ)と共に寺務を執るもの、又その下に權上座もありたり。座首。座元。(中座・下座に對して)㊂〔佛〕寺院にて、食堂(ジキダウ)に安置せる文殊菩薩又は賓頭盧(ビンヅル)尊者の像。聖僧(シヤウソウ)。

じやうざ 上座【名】〔地〕筑前國の舊郡の一。明治二十九年下座・夜須(ヤス)の二郡と倂せて、朝倉郡を立つ。

しやう-さい 障塞【名】とりで。保塞。

しやう-さい 詳細【名】くはしきこと。つぶさ。委細。

しやう-さい 淸齋【名】〔佛〕淸淨なる持齋。

しやう-ざい 掌財【名】㊀財貨を掌ること。㊁〔佛〕ふうす(副寺)に同じ。

しやう-ざい 漿劑【名】〔醫〕『羅 Mucilago』亞剌比亞護謨・サレップ根・澱粉・糊などのごとき植物質の物を、水にて煮て膨脹せしめ、粘液狀にしたるもの。多くは刺戟劑の包攝用に供せらる。

じやう-さい 攘災【名】わざはひをはらひのくること。

じやう-さい 常歲【名】平素のとし。

じやう-さい 上裁【名】㊀高貴なる人の裁決。盛衰記「被レ下宣命並御下文云、宜三待下聖斷上仰二上裁一」㊁天皇の御裁可。勅裁。天裁。

じやう-さい 上顎【名】〔動〕『英 Mandible』節足動物の口器の上部に位するもの。

じやう-さい 城塞・城砦【名】しろと、とりでと。

じやう-ざい 淨財【名】㊀寺に寄付する金錢。㊁慈善の義捐(ギエン)金。

じやうざいくわう-ゐん 常在光院【名】足利時代に、今の京都智恩院の所在地にありし禪宗の寺。華頂山と號し、五山長老の退隱の地として、當時に聞えたり。

じやうさい-もん 上西門【名】平安城の大內裡外郭の十二門以外の掖門。西面に在りて、東門院と相對し、右衞門府これを護りたり。平治「上皇、…仁和寺の方へこそ思し召したためとて、…紛れ出でさせおはします。上西門の前にて、北野の方を伏し拜ませたまひて、それより御馬に召されけり」

じやうさいもん-ゐん 上西門院【名】〔人〕二條天皇の准母。鳥羽天皇の第二の皇女。御名は恂子。文治五年崩ず。壽六十四。

じやうざい-りやうじゆせん 常在靈鷲山【名】〔佛〕『法華經の壽量品の偈(ゲ)に「於二阿僧祇劫一常在二靈鷲山及餘諸處一衆生見二劫盡大火所レ燒時、我此土安穩、天人常充滿」とあるに本づく』釋迦の肉身は入滅すとも、その報身、卽ち實體はその法華經を說きし地なる印度の靈鷲山にありて、永久に說法すべきこと。榮花「壽量品の常在靈鷲山の有樣、すべていふべきにあらず」

じやうざい-りやうぜん 常在靈山【名】〔佛〕前條の略。謠曲(舍利)「常在靈山の秋の空」

しやう-さう 傷創【名】さうしやう(創傷)に同じ。

しやう-さう 傷愴【名】いたみ悲しむこと。

しやう-さう 尙早【名】未だ早きこと。時機の熟せぬこと。

しやう-さう 將曹【名】近衞府の主典(サクワン)。

しやう-さう 生相【名】〔佛〕四相の一。未起の有爲法を現在に生ぜしむる法。

しやう-さう 章草【名】漢字の書體の隸書をくづして、なほ隸の筆意を失はざるもの。支那後漢の章帝これを創む。

しやう-さう 庄倉【名】庄の租稅を貯ふる倉。

しやう-さう 正倉【名】古、正稅を納めたる官倉。

しやう-ざう 正像【名】〔佛〕正法と像法と。謠曲(東岸居士)「正像すでに暮れて、末法に、生(シヤウ)を受けたり」

しやう-ざう 正藏【名】しやうざうゐん(正藏院)の略。

しやう-ざう 性相【名】〔佛〕佛敎にて、一切萬有の本體と現象とを分ち顯はす語。性は理性・本性等と熟して本體をいひ、相は事相・相貌等と熟して現象をいふ。

しやう-ざう 尙藏【名】㊀藏めおくことを尙(ツカサド)ること。令「尙藏一人、掌二神璽・關契・供御衣服・巾櫛・服翫…賞賜之事一」㊁くらのかみ(尙藏)に同じ。

しやう-ざう 掌藏【名】くらのかみ(掌藏)に同じ。

じやう-さう 情想【名】感情と思想と。

じやう-さう 情操【名】〔哲〕『英 Sentiment』智的作用の最も複雜なる關係に伴ひて生ずる感情。卽ち情緒の更に發達したるもの。智的情操・倫理的情操・美的情操(卽ち趣味)・宗敎的情操等に分類す。

じやう-さう 常操【名】常に操守する道。

じやう-ざう 淨藏【名】〔人〕㊀『法華經の妙莊嚴王本事品に出づ』淨眼(ジヤウゲン)と共に過去の世の光明莊嚴國の妙莊嚴王の王子にして、早く佛道を修めて神通力を得、邪見なる父王を救はんがために、種種の奇瑞を以て、父王の心を饒さしめ、終に佛に就きて、法華の利益を得しめたりといふもの。太平記「これ又善性・善子の珊提嵐(サクダイラン)國に仕へし孝にも過ぎ、淨藏・淨眼の妙莊嚴王を化(ケ)せし功にも越えたれば」㊁天台宗の高僧。三善淸行の第八子。天曆年間八阪寺(ヤサカデラ)に住し、咒を以て傾斜せる塔を起し、波斯(ハシ)國より到れる僧の宿痾を治す。康保元年洛東雲居(ウンゴ)寺に寂す。年七十四。敬ひて淨藏貴所といふ。

じやうざう-き 淨藏忌【名】十一月二十一日、京都東山雲居(ウンゴ)寺にて、開祖淨藏のために修する忌。

じやうざう-きしよ 淨藏貴所【名】〔人〕じやうざう(淨藏)㊁を見よ。太平記「淨藏貴所を請じ奉り」

しやうざう-まつ 正像末【名】〔佛〕正法と像法と末法と。ごごひやくねん(五五百年)・さんじ(三時)參照。謠曲(現在七面)「滅後の弘經(グキヤウ)も、正像末に對して、今、後五百歲(コゴヒヤクサイ)の時なれば」

しやうざうまつ-わさん 正像末和讚【名】〔書〕三帖和讚の一。正像末の三時に於ける衆生の機根を說明し、末法の衆生が彌陀・釋迦二佛の慈悲に由りて救濟せらるることを讚歎せる四句百十六首の和讚。眞宗の祖師親鸞の作。

しやうざう-りつぶん 正藏率分【名】古、每年大藏省に納むる調・庸及び雜物の十分の二を、正藏率分所に別納して、公用に倂せしこと。

しやうざうりつぶん-じよ 正藏率分所【名】『正藏院の內なる率分所の義』りつぶんしよ(率分所)に同じ。

しやうさう-ゐん 正倉院【名】『しやうさう(正倉)を見よ』㊀古、大藏省以下諸國の國府(コフ)・諸寺等にありて、倉庫の數多並列したりし一區域。㊁大和國奈良市東大寺の境內、大佛殿の西南にある校倉(アゼクラ)。東大寺の寶藏にして、大佛に寄進せられし珍寶及び供養・儀式等に用ひし器具を收藏せし所。もと單に正藏といひ、古は一間四方の校倉二箇並び立ちしによりて雙倉といひ、後、雙倉を連結して、新に中間に一倉を加へしより、又三倉の稱あり。間口十八間餘・奧行五間餘・高さ五間餘あり。三倉の中、北倉と中倉とは、代代勅封の寶藏とし、南倉は綱封藏とて、東大寺三綱の管掌に屬せしが、明治維新後、三倉共に勅封となり、帝室の直轄に歸し、今、帝室博物館總長の主管たり。もとこの寶藏の所在地域を正藏院といひしが、鎌倉時代頃より正倉院といひ、後には寶藏そのものの名稱たるに至りしもののごとし。

しやうざう-ゐん 正藏院【名】㊀前條㊁を見よ。㊁大藏省の正倉院。

しやうさうゐん-ぎよもつ 正倉院御物【名】正倉院に納められたる奈良朝の帝室の御寶物。大部分は聖武天皇の御遺物に屬す。天平勝寶八年天皇の御遺物を光明皇后より奉獻の願文と共に東大寺に獻ぜられ、勅封として、正倉院に保存せられしが、爾來千餘年の間に、少しく散逸せり。されど、猶數千點の寶物を今日に傳へて、當時の文化を知るに最上の資料たり。

しやう-さく 牀簀【名】ゆかとしたるすのこ。

しやう-さく 匠作【名】しゆりしき(修理職)の唐名。

じやう-さく 城柵【名】城のさく。さく。しろ。とりで。

じやう-さく 上策【名】最上のはかりごと。上計。(下策(ゲサク)に對して)

じやう-さく 上作【名】㊀よきこしらへ。出來のよきもの。上でき。(下作(ゲサク)に對し

あいうえお　かきくけこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの　はひふへほ　まみむめも　やゆよ　らりるれろ　わゐゑを

て） ㊁穀物の豐作。豐稔。

しやうさく-かん 將作監【名】木工寮(ﾓｸﾚｳ)の唐名。

しやうさく-かん 匠作監【名】修理職(ｼｭﾘ)の唐名。

しやうさく-けいし 匠作計史【名】修理筭師(ｼｭﾘｻﾝｼ)の唐名。

しやうさく-けいし 將作計史【名】木工筭師(ﾓｸｻﾝｼ)の唐名。

しやうさく-しゆぼ 將作主簿【名】木工屬(ﾓｸｻｸﾜﾝ)の唐名。

しやうさく-じよう 將作丞【名】木工允(ﾓｸﾉｼﾞﾖｳ)の唐名。

しやうさく-じよう 匠作丞【名】修理進(ｼｭﾘﾉｼﾞﾖｳ)の唐名。

しやうさく-せうゐん 匠作少尹【名】修理亮(ｼｭﾘﾉｽｹ)の唐名。

しやうさく-たいしやう 將作大匠【名】木工頭(ﾓｸﾉｶﾐ)の唐名。

しやうさく-たいゐん 匠作大尹【名】修理大夫(ｼｭﾘﾉﾀﾞｲﾌ)の唐名。

じやうさく-もの 上作物【名】上出來の物。

しやうさく-ろくじ 匠作錄事【名】修理屬(ｼｭﾘｻｸﾜﾝ)の唐名。

じやうざ-さんまい 常坐三昧【名】〔佛〕常坐して三昧に入ること。天台宗にて、常行三昧・半行半坐三昧・非行非坐三昧と共に、四種三昧の一とするもの。

じやうざ-さんまいだう 常坐三昧堂【名】じやうぎやうだう(常行堂)に同じ。

じやう-さし 狀差【名】柱などに掛けて、來狀を差しおく具。手紙ばさみ。

じやうざ-せき 上座石【名】築山に据うる、厚くして扁き石。くわんおんせき。

しやう-さつ 詳察【名】つまびらかに觀察すること。審察。

しやう-さつ 省札【名】みんぶしやうさつ(民部省札)の略。

しやう-ざふ-にぎやう 正雜二行【名】〔佛〕正行と雜行との併稱。

じやう-さま 上樣【代】客人に差出だす勘定書などに、客人の名の代りに用ふる敬稱。うへさま。上。

しやう-さん 生產【名】せいさん(生產)に同じ。盛衰記「生產より成人に至るまで、終に物言ふ事なし」

しやう-さん 商算【名】しやうげふさんじゆつ(商業算術)の略。

しやう-さん 賞讚【名】ほめたたふること。讚賞。稱讚。

しやう-さん 商山【名】〔地〕支那陝西(ｾﾝｾｲ)省商州(西安府の東南)の東南に在る高峰。商洛山ともいふ。

商山の四皓(ｼｺｳ)【句】『四人共に八十餘歲にして、鬚眉皓白なりしによりて、四皓といふ』支那漢の代に、高祖の士を侮慢するに快からず、仕へずして、商山に隱棲せし四人の老學者、卽ち東園公・夏黃公・甪里(ﾛｸﾘ)先生・綺里季。後、高祖の、盈太子を廢し、趙王如意を立てんとせし時、太子、張良の敎によりて、書を爲り、厚くこれを招きしに、共に山を出でて、太子の臣となりしより、廢立の事止みたり。國性爺後日合戰「琴高は鯉、商山の四皓は龍の頭に乘る」

じやう-さん 常餐【名】日常の食事。常饌。

じやう-さん 常山【名】〔地〕支那直隸省定州曲陽縣の西北にある山。漢の宣帝以後、明以前には、これを五岳の一なる恆山なりとして、祭祀を行へり。

常山の蛇勢(ﾀﾞｾｲ)【句】『常山の蛇は、兩頭ありて、その一頭に觸るれば、他の一頭至り、その中に觸るれば、兩頭共に至る由、孫子の九地篇に見えたるに本づく』㊀首尾相應じて、互に相助くる姿勢。常蛇(ｼﾞﾔｳﾀﾞ)。「首尾相衞る」「首尾俱に救ふ」及び「長蛇(ﾁﾔｳﾀﾞ)の陣」參照。㊁〔文〕文章の首尾相應ずること。

じやう-ざん 常山【名】㊀〔人〕ゆあさじやうざん(湯淺常山)を見よ。㊁〔植〕こくさぎ(小臭木)に同じ。

しやう-さんかう 正三綱【名】〔佛〕上座・寺主・都維那(ﾂｲﾅ)の總稱。(權(ｺﾞﾝ)三綱に對して)

じやうざん-きだん 常山紀談【名】〔書〕天文・永祿の頃より江戶幕府の初頃までの戰國武士に關する紀事、四百七十條を集錄せるもの。十五卷。湯淺常山の著。

じやう-さんげ 常懺悔【名】〔佛〕「念念稱名常懺悔」を見よ。

しやうさん-し 正算司【名】大藏省の一司。正・大令史・中令史・少令史等の職員を置きたり。明治四年設置、同八年廢止。

しやう-し 尙子【名】總領の子。長子。

しやう-し 章幟【名】定紋のある幟(ﾉﾎﾞﾘ)。

しやう-し 尙齒【名】『齒(ﾖﾜｲ)を尙(ﾄｳﾄ)ぶ義』老人を尊敬すること。

しやう-し 嘗試【名】『嘗も試むる義』試みること。ためすこと。

しやう-し 省試【名】㊀支那の科擧の二回目の試驗、卽ち一回目の鄕試を通過して、擧人の資格を得たる者を、京師に集めて試みしもの。これを通過すれば、進士の號を授けらる。但し唐・宋時代の名稱にて、後世、會試と改稱せり。㊁王朝時代の文官任用法の一。大學の試問に合格したる擧人と、國學の試問に合格したる貢人とを集めて、式部省にて行ひし試驗。秀才・明經・進士・明法及び筭道に分ち、及第せる者には、成績に隨ひて、出仕を定められたり。

しやう-し 將士【名】大將と士卒と。

しやう-し 將指【名】『將は他の指を統率する義。左傳の定公十四年の條に「闔盧傷 將指」とありて、杜預の註に足の大指の斬らるるをいふとあり、又疏には、足には大指を、手には中指を將指とする由見ゆ』手の中指、また足の親指。

しやう-し 賞詞【名】㊀ほめことば。賞辭。㊁警察賞與の一。言葉にて賞むるもの。最も輕き功勞ありし者に與ふ。

しやう-し 賞賜【名】褒美に物を賜ふこと、又その物。

しやう-し 生死【名】㊀せいし(生死)に同じ。㊁〔佛〕しやうじ(生死)に同じ。

しやう-し 殤死【名】わかじに(若死)に同じ。

しやう-し 匠司【名】海軍に屬して、艦船・汽機等の兵器の製作に從事せし奏任の技術官。初は、大・中・少の三等、後には大・少・權大・權少・補の五等に分れたり。明治五年に設置、同十九年に廢止。

しやう-し 匠氏【名】しやうじん(匠人)に同じ。

しやう-し 匠師【名】宮內省內匠(ﾀｸﾐ)寮の舊職員の一。奏任の技術官にて、明治十九年に設置、同二十二年に廢止。

しやう-し 正士【名】〔佛〕ぼさつ(菩薩)㊀の譯語。

しやう-し 正子【名】〔天〕『正しき子(ﾈ)の刻の義』某地點において、太陽がその子午線より百八十度隔れる地點の子午線を經過する時刻、卽ち正午と次の正午との中央に位する時刻。眞夜中(ﾏﾖﾅｶ)。(正午に對して)

しやう-し 商子【名】〔書〕主として富國・强兵の政策を論じたるもの。もと二十九篇。現今のものは二十六篇にして、而も目錄のみにて、文なきもの二篇あり。支那の周代の商鞅の著といへども疑し。

しやう-じ 生死【名】〔佛〕生(ｼﾔｳ)・老・病・死の四苦の終始。死生。

生死出離【句】〔佛〕「生死を離る」に同じ。太平記「悲しいかな。未來無窮の生死出離、いづれの時ぞ」

生死卽(ｿｸ)涅槃(ﾈﾊﾝ)【句】〔佛〕生・老・病・死の四苦と、涅槃卽ち四苦を離れたる悟境とは、互に相容れざるが如くにして、而も生死の迷界を精神的に解脫したる佛の心境より觀察すれば、生死の差別相を離れて、涅槃なく、涅槃の平等心を離れて、生死なし。「煩惱(ﾎﾞﾝﾅｳ)卽菩提」參照。〔諺語〕秋夜長物語「天上の五衰を聞きて、淨土を求むる時は、生死卽涅槃となる」

生死長夜(ﾁﾔｳﾔ)【句】〔佛〕長く生死の迷界に沈淪して、これを脫する智慧の光明を有せざることを、闇黑なる長夜に譬へていふ語。生死長夜の長き夢。盛衰記「悲しいかな。凡夫たることを。痛しいかな。二空の滿月を備へながら、生死長夜の迷情たることを」

生死長夜の長き夢【句】前條に同じ。謠曲(安宅)「生死長夜の長き夢驚かすべき人もなし」

生死長夜の夢【句】〔佛〕前條に同じ。

生死に住す【句】〔佛〕生死流轉(ﾙﾃﾝ)の苦界を脫すること能はず。(「生死を離る」に對して)

生死に離る【句】〔佛〕「生死を離る」に同じ。平家「この界の衆生の生死に離るることを惜しみ」

生死に輪廻(ﾘﾝﾈ)す【句】〔佛〕「生死輪廻」に同じ。平家「妻子は、無始曠劫よりこのかた、生死に輪廻するきづななるが故に」

生死に流轉(ﾙﾃﾝ)す【句】〔佛〕前條に同じ。守覺「生死に流轉するは、せんずる所、煩惱にひかへられて、今にかくてうき世を出でやらぬにこそ」

生死の海【句】〔佛〕生死流轉(ﾙﾃﾝ)の苦しみの深きを、海に譬へていふ語。生死(ｼﾔｳｼﾞ)の海。「邪見の山」參照。謠曲(入鹿)「西海の浪にただよひ、生死の海に沈淪せり」

生死の海を渡る【句】〔佛〕流轉(ﾙﾃﾝ)の苦海を渡りて、悟の彼岸に到り著かんとす。謠曲(船橋)「生死の海を渡るべき船橋を作らばや」

生死の岸【句】〔佛〕生死の海の岸。此岸は迷界、彼岸は悟境卽ち涅槃(ﾈﾊﾝ)。

生死の到來【句】〔佛〕『生は輕く添へたる語』死ぬべき時の來ること。徒然「われらが生死の到來、ただ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮す」

生死の眠【句】「生死の闇(ﾔﾐ)」に同じ。平家「後夜(ｺﾞﾔ)・晨朝(ｼﾞﾝﾃｳ)の鐘の聲には、生死の眠を覺すらんとも覺えたり」

生死の淵(ﾌﾁ)【句】〔佛〕生死の苦しみの、人を沈むるを淵に譬へていふ語。

生死の道【句】〔佛〕生死流轉(ﾙﾃﾝ)の道程。謠曲(野宮)「神風や伊勢の內外(ﾅｲｹﾞ)の鳥居に出入る姿は、生死の道を、神は受けずや思ふらんと」

生死の暗(ﾔﾐ)【句】〔佛〕煩惱のために、轉迷開悟の光明に接せず、生死流轉(ﾙﾃﾝ)の苦界を脫する能はざること。生死の眠。長夜の夢。榮花「佛日すでに涅槃の山に入りたまひなば、衆生、生死の暗に惑ふべし」

生死は車の輪の如し【句】〔佛〕『智度論の五に「生死輪載レ人、諸煩惱結業、大力自在轉、無二人能禁止一とあり』衆生(ｼﾕｼﾞﾔｳ)の生死に流轉(ﾙﾃﾝ)する樣は、車輪の廻轉するが如く、始なく終なし。〔諺語〕水鏡「生死は車の輪の如くにして、始まりては終り、終りては始まり、いつを始、いつを終といふことあるべからず」

生死本來佛性(ﾌﾞｯｼﾔｳ)【句】〔佛〕吾人は、今、生死の迷界に沈淪すれども、本來は涅槃(ﾈﾊﾝ)の悟を開くべき佛性を具有せり。〔諺語〕[illegible]「生死本來の佛性」

生死無常(ﾑｼﾞﾔｳ)【句】〔佛〕命ある者は、生死流轉(ﾙﾃﾝ)を免れず、常住なるを得ざること。保元「生死無常の理(ｺﾄﾜﾘ)、あはれなり」

生死輪廻(ﾘﾝﾈ)【句】〔佛〕りんゑ(輪廻)に同じ。

生死流轉(ﾙﾃﾝ)【句】〔佛〕前條に同じ。平家「佛日はやく沒して、生死流轉の衢(ﾁﾏﾀ)冥冥たり」

生死流浪(ﾙﾗｳ)【句】〔佛〕生死の海にただよふこと。生死の苦しみを脫し得ぬこと。謠曲(源氏供養)「生死流浪の須磨の浦を出でて」

生死を出づ【句】〔佛〕次條に同じ。徒然「この世をはかなみ、必ず生死を出でんと思はんに、何の興ありてか、朝夕君に仕へ、家を顧みるいとなみのいさましからん」

生死を離る【句】〔佛〕佛道を修め、轉迷開悟して、生死流轉(ﾙﾃﾝ)の苦界より脫す。涅槃(ﾈﾊﾝ)に入る。煩惱(ﾎﾞﾝﾅｳ)を脫す。成佛得脫す。生死出離(ｼﾕﾂﾘ)。出離生死。(「生死に住す」に對して)

四種の生死【句】〔佛〕如來法身の功德(ｸﾄﾞｸ)を障害すといふ四つの生死。卽ち、一に方便生死、二に因緣生死、三に有有生死、四に無有生死。ししゆしやうじ。四障。

しやう-じ 尙侍【名】『侍御(ｼﾞｷﾞﾖ)を尙(ﾂｶｻﾄﾞ)る義』㊀ないしのかみ(尙侍)に同じ。㊁宮中の最上級の女官。勅任官。今は廢せらる。

しやう-じ 掌侍【名】『侍御(ｼﾞｷﾞﾖ)を掌る義』㊀ないしのじよう(掌侍)に同じ。㊁明治初年の第三等の宮中の女官。定員四人にて、勾當掌侍・二掌侍・三掌侍・新掌侍の稱呼を設けたり。㊂現制度の宮中の女官中、典侍・權典侍に次ぐもの。なほその下に、權掌侍ありて、共に奏任とす。てんじ(典侍)參照。

しやう-じ 莊司・庄司【名】莊園の所有主の命を受けて、その莊園內の雜務を掌りし職。莊官たる一切の事務を掌るために、本家又は領家より置きたる役。地頭置かるるに及びて、漸く衰へたり。莊官。太平記八「庄司が內の大力よと覺えて」

しやう-じ 賞辭【名】ほめことば。賞詞。

しやう-じ 聖侍【名】〔佛〕しやうそうじしや(聖僧侍者)の略。

しやう-じ 省字【名】くづしがき(崩書)に同じ。

しやう-じ 正嗣【名】せいし(正嗣)に同じ。

しやう-じ 精進【名】しやうじん(精進)に同じ。〔古語〕[illegible]「黑き御だい一よろひ、しやうじの物いと淸らにして」

しやう-じ 商事【名】『獨 Handelssache』商人及び商行爲に關する事項、並びに商法の規定するその他の事項。法律上は、まづ商法を適用し、商法に規定なき時は、商慣習法に依り、又、商慣習法もなき時は、民法を適用す。

しやう-じ 障子【名】『障は塞(ﾌｻ)ぐ・界(ｻｶ)ふ・隔つ等の意、子は接尾語』㊀屋內の室と室との仕切に立つる建具。明(ｱｶﾘ)障子・衝立(ﾂｲﾀﾃ)障子・襖(ﾌｽﾏ)障子などの總稱。殊に古は多く襖障子にいひ、又古、宮中にありし馬形(ｳﾏｶﾞﾀ)の障子・荒海の障子などは、衝立障子なり。明障子は平安朝時代の末頃より起り、鎌倉時代には廣く行はれ、後、單に障子といへば、明障子のみを指すに至れり。さうじ。落窪「へだてのしやうじをあけて出づれば」㊁はんかう(半頭)㊀を見よ。㊂「鼻の障子」を見よ。

しやう-じ 床子【名】机のごとき形の腰掛。椅子の類なれども、背後にも、左右にも、勾欄の取附けてあらぬもの。さうじ。だいしやうじ(大床子)參照。

じやう-し 城市【名】城のあるまち。まち。都城。

じやう-し 城址【名】城の在りしあと。しろあと。

じやう-し 常師【名】定まれる師。

じやう-し 上師【名】工部省の師の三等に分れたりし中の上級の者。

じやう-し 上司【名】上級の官廳又は官吏。

じやう-し 上旨【名】上(ｶﾐ)たる者のおぼしめし。上意。上命。

じやう-し 上巳【名】じやうみ(上巳)に同じ。下學集「上巳(ｼ)」

じやう-し 上肢【名】〔醫〕人類の前肢、卽ち手。(下肢に對して)

じやう-し 上士【名】㊀〔佛〕ぼさつ(菩薩)に同じ。㊁ひら侍より身分高き侍。

じやう-し 狀紙【名】書狀などを書くに用ふる紙。はんきれ。

じやう-し 狀師【名】『狀は、事實を敍べて上陳する意』くじし。辯護士。

じやう-し 情思【名】㊀人情のかんがへ。おもひ。㊁愛情の思。こひ。

じやう-し 情死【名】しんぢゆう(心中)に同じ。

じやう-し 情史【名】情事のいきさつを記したる書。艷史。

じやう-し 上梓【名】『梓(ｱﾂﾞｻ)に上(ﾉﾎﾞ)す義、卽ち古、梓は版木(ﾊﾝｷﾞ)に用ひられしより、版下(ﾊﾝｼﾀ)の紙を、その版木にのせて刻む意にていふ』しゆつぱん(出版)に同じ。

じやう-し 上使【名】德川時代に、幕府より諸大名の許に遣りし使者。老中・奏者番・高家(ｶｳｹ)・小姓(ｺｼﾔｳ)・使番(ﾂｶｲﾊﾞﾝ)等をこれに充て、これを受くる大名の資格に從ひて、使者の身分に高下の別ありたり。

じやう-じ 常事【名】㊀一定の事柄。㊁通常の出來事。

じやう-じ 情事【名】㊀實際の事柄。いつはりなき事柄。㊁男女間の人情にかかはりたる事。こひ。

じやう-じ 常時【副】いつも。常に。

しやうじ-あげ 障子上【名】攝政・關白、內覽の宣旨を蒙りて、執奏の文書を閱する際、出座せし寢殿の一部。

しやうじ-いる 請入る【動下二他】請ひ招きて入らしむ。竹取「まづしやうじ入れ奉らん」

しやう-しう 唱酬【名】しやうわ(唱和)に同

しやう-しう 商秋【名】『商は、五音(ゴイン)の中、秋に配せらるる音なるよりいふ』あき(秋)に同じ。
しやう-しう 尙州【名】〔地〕朝鮮慶尙北道西邊にある一邑。釜山より京城に至る間の要驛。
しやう-しう 上秋【名】陰曆七月の異稱。
じやう-しう 上州【名】〔地〕かうづけ(上野)に同じ。
　上州の長脇差(ナガワキザシ)【句】『昔、上野國には、常に長脇差をさす無賴の徒多かりしよりいふ』上野國の人を卑しめていふ語。
じやう-しう 城州【名】〔地〕やましろ(山城)に同じ。
じやう-しう 常州【名】〔地〕ひたち(常陸)に同じ。
じやう-しう-いっぽんねぎ 上州一本葱【名】〔植〕しもにたねぎ(下仁田葱)に同じ。
じやう-しう-ぎぬ 上州絹【名】上野國藤岡邊より產する絹。幅九寸・丈五丈四尺あり。
じやう-しう-さあや 上州紗綾【名】上野國より產出する紗綾。
じやう-しう-さいもん 上州祭文【名】歌祭文の一種。江戸には、上野國より出で來りて語る者多きよりいふ。
じやう-しう-どろぼう 上州泥坊【名】上野國には、古來、無賴の惡漢多く、從ひて、盜賊も、その國より多く出でしこと。
じやう-しう-は 常州派【名】〔美〕支那、淸の花鳥畫家の一派。畫家惲(ウン)南田等を祖とす。純沒骨體を特色とし、大いに世に行はれて、寫生の正統とせらるるに至れり。
じやう-しう-ふたのちりめん 上州二幅縮緬【名】上野國より產出する、一種の縮緬。幅二尺四寸ありて、地薄く、絲の縷(ヨリ)強し。
じやう-しう-むしゆく 上州無宿【名】一上州生れの無宿者。二『昔、上野國には、無賴の徒多かりしよりいふ』上野國の人を卑しめていふ語。
しやう-じ-かい 生死海【名】〔佛〕「生死(シャウジ)の海」に同じ。
しやう-じ-がうし 障子隔子【名】明(ケウ)障子の骨組の如き形をなす模樣。
しやう-じ-かぶしきぐわいしや 商事株式會社【名】株式組織の商事會社。
しやう-じ-がみ 障子紙【名】明(ケウ)障子を張るに用ふる紙。美濃紙をつぎあはせて卷きたるもの。
しやう-しき 生色【名】〔鑛〕こがね(黃金)の異稱。
しやう-じき 唱食【名】〔佛〕禪宗にて、僧の食膳に向ふ時に唱ふる偈(ゲ)。
じやう-しき 常識【名】『英 Common sense』普通の理解力ある人の有する程の知識・見解。普通の人情・世態を理解し、常規を逸せざる穩健なる思想・識見。こんもんせんす。
じやう-しき 常式【名】つねの方式。
じやう-しき 常式【副】いつも。常に。
じやう-じき 淨食【名】しやうじん(精進)に同じ。
じやう-しき-てつがく 常識哲學【名】〔哲〕『英 Common sense philosophy』すこっとらんどてつがく(蘇格蘭哲學)に同じ。
じやう-しき-は 常識派【名】〔哲〕前條に同じ。
しやう-じ-きん 正字金【名】『正の字の極印あるよりいふ』安政小判金又は安政一分金の別稱。
じやう-し-きん 上肢筋【名】〔醫〕上肢を固定し、又これを動かす筋肉。肩胛筋・上膊筋・前膊筋・手筋の四に分つ。(下肢筋に對して)
じやう-じ-きん 上字金【名】かりがねきん(雁金)に同じ。
しやう-じ-ぎやうせい 商事行政【名】〔法〕經濟行政の一。商事の保護・取締を目的とするもの。
しやう-じ-ぎやうせい-はふ 商事行政法【名】商事行政に關する法規。
しやう-し-くわい 尙齒會【名】一『しやうし(尙齒)を見よ』年老いたる人どもを招きて、宴を開き、詩歌を作りなどする會合。支那の風習に倣へるものにて、白樂天の行ひし七叟尙齒會に依り、數は七人を常とし、列座の順は、最も高年なる人を上とす。又、七人以外は、相伴として、垣下(エンカ)に列せしめたり。元慶元年三月南淵(ナブチ)年名がその山莊にて行ひしを始とす。月詣集「淸輔朝臣の、しやうしくわい行ひ侍りける、七叟にてよめる」二高野長英・小關三英・遠藤謹助等が知識交換のために結びたる社。
しやう-じ-ぐわいしや 商事會社【名】〔法〕『英 Commercial corporation 佛 Société commerciale』商法に規定せる合名會社・合資會社・株式會社・株式合資會社の總稱。
しやう-じ-くわん 掌璽官【名】昔、天皇の御印璽を掌りし官、卽ち今の內大臣。
しやう-じ-けいやく 商事契約【名】〔法〕『英 Commercial contract』商業に關する契約、卽ち賣買契約・交互計算契約・運送契約・受負契約等の類。
しやう-じ-けいやく-はふ 商事契約法【名】〔法〕商事契約の權利關係を定めたる法規。
じやう-し-こ 上鉋【名】仕上(シアゲ)を削るに用ふる鉋(カンナ)。(粗鉋(アラシコ)・中鉋(ナカシコ)に對して)
しやう-じ-こ 精進湖・生死湖【名】〔地〕富士八湖の一。甲斐國西八代(ニシヤツシロ)郡に屬し、富士山の西北麓に位す。周回二里半弱。右は、本栖(モトス)湖・西湖(ニシノウミ)と共に相合して、一水を成し、石花湖(セノウミ)と呼びしに、貞觀六年富士山噴火の際、熔岩によりて中斷せられしなりといふ。
じやう-じ-こうはふ 常時公法【名】〔法〕次條の約。
じやう-じ-こくさいこうはふ 常時國際公法【名】〔法〕へいじこくさいこうはふ(平時國際公法)に同じ。
しやう-じ-ごし 障子越【名】障子を隔てて事を爲し又は物言ふこと。曾我「障子越にいひければ」
じやう-し-こつ 上肢骨【名】〔醫〕上肢を形成する骨。上膊骨・尺骨・橈骨(コツ)・腕骨・掌骨・指骨に細別す。(下肢骨に對して)
しやう-じ-さいばん 商事裁判【名】商事に關する裁判。佛國その他二三箇國にては、これがために特別の裁判所を設け、商人中より、國家の選任したる裁判官をして裁判せしむれど、我が國にては、通常の民事裁判所の管轄に屬せしむ。
じやう-しし 淨師子【名】〔人〕ぜんむゐ(善無畏)に同じ。
しやう-じ-じけん 商事事件【名】〔法〕商事に關する訴訟事件。
しやう-じ-じんざゑもん 庄司甚左衞門【名】〔人〕江戸吉原の創建者。相模國小田原の人。姉は北條氏政の妾。寬永中、官に請ひて、江戸市中に散在せる妓樓を一廓に集めて管理す。正保元年歿す。年六十九。
しやう-じ-しゆつり 生死出離【句】しやうじ(生死)の條下を見よ。
じやう-じ-ぜい 常時稅【名】每年度に繰返し、徵收せらるる租稅。(臨時稅に對して)
じやう-じせい-たい 常磁性體【名】〔理〕『英 Paramagnetic substance』磁石に近づくれば、その磁石に近き方に異名の極生じ、遠き方の端に同名の極生じて、その磁石に吸收せらるる物體。卽ち鐵・ニッケルなど。(反磁性體に對して)
しやう-じ-そく-ねはん 生死卽涅槃【句】しやうじ(生死)の條下を見よ。
じやう-し-たい 上肢帶【名】〔醫〕けんかふたい(肩胛帶)に同じ。
しやう-じ-だんたい 商事團體【名】商事を目的とする團體。銀行・取引所の類。
しやう-じ-ちやうや 生死長夜【句】しやうじ(生死)の條下を見よ。
しやう-しつ 傷疾【名】きずつき疾(ヤ)むこと。
しやう-しつ 詳悉【名】くはしきこと。詳かなること。委細。
しやう-しつ 漿質【名】漿液狀の物質。
じやう-しつ 淨室【名】きよめたる室。きよま。
じやう-じつ 成實【名】〔佛〕じやうじつしゆう(成實宗)の略。正法眼「倶舍(クシャ)・成實などいふは小乘なり」
じやう-じつ 情實【名】一事のわけ。事情。二道理の外に、內內の事情あること。私情にからまりたる事實。
じやう-じつ 常日【名】通常の日。平日。あたりまへの日。
じやう-じつ 上日【名】一『書經の舜典篇に「正月上日受終于文祖」とあり』ついたち(朔日)に同じ。一說に、じやうじゆん(上旬)に同じと。二役所に出勤する日。上番の

日。(下日に對して) じやうちやう(上長)・ばんじやう(番上)參照。 艶狩劔本地「內侍命婦のおもと人、上日の上達部、几帳の物見・簾のつま覗きさざめき」
しやう-しつ-がん 晶質岩【名】〔地〕『英 Crystalline rock』破片の凝結より成らずして、結晶質粒の密接によりて成りたる岩石。例へば花崗石などの類。
じやう-しつ-しやど 壤質砂土【名】〔地〕砂土と壤土との中間の土壤にして、砂土の方に近きもの。
じやう-じつ-しゆう 成實宗【名】〔佛〕佛教の一派。白雉四年南都の僧道照、勅によりて入唐し、玄奘三藏より傳授せられしもの。成實論を基として、宗義を立つ。
じやう-しつ-しよくど 壤質埴土【名】〔地〕埴土と壤土との中間の土壤にして、埴土の方に近きもの。
しやう-しつ-はくがん 晶質剝岩【名】〔地〕けっしやうへんがん(結晶片岩)に同じ。
じやう-じつ-ろん 成實論【名】〔書〕『如來所說の經・律・論の三藏中の實義を釋成せんことを目的とするによりて名づく』三寶・四諦の理を說けるものにて、四阿含經の語句を引用すること多し。成實宗はこの書を正依(シャウエ)とす。十六卷・二百二品あり。印度訶梨跋摩(カリバツマ)の著。羅什三藏の譯。
しやう-し-ないしんわう 章子內親王【名】〔人〕後一條天皇の皇女。後冷泉天皇の中宮。延久元年尼となる。二條院と稱す。長治二年崩ず、壽八十。
しやう-じ-の-いた 障子板【名】大鎧(オホヨロヒ)の一部。頸を射られぬやうに、半月形にして、綿上(ワタガミ)の上に立てたるもの。保元「障子の板か、栴檀・弦走(ツルバシリ)か」
しやう-し-はふ 商私法【名】〔法〕商法の一。商事に關する私法。單に商法といへば、普通これを指す。(商公法に對して)
じやう-じ-はん 常時犯【名】〔法〕國事犯以外の、通常の犯罪の總稱。
じやう-じ-ばんこくこうはふ 常時萬國公法【名】〔法〕へいじこくさいこうはふ(平時國際公法)に同じ。
じやう-じ-はんにん 常時犯人【名】〔法〕常時犯の犯罪人。
じやう-じ-しばゐ 常芝居【名】常に興行してある芝居。
しやう-じ-ひしようじけん 商事非訟事件【名】〔法〕商事に關する非訟事件。(商事事件に關して)
しやう-じ-びやうぶ 障子屛風【名】明(ケウ)障子にて作りたる屛風。
しやう-しふ 翔集【名】鳥のかけり飛び集ること。
じやう-しふ 常習【名】つねの習慣。つねならはし。
しやう-じ-ふうさ 商事封鎖【名】〔法〕『英 Commercial blockade』戰時封鎖の一。敵の經濟を妨害する目的にて、その通商に必要なる港又は海岸を封鎖すること。軍事封鎖とは異にして、中立國の通商權に影響するところ大なるが故に、國際法においては、その效力に必要なる幾多の條件を定む。(軍事封鎖に對して)
しやう-じ-ぼね 障子骨【名】一障子の骨。二凧の骨組を、障子の骨の如くに竪橫に渡したるもの。
しやう-じ-ぼり 障子堀【名】地面を、障子骨の如く、縱橫に掘ること。
じやう-じ-ま 城島【名】〔地〕筑後國三潴(ミツマ)郡にある町。柳河町の北三里餘。筑後川の左岸。
しやう-じ-みの 障子美濃【名】障子を張るに用ふる美濃紙。
しやう-しん 正信【名】〔佛〕正法(シャウボフ)を信ずる心。眞正な信仰。
しやう-しん 聖心【名】〔佛〕ぶっしん(佛心)に同じ。
しやう-しん 詳審【名】つまびらかなること。
しやう-しん 獎進【名】獎勵してすすむること。
しやう-しん 傷心【名】心をいたむること。悲しく思ふこと。
しやう-じん 正眞【名】せいしん(正眞)に同じ。狂言(粟田口)「正眞の粟田口を持たれた御方があるによって」
しやう-じん 匠人【名】たくみ。大工(ダイク)。工匠。
しやう-じん 生身【名】一〔佛〕衆生(シュジャウ)濟度のために、父母に託して胎生する、佛の肉身。畫像の木像等ならぬ、生身(イキミ)の佛。十訓抄「生身の普賢」太平記「生身の彌勒」二まことの身。まことその人。さうじみ。[正身]
　生身の成佛(ジャウブツ)【句】〔佛〕そくしんじやうぶつ(卽身成佛)に同じ。
しやう-じん 精進【名】一〔佛〕『梵 Vīrya(毘梨耶)の譯語。精力を籠めて道に進む義。また勤と譯す』佛道を勤修(ゴンシユ)して、懈怠(ケタイ)せざること。しやうじ。さうじん。さうじ。精進波羅蜜。枕「一日ばかりのしやうじんの懈怠とやいふべからん」右大將家賞記「勇猛精進の大道心も、無常の刹鬼は防ぎ難く」二けっさい(潔齋)に同じ。三『雲溪友議に「與元縣西墅有蘭若、上座僧常飮酒食肉、群輩皆效焉、一旦多作大餠、招群徒、衆入屍陀林、以餠裹腐屍肉而食、上座曰、汝等能食此肉、方可食諸肉、自此緇徒因成精進也」とあり』肉食せず、膳部に野菜のみを用ふること。素食。淨膳。細見酒香童子「一日の精進も養ひ親への無禮なり」
しやう-じん 聖尋【名】〔人〕眞言宗の僧。鷹司基忠の子。東大寺別當に補せられ、笠置寺の別當を兼ぬ。元弘の亂、後醍醐天皇を笠置山に奉じ、城陷るや賊軍に擒へられ、下總國に流されしが、高時誅伏の後、東大寺に還り、笠置寺を再造す。
じやう-しん 上脣・上唇【名】一上部に位するくちびる。うはくちびる。二〔植〕脣形をなせる花冠又は萼の上方なる脣形部。
じやう-しん 上申【名】上へ申し出づること。かきあげ。
じやう-しん 城津【名】〔地〕朝鮮咸鏡北道の南端にある開港場。元山の東北七十五里に在り。日本海に臨む。
じやう-しん 淨心【名】〔佛〕吾人の本來具へたる自性(ジシャウ)。淸淨の心。淸淨心。
じやう-しん 淨信【名】〔佛〕淸淨なる信仰。
じやう-じん 情人【名】戀ひ思ふ人。いろ。情夫。情婦。
じやう-じん 常人【名】一なみのひと。尋常の人。二しぜんじん(自然人)に同じ。
じやう-じん 成尋【名】〔人〕天台宗の僧。藤原佐理(スケマサ)の子。洛北岩倉の大雲寺に居り、延久三年入宋して、神宗皇帝に謁し、雨を祈りて驗ありしため、善慧大士の號を賜はり、優遇のあまり、歸國を許されず、元豐四年(我が永保元年)その地に寂す。年七十一。
しやう-じん-あけ 精進明【名】しやうじんおち(精進落)に同じ。
しやう-じん-あげ 精進揚【名】野菜類の揚物(アゲモノ)。多く佛事などの時に用ふ。
しやう-じん-おち 精進落【名】精進の期限了りて、魚・鳥などの肉類を食すること。しやうじんあけ。
しやう-じん-がため 精進固【名】盂蘭盆(ウラボン)などの精進をなすに先だちて、魚肉を食すること。浮世風呂「今日は精進がためだから、本直(ホンネ)になりやあ、出入場へ持ってきてえが」
しやう-しん-ぎ 正眞木【名】庭園に特に目立つやうに、一本いかめしく植ゑてある大なる木。
しやう-じん-ぎよるゐ-ものがたり 精進魚類物語【名】〔書〕ぎよてうへいけ(魚鳥平家)に同じ。
しやう-しん-げ 正信偈【名】〔書〕しやうしんねんぶつげ(正信念佛偈)の略。
しやう-じん-こん 精進根【名】〔佛〕五根の一。雜念(ザフネン)を交へず、堅く正法(シャウボフ)を信じて、勤修(ゴンシユ)すること。勤根(ゴンコン)。
しやう-しん-し 聖眞子【名】山王七社(サンワウシチシャ)の一。阿彌陀如來の垂迹(スイジャク)、八幡大菩薩の分身と稱せらる。太平記「聖眞子は九品安養界の化主(ケシュ)、八幡大菩薩の分身」
しやう-しん-じ 淸信士【名】〔佛〕うばそく(優婆塞)に同じ。(淸信女に對して)
じやう-しん-しよ 上申書【名】上申する文書。
しやう-じん-すまし 精進淸汁【名】鰹節などを用ひず、椎茸或は昆布を煮出して作りたるすまし。
しやう-しん-なん 淸信男【名】〔佛〕しやうしんじ(淸信士)に同じ。

しやうしん-によ 清信女【名】〔佛〕うばい(優婆夷)に同じ。(清信士に對して)

しやうしん-ねんぶつ-げ 正信念佛偈【名】〔書〕『しやうしん(正信)を見よ』教行信證(けうぎやうしんしよう)の行卷にある六十行・百二十句の偈(げ)。本書以外に單行し、信徒、朝暮の勤行(ごんぎやう)にこれを讀誦す。一卷。親鸞の著。略稱、正信偈。

しやうじん-ばら 精進腹【名】菜食のみの腹。粗食したる腹。一代男「あしたの豆腐賣さへ稀に、なほ精進腹の、どこやら物淋しく」 同「精進腹では酒も飲まれず」

しやうじん-はらみつ 精進波羅密【名】〔佛〕『梵 Viryapâramitâ の譯語。精進は六波羅密(六度)の一なるよりいふ』しやうじん(精進)[二]に同じ。

しやうじん-び 精進日【名】精進を行ふべき日。若風俗「親仁の精進日は忘れず」

しやうじん-ぶくさ 精進袱紗【名】佛事の贈物などする時に用ふる袱紗。赤色を交へず、白・淺葱(あさぎ)などの色を用ひ、定紋または佛事に緣ある蓮華、寂しき草花などを附く。(祝儀袱紗等に對して)。

しやうじん-もの 精進物【名】肉類又はそれを用ひて作りたるにあらざる食物。野菜の類。しやうじもの。さうじんもの。狂言(飯道心)「よう覺えさしませ。こなたは皆精進物の事ばかりおしやる」

しやうじん-や 精進屋【名】佛道を修むるために籠る所。さうじんや。東鑑「御精進屋七條殿」

しやうじん-れうり 精進料理【名】肉類を交へぬ、穀物・野菜の類のみを用ひたる料理。

しやう-しや 商社【名】商事會社。商會。

しやう-しや 掌車【名】もと宮内省主馬寮に置かれし、准判任の職員。明治四十一年廢止せらる。

しやう-しや 廠舍【名】四方に圍(かこひ)なき屋舍。こや。

しやう-しや 傷者【名】きずつきたる者。ておひ。負傷者。

しやう-しや 生寫【名】いきうつし(生寫)に同じ。

しやう-じや 青蛇【名】青色のへび。用明天皇職人鑑「呂洞賓が袖の中の青蛇をなげうって、黃龍に乘ぜしは」

しやう-じや 盛者【名】盛んなる者。

盛者必衰(すゐ)【句】〔佛〕『仁王經四の無常偈に「盛者必衰、實者必虛」、涅槃經の二に「夫盛必有レ衰、合會有二別離一」とあり』盛んなる者は必ず衰ふる時あり。〔諺語〕平家「娑羅雙樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす」

しやう-じや 聖者【名】〔佛〕無漏智(むろち)を發して、正理を證悟せし人。小乘にては、見道以上をいひ、大乘にては、無明(むみやう)を斷破せる地上の菩薩をいふ。(賢者に對して)正法記「淨居天(じやうごてん)とて、證果の聖者の住所なり」

しやう-じや 精舍【名】『梵 Vihāra(毗訶羅・鼻訶羅)の譯語。譯語は、もと支那にて學舍・塾舍・校舍等の義なりしを、晉の孝武帝の代、僧を精舍に置きしより、その名を襲用して、佛寺の義に用ふることとなりしなり。せいしや(精舍)參照。』てら。がらん。精廬(せいろ)。平家「祇園精舍の鐘の聲」

しやう-じや 生者【名】生きてゐる者。

生者必滅(めつ)【句】〔佛〕『大涅槃經に「生者必滅、會者定離」とあるに本づく』生命ある者は、早晚死滅す。〔諺語〕保元「有爲無情の習、生者必滅の掟」

じやう-しや 常赦【名】昔の赦の一種。八虐・故殺・謀殺・私鑄錢・强盜・竊盜の外は、皆赦すもの。(大赦・非常赦に對して)續紀「八虐常赦所レ不レ免者」

じやう-しや 淨寫【名】きれいに書直すこと。淸書。淨書。

じやう-しや 淨捨【名】きしや(喜捨)に同じ。

しやう-しやう 商聖【名】しやうそう(商僧)に同じ。

しやう-しやう 將相【名】大將と宰相と。

將相寧(なん)ぞ種あらんや【句】「王侯・將相寧ぞ種あらんや」を見よ。

しやう-しやう 省掌【名】[一]古の八省の雜任。官掌(くわんじやう)の類。[二]明治十年以前における各省の職員の一。鋲人を選じ、書疏を達し、使部を檢することを掌りし判任官。

しやう-しやう 莊莊【貌】おごそかなるさま。さうさう。

しやう-しやう 將將【貌】[一]さかんなるさま。おごそか。[二]玉などの鳴る聲の形容。

しやう-しやう 鏘鏘【貌】さうさう(鏘鏘)に同じ。

しやう-しやう 彰彰・章章【貌】あきらかなるさま。明白なるさま。彰乎。

しやう-しやう 昌昌【貌】さかんなるさま。

しやう-しやう 晶晶【貌】光明なるさま。

しやう-じやう 症狀【名】〔醫〕しやうこう(症候)に同じ。

しやう-じやう 商狀【名】商業のありさま。商況。商勢。

しやう-じやう 象狀【名】かたち。さま。形象。

しやう-じやう 掌狀【名】〔植〕『英 Palmate』指を開きたる掌(てのひら)の狀をなせること。

しやう-じやう 掌上【名】掌(たなごころ)の上。てのひら。

掌上に運(めぐ)らす【句】『孟子の公孫丑上篇に見ゆ』「掌(たなごころ)に運らす」に同じ。

しやう-じやう 牀上・床上【名】寢臺の上。とこの上。ゆかの上。

床上、床を安んず【句】[一]『續畫品に「南齊毛稜善二於布置一、比二其叔父惠秀一、則床上安レ床」とあり』一層すぐれたり。[二]「屋下、屋を架す」を見よ。〔諺語〕

しやう-じやう 清淨【名】[一]淸くして穢れざること。[二]〔佛〕煩惱・惡行などなく、心のきよきこと。盛衰記「袈裟衣きたる者は淸淨の上人にて」

しやう-じやう 猩猩【名】[一]〔動〕『英 Orang-outang 棲息地の土人の語に基づけるものにて、森に住む人の意』猿類に屬する哺乳動物。スマトラ及びボルネオに產す。身のたけ四五尺、赤茶色の毛に

(しやうじやう[一])

蔽はれ、闊大にして裸出し、帶鉛色をなす。前肢長く垂るれば、殆ど足部に達し、後肢短く、立行巧ならず、常に森林中に棲む。牡は頸部に、髭鬚を有す。おほしやうじやう(大猩猩)・くろしやうじやう(黑猩猩)參照。[二]支那における想像上の怪獸。髮長くして赤く、面貌人に類し、その聲小兒の啼くがごとく、犬の吠ゆるにも似、また人語を解し、酒を好むといふもの。雲南の山谷に產すといふ。せいけつ(猩血)・しやうじやうひ(猩猩緋)參照。[三]酒量の大なる人の譬。[四]〔動〕『酒・酢などの中に發生するよりいふ』さし(蠛子)の異稱。[五]役者の隈取(くまどり)の一種。赤く彩るもの。[六]謠曲の一。かうふうと云ふ酒賣る男の孝心深きを愛して、猩猩來り、盡きせぬ酒泉を與へ、めでたく醉ひ戯れ舞ひ遊ぶことを作れるもの。

猩猩の火事見舞【句】「金時(きんとき)の火事見舞」に同じ。〔諺語〕

猩猩よく言へども、禽獸を離れず【句】「鸚鵡よく言へども飛鳥を離れず」を見よ。〔諺語〕

じやう-しやう 上相【名】上位にある宰相。

じやう-しやう 上生【名】〔佛〕極樂往生の階級なる上品(じやうぼん)・中品・下品(げぼん)の各の上位なるもの。(中生・下生に對して)

じやう-しやう 上姓【名】[一]種姓(すじやう)の尊きこと、又その人。貴族の出。(下姓(げしやう)に對して)[二]生來の日本人の姓。(下姓(げしやう)に對して)

じやう-しやう 上將【名】上位に在る將軍。上將軍。

じやう-しやう 城將【名】城を守る大將。

じやう-しやう 城墻【名】城の上のかき。城堞。

じやう-しやう 上章【名】上方に在る章句。

じやう-しやう 上聲【名】〔語〕漢字の四聲の一。董・腫・講・紙・尾等の三十韻に分つ。

じやう-じやう 上上【名】上の上。極めてよきこと。最上。狼歌加留多「男の上上きつすゐとは、齋藤瀧口賴方」

じやう-じやう 城上【名】城の上。

じやう-じやう 情狀【名】まことの狀態。事情。

じやう-じやう-しやくりやう 情狀酌量【句】裁判官が、罪人の情

狀を酌取りて、減刑をなす。

じやう-じやう 常狀【名】常の狀態。

じやう-じやう 常情【名】人生普通の情。

じやう-じやう 常常【副】つねづね。ふだん。

常常綺羅の晴著(はれぎ)無し【句】常によき衣服を著るため、晴の時に著る衣服なし。常上著(じやうじやうぎ)の晴著なし。普著無(ふだんぎ)の晴著無し。常常好(じやうじやうごのみ)の晴著無し。〔諺語〕

じやう-じやう 瀼瀼【貌】露のしげきさま。太平記「さこそ袖より餘る荊棘の露も、瀼瀼として深からんずらめ」

しやうじやう-あし 猩猩脚【名】花臺・置物臺等の足の曲線狀をなしたるもの。その最も高きを鷺足、低きを猫足、花形あるを華足(けそく)といふ。

(しやうじやうあし)

しやうじやう-いし 清淨石【名】手水鉢の傍に据うる石。のぞきいし。

しやうじやう-えふ 掌狀葉【名】〔植〕『英 Palmate(又、Digitate)leaves』葉柄と葉片との接合部に向ひて、葉緣より裂込み、その狀恰も掌を擴げたる如き形の葉。槭(かへで)・八角金盤(やつで)などの葉、これに屬す。(羽狀葉に對して)

しやうじやう-がに 猩猩蟹【名】〔動〕あさひがに(朝日蟹)に同じ。

しやうじやう-がひ 猩猩貝【名】〔動〕瓣鰓(べんさい)類に屬する軟體動物。殼やや圓形にして質厚く、六條の大なる放射肋ありて、各肋より數箇の長き突起を斜出す。肋間には大小の放射脈を有し、また鱗狀の小突起を密生す。表面は朱色、內面は微紅を帶ぶ。長さ二寸五分。我が國西南海に產す。

しやうじやう-き 清淨忌【名】さんじふさんねんき(三十三年忌)の別稱。

じやうじやう-ぎ 常上著【名】次條を見よ。

常上著の晴著(はれぎ)無し【句】「常常綺羅の晴著無し」に同じ。〔諺語〕

しやうじやう-ぎく 猩猩菊【名】〔植〕菊の一種。花は紅にして、瓣の尖れるもの。大輪なるを亂猩猩(みだれしやうじやう)といひ、小輪なるを小猩猩といふ。

じやうじやう-きつ 上上吉【名】[一]この上なく吉なること。一茶「元日や上上吉の淺黃空」[二]技藝などの位附の一。この上なく勝れたるもの。

じやうじやう-ぐん 上將軍【名】上級に位する將軍。全軍の首將。上將。太平記「この宮を上將軍と仰ぎ奉りて」

しやうじやう-くわう 清淨光【名】〔佛〕阿彌陀佛の十二光の一。貪る所無き佛の淸淨なる心より出でて、淸淨なる色相(しきさう)を示し、よく衆生(しゆじやう)の濁れる心を除く光明。この光明の本體たるに由りて、阿彌陀を淸淨光佛ともいふ。淸淨光明。

しやうじやうくわう-じ 清淨光寺【名】ゆぎやうでら(遊行寺)に同じ。

しやうじやうくわう-ぶつ 清淨光佛【名】〔佛〕しやうじやうくわう(淸淨光)を見よ。榮花「南無淸淨光佛と申し、廊を渡りて大御堂に參れば」

しやうじやう-くわうみやう 清淨光明【名】〔佛〕しやうじやうくわう(淸淨光)に同じ。

しやうじやうくわうみやう-しん 清淨光明身【名】〔佛〕『法華經の法師品に出づ』淸淨光を放つ佛の眞身。淸淨身。榮花「聞けば、法師品の淸淨光明身のわたりをぞ讀むなる」

しやうじやうけ-ゐん 清淨華院【名】京都市上京區北邊(きたべ)町に在る淨土宗の寺。同宗鎭西派四箇本寺の一。本尊は阿彌陀佛。もと天台宗にて、淸和天皇の勅願により、慈覺大師創建し、後白河天皇の勅により、源空住持して、今の宗旨に改む。淨華院。

しやうじやう-こぞう 猩猩小僧【名】昔の玩具の一種。猩猩の形をなせる人形、壺の中より出で、下なる臺にさしたる笛を吹けば、人形のまはるやうにせるもの。

しやうじやう-さう 猩猩草【名】〔植〕大戟(たいげき)科に屬する一年生の草。原產地は、北は北米合衆國、南はブラジル・ペルウに至る間。近年舶來して觀賞せらる。高さ一二尺、葉は線形・卵形・圓形など種種の形を呈し、夏秋の交、鮮紅色の花瓣樣を呈す。花はその間に生じ、綠黃色にして著しからず。

しやうじやう-さぎ 猩猩鷺【名】〔動〕あまさぎ(尼鷺)に同じ。

しやう-しやうじん 正精進【名】〔佛〕はっしやうだう(八正道)を見よ。

しやうじやう-しん 清淨心【名】〔佛〕妄念を去りたる淸きまことの心。疑ふ所なき信念。無垢(むく)の心。信心。

しやうじやう-しん 清淨身【名】佛の淸淨なる眞身。淸淨光明身。鴉鷺合戰「鷺鷲の汀に立てる色、豈淸淨身にあらずや」

じやう-しやうじん 常精進【名】〔佛〕常に精進を行ふこと。狼歌加留多「寺まゐりに月日を送る常精進」

しやうじやう-しん-じよ 生淨信處【名】〔佛〕そとば(率都婆)の譯語。

しやうじやう-せかい 清淨世界【名】〔佛〕じやうど(淨土)[一]に同じ。

しやうじやう-せき 清淨石【名】きよめいし(淨石)に同じ。

しやうじやう-せぜ 生生世世【副】〔佛〕現世も、後世も。生れかはり、死にかはりて、末長く。平治「御恩に依りて、かひなき命を助けられまゐらせ候こと、生生世世にも報じつくしがたく」

じやう-じやうだん 上上段【名】上段の間のつづきに、襖・障子にて隔てたる小間。冠棚又は書緣などありて、床の如く作れるもの。

しやうじやう-ち 清淨智【名】〔佛〕むろち(無漏智)に同じ。

しやうじやうてい【名】うかれめ。女郎。〔肥前國長崎の方言〕博多小女郎浪枕「柳町のしやうしやうていども請出いて、上方さなへつっぱしる」

しやうじやう-てん 清淨天【名】〔佛〕たうりてん(忉利天)を見よ。

じやうじやう-でん 上上田【名】じやうでん(上田)を見よ。

しやうじやう-とんぼ 猩猩蜻蛉【名】〔動〕蜻蛉の一種。全身赤きもの。

しやうじやう-にもん 聖淨二門【名】〔佛〕聖道門と淨土門との併稱。

しやうじやう-のみ 猩猩飮【名】猩猩の如く、多量の酒を一息に飮むこと。

しやうじやう-のり 猩猩海苔【名】紅色に染めたる沖獨活(おきうど)。

しやうじやう-は 尙商派【名】〔經〕ちゆうしやうしゆぎ(重商主義)に同じ。

しやうじやう-ばかま 猩猩袴・粉條兒菜・玉帶春苜【名】百合(ゆり)科に屬する多年生の草。山地に自生し、高さ一尺餘。葉は萬年青のに似て、更に幅廣く、莖を圍んで叢生す。春、花莖を抽んでて、淡紅紫色の總狀花を著く。

しやうじやう-ひ 猩猩緋【名】『支那にて、印度人は猩猩の血を取りて、紅色の染料とすといふ說あるによりていふ。せいけつ(猩血)參照』少し黑みがかりたる紅色、又その色なる毛織物。丹波與作「猩猩緋の道中羽織」

しやうじやう-ふうろ 猩猩風露【名】〔植〕ひめふうろ(姬風露)に同じ。

しやうじやう-ふくえふ 掌狀複葉【名】〔植〕『英 Palmately compound leaves』各小葉が共同葉柄の先端より生ずる複葉。葉片の數は二・三・四・五・七・九等なるを普通とす。七葉樹(とち)・通草(あけび)等の葉、これなり。又その再三同樣に分裂して、その先端に各一葉片を著くる時は、再出(又は二回)・三出(又は三回)掌狀複葉等と呼ぶ。(羽狀複葉に對して)

しやうじやう-ぼく 猩猩木・一品紅【名】〔植〕大戟(たいげき)科に屬する灌木。高さ二尺乃至六尺計、葉は互生にして軟毛あり。卵狀楕圓形乃至披針形をなし、稍鈍頭をなし、全緣又は緩狀の淺裂をなす。枝の上部の葉は全緣にして、上面鮮紅色を呈す。冬季枝頭に帶綠黃色の小花聚繖花序をなして開く。原產地はメキシコの熱帶地方と中部亞米利加となれども、近年舶載して觀賞用に供す。猩猩草もその一種なり。

しやうじやう-みだれ 猩猩亂【名】能(のう)の曲の「猩猩」の曲に行はるるもの。

しやうじやう-みやく 掌狀脈【名】〔植〕網狀脈の一種。葉脚より射出せる數箇の大

脈より更に枝脈を支出せるもの。槭(カヘ)・胡瓜(キウ)・桐などの葉に見るもの、これなり。(羽狀脈に對して)

しやうじやう-みやくえふ 掌狀脈葉【名】〔植〕『英 Palmately (又 Digitately) veined leaves』掌狀脈を有する葉。(羽狀脈葉に對して)

じやうじやう-よし 常常好【名】次條を見よ。

常常好の晴著(ギレ)無し【句】「常常綺羅(シヤウシヤウキ)の晴著無し」に同じ。〔諺語〕

しやうじやう-らく 淸上樂【名】〔音〕黄鐘(ワウシキ)調に屬する雅樂。

しやうじやう-れつ 掌狀裂【名】〔植〕『英 Palmate』葉の、掌狀に裂開せる形。

(しやうじやうれつ)

じやうしや-きん 上斜筋【名】〔醫〕くわつしやきん(滑車筋)に同じ。

しやうしや-きよく 尙舍局【名】とのもれう(主殿寮)の唐名。

じやう-じやく 常寂【名】〔佛〕『常は生滅の相を離れたること、寂は煩惱の相を絕ちたること』常住にして寂靜(ジヤク)なること。法身と解脫(ゲダ)と。

じやうじやく-くわう 常寂光【名】〔佛〕■一常住と寂靜と光明と、即ち法身と解脫(ゲダ)と般若(ハン)との德を備へたること。■二じやうじやくくわうど(常寂光土)の略。 榮花「その佛の所住のところを常寂光と名づく」

じやうじやくくわう-ど 常寂光土【名】〔佛〕四佛土の一。根本無明を全く斷ぜし者の居る、常住・寂靜(ジヤク)・光明の國土。寂光淨土。寂光土。寂光。寂光の都。法性(ホツシヤウ)の都。本覺眞如の都。寂光の本土。(凡聖同居(ボンシヤウドウゴ)土・方便有餘(ウヨ)土・實報(ホウ)無障礙土に對して)

しやうしや-じよう 尙舍丞【名】主殿允(ジヨウ)の唐名。

しやうしや-ちよくちやう 尙舍直長【名】主殿助(スケ)の唐名。

しやうしや-ほうぎよ 尙舍奉御【名】主殿頭(カミ)の唐名。

しやうしや-れいし 尙舍令史【名】主殿屬(サカン)の唐名。

しやう-しゆ 將種【名】將家の子孫。

しやう-しゆ 聖種【名】〔佛〕■一『聖者(シヤウジヤ)の種姓(スジヤウ)の義』入道して、三學を修する者。即ち三寶中の僧寶。■二衆聖を生ずる行法(ギヤウホフ)。衣服・飲食・臥具につきて、得る所に隨ひて喜足すると、惡を斷じ、善を修するを樂しむとを、四聖種と名づく。

しやう-しゆ 賞首【名】第一等の賞を受くる者。

しやう-しゆ 匠手【名】宮內省內匠(タク)寮の舊職員の一。判任の技術官にて、明治十九年設置、同二十二年廢止。

しやう-じゆ 聖主【名】せいしゆ(聖主)に同じ。 盛衰記「聖主より凡庶に至るまで、眞乘の結緣、萬方に普し」

しやう-じゆ 聖衆【名】〔佛〕極樂淨土にある菩薩の總稱。(賢衆(ケンジユ)に對して) けんじやうじゆ(賢聖衆)參照。 榮花「諸の菩薩・聖衆、奇聲・伎樂をして喜び迎へ取りたまふ」

聖衆の來迎(ライガウ)【句】〔佛〕次條に同じ。 平家「聖衆の來迎にておはせば、などか引攝(インゼフ)なかるべき」

聖衆來迎(ガウ)【句】〔佛〕『觀無量壽經に見ゆ』念佛行者の臨終に、阿彌陀佛の淨土より菩薩たちの來り迎ふること。 榮花「これは聖衆來迎かと見ゆ」

しやう-じゆ 正受【名】〔佛〕『梵 Samaya(三昧)の譯語。三は正、昧は受の義、即ち寂靜・明徹の心に、諸法の實相を正受して諦觀する意』ぜんぢやう(禪定)に同じ。

じやう-じゆ 樟樹【名】〔植〕くす(樟)に同じ。

じやう-しゆ 城守【名】■一城に據りて守ること、又その人。■二次條に同じ。

じやう-しゆ 城主【名】■一城を守る主將。■二戰國時代にて、一城に主たる者の稱。■三江戶時代の、國持・並びにこれに次ぎて居城を有するもの。

じやう-しゆ 上酒【名】上等なる酒。よき酒。醇醪。

じやう-しゆ 上手【名】『顏氏家訓の雜藝篇に見ゆ』じやうず(上手)に同じ。

じやう-しゆ 情趣【名】おもむき。おもしろみ。趣致。情致。

じやう-しゆ 淨衆【名】〔佛〕淸淨持戒の僧衆。

じやう-しゆ 常主【名】定まれる主人。

じやう-しゆ 上趣【名】〔佛〕三界の中、色界(シキカイ)と無色界(ムシキカイ)との總稱。

じやう-しゆ 上首【名】〔佛〕一座の大衆(ダイシユ)中の主位。一人なることとあり、二人以上なることとあり。

じやう-じゆ 上壽【名】壽命の最も長きこと。(中壽・下壽に對して) 太平記「不老・不死の上壽を保てり」

じやう-じゆ 成就【名】できあがること。成り調ふこと。成功。 謠曲(松風)「攝取の願望、おのおの成就圓滿の靈地」

しやう-しゆう 正宗【名】〔佛〕正眞の宗旨。 太平記「釋氏化導(ケダウ)の正宗」

じやう-しゆう 淨宗【名】〔佛〕じやうどしゆう(淨土宗)の略。

しやうしゆう-ぶん 正宗分【名】〔佛〕さんぶんだん(三分段)を見よ。

じやうしゆ-かく 城主格【名】城主と同樣の待遇を受くるもの。

じやう-しゆく 上宿【名】■一『じやうばん(上番)』を見よ』しゆくちよく(宿直)に同じ。■二古、天皇御寢の後、鬼の間に宿直すること。うへぶし。

じやうしゆたら-しゆう 常修多羅宗【名】〔佛〕『修多羅(Sūtra)は經(キヤウ)の意。涅槃經は涅槃常住の義を說けるによりて常修多羅といふ』ねはんしゆう(涅槃宗)の異稱。

しやう-じゆつ 詳述【名】詳かに述ぶること。詳說。

じやう-じゆつ 上述【名】上のくだりに述べたること、又そのもの。

しやうしゆ-ほ 匠手補【名】宮內省內匠(タク)寮の舊職員の一。等外の技術官にて、明治十九年設置、同二十二年廢止。

しやう-じゆん 奬順【名】『孝經の事君章に「奬二順其美一匡二救其惡一」とあり』奬(スヽ)めて爲さしむることと、順ひて行ふことと。奬勵と順行と。

じやう-しゆん 上春【名】陰曆一月の異稱。

じやう-じゆん 上旬【名】月の一日より十日までの稱。上澣。初旬。(中旬・下旬に對して)

じやうしゆん-くわ 常春花【名】〔植〕きんせんくわ(金盞花)に同じ。

しやうじゆ-らいがう 聖衆來迎【句】しやうじゆ(聖衆)の條下を見よ。

しやうじゆらいがう-ぐわん 聖衆來迎願【名】〔佛〕阿彌陀佛の四十八願中の第十九願。念佛行者の臨終の時、大衆親しくその人の前に現じて引接(インゼフ)せんとの願。

しやう-しゆゐ 正思惟【名】〔佛〕はっしやうだう(八正道)を見よ。

しやう-しよ 尙書【名】■一〔書〕『尙は上に通じ、上古の書の意。墨子の明鬼篇にその名はじめて見ゆ』しよきやう(書經)を見よ。■二『文書を尙(ツカサド)る義』支那の官名。秦の始皇帝の設置に係り、當時は單に文書の受授に任ずる、地位卑き職なりしが、漢代には少府の屬官となり、尙書令・尙書僕射(ヤ)・尙書丞・尙書郞の階級設けられ、後漢には、三公の上に立ちて、政務を主宰するに至り、六朝時代には政務を綜ぶる一省とし、梁はこれを六部に分ちて、事務を分掌せしめ、唐・宋代及び金に至りて、中央政府の首位に立ち、元は名を中書省と改め、尙書若干これに隸して、省務を分掌し、明は中書省中に六部を設けて、各部の長官を尙書と呼びしが、後、中書省廢せられ、六部各獨立の行政府たるに及びて、尙書は中央行政府における長官の稱となり、淸もまたこの制を襲用せり。■三べんくわん(辨官)の唐名。

しやう-しよ 象胥【名】『周禮の秋官に「象胥掌二蠻閩夷貉戎狄之國使一掌下傳二王之言一而諭說焉上」とあり』つうじ(通事)に同じ。

じやう-しよ 生處・生所【名】〔佛〕『毗曇論に「趣二彼生處一」とあり』死後、樂土に生るる處。 盛衰記「厭耶の生所を知らんとて、大菩提心を發し」 賀古敎信七墓廻「賽の河原とて童男・童女の生所あり」

しやう-じよ 庠序【名】『鄕校を、周にては庠といひ、殷にては序といひしに因る。庠は養にて、養老の禮を主として、人を敎育する意、序は射にして、射藝を習はす意といふ』がくかう(學校)に同じ。

じやう-しよ 常處【名】一定の居處。

じやう-しよ 上書【名】思ふ旨を書きて、官に奉るもの。たてまつりぶみ。

じやう-しよ 上所【名】■一昔、手紙の宛名の上に、上輩には「進上」同輩より少し上には「謹謹上」同輩には「謹上」と書く習なりし、その言葉。下輩には用ひず。■二名宛の所。あげどころ。

じやう-しよ 淨書【名】せいしよ(淸書)に同じ。

じやう-しよ 情緒【名】■一思につれて起る種種の情。「情緒亂れて、絲の如し」■二〔哲〕『英 Emotion』主として、利害の關係による認識に伴ひて生ずる情念。單純感情と情操との中間に位し、吾人の生活に關係すること最も多し。悲哀・怨恨・恐怖・憤怒等は利己的又は主我的情緒にして、愛情・同情等は社會的(又は主他的)情緒といふ。

じやう-しよう 上衝【名】のぼせ。けあがり。逆上。

しやう-じよう 相丞【名】だいじん(大臣)に同じ。

じやう-しよう 上昇・上升【名】■一のぼること。■二〔植〕全部斜に上方に向ひ、又は基部のみ斜に上方に向ひ、上部は直立すること。

じやう-じよう 上乘【名】■一〔佛〕勝れて最上なる佛乘。 盛衰記「眞言上乘の法の中に、如何なる法か、箇樣の在家の者の行ひ奉り、揭焉(ケチエン)の利生にあづかること候」■二勝れて最上なること。

じやうしよう-ぐん 常勝軍【名】戰ひて常に敵に克つ軍隊。

じやうじよう-くわんぢやう 上乘灌頂【名】〔佛〕最上の灌頂。眞言宗の灌頂にいふ。

じやうしよう-けい 上昇莖【名】〔植〕自ら直立すること能はず、他物に依りて、その位置を保つ莖。攀緣莖・纏繞莖の二種に分つ。

じやうしよう-じ 成勝寺【名】六勝寺の一。崇德天皇の御願に因りて、他の五寺と共に、京都北白河に在りしもの。保延五年落成、永久元年燒失す。

じやうしよう-ちゆうぢゆく 上昇中軸【名】〔植〕植物體の中軸にして、通常上方に生長するによりていふ。くき(莖)■一の異稱。上軸。

しやうしよう-ほふしんわう 性承法親王【名】〔人〕後水尾天皇第六の皇子。名は承法。豐宮といふ。仁和寺の門跡。一身阿闍梨となり、延寶六年薨ず。年四十一。

じやうじよう-ゐん 上乘院【名】もと山城國愛宕(オタギ)郡粟田(アハタ)鄕に在り、後に葛野(カド)郡池裏村に移りきといふ寺。門跡の一にて、上乘院門跡又は下河原(シモガハラ)門跡といひ、始は眞言宗にて、御室(オムロ)仁和寺に屬し、御室隱居の後、この院に移る例なりしが、のち天台宗より入りて相續するに至り、足利時代に至りて廢絕せり。

じやうじようゐん-もんぜき 上乘院門跡【名】前條を見よ。

しやう-しよく 傷食【名】しよくしやう(食傷)に同じ。

しやう-しよく 尙食【名】『食事を尙(ツカサ)る義』支那にて、古、天子の食膳を掌りし官。

じやう-しよく 牀褥・床褥【名】しとね。ねどこ。

じやう-しよく 淨拭【名】拭ひきよむること。

じやう-しよく 常食【名】■一日常の食物。■二一定の食事。

じやう-しよく 常職【名】■一日常の職務、また職業。■二一定の職務また職業。

じやう-しよく 上職【名】■一上位にある職員。■二だいふしよく(太夫職)に同じ。〔德川時代の遊廓の語〕

しやうしよく-きよく 尙食局【名】『支那唐・宋時代の殿中省の一局。天子の常膳を供することを掌りし所なるによりていふ』ないぜんし(內膳司)の唐名。

しやうしよく-ほうぎよ 尙食奉御【名】內膳正(ナイゼンカミ)の唐名。

しやうしよ-さいうたいじよう 尙書左右大丞【名】『支那隋・唐時代、尙書省、左右兩司に分れて、六部を分掌し、左右丞一人づつその事務を司り、門下省は我が國の太政官に當り、六部は八省に當るによりていふ』べんくわん(辨官)の唐名。

じやうしよ-さち 成所作智【名】〔佛〕四智の一。自利・利他の二業を成ずる智。凡夫・二乘の類を利せんがために、種種變化の事を成す智。如來の化身(ケシン)・化土(ケド)を現ずる等、諸の神通の所作は、すべてこの智の作用なり。

しやうしよ-しゆじ 尙書主事【名】せうし(少史)の唐名。

しやうしよ-せい 尙書省【名】■一しやうしよ(尙書)■二を見よ。■二だじやうくわん(太政官)の唐名。

しやう-しよゐん 紫陽書院【名】『府城の南門を距ること五淸里弱に當りて、紫陽山あるによりて名づく』支那南宋の朱熹がその生地なる安徽省徽州府に建てし學堂。因って、又その學を紫陽の學ともいふ。

しやうじ-ろく 姓氏錄【名】〔書〕しんせんしやうじろく(新撰姓氏錄)の略。

しやうし-ゑ 尙齒會【名】しやうしくわい(尙齒會)に同じ。

しやう-す 莊主【名】禪寺の役僧の一。寺田の耕作等の事を掌るもの。莊頭。

しやう-す 賞す【動佐變他】ほむ。よみす。賞讚す。

しやう-ず 請ず【動佐變他】まねく。請待(シヤウダイ)す。請引す。 竹取「かしこまりてしやうじいれてあへり」

しやう-ず 生ず【動佐變自】■一はゆ。おふ。うまる。發生す。■二おこる。出來す。發生す。

しやう-ず 生ず【動佐變他】■一はえさす。おほす。うむ。■二おこす。でかす。なす。

しやう-ず 唱ず【動佐變他】となふ。うたふ。 平家「專唱名號至西方と釋して、專ら名號を唱ずれば、西方に至り」

じやう-す 狀す【動佐變他】狀態を書きあらはす。めいじやう(名狀)參照。

じやう-ず 上手【名】■一技藝などの巧者。(下手(ヘタ)に對して) 源氏「いと物のじやうずなる女さへ、多くあつまりて」■二碁・將棋などの七段の位を有する人。助數詞のだん(段)■三參照。■三如才なきこと。口まへのうまきこと。おじやうず。

上手の猿が手を燒く【句】次條に同じ。〔諺語〕

上手の手から水が漏る【句】事に馴れたる人にても、思ひがけなく失敗することあり。弘法にも筆の誤。〔諺語〕

上手の猫が爪を隱す【句】「能(ノウ)ある鷹は爪を隱す」に同じ。〔諺語〕

上手を使ふ【句】相手の氣に入るやうにす。如才なくす。おもねる。 持統天皇歌軍法「ここが我等の老功、ぬらりくらりと何方付かずに上手を使うて歸りしが」

じやう-す 上衆【名】貴き人。(下衆(ゲス)に對して)〔古語〕 源氏「おぼえいとやんごとなく、上ずめかしけれど」

じやう-ず 成ず【動佐變自】おのづから目的に達す。成る。 野守鏡「內外の法、おのづから成ずるものなり」

じやう-ず 成ず【動佐變他】〔佛〕なし遂ぐ。完全に目的を達す。「無上菩提を成す」

じやう-すう 常數【名】■一ていすう(定數)に同じ。■二一定の數量。■三〔數〕『英 Constant』常に一定せる數。例へば圓周率の3.14159…なる、三角形の內角の和の二直角なる類。(變數に對して) ■四〔理〕『英 Constant』或物質において、一定の狀態の下にありては必ず一定する量。例へば比熱・比重・屈折率など。

じやうず-ごかし 上手倒【名】『じやうず(上手)■三を見よ』口まへ・動作など如才なくして、相手をごまかすこと。 今國姓爺「はあっと飛退き蹲り、頭を垂れて禮をなす。やあ盜人め、手並に怖ぢて、上手ごかし、くはぬくはぬと振上ぐる」

じやうず-ひき 上衆引【名】盲人の階級の一。

じやうず-めかし 上衆めかし【形二】貴人のさまにてあり。上﨟ぶりたり。〔古語〕 源氏「とみにも動かれず。あまりじやうずめかしと思したり」

じやうず-めく 上衆めく【動四自】貴人の如く見ゆ。〔古語〕 源氏「やんごとなき人に、いたう劣るまじう、じやうずめきたり」

じやうず-もの 上手者【名】他人に對して如才なくつきあふ人。 傾城名代紙衣「この女郎、極めてじやうずものにて」

しやう-すゐ 將帥・將率【名】軍を率ゐる總大將。

しやう-すゐ 傷悴【名】悲しみて、やせかじけたること。

しやう-ずゐ 祥瑞【名】めでたき前兆。吉兆。吉瑞。吉祥。瑞祥。
しやうずゐ 祥瑞【名】㊀〔人〕陶工。性は伊藤、一說に山田。通稱は五郎太夫、伊勢國松坂の人。後柏原天皇の御代に明國に赴き、磁器の製法を學びて歸り、肥前國伊萬里(イマリ)に窯(カマ)を開く。その作、質甚だ密に、釉藥(ウハグスリ)白く光澤ありて、藍色の圖樣を描き、手法豪放にして、雅致に富み、「五良大輔呉祥瑞造」の銘あり。祥瑞は、支那晉にて「しよんずゐ」とも呼ぶ。㊁前項祥瑞の作に係る陶器。
じやう-すゐ 上水【名】飲料に供するため、溝又は樋などにて導きたる水。(下水(ゲスイ)に對して)
じやう-すゐ 淨水【名】㊀清淨なる水。清水。㊁てうづみづ(手水)に同じ。
じやう-ずゐ 常隨【名】常に附隨ふこと。太平記「三年が間、常隨給仕申し候ひつつ、佛神三寶の御咎をも免れ」
じやうすゐ-がた 上水方【名】江戸幕府の職制の一。道方掛の一部にて、玉川・神田の兩水道の事を掌りしもの。
じやうすゐ-ち 淨水池【名】淨水場內又はその他に淨水㊀を蓄へ置く人造の池。塵埃の浸入、動・植物の發生等を防ぐ設備を施す。淨水場にありては、濾過池より出で來れる水を、更にここに導き入れて、一層靜置せしむ。
じやうすゐ-ぢやう 淨水場【名】水源より導き來りし所謂水道水を貯藏し、且つ清淨ならしむる所。沈澄池・濾過池・淨水池又は喞筒機室・配水管等の廣大なる設備あり。
しやうすゐらい-ちやう 掌水雷長【名】軍艦內の職員の一。水雷長の命を受けて、水雷長主管の兵備品中、機關長の管理に屬せざるもの一切を守衞し、水雷庫を整頓し、水雷術敎授上の事務を分掌するもの。
じやう-ぜ 淨施【名】〔佛〕きしや(喜捨)に同じ。
じやう-ぜ 常是【名】㊀德川時代に、丁銀通用の際、銀位の一定を證するため、紙に包み、封印をなす特權を幕府より授けられたる家。慶長年間、堺の町人湯淺作兵衞常是、家康より大黑の名字を與へられ、この特權を得しに始まる。㊁德川時代に、座銀より發行したる丁銀の極印として用ひし二字。㊂德川時代に、銀位を檢定し、丁銀を包み封ぜし所。
しやう-せい 象聲【名】〔語〕りくしよ(六書)を見よ。
しやう-せい 商勢【名】商業の形勢。商況。商狀。
しやう-せい 商星【名】しやう(商)㊃に同じ。
しやう-せい 將星【名】㊀支那にて、大將たる象(カタチ)ありといふ星。㊁しやうぐん(將軍)の異稱。
將星落つ【句】『支那後漢の諸葛亮の司馬懿(シイ)と五丈原に對陣中、死歿せし時、大星その陣中に落ちたりといふ傳說に本づく。ぶんせい(文星)參照』大將死す。
しやう-せい 彰旌【名】せいへう(旌表)に同じ。
しやう-せい 昌盛【名】さかんなること。隆盛。
しやう-せい 昌世【名】さかゆる世。昌代。
しやう-ぜい 正稅【名】『せいぜい(正稅)を見よ』王朝時代の官稻の一。官倉に納めおきて、國用に充てしもの。おほちから。ふとぢから。(公廨(クゲ)稻・郡稻に對して) 後紀「混合正稅二」 盛衰記「正稅官物を打ち留め、人の心をたぶらかし」
しやう-ぜい 商稅【名】商業に課する稅。商業稅。
しやう-せい 城勢【名】城の樣子。
じやう-せい 城西【名】都城の西の方。
じやう-せい 情性【名】㊀人の心情と性質と。こころ。性情。㊁〔哲〕じやうへき(情癖)に同じ。
じやう-せい 上世【名】いにしへ。上代。上古。
じやう-せい 上製【名】上等の製造。
じやう-せい 情勢【名】じやうきやう(情況)に同じ。
じやう-せい 常勢【名】常のありさま。定まれる形勢。
じやう-せい 常制【名】常に定まりたる制度。
じやう-ぜい 常稅【名】經常の租稅。
しやうぜい-し 正稅使【名】しやうぜいちやうし(正稅帳使)に同じ。
じやう-せいたい 上聲帶【名】〔醫〕かせいたい(假聲帶)に同じ。
しやうぜい-たう 正稅稻【名】正稅として徵收する稻。
しやうぜい-ちやう 正稅帳【名】四度公文(シドクモン)の一。地方の各國內の正稅の穀類及び雜用を記せる帳簿。稅帳。大帳參照。
しやうぜいちやう-し 正稅帳使【名】四度使(シドシ)の一。每年正稅帳を携帶して京都に上り、太政官に差出だししもの。國司これに任じ、九州にては、一旦太宰府に送り、太宰府より更に太政官に送る規定なりき。その帳簿は、太政官より民部省に下し、民部省は主稅寮にて檢閱・決算したり。正稅使。稅帳使。
じやうせい-どうじ 上淸童子【名】ぜに(錢)の異稱。
しやうぜい-もくろくちやう 正稅目錄帳【名】正稅の目錄を記したる帳簿。
じやう-せう 上焦【名】三焦の一。心臟の下にあるもの。
じやうせう-じ 誠照寺【名】越前國今立郡鯖江(サバエ)町に在る眞宗の寺。同宗誠照寺派の本山。本尊は阿彌陀如來。親鸞の留錫せし處。俗に鯖江御堂と稱す。
じやうせうじ-は 誠照寺派【名】〔佛〕眞宗の一派。本山は越前國鯖江(サバエ)の誠照寺、派祖は如覺。はじめ三門徒の一たりしが、明治維新後、一旦天台宗に屬し、また獨立して、眞宗十派の一となれり。
じやう-せき 城蹟・城跡【名】城のあと。城址。しろあと。
しやう-せき 掌跡【名】手のひらのあと。
じやう-せき 攘斥【名】はらひ退くること。
じやう-せき 讓責【名】せめとがむること。詰斥。呵斥。
じやう-せき 上席【名】㊀じやうざ(上座)に同じ。㊁階級の高きこと。「上席判事」
じやう-せき 常式【副】じやうしき(常式)の轉訛。(甲斐國の方言)
じやうせき-しや 上席者【名】階級の高き人。
じやう-せつ 詳說【名】つまびらかに說きあかすこと。細說。
じやう-せつ 淨刹【名】㊀〔佛〕『刹は梵(ボン)語kṣetra にて、國土と譯す』淸淨なる佛國。淨土。盛衰記「最後の十念を以て、淨刹の下品(ゲボン)に迎へ取りたまへ」㊁てら。寺院。梵刹。
じやう-せつ 常設【名】常に設けてあること。
じやうせつ-ちゆうさいさいばんしよ 常設仲裁裁判所【名】歐洲大戰前、外交の手段にては處理すること能はざる國際紛議を、直ちに仲裁裁判に付するに便ならしむる目的にて、和蘭國海牙(ヘイ)に常設せる仲裁裁判所。
じやうせつ-ゐゐん 常設委員【名】平素設け置く委員。常置委員。
しやう-せん 省錢【名】九六錢(クロク)・八丸(ハチ)等のごとき、その値百文に滿たざる錢を百文とすること。
しやう-せん 商船【名】商業上の目的を以て、航海の用に供する西洋形の船舶。商舶。
しやう-せん 晶腺【名】〔鑛〕しやうぞく(晶族)に同じ。
しやう-ぜん 生前【名】せいぜん(生前)に同じ。
しやう-ぜん 生善【名】〔佛〕「滅罪・生善」を見よ。
しやう-ぜん 鏘然【貌】しやうしやう(鏘鏘)に同じ。
じやう-せん 上僊・上仙【名】『天に昇りて、仙人となる義』とうせん(登仙)に同じ。
じやう-せん 上宣【名】上卿より宣達する詞。江次第「上宣令候」
じやう-せん 上船【名】船に乘ること。乘船。
じやう-せん 常饌【名】日常の食事。常餐。
じやう-ぜん【名】〔動〕みづすまし(水澄)を云ふ。(西國の方言)
じやう-ぜん 淨膳【名】精進(シヤウジン)料理の膳部。素食。
じやう-ぜん 成選【名】せいせん(成選)を見よ。
しやうせん-かうろ 商船航路【名】通商貿易の目的を以て通航する海上の道程。
しやうせん-がくかう 商船學校【名】㊀遞信大臣管理の下に、船舶の航海運用・機關の學術・技藝を敎授して、高等なる船舶職員たるべき者を養成する學校。㊁實業學校の一。普通學並びに船舶の航海・運用・機關及び造船等に關する學術・技藝の大意を

敎授する所。甲種と乙種とあり。
じやうせん-かよう【名】〔動〕みづすまし(水澄)を云ふ。(西國の方言)
しやう-せんぐう 正遷宮【名】神社の新築成りて、權殿(カリ)より本殿へ遷座すること。(假遷宮に對して)
しやうぜん-けい 將然形【名】〔語〕しやうぜんだん(將然段)に同じ。
しやうぜん-げん 將然言【名】〔語〕將然段の語。例へば「咲かず」「調べん」「善くば」「行くべからず」の「咲か」「調べ」「善く」「べから」の類。
しやうせん-ごそう 商船護送【名】戰時、局外中立國軍艦が海洋航行の自國商船を護送して、交戰國の軍艦に對して、その商船の戰時法違犯のものにあらざることを證明して、その臨檢・搜索の煩累と損失とを避くること。
しやうせん-しっぽう 省線七寶【名】七寶燒の一。その輪廓を作る針金を、酸類にて腐蝕せしめたるもの。しっぽうやき(七寶燒)參照。
しやうぜん-だん 將然段【名】〔語〕動詞・形容詞又は助動詞の、將然言として用ひらるる段、即ちその第一變化。未然段。將然形。
しやうせん-ちやう 商船長【名】商船の船長。
しやうせん-ほくわく 商船捕獲【名】敵國の商船を捕獲すること。
しやうせん-もくろく 商船目錄【名】保險者・傭船者その他の利害關係人に對して、その船舶の性格及び狀態を知らしめんがため、世界各國商船の檢査成績及び等級別を記錄したる書冊。
しやうぜん-もん 章善門【名】八省院二十五門の一。西面の中門にして、宣政門と相對し、左右に敬法・顯親の二門あり。
しやう-そ 障阻【名】さまたぐること。さしつかへ。
じやう-そ 上疏【名】事由を疏陳して上(タテマツ)ること。上書。上表。
じやう-そ 上訴【名】㊀上に訴ふること。訴訟。㊁〔法〕裁判の正當なることを擔保し、完全に私權保護の目的を達せしめ、兼ねて法則の解釋を一定する目的にて、裁判所のなしたる未確定の裁判に對し、これに不服なる者より、一定の期間內に、その上級裁判所に、これが取消又は變更を申し立つること。即ち控訴・上告・抗告の總稱。
しやう-そう 請僧【名】法會などに招請せられたる僧。狹衣「講師は、山の座主なりけり。しやう僧は六十人」
しやう-そう 聖僧【名】〔佛〕㊀斷惑證悟したる聖人。德行の最も勝れたる僧。㊁じやうざ(上座)㊂に同じ。㊂禪宗にて、僧堂の中央に祀る佛・菩薩・高僧の像等の稱。多くは、文殊菩薩或は憍陳如(ケウヂンニヨ)・賓頭盧(ビンヅル)・迦葉(カセフ)・須菩提(スボダイ)等の何れかを祀る。
しやう-そう 商僧【名】商業を營む僧。賈僧(マイ)。商聖(シヤウ)。下學集「賈子、マイス。商僧也」
しやう-そう 裳層【名】〔建〕しやうかい(裳階)に同じ。
しやう-そう 尙崇【名】あがめたふとぶこと。尊崇。
しやう-そう 請奏【名】古、諸司が、事件の起りし時、奏文を奉りて上請せしこと。
しやう-そう 聖聰【名】〔人〕淨土宗の僧。千葉氏胤の次男。字は酉譽。下總國の人。聖冏(シヤウゲイ)の弟子。江戸增上寺の開祖となる。應永二十四年寂す。年七十五。著書多し。
じやう-そう 上奏【名】㊀意見を天皇陛下に奏聞すること。奏上。㊁〔法〕貴族院又は衆議院が直接に意見を、又、各省大臣・宮內大臣・朝鮮總督・臺灣總督・關東都督・會計檢査院長等が、直接又は內閣總理大臣を經て、所部の奏任官の進退、所部官吏の敍位・敍勳を、又、皇室例の制定・改正もしくは廢止を要するものある時、宮內大臣が案を具して、天皇に奏すること。又單に、勅語に奉答し、もしくは慶弔等の儀式上の表辭を上るに過ぎざることあり。
じやう-そう 上宗【名】せんぞ。祖先。
じやう-そう 上層【名】㊀上方の層。うはかは。上部。(下層に對して)㊁じやうりう(上流)㊁に同じ。
じやうそう-あん 上奏案【名】帝國議會にて、上奏すべき意見を討議する案文。
しやうそう-こくし 正宗國師【名】〔人〕はくいん(白隱)に同じ。
しやうそう-じしや 聖僧侍者【名】禪宗の役僧の一。聖僧㊂に侍仕し、齋(トキ)に飯(ハン)を鳴らし、中夜に燈を剔(カ)くなどの事をなすもの。聖侍。彼岸侍者。彼岸衆。
しやう-そうじやう 正僧正【名】そうじやう(僧正)を見よ。
じやうそう-しやくわい 上層社會【名】じやうりうしやくわい(上流社會)に同じ。
じやうそう-かうぼ 上層釀母【名】麥酒の釀造中、醱酵の際、溶液の上層に浮びて醱酵を起すもの。(下層釀母に對して)
しやうそう-もつ 聖僧物【名】〔佛〕律僧の分に充てたる寺の物。
しやう-ぞく 戕賊【名】『戕も、賊も、殘(ソコナ)ひ殺す義』人を斬りころすこと。
しやう-ぞく 晶族【名】〔鑛〕『英Druse』或岩石の裂罅(レッカ)・空隙の周圍に、多くの結晶の並列して集合せるもの。晶腺。
しやう-ぞく 裝束・粧束【名】㊀室內・庭上・器物などを飾り裝ふること。大鏡「一條院の御卽位の日、大極殿裝束すとて、人人集まりたるに」㊁衣冠を著くること。みじたく。盛裝。さうぞく。盛衰記「侍二三人はなやかに裝束せさせて」㊂きもの。衣服。みなり。服裝。
裝束の家【句】武家時代に、世世裝束上の事を業とせし家、卽ち三條・大炊御門(オホヒミカド)・山科(ヤマシナ)の諸家。
裝束の假(カ)【句】王朝時代に、外官の拜命後に給せられし休暇。日數は、任地の距離に隨ひて差異ありき。
裝束の傘(カサ)【句】武家時代に、裝束著用の際、從者に持たせし傘。廣さ八尺を本とし、弓を持ちて馬に乘る時、その弓の濡れぬほどに作りたりといふ。太平記「裝束の唐笠ほどなる光物」
しやう-ぞく 裝束【動四自】さうぞく(裝束)に同じ。
じやう-そく 常則【名】常の法則。通常の規則。
じやう-そく 上足【名】上席の門弟。高足。逸足。
じやう-ぞく 上蔟【名】蠶兒の、すでに適度の發育をなしたる時、繭を造らするため、集めて、蔟(マブシ)にのぼすること。
じやうぞく-くわげん 上屬和絃【名】じちゆうくわげん(次中和絃)に同じ。
しやうぞく-ざつじせう 裝束雜事抄【名】〔書〕淨衣(ジヤウエ)・半尻・布衣・臣下袍・闕腋(ケツテキ)・小袖・下襲(シタガサネ)等のことを記せるもの。一卷。藤原永行の著。
しやうぞく-し 裝束司【名】中古、天皇の行幸・大嘗會・御禊・大葬などに際し、臨時に設けられて、服飾の事一切を司りし職。定員なく、聖武朝より鎌倉時代まで斷續して行はれたり。
しやうぞく-しふせい 裝束集成【名】〔書〕男女の裝束に關する一切を輯めて、その沿革の參考に資すべき古記錄を拔粹したるもの。十二卷。壺井義知もしくはその門人などの著ならんといへど、確かならず。
しやうぞく-しよくもんづゑ 裝束織文圖會【名】〔書〕裝束の種類を網羅し、その色目・織文をも圖解したるもの。一卷。松方辰方(トキカタ)の著。故實叢書に收む。
しやうぞく-づしき 裝束圖式【名】〔書〕諸種の裝束の圖を示して、その大略を示したるもの。二卷。著者詳かならず。
しやうぞく-づつ 裝束筒【名】しとづつ(尿筒)に同じ。
しやうぞく-の-あな 裝束孔【名】ひびきのあな(響孔)に同じ。
しやうぞく-ばこ 裝束箱【名】衣服を入るる箱。拾遺大皇歌車法「それ裝束箱・懷中刀入れさせよ」
しやうぞく-はじめ 裝束始【名】㊀衣裳を始めて著くる儀式。拾遺大皇歌車法「龍田明神の宮にて、裝束始の儀式を行ひ、男子の兄弟あるならば、公家になして冠させよ」㊁夏の休業期終りて、秋に入り、始めて行ふ能樂。(裝束納に對して)
しやうぞく-ばり 裝束針【名】衣冠などの裝束を縫ふに用ひし針。

しやうぞく-ひき 裝束祕記【名】〔書〕主上の御束帶・御服・院中の御束帶・御衣冠・御烏帽子・直衣(ナホシ)、臣下の衣冠・束帶及びその著用の事を記せる書。一卷。著者詳ならず。
しやうぞく-びな 裝束雛【名】裝束を著けしめたる雛人形。
しやうぞくぶんしよく-すゐだん 裝束文飾推談【名】〔書〕裝束の種種の紋につき、舊記を引き、且、自說を加へたるもの。一卷。壺井義知の著。
しやうぞく-をさめ 裝束納【名】夏期に入るにつけて、能裝束を納むること、及びその期に行ふ能樂。(裝束始に對して)
じやうそ-けん 上訴權【名】〔法〕上訴をなし得る權利。ふたいじやうそけん(附帶上訴權)參照。
じやうそ-さいばんしよ 上訴裁判所【名】上訴審の裁判所。地方裁判所・控訴院・大審院の內これに當る。「審判。
じやうそ-しん 上訴審【名】〔法〕上訴㊂の
しやう-そつ 將卒【名】大將と兵卒と。
じやうそ-ひよう 上訴費用【名】上訴の裁判費用。
じやうそ-まうしたて-しよ 上訴申立書【名】〔法〕上訴をなすに要する書面。即ち控訴狀及び控訴申立書、上告狀及び上告申立書・抗告狀及び抗告申立書の總稱。
しやう-そん 正尊【名】謠曲の一。賴朝の命にて、土佐坊正尊(昌俊)の、義經を討ちに向ひしことを作れるもの。
じやう-そん 讓遜【名】そんじやう(遜讓)に同じ。「略。
じやう-だ 常蛇【名】「常山の蛇勢(ダセイ)」の
しやう-たい 正體【名】㊀神佛などのまことのからだ。本體。著聞「かの御正體にたがふことなかりけり」㊁變化(ヘンゲ)せぬものの姿。也哥「化物の正體見たり枯尾花」㊂たしかなる精神。正氣(シヤウキ)。沙石集「時至らざりけるや、皆正體なき事にてありけれども」
正體なみだ【句】『正體無くの無を淚の「な」に言掛けたる語』正氣(シヤウキ)を失ひて泣く淚。心中宵庚申「愼み深き堅親仁、惡口交りの口說泣、二人の娘も正體なみだ」
しやう-たい 昌泰【名】醍醐天皇の御代の年號(紀元一五五八年—一五六〇年)。
しやう-だい 昌大【名】盛んに大なること。
しやう-だい 昌代【名】しやうせい(昌世)に同じ。
しやう-だい 唱題【名】〔佛〕經の題目を唱ふること。日蓮宗にて「南無妙法蓮華經」と唱ふる類。しやうだいしゆう(唱題宗)參照。
しやう-だい 請待【名】『延請・待遇の義』人を請じてもてなすこと。招待。
しやう-だい 掌大【名】手のひらほどの大きさ。小さき地域又は物の譬にいふ語。
しやう-だい 章臺【名】しやうくわのだい(章華臺)の略。
じやう-たい 上腿【名】〔醫〕下肢の上部、即ち骨盤より膝までの間。大腿。(下腿に對して)「部分。
じやう-たい 上體【名】身體の、腰より上の
じやう-たい 上帶【名】小銃の銃身を銃床に緊密せしむる環の、銃口に近き點にあるもの。(下帶に對して)「を見よ。
じやう-たい 上台【名】さんたいせい(三台星)
じやう-たい 狀態【名】ありさま。なりふり。すがた。
じやう-たい 情態【名】㊀心情と狀態と。㊁まことのありさま。
じやう-たい 常態【名】つねのさま。
じやう-だい 上代【名】㊀じやうせい(上世)に同じ。㊁古、上卿の事故ある時、これに代りて、事を執りし大辨。
じやう-だい 城代【名】㊀君主に代りて、その居城を守る職。㊁次條の略。
じやうだい-がらう 城代家老【名】るすがらう(留守家老)に同じ。
しやうたい-けん 請待券【名】請待せし證として渡しおく書附又は切符。招待券。
しやうたい-こく 清泰國【名】〔佛〕ごくらくじやうど(極樂淨土)に同じ。
じやうだい-じ 城大寺【名】とうだいじ(東大寺)の異稱。
しやうたい-じやう 請待狀【名】請待の通知書。招待狀。
しやうだい-しゆう 唱題宗【名】〔佛〕『唱題を專要とする宗旨なるよりいふ』にちれんしゆう(日蓮宗)の異稱。(宗外の人より呼びていふ)
じやうだい-ぞめ 上代染【名】更紗と小紋染との中間に位する染模樣。
しやうたい-び 請待日【名】せうたいび(招待日)に同じ。
しやうだいふ-いも 淸太夫芋【名】〔植〕『この物の栽培を奬勵せし武藏國秩父(チチブ)の代官河原淸太夫の名を取りて呼びしものならんといふ』じやがたらいも(馬鈴薯)に同じ。
しやう-たう 正當【名】㊀せいたう(正當)に同じ。㊁僞り飾らぬこと。實直。樸實。㊂正しく忌日に當れる日。榮花「御正當には、殿にて、經・佛など」
しやう-たう 傷悼【名】いたみかなしむこと。痛悼。哀悼。
しやう-たう 商湯【名】〔人〕『しやう(商)國を見よ』たうわう(湯王)に同じ。
しやう-だう 餉道【名】りやうだう(糧道)に同じ。「と。
しやう-だう 獎導【名】すすめみちびくこと。
しやう-だう 唱道・倡道【名】『唱(トナ)へ道(イ)ふ義』みづから魁となりてとなふること。廣く告げふらすこと。稱道(シヨウダウ)。
しやう-だう 唱導【名】〔佛〕㊀佛法を唱說して、衆生を化導(ケダウ)すること。㊁しやうだうし(唱導師)の略。盛衰記「凡僧なれども、この澄憲を唱導に招じたる施主故に」
しやう-だう 聖道【名】〔佛〕㊀證悟して、聖者となる道。㊁人間の中の智慧に富みたる賢聖(ケンシヤウ)が、この世に生存中、自力を以て、諸種の惑を解き、つひに成佛せんとする道。これを主張する教を聖道門と云ひ、淨土門と對立す。この二門の對立は、支那唐の道綽禪師の安樂集に始めて唱へられしものにて、龍樹菩薩の難行道・易行(イギヤウ)道の區別に淵源す。㊂寺の稚兒(チゴ)。太平記「禪僧になりたらば、沙彌・喝食に指をさされ、聖道になりたらば」
聖道の修行(シユギヤウ)【句】〔佛〕自力を以て成佛せんとする修行。即ち四諦(シタイ)・十二因緣・六度萬行等の總稱。盛衰記「聖道の修行ならば、凡聖(ボンシヤウ)元より二なし」「室。
しやう-だう 正堂【名】〔佛〕禪寺の方丈の
しやう-だう 正道【名】㊀せいだう(正道)に同じ。㊁〔佛〕正眞の佛道。
じやう-たう 常套【名】『套は、物の重なりあふ意より轉じて、前例に倣ひて行ふのみなる意に用ふ。きうたう(舊套)參照』ありふれたること。きまり切りたること。
じやう-だう 上堂【名】〔佛〕禪宗の行事の一。導師が、法堂の須彌座(シユミザ)上に登りて宗法を論ずるもの。「上京。
じやう-だう 上道【名】都に上(ノボ)ること。
じやうだう 上道【名】〔地〕備前國六郡の一。郡役所を西大寺(サイダイジ)町に置く。
じやう-だう 成道【名】〔佛〕㊀悟を開くこと。大悟。成佛得道。㊁釋迦の八相の一。即ち釋迦が、佛陀伽耶(ガヤ)なる菩提樹下、金剛座上諸魔を降し、廓然大悟して、一切種智を得、無上菩提に感ぜし相。
じやう-だう 常道【名】常に必ず由るべき道。尋常の道理。つねのみち。
じやう-だう 淨道【名】〔佛〕淸淨なる佛道。
じやうだう-き 成道忌【名】〔佛〕釋迦が成道したる日を緣として修する法會。その日に二月八日(因果經)・四月八日(方等泥洹經)・三月八日(西域記)・三月十五日(西域記)・五月八日等の異あれども、我が國にては、譬喩經に據りて、十二月八日と定め、この日も、佛生會(ブツシヤウヱ)と同じく灌佛す。臘八(ラフハツ)。成道會。
じやうたう-ご 常套語【名】常套となれる語。くちぐせ。「同じ。
しやうたう-し 娼褶子【名】かげま(陰間)に
しやうだう-し 唱導師【名】〔佛〕㊀說法を爲す人。唱導をなす人。㊁だうし(導師)㊀に同じ。
じやうたう-しゆだん 常套手段【名】くわんようしゆだん(慣用手段)に同じ。

しやうだう-もん 聖道門【名】〔佛〕しやうだう(聖道)を見よ。(淨土門に對して)
じやうだう-ゑ 成道會【名】じやうだうき(成道忌)に同じ。
じやう-たつ 上達【名】學術・技藝などの進みて、上手になること。
じやう-だつ 攘奪【名】ぬすみ奪ふこと。
しやう-たふ 牀榻【名】こしかけ。ねだい。
じやう-たぼ 上髱【名】『上等の髱といふ義。たぼ(髱)㊂を見よ』びじん(美人)に同じ。
じやう-だま 上玉【名】㊀上等の寶玉。㊁上等なるしろ物。(俚語)
しやう-だん 唱彈【名】㊀歌ふことと彈ずること。唱歌と彈奏と。㊁歌ひ且つ彈ずること。
しやう-たん 嘗膽【名】「臥薪嘗膽」を見よ。「と。
しやう-たん 傷嘆・傷歎【名】傷み嘆くこと。
しやう-たん 賞嘆・賞歎【名】感心して賞むること。讚嘆。嘆賞。
しやう-だん 章段【名】文章の段落。徒然「先聖の作れる內外の文にも、章段の缺けたる事のみぞ侍る」「對して)
じやう-たん 上端【名】上のはし。(下端に
じやう-たん 情端【名】いろけ。情。春情。
じやう-だん 常談【名】㊀つねの話。普通なる話。平話。㊁たはむれていふ話。ふざけていふ話。ざれごと。㊂たはむれ。おどけ。滑稽。㊃みちくさ(道草)㊁を云ふ。〔京都の語〕
じやう-だん 上段【名】㊀上の段。高き段。㊁一室中に、床を一段高く造り構へたる所。㊂じやうざ(上座)に同じ。㊃劍法の構への方の一。柄を兩手にて持ち、頭の上にふりかざすもの。(中段・下段に對して)㊄屋形船の一部。
上段の間(マ)【句】〔建〕書院造の建物にて、普通の座敷よりは特に床(ユカ)を一段高くして作れる座敷。貴賓を請待する時の席とす。「ざれごと。
じやうだん-ぐち 常談口【名】おどけぐち。
じやうだん-ごと 常談事【名】たはむれごと。ざれごと。
しやう-たんじやうび 正誕生日【名】その人の誕生したる當月當日。
じやうだん-どこ 上段床【名】座敷よりは一段高く作れる床の間。
しやう-ち 聖智【名】〔佛〕眞如實相を知る智。眞智。
しやう-ち 正智【名】〔佛〕こんぽんち(根本智)に同じ。(俗智に對して)「じ。
しやう-ち 生地【名】せいち(生地)㊀に同
しやうぢ 正治【名】土御門天皇の御代の年號(紀元一八五九年—一八六〇年)。
じやう-ち 上地【名】㊀上等なる土地。㊁土地を官に上納すること、又その土地。
じやう-ち 上知【名】知行(チギヤウ)を官に上納すること。
じやう-ち 上智【名】最もすぐれたる智慧、又その智慧を有する人。(下愚に對して)平家女護島「生死不定は上智・博識も辨ずべからず」
上智と下愚とは移らず【句】『論語の陽貨篇に「惟上智與下愚不移」とあるに本づく。顏氏家訓にも「上知不敎而成、下愚雖敎無益」とあり』普通の人の性はほぼ相同じきが故に、習慣の善惡によりて、賢とも愚ともなるべけれど、上智の者と下愚の者とは、性質固定して、習慣によりて變化することなし。〔諺語〕
じやう-ち 淨智【名】〔佛〕淸淨にして、煩惱を絕ちたる智。
じやう-ち 淨地【名】『淸淨なる土地の義』㊀寺などのある土地。㊁僧侶の飯醬をおく處。
じやう-ち 城地【名】城と領地と。
じやう-ち 城池【名】㊀城と濠(ホリ)と。㊁城の周圍にある濠。
じやう-ち 常置【名】常に置くこと。常設。
じやう-ち 情致【名】おもむき。情趣。
じやう-ち 城雉【名】城上の墻。城墻。
じやう-ち 壤地【名】土地。土壤。
じやう-ぢ 上地【名】〔佛〕㊀じやうかい(上界)に同じ。(下地に對して)㊁菩薩の修行上の地位の高きもの。(下地に對して)
しやう-ぢき 正直【名】㊀正しくすなほなること。僞りなきこと。せいちよく。正當。㊁大きなる篦(ヘラ)。望一千句「正直の首(クビ)を照す月のかげ(といふ句に)『秋の夜をかけ桶を結ふなり』㊂桶屋などの用ふる、長さ四尺の鉋。㊃建家の歪(ユガミ)を正す器械。長き木の上下に橫木ありて、上の橫木の一端より錘を垂らしたるもの。上下の橫木の、錘を垂さざる方の端を柱に當て試むるに、錘を吊りたる繩の端、下の橫木の端に觸るれば、柱に歪なきを知るべく、然らざる時は、歪あるを知るべし。㊄しやうぢきぢやや(正直茶屋)の略。靜擧「正直は四手(ヨツデ)萬八舟で見る」
正直の頭(カウベ)に神宿る【句】正直なる人には、神の擁護あり。〔諺語〕
正直捨方便(シヤホウベン)【句】〔佛〕『法華經の方便品の偈(ゲ)に「於諸菩薩中、正直捨方便、但說無上道」とあるに本づく』法華經は、釋尊出世の本懷の經なるが故に、その說くところ、他の諸經におけるがごとき方便の權數にあらずして、徹頭徹尾最上妙の一乘法なること。謠曲(身延)「正直捨方便、無上の道に至るべし」
正直の儲(マウケ)は身に附く【句】正直に儲けたる金錢は、永久に失ふこと無し。「惡錢身に附かず」の反對。〔諺語〕
正直は一生の寶【句】正直なる行は、一生身を離れざる無形の寶なり。〔諺語〕
正直は最上の政策なり【句】『亞米利加のフランクリン(B. Franklin)の語Honest is the best policyに本づく』正直なる行動は、策略を用ふるよりも却りて好結果を奏するものなり。〔諺語〕
しやうぢき-かうべ 正直頭【名】『「正直の頭(カウベ)に神宿る」を見よ』正直なる性質。五人女「この男の正直かうべは人まかせ」
しやうぢき-ぢやや 正直茶屋【名】文化・文政時代に、江戶淺草馬道(ウマミチ)にありし蕎麥屋。吉原通ひの通路に當りしため、有名なりき。しやうぢき。
しやうぢき-もの 正直者【名】正直なる人。
しやう-ちく 湘竹【名】『博物志に「堯之二女、舜之二妃曰湘夫人、舜崩、二妃啼以涕揮、湘竹盡斑」とあり』斑文ある一種の竹。しやうれん(湘簾)參照。
しやう-ぢく 晶軸【名】〔鑛〕けつしやうぢく(結晶軸)に同じ。
じやう-ぢく 上軸【名】〔植〕じやうしようちゆうぢく(上昇中軸)に同じ。
じやうち-くわんりん 上地官林【名】社寺上地の官有林。
じやう-ちじ 淨智寺【名】相模國鎌倉郡小坂(コサカ)村大字山之內(ヤマノウチ)にある臨濟宗の寺。金峯山と稱し、昔時、五山の第四に列したり。北條師時の開基、開山は兀庵普寧。今は一宇の堂を存するのみ。
しやう-ちつ 緗帙【名】あさぎ色の絹にて造れる帙。「を見よ。
しやう-ぢん 聲塵【名】〔佛〕ろくぢん(六塵)
しやうぢん-とくだう 聲塵得道【名】〔佛〕六塵得道の一。この世界の人類の、說法の聲を聞きて、佛道を覺ること。野守鏡「昔は律浮世の曲を傳へて、聲塵御道の業をなしはべりしかども」
聲塵得道の國【句】〔佛〕『娑婆世界の人の最大多數は、聲塵得道をなすによりていふ』しやばせかい(娑婆世界)の異稱。野守鏡「娑婆世界は聲塵得道の國なるが故に、音律正しければ、內外の法おのづから成ずるものなり」
じやうちん-ろくじ 上鎭錄事【名】ぐんさう(軍曹)㊀の唐名。
しやう-ちやう 正長【名】稱光天皇の御代の年號(紀元二〇八八年)。
しやう-ちやう 正丁【名】大寶令の制定にて、男子の二十一歲乃至六十歲以下にて、壯健なる者。せうちやう(少丁)・らうちやう(老丁)・しやうによ(正女)參照。
しやう-ちやう 庄長【名】㊀しやうじ(莊司)に同じ。〔莊長〕㊁臺灣にて、廳長又は支廳長の指揮・命令を承けて、庄內の行政事務を補助執行せしもの。明治四十二年廢止。
しやう-ちやう 省長【名】省㊂の民政長官。督軍と相並んで、一省を鎭撫す。
しやう-ちやう 省帳【名】『民部省にて調

…製・保監せしによりていふ』**づちやう**(圖帳)に同じ。 東鑑「奥州羽州兩國省帳」

しやう-ちやう 匠丁【名】昔、匠人として役せられし正丁。飛驒國より毎年貢進せられたり。 三代實錄「飛驒國年貢二匠丁一百人一」

しやう-ぢやう 正定【名】〔佛〕㊀はつしやうだう(八正道)を見よ。 ㊁しやうぢやうじゆ(正定聚)の略。

じやう-ちやう 上帳【名】蠟燭のつつみ紙。

じやう-ぢやう 上聽【名】じやうぶん(上聞)に同じ。

じやう-ぢやう 上場【名】芝居にて、或狂言を舞臺にかけて演ずること。上演。

じやうちやう-くわん 上長官【名】陸・海軍の佐官と佐官相當官との稱。

しやうちやう-こばん 正長小判【名】古金貨の一。楕圓形にして、縱二寸三分・橫一寸一分、面の上部に「正長」の二字、中部に桔梗花、下部に花押の極印あり。正長は、鑄造の年代なりや、鑄造者の名なりや、詳かならず。

しやうぢやう-じゆ 正定聚【名】〔佛〕『正(タダ)しく佛果を得るに定まれるよりいふ』三聚の一。不退轉の地位に入りたる菩薩衆。淨土門にては、信心を得たる者は、來世において必ず成佛すべしとするが故に、この中に入る。(邪定聚・不定聚に對して)

しやう-ちやく 正嫡【名】せいてき(正嫡)に同じ。

じやうちやく-え 上著衣【名】〔佛〕さんえ(三衣)を見よ。

じやう-ぢゆ 常住【名】〔佛〕じやうぢゆう(常住)㊁に同じ。

しやう-ちゆう 掌中【名】㊀手のうち。たなごころのうち。掌裡。 ㊁領有の範圍。

掌中に入る【句】『通鑑綱目に「劉裕伐二南燕一過二大峴一燕兵不レ出、裕擧レ手指レ天、喜形二於色一、左右曰、公未レ見レ敵而先喜、何也。裕曰、兵已過レ險、士有二必死之志一餘糧棲レ畝、人無二匱乏之憂一虜已入二吾掌中一矣」とあり』先方の事情を明かに知了す。

掌中の珠【句】『杜甫の寄二漢中王一詩に「掌中探見一珠新」とあり』最愛の子に譬へていふ語。「掌中の珠を失ふ」

しやうちゆう 正中【名】後醍醐天皇の御代の年號(紀元一九八四年—一九八五年)。

しやう-ぢゆう 生住【句】しやう(生)の條下を見よ。

じやう-ちゆう 城中【名】城のなか。城內。

じやう-ぢゆう 常住【名】㊀常に住めること。常に住みてあること。 平家「常往の偕……御琵琶を奏る」 ㊁〔佛〕生滅(シヤウメツ)變化せずして、常に存在すること。眞如(シンニヨ)の理體。(無常に對して) 徒然「常住ならんことを思ひて、變化の理を知らねばなり」

常住如法(ニヨホフ)の月【句】〔佛〕眞如の理體の佛道修行者の證悟の目的物として仰がるるを、月に譬へていふ語。 鸚鵡小町「顛倒・無明の妄雲、徒に常住如法の月を隱して」

常住の燈火(トモシビ)【句】〔佛〕㊀眞如の理の凡夫の迷妄を照破するを、燈火に譬へていふ語。 ㊁「月、常住の燈火を挑(カカ)げ」を見よ。

常住不斷【句】常に斷えざること。ふだん。つね。

常住不變【句】〔佛〕眞如の理體の變化なきこと。

常住不滅【句】「常住不斷」に同じ。 平家「常住不滅、實報・寂光の生身(シヤウジン)の御佛と思し召し准へて」

じやう-ぢゆう 常住【副】つねに。ふだん。じやうしき。

常住坐臥【句】坐するにも臥すにも。

しやう-ぢゆう-いめつ 生住異滅【句】しやう(生)の條下を見よ。

じやうちゆう-げぼん 上中下品【名】〔佛〕阿彌陀佛の淨土に往生すべき機類の三種、卽ち上品と中品と下品と。くぼん(九品)參照。

上中下品の來迎(ライガウ)【句】〔佛〕臨終に、上中下三品の機類に應じて、それぞれ來迎を受くること。 著聞「上中下品來迎の儀」

じやう-ぢゆうこく 上柱國【名】正二位の唐名。

じやうぢゆう-じ 淨住寺【名】山城國葛野(カド)郡松尾村葉室(ハムロ)にある黃檗宗の寺。もと律宗。葉室中納言入道定然の開山、叡尊の開基。僧鐵牛の中興。葉室家の菩提所たり。

じやうぢゆう-じ 常住寺【名】山城國洛西(西堀川の西、一條の南)にありし天台宗の寺。本尊は藥師佛。平安遷都と同時に奈良より移轉せしもの。天慶以後の事跡詳かならず。一名、野寺。

しやうちゆう-ぼん 掌中本【名】袖珍本の如き一種の小本。

じやうぢゆう-ゐん 常住院【名】山城國愛宕(オタギ)郡にありし天台宗の寺。園城寺門跡の一。證空を開祖とし、爾來門跡相繼ぎて、應永年中の道意に及びしが、その後の事跡詳かならず。

じやう-ぢゆう-ゑ-くう 成住壞空【句】じやう(成)の條下を見よ。

しやう-ちよ 彰著【名】あきらかにあらはるること。あきらかにあらはすこと。

しやう-ぢよ 商女【名】あきなひする女。

しやう-ぢよ 娼女・倡女【名】うたひめ。あそびめ。遊女。妓女。

じやう-ちよ 情緒【名】じやうしよ(情緒)の誤讀。

しやう-ちよう 象徵【名】『英 Symbol. 形象を以て、符徵とする義』觀念・思想・感情等を代表する符號的表現の總稱。比喩の最も進みたるものにて、佛教に於ける「印」と同じ。例へば、色ならば、白を純潔、赤を情熱・革命、黑を悲哀、青を理想の象徵とし、花ならば薔薇を戀愛、菫を溫情・貞淑の象徵とする類にて、美學上、聯想の一種として說明せらる。しんぼる。表徵。表象。

しやうちよう-しゆぎ 象徵主義【名】『英 Symbolism』㊀〔美〕宇宙・人生及び藝術を象徵として觀ずる美的態度、又象徵によりて、思想及び感情の內容を表現する藝術上の樣式、又美的態度を批評し、或は說明するに當り、象徵を最上の原理となすもの。しんぼりずむ。 ㊁〔哲〕事物を宗教的意義の象徵として、宗教上に用ふること。しんぼりずむ。

しやうちよう-げき 象徵劇【名】或思想を、象徵を用ひて表現したる劇。

しやうちよう-は 象徵派【名】〔美・哲〕『英 Symbolist』象徵主義を主張する流派。

じやうち-りん 上地林【名】舊藩時代に社寺領たりし森林の、明治四年政府に上地せしめられしもの。社寺上地林。

じやうち-ゐん 常置員【名】常置の委員。

じやうち-ゐゐん 常置委員【名】繼續しておく委員。常設委員。

しやう-づ 掌圖【名】〔兵〕略圖よりも精密にして、やや正則圖に近き圖。地圖を補修して、偵察したる景況を示し、或は諸種の築設・構造の設計を描くに必要なるもの。

しやうづ【名】きめう(奇妙)を云ふ。「伊勢國富田の方言」

じやう-つう 狀通【名】書狀をつかはすこと。又その書狀。 用明天皇職人鑑「幼なじみの本妻さへ、皇子方のものなれば、狀通にて緣切つたり」

しやうづ-か 三途川・葬頭河【名】〔佛〕さうづか(三途川)の訛。

しやう-つき 祥月【名】『支那の小祥・大祥に倣ひたるもの。せうしやう(小祥)參照』その人の死にし月と同じ月。命日の月。

しやう-づき 將附【名】敗軍して、大將の落ちゆく時、附添ふ者。

しやうつき-めいにち 祥月命日【名】しやうき(正忌)に同じ。

しやう-づけ 章附【名】淨瑠璃の稽古本に記せる、聲の抑揚・屈折等、すべて節を示す符號。例へばノ(上ぐる)、ヽ(下ぐる)、レ(跳ねる)の類を記入すること、又その記入ある稽古本。

じやう-つっぱり 情張【名】じやうばり(情張)の訛。 浮世床「婆婆ふさげと呼ばれたる、じやうつぱりのかかあざゑもん」

じやう-づめ 常詰【名】㊀常に出勤して居ること。つめきり。 ㊁常に來ること。

じやう-づめる 常詰める【動下一自】常詰(ジヤウヅメ)をなす。つめきりにす。 浮世風呂「髮は、髮結のお櫛さんが常詰める」

しやう-てい 匠丁【名】しやうちやう(匠丁)に同じ。

しやう-てい 詳禎【名】めでたきこと。めでたきしるし。吉祥。

しやう-てい 章程【名】『程は法式の義』㊀文章に綴りあらはしたる法式。法度・規約の箇條書。 ㊁事務執行の細則。

しやう-てい 障泥【名】あふり(障泥)に同じ。

じやう-てい 上帝【名】天の神。天の主宰者。天帝。造物主。

じやう-てい 上丁【名】上旬の丁(ヒノト)の日。

じやう-てい 上程【名】『道程に上(ノボ)る意』旅のかどで。發程。上途。發途。

じやう-てい 常棣【名】㊀〔植〕實の形、櫻桃(ユスラ)のに似て、食用に供し得る、一種の樹なりといふ。棠棣(タウテイ)。 右大將鎌倉實記「常棣の華鄂にして韡韡たらざらんや、兄弟牆に鬩げとも、外侮を防ぐ」 ㊁『詩經の小雅に常棣篇ありて、兄弟の情を述べたるよりいふ』はらから。兄弟。

じやう-てう 情調【名】㊀『杜牧の詩に「江南仲蔚多二情調一悵望春陰幾首詩」とあり』感情に富めるしらべ。 ㊁〔哲〕きぶん(氣分)㊁に同じ。

じやう-でき 上出來【名】すぐれたる出來。上作。

しやうてつ 正徹【名】〔人〕歌僧。姓は紀、字は清巖。東福寺の書記たりしより徹書記と稱す。和歌をよくす。その歌、諷世の意ありとて、山科(ヤマシナ)に謫せらる。長祿二年寂す。年七十九。

しやうてつ-ものがたり 正徹物語【名】〔書〕みづからの歌、古人の歌論、その他、歌詞の註釋・議論・雜談等を記せるもの。二卷。正徹の著。又その上卷のみを單行せしめて、徹書記物語と題せる板本あり。

じやう-てふ 城堞【名】城のひめがき。城墻。

しやう-てん 商店・商廛【名】あきなひする店。

しやう-てん 賞典【名】㊀褒美として賜ふ物。賞與。 ㊁賞典のさだめ。

しやう-てん 掌典【名】㊀つかさどること。 ㊁明治以後の職制の一。祭事・神饌を掌るもの。四年始めて神祇官に設置せられ、大・中・少の三等に分れ、奏任もしくは判任と定められしが、神祇官の神祇省と改稱せらるるや、又これに屬し、翌年神祇省の廢止と共に式部寮に轉屬し、十年一旦大・中・少に各權官を設けて六等に、分れしが、同年一等・二等・三等・四等の四階に改められ、十七年式部寮の式部職となるや、同職掌典部の一職員となり、等級の差別撤廢せられ、すべて奏任たるに至れり。

しやう-でん 聖天【名】だいしやうくわんぎてん(大聖歡喜天)の略。

しやう-でん 詳傳【名】詳かなる傳記。

じやう-てん 常典【名】常ののり。常例。

じやう-てん 上點【名】えいじはつぱふ(永字八法)を見よ。

じやう-てん 上天【名】㊀そら。天。(下土に對して) ㊁じやうてい(上帝)に同じ。 ㊂しようてん(昇天)に同じ。 ㊃『爾雅の釋天篇に「冬爲二上天一」とあり』四天の一。冬の天。

じやう-でん 上田【名】地味の肥瘠によりて田地に等級を設けたる中の、上等なるもの。その下に中田・下田・下下田を分ちて、合はせて四等とし、又は上田の上になほ上上田を設けて、五等とせしこともあり。(中田・下田に對して)

しやうてん-ぐ 聖天供【名】〔佛〕聖天を供養する法。

しやうてんぐ-りう 正天狗流【名】劍法の一派。池原五左衞門正重の創めたるもの。判官流。

しやうてん-こう 聖天講【名】大聖歡喜天の法會。

しやうてん-じちやう 掌典次長【名】掌典長を助け、掌典長事故ある時、代理をなす掌典部の高等官。

しやうてんじ-ます 正傳寺枡【名】中世以後行はれし一種の枡。正傳寺(所在不明)の領內に用ひられしものといふ。

しやうでん-じん 聖天神【名】しやうでん(聖天)に同じ。

じやう-てんだう 淨顚倒【名】〔佛〕してんだう(四顚倒)を見よ。

しやうてん-ちやう 掌典長【名】掌典部の長。部務を掌理する勅任官。

しやうてん-ぶ 掌典部【名】式部職の一部。掌典長一人(勅任)・掌典次長一人(勅任又は奏任)・掌典八人(奏任・名譽職となすを得)・內掌典六人・掌典補八人(以上判任)の職員ありて、祭事を司る所。

しやうてん-ぶし 正傳節【名】淨瑠璃節の一。寬延・寶曆の頃、宮古路(ミヤコヂ)豐後の弟子春富士正傳の創めしもの。一說に、京都の人醬油屋傳兵衞江戶に下り、吉原に住して、語り初めしものなるより、醬傳の二字を正傳に改めしものなりと。一時上方に流行せり。

しやうてん-ほ 掌典補【名】明治十年神部(カンベ)を廢して、置きたる掌典部の職員。判任官にて、祭典に從事す。

しやうてん-ろく 賞典祿【名】明治二年國家に功勞ありし人に褒賞せし秩祿。總高百萬石の中、二十萬石を、大政復古の功臣に、八十萬石を武功の者に賜ひしものにて、同十年に至りて、金祿公債證書を發行し、石高を金高に換算して、一時に下賜せり。

しやうと 昌圖【名】〔地〕支那滿洲盛京省の北部にある都會。南滿洲鐵道の停車場あり。

しやう-ど【名】せうどの誤。 懸八幷柱曆「下を覗けばとこやみに、何のしやうどは見えねども」

しやう-ど 性土【名】〔佛〕ほつしやうど(法性土)の略。

じやう-ど 城都【名】みやこ。城市。

じやう-ど 上都【名】みやこ。 東鑑「早出二上都一」

じやう-ど 上途【名】じやうてい(上程)に同じ。

じやう-ど 壤土【名】㊀つち。土地。土壤。 ㊁〔農〕『英 Loamy soil』埴土(ヘナツチ)よりも粘力少なく、砂土よりも濕潤にして、最も耕作に適する土。粘土に近きを粘質壤土といひ、砂土に近きを砂質壤土といふ。眞土。

じやう-ど 常度【名】㊀定まれる法度。 ㊁通常の程度。 ㊂日常の態度。

じやう-ど 淨土【名】〔佛〕㊀『淸淨なる國土の意』佛の過去の修行圓熟せるによりて報い來れる國土。三毒・五濁(ゴヂヨク)の業(ゴフ)を離れたる處なるよりいふ。毗盧舍那佛(ビルシヤナブツ)の蓮華藏世界、大日如來の密嚴(ミツゴン)淨土、阿彌陀如來の極樂淨土、釋迦如來の靈山淨土、藥師如來の淨琉璃世界等、有名なるが中に、阿彌陀如來の極樂淨土殊に名高し。淸淨世界。佛界。佛國。淨界。淨國。淨刹。覺苑。(穢土(ヱド)に對して) 落窪「よろづの事、淨土の心地するわが殿を打捨てて」 ㊁じやうどしゆう(淨土宗)の略。

淨土の主(シユ)【句】〔佛〕西方淨土のあるじ、卽ち阿彌陀佛。

淨土の五流【句】〔佛〕淨土宗の、その祖法然上人の弟子に由りて分立したる五種の流派、卽ち聖光房辨長の鎭西流、善惠房證空の西山派、皆空房隆寬の長樂寺流、覺明房長西の九品寺(クホンジ)流、成覺(ジヤウカク)房幸西の一念義の併稱。

淨土の八祖【句】淨土敎の正統を繼承し來りし三國の八人の祖師、卽ち馬鳴(メミヤウ)・龍樹・天親(以上印度)・菩提流支(ボダイルシ)(印度の人にして、唐朝武后の時、支那に來りし人)・曇鸞・道綽・善導(以上支那)・源空卽ち法然上人(日本)。淨土宗の鎭西流にてこれを用ふ。 三代男「淨土の八祖をはじめ、先祖の佛並べ書いて」

生ける淨土【句】㊀まことの佛の居る淨土。〔古語〕 源氏「いとかしこう生ける淨土の飾に劣らず」 ㊁現世の極樂。

しやう-とう 正統【名】せいとう(正統)に同じ。 正統記「弘法、六人の中に嫡嫡たり。…然れば、眞言の宗には正統なりといふべきにや」

しやう-とう 莊頭【名】〔佛〕しやうす(莊主)に同じ。

しやう-とう 聖燈【名】りゆうとう(龍燈)に同じ。

しやう-とう 牀頭・床頭【名】床のほとり。

しやう-とう 傷等【名】負傷の輕重により設けたる等差。

しやう-とう 掌燈【名】古、宮中の節會(セチヱ)の時、主殿寮(トノモリ)の官人、片手に脂燭を持ち、これを他の片手に持てる小さき焙烙(ハウロク)のごとき土器(カハラケ)にて受けつつ、御階を昇り、主殿司(トノモサ)の女官これを受取りて、手に持ちたるまま座に居りしこと。

しやう-とう 檣頭【名】ほばしらのかしら。

しやう-とう 檣燈【名】船燈の一種。汽船に

限りて用ひ、航海中前檣に吊して、その船の前面を示す白色の燈火。光力五海里に達し、羅針盤の二十點間を照すべく製造せるものなるを要す。

しやう-どう 章動【名】〔天〕『英Nutation 章動は支那天文學上の用語にして、その周期十八年六月即ち約一章(十九年)に一回の割合なるによりていふ』黄道極の周圍に於ける天極の運動の週期的變化。太陰と太陽とが各一定の週期を以て、赤道の南北に往來するによりて生ずる引力の變化のために起る。さいさ(歳差)參照。

じやう-とう 上燈【名】げんせう(元宵)を見よ。

じやう-とう 上冬【名】陰暦十月の異稱。

じやう-とう 城東【名】都城の東の方。

じやう-とう 常燈【名】㊀じやうとうみやう(常燈明)の略。 枕「みあかし、じやうとうにはあらで」 ㊁昔、海岸の要所・要所に、夜分常に點し燈火。今の燈臺の如きもの。たかとうだい。 ㊂じやうやとう(常夜燈)に同じ。

じやう-とう 上等【名】㊀高き等級。上級。(中等・下等に對して) ㊁最も勝れたること。優等。

じやう-とう 上騰【名】たちのぼること。上昇。

じやうとう 常騰【名】〔人〕法相宗の學僧。俗姓は高橋。京都の人。大和國大安寺に住す。博學にして、唯識に精通す。少僧都に任ぜられ、崇福寺の撿挍となり、弘仁六年寂す。年七十六。著書多し。

じやう-とう 上棟【名】むねあげ(棟上)に同じ。

しやうとう-がく 正等覺【名】〔佛〕とうしやうがく(等正覺)に同じ。

じやうとう-かんごちやう 上等看護長【名】りくぐんじやうとうかんごちやう(陸軍上等看護長)の略。

じやうとう-けいしゆ 上等計手【名】りくぐんじやうとうけいしゆ(陸軍上等計手)の略。

じやうとう-こうちやう 上等工長【名】りくぐんじやうとうこうちやう(陸軍上等工長)の略。

じやうとう-さいばんしよ 上等裁判所【名】府縣裁判所の裁判に服せずして控訴する者を覆審せし裁判所。明治八年設置、同十年廢止せらる。

しやうとう-じ 正燈寺【名】東京市下谷區龍泉寺町にある臨濟宗の寺。妙心寺の末寺。東陽山と號す。明治初年までは梅・紅葉の名所として名高く、又その地吉原遊廓に近きため、一層有名なりき。 五郎兵衛商賣「放蕩の種には正燈寺の紅葉・御殿山の櫻・八幡の開帳等なり」 御傳「こゝもとけ疾うに御立と正燈寺」

しやうどう-じ 猩同子【名】かあみんれえき同じ。

じやう-どうじ 上童子【名】どうじ(童子)㊁を見よ。

じやうとう-しき 上棟式【名】むねあげの儀式。

じやうとう-しつ 上等室【名】汽船などにて、上等客を容るる室。(中等室・下等室に對して)

しやうとうしやう-がく 正等正覺【名】〔佛〕とうしやうがく(等正覺)に同じ。

じやうとうしやう-がく 成等正覺【名】〔佛〕菩薩の因行(インギヤウ)を滿じて、妙覺の佛果を成就すること。成佛。 平家「悉達太子は、…難行・苦行の功によりてこそつひに成等正覺したまひき」 謠曲(東北)「すはや、火宅の門を、今ぞいづみ(出づ・和泉)式部は、成等正覺を得るぞありがたき」

じやうとう-そつ 上等卒【名】じやうとうへい(上等兵)の舊稱。

じやうごう-つばめ しやうごう燕【名】〔動〕燕雀(エンジヤク)類に屬する候鳥(ワタリドリ)。腹部は白色、背面と胸部とは暗褐色、尾の分岐極めて淺し。すなむぐり。すなむぐりつばめ。すなもぐりつばめ。

じやうとう-ていてつこうちやう 上等蹄鐵工長【名】りくぐんじやうとうていてつこうちやう(陸軍上等蹄鐵工長)の略。

じやうとう-ひん 上等品【名】上等の物品。(下等品に對して)

じやうとう-へい 上等兵【名】陸軍における最上級なる兵卒。伍長の次、一等卒の上に位す。

じやう-とうみやう 常燈明【名】神佛の前に、晝夜の區別なく絶えず燈しおく燈明。常燈。長明燈。續明燈。無盡燈。

じやうとう-もの 上等物【名】上等の品物。

じやうとう-もん 上東門【名】平安城の大内裡外郭門の一。外郭十二門の外なる脇門にて、上西門と共に、宮城の東西の北端の第一門たり。左衞門府これを衞る。土の門。

じやうとうもん-ゐん 上東門院【名】〔人〕ふぢはらあきこ(藤原彰子)を見よ。

じやうど-かうそうわさん 淨土高僧和讃【名】〔書〕かうそうわさん(高僧和讃)に同じ。

じやう-とき 常齋【名】時を定めて、始終變らず、齋(トキ)を僧侶に供すること。 狂言(ちはぐれ)「じやうときを下さるる御方が有って、毎月定めて、これへ來る。誠に粥から、御ときを下されて、その上に、結構なお菓子を下さるるが」

しやう-とく 生得【名】㊀〔佛〕『仁王經の下に「衆生識初一念識異二木石一生得レ善、生得レ惡」、又、大乘義章の三に「生得善心」などあり』生れながらにして得たる所の法。(修得(シユトク)・報得(ホウトク)等に對して)[性得] ㊁うまれつき。もちまへ。しやうぶん。天分。生分。せいとく(生得)參照。 平治「この人は生得勢(セイ)小さくおはしければ」

しやうとく-の-ほう 生得の報【句】〔佛〕しやうほう(生報)に同じ。 盛衰記「たとひ何となけれども、生得の報とて、身一つ助くる分はあるぞかし。いはんや清盛が身においてをや」

しやう-とく【名】〔動〕かなびしや(吹沙魚)を云ふ。〔肥前國の方言〕

しやう-とく 彰德【名】德を世にあらはすこと。又あらはれたる德。

しやう-とく 正德【名】中御門天皇の年號(紀元二三七一年—二三七五年)。

しやう-どく 瘴毒【名】瘴氣の毒。

しやうとく-あひかはせん 正德相川錢【名】しやうとくさじせん(正德佐字錢)に同じ。

じやう-とくい 常得意【名】平常の得意。

しやうとく-いちぶばんきん 正德一分判金【名】むさしいちぶばんきん(武藏一分判金)に同じ。

しやうとく-きん 正德金【名】江戸時代の通貨の一。武藏小判金と武藏一分判金との總稱。古金。武藏判。

しやうとく-ぎん 正德銀【名】江戸時代の通貨の一。正德丁銀と正德豆板銀との總稱。

しやうとく-きんぎん 正德金銀【名】正德金と正德銀との總稱。古金銀。

しやうとく-きゆう 昌德宮【名】㊀朝鮮京城にある李王家の居城。文祿の役に、日本軍の京城に入るに先だてこれを燒く。のち再建す。城内廣大にして、博物館・動物園・植物園を設く。㊁李王家の宮號。「昌德宮李王」

しやうとく-くわう 聖德皇【名】〔人〕聖德太子の威德を追尊して、後世私に稱せし尊號。上宮法皇。 高僧和讃「聖德皇のめぐみにぞ」

しやうとく-くわん 尙德館【名】因幡國鳥取市にありし舊鳥取藩の學校。寶暦六年藩主池田重寬の創建、明治三年廢す。

しやうとく-くわん 正德館【名】越後國三島(サントウ)郡與板(ヨイタ)町に在りし舊與板藩の學校。明治四年廢す。

しやうとく-こばんきん 正德小判金【名】むさしこばんきん(武藏小判金)に同じ。

しやうとく-さじ 正德佐字【名】しやうとくさじせん(正德佐字錢)の略。

しやうとく-さじいちぶばんきん 正德佐字一分判金【名】『「佐」の字の極印あればいふ』江戸時代の通貨の一。佐渡にて鑄造せし正德一分判金。佐渡判。

しやうとく-さじこばんきん 正德佐字小判金【名】『「佐」の字の極印あればいふ』江戸時代の通貨の一。佐渡にて鑄造せし正德小判金。佐渡判。

しやうとく-さじせん 正德佐字錢【名】江戸時代の通貨の一。正德四・五兩年に亙りて、佐渡國相川にて鑄造せし寬永銅錢。徑八分、黄褐色を呈し、背孔の上部に「佐」の字あり。正德佐字。正德相川錢。

しやうとく-たいし 聖德太子【名】〔人〕用明天皇の第二皇子。御母は天皇の異母妹穴穗部間人(アナホベハシヒト)皇后。厩戸皇子・豐聰耳(トヨトミ)皇子また上宮(カミツミヤ)太子ともいふ。天性聰明なり。蘇我馬子等と物部守屋を誅し、推古天皇の卽位したまふや、皇太子として政を攝し、始めて冠位十二階を制し、憲法十七條を制定す。好みて釋書を讀み、その註疏を作り、諸國に寺院を建立し、貧民を救助せり。推古天皇の二十九年(一説に三十年)妃と同日に薨ず。年四十九。

(しやうとくたいし)

しやうとくたいし-てんれき 聖德太子傳曆【名】〔書〕聖德太子の傳を記せるもの。二卷。平基親の著。一名、平氏太子傳。

しやうとくたいし-ゑでん 聖德太子繪傳【名】〔美〕聖德太子の事蹟を描ける繪傳。古來種種あり。法隆寺に藏する二曲屛風二雙半に描けるもの(もとは同寺の壁畫)最も名高し。筆者は秦(ハタ)致眞なりといふ。

しやうとくたいし-ゑでんき 聖德太子繪傳記【名】淨瑠璃の一。聖德太子の繪傳に據り、古淨瑠璃を增補したるもの。近松門左衞門の作。

しやうとく-ちやうぎん 正德丁銀【名】きやうほうちやうぎん(享保丁銀)に同じ。

しやうとく-ひら 正德平【名】正德年間に織出して流行せし絹織物。主として、夏の袴地に用ひられたり。

しやうとく-ほうさん 聖德奉讃【名】親鸞上人が聖德太子の恩德を讃嘆して作りたる十一首の和讃。

しやうとく-まめいたぎん 正德豆板銀【名】きやうほうまめいたぎん(享保豆板銀)に同じ。

しやうとく-もん 章德門【名】八省院二十五門の一。會昌門の東に在り。左廂門。

じやうとくりん-てん 成德輪天【名】〔佛〕さうりてん(忉利天)を見よ。

しやうとく-わう 聖德皇【名】〔人〕しやうとくくわう(聖德皇)に同じ。

じやうとく-ゐん 常德院【名】〔人〕あしかがよしひさ(足利義尙)の諡(オクリナ)。

じやうど-けう 淨土敎【名】〔佛〕淨土門の敎。我が國にては、融通念佛宗に至りて始めて獨立して一宗を成し、續ぎて淨土宗・淨土眞宗及び時宗の開立を見るに至れり。

じやう-どこ 上床【名】上等なる寢床。〔遊廓の語〕

じやうど-さんぶきやう 淨土三部經【名】〔書〕さんぶきやう(三部經)を見よ。

じやうど-じ 淨土寺【名】㊀備後國尾道(ヲノミチ)市の東の山腹にある律宗の寺。もとは眞言宗にて、高野山の末寺なりしが、今は京都泉涌寺に屬す。聖德太子の創立と傳ふ。本尊は觀音菩薩。㊁播磨國賀茂郡小野村にある淨土宗の寺。もと東大寺領なりしが、建久年間東大寺再興の際、重源の奏上により、後白河法皇これを陳和卿に與へ、和卿更に東大寺に寄附し、重源の進上に任せしに、重源淨土敎に歸依せしため、この寺を建つ。㊂洛東淨土寺町にありし天台宗の寺。今、銀閣寺のある所。後一條天皇の代、明救(ミヤウグ)の建立。後、足利義政の請によりて、相國寺の西に移轉し、幾くもなく廢絶せり。

じやうど-しんしゆう 淨土眞宗【名】〔佛〕『淨土宗中、殊に彌陀眞實の敎を弘むとの意。眞宗の字面は支那唐の善導大師の散善義に「眞宗叵過」とあり、又同じく唐の法照禪師の五會法事讃に「念佛成佛是眞宗」とあるに本づく』淨土宗より分れたる佛敎。親鸞上人の創めしもの。肉食・妻帶を許し、別に持戒を要せず、所依(シヨエ)の經典は淨土宗と大差なく、殊に無量壽經を重んじ、往生淨土の正因を、唱名にありとせずして、阿彌陀如來の願力を信ずるに在りとし、淨土宗中の頓敎と稱す。今は十派に分れ、いづれも血統相續の制を取れり。一向宗。眞宗。門徒宗。門徒。

じやうど-しゆう 淨土宗【名】〔佛〕圓光大師の開きし一派の佛敎。大無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經及び往生淨土論を正依(シヤウエ)とし、善導の宗意を承けて開立せしものにて、專ら南無阿彌陀佛を唱へて極樂に往生するを主義とせるもの。宗祖寂後、五派に分れ、更に分れて、鎭西・西山の二流となる。前者は關東の三流、即ち白旗・藤田・名越(ナゴヤ)及び京都の三流、即ち三條・一條・小幡の六流に分れ、智恩院を總本山とし、慶長以後、增上寺十八檀林を總轄せしが、明治維新後、一時東西二部に分れ、明治十七年知恩院・增上寺・淨華(ジヤウケ)院・知恩寺・金戒光明(コンカイクワウミヤウ)寺を五箇の本山とし、輪次に管長を出すこととなり、後また知恩院を管長の本所とするに至れり。後者は淨土宗西山派と稱し、山城國の光明寺・禪林寺・誓願寺・圓福寺を四箇總本山と稱し、各寺交代に管長を出す。淨土專念宗。淨土。淨宗。淨家。念佛宗。白蓮(ビヤクレン)宗。

じやうどしゆう-せいざんは 淨土宗西山派【名】〔佛〕前條を見よ。

じやうど-すごろく 淨土雙六【名】道中雙六の未だ多く流行せぬ元祿の頃行はれし一種の雙六。人間より、或は上りて天上・聲聞(シヤウモン)・緣覺・菩薩等を經、天人、或は下りて阿修羅(アシユラ)・地獄・畜生道などを經めぐりて、つひに極樂に往生するを上(アガ)りとせるもの。賽の形も、道中雙六のとは異なり、木を削りて、六角の獨樂とし、それに「南無諸佛分身」の六字を、一字づつ書きて、一・二・三のしるしの代りにせり。 二代男「或は手撲・火わたし・綠とり、淨土雙六心に罪なく浮れ遊ぶを」 今樣二十四孝「高下・貧福、世間は淨土雙六を打つが如し」

じやうど-せんねんしゆう 淨土專念宗【名】〔佛〕じやうどしゆう(淨土宗)に同じ。

じやうど-まんだら 淨土曼荼羅【名】〔佛〕ごくらくまんだら(極樂曼荼羅)に同じ。

じやうど-もん 淨土門【名】〔佛〕吾人が、この宇宙間に生存中は社會の羈絆のために淨行決心を得ざれども、如說のごとくに發願すれば、死後は阿彌陀如來の極樂淨土に生れて、佛果を得べしとする敎門。末世下根の者に適すと稱せらる。(聖道(シヤウダウ)門に對して) 俳家奇人談(西武)「夜の明けて花に開くや淨土門」

じやうど-もんるゐ 淨土文類【名】〔書〕けうぎやうしんしよう(敎行信證)㊁に同じ。

じやうど-もんるゐじゆせう 淨土文類聚鈔【名】〔書〕親鸞上人が、その著書敎行信證(ケウギヤウシンシヨウ)中の大要を鈔出せしもの。一卷。けうぎやうしんしよう(敎行信證)參照。

しやう-とりひき 商取引【名】㊀〔法〕しやうかうゐ(商行爲)に同じ。〔舊商法の語〕㊁商業上の法律行爲。

じやうど-ろん 淨土論【名】〔書〕㊀わうじやうじやうどろん(往生淨土論)の略。㊁西方往生の事を、九章に分ちて論述せるもの。三卷。支那唐の迦才の撰。

じやうど-わさん 淨土和讃【名】〔書〕三帖和讃の一。百十八首より成り、淨土三部經の意に依りて、淨土の莊嚴及び往生の法門を讃歎せるもの。親鸞上人七十六歲の作。

しやう-ない 省內【名】省の內部。省の範圍內。

しやう-ない 莊內・庄內【名】莊園の內。領土の城內。

しやう-ない 莊內・庄內【名】〔地〕羽前國の東田川・西田川の二郡及び羽後國飽海(アクミ)郡の舊稱。酒井氏の舊藩地。 薩摩歌「大雁木打ったる印こそ庄內の主ぞと」

じやう-ない 城內【名】じやうちゆう(城中)に同じ。

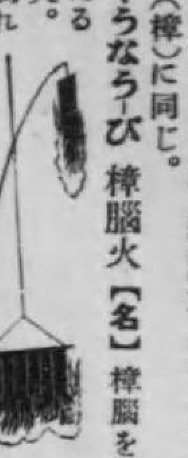
しやうない-じんじや 莊內神社【名】羽前國西田川郡鶴岡町なる鶴岡公園に鎭坐せる縣社。祭神は舊藩主酒井氏の祖忠次・家次・忠勝の三世。

しやう-なう 樟腦【名】樟の木を碎き、蒸餾して製したる白色・結晶性の塊又は粉末。香氣強く、醫藥・驅蟲劑とし、又、火藥・セルロイドの製造に用ふ。かんふる。 俳諧新選(釦江)「星合や樟腦匂ふかし小袖」

しやうなう-さん 樟腦酸【名】『羅Acidum camphoricum』樟腦を硝酸にて酸化して得る無色・無臭の板狀結晶。鼻腔・咽頭・喉頭等の炎症に、緩和收斂劑として用ひ、又、內服藥として、肺病患者の盜汗に適用す。

しやうなう-せい 樟腦精【名】かんふるちんき(羯布羅丁幾)に同じ。

しやうなう-ぜい 樟腦稅【名】臺灣の樟腦及び樟腦油を政府の專賣とせし以前、卽ち明治三十二年八月以前、樟腦油の製造者に課せし稅。
しやうなう-ちんき 樟腦丁幾【名】かんふるちんき(翔布羅丁幾)に同じ。
しやうなう-の-き 樟腦木【名】〔植〕くすのき(樟)に同じ。
しやうなう-び 樟腦火【名】樟腦を燃やしたる火。觸れても熱からず。芝居にて、狐火などに用ふ。



(火腦樟)

しやうなう-ゆ 樟腦油【名】樟の木の細片に水蒸氣を通じて蒸溜し、その溜液を冷却して、固結せしめし樟腦を搾出・分離したる油狀の殘液。特殊の香氣ありて、シャボンの製造用又は防臭用に供せらる。
じやう-なし 情無【名】人情のなきこと、又その人。薄情。
情無し苦無し【句】人情なきものは、苦勞もなし。
じやう-なふ 上納【名】官に金品を納むること。
しやう-なん 湘南【名】〔地〕㊀支那の湘水の南方。しやうせう(湘瀟)參照。㊁『湘の字は、相模の相の字に、三水偏を添へたる字なるより、支那の湘南に準へて用ひたり』相模國の南部なる海岸地方、卽ち小田原・大磯・逗子(ズシ)などの一帶の地。
じやう-なん 城南【名】都城の南。
じやうなん-じ 城南寺【名】『鳥羽は、京都の南方にあるよりいふ』山城國紀伊郡下鳥羽に在りし寺。創建・廢絕の年代共に詳かならず。城南神社に屬せしものなるべしといふ。せいなんじ。次條參照。
じやうなんじ-まつり 城南寺祭【名】㊀山城國鳥羽の城南寺の祭。流鏑(ヤブ)などを行ひ、天皇の臨幸ありて、盛大なりしが如し。㊁『城南寺祭には、餅を搗きて、人に强ひ食はする習なりしよりいふ』濫腹すること。
じやうなん-じん 城南神【名】次條又は次次條の略。 蕪村「腹あしき僧も餅くへ城南神」
じやうなん-じんじや 城南神社【名】山城國紀伊郡下鳥羽村に鎭坐せる府社。祭神は息長帶(オキナガ)姬命及び八千戈(ホコ)神に國常立(クニトコタチ)神を配祀すといふ。式內の古社にて、もと眞幡寸(マハタ)神社といへり。
じやうなんじん-まつり 城南神祭【名】じやうなんじまつり(城南寺祭)に同じ。
しやうなん-てい 湘南亭【名】山城國葛野(カド)郡松尾村なる西芳寺の境內にある茶室。夢窓の選びし十景の一。千少庵再興す。
じやうなん-の-りきゆう 城南離宮【名】とばどの(鳥羽殿)に同じ。
じやう-に【副】多く。ぎやうに。 膝栗毛「肴あ、じやうにつん出して喫れさい」
しやう-にち 正日【名】㊀喪にあたりてより四十九日目の日。四十九日。 源氏「御法事など過ぎぬれど、しやうにちまでは、なほこもりおはす」 ㊁年年の忌日。
じやう-にち 上日【名】じやうじつ(上日)に同じ。〔古語〕 平家「またさる目にもぞ逢ふとて、上日の者をあまた附けて」
しやう-にん 商人【名】あきんど。商賣人。
しやう-にん 聖人【名】〔佛〕『梵Arya(阿離野)の譯語』㊀智慧廣大無邊にして、慈悲心を有する人。 盛衰記「これ凡人に非ず、定めて聖人ならん」 ㊁高僧の尊稱。
しやう-にん 上人【名】〔佛〕㊀『摩訶般若經に「何名二上人一、佛言、若菩薩一心行二阿耨菩提一心不二散亂一、是名二上人一」、禪林寶訓音義に「內有二智德一外有二勝行一在二人之上一故稱二上人一」とあり』上德の人。㊁ほつけうしやうにんゐ(法橋上人位)の略。㊂そうりよ(僧侶)の敬稱。 千載「あるしやうにんの來りける日」
伊勢の上人【句】伊勢國度會(ワタラヒ)郡宇治の慶光院に住する尼。紫衣を著し、世世上人の位に進む恒例を有す。
しやう-にん 生忍【名】〔佛〕忍辱(ニンジ)の一。諸の衆生の加ふる種種の惡害に對して、瞋恚(イルジ)せざること。人の供養に對して、憍慢・遊逸ならざると、人の罵詈・傷害に遭ひて、よく忍んで、怨恨・瞋恚せざるとの二種あり。 衆生忍。(法忍に對して)
じやう-にん 常任【名】㊀常に委任すること。㊁常にその任にあること。
じやう-にん 淨人【名】〔佛〕在俗の儘にて寺に住み、衆僧に仕ふる信者。
じやう-にん 情人【名】じやうじん(情人)に同じ。
じやう-にん 上人【名】㊀上流の人。 女重寶記「都の風俗、上人は格別、中より下は衣裳の染樣・とりなり・帶の結びやうまで」 ㊁氣だてのよき人。
じやう-にん 常忍【名】〔人〕僧。日蓮の弟子。名は日常、常修院と號す。因幡國富城鄕に食み、後に、下總國葛飾(カツシカ)郡八幡(ヤハタ)の庄に移り、その地に大本山法華經寺を建立し、正安元年寂す。年八十四。
しやうにん-ぐんばいうちは 商人軍配團【名】〔書〕西鶴の永代藏の流を汲みて、當世の商人に關する巷談・俗話を小說風に記し集めたるもの。五冊。江島屋其磧の著。
しやうにん-こんじやう 商人根性【名】しやうばいかたぎ(商賣氣質)を罵りていふ語。
しやうにん-はふ 商人法【名】〔法〕商法法典を編纂するに、商人を基礎として、商事關係を定むるもの。
じやうにん-ゐゐん 常任委員【名】常時その任にある委員。
しやう-によ 正女【名】正丁(シヤウテイ)と同じき年齡の女子。
しやう-ね 性根【名】こんじやう(根性)に同じ。
じやう-ねい-でん 常寧殿【名】平安の舊內裏にありし殿舍の一。南面して、承香(シヨウキヤウ)殿の後方、貞觀(ヂヤウクワン)殿の前方にありしもの。もと皇后の御座所なりしが、後世、弘徽(キ)殿に代へらるるに至れり。きさきまち。きさいまち。せいねいでん。
しやう-ね-だま 性根玉【名】こんじやうだま(根性玉)に同じ。
じやう-ねつ 情熱【名】感情の熱すること。熱したる感情。
しやう-ね-ば 性根場【名】芝居の狂言の、曲中の中心又は骨子たる場。正念場。
しやう-ねん 正念【名】〔佛〕㊀はっしやうだう(八正道)を見よ。㊁淨土宗にて、正しく持續して亂れざる信仰心。㊂しやうき(正氣)に同じ。
しやう-ねん 生年【名】よはひ。年齡。 平治「嫡子惡源太義平は、生年十九歲」
じやう-ねん 情念【名】感情より起る念。
じやうねん-が-たけ 常念嶽【名】〔地〕信濃國にある乘鞍嶽の一峰。安曇(アヅミ)郡に屬す。高さ一〇三二九尺。
しやうねん-ば 正念場【名】しやうねば(性根場)の訛。
じやうねん-ぶつ 常念佛【名】㊀絕えず念佛を唱ふること。㊁芝居の囃子(ハヤシ)の一。鐘の音を入れたる囃子にて、道行・心中などの場に用ふ。
しやう-の-いはや 笙岩屋【名】〔地〕大和國吉野山の奧、御嶽にある岩屋。行律の僧の居るところ。 太平記「いかなる笙岩屋の聖なりとも、心迷はでありじと、目もあやに覺えてこそ候ひしか」
しやう-のう 商農【名】商人と農夫と。
しやうのう-は 商農派【名】〔經〕ちゆうのうは(重農派)に同じ。
しやう-の-こと 箏【名】さう(箏)に同じ。 和名「箏、象乃古度」
じやう-の-すけ 城介【名】あきたじやうのすけ(秋田城介)の略。
しやう-の-ふえ 笙【名】しやう(笙)に同じ。 和名「笙、象乃布江」
しやうのふえ-ふき 笙笛吹【名】しやうふき(笙吹)に同じ。 今鏡「時光といふ笙の笛ふきに習ひたまひけるに」
じやう-ば 上馬【名】上等の馬。じやうめ。細馬。(下馬に對して) 景年「世の中の六十餘國の上馬、これなん一なると奉り集めたるも」
しやう-はい 賞牌【名】㊀功勞・技能を賞するしるしとして與ふる記章。多くは金・銀・銅などにて扁き形に製し、その事項を記す。㊁くんしやう(勳章)の舊稱。
しやう-はい 賞盃【名】功勞又は善行を賞

して與ふる盃。金盃・銀盃・木盃の三種あり。
しやう-ばい 商賣【名】㊀商業。あきなひ。うりかひ。㊁なりはひ。よすぎ。營業。職業。㊂藝・娼妓などのよすぎ。
商賣忌敵(ガタキ)【句】『もと「朋輩忌敵」の訛』商人の、互に他の同業者をそしり合ふこと。〔諺語〕
じやう-はい 上輩【名】㊀貴き身分の者ども。(下輩に對して) ㊁自分より身分高き者。めうへ。先輩。(下輩に對して)
じやう-はい 攘排【名】はらひしりぞくること。擯斥。
しやうばい-あがり 商賣上【名】『しやうばい(商賣)㊂を見よ』嘗て藝妓・娼妓・茶屋女などをして居たりしこと、又その人。 江戸生艶氣樺燒「どれえにじみでも、耳のわきに枕だこのあるので、商賣上りは、それぢきに知れやす」
しやうばい-かた 商賣方【名】商賣の方面。あきなひの方。
しやうばい-かたぎ 商賣氣質【名】商人特有の氣質。利益にさとき習慣など。
しやうばい-がたき 商賣敵【名】あきなひがたき(商敵)に同じ。
しやうばい-がら 商賣柄【名】その商人としての身柄、又その商賣によりて養はれたる習性。
しやうばい-ぎ 商賣氣【名】懸引(カケヒキ)などを試みて、金儲をなさんとする心。
じやうはい-しやしん-さしよう 淨背捨身作證【名】〔佛〕八解脫の一。定中にて、地・水・火・風・靑・黃・赤・白の八色を鍊習して、光明の淸淨皎潔なること、妙寶の色の如くならしめ、從って心旣に明淨にして、樂漸く增長し、遍身ために怡悅すること。
しやうばい-て 商賣手【名】㊀營業の關係の及ぶ範圍。㊁しやうばいにん(商賣人)に同じ。
しやうばい-てつぱう 商賣鐵砲【名】商人の賣買する鐵砲。〔江戸時代の語〕
しやうばい-にん 商賣人【名】㊀商賣に從事する人。商人。㊁その事に專門なる人。くろうと。㊂藝妓・娼妓などの總稱。くろうと。(しろうとに對して)
しやうばい-もの 商賣物【名】㊀商賣の品物。商品。㊁職業として扱ふ物。
しやうばい-や 商賣屋【名】㊀商賣する家。あきんどや。商家。㊁藝者屋などの如く、重に客商賣をする家。
しやう-はう 正保【名】後光明天皇の御代の年號(紀元二三〇四年—二三〇七年)。
しやう-はう 詳報【名】くはしきしらせ。
しやう-はう 尙方【名】㊀『漢書の百官公卿表の註に「尙方主二作禁器物一」とあり。尙は主(ツカサド)る義、方は方法・藝術の義なるべし』支那秦・漢兩時代に、少府に屬して、天子の佩劍・玩好器物・玉器等の製作を掌りしもの。漢末分ちて、中尙・左尙・右尙とし、魏・晉もこれに因り、唐に至るまで、或は三尙或は一尙を置けり。㊁『漢書の郊祀志に「欒大膠東宮人、故嘗與二文成將軍一同レ師、已而爲二膠東王尙方一」とありて、註に「主二方藥一」とあり。尙は主(ツカサド)る義』支那漢代に、醫藥の調合を掌りし職。
尙方斬馬の劍【句】『漢書の朱雲傳に「願得二尙方斬馬劍一斷二佞臣一人一以厲二其餘一」とあり』尙方㊀にて作り、馬をも一刀に斬り得る利劍。
しやう-ばう 障防【名】㊀しきり。おさへ。㊁つつみ。堤防。
じやう-はう 上方【名】㊀うへの方。上部。(下方に對して) ㊁山上の佛寺。㊂『その居る處、寺の最高深處に在るより轉じていふ』住持の僧。 古寫本節用集「上方(ジヤウハウ)當住持曰二上方一又呼レ兒曰二上方一」
じやう-はう 城堡【名】㊀城と小城と。㊁しろ。
じやう-はう 淨邦【名】〔佛〕じやうど(淨土)に同じ。
じやう-ばう 上房【名】〔地〕備中國八郡の一。郡役所を高梁(タカハシ)町に置く。
じやう-ばう 狀貌【名】かたち。すがた。
じやう-ばう 淨房【名】かはや(厠)に同じ。
しやうはう-ちやう 掌砲長【名】軍艦內に在りて、砲術長の命を受け、兵備品の守監・手入・掃除を督し、砲術の教授に關する事務を掌りし曹長相當官。明治五年に置かれ、同十七年に廢す。
しやう-はく 商舶【名】しやうせん(商船)に同じ。
じやう-はく 上白【名】上等の白米。(下白に對して) 天神記「朱椀の定器に、上白の飯盛ったやうなと見立も心一杯」
じやう-はく 上膊【名】〔醫〕上肢の肘より上の方。(前膊に對して)
じやうはく-きん 上膊筋【名】〔醫〕上肢筋の一部。二頭膊筋・烏啄膊筋・內膊筋・三頭膊筋の總稱。
じやうはく-こつ 上膊骨【名】〔醫〕肩胛骨と前膊骨との中間に連接して、上膊を形成せる管狀の長骨。
じやうはく-だつきう 上膊脫臼【名】〔醫〕けんかふだつきう(肩胛脫臼)に同じ。
じやうはく-どうみやく 上膊動脈【名】〔醫〕動脈の一。腋窩動脈に連なり、上膊骨に沿ひて、肘に至るもの。
しやう-ばこ 狀箱【名】ふみばこ(文箱)に同じ。 平家女護島「狀箱かたげ、飛脚の足」
じやう-はたご 上旅籠【名】上等のはたご。 丹波與作「泊らんせ。旅籠安うて、泊めませう。上旅籠・中旅籠お望み次第」
しやう-はちまん 正八幡【名】次條に同じ。 傾城酒呑童子「姬君のおはなしは正八幡のお託宣」
しやうはちまん-ぐう 正八幡宮【名】正眞の八幡宮。 盛衰記「正八幡宮も必ず守護し奉るらん」
しやうはちまん-だいぼさつ 正八幡大菩薩【名】『佛敎の本地垂跡(スヰジヤク)說によりて、菩薩といふ』前條に同じ。 鎌田兵衛名所盃「祖父なる人の首打ち、正八幡大菩薩の神慮も納受あるべきか」
じやう-はつ 淨髮【名】僧の髮を剃ること。半月に一度づつ行ふを定とすといふ。
じやう-はな 城端【名】〔地〕越中國東礪波(ヒガシトナミ)郡にある町。山田川の流域。中越鐵道の一驛。漆器・絹絲等を產す。
じやう-はな 上花【名】次條の略。
じやう-はなうるし 上花漆【名】黑塗立漆中の、上等の品。製法は生漆に研汁もしくは鐵汁を和し、又は酢に漬したる鐵汁、楮樹、五倍子粉、又は重クロム酸を用ふ。
しやう-ばつ 賞罰【名】賞すると罰すると。
じやうはな-ごばう 城端御坊【名】ぜんとくじ(善德寺)を見よ。
しやう-はふ 章法【名】文章の章の組立方。(字法・句法などに對して)
しやう-はふ 商法【名】㊀あきなひの仕方。あきなひ。商賣。㊁〔法〕『英 Commercial law』廣義にては、商事に關する法規の全部、卽ち商私法・商公法・商國際法の總稱なれど、商公法及び商國際法は未だ獨立の一系統を成すに至らざるが故に、普通に、狹義の商私法の意に用ふ。各その條を見よ。㊂しやうはふがく(商法學)に同じ。
じやう-はふ 常法【名】㊀一定の法則。常例。㊁世間一般の法則。
しやうはふ-くわいぎしよ 商法會議所【名】しやうこうくわいぎしよ(商工會議所)の舊稱。
しやうはふ-し 商法司【名】會計官に屬して、商事に關する事項を掌りし所。明治元年に置かれ、翌年に廢せられたり。
しやうはふ-しかうはふ 商法施行法【名】〔法〕商法に附屬して、その施行に必要なる事項を規定したる法律。明治三十二年の公布。
しやう-はん 墻藩【名】かき。まがき。
しやう-はん 掌蹯【名】『爾雅の疏に「蹯掌也。此四獸之類、皆有二掌蹯一」とあり』熊などのたなひろ。
しやう-はん 商販【名】あきなふこと。販賣。
しやう-ばん 相伴【名】㊀饗應の席に、正客の相手となりて、同じく饗應を受くること、又その人。あひたけびと、伴食。陪食。㊁饗應の席を斡旋(アツセン)すること、又その人。接伴。㊂つきあひて共になすこと。つきあひ。 今宮心中「やいとぎやうの相伴せうか」 ㊃それほどの價値なけれども、他に均霑し、その利益を分ち與へらるること、又その人。伴食。
じやう-はん 上班【名】上の班次。
じやう-はん 上半【名】上の半分。(下半に對して)

じやう-ばん 上盤【名】かむり(冠)□に同じ。
じやう-ばん 上判【名】こぼうしよ(小奉書)に同じ。
じやう-ばん 上番【名】『一杜甫の詩に「會須三上番看二成竹一」とありて、朱註に「上番…唐人方言」とあり』第一番。二役人の、役所に出勤すること。(下番に對して)
じやう-ばん 城番【名】一城に在番して、警固に任ずる兵士。在番衆。番手衆。二江戸時代に、二條城・大阪城及び駿府城に置きて、これを警固せしめし役。定番(ヂャウ)。おほさかじやうばん(大阪城番)・すんぷじやうばん(駿府城番)・にでうじやうばん(二條城番)參照。
しやうばん-しゆう 相伴衆【名】武家の役名。室町時代に、大名の中より選び、將軍の、他家に御成の時、御相伴に與らしめしもの。初は、譜代大名中、山名・一色・細川・畠山・赤松・土岐・六角・京極・武田・佐佐木等の諸氏中より、少なきは數人、多きは二十人餘これに列せられ、平生は定職なく、歳首の賀正、その他、恒例・臨時の儀式に、管領に次ぎて、國持・外様(トザマ)・御供衆の上に列するを例とせり。
じやうばん-せん 常磐線【名】〔地〕東京の北部、北豐島(キタトシマ)郡日暮里(ニツポリ)驛より常陸國の土浦(ツチウラ)・水戸、磐城國の平・中村等の濱街道に沿うて、陸前國岩沼に至るもの。日本鐵道會社の建設に係り、今は國有に歸す。
しやうはん-ちやう 掌帆長【名】軍艦内にありて、副長及び航海長の命を受け、帆・綱・錨・錨鎖等に關する一切を守監し、且その分擔する需品を受給する兵曹長又は上等兵曹。
しやうばん-にん 相伴人【名】相伴する人。
じやうは-もくれん 常葉木蓮【名】〔植〕たいさんぼく(泰山木)に同じ。
しやう-ばら 庄原【名】〔地〕備後國比婆(ヒバ)郡にある町。廣島市の東北二十一里。西城(サイジヤウ)川に沿ふ。郡役所を置く。
じやう-はらみつ 淨波羅蜜【名】〔佛〕『普賢觀經に「釋迦牟尼、名二毘盧遮那一遍二一切處一其佛住處、名二常寂光一…淨波羅蜜滅二有相一處」とあり』四波羅蜜の一。一切差別の有相を滅して、感染なき波羅蜜。常樂我淨中の淨。じやうらくがじやう(常樂我淨)參照。
じやう-はり 淨玻璃・淨頗黎【名】〔佛〕一最も透明なる水晶。二次條の略。
淨玻璃の鏡【句】一〔佛〕『僞書十三經に見ゆ』俗に地獄の閻魔王廳に在りて、亡者の生前に於ける善惡の所業を映し出すといふ鏡。 若聞「今年よりは、おほやけ・わたくし、淨玻璃の鏡に向ひ、願ひたるといひたりける」 二言ひまぎらすことを得ざる眼識。
じやう-はり 情張【名】『「情を張る」を見よ』がうじやう(强情)に同じ。
情張は棒の下【句】情を張る者は、人に打擲せらる。
じやう-はり 常張【名】平常に、有るかぎりの美服を著飾ること。
常張な者は出張(デバ)なし【句】平常著飾る者は、儀式等の場合に著るべき物なくて困る。〔諺語〕
じやう-はりもの 情張者【名】强ひて已れの意地を通さんとする人。强情なる人。
しやう-ひ 傷悲【名】ひしやう(悲傷)に同じ。
しやう-び 薔薇【名】一〔植〕のいばら(野薔薇)に同じ。二襲(カサネ)の色目の一。表は紅、裏は紫にて、四月用ひしもの。さうび。
しやう-び 賞美【名】ほめたたふること。稱美。
じやう-ひ 城陴【名】城のひめがき。城壖。「城堞(ジヤウテフ)」。
じやう-ひ 上皮【名】表面の皮。表皮。
じやう-ひ 攘臂【名】うでまくりすること。
じやう-ひ 常費【名】平常の入費。經常費。
じやう-び 常備【名】一常に備へおくこと。二じやうびへいえき(常備兵役)の略。
じやうび-かん 常備艦【名】常備艦隊を始とし、練習・測量艦に至るまで、定員を充たして、各その所屬任務に從ふ艦隊。
じやうび-かんたい 常備艦隊【名】一定の海區を守護するために、常備せる艦隊。
しやうび-きせき 薔薇輝石【名】〔鑛〕『英 Rhodonite』輝石の一種。半透明乃至不透明にて、玻璃光澤を有し、質脆く、紅色を呈し、風雨に曝さるれば黑變す。三河國に產す。
じやうび-ぐん 常備軍【名】常備兵を以て編成する軍隊。
しやうび-くわ 薔薇科【名】〔植〕いばらくわ(薔薇科)に同じ。
じやうひ-さいばう 上皮細胞【名】相連接して、上皮組織を形成する細胞。境界判明にして、原形質及び核より成り、細胞膜を有せざること多く、一般に柔軟なるを以て、外來の壓力に逢へば、形態を變ずれども、扁平・圓柱の兩形に大別せらる。
しやうび-しん 薔薇疹【名】〔醫〕皮膚の一部に、平に紅色を呈する發疹。
しやうび-すゐ 薔薇水【名】薔薇の花を蒸溜して取りたる香水。
じやうひ-そしき 上皮組織【名】〔醫〕『獨 Epithelgewebe』人體の外圍及び内腔の内面を被覆せる組織。上皮細胞の連接して成れるもの。皮膜組織。
じやう-びたき 上鶲【名】〔動〕鶲の一種。山地に產し、形は駒鳥に似、雄は頭部灰蒼色、脊及び翼は黑くして、翼に純白の大形紋あり。胸腹部と尾とは焦茶色にて、上鶲及び照鶲の名は、この雄に宛てしものなり。雌は全身茶褐色、腰部以下は焦茶色にて、翼の白紋は雄より少さし。されば茶鶲又は馬鹿鶲の名あり。禁止鳥の一。てりびたき。
しやう-ひつ 正筆【名】一しんぴつ(眞筆)に同じ。 嵯峨天皇甘露雨「透きうつしより正筆を少し拜見と、取ってのけたる屛風のかげ」 二にくひつ(肉筆)に同じ。
しやう-ひつ 省筆【名】げんぴつ(減筆)に同じ。
じやう-びったり【副】つね。しじう。平常。
じやう-びってえ【副】前條の訛。 浮世風呂「常日一夜(ジヤウビッテエ)婢さんに叱られてばっかし居るはな」
じやうび-へい 常備兵【名】一常備□の兵士。二常備兵役に服せる兵士。
じやうび-へいえき 常備兵役【名】現役及び豫備役の總稱。
しやう-ひん 商品【名】あきなひする品物。
しやう-ひん 賞品【名】褒美に與ふる品。
じやう-ひん 上品【名】一品がらのよきこと、又その物。二品(ヒ)のよきこと。ひとがら。高尚。(下品に對して)
じやう-ひん 上賓【名】じやうかく(上客)に同じ。
しやうひん-ありだか 商品有高【名】商品の現在手許にある高。
しやうひんありだか-ちやう 商品有高帳【名】商品有高を記入する補助簿。商品毎に口座を設けて、その賣買數量・賣買相場・仕入金額・賣上金額、及び差引在庫高等を記す。在品控帳。
しやうひん-うけはらひちやう 商品受拂帳【名】しやうひんばいばいちやう(商品賣買帳)に同じ。
しやうひん-うりあげちやう 商品賣上帳【名】賣上げたる商品の明細を記入する帳簿。賣上の順序により、年月日・賣渡先・品名・數量・單價・金額・風袋・割引・諸掛、その他受渡・支拂に關しての一切を記入す。
しやうひん-がく 商品學【名】商業經營の立場より、商品に關する種種の事項、例へば產地・產額・種類・製法・用途・賣買・慣習・需要地等の類を研究する學問。
しやうひん-かひいれちやう 商品買入帳【名】〔商〕しやうひんしいれちやう(商品仕入帳)に同じ。
しやうひん-かんぢやう 商品勘定【名】〔商〕簿記の勘定科目の一。商品を整理するために、借方に仕入品、貸方に賣上品を記入するもの。
しやうひんかんぢやう-もとちやう 商品勘定元帳【名】〔商〕商品整理のために、その仕入・賣却、金額支拂などを記す帳簿。
しやうひん-きって 商品切手【名】記載せる金額の商品を持參人に渡すべき由を表示したる無記名式又は指圖式の證券。例へば吳服切手・鰹節切手の類。調達切手。進物切手。
しやうひん-しいれちやう 商品仕入帳【名】〔商〕商品を仕入れたる時、その受渡に關する一切の要件、卽ち仕入先・品名・數量・代價及び代金支拂方法等を記入する帳簿。仕入帳。商品買入帳。

しやうひん-たなおろしへう 商品棚卸表【名】〔商〕たなおろしへう(棚卸表)に同じ。
しやうひん-ちんれつくわん 商品陳列館【名】一商品を陳列する建物。商品陳列所。二農商務省商務局に屬し、内外の商品見本及び參考品を蒐輯陳列して、公衆の觀覽・參考に供する所。
しやうひん-ちんれつじよ 商品陳列所【名】前條□に同じ。
しやうひん-とりひきじよ 商品取引所【名】取引所の一。商品を賣買取引するため、法律に據り、政府の許可を得て設立する一定の場所。とりひきじよ(取引所)參照。
しやうひん-ばいばいちやう 商品賣買帳【名】〔商〕商品の仕入及び賣上を併せ記する帳簿、卽ち商品仕入帳と商品賣上帳とを合併したるがごときもの。商品受拂帳。
しやうひん-みつもりだいきん 商品見積代金【名】〔商〕簿記上にて、總決算の時、現在品の代金を見積りたる總額。
じやう-ひやう 上平【名】〔語〕しせい(四聲)を見よ。(下平に對して)
じやうひやう-じやう 上平聲【名】〔語〕前條に同じ。
しやうびやう-へい 傷病兵【名】負傷兵と病兵と。
しやう-びやく 省百・省陌【名】しやうせん(省錢)に同じ。
しやうび-ゆ 薔薇油【名】『英 Attar』新鮮なる薔薇の花を水にて蒸溜して得る、淡黃色なる揮發油。淡黃色を呈し、價頗る貴く、香水の原料又は藥用に供す。
しやう-ふ 祥符【名】めでたきしるし。
しやう-ふ 省府【名】王朝時代に、民部省より諸國に下しし公文。(官符・國符に對して)
しやう-ふ 相府【名】しやうこく(相國)に同じ。
しやう-ふ 商布【名】商品たる布。
しやう-ふ 娼婦・倡婦【名】倡妓。遊女。妓女。
しやう-ふ 生麩【名】小麥の澱粉。小麥粉又は小麥糟(マス)より製し、食料及び糊料とし、また染色上、型附(カタ)糊・仕上糊等より用ふ。
しやう-ふ 尙父【名】〔人〕『武王がこれを尙(トウ)びて、父とする義』だいこうばう(太公望)の尊稱。
しやう-ぶ 尙武【名】武事をたふとぶこと。
しやう-ぶ 菖蒲【名】一〔植〕あやめ(菖蒲)に同じ。二〔植〕はなしやうぶ(花菖蒲)に同じ。三〔植〕天南星科に屬する多年生の草。葉は劍狀、長さ三四尺に達し、平行脈を有す。花は小形、淡黃色にして、肉穗花序をなす。長き根莖を有し、特殊の香氣を具ふ。各地の池澤に自生す。觀賞用として栽培し、根莖は藥用又は香料とす。あやめ。うたかたぐさ。〔水菖蒲・泥菖蒲・白菖〕 四しやうぶがさね(菖蒲襲)の略。
菖蒲の輿【句】「菖蒲(アヤメ)の輿」に同じ。
菖蒲の節句【句】「菖蒲(アヤメ)の節句」に同じ。
しやう-ぶ 象舞【名】支那周の武王の舞樂の一。戰時に於ける刺擊にかたどりたるもの。
しやう-ぶ【名】魚の鰭の一部。
じやう-ふ 城府【名】『支那にては、都府の周圍に城壁をめぐらしたるよりいふ』みやこ。都邑。都城。都府。
城府を設けず【句】『宋史の堯俞傳に「堯俞厚重言寡、遇レ人不レ設二城府一、人自不レ忍レ欺」とあり』人に對して、隔なく打解けて、心事を談ず。
じやう-ふ 情夫【名】いろをとこ。かくしをとこ。
じやう-ふ 情婦【名】いろをんな。かくしをんな。
じやう-ふ 上布【名】亞麻又は苧麻(カラムシ)の緖にて織りたる上等なる麻布。越後上布・能登縮・薩摩上布・沖繩上布など有名なり。
じやう-ぶ 上部【名】上の方。上の部分。(中部・下部に對して)
しやうぶ-あはせ 菖蒲合【名】ねあはせ(根合)に同じ。 扶桑略記「有二菖蒲合事一」
しやうぶ-いんぢ 菖蒲印地【名】あやめいんぢ(菖蒲印地)に同じ。
しやう-ふう 商風【名】『五音を四季に配して、商を秋とするによりていふ』あきかぜ(秋風)に同じ。
しやう-ふう 正風【名】一〔佛〕正しき宗風(シユウフウ)。「一宗の正風を擧揚す」 二〔文〕松尾芭蕉の創めたる閑寂趣味の俳諧。蕉風。(古風・談林風などに對して)
じやう-ふう 上風【名】かざかみ(風上)に同じ。(下風に對して)
しやうふう-てい 正風體【名】一正しき風體。二〔文〕しやうふう(正風)に同じ。
しやうぶ-うち 菖蒲打【名】一あやめいんぢ(菖蒲印地)に同じ。二三本の菖蒲にて綯(ナ)ひたる條、又はその綯方。三緖にて二の如くに組みたる紐。
しやうぶ-がさね 菖蒲襲【名】あやめ(菖蒲)四に同じ。
しやうぶ-がた 菖蒲形【名】一刀身の形の、菖蒲の葉のごとくなるもの。二馬具の一。銀面(バシ)に著けて、馬の額に當つるもの。
しやうぶ-がたな 菖蒲刀【名】あやめがたな(菖蒲刀)に同じ。
しやうぶ-かたびら 菖蒲帷子【名】あやめかたびら(菖蒲帷子)に同じ。
しやうぶ-がは 菖蒲革【名】一地を藍色に染め、一種の、圖案化したる菖蒲の花と葉との模様を白くおきたるなめしがは。山城國八幡の神官が内職に染めしものの由にて、勝負又は勝武とその音相通ずとて、古は、好んで武具の製造に用ひたり。二布地を一の如く染めたるもの。 鑓山錦艶写「闘門見張所の體、爰に菖蒲革の足輕○△□◎の四人床几に掛り、焚火にあたり居る」
しやうぶがは-ぞめ 菖蒲革染【名】菖蒲革のごとくに染むること。
しやうぶがは-の-つのじふもんじ 菖蒲革角十文字【名】槍標(ヤリジ)の一。 蘆屋歌「菖蒲皮の角十文字、白頭の大禿、これ越前家」
しやうぶ-かぶと 菖蒲胄【名】一古、五月五日、髮にかざしし菖蒲。二古、端午の祝に、菖蒲にて、胄の形に作りしもの。あやめかぶと。かぶとのはな(胄花)參照。
しやう-ふき 笙吹【名】笙を吹くに巧みなる人。笙の笛ふき。 盛衰記「時光といふ笙吹」
じやう-ふぎやう 常不輕【名】〔佛〕『梵 Sadāparibhūta の譯語』法華經の不輕品に、常に身に不輕の行をなし、口に不輕の敎を宣べ、人に逢ふごとに、汝等いづれも菩薩の道を行じて、佛となるを得べきが故に、我れこれを敬ひて輕慢せずとて、悉くこれを禮拜・讚嘆し、衆人中に增上慢の比丘(ビ)ありて、惡口・毒語して、輕侮すれども、常にこの言をなして、禮拜したりと記されたる比丘。 源氏「このじやうふぎやう、そのわたりの里・京までありきけるを」
じやうふぎやう-びく 常不輕比丘【名】〔佛〕前條に同じ。
じやうふぎやう-ぼさつ 常不輕菩薩【名】〔佛〕前條に同じ。
じやうふぎやうぼさつ-ぼん 常不輕菩薩品【名】〔書〕法華經の第二十品の稱。常不輕菩薩の事蹟を述べたるもの。
しやうぶ-きり 菖蒲切【名】古、五月五日に、小供が印地(インヂ)を行ひし後、菖蒲刀にて戰ひし遊戲。
しやう-ふく 祥福【名】ふくしやう(福祥)に同じ。
しやう-ふく 尙復【名】『尙は主(ツカサ)る義』中古、天皇の讀書式の始に、侍讀の授け奉りし所につきての復習を掌りし役。
しやう-ふく 章服【名】徽章を附けたる服。
じやう-ふく 常服【名】平常の衣服。
しやう-ふく-じ 聖福寺【名】筑前國博多市に在る臨濟宗の寺。僧榮西の創建にして、我が國禪寺の最初なり。
じやう-ふく-じ 淨福寺【名】京都市上京區篠屋町に在る淨土宗の寺。もとは天台宗。本尊は三國傳來の釋迦佛。延暦年中、一誓の建立する所。一名、村雲寺。
じやうふくじ-なっとう 淨福寺納豆【名】納豆の一種。よく煮たる豆の中へ炒(イ)りたる小麥粉を和して、麴となし、別に煮たる食鹽水と煉合はせて、木臼にて搗き、日に乾すこと三十日にして、山椒の粉末を加

へ、再び木臼にて搗きたるもの。
しやうふく-だう 昌福堂【名】平安城の内裏の大極殿の東南にありし堂。
しやうぶ-くはがた 菖蒲鍬形【名】兜(ｶﾌﾞﾄ)の鍬形の、菖蒲の葉の如く眞直に尖りたるもの。
じやう-ぶくろ 狀袋【名】手紙を入れて送る上袋。ふうづつみ。ふうとう。
しやうぶ-ごし 菖蒲輿【名】「菖蒲(ｱﾔﾒ)の輿」に同じ。
しやうぶ-ざけ 菖蒲酒【名】あやめざけ(菖蒲酒)に同じ。
しやうぶ-す 菖蒲酢【名】菖蒲の根を剝みて浸したる酢。古、端午の節に用ひたり。小町踊「菖蒲酢もまじるや軒の梅の雨」
しやう-ふだ 正札【名】㊀正價を記して、商品に附けおく札。㊁かけねのなきこと。
しやうぶ-たたき 菖蒲叩【名】しやうぶうち(菖蒲打)に同じ。
しやうぶ-だち 菖蒲太刀【名】あやめがたな(菖蒲刀)に同じ。
しやうふだ-つき 正札附【名】㊀正札の附きたること、又その商品。㊁世人の定評を得てあること、又その物、又はその人。
じやう-ふだん 常不斷【副】いつも。つねに。ふだん。
しやうぶ-ちや 菖蒲茶【名】菖蒲の根を加へて煎じたる茶。商歎寿言「菖蒲茶といふもの、五山の僧の詩集に見ゆ」と。
しやう-ぶつ 生佛【名】〔佛〕衆生(ｼｭｼﾞｬｳ)と佛。
生佛一如(ｲﾁﾆｮ)【句】〔佛〕「凡聖(ﾎﾞﾝｼｬｳ)一如」に同じ。[illegible]「法身は生佛一如の理(ﾘ)めいて」
生佛一體【句】〔佛〕前條に同じ。
生佛の假名(ｹﾐｮｳ)【句】〔佛〕生佛一如(ｲﾁﾆｮ)にして、迷悟は二岐ならざれども、假にその相(ｻｳ)につきて、衆生と佛との名を設けたるに過ぎざること。平家「眞如廣大離レ立二生佛假名一」
生佛不二(ﾌﾆ)【句】〔佛〕「生佛一如」に同じ。
しやう-ぶつ 正物【名】㊀似せならぬ物。ほんもの。(贋物に對して) ㊁げんぶつ(現物)㊀に同じ。

じやう-ぶつ 成佛【名】〔佛〕㊀佛果を成就すること。無上の悟を開くこと。成佛道。㊁死して佛となること。今國姓爺「これぞわが一期の灌頂、未來の血脈、疑なし。成佛します、水を水をと呼ぶ聲に」
成佛得脫(ﾄｸﾀﾞﾂ)【句】〔佛〕佛果を成(ｼﾞｬｳ)じ、解脫(ｹﾞﾀﾞﾂ)の德を得ること。
成佛の木實(ｺﾉﾐ)【句】〔佛〕ぶっくわ(佛果)の意なるべし。謠(道成寺)「げに有難や、草も木もみな成佛の木實まで、玉を連ぬる光かな」
じやう-ぶつ 滋養物【名】體の養分となるべき物質を、多量に含める食物。
しやうぶ-づくり 菖蒲作【名】刀の、切先より鎬(ｼﾉｷﾞ)に似たる條を有する作り方。一說に、纈絲(ｲﾄ)を菖蒲打にしたるもの。長町女腹切「菖蒲づくりの拵も、五月からの誂」
じやうぶつ-だう 成佛道【名】〔佛〕『佛道を成就する義』じやうぶつ(成佛)㊀に同じ。
しやうぶ-づつみ 菖蒲包【名】包の折形の一。端午の節句に、菖蒲を包むに用ひしもの。

(包蒲菖)

しやうぶ-なは 菖蒲繩【名】菖蒲にて綯(ﾅ)ひたる繩。昔、菖蒲打などに用ひしもの。
しやうぶ-ねあはせ 菖蒲根合【名】ねあはせ(根合)に同じ。
じやう-ぶみ 狀文【名】じやう。ふみ。てがみ。童話子「主ある妾に執心かけ、たびたびの狀文」
しやう-ふん 詳氛【名】めでたき氣。祥氣。瑞氣。
しやう-ふん 樂粉【名】しやうふ(生麸)に同じ。下學集「樂粉、シャウフン」
しやう-ぶん 性分【名】㊀うまれつき。性質。㊁〔佛〕諸法差別の自性(ｼﾞｼｬｳ)。
じやう-ぶん 滋養分【名】食物中の、滋養となる成分。養分。
じやう-ぶん 上分【名】古、國郡より、年貢以外に、毎月の月末などに上納せし物といふ。庭訓往來「月迫之上分」
じやう-ぶん 上聞【名】上(ｶﾐ)の御耳に入ること。上聽。雪女五枚羽子板「義教公の上聞に達し」

じやう-ぶん 上文【名】前に記述したる文言。前文。
じやう-ふんべつ 上分別【名】すぐれたる分別。よき考。千両幟「あいつに勝を讓っておいて、その上で、のっぴきさせず頼むが近道・じやうふんべつ」
じやうぶん-まい 上分米【名】その領地を通過する年貢米に對して、歩米を課すること。運上米。上米取(ｱｹﾞﾏｲﾄﾘ)。
しやうぶ-ゆ 菖蒲湯【名】「菖蒲(ｼｬｳﾌﾞ)の湯」に同じ。一代男「しのべ竹の人除(ﾋﾄﾖｹ)に、鉦屋島の帷子(ｶﾀﾋﾞﾗ)、女の隠し道具をかけ捨てながら、菖蒲湯をかかる由して」
しやうぶ-ゆかた 菖蒲浴衣【名】昔、京都にて、端午の節に、奴僕に輿へし浴衣。
しやう-へい 障蔽【名】㊀おほひかくすこと、又その物。㊁しきり。へだて。
しやう-へい 唱平【名】古、節會(ｾﾁｴ)の時などに、盃を勸めて、壽(ｽ)を祝せしこと。一說に、人に酒を勸むる時、相手の量に應じて、平均に飲むべしとの義なりと。續後紀「ヒ。「跪唱レ平」
しやう-へい 昌平【名】たいへい(泰平)に同じ。
しやうへい 正平【名】後村上天皇の御代の年號(紀元二〇〇六年―二〇二九年)。
しやう-へい 傷兵【名】きずつきたる兵。ておひのつはもの。負傷兵。
しやう-へい 彰炳【貌】あらはにめだつさま。あきらか。
じやう-へい 情弊【名】情實の弊害。
じやう-へい 城兵【名】城中にある兵。
しやうへい-かう 昌平校・昌平黌【名】しやうへいざかがくもんじよ(昌平坂學問所)に同じ。
しやうへい-がは 正平革【名】獅子・唐草の模様及び正平六年六月一日の文字を白く殘して、柿色に染めたる革。正平六年將軍懷良(ｶﾈﾖｼ)親王、肥後國熊本の革工に命じて染出さしめたるもの。ごめんがは。正平御免革。
じやうへい-きよく 常平局【名】大藏省にありし一局。米價の廉なる時、又は騰なる地方より糴(ﾃｷ)し、その高き時、又は高き地方へ糶(ﾁｮｳ)して、常に米價の平均を得しむることを掌りし所。明治十三年設置、同十五年廢止。

しやうへい-ごめんがは 正平御免革【名】しやうへいがは(正平革)に同じ。
じやうへい-さう 常平倉【名】民間の穀價を平均せんがために、淳仁天皇の天平寶字三年初めて設けられたる官設の米穀の貯藏所。相當の價を定め、豐年には、時價廉くとも、その價を以て買ひて、此所に貯へ、凶年には、時價高くとも、その價をもって賣り、高低過度の憂なからしめんとせし設備。
しやうへい-ざか 昌平坂【名】〔地〕東京市湯島三町目なる女子高等師範學校昌平黌址前を、東方へ、昌平橋に下る坂路。
しやうへいざか-がくもん-じよ 昌平坂學問所【名】『昌平は、孔子の生地なる支那山東省兗州府曲阜縣昌平鄕の名を取りしもの』江戸幕府の外神田(ｿﾄｶﾝﾀﾞ)臺、今の女子高等師範學校の在る處に設立せし公學校。將軍綱吉の時、忍(ｼﾉﾌﾞ)ケ岡の弘文院を移して、規模を擴張せるもの。正殿を弘文院、學舍を弘文館と呼び、林氏世世祭酒に任じ、その下に、儒員・教授方等ありて、幕臣及び諸藩士の子弟に專ら儒學を教授せしが、明治維新後、政府の所管に歸し、今の東京帝國大學の前身となれり。昌平黌。せいだう(聖堂)參照。
じやうへい-し 常平司【名】じやうへいしよ(常平所)に同じ。(陽成天皇の御代の一時の改稱) 三代實錄「東西京中置二常平司一」
じやうへい-じよ 常平所【名】古、平安京の左京と右京とに置きて、穀價の廉き時に買ひし物を、高き時に原價にて賣出しし所。三代實錄「東西兩京始置二常平所一」
しやうへい-ぞめ 正平染【名】正平の革の染方。
しやうへい-ばし 昌平橋【名】〔地〕東京市神田川に架せる橋。お茶の水橋と萬世橋との間にあるもの。
しやうへい-もん 昌平紋【名】きりつけもん(切部紋)に同じ。

しやう-へう 商標【名】『英 Trade mark』營業者が自己の生產・製造・加工・選擇・證明・取扱、又は販賣の營業に係る商品なることを示すために用ふる文字・圖形・記號又はそれらを結合せるもの。
しやう-へう 商飈【名】『しやうふう(商風)を見よ』秋の暴風。
しやう-へう 賞表【名】賞めあらはすこと。賞譽のしるし。
じやう-へう 上表【名】表を上(ﾀﾃﾏﾂ)ること、又上りたる表。上書。
しやうへう-けん 商標權【名】〔法〕一定の期間、その商標を、出願の際指定したる商品につきて專用する權利。商標專用權。
しやうへうけん-しや 商標權者【名】〔法〕商標權を有する者。
しやうへう-げんぼ 商標原簿【名】商標登錄のために、農商務省特許局に備ふる特定の官簿。登錄すべき事項は、登錄番號・商標・類別及び商品・登錄商標主の氏名・住所・登錄年月日等なり。
しやうへう-こうはう 商標公報【名】特許局より發行する公報。登錄商標及びこれに關する、必要なる事項を記載す。
しやうへう-せんようけん 商標專用權【名】〔法〕しやうへうけん(商標權)に同じ。
しやうへう-とうろく 商標登錄【名】商標權を得るため、二十年間を一期として、特許局に出願し、商標原簿に、登錄を受くること。登錄せられたる時は、登錄證を交付せらる。二十年後は、更に二十年づつを一期として、永續するを得。
しやうへうとうろく-しよう 商標登錄證【名】商標を商標原簿に登錄したる後、登錄出願者に交付する證。
しやうへう-はふ 商標法【名】商標專用者の權利を設定・保護するために設けし法律。明治三十二年の公布。
しやうへう-れう 商標料【名】商標又は商標權の更新の登錄をなす場合に納付する料金。
しやう-へき 障壁【名】へだてのかべ。しきり。かこひ。

しやう-へき 牆壁【名】牆(ｶｷ)と壁(ｶﾍﾞ)と。へだて。
じやう-へき 城壁【名】城のかべ。しろ。
じやう-へき 情癖【名】〔哲〕感情の働が、慣習又は遺傳の結果、常住の性癖もしくは性向となれるもの。
じやう-べっかふ 上鼈甲【名】㊀上等の鼈甲。㊁『上等の鼈甲には斑(ﾌ)無きを、晒拔(ﾌﾇｹ)の意にかけていふ』愚者の隱語。〔京都・大阪の遊廓の語〕
じやう-へん 常篇【名】なみ。通常。太平記「事、常篇に絕えたり」
じやう-へん 上篇【名】最初の一篇。(中篇・下篇に對して)
じやう-べん 淨辨【名】〔人〕歌僧。按察(ｱｾﾞﾁ)法印光成の子、慶運の父。法印に敍せらる。和歌を藤原爲世に學び、頓阿・兼好及びその子慶運と四天王の目あり。されど歌集も傳はらず。遺詠も多からず。
蘆の葉の淨辨【句】〔人〕「湊江の氷に立てる蘆の葉に夕霜さやぎ浦風ぞ吹く」といふ歌によりて得し、淨辨の綽號。
しやうへん-がく 正偏覺【名】〔佛〕次條に同じ。
しやうへん-ち 正偏知【名】〔佛〕とうしやうがく(等正覺)に同じ。
しやうべゑ-りう 庄兵衛流【名】おほもりりう(大森流)㊁に同じ。
しやう-ほ 章甫【名】次條を見よ。
章甫の冠【句】『禮記の儒行篇に「魯哀公問二於孔子一曰、夫子之服、其儒服與、孔子對曰、丘少居レ魯、衣二逢掖之衣一、長居レ宋冠二章甫之冠一」とあり。章は明、甫は丈夫の美稱にて、丈夫を表明する意なりといふ』支那殷の世の冠。緇布(ｼﾌﾞ)にて製せしものなるべしといふ。孔子これを冠りしより、儒者の冠となれり。雪女五枚羽子板「章甫の冠を沓に履かれんより、首陽山に蕨餅を練り、汨羅に沈んで、江魚の腹中に葬られんには如かじ」
しやう-ほ 商舖【名】あきんどみせ。あきなひみせ。商店。
しやう-ぼ 賞募【名】懸賞にて募ること。

じやう-ほ 讓步【名】㊀路を讓りて、人を先立たしむること。㊁自己の主張するところをまげて讓り合ふこと。
しやう-ほう 正報【名】〔佛〕『過去の業因(ｺﾞﾌｲﾝ)に依りて感得せし果報の正體なるよりいふ』二報の一。衆生の肉體・精神。正果。(依報(ｴﾎｳ)に對して)
しやう-ほう 生報【名】〔佛〕三時業(ｻﾝｼﾞｺﾞﾌ)の一。この世にて爲せる善惡の業力(ｺﾞﾌﾘｷ)によりて、次生(ｼﾞｼｬｳ)に、これに應ずべき善惡の果報を受くること。生得(ｼｬｳﾄｸ)の報。順生業(ｼﾞｭﾝｼｬｳｺﾞﾌ)。(現報・後報に對して)
しやう-ほう 聖寶【名】〔人〕高僧。洛東醍醐寺の開祖。葛野(ｶﾄﾞﾉ)王の子。理源阿闍梨と號す。氣宇濶大にして、顯密二敎を究む。仁和三年傳法阿闍梨の位を賜ひ、貞觀寺の座主となる。延喜九年寂す。年七十八。
じやう-ほう 穰豐【名】ほうじやう(豐穰)に同じ。
じやう-ほく 城北【名】都城の北の方。
城北の御所【句】德川氏のとき、江戸城の田安門と淸水門との中に造りし殿舍。
じやう-ぼく 上木【名】じやうし(上梓)に同じ。
じやう-ほくめん 上北面【名】四位・五位の諸大夫にて、北面の侍となりて、院の昇殿を許されたるもの。(下北面に對して) 盛衰記「上北面より殿上をゆるさるる者もありければ」
しやうほけ-きやう 正法華經【名】〔書〕法華經譯本の最初のもの。十卷。支那西晉の代、印度の僧竺法護の譯。
しやうほ-しゆぎ 償補主義【名】海關稅を徵收する政策として、外國製には、內國製と同等もしくは同等以上の課稅を爲すべしと唱道する主義。
じやうぼだいゐん-の-みささぎ 成菩提院陵【名】白河天皇の御陵。山城國紀伊郡竹田村字塔垣(ﾀｳﾉｶﾞｷ)と呼ぶ田間にあり。俗稱、塔壇(ﾀﾌﾉﾀﾞﾝ)。
しやう-ぼふ 正法【名】〔佛〕眞正の道法。正しき教法。(外法(ｹﾞﾎﾌ)に對して)しやうぼふじ(正法時)參照。

正法に奇特無し【句】正しき教法には、却って普通と異なる所なきものなり。正法に不思議無し。甲陽軍鑑「正法に奇特なしと聞けば、神變は更にいらざるものなり」
正法に不思議無し【句】前條に同じ。
しやうぼふ-げんざう 正法眼藏【名】㊀〔佛〕釋迦牟尼佛の妙心。爲愚癡物「時に、世尊、迦葉(ｶｼﾌ)に告げて曰く、吾に正法眼藏、涅槃(ﾈﾊﾝ)の妙心あり。汝に付囑す」㊁〔書〕支那宋の禪僧天慧宗杲(ｶｳ)の、その弟子と問答せる語を、紹興十七年侍者沖密慧然の編輯せしもの。五卷。㊂〔書〕我が國曹洞宗の開祖道元の法語の纂集なりと稱せらるるもの。もと百卷なりしが、五卷を逸し、現本は九十五卷。
しやうぼふ-じ 正法寺【名】㊀美濃國本巢(ｽﾄ)郡西鄕村大字小野にある禪宗の寺。古來和歌の會など屢ありて、その名高し。㊁京都市下京區淸閑寺町にある時宗の寺。延曆中傳教の開基。本尊は釋迦如來。もと天台宗に屬せしが、後小松天皇の時に、國阿上人中興して、今の宗旨に改む。㊂上總國山武郡大和村大字小西に在る日蓮宗の寺。四十四本山の一。原胤繼の創立、日意の開山。一名、小西檀林。㊃陸中國江刺郡黑石村大字黑石に在る曹洞宗の寺。康永三年領主長部淸秀の創立、無底の開山。本尊は正如意輪觀音。㊄いはまでら(岩間寺)に同じ。
しやうぼふ-じ 正法時【名】〔佛〕正法の行はるる時期、即ち佛入滅後の五百年間。さんじ(三時)㊃參照。
じやうほふ-じ 淨法寺【名】上野國多胡(ﾀｺﾞ)郡鬼石町大字淨法寺にある天台宗の寺。聖武天皇の朝に開創し、傳教再建す。古名、綠野(ﾐﾄﾞﾉ)寺。
しやうほふじ-わん 正法寺椀【名】南部塗の一。正法寺㊃にて製せしもの。
しやう-ほふむ 正法務【名】〔佛〕ほふむ(法務)㊁を見よ。
しやうぼふ-りつ 正法律【名】〔佛〕眞言宗の高僧、慈雲の主唱せし眞言律宗。慈雲・二十七歲にして、河內國高井田の長榮寺に住

持たりし時、弟子親鸞・覺法等と相議し、正法の衰へたるを匡正せんとて創む。晩年に河內國高貴寺に遷るや、その寺を、正法律一派の本山と定めたり。

しやう-ほん 正本 【名】 ㊀根據とすべき正しき本。本書。 ㊁きやくほん(脚本)に同じ。 ㊂小說本の一種。享保頃行はれしもの。 靜觀戲新書「爰に享保年中の頃まで出來たる江戸草雙紙の始り正本といふ物、俗にからかみ表紙といふ。この手下に鉢かつぎ・薄雲・烏帽子折・公平・兜論その外、名高きもの夥し」 ㊃登記所の臺帳。

しやう-ぼん 生飯 【名】 さんばん(生飯)を見よ。

じやう-ぼん 上品 【名】〔佛〕くぼん(九品)㊀を見よ。

じやう-ぼん 上品 【名】 ㊀〔地〕美濃國の地名。 ㊁次條の略。

上品の絹 【句】 美濃國上品より產出する絹。 盛衰記「上品の絹百疋」

じやう-ぼん 淨飯 【名】〔人〕『梵Śuddhodana の譯語』中印度迦毘羅衞(カビラ)の城主。釋迦の生父。淨飯王。

じやうぼん-げしやう 上品下生 【名】〔佛〕上品を三等に分ちたる中の下位。くぼん(九品)參照。

じやうぼん-ごくらく 上品極樂 【名】〔佛〕九品の中の上品に屬する極樂。くぼん(九品)參照。 著聞「上品極樂は我が本國なり。定めて終に往生すべし」

しやうほん-じたて 正本製 【名】〔書〕文句を臺帳風にせるのみならず、插畫も、俳優の似顏に描き、書割・道具立を寫すなど、總て芝居掛に作りたる草雙紙。筋はお仲清七・小いな半兵衞など一篇乃至二三篇續きにて、數種を收む。十二篇。柳亭種彥作。

じやうぼん-じやうしやう 上品上生 【名】〔佛〕上品を三等に分ちたる中の上位。くぼん(九品)參照。 謠曲(遊行柳)「上品上生に至らんことぞ嬉しき」

じやうぼん-ちゆうしやう 上品中生 【名】〔佛〕上品を三等に分ちたる中の中位。くぼん(九品)參照。 義經記「上品中生の彌陀」

しやうぼん-まめ 【名】〔植〕かにめあづき(蟹眼小豆)に同じ。

じやうぼん-れん 上品蓮 【名】〔佛〕次條の略。

じやうぼん-れんだい 上品蓮臺 【名】〔佛〕上品極樂の七寶池中なる七寶の大蓮華。 謠曲(源氏供養)「上品蓮臺に心をかけて」

じやうぼん-わう 淨飯王 【名】〔人〕じやうぼん(淨飯)に同じ。

じやうぼん-わう 淨梵王 【名】〔佛〕『淨は梵の譯語なるを、梵語と漢譯とを重ねたること、さんげ(懺悔)の類なるもの』ぼんてんわう(梵天王)に同じ。

しやう-ほんゐ 飼養本位 【名】 家畜の飼養に要する一定の滋養分の量また率。

しやう-まい 正米 【名】 ㊀現に存在する米。 ㊁現在に存在する米の取引。(空米に對して)

じやう-まい 上米 【名】 ㊀上等米。 ㊁『米を上(アグ)る義』 德川將軍吉宗の時、一時各大名の在府期を半年に減縮すると同時に、萬石以上の者をして、萬石ごとに、百石づつの割合にて上納せしめし米。

じやう-まい 城米 【名】 ㊀江戸時代に備荒のために、譜代の諸藩に命じて貯藏せしめし穀米。 ㊁城中に貯へたる米。

しやうまい-いち 正米市 【名】 次條の略。

しやうまい-いちば 正米市場 【名】 正米の取引をなす市場。正米いち。正米しぢやう。

しやうまい-さうば 正米相場 【名】 正米市場の米相場。

しやうまい-し 正米師 【名】 正米の賣買を業とする人。

しやうまい-しぢやう 正米市場 【名】 しやうまいいちば(正米市場)に同じ。

じやうまい-ぶぎやう 城米奉行 【名】 豐臣時代の職制の一。城米のことを掌りしもの。

しやう-まく 漿膜 【名】〔醫〕しやうえきまく(漿液膜)の略。

じやう-まへ 鎖前 【名】 じやう(鎖)に同じ。

じやう-まん 上慢 【名】〔佛〕ぞうじやうまん(增上慢)に同じ。

上慢の幢(ハタ) 【句】 上慢の心の高きを、旗ぼこに譬へていふ語。我慢のはたぼこ。 太平記「久しく山門の澆漓風に隨はば、上慢の幢高うして、遂に天魔の掌握のうちに落ちぬべし」

五千の上慢 【句】〔佛〕『法華經の方便品に見ゆ』釋迦が靈鷲山(リヤウジユセン)にて、將に法華經を說かんとする時、聞くに足らずとて、俄かに立去りきといふ、增上慢なる五千人の聲聞(シヤウモン)僧。 十訓「五千の上慢は、佛だに、何ともしたてまつらず」

しやう-み 正味 【名】 ㊀せいみ(正味)に同じ。 ㊁物の皮・滓(カス)などを去りたる、眞のよき部分。 井筒業平河內通「表向の名前は祖母が夫、かんじんの正味はそなたの殿御」 ㊂〔商〕しやうみぢゆうりやう(正味重量)の略。 ㊃しやうみねだん(正味値段)の略。 ㊄ほんもの。しやうぶつ。 「と。

しやう-み 賞味 【名】 賞美して食ひ味ふこと。

じやう-み 上巳 【名】 ㊀三月の初の巳の日。元巳。上巳(ジヤウシ)。 ちゆうみ(中巳)參照。 ㊁次條の略。

上巳の節供(セック) 【句】 初は三月の初の巳の日、中世以後、陰暦三月三日に、女子の祝日として、雛祭を行ひしこと。重三(チョウサン)。雛の節供。桃の節供。 ごせっく(五節供)參照。

上巳の祓(ハラヒ) 【句】 古、上巳の日に行ひし祓。

じやう-み 情味 【名】 あぢはひ。おもむき。

しやうみ-うりあげきん 正味賣上金 【名】〔商〕商品を賣却して得たる金額中より、その商品に對して支拂ひたる諸費用を引去りたる殘額。

しやうみ-ぢゆうりやう 正味重量 【名】〔商〕『英 Suttle weight』 總量目中より風袋或は損減・漏泄等を引去りたる純量目。正味。正目(シヤウメ)。

しやう-みつ 詳密 【名】 くはしくてこまかなること。詳細。

しやうみ-ねだん 正味値段 【名】 かけねなしの價。正味。

じやう-みの 上美濃 【名】 なかなほし(中直)㊀に同じ。

しやうみ-ばりき 正味馬力 【名】『英 Brake horse-power』 外部の仕事に使用し得べき正味の馬力。指示馬力より、各動部の摩擦のために減少して、その約七乃至八割內外なるを常とす。商止又はその他の動力計によりて組織す。商止(プ)馬力。動力計馬力。實効馬力。

しやうみ-べに 正味紅 【名】 しやうえんじ(生臙脂)㊀に同じ。

しやう-みん 商民 【名】 商業を營む人民。

しやう-みやう 正命 【名】〔佛〕はつしやうだう(八正道)を見よ。

しやう-みやう 唱名 【名】〔佛〕しようみやう(稱名)に同じ。

しやう-みやう 聲明 【名】〔佛〕㊀『梵Śabdavidyā (攝拖苾馱)の譯語』 五明(ゴミヤウ)の一。諷誦(フウジユ)を研究して、音聲を調節する規則を立つるもの。 ㊁ぼんばい(梵唄)に同じ。

じやう-みやう 常命 【名】 人間の普通の壽命。非業ならぬ壽命。

じやう-みやう 淨名 【名】〔人〕次次條に同じ。

じやうみやう-きやう 淨名經 【名】〔書〕ゆゐまきやう(唯摩經)に同じ。

じやうみやう-こじ 淨名居士 【名】〔人〕『淨名は唯摩の漢譯』 ゆゐまこじ(唯摩居士)に同じ。 大鏡「佛在世の淨名居士とおぼえはべるものかな」

しやうみやう-ごふ 聲明業 【名】 眞言宗にて、聲明を學習する者。

しやうみやう-し 聲明師・聲明士 【名】 聲明に通ずる人。

じやうみやう-だいし 淨名大士 【名】〔人〕じやうみやうこじ(淨名居士)に同じ。 盛衰記「淨名大士は講堂に奄羅園を廻じけり」

しやうみやう-ぶし 聲明節 【名】 聲明の節。 狂言(小傘)「いつぞや、早少女(サヲトメ)が、山田を植ゑる時、田植を歌うて植ゑたを、某も面白さに、よう覺えてゐるにより、これに聲明節を附けて、辭らかいておかうではあるまいか」

じやう-みやく 靜脈 【名】〔醫〕大循環にありては靜脈血を、小循環にありては動脈血を心臟に輸送する管。毛細管網に始まり、漸次集合して大管となり、大靜脈幹を經て心房に入るもの。多くは皮膚直下にありて、外面より見ゆ。脈搏なく、血液の壓力も大ならざれば、これを切りても、一時に多量の血液出づることなし。(動脈に對して)

じやうみやく-くわん 靜脈管 【名】〔醫〕靜脈を形成する血管。

じやうみやく-けつ 靜脈血 【名】〔醫〕身體諸臟器の酸化作用によりて老敗し、多量の炭酸等の不用物を含める血。還元したるヘモグロビンを含めるため、暗赤色を呈す。くろち。ふるち。(動脈血に對して)

じやうみやく-どちやう 靜脈怒張 【名】〔醫〕じやうみやくりう(靜脈瘤)に同じ。

じやうみやく-べん 靜脈瓣 【名】〔醫〕靜脈內にありて、その內膜より成れる瓣膜。血液の逆流を防ぐ作用を營む。

じやうみやく-りう 靜脈瘤 【名】〔醫〕靜脈の一部又は數箇所の擴張するもの。靜脈怒張。

しやう-む 商務 【名】 商業上の事務。

しやう-む 莊務 【名】 莊園の事務。

しやう-む 瘴霧 【名】 惡しき氣を含む霧。

しやう-む 省務 【名】 各省の事務。

じやう-む 常務 【名】 ㊀通常の事務。 ㊁常に執る事務。

しやうむ-きよく 商務局 【名】 ㊀明治十三年大藏省に置かれ、商事に關する事務を掌りし局。翌年廢せらる。 ㊁農商務省の一局。商事に關することを掌る。

しやうむ-くわうてい 聖武皇帝 【名】 しやうむてんわう(聖武天皇)に同じ。 出世景淸「この大伽藍と申すは、聖武皇帝が御建立」

しやうむ-くわん 商務官 【名】 商事視察のため、特に海外に派せらるる官吏。外交官又は領事官たる資格ある者、又は現にその職にある者より特に任命せらる。

しやうむ-てんわう 聖武天皇 【名】〔人〕第四十五代の天皇。御名は首(オビト)。天璽國押開豐櫻彥(アメシルシクニオシハラキトヨサクラヒコ)また勝寶感神聖武皇帝の尊號あり。文武天皇の皇子。御母は藤原宮子。在位二十五年(紀元一三八四—一四〇八)。天平勝寶八年崩ず。壽五十六。

じやうむ-とりしまりやく 常務取締役 【名】 定まりたる事務を扱ふ取締役。

じやうむ-ゐゐん 常務委員 【名】 定まりたる事務を扱ふ委員。

しや-うん 社運 【名】 社の運命。

じや-うん 邪雲 【名】 禍を示す雲。邪法によりて現るるといふ雲。 盛衰記「邪雲佛日の影を犯す」

じやう-め 正目 【名】 しやうみぢゆうりやう(正味重量)に同じ。

じやう-め 上馬 【名】 じやうば(上馬)に同じ。 源氏「世になき上馬どもを、調へさせたまへり」

しやう-めい 正銘 【名】『正しき銘ある意』 僞ならぬこと、又そのもの。まこと。正眞。 爲朝歌「抜くと、鞘を叩き割り、再び指さず死ぬるが、これが薩摩の正銘」

しやう-めい 將命 【名】 ㊀『儀禮に「某固願聞二名于將レ命者一」とあり。命令を將(オコナ)ふ義』 命令の取次をなすこと。 ㊁さしづ。指揮命令。

しやう-めい 詳明 【名】 つまびらかなること。詳細。

じやう-めう 淨妙 【名】 清くしてたへなること。淸淨・微妙。 盛衰記「淨妙無碍(ゲ)の歌を以て、如來大會(ダイヱ)を供養せしに」

じやうめう-じ 淨妙寺 【名】 ㊀相模國鎌倉郡淨妙寺村にある寺。五山の一。臨濟宗十三派の本山の一。文治四年足利義兼の創建。行勇律師の開基。初、眞言宗に屬して極樂寺また法樂寺と稱せしが、義兼の子義氏これを禪宗に移し、のち足利尊氏、その父貞氏の法號を附して、今の名に改む。 ㊁紀伊國有田郡小豆島に在る臨濟宗の寺。大同元年平城天皇の御母乙牟漏(オトムロ)皇后の創立。唐僧如寶の開山。

じやう-めきき 上目利 【名】 上手のめきき。 重井筒「私が惚れたのは……それそれその次のらむうげんだとぞ答へける。これは上物上目利と、豆板一粒はつとはづみ」

しやう-めつ 生滅 【名】〔佛〕萬有の現象の發生すると變滅すると。生あるもの必ず滅あるを有爲(ウヰ)法といひ、滅するもの必ずしも生あらざるを無爲法といふ。

生滅滅已(イ) 【句】〔佛〕『梵Uppajjitvā-nirujjhantiの譯語』 涅槃經に出でたる四句の偈(ゲ)の一句。いろはうた(伊呂波歌)を見よ』 生滅の境を離れて、涅槃(ネハン)の證果に達すること。生滅の現象界に執著するを滅し盡すこと。 梁花「生滅滅已は華嚴經の文なり」

しやう-めん 正面 【名】 ㊀正しく面を向くること、又その方面。まむき。まおもて。まとも。 ㊁〔兵〕側面縱隊の先頭が右に位置する時の橫隊の前幅。 ㊂〔兵〕陣形に排列せる艦隊の前幅。 ㊃しやうめんさじき(正面棧敷)を見よ。

正面が切れぬ 【句】 舞臺にて、正面が向き得ぬ。芝居にて、役者が見物におぢて、正面を向き得ぬ。

しやう-めん 晶面 【名】〔鑛〕『英Crystal face』 結晶體の平面。錐面・柱面・卓面の三種あり。面。各その條を見よ。

じやう-めん 上面 【名】 上方の面。うはつら。表面。めん。

しやうめん-こうげき 正面攻擊 【名】〔兵〕敵陣の正面の方より攻立つること。(側面攻擊・背面攻擊に對して)

しやうめん-こんがう 青面金剛 【名】〔佛〕帝釋天の使者。體色青く、六臂を有して、手に弓箭・寶劍を執り、一鬼を足下に踏めるを像とす。 かうしんしやうめん(庚申青面)參照。

しやうめん-さじき 正面棧敷 【名】 芝居の舞臺と相對する正面の階上。昔は棧敷といへば、見物席の左右の階上にのみ限り、正面はただ正面、又はつんぼさじきと呼ぶを常とせり。

しやうめん-しようとつ 正面衝突 【名】 車などの、正面と正面と衝突すること。

しやう-もく 生木 【名】 せいぼく(生木)に同じ。

生木化佛(ケブツ) 【句】〔佛〕性空法師庵居の初、傍に櫻桃樹ありしが一日、天人降り來り、これに禮して、「稽首生木如意輪、能滿二有情福壽願一、亦滿二往生極樂願一、一切衆生心所レ念」といふ偈(ゲ)を作りしより、性空その枝を斬り、その根株にて、如意輪觀音の像を造り、安鎭行者に刻ましめたりといふ傳說(元亨釋書第二十八に出づ)によりていふ。或はいふ、單に地上に成育せる樹木が、そのままに法身佛陀の靈現なりとの意と。「草木國土悉皆成佛」參照。 太平記「生木化佛の觀世音、稽首生木如意輪、能滿有情福壽願、亦(ヤク)滿往生極樂願、百千俱胝悉所念」と天人降下(カウゲ)供養し奉る像なり」

しやう-もくから 【名】〔植〕うまのすずくさ(馬兜鈴)に同じ。

じやう-もの 上物 【名】 上等の物。 一代男「女郎は、らは氣らしく見えて、心のかしこきが上物と、くつはの又市と申せし人」 重井筒「これは上物・上目利」

しやう-もん 相門 【名】 宰相の家がら。

相門必ず相あり 【句】『史記の孟嘗君傳に「文問二其父嬰一曰、君用レ事相レ齊、門下不レ見二一賢者一、文聞、將門必有レ將、相門必有レ相、於レ是嬰乃使レ待二賓客一。賓客日進」とあるに本づく』 名家には、必ず名人出づ。(諺語)

しやう-もん 將門 【名】 軍將の家がら。武家。武門。將家。

將門必ず將あり 【句】『「相門必ず相あり」を見よ』 大將の家には大將出づ。(諺語)

しやう-もん 正文 【名】 表向へ出す書附。本紙。

しやう-もん 唱門 【名】 しやうもんじ(唱門師)の略。 正徹千句「いかにも耳のうときしやうもん」

しやう-もん 聲聞 【名】〔佛〕『梵Śrāvaka (舍羅婆迦)の譯語』 せいぶん(聲聞)を見よ』 佛道を悟る程度の深淺に依る位の一。直接に佛の說法を聞きて、四諦(タイ)の理を悟り、見惑・思惑を斷じて、涅槃(ネハン)に入るもの。緣覺と併せて二乘といひ、菩薩をも加へて、三乘といふ中の最下位なるもの。緣覺と同じく小乘の範圍に屬し、その修行及び證果は、菩薩よりも小さく、自利のみありて、化他(ケタ)の大行なく、阿羅漢を極果とす。 太平記「六波羅蜜の行、二時に破れて、破戒の聲聞とぞなりにける」

聲聞の四果 【句】〔佛〕 聲聞乘の證果

(ｸﾚｼｬ)の四つの等級。第一階は、須陀洹(ｼｭﾀﾞ)果とて、見惑を斷じて、初めて聖者の流類に入れるもの、第二果は斯陀含(ｼﾀﾞｺﾞﾝ)果とて、思惑の過半を斷じたるもの、第三は、阿那含(ｱﾅｺﾞﾝ)果とて、思惑の殘餘をも斷じて、再び欲界に還來せぬもの、第四は、阿羅漢果とて、一切の見・思二惑を斷じ盡したる極果。須陀洹果は預流(ﾖﾙ)果と譯し、斯陀含果は、思惑未だ斷じ盡さざるため、欲界の人間と天界とに一度受生すべきが故に、一來果と譯し、阿那含果は不還(ﾌｹﾞﾝ)果と譯す。

しやう-もん 青門 【名】〔佛〕しやうれんゐんもんぜき(青蓮院門跡)の略。

じやう-もん 【名】『せうもう(燒亡)の訛かといふ』くわじ(火事)を云ふ。〔京都の語〕 膝栗毛「じやうもんがいくとは、火事があるさうなといふことなり」

しやう-もん-かい 聲聞界 【名】〔佛〕十界又は九界の一。聲聞の境界。

しやう-もん-こんじやう 聲聞根性 【名】聲聞の境界を脫しえぬ、劣りたる心。 嵐雪十紅「放下師の小刀のみこむ姿の聲聞根性、あな、これの羅漢や、羅漢や」

しやう-もん-し 唱門師・唱文師 【名】【一】昔、元朝の寅の刻、犬神人(ｲﾇｼﾞﾆﾝ)の禁裡の日華門に參りて、毘沙門經の文句を訓讀して祝の儀をなししもの。大黑。 【二】かどせっきやう(門說經)に同じ。 【三】おんやうじ(陰陽師)を云ふ。〔京都の語〕

しやう-もん-じん 聲聞身 【名】〔佛〕十身の一。聲聞乘を得たる衆生身。

しやう-もん-じよう 聲聞乘 【名】〔佛〕『えんがくじよう(緣覺乘)を見よ』三乘又は二乘の一。聲聞の地位に達する教。(緣覺乘・菩薩乘に對して)

しやう-もん-そう 聲聞僧 【名】〔佛〕聲聞の證果を得んとして修行する僧。

しやう-もんぢやう-しやう 聲聞定性 【名】〔佛〕五性の一。決定(ｹﾂｼﾞﾖｳ)して、聲聞の果のみを聞くべき種性。

じやう-もん-らう 城門郎 【名】けんもつ(監物)の唐名。

しやう-もやう 仕樣模樣 【名】しやう(仕樣)に同じ。 日本振袖始「仕樣模樣もありそな事と、氣を揉めば」

しやう-や 莊屋・庄屋 【名】江戶幕府時代の村の百姓の長。領主の命を受け、郡代又は代官の下にありて、その地の事を掌りしもの。一般に村內の舊家世襲して、大いに勢力あり、その數村又は數十箇村を支配するを大莊屋といへり。むらをさ。なぬし。里正。しやうじ(莊司)參照。

じやう-や 上夜 【名】夜の上番。當直。

じやう-や 常夜 【名】いつも夜のごとく暗きこと。 賀古教信七墓廻「何處あてどの五月闇、常夜の暗と目もくれて」

しやう-やう 賞揚 【名】ほめたたふること。稱揚。稱譽。

しやう-やう 徜徉・徜佯・倡佯・相羊 【名】『相羊は、楚辭に「聊逍遙以相羊」とあり』せうえう(逍遙)に同じ。

しやう-やう 奬揚 【名】すすめあぐること。奬譽。

じやう-やう-ぐう 上陽宮 【名】じやうやうじん(上陽人)を見よ。 盛衰記「友無き宿に獨り居て、明し暮らす悲しさは、上陽宮の徒然(ﾂﾚﾂﾞﾚ)斯くやと、互に語りつつ」

じやう-やう-じん 上陽人 【名】〔人〕『白居易の上陽白髮人と題する詩に「上陽人、紅顏闇老白髮新、綠衣監使守二宮門一、一閉二上陽一多少春、玄宗末歲初選入、入時十六今六十、同時采擇百餘人、零落年深殘二此身一」とあり』支那唐の玄宗帝の代、楊貴妃寵を專にして、六宮の美人すべて進幸を得ざりし中に、殊に貴妃のために嫉妬の犧牲となりて、徒らに年老いし上陽宮の一婦人。不遇の宮女の例に引かる。 大鏡「上陽は、楊貴妃にそばめられて、みかどに見え奉らで、春のゆき、秋の過ぐるをも知らずして、十六にて參り、六十まで有りけり」

しやう-やく 請益 【名】せいえき(請益)に同じ。 江次第「示二請益之氣色一」

しやう-やく 尙藥 【名】『尙は主(ﾂｶｻﾄﾞ)る義』くすりのかみ(尙藥)に同じ。

しやう-やく 生藥 【名】〔醫〕『獨 Droge』草根・木皮に屬する藥品の總稱。卽ち動・植物及びその產生物中、それより有効成分を抽出製造しべき原料となるもの。

じやう-やく 滋養藥 【名】きやうさうざい(强壯劑)に同じ。

しやう-やく-きよく 尙藥局 【名】てんやくれう(典藥寮)の唐名。

しやう-やく-ば 庄役場 【名】臺灣の庄の役場。庄長がその行政事務を取扱ふ所。

しやう-やく-ほうぎよ 尙藥奉御 【名】てんやくのかみ(典藥頭)の唐名。

しやう-や-けん 庄屋拳 【名】きつねけん(狐拳)に同じ。

じやう-やど 上宿 【名】上等のやどや。

じやう-やど 常宿 【名】ぢやうやど(定宿)に同じ。

じやう-や-とう 常夜燈 【名】一夜を通じて點火しておく燈明。常燈。

辻の常夜燈 【句】がいとう(街燈)に同じ。

しやう-ゆ 醬油 【名】我が國固有の調味用嗜好品の一。普通、大豆を水に浸して、釜中にて煮、熬(ｲ)りて粉末としたる小麥と混ぜて、麴に製し、鹽水中に入れ、一二年間醱酵せしめたる後、壓搾して製するもの。濃褐色又は淡褐色の液をなし、鹹味と甘味とを有し、一種特有の香氣あり。したぢ。むらさき。

醬油で煮染(ﾆｼ)めた樣(ﾖｳ) 【句】白き帶などの、古び色づきて、赤黑くなれる狀。

醬油の實(ﾐ) 【句】次條に同じ。

醬油の諸實(ﾓﾛﾐ) 【句】醬油製造の行程中、熬(ｲ)りて粉末としたる大豆と小麥とを交ぜて麴とし、鹽水中に入れて、數十日間かきまぜたるもの。

しやう-ゆ 奬諭 【名】すすめさとすこと。奬勵・訓諭。

じやう-ゆ 上諭 【名】【一】かみのおさとし。君主の諭命。 【二】〔法〕法令・條約・豫算等を公布する時、その前文として、天皇の裁可を經たることをあらはす語。

しやう-ゆ-ざうこくぜい 醬油造石稅 【名】醬油の造石數に應じて、その製造人に課する租稅。

しやう-ゆ-すまし 醬油澄汁 【名】すましじる(澄汁)に同じ。

しやう-ゆ-ぜい 醬油稅 【名】醬油造石稅と自家用醬油稅との稱。

しやう-ゆ-せいざうにん 醬油製造人 【名】醬油を釀造する人。

しやう-ゆ-たき 醬油煮 【名】「金時(ｷﾝﾄｷ)の醬油煮」を見よ。

じやう-ゆめ 上夢 【名】上等のゆめ。吉夢。

しやう-ゆ-や 醬油屋 【名】醬油を製造する家、又それを賣る家。

じやう-ゆゐしきろん 成唯識論 【名】〔書〕天親菩薩の著なる唯識三十頌の註釋中、護法論師の說を骨子とし、安慧・難陀等の九師の註釋を參酌譯出せるもの。十卷。玄奘三藏の譯。三藏の門人慈恩・窺基の註解せる述記二十卷あり。

しやう-よ 莊預・庄預 【名】しやうちやう(庄長)に同じ。

しやう-よ 奬譽 【名】すすめほむること。奬揚。

しやう-よ 賞與 【名】賞めて、金品を與ふること、又その金品。賞賜。

しやう-よ 賞譽 【名】ほめたたふること。ほめあぐること。稱譽。

じやう-よ 讓與 【名】ゆづり與ふること。

しやう-よう 商用 【名】商賣上の用向。

しやう-よう 聖容 【名】〔佛〕佛菩薩の容貌の敬稱。 盛衰記「一十六丈の聖容必滅の煙、天にたなびく」

しやう-よう 請用 【名】加持・祈禱などのために、僧侶・驗者どもを請じ入るること。 盛衰記「おこり心地、もののけなどいひて、請用隙なし。向と向ひぬるに、空しき事はなし」

じやう-よう 常用 【名】つねに使用すること、又そのもの。

じやう-よう-じ 常用時 【名】『英 Civil time』正子を日の始とし、正午まで十二時間を午前、正午より次の正午まで十二時間を午後として數ふる時。(天文時に對して)

しやう-よう-たい 晶溶體 【名】〔化〕『英 Mixed crystal』二種又は二種以上の結晶質が、種種の割合に混じ、溶解して結晶せるもの。

じやう-よう-たいすう 常用對數 【名】〔數〕

『英 Common logarithm』底數が一〇なる時の或數の對數。實地計算に弘く應用せらる。

しやう-よう-ばりき 商用馬力 【名】『英 Commercial horse power』蒸氣罐の、汽罐より蒸氣を供給して運轉する汽機の平均馬力數より規定せるもの。卽ち一時間に華氏百度の水三十封度を一平方吋につき、大氣壓以上七十封度の汽壓に對し、乾燥せる蒸氣に變化するものを、一馬力とす。

しやう-よう-ぶん 商用文 【名】商業上の通信・取引等に關する文書。

しやう-よう-ぶんしよ 商用文書 【名】商取引に使用する文書。

しやう-よう-ぶるひ 請用振 【名】請用にあひて、驗の顯れしを誇ること。 盛衰記「御驗者の請用振は、何れの日にて侍るべきぞ」

しやう-よう-りやくご 商用略語 【名】〔商〕『英 Commercial abbreviation』商業上に使用する一種の符牒。例へば B/L が Bill of lading(船荷證券)の略語なる類。

しやう-よ-きん 賞與金 【名】賞與の金。賞金。

じやう-よく 情欲・情慾 【名】【一】情と慾と。 【二】いろごころ。色情。性慾。

しやう-よ-ひん 賞與品 【名】賞與の品物。賞品。

しやう-らい 唱禮 【名】法會に、表白終りたる後、唱禮師の、禮盤(ﾗｲﾊﾞﾝ)によりて、五悔・五大願等の文を唱ふること。 盛衰記「唱禮し奉って」

しやう-らい 將來 【名】【一】持ちて來ること。 嵯峨天皇甘露雨「弘法大師は天竺將來の御袈裟衣、弟子二人に灑水させ、壇に上らせ給ひければ」 【二】まさに來らんとする時。これよりのちの時。未來。後來。當來。 【三】ゆくすゑ。ゆくさき。前途。

しやう-らい 生來 【名】せいらい(生來)【一】に同じ。

しやう-らい-し 唱禮師 【名】法會の時、唱禮を行ふ僧。

しやう-らい-むし しやうらい蟲 【名】〔動〕けら(螻蛄)を云ふ。〔京都の語〕

しやう-らう 精靈・生靈・聖靈 【名】〔佛〕しやうりやう(精靈)の約。

しやう-らう-びやう-し 生老病死 【句】しやう(生)の條下を見よ。

じやう-らく 上洛 【名】『らくやう(洛陽)を見よ』都にのぼること。上京。 曾我小栗判官「則ち上洛、朝參あり」

じやう-らく 常樂 【名】〔佛〕常住にして安樂なること。 じやうらくがじやう(常樂我淨)參照。 盛衰記「九品淨土常樂の安養に生れんと欲するなり」

常樂の緣 【句】〔佛〕常樂の德を具足せる佛界に到る因緣。 謠曲(東北)「いさぎよき響は、常樂の緣をなすとかや」

常樂の地 【句】〔佛〕常樂の德を具有せる地、卽ち淨土。 盛衰記「步は近く常樂の地に運び」

常樂の夢 【句】〔佛〕佛の心境の安樂なるを、快き夢に譬へていふ語。 謠曲(山姥)「風、常樂の夢を破る」

じやう-らく-が-じやう 常樂我淨 【句】〔佛〕佛の證得する四德、卽ち常と樂と我と淨と。常は常住不變なることにて、無常の反對をいひ、樂は安樂なることにて、苦惱の反對をいひ、我は自在無碍(ｹﾞ)なることにて、障碍の反對をいひ、淨は淸淨なることにて、濁惡(ﾀﾞｸｱｸ)の反對をいふ。眞如法性の境は、よく常住不變にして、淸淨安樂なる心を持つこと。涅槃(ﾈﾊﾝ)の四德。 拾千載「觀念の心し澄めば山風も常樂我淨とこそ聞ゆれ」 盛衰記「風、嶺松を吹く折は、近く常樂我淨の觀を凝らす。六時の禮讃聲すみて」

じやう-らく-じ 常樂寺 【名】【一】相模國鎌倉郡小坂村大字大船の粟船山の麓にある臨濟宗の寺。北條泰時の創建なりといひ、その墓あり。支那宋の蘭溪道隆の渡來するや、まづこの寺に住せしめ、居ること七年にして、建長寺を建てて移らしむ。故にこの寺を建長寺の根本と稱す。 【二】近江國甲賀郡石部にある天台宗の寺。元明天皇の和銅年中金肅菩薩の開基なりと傳ふ。近江巡禮第一番の札所。 【三】けいそくじ(鷄足寺)【二】の舊稱。

じやう-ら-くむ 【動四自】ちやうらくゐ(丈六組む)を見よ。

じやう-らく-やき 上樂燒 【名】弘化年間、山城國京都紫野大德寺の塔頭(ﾀｯﾁｭｳ)常樂庵にて燒きたる樂燒。器底に「常樂」の二字を印す。

じやう-らく-ゑ 常樂會 【名】〔佛〕『じやうらく(常樂)を見よ』興福寺・四天王寺・金剛峯寺などにて修する涅槃會(ﾈﾊﾝｴ)。

常樂會の內梵(ﾅｲﾎﾞﾝ) 【句】常樂會に奏する內梵音と稱する樂曲。 盛衰記「常樂會の內梵、都率天より傳はれり」

じやう-らふ 上臈 【名】『らふ(臈)を見よ』【一】〔佛〕法臘(ﾎﾌﾗﾌ)を積むこと多き者。臈次の上位なる者。(下臈に對して)〔上臈〕 榮花「この僧たち・さるべき上臈・僧綱などのは」 【二】多く年功を積みて、階級の上なる朝臣。(下臈に對して) 平治「信賴卿一座して、その座の上臈達、皆下にぞ附かれたる」 【三】じやうらふにようばう(上臈女房)の略。(中臈・下臈に對して) 源氏「上らふども、皆まうのぼりて」 【四】身分よき女。 【五】江戶幕府の大奧の女官の最上位なるもの。(年寄・中臈などに對して) 【六】明治二年宮中に置かれたる女官。女房の次位。

上臈も三食(ｻﾝｼﾞｷ) 【句】「下衆(ｽ)は三食、上臈も三食」を見よ。

じやう-らふ-しゆ 上臈衆 【名】上臈の人人。 狂言(きんじ聟)「今日は聟樣のおいでぢや。いつものやうに見苦しくして御ざらずとも、上臈衆も、身だしなみを肝要でおぢやる」

じやう-らふ-すげ 上臈菅 【名】〔植〕莎草(ｶﾔﾂﾘｸﾞｻ)科に屬する多年生の草。水邊に自生す。莖の高さ二三尺。葉は細長く、初夏、茶褐色の花穗を出す。

じやう-らふ-にようばう 上臈女房 【名】典侍にして、三位もしくは二位に敍せられしもの。執柄大臣家の女、これに充てられ、多くは禁色(ｷﾝｼﾞｷ)を許され、劍璽に候し、陪膳に仕へ、夜御殿に祗候す。また女房中、公卿等の女にして、未だ典に補せられず、二位・三位に敍せられざる者は、小女臈と呼び、これに對して、大上臈の名もありたり。院御所・攝關家等にも同樣の制度ありき。上臈。(中臈女房・下臈女房に對して)

上臈の隨身(ｽﾞｲｼﾞﾝ) 【句】ずゐじん(隨身)の條下を見よ。

じやう-らふ-むこ 上臈婿 【名】貴人を婿にすること、又貴人の婿。 保元「茂光は上臈婿取りて」

じやう-らふ-めん 上臈面 【名】能・狂言などにて、上臈にいでたつ者のかぶる假面。 醒睡笑「それなる上らふめんを見たきよし乞ひければ」

しやう-らん 詳覽 【名】くはしく見ること。

じやう-らん 上覽 【名】貴人の見たまふこと。

じやう-らん 擾亂 【名】騷動すること。さわぎ。 國性爺「今に始めぬ韃靼の雜題、すは擾亂の基ぞと」

じやう-らん-ろう 翔鸞樓 【名】大內裡八省院の四樓の一。應天門外の西南に突出し、五間・四間四方にて、屋背に鴟鳥(ｼﾋﾞ)の飾ありしもの。 せいほうろう(棲鳳樓)參照。

じやう-ら-ら 淨裸裸 【副】せきらら(赤裸裸)に同じ。

しやう-り 商利 【名】あきなひの贏(ﾓｳｹ)。商業上の利益。

しやう-り 掌裡 【名】しやうちゆう(掌中)に同じ。

しやう-り 掌理 【名】掌りて處理すること。

しやう-り 牆籬・墻籬 【名】かき。まがき。

じやう-り 草履 【名】ざうり(草履)の訛。 七一職人歌合「ざうりつくり、じやうり、じやうり、板金剛召せ」

じやう-り 情理 【名】【一】人情と道理と。 【二】事情のすぢみち。

じやう-り 常理 【名】普通の道理。

しやう-り-りう 牆柳・墻柳 【名】かきに生じてある柳。

じやう-りう 上流 【名】【一】みなかみ。川かみ。(中流・下流に對して) 【二】上の階級。上の地位。上層。(中流・下流に對して)

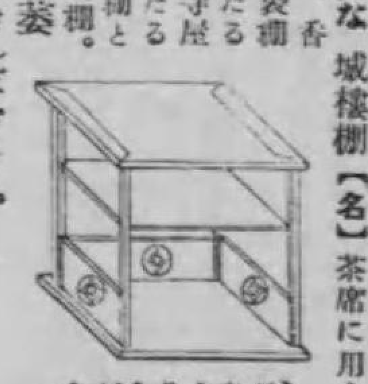
じやう-りう-しやくわい 上流社會 【名】上流の人人の社會。上層社會。(中流社會・下流社會に對して)

しやう-りく 商陸 【名】商陸(ｼﾔｳﾘｸ)の根莖を採集して乾燥せる漢藥。利尿劑とす。

じやう-りく 上陸 【名】船を乘りすてて陸にのぼること。

じやうりくぜい 上陸稅【名】『英Shorage』貨物を本船より陸揚するとき、その貨物に課する稅金。
じやうりくちてん 上陸地點【名】上陸する場所。
しやうりしべつにち 生離死別日【名】婚姻に大凶なりといふ日。即ち正月六日・二月五日・三月四日・四月三日・五月二日・六月朔日・七月六日・八月五日・九月四日・十月三日・十一月二日・十二月朔日を初として、この日より七日の間とす。裏不成就日ともいふ。
じやうりつ 常律【名】通常の法律。軍律以外の普通の法律。
しやうりつ 商律【名】〔法〕しやうはふ(商法)㊁に同じ。
じやうりつ 滋養率【名】生物の種類・年齡又は勞働の如何に對する滋養分の割合。
しやうりん 瘴林【名】瘴氣ある林。
じやうりん 上林【名】㊀じやうりんゑん(上林苑)に同じ。㊁『上林苑の果物の義』くわぶつ(果物)の異稱。東鑑「被レ副二送竹葉上林巳下一」
じやうりんざうひよう 上林藏冰【名】主水正(モンドノカミ)の唐名。
じやうりんしよ 上林署【名】もんどのつかさ(主水司)の唐名。
じやうりんじよう 上林丞【名】主水佑(モンドノスケ)の唐名。
じやうりんゑん 上林苑【名】『史記の始皇記に「三十五年、作二朝宮渭南上林苑中一、先作二前殿阿房一」とあり』天子の園。上林。上苑。
じやうりもち 草履持【名】ざうりもち(草履持)に同じ。貞丈雜記「草履取を、いにしへは、じやうりもちといふ」
しやうりやう 將領【名】しやうすゐ(將帥)に同じ。
しやうりやう 精靈・生靈・聖靈【名】〔佛〕『靈の字は精・生と同音にして、敬意を含む』死者の靈魂。なきたま。せいれい。しやうらう。亡靈。盛衰記「過去聖靈、往生極樂と手向けさせたまふもあはれなり」
しやうりやう 莊領・庄領【名】庄家の領。莊園。盛衰記「二十六箇國を相分つて、庄領國領をいはず」
しやうりやう 商量【名】㊀はかり考ふること。㊁〔佛〕學人の、參禪・修行して問答すること。
しやうりやうおくり 精靈送【名】〔佛〕精靈會(盂蘭盆會)の翌日、精靈の幽界へ歸るを送る儀式。おくりび(送火)參照。
しやうりやうざん 清涼山【名】〔地〕ごだいさん(五臺山)㊀に同じ。
しやうりやうしふ 性靈集【名】〔書〕『顏氏家訓の「原二其所レ積文章之體一、標二擧興廢一、發二引性靈一」といへるより名とす。性靈とは、人の習性・精靈をいふ』弘法大師の詩文集。弟子眞濟の編。十卷。一名、遍照發揮性靈集。
しやうりやうだいし 清涼大師【名】〔人〕ちようくわん(澄觀)を見よ。
しやうりやうだな 精靈棚【名】精靈會の時、精靈を祀るために、佛前にしつらへて供物を呈する棚。亡者ここに來りて、饗を享(ウ)くといふ。たまだな。
しやうりやうとんぼ 精靈蜻蛉【名】〔動〕㊀きやんま(黃蜻蛉)に同じ。㊁あかとんぼ(赤蜻蛉)に同じ。
しやうりやうなし 精靈梨【名】〔植〕『精靈會に用ふるよりいふ』やまなし(山梨)に同じ。
しやうりやうばった 精靈蝗蚸【名】〔動〕はたおり(機織)に同じ。
しやうりやうばな 精靈花【名】〔植〕みそはぎ(千屈菜)に同じ。
しやうりやうまつり 精靈祭【名】うらぼん(盂蘭盆)に同じ。
しやうりやうむかへ 精靈迎【名】〔佛〕精靈會(盂蘭盆會)の日に、精靈を祭壇に迎ふること。むかへび(迎火)參照。
しやうりやうやんま 精靈蜻蛉【名】〔動〕㊀あかとんぼ(赤蜻蛉)を云ふ。〔京都・大阪の語〕 ㊁きやんま(黃蜻蛉)に同じ。
しやうりやうゐん 聖靈院【名】えいふくじ(叡福寺)の別稱。
しやうりやうゑ 精靈會【名】㊀うらぼん(盂蘭盆)に同じ。㊁大阪四天王寺にて、聖德太子の忌日、即ち毎年二月二十二日(昔は二十一日より二十三日まで)に、その像を、聖靈院より六時堂に移して行ふ法會。涅槃(ネハン)會・念佛會と共に、同寺三大會の一なり。
しやうりやうゑんば 精靈蜻蛉【名】〔動〕しやうりやうやんま(精靈蜻蛉)に同じ。
しやうりやく 詳略【名】詳密と粗略と。
しやうりやく 將略【名】大將たるべき方略。大將たる器量。
しやうりやく 省略【名】せいりやく(省略)に同じ。
しやうりやく 商略【名】㊀はかること。㊁商賣上のかけひき。
しやうりやく 正曆【名】一條天皇の御代の年號(紀元一六五六―一六六〇)。
じやうりやく 上略【名】上にある文句を略して、記さぬこと。(中略・下略に對して)
しやうりやくきがう 省略記號【名】〔音〕せいりやくきがう(省略記號)に同じ。
しやうりやくざん 省略算【名】〔數〕せいりやくざん(省略算)に同じ。
しやうりやくじ 正曆寺【名】大和國添上(ソフノカミ)郡五ケ谷(ゴカ)村にある眞言宗の寺。別格本山たり。本尊は藥師佛。菩提山・華樹院と號し、正曆三年僧正兼俊一條天皇の勅を奉じて建立し、建保六年大僧正信圓再興す。
しやうりやくすゐろんしき 省略推論式【名】〔哲〕せいりやくすゐろんしき(省略推論式)に同じ。
しやうりやくはふ 省略法【名】〔語〕せいりやくはふ(省略法)に同じ。
しやうりゆう 青龍【名】㊀『禮記の典禮篇に「左二青龍一而右二白虎一」とあり』四神の一。東方に配し、龍をゑがきて、その象とす。せいりゆう。せいりよう。(白虎・朱雀・玄武に對して) 平家「左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武、四神相應の地なり」 ㊁りゆう(龍)に同じ。
しやうりゆうき 青龍旗【名】青龍の象をゑがきたる仗旗。せいりゆうき。
しやうりゆうじじやう 青龍寺城【名】しようりゆうじじやう(勝龍寺城)に同じ。
しやうりゆうわう 青龍王【名】龍屬の王。嵯峨天皇[illegible]「弘法大師守敏僧都行法を較べためさるべしと、神泉苑の汀に樓棊高くしつらはせ、正面に青龍王の繪馬をかけ」
しやうりよ 商旅【名】たびあきうど。旅商。
じやうりよ 靜慮【名】〔佛〕ぜんぢやう(禪定)に同じ。
じやうりよく 常綠【名】『英Ever-green』四時を通じて綠なること。ときは。
じやうりよくえふ 常綠葉【名】〔植〕『英Evergreen-leaves』四時綠色にして、冬も枯落せざる葉。
じやうりよくくわつえふじゆ 常綠闊葉樹【名】〔植〕『獨Immergrünes laubholz』常綠なる濶葉樹。椎・樟の如きこれなり。
じやうりよくしんえふじゆ 常綠針葉樹【名】〔植〕『獨Immergrünes nadelholz』常綠なる針葉樹。檜・杉の如き、これなり。
じやうりよくじゆ 常綠樹【名】〔植〕『英Evergreen-tree』常綠葉を有する樹木。即ち松・杉・交讓木(ユヅリハ)の類。ときはぎ。常綠木。
じやうりよくぼく 常綠木【名】〔植〕前條に同じ。
じやうりよはらみつ 靜慮波羅蜜【名】〔佛〕ろくはらみつ(六波羅蜜)を見よ。
じやうるり 淨瑠璃【名】㊀〔佛〕清淨・透明なる瑠璃。榮花「青苔鋪設、自展二七淨瑠璃之茵一」 ㊁〔書〕じやうるりものがたり(淨瑠璃物語)の略。 ㊂『じやうるりものがたり(淨瑠璃物語)を見よ』語物(カタリモノ)の一。足利時代の末葉すでにその名稱ありて、初は淨瑠璃物語を扇拍子などにて語り、慶長の頃、澤角(サハズミ)檢校、平家琵琶に倣ひ、當時行はれ初めし三味線を伴奏することを案出し、のち西ノ宮の傀儡師(クワイライシ)淡路之丞、操(アヤツリ)人形をも併せ演ずることを創め、淨瑠璃物語以外の新作行はれ、上方より漸次に、江戸にも傳はり、薩摩節・義太夫節・金平節・大薩摩節・外記(ゲキ)節・式部節・土佐節・手品節・近江節・半太夫節・一中節・常磐津節・宮本節・清元節・新内節など、種種の流派を生じ、また或は歌舞伎芝居の相方となり、或は舞踊を伴ひ、或は全然獨立の音曲として行はるるに至れり。江戸に起りし諸流を東派、京都・大阪のを西派といひ、西派の義太夫節最も盛行す。竹本義太夫以後を新淨瑠

璃、その以前のを古淨瑠璃といふ。㊃ぎだいふぶし(義太夫節)に同じ。「上るり」
じやうるりかんばん 淨瑠璃看板【名】淨瑠璃の標題、及びそれを演ずる俳優・太夫等の名を記したる劇場の看板。
じやうるりきやうげん 淨瑠璃狂言【名】義太夫節を用ひて演ずる芝居の狂言。即ち操(アヤツリ)狂言のために作りたるものを、歌舞伎風に改めたるもの。
じやうるりげいこ 淨瑠璃藝子【名】義太夫節・宮薗節などの三味線を彈く藝妓。
じやうるりごぜんじふにだん 淨瑠璃御前十二段【名】〔書〕次條に同じ。
じやうるりごぜんじふにだんさうし 淨瑠璃御前十二段草紙【名】〔書〕じやうるりものがたり(淨瑠璃物語)に同じ。
じやうるりざ 淨瑠璃座【名】淨瑠璃を語る座。
じやうるりざかかたきうち 淨瑠璃坂仇討【名】いちがやのかたきうち(市谷敵討)に同じ。
じやうるりじ 淨瑠璃寺【名】山城國相樂(サガラ)郡當尾(タウノヲ)村に在る眞言宗の寺。西小田原山と號す。もと興福寺一乘院の末寺。行基、聖武天皇の勅を奉じて創建す。俗稱、九品寺・九體寺。
じやうるりしばゐ 淨瑠璃芝居【名】『元祿時代には稀なりしより、特にいふ』淨瑠璃の語物(カタリモノ)を交へて興行する芝居。(今は普通になれるより、單に芝居といふ)〔元祿時代の語〕
じやうるりじふにだんさうし 淨瑠璃十二段草紙【名】〔書〕じやうるりものがたり(淨瑠璃物語)に同じ。
じやうるりじやうど 淨瑠璃淨土【名】〔佛〕次條に同じ。謠曲(檀風)「新宮藥師如來の淨瑠璃淨土は東にて、こち吹く風となしたまふ」
じやうるりせかい 淨瑠璃世界【名】藥師如來の淨土。この土を距ること東方十恒沙(ゴウジャ)の佛土の外に在りて、瑠璃を以て大地となし、藥師因位の時、十二大願を發し、その願の成就して、正覺を取りし所といふ。謠曲(白髭)「時に東方より淨瑠璃世界の主(イワウ)藥師、忽然と出でたまひて」
じやうるりだい 淨瑠璃臺【名】芝居の舞臺に設くる淨瑠璃の床。香翩下五十三驛「下手に、淨瑠璃臺、これに常盤津連中居並び、直ちに淨瑠璃になる」
じやうるりたいふ 淨瑠璃太夫【名】淨瑠璃節を語る人。
じやうるりひめものがたり 淨瑠璃姬物語【名】〔書〕じやうるりものがたり(淨瑠璃物語)に同じ。
じやうるりふ 淨瑠璃譜【名】〔書〕貞享より明和に至る八十餘年間の大阪竹本・豐竹兩座の淨瑠璃の沿革を年代順に記したるもの。二卷。編者未詳。溫知叢書に收む。
じやうるりぶし 淨瑠璃節【名】㊀淨瑠璃風の節まはし。狂言(昆布賣)「この度はうたひぶしに賣れ。…今度は小うたぶしに賣れ。…今度は淨瑠璃ぶしに賣れ」 ㊁ぎだいふぶし(義太夫節)に同じ。
じやうるりぼん 淨瑠璃本【名】ぎだいふぼん(義太夫本)に同じ。一代男「あくびしてはあがり、おりては淨瑠璃本など讀み、何の用もなきに、一座をさましぬ」
じやうるりものがたり 淨瑠璃物語【名】〔書〕牛若丸奧州へ下るとき、三河國矢矧(ヤハギ)の宿にて、長者の娘淨瑠璃姬と一夜の契を結びしが、その後駿河國吹上(フキアゲ)の濱にて病に罹り、眞砂の下に埋れたりしを、淨瑠璃姬尋ね出でて看病せしため、病癒えて、奧州へ下る事を述べたるもの。一卷。小野お通の作といへど詳かならず。前篇を十二段に分つ。この物語を三味線に合はするに及び、淨瑠璃節の名稱も起るに至れり。別名、淨瑠璃姬物語・淨瑠璃十二段草紙。
じやうるりゑかんばん 淨瑠璃繪看板【名】淨瑠璃看板の內容を畫にて示せる劇場の看板。
しやうるゐ 生類【名】生きて命あるもの。いきもの。せいるゐ。動物。
生類憐(アハレミ)の令【句】德川五代將軍綱吉の、家畜その他の禽獸・魚鳥の酷使・殺傷・捕獲等を禁じたる制令。綱吉、知足院の僧隆光の說を信じ、世嗣なきは、前世多殺の報なりとせしに基くものにて、その生年の戌年たりしがため、特に犬の保護を重んじたり。
じやうるゐ 城壘【名】㊀城の土居(ドヰ)。㊁しろ。とりで。
しやうれい 省令【名】各省大臣が、その職權又は特別の委任によりて發する行政命令。大臣、年月日を記入し、これに署名す。
しやうれい 奬勵【名】すすめ勵ますこと。
しやうれい 瘴癘【名】風土・氣候のために起る熱病、即ちマラリヤの類。
じやうれい 常禮【名】つねの禮式。
じやうれい 常例【名】常のしきたり。ならはし。常式。
しやうれいどく 傷冷毒・瘴癘毒【名】沼澤などより生ずる濕氣の毒。リウマチス・風濕などの原因となる。
しやうれん 青蓮【名】〔佛〕しやうれんげ(青蓮華)に同じ。
青蓮の眦(マナジリ)【句】〔佛〕「青蓮華の眼(マナコ)」に同じ。謠曲(調伏曾我)「降三世明王は、青蓮の眦に、惡魔を降伏して」
しやうれん 湘簾【名】『湘はしやうちく(湘竹)の意』竹にて造りたる簾。
じやうれん 常連【名】㊀常に定まりて伴ふつれの者。㊁興行場に常に來る見物人。定連。
しやうれんげ 青蓮華【名】〔佛〕『梵Utpala(優鉢羅)の譯語。法華經の妙音菩薩品に「是菩薩、目如二廣大青蓮華葉一」とあり』蓮の一種。その葉長くして廣く、青白分明なるより、經文中、佛・菩薩の眼の形容に用ふ。大原問答青葉宿「口には青蓮華の薰を含み、內外共に清淨に」
青蓮華の眼(マナコ)【句】〔佛〕前條を見よ。榮花「青蓮華の眼は、四大海を湛へ」
しやうれんゐん 青蓮院【名】京都市上京區粟田口町にある天台宗の寺。仁平三年鳥羽天皇の勅に由りて創建し、青蓮房行玄を開基とす。世世皇族の出家して、住持したまふ所にして、青蓮院門跡又は略して青門(シヤウモン)と稱し、門跡の隨一たり。一名、法華三昧院。
しやうれんゐんのみや 青蓮院宮【名】青蓮院門跡の稱號。前條參照。
しやうれんゐんは 青蓮院派【名】おいへりう(御家流)㊀に同じ。
しやうれんゐんもんぜき 青蓮院門跡【名】しやうれんゐん(青蓮院)を見よ。
じやうろうだな 城樓棚【名】茶席に用ふる棚物の一。香道に用ふる袋棚を半分にしたるもの。天王寺屋宗及の創めたるより、宗及棚ともいふ。牛切棚。


(じやうろうだな)

しやうゐ 傷萎【名】きずつきしぼむこと。
しやうゐ 正位【名】位階の各階を二級に分ち、その上級のもの。(從位に對して)
じやうゐ 上位【名】上のくらゐ。高き位。(下位に對して)
上位の薩埵(サッタ)【句】〔佛〕初地(ショヂ)以上の位地にある菩薩。
じやうゐ 淨位【名】天武天皇の朝に制定せられし爵位の內、明位に次ぎ、四階ありて、毎階大・廣の二つに分れ、明位と共に諸王以上に賜ひしもの。紀「淨位、ジヤウヰ」
じやうゐ 讓位【名】天皇の、御位を讓りたまふこと。みくにゆづり。讓國。脫屣(ダツシ)。遜位。じゆぜん(受禪)參照。
じやうゐき 淨域【名】〔佛〕㊀じやうど(淨土)に同じ。㊁じやうち(淨地)㊀に同じ。
じやうゐくわしよくぶつ 上位花植物【名】〔植〕子房が花萼底より上に位する花を有する植物、即ち子房上生の植物。例へば牡丹・福壽草・蓮・罌子粟(ケシ)・百合(ユリ)などの類。(下位花植物に對して)
しやうゐん 醬院【名】古の大膳職の別院。醬(ヒシホ)の事を掌りし處。
しやうゐん 省員【名】㊀官省の職員。㊁人員を減ずること。ひとべらし。
しやうゐん 正院【名】左院・右院と共に明

治四年七月に設けられし行政府。太政大臣・納言・參議・樞密大使・樞密權大使・樞密大史・樞密權少史・大使・權大使・少史・權少使(同年八月、太政大臣・左右大臣・參議・大內史・權大內史・少內史・權少內史・大外史・權大外史・少外史・權少外史に改めらる)・大主記・權大主記・少主記・權少主記の職員あり。天皇親臨して萬機を總判せり。十年一月廢止。

じやう-ゐん 上院【名】『英 Upper house』貴族又は勳功者等を組織したる議會。我が國の貴族院の類。(下院に對して)

じやう-ゐん 常員【名】平常の員數。

しやう-ゑ 正繪【名】織上げて後に顯る模様と全く同一の大きさに、豫め描きたる下繪、卽ち織物上の圖案。しやうゑし(正繪師)參照。〔德川時代の語〕

じやう-ゑ 淨穢【名】きよきと、けがれたること。淸淨と汚穢と。

淨穢不二(ふに)【句】〔佛〕差別の迷相を解脫し、眞如平等の妙理を悟りて觀ずれば、淸淨と汚穢との差別無く、無我・無心の境に入ること。謠曲(放下僧)「弓と申すは、本末に烏兎の姿を象り、日月をここに顯し、淨穢不二の祕法を表はす」

じやう-ゑ-くう 成・壞・空【句】じやう(成)の條下を見よ。

しやう-ゑ-し 正繪師【名】正繪を描くことを職とする人。

しやう-ゑん 牆垣・墻垣【名】かき。まがき。「墻籬。

しやう-ゑん 莊園【名】『田莊・園地の義。莊は、田間に在る屋舍にして、荒地開墾の際、舍を設くるによりていひ、園は菜園なり』平安朝時代以後、皇族・公卿及び神社・佛閣の占有に屬し、租稅・課役を免れ、國司の治權以外に立ちし土地。さんせいいつしんはふ(三世一身法)參照。

じやう-ゑん 上苑【名】じやうりんゑん(上林苑)に同じ。朗詠「花明二上苑一輕軒馳二九陌之塵一、猿叫二空山一斜月瑩二千岩之路一」增鏡「發行、花は上苑に明かなりと打出したるに、いとど物の音もてはやされて」

しやうゑん-きろくじよ 莊園記錄所【名】きろくじよ(記錄所)に同じ。

しやうゑん-けんけいじよ 莊園券契所【名】きろくしやうゑんけんけいじよ(記錄莊園券契所)に同じ。

じやう-をく 城屋【名】城と家と。

じやう-をん 常溫【名】㊀常に一定せる溫度。平溫。㊁平常の溫度。一年間の平均溫度。㊂通常の溫度。㊃〔理〕『英 Common temperature』大氣のは攝氏十五度前後、身體のは三十七度前後の稱。

じやうをん-そう 常溫層【名】〔地〕こうをんたい(恆溫帶)に同じ。

じやうをん-たい 常溫帶【名】〔地〕前條に同じ。

しや-えい 舍營【名】〔兵〕軍隊が、屋內に入りて、休養宿泊すること。一舍營地の高級者を、舍營司令官と稱し、舍營に關するすべての命令權を有す。

しや-えい 寫映【名】うつること。うつすこと。

しや-えい 寫影【名】物の形をうつすこと。

しや-えい 斜映【名】光の斜にうつること。

しや-えい 斜影・斜景【名】ゆふひかげ。

しや-えい 射影【名】とうえい(投影)に同じ。

しやえい-しれいくわん 舍營司令官【名】〔兵〕しやえい(舍營)を見よ。

しやえい-はふ 射影法【名】とうえいはふ(投影法)に同じ。

しやおしん-ちう 紹興酒【名】『漢字の支那音』せうこうしゆ(紹興酒)に同じ。

しや-おん 謝恩【名】恩を有難がること。うけたる恩に對して禮を述ぶること。

しやおん-くわい 謝恩會【名】謝恩のために催す會合。

しやおん-さい 謝恩祭【名】〔基〕『英 Peace offering』舊約時代に、神の恩惠を感謝せんがために行ひしもの。酬恩祭。

しやおん-もんじ 寫音文字【名】〔語〕おんじ(音字)に同じ。

しや-か 斜下【名】ななめにさがること。

しや-か 社家【名】數戶聚りたる家屋。しやけ(社家)參照。

しや-か 瀉下【名】そそぎ下ること。

しや-か 釋迦(梵 Śākya)【名】〔人〕しやかむに

(釋迦牟尼)を見よ。

釋迦に經(きやう)【句】次條に同じ。〔諺語〕小町踊「嵯峨野にて鳴く鶯や釋迦に經」

釋迦に說法【句】已にその事を知れる人に、その事を說聞かすること。釋迦に經。〔諺語〕

釋迦に提婆(だいば)【句】何にも敵のある譬。門出八島「釋迦に提婆、太子に守屋」

釋迦の十大弟子【句】じふだいでし(十大弟子)を見よ。

釋迦の手【句】「御釋迦の手」に同じ。

釋迦の八相【句】〔佛〕はつさう(八相)を見よ。

釋迦の遺弟子【句】釋迦の滅後に、佛法を信じたる者。平家「釋迦の遺弟子達なり」

しや-が 胡蝶花・蝴蝶草・著莪【名】〔植〕『ひあふぎの漢字「射干」の音轉といふ』鳶尾(いちはつ)科に屬する多年生の草。高さ一二尺に達し、葉は劍狀にして長さ一尺乃至一尺半ばかり、全緣、鮮綠色にして、扇子狀に排列す。春花莖の末に數花を著く。その形、鳶尾・溪蓀(あやめ)などのに似て、やや小さく、色は白色に紫暈あり、中心に黃斑あり。陰地に自生し、また觀賞用として園養せらる。性强くして、繁殖速かなり。

しや-が 車駕【名】㊀『漢書の景帝記に「夫吏者民之師也、車駕・衣服宜レ稱」とあり』乘物。㊁『史記の韓嫣傳に「天子車駕、蹕ニ道未レ行」、漢書の高帝記に「車駕西都ニ長安」とありて、顏註に「凡言ニ車駕一者、謂ニ天子乘ニ車而行一不ニ敢指斥一也」と、又、唐六典に「服御曰ニ乘輿一行幸曰ニ車駕一」とあり』行幸の時に、天皇を間接に指していふ語。

しや-かい 沙界【名】〔佛〕『恒河沙世界の略』無數・無量の世界。盛衰記「有頂(うちやう)無間(むげん)・鐵圍(てつ)・沙界蠢動含靈」

しや-かい 射界【名】彈丸の到達する區域內。

しや-かい 娑界【名】〔佛〕しやばせかい(娑婆世界)の略。

しや-がい 車蓋【名】車の上の天蓋。

しやか-いちだい 釋迦一代【副】物の堅牢にて、久しく保つさま。〔德川時代の語〕「釋迦一代こらへる」

じやが-いも 馬鈴薯【名】〔植〕じやがたらいも(馬鈴薯)に同じ。

しや-かう 社交【名】㊀團體を組織して、互に交際すること。㊁社會の交際。世間のつきあひ。

しや-かう 社羹【名】古、支那にて、社日に羹(あつもの)をつくりて、社神を祀りしこと。

しや-かう 射倖【名】『じやり(射利)を見よ』僥倖を得んとして、事を爲すこと。徼倖。

しや-かう 斜巷【名】狹斜のちまた。いろまち。いろざと。遊里。

しや-かう 斜高【名】〔數〕『英 Slant height』圓錐・角錐などの頂點より底面の周圍の一點までの距離。

しや-かう 斜坑【名】坑口より斜に下る坑道。

しや-かう 赦降【名】赦免と恩降と。刑部省式「據ニ赦降出日一免レ罪」

しや-かう 車行【名】車に乘りて行くこと。

しや-がう 社號【名】㊀神社の稱號。某神社と稱すること最も普通なれども、鹿島(かしま)神宮のごとく神宮と呼ぶもの、金崎(かねがさき)宮のごとく宮と呼ぶもの、稻荷(いなり)社のごとく社と呼ぶものなどあり。㊁社の名。會社の號。

しや-がう 奢傲【名】奢侈と傲慢と。おごりたかぶること。

じや-かう 蛇行【名】だかう(蛇行)に同じ。

じや-かう 邪行【名】㊀『水經、註に「邪行五里、逆行三里」とあり、邪は斜に通ず』ななめに行くこと。㊁よこしまなる行。

じや-かう 麝香【名】㊀麝香鹿の牡(をす)の腹部に在る、雞卵大にして囊狀をなせる皮腺。香氣甚だ强く、香料又は藥用とす。紫麝。㊁じやかうじか(麝香鹿)の略。

じやかう-うし 麝香牛【名】〔動〕偶蹄(ぐうてい)類に屬する哺乳動物。形、綿羊に似、毛甚だ長く深く、特に頸背部には縮れたる長毛密生す。老いたる牡(をす)の角は、基部廣くして、前額の大分を蓋ひ、蹄は不等形にて、その間に毛あり、氷上を步むに適す。肉は麝香樣の香氣を放つ。米國の北部に產す。じやぎう。麝香羊。

しやかう-けいやく 射倖契約【名】〔法〕効力の全部又は一部が、偶然の事實にかかる契約。例へば保險契約・終身定期契約の類。

じやかう-さう 麝香草【名】〔植〕㊀唇形(しそ)科に屬する多年生の草。方莖にして高さ二三尺、葉は長楕圓形にて、鋸齒を有し、葉腳圓形をなして對生す。秋季葉腋に淡紅紫色の唇形花を開く、芳香を有し、山地に自生す。えあらちき。〔鈴子香〕㊁いぶきじやかうさう(伊吹麝香草)に同じ。

じやかう-じう 麝香獸【名】〔動〕次條に同じ。

じやかう-じか 麝香鹿【名】〔動〕偶蹄(ぐうてい)類に屬する哺乳動物。大きさ三尺內外にして、形體鹿に類す。角無く、毛は通常暗褐色にて、時時變色し、薄き斑點を有す。麝香は、この獸の牡(をす)より得るなり。かをりじか。じや。

(じやかうじか)

しや-かうしん 斜行進【名】ななめに進行すること。(直行進に對して)

じやかう-ずり 麝香磨【名】麝香を磨りこなすに用ふる、小さき茶碗のごとき物。

じやかう-ちどり 麝香千鳥【名】〔動〕みづちどり(水千鳥)に同じ。

じやかう-ちんき 麝香丁幾【名】麝香一分に、水及び稀アルコオル各二十五分を加へて浸出せしめたる藥品。

しやかうてき-どうぶつ 社交的動物【名】社交の本能を有する動物、卽ち人類など。

じやかう-なでしこ 麝香撫子【名】〔植〕かあねいしよんに同じ。

じやかう-ねこ 麝香猫【名】〔動〕食肉類に屬する哺乳動物。形及び大いさは鼬鼠(いたち)又は猫に似、麝香の如き香氣を放つ。印度に產す。かをりねこ。

じやかう-ねずみ 麝香鼠【名】〔動〕食蟲類に屬する小獸。形鼠に似て、皮腺の分泌液に、麝香のごとき香氣あり。九州・沖繩島等に產す。

じやかう-の-ねこ 麝香猫【名】じやかうねこ

(麝香猫)に同じ。大鏡「麝香の猫、夢喰ひ貘」

じやかう-の-ま 麝香間【名】㊀京都の舊皇居內の一室。小御所(こごしよ)に至る長廊下と南北の通廊との左方、一角に在るもの。將軍參內の時の便所に充てられ、天明八年炎上の際まで、麝香獸の描かれありきといふ。㊁東京の現皇居內の一室。祗候所(しこうしよ)に充てらる。

じやかうのま-しこう 麝香間祗候【名】功勞ある華族又は官吏を優待する目的にて與へらるる資格。錦雞間祗候の上に位し、職制・俸給なく、親任官の待遇を受く。

じやかう-ばら 麝香薔薇【名】〔植〕薔薇の一種。幹小さけれど、性甚だ强く、よく寒氣に堪ふ。花季やや遲けれど、花甚だ多し。

じやかう-ひつじ 麝香羊【名】〔動〕『英 Musk sheep』じやかううし(麝香牛)に同じ。

しや-からべ【名】『「しや」は接頭語』頭を罵りていふ語。孕常盤「淨海がこの提挙にて、しやからべ微塵にはり碎かん」

じやかう-ぼね 麝香骨【名】扇の骨の丁子沈香などにて煮て、よき香をこめたるもの。毛吹草「薰りぬる風や扇のじやかう骨」

じやかう-ほほづき 麝香酸漿【名】〔植〕玄參(ごまのはぐさ)科に屬する多年生の草。葉は對生、夏秋の交、淡黃色の花を開く。花冠の長さ萼片に二三倍す。全體に毛茸ありて、粘質をなし、麝香樣の芳香あり。北米合衆國の產にて、水濕の地に生じ、また園養し、或は鉢植として、花を賞す。

じやかう-ゆ 麝香油【名】麝香の匂ある香油。

じやかう-れんりさう 麝香連理草【名】〔植〕荳(まめ)科に屬する草。長さ七八尺、兩側に翼を有す。複葉にして、小葉は披針形を呈し、また卷鬚に變ず。夏季、淡紅色の花を開く。ひろは。れんりさう。麝香豌豆。

じやかう-ゑんどう 麝香豌豆【名】〔植〕前條に同じ。

しや-かく 斜角【名】〔數〕『英 Oblique angle』鋭角又は鈍角の如き直角ならざる角。

しや-かく 射角【名】彈丸の射線と水平線とのなす角。

しや-かく 社格【名】神社の格式、卽ち官幣大社・官幣中社・官幣小社・別格官幣社・國幣大社・國幣中社・國幣小社(以上官社)・府社・縣社・鄕社・村社及び無格社の種別。

しやかく-きん 斜角筋【名】〔醫〕頸部に存する筋肉。前・中・後の三に分つ。

しやかく-たう 斜角壔【名】〔數〕『英 Oblique prism』側稜と底面との直交せざる角壔。(直角壔に對して)

じや-かご 蛇籠【名】㊀『大蛇の臥せるに似たるよりいふ』大きくあらく編みたる長き竹籠。石を入れて、水勢を殺ぐ等に用ふ。㊁同上を竪にしたる如き形の指物。

(じやかご ㊀)

じやか-じやか【貌】鉦・三味線などの鳴物を、かまびすしく鳴らす音。

しや-かしら【名】『「しや」は接頭語』頭を罵りていふ語。宇治「しや頭うち割らんとしつるものを」

しやか-せそん 釋迦世尊【名】〔人〕しやかむに(釋迦牟尼)の尊稱。

しやか-ぜんぜ 釋迦善逝【名】前條に同じ。ぜんぜ(善逝)參照。野守鏡「釋迦善逝微妙法の聲」

しやか-そん 釋迦尊【名】〔人〕前條に同じ。太平記「善いかな、釋迦尊、この地に佛法を弘通したまはんこと」

しやか-だう 釋迦堂【名】釋迦の像を本尊として祀れる堂。太平記「西塔の釋迦堂を皇居となさる」

釋迦堂の念佛【句】〔佛〕しやかねんぶつ(釋迦念佛)に同じ。

じやがたら 咬𠺕吧【名】㊀〔植〕じやがたらいも(馬鈴薯)の略。㊁〔植〕じやがたらみかん(咬𠺕吧蜜柑)の略。㊂じやがたらじま(咬𠺕吧縞)の略。㊃鮫皮の眞鮫の一。㊄〔地〕じやがたらじま(咬𠺕吧島)を見よ。

じやがたら-いも 馬鈴薯【名】〔植〕『ジャガトラ(Jagatra)島を經て、我が國に傳はりしよりいふ』茄(なす)科に屬する多年生の

草。高さ二三尺。葉は羽狀複葉にして、大小の二種を有す。茸毛あり。花は淡紫白色、鐘狀にして五裂す。塊莖は謂はゆる芋にて群生し、皮の色は、薄く黃ばみ、又は薄く赤ばみたり。南米智利及び秘露等の原產。塊莖は食用とし、また澱粉を製し、酒精の原料とす。あつぷら。えぞいも。からういも。じやがたら。

じやがたら-じま 咬𠺕吧縞【名】古、ジャガタラ島より渡來せしといふ一種の織物。

じやがたら-じま 咬𠺕吧島【名】〔地〕じやがとらじま(咬𠺕吧島)に同じ。

じやがたら-すゐせん 咬𠺕吧水仙【名】〔植〕なつずゐせん(夏水仙)に同じ。

じやがたら-みかん 咬𠺕吧蜜柑【名】〔植〕ざぼん(朱欒)を云ふ。〔京都の語〕

しやかちら 沙羯羅【名】しやかつら(沙羯羅)に同じ。

しや-かつ 沙喝【名】〔佛〕剃髮して沙彌となり、喝食(かつじき)の服を著る者。〔禪宗の語〕

じや-かつ 蛇蝎【名】だかつ(蛇蝎)に同じ。

しやかつら 沙羯羅【名】〔佛〕次條の略。

しやかつら-りゆうわう 沙羯羅龍王・娑竭羅龍王【名】〔佛〕しやかつりゆうわう(娑伽羅龍王)に同じ。補忌年代記「娑伽羅龍王通天の冠、緣紗の袍」

じやがとら-じま 咬𠺕吧島【名】〔地〕『英 Jacatra 又 Djakatra』古、ジャワ(Java)島に在りし獨立國。同名の首府あり。じやがたら。

しやか-によらい 釋迦如來【名】〔人〕しやかむに(釋迦牟尼)の敬稱。大鏡「陽成天皇…八十一にてかくれさせたまふ。御法事に願文には、釋迦如來の一とせのこのかみとは作られたるなり」

しやかによらい-たんじやうゑ 釋迦如來誕生會【名】戲曲の一。釋迦牟尼一代の事蹟を脚色したるもの。近松門左衞門の作。

しやか-ねんぶつ 釋迦念佛【名】〔佛〕せんぼんねんぶつ(千本念佛)に同じ。

しやか-の-たんじやう 釋迦誕生【名】享保の頃、小さき輿に茶を入れ、中に釋迦の

立像を安じ、屋根を各種の色紙にて拵へ、卯の花など附けて、物乞の持ちあるきたるもの。

しやか-はっさう 釋迦八相【句】はっさう(八相)の條下を見よ。

しやかはっさう-やまとぶんこ 釋迦八相倭文庫【名】〔書〕釋迦一代の事蹟を脚色したる草雙紙。五十七篇。萬亭應賀の作。

しやが-ばな 胡蝶花【名】〔植〕しやが(胡蝶花)に同じ。

しやが-ひ 舍飼【名】家畜を畜舍內に飼養すること。

じやが-ひ 蛇貝【名】〔動〕腹足(ﾌｸｿｸ)類に屬する軟體動物。海岸の岩石に附著す。その殼、管狀をなして長く、不規則なる螺旋狀を呈す。へびがひ。むしがひ。

じや-が-ひ-でも 是が非でも【句】「是(ぜ)が非(ひ)でも」の訛。

しやか-ぶつ 釋迦佛【名】〔佛〕しやかむに(釋迦牟尼)の尊稱。

しや-か-ぶり【名】『しやは接頭語』かぶり(冠)を罵りいふ語。平家「しや冠を打落し」

しやかま【名】口やかましくうるさき人。〔伊豆國の方言〕

しや-がむ【動四自】腰を低くしてかがむ。うづくまる。

しやか-むに 釋迦牟尼(梵 Sakyamuni)【名】〔人〕『釋迦は印度の迦毗羅衞國に住せし刹帝利(ｾﾂﾃｲﾘ)種の一種族の名、能力又は勇强の意。もと瞿曇(ｸﾄﾞﾝ)氏と稱し、後、分れて釋迦氏と稱す。牟尼は寂默・仙人・智者などと譯し、內外諸聖の德行に對する敬稱。』卽ち釋迦牟尼は釋迦種族中の聖者の義。佛敎の敎祖。印度ヒマラヤ山麓なる迦毗羅(ｶﾋﾞﾗ)城の主、淨飯(ｼﾞﾖｳﾎﾞﾝ)王の子。母を摩耶といふ。初名は悉達(ｼﾂﾀ)太子。二十九歲(或はいふ十九歲)の時、潛かに宮殿を遁れて苦學苦行し、三十五歲(或はいふ三十歲)菩提樹下に坐して正覺を得、鹿苑・祇園・王舍城・竹林等に法を說き、西曆紀元前約四八五年(或はいふ四八七年)八十歲にして入滅す。敎主世尊。釋尊。

しやかむに-にょらい 釋迦牟尼如來【名】しやかむに(釋迦牟尼)の敬稱。蟬丸「天竺の釋迦牟尼如來は佛といひ」

しやかむに-ぶつ 釋迦牟尼佛【名】しやかむに(釋迦牟尼)の敬稱。

しや-かん 左官【名】さくわん(左官)の訛。

しや-かん 舍監【名】寄宿舍の監督。

しや-がん 砂岩【名】〔鑛〕さがん(砂岩)に同じ。

しや-がん 砂岸【名】さがん(砂岸)に同じ。

しや-がん 赭顏【名】赤き顏。赭面。朱顏。

しや-がん 斜眼【名】やぶにらみ。よこめ。

じや-かん 邪姦・邪奸【名】邪智にして姦佞なること。奸邪。

じやがん-せき 蛇含石【名】〔鑛〕きんがせき(金牙石)に同じ。

しやがん-とう 遮眼燈【名】『相手の視線を遮るやうにせる物なるよりいふ』がんだうぢやうちん(强盜提灯)に同じ。

しやか-もん 釋迦文【名】〔人〕しやかむに(釋迦牟尼)の訛略。

しやかもん-ぶつ 釋迦文佛【名】〔人〕しやかむにぶつ(釋迦牟尼佛)の訛略。天智天皇「西天の釋迦文佛は、五穀を捨てたる罪業は、五逆に優ると說きしとかや」

しや-がら 沙羯羅【名】〔佛〕次條の略。〔沙竭羅・娑誐羅〕

しやがら-りゆうわう 沙羯羅龍王・娑竭羅龍王・沙誐羅龍王(梵 Sāgara)【名】〔佛〕『沙羯羅は鹹海と譯す』八大龍王の一。海に住すといふ。盛衰記「かの明神は沙竭羅龍王の娘を勸請して崇め奉る」

しやがれ-ごゑ 嗄聲【名】しはがれごゑ(嗄聲)の訛。

しやがれっ-こゑ 嗄聲【名】前條の音便。

しや-き 車騎【名】一兵車と騎馬と。二車馬に乘るつはもの。

しや-き 車軌【名】車の軌道。

しや-き 車旗【名】車と旗と。

しや-き 斜暉【名】ゆふひ。夕陽。斜陽。

しや-き 射騎【名】一弓術と馬術と。射御。二射手と騎手と。

しや-ぎ 射儀【名】射術に關する儀式。

しや-ぎ 謝儀【名】しやれい(謝禮)に同じ。

じや-き 蛇木【名】〔植〕はひびやくしん(矮檜)に同じ。

じや-き 邪氣【名】一疾病をなさしむる惡しき氣。妖氣。雪女五枚羽子板「厄拂の詞をのべて咒へば、惡病・邪氣を除くと申す」二次條一に同じ。著聞「はじめ歩み來りつる者は邪氣なり」三ひきかぜ。風邪。感冒。

じや-き 邪鬼【名】一もののけ。妖怪。怨靈。怨念。二たたりをなす神。惡しき神。

じや-ぎ 邪義【名】正しからぬ敎義。よこしまなる敎義。聖德太子繪傳記「現世安穩の佛說世に示さんとおぼせども、天下の貴賤未だ迷の邪義の罪、上一人の御腦となり」

しや-きう 砂丘【名】さきう(砂丘)に同じ。

じや-ぎう 麝牛【名】〔動〕じやかううし(麝香牛)に同じ。

しやき-しやき【貌】一齒切れよきさま。てきぱき。ちやきちやき。二快く物を切りなどする音。

じやき-じやき【貌】一ざくざくの、一層不快なるさまにいふ語。二物を剪る音の形容。じよきじよき。

しや-きでん 射騎田【名】王朝時代に、射術奬勵のために、諸衞府の用に充てたりし不輸租田。射田。

しや-きぬ 紗衣【名】紗にて仕立てたる衣服。

しや-きん 紗巾【名】一紗のきれぢ。二紗の頭巾。

しや-きん 謝金【名】謝禮として送る金。禮金。

しや-きん 砂金【名】〔鑛〕さきん(砂金)に同じ。

しやきん-さいしゆ-ぜい 砂金採取稅【名】さきんさいしゆぜい(砂金採取稅)に同じ。

しやきん-せき 砂金石【名】〔鑛〕さきんせき(砂金石)に同じ。

しやきん-づつみ 砂金包【名】さきんづつみ(砂金包)に同じ。

しやきん-もち 砂金餅【名】さきんもち(砂金餅)に同じ。

しやきん-ろせき 砂金鹵石【名】〔鑛〕さきんろせき(砂金鹵石)に同じ。

しや-きやう 寫經【名】〔佛〕經文を筆寫すること、又その寫したる經文。著聞「造塔・寫經の大願」

しや-きやう 蔗境【名】かきやう(佳境)に同じ。

蔗境に入る【句】『晉書に「顧愷之、每食二甘蔗一常自レ尾至レ本、人或怪レ之、愷之曰、漸入二蔗境一」とあるに本づく』風景又は文章・談話などが、次第に面白くなる。佳境に入る。例に蔗を食ふ。

しや-きやう 舍兄【名】しやけい(舍兄)に同じ。心中宵庚申「山脇小七郎の舍兄(ｼﾔｷﾔｳ)となり」

じや-ぎやう 蛇形【名】へびの形。じやたい。松風村雨束帶鑑「蛇形退散の守をかけさせ、帝よりは日の御座の寶劍を枕刀に置かれし故」

じやぎやう-きゆう 蛇形弓【名】張弓の一。白木の弓。魔を射るに用ふといふ。

しやきやう-し 寫經司【名】古、佛經を寫さしむるために設けし役所、長官・次官等の職員を置く。寫經所。寫書所。

しやきやう-じよ 寫經所【名】前條に同じ。

しやきやう-せい 寫經生【名】古、寫經所にありて、經文を書寫せし人。

しや-きやく 斜脚【名】斜に行くこと。謡曲(綾鼓)「花は斜脚の曖風に開けて」

しや-ぎよ 射御【名】弓を射、馬に騎ること。射騎。

しや-ぎよ 車御【名】車に乘ることと、馬を御することと。

じや-きよく 蛇曲【名】「長蛇(ﾁﾔｳﾀﾞ)の陣」に同じ。

じや-きよく 邪曲【名】よこしま。わるだくみ。

しや-ぎり【名】一手に持ちて敲き、笛・太鼓の囃子(ﾊﾔｼ)に合はせて鳴らす小形の鉦(ｶﾈ)の音。ちやんぎり。二芝居の囃子の一。鐘・太鼓を雜へて拍子をとるもの。昔は人寄・打出の際などに囃立つるを常とし、狂言の間にも用ひたり。かたしやぎり(片しやぎり)・たうちやくしやぎり(到著しやぎり)參照。

しや-ぎる【動四自】しやぎりを行ふ。南水漫遊「人よせの內、樂屋にて、鐘・太鼓を交へ、拍子をとる、これを舍來留(ｼﾔｷﾞﾙ)といひしが、今はシヤギリと唱へ、幕明けに近づけば、甲(ｶﾝ)太鼓を交ぜ勇しくなせり」

しやく 錫【名】〔佛〕しやくぢやう(錫杖)一の略。

錫を掛く【句】掛錫(ｹｲｼﾔｸ)す。

錫を飛ばす【句】飛錫(ﾋｼﾔｸ)す。

錫を留む【句】留錫(ﾘｳｼﾔｸ)す。

しやく 爵【名】一『爵の字の音雀に通じ、その形雀に象れるによりていふ』さかづき。酒器。二古、支那にて、諸侯父はその臣僚の世襲の身分。周の代には、諸侯のを公・侯・伯・子・男の五等(五爵)、臣僚のを卿・大夫・士の三等に分ちたり。三華族令により、華族にその家格・身分を表はすために賜ひし階級。後、朝鮮貴族にも賜ふこととなれり。公・侯・伯・子・男の五等に分つ。

しやく 赤【名】一せき(赤)に同じ。狂言(富士松)「青・黃・赤(ｼﾔｸ)・白・黑五色に關はらず」二しやくにち(赤口日)に同じ。

赤の日【句】しやくにち(赤口日)に同じ。貞丈雜記「赤の日は赤口神といふ神の司る日にて、辯舌を用ふるにわろき日なりといふ」

しやく 笏【名】『笏の音、實は「こつ」なれど、骨と通ずるを忌み、又もと長さ一尺の物なるより、尺の音を借りていふとも、笏の字の音も「しやく」なり(雅樂要義に據る)ともいふ』束帶の時、右手に持つもの。木・象牙などにて造る。元は事を記して備忘に便ぜしが、後にはただ儀式用とのみなれり。初、唐制に基きて、五位以上は牙笏(ｹﾞｼﾔｸ)、六位以下は木笏に定められしが、中古以來は、禮裝の時のみ牙笏を用ひ、平常は木笏を用ふるに至れり。寸法も、位によりて區別を立てたれども、概して長さ一尺二寸・幅二寸ほどなりき。さく。こつ。和名「笏、音忽、俗云尺、手板、長一尺六寸、濶三寸、厚五分也」

(しやく)

しやく 癪【名】『癪はしやくしゆ(積聚)の積に疒を加へ、積の字の吳音に讀ませたる和字』一胸又は腹部に痙攣を感じて痛む病。甚しきは、人事不省となる。婦人に多し。胃痙攣。癪氣。積聚。重桂王「おさゐがことのその日より、癪の痞に胸いたみ」二氣に入らぬこと。しやくにさはること。癇癪。三氣に入らぬ言葉。浮世風呂「よせえ。しやくをいふなえ。男なら、持ってみや」

癪に障る【句】癇癪にさはる。憤激の心をおこす。腹が立つ。氣に障る。

癪の蟲【句】一氣に障るもの。癇癪を起す對象。二癇癪を腹の中に在る蟲と見做していふ語。「癪の蟲が納まらぬ」

しやく 酌【名】一酒をくみて、盃に盛ること、又それをなす人。二旅人宿の給仕女。酌婦。〔越後國の方言〕一代男「坂田といふ所に始めて著きぬ。…上方(ｶﾐｶﾞﾀ)のはすは女とおぼしき者皆、問屋の召仕の女にはあらず、銘銘に宿を持ちてありながら、旅人を見かけて、集る由。これを思ふに、このいたづらの國有馬の湯女(ﾕﾅ)に變ふる所なし。異名を、所言葉にて、しやくといへり。人の心をくむといふことかと、そこの人に問へども、子細は知らず」

酌に立つ【句】酌をなす役をつとむ。

酌の銚(ﾋ)【句】「能(ﾉｳ)の融(ﾄﾛ)」の舞の替(ｶﾞｴ)の形(ｶﾀ)。曲水の宴にて、酌をなしつつ舞ふ意を示す。

酌は髱(ﾀﾎﾞ)【句】酒の酌は、女ならざれば興味なし。〔諺語〕

酌を取る【句】酒の席にて酌の役をつとむ。きのふはけふの物語「しやくとる女に、何と云ふ物ぞと問へば」

しやく 杓【名】一ひしやく(柄杓)に同じ。五人女「住吉燈へのお初尾(ﾊﾂｵ)として、しやく振って、また又頭數(ｱﾀﾏｶｽﾞ)よみて、飲むも飲まぬも、七文づつの集錢(ｼﾕｾﾝ)出し」二〔植〕繖形(ｻﾝｹｲ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺、葉は再出羽狀複葉にて、胡蘿蔔(ﾆﾝｼﾞﾝ)のに似たり。春、白色の小花を複繖形花序に開く。各地の山地に自生す。〔根尾〕

しやく 尺【名】一ものさし(物指)に同じ。二せい。たけ。長さ。

尺を打つ【句】次條に同じ。

尺を取る【句】物指にて長さをはかる。尺を打つ。

しやく 釋【名】一文義の解釋。註釋。二〔佛〕『釋迦の姓を紹(ﾂ)ぐ意。支那晉の道安の用ひ初めしものといふ。しやかむに(釋迦牟尼)參照』僧侶の、釋迦の弟子たるを示すために、姓として用ひしもの。明治五年以後戶籍上には、僧侶も本姓を設くべきこととなれり。三〔佛〕淨土眞宗にては、死して一たび寺門に入れば、同じく釋迦の弟子となる意にて、戒名に冠して用ふ。四講釋又は講釋師の略。〔俚語〕鏡山錦栬葉「釋の方ではのんのんの南龍」

しやく 借【名】〔商〕簿記法における、かり方。(貸に對して)

しやく 石南【名】〔植〕しやくなげ(石楠)の略。

しやく 周易【名】〔書〕しうえき(周易)に同じ。〔古語〕拾芥抄「周易、シヤク」

しやく 蝦蛄【名】〔動〕しやこ(蝦蛄)を云ふ。〔豐後國の方言〕

し-やく 試藥【名】一〔化〕『英 Reagent』或物質の存否を檢するに用ふる物質。例へば石灰水が炭酸瓦斯の存否を檢する試藥となる類。二或病に對して、適劑なりや否やを檢するために試用する新藥。

し-やく 私約【名】わたくしに約束をなすこと、又その約束。

しやく 尺【助數】一長さの單位。丈の十分の一。寸の十倍。現今のは、農商務省保管の白金・イリヂウム合金製の原器に記せる標線間の攝氏零下一五度における長さ三十三分の十を尺と定む。これ從前の謂はゆる曲尺(ｶﾈｼﾞﾔｸ)に相當するものにて、もと建築上に用ひられ、支那唐の大尺に據れるもの、これに對して、同じく唐の小尺も用ひられ、上古は周尺(曲尺の七寸五分五厘に相當す)も行はれたり。せき。其水「際は只一尺ばかりだになき…松の木などの二三尺ばかりにて」二長さ。たけ。

尺も短き所あり、寸も長き所あり【句】『屈原のト居に「尺有レ所レ短、寸有レ所レ長、物有レ所レ不レ足、智有レ所レ不レ明」とあり』物にはそれぞれ長短あること。

尺を枉(ﾏ)げて、尋を直(ﾉ)ぶ【句】『孟子の滕文公下篇に「枉レ尺直レ尋、宜レ若レ可レ爲也」とあり』僅少のものをまげて、他の多くのものを正しくす。

しやく 勺・夕【助數】『夕は勺の字の草體より出でしものにて、俗に「せき」とも讀む』一量の單位。升の百分の一。二地積の單位。坪の百分の一。三材料の單位。通常、尺〆(ｼﾔｸｼﾒ)の十分の一。

じやく 弱【名】一よわきこと、又その者。「强者を抑へ、弱を扶く」二二十歲又はその前後。じやくくわん(弱冠)參照。三いとけなきこと、又その者。

じやく 寂【名】〔佛〕一じやくめつ(寂滅)に同じ。二僧の死ぬこと。入寂。

じ-やく 餌藥【名】養生に用ふる藥。 「依二餌藥事一」

じやく 弱【接尾】〔數〕『この數にはやや不足すとの義』運算して得たる數を、或桁にて切上げたる時、その得たる數に添へていふ語。例へば1.3865を1.387弱といふ類。(强に對して)「過の近似値(ｷﾝｼﾞﾁ)」參照。

しやく-あ 釋阿【名】〔人〕ふぢはらとしなり(藤原俊成)に同じ。

しやく-あふり 尺障泥【名】長くして、裾廣き障泥(ｱｵﾘ)なるべし。

しやく-いふ 爵邑【名】爵位と封邑と。爵封。

しやく-いん 酌飮【名】のみもの。飲料物。

しやくう-はう 射空砲【名】『英 Anti-aircraft gun』航空機の射擊に使用する大砲。

しやく-うんせう 釋雲照【名】〔人〕眞言宗の高僧。出雲國の人。慈雲上人を拜して出家す。明治十三年東京に出でて、目白僧園を開く、仁和寺管長となり、大僧正に進む。同四十二年寂す。年八十三。

しやく-え 赤衣【名】あかき色の衣服。平治「五位は赤衣を著れば」

しやく-えび【名】〔動〕あなごに同じ。

しやく-えん 錫鹽【名】〔化〕鹽化第一錫の結晶。媒染劑として用ひらる。

しやく-か 借家【名】しやくや(借家)に同じ。

しやく-か 釋家【名】ぶっか(佛家)に同じ。

しやく-かい 釋解【名】かいしやく(解釋)に同じ。

しやく-かう 釋講【名】かうしやく(講釋)に同じ。

しやく-がう 爵號【名】爵の名目、卽ち公・侯・伯・子・男。

しやく-がう 綽號【名】あだな。

じやく-かう 弱行【名】實行力の弱きこと。

しやく‐からほんげ 迹高本下【名】〔佛〕天台宗にて、迹門(シヤクモン)を高しとし、本門を次位に置くこと。本下迹高。太平記「これ即ち迹高本下の成道(ジヤウダウ)なり」

じやく‐かく 尺角【名】木材の横斷面の一尺四方なるもの。

しやくか‐くわんばん‐き 釋家官班記【名】〔書〕僧家の官位の事を記したるもの。一卷。尊圓親王の著。

しやく‐がみ 笏紙【名】朝廷にて、公事(クジ)を行ふ時、内辨などが、その次第を書きて、笏の裏面に貼附けおく紙。笏紙(シヤクシ)。江次第「令レ押二笏紙一」

しやく‐かん 尺翰【名】せきかん(尺翰)に同じ。

じやく‐かん 若干【名】『干の字、分解すれば一及び十となるより、一の若(ゴト)く十の若しとの意にていふ』そこばく。そくばく。

じやく‐がん 弱顔【名】『通鑑の陳宣帝紀の胡註に「見レ人靦自羞、而顏有二忸怩者一爲二弱顏一」とあり』はにかむ顏。

しやく‐がん 釋眼【名】次條を見よ。

釋眼儒心【句】『佛のまなこ、孔子の心の義』慈悲仁愛の深きこと。

しやく‐き 癪氣【名】癪の氣味。

しやく‐き 爵記【名】授爵の證として、その授けられたる人に交付する文書。親署の後、御璽(ギヨジ)を鈐(ケン)し、宮内大臣年月日を記入して、副署す。

しやく‐ぎ 笏木・梂【名】笏に造る樹。昔は、一位の材を用ひたり。さくぎ。〔古語〕増鏡「しやくぎの、みなゑりぼね、紅の紙にはりて持ちたる」

しやく‐ぎ 釋義【名】意義をときあかすこと。註解。解釋。解義。

しやく‐きん 借金【名】金を借ること、また借りたる金。借財。借錢。

借金の山【句】借金の多きを山に譬へていふ語。借錢の山。雜衣「今世の人人、借金の山なして」

借金を質に置く【句】㊀赤貧にて、質種(シチグサ)とすべき一物も無く、ただ有るものは借金のみなり。㊁無理に金を工面することの譬。

しやく‐ぎん 借銀【名】銀子を借ること、又借りたる銀子。かりがね。

しやくきん‐こひ 借金乞【名】次條に同じ。春花五大力「お江戸は、繁華の地とはいひながら、借金こひまで、はでなものぢやなあ」

しやくきん‐とり 借金取【名】借金の催促に來る人。

しやくきん‐はたり 借金徴【名】前條に同じ。

じやく‐きゆう 弱弓【名】力の弱き弓。

しやく‐きよ 借居【名】借家にすまふこと。儉居。

じやく‐きよ 若許【名】じやくかん(若干)に同じ。

しやく‐きよく 積極【名】せききよく(積極)に同じ。

しやく‐く 借區【名】㊀借用の地區。㊁鑛區の採掘權を得ること。

しやくくう 綽空【名】〔人〕しんらん(親鸞)を見よ。

しやくく‐にち 赤口日【名】『しやっくにちと發音す』しやくぜつにち(赤舌日)に同じ。

しやくく‐にん 借區人【名】鑛區の採掘權を得たる人。採掘人。

しやくく‐るゐとく 積功累德【名】〔佛〕『法華經の提婆品(ダイバ)に「釋迦如來、於二無量劫一難行・苦行、積レ功累レ德、求二菩提道一」とあるに本づく』功德を累積する意。佛果を得るために、善根功德を積むこと。太平記「御國忌の日ごとに、種種の御作善(サゼン)、積功累德せらる」

しやく‐くわ 爝火【名】ともしび。たいまつ。

しやく‐ぐわい‐せん 社外船【名】我が國の汽船にて、社船以外のもの。

じやく‐くわう 寂光【名】〔佛〕㊀『寂は眞理の寂靜(ジヤウ)、光は眞智の光照の義、即ち寂理に卽して、智慧の光の諸相を照す意』理・智の二德を兼備へたる法體(ホツタイ)の相(サウ)。㊁じやくくわうど(寂光土)の略。平家「東大寺は、常在不滅、實報・寂光の生身の御佛と思し召し准へて」

寂光の本土【句】〔佛〕じやくくわうど(寂光土)を見よ。太平記「ただ速かに寂光の本土にこそ歸らめ」

寂光の都【句】〔佛〕じやくくわうど(寂光土)に同じ。謠曲(邯鄲)「名に聞きし寂光の都・喜見城の樂も斯くやと」

じやくくわう‐じ 石光寺【名】そめでら(染寺)を見よ。

じやくくわう‐じ 寂光寺【名】㊀京都市上京區北門前町にある顯本法華宗の寺。同宗二十一本寺の一。空中山と號す。天正六年日淵の開基。もと上京の室町にありしが、寶永年間火災に遭ひて、ここに移れり。ほんいんばう(本因坊)參照。㊁下野國日光山中の寂光瀑の側に在りし寺。伽藍壯麗なりしが、明治十年に燒失して、今は寂光權現の一小祠を留むるのみ。

じやくくわうじ‐せん 寂光寺錢【名】寛永銅錢の一。元文二年下野國日光の寂光寺にて鑄造せしもの。黑褐色を呈す。

じやくくわう‐じやうど 寂光淨土【名】〔佛〕次條を見よ。盛衰記「法性不二の色身(シキシン)は寂光淨土に居すれども、和光同塵の座跡は、巨海の流頭に交れり」

じやくくわう‐ど 寂光土【名】〔佛〕四土の一。ただ佛のみ住したまふ處。諸身所依(シヨエ)の土。四土の區別は立つれども、寂光は法界に周偏する普遍の法體に外ならざるが故に、他の三土も、この寂光一理の上の顯現にあらざるはなし。故に、寂光の本土と稱し、また他の三土に比して、純淨の境なるによりて、寂光淨土ともいふ。寂光。(實報土・方便土・凡聖同居(ボンシヤウドウゴ)土に對して) 太平記「釋尊これに由って、寂光土に歸らんとしたまひける處に」

じやくくわう‐ゐん 寂光院【名】山城國愛宕(オタギ)郡大原村小鹽(ヲシホ)山の麓にある天台宗の尼寺。壽永の亂後、建禮門院の閑居したまひ、次いで崩御せられし處。本尊は觀音。建禮門院の御剃像及び阿波内侍の像を安置す。

しやくくわ‐えび しやくくわ蝦【名】〔動〕『石南花蝦の略ならんといふ』しやこ(蝦蛄)を云ふ。〔西國の方言〕

しやく‐くわく 尺蠖【名】〔動〕せきくわく(尺蠖)に同じ。國姓爺後日合戰「尺蠖の屈めるは伸びんがため」

じやく‐くわん 弱冠【名】『禮記の典禮に「人生十年曰レ幼學、二十曰レ弱冠、三十曰レ壯有レ室、四十曰レ强而仕」とあるが如く、支那周代の制にて、男子二十歳にして元服せしよりいふ。弱は若(ワカ)き意』二十歳の男。また年若きこと。大磯虎稚物語「惣じて、この君弱冠の昔より軍術・鍛術妙ありて」

しやく‐くわん 借款・借欵【名】『欵は、經費の義。もと條項の意に用ひられ、簿記の條項の意より、又轉じて經費の意となる。存款(預金)・出款(支出金)などいふ類。くわん(款)參照』しやくきん(借金)に同じ。

しやくくわん‐はふ 尺貫法【名】我が國にて一般に用ふる、尺度の單位には尺、重量の單位には貫を用ふる度量衡。(めえとる法に對して)

しやくくわんべうしき‐たんゐ 尺貫秒式單位【名】尺度にては尺を單位とし、重量にては貫を單位とし、時間にては秒を單位とすること。

じやく‐けい 若契【名】若道のちぎり。男色の契。

しやく‐けう 釋敎【名】釋迦の敎。佛敎。本朝三國誌「神祇・釋敎・戀・無情」

しやく‐けう 石橋【名】㊀いしばし(石橋)に同じ。㊁支那天台山にありといふ橋。溪流の落ちて瀑布となる處に架り、色青白にして、長さ七丈ばかり。昔の初、天竺大那爛陀寺の沙門白道猷此所に至りて、親しく五百羅漢を見たりとの傳說あり。また天台山は文珠菩薩の淨土なるより、獅子を配して、文學上材料とせるものあり。㊂謠曲の一。大江定基出家して、寂昭と稱し、入宋し、天台山中の石橋を渡らんとして、獅子の舞ふさまを見ることを作れるもの。㊃長唄にて演ずる舞踊の一。赤又は白の長き髮を垂れたる獅子の、その長髮を振り動かして舞ふ曲。

じやく‐けう 鵲橋【名】『鵲(カササギ)の橋』に同じ。

しやくけう‐ぎよくりんわかしふ 釋敎玉林和歌集【名】〔書〕代代の撰集及び傳記の中より、宗門の意にかなへる和歌を撰びたるもの。四卷。僧先啓の撰。

しやくけう‐だいりんしふ 釋敎題林集【名】〔書〕經論・釋文を詠める歌どもを代代の撰集・家家の集より採集し、法數・法華經・雜經・諸集・雜の五部門に分ちたるもの。八卷。僧淨惠の撰。

しやくけう‐ぼたん 石橋牡丹【名】紋所の一。下の圖を見よ。

(しやくけうぼたん)

じやく‐げつ 若月【名】みかづき(三日月)に同じ。

しやく‐こ 借庫【名】藏敷料を支拂ひ、他より倉庫を借入るること、又その借入れたる庫。

しやく‐ご 尺子【名】ものさし(物指)を云ふ。〔常陸國の方言〕

しやく‐ご 赤後【名】赤舌日(シヤクゼツニチ)の次の日。

しやくこう‐にち 赤口日【名】しやくくにち(赤口日)に同じ。

じやくご‐き 寂語忌【名】じふさんねんき(十三年忌)の異稱。

じやく‐こく 弱國【名】兵備の完全せぬ國。弱き國。

しやく‐こつ 尺骨【名】〔醫〕せきこつ(尺骨)に同じ。

しやく‐こつ 尺笏【名】馬の額より鼻に達する白き斑毛(ブチ)。

しやくこつ‐どうみやく 尺骨動脈【名】〔醫〕せきこつどうみやく(尺骨動脈)に同じ。

しやく‐さい 借債【名】ふさい(負債)に同じ。

しやく‐ざい 借財【名】しやくきん(借金)に同じ。

じやく‐さう 弱草【名】わか草。

じやく‐さく 雜供雜供【名】ざくざくじる(雜供雜供汁)に同じ。

しやく‐ざし 尺指【名】馬の丈を量る具。尺杖の類。

しやく‐ざし 笏差【名】扇を腰に差すに、少し脇の方へよせて差すこと。

じやく‐さん 弱酸【名】〔化〕『英 Weak acid』解離度の少なるがために、水溶液となりて生ずる水素イオンの量の、比較的少なきもの。例へば食醋中にある醋酸・炭酸及び硫化水素の類。(强酸に對して)

しやくさん‐もめん 尺三木棉【名】臺灣に輸出する白木棉。その幅一尺三寸あるをもって名づく。臺灣木棉。

しやく‐し 釋氏【名】㊀釋迦姓に屬する者。しやかむに(釋迦牟尼)參照。太平記「瑠璃太子、少き心にも、安からぬ事に思し召しければ、我れ年長ぜば、必ず釋氏を滅して、この恥を濯ぐべし、と深く惡念をば起されける」㊁ぶっか(佛家)に同じ。太平記「釋氏化導(ケダウ)の正宗(シヤウシウ)」

釋氏の敎【句】〔佛〕しやくけう(釋敎)に同じ。太平記「今、摩騰法師等、釋氏の敎を傳へて、佛骨の碎きを說く」

釋氏の諸王【句】印度にて、釋迦を氏とせし淨飯(ジヤウボン)・白飯(ビヤクボン)・斛飯・甘露飯の四王。太平記「釋氏の諸王・大臣これを見て」

しやく‐し 釋子【名】〔佛〕釋氏の弟子。(慈子に對して)略。

しやく‐し 釋師【名】かうしやくし(講釋師)の略。

しやく‐し 杓子【名】『子は接尾語』㊀汁・飯などをすくひ取る具。木・具・金屬などにて造り、小皿の如き形して、一端に柄を附けたる器。かひ。本朝三國誌「この大佛の側では、杓子が耳かき」㊁しやくしがた(杓子形)の略。㊂杓子の頭の如く中凹なる形。

杓子を渡す【句】姑が嫁に世帶を任す。

杓子で腹を切る【句】㊀實行するを得ず、形式のみなる譬。㊁とても出來ぬことの譬。〔諺語〕

杓子は耳搔にならず【句】大なるものは、小さき所に用ひ難し。〔諺語〕

しやく‐し 笏紙【名】しやくがみ(笏紙)に同じ。

しやく‐じ 石神【名】しやくじん(石神)の略。

しやぐ‐じ 石神【名】前條に同じ。

じやく‐し 弱志【名】意志の弱きこと、又弱き意志。

じやく‐し 弱子【名】㊀年少の小供。㊁よわき小供。

じやく‐し 弱翅【名】つばさの力の弱きこと、また弱きつばさ。

じやく‐し 弱視【名】〔醫〕『羅 Amblyopia』視力障害の一。例へば夜盲の如く、眼鏡を用ひても視力出でず、又、屈折體及び眼底に視力障害を說明すべき何等の變化なくして、視力の弱きもの。その最も高度なるを黑內障とす。色盲も亦一種の弱視なり。

しやくし‐えうらん 釋氏要覽【名】〔書〕佛敎に關する須知の事項を二十七目に分けて、註釋を施せるもの。三卷。支那宋の沙門道誠の撰。

しやくし‐かけ 杓子掛【名】臺所に掛置きて、杓子その他の物をさし置くに用ふる具。太き竹の節毎に、斜に切りかけて、穴を穿ちたるもの。眞實伊勢物語「年越の夜も、杓子掛のすりこぎながめて寢にける」

しやくし‐がた 杓子形【名】杓子の如き形。しやくし。

しやくし‐がひ 杓子貝【名】〔動〕斧足(フツ)類に屬する軟體動物。殼は長さ約一寸。楕圓形にして、左右は不等、嘴を有し、後方に柄狀部ありて、その末端開け、表裏共に白色を呈し、表面は平滑なり。紀伊國に產す。

しやくし‐しき 赤色【名】せきしよく(赤色)に同じ。浦島年代記「死骸より赤色(シヤク)の魂顯れ出で」

しやくし‐こばん 杓子小判【名】金座方にて、小判の重量に切りたる金を、火にてなまし、極印なき緣の方を打延し、杓子形に造りたる物。

しやくし‐さう 杓子草【名】〔植〕からすびしやく(烏柄杓)に同じ。

しやくし‐ぢやうぎ 杓子定規【名】『昔の杓子は、その柄皆曲れるよりいふ』㊀正しからぬ定規。㊁一定の形式より外に應用すること能はぬことに譬へていふ。

しやく‐じつ 赤日【名】しやくぜつにち(赤舌日)に同じ。

じやく‐しつ 弱質【名】質のよわきこと、又その物。

じやく‐しつ 寂室【名】〔人〕高僧。姓は藤原、名は元光、佛燈國師を師とす。元應二年入唐し、七年を經て歸朝し、永德寺及び永源寺を創立す。圓應禪師の號を賜はり、正平二十二年寂す。年七十八。

しやくし‐づら 杓子面【名】中央の凹みたる面相。

しやくし‐な 杓子菜【名】〔植〕さじな(匙菜)に同じ。

しやく‐しふ 積集【名】〔佛〕たふ(塔)に同じ。

じやく‐しん 弱震【名】〔地〕何人にも感じ得て、戶障子鳴り、垂下物の動搖を來し、液體の振盪を起す等の程度の强さなる地震。(烈震・强震・微震に對して)

しやく‐じん 石神【名】いしがみ(石神)に同じ。

しやく‐じめ 尺締・尺〆【名】木材の賣買の單位。一尺平方にて長さ二間なるを尺締一本とし、奇零ある場合には、尺〆何本何勺何才といふ。さいせき(材石)參照。

しやく‐しや 沙參【名】〔植〕つりがねさう(釣鐘草)を云ふ。〔越中國の方言〕

しやく‐しや 錫砂【名】〔鑛〕錫を含める岩石の崩壞して、雨水にあたりて、砂粒の如くなりたるもの。河床より產す。

じやく‐しや 弱者【名】よわきもの。(强者に對して)

しやく‐じやう 借狀【名】借りたる證據として、貸主に預けおく證書。借用證書。

じやく‐じやう 寂靜【名】㊀せいせき(靜寂)に同じ。㊁〔佛〕心身を空寂にして、靜かに觀念を凝したること。

じやく‐じやう 寂常【名】〔佛〕じやうじやく(常寂)に同じ。

しやくしやう‐くわ 爵牀科【名】〔植〕きつねのまごくわ(爵牀科)に同じ。

じやくじやう‐しゆぎ 寂靜主義【名】〔哲〕『英 Quietism』神祕主義の一。人力を以て自然を解脫征服するは不可能事なりとし、運命に安んじて、一切の活動を廢し、靜寂の觀念のみによりて、神靈と合體せんとする主義。

しやく‐しやく 灼灼【貌】しやくぜん(灼然)に同じ。

しやく‐しやく 灼爍・爍爍【貌】あざやかなるさま、又光り輝くさま。

しやく‐しやく 綽綽【貌】しやくぜん(綽然)に同じ。

しやく‐しやく 錫錫【貌】㊀『顧況の彈二箜篌一歌に「瑠璃席一聲一聲鳴錫錫」とあり』琴の音の形容。㊁『しやくぢやう(錫杖)を見よ』錫杖の音の形容。

しやく‐しやく【貌】しやきしやきに同じ。

じやく‐じやく 寂寂【貌】せきせき(寂寂)に同じ。

じやく‐じやく【貌】ざくざくに同じ。

しやく‐しゆ 借主【名】かりぬし(借主)に同じ。

しやく‐しゆ 積聚【名】〔醫〕『五臟・六腑に

毒物又は毒氣の聚積するによりて起れるものと思ひて名づけしもの』しやく(癪)に同じ。〔漢方醫書の語〕
しやく-しゆ 釋種【名】印度の釋迦の種族。しやかむに(釋迦牟尼)參照。
じやく-しゆ 弱主【名】わかき主君。幼弱なる君主。
し-やくしよ 市役所【名】市長がその事務を取扱ふ役所。市廳。
しやく-しよ 借書【名】しやくようしよ(借用書)に同じ。 太平記「借書を調べ、判形を加へて」
しやく-しよ 釋書【名】㊀ぶっしよ(佛書)に同じ。㊁〔書〕げんかうしやくしよ(元亨釋書)の略。
しやく-す 釋す【動佐變他】釋(と)く。說明す。 太平記「さなきだに重きが上の小夜衣我がつまならぬつまなかさねそといふ歌の意を以て、人目計を憚候物ぞとこそ覺えて候と、歌の心を釋しければ」
じやく-す 寂す【動佛變自】『じやく(寂)を見よ』僧侶死す。入寂す。示寂す。
しやく-すん 尺寸【名】せきすん(尺寸)に同じ。
しやく-すゐ 杓水【名】一杓の水。 大原問答「千尋の堤に杓水を濺ぎて、洪水を漲らし、萬丈の峯より丞ん石を拋って、大敵を亡す術」
じやく-せう 弱小【名】㊀弱くして小さきこと。小弱。㊁年齡の少なきこと。年少。弱年。少小。
じやく-せう 寂昭【名】〔人〕天台宗の學僧。大江齊光(なりみつ)の子。名は定基。參河守に任ぜらる。永延二年剃髮し、初め寂心を師とし、のち源信・仁海二師に學ぶ。長保四年入宋し、長元九年かの地に寂す。年七十三。
しやく-せき 錫石【名】〔鑛〕『英Cassiterite』錫の主要なる鑛石。薩摩國に產す。成分は酸化錫にして、半透明乃至不透明なる短柱狀の結晶をなし、褐色又は黑色を呈し、强き光澤あり。
しやくぜち-にち 赤舌日【名】しやくぜつにち(赤舌日)に同じ。 徒然「赤舌日といふこと、陰陽道には沙汰なき事なり。昔の人、これを忌まず。この頃の何者の言出でて忌みはじめけるか、この日あること、末通らずといひて」

しやくぜつ-じん 赤舌神【名】陰陽家にて、大歳西門の番神乃至第三番の羅刹(らせつ)にて、極惡忿怒(ふんぬ)、閻浮提(えんぶだい)の衆生を惱亂せしむといふもの。
しやくぜつ-にち 赤舌日・借舌日【名】陰陽家にて、赤舌神の司るといふ日。百事に凶なりといふ。正月と七月とは、三日・九日・十五日・二十一日・二十七日、二月と八月とは、二日・八日・十四日・二十日・二十六日、三月と九月とは、朔日・七日・十三日・十九日・二十五日、四月と十月とは、六日・十二日・十八日・二十四日・晦日、五月と十一月とは、五日・十一日・十七日・二十三日・二十九日、六月と十二月とは、四日・十日・十六日・二十二日・二十八日。しやくにち。しやくにつ。
しやく-せん 借錢【名】しやくきん(借金)に同じ。
借錢の山【句】「借金の山」に同じ。 宿屋飯盛「世わたりの道に二つの追分や寶の山に借錢の山」
しやく-ぜん 積善【名】せきぜん(積善)に同じ。
しやく-ぜん 灼然【貌】㊀赤くかがやくさま。きらきら。灼灼。㊁あきらかなるさま。いちじるしきさま。
しやく-ぜん 綽然【貌】ゆるやかなるさま。ゆったりせるさま。
しやく-ぜん 釋然【貌】せきぜん(釋然)に同じ。
しやくせん-こひ 借錢乞【名】しやくきんとり(借金取)に同じ。 世間胸算用「凡那の御蔭で、借錢乞の顏を見ずに」
しやく-せんだん 赤栴檀【名】〔植〕ごづせんだん(牛頭栴檀)に同じ。 謡曲〔百萬〕「毘首羯磨(びしゆかつま)が作りし赤栴檀の尊容」
しやく-そう 錫僧【名】〔佛〕しやくぢやうし(錫杖師)に同じ。
じやく-そつ 弱卒【名】よわき兵卒。(强卒に對して。)
しやく-そん 釋尊【名】〔人〕しやかむに(釋迦牟尼)の尊稱。 公事根源「天龍くだりて、水を注ぎて、釋尊に浴せ奉りしことなり」
しやくそん-ごうたん-ゑ 釋尊降誕會【名】くわんぶつゑ(灌佛會)に同じ。

しやくそん-じ 釋尊寺【名】信濃國北佐久郡小諸(こもろ)町の西、川邊村布引山にある天台宗の寺。本尊は觀世音。天平二十年行基僧正の開基。千曲(ちくま)川に臨み、山水の勝を以て著はる。俗稱、布引山觀音。
しやく-たい 借貸【名】㊀たいしやく(貸借)に同じ。㊁古、國司が、民に官稻を貸して、その利息を收めざること。賑貸。
しやく-だい 釋提【名】〔佛〕しやくだいくわんいん(釋提桓因)の略。
しやくだい-きけん 釋提喜見【名】〔佛〕次條の略。
しやくだい-きけんぐ 釋提喜見宮【句】〔佛〕次條に同じ。 平家「大梵高臺の閣の上、釋提喜見の宮の中」
しやくだい-きけんぐ 釋提喜見宮【名】〔佛〕きけんぐうでん(喜見宮殿)に同じ。
しやくだい-くわんいん 釋提桓因(梵Śakra devānām Indra)【名】たいしやく(帝釋)の梵名。
しやく-たいげ 赤帶下【名】ながち(長血)に同じ。
しやくだい-ぜんけんぐ 釋提善見宮【名】〔佛〕きけんぐうでん(喜見宮殿)に同じ。
じやく-だう 若道【名】『若衆道を、略して音讀せるもの』わかしゆだう(若衆道)に同じ。 若風俗「おのれその身として、若道の心根やさし」
じやくだう-ぐるひ 若道狂【名】わかしゆぐるひ(若衆狂)に同じ。
じやくだう-ざかり 若道盛【名】わかしゆざかり(若衆盛)に同じ。 若俗風「若道盛の人のあるが中に」
しやく-たく 借宅【名】しやくや(借家)に同じ。
しやく-たて 杓立【名】茶杓を立て置く具。
しやく-たふ 積塔・石塔【名】次條を見よ。
しやくたふ-ゑ 積塔會・石塔會【名】昔、撿挍・勾當等が毎年二月十六日に、京都高倉(たかくら)綾小路(あやのこうぢ)なる淸聚庵にて、その祖神と稱する雨夜(あまよ)尊を祭り、平家を語りし法會。當日、勾當三人、四條河原に至り、石を積みて塔形に摸するを、積塔といふ。
しやく-だん 尺斷【名】せきだん(尺斷)に同じ。

しやく-たらう 尺太郎【名】〔動〕かはづ(蛙)を云ふ。〔土佐國の方言〕
しやく-たらず 尺不足【名】穀物などの、一端又は一匹の長さの足らぬこと。
しやく-ち 借地【名】土地を借ること、又その土地。かりち。
しやく-ち 尺地【名】せきち(尺地)に同じ。
じや-ぐち 蛇口【名】『蛇の口に似たるよりいふ』㊀銅・鐵・眞鍮等の金屬にて、龍蛇の形に造りたる裝飾物。湯水の注口の先端に附く。㊁蛇の口のごとく鋭角をなして開きたる形。
しやくち-けん 借地權【名】〔法〕『英Lease』他人の所有する土地の使用・收益を目的とする權利。我が國の法律の用語にあらざるが故に、或は賃借權のみを指し、或は地上權をも含めていふ等、用法一定せず。
しやくち-にん 借地人【名】〔法〕借地をなしたる人。
しやく-ちん 借賃【名】かりちん(借賃)に同じ。
しやく-ぢやう 錫杖【名】㊀『梵Khakkhara 喫棄羅(きつきら)の譯語。 飜譯名義に「梵言二隙棄羅一此云二錫杖一由三振時作二錫錫聲一亦名二聲杖一」とあり』僧侶・修驗者の用ふる一種の杖。十八物の一。上部は錫、中部は木、下部は牙又は角にて造り、頭は塔婆の形をなし、これに數箇の鐶(くわん)を附けたり。携へて步むにつれ、鐶鳴りて、惡蟲・毒獸などを警しむるためといふ。しやく。聲杖。 撰集抄「錫杖にてあばへりければ」 ㊁修驗者の手に持ちて振り鳴らす具。短くして㊀の頭部のみの如きもの。祭文語も、拍子を取るに用ひたり。 女殺油地獄「いで一薛と、錫杖振りたて、いらたか數珠さらりさらりと押しもんだり」 ㊂四箇法要の第四。梵音の次に、一種の頌文(じゆもん)を諷ひつつ錫を振ること。

(錫杖 ㊀)

錫杖を飛ばす【句】『王維の詩に「上人飛二錫杖一」とあり』「錫を飛ばす」に同じ。
しやく-ぢやう 尺丈【名】田地を測るに用ふる尺。長さ三尺或は三尺六寸あり。毎六寸に黑線を刻み、端尺を切るに用ふ。

しやく-ぢやう 試薬場【名】內務省の所轄の下に、藥劑の試驗・證明等を行ひし所。明治九年設置、同十六年廢止せらる。
じやく-ぢやう 寂場【名】〔佛〕じやくめつだうぢやう(寂滅道場)の略。 太平記「雪山に捨身、寂場樹下に端坐し給ふ」
じやく-ぢやう 寂定【名】〔佛〕㊀妄心・妄想を離るること。㊁僧侶の死ぬること。入寂。入定。
しやくぢやう-がたけ 錫杖嶽【名】〔地〕飛驒國吉城(よしき)郡の東北境にある山。
しやくぢやう-さう 錫杖草【名】〔植〕㊀しやくぢやうばな(錫杖花)に同じ。㊁いちやくさう(鹿蹄草)に同じ。
しやくぢやう-し 錫杖師【名】〔佛〕七僧また九僧の一。法會の時、錫杖を持ちて先行するもの。錫僧。
じやくぢやう-じゆ 寂場樹【名】〔佛〕釋尊が、その樹蔭を寂場として、正覺を得たる菩提樹。 太平記「舍利弗(しやりほつ)は、寂場樹下に端坐して」
寂場樹下の說法【名】〔佛〕釋迦が、寂場樹下にて、成道(じやうだう)し、直ちに其所にて華嚴經(けごんきやう)を說きしこと。
しやくぢやう-ばな 錫杖花【名】〔植〕鹿蹄(いちやくさう)科に屬する一年生の草。松・樫などの根に寄生す。莖の高さ五六寸乃至一尺、黃褐色又は帶赤色にして、夏季白色の小花を開く。しやくぢやうさう。
しやくぢやう-まめ 錫杖豆【名】〔植〕いんげんまめ(隱元豆)に同じ。
しやく-ぢゆう 借住【名】借家に住むこと。借居。僦居。
しやく-ちよ 錫紵【名】天皇の、二等以上の御親屬の喪の時に著用せらるる淺黑の闕腋(けつてき)の袍。 裝束抄「錫紵者細布也、即用二淺黑染一也」
しやくち-れう 借地料【名】㊀〔經〕土地そのものの報酬にして、土地より生ずる純所得。㊁〔法〕借地人が、土地の使用料として、地主に支拂ふ金錢その他の物。民法には、借賃・地代又は小作料といひ、これらを總括せる名稱とす。

じや-くづれ 蛇崩【名】『沙崩の義ならんといふ』崖(がけ)などの崩るること。
しやく-づゑ 尺杖【名】㊀大形のものさし。㊁馬の尺を指す杖。
じやく-てい 弱弟【名】年若き弟。幼弟。
じやく-てき 弱敵【名】よわき敵。(强敵に對して)
じやく-てき 若敵【名】年齡の若老に拘らず、一度も功を立てざる大將。〔戰國時代の語〕
しやく-てつ 尺鐵【名】せきてつ(尺鐵)に同じ。 太平記「無二尺鐵之資一」
しやく-てん 借店【名】たながり。かりだな。
しやく-てん 釋典【名】ぶってん(佛典)に同じ。
しやく-でん 釋奠【名】せきてん(釋奠)に同じ。 其「しやくでんもいかならん。くじなどは、かけ奉りてする事なるべし」
じやく-てん 弱點【名】よわみ。缺點。
しやく-ど 尺度【名】㊀せきど(尺度)に同じ。㊁ものさし(物指)に同じ。
しやく-ど 爵土【名】爵位と領土と。
じやく-とう 雀頭【名】じやくとうひつ(雀頭筆)の略。
しやく-どう 赤銅【名】『せきどう(赤銅)を見よ』㊀〔化〕銅と黃金との合金。紫黑色にして、頗る重し。烏銅。烏金。紫金。㊁次條の略。
しやくどう-いろ 赤銅色【名】赤銅の如き色。
しやくどう-づくり 赤銅造【名】『こがねづくり(黃金造)を見よ』赤銅にて裝飾を施したること、又その物。 曾我「しやくどうづくりの太刀の、寸のびたるに」
しやくどう-づくり 尺籐作【名】弓の籐を一尺おきに卷くこと。
じやくとう-ひつ 雀頭筆【名】穗を太く短く造りたる筆。
しやく-どく 尺牘【名】せきどく(尺牘)に同じ。
しやく-とり 酌取【名】宴會の時、酒の酌をなすこと、又その人。 盛衰記「酌とりには、畫の女をいだして」
しやく-とり 尺取【名】〔動〕次條の略。

しやくとり-むし 尺取蟲・尺蠖【名】〔動〕『その前進の狀、尺を取るに似たるよりいふ』鱗翅類中、尺蠖蛾類の幼蟲の總稱。夏・秋の交、主に草木の枝葉に棲み、青・茶褐色、又は灰色等を呈し、形細長くして、首と尾と相應じ、中部を高く揚げて屈伸しつつ前進し、靜止する時は、尾端の足にて體を支へ、樹枝狀をなす。嫩葉(わかば)を食するより、農林業の害蟲なり。成蟲は蛾となる。つゑつきむし。

(しやくとりむし)

しやくとり-をんな 酌取女【名】酒の酌をする女。酌婦。
しやく-なが 尺長【名】たけなが(丈長)㊀に同じ。
しやく-なぎ 海馬【名】〔動〕たつのおとしご(龍落子)に同じ。
しやく-なぎ 石南【名】〔植〕しやくなげ(石南)に同じ。
しやく-なげ 蝦蛄【名】〔動〕しやこ(蝦蛄)を云ふ。〔東國の方言〕
しやく-なげ 石南【名】〔植〕石南科に屬する常綠灌木。高さ七八尺。葉は楕圓形にして革質、表は滑澤にして、裏は褐色の毛茸(こうじよう)を生ず。初夏、梢頭に淡紅色の合瓣花を集生し、十雄蕊と一雌蕊とを具へ、形やや躑躅(つつじ)に似たり。各地の深山に自生し、觀賞用として栽培せらる。うつぎばなさくなげ。しまき。しやくなんげ。

(しやくなげ)

しやくなげ-くわ 石南科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・合瓣花區の一科。多くは灌木・半灌木又は多年生の草なれども、稀に喬木なるもあり。石南・躑躅(つつじ)・八汐(やしほ)・梫木(あせぼ)など、これに屬す。
しやく-なん 石南【名】〔植〕しやくなげ(石南)に同じ。

しやく-なんげ 石南花【名】〔植〕前條に同じ。
じやく-にく 弱肉【名】次條を見よ。
弱肉强食【句】「强食弱肉」に同じ。
しやくにく-ちゆうだい 赤肉中臺【名】〔佛〕『三密瑜伽(ゆが)成就して、衆生の肉團心卽ち心臟の開敷せし相なりといふ。古人は、心臟を精神・思考の府なりと考へたり』人の心臟を八葉の蓮華と見なしたる、その中臺。心蓮(しんれん)。 太平記「大師御入定の室の戶を開かせ給へば、嶺松含レ風、顯二瑜伽上乘之理一、山花籠レ雲、秘二赤肉中臺之相一」
しやく-にち 赤日【名】しやくぜつにち(赤舌日)に同じ。
しやく-にほんぎ 釋日本紀【名】〔書〕日本書紀の註釋書の存在せるものの中の最も古きもの。漢文にて記す。二十八卷。卜部(うらべ)懷賢の著にして、卜部兼永の校閱を經たり。
しやく-にん 酌人【名】㊀酌取をする人。 國姓爺後日合戰「見苦しき土の盃、酌人の起居動作も、大國中華の風儀にあらず」 ㊁特に、藝妓の稱。
しやく-ねつ 灼熱【名】燒きて熱くすること。燒けて熱くなること。
しやく-ねん 釋然【貌】せきぜん(釋然)に同じ。 右大將鎌倉實記「手足に桎梏を被るとも、念彼觀音の力に因って、釋然として解き脫るることを得ん」
じやく-ねん 弱年・若年【名】㊀年わかきこと。幼年。弱齡。㊁十一歲より十七歲までの稱。〔德川時代の語〕 ㊂年若くして、物事に未熟なること。思慮の至らぬこと。若輩。 若風俗「さりとては若年の至なり、惣じて詩歌は等類もあるものぞかし」
じやく-ねん 寂念【名】〔佛〕俗念を去りたる靜かなる心。寂靜(じやくじやう)なる心。禪定(ぜんぢやう)。 謡曲〔卷絹〕「三難、耳絕えて、寂念閑定(かんぢやう)の床の上には」
じやく-ねん 寂然【貌】㊀せきぜん(寂然)に同じ。㊁〔佛〕『維摩經の弟子品に「法常寂然、滅二諸相一故」とあり、註に「生曰、寂然者、寂靜・無事之義也」とあり』寂靜(じやくじやう)

あいうえお　かきくけこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの　はひふへほ　まみむめも　やゆよ　らりるれろ　わゐゑを

にして無事なるさま。

じやくねん 寂念【名】〔人〕ふぢはらためなり（藤原爲業）を見よ。

じやくねん 寂然【名】〔人〕ふぢはらよりなり（藤原頼業）を見よ。

じやくねんほふし-しふ 寂然法師集【名】〔書〕寂然法師（藤原頼業）の歌集。一卷。

じやくねん-もの 弱年者・若年者【名】としのゆかぬ者。わかもの。若輩。

しやく-の-き 笏木【名】〔植〕いちゐ（一位）に同じ。

しやく-の-らう 策勞【名】『策は簡の意にて、文詞を書くこと』王朝時代の文官登用試驗の一。文章得業生が、方略の宣旨を蒙りて對策し、及第せる時、官位を授けられしこと。多くは式部丞に任じ、五位に敍せらるるを常とす。

しやく-ば 借馬【名】馬を借ること、又借りたる馬。かりうま。

じやく-はい 弱輩・若輩【名】㊀弱年の人。若き者、未熟なる者を輕んじていふ語。堀田鉄「主君頼光、若輩なれども、御思案深く」㊁未熟なる人人。また未熟なる物事。至らぬものごと。弱年。

じやくはい-もの 弱輩者・若輩者【名】年若き者、未熟なる者を輕んじていふ語。世継曾我「いや某は若輩者のことなれば」

じやくはい-わざ 弱輩業・若輩業【名】弱輩者のしわざ。未熟者の所爲。雪女五枚羽子板「遺恨を晴らすなどといふ若輩業のあるべきか」

しやく-はう 釋放【名】〔法〕公力に因る拘束を免じて、自由ならしむること。

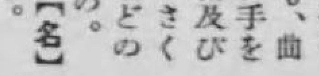
しやく-はう 借方【名】〔商〕かりかた（借方）㊂に同じ。（貸方に對して）〔簿記の語〕

しやくはう-かんぢやう 借方勘定【名】〔商〕かりかたかんぢやう（借方勘定）に同じ。（貸方勘定に對して）〔簿記の語〕

しやくはう-きんがく 借方金額【名】〔商〕かりかたきんがく（借方金額）に同じ。〔簿記の語〕

しやくはう-しや 釋放者【名】釋放せられたる人。

しやく-はち 尺八【名】㊀竪笛の一種。淡竹（ハチク）の根元を、長さ支那唐代の小尺にて一尺八寸（我が國の曲尺（カネジャク）にて一尺四寸五分餘）に切り、表に四つ、背に一つの孔を穿ち、筒の上端を歌口とせるもの。今は寸法一定せざれども、曲尺一尺八寸を普通とす。右手を上にし、左手を下にし、食指及び無名指を孔に當てて奏す。さくはち。〔頁笠〕㊁紙・絹・紈などの幅一尺八寸の大いさなるもの。


（㊀しやくはち）

しやくはち-いか 尺八烏賊【名】〔動〕やりいか（槍烏賊）に同じ。

しやくはち-がめ 尺八龜【名】〔動〕やりいか（槍烏賊）に同じ。

しやくはち-ばと 尺八鳩【名】〔動〕あをばと（青鳩）に同じ。

しやくはち-ふき 尺八吹【名】尺八を巧に吹き、又これを吹くを業とする者。

しやくはち-むし 尺八蟲【名】〔動〕ごまふとびけら（胡麻斑飛蝶蛄）に同じ。

しやく-ばつ 斫伐【名】刃物にて斷伐ること。

しやくばつ-あん 斫伐案【名】伐採すべき森林の面積、及び材積を豫定したる表。

じやく-はん 雀斑【名】そばかす（蕎麥滓）に同じ。

しやくば-や 借馬屋【名】馬を貸すことを生業とする家。

しやく-ひ 借費【名】しやくれう（借料）に同じ。

しやく-ひき 笏引【名】をずむしねり（尺蠖練）に同じといふ。江次第「練作法有レ二、謂二笏引・鼻高一也」

しやく-びたひ 笏額【名】さくつき（笏額）に同じ。

しやく-びやうし 笏拍子【名】さくばうし（笏拍子）に同じ。

しやく-びやく 赤白【名】赤と白と。國姓爺合戰「涼白二つの川水に心を付けて」

しやく-ふ 酌婦【名】㊀酒の酌をなす女。しやくとりをんな。おしやく。㊁田舍の料理茶屋に雇はれて、客の酒の相手をする女。

しやく-ふ 【動四他】汲取る。すくふ。

しやく-ぶく 折伏【名】『折の字の呉音、正しくはせちなれども、古來、析の字の呉音と混じて、しやくと讀み來れり』㊀〔佛〕邪惡・煩惱・迷執の類を破折・催伏すること。佛菩薩の衆生を濟度するに、この折伏と攝受（セフジュ）との二法を用ふ。この二者は佛教の大綱にして、不動尊は折伏を司り、地藏尊は攝受を主とす。㊁敵を挫きて從はしむること。

しやくぶく-もん 折伏門【名】〔佛〕折伏の方法を以て、人を佛道に導くこと。（攝受（セフジュ）門に對して）

しやく-ぶくろ 尺袋【名】ものさしを入るる箱。

しやく-ほう 爵封【名】爵位と封邑と。爵土。爵邑。

しやく-ぼん 釋梵【名】〔佛〕帝釋天と梵天と。水鏡「釋梵感應を垂れて、日本地へ送り給ふなるべし」

しやくほん-りやうもん 迹本兩門【名】〔佛〕ほんじやくにもん（本迹二門）に同じ。

しやく-ま 尺魔【名】「寸善尺魔」を見よ。

しや-ぐま 【名】〔植〕おきなぐさ（翁草）㊀に同じ。

しや-ぐま 赤熊【名】㊀白熊の毛を赤く染めたるもの、又それに似たる髮。浦島年代記「汐風にもまれて、髮は赤熊」㊁ちぢれ毛にて作りたる入毛。

しやく-まい 借米【名】米を借ること、又借りたる米。

じやく-まう 雀盲【名】とりめ（鳥目）に同じ。

じやく-まく 寂寞【名】物しづかなること。せきばく。新古今「じやくまくの苔の岩戸のしづけきに涙の雨のふらぬ日ぞなき」

寂寞の扃（トボソ）【句】靜寂なる住居、又その門。釋迦如來誕生會「寂寞の扃を押開き、顯れ出でし阿羅羅仙人」

寂寞無人聲（ムニンジャウ）【句】〔佛〕『法華經の法師品に「若說法之人、獨在二空閑處一、寂寞無二人聲一、讀二誦此經典一、我爾時爲現二淸淨光明身一、若忘二失章句一、爲說令二通利一」とあるに本づく』靜かなる形容。斯かる處にて法華經を讀誦する時は、奇瑞ありとていふ。

しやぐま-さいこ 赤熊柴胡【名】〔植〕おきなぐさ（翁草）㊀に同じ。

しやぐま-さう 赤熊草【名】〔植〕前條に同じ。

しやぐま-はぎ 赤熊萩【名】〔植〕荳（マメ）科に屬する一年生の草。近年舶載せるもの。高さ一二尺。葉は三葉より成る掌狀複葉にして、各小葉は線形又は倒披針形をなし、鈍頭又は微凹頭にして、先端に齒牙あり。葉脚は楔形をなす。夏日、白色又は淡紅色の小さき蝶形花を開く。

しやく-み 曲見【名】能樂（ノウ）の假面（メン）の一。年やや長けたる女の顏をあらはせるもの。「柏崎」の曲などに用ふ。

しやく-みやう 釋名【名】㊀經論を解釋するに、古來、三段に次第する内の第二段として、題名の意義を解きあかすもの。榮花「例の大意・釋名・入文解釋（ニフモンゲシャク）よりはじめて」㊁〔書〕せきめい（釋名）を見よ。

しやく-む 【動四自】中央くぼむ。

しや-くん 斜曛【名】ななめに照らす夕日。ゆふひ。夕陽。斜陽。

しやく-めい 釋明【名】ときあかすこと。說明。

しやく-めい 綽名【名】しやくがう（綽號）に同じ。

しやく-めい 錫命【名】命令をたまふこと。

しやく-めい 釋名【名】㊀しやくみやう（釋名）を見よ。㊁〔書〕せきめい（釋名）を見よ。

じやく-めつ 寂滅【名】㊀〔佛〕『その體、寂靜（ジャクジャウ）にして、一切の相を離れたる義』ねはん（涅槃）の漢譯。榮花「眞如・寂滅の相」㊁なくなること。死ぬること。

寂滅の烟と立上（タチノボ）る【句】燒失す。太平記「一時に灰燼となって、佛像・神體・經論・聖教（シャウギャウ）、忽ちに寂滅の烟と立上る」

寂滅爲樂（ヰラク）【句】〔佛〕『梵 Tesaṁ rūpasamo sukho の譯語。涅槃經の四句の偈（ゲ）の中の一句』寂滅の境に入りて、はじめて眞の樂を得。榮花「寂滅爲樂は、淨土に參る八相成道（ジャウダウ）の義果なり」

じやくめつ-いん 寂滅印【名】〔佛〕三法印の一。涅槃（ネハン）の境に體達したることを表徴する印。

じやくめつ-だうぢやう 寂滅道場【名】〔佛〕化身（ケシン）佛の有餘涅槃（ウヨネハン）を證せし道場。釋尊にありては、摩竭陀（マガダ）國迦耶（ガヤ）山頭、尼連禪（ニレンゼン）河邊の菩提樹下な

る金剛座上をいふ。寂滅場。寂場。盛衰記「中天竺の摩訶陀國寂滅道場の金剛座、これなり」

じやくめつ-ぢやう 寂滅場【名】〔佛〕前條の略。

じやくめつ-ゐらく 寂滅爲樂【句】じやくめつ（寂滅）の條下を見よ。

じやく-もく 寂默【名】〔佛〕㊀靜かに默想して言はざること。㊁むに（牟尼）の漢譯。

しやく-もち 癪持【名】常に癪の病になやむこと、又その人。傾城反魂香「常が癪持、ぶらぶらとしながら」

しやく-もん 借問【名】しやもん（借問）に同じ。

しやく-もん 迹門【名】〔佛〕『迹は垂迹の義。大藏法數に「法華經中前十四品名爲二迹門一、亦猶二足跡一、譬如三人之所居則有二行住之迹一也、蓋論釋迦最初成道已來、及中間施レ化節節、唱レ生唱レ滅以至二于今一、成佛度生、皆是從レ本垂レ迹、故名二迹門一」とあり』久遠（クヲン）の古、既に成佛せる法身佛が衆生濟度のために、しばしばこの世に身を現し、その都度新に成佛の相をあらはすと見ての立場より說く法門、即ち權（ゴン）即（ソク）實の實相を說くもの。法華經全部二十八品の中、第一序品より第十四安樂行品までの前半十四品は即ちこれなり。（本門に對して）

しやく-もん 釋門【名】『釋迦の門下の意』佛門。僧侶。太平記「速かに釋門の徒となりて、遠鄕に幽居をトめんと」

しやく-もん 釋文【名】經論を解釋したる文句。雪丸「又天台の釋文にも、法華彌陀眼目の異名とて」

しやくもん-さんじふろくかせん 釋門三十六歌仙【名】僧侶にして歌に巧なる三十六人、即ち達磨和尙・菩提僧正・大僧正行基・傳教大師・弘法大師・慈覺大師・智證大師・沙彌滿誓・僧都玄賓・僧正遍昭・喜撰法師・僧正聖寶・素性法師・空也上人・日藏上人・蟬丸・性空上人・少僧都源信・惠慶法師・能因法師・良暹（リヤウゼン）法師・律師永觀・登蓮法師・大僧正行尊・僧正永緣・俊惠法師・道因法師・西行法師・大僧正慈圓・二品親王守覺・法橋顯昭・寂蓮法師・寂念法師・僧正行意・貞慶上人・高辨上人。正平元年勧修寺榮海の選みしもの。

しやくもんさんじふろくかせん-しふ 釋門三十六歌仙集【名】〔書〕前條の三十六歌仙の歌一首づつを集めたるもの。一卷。勧修寺僧正榮海の撰。

しやく-や 借家【名】借りて住む家。かりいへ。かりたく。かりや。借家（シャクカ）。

借家榮えて、母屋（オモヤ）倒る【句】すゑずゑの者榮盛して、却って上の者の衰ふる譬。〔諺語〕

しやく-やく 芍藥・勺藥【名】毛茛（キンポウゲ）科に屬する多年生の草。もと支那より渡來せるものにて、高さ三四尺に達し、葉は牡丹のに似て細長く、花も牡丹のに似てやや小さく、夏開きて、色は紅・白など種種あり。園養して觀賞に供し、また根を藥用とす。えびすぐさ。えびすぐすり。かほよぐさ。ぬみぐすり。やまざけ。紅藥。

芍藥の贈（オクリ）【句】『詩經の鄭風溱洧篇に「維士與レ女、伊其相謔、贈レ之以二勺藥一」、古今註に「牛亭問曰、將レ離將レ別、贈以二芍藥一何耶、答曰、芍藥一名將離、故以レ此贈レ之」とあり』支那にて、古、男女の情を厚くするために、互に芍藥を贈りしこと。

芍藥の戯（タハブレ）【句】男女の情事。

じやく-やく 雀躍【名】『雀のごとく躍る意。「雀百まで躍を忘れず」參照』こをどりして喜ぶこと。

しやく-やく 綽約・婥約【形】姿のしなやかなるさま。たをやか。

しやくやく-むし 芍藥蟲【名】〔動〕こがねむし（黄金蟲）に同じ。

しやくや-ずまひ 借家住【名】借家にすむこと。かりやずまひ。しやくやずみ。

しやくや-ずみ 借屋住【名】前條に同じ。

しやくや-ふだ 借家札【名】かしやふだ（貸家札）に同じ。俳諧古選附錄（文鳥）「夕顔や女の手にて借家札」

しやく-よう 借用【名】借りて用ふること。

しやくよう-きん 借用金【名】借用したる金錢。

しやくようきん-かんぢやう 借用金勘定【名】〔商〕借用金を整理する勘定科目。貸方には借入金を記入し、借方には返却金を記入す。借入金勘定。

しやくよう-ご 借用語【名】〔語〕ぐわいらいご（外來語）に同じ。

しやくよう-しよう 借用證【名】次條に同じ。

しやくよう-しようしよ 借用證書【名】金錢又は物品を借受けたるとき、その借主より貸主に差入るる證書。借用證文。借狀。

しやくよう-しようもん 借用證文【名】前條に同じ。

しやくよう-ひん 借用品【名】借用したる物品。かりもの。借用物。

しやくよう-ぶつ 借用物【名】前條に同じ。

しやくよう-れう 借用料【名】しやくれう（借料）に同じ。

じやく-ら 雀羅【名】雀を捕へんための網。とりあみ。

門前、雀羅を設く【句】『漢書の鄭當時傳贊に「翟公爲二廷尉一、賓客塡レ門、及レ廢門外可レ設二雀羅一」とあるに本づく』來訪者なきために、門外に鳥網を張り得るほどに寂し。〔諺語〕

門前、雀羅を張る【句】前條に同じ。〔諺語〕

しやく-らう 釋老【名】㊀釋迦（シャカ）と老子と。㊁佛教と道教と。

しやく-らん 借覽【名】書籍などを借りて閲覽すること。

しやく-らん 灼爛【名】やけただるること。

しやくり 噦【名】さくり（噦）の訛。盛衰記「夢ならば、覺めて後はいかがせんと、嗚咽（ヲエツ）もしあへず泣語り」

しやくり 疏・決【名】㊀中くぼに刳（エグ）ること。㊁しやくふこと。すくふこと。㊂そそのかすこと。あやつること。

しやく-り 赤痢【名】せきり（赤痢）に同じ。

しやくり-あぐ 噦上ぐ【動下二自】さくりあぐ（噦上ぐ）の訛。

しやくり-なき 噦泣【名】さくりなき（噦泣）に同じ。心中宵庚申「泣入り泣入り、しやくりなき」

しやくり-びき 疏引・決引【名】しやくりつつひくこと。狂言記「鎌倉の方へ、しやくり引に致さう」

しやくり-ひく 疏引く・決引く【動四自】すくひ取るやうにして引く。浦島年代記「波も藻屑もこととももせず、引留めんとしやくり引く」

しやくり-びやう 赤痢病【名】せきりびやう（赤痢病）に同じ。著聞「赤痢病を大事にして、存命殆どあぶなかりけるに」

しやくり-もどす 疏戻す・決戻す【動四他】しやくるやうにして戻す。狂言記「都の方へしやくりてもどさう」

しやく-りやう 酌量【名】くみとること。推量すること。斟酌。

しやくりやう-げんけい 酌量減輕【名】〔法〕裁判所が、犯罪の動機に同情すべき等の點あることを認め、酌量して、法定の刑を輕減すること。

しやくりやう-ふ 赤靈符【名】せきれいふ（赤靈符）に同じ。

しやく-りよ 釋侶【名】そうりよ（僧侶）に同じ。

しやくる 噦る【動四自】㊀噦（シャクリ）を爲す。撰集抄「しやくりもあへず泣くめり」㊁しやくりあぐ（噦上ぐ）に同じ。

しやくる 疏る・決る【動四他】『さくる（疏る）の訛なるべし』㊀中くぼに刳（エ）る。天の網島「氣をせければ、せくほどまはる車戸のあくるを人や聞きけんと、しやくってあくれば、しやくって響き」㊁杓子を使ふ。すくひとる。しやくふ。㊂からかひあやつる。㊃おだつ。煽動す。敎唆す。操縱す。

しやくる （英 Shackle）【名】次條の略。

しやくる-がいし しやくる碍子（英 Shackle insulator）【名】ちやだいがいし（茶臺碍子）に同じ。

じやく-れい 弱齡【名】じやくねん（弱年）に同じ。

しやく-れい 釋例【名】解釋の例。

しやく-れう 爵料【名】古、錢を獻じて、爵位を請求せし料金。敍料（ジョレウ）。小右記「以二爵料一被レ充二築レ垣料一」

しやくれう 借料【名】かりちん。借用料。
じやくれん 若戀【名】若道の戀。若風俗「若戀を忘れもやらず」
じやくれん 寂蓮【名】〔人〕ふぢはらさだなが(藤原定長)を見よ。
じやくれんほふしかしふ 寂蓮法師家集【名】〔書〕寂蓮の歌集。一卷。
しやくろ 借廬【名】しやくや。かりや。
じやくろ 石榴・柘榴【名】〔植〕ざくろ(石榴)の訛。狂言〔文藏〕「榧か、椎か、榛(はしばみ)か、じやくろか、くるみか、かち栗か」
しやくろく 尺六【名】幅又は長さの一尺六寸なるもの。
しやくろく 爵祿【名】爵と祿と。位と扶持と。
じやくろぐち 石榴口・柘榴口【名】ざくろぐち(石榴口)の訛。
じやくろぶろ 石榴風呂・柘榴風呂【名】ざくろぶろ(石榴風呂)に同じ。醒睡笑「たてあきの戸なきを柘榴風呂とは何ぞ」
しやくろん 釋論【名】㊀〔佛〕經文の文意を一一に解釋すること。(宗論に對して)ろん(論)參照。㊁〔書〕『大品(だいぼん)般若經を釋せし書なるによりていふ』だいちどろん(大智度論)の異稱。(顯教の語)
しやくろんしゆう 釋論宗【名】〔佛〕『類聚名物考に「釋論宗付禪與眞言未別立之」とあり』十一宗の一。禪宗と眞言宗とに附屬して、別立するに至らざるもの。
しやくわい 社會【名】㊀『荊楚歲時記に「社日四鄰並結綜會社」とあり。しやさい(社祭)參照』支那にて、社日に鄉村の住民の會合せしこと。㊁『英 Society』多少恒久的なる關係における、二人以上の人の協同的生活の體。㊂同じ種類の人人の仲間。
しやぐわい 車外【名】車のそと。(車內に對して)
しやくわいいうきたいせつ 社會有機體說【名】〔哲〕『英 Theory of social organism』社會を一箇の生物と比較して、單に集合・成立せるものにあらずとし、全體として、各部分相互に相關連せる一種の有機體なりとする見解。
しやくわいいし 社會意志【名】『英 Social will』社會における集合意志。例へば我が國の武士道の類。社會精神。
しやくわいいしき 社會意識【名】〔哲〕『英 Social consciousness』社會の成素たる衆人の意識の集合・統一せられたるもの。一般意識。社會心意。
しやくわいがく 社會學【名】『英 Sociology 又 Social science』社會の組織・職能・進化などにつきて研究する學問。佛蘭西の哲學者コント(A. Comte)によりて始めて組織せられ、英吉利のスペンサア(H. Spencer)に至りて、體系備はる。
しやくわいきようさんしゆぎ 社會共產主義【名】〔經〕きようさんしゆぎ(共產主義)に同じ。
しやくわいきようさんたう 社會共產黨【名】きようさんたう(共產黨)に同じ。
しやくわいきよく 社會局【名】內務省の一局。大正九年に同省地方局內の社會課を分離して、獨立せしめしもの。二課に分れ、第一課は罹災救助・窮民救助・軍事救濟・職業紹介・授產所等に關する事項、第二課は感化教育・兒童保護・共濟組合及び社會教化事業に關する事項を掌る。
しやくわいくわ 社會化【名】〔哲〕『英 Socialization』個人又は群衆又は他の社會を化して、自己の社會の成分又は部分となす作用。
しやくわいくわがく 社會科學【名】『英 Social sciences』社會組織に關係する事物を對象とする科學、即ち社會學・政治學・經濟學などの總稱。社會的科學。
しやくわいけいざい 社會經濟【名】〔經〕『英 Social economy』人類の社會的結合をなして、互に貨物の交換をなす經濟。產業經濟。(孤立經濟に對して)
しやくわいけいやくせつ 社會契約說【名】『英 Social contract』人類が、原始生活より脫して、その間に社會の發生するに至りし起原を、一の契約にありとなす說。英吉利のホッブス(T. Hobbes)・ロック(J. Locke)等の唱道せしもの。みんやくせつ(民約說)參照。
しやくわいけういく 社會教育【名】『英 Social education』㊀學校以外、即ち社會一般の人に施す教育。民衆教育。庶民教育。(學校教育・家庭教育に對して)㊁社會主義に依る教育。社會と個人との調和を目的として行ふ教育。
しやくわいげき 社會劇【名】『英 Social drama』社會問題に關する思想を表現したる劇。イプセン(H. Ibsen)の作のごとき、殊に有名なり。しさうげき(思想劇)參照。
しやくわいけふどうせつ 社會協同說【名】〔哲〕『英 Social collaboration theory』社會的組織は單に摸倣・同情等のみにて組織せらるるものにあらずして、協力の結果なりとする說。
しやくわいげんしやうろん 社會現象論【名】〔哲〕『英 Social phenomenology』社會學の一部。社會はいかなる狀態にあるかの問題を研究するもの。社會的現象。(社會存立論・社會進化論に對して)
しやくわいしんい 社會心意【名】〔哲〕『英 Social mind』しやくわいいしき(社會意識)に同じ。
しやくわいしんくわ 社會進化【名】〔哲〕『英 Social evolution』社會の進化、即ち生物進化の結果、人類の間に發生したる社會の、漸次文明の度を增進すること。社會的進化。
しやくわいしんくわろん 社會進化論【名】〔哲〕『英 Social teleology』社會學の一部。社會進化の概念・事實・法則・理想等を研究するもの。即ち社會はいかに在らんとするか、いかに在るべきかの問題を研究するもの。社會動學。(社會存立論・社會現象論に對して)
しやくわいしんり 社會心理【名】〔哲〕民族といはず、人種といはず、弘く社會一般に亙りての心理現象。
しやくわいしんりがく 社會心理學【名】〔哲〕『英 Social psychology』心理學の一分科。社會心理を研究する科學。人種心理學及び民族心理學に比して、一層普遍的・抽象的・主觀的なるもの。
しやくわいしゆぎ 社會主義【名】『英 Socialism』㊀〔經〕現今の經濟組織は、私有財產制と自由競爭制と並び行はれ、隨って貧富の度著しく懸隔せるにより、これを根本より打破し、財の分配をして、宜しきを得しめんことを目的とする主義の總稱。個人主義と國家主義との調節を目的とするものにして、その方法に對する、學者の見解一ならず、隨って國家社會主義・共產主義・キリスト教社會主義等種種の別あり。㊁〔經〕きようさんしゆぎ(共產主義)の特稱。㊂〔哲〕教育上、社會と個人との調和を計り、公共的精神の涵養を目的とする主義。
しやくわいしゆぎしや 社會主義者【名】社會主義を唱ふる人。
しやくわいせいがく 社會靜學【名】〔哲〕『英 Social statics』しやくわいげんしやうろん(社會現象論)に同じ。(社會動學に對して)
しやくわいせいくわつ 社會生活【名】『英 Social life』孤立せずして、社會的團體をなして生活すること。社會的生活。
しやくわいせいさく 社會政策【名】『英 Public policy 獨 Sozialpolitik』社會問題を解釋せんがために施行する國家の政策。現今實行せられ、若しくは學說として有力なるものは、相續法・租稅法・工場法等の改正、又は組合設置・普通教育普及等、これなり。
しやくわいせいさくがく 社會政策學【名】〔經〕社會政策を研究する學。
しやくわいせいしん 社會精神【名】〔哲〕しやくわいいし(社會意志)に同じ。
しやくわいせいど 社會制度【名】『英 Social institution』社會の財產又は階級等に要する國家の制度。
しやくわいせうせつ 社會小說【名】〔文〕社會の狀態を描寫するを目的とする小說。
しやぐわいせん 社外船【名】社船以外の船舶。
しやくわいそんりつろん 社會存立論【名】〔哲〕『英 Social ontology』社會學の一部。社會はいかにして、いかなる理法に基きて存立するかの問題を研究するもの。社會理學。(社會現象論・社會進化論に對して)

しやくわいたう 社會黨【名】『英 Socialistic party』社會主義(特に社會共產主義)を執る黨派。
しやくわいてき 社會的【形】社會と關聯せるさま。
しやくわいてきかんじやう 社會的感情【名】『英 Social feeling』人類が社會を組織する自然の情、即ち同情・愛情の類。
しやくわいてきくわがく 社會的科學【名】しやくわいくわがく(社會科學)に同じ。
しやくわいてきげんしやう 社會的現象【名】しやくわいげんしやう(社會現象)に同じ。
しやくわいてきしんくわ 社會的進化【名】〔哲〕しやくわいしんくわ(社會進化)に同じ。
しやくわいてきじやうさう 社會的情操【名】〔哲〕『英 Social sentiment』社會に關する情操。
しやくわいてきじやうしよ 社會的情緒【名】〔哲〕『英 Social emotion』社會に關する情緒。
しやくわいてきせいくわつ 社會的生活【名】しやくわいせいくわつ(社會生活)に同じ。
しやくわいどうがく 社會動學【名】〔哲〕『英 Social dynamics』しやくわいしんくわろん(社會進化論)に同じ。(社會靜學に對して)
しやくわいとうけいがく 社會統計學【名】『英 Demography』統計上より社會の現象を比較研究する學。
しやくわいぶんくわ 社會分化【名】〔哲〕『英 Social differentiation』社會が、その進化の一過程として、單純齊一なる狀態より、複雜・不齊なる狀態に進むこと。
しやくわいみんしゆしゆぎ 社會民主主義【名】『英 Social democratism』民主政治の下に、社會主義の制度を實現せんとする主義。
しやくわいみんしゆたう 社會民主黨【名】社會民主主義の黨派。
しやくわいもんだい 社會問題【名】近世における一切の社會に關する問題、即ち經濟・人口・人種・戰爭及び平和・宗教・婦人・犯罪・階級・革命等の問題。近世の社會生活にありては、經濟問題がその基調を成すが故に、社會に於ける資本家及び企業家と勞働者との利害衝突に基く、貧富の懸隔を調和せんとすることに關する諸問題を指すこと、殊に多し。
しやくわいりがく 社會理學【名】〔哲〕『英 Social logic』しやくわいそんりつろん(社會存立論)に同じ。
しやくわいりんり 社會倫理【名】〔哲〕『英 Social ethic』個人と社會との間、又は社會相互の間における倫理關係。(個人倫理に對して)
しやくわいりんりがく 社會倫理學【名】〔哲〕倫理學の一部門。社會倫理を究明するもの。
しやくわいりよく 社會力【名】〔哲〕『英 Social force』社會的聯合中にはたらく一種の力。その實質につきては、學者中種種の說あり、或者は社會の原動力の義として、慾望を指し、或者は社會中に發生し、個人に對して、强制力を有する力の義として、法又は社會意志をその一に數へ、或者は社會化の力をも含めるものと解釋す。
しやくわう 砂鑛【名】さくわう(砂鑛)に同じ。
じやくわうじ 石王寺【名】〔鑛〕丹波國石王寺山より產する、色黑くして、白狀・銀紋等ある石。硯などに造る。
じやくわうじすずり 石王寺硯【名】石王寺にて造れる硯。前條參照。
しやくわん 舍館【名】宿舍。旅館。
しやくわん 左官【名】さくわん(左官)の訛。
じやくわん 蛇管【名】㊀ほおすに同じ。㊁『獨 Schlangenrohr』螺線狀に蟠曲せる形の、蛇に似たるよりいふ』液體を蒸餾する時に、煮沸釜より噴出する蒸氣を通じて冷却・凝集せしむる裝置の管。相當に長さを要すれども、場處を塞がぬために、螺線狀に蟠曲せしめて造る。
しやくゐ 爵位【名】爵と位と。くらゐ。
しやくゐ 借位【名】㊀高貴の人に謁見し、又は外國の使臣などに應接するために、無位の者に、一時假に位階を借すこと。㊁國守が、その管內の神社に、假に授けたる位。後に更めて、勅許を受くべきものなり。
しやくゐきよく 爵位局【名】宮內省にありし一局。局長・主事・屬の職員ありて、爵位及び華族に關する事務を管理せし所。明治二十一年華族局を改稱せしものにて、同四十一年爵位寮と改稱せらる。
しやくゐのかみ 爵位頭【名】爵位寮の長官。寮務を監督せしもの。
しやくゐれう 爵位寮【名】宮內省にありし一局。頭(かみ)・主事の職員ありて、爵位・華族及び有位者に關する事務を掌りし所。明治四十一年爵位局を改稱せしものにて、同四十三年廢止し、宗秩(そうちつ)寮を設く。
しやくゑん 釋圓【名】〔人〕えいさう(榮朝)を見よ。
しやくをう 釋雄【名】〔人〕『せそう(世雄)を見よ』しやかむに(釋迦牟尼)の尊稱。
しやけ 鮭【名】〔動〕さけ(鮭)の訛。〔東京の語〕
しやけ 社家【名】かんぬし。神職。社司。しやか(社家)參照。
しやけ 捨家【名】家を捨てて佛門に入ること。僧侶となること。出家。しやしん(捨身)參照。
じやけ 邪氣【名】もののけ(物化)に同じ。源氏「例の御じやけの、久しく起らせたまはざりつるを」
しやけい 舍兄【名】實の兄。しやきやう。家兄。(舍弟に對して)盛衰記「舍兄鎌倉賴朝、深く此の旨を存ず」
しやけい 寫景【名】風景を描寫すること。
しやけい 斜景【名】たうけい(倒景)に同じ。
しやけい 斜傾【名】けいしや(傾斜)に同じ。
しやけい 斜徑【名】斜なる小路。
しやけい 斜頸【名】〔醫〕生來、頸の一方に傾けること。
しやげい 射藝【名】弓を射る術。射術。天神記「日本の射藝さぞ有るらんと見物す」
じやけい 邪計【名】わるだくみ。惡策。姦謀。
じやけい 邪徑【名】よこみち。こみち。
じやけう 邪教【名】正道に合はざる宗教。
しやげき 射擊【名】〔兵〕火砲及び小銃の發射。その目的方法等に由りて、教練射擊・戰鬪射擊、間接射擊・直接射擊・一齊射擊・各個射擊等に分つ。
しやげきばん 射擊板【名】〔兵〕攻城又は守城の射擊に使用するために調製せる地圖。
しやげきへう 射擊表【名】〔兵〕しやへう(射表)に同じ。
しやげざい 瀉下劑【名】〔醫〕單に便通を促すのみならず、その排泄物を液狀に變じて下痢せしむる下劑。(緩下劑・峻下劑等に對して)
しやけしん 社家神【名】次條の略。
しやけしんだう 社家神道【名】げぐうしんだう(外宮神道)に同じ。
しやげつ 沙月【名】さげつ(沙月)に同じ。
しやげつ 斜月【名】㊀將に沒せんとして、斜に照らす月。㊁名香の一。質は伽羅、香は立田の趣あり。「結芙)の略。
じやけつ 蛇結【名】〔植〕じやけついばら(蛇
じやけつ (英 Jacket)【名】じやけっとの訛。
じやけついばら 蛇結茨・雲實【名】〔植〕『莖の狀、蛇のからみたるが如くなるよりいふ』豆(まめ)科に屬する有毒なる落葉灌木。山野に自生す。高さ約一丈に達し、葉は多數の小葉より成る二回羽狀複葉。莖にも葉にも刺あり。初夏黃色の不整齊花開き、實は莢果をなす。かはらふぢ。うんじつ。さるかけいばら。さるとりいばら。じやけつ。こばんのき。
じやけっと (英 Jacket)【名】洋服の上衣の、僅かに腰に達する程の短きもの。じやけつ。
しやけつはふ 瀉血法【名】〔醫〕『獨 Blutentziehung』一種の消炎法として、血液を瀉出せしむること。水蛭(ひる)又は吸瓢(すひふくべ)を用ひて行ふものは、その局部的にして、最も簡單なるもの、また鍼にて刺して行ふもの等あり。
しやけぶぎやう 社家奉行【名】室町幕府の職制の一。神社に關する一切のことを掌

りしもの。じしやぶぎやう(寺社奉行)參照。
しやけん 謝遣【名】ことわりて去らしむること。
しやけん 奢儉【名】奢侈と儉約と。
じやけん 邪險・邪慳【名】むごく人を扱ふこと。殘忍。無慈悲。
じやけん 邪見【名】㊀〔佛〕五見の一。自己の迷見を正しとして、正法(シヤウ)を誹謗し、善惡・因果の理法の嚴存するをも顧みずして、意に介せぬこと。盛衰記「さしもの邪見を改めて、菩提心を發し」釋迦如來誕生會「後生を知らぬ邪見の家」㊁じやけん(邪險)に同じ。太平記「申すも餘り邪見に無レ情候へ共」
邪見の網【句】〔佛〕邪見の參差交絡して、人心を妨ぐるを網に譬へていふ語。
邪見の角(ツノ)【句】〔佛〕邪見のかとだつを、角に譬へていふ語。
邪見の幢(ハタホコ)【句】〔佛〕邪人の邪見を標榜するを、幢に譬へていふ語。
邪見の刃(ヤイバ)【句】〔佛〕邪見の鋭く烈しきを、刃に譬へていふ語。井筒業平河內通「無慘の切先邪見の刃」
邪見の山【句】〔佛〕邪見の高きを、山に譬へていふ語。
有無の邪見【句】〔佛〕來世を有と見るも無と見るも、共に正しからぬ見解なること。「むごき心。
じやけんしん 邪見心【名】邪見なる心。
じやけんもの 邪見物【名】邪見なる人。むごき者。
しやこ 車庫【名】電車・汽車・自働車などを入れ置く建物。
しやこ 這箇・者箇【名】〔佛〕『代名詞のしやこ(這箇)を見よ』禪の極致。箇中の消息。[禪宗の語]
しやこ 鷓鴣【名】〔動〕鶉雞(ジユンケイ)類に屬する鳥、支那南方に產す。形、數珠掛鳩(ジユズカケバト)に似て、頭は鷄の如く、腹部に丸く白き紋あり。常に南に飛ぶといふ。

(しやこ)

しやこ 蝦蛄【名】㊀〔動〕甲殼類に屬する軟體動物。長さ三四寸乃至六七寸に達し、形、蝦(エビ)に似て、それよりも扁く、肢の黃色なると尾節の紅色なるとの外は、蒼灰色を呈す。我が國東部の淺海に產し、食用に供す。しやく。しやくくわえび。㊁しやこまげ(蝦蛄髷)の略。
蝦蛄で鯛釣る【句】「蝦(エビ)で鯛釣る」に同じ。[諺語]
しやこ 車渠・硨磲【名】㊀〔動〕しやこがひ(車渠貝)の略。㊁七寶の一。車渠貝の貝殼を磨きて、裝飾用に供するもの。和名「硨磲、俗言謝古」
しやこ 這箇・者箇【代】『支那の俗語。者は此の意、後、這と書くに至れり』この。この者。
じやこ 蛇籠【名】じやかご(蛇籠)に同じ。
じやこ 雜魚【名】ざこ(雜魚)の訛。
しやこう 藉口【名】『「口に藉(シ)く」を見よ』いひわけ。せきこう。口實。
しやこう 射侯【名】的のほし。
しやこう 車工【名】車を製造する職人。車「匠。
しやこう 瀉口【名】〔地〕河口の、沙洲又は島などに圍まれて、瀉を形づくれるもの。盤城國の宇多川における松川浦の類。
しやこう 謝公【名】〔人〕しやれいうん(謝靈運)の敬稱。
謝公の屐(ゲキ)【句】『世說の任誕篇に「謝康樂尋レ山陟レ嶺、必造二幽峻巖障一千重莫レ不二遍歷登躡一常著二木屐一上レ山則去二前齒一下レ山則去二後齒一」とあり』支那晉の謝靈運の、木屐を著けて、登山せし故事。
しやこがひ 車渠貝・硨磲貝【名】〔動〕瓣鰓(ベンサイ)類に屬する軟體動物。我が國にては、小笠原島・琉球・臺灣に產す。殼は長さ三尺餘・幅二尺餘・厚さ六七寸に達し、外面暗褐色、內面は淡黃色を帶び、上下兩殼共に强大なる五條の隆起を有し、殼緣は鋸齒狀をなす。殼は植木鉢又水盤として用ひられ、又、裝飾品の製造に供せらる。あふぎがひ。しやこ。しやこ(車渠)㊁參照。

しやこく 赭黑【名】あかぐろき色。
しやこく 車轂【名】車のこしき。
車轂擊つ【句】『こくげき(轂擊)を見よ』車馬の往來繁き形容にいふ語。
じやこくわ 蛇菰科【名】〔植〕つちとりもちくわ(蛇菰科)に同じ。
じやごけ 蛇苔【名】〔植〕蘚苔(センタイ)類に屬する隱花植物。山野・濕地又は水邊の岩上に自生す。體は扁平不規則の葉狀をなし、長さ二寸半乃至五寸・幅一分乃至六分ほどにて、表面に蛇鱗狀の模樣あり。雌器と雄器とは、異株に生ず。
しやこさいたう 鷓鴣菜湯【名】昔、小供の蟲くだしに用ひし藥。「同じ。
じやこすぎ【名】〔植〕やまごばう(山牛蒡)に
しやこたん 積丹【名】〔地〕後志國十七郡の一。小樽支廳の管轄。
しやこたんさん 積丹山【名】〔地〕後志國積丹半島にある山。積丹・美國(ビクニ)の兩郡に跨り、高さ四千餘尺。積丹川の水源なり。
しやこたんだけ 積丹嶽【名】〔地〕前條に同じ。「同じ。
しやこたんだけ 積丹竹【名】〔植〕次條に
しやこたんちく 積丹竹【名】〔植〕しやこはんちく(鷓鴣斑竹)に同じ。
しやこたんはんたう 積丹半島【名】〔地〕後志國美國(ビクニ)・古宇・岩內・積丹四郡の日本海に突出してなれる半島。その最北端を積丹岬となす。「を見よ。
しやこたんみさき 積丹岬【名】〔地〕前條
じやこつ 蛇骨【名】㊀蛇の骨。㊁〔鑛〕『色白くして、蛇の骨に似たるよりいふ』菲華・沸石類などのごとき鑛物。
じやこね 雜魚寢【名】ざこね(雜魚寢)を云ふ。[甲斐國の方言]
しやこはい 車渠盃・硨磲盃【名】硨磲にて造りし盃。國性爺後日合戰「玉盃・銀盃・硨磲盃なんども用ふべき所、見苦しき土の盃」
しやこばん 鷓鴣斑【名】名香の一。木質伽羅に近く、香少なく、且つ苦く輕し。
しやこはんちく 鷓鴣斑竹【名】〔植〕ねまがり竹の變種。北海道に自生す。稈の高さ一丈餘に達し、[illegible]を竄れる部分は紫黑色の雲紋あり。烟管・筆管・杖などに造る。しやこたんちく。瑇瑁竹。
しやこまげ 鷓鴣髷・蝦蛄髷【名】女の髮の結ひ方の一。しやこに似たるもの。しやこ。おしやこ。

(しやこまげ)

しやざ 謝座【名】古、朝廷にて賜宴の時、群臣の座を立ちて、謝禮を申しし儀式。公事根源「その後、謝座の儀ありて、階をのぼりて、堂上の腰かけに著く」
しやざ 且座【名】茶道の七事の一。客三人・頭・半頭の五人を定とし、おのおの花・炭・香・濃茶・薄茶の五役を分擔するもの。
しやさい 車載【名】車につむこと。
車載斗量【句】車に積み、斗にて量るほど數量の多きこと。
しやさい 社祭【名】社卽ち土の神を祭ること。春・秋二回に行ふを例とし、その日を社日といふ。しやじつ(社日)參照。
しやさい 社債【名】〔法〕『英 Debenture』公債の一。株式會社又は株式合資會社が商法の規定に從ひて、公募したる負擔に對し、發行する有價證券の示す債務。
しやざい 謝罪【名】罪を謝すること。あやまること。わび。
しやざい 赦罪【名】罪をゆるすこと。
しやざい 瀉劑【名】くだしぐすり。下劑。
じやさい 麝臍【名】麝香鹿の臍(ヘソ)より採れる香。麝香のほぞ。「る證券。
しやさいけん 社債券【名】社債を表示す
しやさいけんしや 社債權者【名】〔法〕社債上の債權を有する者。
しやさいげんぼ 社債原簿【名】株式會社又は株式合資會社に備へ置くべき、社債の原簿。株式における株主原簿に相當するものにて、社債の金額・總額・利率・償還方法・償還期限・債券の番號・發行の年月日・社債權者の氏名・住所などを記入す。
しやざいし 謝罪使【名】一國を代表して、他國に罪を謝するために派遣せらるる使。
しやさいしやうきやくしきんじゆんびき

ん 社債償却資金準備金【名】〔商〕社債の償却資金に充つるため、每決算期に利益金の一部を控除して設くる準備金。社債償却積立金。
しやさいしやうきやくつみたてきん 社債償却積立金【名】〔商〕前條に同じ。
しやさう 紗窓・紗窻【名】紗を張りたる窓。太平記「紗窓に鬢を閉ぢて」
しやさう 社倉【名】ぎさう(義倉)に同じ。
しやざう 寫象【名】〔哲〕しやしやう(寫象)に同じ。
しやさうくわ 莎草科【名】〔植〕ささうくわ(莎草科)に同じ。
しやさつ 射殺【名】射て殺すこと。
しやさふ 斜插【名】㊀ななめにさすこと。㊁〔文〕漢文にて、文の一段落中に、文意を補ひ、精彩を加へんがために插入する一節。
しやさん 社參【名】神社に參詣すること。讚岐大夫口囊傳「加茂の明神へ社參致せしに」
しやさん 柘蠶【名】〔動〕柘葉をもつて飼育する三眠蠶。繭は黃色にして、紡錘狀をなす。支那四川省地方にて多く飼育す。
しやざん 赭山【名】草木のなき山。はげやま。
しやざん 射山【名】『藐姑射山(ハコヤ)の略』上皇又は法皇の異稱。東鑑「射山事尤可レ奉レ重」
しやし 遮止【名】㊀さへぎり止むること。㊁〔佛〕えんま(閻魔)の漢譯。「ること。
しやし 舍飼【名】禽獸を建物內に飼育す
しやし 斜視【名】㊀ながしめに視ること。よこめ。邪視。㊁やぶにらみ(邪視)に同じ。
しやし 社祠【名】やしろ。ほこら。
しやし 社司【名】㊀かんぬし。神官。神職。新古今「社司ども、貴船(キフネ)に參りて」㊁府社・縣社又は鄉社の社掌の上に立つ判任官待遇の神職。明治の初、祠官と稱したり。
しやし 砂嘴【名】〔地〕さし(砂嘴)に同じ。
しやし 奢恣・奢肆【名】おごりてほしいままなること。
しやし 奢侈【名】身の程を超えて華美なる生活をなすこと。おごり。贅澤。驕奢。

しやし 捨施【名】ほどこすこと。
しやじ 舍次【名】『左傳の莊公三年の條に「凡師一宿爲レ舍、再宿爲レ信、過レ信爲レ次」とあり』軍隊の宿泊。
しやじ 射字【名】小供の遊戲の一。いろは四十七字を紙に書き、一人をして、その中の字に印(シルシ)を附けさせ、傍にて太鼓を打ち、その數を室を隔てて聞きて、その字の何なるかを知ること。
しやじ 社寺【名】神社と佛寺と。寺社。
しやじ 謝辭【名】㊀謝禮のことば。れい。㊁謝罪のことば。わびごと。
しやじ 寫字【名】文字をかき寫すこと。
じやし 邪視【名】しやし(斜視)に同じ。
じやし 邪思【名】よこしまなる意思。
じやし 邪侈【名】よこしまにして、おごりたかぶること。
じやじ 邪辭【名】よこしまなることば。
しやじいうりん 社寺有林【名】社寺の所有に屬する林。社寺林。「同じ。
しやしう 砂洲【名】〔地〕さしう(砂洲)に
しやじきよく 社寺局【名】內務省に在りし一局。全國の神社・佛寺に關することを掌りし所。明治十三年設置、後に宗教局と改稱し、大正四年文部省に屬したり。
しやじじやうち 社寺上地【名】舊幕時代、社寺の所有せし朱印地・除地等を、明治四年にその境內を除く外、悉く政府に上地せしめられしもの。
しやじじやうちりん 社寺上地林【名】舊幕時代、社寺の領有せし森林を、明治四年政府に上地せしめられしもの。上地林。
しやじじやうちゐたくりん 社寺上地委託林【名】しやじほくわんりん(社寺保管林)に同じ。
しやししやしやうしけん 社司社掌試驗【名】社司・社掌たらんとする者につきて、資格の有無を定むる試驗。これに及第したる者は、社司・社掌に補するを得。
しやしぜい 奢侈稅【名】奢侈品の所有者、又はその消費者に賦課する稅。享樂稅。

しやじせい 寫字生【名】㊀寫字を職とする人。㊁明治二年大學校に置かれ、公文の繕寫、書史の謄錄を掌りし職員。大・中・少の三等ありて、共に判任官たり。
しやじつ 寫實【名】㊀實狀を寫すこと。㊁社會の實狀を文字に寫すこと。
しやじつ 斜日【名】ゆふひ。斜陽。
しやじつ 社日【名】支那にて、立春又は立秋の後の第五の戊の日に、社卽ち土の神を祭ること。春のを春社といひて、五穀の豐熟を祈り、秋のを秋社といひて、報賽のためにす。しやにち。しやさい(社祭)參照。
しやじつげき 寫實劇【名】現代の世相そのままを題材として演ずる劇。
しやじつしゆぎ 寫實主義【名】〔文・美〕『英 Realism』自然を完全なる模範となし、そのありのままを忠實に描寫して、作者の私意を挾まざる主義。(理想主義に對して)
しやじてんそう 社司傳奏【名】昔、社寺の事を朝廷に執奏せし役。
しやしひ 奢侈費【名】㊀奢侈の費用。㊁〔法〕物の改良又は保存のためにあらずして、裝飾などに供する費用。
しやしひん 奢侈品【名】奢侈のために用ふる品。おごりの品。
じやしふ 邪執【名】よこしまなる執念。
しやじふじせき 斜十字石【名】〔鑛〕じふじせき(十字石)に同じ。
しやじほくわんりん 社寺保管林【名】社寺の保管に屬する森林。卽ち社寺の上地したる森林にして、農商務大臣の許可を得、十五箇年を一期として保管するもの。社寺委託林。
しやしん 赦身【名】赦免せられたる身。
しやしん 寫眞【名】㊀肖像畫をゑがくこと。寫生。㊁寫眞器械にて、物の形像を寫し取ること、又その寫し取りたる形像。
寫眞を撮(ト)る【句】寫眞器械にて、物の形像をうつしとる。
しやしん 捨身【名】〔佛〕報恩のために、臂を斷ち、身を燒き、布施のために、肉を割き、身を棄つる等の行。婆羅門敎にて多く行ふ所なれども、佛敎にては、抑りてこれを誡む。しやけ(捨家)參照。謠曲(安達原)「捨身・抖擻の行體は、山伏修行のたよりなり」
しやしん 寫神【名】形態に止まらず、その神髓を寫すこと。傳神の筆。
しやじん 藉甚【名】せきじん(藉甚)を見よ。
しやじん 社人【名】㊀『春渚記聞に「因譜二其詳於社人一」とあり』一村里の人。㊁しやにん(社人)に同じ。
しやじん 舍人【名】㊀『史記の廉頗・藺相如傳に「臣舍人藺相如」とあり』門下。食客。めしつかひ。㊁とねり(舍人)に同じ。
じやしん 邪神【名】禍を與ふる神。まがみ。賀古敎信七墓廻「邪神を祈る小忌衣」
じやしん 邪心【名】よこしまなる心。
じやしん 邪臣【名】よこしまなる臣下。
じやしん 蛇心【名】蛇のごとき陰險なる心。
蛇心・佛口【句】陰險なる心をもちながら、口先のみ親切らしくすること。
じやしん 蛇身【名】蛇のすがた。鐵輪「角は忽ち蛇身となり、鱗を振ひ、炎を降らし」
じやじん 邪人【名】よこしまなる人。
しやしんあえんとつぱん 寫眞亞鉛凸版【名】『英 Photozincography』寫眞版の一。寫眞化學的作用によりて、亞鉛の板面に不溶解耐酸層の畫像を作り、次に硝酸にて腐蝕せしめて製する凸版。原圖の複製に適す。寫眞亞鉛版。亞鉛凸版。
しやしんあえんばん 寫眞亞鉛版【名】前條に同じ。
しやしんあふばん 寫眞凹版【名】『英 Photogravure』寫眞版の一。寫眞及び腐蝕法を應用して製せる銅凹版。寫眞版中最も優美に印刷するを得。「同じ。
しやしんあみばん 寫眞網版【名】次條に
しやしんあみめどうばん 寫眞網目銅版【名】次條に同じ。
しやしんあみめとつぱん 寫眞網目凸版【名】あみめばん(網目版)に同じ。
しやしんあみめばん 寫眞網目版【名】前條に同じ。
しやじんかん 舍人監【名】春宮坊の被

官。正(ジヤウ)・佑(スケ)・令史(サクワン)・史生(シジヤウ)・舍人(トネリ)・使部・直丁(ヂキヤウ)等の職員ありて、東宮の舍人の名帳(ミヤウチヤウ)・禮儀・分番の事を掌りし所。みこのみやのとねりのつかさ。
しやしん-き 寫眞器【名】次條に同じ。
しやしん-きかい 寫眞器械【名】〔理〕寫眞撮影に用ふる器械。その主要部分は暗箱(アンバコ)・焦點硝子(ピントグラス)・レンズ・絞(シボリ)・シャッタア・焦點硝子(ピントグラス)取枠(トリワク)等にして、三脚臺を附するものと、附せざるものとあり。暗箱の前部に取附けたるレンズを通して、後壁に倒映せる畫像を感光板に印せしむるやうに造りたるもの。寫眞器。

(しやしんきかい)

しやしん-きやう 寫眞鏡【名】しやしん(寫眞)㈡に同じ。〔明治の初頃の語〕
しやしん-けっこん 寫眞結婚【名】寫眞の見合(ミアヒ)のみによりて結婚すること。海外の植民地等に在住せる者の、内地より妻を娶るに、多くこの法を用ひたり。
しやしん-げふ 寫眞業【名】寫眞を營業とすること。
しやしん-し 寫眞紙【名】寫眞の燒附に用ふる紙。
しやしん-し 寫眞師【名】寫眞を取る技術者。
しやしん-じゆつ 寫眞術【名】寫眞を取る方法及びその技術。即ち寫眞器械によりて、焦點硝子(ピントグラス)に焦點を結びたる畫像を、化學作用によりて、乾板・濕板又はフヰルム等に感光せしめ、暗室にて現像定著して、原板を作り、紙又はその他の材料に印畫せしむる方法。
しやしん-せきばん 寫眞石版【名】『英 Photolithography』寫眞版の一種。原圖たる寫眞を石版に轉寫し、藥品にて腐蝕せしめて、製版印刷するもの。
しやしんせきばん-じゆつ 寫眞石版術【名】寫眞石版を作る技術。
しやしん-そくりやうじゆつ 寫眞測量術【名】『獨 Photogrammetrie』寫眞器械に經緯儀を裝置し、これによりて撮影したる寫眞によりて、地形圖を描畫する方法。
しやしん-ちよさくけん 寫眞著作權【名】寫眞術による著作物、又は寫眞術によりて適法に複製せる美術上の著作物の著作權。
しやしん-でふ 寫眞帖【名】寫眞を貼り、または插みおく帖。しやしんばさみ。
しやしん-でんき-あふばん 寫眞電氣凹版【名】次條に同じ。
しやしん-でんきはふ 寫眞電氣法【名】製圖學の一科。寫眞及び電氣術を應用して、石版・銅版等に地圖をあらはし、且つ彫刻する方法。
しやしん-どうばん 寫眞銅版【名】寫眞版の中、寫眞網目凸版と寫眞凹版との總稱。
しやしん-ばうゑんきやう 寫眞望遠鏡【名】『英 Photographic telescope』望遠鏡の焦點面に乾板を置き、遠方の物體を撮影するに用ふるもの。
しやしん-ばさみ 寫眞挾【名】しやしんてふ(寫眞帖)に同じ。
しやしん-ばん 寫眞版【名】㈠『英 Photo-mechanical process』有機物と重クロオム酸鹽類との混合物の、日光の作用を受くる時は、水に對する不溶解性に變じ、且つ耐酸性となることを利用して、硝子・銅・亞鉛などの面上に得たる印刷版の總稱。寫眞亞鉛版・寫眞網目版(以上凸版)・寫眞石版・コロタイプ(以上平版)・寫眞凹版・寫眞電氣凹版(以上凹版)等これに屬す。㈡しやしんあみめばん(寫眞網目版)の特稱。
しやしん-はん 寫眞班【名】旅行などする團隊中の、途中・途中にて實狀を寫眞に取ることを掌る組。
しやしん-はんけん 寫眞版權【名】しやしんちよさくけん(寫眞著作權)の舊稱。
しやしん-ぶんくわうき 寫眞分光器【名】『英 spectrograph』分光器に寫眞器を附したるもの、特に恆星のスペクトルを撮影するに用ふる裝置。
しやしん-まきゑ 寫眞蒔繪【名】蒔繪の一種。寫眞を漆器面に現したるもの。漆器面に感光性の液を塗り、寫眞原版と組合はせて日光に曝し、後、金屬粉を抹布し、漆の上塗を施して仕上ぐ。
しやしん-めっき 寫眞鍍金【名】寫眞術にて、種板を感光紙に燒附けたるものを、鹽基性としたる鍍金液に浸して、陰畫を陽畫となすこと。
しやしん-ようし 寫眞用紙【名】寫眞に使用する紙。
じや-じや【貌】水などの流れ出づるさま。
しや-しやう 車匠【名】車を製造する職工。車工。
しや-しやう 斜檣【名】『英 Bowsprit』帆前船の船首の上部に突出せしめ、前檣よりの支索を繋ぐやうにせる材。木造又は鐵製。やりだし。
しや-しやう 社掌【名】神職の階級の一。府社・縣社及び郷社にては、社司の次位に列し、村社にては、第一位に列する判任待遇の者。明治の初には、祠掌と稱せり。
しや-しやう 車掌【名】電車・汽車・乘合馬車・乘合自動車などの中にありて、車中一切の事をつかさどる役。
しや-しやう 寫象【名】〔哲〕㈠くわんねん(觀念)㈢に同じ。㈡へうしやう(表象)㈠に同じ。
しや-じやう 謝狀【名】㈠謝罪の書狀。わびじやう。㈡謝禮の書狀。書狀。
しや-じやう 赦狀【名】㈠罪を赦すことの書面。赦面狀。赦書。赦書狀。㈡大赦又は特赦を命ずる書面。
しや-じやう 車上【名】車の上。
しや-じやう 寫情【名】事情を書きあらはすこと。
しや-じやう 灑淨【名】〔佛〕眞言宗の修法にて、龍・海水を灑(ソソ)ぐと念じ、灑水器の香水を取りて、壇場に灑(ソソ)ぐこと。鑁字(バンジ)の智水を一切衆生の心地に灑ぎ、淨菩提心の種子(シユジ)を生長せしむる意にて行ふ。
じや-しやう 邪正【名】よこしまなると、ただしきと。正邪(セイジヤ)。野守鏡「邪正は法によらず心によるが故に、禪宗も正法なりといへども、誤れる心あるによりて、邪法となれるなるべし」
じやしやう-いちによ 邪正一如【句】〔佛〕「善惡不二(フニ)」に同じ。謠曲、山姥「邪正一如と見る時は、色卽是空そのままに、佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり」
しやしや-うなぎ しやしや鰻【名】〔動〕いかなご(鮊子)に同じ。
じやじや-うま じやじや馬【名】㈠跳ねあばるる馬。釋迦如來誕生會「はね馬、じやじや馬、放れ馬心任せに跳ねまはれ」㈡傍若無人の振舞をなす人。あばれもの。
しやじやしや【名】〔植〕つりがねにんじん(鐘人參)を云ふ。〔越中國の方言〕
しやしや-ぜみ しやしや蟬【名】〔動〕くまぜみ(熊蟬)に同じ。
じやじや-ばる じやじや張る【動四自】傍若無人にふるまふ。おのれ一人の意を通さんと努む。
しやしや-び【名】〔植〕あきぐみ(秋茱萸)に同じ。
しやしや-ぶ【名】〔植〕前條に同じ。
しやしや-らくらく 洒洒落落【貌】『洒落の義』甚だ洒落なるさま。
しやしやり-いづ しやしやり出づ【動下二自】臆面もなく、人人の中へ出づ。のさばりいづ。でしやばる。夫婦畑質「上手なる醫者を呼び、見せらるれば、內儀しやしやり出て、これこの病體は、何と御らうじましたと問ふに」
しや-しゆ 社主【名】その社の持主。
しや-しゆ 射手【名】㈠弓又は銃砲を發射する人。いて。㈡〔天〕じんばきゆう(人馬宮)に同じ。
しや-しゆ 謝酒【名】朝廷にて、群臣に宴を賜ふ時、群臣が謝意を表する拜。
じや-しゆう 邪宗【名】㈠よこしまなる宗教。邪宗門。㈡やそけう(耶蘇教)の異稱。〔江戶時代の語〕
じや-しゆうもん 邪宗門【名】前條に同じ。
しや-しゆつ 射出【名】㈠矢・彈丸等を放つこと。發射。㈡一點より直線狀に迸出すること。
しや-じゆつ 射術【名】矢又は彈丸を發射する術。射法。
しやしゆつ-ずゐ 射出髓【名】〔植〕ずゐせん(髓線)に同じ。

しやしゆつ-みやく 射出脈【名】〔植〕『英 Radiated-veined』並行脈の一種。一點より他方に向ひて、數多の肋脈を直線狀に射出する葉脈。例へば棕櫚の葉の葉脈の類。
しやしゆつみやく-えふ 射出脈葉【名】〔植〕射出脈を有する葉。
しやしゆつ-ゐくわんそく 射出維管束【名】〔植〕維管束の木質部と靱皮部とが、縱に駢列して、互に相交錯し、射出狀をなすもの。
しや-しよ 寫書【名】書籍をうつすこと、又その寫したるもの。
しや-しよ 赦書【名】しやじやう(赦狀)㈠に同じ。
しや-じよう 車乘【名】くるま。車輛。
しや-しよく 赭色【名】あかいろ。赤色。
しや-しよく 社稷【名】㈠土地の神と穀物の神と。㈡國家の尊崇する神靈。「宗廟・社稷の天照太神」㈢『土地と穀物とは國民を養ふ最重要物なるよりいふ。しや(社)㈣及びしよく(稷)參照』くに。國家。朝廷。
しやしよく-の-しん 社稷の臣【句】國家の安危を我が任とする臣。
しや-しよじやう 赦書狀【名】しやじやう(赦狀)㈠に同じ。
しやしよ-しゆ 寫書手【名】昔の圖書寮の屬官。書籍を寫すことを掌りしもの。
しやしよ-しよ 寫書所【名】しやきやうしよ(寫經所)に同じ。
しやじ-りん 社寺林【名】社寺の所有する森林。社寺有林。
しやじゐたく-りん 社寺委託林【名】しやじほくわんりん(社寺保管林)に同じ。
しや-す 謝酒【名】しやしゆ(謝酒)に同じ。
しや-す 舍す【動佐變自】やどる。とまる。
しや-す 謝す【動佐變自】㈠暇乞をなして去る。まかる。㈡しぼみ落つ。落ちる。「花謝して、實むすぶ」
しや-す 謝す【動佐變他】㈠わぶ。あやまる。謝罪す。㈡禮を述ぶ。感謝す。㈢ことわる。謝絕す。「客を謝す」
しや-す 瀉す【動佐變自】㈠そそぐ。瀉下す。㈡腹がくだる。下痢す。

しや-すき 沙漉【名】簀の目を隱さんがために、その上に紗を敷ひて漉きたる紙。紗の經緯を紙面に殘す。
じや-ずし 蛇鮨【名】まつかはずし(松皮鮨)に同じ。
しや-すゐ 灑水・洒水【名】㈠水を灑(ソソ)ぐこと。㈡〔佛〕眞言宗にて、灑淨用に供する香水。しやじやう(灑淨)參照。
しやすゐ-の-いん 灑水の印(イン)【句】〔佛〕眞言宗にて、灑水を操示する印。印を結びて、火を消すこと。謠曲、舞車「僧正見たまひ、灑水の印を結んで、鑁字(バンジ)の明(ミヤウ)を誦せしかば、火焰は消えにけりやな」
じや-すゐ 邪推【名】ひがみて推察すること。又ひがみたる推察。
しやすゐ-き 灑水器【名】灑水㈡を容るる器物。
しやすゐ-ぢやう 灑水杖【名】さんぢやう(散杖)に同じ。
じやすゐ-ぶかし 邪推深し【形一】邪推の念深し。
しや-せい 寫生【名】㈠實物を在りのままに寫し取ること。いきうつし。㈡繪畫・文章などにて、景色・狀態などをあるがままに寫すこと。
しや-せい 射精【名】精液を射出すること。
じや-せい 邪正【名】せいじや(邪正)に同じ。
しやせい-ぐわ 寫生畫【名】寫生したる繪畫。
しやせい-くわん 射精管【名】〔醫〕『羅 Ductus ejaculatorius』精嚢より尿道までの稱。輸精管に續きたるものにて、破裂狀の小孔によりて、尿道に開口す。
しやせい-ご 寫聲語【名】〔語〕ぎせいご(擬聲語)に同じ。
しやせい-ぶん 寫生文【名】『正岡子規等の雜誌「ほととぎす」誌上に唱へ初めたる名稱』事物を、客觀的に、ありのままに微細の點まで寫しいだせる一種の文體。
しやせいよう-かさ 寫生用傘【名】長き接柄(ツギエ)を有する洋傘。傘は外側に白布、內側に綠色の布を張るを普通とし、柄は關柄ありて、何れの方向にも傾け得るやうに造りたり。
しや-せう 斜照【名】ゆふひ(夕日)に同じ。

しや-せう 寫照【名】『照は鏡にて、鏡の照す所の面像を摸做して寫し書く義』肖像を畫くこと。
しや-せき 赭石【名】㈠赤き色の石。㈡あかにいし(丹石)に同じ。
しや-せき 砂石・沙石【名】させき(砂石)に同じ。
しや-せき 砂磧・沙磧【名】させき(砂磧)に同じ。
しやせき-しふ 砂石集・沙石集【名】〔書〕させきしふ(沙石集)に同じ。
しや-せつ 社說【名】新聞・雜誌などに、その社の說として掲ぐる論說。
しや-ぜつ 謝絕【名】いなむこと。ことわり。拒絕。
じや-せつ 邪說【名】よこしまなる說。
しや-せん 射戰【名】弓を射て戰ふこと。
しや-せん 射線【名】發射せる彈丸の進行線。
しや-せん 斜線【名】斜にひきたる直線。
しや-せん 社船【名】我が國の船舶中、政府の命令航路に從業せる會社、卽ち日本郵船會社・大阪商船會社等の所有に屬して、その航路に就航せるもの。その以外の船舶を社外船といふ。
しや-ぜん 車前【名】㈠車の前。㈡〔植〕おほばこ(車前)に同じ。
しや-ぜん 洒然【貌】あかぬけたる狀。さつぱりしたる狀。
しやぜん-くわ 車前科【名】〔植〕おほばこくわ(車前科)に同じ。
しやせん-しふゐ 謝選拾遺【名】〔書〕『文章軌範は謝枋得の選輯に係るより、その遺漏を拾ひ補ふ意にて名づけたるもの』賴山陽が、續文章軌範の採擇蕪雜なるを病へて選べる文集。韓退之・柳宗元・歐陽修及び三蘇の六家より選べり。七卷。
しやせん-とうし 斜線透視【名】〔美〕せいかくとうし(成角透視)に同じ。
しやせん-はいけい 斜線配景【名】〔美〕せいかくとうし(成角透視)に同じ。
しや-そ 社鼠【名】「城狐・社鼠」を見よ。
しや-そう 社僧【名】昔、神社に奉仕せし僧。神宮寺に在りて、神祇のために佛事を修せし僧。宮僧(グウソウ)。神僧。

しや-そく 社則【名】會社の規則。
じや-そく 蛇足【名】だそく(蛇足)に同じ。
しや-だ 射垜【名】あづち(垜)に同じ。
しや-たい 借貸【名】罪をゆるすこと。假借。
しや-たい 車體【名】汽車・電車などの、一車として組上りたるもの。
しや-だい 車臺【名】㈠汽車などの車體を支へ、車輪に連結する鐵製の枠(ワク)。㈡汽車・電車その他の車の、旅客又は荷物を載する部分。
じや-たい 蛇體【名】蛇のすがた。蛇の形。
しや-たう 蔗糖【名】かんしやたう(甘蔗糖)に同じ。
しや-だう 車道【名】㈠車の通行する道。㈡道路の中にて、特に車の通行に充つるために設けたる道。(人道に對して)
じや-だう 邪道【名】よこしまなる道。邪教。宇治拾遺「今は、邪道に墮ちなんずる、うきことなりといふ」
しや-たつ 車立【名】和船にて、檣を立て、また帆を上下する等に用ふる綱を卷附くる杙(クヒ)。その存在の場所によりて、艫車立(トモクルマタテ)・舳車立(ヘクルマタテ)・筒挾車立(ツツハサミクルマタテ)・淦間車立(アカマクルマタテ)等の名稱あり。
しや-だつ 洒脫【名】俗氣を脫して、さつぱりとしてあること。
しや-たふ 社塔【名】神社と寺塔と。一代男「世之介は、思に限りありとて、金銀洛中に蒔散し、社塔の建立、常燈をとぼし」
じや-だま 蛇卵【名】水銀と硫黃との化合物にして、火を點ずれば、蛇の如くうねりて、甚しく長く伸ぶるもの。
しや-だん 社段【名】神社の階段。
しや-だん 遮斷【名】遮りとどむること。
しや-だん 社團【名】〔法〕『英 Association』㈠共通なる一定の目的のために結合せる人の團體。何何學會、何何慈善協會等の類。(財團に對して)㈡しやだんはふじん(社團法人)の略。

しや‐だん 社壇【名】㊀『唐書の禮樂志に「郊社令、立二諸於社壇四隅一」とあり』支那にて、社即ち土の神を祭る壇場として、土を盛りて、上を平かにせる處。しやしよく(社稷)參照。㊁神を祀りたる處。やしろ。社殿。太平記「自餘の社壇には車替って」

しやだん‐き 遮斷器【名】『英 Circuit breaker 又は Cutout』開閉器の一。電流の通ぜる回路を切開くためのもの。多くは自働的なるが故に、單に遮斷器といへば、通常は自働遮斷器を意味す。

しやだん‐はふじん 社團法人【名】〔法〕『英 Corporation』私法人の一。法律上人格を有する社團。その目的によりて、公益法人と營利法人との別あり。(財團法人に對して)

しやち 鯱【名】㊀しやちほこ(鯱鉾)㊀の略。㊁〔動〕さかまた(逆叉)に同じ。

しや‐ち 社地【名】神社の地域。神領。神域。

しや‐ち 砂地・沙地【名】さち(砂地)に同じ。

しや‐ち 車知・車地【名】㊀重量ある物を動かすに用ふる器械。中央に堅固なる軸柱を備へ、その上端に四箇の腕木を有するもの。地上に固著せしめ、軸の腕木を押せば、中央の軸回轉して、次第に繩の一端軸部に卷附くを以て、繩の他端を以て縛せる移動せしむべき目的物は、漸次に曳寄せらるるに至る。絞車。神樂棧。㊁船具の一。綱を卷上ぐるためのもの。軸と轆との車立(シヤタツ)と筒換(サツパ)とにて用ふ。

しや‐ぢ 遮持【名】〔佛〕だらに(陀羅尼)の漢譯。

じや‐ち 邪智【名】わるがしこき才智。わるぢゑ。奸智。

しやち‐がはら 鯱瓦【名】鬼瓦と同樣に屋根の端に附くる瓦の、鯱の形に造れるもの。鯱鉾(シヤチホコ)と同じく、火災を防がんとの迷信に依るといふ。しやちほこがはら。しやちほこ。

しや‐ぢく 車軸【名】しやぢゆく(車軸)に同じ。

しやぢく‐さう 車軸草【名】〔植〕しやぢゆくさう(車軸草)に同じ。

しやぢく‐も 車軸藻【名】〔植〕しやぢゆくも(車軸藻)に同じ。

しやちこ‐ばる 鯱張る【動四自】しやちほこばる(鯱鉾張る)に同じ。

しやち‐しよくぶつ 砂地植物【名】さちしよくぶつ(砂地植物)に同じ。

しやち‐ばる 鯱張る【動四自】しやちほこばる(鯱鉾張る)の略。今國姓爺「血まみれの劍提げ、しやち張りかへって歸りけり」

しやち‐ほこ 鯱鉾・鯱【名】㊀想像上の海獸。全身黑く、ほぼ魚形にして、頭、虎の如く、背には刺ありといひ、海中の產なるため、火を防ぐ効ありとて、その形を金屬に鑄造しなどし、宮殿・樓門などの棟の兩端に附けて、裝飾の用をも兼ねしむること多し。もと支那の蚩吻(シフン)の變形なるべし。さちほこ。國姓爺「鯱鉾天に鰭振って、石疊高く築上げたり」㊁〔動〕さかまた(逆叉)に同じ。㊂次條の略。

しやちほこ‐がはら 鯱鉾瓦・鯱瓦【名】しやちがはら(鯱瓦)に同じ。

しやちほこ‐だち 鯱鉾立・鯱立【名】頭を下にし、兩手をつきて、足を上方に直立せしめて立つこと。さかだち。しやっちよこだち。さっちよこだち。

しやちほこ‐ばる 鯱鉾張る【動四自】㊀鯱の如くいかめしく構ふ。しやちばる。しやっちこばる。しやっちきばる。㊁自由に屈曲し得ぬやうに、固くなる。圓滑ならず。しやっちよこばる。しやっこばる。しやっちきばる。

しや‐ちん 砂塵・沙塵【名】さちん(砂塵)に同じ。

しや‐ぢん 車塵【名】車の通過せし後に起つ塵(ケ)。

しや‐ちやう 社長【名】㊀古、支那にて、一村里の長たる者。㊁臺灣の行政區劃の一たりし社の長。明治四十二年に區長と改稱せり。㊂社團などの代表者。會社の長。

しや‐ちやう 赦帳【名】江戶時代に寛永寺又は增上寺にて、幕府のために法事を行ふ際、刑に處せられたる者の親族より、この兩寺に對して赦免を請ふ時、兩寺にて、その名を記して、幕府に差出しし帳簿。幕府にては、檢閲の上、赦すべき者に對しては、法事の場に召して、直ちに放免せり。

しや‐ちやう 舍長【名】㊀『史記の扁鵲傳に「爲二人舍長一」とありて、註に「守二客館一之帥、故號云二舍長一也」とあり』舍の長。宿舍のかしら。㊁明治初年の大學の職員の一。同三年もとの寮長を改稱せしもの。同四年廢せられたり。

しや‐ぢやう 射場【名】弓などを射る場所。いば。

しや‐ぢやう 寫場【名】寫眞を撮影するために設けたる場所。寫眞のうつしば。

しや‐ぢやう 砂場・沙場【名】さぢやう(砂場)に同じ。

じやぢやう‐じゆ 邪定聚【名】〔佛〕三定聚の一。つひに證悟することなくして、必ず地獄に入るべき人の位。(正定聚・不定聚に對して)

しやちやう‐せき 斜長石【名】〔鑛〕『英 Plagioclase』石灰と曹達とを含める長石。火成岩中に普通に存在し、三斜晶形に結晶し、往往聚片雙晶をなす。石灰と曹達との割合によりて、曹長石・曹灰長石・灰曹長石・灰長石等に分つ。

しや‐ぢゆう 砂中・沙中【名】さちゆう(砂中)に同じ。

しや‐ぢゆう 車中【名】車の中。車內。

しや‐ぢゆう 社中【名】社の仲間。組合のうち。なかまのうち。

しやぢゆう‐たい 斜柱體【名】〔數〕『英 Oblique prism』角壔(カクタウ)の側面が端面に直交せざるもの。

しや‐ぢゆく 車軸【名】㊀車の心棒。しやぢく。㊁〔植〕しやぢゆくさう(車軸草)の略。

車軸の雨【句】『次條を見よ』大雨の形容。

車軸の如し【句】『「雨、車軸の如し」を見よ』大雨の譬。宇治「車軸のごとくなる雨降りて、天下忽ちにうるほひ」

車軸を下(クダ)す【句】前條に同じ。盛衰記「降る雨車軸を下して、鈴鹿(スズ)川に洪水張りありて」

車軸を流す【句】前條に同じ。大原問答「車軸を流す雨」

車軸を降らす【句】前條に同じ。太平記「大雨、車軸を降らす」

しやぢゆく‐くわんせつ 車軸關節【名】〔醫〕『羅 Trochoides』可動關節の一種。關節面は骨の縱軸と一致し、一方の骨が他の骨を中軸として、その周圍を廻轉するもの。例へば、第一頸椎が第二頸椎の齒狀突起の周圍を回轉する類。

しやぢゆく‐さう 車軸草【名】〔植〕荳(マメ)科に屬する多年生の草。北地又は高山に自生す。高さ約一尺に達し、葉は四乃至七箇の披針形なる小葉より成る掌狀複葉。秋季、葉腋の花軸上に、淡紅色又は白色の蝶形花數箇を著け、長楕圓形の莢を結ぶ。あみだがさ。しやぢゆく。

しやぢゆく‐も 車軸藻【名】〔植〕輪藻類に屬する隱花植物。淡水、殊に清澄なる流水に生じ、形やや杉菜に類し、綠色にして細く、長さ尺餘に達することあり。夏盛んに生じ、冬に至れば枯死す。

しやぢゆくも‐しよくぶつ 車軸藻植物【名】〔植〕りんさうしよくぶつ(輪藻植物)に同じ。

しやぢゆくも‐るゐ 車軸藻類【名】〔植〕りんさうるゐ(輪藻類)に同じ。

しやちら‐こはし しやちら強し【形】硬くこはし。日本武尊吾妻鑑「さぞ眞黑なしやちごはい肌へ、おおむくつけや、うるさや」

しやちら‐さんばう しやちら三寶【副】手あたり次第に。心中刃は氷の朔日「且那のかけも何もかもしやちらさんばう、近附中に、痛手を負はせ、動かれぬ身になりし故」

しやつ 襯衣(英 Shirt)【名】西洋風の襦袢。しやっつ。

しやつ【代】罵りていふ第三人稱の奴(ヤツ)。きやつ。平家「しやつここへ引寄せよとて」

しやづ‐き 寫圖器【名】しゆくづき(縮圖器)に同じ。

じやっ‐き【名】きりんに同じ。

しやっ‐きやく【名】突張り又はしやちほこばること。〔室町時代の方言〕

しやっ‐きり【貌】屹として突張るさま。しかと直立して動かぬさま。

じやっく(英 Jack)【名】トランプの牌(ハイ)の一、僕又は兵士の姿を畫けるもの。

しやっくり 噦【名】さくり(噦)の訛。李寄鑑「姫が閨へ忍んで、ぬっくりやらしやっくりやら、疑しくば月を明けうか」

しやっくる‐がいし シヤクル碍子(英 Shackle-insulator)【名】しやくるがいし(シヤクル碍子)に同じ。

しやったあ(英 Shutter)【名】寫眞術にて速寫を行ふ場合に、自動的にレンズの蓋(フタ)を迅速に開閉し得るやうに仕掛けたるもの。レンズの前面に插込むもの、レンズに取附けたるもの、又ピントグラスの前に裝置するもの等あり。構造は、これに附屬せるゴム球、又は紐の一端を押せば、直ちに開閉作用をなす。

(しやったあ)

しやっち【副】しひて(强ひて)を云ふ。〔豐後國の方言〕

しやっちき‐ばる 鯱鉾張る【動四自】しやちほこばる(鯱鉾張る)の訛。

しやっちこ‐ばる 鯱鉾張る【動四自】しやちほこばる(鯱鉾張る)の訛。

しやっちよこ‐だち 鯱鉾立【名】しやちほこだち(鯱鉾立)の訛。

しやっちよこ‐ばる 鯱鉾張る【動四自】しやちほこばる(鯱鉾張る)の訛。

しやっ‐つ【名】しやつの訛。

しやっ‐つら しやっ面【名】しやつら(しや面)の訛。本朝三國誌「ええ憎い奴め、誰れかある、それしやっつらはれ」

じやぱん(英 Japan)【名】〔地〕『伊太利人マルコポオロ(Marco Polo)の紀行文中に Zipangu(「日本」の支那音の訛)と記して、初めて我が國を歐洲に紹介せしものの、更に轉訛したるもの』英國人によりて稱せらるる我が國の稱呼。じやぱん。

しやつ‐ぱら しやつ原【代】きやつばら(彼奴原)に同じ。文武五人男「何條しやっぱら來れよかし、搦め捕って、汝等に某が力の程を見せんずもの」

しやっぷ【名】しやっぽの轉。〔俚語〕

しやっぷり【貌】さぶりに同じ。曾我會稽山「ゆんでに廻はってしやっぷり、めてへ廻はってしやっぷり」

しやっぽ(佛 Chapeau)【名】ばうし(帽子)に同じ。

しやつ‐め しやつ奴【代】きやつめ(彼奴)に同じ。國姓爺合戰「しやつめ共に逃がすな」

しや‐つら しや面【名】顔を罵りていふ語。しやっつら。平治「やれおのれは義平が首討つ程の者か、…惡しく斬るならば、しやつらに喰ひつかんずるぞ」

しや‐てい 舍弟【名】實の弟。おとうと。家弟。(舍兄に對して)

しや‐てい 沙底【名】さてい(沙底)に同じ。

しや‐てい 沙汀【名】さてい(沙汀)に同じ。

しや‐てい 射程【名】〔兵〕彈丸を發射したる時、その發射點と落點との直距離、又は落下して十分の効力を發揮し得る地點までの距離。後者を有効射程といひ、前者の到達し得る限度を、最大射程と稱す。

しや‐てい 這底【名】しやり(這裏)に同じ。

しや‐てい 斜堤【名】〔兵〕壕前の死角を消滅し、內岸壁を掩護するために、外岸上に接して設くる積土。

しや‐てき 射的【名】的に向ひて小銃を發射すること。

しやてき‐じゆう 射的銃【名】射的に用ふる、小形にして輕便に作りたる鐵砲。

しやてき‐ぢやう 射的場【名】次條に同じ。

しやてき‐ば 射的場【名】射的を行ふところ。しやぢやう。しやてきぢやう。

しや‐てつ 車轍【名】車の走りすぎたるあと。わだち。

しや‐てつ 砂鐵【名】〔鑛〕さてつ(砂鐵)に同じ。

しやでも‐むでも 遮でも無でも【副】いやでもおうでも。しやっちむっち。しやにむに。

しや‐でん 射田【名】しやきでん(射騎田)に同じ。

しや‐でん 社殿【名】神社の神體を安置する殿堂。やしろ。

しや‐でん 社田【名】神社に附屬せる田地。神田。

しや‐ど 赭土【名】色の赤き土。主として、赤色酸化鐵を含む。あかつち。

しや‐ど 砂土【名】さど(砂土)に同じ。

しや‐とう 沙頭【名】さとう(沙頭)に同じ。

しや‐とう 社頭【名】神社のほとり。神前。

しや‐とく 謝德【名】德を謝すること。曾我五人兄弟「赦恩・赦德のためなれば」

しや‐とく 舍匿【名】かくまふこと。

じや‐どく 邪毒【名】邪氣ある毒。太平記「惡念を發して、遂に三七日が中に、墳上にして死にける、その怨靈果して邪毒をなしければ」

じや‐どく 蛇毒【名】だどく(蛇毒)に同じ。

しや‐とる しや取る【動四他】とる(取る)を强めていふ語。

しやな 遮那・沙那・舍那【名】〔佛〕㊀『びるしやな(毘盧遮那)の略』だいにちによらい(大日如來)に同じ。謠曲(兼平)「峯には、遮那の梢を並べ、麓に止觀の海をたたへ」㊁〔書〕しやなきやう(遮那經)の略。

遮那・止觀(シクワン)【句】㊀〔書〕遮那經と摩訶止觀と。㊁〔佛〕『遮那經は眞言宗の、摩訶止觀は天台宗の敎義の由る所なるよりいふ』眞言宗と天台宗と。太平記「遮那止觀の兩宗を置かる」

遮那の果德【句】〔佛〕大日如來の具へたる佛德。野守鏡「大日如來不可德の因果を攝して、遮那の果德あらはし」

遮那の果滿【名】〔佛〕大日如來の佛果の衆德圓滿なること。盛衰記「誠にこれ四隅・四行の薩埵、因緣合成(ガウジヤウ)して、中央・中臺の遮那の果滿現じたまふ」

遮那の大戒【名】〔佛〕ぼんまうかい(梵網戒)に同じ。平家「傳教大師、入唐・歸朝の後、圓頓の教法を此所に弘め、舍那の大戒をその中に傳へてより以來」

しやな 紗那【名】〔地〕千島國九郡の一。擇捉(エトロフ)島の中部。根室支廳の管轄。

しや‐ない 車內【名】車のうち。車中。(車外に對して)

しや‐ない 社內【名】㊀社殿の內。社の境內。生玉心中「今日は天滿の社內の茶屋で」㊁一會社の內。

しやないど‐はふ シヤナイド法(英 Cyanide process)【名】〔化〕せいくわはふ(青化法)に同じ。

しやな‐きやう 遮那經【名】〔書〕だいにちきやう(大日經)の異稱。

しやな‐ぐる【動四他】かなぐるに同じ。千兩幟「弱みをつけこむ厄病のかみ(神・髮)もかしらも、ひきしやなぐり」

しやな‐けうしゆ 遮那教主【名】〔佛〕しやな(遮那)㊀の敬稱。謠曲(大會)「遮那教主の祕法を受け」

しやな‐ごふ 遮那業【名】〔佛〕毎日、遮那經・孔雀王經・不空羂索(ケンジヤク)經・佛頂經等の護國の眞言を長念すること。大戒を受けたる者に課す。

しやな‐しやな【貌】『じよなめくを見よ』しやならしやなら。すなすな。すならすなら。猿獸加留多「しやなしやな振りてぞ歸りける」

しやな‐ぶつ 遮那佛【名】〔佛〕しやな(遮那)の敬稱。

しやなら‐しやなら【貌】しなやかに身をこなすさま。日本武尊吾妻鑑「心に染まぬ歩みぶり、しやならしやならと蹴つまづく」

しや‐に 沙尼【名】〔佛〕しやみに(沙彌尼)の略。

しやに‐かまふ 斜に構ふ【句】しや(斜)の條下を見よ。

しや‐にち 社日【名】しやじつ(社日)に同じ。

しや‐にふきん 社入金【名】神社の收入金。卽ち國庫供進金・賽錢(サイセン)・守札料・祈禱料・神樂料・境內外收得金など、神社に納入する一切の金額。

しや‐にん 社人【名】神社に仕ふる人。かんぬし。吉野都女楠「社人の烏帽子・淨衣を著せ」

しやに‐むに 遮二無二【副】めちやに。むやみに。むりに。しやでもむでも。

じや‐ねい 邪佞【名】よこしまにして人にへつらふこと。

じや‐ねん 邪念【名】よこしまなる考。純粹ならぬ念慮。

しやのく 車匿【名】〔人〕『梵 Chandaka(闡鐸迦)』『樂欲(ゲウヨク)の義』悉達(シツタ)太子、卽ち釋迦が王宮を脫して、頭陀(ヅダ)となりし時、太子を載するために、犍陟(ケンジヤク)といふ馬を牽出でし馭者。後出家して、比丘(ビク)

となり、惡口の性改まらず、惡口車匿とも惡性車匿ともいはれしが、佛涅槃(ネハン)に臨みて、阿難に命じて、默擯法を以てこれを治せしめ、後に果を證せり。車匿童子。車匿舍人。さのく。㊁馬丁。べったう。

しやのく-どうじ 車匿童子【名】〔人〕前條㊀に同じ。

しやのく-とねり 車匿舍人【名】〔人〕『舍人は馬丁の義』前前條㊀に同じ。平家「昔、悉達太子の檀特山へ入らせたまひし時、舍匿舍人こんでい駒を賜はりて」

じや-の-こ 蛇子【名】〔動〕うみうま(海馬)に同じ。

しやのしやの-ころも 紗紗衣【名】傀儡師(クグツシ)のうたふ、小唄(コウタ)の一なるべしといふ。一説に、しやのしやのはしやなしやなに同じかるべしと。

じや-の-すけ 蛇之助【名】『蛇は物を呑むといふより酒落(シャレ)ていふ』のみすけ(飲助)に同じ。

しやのたいぷ (英 Cyanotype)【名】シャン化物を用ひて得たる寫眞畫。青色を呈し、繪圖面などの複寫に應用す。青寫眞。

じや-の-ひげ 蛇鬚・沿階草【名】〔植〕りゆうのひげ(龍鬚)に同じ。

じや-の-め 蛇目【名】㊀輪の形を、太く畫きたるもの。紋所とす。㊁じやのめがさ(蛇目傘)の略。㊂じやのめまはし(蛇目廻)の略。㊃肘壺の摩擦を減ずるため、その間に插入せる輪。

(じやのめ㊀)

蛇目の傘(カラカサ)【句】じやのめがさ(蛇目傘)に同じ。

じやのめ-がさ 蛇目傘【名】さし傘の紙を黑く又は赤く蛇の目の紋のごとく塗りたるもの。じやのめ。

じやのめ-ぐさ 蛇目草【名】〔植〕㊀褐色藻類中の海藻。形、扁平にして、上部は扇狀に擴張し、下部はやや硬く、細き根狀をなして、他物に附著す。全體褐綠色なれども、海中にありては、美しき碧色の光輝を放つことあり。うみうちは。みみたけ。㊁くじやくさう(孔雀草)㊀に同じ。

じやのめ-さう 蛇目草【名】〔植〕前條に同じ。

じやのめ-まはし 蛇目廻【名】廻舞臺の、中央部は元のままとし、その外部の蛇目形の部分のみを廻轉すること。じやのめ。

しや-ば 車馬【名】㊀車と馬と。㊁車に附けたる馬。

しやば 娑婆・娑婆(梵 Sabhā)【名】〔佛〕㊀『Sabhāは雜會(ザフヱ)の義にて、六趣の衆生の雜處』釋迦一佛の化境(ケキヤウ)たる三千大千世界。娑婆世界。娑界。㊁この世。現世。薩摩歌「娑婆か冥土かいかにもと」㊂牢獄のそと。〔囚人の語〕㊃遊廓のそと。〔遊女の語〕

娑婆以來【句】『隔世の感あるよりいふ』久しく別れて後に逢ひたる時の語。

娑婆が無い【句】出牢の機なし。

娑婆往來八千度【句】〔佛〕『梵網經に出づ』娑婆は釋迦の化境なれば、その出世・降臨せしこと、久遠(クヲン)の過去よりして、幾千度にも及びたること。釋迦如來誕生會「我無量劫の昔より無邊の衆生を度せんがため、娑婆往來八千度」

娑婆示現(ジゲン)觀世音【句】〔佛〕『「念佛往生安心の偈文(ゲモン)」を見よ』觀世音菩薩の、大悲心を起して、娑婆世界に種種に應用して、衆生を救濟したまふこと。謡曲 善光寺「娑婆示現觀世音、三世利益同一體」

娑婆で見た彌三郎【句】知り人を知らぬ人のやうにもてなす語。〔諺語〕一代男「此の世の人とも思はれず、娑婆で見た彌三郎殿の御禮」

娑婆で見た彌次郎【句】前條に同じ。〔諺語〕

娑婆電光の境【句】現世の無常なるを譬へていふ語。津國女夫池「それ娑婆電光の境には恨むべき人もなく」

しやはう-けい 斜方形【名】〔數〕『英 Rhombus』二雙の相對する邊が、それぞれ平行なる四邊形の稱。平行四邊形。(矩形に對して)

しやはう-じふにめんたい 斜方十二面體【名】〔鑛〕『英 Rhombic dodecahedron』等軸晶形の完面體。斜方形の面十二にて閉める晶形。

しやはう-しやう 斜方晶【名】斜方形に結晶すること、又そのもの。

しやはう-しやうけい 斜方晶系【名】〔鑛〕『英 Rhombic system』結晶系の一。對晶面は三角にして、三本の結晶軸に互に直角に交はり、且つ長さを異にするもの。硫黃の結晶のごとき、これに屬す。

しや-ばうとく 謝枋得【名】〔人〕支那宋の忠臣。字は君直、疊山と號す。理宗の時、進士に擧げられ、信州に知たり。宋亡びて後、元に徵されたれども仕へず、至元二十六年、因はれ斷食して死す。文章軌範はその選なり。

しやはう-ふっせき 斜方沸石【名】〔鑛〕『英 Chabasite』沸石類の一種。菱面體に結晶し、劈開を有す。

しやばかった 娑婆揭多【名】〔佛〕ぜんせ(善逝)の梵名。

しやば-かん 車馬監【名】主馬(シュメ)寮の職員。車馬・裝具の管守、馬匹の飼養等に闢する事務を掌る奏任官。

しやば-き 娑婆氣【名】名聞(ミャウモン)・利慾を離れぬ心。俗氣。

しや-ばく 沙漠【名】〔地〕さばく(沙漠)に同じ。

しやば-せかい 娑婆世界【名】〔佛〕しやば(娑婆)に同じ。榮花「この娑婆世界は、苦樂ともなるところとは知らせたまひつらんものを」

しやば-だう 車馬道【名】一條の道路の中、特に車馬のみ通行に宛つる所として區劃したるもの。

しやばっ-き 娑婆氣【名】しやばき(娑婆氣)の音便。

しや-はふ 社法【名】神社の法度。

しや-はふ 射法【名】しやじゆつ(射術)に同じ。

じや-はふ 邪法【名】正道に背ける敎。じやほふ。邪道。

しやば-ふさぎ 娑婆塞【名】次條に同じ。

しやば-ふさげ 娑婆塞【名】徒らに生きのびて居ること。しやばふさぎ。天神記「兄めが常常娑婆塞げとぬかすも道理」

しやばへ【名】東南より吹く風。〔西國の船人の語〕

じや-ばみ 蛇喰【名】㊀山野の一部に、徑二三間ほど圓形に草木の生えざる處。㊁〔動〕うはばみ(蟒蛇)を云ふ。〔出雲國の方言〕

しや-はん 這般【代】この。これらの。

しや-ばん 車盤【名】しやち(車知)㊀に同じ。

じやばん (英 Japan)【名】〔地〕じやっぱんに同じ。

じや-ばら 蛇腹【名】㊀じやばらぶせ(蛇腹伏)の略。㊁蛇腹伏の模樣。㊂次條の略。㊃〔建〕軒又は天井・胴部などにありて、蛇の腹に似たる刳形の連續せる裝飾。㊄暗箱(アンバコ)の側壁を、皮又は布にて造り、一種の襞(ヒダ)を附けて屈伸し得るやうせる部分。㊅提燈(チャウチン)の屈伸する部分。㊆土藏の鉢卷。

じやばら-いと 蛇腹絲【名】普通の絹絲より太く、縒を强くかけ、蛇腹伏に用ふる絲。

じやばら-ぬひ 蛇腹縫【名】次條に同じ。

じやばら-ぶせ 蛇腹伏【名】左縒(ヒダリヨリ)の絲と、右縒の絲とを合はせて、伏縫(フセヌヒ)にしたる縫樣。じやばらぬひ。じやばら。

しや-ひ 奢靡【名】奢りてはでなること。

しや-ひ 社費【名】㊀神社の經費。㊁社團の經費。會社の費用。

じや-ひ 蛇皮【名】蛇の表皮。

じやび-せん 蛇皮線【名】形、三味線に似て、胴を蛇皮にて張りたる清樂用の絃樂器。月琴のと大差なき義甲を用ひて彈く。三味線はこの形を眞似たるものにて、またその名稱も、蛇皮線の轉訛なりといふ。三絃子(サンゲンシ)。

(じやびせん)

しや-びやう 瀉病【名】蠶の軟化病の一。食慾減じ、不活潑となり、軟便より水瀉となり、死後黑褐色に變じて腐る。

しや-びやう 瀉瓶【名】〔佛〕『瓶の水を他の瓶に移し入るるに譬へていふ語』佛法の奧義を師より弟子に傳へて、遺漏なきこと。傳燈。正統記「弘法六人の中に瀉瓶た

り。…然れば、眞言の宗には正統なりといふべきにや」

しや-ふ 車夫【名】人力車を挽く人。くるまひき。くるまや。

しや-ふう 斜風【名】斜に吹きくる風。

じや-ふう 邪風【名】あしき風習。

しや-ふく 車服【名】車と服裝と。

しやふき【名】しはぶき(咳)の訛。〔關東の方言〕

しやふく-もんだふ 車服問答【名】〔書〕車服のことに關し、新井白石の問に答へたるもの。その故實を記し、まま圖解をも示せり。三卷。野宮(ノノミヤ)定基の著。

じや-ぶくろ 蛇袋【名】㊀苧(ヲ)にて作り、管緒(クダヲ)の上に附け、帆をあぐる時、帆綱を擦りて引上ぐるもの。うなぎのかは。ふたの。ほずれ。よだれかけ。㊁指物の名。吹流(フキナガシ)の如くにして、圓筒形なるもの。

じやぶ-じやぶ【貌】水中をかき亂す音。

しや-ふつ 煮沸【名】煮ること。わかすこと。

じやぶん-じやぶん【貌】じやぶじやぶと同樣にしてやや重き音。

じやぶる (英 Shovel)【名】しやべるに同じ。

しやぶる【動四他】『しはぶるの訛』ねぶる。なめまはす。

しや-へい 遮蔽【名】さへぎりおほふこと。妨ぐること。

しやへい-ぢんち 遮蔽陣地【名】〔兵〕敵の觀望に對して、常に祕匿し得る位置に設けたる陣地。

しや-へう 射表【名】〔兵〕『英 Range table』實戰の際、砲兵をして、極めて迅速且つ容易なる射法を以て、精確なる命中を得しめんがため、種種の場合に應ずる彈道を計算し、その數値を以て編成したる表。射擊表。

しや-へう 謝豹【名】〔動〕ほととぎす(子規)の異稱。

じや-へき 邪僻【名】よこしま。ひずみたる心。邪曲。雙生隅田川「形は人に似たれども、奸曲邪僻の佞臣の」

しやべ-くる 喋る【動四自】しやべる(喋る)に同じ。浮世風呂「若え者並(ナミ)にしやべくるからのことさ」

しや-べつ 差別【名】㊀さべつ(差別)に同じ。㊁〔佛〕萬法の箇箇の性類。(平等(ビャウドウ)に對して)

しやべつ-かい 差別界【名】〔佛〕箇箇の性類より見たる萬法、卽ち現象界。(平等(ビャウドウ)界に對して)

しや-へん 斜邊【名】㊀斜なる側邊。㊁〔數〕『英 Hypotenuse』直角三角形の直角に對する邊。弦(ゲン)。㊂〔數〕『英 Chord』直圓錐の母線。

しやべり 喋・饒舌【名】しやべること、又その人。五人女「しやべりのなるとて、隱れもなき仲人(ナカウド)がた」

しやべり-て 喋手【名】㊀しやべる人。㊁上手にしやべる人。

しやべる (英 Shovel)【名】土砂を抄(スク)ふに用ふる具。鐵製の鍬に、木柄を附けたるもの。しやぶる。

(しやべる)

しやべる 喋る【動四自】㊀煩しく物言ふ。多辯をつひやす。さべる。㊁巧に話す。

じやぼ【名】〔植〕じやぼん(香欒)の略。

じや-ぼう 邪謀【名】よこしまなる策略。わるだくみ。奸計。

しやぼてん 覇王樹・仙人掌【名】〔植〕さぼてん(仙人掌)の訛。

しや-ほに【副】しやほんにの約。飄輝八島「しやほに見知らぬ人ぢやがと」金平法問諍「しやほに面白さうに」

じや-ほふ 邪法【名】正しからぬ敎法。(正法(シャウボフ)に對して)

しや-ほん 寫本【名】本を寫すこと、又その寫したる本。うつしぼん。(版本に對して)

しやぼん 石鹼(葡 Sabão 西 Jabon 佛 Savon)㊀苛性アルカリと脂肪又は油とを原料として造り、化粧用・洗濯用又は藥用に供するもの。水に入るれば、アルカリは徐徐に遊離して、皮膚・衣服などに附著せる脂肪を抱合し、それを地質より離れ易からしめ、化學的及び器械的に洗淨作用をなす。さぼん。せきけん。㊁白豆・無患子(ムクロジ)の皮など、總て油を洗ひ落すものの總稱。

じやぼん 香欒【名】〔植〕ざぼん(香欒)の訛。

しやぼん-さう 石鹼草【名】〔植〕『この植物の浸出液は泡立ちて、石鹼の溶液に似たるよりいふ』石竹(セキチク)科に屬する多年生の草。原産地は歐羅巴。高さ二尺ばかり、葉は對生にして、披針形又は卵形をなす。夏期梢頭に白色又は淡紅色の美花を開く。觀賞用として栽培せらる。さぼんさう。

しやぼん-だま 石鹼球【名】㊀石鹼を溶かしたる水、又は無槵子(ムクロジ)を煎じたる汁を管の先端に含ませ、他の一端より息を吹きこみて生ぜしむる水泡の球。小供の遊戲に供す。さぼんだま。㊁現れて忽ち消ゆる物事の譬。

しやぼんだま-うり 石鹼玉賣【名】石鹼玉の原料たる溶液を、小供に呼賣する人。たまや。

しや-ほん-に しや本に【副】『しやは接頭語』ほんに(本に)を强めていふ語。出世景清「しやほんにをかしいまで能い擬蕤ぢや」

しやぼん-の-き 石鹼樹【名】〔植〕薔薇(サウビ)科に屬する常綠樹。原産地は亞米利加。高さ一丈餘。葉は卵形、帶黃綠色の小花、雌雄株を異にして開く。樹皮は石鹼の代用に供せらる。さぼんのき。

しやぼん-まめ 石鹼豆【名】〔植〕『洗粉に製するよりいふ』しろあづき(白小豆)に同じ。

しや-ま【名】㊀牝(メ)の馬。㊁痩せたる少女を罵りていふ語。おしやま。

じや-ま 邪魔【名】〔佛〕正理に悖りたる妄見を說きて、菩提の正道を障ふる者。さはり。さまたげ。

邪魔を入る【句】さまたげをなす。故障を入る。

しやまう-けい 車網形【名】和算にて、車の輻のごとき形、又は扇の地形の如き形。

しや-まだるし しや間怠し【形一】『しやは接頭語』まだるし(間怠し)に同じ。淀鯉出世瀧德「しやまだるい。最前に總兵衞め斬りそこなうたも女房故」

しやまに 樣似【名】〔地〕日高國七郡の一。浦河支廳の所管。

じや-まん 邪慢【名】〔佛〕七慢の一。邪見を懷きて、心のおごれること。太平記「ここに我慢・邪慢の大天狗ども、如何にしても人の心中に依託して、不退の行學(ギャウガク)を妨げんとしけれども」

しやまん-けう シャマン敎【名】『英 Shamanism』滿洲・蒙古等に行はるる一種の宗敎。神降(カミオロシ)のごとき方法を取るものにて、精靈崇拜に屬するもの。我が國の巫女(ミコ)これに類す。

じやま-もの 邪魔者【名】妨となる者。

しやまら 遮摩羅・遮末羅(梵 Cāmara)【名】〔佛〕『猫牛と譯す』須彌山(シュミセン)の四方に在りて、南方贍部(センブ)洲に屬する二中洲の一。他の一中洲は筏羅遮摩羅(バラシャマラ)(梵 Avaracāmara)といふ。正統記「南洲と東洲との中なる遮摩羅といふ洲なるにや」

しや-み 沙彌(梵 Śrāmaṇera (室羅末尼羅))【名】〔佛〕『息慈・息惡・行慈など譯し、惡を息(ヤ)め、慈を行ずる義。又勤策男とも譯するは、大僧のために勤めて策勵せらるるよりいふ』出家したれども、なほ比丘(ビク)の大戒を受持するに堪へざる者。さみ。しやみに(沙彌尼)參照。

沙彌から長老【句】次條の略。〔諺語〕

沙彌から長老に飛ぶ【句】順序をふまず、一足飛に上位に昇ることの譬。沙彌から長老。〔諺語〕

沙彌から長老にはなれぬ【句】物事は順序ありて、一足飛には上り得ぬことの譬。〔諺語〕

沙彌の十戒【句】〔佛〕しやみかい(沙彌戒)を見よ。盛衰記「高祖大師は、……讚岐國多度郡の人、…二十の歲出家して、沙彌の十戒を受け」

しや-み 三味【名】しやみせん(三味線)の略。

じやみ【名】〔動〕いさざ(鯊)に同じ。

じやみ (英 Jam)【名】じやむの轉訛。

しやみ-かい 沙彌戒【名】〔佛〕『沙彌は十戒を受けざるべからざるよりいふ』じつかい(十戒)に同じ。

しやみ-かつじき 沙彌喝食【名】〔佛〕禪宗又は律宗の寺院にて、食物の給仕などをする兒童。さみかつじき。沙喝(サカツ)。

しやみこ-をどり 暹羅子踊【名】しやむをどり(暹羅踊)に同じ。
しやみ-せん 三味線【名】『三線の字音の轉訛なりとの說もあれど、じやびせん(蛇皮線)の轉訛なりとの說、眞を得たるものなるべし』さみせん(三味線)を見よ。
しやみせん-いと 三味線絲【名】さみせんいと(三味線絲)に同じ。
しやみせん-がひ 三味線貝【名】〔動〕めくわしや(女冠者)に同じ。
しやみせん-ぐさ 三味線草【名】〔植〕『ぺんぺんぐさ(ぺんぺん草)を見よ』なづな(薺)に同じ。
しやみせん-ごま 三味線駒【名】さみせんごま(三味線駒)に同じ。
しやみせん-ひき 三味線彈【名】さみせんひき(三味線彈)に同じ。
しやみ-づる 三味づる【動四自】三味線を彈く。七編人「下手公が三味づって、門附といふ趣向だが」
しやみ-に 沙彌尼(梵 Śrāmaṇerikā(室利摩拏理迦))【名】〔佛〕『勤策女と譯す』女性の沙彌。さみに。沙尼。
じやみ-ぱん ジャミ麪包【名】ジャムを入れて燒きたるパン、又は食パンを切りて、ジャムを附けたるもの。
じやみ-もなか ジャミ最中【名】餡の代りにジャムを用ひたる最中。
じやみる【動上一自】事成らんとして頓挫す。
しやむ 暹羅・沙室(英 Siam)【名】〔地〕㊀亞細亞洲の東南部印度支那半島の中部にある王國。首府を盤谷(バンコク)といふ。しやむろ。さいあむ。㊁しやも(軍雞)に同じ。㊂しやむがは(暹羅革)の略。
沙室の雞【句】〔動〕しやも(軍雞)に同じ。若風俗「沙室の雞合(アハセ)いさぎよく、…沙室の雞を集めて會を始めける」
しや-む 社務【名】㊀神社の事務。㊁神社の事務を執行ふ者。㊂會社の事務。
じやむ【動四自】しやくむ(疏む)に同じ。
じやむ(英 Jam)【名】葡萄・杏子(アンズ)・覆盆子(イチゴ)などの如き果實に、砂糖を加へ、煮詰めて製したるもの。西洋菓子の材料に用ふ。じやみ。しろっぷ(果蜜)參照。
しやむ-がは 暹羅革【名】德川時代に、暹羅より渡來し、專ら足袋などに用ひし革。しやむ。
しや-むし しや蟲【名】『しやは接頭語』むし(蟲)を罵りていふ語。
じや-むし 蛇蝨【名】環蟲類に屬する蠕形(ゼンケイ)動物。沙蠶(ゴカイ)の類。北海道の沿海に產し、長さ三四寸乃至二尺ほど。全身、暗青色を呈し、疣足の背面に葉狀突起ありて、その色、前部は綠なれども、後部に至るに隨ひて、紅色に變ず。
しやむ-しよ 社務所【名】神社の事務を執行ふ所。
しやむ-しよく 社務職【名】しやむ(社務)㊁に同じ。東鑑「宇都宮社務職」
しやむ-せん 三味線【名】しやみせん(三味線)の轉訛。
しやむせん-いと 三味線絲【名】㊀しやみせんいと(三味線絲)の轉訛。㊁〔植〕かにくさ(蟹草)に同じ。
しやむ-ぞめ 暹羅染【名】さらさぞめ(更紗染)に同じ。
しや-むね しや胸【名】『しやは接頭語』むね(胸)を罵りていふ語。盛衰記「しや胸突きて、眞仰(マノケ)に突倒す」
しやむろ 暹羅【名】㊀〔地〕しやむ(暹羅)㊀に同じ。㊁鮫皮の眞鮫の一。
しやむろ-ぞめ 暹羅染【名】さらさぞめ(更紗染)に同じ。
しやむろ-だいこん 暹羅大根【名】〔植〕あかぢさ(赤萵苣)に同じ。
しやむろ-どり 暹羅鳥【名】〔動〕しやも(軍雞)に同じ。
しやむろ-ぶね 暹羅船【名】暹羅國の船。
しやむ-をどり 暹羅踊【名】暹羅國の踊にまねたる踊なるべし。天明頃行はれたるもののごとし。
しやん 青素(英 Cyanogen)【名】〔化〕『青色の義。青色なる鑛化合物あるによりていふ』無色・有毒の異臭ある氣體。空氣中にて點火すれば、赤紫色の焰を出して燃ゆ。高溫度の炭素と窒素と相逢ふ時に生じ、又シャン化銀もしくはシャン化水銀を熱して製す。しあん。せいそ。
しやん【貌】手を打つ音。心中萬年草「さあ、しやんと打ちませう、と手を拍げても」
じやん【貌】半鐘の音。
じやん 上【名】〔音〕『漢字の支那音』淸樂の音階の最下級に位する音譜。
じやん-か【名】じやんこに同じ。
じやんか-づら じやんか面【名】じやんこづら(じやんこ面)に同じ。
じやんく 戎克(英 Junk)【名】『船の字、支那厦門(アモイ)の方言にてはChün福州の方言にてはCh'iongと發音するに起因す』支那人が、乘客及び荷物を載せて、沿海・河川等に使用する船。細長くして、舷高く、帆又は櫓にて漕ぐ。
しやんぐ-しやんぐ【貌】しやんしやん㊀に同じ。
しやん-くわがふぶつ 青化合物【名】〔化〕しやんくわぶつ(青化物)に同じ。
しやんくわ-かり 青化加里【名】〔化〕次條に同じ。
しやんくわ-かりうむ 青化加僧母【名】〔化〕『英 Potassium cyanide』白色・固形の有毒なる結晶物。水に溶け易く、多量に製せられ、化學工藝・冶金等にて、瓦斯製造の副產物として用ひ、その稀薄液は、金鑛より金を溶解するに用ふ。青化剝篤僂母。青化加里。
しやんくわ-ぎん 青化銀【名】〔化〕『英 Silver cyanide』酸銀の溶液にシャン化カリウムを加ふれば、沈澱して生ずる化合物。
しやんくわ-すゐぎん 青化水銀【名】〔化〕しやんくわだいにすゐぎん(青化第二水銀)に同じ。
しやんくわ-すゐそ 青化水素【名】〔化〕『英 Hydrogen cyanide』酸類の一。極めて弱き酸にして、純粹なるは無色なる液體をなし、甚だ揮發しやすく、通例シャン化カリウムもしくは黃血鹽に、稀硫酸を加へ、蒸溜して製するを便とす。無水のものは保存し得れども、水溶液は、日光及び大氣に觸るれば、自然に變質して、褐色物を分離するに至る。劇毒を有すれども、適度に用ふれば、鎭痛藥に供するを得。
しやんくわだいに-すゐぎん 青化第二水銀【名】〔化〕『英 Mercuric cyanide』美麗なる無色方形の結晶せる毒物。熱すればシャンと水銀とに分解し、その水溶液は殆ど電離せず。
しやんくわ-ぶつ 青化物【名】〔化〕『英 Cyanide』炭素・窒素各一原子より成る原子團NCを有する化合物の總稱。强烈の毒物にして、種類多し。青酸鹽。
しやんくわ-ぼたしうむ 青化剝篤僂母【名】〔化〕『英 Potassium cyanide』しやんくわかりうむ(青化加僧母)に同じ。
じやん-けん じやん拳【名】いしけん(石拳)を云ふ。〔東京の語〕
じやんけん-ぽん じやん拳ぽん【名】前條に同じ。〔東京の語〕
じやんこ【名】あばた(痘痕)に同じ。
じやんこ-づら じやんこ面【名】あばたづら(痘痕面)に同じ。浮世床「じやんこ面には熊がなるっ」
しやん-さん 青酸【名】〔化〕『英 Cyanic acid』有機酸の一。醋酸に似たる臭を有する無色の液體。シャンヌル酸を熱して製す。せいさん。
しやん-しやん【貌】㊀鈴などの徐かに鳴る音。しやんぐしやんぐ。㊁身體壯健にて、よく立働くさま。㊂湯のさかんに沸立つさま。丹波與作「すゑ風呂も、しやんしやん、かかり湯取って、加減見て」㊃景氣つけて、手を拍ちたたくさま。今宮心中「しやんしやん、さあ、これからが本ざけ」
じやん-じやん【名】『炙條の意より轉じていふ』はんしよう(半鐘)に同じ。
じやんじやん-こん【名】拳の掛聲。
じやんじやん-もく【名】〔植〕とちかがみ(水鼈)に同じ。
しやん-す 相思【名】『漢字の支那音』こひびと。情人。〔肥前國長崎の方言〕膝栗毛「よんによう、しやんすと契らんす」
しやんす【句】㊀す(爲)の條下を見よ。㊁す(令)の條下を見よ。
しやんだり(英 Chandelier)【名】天井などに吊す枝形附の燈架。
しやんと(英 Shunt)【名】〔理〕電路の中央に

作りたる岐路。本電路を通過する電流强きに失して、電流計の感ずる所强きに過ぐるか、又は他に害を及ぼす恐ある時、强き電流を通過せしめざらんために附するもの。
しやん-と【副】正しくしまりあるさま。ちやんと。きちんと。たしかに。狂言(記)「地白帷子…、胸にしやんと結んで」一代女「五月の頃まで、冬の庭道具を、長持の上に積重ね、節句前をも、朔日(ツイタチ)・二日にしやんと仕舞うて」
しやんぬる-さん シャンヌル酸(英 Cyanuric acid)【名】〔化〕尿素を熱すれば得らるる固體。熱してシャン酸を作る。
しやん-はい 上海【名】〔地〕支那江蘇省の南部に在る開港場。同國第一の貿易場。
しやんはい-すゐみつたう 上海水密桃【名】〔植〕水密桃の一種。實の形、長卵圓形にして大きく、上端尖り、暗紅色を呈す。果皮は柔軟・多漿にして、味美なり。豐產なる特性あり。
しやんぱん 三鞭酒(佛 Champagne)【名】『佛蘭西の東北部なる一地方の名にて、その地方の產、眞質を以て聞ゆるに因る』一旦醱酵したる白葡萄酒を原料とし、これに糖分を加へ、瓶に詰めて密栓を施し、更に瓶中にて第二の醱酵を起さしめ、その際生ずる炭酸瓦斯を液中に飽和せしめたるもの。洋酒中最も高價なり。しやんぺん。
しやんぺん 三鞭酒【名】前條に同じ。
しやんぺん-さいだあ(英 Champagne cider)【名】白葡萄よりシャンパンを造ると同様の方法を、サイダアに施したるもの。多くは夏時の飲用に供す。
しや-めい 社名【名】㊀神社の名稱。㊁結社又は會社の名稱。
しや-めん 緒面【名】しやがん(緒額)に同じ。
しや-めん 斜面【名】『英 Inclined plane』㊀〔理〕〔數〕水平面と或角をなせる平面。㊁物體を上下する時などに用ふる、水平と或角をなす平面。
しや-めん 赦免【名】㊀罪をゆるすこと。盛衰記「六波羅殿より、赦免の御教書候ふ」㊁過失をゆるすこと。狂言(幹聟)「ひまも得させいで、遲なりましたるところ、御しやめん有らせられませい」
しやめん-じやう 赦免狀【名】罪を赦すべき由を記したる書狀。赦狀。赦書。免狀。平家女護島「赦免狀は濟み候へ共、海上改の關所・關所の通切手」
しやも 軍雞【名】〔動〕『しやむろどり(暹羅鳥)の義』鷄の一種。形大きく、冠頭小さく、尾短く、力强くして、最も鬪合を好む。羽色黑きもの多けれども、茶褐色・白色等のものもあり。肉味美なれども、產卵數少なし。今は我が國の特產なれども、馬來(マレー)邊の種類に近し。琉球に產するものは、體格更に大きく、產卵の數も優れり。
しやも(アイヌ語 Shamo)【名】『人の義』日本內地の人を指していふ語。
しやも-いり 軍雞入【名】罪人を假牢(カリロウ)に入るること。
しやも-じ 杓文字【名】『もじ(文字)は接尾語』しやくし(杓子)を云ふ。〔女の語〕
しやもつ 謝物【名】謝禮の贈物。れいもつ。
しやも-ひば 軍雞檜葉【名】偏柏(ヒバ)の變種。技葉の附き方、軍雞(シャモ)の足の如くにして、枝太く、且つ數枝合著して成るもの多し。また斑入(フイリ)なるもあり。かなあみひば。つくもひば。
しやもん 沙門(梵 Śramaṇa)【名】㊀〔佛〕『靜志・淨志・乏道・貧道・功勞・勤勞・勤息・止息など譯す』出家の總稱。くはのとざし。くはのとぼそ。桑門。僧門。沙門(サモ)。㊁能(ノウ)の裝束の一。高僧・貴僧の著くる頭巾。沙門帽子。
しや-もん 借問【名】假に問ふこと。試に問ふこと。
しやもん-おり 斜文織【名】織物の斜に線を表せる織方。あやおり。
じやもん-がん 蛇紋岩【名】〔鑛〕『英 Serpentine』橄欖岩・飛白岩等の分解して生じたるもの。主に蛇紋石より成る。建築用・裝飾用の石材とす。武藏國秩父の鳩糞(クソ)及び常陸・肥後の兩國に產する斑石(マダラ)のごとき、その美麗なるものなり。
じやもん-せき 蛇紋石【名】〔鑛〕『英 Serpentine』結晶不明にて、緻密なる塊狀をなし、半透明乃至不透明にして、玻璃光澤・脂肪光澤の斑ありて、色は綠に黑みを帶び、黃綠の斑ありて、蛇皮に似たるもの。角閃石・輝石・橄欖石の變生せるものにて、成分は含水硅酸苦土なり。上品なるは寶石とせられ、普通品は石燈・硯などに造り、また石綿に代用するもあり。だもんせき。
しやもん-ばうし 沙門帽子【名】しやもん(沙門)㊁に同じ。
しや-やう 斜陽【名】ゆふひ(夕日)に同じ。
しや-やく 瀉藥【名】くだしぐすり(下藥)に同じ。
しや-やくば 社役場【名】臺灣に於ける社の社長が、その行政事務を取扱ひし所。
じや-やなぎ 蛇柳【名】㊀〔植〕くわつえふさん(廣葉杉)に同じ。㊁高野山の奧の院路の溪流の側にある柳。大師の化度によりて、蛇得脫して、柳となれりと傳ふるもの。心中萬年草「微妙の橋のあぶなさも、後世の見せしめ蛇柳や」㊂歌舞伎十八番の一。本外題は「百千鳥大磯流通(オオイソナガシ)」。三勝といふ女、戀人なる丹波助太郎といふ男の他の女を伴ひ來るに嫉妬を起し、三勝の靈助太郎にのりうつりて、荒場を演ずることを作れるもの。淨瑠璃名題は「夏柳衛玉川」といふ。金井三笑の作。
しやゆゐ 闍維・邃遺(梵 Jhāpita)【名】〔佛〕だび(茶毘)に同じ。盛衰記「邃遺の烟に音咽び」
しや-よ 車輿【名】㊀車と輿と。㊁車の箱。
しや-よう 社用【名】㊀神社の用務。㊁會社の用務。
じや-よく 邪慾【名】㊀よこしまなる慾望。㊁にくよく(肉慾)に同じ。
しやら【名】〔植〕なつつばき(夏椿)に同じ。
しやら 娑羅(梵 Śāla)【名】〔植〕『堅固・正確の義。常綠木の意』龍腦香(リユウノウ)科に屬する喬木。印度に產し、高さ十丈に及ぶ。葉は全緣・平滑にして、卵狀長楕圓形をなし、淡黃色なる五瓣の小花を開き、花にも花梗にも絨毛密生す。材は淡褐色を呈し、堅緻なるため、建築用・器具用として、チイク樹に次ぎて貴重せられ、樹脂は瀝青(チヤン)に代用せられ、種子よりは油を搾取するを得。さら。しやらそうじゆ。
しやら 洒落【名】㊀しやらくさきこと。なまいき。こしやく。井筒業平河內通「むう、しやらな、なまなか謎を解きたてて」㊁めかすこと。曾我會稽山「洒落な、丁稚上りめ」㊂しやれ。いき。可笑記「薄化粧に花車めかしてしやらなる風情」㊃いうぢよ(遊女)を云ふ。〔越前國の方言〕
しやら-い 射禮【名】しやれい(射禮)に同じ。㊀古、正月に、禁中にて、弓を射しめし公事。十五日に、兵部省にて、手番(テツガヒ)を定め、射手を揃へて、十七日建禮門院にて行ひ、親王以下、五位以上、並びに六衛府の者どもこれに參加し、天皇親臨ありて、宴を賜ひ、能射の者には祿を給せられたり。又、臨御なき時は、大臣勅を奉じてこれを行ひ、正月が御忌月に當る場合には、三月十三日に行ひ、代始には豐樂(ブラク)院にて行ひたり。大射。
しやら-から【名】いうぢよ(遊女)を云ふ。〔丹波國の方言〕
じやら-かす 戲かす【動四他】じやらす(戲す)に同じ。
しやら-く 洒落・灑落【名】㊀深く事物に拘らぬ氣質。うちとけてあっさりしたる氣象。㊁おしやらく(御洒落)を見よ。
しや-らく 謝落【名】〔植〕一定の時期に脫落すること。(早落・宿存に對して)
しやらく 寫樂【名】〔人〕浮世繪師。通稱は齋藤十郎兵衞、東州齋と號す。阿波侯の能役者たり。文化頃、雲母繪と稱する彩色摺を工夫す。俳優の似顏をよくし、寫實意表に出でたり。
しやら-くさし 洒落臭し【形二】なまいきなり。こしやくなり。
じやら-くら【貌】たをやかに、あだっぽきさま。じやらじやら。艷容劍本地「これ、じやらくらも好い加減、旅人衆が大勢門に立ってぢや」
しやら-くわ 沙欏科【名】〔植〕へごくわ(杪欏科)に同じ。
しやら-け 娑羅華【名】〔佛〕㊀娑羅の花。

三白き紙にて、娑羅の花に擬して造れるもの。佛式の葬具に用ふ。
しやら-ごゑ しやら聲【名】しわがれ聲。桂川連理柵「又鬼婆がしやら聲は、長右衛門が戻ったかと」
しやら-しやら【貌】雪駄などにて歩む時の音などにいふ語。ちやらちやら。
じやら-じやら【貌】一じやらくらに同じ。二くだらぬ。たはいなくばからし。
しやら-じゆ 娑羅樹【名】〔植〕しやら(娑羅)に同じ。
じやらす 戯す【動四他】じやれるやうにす。じやらかす。
しやら-そうじゆ 沙羅雙樹【名】一〔佛〕『雙樹は四方に雙生する義。涅槃(ネハン)經に見ゆ』釋迦の、拘尸那(クシナ)城外、跋提(バツダイ)河畔に入滅せし時、その邊にありし娑羅の樹林中、特に高く相對して雙をなしし四木。入滅の際、枯凋して、白色に變じたりと傳ふ。さら。鶴樹。二〔植〕しやら(娑羅)に同じ。
じやら-つく【動四自】じやらじやらとす。じやらくらとす。
しやら-くさし 洒落臭し【形一】しやらくさし(洒落臭し)の訛。
しやら-どく しやら解く【動下二自】すらりと解く。常磐小栗判官「引っしごき帶しやら解けし、しどけなや、とて結ぶとすれば」
しやら-ばら-さう 遮羅婆羅草【名】〔植〕天竺に生じ、葉廣く、馬これを食ふときは、化して人となるといふ草。
しやら-へん 沙剌片【名】支那料理の一。晒したる魚翅(ユイチイ)。
しやら-ほどけ【名】しどけなく解くること。五人女「柚枕取亂して、帶はしやらほどけをそのままに」
しやら-らん 遮欄【名】てすり(手摺)に同じ。
しやら-りん 娑羅林【名】一娑羅の木の茂れる林。さらりん。二〔佛〕『梵 Śālavana の譯語』特に、釋迦の入滅したる娑羅の木の林。つるのはやし。鶴林(カクリン)。しやらそうじゆ(娑羅雙樹)一參照。盛衰記「如來入滅の娑羅林中に至るまで、一化(イチ)早く極りて」
しやり 闍梨【名】〔佛〕あじやり(阿闍梨)の略。
しやり 舍利(梵 Śarīra(設利羅・室利羅・實利))【名】一『祕藏記の上に「天竺呼米粒爲舍利、佛舍利亦似米粒、是故曰舍利也」、彌勒上生經疏の下に「舍利者稻穀也、駄都者體也、佛體大小如稻穀量、故以爲名」とあり。駄都は梵 Dhātu』こめ。米粒。二〔佛〕佛または聖者の遺骨。佛舍利。さり。骨身。三蠶の十分成長しても、絲を吐くことなく、白く固くなりて死ぬること。黴菌の寄生に因る。おしやり。〔白殭蠶〕四陸奥國東津輕郡今別(イマベツ)・平舘(タイラダテ)・雨村の海濱に產する、一種の白石。大なるは拳のごとし。五謠曲の一。足疾鬼といふ鬼の、泉涌寺の佛舍利を奪ひたるに、忽ちに、韋駄天といふ天神に取返さるることを作れるもの。
舍利が甲になる【句】長久なる年月を要する譬。骨が舍利になる。
骨が舍利になる【句】前條に同じ。
しやり 這裏・這裡・者裏【名】このうち。この事。這底。〔禪書などの語〕
しやり 砂裏・沙裡【名】さり(砂裏)に同じ。東海道名所記「一寸の光陰は砂裏の金。」
しやり 射利【名】『射は目標を定めて、これを射て取る義。この意の時は、正しくはせきの音』利をのみ望むこと。
しやり 瀉痢【名】はらくだり(腹下)に同じ。
しやり 斜里【名】〔地〕北見國八郡の一。網走(アバシリ)支廳の管轄。
しやり【名】〔鑛〕『齒にて嚙む時の音によりていふとぞ』純粹の錫。
じやり 砂利・沙利【名】砂まじりの小石。ざり。砂礫。猿蓑 土芳「梅が香やじやりしき流す谷の奥」
しやり-う 者流【捘尾】そのたぐひの人。仲間。「長袖者流」「操觚者流」
しやり-えん 瀉利鹽・舍利鹽【名】〔化〕りうさんまぐねしうむ(硫酸麻偪尼僂母)に同じ。
しやり-かうべ 髑髏【名】しやれかうべ(髑髏)に同じ。
しやり-き 車力【名】荷車などを挽くを業とする人。
しやり-こう 舍利講【名】次條に同じ。
しやり-こうゑ 舍利講會【名】佛舍利を供養する講會。舍利講。舍利會。
しやり-し 舍利子【名】〔人〕しやりほつ(舍利弗)に同じ。
しやり-しやり【名】〔植〕あせび(楼木)に同じ。
しやり-しやり【貌】堅き細かきものをこする音。しよりしより。
じやり-じやり【貌】小石・砂などの軋る音。
しやり-たふ 舍利塔(梵 Śarīra-stūpa)【名】〔佛〕佛舍利を納めおく小さき塔。骨塔。

(しやりたふ)

しやり-りつ 赦律【名】赦に關する法規。
じやり-つち 砂利土・沙利土【名】砂利の多くまじりたる土。
しやり-てん 娑利天【名】〔佛〕とうりてん(忉利天)を見よ。
しやり-でん 舍利殿【名】寺院の一部、佛舍利を安置せる殿堂。多くは正方形にして中央に舍利塔を安置す。
しやり-ぶくろ 舍利袋【名】舍利を入れたる袋。盛衰記「錦の御舍利袋」
しやり-べつ 舍利別【名】蔗糖を植物汁・植物煎・乳劑類の内に溶解して得たる濃厚なる糖液の總稱。白糖六十五分を熱湯三十五分に溶解し、白糖中の蛋白分を除きたるを單舍利別、又略して單舍といひ、甘味強くして、味附の料に供す。しろっぷ。
しやり-べつ-ざい 舍利別劑【名】或藥物に、白砂糖又は舍利別を溶和して煮沸したるを、絨布にて漉(コ)したるもの。藥物固有の効力を有するのみならず、調味藥を兼ぬ。大黃(ダイオウ)舍利別・纈涅瓦(カノコソウ)舍利別・旃那(センナ)舍利別等の種類あり。
しやり-ほつ 舍利弗(梵 Śāriputra)【名】〔人〕『Śāriは母の名、putra(弗多羅)は子の義。故に舍利子と譯す』印度の高僧。釋迦十大弟子の一。智慧第一の稱あり。十六羅漢の一。父は帝沙、母は舍利。釋迦に先だちて入寂す。榮花「舍利弗はなほ名に違はず、痩せたまへり」
しやり-ほふ 舍利法【名】〔佛〕舍利を本尊として、密法を修すること。
しやり-むり 差理無理【副】しやにむに(遮二無二)に同じ。
しや-りん 車輪【名】一車の輪。車のまはるところ。くるまわ。二『「世界は車輪の如し」を見よ』一生懸命に立ちはたらくこと。しやりんだま。三役者が非常に努力して、役を勤むること。
車輪に働く【名】車輪の廻轉するがごとくに、油斷なく働く。
車輪の如し【句】〔佛〕一「世界は車輪の如し」を見よ。二因果の循環するを車輪の廻轉に譬へていふ語。謠曲(春榮)「殺(セツ)の報、殺の緣、たとへば車輪のごとく」
車輪の廻(メグ)るが如し【句】〔佛〕前條に同じ。宇治「生死(シヤウジ)に流轉(ルテン)すること、車輪の廻るが如し」平家「夢の中の果報、また幻の間の樂、既に流轉(ルテン)無窮なり。車輪の廻るが如し」
車輪を埋む【句】『後漢書の張綱傳に「漢安元年遣八使、循行風俗、綱獨埋其車輪于陽亭」とあるに本づく』車を停めて進まざること。
しやりん-くわんせつ 車輪關節【名】〔醫〕くわいてんくわんせつ(廻轉關節)に同じ。
しやりん-すゐしんき 車輪推進器【名】ぐわいしや(外車)に同じ。
しやりん-だま 車輪玉【名】しやりん(車輪)二に同じ。人心覗機關「もうこれからはむだづかひせず、車輪玉でかせいで、思ふさま金溜めて」
しやりん-ばい 車輪梅【名】〔植〕薔薇(サウビ)科に屬する常綠灌木。高さ三四尺。葉は楕圓形にして、鋸齒緣を有し、夏季梅花に似て、香氣ある白色の花簇(ムラ)り開く。實は豆粒ほどの大きさにて圓く、熟すれば紫黑色に變じ、暗褐色の染料に供せらる。はまもくこく。
しや-りやう 車輛【名】一車のかず。二くるま。
しや-りやう 社領【名】神社につきたる領分。社地。
しや-りよう 斜稜【名】〔數〕『英 Slant edge』

角錐の側面の相交はりて成す稜。
じやり-り【貌】小石などやうの小さく堅き物の觸るる音。しよりり。
しやり-ゑ 舍利會【名】しやりこうゑ(舍利講會)に同じ。古今「雲林院のみこの、舍利會に、山にのぼりて歸りけるに」
しやる 曝る・晒る【動下二自】さる(曝る)の訛。
しやる【句】す(令)の條下を見よ。
し-やる 爲遣る【動四他】なす。取計らふ。落窪「しやらんやうもおぼえで」
じやる-ゐ 蛇類【名】へびるゐ(蛇類)に同じ。
しやれ 曝・晒【名】され(曝)の訛。
しやれ 洒落【名】一氣のききたること。あくどくあらぬこと。きいたふう。二なまいきなること。三文句をもぢりて、他の意味に通はせいふ滑稽。ざれごと。四座興になすこと。たはぶれ。五華美に著飾ること。めかすこと。曾我虎が磨「雪にしやれたる白兎」
じやれ 戯【名】じやれること。たはむれ。堀川波の鼓「今のは、みなじやれぢや。嘘(ウソ)ぢや、嘘ぢや」
しやれ-い 射禮【名】弓術の禮式。しやらい(射禮)參照。
しやれ-い 奢麗【名】おごりて美麗にすること。
しやれ-い 赦例【名】赦免せられたる前例。
しやれ-い 赦令【名】赦免の命令。
しやれ-い 謝禮【名】一謝意を表する禮儀。おれい。二謝意を表するための贈物。
しやれ-いうん 謝靈運【名】〔人〕支那南北朝の詩人。康樂公を襲封し、謝康樂と稱せらる。性、豪奢を喜び、山川を跋涉し、詩を作って自ら娯む。臨川内史に任ぜられしも、放縱にして、廣州に徙され、つひに棄市せらる。年四十九。
しやれい-さん 車嶺山【名】〔地〕朝鮮白頭山脈の分嶺。忠淸北道と南道とを横斷す。
しやれい-しき 射禮式【名】〔書〕家傳の射禮四十五箇條を詳かに述べたるもの。一卷。小笠原元長の著。
しやれ-いた 曝板・晒板【名】されいた(晒板)の訛。一代女「しやれいたの額かけて」
しやれう-たう 社寮島【名】〔地〕臺灣基隆(ケイ)港口の東門をなす島。周回一里七町。
しやれ-かうべ 曝首・髑髏【名】されかうべ(髑髏)に同じ。
じやれ-がき 戯書【名】ざれふで(戯筆)に同じ。
じやれ-かく 戯掛く【動下二自】戯(ジヤレ)しかく。戯れかく。持統天皇歌軍法「何でも是れにじやれかけなば、宿かしさうなものなりと」
しやれ-がひ 曝貝・晒貝【名】されがひ(晒貝)に同じ。
しやれ-き 砂礫・沙礫【名】されき(砂礫)に同じ。
しやれ-ぎ 曝木・晒木【名】されぎ(晒木)に同じ。
しやれ-こむ 洒落込む【動四自】しやれる(洒落る)四を窮めていふ語。
しやれ-だて 洒落立【名】何彼につけてしやれんとすること。曾我虎が磨「この頃のうつせ貝、洒落立おけと」
しやれ-のめす 洒落のめす【動四自】大いにしやる。四天王大通仕立「その身は祇園の梅本で、前髪に洒落のめしける」
しや-れつ 車裂【名】くるまざき(車裂)に同じ。
しやれ-ふ 射獵【名】弓矢にて獵をすること。
しやれ-ふう 洒落風【名】うきよふう(浮世風)に同じ。
じやれ-ぶかい 戯深い【形】好みて洒落などいひて、戯れ易し。闘八州繋馬「殿達はじやれぶかい」
しやれ-ぼん 洒落本【名】江戸時代に行はれたる小說の一種。主として、遊里の痴態を實的に寫せるもの。半紙を二つ折にせし製本にて、その形長方形をなせば、蒟蒻本・油揚本などともいふ。明和の末、田舍老人多田爺の作「遊子方言」に初まり、爾來多く行はれしが、寬政の初、幕府その出版を禁ず。作者には風來・京傳・田螺(タニ)金魚・唐來三和・蓬萊山人等あり。
しやれ-もの 洒落者【名】一洒落なる人。おしやれ。二好みて、身なりを飾る人。俗風ならぬ人。今宮心中「おきさばかりが女房か、彼の樣な洒落者より、おむくむくの手入らずを抱かせうぞ」三くわはうもの(果報者)に同じ。
しやれ-もんく 洒落文句【名】しやれたる文句。秀句。
しやれる 洒落る【動下一自】一趣ありて、氣のききたる擧動をなす。二なまいきなる風をなす。三著飾る。めかす。四滑稽なる文句を言ふ。しやれを言ふ。
じやれる 戯れる【動下一自】ざる(戯る)の訛。戀八卦柱暦「じやれてそばへて手毬と」心中宵庚申「一蓮託生の閻の御同行と、じやれて擁髮を取りければ」
じやれ-わらひ 戯笑【名】たはむれて笑ふこと。持統天皇歌軍法「妯(コブ)などのじやれわらひ」
しや-ろ 車路【名】しやだう(車道)に同じ。
じや-ろ 邪路【名】よこしまなる道。邪道。太平記「落邪路」
しや-ろう 砂漏・沙漏【名】さろう(砂漏)に同じ。
しや-ろく 寫錄【名】書きうつすこと。
しや-ろく 社祿【名】神社に屬する財產。
じや-ろん 邪論【名】じやせつ(邪說)に同じ。
じや-わ 爪哇(英 Java)【名】〔地〕印度諸島の一。和蘭領中の最要島にて、東西約二六〇里・南北約一九里より四九里を有す。首府をバタヴィアと稱す。
じや-わう 闍王【名】〔人〕あじやせ(阿闍世)に同じ。
じやわ-たう 爪哇糖【名】爪哇より輸出する砂糖。
じやわ-ぶね 爪哇船【名】爪哇國の船。
しや-ゐ 闍維・遮遺【名】〔佛〕しやゆゐ(闍維)に同じ。
しや-ゐん 社員【名】一新聞・雜誌社又は會社などの役員。二〔法〕『英 Member』社團を組織する人。
しやゐん-けん 社員權【名】〔法〕『獨 Mitgliedsrecht』社員二が、社員たる資格において、その屬する社團法人に對して有する權利、卽ち法人の事務に參與する權と社員一個の利益のために存する權とより成る。
しやゐん-そうくわい 社員總會【名】〔法〕『獨 Mitgliederversammlung』社團法人の最高機關。社員全部を以て組織し、その法人の意思を代表し、その業務を監督す。
しやゐん-めいぼ 社員名簿【名】社員の氏名・住所・資格その他必要の事項を記載したる帳簿。
しや-ゑ 舍衛(梵 Śrāvastī(室羅伐悉底・室羅伐・舍婆提)の訛略)【名】〔地〕『聞者・聞物・好道・豐德・仙人住處など譯す。多く名聲の人を出し、多く勝物を生ずる地の意』釋迦時代に、印度北方の强國たりし憍薩羅(コーサラ)國の都城。憍薩羅は、摩伽陀(マガダ)國の北、迦毘羅衞(カピラエ)城の西、今のオオヅ(Oudh)地方にして、釋迦在世の時、波斯匿(ハシノク)王ここに都し、又この地の長者須達(シュダツ)は祇園精舍(ギオンシヤウジヤ)を建て、信女毘舍佉(ビシヤキヤ)を建て、釋迦は、この二寺、殊に長く祇園精舍に在りて、多くの經を說きたり。野守鏡「舍衛の三億の家は、佛の出で給へることをなほ知らざりき」
しやゑ-こく 舍衛國【名】〔地〕前條を見よ。太平記「舍衛國の大臣須達(シュダツ)長者、この國に一の精舍(シヤウジヤ)を建て」
舍衛國の女人(ニヨニン)【句】〔佛〕れんげによ(蓮華女)を見よ。榮花「かの舍衛國の女人の、我が顏よしと見けんにも劣らず」
しやゑ-じやう 舍衛城【名】〔地〕しやゑ(舍衛)に同じ。
しゆ 衆【名】かたがた。ひとびと。人たち。「夫婦のしゆ」「おや子のしゆ」「若いしゆ」
しゆ 株【名】きりかぶ。くひせ。
株を削り、根を堀る【句】『戰國策の秦の條に「削株掘根、無與禍鄰、禍乃不存」とあるに本づく』禍根を絕つ。
しゆ 朱【名】一辰砂(シンシヤ)及び銀朱の總稱。松風村雨束帶鑑「主なき古墳を掘りかへし、太刀・鎧・朱などを盜み寶候」二やや黃ばめる赤色。あけ。三しゆずみ(朱墨)の略。〔諺語〕
朱に交はれば赤くなる【句】『論衡に「詩傳云、譬猶練絲、染之藍則青、染之朱則赤」とあり』白き物を、赤き色に染む如く、人は交はる所の人に感化せられ易し。〔諺語〕
朱を加ふ【句】他人の詩歌・文章を添削す。雌黃(シユウ)を加ふ。

しゆ 種【名】㊀たね。種子。㊁たぐひ。種類。㊂物事の生ずるもと。たね。原子。「罪業、種となりて」㊃〔生〕『英 Species』分類上、生物の單位たるもの。種の特長は子孫に遺傳すれども、同時に絶えず變化するが故に、或學者の同一種となす者も、他の學者は別種と認むるもあり。されどその形質の大體において、相一致する者を、同一種と定む。へんしゆ(變種)・ぞく(屬)參照。
しゆ 取【名】㊀取ること。「取捨」㊁〔佛〕じふにいんえん(十二因緣)を見よ。
しゆ 趣【名】〔佛〕衆生が自ら作り出しし業(ゴフ)に由りて趣き住むべき處。
しゆ 酒【名】さけ(酒)に同じ。 謠曲(舟辨慶)「靜かにしゆをすすめ候へ」
しゆ 手【名】㊀て(手)に同じ。「手足」㊁とくげふせい(得業生)㊂を見よ。
しゆ 主【名】㊀ぬし。あるじ。㊁きみ。君主。㊂しゆう。主君。(從に對して) 大和「このしゆなるみやす所聞きて」㊃かしら。をさ。㊄主なる物事。肝要なる物事。もとゐ。㊅ぬし。もちぬし。所有者。㊆行動を起す者。主動者。㊇〔基〕『英 Lord』きりすと(基督)の敬稱。
主憂ふれば、臣勞す【句】『國語に「范蠡曰、爲二人臣一、君憂臣勞」とあり』君上に心憂あれば、その臣は苦勞す。
主として【句】おもに。もっぱら。職として。
主の禱(イノリ)【句】〔基〕『英 Lord's prayer』キリストが祈禱の摸範として、弟子に敎へたるもの。
主の日【句】〔基〕『英 Lord's day. キリストはこの日に復活したりと云傳ふるに因る』にちえうび(日曜日)の異稱。
主辱めらるれば、臣死す【句】『國語に「范蠡曰、…君辱臣死」とあり』君主恥を受くれば、臣は死を致す。〔諺語〕
しゆ 首【名】㊀かしら。首長。首魁。㊁はじめ。㊂もと。根本。㊃罪を犯せる發頭人。(從に對して)
しゆ 守【名】㊀こくしゆ(國守)又はしゆご(守護)の略。㊁位卑くして、官高きことを示す語。(行に對して)「從三位守大納言」
しゆ 首【助數】詩・歌又は文章の數。「一首」「二首」
しゆ 朱・銖【助數】㊀重量の單位。一兩の二十四分の一。㊁江戸時代の貨幣の金高の單位。歩(ブ)の四分の一。銀目の三匁七分五厘、今の十二錢五厘に相當す。㊂一割の十分の一。分。
しゆ 種【助數】物の類別の箇數。いろ。「三種の神器」
しゆ 株【助數】樹木の數。もと。「一株の長松」
しゆ 炷【助數】香(カウ)を焚く度數。
しゆ 衆【接尾】しゆう(衆)に同じ。
し-ゆ 脂油【名】脂肪と油との總稱。
じゆ 頌【名】〔佛〕かだ(伽陀)に同じ。 枕「俱舍のじゆをすこしいひつづけありくこそ、所につけてをかしけれ」
じゆ 壽【名】㊀ながいき。長壽。長命。㊁ことほぎ。いはひ。㊂よはひ。年齡。
壽を上(タテマツ)る【句】『漢書の註に「凡言レ爲レ壽者、謂下進二酹子尊者一而獻中無疆之壽上」とあり』酒杯を尊者に進めて、限りなき壽を獻ず。長壽ならんことを祈る。
壽を爲す【句】前條に同じ。
じゆ 儒【名】㊀『周禮の大宰に「以二九兩一繫二邦國之民一、三曰師、以レ賢得レ民、四曰儒、以レ道得レ民」とあり』支那周の世に、鄕里にありて、民に道藝を敎ふることを掌りし者。㊁じゆけう(儒敎)に同じ。 雙生隅田川「大聖釋尊は因緣生死の二つを敎へ、儒には仁義の二柱」㊂じゆしや(儒者)に同じ。
じゆ 呪・咒【名】㊀〔佛〕だらに(陀羅尼)に同じ。㊁のろひ。まじなひ。
じゆ 樹【名】き(樹)に同じ。
じゆ 受【名】㊀受くること。受取ること。㊁〔佛〕『梵 Vedanā』じふにいんえん(十二因緣)を見よ。 榮華「受・想・行・識もまたかくの如し」
じゆ 授【名】㊀さづくること。㊁さづかること。
じゆ 綬【名】㊀いんじゆ(印綬)㊀に同じ。㊁古昔、禮服の時、乳の下より結び垂るる平緖の如き帶。白地に種種の色を組合はせたるもの。㊂勳章・徽章・記章等を佩用するに用ふる紐。
綬を結ぶ【句】『顏延之の詩に「脫二巾千里外一、結レ綬登二王畿一」とあり。支那にて、官に就けば、印綬を結び垂るる習なりしよりいふ』官に就く。印綬を佩ぶ。
じゆ 從【接頭】主位に附隨すること。(正(シヤウ)に對して)
しゆ-あう 主媼【名】一家の主なる婦人。
しゆ-あく 首惡【名】おもなる惡人。元兇。
しゆ-あふ 手押【名】つめいん。拇印。
しゆ-あん 朱殷【名】黑ずみたる赤色。
しゆ-い 主意【名】おもなる意味。本意。
しゆ-い 趣意【名】かんがへ。心ばせ。みこみ。趣旨。
しゆ-い 殊異【名】他とことなること。差別。
しゆ-い 朱衣【名】あかき著物。
じゆ-い 授衣【名】㊀『詩經の豳風七月篇に「七月流火、九月授レ衣」とあり』寒冷の候に向ひて、冬の仕度をなすこと。㊁陰曆九月の異稱。
授衣の節【句】前條㊁に同じ。
じゆ-い 壽衣【名】きやうかたびら(經帷子)に同じ。
しゆ-いう 酒友【名】飲酒上の友人。のみともだち。
しゆ-い-がき 趣意書【名】次條に同じ。
しゆ-い-しよ 趣意書【名】趣意を記せる書。しゆいがき。
しゆ-い-せつ 主意說【名】〔哲〕『英 Voluntarism』感覺・表象・思考等の知的要素を他の精神作用の基となすに對して、慾動・衝動・感動等、總ての意志現象を以て、內部經驗內容の基本及び本位となすの說。(主知說・主情說に對して)
しゆ-い-そん 朱彝尊【名】〔人〕支那淸朝の學者。字は錫鬯(シャクチャウ)、竹垞と號す。明史及び一統志の輯撰に與る。著すところ經義攷・明詩綜・文集等あり。康熙四十八年歿す。年八十一。
しゆ-いつ 主一【名】心を一方に集注すること。專一。
主一・無適【句】〔哲〕『論語の學而篇に「敬レ事而信」とありて、註に「敬者主一無適之謂也」とあり、二程全書に「程子曰、主一之謂レ敬、無適之曰レ一」とあり。無適は他に適(ユ)かざる意。主一の字面は古文尙書、無適の語は文子に見ゆ』精神を純一ならしめて、他に移さぬこと。敬(ケイ)。〔程朱學派の語〕
しゆ-いん 酒淫・酒婬【名】酒と色事と。 武道傳來記「歌道一人に心を寄せ、琵琶・琴の翫び、酒婬の種となりて」
しゆ-いん 手淫・手婬【名】已れの手にて、その生殖器を摩擦して、淫欲をもらすこと。
しゆ-いん 手印【名】㊀手の形を捺(オ)したるもの。 東鑑「申二下御手印一」㊁當人の直書、又は自ら署名・華押せるもの。 秀鶴諸「里見誅せられて後、彼が調度の中より、秀賴公の御手印を取出だす」㊂〔佛〕いん(印)㊃に同じ。 平治「大師、手印を以て封ぜらる」
しゆ-いん 朱印【名】㊀朱肉を用ひて押す印。(黑印に對して)㊁室町時代又は江戸時代に、武將が、政務執行に關する文章に、朱肉を用ひて捺(オ)したる印、又これを捺したる文書。こくいん(黑印)參照。
しゆ-いん 主因【名】おもなる原因。
しゆ-いん 修因【名】〔佛〕善因を修すること。 十訓「おほむね後世の修因なりといへども、公請(クジヤウ)に赴く日は、今生(コンジヤウ)の能(ノウ)ともいふべし」
修因感果【句】〔佛〕善惡の因を行ふことによりて、苦樂の果を感ずること。 盛衰記「修因感果究竟にして、彼の卿、寺邊に廻り來る」
しゆ-いん 衆陰【名】多くの陰の氣。 [illegible]「一陽を以て、衆陰をすぶるといっぱ」
じゆ-いん 樹陰【名】樹木のかげ。こかげ。
じゆ-いん 儒胤【名】儒者の後胤。 平治「儒胤を受けて、儒業を傳へずと雖も」
じゆ-いん 呪印・咒印【名】〔佛〕陀羅尼と印契(インゲイ)。
しゆいん-じやう 朱印狀【名】朱印㊁の文書。ごしゆいんじやう。
しゆいん-せん 朱印船【名】しゆいんぶね(朱印船)に同じ。

しゆいん-ち 朱印地【名】武家時代に、朱印狀によりて、社寺などに下付せられし土地。租稅を免ぜられ、賣買を禁ぜられたり。ごしゆいんち。
しゆいん-てんま 朱印傳馬【名】傳馬の一。無賃なるもの。
しゆいん-ぶね 朱印船【名】德川時代に、朱印狀を付與せられて、特に外國貿易に從事することを許されし船。ごしゆいんぶね。奉書船。
しゆう 主【名】しゆ。主君。主人。
主と親とには勝たれぬ【句】主と親とには服從せざる可らず。〔諺語〕
主の緣【句】主從の緣。三世の緣。
主の前と辷道(スベリミチ)は早く通る【句】主人の前を已む得ず通る場合には、失禮を恐れて、急ぎ通るべし。〔諺語〕
主の威を借る虎【句】『「虎の威を借る狐」より轉化せしものなるべし』主人の威勢を賴みて、權柄顏をなす譬。〔諺語〕
しゆう 宗【名】㊀宗教。宗門。㊁宗教の流派。宗派。
しゆう 衆【名】㊀多くの人。おほぜい。㊁ところのしゆう(所衆)の略。
し-ゆう 雌雄【名】㊀めすと、をすと。牝牡。㊁かちまけ。まさりおとり。 十訓「昔は、雌雄を決して、藝能あらはるるについて」
し-ゆう 鷙勇【名】鷙鳥の如く猛き勇氣。
しゆう 衆【接尾】一群の人數の下に添ふる敬稱。たち。しゆ。 重帷子「御留守御家老衆より仰せつけらるる」
じゆう 從【名】㊀主たる物事に附隨せる物事。㊁けらい。めしつかひ。從者。(主に對して)㊂主謀者に從ひて、罪を犯せるもの。(首に對して)
じゆう 縱【名】『この字の音、正しくはしよう』㊀たて(縱)に同じ。㊁南北。
じゆう 戎【名】㊀たたかひ。いくさ。戰爭。㊁つはもの。兵器。武器。
じゆう 銃【名】こづつ。小銃。銃器。
じゆう (英 Jew)【名】㊀ユダヤ人。㊁『ユダヤ人の性格に本づきていふ』吝嗇なる金持。
しゆう-あしらひ 主あしらひ【名】主人として待遇すること。 一代男「我が女房を、常ならぬ出立(イデタチ)、やとひ腰元・やとひ下女、おのれも長七になって、主あしらひ」
しゆう-い 衆意【名】衆人の意見。多數の意向。
しゆう-い 衆醫【名】多くの醫者。
じゆう-い 戎衣【名】戰爭に出づる時の服、即ち甲冑の類。戎服。軍服。 太平記「皆戎衣にて、前騎・後乘す」
じゆう-い 絨衣【名】羅紗の衣服。
じゆう-い 戎夷【名】えびす。夷狄。戎狄。 太平記「戎夷の掌に墮つべき御悟無かりしかば」
じゆう-いう 從遊【名】隨從して遊びまはること。
しゆう-い-しゆ 雌雄異株【名】〔植〕『英 Dioecious』雌花と雄花と、各別の株に開くもの。例へば柳・公孫樹(イテフ)・大麻(オ)などにおけるが如し。雌雄別株。(雌雄同性に對して) たんせいくわ(單性花)參照。
じゆう-いつ 縱逸【名】『縱の字の音、正しくはしよう』ほういつ(放逸)に同じ。
じゆう-いつ 充溢【名】みちあふるること。
しゆう-いたい 雌雄異體【名】〔動〕『英 Dioecious』雌生殖器と雄生殖器との、別體に具はれるもの、即ち雌雄各個體を異にすること。高等なる動物は大抵これなり。雌雄別體。(雌雄同體に對して)
しゆう-いったい 雌雄一體【名】〔動〕しゆうどうたい(雌雄同體)に同じ。
じゆう-えい 充盈【名】みつること。一杯になること。充滿。
しゆう-えん 終焉【名】㊀『國語の晉の條に「子犯知二文公之安一レ齊而有二終焉之志一也」とあり』身の落ちつき處とすること。㊁命の終。いまはの時。臨終。末期(マツゴ)。 十訓「終焉の時、當生には、必ず今一度奉公の身たらんといへり」
しゆう-おもひ 主思【名】主人のためを思ふこと。主人おもひ。
じゆう-か 銃架【名】小銃を載せ置く臺。
じゆう-かいがん 縱海岸【名】〔地〕『英 Longitudinal coast 縱の字の音、正しくはしよう』山脈の主軸と平行せる海岸。(橫海岸に對して)
しゆっ-かう 崇高【名】すうかう(崇高)に同じ。
じゆっ-かう 戎行【名】行軍又その通路。
じゆう-かう 銃腔【名】銃身に穿てる、銃丸の通過する腔。
しゆう-かう-せん 聚交線【名】〔數〕『英 Concurrent lines 聚の字の音、正しくはしゆ』同一の點を通過する、多くの線。
しゆう-がく 宗學【名】〔佛〕各宗における各自の修學。
じゆう-かぜい 從價稅【名】〔法〕『獨 Wertzoll』物の價格を基として、一定の率によりて賦課する關稅。(從量稅に對して)
じゆう-かぜい-ひん 從價稅品【名】從價稅を課せらるる物品。
じゆう-かぜい-りつ 從價稅率【名】從價稅を課する一定の割合。
しゆう-がふ-しずゐ 聚合雌蕊【名】〔植〕『英 Syncarpous pistil 聚の字の音、正しくはしゆ』複雌蕊の一。各雌蕊の多少相連合するもの。例へば煙草(タバコ)・罌粟(ケシ)・百合(ユリ)における類。(分離雌蕊に對して)
しゆう-がふ-ぢごく 衆合地獄【名】〔佛〕しゆがふぢごく(衆合地獄)を見よ。
しゆう-がふ-ぶつ 聚合物【名】〔法〕『聚の字の音、正しくはしゆ』經濟上、一物として取扱はるるもの。例へば圖書館內の書籍・倉庫內の荷物の類。これに對する所有權は、普通、各箇の物の上に存し、全體を一括したる上に存するものにあらずとの見解に從ふ。
しゆう-がふ-めいし 聚合名詞【名】〔語〕『聚の字の音、正しくはしゆ』がふめいし(合名詞)に同じ。
じゆう-がふ-ゑん 充洽園【名】日蓮宗の第二中興の祖と稱せられたる僧日輝の家塾。加賀國金澤市寺町立像寺に在りたり。
じゆう-がふゑん-がくは 充洽園學派【名】充洽園の學系に屬する一派。
しゆう-かん 終刊【名】最後に刊行したること、又その物。
じゆう-がん 銃眼【名】身體を露出せずに、城外を窺ひ、又は射擊を行はんがために、城壁に穿ちたる孔。昔の狹間(サマ)と呼びしもの、これに相當す。
しゆう-き 終期【名】㊀或事の終る時期。末期。(始期に對して)㊁〔法〕期限の消滅。
しゆう-き 宗規【名】宗教の規則。
しゆう-ぎ 衆議【名】多くの人の意見。群議。
しゆう-ぎ 宗儀【名】一宗の儀式。
しゆう-ぎ 宗義【名】各宗教の旨とする義。一宗の義理。
じゆう-き 銃器【名】小銃又は拳銃の類。
じゆう-き 戎器【名】へいき(兵器)に同じ。
じゆう-き 從騎【名】騎馬の從者。
じゆう-きう 從舅【名】母の從父兄弟。
じゆう-き-けいさつ 戎器警察【名】〔法〕高等警察の一。戎器の取締に關するもの。
じゆう-ぎし 從儀師【名】じゆうゐぎし(從威儀師)に同じ。
しゆう-ぎ-はん 衆議判【名】しゆぎはん(衆議判)を見よ。
しゆう-きよく 終極【名】をはり。はて。
しゆう-きよく 終局【名】㊀『きよく(局)㊂を見よ』碁をうち終ふること。㊁はて。をはり。事の終。終結。
しゆう-きよく-げんり 終局原理【名】〔哲〕『英 Last principle』こんぽんげんり(根本原理)に同じ。
しゆう-きよく-しゆくしゆ 終局宿主【名】〔動〕しゆくしゆ(宿主)を見よ。
しゆう-きよく-はんけつ 終局判決【名】〔法〕『英 Final judgment』判決の一。民事訴訟事件の全部又は一部を、各審級にて終局せしむるもの。(中間判決に對して)
しゆう-ぎ-ゐん 衆議院【名】帝國議會の一部。一般の人民より選擧したる議員によりて成立てるもの。(貴族院に對して)
しゆう-ぎゐん-きそく 衆議院規則【名】憲法第五十一條によりて制定したる衆議員內部の整理に關する規則。
しゆう-ぎゐん-ぎちやう 衆議院議長【名】

衆議院の議長。衆議院議員より三名の候補者を選み、その中より勅任せられ、衆議院の秩序を保ち、議事を整理し、院外に對して議員を代表し、議會閉會後に於ても、尙議院の事務を指揮す。
しゆうぎゐん-ぎゐん 衆議院議員【名】衆議院を組織する議員。庶民の公選によるもの。任期を四箇年とす。代議士。
しゆうぎゐんぎゐん-せんきよはふ 衆議院議員選擧法【名】衆議院議員の選擧權・被選擧權・選擧區・選擧の方法等に關して規定せる法律。明治三十三年公布、後、同三十五年・四十一年・四十三年大正八年の改正を經たり。
しゆうぎゐん-じむきよく 衆議院事務局【名】衆議院の議事・記錄・筆記・印刷・會計等に關する庶務を掌理する行政機關。書記官長・書記官・屬・速記・技手・守衞長・守衞番長等の職員を置く。
しゆうぎゐん-しよきくわんちやう 衆議院書記官長【名】衆議院事務局の職員の一。衆議院議長の指揮を受け、局中の事務を監督し、公文に署名する勅任官。
しゆう-ぐ 衆愚【名】多數の愚人。 太平記「衆愚の愕愕たるは、一賢の唯唯たるに如かず」
じゆう-ぐ 戎具【名】いくさの用具。戎器。「兵器。
しゆう-ぐん 終軍【名】〔人〕支那漢代の人。字は子雲、少にして學を好み、善く文を屬す。武帝の時、博士に擧げられ、のち諫議大夫に至る。
終軍、繻(じゆ)を棄つ【句】『漢書の終軍傳に見ゆ。繻は帛の義』終軍はじめ關に入る時、關吏繻の一片を與へて、關を出づる時の印となさしめんとしたるに、軍繻を棄てて、われ關を出づる時は、顯官・大職に在るべし。何ぞ割符の用あらんといひし故事。「ること。
じゆう-ぐん 從軍【名】軍に從ひて、出陣す
じゆうぐん-きしや 從軍記者【名】新聞社・雜誌社などの派遣員にて、從軍する記者。
じゆうぐん-きしやう 從軍記章【名】凱旋後、すべての從軍者及び功績ある軍務幇助者に授くる記章。「褒。
じゆうぐん-ねん 從軍年【名】從軍せる年
じゆうぐん-はい 從軍牌【名】じゆうぐんきしやう(從軍記章)の舊稱。
しゆう-くわ 衆寡【名】人數の多きと少なきと。多勢と無勢と。
衆寡敵せず【句】多數に對する小數にて、勝目なし。
しゆう-くわ 穗花【名】〔植〕『英 Spikelet』禾本科植物の穗の一部を搆成する小穗。中央に總梗あり、これより一乃至數箇の小花を生ず。
じゆう-くわ 銃火【名】彈丸の發する時に、銃口より迸(ほとばし)る火光。
銃火を交ふ【句】銃戰を開始す。
しゆう-くわい 衆會・聚會【名】多人數の集會すること、又その集會。
じゆう-くわん 縱觀【名】『縱の字の音、正しくはしよう』ほしいままに見物すること。自由に見ること。縱覽。
じゆう-くわん 縱貫【名】『縱の字の音、正しくはしよう』竪につらぬくこと。南北につらぬくこと。
じゆう-ぐわん 銃丸【名】小銃に用ふる彈丸。鐵砲のたま。てっぽうだま。
じゆうくわん-てつだう 縱貫鐵道【名】『縱の字の音、正しくはしよう』或地域を南北に貫通せる鐵道。「よ。
じゆう-けい 銃刑【名】銃殺の刑。軍律に依りて銃殺する處罰。
しゆう-げい 衆藝【名】多くの藝。諸藝。
しゆう-けい 崇敬【名】すうけい(崇敬)を見
じゆう-けい 從兄【名】伯叔父の子にて、己れより年長なる者。年上の男のいとこ。從父兄。(從弟に對して)「語)を見よ。
しゆうけい-ご 崇敬語【名】すうけいご(崇敬
じゆうけい-てい 從兄弟【名】從兄と從弟と。父又は母のをひ。男のいとこ。
しゆう-けう 終敎【名】〔佛〕五敎の一。大乘終極の說法にして、眞如緣起の理を說けるもの。
しゆう-けう 宗敎【名】『宗は主要の義、自己の信崇し主張する要旨をいふ』神・佛等、人生に超越せる崇高・偉大なる或物に對する畏敬の念を基とし、信仰・祭祀等を行ひて、慰藉・安心・幸福を得、以て人生の缺陷を補はんとするもの。神道・佛敎・耶蘇敎の類。しゆうし。しゆうもん。
しゆうけう-いしき 宗敎意識【名】〔哲〕『英 Religious consciousness』宗敎的主體を認めて、畏敬崇拜し、服從・信賴する意識現象の總稱。宗敎心。
しゆうけう-えんげき 宗敎演劇【名】宗敎藝術の一。宗敎を題材としたる演劇。宗敎劇。
しゆうけう-えんぜつ 宗敎演說【名】宗敎に關する演說。
しゆうけう-おんがく 宗敎音樂【名】〔音〕宗敎藝術の一。宗敎を題材としたる音樂。
しゆうけう-か 宗敎家【名】宗敎を信ずる心篤き人。主として、宗敎のために盡し、又は宗敎を宣傳するを務とする人。
しゆうけう-がく 宗敎學【名】『獨 Religionswissenschaft 又 Religionslehre』宗敎に關する科學的研究をなす學科。
しゆうけう-きやう 宗敎狂【名】宗敎に狂熱すること、又その人。
しゆうけう-ぎやうせい 宗敎行政【名】〔法〕公益行政の一。宗敎に關する取締を目的とするもの。
しゆうけう-きよく 宗敎局【名】文部省の一局。文部大臣の管理に屬し、宗敎各派に關する事務を取扱ふ所。もと內務省に屬し、社寺局の擴張されしもの。
しゆうけう-ぐわ 宗敎畫【名】〔美〕宗敎藝術の一。宗敎上の人物・事蹟を題材としたる繪畫。
しゆうけう-げいじゆつ 宗敎藝術【名】〔美〕宗敎上の人物・事蹟を題材としたる藝術。古代の藝術は多くこれに屬し、宗敎と共に消長せり。
しゆうけう-けういく 宗敎敎育【名】宗敎によりて、敎育を施すこと。
しゆうけう-げき 宗敎劇【名】しゆうけうえんげき(宗敎演劇)に同じ。
しゆうけう-しん 宗敎心【名】宗敎を信ずる心。信心。
しゆうけう-てうこく 宗敎彫刻【名】〔美〕宗敎藝術の一。宗敎を題材としたる彫刻。
しゆうけう-てつがく 宗敎哲學【名】〔哲〕『英 Philosophy of religion 又 Religious philosophy』哲學說を以て宗敎を解釋・說明し、宗敎の哲學的性質並びに必然性を明かにせんとするもの。
しゆうけう-びじゆつ 宗敎美術【名】〔美〕宗敎に關する美術。
しゆうけう-ろん 宗敎論【名】宗敎に關する論說。「こと。
じゆう-げき 銃擊【名】小銃にて射擊する
しゆう-けつ 終結【名】一をはり。はて。結局。二〔數〕『英 Conclusion』假設より推理を經て、最後に達する結果。
しゆう-けつ 終決【名】一全く決定すること。きまりの附くこと。二徵兵事務に關する裁決。卽ち現役兵の徵募・補充兵の編入、要員超過徵兵免除及び兵役免除等のことを裁決するもの。
じゆう-けつ 充血【名】〔醫〕『羅 Hyperaemia』刺戟ありて、その部に、血液輻輳し、しかも白血球などの浸出せぬもの。(貧血に對して) うっけつ(鬱血)參照。
しゆうけつ-しゆくしゆ 終結宿主【名】〔動〕しゆうきよくしゆくしゆ(終局宿主)に同じ。
しゆう-げふ 終業【名】業を終ふること。
じゆう-げふ 從業【名】業務に從ふこと。就業。
じゆうげふ-しや 從業者【名】一從業するもの。從業員。二〔法〕營業主・使用人等、直接に營業に從事する人。「じ。
じゆうげふ-ゐん 從業員【名】前條[一]に同
しゆう-げん 衆言【名】衆人のことば。
じゆう-けん 戎軒【名】一戰場に用ふる大車。二いくさ。戰爭。「筆を棄てて、戎軒を事とす」
じゆう-けん 銃劍【名】一こづつとつるぎと。二兵卒の銃の先端に附くる劍。常に

は、腰に下ぐ。けん。三じゆうさう(銃槍)に同じ。
じゆう-げん 縱言【名】『縱の字の音、正しくはしよう』しようげん(縱言)に同じ。
じゆうけん-じゆつ 銃劍術【名】じゆうさうじゆつ(銃槍術)に同じ。
しゆうげん-せんじ 宗源宣旨【名】吉田・卜部(うら)の兩家より、私に宣旨と稱して、神社に神位を授くる位記。
しゆう-こ 終古【名】久しき年月。永遠。(過去にも將來にもいふ)
しゆう-こう 衆口【名】多勢のことば。
衆口金を銷す【句】次條に同じ。 吉野忠臣「衆口金を銷し、積毀骨を流すなどと古き書にも申す如く」
衆口、金を鑠(と)かす【句】『國語の周の條に「衆心成レ城、衆口鑠レ金」、戰國策の魏國の條に「臣聞積羽沈レ船、群輕折レ軸、衆口鑠レ金」とあり』多數の人のいふ言は驚くべき力あり。言葉の下に金を消す。〔諺語〕
じゆう-こう 銃口【名】小銃の筒口。
じゆうこう-ちやう 銃工長【名】りくぐんじゆうこうちやう(陸軍銃工長)の略。
じゆう-こく 戎國【名】えびすの國。 太平記「華夷變じて、戎國の民と成りぬれば」
じゆう-こく 縱谷【名】〔地〕『英 Longitudinal valley 縱の字の音、正しくはしよう』その地方の山脈の主軸の方向と平行して走れる溪谷。(橫谷に對して)
しゆう-ころし 主殺【名】主君を殺すこと、又その人。しゆごろし。弑逆。「涯。
しゆう-さい 終歲【名】一一年中。二一生
しゆう-さう 衆草【名】多くの草。
しゆう-さう 衆相【名】多くの相好。 榮花「所觀の衆相は、卽ち是れ三身卽一の相好光明なり」
じゆう-さう 戎裝【名】出陣の出立。戎服。
じゆう-さう 銃創【名】小銃にて擊たれたるきず。たまきず。銃傷。
じゆう-さう 銃槍【名】一銃とやりと。二銃の先に劍を附けて、槍に代用するもの。劍つき鐵砲。銃劍。
じゆうさう-じゆつ 銃槍術【名】銃槍を用ひて、己れを防ぎ、敵に當る技術。銃劍術。
じゆうさく-き 縱削機【名】『縱の字の音、正しくはしよう』しようさくき(縱削機)に同じ。
じゆう-ざげん 從坐減【名】中古の法律にて、從犯によりて、罪に坐したる者の減等。
じゆう-さつ 銃殺【名】小銃にて、罪人を殺すこと。多くは軍律による死刑なり。
しゆう-さん 聚散【名】『聚の字の音、正しくはしゆ』あつまると散ると。集散。
じゆう-さんか 從參加【名】〔法〕『獨 Nebenintervention』訴訟參加の一。他人間の訴訟の結果に利害關係を有する第三者が、原告もしくは被告を補助するために、その訴訟に參加すること。例へば債權者と主なる債務者との間の訴訟に、保證人もしくは保證人たりし者が參加して、債務者を補助し、父母の間に起れる離婚の訴訟に、子が參加する類。補助參加。(主參加に對して)
じゆうさんか-にん 從參加人【名】『獨 Nebenintervenient』〔法〕從參加をなす人。(主參加人に對して)
しゆうさん-くわ 聚繖花【名】〔植〕『英 Cyme 聚の字の音、正しくはしゆ』聚繖花序をなして開く花。
しゆうさん-くわじよ 聚繖花序【名】〔植〕『英 Cymose inflorescence 聚の字の音、正しくはしゆ』花序の一。外觀は多少總狀花序・繖形花序等のごとき無限花序に類すれども、實は有限花序の原式にして、各花梗は皆まづ頂花を著け、漸次その下方なる花芽の發達するもの。頂端は、扁平なると、凹形なることとあり。
しゆうさん-じやう 聚繖狀【名】〔植〕『聚の字の音、正しくはしゆ』聚繖花をなせる形。
しゆう-し 衆士【名】多數の人士。諸士。
しゆう-し 衆子【名】多くの子。
じゆう-し 螽斯【名】〔動〕一いなご。いなむし。二きりぎりす(螽斯)の異稱。
螽斯詵詵(しんしん)【句】『詩經の周南螽斯篇に「螽斯羽詵詵兮、宜爾子孫振振兮」とあるに本づく。詵詵は和ぎ集まるさま。螽斯は嫉妬せざる蟲なるが故に、子孫衆多なりとの俗說によりていふ』子孫の繁榮する譬。
螽斯の化(くわ)【句】前條を見よ。 太平記「螽斯の化行はれて、桑后・元妃の外、君恩に誇る官女、甚だ多かりければ」
しゆう-し 宗旨【名】一宗門の趣旨。宗敎の敎義。(主に佛敎のにいふ) 傾城反魂香「元の座敷へ入人は、宗旨宗旨の手向草」二しゆうもん(宗門)に同じ。三己れの從事する職業、又己れの嗜好。
宗旨を變ふ【句】從來の主義方針を一變す。今まで崇拜せしところのものを變ふ。
しゆう-し 宗師【名】〔佛〕『そうし(宗師)を見よ』一正法(しやうぼふ)を傳へて、衆人に尊崇せらるる者。二各宗の宗義を開きし人を、その宗門にて尊びていふ語。例へば眞宗にて、支那唐の善導を指していふ類。
しゆう-し 終止【名】をはり。しまひ。
しゆう-し 終始【名】をはりはじめ。本末。始終。
終始一貫【句】次條に同じ。〔諺語〕
終始一(いつ)の如し【句】『荀子の禮論篇に「愼レ終如レ始、終始如レ一」とあるに本づく』始より終まで、かはらず。終始一貫。〔諺語〕
しゆう-し 終始【副】常に。しじゆう。
しゆうし-きがう 終始記號【名】〔音〕樂曲を反復して奏し、中央にて終止すべきことを示す記號。二本の縱線の上に延長記號、卽ち(・又はその代りに Fine もしくは Fin の文字を書す。樂曲反復の場合に必要を生ずる記號なるが故に、反始記號又は連續記號に伴ひて用ひらる。
じゆう-し 從子【名】をひ(甥)に同じ。
じゆう-し 從士【名】從者たるさむらひ。
じゆう-し 從姉【名】伯叔父の子にて、自分より年上なる女。年上なる女のいとこ。(從妹に對して)
じゆう-し 從詞【名】〔語〕『從の字の音、正しくはしよう』せつめいご(說明語)に同じ。
じゆう-し 從死【名】死にしあとを慕ひて死ぬること。
じゆう-し 縱恣【名】『縱の字の音、正しくはしよう』ほしいまま。放縱・自恣。
じゆう-し 戎士【名】兵士。軍人。
じゆう-じ 戎事【名】軍事。兵事。
じゆう-じ 充耳【名】一『詩經の國風淇奥篇に「充耳琇瑩」とあり』耳をおほふ飾。二『詩經の邶風旄丘篇に「叔兮伯兮、褎如充耳」とあり』耳のきこえぬさま。
じゆう-じ 從事【名】その業をなすこと。その事にしたがふこと。
しゆう-しう 聚收【名】『聚の字の音、正しくはしゆ』あつめて取入るること。
しゆうし-がへ 宗旨變【名】『「宗旨を變ふ」を見よ』從來の主義を變ふること。
しゆうし-けい 終止形【名】〔語〕活用言の終止段の形。截斷形。
しゆうし-げん 終止言【名】〔語〕活用言の終止形なるもの。斷止言。截斷言。
しゆうし-じゆん 宗旨順【名】宗旨によりて定まれる席順。
しゆうし-じようもん 宗旨證文【名】てらうけじようもん(寺請證文)に同じ。
しゆうし-だん 終止段【名】〔語〕活用言の語尾變化の、終止言として用ひらるる段、卽ち第三段。
しゆうし-ちがひ 宗旨違【名】一信仰する宗敎の互に異なること。二人の嗜好の、互に異なること。例へば、酒を好むと菓子を好むとの類。「こと。
じゆう-じつ 充實【名】すきまなく滿つる
しゆう-じつ 終日【名】朝より夕まで。ひ「もす。
ねもす。
しゆう-じつ 終日【副】朝より夕まで。ひね
しゆうし-てがた 宗旨手形【名】てらうけじようもん(寺請證文)に同じ。
しゆうし-にんべつ-あらため 宗旨人別改【名】江戸時代に、耶蘇敎禁遏(きんあつ)の手段として、幕府の行ひし方法。人別帳に基きて、一家一人毎に調べ、各自印形を押捺(おうなつ)せしめ、更にその家の檀那寺をして、

その宗旨に屬する旨を證明せしめしこと。天草(ｱﾏｸｻ)の騒亂以後實施せられ、明治維新に至るまで繼續し、九州にては、殊に嚴密に行はれたり。
しゆうしにんべつあらため-ちやう 宗旨人別改帳【名】檀那寺の證明を經たる人別帳。毎年三月より六月頃までに、庄屋・名主・判元見屆支配役所等に差出す定なりき。てらうけじやうもん(寺請證文)參照。
しゆうし-はふ 終止法【名】〔音〕せいしはふ(靜止法)に同じ。
しゆう-しふ 聚集【名】『聚の字の音、正しくはしゆ』あつむること。集聚。
しゆう-しん 衆心【名】多くの人の心。
衆心、城を成す【句】『國語の周語に「伶州鳩曰、衆心成レ城、衆口鑠レ金」とあるに本づく』多數の人の心合へば、堅きこと城の如し。〔諺語〕
しゆう-しん 終身【名】死ぬるまでのあひだ。一生涯。
しゆう-しん 終審【名】一最後の審問。二〔法〕或事件の終結を告ぐべき、卽ち上訴の途無きに至りし裁判所の審判。通常、上告裁判所の審判が終審なれども、大審院の特別權限に屬するものは、始審にて終審となることあり。
しゆう-しん 崇信【名】すうしん(崇信)を見よ。
しゆう-しん 終身【副】死ぬるまで。終生。
しゆう-じん 衆人【名】一多くの人。おほぜい。二なみなみの人。普通人。
衆人廣坐【句】『史記の信陵君傳に「自迎-嬴於衆人廣坐之中-」とあり』大勢の坐する所。
じゆう-しん 從臣【名】扈從する臣下。
じゆう-しん 縱震【名】〔地〕『英 Longitudinal earth quake 縱の字の音、正しくはしよう』斷層地震に於て、その震源たる斷層線の方向が、その地方を作れる山脈の主軸と平行せる時のもの。山脈の傾斜急なる側面に多し。(横震に對して)
じゆう-しん 銃身【名】小銃の主要部。銃床によりて支持せられ、彈丸をこめて、發射の際、通過せしむる圓筒形の部分。現時は、鋼を用ひて造る。
じゆう-じん 充牣・充仞【名】『牣はみつる義』滿つること。
しゆうしん-ぎゐん 終身議員【名】辭職せざる限は解職せらるることなき議員。卽ち貴族院の皇族議員・公爵議員・侯爵議員及び勅選議員。
しゆうしん-くわん 終身官【名】有罪の宣告又は懲戒の處分の外、自ら辭職せざる限は免ぜらるることなき官。卽ち裁判官及び陸・海軍武官。
しゆうしん-さん 終身產【名】或特定人の生存中を限りて、その所有を許し、これが繼承を許さざる財產。
しゆうしん-せいめいほけん 終身生命保險【名】しばうほけん(死亡保險)に同じ。
しゆうしん-ちようえき 終身懲役【名】〔法〕むきちようえき(無期懲役)の舊稱。(改定律令の語)
しゆうしん-ていききん 終身定期金【名】〔法〕終身定期金契約の目的たる金錢その他の物。
しゆうしんていききん-けいやく 終身定期金契約【名】〔法〕契約の一。當事者の一方が、自己・相手方又は第三者の死亡するまで、定期に金錢又は物品を相手方又は第三者に給付することを約するもの。
じゆう-しんどう 縱振動【名】〔理〕『縱の字の音、正しくはしよう』振動體、その物の各部の震動の方向が、その物體の長さの方向と一致せる振動。
しゆうしん-ねんきん 終身年金【名】或特定人に對し、死亡するまで給與する年金。
しゆうしん-ほけん 終身保險【名】〔商〕しばうほけん(死亡保險)に同じ。
しゆうしん-ろく 終身祿【名】その者の死亡するまで給與せらるる家祿・賞典祿。(永世祿・年限祿に對して)
じゆう-しや 從者【名】隨從する者。とも。ずさ。
しゆう-しやう 終正【名】しきしやう(式正)に同じ。
しゆう-しやう 宗性【名】〔人〕華嚴宗の學僧。藤原隆兼の子。大和の東大寺に學び、大安寺に住す。後嵯峨上皇のために、華嚴を說き、權大僧都に任ぜらる。文應元年勅に依りて、東大寺別當に補し、住すること三年。寂年詳かならず。年七十。著作多し。
しゆう-じやう 衆情【名】多くの者の心。
じゆう-しやう 銃床【名】小銃の銃身を裝置し、これを支持する部分。現時は、多くは胡桃(ｸﾙﾐ)の材を用ふ。
じゆう-しやう 銃傷【名】てつぱうきず。銃創。
しゆう-しやく-にろん 宗釋二論【名】〔佛〕宗論と釋論と。
じゆうしや-むこ 從者聟【名】從者の聟。懸八卦柱曆「これや三毛よ、惡い男持つなよ、…このさんが從者聟、よい雄猫添はそぞへ」
じゆう-しゆ 銃手【名】小銃にて射撃する人。うちて。
しゆう-じゆう 主從【名】主君と從者と。
主從は三世(ｾﾞ)【句】主從の關係は、來世の次の世までも、緣有り。三世の緣。(「親子は一世」「夫婦は二世」に對して)〔諺語〕
じゆう-じゆん 從順【名】一正しきに從ふこと。二順序の正しきこと。順從。三じうじゆん(柔順)に同じ。
しゆう-しよ 衆庶【名】しゆうじん(衆人)に同じ。
しゆう-しよう 聚訟【名】『後漢書の曹褒傳に「帝曰、諺言作-舍道傍-三年不レ成、會禮之家、名曰-聚訟-」とあるに本づく。聚の字の音、正しくはしゆ』或事件に對し、議論區區に分れて、一定せざること。
しゆう-しよう 衆證【名】一多くの證人。二〔法〕特に、三人以上の證人。〔鎌倉時代の語〕
しゆう-じよう 宗乘【名】〔佛〕『乘は大乘・小乘などの乘に同じ。だいじよう(大乘)參照』一宗の宗義及び教典。殊に禪門及び淨土門にて、自家を標榜していふ。宗典の學問。(餘乘に對して)
しゆう-しよく 終食【名】次條を見よ。
終食の間【句】『論語の里仁篇に「君子無-終食之間違-レ仁」とあり』一飯の時間の義。僅かの時間。片時。
しゆう-すぢ 主筋【名】主人たる關係ある身分柄。
しゆう-すゐ 衆水【名】多くの水流。衆流。
しゆう-せい 衆聖【名】多くの聖人。
しゆう-せい 衆星【名】多くの星。
しゆう-せい 衆生【名】多くの生物。しゆじやう(衆生)參照。
しゆう-せい 終成【名】できあがること。成就。
しゆう-せい 終生・終世【名】生命の終るまでの間。一生。終身。畢生。
しゆう-せい 宗制【名】宗教上の制度。
しゆう-せい 終生【副】生命の終るまで。
じゆう-せい 銃聲【名】小銃を發射する聲。
しゆうせい-やく 聚成藥【名】〔植〕『聚の字の音、正しくはしゆ』しゆうやく(聚藥)に同じ。
しゆう-せう 衆少【名】少なきものの多く積り重なれること。
衆少多きを成す【句】『漢書の董仲舒傳に「衆少成レ多、積小致レ鉅」とあり』少なきものも、集まれば多數となる。
しゆう-せう 終宵【名・副】よもすがら。ひとばん。徹夜。終夕。終夜。
しゆう-せき 終夕【名・副】前條に同じ。
じゆう-せき 充積【名】みちかさなること。
じゆう-せき 充斥【名】みちみつること。充滿。
しゆう-せつ 衆說【名】衆人の說。多數の意見。
しゆう-ぜん 衆善【名】多くの善事。
じゆう-せん 銃戰【名】小銃を用ひてする戰。小銃戰。
じゆう-せん 縱線【名】一『縱の字の音、正しくはしよう』たてのすぢ。二〔音〕『英 Bar』譜表の五線を縱貫して、全曲を等一なる時間を屬する小部分に區劃し、併せて强弱を判明にする直線。一條より成る單縱線と二條より成る複縱線とあり。前者は、ただ樂曲を小分するに用ひ、後者は、樂曲の終結又は段落を示し、また拍子もしくは調子の變更する時に用ふ。せうせつ(小節)參照。
じゆう-ぜん 從前【名】今より前。以前。

しゆう-そ 宗祖【名】一宗の開祖。祖師。
じゆう-そ 從祖【名】祖父の兄弟。おほをぢ。從祖父。
しゆう-そう 衆僧【名】多くの僧侶。衆徒。
じゆう-そう 從僧【名】僧綱・三綱などの僧職に隨從する僧侶。伴僧。平家「法衣、自然に身に纏ひて、肩にかかり、天より黃金の鉢下る。二人の從僧、二人の童子、十人の下僧」
しゆう-そく 終速【名】〔理〕『英 Final velocity』らくそく(落速)に同じ。
しゆう-そく 終熄【名】をはり熄(ﾔ)むこと。
じゆう-そく 充塞【名】みちてふさがること。
じゆう-そく 充足【名】みちたること。みたしたすこと。
じゆう-ぞく 從屬【名】つきしたがふこと、又その人。
じゆうぞく-げんゆりつ 充足原由律【名】〔哲〕次條に同じ。
じゆうそく-げんり 充足原理【名】〔哲〕『英 Principle of sufficient reason』一の事物は、その然有るにつきては理由なかるべからずといふ原理。この原理を單に論理的のものと見れば、根據と歸結との關係、客觀界に移して、實在の方面より見れば、原因と結果との關係を示すものといふべく、從って歸納論理の根據たる齊一律・因果律のごときは、この原理の一部と見做すべきものなり。充足原由律。原由律。
じゆうそ-けいてい 從祖兄弟【名】從祖父の子。いやいとこ。再從兄弟。
じゆうそ-そふぼ 從祖祖父母【名】父の伯叔父母。祖父母の兄弟姉妹。
じゆう-そつ 從卒【名】一つきしたがふ兵卒。二各將校に專屬して、その公務上の使役に服する兵卒。品行方正・成績頁好なる者を選びて任ず。
じゆう-そふ 從祖父【名】父の從父兄弟。いとこをぢ。おほぢをぢ。
じゆうそ-はくしゆくふぼ 從祖伯叔父母【名】次條に同じ。
じゆうそ-ふぼ 從祖父母【名】從祖祖父母。
じゆうそ-ぼ 從祖母【名】從祖父の妻。いとこをば。おほをば。
じゆう-そん 從孫【名】兄弟・姉妹の孫。
しゆう-た 衆多【名】數の多きこと。許多。
しゆう-たい 宗體【名】宗旨の立てかた。宗義の實體。謠曲(放下僧)「われらが宗體と申すは教外(ｹｳｹﾞ)別傳にして、言ふも言はれず、說くも說かれず、言句に出せば、教に落ち、文字を立つれば宗體に背く」
じゆう-たい 銃隊【名】一銃卒を以て組織せる軍隊。二江戶幕府の銃卒の軍隊。文久三年創設。老中の支配に屬し、小筒組とも鐵砲組とも呼びたり。三〔兵〕銃を執りて、隊伍を編成せる水兵。その陸戰のために上陸するを、海軍陸戰隊又は略して陸戰隊といふ。
じゆう-たい 縱隊【名】『縱の字の音、正しくはしよう』縱列に組みたる隊形。軍隊にては、行軍及び夜間の攻擊等に用ひ、行軍縱隊・途上縱隊・全距離縱隊等の別あり。(横隊に對して)
しゆう-たいせき 終堆石【名】〔地〕『英 Terminal moraines』たいせき(堆石)を見よ。
じゆうたい-わうたい 縱隊橫隊【名】『縱の字の音、正しくはしよう』縱隊を數箇竝列したる隊形。
じゆう-たう 充當【名】一あてはまること。あてはむること。二〔法〕『佛 Imputation des payments』同一の債權者と債務者との間に、同種の目的を有する數箇の債權存する場合に、債務者がその全部の債權を消滅せしむるに足らざる辨濟をなせる時、その數箇の債權の中、消滅すべきものを定むること。充當權を有する者は、第一に辨濟者にして、辨濟者これを行使せざる場合には、辨濟受領者これを爲すを得。兩者共にこれを爲さざる場合には、法定の順序に從ふ。
しゆう-たうた 雌雄淘汰【名】〔動〕『英 Sexual selection』自然淘汰の一種。雄が雌の愛を買ひ、又は他の雄を倒して、雌を獨占せんとする天性のため、永年間に、漸次淘汰せられて、雄の色彩・音聲・形狀等の殊更に優ぐれたるものとなること。例へば鷄の雄の羽毛の美なる、鶯の雄の美聲なる、獅子の牡(ｵｽ)に鬣(ﾀﾃｶﾞﾐ)ある類。英國のダアキン(C. Darwin)の唱道に係る。
しゆう-だふし 主倒【名】主人の家をほろぼすこと。主人に迷惑をかくること。
じゆう-たん 絨毯【名】『英 Carpet』毛・麻・綿などの絲を用ひて、平地又は天鵞絨(ﾋﾞﾛｰﾄﾞ)のごとく花紋を織出したる厚き織物。もと舶來品にて、床の敷物又は鞄(ｶﾊﾞﾝ)などに用ふ。段通(ﾀﾞﾝﾂｳ)のごときも、この一種なり。
じゆう-だん 銃彈【名】小銃の彈丸。
じゆう-だん 縱斷【名】『縱の字の音、正しくはしよう』たてに切斷すること。(横斷に對して)
じゆうだん-めん 縱斷面【名】『縱の字の音、正しくはしよう』縱斷したる物の斷面。(横斷面に對して)
じゆう-ぢん 銃陣【名】銃隊にて組織したる陣。
じゆう-ぢん 縱陣【名】『縱の字の音、正しくはしよう』〔兵〕各艦の首尾線の一直線內にある陣形。その單列なるを單縱陣、各小隊又は分隊ごとに縱陣を作りて二列もしくはその以上なるを、小隊縱陣・分隊縱陣と呼ぶ。
じゆう-ぢやう 戎仗【名】古、軍隊にて用ひし鼓・吹・觿・鉦などの類。
しゆう-ちゆう 衆中【名】一多くの人人の中。「衆中に辱む」二なかま。同僚。曾我「虎が曆、所所に當番の衆中はなきか」三江戶時代に、評定所に出でて事を議せし、三奉行・大目付・目付などの稱。
しゆう-ぢよ 衆女【名】多くの女。
しゆう-づら 主面【名】主らしきかほ。(主に罵りていふ)
じゆう-てい 從弟【名】をぢの子の、自分より年下の男なるもの。年下の男のいとこ。從父弟。(從兄に對して)
じゆう-てい 縱堤【名】『縱の字の音、正しくはしよう』ていばう(堤防)を見よ。
しゆう-てう 終朝【名】夜あけより正午までの間。朝の間。
しゆう-てき 衆敵【名】多くの敵。
じゆう-てき 戎狄・戎翟【名】えびす。夷狄。太平記「戎翟の旌旗、天を掠めて」
しゆう-でし 衆弟子【名】〔佛〕しゆでし(衆弟子)を見よ。
しゆう-てん 終點【名】一最終の箇處。二電車などの、線路の盡くる處。
しゆう-てん 宗典【名】〔佛〕一宗の教義を述べたる經文・典籍。
じゆう-てん 充塡【名】つめふさぐこと。つまりふさがること。塡充。
じゆう-でん 充電【名】〔理〕ちくでん(蓄電)に同じ。
じゆうてん-かしやう 充塡假晶【名】〔鑛〕『英 Pseudomorphism by infiltration』一鑛物のありし跡に塡充して生じたる假晶。
じゆうてん-くわうしやう 充塡鑛床【名】〔地〕岩石中の空所に充塡して成れる鑛床。
しゆうでん-くわん 聚電環【名】『聚の字の音、正しくはしゆ』〔理〕すりつぷりんぐに同じ。
しゆう-と 宗徒【名】宗門の信者。信徒。
しゆう-と 衆徒【名】〔佛〕しゆと(衆徒)を見よ。
しゆう-ど 衆怒【名】衆人のいかり。衆忿。
衆怒犯し難し【句】『左傳の襄公十年の條に「子產曰、衆怒難レ犯、專レ欲難レ成」とあるに本づく』衆人の怒には猥りに當るべからず。〔諺語〕
じゆう-とう 充棟【名】『「牛に汗し、棟に充つ」を見よ』棟木に屆くほど、書物の多きこと。
しゆう-とうしゆ 雌雄同株【名】〔植〕『英 Monoecious』雌花と雄花とを同株に著くるもの。例へば胡桃(ｸﾙﾐ)・榛(ﾊｼﾊﾞﾐ)・胡瓜(ｷｭｳﾘ)などにおけるもの、これなり。(雌雄異株に對して) たんせいくわ(單性花)參照。
しゆう-とうたい 雌雄同體【名】〔動〕『英 Hermaphrodit』雌雄の兩生殖器を一箇體內に具備するもの。下等動物殊に寄生蟲に多く、脊椎動物中にては、盲鰻(ﾒｸﾗｳﾅｷﾞ)その唯一の奇例にして、時期を異にして、同一個體より、或は精蟲を生じ、或は卵子を生ず。雌雄一體。(雌雄異體に對して)
しゆう-とく 宿德【名】しうとく(宿德)に同じ。

しゆう-とくぶん 主德分【名】從者は己が仕ふる主人に德分を附くべきこと。
しゆう-どり 主取【名】主人に仕ふること。
しゆうなん-ざん 終南山【名】〔地〕支那陝西(せんせい)省西安府城の南に在る山。秦嶺山脈中の一峰。南山。
しゆう-ねん 終年【名】㊀年の始より終までの間。一年中。㊁天年を終ふるまでの間。一生涯。
しゆう-は 衆葩【名】多くの花。
しゆう-は 宗派【名】㊀宗門の分派。㊁流儀。流派。
じゆう-は 銃把【名】銃床の凹みたる部分、即ち照準・發射の際、右手にて握るところ。だいじり。
じゆう-は 縱波【名】『縱の字の音、正しくはしよう』㊀船の首尾に平行して打つ波。㊁〔理〕『英 Longitudinal wave』波動の傳播する媒質の各部の振動が、波の進行の方向に平行なるもの。この波は、その媒質中に、疎密の兩部を生じ、この疎密相隔てたるものが、波動の源より擴り出づ。音波はその一例なり。疎密波。(橫波に對して)
じゆう-ば 戎馬【名】戰爭に用ふる馬。軍馬。
しゆう-はい 崇拜【名】すうはい(崇拜)に同じ。
しゆう-はい 衆輩【名】多くのともがら。數多のやから。
しゆう-はう 衆芳【名】多くのかうばしき花。群芳。
しゆう-はう 衆邦【名】多くの國。群邦。
しゆう-ばう 衆望【名】衆人の屬望。
じゆう-はう 銃砲【名】小銃と大砲と。
じゆうはうくわやくるゐ-とりしまり-はふ 銃砲火藥類取締法【名】明治三十二年法律を以て公布せられたる銃砲及び火藥類の取締に關する法規。
じゆうはう-しやう 銃砲商【名】銃砲を販賣すること、又その人。
じゆう-はふ 從法【名】〔法〕けいしきはふ(形式法)に同じ。(主法に對して)
しゆう-はん 終判【名】しゆうしん(終審)に同じ。
じゆう-はん 從犯【名】〔法〕二人以上にて

罪を犯す場合に、從たる地位に立つこと、即ち正犯を補助(ほじよ)すること、又その犯人。正犯を教唆(けうさ)したる場合も、これに準ぜらる。(正犯に對して)
從犯の輕減【句】〔法〕從犯なるの故を以て、正犯の刑より減輕すること。
從犯の從犯【句】〔法〕かんせつじゆうはん(間接從犯)に同じ。
じゆうはん-しや 從犯者【名】犯罪に關し、從たる地位にある者。
しゆう-び 終尾【名】をはり。しまひ。
しゆう-び 崇美【名】すうび(崇美)に同じ。
しゆう-び 衆美【名】多くの美しき又はよき物事。
じゆう-ひ 從婢【名】隨從する下婢。めしつかひ女。
じゆう-び 戎備【名】ぐんび(軍備)に同じ。
じゆう-び 充備【名】みちそなはること。充分に具備すること。
じゆう-び 充美【名】充ち備はりて、美しきこと。
しゆう-ひでり 主旱【名】仕ふべき主人のなきこと。雪女五枚羽子板「主ひでりはいかず、斯波に扶持を受けんとは勿體なし」
しゆう-ひやう 衆評【名】衆人の批評。
しゆう-びやう 衆病【名】多くの病氣。しゆびやう(衆病)參照。
しゆう-ふ 衆夫【名】㊀多くの男。㊁多くの夫。
しゆう-ふ 衆婦【名】㊀多くの婦女。㊁多くのつま。
しゆう-ふ 衆父【名】多くの父。衆人の父。
じゆう-ふ 從父【名】をぢ(伯父・叔父)に同じ。
じゆう-ぶ 從部【名】せつめいぶ(說明部)に同じ。
しゆう-ふう 終風【名】終日吹く風。
しゆう-ふう 宗風【名】㊀その宗門又は宗師(しゆし)獨特の風儀。太平記「寺を立て、宗風を開基するに」㊁家元の流儀。
じゆう-ふく 銃腹【名】すあひに同じ。
じゆう-ふく 戎服【名】㊀じゆうい(戎衣)に同じ。㊁やうふく(洋服)に同じ。
じゆう-ふく 從服【名】ふくじゆう(服從)に同じ。
じゆうふ-けい 從父兄【名】じゆうけい(從兄)に同じ。

じゆう-ぶつ 從物【名】〔法〕他物に附屬して、法律行爲の目的となる物。即ち或物の所有者が、その物の常用に供するために、これに附屬せしめたる、自己所有の他の物。(主物に對して)
じゆうふ-てい 從父弟【名】じゆうてい(從弟)に同じ。
しゆう-ふん 衆忿【名】衆人のいかり。衆怒。
しゆう-ぶん 聚蚊【名】『聚の字の音、正しくはしゆ』群りたる蚊(か)。
聚蚊、雷を成す【句】㊀『南史の梁武陵王紀傳に「夏季煩暑、聚蚊成ㇾ雷」とあるに本づく』多くの蚊のうなり、雷の如く聞ゆ。〔諺語〕㊁『漢書の景十三王傳に「中山靖王聞ㇾ樂、對曰、夫衆煦漂ㇾ山、聚蟁成ㇾ雷、朋黨執ㇾ虎、十夫撓ㇾ椎、是以文王拘㆓於牖里㆒、孔子阨㆓於陳蔡㆒」とあり。蟁は蚊に同じ』群小の讒言に譬へていふ語。〔諺語〕
しゆう-ぶん 衆分【名】しゆぶん(衆分)を見よ。
じゆう-ぶん 充分【副】物の充ちたるさま。十分。
しゆう-へい 衆兵【名】多くの兵卒。
じゆう-へい 戎兵【名】武者。兵士。
じゆう-へい 從兵【名】つき從ふ兵。とものつはもの。從卒。手兵。
しゆう-べっしゆ 雌雄別株【名】〔植〕しゆういしゆ(雌雄異株)に同じ。
しゆう-べったい 雌雄別體【名】〔動〕しゆういたい(雌雄異體)に同じ。
しゆうへん-さうしやう 聚片雙晶【名】〔鑛〕『英 Polysynthetic twin 聚の字の音、正しくはしゆ』雙晶の一種。多くの薄き結晶固體が、一つおきに、同一方向に列べるもの。
しゆう-ぼ 衆母【名】㊀多くの母。㊁衆人の母。
じゆう-ほ 充補【名】㊀ほじゆう(補充)㊀に同じ。㊁缺員の官職に任ずること。
じゆう-ぼ 從母【名】母方のをば。
じゆうぼ-い 從母姨【名】前條に同じ。
しゆう-ほう 崇奉【名】すうほう(崇奉)に同じ。

しゆう-ほう 衆峰・衆峯【名】多くの峰。
しゆう-ぼく 衆木【名】多くの樹木。
じゆう-ぼく 從僕【名】召使の男。しもべ。下男。僕。
じゆうぼ-けい 從母兄【名】從母の兄。
じゆうぼ-けいてい 從母兄弟【名】從母の男子。
じゆうぼ-こんてい 從母昆弟【名】前條に同じ。
じゆうぼ-しまい 從母姉妹【名】從母の女子。
じゆうぼ-てい 從母弟【名】從母の弟。
しゆう-ほふ 宗法【名】宗門の法則。
じゆう-まい 從妹【名】をぢの子にて、自分より年下なる女。年下の女のいとこ。(從姉に對して)
しゆう-まう 衆盲【名】㊀多くの盲人。㊁多くの愚かなる者。衆愚。
衆盲、象を評す【句】「群盲象を評す」に同じ。
じゆう-まうふ 絨毛布【名】毛織の布。
しゆう-まつ 終末【名】をはり。はて。終結。
しゆうまつ-しけん 終末試驗【名】一定の學業を修了したる最後に行ふ試驗。
じゆう-まん 充滿【名】滿つること。充斥。
しゆう-みん 衆民【名】多くの民。群民。
しゆう-む 衆務【名】多くの事務。
じゆ-うん 受蘊【名】〔佛〕ごうん(五蘊)を見よ。
しゆう-めい 主命【名】しゆめい(主命)に同じ。
しゆう-めう 衆妙【名】多くの妙理。
しゆう-もく 衆目【名】衆人の目。もろもろの人の觀察。
しゆう-もち 主持【名】主人に事へをる身。しゆじんもち。一代男「或は主持、さはりある人、歸るにまぎれて、出口のあんどんうるさく、橫顏して走り出で」
しゆう-もん 宗門【名】㊀佛教に歸依(きえ)する人の進み入る門。教門。㊁その人、その家の信仰せる佛教。宗旨。㊂〔佛〕禪宗にて、自宗を眞正なる釋迦の教法を傳へたるものとして、自讚していふ語。
しゆうもん-あらため 宗門改【名】㊀しゆう

しにんべつあらため(宗旨人別改)に同じ。㊁しゆうもんあらためやく(宗門改役)の略。
しゆうもんあらため-ちやう 宗門改帳【名】宗旨人別改を記して、幕府の寺社奉行に上申せしめし帳簿。天領・私領を論ぜず、寛文の頃より年毎に施行せり。
しゆうもんあらため-やく 宗門改役【名】江戶幕府の職制の一。各戶に就きて、その歸依せる宗門を調査し、耶蘇教徒の檢察を掌りしもの。舊稱、吉利支丹御支配・切支丹奉行・切支丹役。
しゆうもん-うけあひ 宗門請合【名】德川時代に、寺院にて、その檀家の一につきて、邪宗、即ち耶蘇教・悲田宗・不受不施派等に屬せざる旨を證明せしこと。
しゆう-や 終夜【名】夕より曉までの間。夜どほし。
しゆう-や 終夜【副】夕より曉まで。夜どほし。
しゆう-やう 衆陽【名】おほくの陽氣。
衆陽の長(ちやう)【句】『漢書の季尋傳に「日者衆陽之長」とあるに本づく』たいやう(太陽)の異稱。
しゆう-やく 聚葯【名】〔植〕『英 Syngenesis 聚の字の音、正しくはしゆ』互に連絡して、一の筒狀をなせる葯。聚成葯。
じゆう-やく 銃藥【名】小銃の發射に用ふる火藥。たまぐすり。
しゆうやく-ゆうずゐ 聚葯雄蕊【名】〔植〕『英 Syngenesious stamens 聚の字の音、正しくはしゆ』合生雄蕊の一。葯は相連なりて環狀をなし、花絲の相分離せるもの。菊科に屬する花に見る。
しゆう-よう 衆用【名】多くの用事。
しゆう-よう 主用【名】しゆよう(主用)㊀に同じ。
じゆう-よう 充用【名】あてがひ用ふること。あてはめ使ふこと。
じゆう-よう 從容【名】しようよう(從容)に同じ。
しゆう-らい 衆籟【名】ばんらい(萬籟)に同じ。太平記「衆籟、曉寒うして、月、庭前の松にかかり」
じゆう-らい 從來【名】これまで。今まで。以前。
しゆうらい-の-ざ 衆來座【名】室町幕府

時代の評定衆の會所。また管領職の家の廣間にもいへり。
しゆう-らく 聚落【名】『聚の字の音、正しくはしゆ』一部落をなせる村里。むらざと。
じゆう-らん 縱覽【名】『縱の字の音、正しくはしよう』心のままに見ること。
しゆう-り 衆吏【名】多くの官吏。
しゆう-りう 衆流【名】㊀多くの河。衆水。㊁種種なる流儀。
じゆうり-がひ【名】〔動〕いがひ(貽貝)に同じ。
じゆうりつ-ぜい 從率稅【名】〔經〕臨時發生する事件を課稅の目的とし、一定の稅率に從ひて賦課せる租稅。例へば關稅・消費稅・相續稅の類。
じゆう-りやう 從良【名】藝者の、情夫に受けだされて、その妻となること。
じゆうりやう-ぜい 從量稅【名】〔法〕『獨 Specifische Zölle』關稅の一。貨物の大いさ・目方・箇數・桝目等すべて、數量を標準として賦課するもの。(從價稅に對して)
じゆうりやうぜい-ひん 從量稅品【名】從量稅を課せらるる物品。
じゆうりやうぜい-りつ 從量稅率【名】從量稅を課する一定の率。
しゆうりやうぜん-くわ 雌雄兩全花【名】〔植〕りやうせいくわ(兩性花)に同じ。
しゆう-りよ 衆慮【名】多くの人のおもんばかり。
じゆう-りよ 戎虜【名】えびす。夷狄。戎狄。太平記「誘㆓引戎虜㆒」
しゆう-りよく 衆力【名】多くの人の力。
じゆうる〔英 Joule〕【助數】『英人ジユウルの名に因めるもの』仕事の單位、エルグの千萬倍。約〇・二四カロリイの熱量に相當す。
しゆう-るし 朱漆【名】朱色の漆。
じゆうる-の-ていりつ ジユウルの定律〔英 Joule's law〕【名】〔理〕熱と電流のエネルギイとの關係を規定せる定律。即ち輸導の各部にて、單位時間に發する熱は、その部分の抵抗と電流の強さの平方との相乘積に正比例すといふもの。英人ジユウル(J. P. Joule)の創定に係る。

じゆう-るゐ 從類【名】一族・家來の者ども。謠曲「望月」「あへなく射たれたまひし後に、多かりし從類も、ちりぢりになり」
しゆう-れう 終了【名】をはり。終來。終尾。
しゆう-れい 宗令【名】〔佛〕宗門の命令。
しゆう-れう 衆寮【名】〔佛〕關山派の學問僧。甲陽軍鑑「洞家にては江湖僧といひ、關山派にては衆寮と申され候」
じゆう-れつ 縱列【名】『縱の字の音、正しくはしよう』㊀たてのならび。たて。(橫列に對して)㊁〔兵〕彈藥・糧食等を運搬する部隊。主に輜重兵の擔任に屬す。彈藥縱列・架橋縱列・糧食縱列等の種類あり。
じゆう-れつ 縱裂【名】『縱の字の音、正しくはしよう』縱に裂開すること。
しゆう-れっしや 終列車【名】當日の最終に發する列車。
じゆう-れふ 銃獵【名】小銃にて、鳥獸を獵すること。
じゆうれふ-ぜい 銃獵稅【名】銃獵者に課する稅金。遊獵・職獵及び身分によりて等級あり。
じゆうれふ-めんじやう 銃獵免狀【名】しゆれふめんじやう(狩獵免狀)に同じ。
しゆう-れん 聚斂【名】『聚の字の音、正しくはしゆ』稅を多く取立つること。
しゆう-ろ 手爐【名】しゆろ(手爐)の音便。
しゆう-ろ 椶櫚・棕梠【名】〔植〕しゆろ(椶櫚)に同じ。名義抄「椶櫚、シユウロ」
しゆう-ろん 衆論【名】衆人の論。衆議。
しゆう-ろん 宗論【名】㊀宗教上の各派の互に主義を述べて議論すること。宗門上の爭論。太平記「宗論の事は、三國の間、先例多く候ふを」㊁〔佛〕一經に就きて、宗旨を總括し、法義を建立すること。(釋論に對して)㊂能(のう)の狂言の一。法華宗の僧と淨土宗の僧と宿を共にして、法問をなすことを作れるもの。
じゆう-わう 縱橫・從橫【名】『縱の字の音、正しくはしよう』㊀たてとよこ。よこたて。㊁勝手氣儘。思ふまま。㊂自由自在なること。他より拘束を受けぬこと。
縱橫の學【句】支那戰國時代の縱橫家の唱へし說。次條參照。

じゆうわう-か 縱橫家【名】『縱の字の音、正しくはしよう。史記の孟子傳に「天下方務㆓於合從・連衡㆒」とありて、索隱に「文穎曰、關東爲ㇾ從、關西爲ㇾ橫、高誘曰、關東地形從長、蘇秦相㆓六國㆒號爲㆓合從㆒、關西地形橫長、張儀相ㇾ秦、壞㆓關東從㆒使㆓與ㇾ秦合㆒號曰㆓連橫㆒」とあり』支那戰國時代に、國家と國家とを縱橫に分合して經營せんと企てし策士、即ち蘇秦・張儀の類。がつしやう(合從)・れんかう(連衡)參照。
じゆうわう-むげ 縱橫無礙【貌】『縱の字の音、正しくはしよう』四方・八方さはりなきさま。
じゆうわう-むじん 縱橫無盡【貌】『縱の字の音、正しくはしよう』四方・八方。むやみ。心のまま。
しゆうわ-しんがう 終話信號【名】『英 Clearing-off signal』電話の通話を終りたることを交換手に報ずる信號。電話機に附屬する把手を回轉し、又は受話機を懸金物に懸くるによりて、自働的に報ずるもの。
しゆうわ-へうじき 終話表示器【名】『英 Clearing-off drop』電話の終話信號ありたる時、交換機に、その信號を顯はす表示器。
じゆう-ゐ 從位【名】從(じゆ)何位と呼ぶ位、即ち位階の各等を更に正・從の二等づつに分ちたるものの低き方。(正位に對して)
じゆう-ゐぎし 從威儀師【名】法會の時、威儀師に從ひて、衆僧の容儀を正すことを掌る役僧。定員八人。從儀師。
じゆう-ゐん 充員【名】人員を補充すること、又その補充したる人員。
じゆうゐん-せうしふ 充員召集【名】〔兵〕陸軍又は海軍の召集の一。動員に當り、諸部團隊の要員を充足するために、在鄕軍人を召集すること。召集中最も重要なるものにて、迅速・機敏・緻密を要す。
じゆうゐんせうしふ-れいじやう 充員召集令狀【名】充員召集に召應せしむるため、召員に交付する令狀。聯隊區司令官之を作成す。
しゆう-ゑ 衆會【名】しゆうくわい(衆會)に同じ。
しゆう-ゑん 衆怨【名】多くの人のうらみ。

じゆ-え 受衣【名】〔佛〕禪僧の弟子となり、僧衣を受けて著ること。傳衣。
しゆ-えい 輸贏【名】ゆえい(輸贏)を見よ。
じゆ-えい 樹影【名】木のかげ。こかげ。
じゆ-えい 孺嬰【名】じゆがい(孺孩)に同じ。
じゆ-えい 壽永【名】安德天皇の御代の年號(紀元一八四二年—一八四三年)。
じゆえい-こばん 壽永小判【名】昔の金貨の一。縱二寸二分弱・橫一寸七分五厘强・重さ二十四匁あり。面に人の立てるが如き極印、背に壽永と花押との極印あり。壽永中の鑄造とも、北條泰時の所造とも言傳ふ。
しゆ-えう 主要【名】かなめ。主眼。必要。
じゆ-えう 需要【名】㊀もとむること。もとめ。㊁〔經〕『英Demand』財貨の交換力を有する者の、一定の財貨に對する慾望、卽ち或財貨を得んと欲する願望と、これを購買する實力とを結合したるもの。(供給に對して)
じゆ-えう 壽夭【名】ながいきと、わかじにと。長壽と夭死と。
しゆえう-かふはん 主要甲板【名】船の主要なる甲板。二層甲板を有する船は、その上甲板を、三層以上の甲板を有する船は、その第二甲板を稱す。
じゆえう-しか 需要市價【名】〔經〕貨物の需要に對して支拂ふ市價。
しゆえう-せいぶん 主要成分【名】主要なる成分。主成分。
しゆえう-ちやう 主要帳【名】〔商〕次條に同じ。
しゆえう-ちやうぼ 主要帳簿【名】〔商〕次條に同じ。
しゆえう-ぼ 主要簿【名】〔商〕『英Main book』會計の始末をまとめ、全般の計算を明かにする帳簿。普通に、總勘定元帳・日記帳・仕譯帳の總稱。主要帳。主要帳簿。
じゆ-えき 受益【名】利益を受くること。
じゆえき-しや 受益者【名】〔法〕利害關係人中の利益を受けたる者。
しゆ-えつ 守悅【名】〔人〕伊勢國宇治山田市慶光院の開山の尼。足利時代に、法嗣清順と共に神宮の造營を謀りて、中途に寂し、その嗣周養、遂にこれを完成す。功によりて、紫衣・上人號を許さる。
じゆ-えふ 樹葉【名】木の葉。このは。
しゆ-えん 酒宴・酒醼【名】さかもり。うたげ。三遲。驩飮。
しゆ-えん 珠豔【名】珠のごとくうつくしきつや。 太平記「只珠豔・尤態の獨り能く是を致すのみに非ず」
じゆ-えん 壽筵【名】長壽を祝ふ座席。賀筵。
じゆ-えん 壽宴【名】長壽を祝ふ酒もり。
しゆえん-ぐるま 酒宴車【名】芝居の囃子(ハヤシ)の一。三味線と太鼓とを用ふ。
しゆ-おん 殊恩【名】特殊の恩惠。
しゆ-おん 主恩【名】主君より受くる恩。
しゆ-おん 主音【名】㊀〔理〕げんおん(原音)に同じ。㊁〔音〕しゆてうおん(主調音)に同じ。
しゆ-おん 嘶音【名】〔語〕しびらんとに同じ。
しゆ-か 主家【名】主人の家。
しゆ-か 酒家【名】㊀さかや。酒店。酒肆。㊁酒のみ。酒ずき。酒客。
しゆ-か 首夏【名】㊀夏のはじめ。㊁陰曆四月の異稱。
しゆ-か 朱夏【名】『夏は、太陽の威盛んにして、色殊に赤きより、支那にては、古來赤色を夏に配す』なつ(夏)に同じ。(青春・白秋・玄冬に對して)
しゆ-か 酒價【名】酒の代價。さかて。
しゆ-か 手下【名】『三國志の甘寧傳に「權賜二米酒衆殽一寧乃料賜二手下百餘人一食」とあり』てした。部下。配下。
しゆ-が 主我【名】『英Ego』〔哲〕㊀じが(自我)に同じ。㊁倫理上、他人の利害如何に關せず、ただ自己の慾情・願望を遂げんとすること。何事も自己の利害より割出すこと。自己。
しゆ-が 珠芽【名】〔植〕『英Bulblet』きうが(球芽)に同じ。
じゆ-か 樹下【名】木の下。こかげ。じゆげ(樹下)參照。
じゆ-か 儒家【名】㊀儒者の家。㊁じゆしや(儒者)に同じ。
じゆ-が 儒雅【名】儒流にして文雅なること。 太平記「身、儒雅の下より出で、望勳業の上に達せしかば」
じゆ-が 壽賀【名】がじゆ(賀壽)に同じ。
しゆ-かい 手械【名】てかせ。
しゆ-かい 酒戒【名】禁酒のいましめ。
しゆ-かい 酒海【名】㊀古、酒を容るるに用ひし器。 和名「酒海」 ㊁酒量の多きこと。酒器。㊂本願寺にて、門主が正月元日に、宗祖親鸞の像の前に、酒肴を供する行事。
しゆ-がい 首鎧【名】かぶと。首甲。
じゆ-かい 受戒【名】〔佛〕得度を得たる者の、戒(カイ)を受くること。これを受くれば男女・僧俗を問はず、佛・菩薩の徒となるを得といふ。
じゆ-かい 授戒【名】〔佛〕得度を得たる者に、戒(カイ)を授くること。 新拾遺「延曆寺の戒壇更に造りて、澄覺法親王、授戒行ひける時」
じゆ-がい 孺孩【名】あかご。ちのみご。孺子。嬰兒。孺嬰。
じゆかい-ゑ 授戒會【名】〔佛〕受戒の法會。 盛衰記「授戒會を行ひ始められしより」
しゆ-かう 趣向【名】㊀おもむき。こころざし。趣意。㊁しくみ。かんがへ。工夫。
しゆ-かう 酒肴【名】酒と肴(サカナ)と、又その馳走。
しゆ-がう 首號【名】しよがう(初號)に同じ。
じゆ-かう 壽考【名】ながいき。長壽。
しゆかう-こくど 衆香國土【名】〔佛〕次條に同じ。
しゆかう-せかい 衆香世界【名】〔佛〕維摩經の香積佛(コウシャクブツ)品に、香積如來の淨土なりと記せる世界。一切の樓閣は香を以て造り、その國土の香氣、十方諸佛の世界に比して最もすぐれたりといふ。
しゆ-がき 朱書【名】㊀しゆしよ(朱書)に同じ。㊁楊弓にて、百手(モモテ)即ち三百矢の內、五十矢以上、的に中ること。ていがき(泥書)參照。
しゆ-かく 手挌・手格【名】『手にて挌(ウ)つ意』なぐりあふこと。なぐりあひ。挌鬪。
しゆ-かく 酒客【名】酒のみ。酒ずき。上戶。酒家。
しゆ-かく 主格【名】㊀〔語〕『英Subjective case』名詞の格の一。主詞として用ひらるるもの。㊁〔法〕しゆたい(主體)に同じ。
しゆ-かく 主客【名】㊀主人と客と。㊁『客を主(ツカサド)る意』古、支那にて、四方よりその朝廷に來る賓客を掌りし職。㊂〔語〕主格と賓格と。主語と客語と。
主客の座【句】一室中にて、主客の著く座席。(「通(ツウ)の座」に對して)
しゆ-かく 種殼【名】〔植〕『羅Nucleus』ぐわいしゆひ(外種皮)に同じ。
しゆ-かく 種核【名】㊀たね。さね。㊁〔植〕『英Nucleus』種皮の內部に在るもの、卽ち種子の實體。胚と胚乳とより成る。仁。
しゆ-がく 修學【名】〔佛〕しうがく(修學)に同じ。
しゆ-がく 朱學【名】しゆしがく(朱子學)の略。
しゆ-がく 手額【名】『宋史の司馬光傳に「衞士望見、以レ手加レ額曰、司馬相光也」とあるに本づく。「手を額に當つ」參照』額に手をあつること、卽ち敬禮すること。
じゆ-かく 壽客【名】〔植〕きく(菊)の異稱。
じゆ-がく 儒學【名】儒敎の學問。
じゆ-がく 鷲嶽【名】〔地〕りやうじゆせん(靈鷲山)㊁に同じ。
しゆがく-しや 修學者【名】〔佛〕學問を修めたるもの。 平家「止事(ヤンゴト)なき修學者、智慧深き大先達に身を捧げられては」
しゆがく-ゐん 修學院【名】㊀山城國愛宕(オタギ)郡修學院村卽ち比叡山の西麓にありし寺。平安朝の頃、播磨守佐伯(サエキ)公行の、叡山の僧勝算のために建てしもの。吉野朝以後、戰亂のために廢滅して、田野と化し、寺號はただ村名となりて殘るのみ。㊁承應年中、江戶幕府にて、前項の修學院の舊地に建てて、後水尾法皇に獻進せし離宮。今は宮內省の所轄たり。
修學院の八景【句】修學院內の勝れたる八つの景、卽ち修學院曉鐘・村落晴嵐・遠岫(エンシュウ)歸帆・松崎(マツガサキ)夕照・茅檐秋月・平田落雁・隣雲夜雨・叡峰暮雪。
しゆ-がさ 朱傘【名】地紙を朱色に染めたるさし傘。室町時代に、貴人の間に用ひら

れたり。
しゆが-しゆぎ 主我主義【名】〔哲〕りこしゆぎ(利己主義)に同じ。
しゆが-せつ 主我說【名】〔哲〕前條に同じ。
しゆ-かふ 首甲【名】かぶと。首鎧。
しゆ-がふ 衆合【名】〔佛〕次條の略。 太平記「衆合・叫喚の罪人も斯くやとぞ見えける」
しゆがふ-ぢごく 衆合地獄【名】〔佛〕『梵Saṃghāta の譯語』八大地獄の第三。殺生・偸盜・邪淫等の惡業を造れる者の墮つる所。二大鐵山の間にありて、人これに墮つれば、二山合して壓し、流血河を成すといふ。又この地獄にある者の壽命は、二十一億四十萬歲なりと稱せらる。石割地獄。衆合。 謠曲(歌占)「衆合地獄の重き苦」
しゆ-がふぶん 主合分【名】〔鑛〕『英Essential constituents』相合して、或岩石を締成する鑛物中の主要なるもの。火成岩において特に一定し、普通なるは石英・正長石・斜長石・雲母・角閃石・輝石・橄欖石等なり。例へば花崗岩の主合分が石英・正長石・雲母なる類。(副合分に對して)
しゆ-かん 手簡・手翰・手束【名】てがみ(手紙)に同じ。
しゆ-かん 主幹・主監【名】もとじめ。とりしまり。主任。
しゆ-がん 主眼【名】大切なるところ。かなめ。眼目。
しゆ-がん 朱顏【名】㊀あかき顏。赭顏。紅顏。㊁『戴叔倫の詩早春曲に「朱顏未レ衰消息稀」とあり』血色の朱の如く麗(ウルワ)しき
じゆ-かん 樹間【名】木と木との間。このま。
じゆ-かん 樹幹【名】樹木のみき。みき。
じゆ-がん 入眼【名】成就すること。成功。にふがん。じゆげん(入眼)參照。 愚管抄「女子入眼の國」
しゆ-がらかさ 朱傘【名】しゆがさ(朱傘)に同じ。
しゆ-き 珠璣【名】㊀『璣は方形のたま』たま。㊁玉の如き詞藻。
しゆ-き 酒旗【名】さかばた(酒旗)に同じ。
しゆ-き 酒器【名】酒を飲む時に用ふる器。卽ち杯など。
しゆ-き 酒氣【名】㊀酒のかをり。酒のあぢ。さかけ。㊁酒に醉ひたる氣分。 懸入井杜鵑「たった今歸り、少し酒氣もござれども、若し急な御用もや」
しゆ-き 手記【名】手づからしるしつくること。おぼえがき。
しゆ-き 主記【名】㊀明治初年の太政官の職員の一。書記・計算のことを掌りし判任官。明治三年設置、同四年太政官に正院(セイイン)の設けらるるや、その職員として、大・權大・少・權少の四官に分れ、後に、中・權の二等を加へられしが、同十年正院と共に廢止せらる。㊁臺灣舊辨務署の職員。辨務署長又は辨務支署長の命を受けて、その主務に從事し、又は辨務支署長となりて、部內の行政事務を管理せし判任官。
しゆ-き 朱器【名】㊀朱塗の器具。㊁すき(朱器)に同じ。
しゆ-き 朱熹【名】〔人〕支那南宋の學者。字は元晦、又仲晦。晦庵・晦翁・滄洲・雲谷・紫陽等の號あり。十九歲にして進士に及第したれども、任官の期甚だ短く、力を專ら著述に盡し、經傳解・四書註・通鑑綱目・近思錄・小學等の著あり。慶元六年歿す。年七十一。後世尊稱して、朱子といふ。
しゆ-ぎ 手技【名】手にてするわざ。てわざ。手藝。
しゆ-ぎ 豎議【名】りふぎ(豎議)に同じ。(廣學に對して) 下學集「豎議、シユギ」
じゆ-き 壽器【名】ひつぎ。棺。
じゆ-き 受寄【名】寄託を受くること。
じゆ-き 受記【名】〔佛〕授記せらるること。受莂(ジュベツ)。
しゆ-ぎ 主義【名】主張する見解。守持する見解。
じゆ-き 授記【名】〔佛〕佛の、發心せる衆生に對して、來世は必ず佛と作(ナ)るべき旨の記別を授くること。 謠曲白鬚「迦葉(カショウ)世尊、西天(サイテン)に出世したまふ時、大聖釋尊その授記を得て」
しゆ-きう 守舊【名】舊習を守ること。保守。
しゆ-ぎう 種牛【名】たねうし。
じゆ-きう 需求【名】もとめ。需要。
じゆき-さいぶつ 受寄財物【名】〔法〕寄託を受けて保管する財物。
じゆ-ぎし 從儀師【名】じゆうゐぎし(從威儀師)に同じ。
じゆき-しや 受寄者【名】〔法〕寄託契約によりて、その受取りし物を保管する人。又は保管の義務を負ふ人。(寄託者に對して)
しゆぎ-はん 衆議判【名】歌合の時、普通の場合のごとく、一人の判者によりて優劣を定むる方法に依らず、多人數にて、互に論駁して判定すること。 著聞「作者の名を隱して、衆議判にて侍りけるに」
しゆぎ-ひやう 衆議評【名】前條に同じ。
しゆ-きふ 首級【名】『支那の秦代に、敵の首一つを斬りたるごとに、爵一級を得る制度なりしより、級の字を添へていふ』討ちとりたる首。しるし。
じゆ-きふ 需給【名】需要と供給と。需供。
じゆき-ぶつ 受寄物【名】〔法〕受寄者が、保管のために受取りたる物。(寄託物に對して)
しゆ-きん 手巾【名】てぬぐひ。てふき。はんけち。
手巾の上帶【句】著衣の上に締むる手巾の帶。 賀古秋信七墓廻「手巾の上帶くるくると…しるしの松の枝垂れし梢に、帶を結び下げ」
じゆ-きん 儒巾【名】支那にて、未だ及第せぬ進士のかぶりし帽子。
しゆ-きん 手筋【名】〔醫〕手骨附屬の筋。拇指側・小指側・中央部の三に分つ。
しゆきん-おび 手巾帶【名】切地のままにてくるくると卷く帶。僧侶などの用ひしもの。今の兵兒帶の類。 卯月の潤色「これは又白縮緬の手巾帶、衣の上によからうと、氣の付いた伯母御樣」
しゆ-きやう 酒狂【名】酒に醉ひて、心の狂ふこと。さかがり。酒亂。酗酒(クシュ)。
しゆ-ぎやう 修行【名】㊀〔佛〕身・口(ク)・意の三業(ゴウ)に通じて、佛法を修習し、作行(サギョウ)すること。㊁しうかう(修行)に同じ。㊂藝術を修め研くこと。修學。稽古。㊃廻國。巡禮。托鉢。遊行(ユギョウ)。すぎやう。㊄武術稽古のために、諸國を遊歷すること。
しゆぎやう-ぢゆうゐ 修行住位【名】天平寶字四年に設けられし修行位の四階の一。修行入位の上に位し、奏授に准ぜられしもの。
しゆぎやう-にふゐ 修行入位【名】天平寶字四年に設けられし修行位の四階の一。その最下級に位し、奏授に准ぜられしもの。
しゆぎやう-ほふしゐ 修行法師位【名】天平寶字四年に設けられし修行位の四階の一。最上級に位し、勅授に准ぜられしもの。
しゆぎやう-まんゐ 修行滿位【名】天平寶字四年に設けられし修行位の四階の一。その第二階に位し、奏授に准ぜられしもの。
しゆぎやう-もん 修行門【名】〔佛〕しもん(四門)㊁を見よ。
しゆぎやう-ゐ 修行位【名】僧職の一。三綱に次げるもの。修行の僧に懈怠(ケタイ)・過失ある時は、僧綱に告げて、これを正すことを掌りしもの。
しゆ-きやく 手脚【名】てとあしと。手足。
しゆ-きゆう 朱宮【名】朱塗の宮殿。
しゆ-きゆう 守宮【名】〔動〕㊀やもり(守宮)に同じ。㊁『事文類聚に「漢武帝時、以二端午日一取二蜥蜴一置二之器一飼以二丹砂一至二明年端午一擣レ之以塗二宮人臂一有レ所レ犯消沒、不レ爾則如二赤痣一故得二守宮之名一」とあるに本づく』さかげ(蜥蜴)に同じ。
しゆ-ぎよ 守禦【名】守りふせぐこと。ふせ

ぎ守ること。 太平記「萬卒守禦の密(ﾐﾂ)しき
に御心を惱され」
しゆ-ぎよ 狩漁【名】かりと、すなどりと。
鳥獸をとると魚をとると。漁獵。
じゆ-ぎよ 入御【名】㊀にふぎよ(入御)に
同じ。㊁內裏に還り入らせたまふこと。
平治「待賢門より入御あるべきにて」
しゆ-きよう 酒興【名】酒宴の興。酒に醉
ひたる面白味、又そのためになすこと。酒
の上。 日本武尊吾妻鑑「酒興ならば助け置
く、去りながら醉醒むるまで縛り上げん」
しゆ-きよう 足恭【名】『論語の公冶長篇に
「子曰、巧言令色、足恭、左丘明恥レ之、丘亦
恥レ之」とあり。足は、足(ﾀ)し加ふる意ある
より、過ぐる意に用ふ』恭敬に過ぐること。
すきよう。 「給。
じゆ-きよう 需供【名】需要と供給と。需
しゆ-ぎよく 珠玉【名】㊀水產の珠と鑛產
の玉と。眞珠と玉と。 曾我物語隅田川「下座敷に
珠玉をちりばめ」 ㊁詩文を褒めていふ
語。玉珠。
珠玉の瓦礫に在るが如し【句】『晉書
の王衍傳に「衍雋秀有二令望一、希心玄遠
未三嘗語二レ利、王敦過二江當一稱レ之曰夷甫
處二衆中一如三珠玉在二瓦礫間一」とあるに
本づく』英才の群俗中に在るに譬へてい
ふ語。〔諺語〕
しゆぎよ-じだい 狩漁時代【名】〔經〕ぎよ
れふじだい(漁獵時代)に同じ。
しゆく 宿【名】㊀やどること。とまること。
宿驛。 ㊁はたごや。旅宿。 ㊂しゆくば。うまや。
源氏十二段長生島臺「宿宿泊泊をば心
がけてぞ上りける」 ㊃星座。星宿。 ㊄
賤民の稱。普通の民より卑しきものをい
ふ語。〔畿內の語〕
しゆく 叔【名】㊀父母の弟妹。をぢ。をば。
㊁兄弟姉妹中の第三番目のもの。(伯・仲に
對して) ㊂夫の弟。 和名「叔、爾雅云、夫
之弟爲レ叔」
しゆく 肅【貌】しゆくぜん(肅然)に同じ。
しゆく 柷【名】漆桶の如き形をなせる、支
那の古の樂器。方二尺四寸・深さ一尺八寸。
中に椎柄ありて、底に達なり。一側面に孔

あり、手を中に入れて撃ちしもの。
しゆく 縮【名】身の鎧附を直すこと、又著
ること。 太平記「鎧一縮して、步立(ｶﾁﾀﾞﾁ)に
成って」
しゆ-く 衆苦【名】〔佛〕多くの苦痛。 太平
記「衆苦充滿の穢土(ｴﾄﾞ)」
しゆく 宿【助數】宿泊する夜の數。泊。
しゆく 縮【助數】鎧を數ふる語。領(ﾘｮｳ)。
太平記「只今仕立てたる鎧一縮」
しゆく 菽【名】〔植〕豆類の總稱。
菽を啜(ｽｽ)りて、水を飮む【句】『禮記
の檀弓篇に「子路曰、傷哉貧也、生無二以
爲一レ養、死無二以爲一レ禮也、孔子曰、啜レ菽
飮レ水、盡二其歡一、斯之謂レ孝」とあるに本
づく』貧しき生活の譬。
しゆ-ぐ 守愚【名】自己の愚かなるに滿足
せること。
じゆく 粥【名】㊀かゆ(粥)に同じ。〔僧徒の
語〕 ㊁あさめし。朝食。〔禪僧の語〕
粥の十德【句】僧の食物たる粥の有す
といふ、資色・增力・益壽・安樂・辯說・除風・
消宿食・辭淸除饑 消渴の十種の利益。
じゆく 熟【名】㊀よく煮ゆること。 ㊁よ
く實のること。熟すること。「不熟」 ㊂じ
ゆくし(熟柿)を云ふ。〔女の語〕
じゆく 塾【名】藝術を敎ふる所。弟子を寄
宿せしめて、學術を傳習する處。じく。
じゆ-く 受苦【名】〔佛〕苦難を受くること。
しゆく-あ 宿痾【名】久しき以前より癒え
ぬ病氣。持病。宿患。宿病。
しゆく-あく 宿惡【名】古き惡事。もとの惡
事。舊惡。
じゆく-あん 熟案【名】つらつらと考へ案
ずること。熟考。
しゆく-い 祝意【名】祝のこころ。賀意。
しゆく-い 宿意【名】㊀かねての意見。 宿
志。 ㊁かねてのうらみ。宿怨。
しゆく-い 宿衣【名】しゆくえ(宿衣)に同じ。
著聞「宿衣一領賜はせければ」
しゆく-いん 宿因【名】〔佛〕前世よりの因
緣。宿緣。
しゆく-う 宿雨【名】久しき以前、又は前日

より降りつづきたる雨。
しゆ-ぐう 殊遇【名】特殊の待遇。取りわけ
鄭重なるあつかひ。
しゆく-うん 宿運【名】宿世より定まれる
運命。宿命。
しゆく-え 宿衣【名】『內裏に宿直する時の
衣服の義』しゆくしやうぞく(宿裝束)に同じ。
しゆく-えい 宿營【名】㊀營所に宿泊する
こと、また宿泊する營所。 ㊁〔兵〕軍隊
が、夜間一定地に駐在して、休養すること。
舍營・村落露營・幕營・露營・廠營に分つ。
しゆく-えう 宿曜【名】㊀二十八宿・十二宮
(以上宮)と七曜・九曜(以上曜)との併稱。
㊁二十八宿・九曜等の行度を察して行ふ占
法。すくえう。宿曜道。
しゆくえう-し 宿曜師【名】宿曜㊁を行ふ
ことを業とする人。すくえうし。
しゆくえう-だう 宿曜道【名】しゆくえう(宿
曜)㊁に同じ。
しゆく-えき 宿驛【名】しゆくば。しゆく。
うまや。つぎば。驛。
しゆく-えん 祝筵【名】いはひの席。賀筵。
しゆく-えん 祝宴【名】いはひの酒もり。
しゆく-えん 宿緣【名】〔佛〕しゆくいん(宿
因)に同じ。
しゆく-おくり 宿送【名】宿より宿へと順
次に送ること。しゆくつぎ。 賀古敎信七墓廻
「時づけの宿送、急げ急げと押立てて」
じゆく-おん 熟音【名】〔語〕『母音には、
一番にて一シラブルを形成するもあれど、
概しては、他の母音もしくは子音と相合し
て成るよりいふ』しらぶるに同じ。
しゆく-が 祝賀【名】いはひことぶくこと。
しゆく-かう 宿好【名】年來のこのみ。久し
き前よりのたしなみ。
しゆく-かう 淑行【名】㊀正しき行。善行。
㊁婦人の立派なる行(ｵｺﾅﾋ)。貞淑なるふる
まひ。 「慮。
じゆく-かう 熟考【名】深く考ふること。熟
しゆく-がく 宿學【名】老熟せる學者。宿
儒。 老學。 「の客。
じゆく-かく 熟客【名】なじみの客。熟面

しゆくが-くわい 祝賀會【名】祝賀のため
に催す會。
しゆく-かご 宿駕籠【名】雲助が旅人を乘
せて、宿驛の間を往來
せし、極めて粗末なる
竹製の駕籠。くもす
けかご。
しゆくが-じやう 祝賀
狀【名】祝賀の意を
述べたる書狀。賀狀。
しゆく-かん 宿憾【名】
以前よりのうらみ。宿恨。
しゆく-がよひ 宿通【名】宿場の遊女に通
ふこと。 曾我物語「下人一人持たずして、
宿通のおかしさよ」 「じ。
しゆく-き 夙起【名】朝はやく起くること。
はやおき。
しゆく-き 宿耆【名】きしゆく(耆宿)に同
しゆく-き 宿忌【名】たいや(逮夜)に同じ。
(正忌(ｼﾔｳｷ)に對して) 「和氣。
しゆく-き 淑氣【名】新春のめでたき氣。
しゆく-ぎ 祝儀【名】しうぎ。いはひ。
しゆく-ぎ 宿疑【名】かねての疑問。
じゆく-ぎ 熟議【名】よく評議すること。評
議のよくととのふこと。
じゆく-くわ 熟果【名】熟したる果物。
じゆく-くわう 熟荒【名】豐年にて、米價低
きため、農民の窮すること。
しゆく-くわん 宿患【名】㊀かねてのうれ
へ。 ㊁しゆくあ(宿痾)に同じ。
しゆく-くわん 宿館【名】宿泊するやかた。
やど。やどや。旅館。
しゆく-くわん 宿官【名】王朝時代に、受領
に任ぜらるべき資格ある者が、自己の任官
の順の至るを待つ間、先づ諸國の權守權
介に任ぜられしこと。やどりのつかさ。
しゆく-ぐわん 宿願【名】かねての願。年來
の願掛。しくぐわん。 著聞「宿願にまかせ
て」 「こと。
しゆく-けい 肅敬【名】つつしみうやまふ
しゆく-けい 肅啓【名】つつしみて申しの

(しゆくかご)

ぶること。拜啓。謹啓。(常に手紙の發端に
用ふ)
しゆく-けい 祝慶【名】いはひよろこぶこ
と。祝賀。 「と。
しゆく-けい 夙慧【名】幼時よりさときこ
じゆく-けい 熟計【名】よく計畫すること、
又その計畫。
しゆくけい-しや 淑景舍【名】しげいしや(淑
景舍)を見よ。
しゆくけい-ゑん 縮景園【名】廣島市上流
川町にある庭園。舊藩主淺野氏の別墅。今
も同家の所有に屬す。
しゆく-けん 宿眷【名】昔からの恩顧。
しゆく-ご 夙悟【名】幼時より頴悟なる
こと。
じゆく-ご 熟語【名】二つ以上の語の、相
連なりて用ひらる語。(單語に對して)
しゆく-こう 宿構【名】詩文などの構造を、
豫て考へおくこと。懷句。
じゆく-こく 熟谷【名】天明年中、江戶牛込
若松町にありし切店(ｷﾘﾐｾ)。 「きふ。
しゆく-こつ 倏忽【貌】たちまち。にはか。
じゆくご-はふ 熟語法【名】〔語〕動詞の語
尾の變化の、他語と結合して熟語となるも
の。連用形。 「よ。
しゆく-ごふ 宿業【名】〔佛〕ごふ(業)を見
しゆく-こん 宿根【名】〔佛〕前世より定ま
れる機根。 ㊁〔植〕たねんこん(多年根)に
同じ。 「怨。
しゆく-こん 宿恨【名】かねての遺恨。宿
しゆくこん-さう 宿根草【名】〔植〕たねんせ
いさうほん(多年生草本)に同じ。
しゆく-さい 祝祭【名】㊀いはひのまつり。
㊁祝日と祭日と。
しゆく-さい 宿債【名】以前よりの債務。
しゆく-ざい 宿罪【名】㊀〔佛〕宿世よりの
つみ。過去の罪障。 ㊁〔基〕げんざい(原罪)
に同じ。 「と。
しゆく-さいじつ 祝祭日【名】祝日と祭日
しゆく-さう 宿草【名】宿根より生ずる草。
しゆくざう-ぶつ 宿藏物【名】まいざうぶつ
(埋藏物)に同じ。

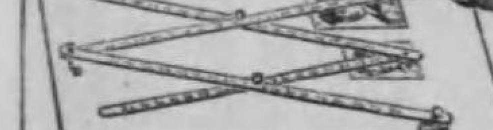
しゆく-さつ 宿札【名】やどふだ(宿札)に同
じ。 「同じ。
しゆく-さつ 縮刷【名】しゆくはん(縮版)に
しゆく-さつ 肅殺【名】『肅は嚴厲又は寒冷
の義、殺は接尾語』秋氣の草木をそこなひ
枯すこと。 「同じ。
じゆく-さつ 熟察【名】つくづくと考ふる
こと。熟考。
しゆく-し 宿紙【名】かみやがみ(紙屋紙)に
しゆく-し 宿志【名】常よりの志。宿望。
しゆく-し 夙志【名】早くより立てたる志。
しゆく-し 祝詞【名】㊀神に祈る詞。 「巫祝。 ㊁し
ゆくじ(祝辭)に同じ。
しゆく-し 祝史【名】みこ。はふり。尸祝。
しゆく-し 宿次【名】㊀やどり。宿泊。 ㊁
しゆくば。宿驛。
しゆく-じ 宿侍【名】宿泊し侍衞すること。
著聞「その僧どもは、東西の廊に宿侍したり
けるに」
じゆく-し 熟紙【名】礬水(ﾄﾞｳｻ)を引きたる
紙。どうさびき。(生紙に對して)
しゆく-じ 祝辭【名】祝の意を表すること
ば。祝詞。 「親。
じゆく-し 熟思【名】つらつら思ふこと。熟
慮。
じゆく-し 熟視【名】つらつら視ること。諦
じゆく-し 熟柿【名】よく熟したる柿。き
ざはしの柿。 國姓爺合戰「岩に熟柿を打つ
ごとく、五體ひしげて失せにける」
じゆく-じ 熟字【名】二つ以上の漢字の相
連なりて、新に一語の意義をなすもの。漢
字の熟語。駢字(ﾍﾝｼﾞ)。 「同じ。
しゆく-しう 縮收【名】しうしゆく(收縮)に
じゆく-しき 熟識【名】㊀よく知りをるこ
と。 ㊁きはめて親しき知合(ｼﾘｱﾋ)。
じゆくし-くび 熟柿首【名】容易に落し易
き首を罵りていふ語。 吉野都女楠「熟柿首ゆ
すり落し、踏みつぶしてくれんと」
じゆくし-くさし 熟柿臭し【形一】熟柿の
如く臭し。酒(ｻｹ)臭し。 狂言(茶壺)「ああ熟
柿臭い、酒に醉うたと見えた」
しゆく-じくわしよ-ぶぎやう 宿次過書奉

行【名】鎌倉・室町兩幕府の諸奉行の一。
路次・往還・過書などの事を掌りしもの。
しゆく-しつ 宿疾【名】しゆくあ(宿痾)に
同じ。
しゆく-じつ 祝日【名】㊀めでたき日。い
はひ。 ㊁國民の一般に祝ふべき日。天長
節紀元節の類。
じゆくし-ばうず 熟柿坊主【名】熟柿の如
く赤き坊主。 吉野都女楠「おのれこそ赤面
の熟柿坊主」
しゆく-しふ 宿執【名】㊀『執は志を同じく
する者の義』かねてよりの友人。 ㊁『執
は結びて解けざる義』かねてよりの確執。
㊂〔佛〕宿世より心に執著して離れざる、
善惡の性質。しくしふ。 十訓「前世の宿
執にや、この事さりがたく心にかかりけ
れば」
宿執開發(ｶｲﾎﾂ)【句】〔佛〕「宿習(ｼｭｸｼﾞﾌ)開
發」の誤。 徒然「河にて馬洗ふ男(ｵﾉｺ)、
「あし、あし」といひければ、上人立ちと
まりて、「あなたふとや、宿執開發の人か
な、阿字・阿字と唱ふるぞや」
しゆく-しふ 宿習【名】ふるき風習。昔よ
りのならはし。しくしふ。舊習。
しゆく-じふ 宿習【名】〔佛〕宿世より釀し
來れる習氣。 盛衰記「今生の災害は過去の
宿習に報ゆべし」
宿習開發(ｶｲﾎﾂ)【句】〔佛〕『天台別傳に
「宿習開發、煥若二華敷一矣」とあり』宿世
に執りおこなひし善根・功德が、現世に
開き現れて、善果を結ぶこと。宿善開發。
しゆくしん 肅愼【名】〔地〕今の滿洲吉林
省の東部及び沿海州方面に於けるツング
ス民族(Tunguses)を指せる名稱。早く周
代より知られ、漢代の挹婁(ｲﾌﾛｳ)、隋唐時代
の勿吉(ﾓｯｷﾂ)・靺鞨(ﾏｯｶﾂ)も皆同じ民族なり。
しくしん。みしはせ。
しゆく-しん 宿心【名】久しき以前よりの
心。年來のねがひ。宿意。 「人。
しゆく-じん 淑人【名】德行ある人。よき
しゆくしん-は 肅愼羽【名】『古、肅愼國よ
り渡來せし故、この名ありといふ』角鷹(ｸﾏ
ﾀｶ)の羽。一說に、しきりば(仕切羽)に同じ。

西宮記「左鷲羽・右肅愼羽」 「き家。
しゆく-しや 宿舍【名】宿泊又は宿直すべ
しゆく-しや 縮寫【名】原圖又は原畫を縮
めて小さく寫すこと。
じゆく-しや 塾舍【名】塾生の寄宿舍。學
寮。 「將。
しゆく-しやう 宿將【名】老功ある大將。老
しゆく-しやうぞく 宿裝束【名】宿直等に
著る、衣冠直衣の類(ﾀｸﾞﾋ)の裝束。しゆくえ。
しゆく-しやく 縮尺【名】『英Scale』縮圖を
製する時の、縮少すべき一定の比例。通常、
分子には1、分母は百・千・萬のごとき數字
を用ふ。 「はひざけ。
しゆく-しゆ 祝酒【名】いはひに飮む酒。い
しゆく-しゆ 宿主【名】〔生〕『英Host』きし
ゆ(寄主)に同じ。
しゆく-じゆ 宿儒【名】年功を積める儒者。
耆儒。 「る人。
じゆく-しゆ 熟手【名】そのことに熟練せ
しゆく-しゆく 蹜蹜【貌】『論語の鄕黨篇に
「蹜蹜如レ有レ循」、禮記の玉藻篇に「擧レ前
曳レ踵蹜蹜如也」とあり』足を擧ぐるごと
く忙しく狹きさま。ちよこちよこ。
しゆく-しゆく 謖謖【貌】風の松に當る音。
松風の音。
しゆく-しゆく 肅肅【貌】㊀つつしみ敬ふ
さま。 ㊁靜かにひつそりしたるさま。 ㊂
しまりたるさま。 ㊃威嚴あるさま。おご
そか。 ㊄『世說に「嵆康肅肅如二松下風一」
とあり』しゆくしゆく(謖謖)に同じ。
しゆく-しよ 宿所【名】すまひ。やど。住所。
しゆく-しよう 祝勝【名】しゆくせふ(祝捷)
に同じ。
しゆく-しよく 宿食【名】前日炊ぎたる飯。
じゆく-しよく 熟食【名】よく煮たる食物、
又これを食ふこと。
しゆく-じろ 宿城【名】平地に構へて、城下
を設けたる城。 「ぐ。
しゆく-す 祝す【動佐變他】いはふ。ことほ
しゆく-す 宿す【動佐變自】やどる。とまる。
じゆく-す 熟す【動佐變自】㊀よく煮ゆ。
㊁よく實(ﾐ)る。 ㊂食物成熟す。 ㊃十分

になる。ととのふ。 用明天皇職人鑑「時期いまだ熟せず、追ひかへされし彼の小舟」 五 馴れて、巧者になる。熟練す。熟達す。 吉野都女楠「身にも熟せぬ武家まじはり」
しゆく-すゐ 宿水【名】前日より汲置きたる水。宵越の水。ねみづ。
しゆく-すゐ 宿醉【名】ふつかゑひ(二日醉)に同じ。
しゆく-すゐ 菽水【名】一 豆と水と。 二 貧素なる食物。
菽水の歡(クワン)【句】『禮記の檀弓下篇に「子路曰、傷哉貧也、生無二以爲一レ養、死無二以爲一レ禮也、孔子曰、啜レ菽飮レ水、盡二其歡一、斯之謂レ孝」とあるに本づく』貧しくして、親に事ふること。
じゆく-すゐ 熟醉【名】十分に酒に醉ふこと。
じゆく-すゐ 熟睡【名】じゆくみん(熟眠)に同じ。
しゆく-せ 夙世【名】一 前世の生死(シヤウジ)。前世。 二 前世の業因(ゴウイン)。善惡に通ずれども、多くは善き方にいふ。すくせ。宿縁。
しゆく-せい 宿成【名】年若くして、學業などの成就すること。早熟。(晩成に對して)
しゆく-せい 肅清【名】きびしく取締りて、不正を除くこと。
しゆく-せい 叔齊【名】〔人〕はくい(伯夷)を見よ。
しゆく-せい 叔世【名】『兄弟の順序を伯・仲・叔・季といふ時の叔』すゑの世。末世。
じゆく-せい 塾生【名】塾に居る生徒。塾徒。
じゆく-せい 熟成【名】せいじゆく(成熟)に同じ。
しゆく-せう 縮小【名】ちぢまりて小さくなること。ちぢめて小さくすること。
しゆく-せき 夙昔・宿昔【名】ふだん。平常。
しゆく-せき 蹙踖【名】足をちぢめつまだててあるくこと。(怖る怖る蹐舞ふ形容にいふ)
しゆく-せき 宿夕【名】ひとよ。一夕。
しゆく-せき 宿碩【名】『碩は大の義』その道の老大家。
しゆく-せつ 宿雪【名】消え殘りたる雪。のこんの雪。殘雪。
しゆく-せふ 祝捷【名】戰捷をいはふこと。

しゆくせふ-くわい 祝捷會【名】祝捷のために催す集會又は宴會。
しゆく-ぜん 宿善【名】〔佛〕前世の善根。しくぜん。 謡曲(國栖)「身は、宿善のかひぞ無き」
宿善開發(カイ)【句】〔佛〕宿善が現世に於て善き果報を實現すること。宿習開發。
しゆく-ぜん 肅然【貌】一 げんぜん(嚴然)に同じ。 二 しづかなるさま。
しゆく-ぜん 倏然【貌】俄かなる貌。忽然。
しゆくせん-りよう 縮線綾【名】練絲(ネリイト)にて織りたる綾。
しゆく-そ 宿訴【名】久しき以前よりつづきたる訴。 盛衰記「寺門の宿訴といひ、頼豪が本意といひ」
しゆく-そ 叔祖【名】〔佛〕師翁の兄弟。
しゆく-ぞく 菽粟【名】『孟子の盡心上篇に「聖人治二天下一、使レ有二菽粟一如二水火一」とあり』豆と米穀と、即ち人の常食。
しゆく-そん 宿存【名】〔植〕果實の熟したる後、又は冬を凌ぎて後までも、なほ存すること。(謝落・早落に對して)
しゆくそん-がく 宿存萼【名】〔植〕花の落ちたる後もなほ殘留する萼。
しゆく-そんつう 叔孫通【名】〔人〕支那前漢の學者。秦の時博士となり、項羽に從ひ、漢王劉邦に降る。漢王の爲に朝儀を定め、太常に拜せられ、太子太傅(フ)に移る。
しゆく-たい 縮退【名】たいしゆく(退縮)に同じ。
しゆく-だい 宿題【名】答案を考ふる餘裕あらしめんがために豫て與へおく問題。(即題に對して)
しゆく-たう 宿禱【名】かねてよりの祈禱。
しゆく-たう 祝禱【名】一 神に禱ること。 二〔基〕『英 Benediction』禮拜の終において、祝福を求むること。
しゆく-だく 宿諾【名】一度承諾したることを履行せずに置くこと。
子路、宿諾無し【句】『論語の顏淵篇に見ゆ』孔子が、その門人子路の長所を讃めていへる語。
じゆく-たつ 熟達【名】熟練して上達すること。
しゆく-たふ 蹙沓【名】蹴かへすこと。蹴て踏むこと。
じゆく-だん 熟談【名】よく相談すること。相談のをりあふこと。
しゆく-ち 朱口【名】〔動〕めなだに同じ。
しゆく-ち 縮地【名】『神仙傳に「費長房從二壺公一有二神術一能縮二地脈一」とある故事に本づく』一 仙術によりて、地域を縮め、距離を近くすること。 二 汽車・汽船等の便のために、遠距離の地も近き思のすること。
じゆく-ち 熟知【名】委しく知ること。よく知ること。
じゆく-ち 熟地【名】〔兵〕形勢を熟知せる地。(生地に對して)
しゆく-ちん 宿賃【名】やどせん(宿錢)に同じ。
しゆく-ぢん 宿陣【名】留まりて、陣を取ること。宿營。
じゆく-ちやう 塾長【名】塾舍の長。塾頭。
しゆく-ぢよ 淑女【名】淑德を備へたる女。淑媛。
しゆく-ちよく 宿直【名】その勤務せる官衙などに、交番にて宿泊すること。
しゆくちよく-しつ 宿直室【名】宿直する室。宿直部屋。
しゆくちよく-じよ 宿直所【名】宿直をなす所。宿舍。
しゆくちよく-にん 宿直人【名】宿直をなす人。
しゆくちよく-べや 宿直部屋【名】しゆくちよくしつ(宿直室)に同じ。
しゆく-づ 縮圖【名】元の形を縮めて、小さくしたる圖。
しゆく-つぎ 宿次・宿繼【名】荷物などを、人足又は馬などにて、宿場より宿場へ送りつぐこと。郵傳。遞送。
しゆくづ-き 縮圖器【名】『英 Pantograph』縮圖を畫くに用ふる器械。


(しゆくづき)

しゆく-てい 宿醒【名】ふつかゑひ(二日醉)に同じ。
しゆく-てい 肅呈【名】しゆくけい(肅啓)に同じ。
しゆく-てう 宿鳥【名】ねとり。
しゆく-てき 宿敵【名】かねてよりの敵。年來の敵。 盛衰記「一門の宿敵を餘所に見るべきにあらず」
じゆく-てつ 熟鐵【名】よく鍛へたる鐵。きたひがね。鍛鐵。
しゆく-てん 祝典【名】いはひの儀式。
しゆく-でん 祝電【名】いはひの電報。
じゆく-でん 熟田【名】よく耕されたる田。こなた。
じゆく-と 熟圖【名】つらつら思ひはかること。深く考ふること。
じゆく-と 塾徒【名】じゆくせい(塾生)に同じ。
じゆく-とう 熟頭【名】じゆくちやう(塾長)に同じ。
じゆく-どう 熟銅【名】よくきたへたる銅。(あら銅に對して)
しゆくとう-るゐ 菽豆類【名】豆科に屬する大豆・小豆・豌豆・落花生等の一類。
しゆく-とく 宿德【名】一『宿は耆宿の義』年高くして、道德あること、又その人。しくとく。 二〔佛〕宿世になせる福德。宿福。
しゆく-とく 淑慝【名】よしあし。善惡。
しゆく-とく 淑德【名】婦人の令德。
じゆく-どく 熟讀【名】よくよむこと。よみなるること。よみこなすこと。
しゆく-どの 宿殿【名】むかし普通の民よりも卑しとせられたる穢多(ヱタ)・非人の類。三味線・鼓弓などを彈き、小芝居などをなせり。しゆくのもの。しゆく。
しゆく-ね 宿禰【名】すくね(宿禰)に同じ。〔古語〕
しゆく-の-もの 宿者・夙者【名】しやうもんじ(唱文師)一を見よ。
しゆく-ば 宿場【名】しゆく。うまや。えき。郵亭。宿驛。
しゆく-はい 祝杯・祝盃【名】いはひのさかづき。
しゆく-はい 肅拜【名】一 つつしみてをがむこと。 二『禮記の少儀篇に「不二手拜一」とあり』手を下げ、地につけて行ふ敬禮。 三 書状の末尾に記す語。頓首再拜。

じゆくばい-う 熟梅雨【名】さみだれ(五月雨)に同じ。
しゆく-はう 宿報【名】宿世の業因によりて感じたる果報。 盛衰記「然るべき宿報にて、官位にこそ思ふさまなりとも」
しゆく-はう 祝砲【名】祝意を表するためにうつ大砲。
しゆく-ばう 宿望【名】かねてよりの希望。宿願。
しゆく-ばう 宿坊【名】一 寄宿する坊舍。宿院。 二 檀家より、その歸屬する僧寺を指していふ語。 四 自己の僧坊。
じゆく-はう 熟烹【名】よく烹ること。
しゆく-はく 肅白【名】しゆくけい(肅啓)に同じ。
しゆく-はく 叔伯【名】一 弟と兄と。 二 兄弟。
しゆく-ばく 菽麥【名】大豆と麥と。
しゆく-はく 宿泊【名】やどること。とまること。
菽麥を辨ぜず【句】『左傳の成公十八年の條に「周子有レ兄而無レ慧、不レ能レ辨二菽麥一」とあるに本づく』大豆と麥との區別をだに知らず。事理を辨別するを得ず。〔諺語〕
しゆくはく-じよ 宿泊所【名】宿泊する場所。
しゆくはく-にん 宿泊人【名】宿泊する人。
しゆくはく-れう 宿泊料【名】宿泊人の宿泊所に拂ふ料金。はたごちん。はたごせん。やどせん。宿料。
しゆくば-ぢよらう 宿場女郎【名】宿場に居る女郎。めしもりぢよらう。
しゆく-はつ 祝髮【名】『列子の湯問篇に「南國人、祝髮而裸」とあり。祝は斷つ義』髮を剃りて、僧侶となること。剃髮。落髮。 最明寺殿百人上﨟「德をかくして、權貴にほこらず、祝髮して最明寺殿」
しゆく-はづれ 宿外【名】宿場の端のところ。宿驛の入口。ぼうばな。 狂言(六地藏)「宿はづれに、堂を建ててござるが」
しゆく-はん 縮版【名】書物などの版を縮小すること、又その縮小したるもの。縮刷。

じゆく-ばん 熟蕃【名】一 やや王化に服せる野蠻人。(生蕃に對して) 二 臺灣の蕃族中、昔は支那の、又今は我が國の施政に歸附せるもの。風習・言語・體質など多くは支那人化して、純粹の血統を傳ふる者少數なるに至れり。(生蕃に對して)
じゆく-ひ 熟否【名】熟することと熟せざることと。
しゆく-びやう 宿病【名】しゆくあ(宿痾)に同じ。
しゆく-ふ 叔父【名】父の弟。をぢ。
じゆく-ふ 熟布【名】ほそぬの(細布)に同じ。(粗布に對して)
しゆく-ぶぎやう 宿奉行【名】武家時代の職制の一。將軍出行の時、臨時に任ぜられて、宿割の事を掌りしもの。
しゆく-ふく 宿福【名】〔佛〕しゆくとく(宿德)二に同じ。
しゆく-ふく 祝福【名】一 前途の幸福を祈ること。 二〔基〕『英 Blessing』神の恩惠。
しゆく-ふん 宿憤【名】豫てよりのいきどほり。積怒。
しゆく-ぶん 祝文【名】一 神に祈る文。 今昔物語「三つの清火をきりかけきりかけ、祝文の詞を上げにける」 二 祝意を陳べたる文章。
しゆく-へい 宿弊・宿病【名】古くよりの弊害。
じゆく-べう 熟苗【名】移植に適當なる狀態となれる苗。
しゆく-べん 宿便【名】腸内に長く停滯せる糞便。
しゆく-ぼ 叔母【名】父のいもうと。をば。
しゆく-ほう 縮縫【名】たてに縫ふこと。
しゆく-ぼう 宿謀【名】かねての謀計。
しゆく-ぼく 宿墨【名】硯にて磨りて、一夜を經過したる墨汁。墨色惡しきと、粘りけのあるとを嫌ひて、書家・畫家等は用ひず。
じゆく-まい 熟米【名】米のよく煮たるもの。 盛衰記「夕も、今朝も、御熟米をだにも御覽じ入れさせたまはず」
しゆく-まう 宿望【名】しゆくばう(宿望)に同じ。 書簡「宿望すでに遂げぬることを悦ぶといへども」
じゆく-みん 熟眠【名】よく眠ること。じゆくすゐ。うまい。
しゆく-みやう 宿命【名】しゆくめい(宿命)に同じ。
しゆくみやう-つう 宿命通【名】〔佛〕六神通の一。自己及び他人の宿世における生命・行事を自在に知る通力。 太平記「宿命通を得て、過現を見たまふ」
しゆく-む 宿霧【名】前夜よりの霧。 太平記「宿霧相侵し、藥石驗を失ふ」
しゆ-くん 酒醺【名】酒に醉ひ、又は酒に醉ひて心地よきこと。
しゆ-くん 主君【名】きみ。しゆう。主人。君上。君主。 狂「このなかのしゆくんには、おまへこそおはしませ」
しゆ-くん 殊勳【名】拔群の勳功。殊功。
しゆく-めい 宿命【名】前世より定まれる運命。宿運。
しゆくめい-せつ 宿命說【名】〔哲〕次條に同じ。
しゆくめい-ろん 宿命論【名】〔哲〕『英 Fatalism』うんめいろん(運命論)一に同じ。
じゆく-めん 熟面【名】よく見知れる顏。(生面に對して)
しゆく-もん 祝文【名】しゆくぶん(祝文)に同じ。
しゆく-もん 宿問【名】久しき以前よりの問題又は疑問。
しゆく-や 宿夜【名】たいや(逮夜)に同じ。
しゆく-や 夙夜【名】一 早朝と夜と。 二 早朝より夜に入るまでの間。明し暮すこと。 太平記「鼎湖の雲を瞻望して、恨を天邊の月に添へ、覇陵の風に夙夜して、別を夢裏の花に慕ふ」
しゆく-や 夙夜【副】朝早くより夜に至るまで。あけくれ。よるひる。あさゆふ。
しゆく-やくにん 宿役人【名】昔、宿驛にありて、問屋場を管し、人馬差立(サシタテ)の事を掌りし役人。
しゆく-ゆう 祝融【名】一 支那の火の神。 二『左傳の昭公二十九年の條に「火正曰二祝融一」とあり』『禮記の月令篇に「孟夏之月、其神祝融」とあり』古の火正、即ち火を司りし官にして、民に功ありしより、後世火星に配し、神として祭るに至りしものなるべしといふ。獸身・人面にして、兩龍に乘るなど記され、また顓頊(センギョク)の弟なりとも傳へらる。 三 くわさい(火災)に同じ。
しゆく-らう 宿老【名】一 年功を積みたる人。としより。しくらう。故老。 二『宿老の者をこれに補せしよりいふ』ひやうぢやうしゆう(評定衆)の異稱。(中老に對して)〔鎌倉・室町幕府の語〕 三 らうぢゆう(老中)又はかろう(家老)の異稱。 嵯峨天皇甘露雨「やあやあ、町人共、直ちに宜旨の事あり、町町宿老・行事・組頭一人も殘らず罷り出でよ」 四 町内の年寄役。
じゆく-らん 熟爛【名】らんじゆく(爛熟)に同じ。
じゆく-らん 熟覽【名】十分に見ること。よく見ること。
じゆく-りよ 熟慮【名】つらつらと考ふること。熟思。
しゆく-れう 宿料【名】やどせん(宿錢)に同じ。
じゆく-れん 熟練【名】馴れて巧になること。熟達。練熟。
しゆ-ぐろ 朱黑【名】蠟色炭の粉末に、朱粉を混じたるもの。色蒔繪の材料とす。
じゆく-ろ 熟路【名】行きなれて、よく案内を知りたる路。
しゆ-ぐわ 鑄貨【名】貨幣を鑄造すること、又その鑄造したる貨幣。
しゆ-ぐわ 手畫【名】〔美〕しぐわ(指畫)に同じ。
じゆ-くわ 樹果【名】樹木の果實。このみ。
じゆく-わ 熟和【名】こなること。消化。
しゆ-くわい 首魁【名】一 さきがくること。 二 かしら。張本人。巨魁。魁首。
しゆ-くわいあん 朱晦庵【名】〔人〕しゆき(朱熹)に同じ。
しゆ-くわう 珠光【名】〔人〕茶道の祖。通稱は村田茂吉。獨蘆軒・香樂菴、また休心法師と號す。奈良の人。奈良稱名寺の住職となりしが、三十餘歳にして、紫野大德寺に入りて、一休に從ふ。遂に茶式を定め、將軍足利義政に知られ、文龜二年歿す。年八十一。
しゆくわう-あん 珠光庵【名】京都三條邊に在りて、珠光の居りし草庵。
しゆくわう-はちん-らく 主皇破陣樂【名】さんじゆはちんらく(散手破陣樂)に同じ。

じゅくわう-ばつ 受光伐【名】『獨 Lichtungshieb』伐殘したる林木を强く光線に當らしめて、生長を促進せんがために行ふ强度の間伐。

じゅくわう-ひ 壽光被【名】澤胡桃(さはぐるみ)の內皮。筥・盆などに捲合はせて飾とす。

しゅくわう-もち 珠光餅【名】茶道の祖珠光の製し創めし餅。茶の會に用ふ。

しゅ-くわげん 主和絃【名】〔音〕しゅてうわん(主調音)に同じ。

しゅくわしつ-さう 手過膝相【名】〔佛〕三十二相の一。手長くして、膝を過ぐるもの。

しゅ-くわん 首卷【名】書物の最初の卷。第一卷。

しゅ-くわん 主管【名】主として、管轄又は管理すること、又その職名。

しゅ-くわん 主觀【名】〔哲〕『英 Subject』思惟し感動し又は意欲する自身、即ち認識の主。自然に對する精神、物質に對する心意、實在に存する思考等と同一視せらるるもの。(客觀に對して)

じゅ-くわん 入棺【名】にふくわん(入棺)に同じ。 傾城酒呑童子「じゅ棺も葬禮も手にかけんと思ふ筋に」

じゅ-くわん 儒冠【名】儒者の被る被物。 太平記「多年拜趨の儒冠を解いて、十戒持律の法體になり給ひにけり」

じゅ-くわん 儒官【名】儒學によりて任官すること、又その人。

じゅ-くわん 受灌【名】〔佛〕灌頂を受くること。

じゅ-くわん 樹冠【名】『獨 Krone』樹木の下枝より上方に於ける枝葉の總稱。

じゅ-ぐわん 呪願・咒願【名】〔佛〕佛・菩薩の前に呪文を唱へて、福德を祈願すること。 榮花「權僧正導師、呪願仕うまつりたまひて」

じゅくわん-くわ 樹冠火【名】森林火災の一。針葉樹林の樹冠を燒き拂ふこと。樹梢火。(地表火に對して)

しゅくわん-けんげん-さうぎ 主管權限爭議【名】〔法〕行政官廳と行政裁判所と又は司法裁判所と司法裁判所との如く、同系統に屬する官廳が、或事項につき、互にその權限の屬否を主張すること。同一の監督下にある官廳間の場合は上級の官廳、監督同一ならざる官廳間の場合には內閣、これを裁決す。職權爭議。主管爭議。けんげんさうぎ(權限爭議)參照。

しゅくわん-さうぎ 主管爭議【名】〔法〕前條に同じ。

しゅくわん-し 主觀詩【名】〔文〕じょじやうし(敍情詩)に同じ。

じゅぐわん-し 呪願師・咒願師【名】〔佛〕七僧の一。咒願文を讀誦するもの。法會の最重要事なるが故に、必ず大導師これに當る。

しゅくわん-しや 主管者【名】主管する人。

しゅくわん-しゅぎ 主觀主義【名】〔哲〕次條に同じ。

しゅくわん-せつ 主觀說【名】〔哲〕『英 Subjectivism』㊀客觀的認識の可能を否定して、吾人の精神は自己の狀態を意識する以上に出づる能はずとなす說。即ち懷疑論の一種、又はその一要素たるもの。(客觀說に對して) ㊁心意的方面のみを見て、物質的方面を無視する傾向ある說。(客觀說に對して) ㊂道德の目的を快・不快の主觀的狀態に置く倫理說。(客觀說に對して)

しゅくわん-だいじん 主管大臣【名】その事物を主管する大臣。

しゅくわん-ちやう 主管廳【名】その事物を主管する官廳。

しゅくわん-てき 主觀的【皃】『英 Subjective』自身を基礎とし、自身に對する關係にて、觀察するさま。(客觀的に對して)

しゅくわんてき-かかく 主觀的價格【名】〔經〕『英 Subjective value』各人より見たる貨物の價格。(客觀的價格に對して)

しゅくわんてき-しやうかうゐ 主觀的商行爲【名】〔法〕『英 Subjective commercial transaction』商法上に規定せる商人が、その行爲をなすにより初めて商行爲となるもの。例へば、運送に關する行爲・出版・印刷又は撮影に關する行爲、作業又は勞務の請負等の如し。關係的商行爲。相對的商行爲。

じゅぐわん-もん 呪願文・咒願文【名】呪願の意を述べたる文。

しゅく-わり 宿割【名】宿處を割當つること、又その役。

しゅくわ-れう 鑄貨料【名】さうへいひ(造幣費)㊁に同じ。

しゅく-ゐん 宿院【名】しゅくばう(宿坊)㊁に同じ。 醒睡笑「鳶が、魚をくはへ來り、宿院の內にてくらはんとするところに」

しゅく-ゑい 宿衞【名】宿直して、護衞すること、又その人。

しゅく-ゑん 淑媛【名】しゅくぢょ(淑女)に同じ。

しゅく-ゑん 宿怨【名】かねての恨。多年のうらみ。舊怨。

じゅ-げ 樹下【名】㊀じゅか(樹下)に同じ。㊁〔佛〕じゅげざ(樹下坐)の略。

じゅげ-せきじゃう 樹下・石上【句】〔佛〕『樹下は前條㊁の意なれども、石上と熟して用ひたる例、佛書には見當らずといふ』出家して、山野・路傍などに宿ること。 太平記「樹下・石上に生じて、すでに靈を得て、年久し」

じゅ-げ 從下【名】古の位階の、從と下との添ひたるもの。即ち從下の五位といへば、從五位下なる類。 平家「もとは從下の五位にておはせしが、忽ちに五階を越えたまふこそめでたけれ」

じゅ-げ 頌偈【名】〔佛〕げ(偈)に同じ。

しゅ-けい 主計【名】㊀會計をつかさどること、又その人。㊁〔兵〕陸・海軍にて、會計・給與等の事項を掌る將校相當官。一等・二等・三等に分つ。

しゅ-けい 主刑【名】〔法〕『英 Principal punishments』獨立して科する刑罰。我が國の舊刑法にては、死刑・無期徒刑・有期徒刑・重懲役・輕懲役・重禁錮・輕禁錮・罰金・拘留・科料の十四種。新刑法にては、死刑・懲役・禁錮・罰金・拘留・科料の六種に分る。

しゅ-げい 種藝【名】作物のうゑつけ。種樹。

しゅ-げい 手藝【名】しゅこう(手工)に同じ。

じゅ-けい 受刑【名】〔法〕刑の執行を受くること。

じゅ-けい 鑄型【名】鑄造する物の模型。いがた。

じゅ-げい 樹藝【名】樹木を植付くること。

しゅけい-がかり 主計係【名】かんぢやうかた(勘定方)㊀に同じ。

しゅげい-がくかう 手藝學校【名】手藝を敎授する學校。

しゅけい-かん 主計監【名】海軍における佐官相當の主計吏、即ち主計大監・主計中監・主計少監の總稱。

しゅけい-きょく 主計局【名】大藏省の一局。總豫算決算・特別會計の豫算決算、仕拂豫算、主計簿の登記、歲入・歲出現計書の調製、諸計算書の下檢査、その他、合計上の重要なる事項を取扱ふ所。

しゅけい-くわ 主計科【名】明治六年海軍に設けられたる一科。乘艦四文官の一。主計大監・主計少監・大・中小主計・艦內廚宰・艦內割烹・介病室廚宰等の職員ありしも、のち廢せらる。

しゅけい-こうほせい 主計候補生【名】りくぐんしゅけいこうほせい(陸軍主計候補生)の略。

しゅけい-くわん 主計官【名】會計を司る官吏。主計の官吏。主計吏。

じゅけい-しや 受刑者【名】刑の執行を受けて居る人。

しゅげい-しゅち-ゐん 綜藝種智院【名】『綜藝とは衆藝を兼綜する意。儒・佛を併せ授けしによりていふ』王朝時代の私學校の一。天長五年僧空海の京都九條坊門の南、油小路の西に創立せしもの。我が國最古の宗敎學校にして、空海寂後の沿革は明かならざれども、承和の頃は、廢絕に歸したるものの如し。

しゅけい-しょぶん 主刑處分【名】〔法〕主刑を科する行政處分。

しゅけい-ちやう 主計長【名】海軍に屬する部局、例へば港務部・鎭守府・水雷團・軍艦等にて、その部局內の會計・給與の事務を掌理する職。

しゅけい-ぼ 主計簿【名】大藏省にて扱ふ金銀出納帳。大藏大臣は、これに基づきて歲入・歲出現計書を調製す。

しゅげい-ゆ 鬚鯨油【名】鬚鯨に屬する鯨より採りたる油。鯨油中の眞品す。

しゅけい-り 主計吏【名】㊀しゅけいくわん

(主計官)に同じ。㊁陸・海軍における會計・給與の事項を掌る官吏、即ち主計・主計監の類。

しゅげい-るゐ 鬚鯨類【名】〔動〕鯨類に屬する一類。齒なくして、鬚を有するもの。こくぢら・せみくぢら・ながすくぢらの類。

しゅけい-れう 主計寮【名】かずへれう(主計寮)に同じ。

しゅげい-ゐん 綜藝院【名】しゅげいしゅちゐん(綜藝種智院)に同じ。

しゅ-けう 主敎【名】〔基〕『英 Bishop』ギリシャ敎にて、總主敎の下、司祭の上に位する僧位。敎會の敎務を總轄し、司祭・補祭等を監督す。

しゅ-けう 手敎【名】てがみ。書狀。 下學集「手敎、シュケウ、書狀之義也」

じゅ-けう 受敎【名】敎を受くること。

じゅ-けう 授敎【名】敎を授くること。

じゅ-けう 儒敎【名】儒學の敎。孔子・孟子の說を奉じ、四書・五經等を經典とする敎。政敎の一致を主義とす。

しゅ-げき 手戟【名】小さきほこ。てぼこ。

じゅげ-ざ 樹下坐【名】〔佛〕頭陀(づだ)の行ふ十二の行の一。大樹の下に坐して、靜かに念じて、佛道を求むること。樹下。

しゅ-けつ 朱闕【名】『朱塗の闕の義。しゅもん(朱門)㊁參照』宮門。禁門。宮闕。

じゅ-けつ 授決【名】〔佛〕『決定の記別を授くる義』じゅき(授記)に同じ。

じゅ-けつ 受決【名】〔佛〕『前條を見よ』じゅき(受記)に同じ。

しゅ-げふ 修業【名】學藝を學ぶこと。稽古。

じゅ-げふ 授業【名】學藝又は業務を敎ふること。敎授。

じゅ-げふ 受業【名】授業を受くること。

じゅ-げふ 儒業【名】儒者の業務。 太平記「儒業の人かと見つる雲客」

じゅげふ-はふ 授業法【名】けうじゅはふ(敎授法)に同じ。

じゅげふ-れう 授業料【名】授業の料金。

しゅ-けん 朱硯【名】朱墨をする硯。しゅすずり。

しゅ-けん 殊眷【名】特殊の眷選。殊寵。

しゅ-けん 主權【名】㊀おもなる權力。㊁〔法〕とうぢけん(統治權)に同じ。

しゅ-げん 修驗【名】㊀しゅげんじゃ(修驗者)の略。㊁しゅげんしゅう(修驗宗)の略。㊂しゅげんだう(修驗道)の略。 盛衰記「三井の流の修驗の人さこそ嬉しく思ひけめ」

じゅ-けん 授權【名】〔法〕『獨 Bevollmächtigung』他人に代理權を授與するを目的とする行爲。

じゅ-げん 入眼【名】敍位に、位階のみを錄したる位記、又は除目(ぢもく)に、官のみを錄したる文書に姓名を加筆すること。じゅがん(入眼)參照。

しゅげん-か 修驗家【名】しゅげんじゃ(修驗者)に同じ。

しゅけん-こく 主權國【名】『英 Sovereign state』㊀主權の完全なる國。即ち獨立權並びに自治權の完全なる國。㊁或事件に對して、主權を有する國。即ち日本の領域に於て犯罪の行はれたる場合、その事件に對する主權國は、日本なりといふが如し。

じゅけん-しかく 受驗資格【名】受驗に必要なる資格。

しゅけん-じゃ 主權者【名】〔法〕『英 Sovereign』國家の最高權者、即ち國家の最高機關。

しゅげん-じゃ 修驗者【名】修驗道を修業する人。被髮して、篠掛(すずかけ)・袈裟・頭巾(ときん)を著け、大刀を佩き、金剛杖をつき、法螺を吹きて、諸國を巡回するもの。しゅげん。修驗家。山伏。おほみねいり(大峯入)・せんだつ(先達)參照。

じゅけん-じゃ 受驗者【名】試驗を受くる人。受驗人。

しゅげん-しゅう 修驗宗【名】〔佛〕しゅげんだう(修驗道)に同じ。

じゅけん-せい 受驗生【名】學校の入學試驗を受くる學生。

しゅけん-せつ 主顯節【名】〔基〕『英 Epiphany 主顯とは、基督が神の子として、世に顯れたりとの意』基督の洗禮を受けたる日なりとて祝ふ日、即ち毎年一月六日。

しゅげん-だう 修驗道【名】『修驗の名は、聖不動經なる「欲ㇾ驗二法成一者、入二山林寂靜處一求二淸淨地一建二立道場一作二護摩事一速得二成就一」、日本靈異記役優婆塞(えんのうばそく)傳なる「修二行孔雀之呪法一證二得奇異之驗術一」に本づくといふ』多く數理上の研究を爲さず、專ら冥驗の行を修するもの、即ち密敎の一部を修行するもの。開祖は役小角(えんのをづぬ)、宇多天皇の頃、聖寶僧正再興せり。のち增譽僧正、天台の修驗道を開き、聖寶の眞言の修驗道と二派對立し、德川時代には、前者を本山派、後者を當山派と呼びたり。明治五年他宗派に隷屬せしむることとなりしが、同十八年復興を許し、天台・眞言二宗に附屬せしめらる。兩部。雜宗。修驗。修驗宗。

じゅけん-ち 受驗地【名】試驗を受くる地。

じゅけん-にん 受驗人【名】じゅけんじゃ(受驗者)に同じ。

しゅけん-もん 崇賢門【名】すうけんもん(崇賢門)に同じ。

しゅけんもん-ゐん 崇賢門院【名】〔人〕すうけんもんゐん(崇賢門院)に同じ。

じゅけん-れう 受驗料【名】受驗者の納むる手數料。

しゅ-こ 酒庫【名】酒を入れおく庫。さかぐら。

しゅ-こ 酒壺【名】さかつぼ。酒を入るるつぼ。

しゅ-こ 酒戶【名】㊀さかや(酒屋)に同じ。㊁『じやうご(上戶)を見よ』飲酒の量。

しゅ-こ 守戶【名】㊀古、山陵の陵戶なき場合に、附近の百姓をして、年を限り、調庸を免じて、これに充てしもの。㊁明治の初年に、山陵の酒掃を掌らしめしもの。

しゅ-こ 主顧【名】とくい。花客。

しゅ-ご 主語【名】『英 Subject』㊀〔哲〕しゅじ(主辭)に同じ。㊁〔語〕一個の文章中にて、主格をあらはしたる語。例へば、「花吹く」「風涼し」の「花」「風」の類。主辭。主詞。(客語に對して)

しゅ-ご 守護【名】㊀まもること。けいご。㊁鎌倉・室町兩幕府時代の職制の一。文治二年源賴朝の諸國國衙に總追補使(そうついぶし)を置き、後、守護と改稱せしに起る。初は大番の催促、謀叛人の追補などを職とし、後つひに國內大小の事務に關涉するに至り、室町時代には、更に甚しく、數箇國を兼併して、諸侯の形勢をなし、遂に割據の世となるに至れり。守護職。守護役。

しゅ-ご 酒後【名】酒を飲みたる後。「茶前・酒後」

しゅ-ご 手語【名】手眞似にてはなすこと。しかたばなし。

じゅ-ご 頌古【名】〔佛〕古則を擧げて韻語となし、その意を發明せるもの。

しゅごい-し 守護石【名】庭園の景色の主眼となる石。

しゅ-こう 殊功【名】すぐれたる勳功。殊勳。

しゅ-こう 首功【名】㊀敵の首を取りたる功勞。㊁第一番の功勞。

しゅ-こう 首肯【名】『首にて肯(がへ)んずる義』うけがふこと。うなづくこと。承諾。

しゅ-こう 手工【名】指先のはたらきにて行ふ工藝。手藝。手技。

しゅ-こう 主公【名】㊀きみ。主君。㊁主人。主人公。

しゅ-こう 趨候【名】すうこう(趨候)を見よ。

しゅ-こう 珠孔【名】〔植〕『英 Micropyle』胚珠の內被と外被とを通じて、外界と交通する小孔。

じゅ-こう 收公【名】しうこう(收公)に同じ。 東鑑「被ㇾ收二公河村鄉一」

じゅ-ごう 准后【名】じゅさんごう(准三后)の略。 著聞「この珠、准后(じゅごう)へ參らせ給はるべし」

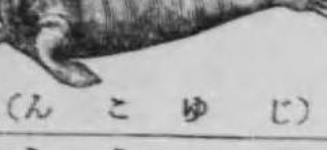
しゅこう-げふ 手工業【名】小額の資本と簡易なる工具とに依り、主に人力を以てなす工業。(機械工業に對して)

しゅこう-さん 酒功讚【名】しゅとくしょう(酒德頌)に同じかるべし。 一代男「折節、初紅葉の陰に、自在をおろし、金の大燗鍋、もろこしの酒功讚をうつすとて、遊女三十五人、おもひおもひの出立」

しゅ-こうしよ 主工署【名】古、春宮(とうぐう)坊に屬し、首(かみ)・令史(さくわん)各一人、工部六人、使部・直丁(ぢきちやう)・驅使丁(くしちやう)各若干等の職員ありて、東宮の土木の營造、雜作の事を掌りし役所。

じゅこう-ちやう 授口帳【名】口分田(くぶんでん)

を授くべき人員を記したる帳簿。
しゅご-さた　守護沙汰【名】鎌倉時代に、守護職に於て聽斷せし訴訟。　東鑑「止ニ守護沙汰一爲ニ通信沙汰一」
しゅ-こし　酒胡子【名】〔音〕雅樂の一。唐樂。壹越調二十五曲の一。唐人、讌飲の時用ひしものといふ。醉公子。酒飲子。　拾芥抄「酒胡子、シュコシ、無舞」
しゅご-し　守護使【名】鎌倉・室町兩幕府の職制の一。守護より派遣せられて、田畠の調査・年貢の未納の催促などをせし使。
しゅご-じん　守護神【名】守護する神。　狂言(鬼子大黒殿)「この山に守護神なくてはかなはじ」
十二の守護神【句】〔佛〕じふにじんしやう(十二神將)に同じ。　一目玉鉾「阪の下に藥師堂あり。…杳かなる洞に光明のかがやかしきをたづねゆきて見たまふに、菊面石なり。そのめぐりに十二の守護神立たせたまふ」
しゅご-しよく　守護職【名】しゅご(守護)㊀に同じ。
しゅご-だい　守護代【名】鎌倉・室町兩幕府の職制の一。守護職の代官。守護代官。郡代。
しゅご-だいくわん　守護代官【名】前條に同じ。
しゅご-だんせん　守護段錢【名】守護がその用途のために課する段錢。
しゅ-こつ　手骨【名】〔醫〕手首より指頭までの骨の總稱。腕骨・掌骨・指骨より成る。
しゅご-にん　守護人【名】守護する人。
しゅご-ぶぎやう　守護奉行【名】鎌倉・室町兩幕府の職制の一。守護㊁の轉補・得替等、守護に關する一切の事を掌りしもの。
じゅご-ふ-し　受業師【名】〔佛〕『梵Upādhyāya(鄔波陀耶)の譯語』得度の後、教を受くる師。親教師。
しゅご-ふにふ　守護不入【名】守護の支配、租税の徵收を免れ、武士の立入りて罪人を逮捕することを得ざること。
しゅご-ふにふ-ち　守護不入地【名】守護不入の許可を得たる土地。即ち神社・佛寺・權門の領地。
しゅ-こん　種根【名】たね。すじやう。　盛衰記「師光は、阿波國の者、種根は、田舍人(ヰナカウド)なりけり」
しゅ-こん　酒痕【名】こぼれたる酒の染(シ)みたる痕跡。
しゅ-こん　主根【名】〔植〕『英Main root』植物の種子より萠發する時、莖の下端より初めて地中に下垂する根の、眞直に下方に伸ぶるもの。分岐せずして單根をなすものと、岐出して支根を生ずるものとあり。
しゅ-こん　鬚根【名】㊀〔植〕主根より發生する、鬚のごとき根。㊁〔植〕『英Fibrous root』複根の一。數多の纖細なる支根を支出するもの。例へば稻・麥その他の禾本科植物に見るものの類。
じゅ-こん　樹根【名】きのね。
じゅ-ごん　儒艮【名】〔動〕『マライ語の訛』(英Dugong)游水類に屬する海獸。海牛に近きものにて、體長さ一丈内外、色は紫色にして黑斑を帶び、全身に軟毛あり。頭はやや丸味を帶び、海草を食ふ。肉は食用に供し、脂肪よりは、油を採取す。紅海以東の熱帶の海洋及び河口に群棲し、我が國沖繩諸島の沿岸にも產し、沖繩にては、「ざんのいを」といふ。海馬。


(じゆこん)

じゅ-こん　入魂【名】懇意。懇親。昵懇。じゅっこん。じっこん。　盛衰記「木曾殿の入魂の郎等にはよもあらじ」
じゅ-ごん　呪禁・咒禁【名】『呪、即ち陀羅尼にて、禁厭(マジナ)ふ義』まじなひをしてたたりを除きはらふこと。
じゅごん-し　呪禁師・咒禁師【名】〔佛〕印明(インミヤウ)を結誦して、加持・祈禱を爲す法師。じゅごんのし。ずごんのし。呪師。
じゅごん-せい　呪禁生・咒禁生【名】古、呪禁の事を學びし者。ずごんせい。
じゅごん-の-し　呪禁師・咒禁師【名】じゅごんし(呪禁師)に同じ。　「呪禁師、ジュゴンノシ」
じゅごん-はかせ　呪禁博士・咒禁博士【名】古、呪禁生を敎ふることを掌りし職。ずごんはかせ。
しゅご-やく　守護役【名】しゅご(守護)㊁に同じ。
しゅ-さ　主査【名】主となりて調査すること、又その人。
しゅ-さ　酒皶【名】しゅさび(酒皶鼻)の略。
しゅ-さ　朱砂【名】しんしや(辰砂)㊀に同じ。
しゅ-ざ　朱座【名】德川時代に、幕府の許を得て、朱及び朱墨を製造し、これを專賣せし所。慶長十四年始めて堺に設け、後、江戶・京都・長崎等にも設置せられたり。
しゅ-ざ　首座【名】㊀首席につくべき人。㊁かみざ。首席。上席。㊂〔佛〕しゅそ(首座)に同じ。㊃〔動〕たひ(鯛)の隱語。〔僧侶の語〕
しゅ-さい　主宰【名】㊀人人の上に立ちて一切を統治すること、又その人。かしら。㊁〔佛〕『事物を主宰する作用あるによりていふ』が(我)に同じ。
しゅ-さい　殊才【名】ことにすぐれたる才、又これを有せる才。異才。奇才。
しゅ-さい　酒債【名】酒代のかけ。
しゅ-さい　首歲【名】さいしゅ(歲首)に同じ。
しゅ-さい　主裁【名】主となりて事を裁判すること、又その人。
しゅ-さい　主祭【名】㊀祭事をつかさどること、又その人。㊁希臘敎の敎職の名。
しゅ-さい　主催【名】團隊の中心となりて、或事を催すこと。主唱して開催すること。
しゅ-さい　守歲【名】除夜に眠らずして、且(アシタ)に達すること。
しゅ-さい　修齋【名】〔佛〕齋會(サイヱ)を執行すること。
しゅ-ざい　衆罪【名】〔佛〕多くの罪業(ザイゴフ)。一切の罪障。
衆罪、草露の如し【句】〔佛〕『普賢觀經に「一切業障海、皆從ニ妄想一生、若欲ニ懺悔一者、端坐念ニ實相一、衆罪如ニ霜露一、慧日能消除」とあるに本づく』思惟(シユイ)・懺悔(サンゲ)の功德によりて、一切の罪障忽ち消滅す。〔諺語〕　謠曲(身延)「衆罪如霜露、慧日(ヱニチ)の光に消えて、即身成佛たり」
しゅ-ざい　首罪【名】㊀首を斷らるる罰。斬罪。㊁しゅはん(主犯)に同じ。
しゅ-ざい　首材【名】『英Stem』船艦の龍骨の前に立てて、舳(ヘサキ)にすべき材木。
しゅ-ざい　酒劑【名】〔醫〕藥物たる草根・木皮の成分を、白葡萄酒又はセリイ酒に浸出して得たる液。
じゅ-さい　儒祭【名】儒禮を以て祖先等を祭ること。支那宋の朱熹の家禮に基き、我が國の風習を折衷して定めしものにて、季節は春夏秋冬の仲月、又は春秋を以てし、江戶時代に、儒學者の間に行はれたり。
じゅ-さい　受齋【名】〔佛〕齋食の供養を受くること。
しゅさい-しや　主裁者【名】主裁する人。
しゅさい-しや　主宰者【名】主宰となりて事を行ふ人。
しゅ-さう　酒槽【名】さかぶね。
しゅ-さう　手爪【名】手のつめ。
しゅ-ざう　修造【名】しつざう(修造)に同じ。　平家「久しく修造無かりしかば、春は霞に立罩めて、秋は霧に交り」
しゅ-ざう　酒造【名】ざうしゅ(造酒)に同じ。
しゅ-ざう　鑄造【名】鑄て造ること。鑄造。
じゅ-さう　壽相【名】〔佛〕しさう(四相)を見よ。
じゅ-さう　儒葬【名】儒敎の儀式によりて葬ること。本づく所は、支那周代の禮に在り、我が國にては、德川時代の儒者これに準據し、朱熹の家禮等を參照して執行せり。じゅしやすてば(儒者捨場)參照。
じゅ-ざう　受贓【名】贓物を受くること。
じゅ-ざう　呪藏・咒藏【名】〔佛〕四藏の一。一切の神咒の總稱。
じゅ-ざう　壽藏【名】存命中に造りおく墓。生壙。壽冢。
じゅ-ざう　壽像【名】存命中に造りおくその人の像。
しゅざう-か　酒造家【名】酒類を釀造する人、又その家。
しゅざう-きよく　修造局【名】〔佛〕禪寺にて、一山の造營・作事を掌る處。
しゅざう-くみあひ　酒造組合【名】酒造業者が各自の利益を增進し、且つ營業上の弊害を矯正せんとする目的を以て組織したる公共組合。

しゅざう-くわ　鑄造貨【名】『金屬貨幣は多くは鑄造せらるるによりていふ』きんぞくくわへい(金屬貨幣)に同じ。
しゅざう-げふ　酒造業【名】酒類の釀造業。
しゅざう-げん　主藏監【名】古、東宮坊に屬し、金玉・錦綾・裝束の裁縫及び翫具などを掌りし役所。くらのつかさ。
しゅざう-す　修造主【名】〔佛〕禪寺にて、修造を監督する職。　庭訓往來「修造主(シユザウス)」
しゅざう-ぜい　酒造税【名】造石税の一種。酒類を課税物件とし、その造石數に應じて徵收する税金。酒税。
じゅざう-たうばん　鷲像纛幡【名】鷲の像を系がきたる纛幡。御即位の式の時、衞門府の軍旗として、會昌門外の陣頭に樹てしもの。
しゅざう-ねんど　酒造年度【名】酒の製造につきて定めたる年度。十月一日より翌年九月三十日までとす。
しゅざう-めんきよ-ぜい　酒造免許税【名】北海道の地方にて、酒造を免許せられたる者が納むる免許税。製造所一箇所毎に納めたるものにて、明治十九年酒造税則施行以前のもの。
しゅ-さつ　手札【名】㊀てふだ。なふだ。㊁てがみ。手書。手翰。
しゅ-さつ　手冊【名】手控の帳面。てちやう。
しゅ-ざね　朱札【名】朱塗の鎧の札(サネ)。
しゅさ-び　酒皶鼻【名】〔醫〕ざくろばな(柘榴鼻)に同じ。
しゅ-さん　主饌【名】おほひのすけ(大炊助)の唐名。
しゅ-さん　酒盞【名】さかづき。酒盃。
しゅ-さん　朱三【名】雙六(スゴロク)にて、采(サイ)の目の二つとも三の數のあらはれたること。重三。
しゅ-さん　趨參【名】さんすう(參趨)に同じ。
しゅ-さん　聚散【名】しゅうさん(聚散)を見よ。　太平記「聚散・離合の有樣は」
しゅ-ざん　主山【名】〔美〕支那風の山水畫にて、主眼となる山。
しゅ-ざん　珠算【名】たまざん(珠算)に同じ。
じゅ-さん　授產【名】產業を授けて、生計を立てしむること。
しゅ-さんか　主參加【名】〔法〕『獨Haupt-intervention』訴訟參加の一。第三者が、他人間に權利拘束となりたる訴訟物の全部もしくは一部を、自己のために請求する訴、及び原告・被告が共謀して、自己の債權に損害を及ぼすことを主張する訴。他人間の訴訟に參加するにはあらず、本訴訟の原告と被告とを、共同の被告とする獨立の訴なり。(從參加に對して)
しゅさんか-にん　主參加人【名】〔法〕主參加をなしたる人。(從參加人に對して)
じゅさん-きん　授產金【名】㊀授產の資金として貸附くる金。㊁明治維新の後、窮乏せる藩士に授產せしむる目的にて、各府縣に積立てたる金。
じゅ-さんぐう　准三宮【名】古、皇后にあらざる天皇の御生母・准母・女御等又は親王・法親王・攝政・關白・大臣等の勳功ある者に、特に授けられし稱號。三后に准じたる年官・年爵を授けられたり。じゅさんごう。じゅごう。
じゅ-さんごう　准三后【名】前條に同じ。
じゅさん-ば　授產場【名】貧民に產業を授けて、生計を立てしむる場所。
しゅ-さんぶつ　主產物【名】生產物品中の主要なるもの。
しゅ-ざや　朱鞘【名】朱漆にて塗りたる刀の鞘、又その刀。　重帷子「そりにそったる朱鞘ぼっこみ」
しゅさ-ゐん　主查委員【名】主となりて調査する委員。
しゅ-し　趣旨【名】しゅい(趣意)に同じ。
しゅ-し　主司【名】とりしまりをなす役、又その人。つかさ。
しゅ-し　主詞【名】しゅご(主語)㊀に同じ。
しゅ-し　種子【名】〔植〕㊀受胎せる胚珠の成熟せるもの。種皮と種核との二部より成り、種核は種子の實質部にして、通常胚と胚乳とより成り、胚は即ち幼植物なり。專ら顯花植物に見る所にして、隱花植物のこれに相當するものは、胞子と呼ぶ。たね。㊁物の發生する基本となるもの。たね。
しゅ-し　手指【名】手のゆび。
しゅ-し　手使【名】しし(指使)に同じ。
しゅ-し　朱四【名】雙六(スゴロク)にて、采(サイ)の目が、二つとも四の數のあらはれたること。重四。しゅさん(朱三)參照。
しゅ-し　洙泗【名】『支那山東省の洙水と泗水との義。洙水は泗水に合す。泗水は袞州(コンシウ)府の東に在り。水源を泗水といひ、西流して、大運河に入る。孔子は同州曲阜縣昌平郷に生れ、この二水の間に在りて、教を垂れしよりいふ』じゅがく(儒學)又はこうもん(孔門)の異稱。
しゅ-し　銖錙【名】ししゅ(錙銖)に同じ。
しゅ-し　鬚髭【名】くちひげ。
しゅ-し　酒食【名】しゅしょく(酒食)に同じ。
しゅ-し　酒滓【名】酒のかす。
しゅ-し　酒幟【名】酒屋のしるしとして軒に立つる幟。さかばた。酒帘。
しゅ-し　酒肆【名】さかや。酒店。酒家。
しゅ-し　酒資【名】さかて。酒代。
しゅ-し　酒巵【名】さかづき。酒杯。酒盞。
しゅ-し　酒司【名】後宮十二司の一。釀酒の事を掌りし所。
しゅ-し　殊死【名】『殊は身首斷析の意』㊀斬首の刑に處せらるること。死罪。㊁死を決して爲すこと。いのちがけ。
しゅ-し　朱子【名】〔人〕しゅき(朱熹)の尊稱。
しゅ-じ　朱字【名】㊀朱墨にて書きたる文字。㊁朱肉にて捺(オ)す時、文字の朱色にあらはるるやうに、凸字に刻りたる印。(白字に對して)
しゅ-じ　主事【名】㊀事を主(ツカサド)ること、又その人。主任。㊁長官の命を受けて、一部の事務を掌理する職。皇后宮職・東宮職・皇室會計審査局・帝室林野管理局・學習院・造神宮使廳・宗秩寮・東京帝室博物館・謄寫廳官房等に置かれ、奏任官たり。㊂明治二年待詔局に屬せし勅任官の職員。同年廢せられたり。㊃〔佛〕禪宗の都寺(ツウス)・監寺(カンス)・維那(ヰナ)・副寺(フウス)・典座(テンゾ)・直歲(シツスイ)の總稱。知事。執事。
しゅ-じ　主辭【名】『英Subject』〔哲〕論理上、命題を組立つる三部の一。立言の主題となるもの。例へば、「秀吉は日本人なり」の「秀吉」の類。主語。主位。㊁〔語〕しゅご(主語)㊁に同じ。
しゅ-じ　種子【名】〔佛〕㊀『草木の種子(シュシ)に譬へていふ』阿賴耶(アラヤ)識中にありて、一切有漏(ウロ)・無漏(ムロ)の有爲(ウヰ)法を生ずる功能。因緣の實體。〔法相宗の語〕㊁密敎にて、發して諸の佛又は妙理となるといふ深祕の梵字。殊に阿(ア)字を尊ぶ。
じゅ-し　樹枝【名】樹の枝。
じゅ-し　壽詞【名】賀壽の意を述べたる詩歌・文章。
じゅ-し　咒師・呪師【名】〔佛〕じゅごんし(呪禁師)の略。
じゅ-し　儒士【名】㊀じゅしや(儒者)に同じ。㊁がくしや(學者)に同じ。
じゅ-し　豎子・孺子【名】わらべ。
豎子の名を爲す【句】『史記の孫子傳中、魏の龐涓が齊の軍師孫臏に對していへる語に「遂爲ニ豎子名一」とあるに本づく』平生輕蔑せし者に、功名を爲さしめたるを殘念に思ふときの語。〔諺語〕
豎子をして、名を爲さしむ【句】前條に同じ。〔諺語〕
孺子敎ふべし【句】『史記の留侯世家に「良乃更ニ名姓一、亡匿ニ下邳一、良嘗間從容、步游ニ下邳圯上一、有ニ一老父一衣レ褐、至ニ良所一、直墮ニ其履圯下一、顧謂レ良曰、孺子下取レ履、良愕然欲レ毆レ之、爲ニ其老一彊忍下取レ履、父曰、履レ我、良業爲取レ履、因長跪履レ之、父以レ足受、笑而去、良殊大驚、隨目レ之、父去里許、復還曰、孺子可レ敎矣」とあるに本づく』この小供には敎育を施すことを得べし。
じゅ-し　樹脂【名】或種の樹木より分泌する液の、空氣に觸れて固まりたるもの。性質一定せざれども、概してテルペン屬炭化水素の酸化したるもの、また存在の狀態も、細胞膜内に含まるるもの、膜質の成分をなすもの、細胞間隙内に分泌せらるる等、種種あり。例へば松脂・漆の類。やに。
じゅ-し　壽死【名】天壽を全うし、草木の自然に枯死するが如く、安樂に死ぬること。

じゆ-じ 受磁【名】〔理〕磁力を受くること。（附磁に對して）

受磁の强さ【句】〔理〕磁氣能率を磁石の體積に除したる商。

しゆし-かうくわん 種子交換【名】從來栽培せし種子を廢して、最も適當せる地方より、眞種を求めて、播種用に供すること。

しゆし-がく 朱子學【名】儒學の一部。支那宋の朱熹の唱導せし經學。同じく宋の代の周茂叔・程明道・程伊川等の說を承けて大成し、理氣の說、持敬の說、格物・致知の說等、その主要なるものなり。朱學。

じゆ-しき 授職【名】〔佛〕じゆしきくわんちやう（授職灌頂）の略。正統記「淳祐、罪障の至を歎きて、卑下の心ありければ、弟子元杲僧都に、許可ばかりにて、授職を許さず」

じゆ-じき 受食【名】〔佛〕比丘（ビク）が檀越（ダンヲツ）の施食を受くること。

じゆしき-くわんちやう 授職灌頂【名】〔佛〕でんけつくわんちやう（傳敎灌頂）に同じ。正統記「勅定によりて、法皇の御弟子寛空にあひて、授職灌頂を遂ぐ」

しゆしき-だう 修式堂【名】しうしきだう（修式堂）に同じ。

じゆし-くわうたく 樹脂光澤【名】〔鑛〕『英 Resinous lustre』松脂又は獸脂に似たる光澤。琥珀の如き光澤。

しゆし-けい 手指形【名】〔植〕しゆしじやう（手指狀）に同じ。

しゆじ-げさ 種子袈裟・呪字袈裟【名】〔佛〕わげさ（輪袈裟）に同じ。平家女護島「もなし衣に種子袈裟かけ、六尺ゆたかの大坊主」

しゆし-じやう 手指狀【名】〔植〕葉の、手指を開きたるが如き形をなせるもの。手指形。

（しゆしじやう）

じゆし-せき 樹脂石【名】〔鑛〕『英 Retinite』褐炭中より往往現るる琥珀に似し鑛物。

しゆし-せんちやう-さう 手指纖長相【名】〔佛〕三十二相の一。手指の細く圓く長きこと。

しゆ-しつ 酒失【名】酒より生ずる過失。

しゆ-じつ 手實【名】王朝時代に、一戸內の人數・容貌・年齡等を記して、戸主より國司に差出しし帳。

しゆし-にゆうざい 種子乳劑【名】〔醫〕『獨 Samenemulsion』種子を水に浸して軟化洗滌し、皮を脫して搗碎し、漸次に水を加へて濾過したるもの。

じゆし-び 受死日【名】くろび（黑日）に同じ。

しゆじ-ふじやう 種子不淨【名】〔佛〕「五種の不淨」を見よ。

しゆしま 須子摩【名】〔人〕すしま（須子摩）に同じ。

しゆ-しん 守辰【名】ぎやうせいくわん（行政官）□を見よ。

しゆ-しん 酒箴【名】酒に關するいましめ。

しゆ-しん 珠簪【名】眞珠・珊瑚珠などにて飾りたるかんざし。

しゆ-しん 珠心【名】〔植〕『羅 Nucleus』胚珠中、內被の內部にありて、柔細胞より成れる部分。その中央に胚囊あり。

しゆ-しん 朱脣・朱唇【名】あかきくちびる。紅を附けたるくちびる。女のくちびる。丹脣。

しゆ-しん 主神【名】□神明に奉仕すること。□かむづかさ（主神）に同じ。

しゆ-じん 主人【名】□一家のあるじ。□わが仕ふる人。しゆう。かみ。

主人の鰭【句】鯉の口の兩脇にある鰭。太平記「二尺ばかりになる魚を、主人の鰭を挾んで」

じゆ-しん 受信【名】音信又は信書を受くること。（發信に對して）

じゆ-しん 樹心【名】樹木の中心。木の心（シン）。

じゆ-しん 儒臣【名】儒學を以て仕ふる臣。

じゆ-じん 孺人【名】支那にて、大夫の妻の尊稱。

じゆ-じん 戍人【名】關所・城塞などを守る人。戍兵。番兵。

しゆじん-おもひ 主人思【名】しゆうおもひ（主思）に同じ。

しゆじん-がは 主人側【名】主人方に關する人人。

じゆしん-き 受信機【名】『英 Receiving instrument』電報を受信するに用ふる機械。普通に用ふるはモオルス形にして、電磁石の側に軟鐵片ありて、その端に槓杆を附し、槓杆の一端にペンありて、ぜんまい仕掛にて繰出さるる現字紙に、その端を接するやうに造れり。

しゆじん-こう 主人公【名】□しゆじん（主人）□の敬稱。□『英 Hero』小說・脚本などに現るる中心人物。

しゆじん-し 主神司【名】伊勢齋宮の內院神殿に勤守し、大殿祭及び齋王の御禊祓の事に供奉することを掌りし役所。令外（リヤウゲ）の官司にして、齋宮寮の被管十二司に對して、特殊の地位に置かれ、その所管不定のため、神祇官の兼攝に屬せしこともあり。職員は臣・忌部（イミベ）・宮主（ミヤジ）各一人。

しゆしん-じゆ 主針儒【名】はりはかせ（針博士）の唐名。

じゆしん-しゆぎ 受信主義【名】〔法〕『獨 Empfangstheorie』隔地者間の意志表示に於て、相手方が意思表示の通知を受くると同時に、その効力發生すとなす主義。例へば書面によりて契約の申込をなす場合に、その書面の被申込者に到達したる時に、効力發生すとする類。（發信主義・表白主義・了知主義に對して）

しゆしん-ちやう 守辰丁【名】陰陽寮の職員の一。漏刻博士に屬し、漏刻を候ひ、鐘鼓を擊ちて、時を報ずることを掌りしもの。

じゆしん-でんぱう 受信電報【名】特別電報の一。電報の發信人が、その電報の受信人に到達したる日時の報知を、郵便又は電信によりて受くることを得るもの。

じゆしんでんぱう-れう 受信電報料【名】受信電報の料金。電信受信報知料と郵便受信報知料との二種に分つ。各條を見よ。

じゆしん-にん 受信人【名】信書・電報などを受取るべき人。（發信人に對して）

しゆじん-もち 主人持【名】現在主人に仕へてゐる人。主人のある人。

じゆしん-らく 壽心樂【名】きじゆんらく（喜春樂）の異稱。

しゆし-もん 手指文【名】しもん（指紋）に同じ。

しゆ-しや 手寫【名】手づから寫すこと。

しゆ-しや 守者【名】監守する人。番人。

しゆ-しや 朱砂【名】〔鑛〕しんしや（辰砂）に同じ。

しゆ-しや 趣舍【名】すうしや（趨舍）を見よ。

しゆ-しや 取舍・取捨【名】□取ると捨つること。よきを用ひ、あしきを用ひぬこと。取捨。去取。□多くの中より入用なるを取り、不用なるを捨つること。えりどり。

じゆ-しや 儒者【名】□儒學に長じたる人。ずさ。儒。□江戸幕府の職名。儒を以て仕ふるもの。林氏の家職とす。

じゆ-しや 受者【名】〔佛〕戒又は灌頂を受くる者。

じゆ-しや 聚砂【名】砂をあつむること。

聚砂の年【句】〔佛〕『西域記鈔に「聚沙之年、蘭蕙桂馥」とあり』せうねん（少年）の異稱。

聚砂爲佛塔（ブツタフ）【句】〔佛〕『法華經の方便品に「乃至童子戲聚レ砂、爲二佛塔一、如レ是諸人等、皆已成二佛道一」とあるに本づく』童子の、戲に砂を聚めて、佛塔を作り、供養する眞似事を爲す。斯かるわづかの善事も、成佛の結緣となるといふ。平家「仄かに聞く、聚砂爲佛塔の功德（クドク）、忽ちに佛因を感ず。況んや、一紙・半錢の寶財においてをや」

じゆ-しや 豎者【名】〔佛〕りふしや（立者）に同じ。

しゆ-しやう 手掌【名】手のひら。たなごころ。

しゆ-しやう 酒觴【名】さかづき。

しゆ-しやう 主醬【名】古の大膳職の職員の一。種種の醬豉（シヤウシ）・未醬（ミソ）などを造ることを掌りしもの。

しゆ-しやう 主將・首將【名】そうだいしやう（總大將）に同じ。

しゆ-しやう 主唱【名】主となりて唱ふること。

しゆ-しやう 首唱【名】はじめに唱へ出すこと、又その人。先唱。

しゆ-しやう 首相【名】ないかくそうりだいじん（內閣總理大臣）の異稱。

しゆ-しやう 修正【名】〔佛〕しゆしやうゑ（修正會）の略。著聞「法成寺の修正に、南門を

入りて參りて、退出の時、西門へまはされけるほど」

しゆ-じやう 衆聖【名】〔佛〕多くの聖人（ニンジヤウ）。

しゆ-じやう 種性【名】〔佛〕個人發展の種子（シユジ）と、その人本有（ホンウ）の性分（シヤウブン）と。

しゆ-じやう 主上【名】てんわう（天皇）に同じ。平治「主上、御位をすべらせたまひて」

しゆ-じやう 守城【名】城を守ること。

しゆ-じやう 鬚狀【名】〔植〕せんゐじやう（纖維狀）に同じ。

しゆ-じやう 衆生【名】〔佛〕『梵 Sattva（薩埵）の舊譯。新譯には有情（ウジヤウ）といふ。しゆうせい（衆生）參照』一切の生物。動物。群類。蒼生。源氏「六道の衆生のために、六部書かせたまひて」

衆生濟度（サイド）【句】〔佛〕衆生を救濟して、生死海を度脫せしむること。傾城酒呑童子「中尊は釋迦牟尼佛、佛も我れも十九歲、それは衆生濟度の道、これは戀路の闇に入り、猶三界を出でやらず」

衆生の始（ハジメ）【句】〔佛〕衆生の この世に生ずるに至りし最初の時。「衆生界無始」參照。謠曲 楊貴妃「それ過去遠遠（ヲンヲン）の昔を思へば、いつを衆生の始と知らず、未來永永（ヤウヤウ）の流轉（ルテン）、更に生死（シヤウジ）の終もなし」

衆生無邊誓願度（セイグワンド）【句】〔佛〕しぐぜいぐわん（四弘誓願）を見よ。釋迦如來誕生會「衆生無邊誓願度の御機緣盡きたまひ」

衆生を度（ド）す【句】衆生を濟度す。棠花「佛ともなり給ひ、衆生をもわたし給へ」

縁なき衆生は度し難し【句】□〔佛〕佛法を聞くべき宿緣の熟せぬ者は、說法も効なく、濟度の道なし。〔諺語〕□頑冥固陋なる者に對しては、說得の方法なし。〔諺語〕

じゆ-しやう 授賞【名】賞を授くること。

じゆ-しやう 受賞【名】賞を受くること。

じゆ-しやう 受章【名】勳章を授與せらるること。

じゆ-じやう 壽城【名】ひつぎ。棺。

しゆじやう-おん 衆生恩【名】〔佛〕四恩の一。衆生が互に助け合ひて負へる恩。

しゆじやう-かい 衆生界【名】〔佛〕生物の存在する世界。十界の中より佛界を除きたるもの、即ち九界。（己界に對して）

衆生界無始【句】〔佛〕衆生の天地間における存在は、宇宙と共に始なきこと、また終もなしと說く。

衆生界無盡【句】〔佛〕衆生界は、十方にわたりて、無限に存在す。鵜鷺合戰「衆生界無盡なれば、終に成佛の期を知らず」

しゆじやう-さう 衆生相【名】〔佛〕しさう（四相）を見よ。

しゆじやう-しん 衆生身【名】十身の一。五蘊（ゴウン）が衆生と共に和合して成れるもの。有情（ウジヤウ）世界の衆生の身。

じゆしやう-しや 受章者【名】勳章を授與せらるる人、又授與せられたる人。

しゆじやう-しゆぎ 主情主義【名】〔文・美〕しゆじやうせつ（主情說）に同じ。

しゆしやう-しよ 主漿署【名】春宮（トウグウ）坊に屬し、首（カミ）・令史（サクワン）各一人、水部（モヒトリ）十人、使部・直丁（ヂキチヤウ）・駈使（クシ）若干人等の職員ありて、東宮の饘粥（センジユク）・漿水・菓子の類を掌りし役所。大同二年主膳監に合併す。

しゆじやう-せけん 衆生世間【名】〔佛〕さんしゆせけん（三種世間）を見よ。

しゆじやう-せつ 主情說【名】〔文・美〕『英 Affectionism 又は Sentimentalism』吾人の精神を美的又は感情的に解釋せんとする見解。主として、第十九世紀の初頃より、ロマンチシズムに伴ひて流行したり。感傷主義。主情主義。（主意說・主知說に對して）

しゆじやう-せんけい 鬚狀線形【名】〔植〕鬚狀を帶びたる線形。

しゆじやう-ぢよく 衆生濁【名】〔佛〕五濁の一。一切衆生が、末世になりて、邪見・放逸を增長すること。

しゆじやう-にん 衆生忍【名】〔佛〕しやうにん（生忍）に同じ。

しゆじやう-はう 守城砲【名】守城に使用する大砲。攻城砲に對抗するに足る威力と防禦地帶內における位置轉換の動作容易なるとを要す。

しゆしやう-ゑ 修正會【名】〔佛〕中古、寺院に於て、元日に始めて三日・五日もしくは七日間、その年の災危を防ぐために修する法會。しゆにぐわつゑ（修二月會）參照。

しゆ-じやか 朱雀【名】次條に同じ。平家女護島「しゆじやかの御所の築山に」

しゆ-じやく 朱雀【名】□四神の一。南方の星象。すざく。（玄武・青龍・白虎に對して）□私年號の一。前後二回あり。一は弘文天皇の元年がその元年に當るもの、他は天武天皇の十三年がその元年に當るもの。水鏡「筑紫より足三つありし雀の赤きを奉りしかば、年號を朱雀元年とぞ申しはべりし」

しゆ-しやく 授爵【名】華族に陞せらるること。

しゆじやく-おほぢ 朱雀大路【名】〔地〕京都舊內裏の朱雀門より、南端の羅城門に至るまでの大路。今は、京都市の西端にて、千本通（センボンドホリ）といへり。しゆじやくどほり。すざくおほぢ。

しゆじやく-き 朱雀旗【名】仗旗の一。

しゆじやく-てんわう 朱雀天皇【名】〔人〕第六十一代の天皇。御名は寬明（ユタアキラ）。醍醐天皇第十一の皇子。御母は藤原穩子。御在位十六年（紀元一五九一年―一六〇六年）。天曆六年崩ず。壽三十。

しゆじやく-どほり 朱雀通【名】〔地〕しゆじやくおほぢ（朱雀大路）に同じ。

しゆじやく-の 朱雀野【名】〔地〕山城國京都の西の都の漸く衰へて、朱雀大路以西の、野の如くなりたる邊。すざかの。

しゆじやく-もん 朱雀門【名】平安城の大內裡の外廓十二門の一。南面三門の中央、即ち美福門と皇嘉門との間に位し、外廓正門たりしもの。大門。大伴門。南門。すざくもん。

しゆじやく-ゐん 朱雀院【名】□京都三條の南、朱雀の西にありて、方四丁に亙りし累代の後院。嵯峨天皇創めて造營せられ、天曆四年燒失し、後再び造營せらる。四條後院。□〔人〕しゆじやくてんわう（朱雀天皇）に同じ。

じゆしや-さう 壽者相【名】〔佛〕じゆさう（壽相）に同じ。

じゆしや-すてば 儒者捨場【名】〔地〕『儒葬は儒學の盛時に唱へられ、寺も無き野邊に送り行くさまの見馴れぬによりて、この俗稱あり』東京市小石川區護國寺の背後に在りて、德川時代に、儒者の儒葬せられし處。室鳩巢・古賀精里・柴野栗山・尾藤二州・岡田寒泉・古賀侗菴等の墓あり。

しゆしや-ひきつけ 取捨引付【名】鎌倉時代に、引付方における裁判の時、文案の可否を取捨せし會議。

しゆしや-をん 衆車園・衆車苑【名】〔佛〕「帝釋の四苑」を見よ。盛衰記「衆車園の遊、歡喜園の戲」

しゆ-しゆ 首衆【名】〔佛〕しゆそ（首座）に同じ。

しゆ-しゆ 主首【名】〔佛〕かんす（監寺）に同じ。

しゆ-しゆ 守株【名】「株（クヒゼ）を守る」を見よ」一事に泥みて、變通の才に乏しきこと。

しゆ-しゆ 朱之瑜【名】〔人〕しゆしゆんすゐ（朱舜水）に同じ。

しゆ-じゆ 手授【名】手づから授くること。てわたし。

しゆ-じゆ 珠襦【名】珠にて飾れる短き衣。

しゆ-じゆ 侏儒・朱儒【名】□身のたけの低き人。一寸法師。□梁の上に立つる短柱。うだち。□見識なき人を嘲りていふ。

しゆ-じゆ 種樹【名】植物を種うること、又その人。うゑつけ。

しゆ-じゆ 種種【名】くさぐさ。いろいろ。

種種雜多【句】いろいろの種類一つに雜じりてあるさま。

じゆ-しゆ 壽酒【名】壽を祝ふ酒。

じゆ-しゆ 戍守【名】まもること、又その人。衞戍。守壽。

じゆ-じゆ 授受【名】授くると受くると。うけわたし。

じゆ-じゆ 受授【名】受くると授くると。やりとり。

じゆ-じゆ 誦呪・誦咒【名】〔佛〕修法にて、陀羅尼等を誦すること。

じゆ-じゆ 數珠【名】じゆず（數珠）を見よ。

しゆ-じゆう 主從【名】しゆうじゆう（主從）を

…見よ。

しゆ-じゆう 首從【名】主犯と從犯と。 欽事要略「相因爲二首從一」

しゆ-じゆう 趨從【名】すうじゆう(趨從)に同じ。

しゆ-しゆつ 輸出【名】ゆしゆつ(輸出)を見よ。

しゆ-じゆつ 手術【名】□手先にてなすわざ。手工。手技。□醫術にて、患部を切開などして、療治すること。

じゆ-じゆつ 呪術・咒術【名】□まじなひ。呪咀。□まほふ(魔法)に同じ。

しゆしゆつ-おくりじやう 輸出送狀【名】ゆしゆつおくりじやう(輸出送狀)を見よ。

しゆしゆつ-かう 輸出港【名】ゆしゆつかう(輸出港)を見よ。

しゆしゆつ-くわぶつ 輸出貨物【名】ゆしゆつくわぶつ(輸出貨物)を見よ。

しゆしゆつ-ぐわんしよ 輸出願書【名】ゆしゆつぐわんしよ(輸出願書)を見よ。

しゆじゆつ-しつ 手術室【名】醫者が手術を行ふ室。外科(ゲクワ)室。

しゆしゆつ-しんこく 輸出申告【名】ゆしゆつしんこく(輸出申告)を見よ。

しゆしゆつ-しんこくしよ 輸出申告書【名】ゆしゆつしんこくしよ(輸出申告書)を見よ。

しゆしゆつ-しやう 輸出商【名】ゆしゆつしやう(輸出商)を見よ。

しゆしゆつ-しやうげふ 輸出商業【名】ゆしゆつしやうげふ(輸出商業)を見よ。

しゆしゆつ-しやうれいきん 輸出奬勵金【名】ゆしゆつしやうれいきん(輸出奬勵金)を見よ。

しゆしゆつ-ぜい 輸出稅【名】ゆしゆつぜい(輸出稅)を見よ。

しゆしゆつ-せいげん 輸出制限【名】ゆしゆつせいげん(輸出制限)を見よ。

しゆしゆつ-ぜい-てうくわ 輸出稅超過【名】ゆしゆつぜいてうくわ(輸出稅超過)を見よ。

しゆしゆつ-ぜい-もく 輸出稅目【名】ゆしゆつぜいもく(輸出稅目)を見よ。

しゆしゆつ-ぜいりつ 輸出稅率【名】ゆしゆつぜいりつ(輸出稅率)を見よ。

しゆじゆつ-だい 手術臺【名】手術を施す臺。

しゆしゆつ-てうくわ 輸出超過【名】ゆしゆつてうくわ(輸出超過)を見よ。

しゆしゆつ-にふ 輸出入【名】ゆしゆつにふ(輸出入)を見よ。

しゆしゆつにふ-ぜい 輸出入稅【名】ゆしゆつにふぜい(輸出入稅)を見よ。

しゆしゆつ-ひん 輸出品【名】ゆしゆつひん(輸出品)を見よ。

しゆしゆつ-ぼうえき 輸出貿易【名】ゆしゆつぼうえき(輸出貿易)を見よ。

しゆしゆつ-めんじやう 輸出免狀【名】ゆしゆつめんじやう(輸出免狀)を見よ。

しゆじゆつ-れう 手術料【名】手術を施したる料金。

じゆ-じゆん 濡潤【名】ぬれうるほふこと。

しゆ-しゆんすゐ 朱舜水【名】〔人〕水戸の客儒。名は之瑜。字は魯璵。支那明の人。萬治二年國難を避けて、わが國に歸化し、水戸侯光圀に聘せらる。鄭成功と議し、明の恢復を謀りしかど、遂に志を遂ぐる能はずして、天和二年歿す。年八十三。のち朱舜水全集の刊あり。

じゆじゆ-ゐん 受授員【名】宮內大臣官房に屬する判任待遇の等外職員。文書受授の雜務に從事するもの。

しゆ-しよ 手署【名】手づから署名すること。

しゆ-しよ 首書【名】かしらがき(頭書)に同じ。

しゆ-しよ 手書【名】手づから書くこと、又その書きたるもの。自筆のかきもの。自筆。

しゆ-しよ 朱書【名】朱にて書くこと、又その書きたるもの。しゆがき。

じゆ-しよ 儒書【名】儒學の書物。 正統記「儒書には、伏犧氏といふ王よりあなたをばいはず」

しゆ-しよう 殊勝【名】□〔佛〕最も勝(スグ)れたること。最勝。 盛衰記「眺望も又殊勝なり」 □けなげなること。神妙。奇特。

しゆ-しよう 修證【名】〔佛〕行を修し、理を證すること。

しゆしよう-がほ 殊勝顔【名】奇特らしき顔つき。 醒睡笑「これの御影堂に、しゆしようがほしてゐらるる坊主の」

しゆしよう-ち 殊勝池【名】〔佛〕喜見宮城內、殊勝殿の前にありといふ池。

しゆしよう-でん 殊勝殿【名】〔佛〕たいしやくぐう(帝釋宮)に同じ。

しゆ-しよく 殊色【名】婦人のすぐれたる容色。

しゆ-しよく 朱色【名】朱のいろ。しゆいろ。

しゆ-しよく 手燭【名】てしよく(手燭)に同じ。

しゆ-しよく 酒食【名】酒と食物と。酒を飲み、物を食ふこと。しゆし(酒食)參照。

しゆ-しよく 酒色【名】酒と女色と。

しゆしよ-しよ 主書署【名】春宮(トウグウ)坊に屬し、令(カミ)・令史(サクワン)各一人、使部・直丁(ヂキテウ)若干人等の職員ありて、東宮の書籍・筆硯の類を供進する事を掌りし役所。大同二年主藏監に合併す。

じゆじ-りつ 受磁率【名】〔理〕『英Magnetic susceptibility』磁性體を細長き棒となし、その長さを磁力線の方向と一致せしめて磁場に置く時、棒の感受する磁力と磁場の强さとの割合。

しゆしり-やう 種子量【名】〔農〕一定の地積に播種又は植附を行ふべき種苗の適當の量。

しゆ-す 繻子【名】或一定の規則の下に、經絲(タテイト)及び緯絲(ヌキイト)の、長く表と裏とに浮く組織にして、從って滑かにして光澤ある、一種の織物。經緯の組織せる所少なきため、地質の堅牢ならざる缺點あり。天文年間、京都にて、支那の法に倣ひて織創めしものといふ。多く女の帶地・半襟等に用ふ。本繻子・毛繻子・觀光繻子・綿(メン)繻子などの種類あり。

しゆ-す 輸す【動佐變他】ゆす(輸す)を見よ。

しゆ-す 修す【動佐變自】をさむ。行ふ。學ぶ。 盛衰記「眞言上乘の祕法は、この伽藍に修せらる」

じゆ-す 誦す【動佐變他】よむ。歌ふ。口ずさぶ。誦(ジュ)す。ずす。ずんず。 枕「そのからうたをじゆして、黑戸に殿上人いと多くゐたるを」

じゆ-す 呪す・咒す【動佐變他】のろふ。まじなふ。 太平記「虛空に向ってしばらく呪したるに、三の太山出現して」

じゆ-ず 數珠【名】『梵Japamālā(鉢蜜莫)』。じゆは數の字の吳音、ずは珠の字の吳音じゆの約。珠數と書くは誤』呪文・稱名・唱題等を數ふる際に用ふるが本義なれども、今は專ら佛・菩薩を禮拜する時、手に懸け、又は揉みて敬意を表するに用ふる具。小さき珠を數多く絲に貫きて、輪形に連ねたるもの。珠の數は一百八を根本とし、その他、一千八十・五十四・四十二・二十七・二十一・十四等のもあり。一百八の數は菩薩の本有(ホンウ)の五十四位と修生(シュシャウ)の五十四位とを表示し、一一に圓滿なるは斷惑・證理の義なりと稱せられ、五十四づつに兩分したる中間に、親王(シンワウ)とて、一箇づつの大珠あり、これに對して、一百八珠を子玉と呼ぶ。又、携帶に便せんため、念佛宗にては一百八の三分の一なる三十六珠、禪宗にては、その六分の一なる十八珠のを用ふ。ずず。ねんず。貫珠。

(じゆず)

じゆず-を-切る【句】出家の志を破る。佛戒を破る。 一代女「住持、はや現になって、…後は酒に亂れ勝手なり、醒き風も通ひ、一夜づつの情代、金子二步に定めおき、諸山の八宗この一宗を勸めまはりしに、いづれの出家も、數珠切らざるはなし」

じゆずかけ-ばと 數珠掛鳩【名】〔動〕しろこばと(白子鳩)に同じ。

じゆず-ぎく 數珠菊【名】〔植〕菊の一種。莖は高さ尺餘。枝多く分岐し、秋の末、花を開く。その色、黃・白・紅など種種あり、また大小も一樣ならず。

しゆす-げさ 種子袈裟【名】しゆじげさ(種子袈裟)に同じ。 下學集「種子袈裟、シュスゲサ」

じゆず-ご 數珠子【名】じゆずだま(數珠玉)に同じ。

じゆず-ご-だま 數珠子玉【名】じゆずだま(數珠玉)に同じ。

じゆずご-なり 數珠子生【名】數珠子玉の如く並び連なること。

じゆず-すげ 數珠菅【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)科に屬する多年生の草。高さ五六寸乃至一尺。花は單性・雌雄同株。山地に自生す。ひろばのやはらすげ。

しゆ-すずり 朱硯【名】朱墨を研(ス)る硯。 也有「朱硯にまづ手染せん窓の蔦」

じゆず-だま 數珠玉【名】□數珠に作る珠。香木・木槵(ムクロ)・水晶などを材とす。じゆずこ。じゆずこだま。ずずこ。ずずこだま。 狂言(鳥山伏)「この數珠は、むさとしたる數珠玉を繫ぎて、いらたかの數珠と名づく」 □〔植〕禾本科に屬する一年生の草。高さ四五尺、葉は細長尖銳、花は單性にして、雌花より成れる花叢は、雌花を包める卵形の嚢器の上に突出し、花期は夏秋の交なり。果實は顆果にして、琺瑯質の殼を有す。東印度地方の原產。ずずご。ずずだま。〔川穀〕 □〔植〕はとむぎ(鳩麥)に同じ。

じゆず-つなぎ 數珠繫【名】數珠玉□の緒に貫かれたる如く、一本の繩にて、多くのものを縛ること。多數の罪人を一度に引立つること。さるつなぎ。ずずつなぎ。 今國姓爺「斬首・生首・珠數つなぎ」

じゆず-ばな 數珠花【名】〔植〕まんじゆしやげ(曼珠沙華)□を云ふ。〔伊豫國の方言〕

じゆず-ひき 數珠挽【名】珠數の玉を造ること、又その人。 用明天皇職人鑑「琴屋・鏡屋・烏帽子折・數珠ひき・烟管屋」

しゆす-びん 繻子鬢【名】□毛筋を透かさぬやうに美しく撫でつけたる髮。安永頃流行せり。 長町女腹切「はれ、よい男の、江戸元結に繻子鬢」 □『常に繻子の頭巾を被りしよりいふ』びくに(比丘尼)□の異稱。

じゆず-ぶくろ 數珠袋【句】數珠を入るるための袋。 持統天皇歌軍法「母様の珠數袋を春日祭に落してぢや」

しゆ-すみ 朱墨【名】辰砂と銀朱とを膠にて練りて造れる墨。卽ち朱色の墨。あかずみ。朱錠。

しゆす-らん 繻子蘭【名】〔植〕びろおどらん(天鵞絨蘭)に同じ。

しゆ-すゐ 主帥【名】□軍隊の大將。□大寶の制、隊正と校尉との中間の階級なりし者。□大寶の制、馬部(メブ)の當番の者。

しゆ-すゐ 酒酒井【名】〔地〕下總國印幡(インバ)郡にある町。成田鐵道の一驛。

しゆ-ずゐ 主隨【名】江戸時代に、江戸の秤座(ハカリザ)たりし家。天正年間、德川家康の江戸に入りし時、甲斐の武田氏の秤子たりし守隨兵三郎の、井伊直政に就き、願ひ出でて許されしに始り、慶長中、神善四郎の京の秤座たることを許されてより、兩氏相並びて、天下の權衡を專掌せり。

じゆ-すゐ 入水【名】にふすゐ(投身)に同じ。 平家女護島「女院二位殿・一門以下、皆入水と聞えしかば」

しゆすゐ-き 酒水忌【名】〔佛〕かうりきき(孝力忌)に同じ。

しゆすゐ-し 主水司【名】古の宮內省に屬し、正(カミ)・佑(ジョウ)・令史(サクワン)各一人、水部(モヒベ)使部・直丁(ヂキテウ)・駈使丁(クシチ)若干人等の職員ありて、供御(クゴ)の饘粥(センシク)、水漿・氷室(ヒムロ)の事を掌りし役所。もひとりのつかさ。もとりのつかさ。もんどのつかさ。

しゆすゐ-せつ 主水說【名】〔鑛〕『英Neptunism』總ての岩石は、海底に沈澱して成れるものなりとの說。獨逸のヴエルネル(A. Werner)の唱道せしもの。

しゆ-せい 主政【名】□政治をとる人。□王朝時代の諸國の郡の判官(ジョウ)。郡內を糾判し、文案を審署し、稽失を勘へ、非違を察することを掌りしもの。

しゆ-せい 守勢【名】敵を引受けて防ぎ守る兵勢。(攻勢に對して)

しゆ-せい 酒精【名】〔化〕『英Spirit of wine又Spirit 酒の主成分をなすによりていふ』あるこおるに同じ。

しゆ-せい 種姓【名】すじやう(種姓)□に同じ。

しゆ-せい 趨勢【名】すうせい(趨勢)を見よ。

しゆ-せい 守成【名】創業の後を承けて、その成業をかため守ること。

しゆ-せい 手製【名】みづから製すること。てせい。

しゆ-せい 修整【名】しうせい(修整)に同じ。 太平記「修二整政道一」

しゆ-ぜい 酒稅【名】しゆざうぜい(酒造稅)に同じ。

じゆ-せい 儒生【名】儒學を學ぶ書生。儒者。

じゆ-せい 受精【名】〔生〕『英Fertilization』有性生殖の一法。雌性細胞が雄性細胞(雄性細胞より小さくして、運動性を有す)を受け、相合して、新しき生物の個體を生ずること。

じゆ-せい 壽星【名】□なんきよくせい(南極星)に同じ。 □陰曆八月の異稱。 □馬の眉間にある旋毛(ツムジ)。しもくのつむじ。

しゆせい-かんだんけい 酒精寒暖計【名】あるこおるかんだんけい(酒精寒暖計)に同じ。

しゆぜい-かんていやく 主稅鑑定役【名】明治十七年大藏省の鑑定役を改稱せる判任官。同十九年廢せらる。

しゆぜいかんていやく-みならひ 主稅鑑定役見習【名】明治十七年大藏省鑑定役見習を改稱せる等外吏。同十九年廢せらる。

しゆぜい-かんり 主稅監吏【名】大藏省主稅局の職員。海關輸出入稅品の監視を掌りし判任官。明治十七年に設置、同十九年に廢止せらる。

しゆぜい-きよく 主稅局【名】大藏省の一局。國稅の賦課徵收、稅務の管理監督、その他租稅上の重要なる事項を取扱ふ所。

しゆぜい-くわん 主稅官【名】大藏省主稅局の職員。主稅官長の命を受け、その主務を幹理せし奏任官。明治十七年に設置、一等より四等までの階級ありしが、後に廢止せらる。

しゆぜいくわん-ちやう 主稅官長【名】大藏省の舊制度における主稅局の長官。勅任にて、諸稅及び府縣徵稅費に關する一切の事務を管理せしもの。明治十七年設置、のち廢止せらる。

しゆ-せいこう 朱成功【名】〔人〕ていせいこう(鄭成功)を見よ。

しゆせい-し 酒清司【名】雅樂の一。壹越(イチコツ)調にして舞無し。 拾芥抄「酒清司、シュセイシ」

しゆせい-すゐじゆんき 酒精水準器【名】すゐじゆんき(水準器)を見よ。

しゆぜい-ぞく 主稅屬【名】明治十七年大藏省に置かれたる主稅局の職員。その主務に從事するもの。判任官にて、一等より十等まであり。のち廢せらる。

じゆせい-なう 受精嚢【名】〔動〕『羅Receptaculum seminis』無脊椎動物の生殖器の一部。雌器より精蟲を受けて、これを蓄ふる嚢。蠕形(ゼンケイ)動物及び軟體動物中の雌雄同體のものと、節足動物とは、概ねこれを有す。

しゆせい-ぶん 酒精分【名】酒精の成分。

しゆせい-ぶん 主成分【名】或物質中のおもなる成分。主要成分。

しゆせい-もん 壽成門【名】八省院二十五門の一。

しゆぜい-れう 主稅寮【名】ちかられう(主稅寮)に同じ。

しゆ-せう 手詔【名】天子の親筆の詔書。手勅。

しゆ-せう 手鈔【名】自ら書拔くこと、又書拔きたるその記錄。

じゆ-せう 樹梢・樹杪【名】樹木の頂。こずゑ。

じゆせう-くわ 樹梢火【名】じゆくわんくわ(樹冠火)に同じ。

じゆせう-くわん 樹梢館【名】江村北海が、致仕後、京都室町(ムロマチ)に築きし家。

しゆ-せうてん 主焦點【名】〔理〕『英Principal focus』球面鏡又はレンズの軸に平行に受けたる平行光線が、反射又は曲折して後に集まる一點。正焦點。實焦點。

しゆ-せき 首席【名】多くの席次の中の第一位、その位置にある人。

しゆ-せき 酒席【名】さかもりの席。酒宴の席。宴會の席。

しゆ-せき 殊績【名】ことに勝れたる功績。

しゆ-せき 酒石【名】〔化〕『英Argol又Tartar』葡萄酒を釀造するにあたり、醱酵樽の內面に皮層狀をなして固結する、汚白色又は赤褐色の物。主に酒石酸水素カリウムより成り、なほ酒石酸カルシウム及び雜多の汚物を含む。藥用又は毛の媒染劑に供し、また精製して酒石英となし、或は酒石酸及びその他、化合物類製出の原料に供す。

しゆ-せき 手跡・手蹟【名】書きたる文字。

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの はひふへほ まみむめも やゆよ らりるれろ わゐゑを

筆跡。盛衰記「父の手跡を見給はんと思ひ」
じゆ-せき 樹石【名】木と石と。木石。
しゆせき-あらそひ 手跡爭【名】手跡の巧拙を爭ふこと。著聞集「その後は、御手跡爭もなかりけり」
しゆせき-えい 酒石英【名】〔化〕『英 Cream of tartar』主に酒石を精製して得たる白色の結晶性粉末。純粹なる酒石酸水素カリウムにして、醫藥として用ひらる。酸性酒石酸。
しゆせき-くんだう 主席訓導【名】主席にある訓導。
しゆせき-けうゆ 首席敎諭【名】首席にある敎諭。敎頭。
しゆせき-さん 酒石酸【名】〔化〕『英 Tartaric acid』無色・透明の結晶體をなす一種の二鹽基酸。水に溶け易く、酸味強く、カルシウム又はカリウム鹽となりて、種種の果實中に存す。酒石英を分解して得べく、ラムネ・サイダア等淸涼飮料の原料となる。
しゆせきさん-かりうむ 酒石酸加留母【名】〔化〕『羅 Kalirum tartaricum』無色透明なる一斜粒狀の結晶または白色結晶粉末にて、水に溶け易く、酒精には不溶性なり。酒石又は酒石酸と炭酸カリウムとを煮、蒸發結晶せしめて製す。緩下劑・利尿等に用ふ。中性酒石酸かりうむ。酒石酸ぽたしうむ。
しゆせきさんすゐそ-かりうむ 酒石酸水素加留母【名】〔化〕『羅 Kalium hydrotartaricum』しゆせきえい(酒石英)に同じ。
しゆせきさん-ぽたしうむ 酒石酸剝篤僾母【名】〔化〕『英 Potassium tartario』しゆせきさんかりうむ(酒石酸加留母)に同じ。
しゆ-せつ 守節【名】節義を守ること。
しゆ-ぜつ 殊絕【名】他に勝れたること。
しゆ-せん 主戰【名】㊀戰爭を主張すること。㊁援軍に對して、その主軍の戰鬪。
しゆ-せん 酒戰【名】互に酒量の優劣を比ぶること。すまふさかもり。すまふざけ。
しゆ-せん 酒饌【名】酒と食饌と。酒肴。
しゆ-せん 酒錢【名】酒を買ふ錢。さかだい。さかて。
しゆ-せん 酒仙【名】大酒家の稱。酒豪。
しゆ-せん 集錢【名】大勢集まりて、互に錢を出しあふこと。五人女「飮むも、飮まぬも、七文づつの集錢出し」一代女「際の夜の集錢出し、萬に物の入ることのみ」
しゆ-せん 守戰【名】守ると戰ふと。
しゆ-せん 鑄錢【名】錢を鑄造すること。
しゆ-せん 首線【名】〔數〕『英 Initial line』一直線が其の一端を樞として廻轉し角を畫くとき其の直線の始の位置を云ふ。
しゆ-せん 手選【名】採鑛の過程中、鑛塊を外觀によりて、女工等の擇りわくること。
しゆ-ぜん 修繕【名】しうぜん(修繕)に同じ。
しゆ-ぜん 修禪【名】〔佛〕しゆぜんぢやう(修禪定)の略。太平記「修禪三百房」
しゆ-ぜん 衆善【名】〔佛〕しゆうぜん(衆善)に同じ。
衆善奉行(ﾌｷﾞﾔｳ)【句】〔佛〕しちぶつつうかいげ(七佛通戒偈)を見よ。
しゆ-ぜん 修善【名】〔佛〕善事をなすこと。太平記「今日は、佛生日とて、…供花(ｸｹ)・燒香に經を誦して、捨惡・修善を事とする習なるに」
しゆ-ぜん 鬚髯【名】あごひげと頰ひげと。
しゆ-ぜん 主膳【名】㊀かしはで㊁㊂に同じ。㊁大膳寮にて、供膳に從事する職員。判任官とす。
じゆ-せん 授洗【名】〔基〕洗禮を授くること。
じゆ-せん 受洗【名】〔基〕洗禮を受くること。
じゆ-ぜん 鷲山【名】〔佛〕りやうじゆせん(靈鷲山)の略。平家「それ高雄は、山堆(ｳｽﾞﾀｶ)うして、鷲山の梢を表し」
じゆ-ぜん 受禪【名】前帝の禪讓を受けて、踐祚したまふこと。盛衰記「受禪沙汰の時」
しゆぜん-かん 主膳監【名】次條に同じ。
しゆぜん-げん 主膳監【名】春宮(ﾄｳｸﾞｳ)坊に屬し、正(ｶﾐ)・佑(ｼﾞｮｳ)・令史(ｻｶﾝ)各一人、膳部(ｶｼﾜﾃﾞ)六十人、使部・直丁(ｼﾞｷﾁｮｳ)・駈使(ｸｼ)若干人等の職員ありて、東宮の飮食・供膳の事を管し、進食の時、試嘗のことを掌りし役所。大同二年主漿署を併せ、令史一人を增す。後世、內膳司をして、東宮の供御をも掌らしめ、特にこの官を置かざりしこともあり。かしはでのつかさ。
しゆせん-し 主船司【名】兵部省に屬し、正(ｶﾐ)・佐(ｼﾞｮｳ)・令史(ｻｶﾝ)各一人、及び使部・直丁を置き、官私の舟檝・船具の事を掌り、また船舶の所載數量等を檢校せし官司。船戸若干を附したり。
しゆせん-し 鑄錢司【名】天武天皇の時、創めて置き、鑄錢の事を掌りし官廳。しゆせんのつかさ。鑄錢所。
しゆせん-し 鑄錢師【名】弘仁年間の鑄錢司の職員の一。長官・次官・判官・主典の四部官以外に置かれしもの。
しゆぜん-じ 修禪寺【名】㊀伊豆國田方郡修善寺村にある曹洞宗の寺。もと修善寺と書き、一に桂谷山寺といふ。延暦十七年空海の草創。源範賴幽閉等の事によりて、その名顯れ、建長中、臨濟宗に屬し、後北條氏の代、曹洞宗となりて、今に至る。㊁しゆぜんじがみ(修禪寺紙)の略。〔修禪紙〕下學集「修禪紙、シユゼンシ」
修禪寺の紙【句】次條に同じ。平家「白薄樣・修禪寺の紙」
しゆぜんじ-がみ 修禪寺紙【名】伊豆國修善寺村より產する一種の和紙。薄紅又は柹色にて、橫に筋あり。しゆぜんじ。
しゆせん-じよ 鑄錢所【名】しゆせんし(鑄錢司)に同じ。
しゆぜんじ-をんせん 修善寺溫泉【名】〔地〕伊豆國田方郡修善寺村にある溫泉。大仁驛より一里八町。桂川に沿うて、獨鈷(ﾄｯｺ)湯・河原湯・箱湯・石湯等十數箇より湧出す。泉質は鹽類泉に屬す。
しゆぜん-だいし 修禪大師【名】〔人〕ぎしん(義眞)に同じ。
しゆぜん-ちやう 主膳長【名】大膳寮の職員。膳羞の事を掌る奏任官。
しゆ-ぜんぢやう 修禪定【名】〔佛〕禪定を修行すること。修禪。
しゆせん-ど 守錢奴【名】しはんぼ。しみったれ。守錢虜。有財(ｳｻﾞｲ)餓鬼。
しゆせん-どうめい 守戰同盟【名】二箇以上の國家が兵力を以て、互に相救援せんことを約する同盟。
しゆせん-の-つかさ 鑄錢司【名】しゆせんし(鑄錢司)に同じ。
じゆせん-のり 壽仙苔【名】〔植〕川苔の一種。筑後國より產す。その小なるものは、紫金苔と稱して、高價なりといふ。
しゆせん-りよ 守錢虜【名】しゆせんど(守錢奴)に同じ。
しゆせん-れう 主船寮【名】海軍省に屬し、艦船及びその器具等の製造・修理等を司りし役所。頭・權頭・助・權助・大屬・權大屬・中屬・權中屬・少屬・權少屬・大匠司・中匠司・少匠司・大師・中師・少師等の職員あり。明治五年設置、同九年廢せらる。
しゆ-そ 首鼠【名】『穴より首を出して窺ふ鼠の意』迷ひて、去就の決せぬこと。
首鼠兩端【句】『史記の灌夫傳に「與ニ長孺ニ共一老禿翁、何爲ニ首鼠兩端ニ」とあるに本づく』いづれにもつかず樣子をうかがふ。どちらつかず。〔諺語〕
しゆ-そ 首座【名】〔佛〕『漢字の宋音』じやうざ(上座)に同じ。〔禪宗の語〕
しゆ-そ 手疏【名】手づから筆を執りて、疏陳すること。
しゆ-そ 輪租【名】ゆそ(輪租)を見よ。
じゆ-そ 呪咀・咒詛【名】のろふこと。まじなふこと。ずそ。祝詛(ｼｭｿ)。宇治「君をじゆそしたてまつりてさふらふ者を、道に埋みてさふらふ」
じゆ-そ 受訴【名】訴訟を受理すること。
しゆ-そう 主僧【名】住持の僧。
しゆ-そう 衆僧【名】しゆうそう(衆僧)に同じ。
しゆ-そう 輪送【名】ゆそう(輪送)を見よ。
しゆ-そう 趨走【名】すうそう(趨走)を見よ。
じゆ-そう 儒宗【名】儒學のおもだてる者。
じゆ-そう 從僧【名】じゆうそう(從僧)に同じ。
じゆ-そう 受贈【名】贈與を受くること。
じゆそう-しや 受贈者【名】〔法〕贈與を受けたる者。
しゆ-そく 手捉【名】手にて捉ふること。
しゆ-そく 首足【名】㊀首と足と。㊁首より足までの全體。

しゆ-そく 手足【名】㊀手と足と。てあし。㊁おもなる補助者。股肱。
手足の愛【句】『禮記に「骨肉之恩、手足之愛」とあり、又、後漢書の袁譚傳に「兄弟者左右手也」などあり』兄弟の愛。
手足を措くに所なし【句】『論語の子路篇に「刑罰不レ中、則民無レ所レ措ニ手足ニ」とあり』身を容るるの地なし。
しゆ-ぞく 種屬【名】たぐひ。ともがら。やから。主種郎屬。
しゆ-ぞく 種族【名】㊀たぐひ。ともがら。人種。㊁『漢書の高帝紀に「種ニ族其家ニ」とあり』一族を誅戮すること。
しゆ-ぞく 殊俗【名】特殊の風俗。
しゆぞく-くわん 數息觀【名】〔佛〕『梵 Ānāpāna(阿那波那)の譯語。俱舍論の二十二に「言ニ阿那ニ者、謂持ニ息入ニ是引ニ外風ニ令レ入レ身義、阿那波者、謂持ニ息出ニ是引ニ內風ニ令レ出レ身義」とあり』五停心觀の一。心想の散亂を止むるために、出入の息を數ふること。すそくくわん。
しゆぞく-しんりがく 種族心理學【名】〔哲〕じんしゆしんりがく(人種心理學)に同じ。
しゆぞく-にうなん-さう 手足柔軟相【名】〔佛〕二十二相の一。手足の柔なること。
しゆぞく-まんもう-さう 手足縵網相【名】〔佛〕三十二相の一。手足とも、その指と指との間に、縵網の纖緯ありて、鵝・鴨などのそれの如きもの。
じゆそ-さいばんしよ 受訴裁判所【名】〔法〕訴訟の提起を受理せる裁判所。訴の現に繫屬せる、又は嘗て繫屬したる裁判所。
しゆ-そつ 守卒【名】守備する兵卒。番兵。
じゆ-そつ 戍卒【名】衞戍の兵卒。まもりの兵。守卒。番兵。蜂羨天皇獸軍法「高仁荷も天孫を受嗣いで、戍卒の爲に、今一命を殞さんとす」「を見よ。
じゆそ-でん 輸租田【名】ゆそでん(輸租田)
しゆ-そん 酒樽【名】酒を入れおく樽。
しゆそ-りやうたん 首鼠兩端【句】しゆそ(首鼠)の條下を見よ。
しゆ-だ 首陀【名】すだ(首陀)に同じ。賀古教信七墓廻「大名高家の公達も、土民・貧家の手育ても、此處に來りて隔なく、せつりもしゆだもかはらざりけり」
しゆ-たい 主體【名】〔法〕主格を有するもの、又その團體。(客體に對して)
しゆ-だい 主題【名】おもなる題目。
しゆ-だい 首題【名】〔佛〕佛經の題目。佛經の首に題したるもの。首題名字。榮花「十千の魚、十三部經の首題の名字を聞きて、皆、忉利(ﾄｳ)天に生れたり」
じゆ-たい 受胎【名】くわいたい(懷胎)に同じ。
じゆ-たい 濡滯【名】とどこほること。遲滯。
じゆ-たい 樹態【名】樹の狀態。きぶり。
じゆ-だい 入內【名】『內裡に參入する義』女御又は皇后の、儀式を具へて、內裏に參らるること。平家「きさき御じゆだいあるべきよし」
しゆだい-みやうじ 首題名字【名】〔佛〕しゆだい(首題)に同じ。
しゆ-たう 手套【名】てぶくろ(手套)に同じ。
しゆ-たう 酒盜【名】しほから(鹽辛)に同じ。
しゆ-たう 酒鐺【名】かんなべ(燗鍋)に同じ。
しゆ-たう 主當【名】古、公設の牧場にて、牛馬の飼養、牧場の雜事を擔當せし役。
しゆ-だう 衆道【名】わかしゆだう(若衆道)の略。五人女「衆道・女道(ﾆｮﾀﾞｳ)を、晝夜のわかちもなく、さまざま遊興盡きて」
じゆ-だう 儒道【名】㊀儒者の道。孔孟のをしへ。(神道・佛道に對して) 大鏡冠「儒道を學んで、五倫の道を守り」㊁儒教と道教と。「儒道の二」
しゆだう-ごころ 衆道心【名】衆道の慾。若風俗「この程、衆道心を移し、芝居がへりの太夫たちに目を附けはべる」
じゆたう-とねり 授刀資人・授刀舍人【名】授刀舍人寮の舍人。
じゆたう-とねり-れう 授刀舍人寮【名】親衞の舍人を掌りし役所。元明天皇の朝に置かれ、天平神護元年改めて近衞府と稱し、大同三年左近衞府となり、中衞(ﾁｳｴ)府を改稱せし右近衞府と相對することとなれり。帶劍寮。授刀寮。授刀衞。
じゆたう-の-れう 授刀寮【名】前條の略。萬葉「皆散ニ禁於授刀寮ニ」
じうたう-れう 授刀寮【名】前條に同じ。
じゆたう-ゑい 授刀衞【名】前條に同じ。
しゆ-たく 手澤【名】『こうたく(口澤)を見よ』用ひ古して生じたるつや。てあか。
じゆ-たく 受託【名】㊀囑託を受くること。㊁寄託を受くること。あづかること。
じゆ-だく 受諾【名】受くることを承諾すること。引受くること。
じゆたく-さいばんしよ 受託裁判所【名】〔法〕他の裁判所の囑託により、その管內に於ける證據調・訊問・送達などの訴訟行爲をなす裁判所。
じゆたく-しや 受託者【名】次條に同じ。
じゆたく-にん 受託人【名】寄託又は囑託を受くる人、又それを受けたる人。受託者。
じゆたく-はんじ 受託判事【名】〔法〕他の裁判所の判事の囑託により、その管內に於ける證據調・訊問・送達などの訴訟行爲をなす判事。
じゆたく-はんばい 受託販賣【名】他人の委託を受けて、その商品を販賣すること。(委託販賣に對して)
じゆたくはんばいひん-かんちやう 受託販賣品勘定【名】〔商〕ゐたくひんかんぢやう(委託品勘定)に同じ。
じゆたく-ぶつ 受託物【名】〔法〕寄託を受けて保管する品物。
じゆたくぶつ-せうひ 受託物消費【名】受託物をひそかに消費すること。
しゆたく-ぼん 手澤本【名】或人の愛讀して、その人の手澤の存する書籍。
しゆた-せつ 主他說【名】〔哲〕あいたせつ(愛他說)に同じ。
しゆ-たち 須達(梵 Sudatta(須達多・蘇達多))【名】〔人〕『善施・善與・善溫・善授・樂施等の義』釋迦時代の印度舍衞城の富豪。波斯匿(ﾊｼﾉｸ)王に仕へて、大臣となる。釋迦の教を信じ、ために祇園舍(ｷﾞｵﾝｼｮｳｼﾞｬ)を建つ。慈悲心に富みて、孤獨の人に財物を給與せり。
しゆたち-ちやうじや 須達長者【名】〔人〕前條の敬稱。榮花「かの須達長者の祇園精舍(ｷﾞｵﾝｼｮｳｼﾞｬ)造りけんも、かくや有りけん」
しゆ-だん 手段【名】てだて。方法。
しゆ-だん 手談【名】ゐご(圍碁)の異稱。下學集「圍碁又云ニ手談ニ」
しゆ-たら 修多羅・素怛纜・修妬路(梵 Sūtra)【名】〔佛〕㊀『契經の義。說く所、よく理に契(ｶﾅ)ひ、機根に合する意。きやう(經)㊀參照』佛書。經(ｷﾔｳ)。合戰「修多羅の敎は、月をさす指とて、これを嫌ひ」㊁袈裟(ｹｻ)の上に附したる一種の裝飾。四筋の色紐を華鬘結(ｹﾏﾝﾑｽﾋﾞ)又は總結などに七結し、鉤紐の代用として、袈裟の上に投げ垂るるもの。

(㊁しゆたら)

しゆだをん 須陀洹(梵 Srota-āpanna(須陀般那・窣路多阿半那・窣路陀阿鉢嚢))【名】〔佛〕煩惱(ﾎﾞﾝﾅｳ)を脫して、聖人の域に入りたる人。
しゆだをん-くわ 須陀洹果【名】〔佛〕「聲聞(ｼｮｳﾓﾝ)の四果」を見よ。
しゆ-ち 酒池【名】池のごとくに酒を湛ふること。
酒池・肉林【句】『史記の殷紀に「以レ酒爲レ池、縣レ肉爲レ林」とあり』酒を湛へたる池と肉を懸けたる林と。豪遊の形容。
しゆ-ち 趣致【名】おもむき。風情。
しゆ-ぢ 主持【名】主となりて執行すること。太平記「作ニ主持之人ニ」
しゆ-ぢ 主治【名】主として治療すること。
じゆ-ぢ 受持【名】〔佛〕㊀受けたもつこと。㊁信力を以て領受して心に存し、念力を以て憶持して忘れざること。
しゆぢ-い 主治醫【名】主任となりて治療する醫者。
しゆ-ちく 種畜【名】蕃殖用に供する家畜。
しゆ-ぢく 主軸【名】㊀中心となる軸。樞軸。㊁〔理〕『英 Principal axis』レンズの兩面をなす球の中心を連ぬる直線。
しゆ-ぢく 朱軸【名】朱塗の軸。用明天皇職人鑑「黃卷・朱軸の經傳を、七寶莊嚴の肚車

に盛り積んで」

しゆちく-ぼくぢやう 種畜牧場【名】種畜に關する事務を掌る所。農商務大臣の管理に屬し、主として、家畜・家禽の改良・蕃殖・種付・配付・飼料の栽培、及び試驗・畜産物の製造及び試驗等の事に從事す。場長・技師・技手の職員を置く。

しゆち-せつ 主知説【名】〔哲〕『英Intellectualism』㊀哲學上思考を感情・意志以上のものとし、精神又は實在の本質は、或種の思想又は理性なりと説くもの。㊁心理學上、情意の作用の基礎又は根原を、知覺・表象・思考等の知的作用なりと説くもの。

しゆぢ-の-ふし 珠持節【名】馬の後脚の中の骨節。かはなのほね。

しゆちん 繻珍・朱珍【名】『もと七絲緞の唐音しちんの轉訛にして、蘭Satijn 佛Satin 蘭Satijn等もその轉訛せるものなるべし』絹の紋織繻子の一種。緯絲(ヨコ)に、紋ばとなるべき色絲と地合となるべきものとを用ひたるもの。主として、女の帶に用ひ、羽織の裏にも用ふ。また綿(メ)繻珍といふものあり。經絲(タテ)もしくは緯絲の一方は木綿を用ひたるをいふ。しちん。もんじゆす(紋繻子)參照。

しゆちん-そん 朱陳村【名】白居易の作に見えたる詩の題名。一村ただ朱氏と陳氏との兩姓のみにて、世世親類の好誼厚く、虚禮のみにて、裏面の交情却りて冷薄なる世上の習態と遙かに異なる趣を敍せり。蕪村「寒き日のゆききは近し朱陳村」

しゆ-ちやう 腫脹【名】はれふくるること。むくみ。

しゆ-ちやう 守長【名】㊀番人の長。㊁もと山陵を掌りし等外吏。明治十七年設置、同四十一年廢せらる。

しゆ-ちやう 守丁【名】明治七年設置せられたる後鳥羽・土御門・順德の三帝の御火葬所の洒掃等の事を掌りし役。初め府縣の所屬なりしが、のち宮内省の所管に移され、同十七年廢せらる。

しゆ-ちやう 首長【名】長たる者。主宰する者。かしら。

しゆ-ちやう 主長【名】主たる者。かしら。

しゆ-ちやう 主帳【名】㊀古の諸國の郡の主典(サカン)。文案を勘へ、公文を讀むことを掌りたり。㊁古、軍團にて、文書を造ることを掌りし役。

しゆ-ちやう 主張【名】㊀己が説をいひはること。㊁『韓愈の送窮文に「各有二主張一私立二名字一」とあるに本づく』持論。㊂『莊子の天運篇に「天其運乎、地其處乎、日月其爭二于所一乎、孰主二張是一孰綱二維是一孰居二無事一推而行レ是」とあるに本づく』主宰すること。

しゆ-ちやう 珠帳【名】珠玉を飾りたる美しきとばり。

しゆ-ぢやう 朱錠【名】しゆずみ(朱墨)に同じ。

しゆ-ぢやう 拄杖・手杖【名】㊀僧の用ふる杖の總稱。印度にて、釋迦が特に老いもしくは病める比丘(ビク)に用ひしめし、小拄杖は、六朝時代より用ひしものの如く、別に禪宗にて、行脚(アンギャ)の際の跋渉に便するものは、長さ六尺ほどありて、大拄杖といひ、佛制にあらずして、支那唐代の禪僧の創めしものの如し。謡曲(烏帽子折)「見申せば、拄杖に團扇を添へて持たれたり」㊁能(ノウ)の狂言の一。拄杖を誂へたる僧、拄杖屋へ行き、亭主の請に任せて、剃髮せしむるを、女房怒りて追出すといふもの。

しゆちやう-ちやう 主帳丁【名】古、主帳より出せる仕丁。

しゆちやう-づきん 首丁頭巾・出頂頭巾・出長頭巾【名】鎌倉・室町兩時代の頃、剃髮の僧又は法師武者の被りし頭巾。紺布にて製し、後方を廣くし、中一所ほど縫ひたるもの。平家「土佐坊この日の裝束には、かちの直垂に黑革緘の鎧著て、出長頭巾をぞ著たりける」

しゆぢやう-や 拄杖屋【名】拄杖を造ることを職業とする家。狂言(拄杖)「やあ、參る程に、彼の拄杖屋はこれでござる」

しゆ-ちゆう 手中【名】手の中。

しゆ-ちゆう 主廚【名】『廚を主(ツカサ)る義。廚の字の音、正しくはちゆ』炊事に關する軍務に從事する海軍卒。一等より五等までの等級あり。

しゆ-ちゆう 酒中【名】酒杯のうち。

酒中の趣【句】『世説の言語篇に「孟萬年好レ飲、喜酣暢、桓宣武嘗問、酒有二何好一而卿嗜レ之、孟答曰、公未レ知二酒中趣一耳」とあるに本づく』酒に醉ひたる心もち。醉中のおもしろみ。

酒中の仙【句】『杜甫の飮中八仙歌に「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不レ上レ船、自稱臣是酒中仙」とあるに本づく』酒を飮みて、無聊を忘れ居る人。

しゆ-ちゆう 朱中・銖中【名】㊀江戸時代、駿河國にて、黃金を量りし呼稱。一朱の二分の一に當れり。㊁甲州金の名目。一朱の二分の一、卽ち兩の三十二分の一。

しゆちゆう-くわ 酒中花【名】山吹の莖の髓にて、花鳥の形などを縮めて作り、簡單に彩りなどし、水に泛ぶれば、脹れ開くやうにしたる玩具。盧聲「名をかへて穢の禿おとなしく」といふ句に「うきをすがりの酒中花の時」

しゆ-ちよう 殊寵【名】特別の寵愛。殊眷。

しゆ-ちよう 守冢【名】墓の番人。はかばん。

じゆ-ちよう 壽冢【名】じゆざう(壽藏)に同じ。

しゆちよう-ほふしんわう 守澄法親王【名】〔人〕後水尾天皇第三の皇子。俗名は幸敎。今宮と稱す。天台座主となる。慈賀院門跡の祖。明曆八年薨ず。年四十七。

しゆ-ちよく 手勅【名】天子の親筆の勅書。手詔。

しゆつ 出【名】㊀その處より出でたるもの。㊁その人の腹より出でたるもの。

じゆつ 術【名】㊀わざ。藝。㊁てだて。はかりごと。手段。㊂修驗者・陰陽師などが呪詛に施す法。㊃〔數〕和算にて、割算の割らるる數。被除數。

じゆつ 戌【名】十二支の一。いぬ。

しゆつ-いう 出遊【名】出でて遊ぶこと。故郷を出でて遠く赴くこと。

じゆつ-いう 卹憂【名】あはれみうれふること。

しゆつ-えう 出要【名】〔佛〕『止觀の七に「如レ救二頭燃一以求二出要一」、十地義記に「出要者、謂果爲二出、因爲二要道一」などあり』出離の要道。解脫(ゲダツ)の道。盛衰記「生前の一善なければ、沒後の出要にまど(へり)」

しゆつ-えん 出演【名】出席して、藝を演ずること。

しゆつ-えん 出捐【名】〔法〕法律上の義務あるにあらで、他人に財產を給付すること。

じゆつ-えん 述演【名】えんじゆつ(演述)に同じ。

しゆつえん-きん 出捐金【名】出捐せる金。

しゆつ-が 出芽【名】はつが(發芽)に同じ。

しゆつ-が 出駕【名】はつが(發駕)に同じ。

しゆっ-かう 出行【名】いで行くこと。

しゆっ-かう 出港【名】船の港を出づること。ふなで。出帆。(入港に對して)

しゆつかう-ぜい 出港稅【名】島地より、內地へ移出する目的にて出港する物品に課する稅金。國內消稅の一種にして、輸出稅とは異なり。例へば沖繩縣酒類出港稅の類。(入港稅に對して)

しゆつかう-てすう 出港手數【名】船舶が碇泊港を去らんとする場合に、當該官廳になす、出港報告の手續。

しゆつかう-とどけ 出港屆【名】出港せんとする船舶より、その由を當該官廳に報告すること、又その屆書。

しゆつかう-とどけしよ 出港屆書【名】船舶が碇泊港を去らんとするに當り、當該官廳にその旨を記して差出す屆書。

しゆつかう-にもつ-めんじやう 出港荷物免狀【名】船舶が、荷物を積みて出港するを許可する免狀。

しゆつかう-めんじやう 出港免狀【名】船舶出港の免許狀。

しゆっ-かく 出格【名】挍に拘らぬこと。別格。破格。

しゆっ-かん 出艦【名】艦(フネ)又は牢獄を出づること。

しゆっ-かん 出監【名】監獄より出づること。

しゆつが-はふ 出芽法【名】はつがはふ(發芽法)に同じ。

じゆつ-きう 卹救・恤救【名】きうじゆつ(救卹)に同じ。

しゆっ-きん 出勤【名】勤務に出づること。

しゆっ-きん 出金【名】金錢を支出すること、又その金錢。出銀。

しゆつ-ぎん 出銀【名】前條に同じ。

しゆっきん-ぼ 出勤簿【名】官衙・會社などに備へ附けて、その役員の、各自出勤するごとに捺印(ナツイン)する帳簿。

しゆっ-きやう 出京【名】㊀京を出でて、田舍へゆくこと。㊁じやうきやう(上京)に同じ。

しゆっ-きやう 出鄕【名】㊀故鄕を出づること。㊁〔佛〕住持の、寺を出て、人里に行きて勸化(クワンゲ)すること。

しゆっ-きやく 出格【名】しゆっかく(出格)に同じ。

しゆっ-きよ 出擧【名】すゐこ(出擧)を見よ。

しゆっ-きよ 卒去【名】卒(シユツ)すること。

しゆつ-ぎよ 出御【名】天皇が、常の御殿より朝堂もしくば御儀式等を行はるる殿舍に出立でたまふこと。(入御に對して) 百練抄「出二御南殿之間二」

しゆっきよ-にん 出擧人【名】出擧の借受人。盛衰記「出擧人に借しちらして、德附き、公名附きなんどして、以ての外に過分になり」

しゆっ-く 出句【名】〔文〕出韻の句。(多く古詩のにいふ)

じゆっ-くう【名】きまま。勝手。浮世風呂「人間といふものは自由(ジユウ)つくうな事ばっかりいふ物よ」

しゆつ-ぐん 出軍【名】㊀戰場に向ふこと。㊁軍隊をくりいだすこと。

しゆつ-ぐん 出群【名】ばつくん(拔群)に同じ。

しゆっ-くわ 出火【名】くわじ。火災。失火。

じゆっ-くわ 術科【名】〔兵〕軍事敎育上、戰鬪に必要なる事項を實施敎習する科目。卽ち操典敎範その他に示す課目の實踐するものにして、學科と相待つべきもの。

しゆっ-くわい 出會【名】であふこと。面會。

じゆっ-くわい 述懷【名】胸中の思を言出すこと。くりごと。

しゆっくわ-ごごん 出過語言【句】〔佛〕玄妙不思議にして、言語にて表現しがたきこと。言語を超越せること。言語道斷。盛衰記「自性(ジシヤウ)の本佛もとより己身(コシン)に備ふと觀ずれば、無窮の聖應(シヤウオウ)、響の聲に應ずるが如し。生死(シヤウジ)斷絶の觀門、出過語言の要路なり」

しゆっ-くわん 出棺【名】死人の遺骸を納めたる棺を、その家より送り出すこと。

しゆつ-ぐわん 出願【名】公官署に願ひ出づること。

しゆつぐわん-しや 出願者【名】出願せる人。出願人。

しゆつぐわん-しよ 出願書【名】出願の書面。

しゆつぐわん-にん 出願人【名】しゆつぐわんしや(出願者)に同じ。

しゆっ-け 出家【名】㊀『梵Pravrajita の譯語』在家(ザイケ)の生活を出離して、沙門の淨行(ジヤウギヤウ)を修すること。父母の家を離れ出でて、僧となること。出塵。脫塵。(在家に對して) ㊁僧侶の通稱。にふだう(入道)參照。

出家・士(サムラヒ)・犬・畜生【句】農・工・商の三民より、相手になし難きものを並稱せし語。〔諺語〕

一人出家すれば、九族天に生る【句】出家の功德の廣大なるをいふ語。

じゆっ-けい 術計【名】てだて。はかりごと。權宜。

じゆつ-げい 術藝【名】『列子に「魯之君子、多二術藝二」、後漢書の班固傳に「文レ之以二術藝二」などあり』げいじゆつ(藝術)に同じ。

しゆっけ-おち 出家落【名】僧侶の墮落。還俗(ゲンゾク)したる僧。

しゆつ-げき 出擊【名】出でて敵を擊つこと。

しゆっけ-ごと 出家事【名】能(ノウ)の狂言の、出家の事を作れるもの。例へば、「宗論」・「呂蓮(ロレン)」・「泣尼」など。

しゆっ-けつ 出血【名】血の出づること、又血を出すこと。

しゆっけつせい-なうまくえん 出血性腦膜炎【名】〔醫〕かうなうまくえん(硬腦膜炎)に同じ。

しゆっけつ-ぼ 出缺簿【名】しゆっせきぼ(出席簿)に同じ。

しゆっけ-とくど-でん 出家得度田【名】王朝時代、人民が僧となりたる時、官に收むる、その人の口分田(クブンデン)・位田・賜田など。

しゆつ-げん 出現【名】㊀出であらはるること。㊁〔佛〕佛・菩薩の實身より、化身(ケシン)の世に出であらはるること。㊂〔天〕『英Emersion』掩蔽の終了をいふ。

しゆっ-こ 出庫【名】くらだし(庫出)に同じ。

しゆっ-こ 崒乎【副】高くけはしきさま。

しゆつ-ご 出期【名】〔佛〕生死(シヤウジ)の苦を出離する期限。

じゆつ-ご 述語【名】〔語〕せつめいご(説明語)に同じ。

じゆつ-ご 術語【名】『英Technical term又Technicals又Technics』特殊の意味を以て、學術上にのみ用ひらるる語。專門語。

しゆつ-ごく 出獄【名】罪を赦され、又は刑期滿ちて、牢獄を出づること。出牢。

しゆっこ-ぐわんしよ 出庫願書【名】稅關倉庫、又は官設保稅倉庫に入庫したる貨物を出庫せんとする時、稅關に差出す願書。

しゆっこ-はうこく 出庫報告【名】にわたしきっぷ(荷渡切符)に同じ。

しゆっ-こん【名】『種根又は宿根の訛か』種性。うまれ。平家「成景は京の者、しゆっこん賤しき下﨟なり」

じゆっ-こん 入魂【名】じゆこん(入魂)に同じ。

しゆっ-さ 出差【名】〔天〕『英Evection』太陽が地球の周圍に畫く軌道の形の變化より起る、太陽の運動の變差。太陽の影響を受くるに因るものにして、周期的に變化し、その變差の極大値は、約一度四分の一。

しゆつ-ざ 出座【名】その座に出づること。

しゆっ-さい 出塞【名】『史記の周紀に「今又將レ兵出レ塞攻レ梁」とあり。塞は支那の北方なる夷狄の界限をいふ』塞を越ゆること。

しゆっ-さい 出妻【名】『孔子家語に「曾參後母遇レ之無レ恩、而供養不レ衰、及二其妻以レ梨烝不一レ熟、因出レ之、終身不レ取レ妻」とあり』離緣したる妻。出婦。しゆつぼ(出母)參照。

じゆっ-さく 述作【名】㊀前人のせし事を述べ明らむることと、己れ自ら作ること。㊁ちよじゆつ(著述)に同じ。

じゆっ-さく 術策【名】はかりごと。計略。

しゆっ-さつ-じよ 出札所【名】切符を賣出す處。

しゆっ-さん 出產【名】㊀さんしゆつ(產出)に同じ。㊁子の生るること。さん。出生(シユッシヤウ)。

しゆっ-さん 出山【名】山を出づること。

出山の釋迦【句】〔佛〕六年の苦行を終へて、尼連禪河の西岸なる苦行林を出づる時の釋迦牟尼。釋迦如來誕生會「出山の釋迦牟尼佛、四八の相好八十種好」

しゆっ-し 出仕【名】㊀出でて官に仕ふること。㊁勤務すべき場所へ出づること。出勤。㊂明治の初年に、新に官吏に登用すべきもの、才能を試みんが爲に置きたる試補官の稱。㊃明治四年以後、事務の繁忙なる場合に置きたる員外官の稱。

しゆっ-し 出資【名】資本を出だすこと。

しゆつ-じ 出自【名】『何何自(ヨ)り出づの義』でどこ。出所。「祖先の出自を尋ぬ」

じゆつ-し 術士【名】巧に謀を弄する人。

しゆっし-ぎむ 出資義務【名】出資をなす義務。例へば株式會社又は株式合資會社の株主が株金を拂込むべきの類。

しゆっし-しやうかう 出仕將校【名】陸海軍にて、或事務につき、定員外にその事務を掌らしむる將校。例へば海軍軍令部におけるものの類。

しゆつ-じつ 出日【名】㊀出づる日。あさひ。㊁『書經の君奭に「丕冒海隅出日」、同書の堯典に「寅賓二出日一、平二秩東作一」とあり』日の出づる處。

しゆっ-しん 出身【名】㊀支那にて、鄕貢進士の、吏部の撰に及第せしこと。㊁その土地又はその地位より立身したること。

出身を賜ふ【句】官署に出仕の命を蒙る。

しゆっ-しやう 出象【名】〔天〕內惑星が太陽面を經過する終の時。

しゆっ-しやう 出生【名】㊀しゆっさん(出產)㊁に同じ。㊁その土地より生れ出でたること。

しゆっしやう-し 出生子【名】出生せる子。

しゆっしやう-ち 出生地【名】出生の地。う

まれ故鄕。

しゅっしやうち-しゅぎ 出生地主義【名】〔法〕父母の國籍に拘らず、その人の出生地によりて、國籍を定むる主義。

しゅっしやう-とどけいで-ぎむしや 出生屆出義務者【名】〔法〕戸籍吏に子の出生の屆出をなす義務を負ふ人。卽ち嫡子の場合には第一に父、父これをなす能はざる時は母、庶子の場合には父、私生子の場合には母、もし是れ等の者が屆出をなす能はざる場合には、戸主・同居者・分娩に立會ひたる醫師・產婆・介抱人等がその順序に從ひ、屆出の義務を負ふ。

しゅっ-しよ 出處【名】㊀出でて仕ふと退きて野に處(ヲ)ると。㊁事の起りたるところ。でどころ。〔出所〕 曾我五人兄弟「出所も知れぬ京童の俗談」

しゅっ-しよく 出色【名】他に勝れたる所のあること。「近來出色の文字」

じゅつ-しよく 述職【名】我が職事に就き、參內して申し上ぐること。諸侯の參內。

しゅっ-す 卒す【動佐變自】しす(死す)の敬語。四位・五位の人、支那にては、大夫の死にいへり。（崩ず・薨ずに對して）

じゅっ-すう 術數【名】㊀算數の術。㊁はかりごと。策略。

しゅっ-すゐ 出水【名】みづで。でみづ。大水。洪水。

しゅっ-せ 出世【名】㊀〔佛〕諸佛の、衆生を濟度せんがために、淨土を捨てて、假にこの人間界に現出すること。如來の出現。 太平記「慈尊出世の曉」 ㊁〔佛〕『前項の意に譬へていふ』隱退したる高僧の、再び大小の寺院に住持すること。㊂世に立ちて榮ゆること。立派なる身分となること。立身。㊃〔佛〕僧侶の役名。延曆寺のは、持佛堂の法事を勤むるものにて、公卿の子これに補せられ、仁和寺のは、御室の近習、これに補せらるる習なりき。㊄〔佛〕世間を超脫して、淨行(ジヤウギヤウ)を修すること、又その人。出家。出塵。 太平記「中納言僧都經超・二位寺主淨勝二人より外は、供奉仕りたる出世・坊官、一人も候はずと申しければ」

しゅっ-せい 出精【名】精を出だすこと。奮發。勵精。

しゅっ-せい 出征【名】㊀『易經の上經に「王用出征、有嘉」とあり』出で行くこと。㊁戰場目ざして出發すること。

しゅっせい-ぐん 出征軍【名】戰鬪に從事するために、戰地に派遣せられたる軍隊。

しゅっせい-ぐんじん 出征軍人【名】出征軍に編入せられたる軍人。

しゅっせい-じやうだう-らく 出世成道樂【名】ばんしうらく(萬秋樂)の異稱。

しゅっせ-うを 出世魚【名】成長するに從ひて、名の變りゆく魚。例へば、ぼら(鯔)・すずき(鱸)・ぶり(鰤)の類。

しゅっせ-かげきよ 出世景淸【名】淨瑠璃の一。惡七兵衞景淸の賴朝を窺ひて、終に捕へられ、首を討たれんとせしが、觀音の身代にて、赦免となり、日向國宮崎の庄を賜はりしも、尙賴朝を恨む心已まず、自ら眼球を拔きて盲目となりて、日向に赴きしことを作れるもの。近松門左衞門の竹本義太夫の爲に作りし淨瑠璃の最初の作。

しゅっ-せき 出席【名】その席に出づること。（缺席に對して）

しゅつせき-ていし 出席停止【名】貴・衆兩院議員の懲罰の一。貴族院にては一箇月以內、衆議院內にては二週間以內、その議院の會議にも委員會にも、出席を停止するもの。

しゅっせき-ぼ 出席簿【名】學校などに備へて、生徒の出席せるものを記すための帳簿。出缺簿。

しゅっせ-くわ 出世果【名】〔佛〕ねはん(涅槃)に同じ。

しゅっせ-けん 出世間【名】㊀〔佛〕無爲・涅槃の境界。四諦(シタイ)の中の滅諦と道諦とは、これに屬す。（世間に對して）㊁俗人の、世事を捨てて、佛門に歸すること。

しゅっせ-ばり 出世張【名】たぬまはり(田沼張)に同じ。

しゅっせ-ひやうぢやうしゅう 出世評定衆【名】ひやうぢやうしゅう(評定衆)を見よ。

しゅっ-せん 出船【名】船の港を出づること。ふなで。出港。

しゅっ-そ 出訴【名】訴へ出づること。起訴。 入夫鑑「淫婦夏引等が密謀の洩れきこえしに驚きて、出訴せばやと思ひしかども」

しゅっ-そう 出走【名】しゅっぽん(出奔)に同じ。

しゅつ-ぞく 出俗【名】だつぞく(脫俗)に同じ。

しゅっ-たい 出來【名】しゅつらい(出來)の音便。

しゅっ-たい 出胎【名】母胎を出づること。

しゅっ-たい 出隊【名】〔佛〕禪寺にて、住持の、大衆の隊を率ゐて、出でて、財糧を勸化(クワンゲ)すること。すゐたい。出鄕。

しゅつ-だい 出題【名】題を提出すること。

しゅつ-だう 出道【名】〔佛〕世間を出離する道。

じゅつ-だう 術道【名】修驗又は禁厭(キンエン)などの道。 盛衰記「伏しまろびて冷したまへども、猶助かる心地し給はず、療治も術道も驗を失ひ、佛神の祈誓も空しきが如し」

しゅっ-たつ 出立【名】いで立つこと。たびだち。發足。

しゅっ-たん 出炭【名】石炭を掘出すこと。

しゅっ-ち 出離【名】〔佛〕しゅつり(出離)㊀を見よ。

じゅつ-ぢ 術治【名】まじなふこと。 庭訓往來「湯治・術治」

しゅっ-ちん 出陳【名】出品陳列すること。

しゅつ-ぢん 出陣【名】㊀戰場に出づること。（入陣に對して）㊁〔佛〕『法戰の義に取りていふ』禪客の、衆中より出でて、陞座(シンザ)の人と問話すること。（入陣に對して）

しゅつ-ぢん 出塵【名】〔佛〕煩惱(ボンナウ)の塵垢(ヂンク)を出離すること。塵の世をのがれて、僧となること。出家。脫塵。 太平記「時の難をのがれんがために、出塵の身となりて、天下の人に指をさされんこと」

じゅっ-ちん 繻珍【名】しゅちん(繻珍)の音便。

しゅっ-ちやう 出張【名】用務ありて、他處へ出向くこと。でばること。

しゅつ-ぢやう 出場【名】或場所に出づること。

しゅつ-ぢやう 出定【名】〔佛〕僧が、修行のために籠りゐたりし場所より出づること。禪定を出づること。（入定に對して） 盛衰記「今日は出定の日也とて、又國中の男女雲霞の如くに集って拜まんとす」

しゅつぢやう-こうご 出定後語【名】〔書〕『しゅつぢやう(出定)を見よ』漢文にて、大乘の佛說に非ざる旨を論じたるもの。一卷。富永仲基の著。

しゅっちやう-じよ 出張所【名】出張して事務を執る所。

しゅつぢやう-せうご 出定笑語【名】〔書〕『しゅつぢやう(出定)を見よ』佛敎を論駁したるもの。六卷。平田篤胤の著。平田篤胤全集に收む。

しゅっちやう-てん 出張店【名】本店より出張したる店。

しゅっちやうてん-ちやう 出張店長【名】出張店の長。

しゅっ-つ 出津【名】船舶の津(ツ)を出づること。

しゅっ-てい 出廷【名】法廷に出頭すること。

じゅっ-てき 怵惕【名】おそれあやぶむこと。 賀古敎信七墓廻「怵惕惻隱は仁の端」

しゅっ-てん 出典【名】故事・成語などの出處たる書籍。典據。

しゅっ-と 出途【名】㊀しゅったつ(出立)に同じ。㊁費用の出みち。

しゅっ-と 出雲【名】〔地〕出雲國の舊郡の一。明治二十九年楯縫(タテヌヒ)・神門(カンド)の二郡と合して、簸川(ヒノカハ)郡となれり。

しゅっ-とう 出頭【名】㊀自らその場所に參ること。㊁要路に在りて、政務を見る者。君側にありて、特に威勢あるもの。君主の寵を專にするもの。 新可笑記「流石一方の家老職にもなりぬべき出頭、時を得たれば」

しゅつ-どう 出動【名】出でて活動を起すこと。

出頭の天【句】『「天」の字の中の斜なる一畫を上に貫けば、「夫」の字となるによりていふ』夫(ヲット)の隱語。

しゅっとう-しゅ 出頭衆【名】しゅっとうにん(出頭人)に同じ。

しゅっ-とうち 出頭地【名】『支那宋の歐陽

修、蘇軾の應擧文を見て「老夫當避此出一頭地」、故事成語考に「士人超拔、謂之出頭地」とあり。地は接尾語』他より拔出でたること。

しゅっ-とう-にん 出頭人【名】『しゅっとう(出頭)㊁を見よ』武家時代に、譜代・新參の別なく、器に應じ、登用せられて、主君に近侍し、政務に與りし者。卽ち幕府の三管領・四職・奉行人など、大名の家の老臣・奉行の類。しゅっとうしゅ。 曾我虎が磨「祐經は出頭人、與する武士も多ければ」

じゅつ-ながる 術無がる【動四自】術なく思ふ。せんかたなく思ふ。切(セツ)ながる。困る。 傾城色三味線「生れ付いて吝い奴にて、じゅつながる銀(カネ)共を箱 押入れ押入れ、內藏 つめるを樂にして」

じゅつ-なし 術無し【形一】爲すべき方法なし。困る。せんかたなし。すべなし。ずちなし。困却す。

しゅつ-なふ 出納【名】『すゐたふ(出納)の誤讀』㊀藏人所に屬して納殿(ナンデン)の出納及び藏人所一切の雜事を掌りし役。定員三人。攝關の家司(ケイシ)にもありたり。 禁秘抄「出納三人、是藏人方一切奉行者也、夜陰外不衣冠又候御壺禮事、無先例堀河院御時、如島被召連猶不甘心事也、出納者、上古親王大臣など擧中、藏人下知、下名簿、學生、明法生諸國目等補之」 ㊁延曆寺の七座の公人(クニン)の一。被物(カヅケモノ)・祿物の出納を掌りし賤しき役。

しゅつ-にふ 出入【名】出づると入ると。出すと入るると。でいり。だしいれ。

しゅつにふかう-ぜい 出入港稅【名】出港稅と入港稅との併稱。

しゅつ-ば 出馬【名】貴人の、馬に乘りて出立すること。

しゅつ-ばい 出梅【名】梅雨の終る日。（入梅に對して）

じゅつばきや 術婆伽・術婆迦・術婆訶・戌縛迦（梵 Śubhakara）【名】〔人〕『大智度論の卷十四に見ゆ』古の印度の漁夫。某國の王女なる拘牟頭（梵 Kumuda）に戀し、その望の遂げがたきに及びて、身より火を發して燒死せりといふ。 盛衰記「天竺の術婆訶は、后宮に契をなし、夢路を恨みて、焔と昇りし」

しゅっ-ぱつ 出發【名】しゅったつ(出立)に同じ。

しゅっぱつ-しんがう 出發信號【名】停車場より出發せんとせる列車又は通過列車に對して、信號現示點以外に、進行の可否を示す信號。

しゅっぱつ-てあて 出發手當【名】外國駐在官が本邦を出發する際、特に給與せらるる手當金。

しゅっぱつ-てん 出發點【名】『英 Starting point』㊀出發せんとする地點。㊁事を始むる動機又はそれが動作に現るる時。

しゅっ-ぱん 出帆【名】船の港を離るること。ふなで。開帆。解纜。拔錨。

しゅっ-ぱん 出版【名】文・圖畫などを、版木に彫りて、世にいだすこと。版行。印行。刊行。

しゅっぱん-けいさつ 出版警察【名】高等警察の一。出版に關し、公安保持のために、人民の自由を制限するもの。

しゅっぱん-けん 出版權【名】〔法〕ちよさくけん(著作權)に同じ。

しゅっぱん-とどけ 出版屆【名】出版をその管轄官廳に屆け出づること、又その屆書。

しゅっぱん-はふ 出版法【名】出版に關する行政上の制限につきて規定せる法律。明治二十九年發布。

しゅっぱん-ぶつ 出版物【名】出版せる文書・圖畫。

しゅっ-ぴ 出費【名】費用を出すこと、又その費用。かかり。いりめ。

じゅつ-ひ 恤悲【名】あはれみかなしむこと。不愍に思ふこと。

しゅっ-ぴん 出品【名】寶店・陳列場などに、品物を出すこと。

しゅっ-ぷ 出府【名】地方より都に出づること。

しゅっ-ぷ 出婦【名】『史記の張儀傳に「出婦嫁於鄕曲者、良婦也」とあり』しゅっさい(出妻)に同じ。

じゅつ-ぶ 述部【名】〔語〕せつめいぶ(說明部)に同じ。

しゅっ-ぺい 出兵【名】兵を出すこと。

じゅっ-ぺい 恤兵【名】物品・金錢などを寄付して、兵事に從へる兵士を慰むること。

じゅっぺい-きん 恤兵金【名】恤兵のために寄付したる金員。

じゅっぺい-ぶ 恤兵部【名】恤兵の事務を取扱ふ所。

しゅつ-ぼ 出母【名】『禮記の檀弓上篇に「孔子之不喪出母、自子思始也」とあり。しゅっさい(出妻)參照』父と離緣したる實母。

しゅつ-ぼつ 出沒【名】出づることと隱るること。或は見え、或は隱るること。

しゅっ-ぽん 出奔【名】㊀逃げて跡をくらますこと。かけおち。逐電。出走。亡命。㊁江戸時代に、徒士(カチ)以上の者の蹤跡をくらますこと。

しゅっぽん-しや 出奔者【名】出奔したる人。

しゅっぽん-とどけ 出奔屆【名】出奔せることを屆け出づること、又その屆出の書面。

じゅつ-みん 恤民【名】人民をあはれみめぐむこと。

しゅつ-もん 出門【名】門を出づること。

しゅつ-やく 出役【名】出張して、執務すること。赴任。

しゅつ-らい 出來【名】㊀『世說の文學篇に「問云、公何處來、答云、今日與謝孝劇談一出來」とあり』物事の或處より出できたること。事件の發生すること。 平治「定めて狼藉出來せんか、火失なからん條こそ雜儀の勘定にて候へ」 ㊁物のなりととのふこと。物のできあがること。しゅったい。成就。

しゅつ-らう 出牢【名】しゅつごく(出獄)に同じ。

しゅつ-らん 出藍【名】『「靑は藍より出でて藍より靑し」を見よ』子弟の、却りて師父よりも上達すること。「出藍の譽(ホマレ)」參照。

しゅつ-り 出離【名】㊀〔佛〕厭ふべき迷界を脫離すること。 平家「出離の道さまざまなりとは申せども」 ㊁〔天〕『英 Egress』惑星が太陽面又は木星面を經過する終。

出離生死【句】〔佛〕生死苦痛ある迷界を脫離して、常住安樂の涅槃(ネハン)界に入ること。生死出離。 盛衰記「卽ち後佛の引導に遇るべくば、現在未來の一切衆生出離生死の期を失ふべし」

しゅつ-るゐ 出類【名】同類よりぬきんでたること。出群。

しゅつ-れふ 出獵【名】狩獵に出づること。

しゅつ-れん 出輦【名】天皇の御他出。いでまし。行幸。

しゅつ-ろ 出路【名】出づる路。でみち。

しゅつ-ろ 出廬【名】『孔明が、玄德のために草廬を出でて仕へし故事』隱遁の生活より出でて、社會の事業に從ふこと。

しゅつ-ゐん 出韻【名】〔文〕漢詩にて、韻を押すべき句に、韻を踏まぬこと。ふみおとし。しゅっく(出句)參照。

しゅ-でい 朱泥【名】支那に產する赤褐色の陶器。水差・急須などに多し。

しゅてう 朱鳥【名】持統天皇の御代の年號（紀元一三四六年―一三六一年）。

しゅてう-おん 手調音【名】〔音〕『英 key-note』音階の第一音。音階の名は、この音の音名を取りて呼ぶ。例へば、主調音ハなる時はハ調音階、トなる時はト調音階と稱する類。きいのおと。主和絃。基音。基調音。

しゅ-てき 酒敵【名】酒を飮む時の相手。

しゅ-でし 衆弟子【名】〔佛〕世間衆多の人を、皆佛の弟子なりとしての語。

しゅ-てつ 鑄鐵【名】〔鑛〕せんてつ(銑鐵)に同じ。

しゅ-てん 主典【名】㊀さくわん(主典)に同じ。㊁官・國幣社に於ける神職の一。定員各社に二人。判任官待遇にして、地方長官より命ぜられ、禰宜(ネギ)の下に位して、祭儀及び庶務に從事す。

しゅ-てん 酒店【名】さかや。さかみせ。酒肆。

しゅ-てん 朱點【名】赤き色の點。

しゅ-てん 主點【名】おもなる箇所。

しゅ-でん 主殿【名】㊀表向の座敷。しんでん。おもてごてん。正殿。㊁大禮の時、點火をなす役。

しゅでん-しよ 主殿署【名】春宮(トウグウ)坊に隷し、首(カミ)・令史(サクワン)・殿掃部(トノモリベ)・使部・直丁(ヂキチヤウ)・駈使丁等の職員ありて、東宮の沐

湯・發燭・酒掃・鋪設等の事を掌りし役所。

しゆてん-だい 主典代【名】『朝廷の主典と區別するために、代の字を附したるもの』院廳の主典(サクワン)。

しゆてん-どうじ 酒呑童子・酒顚童子・酒天童子【名】㊀昔、丹波國大江山に棲めりといふ鬼神。時時都に出でて、美女を掠め、財寶を奪ひ、淫酒に耽りしを、賴光勅命を受けて、保昌・四天王等と共に退治したりと傳ふ。㊁おほえやま(大江山)㊂の古稱。

しゆてんどうじ-まくらことば 酒呑童子枕言葉【名】淨瑠璃の一。酒呑童子の傳說を基として脚色せるもの。近松門左衞門の作。

しゆでん-れう 主殿寮【名】㊀とのもづかさ(主殿寮)に同じ。㊁宮內省の一寮。頭(カミ)・主事・皇宮警視長・皇宮警視・皇宮警部の職員ありて、宮殿及び離舍の警察を掌る。

しゆ-と 酒徒【名】酒を飲む仲間。

しゆ-と 首途【名】かどで。たびだち。

しゆ-と 衆徒【名】〔佛〕中古以後、諸大寺の僧の、學侶以外に、武技を講習し、雜役・驅使その他の非精神的方面に從事せしもの。すと。僧兵。太平記「さては衆徒の心も變じぬるにやと、叡慮を惱まされける所に」

しゆ-ど 手弩【名】石弓の小なるもの。三代實錄「手弩一百具」

しゆ-ど 朱土【名】日本繪具の一。黃土を灼熱して作りたる暗赤色のもの。板狀なると塊狀なるとあり。乳鉢にて磨り、膠を加へて用ふ。

しゆ-とう 種痘【名】天然痘豫防のために、痘苗(ベウ)を人體に接種して、その病症に對する免疫性を得しむること。第十八世紀の終に英人ジエンナア(E. Jenner)の創めしものなれども、支那・印度にては、不完全ながら古くよりこの法行はれきといふ。うゑばうさう。牛痘。

しゆ-とう 殊鬪【名】殊死して鬪ふこと。必死のたたかひ。

しゆ-どう 主動【名】主になりて行動すること。

しゆ-どう 朱銅【名】銅器の表面に現れたる色の名。朱色の斑點あるもの。古銅器には自然に現るるものなれども、近世は人工を以て傳色す。

じゆ-とう 樹頭【名】木の上。木の枝の上。

じゆ-とう 受筒【名】水を高處に貯ふる設備。配水池を設くるに適したる高地なき場合に使用するものにて、鋼製の竪立せる圓筒中に水を充し、これより配水す。

じゆ-どう 受動【名】㊀他の動作を受くること。㊁〔語〕しよどう(所動)に同じ。(役動(エキ)に對して)

じゆ-どう 竪童【名】召使の少年。

しゆとう-い 種痘醫【名】種痘をなす醫師。

しゆとう-きよく 種痘局【名】明治四年種痘館を廢して、東校の中に設けたる、種痘醫の免許狀、並びに痘苗の分與等の事を扱ひし所。同七年廢せらる。

しゆとう-くわん 種痘館【名】安政五年伊藤玄朴・大槻俊齋等、江戶に開業せる諸藩の西洋醫數名が幕府に請ひて、內神田に設けし醫學校。明治四年廢せらる。

しゆとう-けいくわ-しよう 種痘經過證【名】醫師がその診療したる種痘患者の全治せる時、その經過を記して、交付する證書。

しゆどう-しや 主動者【名】主動の地位にある人。

じゆどう-しや 受動者【名】受動の位地にある人。

しゆとう-しよう 種痘證【名】定期種痘を施したる者に對し、これを檢診したる醫師の交付する證書。

しゆとうずみ-しよう 種痘濟證【名】種痘を受け、檢診を經たるものに、市町村長の交付する證書。

じゆどうせい-げんどう 受動性幻動【名】〔哲〕『英Passive hallucination of motion』他に動かされざるに、動かさるるが如く感ずる幻覺。

しゆとう-ていき 種痘定期【名】種痘を行ふにつきて定めたる期間。出生より翌年六月に至る間を第一期とし、數へ年十歲を第二期とす。第一期に不善感なる時は翌年六月に至る間、第二期にて不善感なる時は翌年十二月に至る間に更にこれを行はしむ。定期前二箇年以內に善感したるものは、第二期の種痘と見做す。

じゆどう-ぼさつ 儒童菩薩【名】㊀〔佛〕釋迦、昔、菩薩にて燃燈佛を供養せし時の名。㊁『辨正論に「大昊、本應聲大士、仲尼、卽儒童菩薩、先遊二玆土一權行漸化、懸二濟五濁一宣二布五常一」とあり』佛家より孔子を指していふ語。

しゆ-とく 修得【名】〔佛〕修行の功によりて得たること。(生得・報得に對して)

しゆ-とく 取得【名】うること。取ること。その所有とすること。

しゆ-とく 主德【名】〔哲〕『英Cardinal virtues』他の德の依屬する主要なる德。元德。

しゆ-どく 酒毒【名】酒の毒。

じゆ-とく 樹德【名】恩德を施すこと。

しゆとく-じかう 取得時效【名】〔法〕『英Acquisitive prescription』時效の一。ある期間、他人の物を占有したるによりて、自然に權利取得の效果を生ずるもの。(消滅時效に對して)

しゆとく-ち 取得地【名】㊀取得したる土地。㊁或物或は權利を取得せる土地。

じゆとく-は 壽德派【名】木村壽德を祖とする、射術の一派。

しゆ-なう 主腦【名】主要なるもの。主眼。

しゆ-なう 酒囊【名】次條を見よ。

酒囊飯袋【句】『荊湘近事に「馬氏奢僣、諸院王子僕從烜赫、文武之道未二嘗留一レ意、時謂二之酒囊飯袋一」とあるに本づく』多く酒を飲み、飯を食ふのみにて、何の能もなき人を罵りていふ語。

しゆ-なふ 收納【名】しうなふ(收納)に同じ。

じゆ-なふ 受納【名】受けをさむること。受けとること。

しゆ-にく 朱肉【名】朱色の印肉。(黑肉に對して)

しゆ-にく 酒肉【名】酒と肉と。さけさかな。

しゆ-にぐわつ 修二月【名】〔佛〕しゆにぐわつゑ(修二月會)の略。

しゆにぐわつ-ほふ 修二月法【名】〔佛〕次條に同じ。

しゆにぐわつ-ゑ 修二月會【名】〔佛〕奈良東大寺の二月堂にて、毎年二月の一日より十四日までの間、本尊觀世音の尊前にて修する法會。天竺の法、建卯の月を歲首とし、支那唐代の二月に當るにより、天竺の年始を祝する意にて行ふ。卽ち修正會(シユシヤウヱ)の類。僧實忠はじめてこれを行へり。修二月法。修二月。修二會。

しゆ-にふ 輸入【名】ゆにふ(輸入)を見よ。

しゆにふ-かう 輸入港【名】ゆにふかう(輸入港)を見よ。

しゆにふ-しやう 輸入商【名】ゆにふしやう(輸入商)を見よ。

しゆにふ-ぜい 輸入稅【名】ゆにふぜい(輸入稅)を見よ。

しゆにふ-ひん 輸入品【名】ゆにふひん(輸入品)を見よ。

しゆにふ-ぼうえき 輸入貿易【名】ゆにふぼうえき(輸入貿易)を見よ。

しゆ-にん 主任【名】主として、その事を擔任すること、又その人。

じゆ-にん 受任【名】㊀任務を受くること。㊁〔法〕委任契約により、委任せられたる事務を處理する義務を負ふこと。

しゆにん-くわん 主任官【名】主として、その任にあたる官吏。主任官吏。

しゆにん-くわんり 主任官吏【名】前條に同じ。

しゆにん-しや 主任者【名】主として、その任に當るもの。

じゆにん-しや 受任者【名】〔法〕委任契約によりて、委任事務を處理する義務を負ふ者。(委任者に對して)

しゆにん-だいじん 主任大臣【名】主として、その任務を掌る大臣。

じゆ-にゆう 授乳【名】母親が、その生兒に乳を飮ましむること。

しゆに-ゑ 修二會【名】〔佛〕しゆにぐわつゑ(修二月會)の略。

しゆ-ぬり 朱塗【名】㊀朱色に塗ること、又その物。㊁朱漆にて塗ること、又その物。

じゆねつ-めん 受熱面【名】『英Heating surface』汽罐に於て、燃料の燃燒によりて發する熱を直接に受けて、これを水に傳ふる表面。傳熱面。

しゆ-のう 主能【名】おもなる能力。

じゆの-お (英Juno)【名】羅馬神話中の主たる女神。ジユピタアと配して、天を司る。

しゆ-ば 種馬【名】繁殖用に供する牡馬(オ)。たねうま。

しゆ-ば 手馬【名】〔兵〕騎兵の徒步戰鬪をなすために下馬したる鞍馬。若干の乘馬者に保持せしめ、所要に應じて、行動又は停止せしむ。

しゆ-はい 酒杯【名】さかづき(盃)に同じ。

しゆ-はい 酒旆【名】しゆき(酒旗)に同じ。

しゆ-はい 手背【名】手のうら。手の甲。

しゆ-はい 趨拜【名】すうはい(趨拜)を見よ。

しゆばいくせい-じよ 種馬育成所【名】馬政局に屬し、種馬牧場にて生れたる幼駒を育成する所。成長後、種馬となすべきものは、種馬牧場又は種馬所に送る。現今、陸中國巖手郡瀧澤村に設く。

しゆ-ばいしん 朱買臣【名】〔人〕支那漢代の吳人。字は翁子。家貧にして、薪を賣りて自ら給し、行く行く書を誦す。妻恥ぢて去る。後、會稽の大守となるに及び、故鄕を過ぎしに、前妻の夫と共に途に迎ふるを見、伴ひて扶持せしが、前妻慙ぢて縊死せり。のち武帝の意に合はずして、元鼎元年自殺す。

しゆ-はう 主砲【名】一隻の軍艦に裝置せる火砲中にありて、最大威力を有する大口徑なるもの。口徑八吋より十吋・十二吋・十四吋・十五吋・十六吋等に及ぶ。

しゆ-はう 殊邦【名】ことなる國。外國。

しゆ-ばう 酒房・酒坊【名】さかや。酒肆。

しゆ-ばう 守防【名】ばうしゆ(防守)に同じ。

しゆば-しよ 種馬所【名】馬政局に屬し、馬匹改良の目的にて、民間の需要に應じて配合せしむべき種馬を繫ぎ置く所。現時、巖手・熊本・宮城・秋田・福島・宮崎・島根・愛知・石川・長野・鹿兒島・靑森・栃木・高知の十四縣と北海道とに一箇所づつ設置せらる。

じゆ-ばつ 受罰【名】罰を受くること。

じゆばつ-しや 受罰者【名】罰を受けたる者。

しゆ-はふ 手法【名】『英Treatment又Manner又Technic』〔美〕藝術品製作上の表現の技巧。技巧。

しゆ-はふ 主法【名】〔法〕㊀じつしつはふ(實質法)に同じ。(從法に對して) ㊁皇漢醫が、その病症に對して用ふる主治藥。

しゆば-ぼくぢやう 種馬牧場【名】馬政局に屬し、種馬を管理・飼養する牧場。靑森縣に二箇所、北海道に二箇所設けらる。

しゆ-はん 酒飯【名】酒と飯と。酒食(シユ)。

しゆ-はん 酒伴【名】酒を飲む仲間。

しゆ-はん 手板【名】しやく(笏)に同じ。

しゆ-はん 首班【名】一番の上席。首席。

しゆ-はん 主犯【名】〔法〕せいはん(正犯)に同じ。

じゆ-ばん 襦袢【名】肌につけて著る短き衣。あかとり。はだぎ。

しゆ-ひ 手臂【名】手とひぢと。

しゆ-ひ 種肥【名】作物の下種の際に、種子と併せて播く肥料。肌肥。

しゆ-ひ 種皮【名】〔植〕種子の外部にありて、その實體たる種殼を包む皮膜。內種子・外種子の別あり。各その條を見よ。

しゆ-び 麈尾【名】『麈は大なる鹿の義、群鹿のこれに隨ふより、聽衆を指導する意を含めたるもの』麈の尾毛に柄を著けたる物。ほっす。

しゆ-び 守備【名】城又は陣地を守り、敵を拒ぐ準備をなすこと。

しゆ-び 須眉・鬚眉【名】ひげとまゆげと。

しゆ-び 首尾【名】㊀首(ヒク)と尾と。頭尾。㊁はじめをはり。終始。㊂〔文〕文章の始と終と、相應じてあること。㊃事のなりゆき。都合。㊄事を都合よくまとむること。成立せしむること。㊅男女の都合よく密會すること。諸國物語「心のたけをくどいて、首尾させて上げませう」太功記「ことに、今宵は、君のとのゐ、又の首尾をと振切るを」

首尾相衞(エイ)る【句】『晉書の溫嶠傳に「嶠重與二侃書一曰、僕與二仁公一當レ如二常山之蛇、首尾相衞一」とあるに本づく』次條に同じ。〔諺語〕

首尾倶に救ふ【句】『戰國策に「有レ蛇二於此一、擊二其尾一其首救、擊二其首一其尾救、擊二其中身一首尾倶救」とあるに本づく』互に同盟の國國が、長蛇の形をなして、互に救ふ。「常山の蛇勢」參照。〔諺語〕

じゆ-ひ 樹皮【名】きのかは。

じゆ-ひ 壽碑【名】生前に建つる碑。

しゆ-びき 朱引【名】㊀朱色の線を引くこと。㊁『江戶時代、江戶の地圖に、府內・府外の境界を作るために、朱線を引きしによりていふ』府內と府外との區域の別。㊂〔文〕俳諧にて、支那の固有名詞を相對せしむること。東坡と山谷と、雲谷と龍門とを對せしむる類。

しゆびき-うち 朱引內【名】『前條㊁を見よ』江戶の府內。

しゆびき-そと 朱引外【名】『しゆびき(朱引)㊁を見よ』江戶の府外。

じゆびた-あ (英Jupiter)【名】羅馬諸神の主宰者。オリンプス山に位を占め、宇宙の森羅萬象を心のままに支配す。希臘にてはゼウスと稱す。ゆぴてる。

しゆび-たい 守備隊【名】守護のためにおく軍隊。

しゆ-ひつ 手筆【名】じひつ(自筆)に同じ。

しゆ-ひつ 主筆【名】新聞社又は雜誌社等にて、記者中の主位にありて、社說その他主要なる記事・論說を擔當するもの。

しゆ-ひつ 執筆【名】しつぴつ(執筆)㊂に同じ。太平記「執筆十二人、夜晝三日間、筆をも置かず注せり」

しゆび-の-まつ 首尾松【名】東京淺草區藏前(マヘ)片町の、大川に面せる所にありし松。昔、吉原がよひの嫖客の、柳橋より猪牙(チヨ)に乘り、この松を左に、松浦家の邸內なる椎の大木を右に見て、大川を溯り、山谷(サン)に著岸せしより、その夜の首尾よからんことを思ひて呼びなしし名稱なりといふ。俗曲(淺草名所)「うれしの森や花川戶橋、その首尾の松、待乳山(マツチ)」

しゆび-へい 守備兵【名】守備隊に屬する兵士。

しゆ-ひん 主賓【名】㊀主人と賓客と。主客。㊁來客中の主なる人。上客。

しゆ-びん 溲瓶【名】『漢字の唐音』寢所の附近に置きて、小便の用に供する陶製の器。おほつぼ。しびん。

しゆ-びん 鬚鬢【名】ひげと鬢髮と。

しゆ-びん 守敏【名】〔人〕眞言宗の高僧。勤操等に師事して、顯・密二教を修め、當時空海と名を等しくす。弘仁天皇、東西の鴻臚館を東寺・西寺となし、東寺を空海に、西寺を守敏に賜ふ。禁中に出入して、屢眞言の修法をなせり。

じゆ-ひん 需品【名】需要の物品。

じゆひん-こ 需品庫【名】需品を入れ置く庫。

しゆびん-づか 守敏塚【名】僧守敏の塚。西寺(サイ)の舊址に在り。大鏡「御影供(イエク)や人の問寄る守敏塚」

しゆ-びやう 衆病【名】〔佛〕しゆうびやう(衆病)に同じ。

衆病悉除(シツヂヨ)【句】〔佛〕多くの病氣の、すべて治癒すること。藥師如來十二願中の第七願。

じゆ-ひよう 樹氷【名】『英Silver thaw』氷點以下に冷却せし雲・霧の、樹枝その他の地物に凝結し、水晶にて包みたるが如く見ゆるもの。その氷層不透明にして粗面なるを、凝霜と異なりとす。北越地方にては、木花(キバナ)といふ。

しゆ-ふ 主婦【名】㊀主人の妻。㊁その家の女主人。

しゆ-ふ 主父【名】『史記の蘇秦傳に「欲レ勿レ言乎、則恐二其殺二主父一也」とあり』その家の主人。(主母に對して)

しゆ-ふ 首府【名】獨立せる國家の政治の中心地。その國の中央政府の所在の都會。

しゆ-ぶ 主部【名】㊀主要なる部分。(支部に對して) ㊁〔語〕『英Logical subject』文章中の主語と、これに屬する修飾語との總稱。(說明部に對して)

しゆ-ぶ 首部【名】はじめの部分。頭部。

しゆ-ぶ 守部【名】宮內省諸陵寮に屬し、守長の指揮に從ひて、諸陵を守りし等外吏。明治十七年設置、同四十一年廢止。

じゆ-ふ 授付【名】さづけわたすこと。付典。

じゆ-ふ 受不【名】受くると受けざると。

じゆ-ふ 呪符・咒符【名】まじなひのふだ。
じゆ-ぶ 鷲峯【名】〔地〕りやうじゆせん(靈鷲山)に同じ。謡曲(春日龍神)「摩耶の誕生、伽耶(ヤ)の成道、鷲峯の說法、雙林の入滅」
鷲峯の偈(ゲ)【句】〔書〕ほけきやう(法華經)の異稱。
しゆふう-かん 酒風漢【名】酒に中毒したる者。よひよひ。
しゆ-ふく 修復・修覆【名】つくろひ直すこと。しうふく。ていれ。
しゆ-ふく 修福【名】福德を修め行ふこと。
しゆ-ふく 首服【名】㊀首の服飾。㊁げんぷく(元服)㊀に同じ。東鑑「召‐出之‐自加‐首服‐給」㊂『首は自白の義』自首して、罪に服すること。〔首伏〕㊃〔法〕自己の犯罪の發覺せざる前に、被害者にこれを告知する行爲。親告罪に就きて、告訴權者の爲したる首服は、自首と同一の効力を有す。されど親告罪に就きても、自首を認めざるに非ざるが故に、犯人は、自首・首服のいづれの方法に依るも、同一の効果を得。
じゆ-ふく 壽福【名】ふくじゆ(福壽)に同じ。
じゆ-ふく 儒服【名】儒者の著る衣服、又それを著用すること。
じゆふく-じ 壽福寺【名】相模國鎌倉郡鎌倉龜谷(カメガヤツ)にある臨濟宗の寺。關東五山の一。開山は榮西、開基は源實朝。本尊は釋迦・文殊・普賢。
しゆふく-どき 修復時・修覆時【名】修復すべき時。凡董「稻妻やとなりの藏も修復どき」
しゆぶ-せん 鷲峯山【名】〔地〕山城國相樂(サガラ)・綴喜(ツヅキ)兩郡の境にある山。高さ二一三五尺。頂上に金胎(コンタイ)寺あり。
しゆ-ぶつ 主物【名】〔法〕『英 Chief matter』獨立して、法律行爲の目的となる物。(從物に對して)
じゆ-ぶつ 儒佛【名】儒敎と佛敎と。
しゆ-ぶて 朱筆【名】朱墨に染めて用ふる筆。
しゆ-ふん 朱粉【名】朱の粉末。
しゆ-ぶん 主文【名】㊀一文章中の主要なる部分。㊁〔法〕はんけつしゆぶん(判決主文)の略。
しゆ-ぶん 守文【名】『始祖の君は、武を以て國を興し、繼承の君は、文を以て國を守るよりいふ』祖業を繼承して、國を治め守ること、又その主君。太平記「是則所‐以草創雖‐并‐天‐守文不‐越‐三載‐也」
しゆ-ぶん 衆分【名】㊀紀伊國高野山金剛峯寺にて、僧侶を三階級に分ちたる中の最下級。(阿闍梨・入寺に對して) ㊁江戸時代、盲官の四等の階級中の最下位。即ちその上に座頭・勾當・撿挍の三階あり。
じゆ-ふん 受粉【名】〔植〕『英 Pollination』雄蘂の花粉が雌蘂の柱頭に附著すること。
しゆぶん-こう 朱文公【名】〔人〕しゆき(朱熹)を見よ。
しゆぶん-てん 衆分天【名】〔佛〕とうりてん(忉利天)を見よ。
しゆ-へい 珠柄【名】〔植〕『英 Funiculus 又 Podosperm』胚珠の胎座に著生する所にして、多少柄狀をなす部分。但し、これを缺き、胚珠の直ちに胎座に著くもあり。
しゆ-へい 守兵【名】㊀守護の兵。まもりの兵。㊁海軍にて、儀仗又は警戒のために守所に配置する兵。
しゆ-へい 酒餅【名】酒と餅と。
しゆ-へい 酒瓶【名】酒を盛る瓶。
じゆ-へい 戍兵【名】衞戍の兵。
しゆへい-しよ 主兵署【名】昔、春宮(トウグウ)坊に屬し、首(カミ)・令史(サクワン)各一人、使部・直丁(ヂヤウ)若干等の職員ありて、東宮の兵器及び儀仗等の事を掌りし役所。大同二年主藏監に合併せしめらる。
しゆ-へう 酒瓢【名】酒を容るる瓢簞。
しゆ-へき 酒癖【名】酒に醉ひて起る癖。さかくせ。
しゆ-べつ 種別【名】しなわけ。類別。
じゆ-べつ 受別【名】〔佛〕じゆき(受記)に同じ。
しゆ-ほ 酒脯【名】さけとほじしと。
しゆ-ほ 酒鋪・酒舗【名】さかや。酒肆。
しゆ-ほ 酒保【名】㊀酒屋の傭人。㊁軍隊内にありて、酒・煙草・菓子・日用品などを安價に販ぐ所。賣品はその隊にて自ら調辨し、又は請負人をして調辨せしむ。
しゆ-ぼ 珠母【名】〔動〕あこやがひ(阿古屋貝)に同じ。
しゆ-ぼ 主母【名】『史記の蘇秦傳に「其夫果至、妻使‐妾擧‐藥酒‐進‐之、妾欲‐言‐酒之有‐藥、則恐‐其逐‐主母‐也、欲‐勿‐言乎、則恐‐其殺‐主父‐」とあり』その家の主婦。(主父に對して)
しゆ-ぼ 主簿【名】㊀主要なる帳簿。㊁『簿を主(ツカサド)る義』帳簿を取扱ふ人。㊂支那唐宋時代の官職の一。㊃王朝時代に於ける諸國の目(サクワン)の唐名。㊄明治初年の大學校の職員。文案を勘署し、出づるを檢し、失を稽ふることを掌る判任官。初め大主簿・少主簿のみなりしが、のち大・少・權大・權少の四となり、大學と改稱するに及びて、この職名を存せしが、同四年大學廢せらるるに及び、全く廢せらる。
じゆ-ぼ 酒母【名】かうぼ(酵母)に同じ。
じゆ-ぼ 壽母【名】『詩經の魯頌閟宮篇に「魯侯燕喜、令妻壽母」とあるに本づく。卽ち壽考の母の意』人の母。
しゆ-ぼう 首謀【名】主となりて、事を企つる者。(多く惡事にいふ)
しゆぼう-しや 謀謀者【名】主謀たる人。張本人。發頭人。
しゆぼ-きん 酒母菌【名】〔植〕かうぼきん(酵母菌)に同じ。
しゆ-ぼく 主僕【名】主人と僕と。主從。
じゆ-ぼく 儒墨【名】儒敎と墨子の敎と。
じゆ-ぼく 入木【名】次條を見よ。
じゆぼく-だう 入木道【名】『支那晉の王羲之は、頗る能書にして、その筆跡ある木版を削りしに、墨痕三寸もしみこみゐたりといふ故事(書斷に出づ)より出でたる語』㊀しよだう(書道)の異稱。㊁弘法大師の流を汲みたる書道の一派。
しゆぼ-だい 須菩提(梵 Subhūti)【名】〔人〕『善吉・空生又は善業と譯す』印度の高僧。釋迦十大弟子の一。十六羅漢の一。舍衞(エイ)の長者たり。天性慈悲に富みて、人と諍はず、出家して常に善業を行へり。すぼだい。
しゆ-ほふ 修法【名】〔佛〕密敎にて、國家又は個人のために、災禍を攘ひ、現世・來世の幸福を祈り、又は怨敵を降伏する目的にて、加持・祈禱を行ふこと。大日・不動・聖天・藥師・熾盛光(シジヤウクワウ)・鬼子母・觀音等を本尊とし、前に壇を構へ、護摩を燒き、口に眞言を唱へ、手に印を結び、心に佛・菩薩の相を觀じつつ行ふ。ずほふ。御修法(ミシホ)。
修法の阿闍梨【句】〔佛〕修法を行ふ阿闍梨。
じゆ-ほふ 呪法・咒法【名】〔佛〕呪師が呪文を唱ふる法式。じゆし(呪師)參照。
じゆ-ほふ 受法【名】〔佛〕師の僧より弟子が法を受くること。
じゆほふ-くわんちやう 受法灌頂【名】〔佛〕天台・眞言兩宗にて、弟子に密法を授くる時に行ふ灌頂。吾妻鏡「寛忠僧都は、寛平法皇の御孫兵部卿敦固親王の子、法皇入室、石山内供受法灌頂の弟子なり」
しゆほふ-ゐん 修法院【名】しんごんゐん(眞言院)㊀に同じ。
しゆほ-ゐゐん 酒保委員【名】酒保の事務を掌る將校。
しゆ-ま 朱間【名】田畝丈量の時、實測の間數を手帳より野帳に轉載し、細心にて計算せし間數を、朱書に副記すること。
しゆ-まう 蛛網【名】蜘蛛のあみ。
じゆまう-らん じゆまう蘭【名】〔植〕いとらん(絲蘭)㊀に同じ。
しゆ-まつ 朱抹【名】朱色に文字を抹消すること。
しゆ-み 麈尾【名】しゆび(麈尾)に同じ。
しゆ-み 酒味【名】酒のあぢはひ。
しゆ-み 趣味【名】㊀人の感興を惹起すべきもの。おもしろみ。おもむき。あぢはひ。雅致。風韻。㊁『英 Taste』美を鑑賞する力。㊂ある物に對して、興味を感ずること。
しゆ-み 須彌【名】〔佛〕しゆみせん(須彌山)の略。
須彌の髮(ヒ)【句】とりがみ(取髮)に同じ。太平記「頭は雪の如くにして、須彌の髮膝を過ぎ」
しゆ-みん 朱明【名】『明の國祖は朱元璋なるより、その姓を冠らせていふ』みん(明)に同じ。

しゆみ-ざ 須彌座【句】㊀しゆみだん(須彌壇)に同じ。㊁はちまんざ(八幡座)に同じ。
しゆみ-せん 須彌山(梵 Sumeru(蘇迷盧・修迷樓))【名】㊀〔佛〕『妙高山・妙光山・安明山・善積山・善光山など譯す』一小世界の中心たる山。印度の神話における世界觀を示せるものにて、水を出づること八萬四千由旬、日月これを廻りて出沒し、三界二十八天これに依りて層層相重なり、その周圍には七金山(シチコン)ありて、外方に至るに從ひて、漸次高さを減じ、七金山の一一の間には各大海あり、その外圍に鹹海あり、鹹海の四方に四大洲あり、これらの全部を繞りて更に鐵圍山あり、これらの全部は金輪(コンリン)の上に位し、金輪の下には水輪・風輪ありて、金輪以上の海水の深さは、須彌山の高さと同じく八萬四千由旬、水輪の深さ三千三十由旬、風輪の深さ六千四十由旬なりといふ。しゆみ。すみせん。すみのやま。そめいろ。㊁『「北は黄に、南は青く、東白、西くれないにそめいろの山」といふ歌の如く、みなみ(皆實・南)は青しといふ意』菜と豆腐とを細かに切りて作りたる味噌汁。
しゆみ-だん 須彌壇【名】〔佛〕『須彌山に象(カタド)れるよりいふ』寺院・殿堂内に設けて、佛像を安置するための臺。須彌座。

(しゆみだん)

しゆみ-たれ【名】しみたれに同じ。
しゆみ-たれる【動下一自】しみたれる。根無草「荷物が無い上、そないにしゆみたれたなりをして」
じゆ-みやう 壽命【名】㊀いのち。よはひ。㊁物の損傷せずに保つ時間。
壽命の藥【句】じゆみやうぐすり(壽命藥)に同じ。
じゆみやう-あめ 壽命飴【名】ちとせあめ(千歳飴)に同じ。
じゆみやう-いも 壽命芋【名】〔植〕じやがたらいも(馬鈴薯)に同じ。
じゆみやう-がみ 壽命神【名】人の壽命を保護すといふ神。
じゆみやう-きやう 壽命經【名】〔書〕密敎の經典。詳しくは「一切如來金剛壽命陀羅尼經」といふ。支那唐の金剛智の譯。一卷。榮花「大般若・觀音經・藥師經・壽命經などの御讀經、おのおの不斷に始めさせ給ふ」
じゆみやう-ぐすり 壽命藥【名】よはひの藥。長命のくすり。浮世親仁形氣「世に閑にするほど、壽命藥は無し」
じゆみやう-たう 壽命糖【名】ちとせあめ(千歳飴)に同じ。
しゆ-む 主務【名】專ら掌る業務。
しゆむ-くわん 主務官【名】その事務を主管する官。
しゆむ-くわんしよ 主務官署【名】その事務を主管する官署。
しゆむ-くわんちやう 主務官廳【名】その事務を主宰する官廳。例へば敎育に關する主務官廳は文部省なる類。
しゆむ-しやう 主務省【名】主務大臣がその事務を取扱ふ所。
しゆむ-しゆ 占守【名】〔地〕㊀しゆむしゆたう(占守島)を見よ。㊁千島國九郡の一。千島の最北なる牟知(ムシ)・知林古丹(チリンコタン)・捨子古丹(シヤスコタン)・越輕磨(エカルマ)・加亞連古丹(カアレンコタン)・溫禰古丹(オンネコタン)・波羅茂知(パラモシリ)・阿賴度(アライド)・占守の諸島より成る。根室支廳の管轄。
しゆむしゆ-かいけふ 占守海峽【名】〔地〕『峽の音、正しくはかふ』次條を見よ。
しゆむしゆ-たう 占守島【名】〔地〕千島群島の一。千島國占守郡に屬す。我が國の最東北端を占め、長さ七里半・幅五里。占守海峽を隔てて、露領カムチャツカと對す。占守海峽は一にクリル海峽ともいふ。
しゆむ-だいじん 主務大臣【名】その權限・職務の專屬する大臣。
しゆん 春【名】はる(春)に同じ。
春・夏(カ)・秋(シウ)・冬(トウ)【句】春と夏と秋と冬と。四時。四季。
しゆん 皴【名】〔美〕文人畫にて、山を形成する岩の紋理。その形によりて、斧劈・荷葉・披麻等十餘種の名稱あり。
しゆん 旬【名】㊀古の禁中の公事の一。もと毎月朔、後には四月と十月との朔日にのみ行はれしもの。四月のを孟夏の旬といひ、十月のを孟冬の旬といひ、倂せて二孟の旬といふ。その時、庭立の奏と稱し、監物(ケンモツ)の御鎰(カギ)の奏、史の官奏、六府の番奏等の諸奏事あり。勸盃・賜祿並びに歌舞の儀あり。諒闇・御忌日等には行はれず。日蝕に際すれば、翌日に延引し、天皇出御ある時は、王卿以下南殿の兀子(ゴツシ)に著き、出御なき時には、宜陽殿の平座(ヒラザ)に著きて行はれ、孟夏の旬には、扇を群臣に拜賜せられ、孟冬の旬には、氷魚(ヒヲ)を賜へり。なほ恒例の旬以外、卽位の後政事を聞しめし始むるを、萬機の旬といひ、十一月十一日冬至にあたる時の祝を、朔旦の旬といひ、内裏新築の後、始めてその披露を南殿にて行はるるを、新所の旬といへり。旬儀。旬政。㊁魚・野菜などのよく熟して、味のよき季節。
旬の鞠(マリ)【句】鎌倉時代に、毎月上・中・下三旬に一回づつ、公家(クゲ)・武家などの蹴鞠に堪能なる者を選びて、その事を演ぜしこと。じゆんのおまりぶぎやう(旬御鞠奉行)參照。
しゆん 舜【名】〔人〕五帝の一。顓頊(センギヨク)七世の孫。堯に繼ぎて卽位し、天下を治む。その先、虞(グ)卽ち今の山西省蒲州府に國せしより、國號を虞と稱す。在位三十九年、位を禹に讓りて歿す。徒然草「驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり」
舜も人なり、我れも人なり【句】『孟子の離婁下篇に見ゆ』舜も我れも同じく人類なれば、志を高尚にして奮勵せば、舜のごとき聖人の地位に至ることも難きにあらず。〔諺語〕
じゆん 閏【名】㊀うるふ(閏)に同じ。㊁じゆんゐ(閏位)に同じ。
じゆん 準【名】四器の一。みづもりをなす具。水準(ミヅバカリ)。
じゆん 醇【名】㊀酒のまじりけなくして味の濃きこと、又その酒。醇酒。㊁じゆん(純)㊀㊁㊂に同じ。
じゆん 純【名】㊀他の物の少しもまじらぬこと。純粹。㊁もつぱらなること。純一。㊂完備せること。よきこと。㊃自然のままにて、つくりかざらぬこと。
じゆん 旬【名】一箇月を十日づつに三分して、上旬・中旬・下旬といふ。十日間。旬日。
旬の雨【句】十日目に一日降る雨。
旬の試(シ)【句】王朝時代に、大學・國學にて、十日ごとに學生に對して行ひし試裁。帖試。
じゆん 殉【名】じゆんずること。殉死をなすこと。
じゆん 順【名】㊀正道にしたがふこと。(逆に對して)㊁順序。次第。順番。㊂順序を違へぬこと。㊃したがふこと。おとなしきこと。しとやかなること。㊄『英 Favourable』じゆんがはせ(順爲替)を見よ。
順に取って順に守る【句】「逆に取って順に守る」を見よ。
順の峰入【句】おほみねいり(大峰入)を見よ。
順の舞【句】舞を順次に舞ふこと。
順の輪【句】太平樂の舞にて、急の段を奏する時、劍を拔きて、右に旋(メグ)ること。(「逆の輪」に對して)
じゆん 準・准【接頭】他の語に上に付して、なぞらふる意に用ふ。「準強盜」「准士官」
じゆん 巡【助數】一めぐりの意をあらはす語。
じゆん 旬【助數】㊀『書經の堯典に「朞年三百有六旬有六日」とあり』十日間づつを一期として、日數を示す語。㊁十年間づつを一期として、年齡を示す語。「齡すでに六旬を超ゆ」㊂ゆじゆん(由旬)の略。
しゆん-あい 春靄【名】はるがすみ。
しゆん-あう 春鶯【名】春季の鶯。
しゆんあう-でん 春鶯囀【名】〔音〕雅樂の一。壹越(イチコツ)調の唐樂。唐の太宗の作といふ。六人立又は四人立にて舞ひ、答舞には新鳥蘇又は古鳥蘇の曲を用ふ。一名、天長寶壽春鶯囀・天壽樂・長壽樂。
じゆん-あん 順安【名】〔地〕朝鮮平安南道の都會。平壤の北約七里。京義鐵道の一驛。
しゆん-い 俊異・儁異・偉異【名】すぐれたること、又すぐれたる人物。
しゆん-い 春衣【名】春著る衣服。はるぎ。
じゆん-い 鶉衣【名】うづらごろも(鶉衣)に同じ。

じゅん-い 春意【名】春さきののどかなる感じ。春心。
自然皆春意あり【句】『程明道の語。近思錄に出づ』我が心靜かなる時は、天地間の萬物おのづから春意あるがごとくに感ず。〔諺語〕
じゅん-い 準依【名】したがひよること。準由。
じゅん-いう 準由【名】したがひよること。準依。
しゅん-いう 春遊【名】春、郊外などに行き遊ぶこと。
じゅん-いう 巡遊【名】へめぐりあそぶこと。
じゅんいう 淳祐【名】〔人〕眞言宗の學僧。菅原淳茂の子。道眞の孫。般若寺の觀賢を師とし、近江國石山寺に住み、專ら著述と密觀とを事とす。天暦七年寂す。年六十四。
じゅん-いく 馴育【名】ならしそだつること。
じゅん-いち 純一【名】〔佛〕じゅんいつ(純一)に同じ。
じゅん-いちゐ 准一位【名】さんいちゐ(散一位)に同じ。
しゅん-いつ 俊逸【名】すぐれてするどきこと、又その人。
しゅん-いつ 駿逸【名】馬の足の極めて早きこと、又その馬。駿足。
じゅん-いつ 純一【名】㊀まじりなきこと。きっすゐ。純粹。㊁うはべを繕ふ心なきこと。
しゅん-いん 春蚓【名】㊀春になりて、地上に這出づる蚯蚓(みゝず)。㊁字體のつたなき形容。
春蚓・秋蛇(しうだ)【句】『晉書の王羲之傳に「子雲近世擅₂名江表₁、然僅得ₗ成ₗ名、無₂丈夫之氣₁、行行如ₗ縈₂春蚓₁、字字若ₗ綰₂秋蛇₁」とあるに本づく』字態の細くして、骨力なきに譬へていふ語。蚯蚓(みゝず)ののたくったやう。
しゅん-う 春雨【名】はるのあめ。はるさめ。
しゅん-う 峻宇【名】軒高き家。高屋。
じゅんう-い 淳于意【名】〔人〕支那前漢の名醫。齊の太倉長たりしを以て、太倉公、又倉公といふ。臨菑の人。扁鵲と併稱せらる。
しゅんう-こん 淳于髡【名】〔人〕支那戰國時代の辯者。齊の人。博聞強記にして、觀相を善くす。梁の惠王卿相の位を以て遇せんとせしも謝して去り、仕へずして終る。
しゅんう-せう 春雨抄【名】〔書〕和歌・連歌等の詞を、いろはわけにして、その義を註釋せるもの。十卷。鱸(すゞき)重常の著。
しゅん-うん 春雲【名】㊀春の雲。㊁ちや(茶)の異稱。
しゅんえい 春榮【名】謠曲の一。增尾春榮丸といふ少年の、敵に囚はれて、高橋權頭(ごんのかみ)といふ者に預けられゐたりしを、兄の種直尋ね來りて、弟の身代りに殺されんとし、春榮は、兄たる事を隱さんとすれど、事つひに破れ、兄弟ともに首座に直りし處に、早打來りて、赦免せられ、春榮は、めでたく高橋の養子となることを作れるもの。
しゅん-えい 雋永【名】『雋は肥肉の義』言論の甘美にして、深長なること。
しゅん-えい 俊英【名】すぐれたる人。英俊。賢才。
じゅん-えい 準穎【名】王朝時代に、物の價を、穎稻に準じて、換算したること。
じゅん-えき 純益【名】總收入の中、諸費用を除きたる餘。純粹の利益。まるまうけ。純收益。純利。
じゅん-えき 潤益【名】『隋書の經籍志に「毛詩序、子夏所ₗ創、毛公及衞敬仲、又加₂潤益₁」とあり』潤色し、增益すること。
じゅんえき-きん 純益金【名】純益の金員。
じゅん-えつ 巡閲【名】巡廻して檢閲すること。みまはり。
しゅんえふ-しふ 春葉集【名】〔書〕荷田(かだ)春滿(あづままろ)の家集。二卷。
じゅん-えん 旬宴【名】旬政の日、群臣に賜ふ酒宴。本朝世紀「有₂旬宴事₁」
じゅん-えん 順延【名】期日を順にくりのばすこと。「雨天順延」
じゅん-えん 順緣【名】〔佛〕㊀情に順ひて、佛緣を結ぶこと。積極的に佛緣を結ぶこと。(逆緣に對して) ㊁老いたる者より順次に死すること。
じゅん-おう 順應【名】『應は、順の字の韻に引かれて、ノウと發音す』㊀境遇に順ひて、これに適應すること。㊁〔哲〕おうくわ(應化)㊁に同じ。
じゅん-おくり 順送【名】前前に次へ次へと送り遞むこと。
じゅん-おん 准蔭【名】蔭位に准ずること。太平記「四月には、五日は三、同日准蔭の位記、七日は擬階の奏なり」
しゅん-か 春夏【名】春と夏と。
しゅん-か 春霞【名】春のかすみ。
しゅん-かい 悛改【名】かいしゅん(改悛)に同じ。
しゅん-がい 俊乂【名】『俊も乂も賢才の義』すぐれたる人。俊英。賢才。
じゅん-かいそん 準海損【名】〔法〕じゅんきょうどうかいそん(準共同海損)に同じ。
しゅん-がう 俊豪【名】器量の人にすぐれたること、又その人。俊傑。
しゅん-かう 春江【名】春の川又は湖。
しゅん-かう 春郊【名】春の郊野。はるの。
じゅん-かう 純孝【名】しかう(至孝)に同じ。
じゅん-かう 循行【名】徧くめぐること。
じゅん-かう 巡航【名】一定の航路を一巡すること。
じゅん-かう 順行【名】㊀順序を逐ひてめぐり行くこと。㊁〔天〕『英 Direct motion』地球の軌道の北方無限の距離より視て、時針と反對の方向に廻る運動。すべての惑星、天王・海王兩星以外の惑星に屬する衞星、ハリイ彗星以外の週期彗星は、皆この運動をなす。(逆行に對して) ㊂〔天〕『英 Direct motion』天球に於ける、黃經の增加する視運動。惑星及び彗星は、時に順行をなし、時に逆行をなす。(逆行に對して)
じゅん-かう 順孝【名】『禮記に「祭₂祀宗廟・社稷₁、則子孫順孝」とあり』じゅんそん(順孫)參照。孫のよく祖父に事ふると、子のよく親に事ふると。
じゅん-かう 遵行【名】㊀したがひ行ふこと。守り行ふこと。新撰三代格「奉ₗ勅依ₗ請者、事施₂一國₁遵行有ₗ便」 ㊁じゅんかうじやう(遵行狀)の略。
じゅん-かう 巡行【名】へめぐり歩くこと。
じゅん-かう 巡幸【名】天皇の御巡行。
じゅん-かう 順講【名】㊀りんかう(輪講)に同じ。㊁一中節のおさらひ。
じゅん-かう 準行【名】或物事を標準として行ふこと。準據すること。なぞらへ行ふ。
じゅんかう-かいちやう 巡行開帳【名】諸所を巡行して、開帳すること。
じゅん-がうかん 準强姦【名】〔法〕婦人の心神喪失もしくは抗拒不能に乘じ、又は精神を喪失せしめ、或は抗拒不能ならしめて姦淫すること。强姦に準じて處罰せらる。
じゅんかう-じやう 遵行狀【名】鎌倉・室町兩幕府時代に、諸國守護より代官に下しし命令文書。遵行。
じゅん-がうたう 準强盜【名】〔法〕竊取したる財物の返還を拒み、又は逮捕を免れ、或は藥酒等を用ひて、人を昏迷せしめて、財物を盜むこと。强盜の罪を以て處罰せらる。
じゅん-がき 順書【名】一座の俳優の名簿。地位の順によりて認めたるもの。
じゅん-がく 峻嶽・峻岳【名】けはしき山。峻山。
しゅんかく-じ 春閣寺【名】さううんじ(早雲寺)の舊稱。
じゅん-がはせ 順爲替【名】〔商〕『英 Favourable exchange』或國にて、他の一國よりの爲替手形の供給、需要に超過し(その國との取引關係において貸債額多き結果)たるため、爲替相場が手形の額面以下に下落せる場合における爲替。順適の爲替。
じゅん-がふ 準合【名】江戶時代に、飛地又は新田などの歩刈を、本田の歩刈合毛の割合に準じ、又は數村入込みたる田を、或一村にて坪刈しその合毛を以て、餘の村にも準ずること。
じゅん-がふ 順合【名】〔天〕『英 Superior conjunction』合の一種。天體が、軌道を運行し、地球と太陽とを結ぶ直線上に來りて、太陽がその天體と地球との間にある場合を、その天體につきて呼ぶ稱。從って、この場合、地球とその天體との兩動徑のなす角度は百八十度なり。上合。外合。(退合に對

して)
しゅん-かん 瞬間【名】またたくひま。極めて僅少の間。瞬息の間。瞬時。瞬頃。瞬刻。
しゅん-かん 筍干・笋干【名】料理の一種。筍をよく煮て、種種に切り、小鳥・鮑・蒲鉾などを入れ、たまり・だしにて煮たるもの。
しゅん-かん 春寒【名】春のさむさ。
しゅん-き 春季【名】㊀『班固の文に「三春之季、孟夏之終」とあり』春のすゑ。㊁春の季節。はるさき。春期。
しゅんき 春記【名】〔書〕小野宮春宮權大夫資房の記錄。丹鶴叢書本・舊和學講談所本の異本ありて、卷數も一定せず。一名、資房卿記・野房記。
しゅん-き 春機【名】男女間の情慾。いろけ。
しゅん-き 春期【名】春の時期。春時。
しゅん-き 春氣【名】春の氣。はるげしき。
しゅん-き 俊器【名】すぐれたる器量。
じゅん-ぎ 旬儀【名】しゅん(旬)㊀に同じ。
じゅん-き 準規【名】準據すべき規則。
じゅん-き 順氣【名】㊀順正なる氣候、又は氣象。㊁氣分を順調にすること。
じゅん-ぎ 順義【名】道義に順ふこと。凱陣八島「殊に順義と申し、姉を申し入れて給はれ」
じゅん-ぎ 巡儀【名】じゅんばん(順番)に同じ。東鑑「次第可ₗ爲₂巡儀₁之由被₂仰出₁」
じゅん-ぎ 準擬【名】なぞらふること。
しゅん-ぎう 駿牛【名】すぐれたる牛。
じゅん-きかん 準軌間【名】へうじゅんきかん(標準軌間)に同じ。
しゅん-ぎく 春菊・茼蒿【名】菊科に屬する一年生又は二年生の草。原產地は歐羅巴地中海の沿岸。葉形も、香氣も、しろよもぎに似て、初夏、葉の間に莖を生じ、黃色にして、大きさ約一寸の頭狀花を開く。又、舌狀花の本は黃に、末白く、管狀花は黃なるもの本白く、先端帶紫色なるもあり。若き莖と葉とは、生食または浸物として食ふ。しんぎく。きくさい。からいぎく。
しゅんき-くわうれいさい 春季皇靈祭【名】くわうれいさい(皇靈祭)を見よ。
しゅんき-しんでんさい 春季神殿祭【名】しんでんさい(神殿祭)を見よ。
しゅんき-にんわうゑ 春季仁王會【名】毎年二月に行はれし仁王會。
しゅんき-はつどうき 春機發動期【名】情慾の念の發動する時期。色氣のつきはじむる時。人種・氣候・社會的地位等によりて多少の相違あれども、一般に、男子は十四歲乃至十六歲、女子は十三歲乃至十五歲。
じゅん-きふ 巡給【名】王朝時代に、各親王に順番に給ひし年給。その順序は、年齡に依れりとも、當代の親王・先皇の親王等の差別に依れりともいひて、明かならず。
じゅん-きん 純金【名】純粹の黃金。きんむく。
じゅん-ぎん 純銀【名】純粹の銀。ぎんむく。
じゅん-きんぢさん 準禁治產【名】〔法〕心神耗弱者・聾者・啞者・盲者・浪費者は、心神を喪失せるにあらざれども、十分に產を治むる目的を達し得ざる者として、法律上自由に治產することを禁ぜらるること。
準禁治產の宣告【句】〔法〕準禁治產者たることを明かにするため、本人が普通裁判籍を有する區裁判所のなす宣告。本人・配偶者・四等親以內の親族・戶主・後見人、又は檢事の請求によりて行ふ。
じゅんきんぢさん-しゃ 準禁治產者【名】〔法〕準禁治產の宣告を受けたる者。ほさにん(保佐人)參照。
じゅん-きやう 荀況【名】〔人〕支那戰國時代の趙の學者。齊に遊學し、三たび祭酒となりしが、讒に遇ひて、去って趙に之き、楚に還りて、前職を奉じ、春申君の歿後、任地に隱れ終る。性惡說を唱ふ。敬稱して、荀卿また荀子といひ、又通諱によりて孫卿ともいふ。
じゅん-きやう 順境【名】得意の境遇。(逆境に對して)
じゅん-きやく 隼脚・準脚【名】はやびきやく(早飛脚)に同じ。東鑑「平新左衞門尉盛時、應₂其準脚₁」
じゅん-ぎやく 順逆【名】㊀したがふことと、さかふことと。㊁正道に從ふことと反逆と。
順逆の二緣【句】〔佛〕順緣と逆緣と。太平記「順逆の二緣、何れも濟度利生の方便なれば」
しゅん-きゅう 春宮【名】㊀『離騷に「溘吾遊₂此春宮₁兮、折₂瓊枝₁以繼ₗ佩」とありて、註に「春宮、東方青帝舍」とあり』春の神の宮殿。㊁『竹書紀年に「周穆居₂春宮₁」とあり』とうぐう(東宮)に同じ。
春宮の圖【句】しゅんぐわ(春畫)に同じ。
しゅん-きよ 峻拒【名】はげしくこばむこと。
じゅん-きよ 準許【名】ゆるすこと。許可。
じゅん-きよ 準據【名】のっとること。したがふこと。太平記「準₂據富寺₁」
じゅん-きよ 鶉居【名】『莊子の天地篇に「聖人鶉居而鷇食」とあるに本づく』居處の定まらざること。
しゅんきよう-でん 春興殿【名】しゅんこうでん(春興殿)に同じ。
じゅんきようどう-かいそん 準共同海損【名】〔法〕『英 Quasi average』船舶が不可抗力により、出發港又は航海の途中にて碇泊をなすに要したる費用。我が商法にては、共同海損の規定を準用して、各利害關係人に分擔せしむ。
じゅんきよ-はふ 準據法【名】〔法〕『獨 Statut』國際私法、外國との交涉事件に適用せられたる內國法にて、又は外國法を、その事件の法律關係に對して呼ぶ稱。
しゅん-ぐ 蠢愚【名】『蠢は、蠢蠢として、蟲類の動作のごとくなる義』おろかなること。おろか。
じゅん-くにもち 准國持【名】次條の略。
じゅん-くにもちしゅう 准國持衆【名】室町幕府時代の職制に、その封土・門地又は席次の、國持衆に次ぎし者。准國持。
じゅん-くんだう 准訓導【名】市町村立小學校の准教員。
じゅん-ぐり 順繰【名】次第を追ひてなすこと。順番。
しゅん-くわ 蕣花【名】㊀むくげの花。㊁あさがほの花。
しゅん-くわ 春花【名】春の花。
しゅん-ぐわ 春畫【名】男女交合の態などを書きたる畫。わらひゑ。まくらざうし。まくらゑ。おそぐつのゑ。春宮の圖。
じゅん-くわ 醇化・淳化【名】㊀邪念の全くなくなること、又そのやうに敎化すること。化醇。㊁〔哲〕『英 Purify』りさうくわ(理想化)に同じ。
じゅん-くわい 巡廻【名】見めぐること。みまはり。
じゅんくわい-けうし 巡回敎師【名】巡回して、到る處に或事を敎授する者。
じゅんくわい-さいばん 巡廻裁判【名】明治初年に、上等裁判所より、判事及び判事補をその管下に巡廻せしめて、府縣裁判所の權限に屬せざる死罪の刑を裁判せしめしこと。同十年廢止。
じゅんくわいさいばん-くわん 巡廻裁判官【名】上等裁判所より派出せられて、巡廻裁判を行ひし判事及び判事補。員數は兩者おのおの一人。明治十年廢止。
じゅんくわい-さいばんしよ 巡廻裁判所【名】〔法〕『英 Circuit courts 又 Circular courts』各地方を巡廻して、隨處に開廷する裁判所。即ち巡廻判事の開廷するもの。英國に行はる。
じゅんくわい-しんようじやう 巡廻信用狀【名】〔商〕『英 Circular letter of credit』一通にて、世界各國の欲する處において、銀行に宛てて、手形又は小切手を振出し得る信用狀。旅客の便宜のために、銀行にて發行す。旅行信用狀。
じゅんくわい-としよくわん 巡廻圖書館【名】じゅんくわいぶんこ(巡廻文庫)に同じ。
じゅんくわい-はんじ 巡廻判事【名】㊀『英 Circuit judge』じゅんくわいさいばんしよ(巡廻裁判所)を見よ。㊁上等裁判所よりその管下の府・縣に派出せられ、府縣裁判所の上席に列して、結審の權を行ひし判事。巡回裁判官の一。明治十年廢止。
じゅんくわい-はんばいにん 巡廻販賣人【名】會社又は商店等より注文接受の目的を以て、見本を携へて派遣せらるる者。商業旅行人。
じゅんくわい-ぶんこ 巡回文庫【名】會員

組織として、期日を定め、會員の家を巡回して、順次に圖書・雜誌等を配本し、貸付くるもの。巡廻圖書館。

しゆん-くわう 春光【名】春の景色。春景。

九十の春光【句】春季三箇月、即ち九十日の間。

じゆんくわう-づきん 順光頭巾【名】『順光といふ坊主が品川遊廓へ通ふに、高祖日蓮上人の冠物より思附きしものなるよりいふ』おこそづきん(御高祖頭巾)に同じ。

じゆん-くわかう-がん 純花崗岩【名】〔鑛〕花崗岩の一種。黑雲母と白雲母との二種を含有せるもの。純正花崗岩。複雲母花崗岩。

しゆんくわ-たん 春花丹【名】げんわうたん(玄黃丹)に同じ。

しゆんくわん 俊寛【名】㊀〔人〕法勝寺の執行(シユギヤウ)たりし僧。法印寛雅の子。平清盛の專橫を惡み、藤原成親、その子成經・平康賴等と後白河法皇を擁して、平氏を滅さんと謀り、事洩れて、治承元年成經・康賴と共に鬼界島に流され、翌二年他二人の赦されて召還せられし時、首謀の罪を惡まれて、ひとり島に殘されて寂す。年三十七。㊁謠曲の一。俊寛法師の島流のことを作れるもの。一名、鬼界ケ島。

じゆん-くわん 巡觀【名】じゆんし(巡視)に同じ。

じゆん-くわん 循環【名】㊀めぐりめぐりて、元に戾り來ること。㊁〔醫〕「血液の循環」の略。

循環、端(ハシ)無きが如し【句】『孫子の兵勢篇に「奇正相生、如二循環無一レ端」とあるに本づく』『環(タマキ)の端無きが如し」を見よ。〔諺語〕

じゆん-くわん 准官【名】㊀明治維新の際、官吏の等級を定むるために設けし名稱。明治四年廢せられたり。㊁宮內省の舊官制にて、准判任以上の宮內省の官吏中より、特に指定せしもの。當時の主殿寮の舍人(トネリ)の類。准官吏。

じゆんくわん-き 循環器【名】〔動〕『英Circulatory organs』身體を營養する血液を全身に運搬し、同時に身體の各部に生じたる老廢物を收集する器官の總稱。人類にありては、心臟と血管とこれに屬し、なほ淋巴系及び脾臟等の血脈これに伴ふ。血行器。

じゆんくわん-き 循環期【名】〔天〕『英Cycle』自然的現象又は人爲的に定めたる期日の循還する週期。

じゆんくわんき-けいとう 循環器系統【名】〔動〕じゆんくわんけい(循環系)に同じ。

じゆんくわん-きふすう 循環級數【名】〔數〕『英Recurring series』無限級數の一。同一の項が數項を隔てて常に現るるもの。

じゆんくわん-けい 循環系【名】〔動〕循環器の相互間の作用の組織。循環器系統。循環系統。

じゆんくわん-けいとう 循環系統【名】〔動〕じゆんくわんけい(循環系)に同じ。

じゆんくわん-さく 循環作【名】〔農〕りんさく(輪作)に同じ。

じゆんくわん-しようめい 循環證明【名】〔哲〕じゆんくわんろんぱふ(循環論法)に同じ。

じゆんくわん-すう 循環數【名】〔數〕じゆんくわんせつ(循環節)に同じ。

じゆんくわん-せうすう 循環小數【名】〔數〕『英Recurring decimal 又 Circulating decimal』小數點の直後もしくは或桁(ケタ)より先は、同じ數字のみ限なく繰返して、現るべきもの。例へば2.41, 4.14141……の類。これを記すに2.41のごとき方法を以てす。

じゆんくわん-せつ 循環節【名】〔數〕『英Recurring period又Repetend』循環小數の、同じ數字の繰返さるる部分。即ち0.3の3, 5.7234の234の類。循環數。

しゆんくわん-そうづ-しまものがたり 俊寛僧都島物語【名】〔書〕俊寛僧都の鹿谷(シシガタニ)山莊の會合より、鬼界ケ島に流されたること、牛若丸の入洛、鬼一法眼の會見等を記したる繪入讀本(ヨミホン)體の小說。十冊。曲亭馬琴の作。

じゆんくわん-てき-ていぎ 循環的定義【名】〔哲〕『羅Circulus』「圓とは圓き場所に限れるものをいふ」のごとく、定義せんとする語を定義中に用ひたるもの、又苦樂を以て、感情を定義し、感情を以て、苦樂を定義する類の定義。定義としては、無意義に歸す。

じゆん-くわんり 准官吏【名】㊀本來官吏にはあらざれども、官吏と同樣の取扱を受くる者。㊁じゆんくわん(准官)㊁に同じ。

じゆんくわん-りう 循環流【名】〔地〕くわんりう(環流)に同じ。

じゆんくわん-ろんしよう 循環論證【名】〔哲〕次條に同じ。

じゆんくわん-ろんぱふ 循環論法【名】〔哲〕『羅Circulus in probando』斷案を立證せんがために擧ぐる前提中に、旣に斷案の眞なるを假定せる謬論。卽ち斷案を豫想せざれば成立しがたき前提より、斷案を導くもの。例へば「人は賢し。故に人は合理的なり」といふ類。循環證明。循環論證。

しゆんくわ-もん 春華門・春和門【名】平安城の內裏の外廓七門の一。內面せる三門中の最東、建禮門の左にあり。一名、白馬(アヲマ)陣・枇杷陣。

しゆんくわ-もんゐん 春華門院【名】〔人〕しようしないしんわう(昇子內親王)を見よ。

じゆん-げ 巡化【名】僧侶が巡廻して、說敎し、化導(ケダウ)すること。

じゆん-げ 順化【名】『世法に順ひて、死を示す義』僧侶の死去。順世。示寂。

しゆん-けい 春景【名】はるげしき。春光。

しゆん-けい 瞬頃【名】しゆんかん(瞬間)に同じ。

しゆん-けい 春慶【名】㊀〔人〕和泉國堺の漆工。後龜山天皇の御代の人。姓氏不詳。春慶塗を發明す。㊁〔人〕かさうとうしらう(加藤藤四郎)の號。㊂しゆんけいぬり(春慶塗)の略。㊃しゆんけいやき(春慶燒)の略。

じゆん-けい 閏刑【名】武家時代に、正刑に代へて行ひし刑罰。贖罪(シヨクザイ)・禁錮など、主として士人・有爵者又は僧徒・婦女・老幼・癈疾などに適用せしもの。

しゆん-げい 狻猊【名】〔動〕しし(獅子)㊀に同じ。

じゆん-けい 荀卿【名】〔人〕じゆんきやう(荀況)の敬稱。

じゆん-けい 楯形【名】〔植〕『英Pelta』葉片の圓形にして、その下面に葉柄の附著し、楯の如くなる形。

じゆん-けい 巡警【名】㊀巡廻して警戒すること。㊁支那の警察吏。我が國の巡査に當る。

しゆんけい-うるし 春慶漆【名】漆の一種。朱合漆と同樣にて、ただ油量多きもの。

じゆんけい-ちやう 順慶町【名】〔地〕大阪市西區に屬する町。新町遊廓の大門の正面なる東西の通路に當り、一丁目より五丁目まであり。古來夜店の賑を以て有名なり。一代男「宿に歸りて見るまでに遲し、順慶町の辻行燈に立忍び、讀めぬ事どもありける」

しゆんけい-ぬり 春慶塗【名】和泉國堺の漆工春慶が創めたる漆塗。檜材に少量の荏油を混じたる透明なる漆を用ひて、地の文の見ゆるやうに、淡黃褐色に塗るもの。春慶。

しゆんけい-やき 春慶燒【名】茶褐色の釉に、黃色の釉(ウハグスリ)を斑(マダラ)にかけたる磁器。尾張國瀨戶の陶祖加藤藤四郎(春慶と號す)の支那より歸りて創めしもの。その子二代藤四郎またその後を繼ぎて造れり。春慶。飛春慶。

じゆんけい-やく 準契約【名】〔法〕債權發生の原因たる事務管理及び不當利得の總稱。

じゆんけい-よさん 純計豫算【名】〔經〕歲出には歲入に關せざる支出のみを揭げ、歲入にはすべての支出を控除せる純收入のみを載する豫算。(總計豫算に對して)

じゆんけい-りう 順慶流【名】『筒井順慶の故事によりていふ』二心を抱くこと。

じゆんけい-るゐ 鶉鷄類【名】〔動〕鳥類分類上の一類。多くは山野・草原に棲み、體は肥大、嘴短く、翼は短小にして飛翔に適せず。爪よく發達し、地を掘り、蟲を探し、穀粒を食ふ。羽毛は雄美なり。「きじ」・「うづら」・「にはとり」等、これに屬す。にはとり類。搔撥(サウハツ)類。

しゆん-げう 春曉【名】春のあかつき。春のあけぼの。

じゆん-けう 殉敎【名】『敎に殉(ジユン)ふ義。じゆんこく(殉國)參照』宗敎のために、生命を犧牲にすること。

じゆんけう-しや 殉敎者【名】殉敎したる者。

じゆん-けうゐん 准敎員【名】小學校の敎員の一。本科正敎員を補助するもの。

しゆん-げざい 峻下劑【名】〔醫〕『英Drastic』下劑の一。激しく腸の粘膜を刺戟し、腹痛に伴ひて、反覆下痢を催さしむる程度のもの。(緩下劑・瀉下劑に對して)

しゆん-けつ 俊傑【名】衆に秀でたること、又その人。豪傑。俊豪。

しゆん-げつ 春月【名】㊀春の季節。㊁春の夜の月。

じゆん-けつ 純潔【名】㊀まじりけなく、いさぎよきこと。㊁慾念なく、心の極めて潔白なること。

じゆん-けつ 純血【名】動物の、同種の者の雌雄の間に生れたるもの。(混血に對して)

じゆん-げつ 旬月【名】㊀十日と一月と。㊁十箇月。㊂わづかばかりの日數。

じゆん-げつ 閏月【名】『書經の堯典篇に「以二閏月一定二四時一」とあり』うるふづき(閏月)に同じ。

しゆんげつ-しんたうするこでん 俊傑神稻水滸傳【名】〔書〕稻葉小僧・新刀德次郎など、義賊と唱へ、俠客と稱せしものの名を假りて、水滸傳風に綴りたる繪入讀本。全篇百五十冊。初篇より四編までの二十冊は、岳亭丘山の畫作。五編以後は、知足館松旭の畫作なり。

じゆんけつ-しゆ 純血種【名】純血なる種類。(雜種に對して)

じゆん-けつぞく 準血族【名】〔法〕『佛Parenté fictive』血緣の連絡なけれども、法の擬制によりて、血族と同一の親族關係を生ぜしむるもの。卽ち養子緣組に基く養子と養親、及びその血族との間の關係、父母の再婚によりて、繼父母と繼子との間に生ずる關係、及び庶の父子が妻を有することによりて、嫡母と庶子との間に生ずる關係の類。法定血族。

じゆん-げふ 巡業【名】巡回して興業すること。

しゆん-けん 峻險・峻嶮【名】けんしゆん(險峻)に同じ。

しゆん-けん 春暄【名】しゆんだん(春暖)に同じ。

しゆん-げん 俊彥【名】しゆんし(俊士)に同じ。

しゆん-げん 峻嚴【名】げんしゆん(嚴峻)に同じ。

じゆん-けん 巡見【名】巡回して見ること。みまはること。

じゆん-けん 巡檢【名】見まはりて取調ぶること。巡察。

じゆん-けん 順見【名】順順に見ること。甲陽軍鑑「懸川の城御順見遊ばし」

じゆん-げん 順現【名】〔佛〕じゆんげんごふ(順現業)の略。平家「業(ゴフ)に橫樣あり。順現・順生・順後業といへり」

じゆん-げんかうはん 準現行犯【名】〔法〕現に犯罪と認むるに足るべき狀況あるのみならず、現行犯と同じく速に處分するを要する事情により、現行犯と同一の手續處分をなすもの。例へば兇器・贓物その他の物件を携帶し、又は身體・被服に顯著なる犯罪の痕跡ありて、犯人と思料すべきものの類。

じゆんげん-ごふ 順現業【名】〔佛〕じゆんげんじゆごふ(順現受業)の略。

じゆんけん-し 巡檢使【名】鎌倉幕府の諸使の一。定時に、指定の國內を巡視し、民間の苦樂を察し、年の豐凶を檢することを掌りしもの。

じゆんけん-し 巡見使【名】江戶幕府時代に、臨時に設けし職名。諸國に派遣して、民政・風俗を察せしめたるもの。元和元年牧野正成を諸國に遣ししを初とし、爾來將軍一代每に、一度行はれしが如し。

じゆんげん-じゆごふ 順現受業【名】〔佛〕四業の一。現世にて行ひたる事の、現世にて果報を受くるもの。順現業。順現法受業(順生受業・順後受業・順不定受に對して)

じゆんけん-じゆんぷ 準絹準布【名】絹布に準じて、金錢を官に納むること。庭訓往來「準絹・準布濟例」

じゆんげんほふじゆ-ごふ 順現法受業【名】〔佛〕じゆんげんじゆごふ(順現受業)に同じ。

じゆん-こ 純乎・醇乎【貌】まじりなき貌。

しゆん-こう 竣功・竣工【名】『事功を竣(ヲ)ふる義』できあがること。成功。落成。

じゆん-こう 醇厚・淳厚【名】質朴にして、人情に厚きこと。敦厚。

じゆん-こう 准后【名】じゆごう(准后)に同じ。

しゆんこう-でん 春興殿【名】平安城の大內裏の殿舍の一。日華門の南、宣耀殿の右にあり、西面して、安福殿に對せり。

しゆん-こく 峻酷・峻刻【名】きびしきこと。峻烈。

しゆん-こく 瞬刻【名】しゆんかん(瞬間)に同じ。

じゆん-こく 純黑【名】まっくろ。

じゆん-こく 殉國【名】『國に殉(ジユン)ふ義。殉は身を以て、物に從ふ義』國のために身を殺すこと。

じゆん-こくしゆ 准國主【名】江戶時代の大名の、國持に次ぎしもの。

じゆんご-ごふ 順後業【名】〔佛〕次條の略。曾我「順罪業とて、生死報ありと、佛もこれを說きたまふ」

じゆんごじゆ-ごふ 順後受業【名】〔佛〕三業の一。現世に行ひたる事の、二生以後に果を受くるもの。順業次受業。(順現受業・順生受業に對して)

じゆんごじゆ-ごふ 順後受業【名】〔佛〕四業の一。果報を未來永遠の中に漸く受くべき因業(インゴフ)。順後業。(順現受業・順生受業・不定受業に對して)平家「業(ゴフ)に橫樣あり。順現・順生・順後業といへり」

じゆんごふじじゆ-ごふ 順業次受業【名】〔佛〕じゆんごじゆごふ(順後受業)に同じ。

じゆん-さ 巡査【名】警部の次に位する、判任待遇の警察官。おまはり。査公。

しゆん-さい 俊才【名】すぐれたる才智、又その才智ある人。英才。賢才。

しゆん-ざい 春材【名】〔植〕『英Springwood』春夏の間に生育せる、植物の木質部。秋材と共に、年輪をなす。卽ち年輪中の疎大なる部分。疎大なるは、材の成長の旺盛なる春期の發育に係るに因る。(秋材に對して)

じゆん-さい 旬歲【名】『漢書の翟方進傳に「方進旬歲間、免二兩司隸一」とありて、顏註に「旬、徧也、滿也、旬歲猶レ言二歲滿一也、若二十日之一周一」とあり』滿一年。

じゆん-さい 旬祭【名】『旬は十日間の義、この場合、漢音にて、淸音に讀む慣例なり』宮中の賢所(カシコドコロ)・神殿・皇靈殿の三殿にて、每月一日・十一日・二十一日の三回に行はせらるる祭典。

じゆん-さい 蓴菜・蓴【名】㊀〔植〕睡蓮(スヰレン)科に屬する多年生の草。葉は楯狀をなし、葉柄長く、莖は水中に沒し、若きものは粘液に纏はる。夏、紫紅色の花を葉腋に開き。池沼に自生す。葉は食用に供せらる。うきぬなは。ぬなは。ねぬなは。ぬなはくり。㊁他人の機嫌を見はからひて、言葉巧に、調子を合はすること。〔京都・大阪の語〕

(㊀じゆんさい)

蓴菜の羹(アツモノ)【句】『「鱸魚(ロギヨ)の膾(ナマス)」を見よ』支那晉の張翰、官に仕へて、遠國に赴任してありしが、秋風吹きそむる頃、故鄕の蓴菜の羹と鱸魚の膾とを思ひ出して、官をやめて歸りし故事。謠曲「國栖」「蓴菜の羹、鱸魚とても、これには、いかでまさるべき」

じゆん-さいごふ 順罪業【名】〔佛〕罪業の報が、順次にめぐり來ること。曾我「われらが父も、狩場の歸さに死にたれば、敵も、狩場の歸さは、定(ヂヤウ)のものなり。順罪業とて、生死、報有り」

じゆんさい-もの 蓴菜物【名】他人の機嫌を見はからひ、言葉たくみに、その人と調子を合はする人。〔京都・大阪の語〕

しゆん-さう 春草【名】春生ずる草。はるくさ。

しゆん-さく 峻削【貌】絕壁などの削りたるがごとく峻しきさま。

じゆん-さく 旬朔【名】㊀十日と朔月と。㊁『南史の謝靈運傳に「遨二遊山水一動踰二旬朔一」とあり』十日間。

じゆんさ-けうしふじよ 巡査敎習所【名】內務省に屬し、巡查に任用すべき者に必要なる學術を敎授せし所。明治十三年設置、同十四年廢せられたり。

じゆんさ-そうちやう 巡査總長【名】じゆん

さほんぶ(巡査本部)を見よ。

じゅんさ-ちやう 巡査長【名】じゅんさほんぶ(巡査本部)を見よ。

じゅん-さつ 巡察【名】㊀巡廻して、諸事を觀察すること。巡檢。巡視。㊁明治初年の彈正臺の職員。同二年に設置、同四年に彈正臺と共に廢止せらる。

じゅんさつ-し 巡察使【名】㊀諸國を巡察せし官使。㊁古、諸國を巡廻して、政務の善惡などを觀察しあるきし臨時の職。大同元年廢せられ、觀察使これに代れり。㊂明治二年岩代・三陸・兩羽に置きて、その地方の政績を巡察せしめたる職。その年の中に廢せらる。翌年又豐後國及び信濃國に設けられしも、程なく廢せられたり。

じゅんさつ-ぞく 巡察屬【名】明治初年の彈正臺の職員。巡察の下にありて、巡察と同樣の事を掌りし判任官。設置・廢止の年月も巡察に同じ。

じゅんさつ-だんじやう 巡察彈正【名】㊀古の彈正臺の職員。巡察して、非違を糺すことを掌りしもの。㊁明治初年の彈正臺の職員。府・藩・縣を巡察して、非違を糺彈することを掌りしもの。明治二年五月設置、同年七月に廢止せられたり。

じゅんさ-ぶちやう 巡査部長【名】㊀次條を見よ。㊁巡査の長として、部下の巡査を監督するもの。

じゅんさ-ほんぶ 巡査本部【名】もと警視廳内の一部として、巡査を管轄して、東京府下の警邏・査察の事を掌りし者。明治四年に設置、同十九年に廢止せられたり。職員は、初は巡査總長・巡査副總長・方面監督・巡査長・巡査副長・巡査部長・巡査とし、同十八年本部長・本部次長(以上警視)・本部員(警視・警部・警部補)とせり。

じゅんさほんぶ-ちやう 巡査本部長【名】前條を見よ。

しゅん-さん 春衫【名】春著る單衣。

しゅん-さん 春蠶【名】春孵化する蠶。はるご。

春蠶の絲を吐くが如し【句】『圖畫寶鑑に「憧之、博學有二才氣一、丹青亦造二其妙一、筆法如二春蠶吐一レ絲」とあるに本づく』畫筆の輕妙なる譬。

しゅん-ざん 峻山【名】けはしき山。峻嶽。

しゅん-ざん 春山【名】春の山。

春山笑ふが如し【句】春の山の藹藹として穩かなるさまを譬へたる語。

じゅん-さんぎ 准參議【名】古、四位の人にして、參議に准ぜられし者。

じゅん-さんぐう 准三宮【名】じゅさんぐう(准三宮)に同じ。

じゅん-さんこう 准三后【名】前條に同じ。

じゅん-さや 順鞘【名】〔商〕定期賣買にて、受渡の期日の近き物より遠き物の高きこと。さや(鞘)參照。

しゅん-し 春思【名】しゅんしん(春心)に同じ。

しゅん-し 俊士【名】㊀すぐれたる人。俊彥。髦士。俊髦。㊁中古、文章生(もんじやうしやう)の科試に應ぜる者の、成績やや優れたる者。また俊士の優秀なるを、秀才生と稱したり。弘仁十一年俊士五人を置きたれども、政途に益なきため、天長四年廢せられたり。

しゅん-じ 春時【名】㊀しゅんき(春期)に同じ。㊁播蒔の時節。

しゅん-じ 蠢爾【貌】㊀うごめくさま。蠢蠢。蠢然。㊁『詩經の小雅に「蠢爾蠻荊」とあり』蒙昧なるさま。

しゅん-じ 瞬時【名】しゅんかん(瞬間)に同じ。

じゅん-し 殉死【名】『じゅんこく(殉國)を見よ』主君の死にしあとを追ひて、自殺すること。おひばら。

じゅん-し 荀子【名】㊀〔人〕じゅんきやう(荀況)の敬稱。㊁〔書〕子夏の流を汲みて、聖人の道を述べたるもの。書中の非十二子及び性惡篇は後の學者の譏を招きたり。初め三百二十二篇ありしも、唐の楊倞(やうりやう)に至りて、二十卷三十二篇となす。

じゅん-し 旬試【名】「旬の試(し)」に同じ。

じゅん-し 巡視【名】巡回して視察すること。巡觀。巡察。

じゅん-じ 順次【名】㊀次第に順ひて爲すこと。じゅんぐり。じゅんじゅん。㊁〔佛〕この次の生。次生(じしやう)。著聞「順次の往生、まことに以てありがたきことなり」

しゅん-しう 俊秀【名】才智の秀でたること、又その人。

しゅん-しう 峻秀【名】山などけはしくして秀でたること。

しゅん-しう 春愁【名】春季に精神のふさぐこと。

しゅん-じう 春秋【名】㊀春と秋と。㊁『四季の内、春と秋とを以て、一年間を代表せしめていふ』よはひ。年齡。㊂〔書〕『年月・四季の順を追ひて記したるによりていふ』五經の一。孔子の筆刪(ひつさん)せしものといふ。魯の隱公より哀公までの十二公・二百四十二年間の事蹟を收め、褒貶の意を寓せり。(なほ春秋の名は、當時、魯國に限らず、周の春秋・燕の春秋・齊の春秋等ありきといふ) ㊃褒貶の意を寓したる歷史。㊄しゅんじうじだい(春秋時代)に同じ。

春秋盛んなり【句】『漢の書賈誼傳に「天子春秋鼎盛」とあり』壯年の頃なり。

春秋高し【句】『戰國策の秦國の條に「王之春秋高」とあり』齡つもりてあり。年老いてあり。春秋長ず。

春秋長ず【句】『漢書の劉澤傳に「太后春秋長」とあり』前條に同じ。

春秋富む【句】『史記の齊悼惠王世家に「皇帝春秋富、未レ能レ治二天下一」とあり』年いまだ若し。生先(おひさき)長し。

春秋に義戰無し【句】『孟子の盡心下篇に出づ』支那春秋時代の諸侯の間の戰爭は、皆各自の利益の爭より出でしものにて、王命に依りたるものなし。(諺語)

春秋に富む【句】「春秋富む」に同じ。晉家文集「君富二春秋一臣漸老」 蜀山人「春秋に富む士(さむらひ)の山なればいつもはたちの心地こそすれ」

春秋の五覇【句】支那にて、覇業をなしたる五人のもの。即ち齊の桓公・晉の文公・秦の穆公・宋の襄公・楚の莊王。以上は趙臺卿の說なれども、顏師古は齊の桓公・宋の襄公・晉の文公・秦の穆公・吳の夫差といひ、白虎通の一說には、齊の桓公・晉の文公・秦の穆公・楚の莊公・吳の闔閭(かふりよ)といひ、荀子には、齊の桓公・晉の文公・楚の莊公に勾踐(こうせん)・闔閭を加へて五伯とせり。

じゅん-しう 巡狩・巡守【名】じゅんしゅ(巡狩)に同じ。

しゅんじうあん-しらを 春秋庵白雄【名】〔人〕かやしらを(加舍白雄)に同じ。

じゅん-しうえき 純收益【名】じゅんえき(純益)に同じ。

しゅんじう-くやうでん 春秋公羊傳【名】〔書〕春秋㊂の事實を敷衍したるもの。十一卷。支那周の公羊高の著。

しゅんじう-こくりやうでん 春秋穀梁傳【名】〔書〕春秋㊂の事實を敷衍したるもの。十一卷。支那周の穀梁赤の著。

しゅんじう-さしでん 春秋左氏傳【名】〔書〕春秋㊂の事實を敷衍したるもの。三十卷。支那周の左丘明の著といふ。

しゅんじう-さんでん 春秋三傳【名】〔書〕春秋公羊傳・春秋穀梁傳・春秋左氏傳の併稱。春秋には、その他、夾氏・鄒氏の傳ありしが、漢末に亡失し、後、胡安國出でて、謂はゆる胡氏傳を作り、三傳と併せて、四傳と呼ばる。

しゅんじう-じだい 春秋時代【名】『ほぼ春秋㊂に記載せる年代なるよりいふ』支那周の王室東遷後、王權ますます衰へ、五覇互に興りて、諸侯の會盟を司りし時代。西曆前七二二年より同四八一年に亙る。せんごくじだい(戰國時代)參照。

しゅんじう-ぶん 春秋分【名】春分と秋分と。

じゅん-しくわん 准士官【名】士官と下士との間に位して、士官の待遇を受くる陸・海軍の判任武官。即ち陸軍にては特務曹長・上等工長・上等計手・上等看護長・軍樂長補、海軍にては上等兵曹・上等信號兵曹・軍樂師・船匠師・上等機關兵曹・看護師・上等筆記。

しゅんじ-じかう 瞬時時効【名】〔法〕正當に且つ公然に、動産の占有を始めし者が、善意に且つ過失なき時、即時にその動產の上に行使する權利を取得すること。即時時効。

じゅんじ-ごふ 順次業【名】〔佛〕じゅんじしやうごふ(順次生受業)の略。

じゅんじしやう-ごふ 順次生業【名】〔佛〕じゅんじしやうじゅごふ(順次生受業)に同じ。

じゅんじしやうじゅ-ごふ 順次生受業【名】〔佛〕じゅんしやうじゅごふ(順生受業)に同じ。

しゅん-じつ 春日【名】春の日。遲日。

春日遲遲【句】『詩經の豳風七月篇に「春日遲遲、采レ蘩祁祁」、又、同書の小雅出車篇に「春日遲遲、卉木萋萋、倉庚喈喈、采蘩祁祁」とあるに本づく』春の日ののんびりと麗(うら)しきさま。

じゅん-じつ 旬日【名】十日間。

じゅん-しはん 準私犯【名】〔法〕不法行爲の一。債權發生の一原因たる惡意に出でたるもの。

しゅん-しん 春心【名】㊀春らしき風情。春思。春意。春情。㊁いろけ。春情。

しゅん-しん 春信【名】春のたより。花信。

しゅん-じん 春盡【名】春のをはり。

じゅん-しん 純臣【名】純忠の臣。

じゅんしん-ゐん 淳信院【名】〔人〕とくがはいへもち(德川家茂)の諡。

しゅん-しや 春社【名】しやじつ(社日)を見よ。

しゅん-じやう 春情【名】しゅんしん(春心)に同じ。

じゅん-しやう 順生【名】〔佛〕次條の略。平家「業(ごふ)に樣樣あり。順現・順生・順後業といへり」

じゅんしやう-ごふ 順生業【名】〔佛〕次條の略。

じゅんしやうじゅ-ごふ 順生受業【名】〔佛〕四業の一。現世にて行ひたる事に對し、次の世にて、直ちに果報を受くるもの。順生業。順次生受業。生報。(順現受業・順後受業・順不定業に對して)

しゅんしやう-まきゑ 春正蒔繪【名】京都の蒔繪師山本春正、及びその子孫の製作したる蒔繪。傾城酒呑童子「本膳は春正蒔繪の價千金」

じゅん-しやく 巡爵【名】六位の藏人(くらうど)の極﨟(ごくらふ)にして、六年間勤續し、五位に敍せられたるもの。

じゅん-しやく 巡錫【名】『錫を巡(めぐ)らす義。錫杖を持ちて、遊行するよりいふ』僧侶の勸化(くわんげ)遊行(ゆぎやう)すること。けしやく(掛錫)參照。

しゅん-しゅ 春首【名】しゅんしよ(春初)に同じ。

しゅん-しゅ 春酒【名】春に釀したる酒。

しゅん-じゅ 春樹【名】春の樹。

春樹暮雲の情【句】『杜甫の春日憶二李白一詩に「白也詩無レ敵、飄然思不レ群、清新庾開府、俊逸鮑參軍、渭北春天樹、江東日暮雲、何時一樽酒、重與細論レ文」とあるに本づく』親友互に相思ふさま。

じゅん-しゅ 巡酒【名】酒を飲みまはすこと。太平記「毎日の巡酒を振舞はせけるに」

じゅん-しゅ 巡狩・巡守【名】『書經の舜典に「五載一巡狩」、孟子の梁惠王下篇に「天子適二諸國一曰二巡狩一、巡狩者、巡レ所レ守也」とあり』昔、支那にて、天子が諸侯の國を巡視せしこと。

じゅん-しゅ 遵守【名】まもりしたがふこと。

じゅん-しゅ 順守【名】『「逆に取りて、順に守る」を見よ』道理に從ひて守ること。

じゅん-しゅ 醇酒【名】味の濃き酒。まぜ物なきよき酒。

じゅん-じゅ 醇儒・純儒【名】『漢書の賈山傳に「涉二獵書記一、不レ能レ爲二醇儒一」、後漢書の鄭康成傳に「稱爲二純儒一」とあり』專ら儒道を修むる學者。

じゅん-じゅう 順從【名】じゅうじゅん(從順)に同じ。

じゅん-じゅく 純熟【名】全く熟(な)るること。平家「然れども交契忽ち純熟して」

じゅん-じゅく 順熟【名】順ひ熟(な)るること。やはらぎ睦むこと。新可笑記「男女の心中まままならぬは、これ惡緣にや。諸事順熟せざれども、疎み果て、古里へ送る程にもあらず」

しゅん-しゅん 蠢蠢【貌】㊀しゅんじ(蠢爾)に同じ。㊁『左傳の昭公二十三年の條に「今王室實蠢蠢焉」とあり』動き擾(みだ)るるさま。

しゅん-じゅん 逡巡・逡遁【名】『逡と巡と疊韻をなせる熟語。逡は巡に通ず』あとじさり。しりごみ。

じゅん-じゅん 純純・肫肫【貌】『中庸の第三十二章に「肫肫其仁」、莊子の山木篇に「純純常常、乃比二於狂一」とあり』懇にして誠なるさま。

じゅん-じゅん 諄諄【貌】ねんごろに說くさま。くどくど。

じゅん-じゅん 惇惇【貌】ねんごろなるさま。純厚なるさま。

じゅん-じゅん 恂恂【貌】まめやかなる貌。

じゅん-じゅん 啍啍【貌】智慧少なきさま。

じゅん-じゅん 醇醇【貌】自ら樂しむさま。

じゅん-じゅん 循循【貌】秩序あるさま。

じゅん-じゅん 畇畇【貌】柔和なるさま。

じゅんじゅん-じゅんくわんせうすう 純循環小數【名】〔數〕『英 Pure recurring decimal』小數點下第一の數字が循環節の第一位をなせる循環小數。(混循環小數に對して)

じゅんじゅん-に 順順に【副】じゅんに(順に)同じ。

しゅん-しよ 春初【名】春のはじめ。春首。

じゅん-じよ 順序【名】しだい。ついで。

じゅん-じよう 準繩【名】㊀準(みづもり)と繩(すみなは)と。「規矩準繩」 ㊁のり。てほん。規則。

しゅんじよう 俊芿【名】〔人〕律宗の學僧。京都泉涌(せんにゆう)寺の開祖。字は我禪、不可棄と號す。肥後國の人。建久十年宋に航して、留ること十二年、歸朝して京都仙遊寺に居る。高倉・後鳥羽・順德三上皇に崇敬せられ、勅に依り、仙遊寺を泉涌寺と改め、官寺に編入せらる。合律の中興と稱せらる。安貞元年寂す。年六十二。著書多し。

しゅんじよう-ばう 俊乘坊【名】〔人〕法然上人の弟子重源の坊號。

しゅん-しよく 春色【名】春げしき。春光。

じゅん-しよく 潤色・潤飾【名】㊀光澤を添ふること。美しく修飾すること。いろづけ。いろあげ。㊁事柄をつくろひ飾ること。

しゅんしよく-うめごよみ 春色梅曆【名】〔書〕江戶吉原の青樓唐琴屋の養子聟なりし丹次郎といふ好男子を中心とし、深川藝妓米八(よねはち)・同仇吉(あだきち)・唐琴屋の娘お蝶・同家抱の遊女此絲(このいと)などの競ひて、これに思を運ぶ趣を記したる人情本。十二冊。

じゅん-しよとく 純所得【名】總所得より租貢を差引きたる殘額。

じゅん-ず 殉ず【動佐變自】㊀殉死をなす。㊁その物事のために命を棄つ。

じゅん-ず 準ず【動佐變自】なずらふ。のっとる。よそふ。

じゅん-すず 純錫【名】鉛を雜へざる純粹の錫。しやり。唐錫。

しゅん-すゐ 春水【名】春季氷雪融けて流るる水。蕪村「春水や四條五條の橋の下」

しゅん-すゐ 春水【名】〔人〕ためながしゅんすゐ(爲永春水)を見よ。

じゅん-すゐ 純粹【名】㊀まじり物のなきこと。きっすゐ。㊁もっぱらなること。專一。純一。㊂まったきこと。完全。完備。

じゅんすゐ-けっさん 純粹決算【名】〔商〕へいげふけっさん(閉業決算)に同じ。

じゅんすゐ-しかう 純粹思考【名】〔哲〕しべん(思辨)㊀に同じ。

じゅん-せ 順世【名】じゅんけ(順化)に同じ。

しゅん-せい 春晴【名】春の日の晴れたる時。

じゅん-せい 旬政【名】じゅん(旬)㊀に同じ。

じゅん-せい 純正【名】㊀純粹にして正しきこと。㊁理論を專らとして、應用に及ばざること。

じゅん-せい 順正【名】順序正しきこと。

じゅん-せい 準正【名】〔法〕『佛 Légitimation』庶子又は私生子に、嫡出子と同等の身分を與ふること。即ち庶子又は私生子が嫡出子と同一の身分を取得すること。我が民法にては、庶子又は私生子の父母が結婚し、認知することによりて生ず。準嫡。

じゅんせい-きかがく 純正幾何學【名】〔數〕『英 Pure geometry』そうがふきかがく(綜合幾何學)に同じ。

じゅんせい-くわかうがん 純正花崗岩【名】〔鑛〕じゅんくわかうがん(純花崗岩)に同じ。

じゅんせい-くわがく 純正科學【名】經驗科學に對して、經驗を混ぜざる科學。即ち數學及び自然科學の類。

じゅんせい-けいざいがく 純正經濟學

【名】〔法〕『英 Theoretical economy』經濟的現象に關する理論を考究する科學。理論經濟學。(應用經濟・理論經濟學に對して)

じゅん-せいさん 準清算【名】〔商〕會社が事業に著手せる後、その設立が無効又は取消となりたる時、解散に準じてなす清算。

じゅんせい-しやくわいしゅぎ 純正社會主義【名】〔法〕『英 Pure socialism』社會主義の一派。佛國人サンシモン(S. Simon)の創設にして、世界の平和・人類の幸福を增進せしむるために、產業的國家なる新社會を現出するを以て理想とするもの。

しゅんぜい-ただのり 俊成忠度【名】謠曲の一。岡部六彌太、平忠度を討ちて後、その自筆の短册を見出し、これを携へて、俊成の許に至りしに、忠度の靈あらはれて、千載集に作者の名をあらはさざりし妄執を述べ、修羅道の苦患(クゲン)を現ずることを作れるもの。古名、五條忠度。

じゅんせい-てう 純正調【名】〔音〕『英 Just intonation』理論上、完全なる方法に由りて構成せられたる樂音の調子。

じゅんせい-てつがく 純正哲學【名】『英 Pure philosophy』實在に關する究極問題の體系的攻究。形而上學。本體哲學。超物理學。

じゅんせい-びじゅつ 純正美術【名】〔美〕じいうげいじゅつ(自由藝術)に同じ。

しゅん-せう 春宵【名】はるの夜。春夜。

春宵一刻直(アタヒ)千金【句】『蘇軾の春夜と題する詩に「春宵一刻直千金、花有₂淸香₁月有レ陰、歌管樓臺人寂寂、鞦韆院落夜沈沈」とあるに本づく』春の夜を賞すること。

じゅん-せう 巡哨【名】巡回して、敵を見張ること。

じゅん-せうすう 純小數【名】〔數〕『英 Pure decimal』小數のみより成る數。(帶小數に對して)

しゅん-せつ 浚渫【名】泥土をさらひて深くすること。

しゅん-せつ 峻節【名】けだかき節操。

しゅん-せつ 春雪【名】春に降る雪。

しゅんせつ-き 浚渫機【名】『英 Dredger』河底・港灣などを浚渫するに用ふる機。蒸氣力によりて廻轉せしめ、人力の及ばざる水底を掘りて、任意の深さに至らしむる機械。汲揚(クミアゲ)式・掘揚(ホリアゲ)式・吸揚(スヒアゲ)式・杓揚(シヤクアゲ)式の四種あり。

じゅん-せっしやう 准攝政【名】古、陛下の御幼稚その他の故障のため、政務・儀式の中の或部分を、攝政に准じて行ふべき宣旨を下されし者。一定の職名にあらず。

しゅんせつ-せん 浚渫船【名】『英 Dredger』浚渫機を裝置したる船。

じゅん-せったう 準竊盜【名】〔法〕他人の占有に屬し、又は公務所の命によりて、他人の看守せる自己の所有物を竊取する行爲。竊盜を以て論ぜらる。

しゅん-ぜん 春前【名】春のはじめ。はるさき。

しゅん-ぜん 蠢然【貌】しゅんじ(蠢爾)に同じ。

じゅん-ぜん 純然【貌】㊀純粹なるさま。純乎。㊁全く同一なるさま。

じゅん-せんいう 準占有【名】〔法〕『英 Quasi possession』權利の占有、卽ち自己のためにする意思にして、財產權の行使をなすこと。財產權につきてのみあるものにして、占有の規定を準用せらる。

じゅんせんいう-しや 準占有者【名】〔法〕準占有をなせる者。

じゅん-せんしう 准撰修【名】せんしう(撰修)㊁を見よ。

しゅん-そ 春蔬【名】春に生成せる蔬菜。

じゅん-そ 淳素【名】質朴にしてつくりかざりのなきこと。淳朴。素朴。

じゅん-そ 筍蔬【名】『筍(タケノコ)と蔬菜との類を食し、肉食せざる義』佛家の生活。「筍蔬の氣を帶ぶ」

じゅん-そうにん 准奏任【名】奏任官にあらずして、奏任官と同一の待遇を受くるもの。奏任官待遇。

じゅんそう-びん 順送便【名】郵便物遞送の一。始點局より遞送人を繼立て、順次その極端局に送るもの。

しゅんそう-らうわ 春湊浪話【名】〔書〕歷史・物語・諸藝の考證及び雜事を記したる隨筆。二卷。土肥經平の撰。

しゅん-そく 瞬息【名】『一回まだたきをなし、また呼吸する義』次條に同じ。

瞬息の間【句】しゅんかん(瞬間)に同じ。

しゅん-そく 駿足【名】しゅんば(駿馬)に同じ。

じゅん-そく 準則【名】或行爲をなすに當りて準據すること、又その準據すべき法則。のっとるべき規則。

じゅん-ぞく 醇俗【名】㊀醇朴なる風俗。㊁佳醇と卑俗と。

じゅんそく-しゅぎ 準則主義【名】〔法〕『獨 System der Normativbedingungen』法人の設立に關し、豫め一定の準據すべき法則を設け置き、設立者がこの條件に從ひて、意思を表示すれば、これが成立を認むる主義。個個の設立ごとに法律を發布し、勅許を仰ぎ、又は行政官廳の許可を受けしむる等の煩を避くるためのものにて、特許主義・免許主義に比すれば寬大なれど、自由主義に比すれば嚴正なり。

じゅん-そつ 准卒【名】海軍にて、艦船に限りて傭役せしもの。卽ち割烹夫・造麵夫・裁縫手・造靴手等の類。明治十八年廢せらる。

じゅん-そん 順孫【名】『漢書の黄霸傳に「貞婦・順孫」とあり』孫のよく祖父に事ふること。

しゅん-だい 春臺【名】次條を見よ。

春臺の戲(タハムレ)【句】『淸嘉錄に「二三月間、里豪・市俠搭₂臺曠野₁、釀レ錢演レ戲、男婦聚觀、謂₂之春臺戲₁、以祈₂農祥₁」とあり』古、支那の農村にて、春、豐作を祈るために行ひし芝居。春さきの村芝居。

しゅんだい 春臺【名】〔人〕だざいしゅんだい(太宰春臺)を見よ。

じゅん-だいじん 准大臣【名】古、勳勞ある大納言を、大臣に擧げんとすれども、闕官なき場合に、暫く大臣の祿を賜ひて、內大臣の次に列せしめ、大方は政務に與らしめずして優待せられし者。儀同三司。

じゅんたい-ゑん 潤體圓【名】元氣を補ふに用ひし古の藥。下學集「潤體圓」

じゅん-たう 筍刀【名】たかうながたな(筍刀)に同じ。

じゅん-たう 順當【名】道理に順ひて適當せること。

じゅん-だう 順道【名】㊀順當なる道路。順路。盛衰記「又順道なり、且は祇の京入なればとて」㊁順當なる道理。曾月の舞鳥「御菩提を弔ひたてまつるこそ順道とも申すべけれ」

じゅんたう-き 巡島記【名】〔書〕あさひなじゅんたうき(朝夷巡島記)の略。

じゅん-たく 潤澤【名】㊀うるほひ。つや。㊁ゆたかなること。澤山。「生產潤澤」㊂まうけ。利潤。

じゅん-たつ 順達【名】廻狀などを順順に送達すること。

じゅん-だて 順立【名】順序を定むること。

しゅん-だん 春暖・春煖【名】春の暖かなる時候。春暄。

じゅん-ち 馴致【名】㊀なじましむること。㊁漸を逐ひて、或狀態に至らしむること。

じゅん-ちやく 準嫡【名】〔法〕じゅんせい(準正)に同じ。

じゅん-ちゅう 純忠【名】私慾なき純粹の忠義。誠忠。

じゅん-ちよくさいしや 准勅祭社【名】明治元年東京に都を奠(サダ)め給ひし時、勅使を派して、幣帛を賜ひし十二社。卽ち日枝神社・根津神社・神田神社・芝神明社・龜戸天神社・白山神社・品川神社・富岡八幡宮・氷川神社・王子神社・鷲(ワシ)神社・總社六所神社。

しゅんてい-くわ 春庭花【名】〔音〕しゅんていらく(春庭樂)に同じ。

じゅんてい-くわんおん 準胝觀音【名】〔佛〕『準胝は淸淨と譯し、心性の淸淨を讃嘆せる稱。音は、觀の字の韻に引かれて、ノンと發音す』六觀音の一。三面・十六臂を有し、未敷(ミフ)蓮華を三昧耶形(サンマヤ)とするもの。六觀音を六道に配する中、主として、人道の衆生を濟度すといふ。

しゅんてい-し 春庭子【名】〔音〕しゅんていらく(春庭樂)に同じ。

じゅんてい-ほふ 準胝法【名】〔佛〕準胝觀音を本尊として祈禱する修法。

しゅんてい-らく 春庭樂【名】〔音〕かふうらく(夏風樂)に同じ。

しゅん-てう 春潮【名】春のうしほ。

じゅん-てう 順潮【名】㊀『元史の張弘範傳に「李恆等順レ潮而退」とあり』うしほに從ふこと。潮流に逆はざること。㊁物事の調子よく進むこと。

じゅん-てき 順適【名】㊀したがひかなふこと。氣に入るやうにすること。迎合すること。㊁〔商〕『英 Favourable』じゅんがはせ(順爲替)を見よ。

順適の爲替(カハセ)【句】〔商〕じゅんがはせ(順爲替)に同じ。

じゅん-てき 準的【名】まと。標準。

じゅん-てつ 純鐵【名】まじり物なき鐵。

しゅん-てん 春天【名】春のそら。春空。

じゅん-てん 順天【名】天道に順ふこと。

じゅん-てん 順轉【名】したてまはし(下手廻)に同じ。

しゅんてん-わう 舜天王【名】〔人〕琉球の國王。初名は尊敦。父は源爲朝、母は同國島尻大里按司の妹なりと傳ふ。國王天孫氏の二十五世の時、權臣利勇位を簒ひて自立す、尊敦これを討ち、衆望を負ひて、文治三年卽位す。在位五十一年。

しゅん-どう 蠢動【名】㊀蟲などのうごめくこと。物のむくむくと動くこと。㊁無智の者の騷ぐこと。

しゅん-どう 俊童【名】才智のすぐれたる小僮。神童。

じゅん-とう 閏統【名】正統にあらざる系統。

じゅん-とう 順痘【名】症の善き疱瘡。

じゅん-とう 準等【名】㊀なぞらへひとしくすること。㊁相當なる等級。

じゅん-どう 純銅【名】まじり物なき銅。

じゅん-どう 準同【名】ひとしきこと。

じゅん-とうぐわい 準等外【名】等外に準ずる官吏。

しゅん-とく 俊德【名】すぐれて高き德。大德。

じゅん-とく 潤德【名】まうけ。利潤。

じゅん-とく 順德【名】『易經の升卦象傳に「君子以順レ德、積レ小以高レ大」とあり』すなほなる德。

じゅんとく-てんわう 順德天皇【名】〔人〕第八十四代の天皇。御名は守成(モリナリ)。後鳥羽天皇第二の皇子。御母は修明門院藤原重子。在位十一年(紀元一八七一年―一八八一年)。承久の亂後、佐渡國に遷され、仁治三年同國にて崩ず。壽四十六。

しゅんとく-まる 俊德丸【名】〔人〕しんとくまる(信德丸)を見よ。

じゅんとくゐん-ごしふ 順德院御集【名】〔書〕順德天皇の御製の歌集。一名、紫禁和歌草。

じゅん-とひや 準問屋【名】〔法〕自己の名を以て、他人のために、販賣又は買入にあらざる行爲をなすを業とする者。

じゅん-とんすう 純噸數【名】とうきじゅんとんすう(登記純噸數)の略。

しゅん-とめ しゅん止【名】あかざめ(淦止)を見よ。

じゅんな-しやうがく-りやうゐん-の-べったう 淳和奬學兩院別當【名】じゅんわしやうがくりやうゐんのべったう(淳和奬學兩院別當)を見よ。

じゅんな-てんわう 淳和天皇【名】〔人〕じゅんわてんわう(淳和天皇)を見よ。

じゅん-なん 殉難【名】『じゅんこく(殉國)を見よ』國家の危難に殉ずること。國難にしたがひ死すること。

じゅんな-ゐん 淳和院【名】じゅんわゐん(淳和院)を見よ。

じゅん-に 順に【副】順を追ひて。次第次第に。順番に。順順に。

じゅんにん-てんわう 淳仁天皇【名】〔人〕第四十七代の天皇。御名は大炊(オホヒ)。舍人(トネリ)親王の御子。御母は大夫人山背(ヤマシロ)。在位六年(紀元一四一九年―一四二四年)。のち淡路に流され、淡路の廢帝といふ。天平神護元年崩ず。壽三十三。

じゅん-ねん 閏年【名】うるふどし(閏年)に同じ。

じゅん-ねん 旬年【名】十箇年。十年。

じゅん-の-おまりぶぎやう 旬御鞠奉行【名】鎌倉時代に、旬の鞠の當日、その事を奉行せし役。殿上人・北條家の一族及び奉行の中、その技に巧なる人の中にて選拔任命せられたり。「旬(シュン)の鞠」參照。

じゅん-の-し 旬の試【句】じゅん(旬)の條下を見よ。

じゅん-の-まり 旬の鞠【句】じゅん(旬)の條下を見よ。

じゅん-の-みねいり 順の峰入【句】じゅん(順)の條下を見よ。

じゅん-の-わ 順の輪【名】じゅん(順)の條下を見よ。

しゅん-ば 駿馬【名】すぐれてよく走る馬。よき馬。しゅんめ。駿足。駿逸。

駿馬、癡漢を駄(ノ)せて走る【句】君臣・夫婦などの配遇宜しきを得ざるに譬へていふ語。〔諺語〕

駿馬の骨を買はずやある【句】『死馬の骨を買ふ」を見よ』淸少納言の年老い零落してありし家の前を、年若き殿上人數多同車して通行し、これを嘲りしに、少納言、簾を掻上げ、現れ出でて答へきといふ語。(古事談に見ゆ)

じゅん-ぱい 巡拜【名】神社・佛閣をへめぐりて、禮拜すること。

しゅん-ぱい 春葩【名】春の花。

じゅん-ぱい 順盃【名】宴席にて、盃を順に廻すこと。

しゅん-ぱう 春坊【名】㊀太子の宮殿。㊁とうぐうばう(東宮坊)の唐名。㊂春の神の宮。

しゅん-ぱう 俊髦【名】『髦は長き髮の義。秀でたるに譬へていふ』ひいでたる人。俊士。髦士。

じゅん-ぱう 詢訪【名】とひ尋ぬること。

じゅん-ぱう 巡方【名】㊀石帶(セキタイ)に飾る、四角なる玉又は石。ずんぱう。㊁次條の略。

巡方の帶【句】いしのおび(石帶)を見よ。增鏡「俊定・經繼などは、巡方の帶をさしたり」

じゅん-はうくわざい 準放火罪【名】〔法〕火藥・汽罐等の如きものを爆發せしめて、放火の目的物となるものを損壞すること。

じゅん-ぱく 純白【名】まじりけのなき白色。ましろ。

じゅん-はくねつでんとう 準白熱電燈【名】『英 Nernst lamp』アルカリ土類の稀有(ケウ)金屬にて造れる圓棒に電流を通じて、之を發せしむるもの。一燭光につき、一・八ワットの電力を要し、約三百時間の使用に堪ふ。ねるんすとらんぷ。

じゅん-はちしやうしやく 巡八聖跡【名】〔佛〕天竺にて、釋尊誕生の地、得道轉法輪の地、入涅槃の地など、八相に關係ある舊跡を參詣しあるくこと。わが邦の巡禮も、これに倣へるなりといふ。

しゅん-ぱつ 峻拔【名】山などのけはしく聳ゆること。

しゅん-ぱつ 俊拔【名】性質のすぐれてあること。

しゅん-はづれ 旬外【名】野菜・魚類などのその季節にはづれてあること。味おほかた佳ならず。時候ばづれ。

じゅん-ぱふ 皴法【名】〔美〕皴(シュン)によりて、山の岩石の紋理をあらはす法。

じゅんぱふ-しよぶん 準法處分【名】〔法〕さいけつしよぶん(裁決處分)に同じ。

しゅん-ばん 春盤【名】ほうらいかざり(蓬萊飾)に同じ。

しゅん-ぱん 峻坂・峻阪【名】けはしき坂。險坂。

しゅん-ぱん 春半【名】春のなかば。

じゅん-ぱん 準飯【名】〔兵〕砲架の前後に裝置して、方向照準を定むるに用ふる具。

じゅん-ばん 順番【名】順を追ひて、事に當ること、又その順序。巡儀。

じゅん-はんざい 準犯罪【名】〔法〕惡意に基かざる不法行爲。

じゅん-はんにん 準判任【名】判任官にあらずして、判任官と同一の待遇を受くるもの。判任官待遇。

じゅん-び 準備【名】目的に副ふやうに設備をなすこと。そなへ。ようい。支度。

じゅん-び 淳美・醇美【名】㊀『晉書に「播₂醇美之化₁杜₂邪枉之路₁」とあり』あつく美しきこと。㊁すなほにして美しきこと。㊂味の濃厚にしてうるはしきこと。

じゅん-び 純美【名】㊀まじりけなく美しきこと。㊁〔哲〕『英 Beauty』美的情操のみを惹起さしむる美。(壯美に對して)

じゅんび-きん 準備金【名】將來の必要に應ぜんために積立ておく金。

じゅんび-しよめん 準備書面【名】〔法〕『獨

Vorbereitende Schriftstück』合議裁判所における民事訴訟の當事者が、相互に口頭辯論に於て申し立てんとする事項を、豫め裁判所及び相手方に知らしめ、審理を進捗せしめんがために作る一切の書面、卽ち訴狀・證據書類の寫、その他答辯書等を含む。

じゅん-びつ 潤筆【名】『筆を潤(ウル)す義』他人の、書畫など書くことの敬稱。

じゅんびつ-れう 潤筆料【名】潤筆を賴みたる謝禮金。揮毫料。

じゅんび-てつづき 準備手續【名】㈠準備のためになす手續。㈡〔法〕受訴裁判所が、受命判事に本案の辯論及び判決の準備をなさしむる手續。

しゅん-ぴよう 春氷【名】春の氷。

春氷を渉る【句】『書經の君牙篇に「心之憂危、若下蹈二虎尾一涉中于春氷上」とあるに本づく』危險なる譬。〔諺語〕

じゅん-ぶ 巡撫【名】㈠巡行して、人民を撫綏(ブスヰ)すること。㈡支那明・清時代の各省の行政長官。明代には總督又は提督これを兼ね、清代には、總督は一省もしくは二省ごとに一人、巡撫は省ごとに一人なりしが、のち總督一人にて、二省を管轄する場合には、總督駐在の巡撫の事務は、總督これを兼ぬることに改められたり。

じゅん-ぷ 準布【名】奈良朝より平安朝に涉りて行はれし估價方法の一。物の價を、布に準じて換算せしこと。

しゅん-ぷう 春風【名】はるかぜ。

春風・春水一時に來る【句】『白居易の律府西池と題する詩に「柳無二氣力一枝先動、池有二波紋一氷盡開、今日不レ知誰計會、春風春水一時來」とあり』風も水も一時に春めき來る。

春風の中(ウチ)に坐するが如し【句】『宋名臣言行錄に「朱光庭見二明道先生於汝州一歸語レ人曰、某在二春風中一坐了一月」とあるに本づく』春風は物を生育するものなるが故に、弟子が師に從ひて、益を受くるさまを譬へていふ語。〔諺語〕

じゅん-ぷう 順風【名】おひかぜ。おひて。(逆風に對して)

順風の帆懸船(ホカケブネ)【句】物事の思ふままに進み行くさまの譬。得手(エテ)に帆。

じゅん-ぷう 淳風・醇風【名】醇厚の風俗。

淳風・美俗【句】淳美なる風俗。

しゅん-ぷく 春服【名】春著る衣服。はるぎ。春衣。

じゅん-ぷく 順服【名】すなほに服すること。

じゅん-ぷく 馴服【名】『史記の秦紀に「鳥獸多馴服」とあり』馴れ服すること。

じゅん-ぷく 巡覆【名】『覆は二度も三度も審かに察する義』じゅんさつ(巡察)に同じ。

じゅん-ぷしる 準麩汁【名】麩になぞらへて、茄子を入れたる味噌汁なりといふ。

じゅんぷぢやう-ごふ 順不定業【名】〔佛〕次條に同じ。

じゅんぷぢやうじゅ-ごふ 順不定受業【名】〔佛〕四業の一。現世にて行ひたる事の、いづれの生(シヤウ)に果報を受くべきか定まらぬもの。順不定業。(順現受業・順生受業・順後受業に對して)

しゅん-ぶん 春分【名】〔天〕二十四氣の一。太陽が春分點にある時。今は、大抵三月二十一二日頃にて、秋分におけると同じく、この日、太陽は正東より上り、正西に入るため、晝夜等分にして、且つ太陽は地球の赤道を直射す。(秋分に對して)

じゅん-ぶん 純分【名】金・銀貨又は地金の中に含める金・銀の分量。

じゅん-ぶんがく 純文學【名】〔文〕『英Pure literature』純粹の文學、卽ち人の感情に訴ふる美しき思想を表出したる文學。詩歌・戲曲・小說など。これらを科學的に說明・批評するをも文學といひ、また多少讀者の趣味に訴へたる論說・歷史の類も、廣義に解すれば、文學の一部とせらるるものあるによりて、特に區別していふ。

じゅんぶん-こうさ 純分公差【名】貨幣の公差の一。法定の貨幣の純分と、實際に鑄造する貨幣の純分との差違。本來は二者差違なき筈なるも、實際に於ては、鑄造技術如何により、僅少の差違あるを免れざるが故に、我が國貨幣法に於ては、本位貨金貨は千分の一、補助貨銅貨は千分の三を純分公差と定む。

しゅんぶん-てん 春分點【名】〔天〕『英Vernal point 又 Vernal equinox』天球上における、黃道と赤道との交點にして、太陽が南半球より北半球に移動するに際し、通過する點。(夏至點・秋分點・冬至點に對して)

しゅん-ふらん 花芥【名】〔植〕油菜の一種。根葉は羽狀に深く裂け、各裂片にまた羽狀の細かき缺刻あり、梢葉は缺刻少なし。ちりめんな。

しゅん-べつ 峻別【名】かっきりと區別すること。

じゅん-ぼ 准母【名】㈠天皇の御母に准ぜらるる資格。內親王に多く、稀には中宮にもあり、皇后又は女院の稱を賜はんがために、この資格を與へられしなり。㈡皇親の御母に准ずること。

しゅん-ぽう 峻峰・峻峯【名】けはしく高き山。

じゅん-ぽう 遵奉【名】したがひ奉ずること。したがひ守ること。

しゅん-ぼく 瞬目【名】しゅんもく(瞬目)に同じ。太平記「滅亡を瞬目の中に得たる」

じゅん-ぼく 淳朴・醇朴【名】すなほにしてかざりけのなきこと。淳素。素朴。

じゅん-ほけんれう 純保險料【名】〔商〕『英Pure premium』保險金支拂の原因たる事故發生の平均率に基きて、純粹に計算せられたる保險料。

じゅん-ほんゐせい 純本位制【名】〔經〕『獨Reinen währung』單本位制の一。無制限法貨たる本位貨幣のみを用ひて、他に法貨を有せざるもの。單一法貨制。

しゅん-まい 俊邁【名】するどくすぐれたること、又その人。英邁。

しゅん-まく 瞬膜【名】〔動〕『英Nictitating membrane』多くの脊椎動物に存する眼の保護器官。眼瞼の內側に存せる半透明の膜にして、上下兩眼瞼の間に伸展して、眼球の前面を被ふを得。鳥類・爬蟲類・無尾兩棲類等に最もよく發育し、哺乳類これに次ぎ、魚類にありては、鮫類に存するのみ。人類のは、上部の眼瞼速かに運動して、眼球の前面を拭ふがために、眼の內角に痕跡を存するのみ。第三眼瞼。

じゅん-み 醇味【名】まじりけなく濃厚なる味。

しゅん-みん 春眠【名】はるのねむり。

春眠、曉を覺えず【句】『孟浩然の春曉の詩に「春眠不レ覺レ曉、處處聞二啼鳥一夜來風雨聲、花落知多少」とあるに本づく』春の寢心地よきさまをいふ語。

じゅん-みん 順民【名】敎化に從ふ民。良民。

しゅん-む 春夢【名】㈠春の夜夢。㈡人生のはかなきさまを譬へていふ語。

しゅんむ-さう 春夢草【名】〔書〕牡丹花肖柏の歌集。三卷。

しゅん-め 駿馬【名】しゅんば(駿馬)に同じ。

しゅん-めい 峻命【名】㈠きびしき命令。嚴命。㈡くんめい(君命)の敬稱。

じゅんめい-くわん 惇明館【名】丹波國天田郡福知山町にありし舊福知山藩の學校。天明中藩主朽木鋪綱創立し、明治四年に閉鎖す。

じゅんめい-ふ 惇明府【名】日獨戰役記念のために、その戰利品、又は戰死者の寫眞等を藏めたまへる宮城內の御府庫。

しゅんめい-ゐん 浚明院【名】〔人〕とくがはいへはる(德川家治)の諡(オクリナ)。

しゅん-も 俊茂【名】才學のすぐれたること、又その人。俊才。茂才。

しゅん-もく 瞬目【名】㈠めばたきをすること。㈡一回めばたきするほどの僅かの時間。瞬間。

じゅん-もん 詢問【名】たづね問ふこと。

じゅん-もんぜき 准門跡【名】門跡にあらずして、門跡の待遇を受くる寺格。後柏原天皇、本願寺第九世光兼の獻金に對して光兼にこの資格を與へられしに始まり、東西兩本願の外、眞宗諸派の本山たる興正寺・專修寺・佛光寺・錦織寺の四箇寺も、この資格を授けられたり。脇門跡。

しゅん-や 春夜【名】はるの夜。春宵。

しゅん-やう 春陽【名】㈠春の日かげ。㈡しゅんじつ(春日)に同じ。

じゅん-やう 遵養【名】世につれて、勢を養ふこと。

じゅん-やう 馴養【名】ならし養ふこと。

じゅんやう-かん 巡洋艦【名】『英Cruiser』軍艦の一種。速力と航續力とを主なる要素とし、專ら偵察の任務に當りて、主戰艦隊の耳目となり、時に敵の運送船・商船を捕獲して、敵國の商業を妨ぐるを目的とす。我が國にては、その噸數に應じて、一等・二等・三等に分ち、裝甲の有無によりて、裝甲巡洋艦・非裝甲巡洋艦に分つ。

じゅん-やうし 順養子【名】弟に兄の後を繼がせ、兄の子に又その後を繼がするなどの類。

しゅん-よ 餕餘【名】『餕は食ひ殘しの義』くひあまし。くひのこし。

じゅん-よ 筍輿【名】竹にて造りたるこし。竹輿。

じゅん-よ 旬餘【名】一旬よりあまれること。十日あまり。

じゅん-よ 閏餘【名】暦面の一年の時日より、實際の一年の時日の方多きこと。うるふのあまり。

しゅん-よう 春容【名】春の景色。春景。春光。

じゅん-よう 遵用【名】したがひもちふること。

じゅん-よう 準用【名】或規定を標準として、他の類似せるものに適用すること。

じゅん-ら 巡邏【名】㈠巡行して偵察すること、又その人。㈡江戶時代、尊王攘夷の說行はれて、世情穩かならざる際、設置せられ、市中巡廻・警衞の任に當りし者。邏卒・巡查の前身なり。

しゅん-らい 春雷【名】春の雷鳴。太平記「春雷一たび動く時、蟄蟲萌蘇する心地し」

じゅん-らう 醇醪【名】まじりけなく濃厚なるにごり酒。

しゅん-らん 春嵐【名】春の山氣。

しゅん-らん 春蘭【名】〔植〕蘭科に屬する常綠・多年生の草。高さ七八寸、葉は狹くして長く、春、根際より花莖を抽き、莖頭に淡黃綠色にして、六片の花蓋より成る不整齊の一花を著く。山地の樹陰に自生し、又、觀賞用として栽培す。地下莖は藥用となり、花を鹽漬とし、櫻湯の如くにして飮用することあり。古來、四君子の一に數へらる。くさらん。はくり。ほくろ。

じゅん-らん 巡覽【名】みめぐること。みまはり。巡見。回覽。

じゅん-り 巡吏【名】㈠巡回する吏員。㈡海軍省の造船所に屬して、巡警に從事せし等外吏。明治九年設置、一等乃至四等の階級ありしが、同十七年廢止せられたり。

じゅん-り 循吏【名】循良なる官吏。

じゅん-り 醇醨【名】㈠酒の濃厚なると淡泊なると。㈡人情の淳良なると輕浮なると。

じゅん-り 純利【名】じゅんえき(純益)に同じ。

じゅん-り 純理【名】經驗を交へずして、專ら理論にのみ依ること。

しゅん-りう 春柳【名】春のやなぎ。

じゅん-りう 順流【名】水の地勢にしたがひて流るること、又水の流るるに連れて下りゆくこと。

じゅん-りし 純利子【名】〔經〕『獨Reinenzins』資本の使用料なる利子。(總利子に對して)

しゅん-りつ 恂慄【名】おそれをののくこと。

じゅん-りつ 準率【名】準據すべき割合。

じゅん-りん 純林【名】一種類の樹木のみより成れる林。單純林。(混林に對して)

じゅん-りやう 純良【名】純粹にして、善良なること。

じゅん-りやう 循良・順良【名】道理に循ひて、善良なること、又その人。すなほ。

じゅん-りやう 馴良【名】馴れて善良なること。

じゅん-りやう 淳良【名】淳厚にして善良なること。

じゅんり-ろん 純理論【名】〔哲〕『英Rationalism』㈠吾人の知識は、感覺のみによりて發生するものにあらず、吾人の先天的に付與せられたる理性の純然たる作用によりて生ずるものにして、理性は知識の淵源なりと主張する說。合理說。主理說。唯理說。理性論。(感覺論に對して)㈡認識論上、吾人は先天的に合理的なる概念を有し、その他の諸概念はそれより演繹的に抽出し得る者なりとする說。合理說。主理說。唯理說。理性論。(經驗論に對して)ひはんろん(批判論)參照。㈢普通の論理上の規定と研究法とを宗敎上の事項に適用して、その正否を決定すべきものとし、吾人の理性を以て、合理的に說明し得ざる者は、妄想なりとして排斥する主義。合理說。主理說。唯理說。理性論。

しゅん-れい 峻嶺【名】けはしきたうげ。

しゅん-れい 峻厲【名】人の性質のするどくはげしきこと。

じゅん-れい 醇醴【名】まじりけなく濃厚なる酒。醇酒。

じゅん-れい 準例【名】標準とすべき例。

じゅん-れい 順禮【名】㈠『國語に「君補二王闕一以順レ禮也」とあり』人が禮儀に從ふこと。㈡諸方の社寺を禮拜しあるくこと、又その人。「巡禮」著聞「竹生(チク)島へ參りたりけり。巡禮果てて、今は歸りなんとしける時」平家「瀧口入道を先達にて、堂塔順禮して、奧の院へぞ參られける」㈢さいこくじゅんれい(西國巡禮)の略。〔巡禮〕

(じゅんれい㈢)

じゅんれい-がるた 巡禮骨牌【名】骨牌の一種。札に歌舞伎役者の巡禮姿を描きたるもの。

じゅんれい-すがた 巡禮姿・順禮姿【名】巡禮のいでたち。平假名盛衰記「運ぶ步の巡禮姿、背に國名をおひずるの」

じゅんれい-みち 巡禮道・順禮道【名】巡禮すべき道。巡禮してあるく道。

じゅんれい-やど 巡禮宿・順禮宿【名】巡禮の人を宿泊せしむる木賃宿。

じゅん-れき 巡歷【名】へめぐること。遍歷。

しゅん-れつ 峻烈【名】きびしくはげしきこと。酷烈。

じゅん-れつ 順列【名】〔數〕『英Permutation』數多の物の中より或箇數だけ選びて、種種の順序に二列に列ぶること。例へば、a・b・c の中より二箇づつ取りたる順列の數は ab,bc,ac,ca,cb,ba の六種なる類。相異なる n 箇の物より r 箇づつ取りたる順列の數を示すに、通例 nPr を以てす。

しゅん-ろ 峻路【名】けはしき路。

しゅん-ろ 春露【名】春のつゆ。

じゅん-ろ 順路【名】㈠順序よき路筋。順道。㈡道理に順ふこと。順道。

じゅん-ろく 馴鹿【名】〔動〕となかい(馴鹿)に同じ。

じゅんわ-しやうがくりやうゐん-の-べつたう 淳和獎學兩院別當【名】『和は、淳の字の韻に引かれて、ナと發音す』淳和院・獎學院の二つの別當を兼ぬること。兩院は源氏の公卿の第一たるもの宣旨を蒙りて、之に補せられ、その人、納言の時は兩院を兼ね、大臣に昇る時は、淳和院別當を源氏の次位のものに讓るを例とせり。中院雅定大臣に昇るに及びて、尙兩院の別當を兼ねしより、子孫之を襲ひ、源氏長者と稱せしが、足利義滿源氏たるの故を以て、兩院別當と稱し、爾後足利歷代の將軍これを襲ひ、德川氏また源氏たるの故を以て、代代兩院の別當を兼ぬるを例とし、恰も將軍幹授の官號の觀をなすに至れり。

じゅんわ-てんわう 淳和天皇【名】〔人〕『和は、淳の字の韻に引かれて、ナと發音す』第五十三代の天皇。御名は大伴、また日本根子天高譲彌遠(ヤマトネコアメノタカユヅルイヤトホ)天皇。桓武天皇の第三皇子、御母は贈皇太后藤原旅子(タビコ)。在位十年(紀元一四八四年—一四九三年)。承和七年淳和院に崩ず。御年五十五。西院(サイ)の帝。

じゅんわ-ゐん 淳和院【名】『和は、淳の字の韻に引かれて、ナと發音す』淳和天皇の天長年中造營せられたる離宮。平安京四條の北、西大宮の西にありしより西院とも稱す。貞觀中火災に罹りて燒失し、元慶中勅して、同院を寺とし、諸國の莊園を寄附せしより、始めて別當を置き、源氏にして公卿の上首たるもの、主に補せられたり。

じゅん-ゐ 閏位【名】『閏は閏月の義より轉じて、剩餘の意に用ふ』正統にあらざる天子の位。

じゅん-ゐ 順位【名】㈠順序を追ひたる地位。㈡〔法〕民法上、權利者の地位を占むべき順序。

じゅん-ゐ 准尉【名】大正八年に設けられたる陸軍の少尉相當官。陸軍各兵科の特務曹長の年功者中より選拔し、士官學校に於て、短期の教育を經て任ぜられたるもの。同九年廢せらる。
じゅん-ゐんけ 准院家【名】院家に准ぜらるる資格の寺院。例へば聖光院の類。
しゅん-ゑ 俊惠【名】〔人〕歌僧。源俊頼の子。京都の人。歌學に長じ、歌苑鈔を著す。鴨長明はその門人なり。
しゅんをく 春屋【名】〔人〕㊀めうは(妙葩)を見よ。㊁そうゑん(宗園)を見よ。
しゅ-め 主馬【名】しゅめれう(主馬寮)の略。
しゅ-めい 主命【名】主人の命令。しゅうめい。君のいひつけ。
しゅ-めい 朱明【名】『樂雅に「夏爲二朱明一」とありて、註に「氣赤而光明」と見ゆ』しゅか(朱夏)に同じ。(立英・青陽・白龍に對して)
じゅ-めい 受命【名】㊀命令を受くること。㊁天命を受くること。「受命創制の君主」
じゅめい-さいばんくわん 受命裁判官【名】〔法〕合議裁判所の部員たる裁判官が、その裁判所の指命によりて、單獨に特定の訴訟行爲をなす時の稱。
じゅめい-しんぱんくわん 受命審判官【名】〔法〕海員審判所の審判官が、審判長より下調の命を受けて、證據調・訊問等をなす時の稱。
じゅめい-はんじ 受命判事【名】〔法〕特に、一定の事項に就きて、裁判所より調査を命ぜられたる判事。
しゅめい-もん 修明門【名】内裏外郭七門の一。内裏の南、建禮門の右にあり。うまのぢん。すめいもん。
しゅめい-もんゐん 修明門院【名】〔人〕すめいもんゐん(修明門院)に同じ。
しゅめ-しょ 主馬署【名】古、春宮(トウグウ)坊に屬し、首(カミ)・令史(サクワン)・馬部(メ)・使部・直丁(ヂキチョウ)の職員ありて、東宮の御馬の事を掌りし役所。首は、後世、馬寮(レウ)の助に兼任せしめ又は重代の侍を任ずる例となりたり。しゅめのつかさ。
しゅめ-の-かみ 主馬頭【名】主馬寮の長官。
しゅめ-の-つかさ 主馬署【名】しゅめしょ(主馬署)に同じ。
しゅめ-の-はうぐわん 主馬判官【名】主馬署の判官。平家「主馬判官盛國」
しゅめ-れう 主馬寮【名】㊀宮内省の舊制度における諸寮の一。頭(カミ)・助(スケ)・權助(ゴンノスケ)(以上奏任)・屬・御者・馬醫の職員ありて、馬匹の調習・飼養、車駕及び乘具の事を掌りし所。明治十九年設置。權頭は頭無き時、權助は助無き時に置かれしもの。㊁宮内省の一部局。頭(カミ)(勅任)・主事・車馬監・調馬師・馬醫師(以上奏任)・馬醫(判任)・技師(奏任)・技手(判任)・調馬手專任・馭手專任・掌車・蹄鐵工長(以上准判任)の職員ありて、馬匹・車輛及び牧場に關する事務を掌る。
しゅ-も 主喪【名】葬儀の主任。
しゅ-もく 種目【名】種種の名目。
しゅ-もく 撞木【名】㊀たたきがねを叩くもの。木にて作り、丁字形をなす。かねたたき。㊁釣鐘を撞く棒。
じゅ-もく 樹木【名】たちき。き。
しゅもく-がた 撞木形【名】撞木の如き形。丁字形。
しゅもく-がひ 撞木貝・丁字貝【名】〔動〕斧足(フソク)類に屬する軟體動物。介殻は、丁字形をなし、外面は灰白色又は黒色、内面は白色。内海に産す。
しゅもく-ざめ 撞木鮫・雙髻鮫・犂頭魚【名】〔動〕鮫の一種。全身灰色にして、形極めて大きく、長さ一二丈に達し、頭部撞木狀をなす。その兩端に眼あり。脊鰭は二基に分れ、前部のは大きく、後部のは小さし。八九月頃胎生し、一胎よく三四十尾を産む。分布廣く、駿海に産す。かせぶか。しゅもくぶか。しもくざめ。

(しゅもくざめ)

しゅもく-しだ 撞木羊齒・【名】〔植〕水龍骨(スヰリュウコツ)科に屬する多年生の草。山地に自生し、莖は地下の根莖より叢生し、短くして、一回羽狀複葉をなし、葉脚に近き部分に、左右各一小枝を分ち、同じく一回羽狀複葉をなす。じふもんじしだ。
しゅもく-ぞり 撞木反【名】相撲(スマフ)の手の一。雙方立上るや、相手の手先を取りながら、首を脇に入れて胸に附け、片手にて、高股を内より掬ひて、後へそり返すこと。じふもんじだすき。
しゅもく-づゑ 撞木杖【名】頭の撞木の形をなしたる杖。かせづゑ。
しゅもく-ぶか 撞木鱶【名】〔動〕しゅもくざめ(撞木鮫)に同じ。
じゅもく-やく 樹木役【名】樹木に課する賦役。
しゅ-もつ 腫物【名】腫瘍又は炎症のために、身體の一部に發生して、潮紅・腫脹・熱・痛等を伴ひ、膿を含めるもの。はれもの。できもの。おでき。
しゅ-もん 手紋【名】手のひらのあや。手理。
しゅ-もん 朱門【名】㊀朱にて塗りたる門。㊁しゅをく(朱屋)㊁に同じ。
しゅ-もん 守門【名】門を守ること。
じゅ-もん 儒門【名】儒者の家。
じゅ-もん 呪文・咒文【名】まじなひに唱ふる文句。
じゅ-もん 誦文【名】呪文を讀誦すること。枕草紙「鼻ひて、誦文する人」
しゅもん-てん 守門天【名】〔佛〕寺院の守護として、その門に安置する持國天と增長天と。この二天は、共に四天王に屬し、持國天は東方の天にして、東は四方の最初に呼ばるるより、四天王を代表せしめ、增長天は南方の天なれば、吾人の住する世界なる南洲守護の意にて置くといふ。
しゅ-やう 腫瘍【名】〔醫〕身體の生育に不要なる、異常なる新生增殖物。組織は健康部のと同一なることあり、同一ならざることあり、また癌腫・肉腫のごとく、患者の生命に關する惡性のものと、ただその增大のために、周圍の組織壓迫せらるるに止まり、外科的に除去すれば、多くは再發せざる善性のものとあり。
しゅやう-さん 首陽山【名】〔地〕支那山西省蒲洲府の府城の南三十淸里にある山。伯夷・叔齊の隱れしによりて有名なり。秀女五枚羽子板「章甫の冠を沓に履かれんより、首陽山に蕨餅を練り、汨羅に沈んで、江魚の腹中に葬られんには如かじ」
しゅやう-ぢやう 種羊場【名】緬羊(メンヤウ)の飼養・蕃殖を掌る官衙(クワンガ)。北海道空知(ソラチ)郡瀧川町に在り。場長・技師・技手の職員を置く。
しゅ-やく 主藥【名】〔醫〕『獨 Hauptmittel』各種の調劑中、主たる効果を現すべき成分。
しゅ-やく 主鑰【名】内藏寮の職員の一。寮の物品の出納(スヰタフ)を掌りしもの。大主鑰・少主鑰の二等に分れたり。
じゅ-やくしや 受約者【名】契約に應じたる者。
しゅや-じん 守夜神【名】〔佛〕『梵 Vasanta-vayanti(婆珊婆演底)の譯語』佛陀守護の神。俗に夜間を守る神とし、惡夢の禁厭(キンエ)に效ありといふ。
しゅ-やり 朱槍【名】柄を朱塗にせる槍。醒睡笑「二間半柄の朱槍二十本ばかり持ちたる中間(チュウゲン)どもの」
しゅ-ゆ 茱萸【名】〔植〕さんしゅゆ(山茱萸)・ごしゅゆ(呉茱萸)などの總稱。
しゅ-ゆ 須臾【副】少しの間。しばらく。しばし。暫時。
しゅゆ-ちや 茱萸茶【名】支那にて、重陽の節に茱萸(シユ)を佩び、菊花の酒を飲む古俗あるより、禪林これに倣ひて、酒の代りに飲む茶。ぐみやち。
じゅゆ-ど 受用土【名】〔佛〕『報身如來の受用したまふ淨土なりとていふ』ほうど(報土)に同じ。
しゅ-よ 手輿【名】たごし(手輿)に同じ。
じゅ-よ 入輿【名】貴人の嫁入。こしいれ。
じゅ-よ 授與【名】授け與ふること。
しゅ-よう 主用【名】㊀主人の用事。しゅうよう。㊁主要なる用事。
じゅ-よう 需用【名】じゅえう(需要)に同じ。
しゅよう-し 主鷹司【名】古、兵部省に屬し、正(カ)・令史(サクワン)及び使部・直丁(ヂキチョウ)の職員ありて、鷹・犬を調習し、遊獵に供することを掌りし役所。鷹戸若干これに附屬したり。天平寶字八年に一旦廢止、延暦十五年に再び設置、貞觀以後は、藏人所(クラウドコロ)にて、その職掌を扱ふこととなれり。

しゅ-よく 手浴【名】〔醫〕一部浴の一。手部のみ浸し浴するもの。これに冷手浴・温手浴の二種あり。(座浴・足浴等に對して)
じゅよ-けいさん 授與計算【名】〔商〕外國爲替の仕拂に於て、外國の貨幣を以て計算すること。
しゅら 修羅【名】㊀〔佛〕あしゅら(阿修羅)の略。太平記「修羅、帝釋(タイシャク)の軍に負けて、藕花(グウクワ)の穴に身を隱し」謠曲(蟹)「執心卸來の修羅の妄執、去っていく(行く・生く)田の名にしおへり」㊁しゅらぐるま(修羅車)の略。㊂石を載する船。ひらた。㊃森林にて伐採したる木材を搬出するに、數本の丸太を並べて、半月形の溝路を作り、これを接續延長して、木材の自重により、滑り落つるやうにする裝置。㊄しゅらば(修羅場)の略。
修羅闘爭【句】〔佛〕㊀阿修羅族が互に闘戰して、血を流すこと。㊁悲慘なる戰闘の狀を、修羅の戰場に譬へていふ語。
修羅の軍(サ)【句】〔佛〕阿修羅王の帝釋(タイシャク)天と合戰する軍兵。
修羅の巷(チマタ)【句】〔佛〕しゅらぢやう(修羅場)に同じ。
修羅を燃す【句】『阿修羅が猜忌嫉妬の念強く、執著心深きよりいふ』心をいらたす。
しゅら-あふぎ 修羅扇【名】『阿修羅王、手にて、日輪を覆へりといふ故事に本づきていふとぞ』日の丸と月の丸とを畫きし扇。驚筑波集「日月は手にも握るやしゅら扇」
しゅ-らい 修禮【名】儀式の下稽古。
しゅ-らい 集禮【名】諸雜費。雜用。勘定。〔元祿頃の大阪の語〕
しゅ-らい 主禮【名】弔問の使を接待する役。
しゅ-らい 周禮【名】〔書〕支那周代の官制を記したるもの。古くは周官といひ、漢の劉歆(キン)に至りて、始めて周禮と稱す。周公旦の制作と傳ふれども信ずべからず。秦の焚書の後、漢の文帝の時に至り、之を獲たれども、冬官一篇を缺く、即ち考工記を以て、補ひて、六篇とす。しうらい。
じゅ-らい 入來【名】來り訪ふことの敬語。おいり。おいで。光來。
しゅらい-ごみ 集禮込【名】集禮をこめること。集禮ぐるみ。異實伊勢物語「かくれなき姉妹のしやれもの、どちらなりともお目つき次第に、泊は集禮ごみに五百づつといふ」
しゅらい-せん 集禮錢【名】諸色の代金。
しゅらい-た 修羅板【名】船筏を造るために、小船を幾艘も幷べて、その上に敷く板。
しゅ-らう 朱廊【名】朱にて塗りたる廊。
しゅ-らう 壽老【名】壽命の長きこと、又その人。ながいき。
じゅ-らう 入牢【名】牢屋に入ること。にふらう。入獄。
じゅらう-じん 壽老人【名】長壽を授くる神。長頭の老人の杖を携へ、玄鹿を伴へるを像とす。福祿壽と同體異名の神にして、古くは福祿壽ありて、この神なしともいひ、また福祿壽の像を長頭に作るは、この神のを誤れるなりともいふ。
しゅら-かい 修羅界【名】〔佛〕しゅらだう(修羅道)に同じ。
じゅら-き 侏羅紀【名】〔地〕『英 Jurassic period この時代に生じたる地層は、佛蘭西とスヰスとの境なるジュラ(Jura)山脈の露出につきて研究せられしによりて名づく』地質時代中、中世代の中部なる一時期。三疊紀の上、白堊紀の下に位す。じゅらけい(侏羅系)參照。
じゅ-らく 壽樂【名】長壽と安樂と。
じゅ-らく 入洛【名】貴人の都に入ること。京都入。みやこいり。
じゅらく-ごしょ 聚樂御所【名】次條に同じ。
じゅらく-だい 聚樂第【名】豐臣秀吉が、京都の、東は大宮通より、西は千本通(センボンドホリ)まで、北は一條より、南は二條までの間の地に營みし第宅。天正十四年春より著手して、同十五年九月落成、秀吉大阪より移り住み、同十六年四月後陽成天皇の行幸あり。秀次關白職を襲ぐと同時に、又ここに住み、その自刃の後廢毀す。聚樂御所。
しゅら-くつ 修羅窟【名】〔佛〕阿修羅王の住める石窟。或は海岸・海底或は深山・幽谷に在りといひ、淸辯菩薩は安達羅國の修羅窟に入りて、彌勒(ミロク)の出世を待つと傳へらる。阿修羅宮。しゃうべん(淸辯)參照。太平記「淸辯菩薩は、青山の岩を劈き、修羅窟に入りたまひけり」
じゅらく-やき 聚樂燒【名】らくやき(樂燒)に同じ。
しゅら-ぐるま 修羅車【名】『阿修羅王の帝釋(タイシャク)と戰ひて、これを動かしきといふより、大石(タイシャク)を、帝釋にかけて呼べるもの』大石・大木などを運搬する車。
じゅら-けい 侏羅系【名】〔地〕『英 Jurassic system じゅらき(侏羅紀)を見よ』地質系統の一。地質時代中の侏羅紀の生成に係る地層の總稱。岩石は石灰石・砂岩・泥板岩等、植物は松柏科・蘇鐵科・羊齒(シ)科の物多く、動物は珊瑚・軟體動物などにて、始祖鳥もこの系統中に始めて發見せらる。
じゅら-しゅ 修羅趣【名】〔佛〕次條に同じ。
しゅら-だう 修羅道【名】〔佛〕六道の一。阿修羅族の居る世界。闘諍を事とすといふ。修羅趣、また十界の一としては、修羅界といふ。太平記「或は餓鬼道の苦を生きながら受け、或は修羅道の奴と死せざる前になりぬらん、と歎かぬ人はなかりけり」
しゅら-ぢやう 修羅場【名】〔佛〕㊀阿修羅王の帝釋(タイシャク)天と合戰する場所。㊁多人數の爭闘する悲慘なる場所。修羅の巷(チマタ)。しゅらば。
しゅら-でたち 修羅出立【名】死して修羅道へ行かんとする身仕度。佃城反魂香「思ふ願が叶はずば、西所河原か舟岡へ直ぐに飛ばうと思ふ氣で、私がための修羅出立」
しゅら-ば 修羅場【名】㊀〔佛〕しゅらぢやう(修羅場)に同じ。㊁芝居又は講釋などにて、戰闘或は烈しき闘爭の場面。あれば。
しゅ-らん 酒亂【名】酒に醉ひて、荒れ狂ふこと。さかきちがひ。さかぐるひ。酒狂。
しゅ-らん 朱欄【名】朱塗の欄干。
しゅ-らん 朱蘭【名】〔植〕しらん(紫蘭)に同じ。
しゅ-り 修理【名】㊀しうぜん(修繕)に同じ。著聞「堂を修理しけるに」㊁しゅりしき(修理職)の略。謠曲隅田川「木工・修理の兩棟梁、大紋の露結びあげ」
しゅ-り 手裡・手裏【名】手のうち。掌中。手中。
しゅ-り 手理【名】しゅもん(手紋)に同じ。
しゅ-り 主吏【名】おもなる官吏。
しゅ-り 主理【名】㊀陸軍裁判所及び海軍裁判所の職員として、今の陸軍軍法會議における理事、海軍軍法會議における主理と同樣の事を掌りしもの。大・中・少の三等に分れたり。陸・海軍ともに明治五年に設置、同十五年に廢止せられたり。㊁海軍軍法會議の一員として、事件の豫審をなし、及び會議に列りて、その意見書の趣意を説明し、判決書に署名・捺印(ナツイン)するを主なる職務とする奏任文官。
しゅ-り 侏離【名】『後漢書の南蠻傳に「語言侏離」とありて、註に「侏離蠻夷語聲」とあり』野蠻人の語聲を形容していふ語。言語を異にして、意味通ぜざること。
しゅ-り 首里【名】〔地〕琉球沖繩島にある區。那覇區の東一里半弱にあり。もと琉球王尙氏の城地にて、第六師團分營あり。
じゅ-り 豎吏【名】小役人。胥吏。
じゅ-り 受理【名】受附けて處理すること。
しゅり-うきゅうじやうし 修理右宮城使【名】しゅりばうじやうし(修理坊城使)を見よ。
しゅり-うばうじやうし 修理右坊城使【名】しゅりばうじやうし(修理坊城使)を見よ。
しゅりえんな『梵 Suddhi-panthaka』【名】〔佛〕『妙乘と譯す』ぶっけう(佛敎)の美稱。
しゅり-きゅうじやうし 修理宮城使【名】しゅりばうじやうし(修理坊城使)を見よ。
しゅり-けん 手裏劍【名】手にて敵に投げつくる、長さ一尺前後の刀。穗先を我が方に向け、柄の方を敵に向けて、掌中に置き、拇指にて鋒(ホコ)を押へ、敵を目がけて擲げば、穗先翻り飛びて、敵を刺す。
しゅり-さきゅうじやうし 修理左宮城使

【名】じゆりばうじやうし(修理坊城使)を見よ。
しゆり-さばうじやう-し　修理左坊城使【名】じゆりばうじやうし(修理坊城使)を見よ。
しゆり-しき　修理職【名】古、大夫(ダイフ)・權大夫・亮(スケ)・大少進(ジヨウ)・屬(サカン)・史生(シシヤウ)・算師の職員ありて、宮城等の營繕を掌りし役所。令外(リヤウゲ)の官なり。をさめつくるつかさ。
しゆり-せつ　主理說【名】〔哲〕じゆんりろん(純理論)に同じ。
じゆ-りつ　樹立【名】㊀眞直に立つこと。眞直に立つること。㊁心定りて、世に立つこと。意志の確乎たること。㊂君主をもり立つること。
しゆり-の-だいぶ　修理大夫【名】修理職の長官。
しゆり-ばうじやう-し　修理坊城使【名】王朝時代に、修理職以外に設置せられ、宮城の外郭左右の防城を修理することを掌りし令外(リヤウゲ)の役所。修理左坊城使と修理右坊城使とに分れ、各、長官一人、判官一人、主典等の職員を置く。仁壽二年木工(モク)寮に併せられしが、貞觀十五年舊に復し、延久三年更に修理宮城設置ありて、同じく左・右に分れ、修理坊城使に准ぜしめられ、爾來、修理職の補助となりたり。
しゆり-はんどく　周利槃特(梵Suddhi-panthaka Ksudra-panthaka又Culla-patka)【名】〔人〕『淨路邊生又は小路と譯す』古の印度の僧。釋迦の弟子の中にて、第一の鈍者なりしが、忽然大悟して、阿羅漢果を得、後世、十六羅漢及び五百羅漢の一に列す。方丈記「住家(スミカ)は淨名居士の跡をけがせりといへども、持(タモ)つ所はわづかに周利槃特が行にだに及ばず」
しゆり-べつたう　修理別當【名】熊野・石清水(イハシミヅ)等の大社に在りて、神社の修理を專務とする社僧。
しゆ-りん　朱輪【名】朱塗の輪。
しゆ-りん　殊倫【名】㊀なみはづれてすぐれたること。㊁類を異にすること。
じゆ-りん　儒林【名】儒者の仲間。
じゆりん-らう　儒林郎【名】正九位上の唐名。
しゆ-りやう　首領【名】㊀首(クビ)と領(エリ)と。くび。㊁一團隊をなせる人人の中のかしら。おほあたま。領袖。頭首。頭目。[主領] 謠曲(善界)「天狗の首領」
首領を保つ【句】『左傳の隱公三年の條に「若以二大夫之靈一得下保二首領一以沒上」とあり』首を斬られずに濟む。
しゆ-りやう　銖錙【名】㊀はかり目の銖、卽ち二分五厘と錙卽ち二十四銖と。㊁些細なる量。錙銖。
しゆ-りやう　酒量【名】飮酒の分量。飮量。
じゆ-りやう　受領【名】㊀受けをさむること。㊁『國司の交替の際、國守が國衙の吏務を受領する義』古、地方諸國の政務を總掌せし者。諸國の長官。主としては守(カミ)なれども、守が遙任なる場合には、權守(ゴンノカミ)また大介(オホスケ)をもいふ。親王を國守として、太守と稱する上總・上野・常陸の三國の介(スケ)をもいひ、又それらの官職に任ぜらるることもいへり。ずりやう。ずらう。盛衰記「子息仲綱受領して、伊豆國知行し、丹波には五箇の庄給はりて」
受領の擧(キヨ)【句】古、縣召除目(アガタメシノヂモク)の時、公卿をして、諸國受領の人を推擧せしめしこと。公卿の擧。建武年中行事「受領の擧あり」
じゆ-りやう　鷲嶺【名】〔地〕りやうじゆせん(靈鷲山)に同じ。著聞「釋迦如來天竺に出でたまひけり。鷲嶺に月隱れ、鶴林に烟盡きて、一千四百八十年に當りて」
じゆりやう-しや　受領者【名】受領せる人。じゆりやうにん。
じゆりやう-しよ　受領書【名】次條に同じ。
じゆりやう-しよう　受領證【名】受領せる證據の書付。受領書。受領證書。
じゆりやう-しようしよ　受領證書【名】前條に同じ。
じゆりやう-しようへう　受領證票【名】受領せる證據として交付する證票。
じゆりやう-しよく　受領職【名】『じゆりやう(受領)㊁を見よ』德川時代に、官の許を得て、肥後守・武藏守もしくは略して肥後・武藏などの名目を、自己の稱呼として用ひしこと。長町女腹切「下立賣(シモタチウリ)を堀河へ引廻したる角(スミ)屋敷、刀屋石見何某とて、諸役御免の受領職」
じゆりやう-にん　受領人【名】じゆりやうしや(受領者)に同じ。
じゆりやう-ぼん　壽量品【名】〔書〕詳しくは「如來壽量品」といふ。法華經二十八品中の第十六品。釋迦如來の、久遠(クヲン)の昔すでに成佛して、その壽量無數・無量・不可思議なるを說く。これを開迹(カイジヤク)顯本と稱し、一經中ここに始めて八相成道の垂迹(スイジヤク)の化身(ケシン)を開きて、久遠實成(ジツジヤウ)の本身を顯せるなり。しようれつは(勝劣派)參照。太平記「六の卷の紐を解きて、壽量品を讀み」
じゆりやす-れき　ジユリヤス曆【名】次條に同じ。
じゆりやん-れき　ジユリヤン曆(英Julian calender)【名】太陽曆の一。羅馬のジユリヤス、シイザア(Julius Cæsar)が命じて作らしめし曆。卽ち平年を三百六十五日とし、四年目ごとに一日を加へて、閏年とするもの。グレゴリイ曆に後るること十二日、現時、希臘・露西亞の兩國にて採用せり。けえざる曆。じゆりやす曆。
しゆ-りよ　首虜【名】敵の首と捕虜と。
しゆりようごん-きやう　首楞嚴經【名】〔書〕『首楞嚴は梵Śūraṅgama(新譯には首楞伽摩と記す)健相・健行・一切事竟と譯し、佛所得の三昧をいふ』詳しくは「大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經」といふ。唐の般剌密帝の譯。十卷。祕密部に屬す。徒然「首楞嚴經を講じて那蘭陀寺と號す」
しゆりようごん-ゐん　首楞嚴院【名】比叡山橫川(ヨカハ)にある寺院。
しゆ-りよく　主力【名】おもなる力。中樞なる力。
しゆ-りよく　酒力【名】酒に醉ひて、豪氣の生ずること。
しゆ-りよく　朱綠【名】朱と綠と。
じゆ-りよく　呪力・兜力【名】まじなひの力。太平記「呪力を以て、水瓶の中に籠(コ)籠めて」
しゆり-ろん　主理論【名】〔哲〕じゆんりろん(純理論)に同じ。
しゆ-るゐ　種類【名】たぐひ。しな。種屬。
しゆ-るゐ　殊類【名】特殊なる種類。
しゆるゐ-いにふぜい　酒類移入稅【名】臺灣の地方稅たる營業稅の一。販賣の目的を以て、內地より移入したる酒類に、石數に應じて課する月稅。
しゆるゐ-がいねん　種類概念【名】〔哲〕個體概念の綜合によりてなれる概念。例へば、机・本箱・椅子等を含める家具なる概念の如し。この概念は多くの經驗を重ね、事物に對して、種種の判斷を下す間に、自然に形作らる。(個體概念に對して)
しゆるゐ-さいむ　種類債務【名】〔法〕債務の目的物が、種類のみを以て指示せられたる債務。例へば米百俵といひて、いづれの米なるかを定めざる類。不特定物の債務。
しゆるゐ-ざうこくぜい　酒類造石稅【名】酒造稅則施行前、卽ち明治二十九年まで北海道に行はれし稅。造酒の石高に應じて納めたるもの。
しゆるゐ-せいざうしや　酒類製造者【名】酒類製造の免許を受けし者。
しゆ-れい　主鈴【名】古、中務(ナカツカサ)省に屬し、少納言の命令を受けて、鈴印・傳符・飛驛の函鈴などを出納することを掌りし役。大主鈴・少主鈴の二等に分れたり。すずのつかさ。
しゆ-れい　守令【名】郡守と縣令と。
しゆ-れい　酒令【名】酒客が戲に設くる、飮酒上の規則。
しゆ-れい　酒禮【名】酒宴の儀を整ふること。
しゆ-れい　酒醴【名】酒とあまざけと。
じゆ-れい　壽齡【名】ながいき。長命。
しゆ-れう　衆寮【名】寺にて、所化(シヨケ)どもの居る部屋。奧の細道「秋風を聞きて衆寮に臥せば、曙の空近う讀經の聲澄むままに」
しゆ-れふ　狩獵【名】鳥獸を獵すること。かり。
しゆれふ-きよく　主獵局【名】しゆれふれう(主獵寮)の舊稱。
しゆれふきよく-ちやう　主獵局長【名】主獵局の長官、卽ち現時の主獵頭(カミ)に當るもの。
しゆれふ-くわん　主獵官【名】主獵寮に屬して、狩獵のことを掌る高等官。

しゆれふ-けん　狩獵權【名】〔法〕狩獵免狀を受けたる者の狩獵をなし得る權利。
しゆれふ-じだい　狩獵時代【名】〔經〕ぎよれふじだい(漁獵時代)に同じ。
しゆれふ-の-かみ　主獵頭【名】主獵寮の長官。勅任官とす。
しゆれふ-はふ　狩獵法【名】獵具・獵法・狩獵免許・鳥獸保護及び罰則等を規定せる法律。
しゆれふ-めんきよぜい　狩獵免許稅【名】狩獵免狀を受くる者の納むべき免許稅。本人及びその家族の所得稅・地租・營業稅等の多少に依りて、三等に區別せらる。
しゆれふ-めんじやう　狩獵免狀【名】狩獵の免許狀。本人の出願に對し、地方長官下付す。甲乙兩種に分たれ、前者は銃器を使用せざる者、後者はこれを使用する者に下付す。銃獵免狀。
しゆれふ-れう　主獵寮【名】宮內省の一部局。頭(カミ)・主事・主獵官・獵場監守長・獵場監守・鷹匠長等の職員ありて、狩獵及び獵場に關する事務を掌る所。舊稱、主獵局、又その長官を主獵局長といへり。
しゆ-れん　珠簾【名】㊀珠玉にて飾りたるすだれ。玉簾。㊁すだれ(簾)の美稱。
しゆ-れん　手練【名】業に手馴れて、巧みなること。練磨のてぎは。
しゆ-れん　修練【名】しうれん(修練)に同じ。
しゆ-れん　酒帘【名】酒店の目じるしの旗。酒旗。
しゆ-ろ　手爐【名】てあぶり。手香爐。袖香爐。
しゆ-ろ　朱鷺【名】〔動〕とき(朱鷺)に同じ。
しゆ-ろ　椶櫚・棕櫚・棕櫚・棕梠【名】㊀〔植〕椶櫚科に屬する常綠喬木。高さ三四丈に達し、幹は直にして枝なく、葉は掌狀に分裂して、幹頭に叢生す。葉柄の本に、毛を織りたるが如き接(ツ)圍繞して生ず。春の末、葉間に黃ばみたる苞出でて、粟穗狀の花を開く。材は床柱・欄干等に用ひて雅致あり。接はよく水濕に堪へ、編みて繩・靴拭とすべく、刷毛(ハケ)・箒の料にも供すべし。和名「椶櫚、一名、蒲葵、俗云、種魯」㊁紋所の一。棕櫚の葉の開きたる形、又はその一半を抱合はせたるものなど種種あり。
しゆ-ろう　鐘樓【名】しようろう(鐘樓)に同じ。
しゆ-ろう　酒樓【名】料理茶屋。料理屋。
しゆ-ろう　朱樓【名】赤く塗りたる樓。太平記「朱樓・紫殿」
しゆ-ろう　戍樓【名】警衞のために設置せる樓。
しゆろう-だう　鐘樓堂【名】『樓といひ、又堂といふは、實は重言なり』しゆろう(鐘樓)に同じ。水鏡「元興寺の鐘樓堂より、鬼ありて、夜ごとに、鐘撞く人を食殺しぬ」
しゆろ-がさ　椶櫚笠・棕櫚笠【名】晒したる棕櫚の葉にて編み造りたる笠。元祿の頃、薩摩國より產す。
しゆろ-くわ　椶櫚科・棕櫚科【名】〔植〕顯花植物・被子類・單子葉門の一科。椶櫚・檳榔竹・蒲葵(ビロウ)・籐(トウ)・檳榔子・椰子などこれに屬し、主として熱帶に生ず。椰子樹科。
しゆろ-さう　椶櫚草・棕櫚草・藜蘆【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。山林の陰地に自生す。春、宿根より苗生じて、深綠色にして、縱に皺多き葉數箇叢生するさま、椶櫚に似、初夏、披針形の小葉互生し、紫黑色にして、六片の花蓋より成る小花、密綴して開く。有毒なれど、少量を用ふれば、溺飮などに効ありといふ。しころさう。ししあし。ししのくびき。ししのくびくさ。ししのくびのき。
しゆろ-ちく　椶櫚竹・棕櫚竹・椶竹・實竹【名】〔植〕棕櫚科に屬する常綠灌木。高さ一丈許に達し、株をなして叢生す。觀賞用に栽培せらるるものは高さ二三尺に過ぎず。葉は棕櫚に似たれども、裂片少なく、花實莖ともほぼ棕櫚に似たり。春夏の候、淡黃色の花を開く。もと暖地の產なり。
しゆろ-なは　棕櫚繩・棕櫚繩【名】棕櫚の毛にて綯(ナ)ひたる繩。
しゆろ-ばうき　棕櫚箒・棕櫚箒【名】棕櫚の毛にて造りたる箒。
じゆわ-き　受話器【名】『英 telephone receiver』電話機の一部。電話を聽取る裝置。磁石を細き銅線にて捲きたる線。通話者よりの電氣來りて輪に感ずるや、これに面せる振動板に微動を起し、原音波に相當する音聲聞ゆ。種類多し。(送話器に對して)
しゆ-わん　朱椀【名】朱ぬりの椀。
しゆ-わん　手腕【名】㊀かひな。うで。㊁うでまへ。技倆。
しゆわん-か　手腕家【名】腕まへのある人。伎倆家。
しゆ-ゐ　思惟【名】しゐ(思惟)に同じ。
しゆ-ゐ　主位【名】主たる位置。
しゆ-ゐ　首位【名】第一の位。第一の位置。
じゆ-ゐ　受遺【名】遺產又は遺物を受くること。遺贈を受くること。
しゆ-ゐき　殊域【名】外國。異域。
しゆゐ-くわんねん　主位觀念【名】〔哲〕こていくわんねん(固定觀念)に同じ。
じゆゐ-しや　受遺者【名】遺贈を受くる人。
じゆ-ゐん　入院【名】〔佛〕しんざんしき(晉山式)に同じ。にふゐん(入院)參照。
しゆ-ゑ　集會【名】しふくわい(集會)に同じ。謠曲(鐘引)「當寺の鐘餘りに小さく候程に、今日集會をなし、鐘を大きに鑄させばやと存候」
しゆ-ゑ　修慧【名】〔佛〕禪定を修めて得たる智慧。
しゆ-ゑ　衆會【名】衆徒の集會すること。謠曲(忠信)「衆會の御座敷とも存ぜず候ふ」
しゆ-ゑい　守衞【名】㊀まもり。警固。㊁貴族院事務局又は衆議院事務局に屬し、守衞長・守衞番長の指揮の下に、院內の取締に從事する判任官。
じゆ-ゑい　戍衞【名】ゑいじゆ(衞戍)㊀に同じ。
しゆゑい-ちやう　守衞長【名】貴族院事務局又は衆議院事務局の職員。守衞番長以下を指揮して、院事の取締に任ずる判任官。
しゆゑい-ばんちやう　守衞番長【名】貴族院事務局又は衆議院事務局の職員。守衞長を助けて、守衞を指揮し、また守衞長事故ある時、その代理を勤むる判任官。
しゆゑ-しよ　集會所【名】〔佛〕人人の集會する所。
しゆ-ゑん　主園【名】所有の莊園。平家「日本國に、平家の主園ならぬ所やある」
しゆ-をう　主翁【名】主人のおきな。
しゆ-をく　朱屋【名】㊀朱塗の家屋。㊁富貴の家の形容。朱門。(白屋に對して)
しゆを-じき　朱折敷【名】朱塗の折敷。文武五人男「朱椀・朱折敷、皆公平といふべきか」
しよ　書【名】㊀文字を書くこと。書法。習字。「書を學ぶ」㊁文字を書きたるもの。手跡。筆蹟。「書・畫」㊂ふみ。ほん。書物。「多く書を藏す」㊃てがみ。書翰。㊄〔書〕しよきやう(書經)の略。「詩・書・禮・樂」
書は言を盡さず【句】『易經の繫辭上傳に「書不レ盡レ言、言不レ盡レ意」とあるに本づく』文字にては、十分に人の言をあらはすこと能はず。〔諺語〕
書は姓名を記すに足る【句】『史記の項羽本紀に「少時學レ書不レ成、去學レ劍、又不レ成、項梁怒レ之、籍曰、書足三以記二名姓一而已、劍一人敵、不レ足レ學」とあるに本づく』文字は我が姓名を書き得ればよし。〔諺語〕
書を學ぶは急流を泝(サカノボ)るが如し【句】『蘇軾の語に「學レ書如レ泝二急流一、用二盡氣力一不レ離二舊處一」とあるに本づく』習字の稽古の油斷すべからざる譬。
書を讀んで羊を亡(ナク)ふ【句】『「亡羊の歎」を見よ』心の外界に馳せて、道念を失ふ譬。
盡(コトゴト)く書を信ずれば、書なきに如かず【句】『孟子の盡心下篇に「盡信レ書則不レ如レ無レ書、吾於二武成一取二二三策一而已矣」とあり。武成は書經の篇名にて、原文の「書」は書經の意なれども、普通には、一般の書籍の義として用ふ』書籍中の文辭にのみ囚はれ、その皮相をのみ讀みて、眞意を究むることなく、悉く妄信するは、弊害あり。〔諺語〕
腹中の書を曝す【句】『世說の誹調篇に出づ』支那晉の郝隆(カクリユウ)、七月七日富家にて、衣帛を曝せるを見、屋外に出でて、日下に仰臥せしかば、人その故を問ひしに、我が腹中の書を曝すなりと答へし故事。
しよ　暑【名】㊀夏の暑きこと。暑熱。炎暑。㊁夏の極めて暑き頃。二十四節の一なる

小暑・大暑各十五日づつの總稱。小暑になるを、暑に入るといひ、大暑の終るを、暑が明くといふ。(寒に對して) 三夏の土用の十八日間。

しよ 杵【名】〔佛〕こんがうしよ(金剛杵)に同じ。太平記「一人の金剛力士、杵を以て、この山を微塵のごとく打碎く」

金剛の杵【句】〔佛〕こんがうしよ(金剛杵)に同じ。太平記「那羅延が力にても動かしがたく、金剛の杵も、碎きがよくぞ見えたりける」

しよ 署【名】一役所。官署。公衙。二書きしるすこと。署名すること。

しよ 緒【名】絲のこぐち。いとぐち。

緒に就く【句】やや成立しかかる。「事業、漸く緒に就く」

しよ 庶【名】めかけばら。庶子。「嫡・庶の別」

しよ 施與【名】せよ(施與)に同じ。

しよ 賜予【名】たまふこと。たまはること。

しよ 詩餘【名】〔文〕『詩の附屬物の義。當時、詩に比して、文學上の餘技と見做されしによりて、この名あり』支那の歌曲の一。漢代の樂府(ガフ)より出で、唐代絕句の一變したるもの。元代には、雜劇・傳奇の中にこれを用ひ、曲中の主客共にその意中を言顯すにこれを以てし、音聲の美と節奏の巧とによりて、觀客の耳を喜ばしむるに至れり。一句の字數は長短一ならざれども、用字に平仄(ヒャウソク)あるは、詩に異ならず。詞(シ)。塡詞。

しよ 杵【助數】鐘を撞きならす數を表はす語。「一杵の鐘聲」

しよ 初【接頭】物事のはじめなる意。「初學」「初緣」

しよ 所【接頭】云云する所の事の意。「所感」「所爲」「所藏」

しよ 諸【接頭】もろもろのといふ意。「諸國」「諸官省」

しよ 諸【接尾】漢字に添へて、貌詞を作るに用ふる語。「忽諸」「藐諸」

しよ 所・處【接尾】場所を示す語。「編輯所」

しよ 署【接尾】官省の小區分の名。「警察署」「大林區署」

じよ 恕【名】おもひやり。同情心。

じよ 序【名】一ついで。順序。秩序。二はし。いとぐち。三『爾雅に「序、緒也。」字亦作レ敍、言ニ其善敍ニ事理次第一有レ序、若ニ絲之緒上也」とあり』じよぶん。はしがき。[敍] 續拾遺「松色春久といふ事を講ぜられけるとき、序をたてまつりて」四〔音〕雅樂の緩急の拍子にて、初の起りの調子。五芝居の狂言の最初の幕。今宮心中「序にて作りし惡心の切(キ)りで報いのくる來る時は」六『孟子の滕文公上篇に「設ニ爲庠序學校一以敎レ之、庠者養也、校者敎也、序者射也、夏曰レ校、殷曰レ序、周曰レ庠、學則三代共レ之、皆所ニ以明ニ人倫一也」とあり』まなびや。ふみや。學校。

序・正(シャウ)・流通(ルヅウ)【句】〔佛〕序分と正宗分と流通分と。さんぶんだん(三分段)參照。河海抄「諸經の說相、みな序・正・流通の三段あり」

序・破(ハ)・急(キフ)【句】一〔音〕『破は破碎の義にて、繁聲に至るをいふ』雅樂の序と破と急と、卽ち拍子の緩急。二始と中と終と。八犬傳「花の物いふ序・破・急の節曲、比類なべて世の俳優人(ワザヲギ)は數ならずとて」三〔文〕俳諧百韻の心得。初表(シヨオモテ)は序の序、二の折までは序、三の折は破、名殘の折は急なること。

じ-よ 時譽【名】その時代の人人よりのほまれ。

じ-よ 自餘・爾餘【名】その外。これよりほか。

じよ 如【接尾】輕く漢字に添へて貌詞を作るに用ふる語。然。若。「突如」「自如」「躍如」

しよ-あう 初鶯【名】はつうぐひす(初鶯)に同じ。

しよ-あく 諸惡【名】もろもろの惡事。

諸惡莫作(サク)【句】〔佛〕『しちぶつつうかいげ(七佛通戒偈)を見よ』一切の惡業を行ふ勿れ。著聞「また諸惡莫作。衆善(シュゼン)奉行(ブギャウ)の文を銘に書かれたり」

しよ-あたり 暑中【名】あつさあたり(暑中)に同じ。

しよ-あつ 阻遏・沮遏【名】そあつ(阻遏)を見よ。

しよ-あん 書案【名】一つくゑ。書几。二書物(カキモノ)、又その下書(シタガキ)。

しよ-い 初意【名】はじめの意見。

しよ-い 書意【名】書面の意義。

しよ-い 暑衣【名】布の帷子(カタビラ)。古戰錄「暑衣・道服を相副へて賜はり」

しよ-いう 所由【名】よるところ。もと。

しよ-いう 諸友【名】多くの友達。

しよ-いう 所有【名】一我が物となりをること。もちもの。所持。二〔法〕或物に對して、所有權を有すること、又その物。

しよいう-けん 所有權【名】〔法〕『羅Proprietas又Dominium』法令の範圍內に於て、自由に物の使用・收益及び處分などをなし得る權利。物權の一種にして、諸物の權利中、最も重要なる地位を占む。

しよいうけん-しや 所有權者【名】〔法〕所有權を有する人。所有者。所有人。所有主。

しよいう-しや 所有者【名】前條に同じ。

しよいう-しゆ 所有主【名】前條に同じ。

しよいう-ぜい 所有稅【名】ざいさんぜい(財產稅)に同じ。(營利稅・使用稅に對して)

しよいう-ち 所有地【名】その人の所有する土地。

しよいう-にん 所有人【名】しよいうしや(所有者)に同じ。

しよいう-ぬし 所有主【名】前條に同じ。

しよいう-ひん 所有品【名】所有する品。

しよいう-ぶつ 所有物【名】所有する物件。

しよいうぶつ-しやうきやく-じゆんびきん 所有物償却準備金【名】〔商〕『英Reserve fund』簿記の勘定科目の一。所有物の代價を償却するために、その純益の一部を割きて積立つる金。

しよいうぶつ-めいさいちやう 所有物明細帳【名】その所有となるべき動產・不動產に關する一切を記入して整理する帳簿。

しよいう-ぶぶん 所有部分【名】〔法〕二人以上にて、一箇の物を區分して所有する場合に、その各自の所有に屬する部分。

しよい-しよい【感】犬などをけしかくる時の聲。〔薩摩國の方言〕

しよ-いちねん 初一念【名】初に思ひ立ちたる一念。

しよ-いん 書淫・書婬【名】讀書に耽ること、又その人。書癡。

しよ-いん 書音【名】手紙のたより。音信。國花諸士鑑「山口へはたびたび書音して、光右衛門も一族同前のちなみ」

しよいりよう-かた 諸入用方【名】江戶幕府の職制の一。下勘定所の分課の一にて、何方に屬し、諸國の代官所・預所等の諸入用の調査を掌りしもの。

しよう 稱【名】一となへ。よび名。二名聲。聲譽。

しよう 證【名】一しるし。しようこ。あかし。〔證〕二〔佛〕無漏(ムロ)の正智(シャウチ)の、よく所緣の眞理に契合すること。眞理を體得・實證すること。さとること。證悟。證入。證得。內證。證覺。

しよう 承【名】〔文〕しようく(承句)の略。「起・承・轉・結」

しよう 衝【名】一つきあたりの所。直接それに當る所。「その衝に當る」二かなめ。要所。三〔天〕『英Opposition』一の天體の黃經と太陽の黃經との差百八十度に等しくなりたる時の稱。月の衝のみは、特に望(ボウ)又は滿月と呼ぶ。

しよう 踵【名】くびす(踵)に同じ。

踵を接す【句】「踵(クビス)を接す」に同じ。

しよう 頌【名】一盛德を稱(タタ)へ述ぶる詞。ほめことば。二〔文〕りくぎ(六義)を見よ。

しよう 鐘【名】一八音の中、金屬樂器の一。今は傳はらず。つきがね。二かね。つりがね。

しよう 勝【名】一爭にかつこと。かち。勝利。「勝敗」「勝劣」二すぐれたること。まされること。三地勢又は風景のすぐれたること、又その地。形勝。

し-よう 試用【名】ためしに用ふること。

し-よう 施用【名】ほどこし用ふること。

し-よう 資用【名】かかり。費用。經費。

し-よう 支用【名】錢・物などを支(ワカ)ち用ふること。

し-よう 姿容【名】すがた。かたち。姿態。

し-よう 使用【名】一用ふること。つかふこと。二〔法〕その用法に從ひて、物を用ふること。

し-よう 私用【名】一わがための用事。私事。(公用に對して) 二私事に使用すること。(官用・公用に對して)

し-よう 私傭【名】私人のやとふこと。私人にやとはること。(公傭に對して)

し-よう 暑雨【名】暑さを催す雨。夏の炎天に降る雨。

しよ-う 諸有【名】〔佛〕もろもろの有(ウ)。有に三有・四有・七有・九有・二十五有等の別あるによりていふ。諸法。衆生(シュジョウ)。淨土和讃「十方諸有をすすめてぞ」太平記「諸有所得の心を離れて、淸淨を修すべきに」

しよう 升【助數】一量の單位。合の十倍。斗の十分の一。二がふ(合)三を見よ。

升を以て石(セキ)を量る【句】『淮南子に「使ニ鞅度一レ堯、是猶下以レ升量上レ石也」とあり。石は升よりも多量なるよりいふ』愚人が、賢者の心を推測するに譬へていふ。

じよう 繩【名】すみなは(墨繩)に同じ。「規・矩・準・繩」

じよう 乘【名】一人の乘る物、卽ち車・馬など。のりもの。太平記「古、屈產の乘、項羽が騅、千里を翔る馬ありと雖も」二『孟子に「晉之乘」とあり。載と同義にて、事を書載せたる物の意』記錄。史書。三〔佛〕『梵Yāna(衍・野那)の譯語。人を乘せて、その單位に到達せしむる意』修行の法。實相を開悟する智慧。行法。佛乘。四〔數〕じようはふ(乘法)の略。

じよう 判官【名】一古の四部官の一。次官(スケ)の次、主典(サクワン)の上。太政官にては、少納言と辨とこれに相當し、その他、役所によりて、用字同じからず。卽ち神祇官には祐、八省は丞、職(シキ)と坊とは進、寮は允、司・署は佑、彈正臺は忠、近衛府は將監、衛門府・兵衛府及び檢非違使は尉、國は掾、郡は主政、鎭守府は軍監、太宰府は監。二明治初年に設置せられたる職員。官によりて、文字同じからず。太政官には辨、神祇各省及び大學校には丞、彈正臺には忠、集議院・留守官・開拓使・按察使・宣敎使には判官、寮には允、司には佑を用ひたり。

じよう 尉【名】一衛門府・兵衛府及び檢非違使の判官。二『一說に、丈の字の音より出でし語にて、ぢやうの假名たるべしと』老いたる男。翁。三能にて、老人の面の總稱。四能にて、尉の面を著けて出づる役。五木炭の、赤熱後、白き灰となりたるもの。小町踊(冬段)「じようとなるや一夜白髮炭かしら」

尉と姥(ウバ)【句】播磨國高砂(タカサゴ)の老松の精が、白髮の老人夫婦となりて現れたりといふ謠曲「高砂」の故事に因りて、假作せるもの。翁と姥と共に能(ノウ)の衣裳を著け、落葉を掻く熊手を携へたる姿なるを常とし、繪にも描き、人形・彫刻にも造りて、婚姻・雛祭等の祝に用ふ。新版歌祭文「したが、島臺の無いかはり、世話事の尉と姥も新しい」

じ-よう 自用【名】自分の使用。

じよう 乘【助數】一車の數。「萬乘の國」二〔數〕同一の數を掛合はする回數。「二乘(自乘)」「三乘」「四乘」

しよう-あい 鍾愛【名】『愛情をその者一人の上に鍾(アツ)むる義』めでいつくしむこと。鍾寵。寵愛。

しようあつ-き 昇壓機【名】『英Booster』回路の電壓を增大せしむる機。

じよう-あふぎ 尉扇【名】能(ノウ)にて、尉の假面(メン)を用ふる時に持つ扇。白骨を用ひ、墨繪を書きたるもの。

しよう-あん 訟案【名】訴訟の主趣を記せる文書。

しようあん 承安【名】高倉天皇の御代の年號(紀元一八三一年—一八三四年)。

しようあん-だいさんのみや 承安第三宮【名】〔人〕これあきらしんわう(惟明親王)に同じ。

じよう-いち 剩一【名】〔數〕『一を剩(アマ)す義。甲數の某倍數と乙數の某倍數との差が一なる意』和算における一次方程式の解法。例へば甲數の某倍數が乙數の某倍數より一だけ大なる時、その兩倍數を算出するもの。

しよう-いつ 縱逸【名】きままにして、しまりのなきこと。放逸。放縱。

しよう-いん 證印【名】證據に押したる印。

しよう-いん 承引【名】うけひくこと。承知。承諾。

しよう-いん 勝因【名】〔佛〕殊勝なる善因。著聞「四八相值遇(グウ)の勝因」

しよう-いん 承允【名】ゆるすこと。允許。

しよういん-じんじや 松陰神社【名】一武藏國荏原(エバラ)郡世田ケ谷村大字若林に鎭坐せる神社。祭神は吉田松陰。二長門國阿武郡椿鄕東分(ヒガシブン)村大字新道、卽ち松下村塾の域內に鎭坐せる縣社。祭神は同前。

しよういん-ぜい 證印稅【名】地券書替の請求者が納むる租稅。

しよう-うん 承運【名】『史記の高祖紀に「漢承ニ堯運ニ」とあり』まはりあはせを承紹ぐこと。正統記「代と世とは、常の義差別なし。然れども、凡の承運とまことの繼體とを分別せんために書分けたり」

しよう-うん 松雲【名】〔人〕一佛工。名は元慶。通稱は九兵衛。京都の人。鐵眼(テツゲン)の弟子。江戶に來りて、五百羅漢を刻み、本所に羅漢寺を建つ。寶永七年歿す。年六十三。ごひやくらかんじ(五百羅漢寺)參照。二まへだつなのり(前田綱紀)の號。

しよう-えい 松影【名】松の樹のうつりたる影。まつかげ。

しよう-えい 誦詠・誦咏【名】頌文をよみうたふこと。

しよう-えう 鍾繇【名】〔人〕支那三國時代の書家。字は元常。魏の後主の建興八年歿す。しようわう(鍾王)參照。

しようえき-ち 承役地【名】〔法〕『英Servient land』要役地のために利用せらるる土地。(要役地に對して)

しよう-えふ 松葉【名】松の葉。まつば。

しようえふ-めいしよわかしふ 松葉名所和歌集【名】〔書〕名所に關する和歌にて、類字名所集その他の書に載せざる歌を集めたるもの。十六卷。宗惠の選。

しよう-えん 松烟・松煙【名】一松の如き、脂油に富める樹木を、空氣の流通不充分なる處にて燃燒せしめ、その煙を凝集したる炭素の細微なる粉末。最も上等なるは、活版印肉・靴墨・文房用墨の製造等に用ひ、下等なるは、門柱・板屛等の塗抹に用ふ。二松明(タイマツ)の烟。三すみ(墨)(一)の異稱。

しようえん-ずみ 松烟墨・松煙墨【名】松烟にて製したる墨。(油烟墨に對して)

しようえん-らく 承燕樂【名】雅樂の一。黃鐘(ワウジキ)調。大戶淸上の作曲。

しよう-おう 承應【名】後光明天皇の御代の年號(紀元二三一二年—二三一四年)。

しよう-か 頌歌【名】功德を頌(ホ)めうたふこと、又その歌。

しよう-か 證歌【名】證據となるべき歌。太平記「名は同じくして、所は替れる證歌なり」

しよう-か 升遐・昇遐【名】『遐(トホ)かなる天に升(ノボ)る義』貴人の死去。登遐。

しよう-か 松下【名】松の木の下。松蔭。

しよう-がい 勝槩【名】しようけい(勝景)に同じ。

じよう-かい 乘戒【名】〔佛〕乘卽ち實相を開悟する智慧と、戒卽ち身口(シンク)の惡を淨め除く制法と。

乘戒俱急(クキフ)【句】〔佛〕乘と戒との兩者を、熱心に修むること。大乘の眞の薩埵(サッタ)の修行狀態を言表はしたるもの。太平記「乘戒俱急の僧」じようかいきふ(戒急)・じようきふ(乘急)參照。

しよう-かう 松膏【名】しようし(松脂)に同じ。

しよう-かう 昇降【名】のぼりくだり。あがりおり。

しようかう 松江【名】〔地〕一支那江蘇省に在る府名。二支那の黃浦江の一部。同上の府境を流過する時の名。

松江の鱸(スズキ)【句】『蘇軾の後赤壁賦に「今者薄暮、擧レ網得レ魚、巨口・細鱗、狀如ニ松江之鱸ニ」とあり。「鱸魚(ロギョ)の膾」參照』支那松江の名產なる鱸魚。松江の府境を貫流する黃浦江にて漁獲する魚。但し、鱸の字をすずきと訓ずるは、實は誤にて、一種の淡水魚なり。

しよう-がう 稱號【名】一となへ。よびな。名目。稱呼。二うぢな。苗字。

じよう-がう 乘號【名】(數)『英Sign of multiplication』二つの數の積を求むる符號。一般には7×5又はa×bのごとく×を用ひ、また代數學にて、特にa·bのごとく·を用ふることあり。
しようかう-き 昇降機【名】大建築物內にて、機械力によりて昇降せしめ得る裝置の總稱。例へばエスカレエタア・エレベエタア等の類。
しようかう-ぐち 昇降口【名】昇降の出入口。
しようかう-けう 昇降橋【名】『英Lift bridge』船舶通行の際など、機械力によりて、全體を昇降せしめ得るやう構造せる橋。
しようかう-せき 松香石【名】(鑛)黑耀石の一種。多くは鼠色にして、質脆く、吹管にて吹けば、玻璃となる。綠色の玻璃を製するに用ふ。
しようかう-せき 承桁石【名】けたうけいし(桁受石)に同じ。
しようかう-てん 昇交點【名】(天)『英Ascending node』交點の一。月・遊星などが南半球より北半球に向ひて、通過する點。正交點。(降交點に對して)
しようかう-ほふしんわう 勝行法親王【名】(人)智仁(トモヒト)親王の御子。後水尾天皇の御猶子。薙髮して、曼殊院に入り、のち天台座主となる。一乘寺中興の開基。元祿六年薨ず。年七十二。
しよう-かかく 使用價格【名】(經)いうようかかく(有用價格)に同じ。(收益價格に對して)
しよう-かく 證覺【名】(佛)しようご(證悟)に同じ。
しよう-かく 昇格【名】資格を昇すこと。
しよう-かく 衝角【名】(兵)『英Ram-head』軍艦の首部の水線下に突出せる鋼鐵の突角。敵艦の水線下なる非裝甲部を衝破るための裝置。もと大砲・水雷と共に軍艦の主要武器たりしかど、現今その必要を認めず、漸次廢せらるるに至れり。
しようかく 勝覺【名】(人)高僧。源俊房の子。範俊・義範に就きて、眞言の奧義を究む。三寶院門跡の祖となる。天永三年雨を神泉苑に祈りて効あり。大治四年寂す。

しよう-がく 昇樂【名】(佛)法會の時、導師の高座に昇らんとするに當りて奏する音樂。
じよう-かく 乘客【名】じようきやく(乘客)に同じ。
しようか-そんじゆく 松下村塾【名】『村名の松本を、支那風に松下と呼變へしものにて、松陰の號もまたこの村名より出づ』吉田松陰の長門國阿武(アブ)郡椿郷東分(ヒガシブン)村の大字松本(マツモト)に開きし私塾。その地、もと松本村と呼び、萩町の東に位す。
じよう-が-ひげ 尉鬚【名】(植)ばくもんどう(麥門冬)を云ふ。〔關西の方言〕
じよう-かん 乘艦【名】艦船に搭乘すること、又その艦船。
じようかん-しぶくわん 乘艦四文官【名】明治六年に設置せられたる海軍の軍醫・祕書・主計・機關の四科の官吏。
しよう-き 聳起【名】そびえたつこと。そびえたたしむること。
しよう-き 鍾馗・鐘馗【名】『事物起原に「開元中、明皇病レ店居二小殿一、夢二一小鬼一、衣二絳犢鼻一履二一足一、懸二一履於腰間一、竊二太眞紫香囊一及拈二玉笛一吹レ之、顚喧擾、上叱レ之、曰臣虛耗也、上怒欲レ呼二武士一見二一大鬼一、頂二破帽一衣二藍袍一東二角帶一、徑捉二小鬼一以レ指刳二其目一擘而啖レ之、上問爲レ誰、對曰臣終南進士鍾馗也、因二應レ擧不一レ捷、觸二殿階一死、奉レ旨賜二綠袍一而葬、誓除二天下虛耗妖孽一言竟覺、而疾愈、乃召二吳道士一圖レ之」とあるに本づく』㊀支那にては疫鬼を驅り、魔を除くといふ神。我が國にては、その像を五月幟に描き、又五月人形に作るを常とし、その像は、巨眼・多髯にして、黑色の衣冠を著け、長き靴を穿ち、右手に劍を執り、小鬼を掴める樣に造る。鍾馗大臣。㊁謠曲の一。支那終南山に住める人、都への道中、鍾馗の靈あらはれて、惡鬼を亡し、國を守らんとの誓をなす事を作れるもの。
しよう-き 誦記【名】きしよう(記誦)に同じ。
しよう-き 悚悸【名】ぞっとすること。
しようき【名】さる(荒)を云ふ。〔伊勢國富田の方言〕

しようぎ【名】さる(荒)を云ふ。〔上野國の方言〕
しよう-ぎ 證義【名】(佛)㊀論議の時、その問答の可否を判斷する役。一說に、證義は八講の時のみの稱にて、その他の論議には、延暦寺などにて、精義(セイ)といふと。證誠(ショウジョウ)。公事根源「證義・講師・聽衆などあり」㊁しようぎしや(證義者)の略。㊂譯經の際、その原文と譯文とを對照して、意義の相違なきや否やを調査する役。
じよう-き 蒸氣【名】㊀液體の蒸發して生ずる氣體。ゆげ。蒸發氣。水蒸氣。汽氣。㊁じようきせん(蒸氣船)の略。
じようき-あつりよくけい 蒸氣壓力計【名】『英Steam-gauge』蒸氣の壓力を計る機械。汽壓計。あつりよくけい(壓力計)參照。
じようきう 承久【名】順德天皇の御代の年號(紀元一八七九年—一八八一年)。
承久の亂【句】鎌倉の執權北條義時の專橫を惡みて、承久三年後鳥羽上皇の、北條氏を滅さんと謀りたまひしより生ぜし亂。その結果、却りて幕軍のために、京師を攻落せられ、後鳥羽上皇は隱岐に、土御門上皇は土佐(後に阿波)に、順德天皇は佐渡に遷幸し給ひ、朝臣の誅責せられし者多かりき。
じようきう-いくさものがたり 承久軍物語【名】(書)承久の亂を記したるもの。六卷。著者詳かならず。群書類從に收む。
じようきう-き 承久記【名】(書)承久の亂の顚末を記せるもの。二卷。著者詳かならず。
じようきう-ひやうらんき 承久兵亂記【名】(書)承久の亂を記したるもの。著者詳かならず。續群書類從に收む。
じようき-から 蒸氣坑【名】(地)『英Fumarole』地中より水蒸氣を噴出する所。火山地方に多し。
じようき-がま 蒸氣釜【名】㊀きくわん(汽鑵)に同じ。㊁獨逸の細菌學大家コッホ(R. Koch)の發明に係り、蒸氣によりて細菌を死滅せしむるに用ふる釜。
じようき-きかい 蒸氣機械【名】汽機に同じ。

じようき-きくわん 蒸氣機關【名】『英Steam engine』英國人ワット(J. Watt)の發明したる、熱を仕事に變ぜしむる一の機械。即ち火熱にて、水を沸騰せしめ、これによりて生じたる蒸氣の張力を利用し、適當の裝置を用ひて、運動を起さしめ、これを種種の機械に傳へて仕事をなさしむるもの。蒸發氣を生ぜしむる部分、即ち汽鑵と、蒸發氣の張力より運動を生ぜしむる部分、即ち機關とより成る。用途によりて、船用と陸上用とに大別し、又、形態によりて、直立式・水平式に別たる。汽機。
しよう-きく 松菊【名】松と菊と。
じようき-くわん 蒸氣管【名】きくわん(汽管)に同じ。
じようき-くわん 蒸氣鑵・蒸氣罐【名】きくわん(汽鑵)に同じ。
しようぎ-しや 證義者【名】(佛)證義の役に當る人。
じようき-しや 蒸氣車【名】きしや(汽車)に同じ。〔明治初年頃の語〕
じようき-せうどく 蒸氣消毒【名】蒸氣にて蒸して消毒すること。煮沸しがたき物品に應用す。
じようき-せん 蒸氣船【名】きせん(汽船)に同じ。
じようき-たあびん 蒸氣タアビン【名】『英Steam turbine』蒸氣の流動速度及び方向を漸次變換せしむるために生ずる動力を以て回轉を起す一種の蒸氣機關。種類多し。(水力たあびんに對して)
しようき-だいじん 鍾馗大臣【名】しようき(鍾馗)に同じ。
じようき-つち 蒸氣鎚【名】『英Steam-hammer』蒸氣力を用ひて、重き鎚を迅速に上下して、鐵などを鍛錬する機。
じようき-てつだう 蒸氣鐵道【名】きしや(汽車)㊁に同じ。
じようき-はっせいき 蒸氣發生器【名】『英Steam generator』きくわん(汽罐)に同じ。
しようき-ひげ 鍾馗髭【名】鍾馗の如く、ぼうぼうと生えたる髭。
しよう-きふ 陞級【名】階級の上ること。昇等。
しよう-きふ 昇給【名】給料の上ること。
じよう-きふ 乘急【名】(佛)實相を開悟す

る智慧の發揮に熱心なること。(戒急・戒緩・乘緩に對して)「乘戒俱急」參照。榮花「或は乘急の人、或は戒急の者、行のしなじなに從ひて、極樂の迎を得たり」
じようき-ぽんぷ 蒸氣喞筒【名】『英Steam-pump』動力に蒸氣を用ふる喞筒。消火用を主とす。短時間內に多量の水を汽化せしむる必要あるを以て、汽鑵は銅にて造り、通常、蒸氣機關とポンプとを連接せしめて、同一の車臺上に据附く。
じよう-きん 剩金【名】あまりの金。のこりの金。剩餘金。
しよう-きやう 勝境【名】しようち(勝地)㊁に同じ。
しよう-ぎやう 勝行【名】(佛)波羅密多の行法。
しようきやう-でん 承香殿【名】平安城の舊內裏にありし殿舍の一。南面して、仁壽殿の後方、常寧殿の前方にありしもの。
じよう-きやく 乘客【名】汽車・汽船等、すべて車・船などに乘る客。のりて。
じようきやく-ていゐん 乘客定員【名】汽車・汽船又は電車などの客室の、廣さを標準として規定せられたる乘客の數。
じようきやく-てにもつ 乘客手荷物【名】㊀汽車・汽船等の乘客が携帶せる荷物。㊁鐵道規則に依り、無賃運送をなす乘客の手荷物。
じようきやく-めいぼ 乘客名簿【名】商法の規定により汽船に備へおきて、その乘客の住所・氏名・年齡等を記入する帳簿。
しよう-きよ 松炬【名】たいまつ(松明)に同じ。
しよう-ぎよ 松魚【名】(動)かつを(松魚)に同じ。
じようき-よく 蒸氣浴【名】『英Steam-bath』蒸氣の充たされたる浴室又は箱の中にて、身體を蒸し溫むること。
しようぎ-らう 承議郎【名】正六位下の唐名。
しようき-らん 忽地笑【名】(植)石蒜(シャクサン)科に屬する多年生の草。葉は根生、叢生し、長くして平行脈を有し、葉枯れたる後、花莖抽て、秋季、黃色の花を開く。北地に自生す。
じようき-りよく 蒸氣力【名】きりよく(汽力)に同じ。

じようき-ろおらあ 蒸氣ロオラア【名】『英Steam roller』ロオラア㊁の、蒸氣力にて回轉する裝置のもの。
しよう-く 聳懼・悚懼・竦懼【名】おそれをののくこと。
しよう-く 承句【名】(文)「起承(キショウ)轉結」を見よ。
しよう-く 勝區【名】景色の勝れたる區域。
じよう-く 冗句【名】不用なる文句。
じよう-く 繩矩【名】㊀すみなはと、さしがね。㊁きく(規矩)㊁に同じ。
じよう-ぐ 乘具【名】乘馬に必要なる用具、即ち鞍・鐙(アブミ)・手綱など。
しようくう 證空【名】(人)㊀淨土宗の僧。源親季入道證玄の子。字は善慧。京都の人。法然に師事すること二十年、京都西山(ニシヤマ)の善峰寺及び粟生(アワフ)の光明寺に住みて、敎門弘通を計り、寶治元年寂す。年七十一。寬政八年鑑知國師の諡號を勅賜せらる。選擇集密要決・曼陀羅註記等を著す。法流を西山(セイザン)派といふ。㊁鎌倉時代の眞言宗の僧。高野山に住む。傳不詳。徒然「高野の證空上人、京へ上りけるに、細路にて、馬に乘りたる女の行逢ひたるが」
しよう-くみあひ 使用組合【名】生產組合の一。產業に必要なるものを、組合員に使用せしむるを目的とするもの。
しよう-ぐん 勝軍【名】㊀戰に勝つこと。勝利。太平記「須彌(シュミ)の四方を領して、鬼門の方を守護し、摧伏の形を現じて、專ら勝軍の利を施したまふことは、毘沙門の德にしくは候ふべからず」㊁勝ちたる軍勢。
しようぐん-じ 勝軍寺【名】河內國中河內郡久寶寺村の南龍華寺字太子堂にある眞言宗の寺。椋樹山と號す。稱德太子物部守屋に克ちし後、建てられしもの。本堂に太子の植髮(ウエガミ)の像を安置す。俗稱、下(シモ)の太子。
しようぐん-ぢざう 勝軍地藏【名】(佛)勝軍不動明王の四十八人の使者の中、第二十三に位する炎羅諸天王の稱。地藏菩薩が降伏の三昧に入りて、武裝せるものにて、身に甲冑を纏ひ、右手に錫杖を持ち、左拿に如意寶珠を載せて、胸の前に安じ、背に後光を負ひ、軍馬に跨れる姿に造り、昔はこれを祭りて、戰勝を祈れり。元亨釋書「鐵曰、我法中有二勝軍地藏・勝敵毘沙門一、我造二二像一供修耳」
しようぐん-びしやもん 勝軍毘沙門【名】(佛)毘沙門天を本尊として、戰勝を祈る修法。太平記「岩屋寺の衆徒、座さまさずに、勝軍毘沙門の法をぞ行ひける」
しようぐん-ふどうみやうわう 勝軍不動明王【名】(佛)不動明王の、佛法修行の人を守るために、四十八人の使者を、種種の鬼王に化身せしめたるもの。
しようぐん-ぼく 勝軍木【名】(植)ぬるで(勝軍木)に同じ。
じよう-ぐるま 自用車【名】じようしや(自用車)に同じ。
しよう-くわ 松花【名】松の花。太平記「西塔の黑谷といふ所に居をトめて、三衣を荷葉の秋の霜に重ね、一鉢を松華の朝の風に任せ給ひけるが」
しよう-くわ 松火【名】松を燃く火。たいまつ。まつ。
しよう-くわ 證果【名】(佛)『しよう(證)を見よ』佛敎の眞理を體得・實證すること。佛法修行を成就すること。無漏の正智(シヤウチ)。盛衰記「證果の尼を殺して、逆を犯し」
しよう-くわ 勝果【名】(佛)『勝(スグ)れたる證果の義』ぶっくわ(佛果)を、聲聞(シャウモン)・緣覺・菩薩の果に對していふ美稱。滿果。
しよう-くわ 昇華【名】(化)『英Sublimation』固體より液體の狀態を經ずして、直ちに氣化する現象。鹽化アンモニウム・樟腦などのごとく、融點と沸點との接近せる固體に起る現象にして、その氣體を冷却すれば、又直ちに固體となる。
じよう-くわ 剩過【名】くわじよう(過剩)に同じ。
しようくわう-だう 承光堂【名】八省院の十二堂の一。大極殿前東西二列の中の東方に屬し、含章堂の南にありしもの。
しようくわう-てんわう 稱光天皇【名】(人)第百一代の天皇。御名は實仁(ミヒト)。後小松天皇の第一の皇子。御母は光範門院藤原資子。在位十六年(紀元二〇七三年—二〇八八年)。正長元年崩ず。壽二十八。
しようくわうみやう-ゐん 勝光明院【名】中古、山城國紀伊郡鳥羽村にありし寺。鳥羽上皇の勅願所。保延二年上皇の臨御ありて、親しく供養せられし頃は、堂宇の美を極めたりといふ。一名、鳥羽の御堂。
しようくわ-せつ 昇華說【名】(地)『英Sublimation theory』鑛脈は地中より瓦斯體の昇りて凝結せしものなりといふ學說。古代にも唱へられたる說なれど、佛蘭西のデュロシェエ(Durocher)の特に唱道せしもの。
しようくわ-だう 松花堂【名】(人)せうじよう(昭乘)を見よ。
しようくわだう-りう 松花堂流【名】書道の一派。松花堂昭乘を祖とす。瀧本流。せうじよう(昭乘)參照。
しよう-くわん 陞官【名】官等を陞(ノボ)すこと。官職を進むること。
しよう-くわん 縱觀【名】じゆうくわん(縱觀)に同じ。
じよう-くわん 冗官【名】無用なる官又は官吏。
じよう-くわん 乘緩【名】(佛)實相を開悟する正智(シヤウチ)を磨くに熱心ならぬこと。(乘急・戒急・戒緩に對して)
しようくわん-だう 承觀堂【名】豐樂(ブラク)院の八堂の一。東西二列に建並びし中の西方第二位に在りて、東方なる顯陽堂と相對せしもの。元日節會の時に、昇殿を得ざる者の席に充てられたり。
しようくわ-ゆわう 昇華硫黃【名】(化)硫黃を蒸溜して發生する蒸氣を、急に冷却して得る黃色の粉末。吸濕性あるを以て、往往微細の團塊をなす。主として精製硫黃を製するに用ふ。硫黃華。
しよう-けい 勝景【名】すぐれたる景色。佳景。
しよう-けい 憧憬【名】どうけい(憧憬)に同じ。
しよう-けい 松桂【名】松と桂と。
しよう-けい 松徑【名】松の木のある小みち。
しよう-けい 鐘磬【名】つきがねとうちならしと。
しよう-けい 鐘形【名】(植)しようじやう(鐘

狀)に同じ。
しよう-けい 承繼【名】㊀うけつぐこと。㊁〔法〕新權利の主體が、舊權利の主體の位置に代ること。
しようけい-にん 承繼人【名】〔法〕如何なる原因に依るを問はず、他人の權利義務を自身に引受けて、取得する人。一般承繼人と特定承繼人との別あり。
しようけう 松喬【名】けうしよう(喬松)㊁に同じ。
松喬の壽【句】『漢書の王吉傳に見ゆ』「喬松の壽」に同じ。
しよう-げき 衝激【名】烈しくつきあたること。
しよう-げき 衝擊【名】つきあたりて擊つこと。突擊。
しようげつだう-こりう 松月堂古流【名】花道の一派。栂尾(トガノヲ)の明惠上人を祖とし、松月堂叡𠘑の花法を定めたるもの。
しよう-けん 證券【名】㊀てがた。證文。㊁〔法〕『獨 Wertpapier』債權を證明する證書、卽ち法律上その債權の利用につき、その證書の占有を必要とするもの。いうかしようけん(有價證權)參照。
しよう-けん 證權【名】『英 Authority』多數の人を信仰服從せしむる權威、又は典據。
しよう-けん 證驗【名】あかし。しるし。證據。
しようけん 證賢【名】〔人〕高僧。字は向阿。三井寺に出家し、淨花坊と號す。禮阿に就きて、淨業を究め、京都花園院に隱遁し、のち淸淨花院を創す。講演に長じ、傍ら和歌を善くし、三部假名鈔を著す。正平十八年寂す。年八十三。
しよう-けん 使用權【名】〔法〕地人の所有の土地・物件などを使用する權利。
しよう-げん 證言【名】㊀言語を以て或事實を證明すること、又その言語。㊁證人の陳述したる言。
しよう-げん 縱言【名】ほしいままにいふこと。口にまかせていふこと。放言。
しようげん 承元【名】土御門天皇の御代の年號(紀元一八六七年—一八七〇年)。
しようけん-いうびんちよきん 證券郵便貯金【名】いうびんしようけんちよきん(郵便證券貯金)に同じ。
しようけん-いんし 證券印紙【名】收入印紙の發行せらるる前、政府より發行して、證券に貼らしめし印紙。
しようけん-いんぜい 證券印稅【名】證券印紙を以て納むべき租稅。
しようけん-かうふ-せいきうしよ 證券交付請求書【名】郵便貯金の預人が、郵便官署に保管を托しある證券の交付を受けんとする場合に差出す請求書。
しようけん-こうさい 證券公債【名】公債募集の際、政府が證券を發行して交付するもの。現行のは、多くこの方法による。證券には、額面・利率・利拂期限・償還期限・番號・支拂の本位・支拂の基地等を記載す。
しようけん-こうにふ-せいきうしよ 證券購入請求書【名】郵便貯金の預人が、その貯金を以て、證券を購入せんことを請求する場合に差出す請求書。
しようけん-じ 松見寺【名】美濃國武儀(ムギ)郡廣見村にある臨濟宗の尼寺。集雲山と號す。如大尼の住せしを以て有名なり。
しようけん-じゆんびはふ 證券準備法【名】『英 Documentary reserve』紙幣發行法の一。金銀貨幣又は地金を以てする代りに、政府の公債・株券その他の證券類を以て、引換準備として發行するもの。
しようけん-しようけん 證權證券【名】〔法〕『獨 Beweispapier 又 Beweisurkunde』旣存の權利を證明するために作成する證券。卽ち株券・公債證書・社債券の類。證據證券。證明證券。(設權證券に對して)
しようげん-せう 承元抄【名】〔書〕歌の風體を論じて、初學の栞とせしもの。一卷。藤原定家の著。
しようけん-とりひきじよ 證券取引所【名】有價證券の賣買取引をなす取引所。
しようけん-ばいきやく-せいきうしよ 證券賣却請求書【名】郵便貯金の預人が、郵便官署に保管を托せる證券を賣却せんことを請求する場合に差出す請求書。
しようけん-ひきかへ-ばらひ 證券引換拂【名】〔商〕『英 Cash against document』商品の代價を支拂ふに、その商品の代りとなる船荷證券などの證券を受取ると同時に支拂ふ方法。
しようけん-ほくわん-かよひちやう 證券保管通帳【名】郵便證券貯金の預入に、郵便爲替管理所より交附する通帳。
しようけん-ほくわん-げんぼ 證券保管原簿【名】郵便爲替貯金管理所に備へて、預人の所有に係る保管證券の出入を登記する帳簿。
しようけん-ほくわん-せいきうしよ 證券保管請求書【名】郵便貯金の預人が、自己の所有に係る證券の保管を郵便官署に請求せんとする場合に差出す請求書。
しようけん-めん 證券面【名】證券の文面。
しよう-こ 鐘鼓【名】鐘と太鼓と。
しよう-こ 稱呼【名】となへ。よびな。稱號。
しよう-こ 證據【名】或事實を證明する根據。しるし。あかし。中證。證左。宇治「何をしようこにて、かうはのたまふぞ」
證據に立つ【句】證人に立つ。
證據の出後(ダシオクレ)【句】「證文の出後」に同じ。〔諺語〕
しよう-ご 證悟【名】〔佛〕『しよう(證)㊁を見よ』實驗して迷を去り、悟を開くこと。正智(シヤウチ)にて、眞理を證知すること。證覺。
じよう-ご 剩語【名】餘計なる言葉。
じよう-ご 冗語【名】無用なる言葉。むだこと。
しようこ-あらため 證據改【名】證據を取調ぶること。檢證。
しよう-こう 昇汞【名】〔化〕えんくわだいにすゐぎん(鹽化第二水銀)の俗稱。
しようこう-があぜ 昇汞ガアゼ【名】消毒材料の一。昇汞藥劑中に浸し、强く壓搾して乾したるガアゼ。
しようこう-すゐ 昇汞水【名】昇汞を溶したる水。消毒用としては、二千倍以上に解くを普通とす。
しようこう-せうどく 昇汞消毒【名】昇汞水を用ひて、消毒を施すこと。
しようこう-ちやう 昇汞錠【名】藥品の一。日本藥局方にては昇汞五〇分・クロオルナトリウム五〇分を混和し、赤色のタアル色素にて著色し、錠劑としたるもの。一箇中〇、五グラムの昇汞を含む。中性昇汞水を製するに使用せらる。
しようこう-はつ 衝口發【名】〔書〕我が國の皇統・國號・年號・衣服・祭祀・國史・制度等に就き、諸書を引きて辨明せるもの。一卷。藤井貞幹の著。
しようこう-よく 昇汞浴【名】〔醫〕稀薄一萬倍乃至五萬倍なる昇汞液中に浴すること。先天黴毒ある幼兒、皮膚病及び全身皮膚の消毒等に應用せらる。浴槽は木質のものを用ふ。
しようこう-わた 昇汞綿【名】消毒材料の一。脫脂綿を昇汞藥劑中に浸したるもの。
しようこ-かうべん 證據抗辯【名】〔法〕訴訟にて、一方の當事者が相手方の擧證に對してなす抗辯。
しようこ-きん 證據金【名】㊀擔保として提供する金錢。㊁〔商〕取引所賣買取引の責任を履行せざる時、損害賠償に供せんが爲に、當事者の雙方より取引所に納めしむる擔保品。
しよう-ごく 訟獄【名】『訟は財を爭ふ意、獄は罪を爭ふ意』うつたへごと。裁判事件。獄訟。
しようこ-けつてい 證據決定【名】〔法〕證據を必要とする事實存在するとき、また證據方法の申出あるとき、當時者の辯論と分離し、特別の手續を以て、證據調を命ずる訴訟指揮上の命令。
しようこ-さいばん 證據裁判【名】證據にもとづきて行ふ裁判。
しようこ-しようけん 證據證券【名】〔法〕しようけんしようけん(證權證券)に同じ。
しようこ-しよるゐ 證據書類【名】事實の證據となる書類。
しようこ-しらべ 證據調【名】證據のとりしらべ。
しようこ-だつ 證據立つ【動下二自】證據を示す。あかしを立つ。證明す。
しようこ-だて 證據立【名】證據立つること。

じよう-こつぷん 蒸骨粉【名】肥料とする骨粉の蒸したるもの。生骨にては、粉碎・腐敗共に難きにより蒸すなり。
しようこ-にん 證據人【名】事實を證據だつる人。あかしびと。證人。
しようこ-はうはふ 證據方法【名】證據を得る手數。
しようこ-はんだん 證據判斷【名】〔法〕證據とすべき事項と、これに對する證據方法との關係を確定するため、各證據方法がその事實を證明するに足るべきや否やを、審理力を以て判斷すること。
しようこ-ぶつ 證據物【名】次條に同じ。
しようこ-ぶつけん 證據物件【名】〔法〕證據となる物件。證憑物件。證據物。
しようこ-ほぜん 證據保全【名】〔法〕『英 Perpetuation of testimony』證據の紛失する恐あるか、又これを使用するに困難なりと思料するかの場合に、訴訟提起の前後を問はず、あらかじめ證據をなし置き、何時にても用ひらるる手續をなすこと。
しよう-こん 松根【名】松の根。
しよう-こん 勝金【名】〔佛〕えんぶだごん(閻浮提金)に同じ。
じよう-こん 乘根【名】〔數〕『英 Root』或數の、その乘冪(ジョウベキ)に對する稱。例へば、aはanのn乘根なるが如し。(乘羃に對して)
しようこん-ゆ 松根油【名】〔化〕松樹の根を蒸餾して得る油。テレビン油に似るを以て、混稱せらる。家具の拭掃・驅鼠などに用ふ。
しようこ-りよく 證據力【名】〔法〕證據に供するにつきての効力。
しよう-さ 證左【名】㊀しようこ(證據)に同じ。㊁證人。證據人。
しよう-ざい 使用罪【名】〔法〕或物件を使用するによりて成立する犯罪。例へば他人の僞造せる官・公署の僞印を、情を知りて行使する類。
じよう-さい 乘載【名】のすること。
しよう-ざいさん 使用財產【名】〔經〕ふせいさんてきざいさん(不生產的財產)に同じ。
しようさい-ふぐ しようさい河豚【名】〔動〕しほさいふぐ(鹽魚)に同じ。

しよう-さう 松窓・松窻【名】その前に、松の木のあるまど。
しよう-さく 繩索【名】細き繩と太き繩と。なは。
しようさく-き 縱削機【名】すろつちんぐましいんに同じ。
じよう-ざつ 冗雜【名】くだくだしく入りまじること、又その物。
しよう-さん 稱讚【名】ほめたたふること。稱美。賞讚。讃稱。
しよう-さん 勝算【名】勝利を得る心算。勝つべき見込。かちめ。
しよう-さん 松杉【名】松の木と杉の木と。
しようさん 勝算【名】〔人〕高僧。俗姓は滋野(シゲノ)。京都の人。始め天台數を修めしが、後、眞言宗に歸す。一條天皇の寵を蒙る。寬弘八年寂す。年七十三。
しよう-さん 松山【名】松の生えたる山。まつやま。
じよう-さん 蒸散【名】〔植〕じようとうさよう(蒸騰作用)に同じ。
じよう-ざん 乘算【名】〔數〕かけざん(掛算)に同じ。
しようさん-くわ 松杉科【名】〔植〕顯花植物・裸子類・松柏門の一科。喬木又は灌木、多く樹脂を含めり。松族・杉族・扁柏(ヒバ)族の三つに細別せられ、松・落葉松(カラマツ)・針樅(ハリモミ)・栂(ツガ)・樅(モミ)などは松族に、高野槇柏・廣葉杉(クワウエフザン)・臺灣杉は杉族に、羅漢柏(アスナロ)・椎楠木・側柏(コノテガシハ)・絲杉・扁柏(ヒノキ)・柏心(ビャクシン)などは扁柏族に屬す。
じようさん-さよう 蒸散作用【名】〔植〕じようとうさよう(蒸騰作用)に同じ。
しようさんじやうど-きやう 稱讚淨土經【名】〔書〕次條の略。謠曲(富士)「この山に籠りたまひつつ、稱讚淨土經、毎日讀誦(ドクジュ)したまひしが」
しようさんじやうど-ぶつせふじゆ-きやう 稱讚淨土佛攝受經【名】〔書〕『淨土を稱讚すれば、佛が攝受する意』唐の玄奘三藏の譯述に係り、方等部に屬する佛經。一卷。
しよう-し 承嗣【名】うけつぐこと。あとつぎ。承襲。繼承。
しよう-し 松子【名】しようじつ(松實)に同じ。

しよう-し 松枝【名】松のえだ。
しよう-し 松脂【名】まつやに。松香。
しよう-じ 頌辭【名】ほめたたふることば。
しよう-じ 勝事【名】すぐれたる事。なみたらざることがら。平家「異なる勝事なれば、公卿僉議ありて」
しよう-じ 承仕【名】〔佛〕『承も仕(ジ)ふる意、卽ち命令を承(ウ)くる意』㊀法會の時、花籠(ケ)を執り、寺內の裝飾に與り、又遲參の僧侶の許へ催促に赴く等、社寺の雜役を勤むる卑しき役。妻帶なるも、出家なるもあり。承仕法師。そうじ。㊁髮を剃りて、仙洞、攝家などの雜役を勤め、後に法橋・法眼などに進むべきもの。㊂室町幕府の職制の一。剃髮にて、規式の際、殿中の裝飾を掌りしもの。
じよう-し 乘子【名】〔數〕いんし(因子)に同じ。
しよう-しう 縱囚【名】『縱はゆるしはなつ義』囚人を釋放して、家に歸らしむること。
しよう-しう 誦呪・誦咒【名】呪文(ジュモン)を誦すること。しようじゆ。
じよう-しう 乘舟【名】船に乘ること、又乘りたる船。
しようしう-もん 承秋門【名】豐樂(ブラク)院十七門の一。西面せる三門の中央。霽景樓と承歡堂との渡殿の中央に位せしもの。
しようしうもん-ゐん 承秋門院【名】〔人〕東山天皇の中宮。中御門天皇の准母。有栖川幸仁(ユキヒト)親王の長女。御名は幸子(ユキコ)。享保五年崩ず。年四十一。
しよう-しき 鍾子期【名】〔人〕支那周代の楚の人。音を聞くに妙を得たりといふ。ちいん(知音)參照。
しようし-くわうたく 松脂光澤【名】〔鑛〕『英 Resinous lustre』琥珀・硫黃などの有する光澤。
しよう-じつ 松實【名】松の實(ミ)。まつかさ。松子。
しよう-じつ 勝日【名】五行家にて、五行の相剋する日、卽ち木剋土・土剋水・水剋火・火剋金・金剋木といふ日。
しよう-しふ 誦習【名】讀みならふこと。
しよう-しふ 承襲【名】あとを承けつぐこと。承嗣。繼承。
しようじ-ほふし 承仕法師【名】しようじ承仕㊀に同じ。盛衰記「これは、當社の承仕法師にてはべるが、…社頭にみあかし參らせんとて參るなり」狂言「遍照寺の承仕法師、池の鳥を日頃飼ひつけて」

じよう-しほん 自用資本【名】所有者自身が、直接自身の營業に使用する資本。(他用資本に對して)
しよう-しん 升進・昇進・陞進【名】官位などの進むこと。平家「一族の昇進六十餘人」
しよう-しん 衝心【名】〔醫〕かくけしようしん(脚氣衝心)の略。
しよう-しん 悚神【名】恐れて、精神を竦動すること。
しようしん 證眞【名】〔人〕天台宗の學僧。比叡山にありて、大藏經を閱すること十六度に及ぶ。後、東塔の華王院に移りて、大いに講說す。また高倉上皇の命に依りて、根本中堂に安居(アンゴ)の論議を批判せしことあり。寂年不詳。三大部私記その他の著述多し。
しようしん-ぶぎやう 昇進奉行【名】室町幕府の職制の一。將軍宣下・任大臣・任大將の時、臨時に奉行中より補任せられて、庶事を處理せしもの。
しようしん-ほふしんわう 承眞法親王【名】〔人〕有栖川織仁(オリヒト)親王の御子。光格天皇の御猶子。俗名は惇德。戒を尊眞入道法親王に受けて、天台座主となり、牛車を許さる。天保十二年寂す。年五十五。
しよう-しや 勝者【名】勝利を得たる人。(敗者に對して)
しよう-しや 使用者【名】人を使用する人。
じよう-しや 自用車【名】自己の使用に充つるための車。
じよう-しや 自用者【名】自用に供する人。
じよう-しや 乘車【名】車に乘ること、又乘れる車。(下車(ゲシャ)に對して)
しよう-じやう 松上【名】松の木の上。
しよう-じやう 承相【名】『承は丞の義、相はたすくる義、合して君主の意を承(ウ)けて、これを助くる者の意』㊀古、支那にて、天子を輔けて、國政を總理せし官職。宰相。㊁執政の大臣。

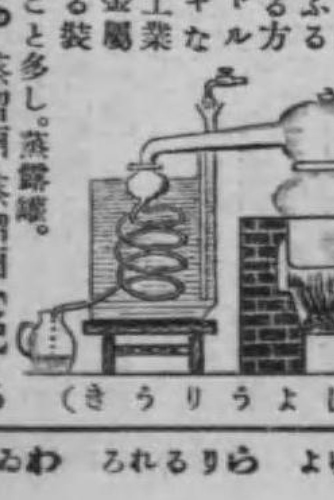
しようじやう 勝情【名】山水の景勝を好む心。
しようじやう 證誠【名】〔佛〕しようぎ(證義)[一]に同じ。
しようじやう 證狀【名】或事實の證明に供する書狀。
しようじやう 鐘狀【名】[一]大鐘(おほがね)の如き形。[二]〔植〕『英 Campanulate』萼・花冠の、鐘のごとき形狀をなせるもの。鐘形。
じようしやう 丞相【名】しようじやう(丞相)に同じ。
じようしやう 繩牀・繩床【名】繩を張りたる、極めて粗造なる椅子。形は今の安樂椅子に似、禪徒の倚るもの。 徒然「繩床に坐せば、おぼえずして禪定なるべし」 水鏡「繩床に端坐して、命をはりにしかば」
しようじやうじ 證誠寺【名】越前國今立郡横江村字横越にある眞宗の寺。山元派の本山。もと同國山元庄に在りて、宗祖親鸞の創建に成る。次いで親鸞の子善鸞これに住し、後、淨如、堂宇を再興し、山元山・證誠寺の勅號を得たりしが、第八世道性の時、今の地に移り、明治十一年西本願寺より分れて、獨立す。
しようじやうじは 證誠寺派【名】〔佛〕さんげんは(山元派)に同じ。
しようじやうだいぼさつ 證誠大菩薩【名】〔佛〕『佛說阿彌陀經の中に、六方の如來の、各廣長舌を出して、阿彌陀如來の功德を稱揚し、證誠するを記せるに本づく』紀伊國熊野神社の祭神伊弉冊(いざなみ)尊を、兩部神道にて、阿彌陀佛の垂迹(すゐじやく)なりとして唱へし敬稱。 盛衰記「證誠大菩薩は、濟度苦薩の教主、三身圓滿の覺王なり」
しようじやうだゑんけい 鐘狀楕圓形【名】〔植〕鐘形を帶びたる楕圓形。
しようじやうでん 證誠殿【名】紀伊國熊野神宮の内、證誠大菩薩を祀れる神殿。 保元「法皇、熊野へ御參詣あり、本宮證誠殿の御前にて、現當二世の御祈念ありしに」 謡曲(護摩)「本宮證誠殿阿彌陀如來の誓にて」
じようしやぎつぷ 乘車切符【名】乘車のために、賃銀の受領及び乘車の權利を表明する切符。乘車券。
しようしやく 松爵【名】『ごたいふ(五太夫)[二]・たいふ(大夫)[二]・「松の位」を見よ』五位の異稱。 十訓「五品を松爵といふ、これなり」
じようしやく 繩尺【名】[一]すみなはと、ものさしと。[二]きく(規矩)[二]に同じ。
じようしやけん 乘車券【名】じようしやぎつぷ(乘車切符)に同じ。
しようしゆ 稱首【名】『第一に稱する義』かしら。第一番。
しようしゆ 松脂油【名】てれびんゆ(テレビン油)に同じ。
しようじゆ 松樹【名】松の木。
しようじゆせんねんつひにこれくつ 松樹千年終に是れ朽つ【句】『「槿花(きんくわ)一日の榮」を見よ』松は常綠木なれども、千年の後には朽つとの意』天下の物死せざるなき譬。〔諺語〕
しようじゆ 誦呪・誦咒【名】しようしう(誦呪)に同じ。
しようじゆう 承從【名】『承(う)け從ふ義』さからはずに從ふこと。承順。
しようじゆつ 稱述【名】言ひのぶること。
しようじゆん 承順【名】しようじゆう(承從)に同じ。
しようしよ 誦書【名】聲を立てて、書を讀むこと。讀書。
しようしよ 證書【名】[一]事實の證明に供するための書面。公正證書と私署證書とに分つ。[二]しようけん(證券)に同じ。
しようじよ 昇敍・陞敍【名】官位を陞せ進むること。
じようしよ 蒸暑【名】むしあつきこと。溽暑。蒸熱。溽熱。
じようしよ 烝庶【名】しよみん(庶民)[二]に同じ。
しようしよう 悚悚・竦竦【貌】しようぜん(悚然)に同じ。
しようじよう 勝乘【名】〔佛〕だいじよう(大乘)に同じ。
じようじよう 烝烝【貌】[一]物の盛んにおこるさま。[二]火氣の上るさま。[三]隨ひ行くさま。
じようじよう 茸茸【貌】[一]草の生茂りたるさま。[二]小人の群り居るさま。
じようじよう 繩繩【貌】[一]多きさま。[二]絕えざるさま。
しようしよげんぼ 證書原簿【名】公證人が、公正證書作成の場合に、その番號・種類・作成の年月日及び囑託人の住所・氏名等を記入する原簿。この帳簿は、記入前に於て、豫め所屬地方裁判所長の契印を受くべきものとす。
しようしよさいけん 證書債權【名】〔法〕その存在及び範圍が專ら證書のみによりて定まる債權。例へば無記名債權・指圖債權の類。
しようしよそしよう 證書訴訟【名】〔法〕『獨 Urkundenprozess』特別訴訟手續の一。一定の金額の支拂、その他の代替物もしくは有價證券の數量の給付を目的とする請求を起すとき、すべて證書によりて、その必要なる事實を證明し、簡易なる手續を以て訴訟を起すこと。
しようしよひきかへばらひ 證書引換拂【名】〔商〕しようけんひきかへばらひ(證券引換拂)に同じ。
しようしよめん 證書面【名】證書の文面。
しようす 頌す【動佐變他】言葉を用ひて、その德をほむ。
しようす 誦す【動佐變他】聲を立ててよむ。となふ。じゆす。ずす。ずんず。誦讀す。
しようす 證す【動佐變自】[一]證據立つ。あかす。證明す。[二]〔佛〕『しよう(證)[二]を見よ』眞理をさとる。證悟す。「菩提(ぼだい)を證す」「無明の惑を斷じて、眞如を證す」
しようす 稱す【動佐變他】[一]いふ。呼ぶ。となふ。[二]たたふ。賞す。褒む。
しようず 稱ず【動佐變他】前條[一]に同じ。 風俗新年代記「高砂の都と稱ず」
じようず 乘ず【動佐變他】掛算を行ふ。かけあはす。かく。
じようず 乘ず【動佐變自】[一]のる。 正統記「船に乘じたまひて、上總に至り」[二]かこつく。つけこむ。つけあがる。「機に乘ず」「弱點に乘ず」
じようすう 繩樞【名】繩にて造りたるとぼそ。卑しき民の住居の形容にいふ。
じようすう 乘數【名】〔數〕『英 Multiplier 又 Multiplicator』掛算の掛くる方の數。法。(被乘數に對して)
しようすゐ 松翠【名】松のみどりの色。
しようせい 證誠【名】しようじやう(證誠)に同じ。
しようせい 鐘聲【名】かねのおと。
しようせい 稱制【名】制を稱すること。「制を稱す」參照。
しようぜい 使用稅【名】〔經〕各人がその財產を使用する事實に課する租稅。(營利稅・所有稅に對して)
しようせき 勝蹟・勝跡【名】名勝・古蹟。名所・舊蹟。
しようせき 蹤跡・蹤迹【名】[一]あしあと。踪跡。 盛衰記「三代の蹤跡ありといへども」[二]ゆくへ。ゆきがた。踪跡。[三]『春渚記聞に「往二青州一蹤二跡之一」とあり』逃げたる人を追ひたづぬること。[四]事跡。形迹。
しようせき 證跡・證迹【名】證據となるべき跡。
じようせき 乘積【名】〔數〕『英 Product』掛算をなして生じたる結果の數。積。
しようせつ 稱說【名】のぶること。陳述。
しようぜつ 勝絕【名】[一]最もすぐれたること。[二]〔音〕夾條の略。
しようぜつてう 勝絕調【名】〔音〕十二調子の一。漢名は夾鐘。鍵樂器にては、下即ちへ音に相當す。 徒然「その間に勝絕調を隔てたり」
しようぜん 承前【名】前文を承(う)くること。前回に掲げたる文句より續くこと。
しようぜん 聳然【貌】おそれて容(かたち)を改むるさま。
しようぜん 悚然・竦然【貌】おそれて、ぞっとするさま。悚悚。
じようせん 剩錢【名】[一]あまりの錢。[二]つりせん。つり。
じようせん 乘船【名】[一]船に乘ること、又乘りたる船。[二]
じようせんきつぷ 乘船切符【名】乘船のための賃金の受領、及び乘船の權利を表明する切符。

しようせんたん 昇仙丹【名】きんかうたん(金膏丹)に同じ。
しようそ 訟訴【名】そしよう(訴訟)に同じ。
しようそ 勝訴【名】訴訟に勝つこと。かちくじ。(敗訴に對して)
しようそく 承足【名】幼少の天子が御倚子に就かせらるる時、足を承(う)くるための物。長さ一尺六寸、高さ・廣さ各五寸。
しようそさうぞく 承祖相續【名】〔法〕だいしふさうぞく(代襲相續)に同じ。
しようそしや 勝訴者【名】訟訴に勝ちたる人。(敗訴者に對して)
じようそん 仍孫【名】『仍は重なる義』昆孫の子。玄孫の曾孫。 和名「仍孫、爾雅云、昆孫之子爲二仍孫一仍重也」
じようた 冗多【名】くだくだしく多きこと。
しようたい 承兌【名】〔人〕さいせう(西笑)を見よ。
しようたいしやく 使用貸借【名】〔法〕『英 Loans for use』無償にて使用・收益せる後に、相手に返還する約束にて、相手方より或物を受取りたる後に成立する契約。
しようだいぼだい 證大菩提【名】〔佛〕しようぼだい(證菩提)に同じ。
しようたう 稱稻【名】すゐこたう(出擧稻)に同じ。 大學寮式「常陸國稱稻、五萬四千束」
しようたう 松濤【名】松風の音の、濤の音のごとく聞ゆるもの。乾濤。
しようたう 承當【名】うけつぐこと。繼承。 太平記「直ちに承當し候はんずる事、恐らくは恥づべき人も候はねば」
しようだう 稱道【名】しやうだう(唱道)に同じ。
しようだう 鐘堂【名】しゆろう(鐘樓)に同じ。
しようだう 證道【名】〔佛〕萬有の實相を證悟する道。
じようたう 乘稻【名】『乘は剩の省字として用ひしなるべし』正稅・公廨(くげ)などの外に剩(あま)れる稻。
しようだうか 證道歌【名】禪の證道を詠じたるもの。紙數數葉に過ぎざれども、文辭流麗、誦するに堪ふ。支那の眞覺大師玄覺、禪の第六祖慧能に會し、つひに禪に歸して作りしものといふ。
しようたうにん 承當人【名】しようけいにん(承繼人)に同じ。
しようだく 承諾【名】聽入るること。うけひくこと。うべなふこと。承知。承引。
しようだくしや 承諾者【名】承諾せる人。
しようだくしよ 承諾書【名】承諾の旨を記したる書面。
しようたん 稱歎・稱嘆【名】ほめはやすこと。賞歎。
じようだん 冗談・串談【名】ふざけたる談話。むだばなし。じようだんばなし。
じようだんばなし 冗談話・串談話【名】前條に同じ。
しようち 勝地【名】[一]形勝の地。 太平記「都…桓武の聖代、この四神相應の地を選びて、…百王萬代の寶祚を修しおかれし勝地なれば」[二]よき土地。名所。勝境。勝區。 榮花「殿のうちのありさましつらひ、なほ、こは、いかなりける勝地ならんと見えたり」
しようちぢやうしゆなし 勝地定主無し【句】『白居易の遊二雲居寺一贈二穆三十六地主一と題する詩に「亂峯深處雲居路、共蹋レ花行獨惜レ春、勝地本來無二定主一、大都山屬二愛レ山人一」とあるに本づく』土地の形勝に見る人人の占め得べきものにて、一人の占有することは能はぬものなり。〔諺語〕
しようちにしゆなし 勝地に主(ぬし)無し【句】前條に同じ。〔諺語〕
しようち 承知【名】[一]『三國志の蜀の費詩傳に「承二知消息一慨怨永歎」とあり』旨を承りて知ること。[二]しようだく(承諾)に同じ。 盛衰記「奉レ仰下知如レ件、諸國官ニ承知一」
承知之(の)助(すけ)【句】承知を人名めかしていふ語。
承知の幕【句】承知せる事柄。
しようち 勝致【名】すぐれたる風致。
しようち 證智【名】〔佛〕證悟を得る正智。
しようぢ 聳峙【名】そびゆること。そばだつこと。
しようちく 松竹【名】松と竹と。松筠。
しようちくばい 松竹梅【名】松と竹と梅と。「歳寒の三友」參照。
しようぢじ 勝持寺【名】山城國乙訓(おとくに)郡大原野村にある天台宗の寺。役(え)小角の開基。本尊は藥師如來。舊稱、大原(おほはら)寺。足利尊氏祈禱所に充てて、今の名に改め、織田・豐臣・德川の諸氏も相次いで諸堂を修補す。境内に西行の庵室あり。俗稱、花の寺。
しようちづく 承知盡【名・副】互に承知し居ること。
しようちとくわいへん 勝地吐懷篇【名】〔書〕類字名所集の歌の國國の相違、或は脫漏の名所、或は中古より誤れる地名などを論じたるもの。二卷。僧契沖の著。
しようちん 昇沈【名】[一]昇ることと沈むことと。[二]盛んなることと衰ふること。浮沈。 平家「當來の昇沈を顧みず」 盛衰記「隔生卽忘(きやくしやうそくまう)とて、生死(しやうじ)道隔りぬれば、昇沈・苦樂ことごとくに忘れ」
しようぢん 承塵【名】『三輔決錄に「有レ鳩從二承塵上一飛下二几前一」とあり』屋根裏より落つる塵埃を承くるために、板・布などを張りたるもの。天井は即ちその變化したるもの。なげし(長押)參照。 和名「承塵、施二於上一承二塵土一也」
しようぢん 衝陣【名】敵に向ひて突擊する軍隊。 太平記「四武の衝陣、堅を碎きて、百戰の勇力、變に應ぜしかば」
じようちやう 冗長【名】無用の長物。いたづらに長たらしきこと。
しようちやうじゆゐん 勝長壽院【名】源賴朝、父義朝の追福の爲に鎌倉大御堂谷の地に建てし寺。足利氏の頃廢絕し、今はその遺趾詳かならず。南御堂。 金槐「三月末つ方、勝長壽院に詣でたりしに」
しようちやうじゆゐんぶぎやう 勝長壽院奉行【名】鎌倉時代に、勝長壽院の寺務を掌りし役。
しようぢやうゐん 勝定院【名】〔人〕あしかがよしもち(足利義持)の諡號。
しようちゆう 鐘頭【名】〔佛〕禪寺にて、一日四回、晦・朞・齋(さい)・入定の時の鳴鐘を撞く役。
じようぢよ 乘除【名】[一]掛けることと割ることと。乘法と除法と。[二]增すことと減ずることと。
しようちよう 承澄【名】〔人〕畫僧。小川の僧正と號す。特に馬を畫くに巧にして、筆法、鳥羽僧正に似たり。建治・弘安頃の人。
しようちよう 鍾寵【名】めで愛すること。寵愛をあつむること。
しようぢゐ 誦持位【名】〔佛〕衆僧の讀經する時、過失を正し、又は經文の忘逸を察して、僧綱に訴へ告ぐることを掌る僧職。
しようてい 衝程【名】『英 Stroke』汽筩(きとう)中に於けるピストンが、一端より他端に滑動する距離。
しようてい 訟廷【名】さいばんてい(裁判廷)に同じ。
じようてい 繩梯【名】なはばしご(繩梯子)に同じ。
しようていきんすゐ 松亭金水【名】〔人〕江戸の小說家。通稱は中村源八。積翠道人と號す。爲永春水の門に入りて、人情本の作あり。讀本(よみほん)には尼子九牛傳・大岡仁政錄等あり。文久二年歿す。年六十八。
しようていぶん 鐘鼎文【名】支那古代の鐘・鼎・彝器(いき)に鑄又は繫(ほ)りたる文字。古文・大篆の類。
しようてき 悚惕【名】おそれをののくこと。悚懼。
しようてん 昇天【名】[一]天に昇ること。[二]〔基〕『英 Ascension』基督の磔刑の後、七日にして甦(よみがへ)り、のち天に昇れること。
しようでん 昇殿【名】『唐書の禮樂志に「應レ升レ殿者詣二東西階一」とあり』中古以後、四位以上の者、また藏人(くらうど)は六位にても許されて、禁中の殿上に昇りしこと。これを許さるる時は、藏人頭(とう)、宣旨を書し、藏人別當勅を奉じて傳宣し、賀拜舞を奏せしめ、昇殿の事終れば、日給簡(につきふのふだ)に附記する習にて、これを許されし者を、殿上人又は堂上人と呼び、然らざる者を、地下人(ぢげにん)又は地下を呼びたり。上皇御所のを御院昇殿といひ、これに對して、禁中のを內昇殿(うちのしようでん)と呼び、東宮御所の昇殿もあり。それぞれその聽許を經たりしが、後には內昇殿を許されし者は、他

の二者を通じて許さるることとなりたり。はんしようでん(半昇殿)・げんしよう(還昇)參照。千載「まだ小男に侍りけるとき、始めて昇殿申させ侍りけるを」
じようでん 承傳【名】承け傳ふること。
じようでん 乘田【名】じようでん(剩餘田)に同じ。
しようてんさい 昇天祭【名】〔基〕『英Ascension Day』基督の復活後、昇天せるを祝する祭。復活後四十日目に昇天せりとの傳說により、復活祭後、四十日目に行ふ。神聖木曜日。昇天節。
しようてんせつ 昇天節【名】〔基〕『英Holy Saturday』前條に同じ。
しようてんらく 承天樂【名】雅樂の一。壹越(イチコツ)調に屬す。
しようとう 昇等・陞等【名】一等級の昇ること。二官等の高くなること。陞叙。
しようとう 竦動・悚動【名】ぞっとするほど心を動かすこと。
しようとう 聳動【名】おそれ動くこと。おどろかし動かすこと。
しようどう 衝動【名】〔哲〕『英Impulse』何等の目的を意識せず、善惡を思考せず、心的生活の一般系統と無關係に、單に外界の刺戟に應じて、迅速に動く行爲。例へば反射運動・本能等の類。
しようどう 鐘銅【名】『英Bell metal』青銅の一種。鐘・鈴などを鑄るに用ふるもの。銅百分の七十七乃至八十、錫二十乃至二十三より成り、間間少量の鉛・鐵・ニッケル等を混加するものあり。音響を出すため、その質堅硬なるを要す。
じようとう 承鐙【名】馬の旋毛(ツジ)の一。脇腹の前にあるもの。
承鐙の肉(シシ)【句】あぶみずり(鐙擦)に同じ。
じようとう 蒸騰【名】〔植〕次條に同じ。
じようとうさよう 蒸騰作用【名】〔植〕『英Transpiration』根より吸收したる水が、莖・枝・葉を通過して、外部に蒸發する作用。通發作用。蒸散作用。
しようどうすゐしや 衝動水車【名】水車の一。水の衝動によりて回轉するもの。
しやうどうつばめ しやうどう燕【名】〔動〕燕屬中の小形なる鳥。尾は僅かに分叉せるのみ。海邊に群をなして飛翔し、濟岸の土砂に穴を穿ちて、產卵す。すなむぐりつばめ。
しようどうはふ 衝動法【名】〔醫〕『英Implantation』炎症治療法の一。局所の血行を旺盛ならしめ、組織細胞の機能を昂さしめ、炎症物を驅除するもの。罨布(アンプ)濕布繃帶を用ふる溫蒸法・溫浴法・按摩法及び水銀劑沃度丁幾(チンキ)を局所塗布料とし、沃度加里を內服薬とする類。
しようとく 頌德【名】功德を頌すること。
しようとく 稱德【名】『論語の憲問篇に「驥不稱其力、稱其德也」とあり』その物がその德に稱(カナ)ふこと。
しようとく 所得【名】しよとく(所得)に同じ。〔古語〕宇治拾「玉のぬしの男、しようとくしたりと思ひけるに盜ひとりて」
しようとく 證得【名】〔佛〕一しようにふ(證入)に同じ。二みだり心を動かさぬやうにすること。〔古語〕蜻蛉日記「人にゆるさるるほどにもなりたりとも、しようとくして、われは、きぞくしたる家よみたまふな」
しようとく 承德【名】堀河天皇の御代の年號(紀元一七五七年—一七五八年)。
しようとく 誦讀【名】そらよみ。よむこと。讀誦。
しようとくくわんぎち 證得歡喜地【名】〔佛〕『歡喜の境地を證得する義』しようくわ(證果)に同じ。
しようとくてんわう 稱德天皇【名】〔人〕第四十八代の天皇。孝謙天皇の重祚。在位五年(紀元一四二五年—一四二九年)。神護景雲四年崩ず。壽五十三。
しようとくひ 頌德碑【名】功德をほめたたへて記せる碑。
しようとくへう 頌德表【名】功德をほめたたへて奉る文書。
しようとつ 衝突【名】一つきあたること。二相互に背反すること。扞格(カンカク)。三〔理〕『英Impact』運動速度の異なる、もしくは一方は速度を有し、他の一方は靜止せる二物體が接觸したる瞬間に起る作用。
じようどの 尉殿【名】一じよう(尉)の敬稱。二〔植〕おきなぐさ(翁草)を云ふ。西國の方言。
しようなん 勝南【名】〔地〕美作國の舊郡の一。明治三十三年勝北郡と合して、勝田(カツタ)郡となる。
じようなん 拯難【名】『拯はすくふ義』きうなん(救難)に同じ。
しようにふ 證入【名】〔佛〕正智を以て、如實に眞理を證得すること。悟入。證得。
しようにん 證人【名】一しようこにん(證據人)に同じ。十訓「この證人のために」二ほしようにん(保證人)に同じ。三〔法〕當事者以外の第三者にして、或見聞せる事實を法廷に於て供述するために、裁判所より呼出され、宣誓の上、供述をなす人。四ひとじち(人質)に同じ。
しようにん 承認【名】『承知・認諾の義』異見なくして、承諾すること。
しようにん 使用人【名】一物又は人を使用する人。使用者。二他人に使用せらるる人。三しやうげふしようにん(商業使用人)の略。
しようにん 昇任・陞任【名】上級の官にのぼること。
しようにんしよ 承認書【名】承認の旨を記したる書面。
しようにんぶぎやう 證人奉行【名】足利幕府の職制の一。判決の公平を保つために、對決に立合ひ、吟味・諮問の奉行に偏頗なきやうにせしもの。今の檢事の如し。
しようにんやしき 證人屋敷【名】『しようにん(證人)』は質を見よ』江戸幕府の時、諸侯の妻子を證人として留置きたる江戸屋敷。
しようにゆうせき 鐘乳石【名】〔鑛〕『英Stalactite』石灰岩中に滲入せし水の炭酸石灰を溶解して、空洞壁より滴る時、水分蒸發して方解石を生じ、次第に垂れさがりたるもの。つららいし。石のよだれ。いしのつらら。いはつらら。いしのはな。いしのちち。石の乳(チ)。せきじゆん(石筍)參照。
しようにゆうどう 鐘乳洞【名】『英Limestone caves』鐘乳石より成れる空洞。石灰洞。
じようによ 證如【名】〔人〕一高僧。一に聯如に作る。藤原佐道の子。證道に就きて顯密の教を學ぶ。貞觀八年寂す。年八十七。二眞宗の僧。本願寺第十代の主。名は光教。光融の長子。後奈良天皇即位の禮を行はれし時、大内義隆資を獻じ、證如またこれを助けしため、二品親王の宣下を賜ふ。天文二十三年寂す。年三十九。
じようねつ 蒸熱【名】じようしよ(蒸暑)に同じ。
しようねん 稱念【名】〔佛〕口に佛號をとなへて、心に佛を念ずること。稱名と念佛と。心念口唱(コウシヤウ)。
しようねんじ 稱念寺【名】越前國坂井郡長崎に在る時宗の寺。開基は遊行・他阿上人。往生院と號す。
しようは 衝破【名】つき破ること。突破。
じようば 乘馬【名】一馬に乘ること。又、その人。二乘用に供する馬。のりうま。じようめ。
しようはい 勝敗【名】かちまけ。勝負。
勝敗は兵家の常【句】「勝負は兵家の常」に同じ。〔諺語〕
じようはう 承保【名】白河天皇の御代の年號(紀元一七三四年—一七三六年)。
しようはうかんじんしやうむわうだい 勝寶感神聖武皇帝【名】〔人〕しやうむてんわう(聖武天皇)に同じ。
しようはく 松柏【名】一松と柏と。二常磐木の稱。三節操を守りて變ぜぬこと。
松柏の操【句】『南史に「奥三松柏一比操」とあるに本づく』堅固なる節操。
松柏の下(モト)その草殖えず【句】『左傳に「松柏之下、其草不殖」とあるに本づく』小なるものは、大なるものに勢力を奪取せらるるをいふ。
松柏の茂(シゲ)【句】『詩經小雅の天保篇に「如松柏之茂」とあるに本づく』松柏の蒼蒼と繁茂せる有様。
しようはくくわ 松柏科【名】〔植〕しようさ

んくわ(松柏科)に同じ。
しようはくるゐ 松柏類【名】〔植〕『英Coniferae』顯花植物・裸子類の一門。その特長は木本にして、莖幹は分枝し、導管は第二木質部に於て缺如す。單葉にして、全緣なし、鱗片形・針形・披針形又は片狀なり。花は單性にして雌雄同株、花被なし。
じようばせん 乘馬戰【名】〔兵〕騎兵が乘馬のまま交戰すること。徒步戰に對して
じようばたい 乘馬隊【名】騎馬の軍隊。
しようはたじやう 勝幡城【名】尾張國海部(アマ)郡勝幡村大字勝幡にありて、織田信定の居りし城。
じようはつ 蒸發【名】〔理〕『英Evaporation又Vaporization』液體の、熱を受けて、表面より氣體と化する作用。
蒸發の潛熱【句】〔理〕きくわねつ(氣化熱)に同じ。
しようばつ 擢拔【名】特別に高く擧ぐること。
じようはつき 蒸發氣【名】蒸發によりて生じたる氣體。ゆげ。蒸氣。
じようはつけい 蒸發計【名】『英Evaporimeter』氣象器械の一。水面よりの蒸發量を測定する器。通例銅製又は亞鉛製の圓筒の内面に目盛(メモリ)を引きたるもの。これに水を盛りて、平に地面に安置し、一定時の後、その水の減じたる量を計り、以てその時間内に於ける蒸發量を知る。
じようはつでんしよ 私用發電所【名】自家の需要のために設けたる發電所。
じようはつねつ 蒸發熱【名】〔理〕きくわねつ(氣化熱)に同じ。
しようはふ 舂法【名】檢見法の一。坪刈して得たる稻の穗を去りて籾にし、其に枇(シヒナ)を簸(ヒ)り去ること。「ひかた。」
しようはふ 使用法【名】使用の方法。用法。
しようばふ 承乏【名】『左傳の成公二年の條に「敢告二不敏一攝レ官承レ乏」とあり。空乏を承(ウ)けて、暫くこれを補ふ義』官に就くことの謙稱。
じようはふ 乘法【名】〔數〕かけざん(掛算)に同じ。
じようばへい 乘馬兵【名】乘馬の兵卒。
しようはん 鐘板【名】鐘と板木(バンギ)と。…鐘板鳴って、食堂(ジキダウ)に入る」
しようはん 證判【名】次條の略。
しようはんじやう 證判狀【名】いけんじやう(一見狀)に同じ。
しようび 鍾美【名】『美を鍾(アツ)むる義。じようあい(鍾愛)參照』多くの美(ヨ)き事の、一つの物の上にあつまれること。「讚」。
しようび 稱美【名】ほめたたふること。稱讚。
じようひ 冗費【名】無益なる入費。むだづかひ。冗用。
しようびん 鴗【名】〔動〕『その誰』かはせみ(川蟬)に同じ。
じようひん 自用品【名】自用に供する物品。
しようひやう 證憑【名】證明のよりどころとなるもの。證據。
しようひやういんめつざい 證憑湮滅罪【名】〔法〕他人の刑事被告事件に關する證憑を湮滅し、又は僞造・變造もしくは僞造・變造の證憑を使用するによりて成立する犯罪。
しようひやうしよ 證憑書【名】證憑となる書面。證書。
しようひやうしよるゐ 證憑書類【名】證憑となる書類。證據書類。
しようひやうぶつけん 證憑物件【名】證憑となる物件。證據物件。
しようぶ 勝負【名】一かちまけ。二しようはい(勝敗)に同じ。三かちまけを決すること。四しようぶごと(勝負事)の略。
有る時勝負【句】たまたま資力を得て、冒險なる輸贏を大膽に決行すること。一六勝負。〔俚諺〕
勝負は時の運【句】勝つも負くるも、ともにその時の運命なれば、人の力にては如何ともせんやうなし。〔諺語〕
勝負は兵家の常【句】『唐書の裴度傳に「帝曰、一勝一負、兵家常勢」とあるに本づく』かちまけは兵家のならひ。勝敗は兵家の常。
しようぶ 鐘部【名】〔動〕水母(クラゲ)の、鐘狀をなせる部分、即ちその體。
しようふう 松風【名】松に吹く風。まつかぜ。松籟。松韻。松濤。
しようぶがは 勝武革【名】しやうぶがは(菖蒲革)に同じ。
しようぶく 承服・承伏【名】承知して服從すること。なつとく。
しようぶごと 勝負事【名】一かちまけを爭ふ遊技。二かけごと。ばくち。
しようぶし 勝負師【名】ばくちうち(博打)に同じ。狂言「三人片輪」このあたりに隱れもない勝負師で御座る」
しようぶつ 稱佛【名】〔佛〕佛名を稱ふること。稱名。念佛。
しようぶづく 勝負盡【名】かちまけ次第にて決すること。狂言「宗論」正味で償ったる錢ではなし、數ばかりの勝負づくで」
しようぶとく 勝負得【名】勝負事に勝ちて、賭(カケ)を得ること。狂言「某と勝負得をしたれば」
しようぶなし 勝負無【名】互に優劣の別なきこと。あひこ。
しようぶまはり 勝負廻【名】鼓翻にて、勝負を爭ふこと。
じようぶん 冗文【名】冗長なる文句。
しようへい 升平・昇平【名】『品字箋に「升平、言二成平一也」前漢書梅福傳に「民有三升平之頌一」注に「升上也、日漸上升也」又「昇平、繼日當レ昇、平也」とあるに本づく』たいへい(太平)に同じ。
しようへい 勝兵【名】すぐれたる軍兵。
しようへい 承平【名】『漢書の食貨志に「今累世承平、豪富吏民、貲數鉅萬」とあり。永く太平を承(ウ)くる義』太平の續くこと。
しようへい 承平【名】朱雀天皇の朝の年號(紀元一五九一年—一五九八年)。
じようへい 冗兵【名】無益なる兵隊。
じようべい 蒸餠【名】一まんぢゆう(饅頭)二ぱん(麪包)に同じ。
しようへう 證票【名】證據となるべき札。例へば受取證の類。
しようへうれう 證票料【名】證票を受くるために支拂ふ料金。
しようべき 昇冪【名】〔數〕『英Ascending power』多項式の項又は文字を、次數の高きを先にし、低きを後にして排列すること。例へば $3ab^3-3a^2b^2+10a^3b-12a^4$ をその昇羃なりといふ類。降冪に對して
じようべき 乘冪【名】〔數〕べき(冪)に同じ。
じようへん 乘變【名】事變につけこむこと。乘機に對して
じようへんせつたう 乘變竊盜【名】火災・水災などの變事に乘じてなす竊盜。
しようほうらう 承奉郎【名】從八位上の唐名。
しようほく 勝北【名】〔地〕美作國の舊郡の一。しようなん(勝南)參照。
じようぼく 繩墨【名】一すみなはと、その用に供する墨と。二きく(規矩)に同じ。
じようぼく 濃墨【名】濃き色の墨。うす墨の反對。
しようぼだい 證菩提【名】〔佛〕『梵Anuttara-samyak-sambodhi(阿耨多羅三藐三菩提)の意譯』菩提を證得すること。佛道修業を成就すること。佛果を得ること。證大菩提。「ぼだい(菩提)」參照。
しようほん 證本【名】證據とすべき書籍。
しようぼん 鐘梵【名】鐘聲と梵唄と。
しようま 升麻【名】〔植〕一みやましようま(深山升麻)の略。二あきからまつ(秋唐松)の異稱。
しようまい 舂米【名】一うすづきたる白米。つきよね。二古、諸國にて舂(ツ)きて、京都に輸送し、大炊(オホヒ)寮などに納めし白米。
しようまん 勝鬘【名】〔書〕一しようまんぎやう(勝鬘經)の略。榮花物語「法華・維摩・勝鬘等の三部の大乘」二しようまんゐん(勝鬘院)の略。〔俗曲〕攝津名所圖會「振返り見る勝鬘の、愛染様に愛敬を祈る芝居の子供衆や、道頓堀の色色や」
じようまん 冗漫【名】冗長にして、散漫なること。
しようまんあいぜんゑ 勝鬘愛染會・勝鬘愛染會【名】大阪の勝鬘院にて、毎年六月一日に本尊愛染明王を開帳すること。愛染明王は、愛敬愛染の佛神なるため、花柳界・芝居等に關係ある者の參詣多く、各自に紋所づき提灯一對を奉納する習慣あり。

しようまん-ぎやう 勝鬘經【名】〔書〕『梵 Srîmâlâ devî siṃhanâda の譯語』詳しくは「勝鬘師子孔一乘大方便廣經」といふ。劉宋の求那跋摩(ｸﾞﾅﾊﾞﾂﾏ)三藏の譯。一卷。大寶積經中の第四十八勝鬘夫人會と同本異譯なるもの。勝鬘夫人の說示に係るといふ。二乘を破斥して、大乘の最も尊きものなることを說けるもの。次條參照。
しようまん-ぶにん 勝鬘夫人【名】〔人〕『梵 Srîmâlâ(尸利摩羅)の尸利を勝と譯し、摩羅を鬘と譯せるもの』印度舍衞(ｼｬｴ)國王波斯匿(ﾊｼﾉｸ)とその夫人摩利(ﾏﾘ)との間に生れし一女。阿踰闍(ｱﾕｼﾞｬ)國王友稱に嫁し、聰明にして、佛敎に歸依し、勝鬘經はその說示に係るといふ。一說には、假設の人物にして、その口を假りて、大乘の深義を說きしに過ぎずと。
しようまん-まつり 勝鬘祭・勝曼祭【名】しようまんあいぜんゑ(勝鬘愛染會)に同じ。
しようまん-まゐり 勝鬘參・勝曼參【名】勝曼愛染會への參詣。愛染まゐり。心中乃は氷の朔日「勝鬘まゐりのよね樣たち、駕籠がもどると云ふうちに」
しようまん-ゐん 勝鬘院・勝曼院【名】大阪市南區天王寺外、夕陽丘(ﾕｳﾋｶﾞｵｶ)町にある天台宗の寺。四天王寺の末寺。本尊は愛染明王。聖德太子の勝鬘經の講讚を行ひし道場の址なりといふ。しようまんあいぜんゑ(勝鬘愛染會)參照。
じよう-みん 烝民【名】『烝は衆の義』しよみん(庶民)[一]に同じ。
しよう-みやう 稱名【名】〔佛〕[一]佛の名號を唱ふること。念佛。稱佛。[二]阿彌陀佛の名號を唱ふること。唱名。
しよう-みやう 證明【名】〔佛〕しようめい(證明)に同じ。盛衰記「七堂の三寶・四所明神、憐を垂れて、我が念を知見・證明したまへ」
しようみやう-じ 稱名寺【名】[一]武藏國久良岐(ｸﾗｷ)郡金澤村に在る眞言律宗の寺。文永六年北條氏の一族なる金澤實時の本願に由り、その子顯時建立す。律僧妙性を開山とす。境內に金澤文庫あり。[二]下總國結城(ﾕｳｷ)郡結城町に在る眞宗の寺。新居山と號す。建保中、親鸞の弟子眞佛の開基。本尊は阿彌陀如來。[三]三河國碧海(ｱｵﾐ)郡大濱町にある時宗の寺。延元四年僧躰阿開基。德川氏の祖有親の遺跡を傳へて、有名なる道場なり。
しようみやうじ-どの 稱明寺殿【名】〔人〕ほうでうさねとき(北條實時)に同じ。
しようみやうじ-ぶんこ 稱名寺文庫【名】かなざはぶんこ(金澤文庫)に同じ。
しようみやう-しや 稱名者【名】稱名する者。著聞「功德最第一、六時稱名者」
しようむ-らう 承務郎【名】從八位下の唐名。
じようむ-ゐん 乘務員【名】汽車・電車などに關する職員の、常に車輛の上にて、職務に從事する者。卽ち機關手・運轉手・車掌などの類。
しよ-うん 曙雲【名】あけぼのの雲。曉雲。
じよう-め 乘馬【名】じようば(乘馬)[二]に同じ。
しよう-めい 證明【名】證據を立てて、理由・事情を明かにすること。あかし。
しよう-めい 鐘銘【名】鐘の銘。
しよう-めい 松明【名】たいまつ(松明)に同じ。
松明の役(ﾔｸ)【句】儀式の際、庭上にて、松明(ﾀｲﾏﾂ)を持つ役。
しようめい-しよ 證明書【名】證明の旨を記せる文書。
しようめい-しようけん 證明證券【名】〔法〕しようけんしようけん(證據證券)に同じ。
しようめい-もん 承明門【名】平安城の舊內裏の內郭十二門の一。南面三門の中央、長樂門と永安門との間、建禮門の後方、紫宸殿の前方にあり。
しようめい-もんゐん 承明門院【名】〔人〕みなもとありこ(源在子)に同じ。
しよう-めう 勝妙【名】すぐれてたへなること。盛衰記「たとひ天上勝妙の樂(ﾀﾉｼﾐ)に誇るとも」
しよう-もん 證文【名】證據となるべき書類。契文(ｹｲﾓﾝ)。十訓「この家の證文など、質におきて、人の物を借りて」
證文の出後(ﾀﾞｼｵｸﾚ)【句】手後(ﾃｵｸﾚ)となりて、効力なきに至れる譬。證據の出しおくれ。〔諺語〕
生きた證文【句】その場に居合はせて、その事件を實際に知れる人を證人とするにつきていふ語。
しよう-もん 松門【名】松の立樹のおのづから門の形をなせるもの。謠曲(景淸)「松門ひとり閉ぢて、年月を送り」
しようもん-がに しようもん蟹【名】〔動〕しほまねき(望潮)に同じ。
しようもん-ぐら 證文藏【名】證文類を入れ置く藏。
しようもん-しらべかた 證文調方【名】江戶幕府の職制の一。下勘定所の一部。代官又は諸役所等より差出したる會計の證文を稽査して、調印することを掌りしもの。
しようもん-ち 證文地【名】江戶時代に由緖ある寺院に寄付せし田地。將軍家より寄贈に係るものは、御朱印地と呼びたり。
しよう-やう 稱揚【名】しやうやう(賞揚)に同じ。
じようやう-だいし 承陽大師【名】〔人〕だうげん(道元)の諡號。
しよう-よ 稱譽【名】ほめたたふること。ほめそやすこと。
しよう-よ【名】ちそう。饗應。〔日向國の方言〕
じよう-よ 剩餘【名】[一]あまり。のこり。餘分。[二]〔數〕『英 Remainder』或數又は式を、他の數又は式にて除したる殘餘。
剩餘の定理【句】〔數〕除法を用ひずして、剩餘を求める定理。
じよう-よ 乘輿【名】『支那にては、もと天子以外にもいひしを、漢以來、狹義に用ひらるることとなれり。しやが(車駕)參照』天皇の乘りたまふ御車。車駕。
しよう-よう 縱容【名】被害を默許すること。
しよう-よう 慫慂・從容【名】『揚子方言に「己不レ欲レ喜而旁人說レ之、不レ欲レ怒而旁人怒レ之、謂二之慫慂一」、史記の衡山王傳に「日夜從容」とあり』勸めそやすこと。
じよう-よう 冗用【名】じようひ(冗費)に同じ。
しよう-よう 從容【貌】あわてず騷がず落ちつきたるさま。ゆつたり。自若。
しようよう-ろく 從容錄【名】〔書〕『從容は萬松禪師の住せし燕京なる報恩寺內の庵號』天童宏智の頌古百則を評唱せるもの。六卷。宋の萬松禪師の著。
じようよ-きん 剩餘金【名】餘分の金。のこりの金。剩金。
じようよ-でん 剩餘田【名】こうでん(公田)[二]に同じ。
じようよ-はふ 剩餘法【名】〔哲〕『英 Method of residues』論理學者英人ミル(J. S. Mill)の歸納法の第四。一現象の中より、その現象に先だてる事柄の中の、その結果なりと、既往の研究によりて知られたる部分を除き去りて、その現象の殘れる部分は、先だてる事柄の中の殘部の結果なることを推知するもの。(類同法・差異法・相變法に對して)
しよ-うら 初裏【名】〔文〕しよをり(初折)を見よ。
しよう-ら 松蘿【名】[一]〔植〕さるをがせ(松蘿)に同じ。[二]松にからまるかづら。
松蘿の契【句】『前條[二]の意より轉じていふ』男女の契。盛衰記「時賴人しれぬ見參して、……松蘿の契色深く」
しよう-らい 松籟【名】しようふう(松風)に同じ。
しよう-らん 縱覽【名】じゆうらん(縱覽)に同じ。
しよう-り 勝利【名】[一]相手に勝つこと。かち。[二]〔佛〕すぐれたる利益(ﾘﾔｸ)。徒然「亡者の追善には、何事か勝利多き」
じよう-りう 蒸溜・蒸餾【名】〔理〕『英 Distillation』液體を熱して、蒸氣とならしめ、その冷凝したる滴を溜らすること。(乾溜に對して)
じようりう-き 蒸溜器・蒸餾器【名】『英 Distillatories 又 Still』液體を蒸溜するに用ふる器。簡單なる方法にはレトルト・ランビキなどを用ひ、工業上等には、金屬製の複雜なる裝置を用ふること多し。蒸露罐。


(じようりうき)

じようりう-しゆ 蒸溜酒・蒸餾酒【名】くわしゆ(火酒)に同じ。

じようりう-すゐ 蒸溜水・蒸餾水【名】蒸溜せしめたる水。
じようりう-ぶんせきはふ 蒸溜分析法・蒸餾分析法【名】〔理〕ぶんべつじようりう(分別蒸溜)に同じ。
しよう-りつ 聳立【名】『立の字の音、正しくはりふ』そびえたつこと。
しよう-りつ 悚慄【名】ふるひおそるること。
じよう-りつ 繩律【名】『繩を引きてただす義』のり。規則。
しよう-りふ 聳立【名】しようりつ(聳立)を見よ。
しよう-りん 松林【名】松のはやし。まつばやし。
しようりん-ゐん 勝林院【名】山城國愛宕(ｵﾀｷﾞ)郡大原に在る天台宗の寺。三千院の北に位す。延曆寺の別院。長和二年寂源の開基。本尊は佛工康成の作の阿彌陀佛。
しよう-りやう 稱量【名】『稱(ﾊｶ)り量る義』輕重・多寡をはかること、又そのもの。はかりめ。
しよう-りやう 承領【名】りやうしよう(領承)に同じ。
じよう-りやく 承曆【名】白河天皇の御代の年號(紀元一七三七年―一七四〇年)。
しようりゆうじ-じやう 勝龍寺城【名】山城國乙訓(ｵﾄｸﾆ)郡新神足(ｼﾝｺｳﾀﾘ)村大字勝龍寺(又は青龍寺)にありしもの。畠山義就(ﾖｼﾅﾘ)細川藤孝等の居りしことあり。明智光秀の山崎戰敗の後、一時これに入りしが、支へ得ずして逃れ、遂に廢城となる。
しよう-りよう 升龍【名】『周禮の大人行に「載二大旆日月・升龍・降龍一」とあり』龍の天へ上るさまを描きたるもの。上り龍。
しよう-れう 承了【名】れうしよう(了承)に同じ。
しよう-れう 使用料【名】〔法〕或物又は權利又は營造物などを使用せる對價として支拂ふ金。
しよう-れつ 勝劣【名】[一]いうれつ(優劣)に同じ。太平記「何れを勝劣とも定めがたし」謠曲(三笑)「神前に供ふる御燈の光、山河・草木かがやき渡り、日夜の勝劣見えざりけり」[二]〔佛〕日蓮宗にて、法華經と他の一切經とを對比し、その優劣を討究批判すること。又、法華經二十八品中、後の十四品のは、前十四品に優越せりとする事をもいふ。
しようれつ-は 勝劣派【名】〔佛〕じふもんは(什門派)に同じ。
しよう-ろ 松露【名】[一]松の葉におく露。[二]〔植〕菌の一種。春の末、海邊もしくは內地の松の下の砂中に生ず。形圓く、大きさ七八分、質軟かにて、初は白色なれど、大氣中に露出せしめおく時は、淡褐色となり、後、紅色を發す。生鮮なるを調理し、又、鹽漬・砂糖漬としても食ふ。くりしよろ。〔麥蕈〕
しよう-ろ 衝路【名】[一]敵の攻寄せて來る路。[二]物事の多くあつまる場所。
じよう-ろ 如雨露【名】じよろ(如露)に同じ。
しようろ-あざみ 松露薊【名】〔植〕きつねあざみ(狐薊)に同じ。
しよう-ろう 鐘樓【名】かねつきだう(鐘撞堂)に同じ。
しようろ-かん 松露羹【名】古の菓子の一種。下學集「松露羹」
じようろ-くわん 蒸露罐【名】じようりうき(蒸溜器)に同じ。
しようろ-ばん 承露盤【名】[一]『漢書の郊祀志に「武帝卽レ位、其後又作二柏梁銅柱、承露仙人掌之屬一」とありて、顏師古の註に「三輔故事云、建章宮承露盤、高二十丈、大七圍、以レ銅爲レ之、上有二仙人掌一承レ露、和二王屑一飮レ之」とあり』支那漢の武帝が、建章宮に設けて、露を承けし銅製の盤。[二]『谷響集卷の一に「重重相輪、名二承露盤一、故傳中(高僧傳)云、承露金盤一十一重・鐵鐷角張盤、及鐷上皆有二金鐸一、承露盤或略云二露盤一」とあり』ろばん(露盤)に同じ。
じよう-わ 承和【名】仁明天皇の御代の年號(紀元一四九四年―一五〇七年)。
承和の變【句】承和九年伴(ﾄﾓ)健岑(ｺﾜﾐﾈ)等、太子恒貞親王を奉じて、東國に去らんとせし事變。事漏れて、太子は廢せられ、健岑等は配流に處せられたり。
じよう-わ 冗話【名】むだばなし。無益の說話。冗談。
しよう-わう 鍾王【名】〔人〕支那の古の能書家なる鍾繇(ｼｮｳｴｳ)と王羲之と。
じようわ-しやうはう 承和昌寶【名】次條の略。
じようわしやうはう-せん 承和昌寶錢【名】承和二年より十四年にかけて鑄造せし銅錢。大さと重量とに三種あれども、何れも面に「承和通寶」の文あり。
じようわ-の-いろ 承和色【名】『承和の帝、卽ち仁明天皇が特に黃菊を愛せられしが名づくといふ』〔植〕きく(菊)の異稱。そがいろ。そがのいろ。〔古語〕
じようわ-らく 承和樂【名】〔音〕雅樂の一。仁明天皇の承和年中、我が國にて新作せしもの。壹越(ｲﾁｺﾂ)調に屬し、六人又は四人にて舞ひ、答舞には仁和樂を用ふ。
しよう-ゐ 稱唯【名】ゐしよう(唯稱)を見よ。
しよう-ゐん 松筠【名】『筠は竹の義』松と竹と。
しよう-ゐん 松韻【名】松にあたる風の音。松籟。
じよう-ゐん 冗員【名】不用なる人員。
じよう-ゑん 乘圓【名】〔人〕眞言宗の僧。俗姓は岡本、字は朗然。晚に玄玄翁、また玄玄子と號す。大阪の人。和泉國五智山の開祖。傍ら書畫を善くす。寬文十三年寂す。年四十六。
しよ-え 所依【名】〔佛〕たよる所。よるところ。よりどころ。
しよ-えき 諸役【名】しよやく(諸役)[二]に同じ。
しよ-えん 諸緣【名】〔佛〕諸種の緣。吾が心身に關する、すべてのほだし。いろいろの外界の關係。徒然「生活・人事・技能・學問等の諸緣を止めよとこそ、摩訶止觀にも侍れ」
しよ-えん 所緣【名】[一]〔佛〕人の心を動かす外界の現象。(能緣に對して)[二]ゆかり。緣。緣由。日本振袖始「蘇民が知邊の御勞とあれば、外ならぬ所緣もあり」
しよ-えん 初緣【名】初めての緣組。初めての嫁入。(再緣に對して)
しよえん-かんくわ 所緣感化【名】〔佛〕外界より受くる感化。
じよ-おん 助音【名】[一]〔佛〕辭助(ｺﾄﾀｽｹ)をなすこと。同音に歌ふこと。著聞「酒色の句を詠ず。極藺(ｺﾞｸﾗﾝ)並びに非藏人(ﾋｸﾗｳﾄﾞ)知經助音す」[二]じよごん(助言)に同じ。平家「今生にて早捨てられ奉つたる身なれば、助音しても何かせん」
しよ-おもて 初表【名】〔文〕しよをり(初折)を見よ。
しよおる (英 Shawl)【名】かたかけ(肩掛)に同じ。
しよお-ゐんどお (英 Show-window)【名】顧客の注意を引くために、商品を陳列せる店頭の硝子窓。うゐんど。
しよ-か 書家【名】文字を巧に書く人。てかき。
しよ-か 書架【名】しよだな(書棚)に同じ。
しよ-か 諸家【名】多くの家門。しよけ。
しよ-か 暑夏【名】暑さ夏の季節。
しよ-か 初夏【名】[一]夏のはじめ。[二]陰曆四月の稱。
しよ-か 諸夏【名】『論語の八佾篇に「子曰夷狄之有レ君、不レ如二諸夏之無一」とあり』支那の中國の諸國。中華。
じよ-か 序歌【名】〔文〕序詞[一]を有する和歌。
しよ-かう 初更【名】いつかう(一更)に同じ。
しよ-かう 初校【名】最初の校正。(再校・三校などに對して)
しよ-がう 初號【名】[一]號數を逐ふものの最初の番號。首號。[二]活字中の最大なるもの。くわつじ(活字)參照。
しよ-がう 諸豪【名】多くの豪傑。群雄。
じよ-かう 助考【名】生花(ｲｹﾊﾞﾅ)にて、木をなびけ、その枝に草を持たせて插すこと。八つの嫌ふべきことの一とす。
じよ-かう 徐行【名】そろそろと進むこと。
じよ-かう 徐航【名】船足をゆるくして航海すること。
しよ-かうかい 初航海【名】しよぢよかうかい(處女航海)に同じ。
しよがえ【名】しよんがえの略。吉野都女楠「さては野に咲く百合の花、しよがえ」
しよか-おほけいづ 諸家大系圖【名】〔書〕そんぴぶんみやく(尊卑分脈)を見よ。
しよ-かかり 諸掛【名】[一]諸種の入費。[二]〔商〕『英 Charges』賣買上、原價以外に要する諸種の費用、卽ち庫敷(ｸﾗｼｷ)料・運賃・諸稅・

各種保險料・艀船(ハシ)賃・車馬賃・仲買手數料・郵便料・雜費などの類。
しよかかり-ごめ 諸掛込【名】〔商〕『英 Free of charge』商品の代價に、諸掛をこめて計算すること。
しよ-かく 書閣【名】㊀しよだな(書棚)に同じ。㊁しよさい(書齋)に同じ。
しよ-がく 所學【名】まなぶところ。學問。太平記「玄奘法師が許に所學して」
しよ-がく 初學【名】學問を初むること、又その人。うひまなび。
しよがく-き 初學記【名】〔書〕初學者のために、支那の經史・文章の要を類集せるもの。三十卷。唐の徐堅等勅を奉じて撰す。
しよがく-くん 初學訓【名】〔書〕人倫の敎を平易に記せるもの。五卷。貝原益軒の著。益軒全集に收む。
しよがく-しや 初學者【名】初學の人。
しよがく-わかしき 初學和歌式【名】〔書〕詠歌の方法につき、初學の徒の心得べき事を記せるもの。七卷。有賀長伯の著。
しよか-じんぶつし 諸家人物志【名】〔書〕儒家・醫家・歌學者・國學者・書畫家等の小傳に、各著述書目を記せるもの。五卷。池永豹の著。
しよ-かつ 所轄【名】『管轄する所の義』その管轄の範圍内にあること。
しよかつ-こうめい 諸葛孔明【名】〔人〕次條に同じ。
しよかつ-りやう 諸葛亮【名】〔人〕支那三國時代の蜀の名將。字は孔明。蜀主の知遇に感じて、後主を輔佐す。八陣の兵法を創む。建興五年自ら軍を率ゐて、魏を伐つ。兵を出すこと三度、同十二年五丈原に據りて、魏の將司馬懿と對陣中病みて歿す。年五十四。
しよ-かん 所感【名】『感ずる所の義』感じたる事がら。かんじ。所思。感想。
しよ-かん 暑寒【名】㊀かんしよ(寒暑)に同じ。㊁『暑と寒とを一度づつ經る義』一年間。春秋。裘葛。
しよ-かん 初寒【名】はじめての寒さ。
しよ-かん 書函【名】書狀又は書籍をいるる函。書簏(ロク)。
しよ-かん 書簡・書翰・書束【名】てがみ。消息文。
しよかん-し 書簡紙・書翰紙【名】書翰を書くに用ふる紙。はんきれ。書翰箋。
しよかん-せん 書簡箋・書翰箋【名】前條に同じ。
しよかん-ひら 暑寒平【名】經(タテ)に木綿絲、緯(ヨコ)に麻絲を用ひて交へ織りたる袴地。夏・冬共に使用せらるるによりて、名を得たり。
しよかん-ぶくろ 書簡袋・書翰袋【名】手紙を入れて送る袋。ふうじぶくろ。封筒。
しよかん-ぶん 書簡文・書翰文【名】手紙を書く時に用ふる文體。候文。
しよかんぶん-たい 書簡文體・書翰文體【名】書簡文の文體。候文體。
しよ-き 所期【名】『もと期する所の事の義』あてにすること。豫期。期待。
しよ-き 初期【名】初期の時期。始期。
しよ-き 暑氣【名】暑中の熱さ。夏のあつさ。うんき。
しよ-き 書記【名】㊀書きしるすこと。記錄。㊁文書記錄を掌る役。かきやく。㊂諸種の官衙に配屬し、上官の指揮を承けて、文書・帳簿の記載その他の庶務に從事する判任官。例へば裁判所書記・郡書記の類。㊃文部省督學局に置かれ、督學の指揮に從ひて、その事務を分擔せし判任待遇の職。明治六年設置、大・中・少の三等に分れ、同十年督學局と共に廢せらる。㊄海軍裁判所に置かれし判任官。明治五年設置、大・中・少の三等に分れ、同九年廢せらる。㊅禪寺にて、文書を掌る役。古くは書狀といひ、また内外に分ちて、内なるものの、卽ち長老の往復の書狀を認むるを書狀者といひ、外なるを書記といふ。
しよ-き 書紀【名】〔書〕にほんしよき(日本書紀)の略。
しよ-き 書几【名】つくゑ。書案。
しよ-き 書櫃【名】書籍を入るる箱。
しよ-き 初起【名】しよはつ(初發)に同じ。
しよ-き 初虧【名】〔天〕蝕にて、その虧けはじまること。
しよ-き 庶幾【名】㊀こひねがふこと。望み願ふこと。㊁ちかきこと。近似。
しよ-き 署記【名】姓名を書きしるすこと。署名。記名。
しよき-あたり 暑氣中【名】あつさあたり(暑中)に同じ。
しよ-きう 杵臼【名】きねとうす。
杵臼の交【句】『書言故事に「後漢公孫穆來遊ニ大學一、無ニ資糧一、乃變レ服客傭、爲ニ吳祐一賃舂、與語大驚、遂共定ニ交於杵舂之間一」とあると本づく』傭人の交。
しよ-きう 睢鳩【名】㊀『みさごは、和して狎れぬ鳥なるよりいふ。くわんしよ(關雎)㊀參照』婦德の高き婦人の譽。保元「關關たる睢鳩、君子の德をたすく」㊁〔動〕みさご(雎鳩)
しよきうひつとく-にち 所求必得日【名】九星にて、何事にも吉なりといふ日。春は戌の日、夏は酉の日、秋は寅の日、冬は亥の日。
しよきかんれい-もくろく 諸記勘例目錄【名】〔書〕禁中公事の、諸家の記錄に散在せるものを、搜索し易からしめんがために、事項を標し、記錄の名を擧げて、下に年號を註せるもの。五卷。撰者詳かならず。
しよき-くわ 書記課【名】書記がその事務を取扱ふ所。
しよき-くわん 書記官【名】㊀元老院・開拓使・各省・會計檢査院・統計院にありて、長官の命を受けて、その主務を幹理せし奏任官。大・少の二等あり、各等又正・權の別あり。明治八年に設置、同十九年に廢止せり。㊁各府縣に設けられ、府知事又は縣令を助けて、部内の行政事務を參判せし職。大・少の二等ありて、府には大・少共に任命し、縣には兩者の内、いづれかを置きたり。明治十年に設置、同十九年に廢止せり。㊂内閣・諸省・賞勳局・馬政局・拓殖局・樞密院・宮内省・帝國大學・製鐵所・總督府・貴族院事務局・衆議院事務局等に配屬せらるる奏任官。各省のは、大臣の命を承けて、大臣官房の事務を掌り、又は各局の事務を助く。その他は、所屬長官を補助して、その事務を分掌す。しよき(書記)㊂參照。
しよきくわん-ちやう 書記官長【名】部下の書記官を統轄する勅任官。内閣書記官長、衆議院書記官長・貴族院書記官長等の類。翰長。
しよき-しふげ 書紀集解【名】〔書〕日本書紀を漢文にて註譯せるもの。字句の出典及び文字の釋義に力を注げり。二十卷。河村秀根の撰。
しよき-せい 書記生【名】㊀明治十八年以前の外務省及び元老院の判任官。書記官に屬して、記錄などを掌れり。㊁大使館・領事館に附屬して、庶務を取扱ふ判任官。
しよき-ちやう 書記長【名】大審院・控訴院にて、書記課の事務を監督する奏任官。
しよ-きつ 初吉【名】『その月の初の吉日の義』ついたち。朔日。
しよき-はらひ 暑氣拂【名】内服して、暑氣を拂ひのくること。
しよ-きふ 初級【名】最初の等級。最も低き等級。
しよ-きふ 書笈【名】きふ(笈)㊀に同じ。
しよき-ほ 書記補【名】書記の事務を補佐する職。例へば郵便局書記補などの類。
じよ-ぎん 助吟【名】歌會にて、披講のとき詠吟者を補助する人。
しよ-きやう 蔗境【名】しやきやう(蔗境)の誤讀。
しよ-きやう 諸經【名】多くの經書又は經文。
しよ-きやう 書經【名】〔書〕支那の虞・夏・商・周四代の事蹟・文章を集載せるもの。孔子の編纂にかかり、凡そ百篇ありたり。もと單に書と稱し、のち尙書と呼稱し、五經の一に列せらるるに及び、書經の名起れり。今文・古文の二種あり。漢の孝文帝の時、晁錯(チヨウソ)の、濟南の伏生より殘缺二十八篇を學び得て、隷體に記ししより、今文尙書の名起りしが、滅びて傳はらず。武帝の末年、魯の共王の、孔子の舊宅の壁中より得しものは、篇數三十四、文字蝌蚪(クワト)の古體なりしより、古文尙書の名を得。然るに元帝の時、豫章の内史梅賾、別に古文尙書を發見せりと稱して獻本し、欽定書となり、古文は傳はらざるに至れり。されど梅賾の古文は、僞作なること明かなり。
書經の六體【句】書經の篇名中、典・謨(ボ)・訓・誥(カウ)・誓・命の字の添へるもの。例へば堯典・舜典・皐陶謨(カウエウボ)・大禹謨・伊訓・大誥・康誥・甘誓・牧誓・顧命・文侯之命など。いづれも君臣勸戒の辭を記したるもの。

しよ-ぎやう 諸行【名】〔佛〕㊀『行は遷流(センル)の義にて、因緣より生じて、三世を遷流するをいふ』一切の宇宙現象。すべての有爲(ウヰ)法。㊁いろいろの修行。
諸行無常【句】〔佛〕『梵 Anityāḥ vata saṃskārāḥ の譯語』萬物は常に變轉して、暫くも常住せず。〔諺語〕平家「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常のひびきあり」
諸行無常の偈(ゲ)【句】〔佛〕我が國の伊呂波歌の本づく所となりし涅槃(ネハン)經の四句の偈。雪山偈(セツセンゲ)。いろはうた(伊呂波歌)參照。
しよ-ぎやう 所行【名】『行ふ所の意』しわざ。おこなひ。ふるまひ。
じよ-きよせい 徐居正【名】〔人〕朝鮮の學者。字は剛中。成宗の時、弘文館大提學たり。勅を奉じ、柳仁洪等と東國通鑑を撰す。弘治元年歿す。
しよき-れう 書記料【名】書類を筆記する料金。
しよ-く 食【名】㊀食ふこと、又その物。じき。食事。食物。㊁ふち。祿。秩祿。
食が細い【句】常に食量少なし。
食は民の本(モト)なり【句】『文子に「食者民之本也、民者國之基也、國者君之本也」とあるに本づく』食物は人民を養ふ根本なり。〔諺語〕
食を願はば器物(キブツ)【句】食物を乞はんとするには、まづ器物を用意する必要あり。食(ジキ)を乞はば器(キ)。盛衰記「食を願はば器といふ下說の喩あり。君もとくとく國國・庄庄を分けたまはり候へ」
しよ-く 燭【名】㊀蠟燭の火。㊁ともしび。
燭に刻して、詩を爲(ツク)る【句】「燭寸の詩」を見よ。
燭を秉(ト)りて、夜遊ぶ【句】『文選の古詩「生年不レ滿レ百、常懷ニ千歲憂一、晝短苦ニ夜長一、何不ニ秉レ燭遊一、爲レ樂當レ及レ時、何能待ニ來茲一」とあるに本づく』好景の盡き易きを惜み、晝間の遊行を以て足れりとせず、夜中まで遊ぶ。
しよ-く 職【名】㊀分擔の事務、又はその事務を取扱ふ地位。つとめ。やくめ。職務。(古は、攝關・參議より、藏人所・檢非違使などの如く、令外(リヤウゲ)にて、相當の位なきを職といひ、官と別ち、今は、同一の官にても、その執務の種類の異なるを職といひ、官には「任ず」、職には「補す」といふ。例へば軍人ならば、陸軍大尉・海軍大尉などは官、中隊長・大隊副官・砲術長・水雷長などは職なる類)㊁生計のためになす仕事。なりはひ。職業。今國姓爺「職の中にも、鍛冶は由緒あるもの」㊂『史記の叔孫通傳に「使ニ人人奉ニ職、四方輻湊」とあり』みつぎもの。
しよ-く 食・蝕【名】〔天〕『英 Eclipse』天體が他の天體の裏面又は影に隱るる現象。普通には、日食と月食とをいへど、木星の影に、その衛星の隱るる等をもいへり。
日月の蝕の如し【句】「君子の過(アヤマチ)は日月の蝕の如し」を見よ。
しよ-く 蜀【名】㊀支那三國の一。今の四川省益州を中心とし、南は雲南及び貴州二省の一部、北は陝西(セン)及び甘肅省の一部に亙りたる國。二世四十四年にして亡ぶ。蜀漢。㊁〔地〕今の支那四川省の雅稱。
蜀の棧道(サンダウ)【句】〔地〕支那四川省保寧府劍州の東北にある要害の地。劍閣より同府廣元縣を經て、陝西(セン)省の南部に通ずる道路。險難を以て有名なり。
蜀を望む【句】「隴を得て蜀を望む」を見よ。
しよ-く 軾・式【名】支那の古の馬車の前にある橫木。車上の人、行人に敬禮の意を表するには、これに憑(ヨ)りて、伏す習なりき。とじきみ。
軾に伏す【句】『前條を見よ』軾す。
軾に憑(ヨ)る【句】前條に同じ。
しよ-く 柷【名】支那古代の木製樂器八音の一。帝嚳(コク)が共工を亡して造れるところといふ。箱狀をなせるものの中に、撞木狀の物を建て、左右に擊つ。常に敔(ギヨ)と併せ用ふ。我が國にても、古は南河浦の曲に用ひたりといふ。
しよ-く 鐲【名】支那古代の金屬樂器の一。八音の一。小鐘に似るもの。
しよ-く 稷【名】〔植〕五穀の一。後世の高粱にて、古、五穀中の首位に置かれたり。しやしよく(社稷)參照。
しよ-く 卓【名】㊀『漢字の宋音』脚の高き机、また物を載する臺。蕪村「梅散るや螺鈿こぼるる卓(シヨク)の上」㊁香の名。
しよ-く 贖【名】ぞく(贖)に同じ。
し-よく 私欲・私慾【名】己れのみ利せんとする欲望。謠八井社腰「助右衞門に知らさぬは、私慾あるに極つた」
し-よく 嗜欲・嗜慾・耆欲【名】たしなみ好む情。
し-よく 思慾【名】思ひ欲すること。
し-よく 翅翼【名】はね。つばさ。
しよ-く 初句【名】きく(起句)に同じ。
しよ-く 諸苦【名】もろもろのくるしみ。
しよく 燭【助數】しよくくわう(燭光)の略。「五千燭の電氣燈」
じよく 辱【名】はづかしめ。はぢ。恥辱。
じよく 蓐【名】㊀しきぐさ。しきわら。㊁しきもの。しとね。ねどこ。〔褥〕
蓐に臥す【句】病みて床につく。
じ-よく 耳翼【名】〔醫〕じかく(耳殼)に同じ。
しよく-あたり 食當【名】食物に當りたる病。食傷。急性胃加多兒。
じよく-い 蓐醫・褥醫【名】婦人の產蓐に臨む醫師。
しよく-いう 職由【名】『職として由る義』主として、それに由ること。
じよく-いう 辱友【名】『辱交の友の義』友を敬ひ、己れを卑下しての稱。
しよく-いそぎ 食急【名】食事を急ぐこと。蕪「なまけ者の食いそぎ」
しよく-いふ 食邑【名】りやうぶん(領分)に同じ。
しよく-いん 食飮【名】いんしよく(飮食)に同じ。
しよく-いん 職印【名】〔法〕官吏・公吏が、職務上に用ふる印。卽ち官印の外、公吏のをも含めての稱。官職・氏名又は官職のみを彫刻せるを、普通とす。
じよく-いん 蓐茵・褥茵【名】しきもの。しとね。太平記「輕羅・褥茵の上に」
しよ-ぐう 處遇【名】處置と待遇と。
しよく-えい 燭影【名】燭火に照らし出さるる物の影。
しよく-えつ 食悅【名】美味にありつきて悅び食ふこと。傾城色三味線「まづ食悅だけの德なり、と世につれてさもしき心」
しよくえふ-かふちゆう 食葉甲蟲【名】〔動〕害蟲の一類。草木の葉を蝕害する鞘翅類の蟲類の總稱。種類甚だ多し。
しよく-えん 食鹽【名】『鹽化ナトリウムにして、食用に供せらるるよりいふ』微細なる結晶をなし、可溶性にして鹹味あるもの。主成分は、ソヂウム及び鹽素なれども、普通品は、多少、鹽化加里・鹽化苦土・硫酸苦土・硫酸曹達等の夾雜物を有す。善良なるは色澤純白にして、輕鬆なれども、夾雜物多きものは、純白ならず、且つ濕り又は潮解しやすし。食用として、日常生活に缺くべからざるのみならず、防腐劑に供せられ、工業上にては、鹽素化合物及びナトリウム化合物製造の原料となる。主として海水に含有せらるれど、岩鹽又は山鹽とて、土中より出づるものあり。しほ。鹽化なとりうむ。鹽化そぢうむ。
しよくえん-ぜい 食鹽稅【名】食鹽の消費高に賦課する租稅。惡稅の第一として數へらる。鹽稅。
しよくえん-せんばい 食鹽專賣【名】政府が食鹽を獨占的に供給する事業。
しよくえんゆにふ-ぜい 食鹽輸入稅【名】輸入食鹽に賦課する稅金。
しよく-か 燭架【名】蠟燭たて。燭臺。
しよく-かう 蜀江【名】㊀支那蜀(四川省)の成都附近を流るる川。揚子江の上流の一部。錦江。㊁次條の略。十訓「蜀江とて、錦洗ふ、と詩歌に作る所あり」
蜀江の錦【句】㊀往昔支那蜀國に產出せし錦。蜀の成都に濯錦といふ江あり、その水にて絲を晒して織りしためにこの名あり。蜀江。蜀錦。㊁京都西陣にて織出す蜀江模樣の錦。

じよく-かう 辱交【名】『交を辱(カタジケナ)くする義』その人と交際あることの謙稱。

しよくかう-がた 蜀江形【名】しよくかうもやう(蜀江模樣)に同じ。

しよくかう-くづし 蜀江崩【名】模樣の一。切子(キリコ)形を圖案化せしめたるもの。下の圖を見よ。

(しよくかうくづし)

しよくかう-の-にしき 蜀江錦【名】〔動〕いぼたてふ(疣取蝶)に同じ。

しよくかう-もやう 蜀江模樣【名】京都西陣にて、錦に織出す切籠(キリコ)の摸樣。蜀江がた。

しよく-かく 食客【名】ゐさふらふ。かかりうど。

しよく-かく 色覺【名】〔醫〕『英Light sensation』視覺の一。ただ光の明暗に感ずるものにて、視覺中の原始的なるもの。(光覺に對して)

しよく-かく 觸覺【名】〔醫〕『英Cutaneous sensation 又 Touch sensation』感覺の一。觸覺器の感ずる官能。即ち物に觸れて、その大小・形狀・硬軟・冷溫等を感ずるもの。壓覺と溫覺及び冷覺とに分てども、眞正に觸覺と呼ぶべきものは、壓覺に外ならず。觸感。觸感覺。感覺。

しよく-かく 觸角【名】〔動〕『羅Antennae』節足動物(蜘蛛類を除く)の頭部にある角だちたる感覺器。もと口器と等しく、運動の器官なる肢の、分業的に變形せるものにて、甲殼類は二對、その他は一對を有す。

しよくかく-き 觸覺器【名】〔醫〕五官の一。觸覺をつかさどるもの、即ち皮膚及びこれに連續せる粘膜。觸器。觸感器。

しよくかくせい-おんぞくかく 觸覺性音續覺【名】〔哲〕おんぞくかく(音續覺)を見よ。

しよく-がたき 職敵【名】同じ職業に從事する者の、互に忌嫌ふこと、又その相手。商賣がたき。

しよく-かん 觸感【名】〔醫〕しよくかく(觸覺)に同じ。

しよく-かん 蜀漢【名】しよく(蜀)[一]を見よ。

しよく-かんかく 觸感覺【名】〔醫〕しよくかく(觸覺)に同じ。

しよくかん-き 觸感器【名】〔醫〕しよくかくき(觸覺器)に同じ。

しよく-き 食器【名】食事に用ふるうつは。膳・椀・皿・鍋・釜などの類。

しよく-き 食氣【名】食物を欲する心。くひけ。食思。食慾。

しよく-き 蝕旣【名】〔天〕日蝕・月蝕にて、太陽が太陰に遮られ、また太陰が、地球に遮られて全く見えざる時の稱。

しよく-き 續紀【名】〔書〕しよくにほんぎ(續日本紀)の略。

しよく-き 觸器【名】〔醫〕しよくかくき(觸覺器)に同じ。

しよく-き 織機【名】はたおりの機械。

しよく-ぎ 職蟻【名】〔動〕蟻の雌蟲にして、生殖器の發達せざるもの。蟻群中、女王一匹と雄蟻數匹との外は、すべてこれに屬し、翅なく、智力・筋力共に敏捷にして、巣を營み、食物を索めて貯藏する等の事に與る。集中に越年したる女王と職蟻とは、春を待ちて巣を出て、雌は產卵して、職蟻これを保育す。しよくほう(職蜂)參照。

しよく-ぎう 食牛【名】[一]食用に供する牛。[二]牛を食ふこと。

食牛の氣【句】『尸子に「虎豹之子、雖レ未レ成レ文、已有二食牛之氣一」とあるに本づく』幼少にして、已に大志あるをいふ。

しよく-きふ 職給【名】職務に對する給料。つとめのてあて。

しよく-きん 食禁【名】食ふことを禁忌すること、又食ふことを禁忌せられたる食物。

しよく-きん 贖金【名】損害をつぐのふ金。つぐのひきん。償金。

しよく-きん 蜀錦【名】「蜀江の錦」の略。謡曲(女郎花)「野草花を帶びて、蜀錦を連ね」

しよく-ぎり 燭切【名】しんきり(心切)に同じ。

しよく-ぐ 食具【名】食事に用ふる器具。食器。

しよく-くわ 殖貨【名】くわしよく(貨殖)に同じ。

しよく-くわ 燭花【名】蠟燭の丁字(チヤウジ)。とうくわ(燈花)參照。

しよく-くわ 食火【名】『山海經に「南方有二食火之國一、其人能食二火炭一」とあり』火を食ふこと。

しよく-くわい 食塊【名】〔醫〕食物の細片の唾液と混じ、舌の動作により、舌背にて、楕圓形の小塊となりたるもの。

しよく-ぐわい 職外【名】職權の範圍外。

しよく-くわう 燭光【助數】『英Candle power』燈火等の光度の單位。英國にては、鯨蠟にて造りたる徑八分の七インチなる蠟燭の、一時間に百二十グレエン(二匁餘)づつ燃え、焰の高さ平均一インチ七五(四十五ミリメエトル)なる時の水平光度を一燭光とす。我が國も、この標本を採用せり。その他、種種の標準あり。燭。こうしようしよくくわう(公稱燭光)參照。

しよく-くわう 屬纊【名】ぞくくわう(屬纊)を見よ。

しよく-くわん 觸官【名】〔醫〕しよくかくき(觸覺器)に同じ。

しよく-くわん 食管【名】〔醫〕しよくだう(食道)に同じ。

しよく-くわん 職官【名】職と官と。官職。

しよくくわん-け 職官家【名】職官のことを專門に研究する家。

しよくくわん-し 職官志【名】〔書〕唐の六典に倣ひて、本朝官職の事を錄せるもの。六卷。蒲生秀實の著。

しよく-けい 贖刑【名】罰金を科する刑。

しよく-けい 食頃【名】食事を濟すほどの僅少なる時間。少時。

しよく-げき 觸激【名】物に觸れて激すること。

じよく-げつ 蓐月・褥月【名】うみづき(產月)に同じ。

しよく-げふ 職業【名】世わたりの家業。なりはひ。生業。職。

しよくげふ-せうかい-じよ 職業紹介所【名】求職者に、現に需要ある職業を紹介するところ。

しよくげふてき-いんし 職業的陰私【名】〔法〕その職業上、他人の委託を受けたるために知り得たる祕密。

しよくげふてき-ぶんげふ 職業的分業【名】〔經〕三大分業の一。人、各、その從事する職業を以て、彼我互に交換し、以て各種の欲望を滿足せしむるもの。個人的分業。(場所的分業・技術的分業に對して)

しよくげふ-びやう 職業病【名】職業に伴ひて特に起る病氣。例へば仕立屋の胃腸病、石炭坑夫の肺病の類。

しよく-けん 蜀犬【名】支那蜀の國の犬。

蜀犬日に吠ゆ【句】『韓愈の書に「蜀中高霧重、見レ日時少、毎レ至二日出一則群犬疑而吠レ之也」とあるに本づく』支那蜀の國は、四面高き山にて圍まれ、爲に日の出遲く、日沒早し、その地の犬は、日を見れば怪んで吠ゆ、乃ち平凡人は非凡人の言行に疑を起すことの譬にいふ。

しよく-けん 職權【名】職務執行に於て許されたる權力。

しよく-げん 食言【名】『言を食(ハ)む義』約束を實行せぬこと。

しよく-げん 囑言【名】[一]ことづて。傳言。[二]後事を委囑すること、又その言。

しよく-げん 職原【名】官職の起源。

しよくげん-くわいつう 職源會通【名】〔書〕舊制を考へ、證據を正して、職原鈔を解釋せるもの。十六卷。林春齋の撰。

しよく-けんげう 職撿挍【名】盲官の一。元祿中杉山和一總撿挍となり、江戶に居住し、關東の盲人を支配せしより、京都に住して、關西の盲人を支配せるものの稱。

しよくけん-さうぎ 職權爭議【名】〔法〕しゆくわんけんさうぎ(主管權限爭議)に同じ。

しよくけん-しよぶん 職權處分【名】〔法〕さいりやうしよぶん(裁量處分)に同じ。

しよくげん-せう 職原鈔【名】〔書〕我が國の官職の故實と任途の事とを、漢文にて編述したるもの。二卷。北畠親房の著。

しよくげんせう-かしらがき 職原鈔首書【名】〔書〕職原鈔に首書したるもの。藤原惺窩(セイクワ)の著。五卷。

しよくげんせう-ききがき 職原鈔聞書【名】〔書〕林春齋の講莚に列なりて、聞書せるもの。八卷。吉田幸庵の著。

しよくげんせう-くかい 職原鈔句解【名】〔書〕職原鈔を解釋せるもの。十二卷。白井宗因の著。

しよくげんせう-さんかう 職原鈔參考【名】〔書〕職原鈔を註解せるもの。讃人於雪子の著とあれど、その傳詳かならず。惺窩の首書に、諸說を加へたり。五卷。

しよくげんせう-だいぜん 職原鈔大全【名】〔書〕職原鈔を集註せるもの。首卷には、職原鈔の起り・歷代官位冠の始・元服の次第・諸國釋奠・稅租・賦役・年給・內裏圖等を載せ、第一卷より第七卷までは本文、第八卷と第九卷とは、一條兼良(カネヨシ)と淸原秀賢との說を追加せり。九卷。植木悅の編。

しよくげんせう-つうかう 職原鈔通考【名】〔書〕漢文にて職原鈔を註せるもの。二十一卷。壺井義知の著。

しよくげんせう-べんかう 職原鈔辨講【名】〔書〕職原抄に關する舊說を論破し、又その師壺井義知の說をも難じたる口授の筆記。二十卷。多田義俊の著。

しよくけん-はふ 職權法【名】國家の機關の職務・權限の分配を定めたる法規。

しよくけん-らんよう-ざい 職權濫用罪【名】〔法〕官吏もしくば公務員が、その職權の範圍を超えて、不法行爲の手段に供する罪。

しよく-ご 食後【名】食事の後。(食前に對して)

しよく-こう 織工【名】織物を職とする工人。

しよく-こう 職工【名】[一]しよくにん(職人)に同じ。[二]資本主に雇はれて働く職人。

しよく-こう 職貢【名】職務と貢物と。

しよくこう-がくかう 職工學校【名】職工を養成する學校。

しよく-こうき 續後紀【名】〔書〕しよくにほんこうき(續日本後記)の略。

しよくこう-くみあひ 職工組合【名】らうどうくみあひ(勞働組合)に同じ。

しよくこう-ちやう 職工長【名】職工[二]の中にて、頭だちたるもの。工長。職長。

しよくこう-どうめい 職工同盟【名】らうどうくみあひ(勞働組合)に同じ。

しよくこう-ら 蜀紅螺【名】〔動〕腹足類に屬する軟體動物。殼は歪める卵形にして、長さ二三寸。外面には褐色と白色との波紋ありて、光澤を有す。沖繩島に產す。

しよく-こく 屬國【名】ぞくこく(屬國)に同じ。

しよく-ごなし 食ごなし【名】食ひたるものを消化せしむること、又そのためになす事。はらごなし。傾城酒呑童子「公時は只今夜食を喰うた食ごなし、磋化も、鬼神も、惡人も一と粉に仕譯ふと駈出る」

しよく-ごのみ 食好【名】おのれの欲する食物を選みて食ふこと。几董「夏痩やあした夕の食ごのみ」

しよく-こん 蜀魂【名】『華陽國志に「帝禪二位於開明一、升二西山一隱焉、時適二二月一、子規鳥鳴、故蜀人悲二鳥鳴一也」と。帝は望帝なりといふ。また寰宇記に「蜀之後主、名杜宇、號二望帝一、讓二位鼈靈一、望帝自逃、後欲レ復レ位、不レ得死、化爲レ鵑、毎二春月開一、晝夜悲鳴、蜀人聞レ之曰、我望帝魂也」とあるに本づく』〔動〕ほととぎす(時鳥)の異稱。蜀魄。

しよくこん-てう 蜀魂鳥【名】〔動〕前條に同じ。

しよく-さい 植栽【名】さいしよく(栽植)に同じ。

しよく-さい 食采【名】知行の地。食邑。采邑。領地。

しよく-ざい 殖財【名】くわしよく(貨殖)に同じ。

しよく-ざい 贖罪【名】[一]〔法〕犯罪者がその被害人に對し、一定の財物を與へて、その罪を贖ひ、以て復讐刑を免るる事を得ること。[二]〔基〕『英Redemption』人間の罪業は、自力にては到底救ふこと能はざるに拘らず、基督の救世主の資格におけるる代償の所行に由りて、救はるること。あがなひ。

しよくざい-きん 贖罪金【名】罪を贖ふために拂ふ金錢。贖罪のために出す金。

しよく-さう 飾粧【名】さうしよく(粧飾)に同じ。

じよく-さう 蓐瘡・褥瘡【名】〔醫〕『羅Decubitus』長日月病牀にある時、一局部に持續的體重をなせるに由り生ずる瘡。主として薦骨部・大轉子・踵(カカト)などに發す。とこずれ。

しよく-ざう 蝕像【名】〔鑛〕『英Etching figure』結晶を藥品にて溶解する時、その面に生ずる凹凸の諸像。例へば方解石の完全劈開面が、鹽酸のために、三角形の微細なる窪を生ずる類。

しよく-さん 殖產【名】生產物を殖すこと。

しよくさん-きよく 殖產局【名】臺灣總督府民政部の一局。殖產のことを掌る所。

しよくさんきよく-ちやう 殖產局長【名】殖產局の長官たる高等官。

しよくさん-くわうざん 稷山鑛山【名】〔地〕朝鮮忠淸南道の北方稷山郡に在る金鑛。京城の南方二十里。鐵道成歡驛の東。

しよく-さんじん 蜀山人【名】〔人〕おほたなんぽ(太田南畝)を見よ。

しよくさんじん-ぜんしふ 蜀山人全集【名】〔書〕太田蜀山の著書を網羅したるもの。六卷。

しよく-し 食指【名】人さし指。

食指動く【句】『左傳魯の宣公四年の條に「楚人獻二黿於鄭靈公一、公子宋與二子家一將レ見、子公之食指動」とあるに本づく』[一]甘い物を食ふことを得る前兆。[二]欲望を遂げんとする念起る。ほしがる。

しよく-し 食思【名】しよくき(食氣)に同じ。

しよく-し 職司【名】職務として處理すべき事務。つとめ。役目。

しよく-し 贖死【名】財物を出して、死罪をあがなふこと。

しよく-じ 職事【名】職務上の事。仕事。

しよく-じ 食時【名】[一]食事の時刻。[二]食事をなす程の時間。僅少の時間。

しよく-じ 食事【名】飯など食ふこと。

しよく-じ 食餌【名】くひもの。ゑ。

しよく-じ 食次【名】料理のこんだて。

しよく-じ 植字【名】活字をうゑ組むこと。うゑじ。くみ。

じよく-じ 蓐事【名】耕作の事。農事。

じよく-じ 蓐兒・褥兒【名】ふさん(誧闍)の異稱。

しよくしつ-さど 埴質砂土【名】〔農〕土壤の一種。粘土のやや多き砂土。

しよくしつ-じやうど 埴質壤土【名】〔農〕土壤の一種。埴土のやや多き壤土。

しよくじ-ばん 植字板【名】活字を植ゑて組みたる板。活版。

しよく-しん 觸脣・觸唇【名】〔動〕『英Labial palpi』しんべん(脣鬚)に同じ。

しよく-しん 觸診【名】〔醫〕診察方法の一。親しく患者の身體に觸れて、その感覺によりて、病狀を察知すること。

しよく-じん 燭燼【名】蠟燭のもえさし。

しよく-じん 穡人【名】のうふ(農夫)に同じ。

しよく-じん 蝕甚・食甚【名】〔天〕『英Maximum obscuration』日蝕・月蝕の最も高度に達すること。

しよく-じん 織紝【名】機(ハタ)を織ること。しよくにん。

しよくしん-き 觸神規【名】〔醫〕『獨Tastzirkel』觸覺の鋭鈍及び部位神分布の狀態を計るに用ふるコンパス樣の器。

しよく-しめい 職氏名【名】〔法〕官職と氏名と。

しよく-しや 屬車【名】ぞくしや(屬車)に同じ。謡曲(卒小町)「鸞輿・屬車の玉ぎぬの」

しよく-しやう 織匠【名】はたおり。織物師。

しよく-しやう 食傷【名】しよくあたり(食當)に同じ。

しよく-しやう 職掌【名】擔當の職務。つとめ。役目。

しよく-じやう 拭淨【名】ぬぐひ淸むること。

じよく-しやう 蓐傷・褥傷【名】とこずれ(床擦)に同じ。

しよくしやう-がら 職掌柄【名】その職掌としての本分。その職によりて養成せられたる鑑識手腕。つとめがら。やくがら。

じよく-じやう 蓐上・褥上【名】しとねの上。ふとんの上。茵上。

しよく-しやく 燭尺【助數】『英Foot candle』照度の單位。一燭光の光源より一呎の距離に於ける垂直照度。光の强きは、距離の自乘に反比例す。

しよく-しゆ 觸手【名】〔動〕『英Tentacles』下等動物に於ける、主として觸覺を掌る長

き肉質の器官。例へば腔腸動物の口の周圍に、四又は六の倍數をなして、車輻狀に存するもの。蝸牛の長短二對を具ふるもの(その長き方の尖端に眼あり)、蛸には八本、烏賊(イカ)には十本、頭端・口圍より發生して、吸盤を具ふるものの類。

しよく-しゆ 觸鬚【名】〔動〕㊀『英Palp』下等動物の口邊に突起して、觸覺を司る器官。例へば蝦・蟹の口邊上下兩顎に小形の突起をなして存するもの。蜘蛛の顎に存するもの等。㊁『英Barbel』魚類中の或種の口邊より生ずる觸手狀の器官。その最も著しきは、鯉・鯰(ナマズ)・泥鰌(ドジョウ)などに存す。

しよく-しゆ 贖取【名】あがなひかへすこと。

しよく-じゆ 植樹【名】樹木を植うること。

しよく-しよ 飾緒【名】陸海軍の將官、又は參謀官の右肩より右胸前に垂れたる金色の縄襟の著裝。

(しよくしよ)

じよく-しよ 溽暑【名】㊀じようしよ(蒸暑)に同じ。㊁陰曆六月の異稱。

しよく-しよく 食色【名】㊀『左傳の昭公十五年の條、又、孟子の告子上篇に「告子曰食色性也、仁內也非レ外也」とあり』飲食と女色と。㊁食物に困らぬ樣子。

しよく-しよく 促織【名】〔動〕そくしよく(促織)に同じ。

しよく-しよく 喞喞【貌】㊀秋の夜、蟲の鳴く聲の形容。㊁『木蘭詩に「喞喞復喞喞、木蘭當レ戸織」とあり』悲しみ泣く聲の形容。㊂『王維の青雀歌に「猶羨黃雀爭二上下一、喞喞空倉復如何」とあり』雀又は鼠の鳴聲の形容。

しよく-しよく 惻惻【貌】そくそく(惻惻)に同じ。

じよく-しよく 蓐食・褥食【名】朝早く、蓐中に在りて、食を攝(ト)ること。

じよくしよく-ざい 辱職罪【名】陸・海軍人にして、その特別の任務に違背せる不名譽の行爲をなす場合、又、軍人にして、從軍を免れ、又は危險なる任務を避くる目的にて、詐欺の行爲をなす場合の犯罪。

しよくじ-れうはふ 食餌療法【名】藥品のみにたよらず、日日の食物の性質・分量等に注意して、疾病を治療すること。

しよく-す 屬す【動佐變自】ぞくす(屬す)に同じ。

しよく-す 屬す【動佐變他】ぞくす(屬す)に同じ。

しよく-す 囑す【動佐變他】㊀たのむ。託す。囑託す。㊁ことづく。傳言す。

しよく-す 蝕す【動佐變自】㊀一の天體が、他の天體に蔽はれて見えず。㊁〔地〕雨露・雪などのために、土地・巖石などの削磨せらるること。

しよく-す 蝕す【動佐變他】㊀蟲が食ふ。蟲ばみ。㊁〔天〕一の天體が、他の天體を遮り隱す。㊂〔地〕雨・露・風・雪などの土地巖石などを削磨すること。

しよく-す 食す【動佐變自】㊀食事をなす。㊁〔天〕しよくす(蝕す)に同じ。

しよく-す 食す【動佐變他】㊀くらふ。くふ。はむ。㊁〔天〕しよくす(蝕す)に同じ。

しよく-す 軾す【動佐變自】「軾に伏す」に同じ。

しよく-すぐ 職過ぐ【動上二自】身分に相應せずよすぐ。浮世床「汝がごとき戲作者を、先生とは、職過ぎたり」

しよく-すん 燭寸【名】次條を見よ。

燭寸の詩【句】『南史の王僧孺傳に「竟陵王子良、嘗夜集二學士一刻レ燭爲レ詩、四韻者、則刻二一寸一以レ此爲レ率」とあり』蠟燭の一寸燃ゆる間に作る詩。

しよく-せい 職制【名】勤め方のおきて。職務上の規定。

しよく-せき 職責【名】職務上の責任。

じよく-せき 蓐席・褥席【名】しとね。ふとん。

しよく-せつ 觸接【名】㊀せつしよく(接觸)に同じ。㊁〔兵〕敵と視界に在ること。

しよく-せつ 稷契【名】〔人〕支那唐虞の世の名臣なる稷と契と。

しよく-せん 燭剪【名】しんきり(心切)に同じ。

しよく-せん 卓氈【名】卓を被ふに用ふる毛布。ていぶるかけ。

しよく-せん 觸線【名】〔數〕せつせん(切線)に同じ。

しよく-せん 食饌【名】㊀くひもの。㊁膳に具へたる食物。

しよく-ぜん 食前【名】㊀食事の前。(食後に對して) ㊁食事の席の前方。

食前方丈【句】『孟子の盡心下篇に「食前方丈、侍妾數百人、我得レ志不レ爲也」とあるに本づく』列れたる食物の、その席の前一丈四方に滿つるほど盛んなる料理。即ち山海の珍味の列ぶるを言ふ。

しよく-ぜん 食膳【名】ぜんぶ(膳部)に同じ。

しよく-ぜん 色然【貌】驚きて、顏色を變ふるさま。

しよくせん-がくかう 織染學校【名】實業學校の一。機織・染色に關する學術・技藝を教育する學校。

しよくぜん-し 織染史【名】織部令史(オリベノサカン)の唐名。

しよくぜん-しよ 織染署【名】おりべのつかさ(織部司)の唐名。

しよくぜん-じよう 織染丞【名】織部佑(オリベノジョウ)の唐名。

しよくせん-れい 織染令【名】織部正(オリベノカミ)の唐名。

しよく-ぜめ 食攻【名】じきぜめ(食攻)に同じ。

しよく-そ 食素【名】〔醫〕えいやうそ(營養素)に同じ。

しよく-たい 食滯【名】しよくもたれ(食滯)に同じ。拜善仁王參「腎虛と食滯はおれが持病だ」

しよく-だい 燭臺【名】蠟燭を立てて點火する臺。らふそくたて。

しよくたい-しき 飾隊式【名】くわんぺいしき(觀兵式)の舊稱。

しよく-だう 食堂【名】食事する室。

しよく-だう 食道【名】㊀『戰國策の趙國の條に「韓絕二食道一」とあり』りやうだう(糧道)に同じ。㊁〔動〕咽喉頭より胃までの間の、食物の通ふ管。人類のは全長二十乃至三十サンチメエトル、食物嚥下(エンゲ)の際は擴張して、中央部にては三乃至三・五サンメエトル半に達し、上部は、氣管と脊柱との間において、身體の正中を下りたる後、左方に轉じ、遂に左氣管枝を交叉し、次いで脊柱を遠ざかり、少しく螺旋狀をなして、胸部大動脈の前部を走り、胃の噴門に達す。食物嚥下の際は、その筋層の作用により、蠕動(ゼンドウ)運動を起して、漸次食塊を下方に送る。食管。

しよくだう-がん 食道癌【名】〔醫〕『羅Carcinoma oesophagi』食道に生じたる癌腫。多く氣管枝と交叉する部、乃至噴門部に生じ、初め食物の嚥下に困み、遂に流動物を通過せしめ得るのみなるに至り、多くは飢餓のために斃る。

しよくだう-けふさく 食道狹窄【名】〔醫〕『羅Strictura oesophagi』嚥下困難となる病。原因は主に癌腫なれども、稀に炎症・梅毒・ヒステリイより來る。

しよくだう-つき-れっしや 食堂附列車【名】食堂の附屬せる鐵道の列車。

しよく-たく 色澤【名】色彩と光澤と。いろつや。

しよく-たく 食卓【名】食事に用ふる机の類。ちやぶだい。

しよく-たく 屬託・囑託【名】ぞくたく(屬託)に同じ。

しよくたく-い 屬託醫・囑託醫【名】ぞくたくい(囑託醫)に同じ。

しよくたく-いし 屬託醫師・囑託醫師【名】ぞくたくいし(囑託醫師)に同じ。

しよくたく-きん 屬託金・囑託金【名】ぞくたくきん(屬託金)に同じ。

しよくたく-さいばんしよ 屬託裁判所・囑託裁判所【名】ぞくたくさいばんしよ(囑託裁判所)に同じ。

しよくたく-じけん 屬託事件・囑託事件【名】ぞくたくじけん(囑託事件)に同じ。

しよくたく-しよ 屬託書・囑託書【名】ぞくたくしよ(囑託書)に同じ。

しよくたく-ゐん 屬託員・囑託員【名】ぞくたくゐん(囑託員)に同じ。

しよく-だくみ 食巧【名】食物を得るに心を勞すること。諺「能(ノウ)なしの食だくみ」

しよく-たたり 食滯【名】しよくたい(食滯)に同じ。

しよく-だな 卓棚【名】〔建〕四十八棚の一。中央に机のごとく板を取附け、二本の束(ツカ)にて支へたるもの。連歌・和歌などを截するに用ふ。

しよく-たん 燭炭【名】〔鑛〕『英Candle coal』英國産にて、凝結力の最も強き一種の黑炭。

しよ-くち 初口【名】はじめ。はじまり。いとぐち。

しよ-ぐち 諸口【名】〔商〕簿記にて、貸借いづれか一方の勘定科目の二つ以上に亙れること。例へば借方は商品、貸方は現金と當座預金となる時、借方に商品、貸方に諸口と記す類。

じよく-ち 辱知【名】『知(チ)を辱(カタジケナク)くする義。じよくかう(辱交)參照』その人と知合なることの謙稱。しりあひ。

しよく-ちやう 職長【名】しよくこうちやう(職工長)に同じ。

しよく-ちゆう 植蟲【名】〔動〕下等動物の一。數多集りて、植物の如き形の巢を造る小さき蟲。珊瑚蟲などの類。

じよく-ちゆう 蓐中・褥中【名】㊀ねどこのうち。蓐裡。㊁びやうちゆう(病中)に同じ。

しよくちゆう-しよくぶつ 食蟲植物【名】〔植〕葉・花などより一種の液を分泌する腺を有し、これに觸るる昆蟲、その他の小動物を捕捉してこれを溶し、その養分を吸收する植物の總稱。靱葛(ウツボカズラ)・毛氈苔(モウセンゴケ)・貉藻(ムジナモ)・狸藻などの類、分類上よりいへば、茅膏菜(イシモチソウ)科・猪籠草(ウツボカズラ)科・狸藻科等に屬す。食肉植物。

しよくちゆう-るゐ 植蟲類【名】〔動〕さんごちゆうるゐ(珊瑚蟲類)に同じ。

しよくちゆう-るゐ 食蟲類【名】〔動〕哺乳類中の一目。概ね小獸にして、嚙齒類に類似し、土中に穴居し、冬眠す。口吻は突出し、爪銳く、土壤を穿つに適し、四肢短く、各五趾を有し、目・耳・共に小なるを常とす。昆蟲・蠕蟲(センチュウ)などを食とし、又雜食するもあり。鼹(モグラ)・地鼠・蝟(ハリネズミ)・麝香鼠など、これに屬す。

しよく-ぢよ 織女【名】㊀機(ハタ)を織る女。はたおりむすめ。織婦。㊁〔天〕支那の天文における牛宿中の三星。西洋の天文學にては、琴座に屬す。あさがほひめ。牧陰。たなばた(棚機)㊂參照。

しよくぢよ-せい 織女星【名】〔天〕前條㊁に同じ。

しよく-でん 職田【名】支那にて、古、官吏に、その職に伴ひて賜はりし田地。(功田・位田に對して) しきでん(職田)參照。

しよく-ど 埴土【名】〔農〕『英Claysoil』粘土質の土壤。少なくとも、六割以上の粘土、四割以下の砂を含めるものにて、粘板岩・長石・雲母等に富む岩石の分解に因りて生ず。粘りて、耕すに困難にして、また燥けば龜裂し、水氣の浸透宜しからず。(壤土・砂土に對して)

しよく-とう 喞筒【名】ぽんぷに同じ。

しよく-どう 贖銅【名】㊀王朝時代に、銅を收めて罪をあがなはしめたること。㊁くわたい(過怠)㊂に同じ。

しよく-として 職として【副】むねとして。主として。もっぱら。

しよく-とつ 觸突【名】ふれあたること。

しよく-にく 食肉【名】㊀動物(殊に鳥獸)の肉を食ふこと。肉食。㊁『左傳の昭公四年の條に「其出入也時、食肉之祿、冰皆與焉」とあり』肉食することを得る家、即ち高官又は富貴の人の稱。

しよくにく-しよくぶつ 食肉植物【名】〔植〕『英Carnivorous plants』しよくちゆうしよくぶつ(食蟲植物)に同じ。

しよくにく-るゐ 食肉類【名】〔動〕哺乳類の一目。概ね體形大きく、能く發達し、齒は三種具備し、特に犬齒强大にして銳し。前肢は五指なれども、後肢は拇趾を缺くもの多く、指趾は各鉤爪を備ふ。獅子・虎・豹・狼・熊・犬・猫・海豹(アザラシ)・膃肭臍(オットセイ)等これに屬す。鰭脚(キキャク)類をも、この中に包含せしむることあり、又これを包含せざる食肉類を、趾行類と蹠行(セキコウ)類とに分つことあり。

しよくにほん-ぎ 續日本紀【名】〔書〕六國史の一。文武天皇の元年より、桓武天皇の延曆十年までの事を記せり。四十卷。菅野眞道・藤原繼繩等の、勅を奉じて撰びたるもの。續紀。

しよくにほん-こうき 續日本後紀【名】〔書〕六國史の一。仁明天皇の天長十年より、嘉祥三年までの事を記せり。但し現存せる書は、缺けたる所多し。二十卷。藤原良房・伴(トモ)善男・春澄善繩(ヨシタダ)等の、文德天皇の遺志を奉じて撰べるもの。續後紀。

しよくにほんこうき-うた-の-かい 續日本後紀歌解【名】〔書〕續日本後紀の歌を解釋せるもの。一卷。荒木田久老の著。一名、梘落葉(カケヒオチバ)。

しよく-にん 織紝【名】しよくじん(織紝)に同じ。

しよく-にん 職人【名】手藝を以て、物を造るを業とする人。例へば大工・左官など。職工。

職人貧乏、人寶(ヒトダカラ)【句】「器用貧乏人寶」に同じ。「細工貧乏人寶」參照。〔諺語〕

しよくにん-うたあはせ 職人歌合【名】〔文〕歌合の一種。職人の歌合に擬して詠めるもの。月と戀とを題とす。建保職人歌合・二條良基公職人歌合・甘露寺親長卿職人歌合・勸進聖職人歌合等あり。

しよくにん-づくし 職人盡【名】㊀悉く職人なること。㊁歌などに種種の職人を詠み入るること。

しよくにんづくし-うたあはせ 職人盡歌合【名】〔書〕月と戀とを題とし、番匠・鍛冶など、種種の職人の心になりて詠みたる歌を番へたるもの。判詞の次に畫圖あり。三卷。著者詳かならず。一名、七十一番職人歌合。

じよく-ねつ 溽熱【名】じようしよ(蒸暑)に同じ。

しよく-のう 職能【名】職務上の能力。

しよく-ば 職場【名】仕事をするところ。

しよく-ばい 觸媒【名】〔化〕『英Catalytic agent 又 Catalyser』自己には變化あらはれず、又、化學變化の原動力にも非ずして、自己に接する他物の化學變化の速度を、或は增進し或は減退せしむる媒助となるもの。例へば、二酸化マンガンが鹽酸カリウムの分解を容易にし、少量のヂアスタアゼが、その量これに數萬倍する澱粉の糖化を短時間に了らしむる類。また醱酵菌・バクテリヤ等の微生體は、即ち生活せる觸媒に外ならず。而して、觸媒のこの作用を接觸作用といふ。接觸劑。

しよく-はう 職方【名】『方內、即ち國內を職(ツカサド)る義』支那にて、古昔、國中の地圖を掌りし官。

しよく-ばう 色貌【名】かほいろとかたち。

しよく-ばう 屬望【名】のぞみを付くること。

しよく-はく 蜀魄【名】〔動〕しよくこん(蜀魂)に同じ。

しよく-はつ 觸發【名】物にふれて發作すること。

しよくはつ-すゐらい 觸發水雷【名】『英Contact mine』布設水雷の一。一度沈置するや、これに接觸する者あれば、直ちに爆發する裝置を有するもの。發火裝置の機械的に動作するものと、或元素又は化合物中互に相觸れて生ずる、化學力を借れるものと、電池の作用を借れるものとにより、機械觸發水雷・化學觸發水雷・電氣觸發水雷に分つ。自發水雷。(視發水雷に對して)

しよく-ぱん 食麪麭【名】食事用にするパン、即ち砂糖・餡などを加へざるもの。

しよく-ばん 觸蠻【名】次條を見よ。

觸蠻の爭【句】「蝸牛の角爭(ツノアラソヒ)」に同じ。

しよく-ひ 食匕【名】食事用のさじ。

しよく-ひ 食費【名】食事の費用。

しよく-び 式微【名】『詩經の邶風式微篇に「式微式微、胡不レ歸」とあるに本づく。微は衰微の義、式は發語の辭にて、「もつて」と調ず』きはめて、衰微したること。しきび。

じよく-ひ 蓐被・褥被【名】しとねと、かいまきと。夜具。

しよく-ひん 食品【名】食料とする物。食料品。食物。食用品。

しよく-ふ 職婦【名】しよくぢよ(織女)㊀に同じ。

じよく-ふ 蓐婦・褥婦【名】さんじよくふ(産褥婦)に同じ。

しよく-ぶぎやう 職奉行【名】わかどしより(若年寄)に同じ。

しよく-ふく 職服【名】職務上着用すべき制服。

しよく-ぶつ 植物【名】〔生〕生物の一。草・木・竹・菌・藻などの類の總稱。高等なるものは炭酸・水・鹽類の如き無機物を資りて、その營養に供し、概ね根・莖・葉等を有すれども、下等植物に至りては、動物と區別し難きものあり。(動物に對して)

しよく-ぶつ 贖物【名】あがなひのために

差出す物。あがもの。
しよくぶつ-かい 植物界【名】『英Vegetable kingdom』自然界に於て、植物と名づくるものの範圍。
しよくぶつ-かいばうがく 植物解剖學【名】〔植〕『英Anatomical botany又Phytotomy』植物學の一部。植物の內部の構造、殊に細胞・組織等の構造及び排列等を研究するもの。
しよくぶつ-がく 植物學【名】『英Botany』自然科學の一。植物の形態・生理・解剖・分類・分布・應用などを研究する學。本草學。
しよくぶつがく-しや 植物學者【名】植物學に熟達せる人。
しよくぶつ-がん 植物岩【名】〔地〕『英Phytogenic rocks』植物體が變化して成りたる岩石。例へば硅藻土の類。
しよくぶつ-きさいがく 植物記載學【名】〔植〕『英Descriptive botany』植物學の一部。植物各箇の形態を記載して、所屬を定むる學。
しよくぶつ-くけい 植物區系【名】〔植〕『羅Flora』一地方に產する植物の全種類を總括したる稱。しよくぶつちりがく（植物地理學）參照。
しよくぶつ-くわがく 植物化學【名】『英Pytochemistory』植物の生活現象を化學的に考究する學問。
しよくぶつ-けいたいがく 植物形態學【名】〔植〕『英Morphological botany』植物學の一部。植物體に於ける外部の形狀を攷究するもの。
しよくぶつ-けんさくわん 植物檢查官【名】植物檢查に任ずる高等官。植物檢查所長又は支所長もしくは所員これに當りて、所轄事務を掌る。
しよくぶつけんさくわん-ほ 植物檢查官補【名】植物檢查官の次位にある判任官。植物檢查所員として、事務に從事す。
しよくぶつけんさ-じよ 植物檢查所【名】農商務大臣管理の下に、植物の輸入・移入又は輸出移出に關する檢查・取締并びに病菌・害蟲の研究、及び調查の事務を掌る所。

しよくぶつ-ざうげ 植物象牙【名】『英Vegetable ivory』象牙椰子（ヤシ）の種子の胚乳。白色・堅實にして、象牙に似たり。釦（ボタ）・洋傘の飾など、種種の器具製造用に供す。
しよくぶつ-しきそ 植物色素【名】しよくぶつせいしきそ（植物性色素）に同じ。
しよくぶつしつ-せんゐ 植物質纖維【名】しよくぶつせいせんゐ（植物性纖維）に同じ。
しよくぶつせい-あぶら 植物性油【名】しよくぶつせいしばう（植物性脂肪）を見よ。（動物性油に對して）
しよくぶつせい-あるかり 植物性阿爾加里【名】『英Vegetable alkali』たんさんかりうむ（炭酸加僧母）に同じ。（鑛物性亞爾加里に對して）
しよくぶつせい-くわん 植物性管【名】〔醫〕ないざうくわん（內臟管）に同じ。（動物性管に對して）
しよくぶつせい-しきそ 植物性色素【名】植物性染料となる性分を有するもの。しきそ（色素）參照。
しよくぶつせい-しばう 植物性脂肪【名】橄欖・落花生・胡麻・胡桃（クルミ）・栾・椿（ツバキ）等の植物の果實又は種子より製したる脂肪。その液狀なるを植物性油といふ。（動物性脂肪に對して）
しよくぶつせい-しんけいけいとう 植物性神經系統【名】〔醫〕植物性管內にありて、交感神經節を中樞部とし、脊柱の左右兩側に連結し、腦脊髓神經に連なる。末梢部は血管及び內臟に分布す。交感神經系統。（動物性神經系統に對して）
しよくぶつせい-せんれう 植物性染料【名】植物より得たる染料。例へば紫根・藍・紅花（ベニ）・刈安（カリヤス）・茜（アカネ）など。植物染料。（動物性染料・鑛物性染料に對して）
しよくぶつせい-せんゐ 植物性纖維【名】織物の原料として、植物より得たる纖維。例へば木綿・麻など。（動物性纖維・鑛物性纖維に對して）
しよくぶつ-せいたいがく 植物生態學【名】〔植〕『英Ecological botany』植物學の一部。植物の生活狀態、殊に植物間相互の關係と、外圍の狀況に適應して、植物の生存する狀態とを研究するもの。

しよくぶつせい-ひれう 植物性肥料【名】植物を腐敗又は變形せしめて得たる肥料。例へば藥・木葉・草・豆腐粕・油粕など（動物性肥料・鑛物性肥料に對して）
しよくぶつ-せいりがく 植物生理學【名】〔植〕『英Physiological botany又Phytophysiology』植物學の一部。植物體の諸器官の作用を研究して、生活原理を考案するもの。
しよくぶつ-せんれう 植物染料【名】しよくぶつせいせんれう（植物性染料）に同じ。
しよくぶつ-たい 植物帶【名】〔地〕『英Botanical region』氣候の如何によりて生ずる植物の分布・異同を分ちたる地帶。水平的なる區分と、及び土地の高低に依る垂直的區分とあり。
しよくぶつ-ちりがく 植物地理學【名】『英Geographical botany又Phytogeography』植物學の一部。植物の地球上に分布・散在する狀態を調查するもの。植物區系の調查及びその成立の來歷につきての研究も、この學の範圍に屬す。植物分布學。
しよくぶつ-びやうりがく 植物病理學【名】〔植〕『英Vegetable pathology又Phytopathology』植物學の一部。諸般の植物、殊に有用植物を害する疾病の狀態・經過を始め、その治療・豫防・驅除の方法に至るまでを研究するもの。
しよくぶつ-ぶんぷ 植物分布【名】〔植〕『英Distribution of plants』植物が地球上各處に特殊の種類を生ずる狀態。その原因の主たるものは、溫度と氣候となり。しよくぶつたい（植物帶）參照。
しよくぶつ-ぶんぷがく 植物分布學【名】〔植〕しよくぶつちりがく（植物地理學）に同じ。
しよくぶつ-ぶんるゐがく 植物分類學【名】〔植〕『英Systematic botany又Classification of plants』植物學の一部。植物の種類を蒐集して、これを類別し、その系統を攷究するもの。
しよくぶつ-ゆ 植物油【名】『英Vegetable oil』植物より搾取し、又は植物を原料として精製したる油。

しよくぶつ-ゑん 植物園【名】『英Botanical garden』各種の植物を培養して、主に學術上の研究に資せんとする目的の園圃。
しよく-ぶん 織文【名】㊀あやのある織物。㊁織出したる模樣。ありもやう。
しよく-ぶん 屬文【名】ぞくぶん（屬文）に同じ。
しよく-ぶん 蝕分・食分【名】〔天〕『英Digits又Degree of obscuration』蝕の度合。皆既を十分、中心まで虧けたるを五分とす。通常は食甚の時のを指す。
しよく-ぶん 職分【名】職事上の本分。つとめ。役目。
しよくぶん-づゑ 織文圖會【名】〔書〕しよくもんづゑ（織文圖會）に同じ。
しよく-ほう 職蜂【名】〔動〕こうほう（工蜂）に同じ。
しよく-ほう 食封【名】㊀食邑。封土。領地。㊁じきふ（食封）を見よ。
しよく-ほう 食俸【名】ふち。食祿。
しよく-みん 植民・殖民【名】『蘭Volksplanting』殖の字は我が國後世の使用に屬するを、支那にては却ってこの字を輸入使用するに至れり』他の未開地に、永久的移住をなす人、又はその行動。
しよくみん-ぎやうせい 植民行政・殖民行政【名】㊀植民地統治に對する本國の行政。㊁植民地に於ける行政、乃ち自治行政。㊂母國行政機關による直接行政。
しよくみん-せいさく 植民政策・殖民政策【名】植民に對する國家の施設・經營。
しよくみんせいさく-がく 植民政策學・殖民政策學【名】植民政策につきて研究する學。
しよくみん-ち 植民地・殖民地【名】植民する土地。植民の住む地。
しよくみんち-ぎやうせい 植民地行政・殖民地行政【名】植民地に關する行政。
しよくみんち-ぼうえき 植民地貿易・殖民地貿易【名】植民地と母國・諸外國若しくは他の植民地との間に行はるる通商貿易。
しよくみんてき-ほごこく 植民的保護國・殖民的保護國【名】獨立の主權を有する植民地にして、主權の行使は母國の制限を受くるもの。

しよく-む 職務【名】擔任する事務。職分に關する勤務。つとめ。役目。
しよくむ-こころえ 職務心得【名】㊀下級の機關に、一時上級の機關の職務を行はしむること。㊁職務を行ふに就きて心得置くべき事柄。
しよくむ-さいそく 職務細則【名】職務上の執行に關する細則。
しよくむ-しやうてい 職務章程【名】職務上の執行に關する規程。
しよくむ-はん 職務犯【名】〔法〕公務に關して成立する犯罪。
しよくむ-ほう 職務俸【名】職務を擔當するによりて、本俸以外に特に給せらるる俸給。例へば大學敎授の講座擔任に對する講座給の類。（本俸に對して）
しよ-くん 諸君【代】同輩及びその以下に對しての第二人稱、又は第三人稱の敬稱。あなたがた。諸子。
しよ-ぐん 諸軍【名】もろもろの軍隊。
じよ-くん 敍勳・叙勳【名】勳等に敍し、勳章を下賜せらるること。
しよく-めい 燭明【名】蠟燭のあかり。
しよく-めい 續命【名】生命をつなぐこと。太平記「一家の續命、悉くこれ武恩にあらずといふ事なし」
しよくめい-る 續命縷【名】くすだま（藥玉）に同じ。三代實錄「勅賜二大使已下、錄事以上、續命縷、品官已下菖蒲蘰一」
じよく-めい 辱命【名】かたじけなき命令。
しよくめい-ゐん 續命院【名】古、旅行中、病に罹りたる者の、入院して療養せし所。
しよく-もく 屬目・矚目【名】『目を屬（ツ）くる義』よく見ること。注目。
しよく-もたれ 食滯【名】しよくたい（食滯）に同じ。
しよく-もつ 食物【名】くひもの。おもの。じきもの。食品。
しよくもつ-ぜい 食物稅【名】食物の消費に課する稅金。例へば鹽稅・醬油稅等の類。
しよくもん-づゑ 織文圖會【名】〔書〕織文に關せる圖會。狩衣の部一卷。女官の部一卷。織物の部一卷。松岡辰方（トキカタ）の著。故實叢書に收む。

しよく-やう 色養【名】『晉書の潘岳傳に「膝下色養」とあり』親に仕ふるに、その命を待たず、その顏色を見て、その意を察して行ふこと。一說に、常にやさしき顏色を以て、父母を孝養すること。
しよく-やうじやう 食養生【名】くひやうじやう（食養生）に同じ。
しよく-やすみ 食休【名】食後の休息。じきやすみ。諺「親が死んでも食休」
しよく-ゆ 食油【名】食用に使用する油。
しよく-よう 色容【名】ようしよく（容色）に同じ。
しよく-よう 食用【名】食物に用ふること、又その物。食料。
しよくよう-ひん 食用品【名】食用となる物品。食用物。食料品。食品。
しよくよう-ぶつ 食用物【名】前條に同じ。
しよく-よく 食欲・食慾【名】食はんことを欲するこころ。くひいぢ。くひけ。じきよく。食氣。
しよく-り 殖利【名】『利益を增殖する義』りしよく（利殖）に同じ。
じよく-り 蓐裡・褥裡【名】じよくちゆう（蓐中）に同じ。
しよく-りやう 食糧【名】食用にするかて。「糧食。
しよく-りよく 燭力【名】『英Candle power』電燈などの光度。燭光。
しよく-るゐ 燭淚【名】蠟燭より垂るる蠟を、淚に譬へていふ語。
じよく-れい 縟禮【名】要なき事にまで、儀式を貴ぶこと。繁項なる禮儀。「繁文・縟禮」
しよく-れう 食料【名】㊀食物の原料。食物。㊁食物の料金。くひぶち。くひれう。
しよくれう-ひん 食料品【名】食料に供する品。食用品。食品。
しよく-れふ 職獵【名】職業にする獵。（遊獵に對して）
しよくれふ-めんじやう 職獵免狀【名】明治二十八年以前、職獵者に下付せし免狀。甲・乙の二種に分つ。銃器を使用せざる者には前者、銃器を使用する者には、後者を下附したり。（遊獵免狀に對して）

しよく-ろく 食祿【名】てあて。扶持。食俸。
しよ-くわ 所課【名】㊀賦課する所の物事。㊁考課すること。詮衡すること。
しよ-ぐわ 書畫【名】書と畫と。
書畫一致【句】〔美〕書道と畫道とは、精神と氣韻とを同じくすといふこと。
しよ-くわい 初會【名】㊀初めて催したる會合。㊁始めての面會。一見。㊂女郎の、或遊客に始めて相方となること。（うら・なじみに對して） 深川新話「初會から帶紐解きの身の上咄といふ幕さ」
しよ-くわい 初囘・初回【名】最初の一回。「初度。
しよ-くわい 所懷【名】おもひ。かんがへ。所感。所思。
しよ-ぐわい 書外【名】書面に記したること以外。文面に載せざる事がら。
じよ-くわい 敍懷【名】じゆつくわい（述懷）に同じ。
しよくわい-きやく 初會客【名】初會の客。遊女に初會にて逢ふ客。
しよぐわ-くわい 書畫會【名】㊀書家・畫家が門弟その他を聚めて、卽席に揮毫せしむる會合。江戸末期より明治初年に亙りて多く行はれ、主催者の外、同業者亦來りて援助するを例とせり。嬉遊笑覽「近來書畫會、所所の料理茶屋に於て催すこと、四時絕ゆることなく、盛りに行はる。その卑俗なること、御法度の花會とて、小歌上るり、踊子供の名弘めに異ならず」㊁書畫を陳列して縱覽せしめ、また賣却する會合。
しよぐわ-でふ 書畫帖【名】書畫を貼（ハ）りつけ、又は書きたる折手本。
しよ-くわん 書卷【名】しよもつ（書物）に同じ。
書卷の氣【句】學者の氣習。
しよ-くわん 所觀【名】〔佛〕觀じたる所のもの。翠花「所觀の樂相は、卽ちこれ三身卽一の相好光明なり」
しよ-くわん 所管【名】管理又は管轄すること。「所の事物。
しよ-くわん 初冠【名】『漢書の昭帝紀の註に「謂二初冠加二上服一也」とあり』初めて冠を加ふること。
しよ-くわん 庶官【名】ひやくくわん（百官）に同じ。

しよ-ぐわん 初願【名】最初のねがひ。はじめての希望。
しよ-ぐわん 所願【名】願ふ所の事物。ねがひ。「ひのすぢ。
しよ-ぐわん 諸願【名】もろもろのねがひ。神佛へかくる多くの願。
じよ-くわん 敍官・叙官【名】官等に敍すること。任官。
じよ-くわん 舒緩【名】ゆるやかなること。「緩舒。
しよ-くわんけ 諸勸化【名】夾條に同じ。一茶「木枯や諸勸化入れぬ小制札」
しよ-くわんじん 諸勸進【名】種種の勸化（クワンゲ）、又これをなす人たち。ものもらひ。諸勸化。冥途飛脚「師走の果に、この如く、しよくわんじん諸あきうど、春とても、無いこと」
しよくわん-しや 所管社【名】式外（シキゲ）の社にて、明治維新以後、直接、神宮に附屬するもの。卽ち內宮の宮比（ミヤビ）神・興玉（オキタマ）神、外宮の四至神・御酒殿神の類。
しよくわん-ちやう 所管廳【名】その事件を所管する官廳。
しよく-ゐ 職位【名】官職と官位と。
しよく-ゐ 卽位【名】そくゐ（卽位）に同じ。名目抄「卽位、ショクヰ」
しよく-ゐん 職員【名】職務を執行ふ人。「役員。
しよくゐん-くわいぎ 職員會議【名】職員の集りて開く會議。
しよくゐん-めいぼ 職員名簿【名】夾條㊀に同じ。
しよくゐん-ろく 職員錄【名】㊀職員の姓名を記せる帳簿。職員名簿。㊁內閣印刷局にて、毎年一回づつ編輯・發行する、全國諸官衙等の職員錄。官職・姓名・等級・俸給額等を記せり。
しよく-ゑ 觸穢【名】服忌・出產・月經等、一切の不淨の、身に接し、目に觸れ、衣服・飲食等に及ぶこと。古は、一定の期間、神事に携はることを許されざりき。けがれ。そくゑ。ゑ。
しよ-け 庶家【名】庶出の家。（嫡家に對して）
しよ-け 諸家【名】しよか（諸家）に同じ。
しよ-け 所化【名】㊀『敎化せらるる者の義』僧侶の弟子。（能化に對して） 徒然「所

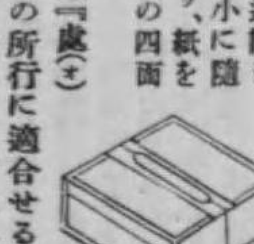
化皆覺えざりしに」㊁『化(ケ)したる所の者の義』ばけたるもの。非道業平河内通「狐狸の所化か、と暫しが程こそ紛ひつれ」
しよ-げ【名】しよげること。雪女五枚羽子板「この抱付の上手女に抱かれて見たいと抱付けば、さすがの藤内しよげになり」
しよ-けい 諸兄【名】㊀多くの兄。兄たち。㊁多くの人を敬ひ親しみての稱。
しよ-けい 庶兄【名】妾の生みたる兄。
しよ-けい 書契【名】『易經の繫辭下傳に「上古結レ繩而治、聖人易レ之以二書契一」とあるに本づく。契は契約の義』木を刻み、その側に書して、事を約すること。文字を記したる手形。正統記「震旦は、殊に書契を事とする國なれど、世界建立をいへること慥かならず」
しよ-けい 書檠【名】『檠はもと燈火を載する臺、轉じて燈火の義』讀書に用ふる燈火。
しよ-けい 處刑【名】刑罰に處すること。しおき。科罪。
しよ-けい 曙景【名】あけがたの景色。曉色。曙色。
しよ-けい 諸系【名】多くの系圖。あまたの系統。
しよ-けい 庶系【名】庶子の系統。嫡子にあらざる系圖。
しよ-げい 初經【名】その人の最初の月經。
しよ-げい 書藝【名】書道に於ける技藝。書きかた。正統記「文章も巧みに、書藝も勝れたまへりし、宮城の東面の額も、御みづから書かしめたまひき」
しよ-げい 諸藝【名】種種の藝。重軽子「若いわろの奇拔な、諸藝の心掛たのもしい」
じよ-けい 敍景・叙景【名】景色を、文章・詩歌にて敍ぶること。
しよけいこ-じよ 諸稽古所【名】相模國足柄下郡小田原寺町に在りし舊小田原藩の學校。文政五年藩主大久保忠眞の創立。後に集成館と稱し、明治四年に廢せり。
じよけい-し 敍景詩・叙景詩【名】〔文〕客觀の景色を敍したる詩歌。貧弱ながら、作者の主觀も含まれたるものにて、畢竟抒情詩の初歩なるものといふべし。
じよけい-ぶん 敍景文・叙景文【名】景色を敍したる文。
じよ-けう 助教【名】㊀教師の職務を補助する役。㊁王朝時代の大學寮にて、博士を補けし者。國子助教。㊂大學校にて、少博士に次ぎ、生徒を教試し、國史を修撰せし奏任官。明治二年設置、同四年大學廢せられて文部省の置かるるやその職員となり、同五年廢せられたり。
じよ-けうじゆ 助教授【名】帝國大學又は文部省直轄諸學校にて、教授を助けて、授業及び實務に從事する職員。奏任もしくは判任。
じよ-けうゆ 助教諭【名】師範學校・公立中學校・高等女學校・專門學校・實業學校などにて、教諭を助けて、生徒を教育する職員。
しよけ-かげふき 諸家家業記【名】〔書〕攝家家業・神祇道・陰陽道・儒門・和歌・筆道・琴・裝束等の諸家業を記せるもの。一卷。二條康道の著。
しよげ-かへる【動四自】『かへるは接尾語』甚しくしよげる。
しよ-げき 書檄【名】檄文を書くこと、又その檄文。
しよけ-けいづ-さん 諸家系圖纂【名】〔書〕諸家の系譜を彙集したるもの。德川光圀の、その臣丸山可澄に命じて編ましめしもの。七十二卷。
しよけ-ちふ-せっき 諸家知譜拙記【名】〔書〕公卿の系譜を、家家に分ちて記せるもの。五卷。速見房常の著。
しよ-けつ 處決【名】『處理・裁決の義』㊀事をさばくこと。判斷。處裁。㊁覺悟を定むること。處裁。
しよ-げつ 庶孽【名】庶出の子。庶子。
しよ-げつ 暑月【名】かき(夏季)に同じ。
しよ-げつ 初月【名】㊀しんげつ(新月)に同じ。㊁はじめの月。
じよ-げつ 如月【名】きさらぎ(著更衣)に同じ。
しよげ-どり しよげ鳥【名】しよげたるさまの鳥。鑓入針杜曆「富限者の下邸をば雨降、中にはさまるしよげ鳥の浪人の巣のとりぶき屋根」千兩幟「しこ踏鳴らす鐵が嶽。こなたはなほもしよげ鳥の、しほしほのぼる土俵の上」
しよ-げふ 所業【名】しわざ。おこなひ。ふるまひ。所行(シヨギヤウ)。
しよ-けん 所見【名】㊀見たるところの物事。㊁いけん(意見)に同じ。
しよ-けん 諸賢【名】㊀多くの賢人。㊁多くの人の敬稱。諸彥。
しよ-けん 諸縣【名】多くの縣。あまたの縣。
しよ-けん 初見【名】最初の會見。
しよ-けん 書見【名】書物を讀むこと。
しよ-けん 書劍【名】㊀書と劍と。㊁『陳子昂の送別出レ塞詩に「平生聞二高義一書劍百夫雄」とあるに本づく』書生の生涯。
しよ-げん 諸彥【名】しよけん(諸賢)に同じ。
しよ-げん 緒言【名】論說のいとぐち。はしがき。まへがき。
じよ-げん 初弦【名】じやうげん(上弦)に同じ。
じよ-げん 助言【名】じよごん(助言)に同じ。
じよ-げん 序言【名】はしがき。序。緒言。
じよ-げん 如幻【名】まぼろしのごとくはかなきこと。
しよげん-こじ 書言故事【名】〔書〕支那の故事成語を部類解釋してその出典を掲げたるもの。十二卷。宋の胡繼宗の編。
しよげん-じかう 書言字考【名】〔書〕がふるゐだいせつようしふ(合類大節用集)に同じ。
しよげる【動下一自】あてがはづれて、興がさむ。
しよげる 諸藝る【動下一自】いろいろの藝ごとをなす。興を催すごときことをなす。吉野都女楠「まづそれまでは、一杯あげてしよげるべい」
しよ-こ 書庫【名】書籍を入れ置く庫。しもつぐら。書樓。芸閣。
しよ-こ 書賈【名】しよし(書肆)に同じ。
しよ-こ 曙鼓【名】曉方に打つ太鼓の音。
しよ-こ 庶姑【名】しうとめ(姑)に同じ。
しよ-こ 諸孤【名】多くの孤兒。
じよ-ご 絮語【名】『じよせつ(絮說)を見よ』くどくどしき言葉。こまやかに語る言葉。
じよ-ご 助語【名】㊀じよごん(助言)に同じ。㊁じよし(助詞)とじよどうし(助動詞)との總稱。㊂〔語〕じよじ(助辭)㊁に同じ。
しよ-こう 諸公【名】多くの身分高き人人。
しよ-こう 諸侯【名】封建時代に、一定の封土を領し、その域內の人民を支配する人。大名。君侯。侯伯。
じよ-こう 助攻【名】補助して攻擊すること、又その攻擊。
しよ-こく 初刻【名】しよはん(初版)に同じ。
しよ-こく 諸國【名】方方の國。くにぐに。群國。
しよこく-そうつゐぶし 諸國總追捕使【名】源賴朝の朝廷に奏して、國國に總追捕使を置きし時、自らこれを總管する意にて呼びし稱號。もと正しき職名にはあらざれども、足利高氏もこれに補せられんことを乞ひしことあり、同直冬(タダフユ)またこれに補せられたり。日本國總追捕使。六十六國總追捕使。增鏡「賴朝…諸國の總つゐぶしといふこと承りて、地頭職に、我が家のつはものどもをなし集めけり」
しよこく-ふかんでん-ふうすゐ-し 諸國不堪田風水使【名】古、朝廷より、諸國の不堪田と水災・風難に遭へる田とを巡察するために任命派遣せられし使。
しよこ-しよこ【副】ちよこちよこに同じ。田世瀧德「仁三郎忙しげにしよこしよこと立ちいで」
じよ-こつ 鋤骨【名】〔醫〕『羅Vomer』顏面骨の一。鼻腔中の中隔をなす。扁平にして斜菱形を作す。
しよこと-なし 爲事無し【形一】せうことなし(爲事無し)に同じ。膝栗毛「お前のつれぢや、しよことがない」
しよ-こん 初婚【名】初めて結婚を行ふこと。(再婚に對して)
しよ-こん 初獻【名】酒宴にて、先づ初に杯をさすこと。
しよ-こん 諸根【名】〔佛〕もろもろの根(コン)。こん(根)㊀參照。
じよ-こん 如今【副】『如は輕く添へたる語』ただいま。いま。現今。
じよ-ごん 助言【名】傍より助けていふ言。じよげん。壽の門松「親だと思うて助言いふまい」
しよ-さ 所作【名】㊀『作(ナ)す所の意』わ

ざ。おこなひ。ふるまひ。所爲。十訓「道理さることなれども、したる所作もなくて」㊁身體のこなし。㊂をどり。舞。㊃しよさごと(所作事)の略。㊄〔佛〕身・口(ク)・意三業(ゴフ)の發動して造作せる所。(能作に對して)
しよ-さ 書佐【名】かきやく。書記。
しよ-さい 書齋【名】『齋は燕居の室の義』書を讀み、物を書く等のための部屋。學問所。
しよ-さい 處裁【名】『處理・裁決の義』しよけつ(處決)に同じ。
しよ-さい 初妻【名】初の妻。(後妻に對して) 新可笑記「此人初妻病死の後は」
しよ-さい 所在【名】㊀ありか。あり場所。㊁ここかしこ。到るところ。所所在在。㊂しわざ。しごと。傾城反魂香「人の見ぬ間に思ふほど、泣くをしよざいか、なさけなや」丹波與作「所在こそおじやれなれ、お大名へも知られた關の小萬が父親を」㊃手近にあること。ありあはせ。用明天皇職人鑑「塗師屋・檜物屋・指物屋・藥鑵屋などに至るまで、所在の得物をひきさげひきさげ」
じよ-さい 如才【名】㊀いい加減になすこと。なほざり。じよさいなし(如才無し)參照。心中刃は氷の朔日「命を助け、身を助け、妊ではなうて親ぢやもの、如才にせいといやっても、わしらに如才はないものを」曾我會稽山「傾城の習よもや如才はいたすまじ」㊁ぬかり。迂闊。春花五大力「どうなりと、云うて下さんせいなあ。そこに如才が有らうか」
じよ-さい 助祭【名】〔基〕『英Deacon』天主敎に於ける僧位の第六階、卽ち司祭の次、副助祭の一なるもの。
じよ-さい 恕罪【名】罪を赦して問はぬこと。宥罪。
じよ-さい 如在【名】『論語の八佾篇に「祭如レ在、祭レ神如二神在一」とあるに本づく』神を祭るに、眼の前に神の在すが如く謹み敬ふこと。によざい。「如在の禮」●
じよ-さい 助劑【名】ばいせんざい(媒染劑)に同じ。
しよざい-こく 所在國【名】その人又はその物の存在する國。
しよざいこく-はふ 所在國法【名】〔法〕その所在國に施行せらるる法令。
しよざい-ち 所在地【名】その人又はその物の存在する地。
しよざいち-はふ 所在地法【名】〔法〕『羅Lex rei sita』物權の目的物の存在する土地に施行せらるる法則。動產及び不動產に關する物權、その他登記すべき權利につきては、その權利者の國籍の如何を問はず、これに從ふこと。國際私法の原則たり。
しよざい-なし 所在無し【形一】つれづれなり。退屈なり。
じよさい-なし 如才無し【形一】㊀ぬかりなし。ぬけめなし。氣が利く。㊁愛想よし。
しよ-さいゐん 初齋院【名】さいぐう(齋宮)を見よ。
しよ-さう 書箱【名】ほんばこ(本箱)に同じ。
しよ-さう 書窓・書窗【名】㊀書齋のまど。鷄窓。㊁書齋。
しよ-さう 初霜【名】はつしも(初霜)に同じ。
しよ-さう 沮喪【名】そさう(沮喪)を見よ。
しよ-さう 所相【名】〔語〕『英Passive voice』じゆどう(受動)に同じ。
しよ-ざう 所藏【名】わが所有物として、藏めてあること、又その物。所持。所有。
しよ-さく 初作【名】はじめての作。最初の著作。
しよ-さく 諸作【名】多くの作。多くの著作。
しよ-さく 書冊【名】しよさつ(書冊)を見よ。
しよさ-くる 所作くる【動四自】所作をなす。仕事をなす。しよさる。浮世親仁氣質「店へ出て、しよさくりてゐらるる所へ」
しよさ-ごと 所作事【名】㊀邦樂に合はせて演ずる舞踊。㊁踊を仕組みたる狂言。げいごと。所作。
しよさ-し 所作師【名】所作事の巧なる人。
しよ-さつ 書冊【名】『冊の字の音、正しくはさく』しよじやく(書籍)に同じ。
しよ-さつ 書札【名】かきもの。かきつけ。てがみ。書紙。
しよさつ-れい 書札禮【名】書札の形式等に關して規定せるもの。例へば官位・家格等によりて文言を變へ、又は眞・行・草の書方を異にする等の式法。書禮式。東鑑「相二論書札禮一事」
しよさ-ぶたい 所作舞臺【名】おきぶたい(置舞臺)に同じ。
しよ-ざむらひ 諸侍【名】侍ども。武士たち。諸士。狂言(鬧野)「いのちが惜しくば、その刀、かみしも、小袖も、みな脫いでおこせ。しよざむらひの腰が、やらるるものか」
しよ-さん 初產【名】うひざん(初產)に同じ。
しよ-さん 初參【名】しんざん(新參)に同じ。慶仁別記「馬場といふ初參の者、勢數ありければ」
しよ-さん 書算【名】書道と算數と。算筆。
しよ-さん 初三【名】㊀その月初の第三日。㊁その月の初の三日間。
初三の月【句】みかづき(三日月)に同じ。
初三の日【句】月の初の第三の日。三日。
じよ-さん 助產【名】『楓窓小牘に「從二助產朱婆婆媾外一得二銅器如一レ壺」とあり』じよさんぷ(助產婦)に同じ。
しよさんてき-しぜん 所產的自然【名】〔哲〕『羅Natura』汎神論的世界觀において、神と自然とを相卽せしめたる中の、創造せられたる方面。(能產的自然に對して)
じよさん-ぷ 助產婦【名】さんば(產婆)に同じ。
しよさ-る 所作る【動四自】しよさくる(所作くる)に同じ。入笑人「ちよいとした茶番がありやす。ところで、野呂(ノロ)が、一番しよさらうといふ存心だ」
しよ-し 諸士【名】もろもろの人士。しよざむらひ。
しよ-し 諸子【名】〔文〕『子はもと男兒の通稱、轉じて人の美稱、師の敬稱となり、更に轉じて、その著書を呼ぶに至れるもの』孔子孟子以外、莊子・老子・韓非子などの如く、支那にて、一家の言を立てたる人の著、及びその學說の總稱。卽ち四庫中の子部に屬するもの。正統記「經史の御學問の上にこの書を御覽じて、諸子等の雜文までなくともの御心なり」
諸子百家【句】『百は多數の義』諸子のこらず。一家言を樹てたる人人。
しよ-し 所司【名】㊀武家時代の職制の一。鎌倉時代には侍所の次官、室町時代にはその長官(別當を置かぬこととなりしため)。㊁僧侶の職名。上座・寺主・都維那の稱。三綱。盛衰記「祇園所司奏狀を獻る」
しよ-し 書史【名】㊀しよじやく。書物。㊁經書と歷史と。
しよ-し 諸司【名】もろもろのつかさ。
諸司の奏【句】王朝時代の節會・七曜の御曆・腹赤・氷樣等の總稱。
しよ-し 庶子【名】㊀嫡子以外の子。㊁妾腹の子。庶出の子。孽子。庶孽。㊂〔法〕實子の一。私生子にして、父の認知を經たるもの。認知の屆出あると同時に、父の妻卽ち嫡母に對しては、準血族として、又法定親子の關係を生ずれども、生母に對しては、なほ私生子たり。
しよ-し 處士【名】『民間に處(ヲ)る士の義』仕官せぬ士。浪人。
しよ-し 處子【名】しよぢよ(處女)に同じ。
しよ-し 諸子【名】㊀同衆及びその以下の者に對する第二人稱の敬稱。あなたがた。諸君。㊁師がその弟子たちに對して呼ぶ第二人稱。
しよ-し 諸氏【名】おのおの。各位。
しよ-し 諸史【名】多くの歷史。
しよ-し 書肆【名】書物を商ふ家。本屋。書林。書店。
しよ-し 書司【名】ふみのつかさ(書司)に同じ。
しよ-し 書紙【名】かきもの。書付。
しよ-し 書師【名】書道に達したる人。てかき。書家。
しよ-し 書旨【名】書面の主旨。文書の趣旨。
しよ-し 書笥【名】ほんばこ(本箱)に同じ。
しよ-し 初志【名】最初のかんがへ。初のおもひ立ちたる志。
しよ-し 所思【名】思ふところ。かんがへ。
しよ-じ 諸事【名】一つ一つの事柄。もろもろの事。種種の事がら。萬事。心中宵庚申「諸事をこまかなけし芥子」

しよ-じ 庶事【名】いろいろの事柄。多くの事柄。諸事。萬事。
しよ-じ 處事【名】事を處理すること。
しよ-じ 諸寺【名】もろもろの寺。諸山。
しよ-じ 書辭【名】書面の文句。
じよ-し 助詞【名】〔語〕てにをは(弖爾乎波)に同じ。
じよ-し 序詞【名】㊀〔語〕枕詞に似て、或語句を言出さんがための前置として用ふる修飾の語。一句以上數句に及ぶ。例へば、「足引の山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかもねむ」の上の句の類。㊁はしがき。序文。
じよ-し 敍賜・叙賜【名】位階・勳等に敍し、勳章・年金等を賜ふこと。
じよ-じ 敍事・叙事【名】事實のままを述ぶること。
じよ-じ 序次【名】物の順序。ついで。次序。
じよ-じ 助辭【名】㊀〔語〕てにをは。助詞。㊁漢文中の矣・焉・於・乎・于などの如く、他の語に附屬して、その意味を助くる語。助語。助字。きよじ(虛字)參照。
しよ-しう 初秋【名】㊀秋のはじめ。㊁陰曆七月の異稱。孟秋。
しよ-しう 諸州【名】多くの州。くにぐに。諸國。
しよしう-めぐり 諸州廻【名】〔書〕五畿內及びその附近なる美濃・近江・越前・若狹・丹後・丹波・播磨・紀伊の國國の紀行。七卷。貝原益軒の著。
しよし-がく 書史學【名】『英 Bibliography』書目・解題に關する學問。
しよ-しき 書式【名】慣例又は法則によりて、一定の型ある書きかた。證書・屆書・願書等の書きざまの一定の制。
しよ-しき 諸色・諸式【名】種種の材料物品。諸品。一代女「それは總に責められ、これは思に沈み、諸色の限を辨へがたし」
しよし-くげでん 諸司公廨田【名】王朝時代の不輸租田の一。乘田・官田を割きて充てたる、諸寮諸司の公廨田。
じよじ-し 敍事詩・叙事詩【名】〔文〕『英 Epic poetry 又 Descriptive poetry』客觀の事柄を主として敍したる詩。客觀詩。(抒情詩に對して)
しよし-しきぶんでん 諸司職分田【名】王朝時代に、太宰帥(ソツ)、諸國守以下、史生(シシヤウ)に至るまでの者に給せし田地。帥十町より史生六段に至る。しきぶんでん(職分田)參照。
しよし-だい 所司代【名】武家時代の職制の一。室町時代には、所司の家人が、その代官として事を執りしもの。織田氏より後は、本職の所司を置かず、所司代のみにて、禁裏の雜務を執らしめ、德川時代には、京都にこれを置きて、京都の警衞、西國諸侯の監督、及び諸般の政務を統べしめたり。太平記「高手・小手にいましめて、侍所へ渡せば、所司代都築入道これを請取りて」
じよじ-たい 敍事體・叙事體【名】敍事を主とする文體。
しよ-しちにち 初七日【名】㊀最初の七日間。㊁しよなのか(初七日)に同じ。增鏡「二十三日御初七日に大宮院御ぐしおろさる」
　初七日の忌【句】初七日の忌日。新願忌。
しよ-しつ 暑濕【名】暑くして濕氣あること。
しよ-しつ 書室【名】しよさい(書齋)に同じ。
しよ-じつ 初日【名】㊀あさひ。旭日。初暘。㊁その物事のはじめの日。しよにち。
しよ-して 初仕手【名】まへして(前仕手)に同じ。
しよし-でん 諸司田【名】王朝時代に、在官の諸司に充てて雜用に給せし田。公廨田(クゲ)。
しよ-しな 諸品【名】種種の品。いろいろの物。しよしき。
しよし-はっと 諸士法度【名】江戶時代の旗本に對する法度。寬永九年に發布す。九箇條より成り、その大旨、武家諸法度に同じく、同十二年二十三箇條に增加せられ、綱吉以後は廢して、武家諸法度に從へり。旗本法度。雜事條目。
じよじ-ぶん 敍事文・叙事文【名】敍事體の文。
しよ-しん 初心【名】㊀はじめに思ひたる事。初志。㊁未だその事に馴れぬこと、又その人。世なれぬこと、又その人。うぶ。未熟。一代男「その初心さ何ほど、やうやうこのほど、岡崎を覺えたる手つきして」㊂〔佛〕はじめて發心して、未だ深行を經ざること。
しよ-しん 書信【名】手紙にてのおとづれ。たより。雁信。
しよ-しん 初審【名】〔法〕ししん(始審)に同じ。
しよ-しん 諸臣【名】もろもろの臣。多くの家來。群臣。
しよ-しん 諸神【名】もろもろの神。多くの神。群神。一代女「通はせ文、…あだなる煙となすに、諸神書きこみし所は消えず」
しよ-しん 所信【名】信ずるところ。信條。
しよ-じん 諸人【名】多くの人。衆人。
しよ-じん 庶人【名】しよみん(庶民)に同じ。
しよ-じん 書人【名】『粧樓記に「劉秦妹、善臨ニ寫右軍蘭亭及西安帖一足レ奪レ眞、秦亦當時翰林書人也」とあり』しよか(書家)に同じ。
しよしん-こう 初心講【名】初心者の催す會。狂言(盜人連歌)「それがし、この頃若い衆と、初心講を結んで御座る」
しよしん-ぼ 書信簿【名】しよじやうひかへちやう(書狀控帳)に同じ。
しよしん-もの 初心者【名】初心なる人。世なれぬもの。うぶ。
しよしめる【動下一他】せしめるの訛。
しよ-しや 書寫【名】書寫すること。宇治「反古の落散りたるを拾ひあつめて、紙にすきて、經を書寫したてまつる」
しよしや 書寫【名】〔地〕しよしやざん(書寫山)の略。
　書寫の上人(シヤウニン)【句】〔人〕しやうくう(性空)の敬稱。世繼「書寫の上人は、法華讀誦(ジユ)の功つもりて、六根淸淨にかなへる人なりけり」
しよ-しや 諸車【名】いろいろの車。「諸車往來止」
しよ-しやう 所生【名】生れし所。盛衰記「所生の所に來って、親類・骨肉に守護せられ」
しよ-しやう 諸將【名】もろもろの大將。多くの大將。
しよ-じやう 書狀【名】㊀しよかん(書簡)に同じ。㊁しよき(書記)㊃を見よ。
じよ-しやう 如牆【名】牆の如く並ぶこと。
じよ-じやう 如上【名】前より述べ來れること。上述。
じよ-じやう 助成【名】じよせい(助成)に同じ。盛衰記「院中の御助成を惡みまゐらせてこそ、此の大願をも思ひ立ちてあれ」
じよ-じやう 抒情・敍情【名】『抒は陳(ノ)ぶる義』自家の感想を述べあらはすこと。
じよじやう-し 抒情詩・敍情詩【名】〔文〕『英 Lyric poetry 抒は陳(ノ)ぶる義』自然又は人事に對して、作者の主觀卽ち感想・氣分を抒(ノ)べたる詩。ちよじやうし。(敍事詩に對して)
しよじやう-じしや 書狀侍者【名】しよき(書記)㊃を見よ。
しよじやう-ひかへちやう 書狀控帳【名】信書の發・受その年月日・要件等を記し置く帳簿。書信簿。
じよじやう-ぶん 抒情文・敍情文【名】自己の情を抒ぶるを主としたる主觀的の文章。(敍事文に對して)
じよしやう-るづう 序正流通【句】〔佛〕じよ(序)の條下を見よ。
しよ-じやく 書籍【名】つづりて冊子となしたる文書。ほん。しよせき。書物。殺靑。
じよ-しやく 敍爵・叙爵【名】㊀爵位に敍せらるること。㊁初めて、從五位下に敍せらるること。五位以上は勅授なりしによりて、特にこの稱ありしなり。くらゐ(位)㊂・じよゐ(敍位)參照。〔鎌倉・室町時代の語〕
しよじやく-くわん 書籍館【名】㊀としよくわん(圖書館)に同じ。㊁明治五年博物局に設け、大學及び南校の圖書を蒐め、閲覽せしめし所。同八年東京書籍館と改稱す。
しよじやく-めいすう 書籍名數【名】和漢書籍の標題の數字に係るものを蒐め、各その名數を記せるもの。三卷。中村治重の著。
しよしや-さん 書寫山【名】〔地〕播磨國飾磨(シカマ)郡曾左(ソサ)村にある山。高さ一二二一尺。姬路市を距る西北一里半。山上、西國三十三所の第二十七番なる圓教寺あり。書寫は方俗「そさ」といふ。

しよしや-ほうへい 諸社奉幣【名】諸社を兼ぬる奉幣使を立てられ、幣帛を獻らるること。(一社奉幣に對して)
しよ-しゆ 處守【名】『處(ヲ)りて守る義』きよしゆ(居守)に同じ。
しよ-しゆ 諸種【名】多くの種類。いろいろ。各種。
しよ-しゆ 書手【名】㊀『唐書に「選二五品以上子孫工レ書者一爲二書手一」とあり』文字を書寫する人。寫字生。㊁一本御書所の主典。
しよ-じゆ 書儒【名】しよはかせ(書博士)の唐名。
しよ-じゆ 諸儒【名】多くの儒者。
じよ-しゆ 助手【名】㊀他人の仕事を助くる人。(主に技術にいふ)㊁他人の技術・事務などを補助する職。帝國大學各學部の助手の類。
しよ-しゆう 諸宗【名】もろもろの宗旨。多くの宗派。
しよ-じゆう 所從【名】『從ふ所の人の義』從者。家來。平治「多くの所從を失ひ」
しよしゆう-けうだうしよく 諸宗敎導職【名】明治の初年、僧侶にて、教導職を兼ねしもの。
しよ-しゆつ 庶出【名】妾腹より生るること、又その人。支出。庶生。
しよ-じゆつ 所述【名】述ぶる所。
じよ-じゆつ 敍述・叙述【名】順序を追ひて述ぶること。
じよじゆつ-ご 敍述語・叙述語【名】〔語〕じゆつご(述語)に同じ。
じよじゆつ-ぶん 敍述文・叙述文【名】〔文〕敍述を主とせる文。例へば「家康大阪に入りて大いに賞罰を行ひ、景勝等の封邑を削り、功臣に加增す」の類。(感嘆文・疑問文・命令文に對して)
しよ-しゆん 初春【名】㊀春のはじめ。はつはる。春初。㊁陰曆正月の異稱。孟春。
しよ-じゆん 初旬【名】じやうじゆん(上旬)に同じ。
しよ-しよ 處暑【名】二十四氣の一。秋に屬し、陰曆にては七月中、陽曆にては八月二十三日頃に當る。
しよ-しよ 處處【名】ところどころ。ここかしこ。はうばう。
しよ-しよ 諸處【名】多くの所。各處。
しよ-じよ 初敍・初叙【名】初めて位階・勳等に敍せらるること。
しよ-じよ 沮洳【名】㊀低くして、水にひたり易く、濕氣多きこと、又その土地。㊁らうごく(牢獄)に同じ。
　沮洳の場(ヂヤウ)【句】『文天祥の正氣歌に「哀哉沮洳場、爲二我安樂國一」とあり』ひとや。牢獄。
じよ-じよ 徐徐【貌】急がぬさま。そろそろ。しづしづ。
じよ-じよ【名】『ぞぞの訛』さうり(草履)を云ふ。〔小供の語〕
しよ-しよう 書證【名】〔法〕訴訟上或事實を證明するに足るべき事柄を記載せる書類を以て、擧證の一方法とすること。(人證などに對して)
しよ-しよう 所證【名】〔佛〕『證する所の義』さとり。證果。盛衰記「諸佛己心の所證なり」
しよ-しよく 黍稷【名】㊀きびと黃粱と。㊁ごこく(五穀)に同じ。
しよ-しよく 所職【名】『職とする所の義』任ぜられたる職。著聞「義光は所職を辭し申して」
しよ-しよく 曙色【名】あけぼのの景色。曉色。曙景。
しよしよく-にん 諸職人【名】多くの職人。鬼貫「花の頃扇插いたり諸職人」
しよ-す 處す【動佐變自】身を置く。をる。「世に處す」
しよ-す 處す【動佐變他】㊀おく。とどむ。「身を處す」㊁取計らふ。さばく。處置す。處分す。
しよ-す 書す【動佐變他】文字をかく。
しよ-す 署す【動佐變自】みづから姓名を記す。署名す。
じよ-す 敍す・叙す【動佐變他】㊀次第を分ち定む。ついづ。〔序す〕㊁官位を授け、又は進む。㊂次第を追ひて陳述す。のぶ。〔序す〕㊃はしがきを書く。〔序す〕
じよ-す 恕す【動佐變他】思ひやりあはれみて許す。なだむ。
じよ-すうし 助數詞【名】〔語〕數詞の下に添へて、そのものを表はす語。一卷の卷、三箇の箇の類。
じよすゐ 如水【名】〔人〕くろだよしたか(黑田孝高)の雅號。
しよ-せい 所濟【名】『みつぎ濟(ス)くる所の物の義』貢租を納むること、又その貢租。盛衰記「正稅・官物の所濟なければ」
しよ-せい 書生【名】㊀學業を習ふ者。學生。㊁食客となりて、暇あるごとに學問する若輩。
しよ-せい 書聖【名】能書の極度と認めらるる人。
しよ-せい 庶生【名】しよしゆつ(庶出)に同じ。
しよ-せい 庶政・諸政【名】多くの政事。もろもろの政治。
しよ-せい 庶姓【名】㊀もろもろの家系。㊁しよぞく(庶族)㊀に同じ。
しよ-せい 所生【名】㊀その人の生みたる子。㊁『詩經大雅の文王篇に「夙興夜寐、無レ忝二爾所生一」とあり』おや。生みたる親。兩親。
しよ-せい 初生【名】初めて生るること。
しよ-せい 諸生【名】㊀多くの學生。㊁じゆしや(儒者)㊀に同じ。
しよ-せい 處生【名】『世に處する義。しよす(處す)參照』世をわたること。よすぎ。
じよ-せい 助勢【名】助けてなすこと。手つだひ。てだすけ。加勢。助力。
じよ-せい 助成【名】助けて成就せしむること。
しよせい-あがり 書生上【名】書生の生活をやめて、新に世に出でたるばかりの人。
しよせい-じ 初生兒【名】生後一週間までの間の小供。うひご。
しよせい-じだい 書生時代【名】がくせいじだい(學生時代)に同じ。
しよせい-しばゐ 書生芝居【名】さうしばゐ(壯士芝居)に同じ。
じよせい-つうふう 助成通風【名】きやうあつつうふう(强壓通風)に同じ。
しよせい-はいいう 書生俳優【名】さうしはいいう(壯士俳優)に同じ。
しよせい-ばおり 書生羽織【名】『主に書生の著るよりいふ』普通のよりも丈長く、膝より下に達する程に仕立てたる羽織。
じよせい-ひん 助成品【名】〔經〕肥料・藥劑などの如き、生產の原料品にはあらざれども、その補助として必要なる物。
しよせい-ほつく 書生發句【名】しんぶんはつく(新聞發句)に同じ。〔新派の起りたる當時の語〕
しよせい-やくしや 書生役者【名】さうしはいいう(壯士俳優)に同じ。
じよせい-やしき 助成屋敷【名】江戶時代の武家屋敷の一。
しよ-せき 書籍【名】しよじやく(書籍)に同じ。
しよ-せき 書跡【名】ひつせき(筆跡)に同じ。
しよ-せき 書尺【名】せきしよ(尺書)に同じ。
しよ-せき 庶績【名】もろもろの功績。
しよ-せつ 諸說【名】㊀多くの人の說。もろもろの主張。㊁多くの風說。
しよ-せつ 初雪【名】はつゆき(初雪)に同じ。
じよ-せつ 絮雪【名】『絮(ワタ)のごとく、雪のごとくに飛散する義』柳の花の形容。柳絮。
じよ-せつ 絮說【名】『絮(ワタ)のごとく纏きて絕えざる義』くどくどと說くこと。
じよ-せつ 敍說・叙說【名】のべ、ときあかすこと。
じよせつ 如拙【名】〔人〕畫僧。文淸と號す。九州の人。京都相國寺の鳳芳軒に住み、畫を以て、足利氏の知遇を受く。支那北宗派の神髓を學びて、清新の趣味と技巧との畫風あり。
しよせつ-しや 所攝社【名】『攝する所の社の義』せつしや(攝社)に同じ。大神宮式「太神宮所攝社二十四座」
しよ-せん 諸仙【名】〔佛〕多くの仙人。もろもろの婆羅門淨行の者。謡曲(梅貫記)「我も、そのかみは、上界の諸仙たるが、…假に人界に生れ來て」
しよ-せん 所詮【副】『詮ずる所の意。詮は事理を明かにする意』つまるところ。結局。

十訓「所詮は、おこなひは、何にてもあれ」
しよ-ぜん　諸善【名】もろもろの善行。衆善(シュゼン)。
諸善奉行(ブギャウ)【句】〔佛〕「衆善(シュゼン)奉行」に同じ。野守鏡「七佛みな諸善奉行、諸惡莫作(サク)と說きたまへる上は」
諸善萬行(マンギャウ)【句】〔佛〕あらゆる善行。淨土和讃「諸善萬行ことごとく」
しよ-ぜん　初禪【名】〔佛〕しよぜんてん(初禪天)に同じ。正統記「初禪の梵宮は、一四天下の廣さなり」
じよ-せん　如船【名】うきぶくろ(浮袋)に同じ。
しよぜん-てん　初禪天【名】〔佛〕色界(シキカイ)の四禪天の第一。梵衆・梵輔・大梵の三天に分れ、果報の福德に差異あり。
しよせん-なし　所詮無し【形一】かひなし。しやうがなし。沙石集「あや、つばらは所詮なき者ぞ」
しよぜん-ぼんてん　初禪梵天【名】〔佛〕しよぜんてん(初禪天)に同じ。正統記「大火災といふこと起りて、色界の初禪梵天まで燒けぬ」
しよ-そ　書疏【名】てがみ。書狀。
しよ-そ　初祖【名】血統又は流派の初代。
じよ-そう　助奏【名】〔音〕音色の變化及び樂器の特性を利用する爲に、或樂器の他に、一箇もしくは箇數の他の樂器を用ひ、獨奏もしくは獨唱を助くる事。
しよ-そうぎ　初僧祇【名】〔佛〕第一の阿僧祇劫。菩薩行を修して佛となるに、三大阿僧祇劫の時間を要する中に、この第一の阿僧祇劫にて、十信・十住・十行・十廻向等の四十位を經といふ。この期間は、なほ凡夫の地位にして、煩惱を斷つに至らずといふ。ごじふにゐ(五十二位)參照。盛衰記「一見の新客は、初僧祇の功德を」
しよそ-き　初祖忌【名】だるまき(達磨忌)に同じ。
しよ-そく　初足【名】病後などの初めての外出。若風俗「かかる野末までの御初足、…ただ御歸宅と申せば」
しよ-ぞく　所屬【名】從屬すること、又その物。
しよ-ぞく　庶族【名】㊀庶流の一族。庶姓。別家。㊁庶民。平民。
しよぞく-ちやう　所屬廳【名】從屬する官廳。
しよ-そつ　諸卒【名】多くの兵卒。
しよ-そん　庶孫【名】庶出のまご。
しよ-そん　書損【名】書きあやまり。書きそこなひ。
しよ-そん　諸尊【名】〔佛〕しよぶつ(諸佛)の敬稱。
しよ-ぞん　所存【名】思ふところ。かんがへ。みこみ。太平記「これ程にいふかひなき御所存にて、天下の大事を思召したちけること」
しよぞん-なし　所存無し【形一】思慮なし。よき考も出でず。太平記「誠に所存なげなる體、心淺くぞ見えたりける」
しよそん-べつぎやう-ごまほふ　諸尊別行護摩法【名】〔佛〕『別行は合行に對する語』諸尊の個個に對して、別別に修する護摩供。書聞「三部の大法、諸尊別行護摩法を受け」
しよ-たい　諸隊【名】多くの隊。
しよ-たい　諸體【名】種種の體裁。
しよ-たい　書體【名】㊀文字の書方。書風。㊁漢字の種種の書方、即ち楷書・行書・草書・隸書などの類。
しよ-たい　所帶【名】㊀『身に帶ぶる所の物の義』領土。財產。平治「かれの所帶なれば、播磨國をも賜はり」㊁家を構へて生計を立つること、又その一家。せたい。相城酒呑童子「夫婦喧嘩所帶の毒」
所帶を持つ【句】新に所帶持となること。
しよ-たい　所待・處待【名】たいぐう(待遇)に同じ。
しよ-だい　初代【名】その系統の、最初の人。
じよ-だい　序代・序題・敍題【名】序文。序。前置。大鏡「大井の御幸も傳りしぞかし。…その日の序題は、やがて貫之のぬしこそは仕うまつりしか」
しよたい-かか　所帶嚊【名】せわにようぼう(世話女房)に同じ。浮世親仁形氣「あたら美女に、男持たせて、しよたいかかにする事、いかにしても惜し」
しよたい-くづし　所帶崩【名】一旦、夫婦となりて、所帶を持ちたる後、故ありて離別したる人。萬紫千紅「大明のしよたいくづし、褒連の和尙たち」
しよたい-じむ　所帶染む【動上二自】所帶を持ちたるため、一家としての生計、又は世間の交際に慣る。家庭のためを計らんとする心になる。
しよたい-だうぐ　所帶道具【名】一家を支ふるに日常必要なる諸具。世帶道具。
しよ-だいぶ　諸大夫【名】㊀中世以來、親王・攝家・大臣家などの家司(ケイ)に補せられ、恪勤(カクゴン)の功により、昇殿を許され、高官に進みし輩。四位・五位を極位とす。㊁五位の侍の通稱。朝散大夫。
しよだいぶ-け　諸大夫家【名】前條㊀の家柄。
しよだいぶ-の-ま　諸大夫間【名】『諸大夫の詰所の義』舊京都皇居内の居室の一。節會その他の儀式の際、殿上人等の候所に充てられし所。宜秋門を入り、車寄を昇り、右方の廊の終端。虎ノ間・鶴ノ間・櫻ノ間の三室あり、初は櫻ノ間のみの稱なりしが、後には三室の總稱となれり。
しよだいぶ-ぼふし　諸大夫法師【名】門跡家の家司(ケイ)。坊官。
しよ-だいみやう　諸大名【名】もろもろの大名。諸侯。
しよ-たいめん　初對面【名】初めての對面。初會。
しよたい-もち　所帶持【名】一戸を構へて獨立の生計を立つること、又その人。身上持。生玉心中「彼奴は所帶持なれば、少しの取りかへもしてくれる」
しよ-たう　諸島【名】多くの島。
しよ-たう　初唐【名】〔文〕支那の唐の代を詩の盛衰變化の上より四つの時期に區分したるうちの初期。凡そ玄宗の開元の初頃までを稱し、王勃・楊炯(ケイ)・盧照鄰・駱賓(ラクヒン)王の四家、詩人として最も傑出す。(盛唐・中唐・晚唐に對して)
しよ-たう　蔗糖【名】しやたう(蔗糖)の誤讀。
しよ-たう　書刀【名】㊀『周禮の工記註に「今之書刀」とありて、疏に「至レ漢、雖レ有ニ紙筆ニ仍有ニ書刀ニ」とあり』支那にて、古、文字を書く竹簡を削るに用ひし小刀。㊁紙を切る小刀。
しよ-だう　書道【名】文字を書く術の道。書法。筆道。
しよ-だう　書堂【名】しよさい(書齋)に同じ。
しよ-だう　諸道【名】もろもろの學藝。正統記「諸道に明かに、佛法の方までも暗からざりけるとぞ」
しよ-だうぐ　諸道具【名】いろいろの道具。多くの道具。
しよだうぐ-かりぶぎやう　諸道具借奉行【名】かりものぶぎやう(借物奉行)に同じ。
しよだうぐ-ぶぎやう　諸道具奉行【名】戰國時代に、諸國の大名、又、德川時代の初期に、將軍の行旅の際、武器以外の雜具を沙汰せしむるために、臨時に任命せし役。
じよ-だし　序出【名】書きはじめ。じよだい。まへおき。發端。
しよ-だち　初太刀【名】はじめに切りかくる太刀。大磯虎稚物語「我れらがためにも舅の敵、掃部に初太刀を討たせたし」
しよ-だな　書棚【名】三棚の一。書物を載せおく棚。しよもつだな。書架。
しよたふ-じやう　書答狀【名】鎌倉・室町兩時代に、原告の訴狀に對する被告の第一回の答狀。初問狀に對する最初の陳狀。初陳狀。初陳。たふじやう(答狀)參照。支狀(ササヘジャウ)。
しよ-だん　初段【名】㊀はじめの段。はじめの一きり。㊁碁・將棋・柔道などの技藝の階級の、最初のもの。
しよ-だん　處斷【名】『處決・裁判の義』罪をさばくこと。裁斷。處決。
じよ-たん　助炭【名】火鉢又は爐などの上に掩ひて、火氣の逸散を防ぐ具。火器の大小に隨ひて、枠(ワク)を作り、紙を上部と左右・背後の四面に張りて作る。


(じよたん)

しよ-ち　處置【名】『處(オ)き置く義、即ちその所行に適合せる位置に定むる義』とりきむること。はからふこと。處理。
しよ-ち　所知【名】『知る所の地の義』しよりやう(所領)に同じ。常盤小栗判官「おのれ所知を押領す」

しよ-ち　初地【名】〔佛〕菩薩乘の十地の第一。
しよ-ち　書癡・書痴【名】『唐書の竇威傳に「竇氏子弟皆喜レ武、獨威尙レ文、諸兄詆爲ニ書癡ニ」とあるに本づく』讀書に耽り、餘事に心を寄せざること。書淫。
しよ-ぢ　所持【名】わが物として持ちてあること。所有。
じよ-ち　舒遲【名】しづかにおそきこと。舒緩。
しよち-いり　所知入【名】㊀にふぶ(入部)に同じ。盛長記「急ぎ京上(ノボリ)して、所知入せん」㊁芝居の囃子(ハヤシ)の名。大名の行列の出づる場などに用ひ、三挺の三味線を用ふ。
しよ-ちう　書厨【名】㊀書物を入れ置く簞笥(タンス)。㊁『齊書の陸澄傳に「讀レ易三年、不レ解ニ文義ニ欲レ撰ニ宋書ニ不レ成、王儉戲レ之曰、陸公書廚也」とあるに本づく』徒らに讀書して、その意義に通ぜざる者をいふ。ほんばこ。
しよ-ぢく　書軸【名】文字を書きたる掛物。書幅。
しよぢ-しや　所持者【名】所持する人。所持人。
しよ-ちつ　書帙【名】㊀ちつ(帙)に同じ。㊁しよもつ。書册。書卷。
しよちっ-ぶり　處置振【名】しよちぶり(處置振)の訛。
しよぢ-にん　所持人【名】しよぢしや(所持者)に同じ。
しよぢにん-ばらひ　所持人拂【名】〔商〕ぢさんにんばらひ(持參人拂)に同じ。
しよぢ-ひん　所持品【名】所持の物品。携帶又は所有せる品物。
しよち-ぶり　處置振【名】事柄を處置する樣子。物事をなす樣子。しよちっぶり。
しよ-ぢん　初陣【名】しよたふじやう(初答狀)に同じ。
しよ-ぢん　諸塵【名】〔佛〕吾人の眞性を汚すもろもろの煩累。五塵。
しよぢん-じやう　初陣狀【名】しよたふじやう(初答狀)に同じ。
しよ-ちやう　所長【名】㊀所と名づくる官府の長。㊁『長ずる事の義』ちやうしよ(長所)に同じ。
しよ-ちやう　署長【名】署と名づくる官府の長。官署の長。
じよ-ちやう　助長【名】㊀『孟子の公孫丑上篇に「勿レ助レ長也、無レ若ニ宋人ニ然ニ宋人有下閔ニ其苗之不ニレ長而揠レ之者上芒芒然歸、謂ニ其人ニ曰今日病矣、予助ニ苗長ニ矣其子趨而往視レ之、苗則槁矣、天下之不レ助ニ苗長ニ者寡矣、以爲レ無レ益而舍レ之者、不レ耘レ苗者也、助ニ之長ニ揠レ苗者也、非ニ徒無ニレ益、而又害レ之」とあるに本づく』速成を欲して、却りて事を害すること。㊁助力して發達せしむること。
じよ-ちやう　助丁【名】しちやう(廝丁)に同じ。
じよ-ちやう　舒暢【名】のびのびすること。暢達。
じよちやう-ぎやうせい　助長行政【名】〔法〕こうえきぎやうせい(公益行政)に同じ。
じよちやう-じむ　助長事務【名】〔法〕助長行政の事務。
しよ-ちやく　庶嫡【名】しよてき(庶嫡)に同じ。
しよ-ちゆう　暑中【名】㊀二十四氣の一。小暑と大暑との間の時期。(寒中に對して)㊁夏の暑さの盛んなる間。
しよ-ちゆう　書中【名】㊀書籍又は手紙の文句の中。㊁書面。手紙。雪女五枚羽子板「宗徒の郎黨一人にても討來らば、三千石は相違なしと、これ慥な書中到來す」
しよちゆう-きうか　暑中休暇【名】學校・諸官省などにて、暑中に業を休むこと。なつやすみ。土用やすみ。暑中やすみ。
しよちゆう-やすみ　暑中休【名】前條に同じ。
しよ-ぢよ　處女【名】『家に處(ヲ)る女の義』未婚の女子。きむすめ。おぼこむすめ。をとめ。處子。
しよ-ぢよ　庶女【名】庶出の女子。
しよぢよ-えんぜつ　處女演說【名】その人の初めてなす演說。
しよぢよ-かうかい　處女航海【名】新に造りたる船のはじめての航海。初航海。
しよぢよ-けつじつ　處女結實【名】〔植〕たんゐけつじつ(單爲結實)に同じ。
しよぢよ-さく　處女作【名】その人の、初めて世に公にせる創作物。
しよぢよ-せいしよく　處女生殖【名】〔生〕『英 Parthenogenesis』たんゐせいしよく(單爲生殖)に同じ。
しよぢよ-まく　處女膜【名】〔醫〕『英・獨・佛 Hymen』膣口の周邊をおほふ皺襞ある粘膜。月經又は交接によりて綻裂す。
しよぢよ-りん　處女林【名】げんせいりん(原生林)に同じ。
しよちり【名】芝居の囃子(ハヤシ)の一。行列の時に用ふる三味線の相方。
しよ-つう　書通【名】書狀をかよはすこと。若風俗「書通に心をお知らせ申すべしと思ひ込み」
しよ-つう　初通【名】初めて艷書を通はすこと。一代女「しよつうよりして、文章、命も取るほどに、次第次第に書きこしぬ」
しよ-つう　諸通【名】〔佛〕もろもろの神通。五通・六通など。
しよっ-きり　初切【名】㊀興行相撲にて、初に行ふ三番勝負。㊁物事の初。しよっぱな。
しよっく(英 Shock)【名】㊀感動。衝動。動搖。㊁〔醫〕反射的に誘發せらるる虛脫に似たる狀態。外傷によりて、知覺神經の廣き領域に强き震盪を及ぼす時、又、特殊神經の刺戟によりても發す。
しよ-づくゑ　書机【名】日本風の讀書用の机。ふみづくゑ。
しよっ-ちゆう　初中【副】絕えず。つねに。始終。常住。〔東京の語〕
しよっ-つくばふ【動四自】つくばふ(蹲ふ)を强めていふ語。丹波與作「辻にしよっつくばふて、思案中橋懸しさまさる」
しよっ-こ【名】〔動〕ほほじろ(頰白)に同じ。
しよっ-ぱい　鹹ばい【形】㊀『すっぱい(酸っぱい)を見よ』しほはゆし(鹹し)の訛。㊁世味酸たり。人情酷薄なり。
しよっ-ぱな　初端【名】物事の始まり。發端。
しよ-て　初手【名】てはじめ。おこり。最初。發端緖。夕霧阿波鳴渡「初手二度まではふる雪の、つみも恐れぬ無理起請」
しよ-てい　書體【名】しよたい(書體)に同じ。
しよ-てい　所體・處體【名】すがた。ふり。體裁。一代男「江戸風のしよていと申す。世之介樣それはそのまま、吉原のかの太夫さまにいきうつしといふ」
しよ-てい　渚汀【名】なぎさ。みぎは。
しよ-てい　初程【名】『翠雨軒詩話に「甌北詩、一彈指頃盛衰殊、曾記初程便棄レ繻」とあり』旅行の門出の事。
しよ-てい　諸亭【名】㊀多くの亭。㊁引附方又は問註所等の諸局。〔鎌倉時代の語〕庭訓往來「諸亭經廻、可レ申ニ圖師ニ也」
しよ-てい　諸庭【名】諸處の公卿の家門。太平記「いつしか諸庭の奉公人となり」
しよてい-くばりわけ-ぶぎやう　諸亭賦分奉行【名】ふべつぶぎやう(賦別奉行)に同じ。
しよてい-ふべつぶぎやう　諸亭賦別奉行【名】前條に同じ。
しよ-てう　諸鳥【名】もろもろの鳥。多くの鳥。
しよてえ-もち　所帶持【名】しよたいもち(所帶持)の訛。浮世風呂「花を活けるの、琴を彈くのと、世帶もちのいられえ事さ」
しよ-てき　庶嫡【名】庶出と嫡流と。庶子と嫡子と。しよちやく。
しよ-てつ　諸姪【名】姪の者たち。
しよ-てっぺん　初天邊【名】㊀てっぺん(天邊)に同じ。㊁しよっぱな(初端)に同じ。
しよ-てん　所天【名】㊀『後漢書の梁竦傳に「昧死自陳ニ所天ニ」、潘岳の寡婦賦序に「適レ人而所天又殞」、吳質の書に「所天優ニ游典籍之場ニ」とあり。天は人の仰ぎ賴む所なるより、天とする意にていふ』その人の仰ぎ賴む人、例へば臣より君、妻より夫を指していひ、又、友人を指していふ類。㊁をっと(夫)に同じ。
しよ-てん　曙天【名】あかつきの天。曉天。
しよ-てん　暑天【名】暑きそら。炎天。
しよ-てん　書典【名】書籍。經典。典籍。
しよ-てん　書店【名】書籍を商なふ家。本屋。書林。書賈。
しよ-てん　諸天【名】〔佛〕㊀もろもろの天

上昇。てんじやう(天上)㊂-さんがいしよてん(三界諸天)參照。㊁天上界のもろもろの神。天衆(テンシユ)。榮花「諸天、雲に乘りて遊戯(ユゲ)し」謡曲(雲雀山)「諸天・氏の神も、まさに照覽あるべきなり」

諸天善神【句】〔佛〕諸天㊁に屬する善神たち。太平記「諸天善神も納受したまふかとぞ見えし」

しよ-てん 所傳【名】『傳ふる所の事の義』つたへ。傳說。

しよ-てん 初傳【名】最初の傳授。

しよ-てん 書傳【名】古人の書傳へたるもの。古人の著したる書物。

じよてん-き 如天記【名】〔書〕さんちやうき(三長記)に同じ。

しよてん-く 諸天苦【名】〔佛〕ごく(五苦)「㊁を見よ。

しよて-ゆるし 初手許【名】諸藝傳授の最初の許。しよゆるし。はつゆるし。(中許・奧許に對して)

しよ-と 書蠹【名】しぎよ(蠹魚)に同じ。

しよ-と 胥徒【名】しより(胥吏)に同じ。

しよ-ど 初度【名】㊀初の度。最初。第一回。㊁『屈原の離騷に「皇覽二揆予初度一兮、肇錫レ余以二嘉名一」とあり』たんじやうび(誕生日)に同じ。

しよ-とう 初等【名】初の等級。低き等級。

しよ-とう 初冬【名】㊀冬の初。㊁陰曆十月の異稱。孟冬。

しよ-とう 書燈【名】書を讀むともし火。書「檠。

しよ-とう 諸等【名】㊀多くの等級。㊁〔數〕しよとうすう(諸等數)の略。

しよ-どう 所動【名】『英Passive voice』㊀はたらきかけらるること。うけみ。被動。受動。(能動に對して) ㊁〔語〕うけみ(受身)㊁に同じ。

じよ-とう 敍等・叙等【名】官等に敍する「こと。

しよとう-きかがく 初等幾何學【名】〔數〕『英Elementary geometry』初等平面幾何學と初等立體幾何學との總稱。(高等幾何學に對して)

しよとう-くわはふ 諸等化法【名】〔數〕諸等通法と諸等命法との總稱。

しよとう-けういく 初等教育【名】簡易なる普通教育、卽ち小學校の教育。(中等教育・高等教育に對して)

じよ-どうし 助動詞【名】〔語〕『英Auxiliary verb』動詞の下に添へて、その意味を助くる詞。例へば、「行きたり」「知りぬ」の「たり」「ぬ」の類。活助辭。

しよとう-すう 諸等數【名】〔數〕ふくめいすう(複名數)に同じ。

しよとう-つうはふ 諸等通法【名】〔數〕諸等數を單名數に化する算法。

しよとう-ふつうけういく 初等普通教育【名】普通教育の低きもの。初等教育。(高等普通教育に對して)

しよとう-へいめんきかがく 初等平面幾何學【名】〔數〕『英Elementary plane geometry』幾何學の一。點・直線・圓又はその集合より成る圖形の性質を攷究するもの。

しよとう-めいはふ 諸等命法【名】〔數〕單名數を諸等數に直す算法。

しよとう-りったいきかがく 初等立體幾何學【名】〔數〕『英Elementary solid geometry』幾何學の一。同一平面上にあらざる直線と直線と、また直線と平面と、また平面と平面との關係及び平面の集合して成る圖形の性質、並びに圓壔(エンタウ)・圓錐(エンスヰ)・球等の性質を研究するもの。

しよ-とく 所得【名】㊀己が得るところの物。わが物となる利益。しようとく。十訓「あはれ、しつる所得かな。…年頃不動尊の火焰を惡しう書けるなり。はや見取りたり。これこそは所得よ」㊁利益。收入。

しよ-とく 書牘【名】『せきとく(尺牘)を見よ』てがみ(手紙)に同じ。

しよ-とく 諸德【名】㊀種種の道德。㊁多くの高德なる僧侶。保元「御門徒の大衆は申すに及ばず、滿山の諸德」

しよとく-がく 所得額【名】所得金のたか。

しよとく-きん 所得金【名】收益の金。

しよとく-しんさゐゐん 所得審査委員【名】所得審査委員會の議員。收稅官中、大藏大臣の任命せる三人と、所得調査委員中より互選したる四人とを以て之に充つ。

しよとくしんさゐゐん-くわい 所得審査委員會【名】稅務管理局に屬し、所得納稅義務者が、政府の通知したる所得金額に對し、不服を申出でし時、審査決議する機關。

しよとく-ぜい 所得稅【名】『英Income-tax』直接國稅の一。各人一箇年の所得を標準として賦課するもの。

しよとくぜい-はふ 所得稅法【名】所得稅の徵收に關する事項を規定したる法律。明治二十年初めて公布。後、數回の改正を經たり。

しよとくぜい-ふかぜい 所得稅附加稅【名】地方稅の一。所得稅を納むる者の所得に課するもの。その稅率は北海道、府縣にては所得稅百分十以下、その他の公共團體にては百分の三十五以下。

しよとく-たい 書牘體【名】書牘の文體。我が國にては、普通に「候」を用ふ。候文體。書簡文體。尺牘體。

しよとく-てうさゐゐん 所得調査委員【名】所得調査委員會の議員。定員は五人。

しよとくてうさゐゐん-くわい 所得調査委員會【名】各稅務署所轄內に置き、第三種所得稅、卽ち法人の所得井びに公債・社債の利子による所得に屬せざる所得金額を調査する委員會。

しよとく-ぶん 書牘文【名】手紙の文。書翰文。日用文。候文。

じよ-な【名】〔動〕かはせみ(川蟬)を云ふ。〔下總國の方言〕

しよ-なぬか 初七日【名】人の死にし日より七日目にあたる日。佛事を修す。しよしちにち。しよなのか。

しよ-なのか 初七日【名】前條に同じ。

しよ-なん 庶男【名】庶出の男子。

じよな-めき【名】じよなめくこと、又その人。末摘花「江戶見物にじよなめきが立つてたれ」

じよな-めく【動四自】なまめかしくいやみなる樣子をなす。

しよに【名】〔動〕かはせみ(川蟬)を云ふ。〔美作國・備前國の方言〕

しよ-にち 初日【名】興行物の初めての日。

しよ-にふひ 諸入費【名】いろいろの入費。諸入用。

しよ-にふよう 諸入用【名】前條に同じ。

しよ-にん 諸人【名】しよじん(諸人)に同じ。

しよ-にん 庶人【名】しよじん(庶人)に同じ。

しよ-にん 初姙【名】初めて姙娠すること。

しよ-にん 初任【名】初めて、その官職に任ぜらるること。

しよ-にん【名】意地わるきこと。膝栗毛「勝手についで飲みなさい。ええ、しよにんな男だ」

じよ-にん 敍任・叙任【名】位勳に敍し、官職に任ずること。

しよ-ねつ 暑熱【名】夏のあつさ。炎暑。炎「熱。

しよ-ねん 所念【名】思ひ込みたること。所存。

しよ-ねん 初念【名】初に思ひ込みたるこ「と。

しよ-ねん 諸念【名】もろもろのおもひ。

しよ-ねん 初年【名】はじめの年。第一年。

じよ-の-くち 序口【名】㊀はじまり。發端。㊁相撲の番附の五段目、卽ち最下の段の地位、又その力士。しよっぱな。

じよ-の-まひ 序舞【名】㊀芝居の囃子(ハヤシ)の一。御殿の場にて、主君に謙言するとき、又は人の出入する場合に用ふ。㊁能の舞の一。靜なる品位ある舞。羽衣・西行櫻等の如き太鼓を用ふるものと、江口・芭蕉等の如く用ひざるものとの二種あり。

しよ-の-めい 疏銘【名】祈禱の旨を記したる書付に、願主の姓名を書きたるもの。

しよ-はう 諸方【名】もろもろの方角。あちこち。四方八方。

しよ-はう 處方【名】㊀處置の方法。手段。㊁病質に應ずる藥劑の調合方。

しよ-ばう 書房【名】『房は實の義』㊀しよさい(書齋)に同じ。㊁しよし(書肆)に同じ。

しよはう-がき 處方書【名】處方を記したる書付。

しよはう-がく 處方學【名】醫藥配合の方法、又は關係等を講究する學問。

しよはう-せん 處方箋【名】醫師の處方を書きたる用紙。藥箋。

しよ-はかせ 書博士【名】王朝時代、大學寮にて、書道教授の任に當りし職。定員二人。ふんはかせ。

じよ-は-きふ 序破急【句】じよ(序)の條下「を見よ。

しよ-はく 初魄【名】『しはく(死魄)を見よ』みかづき(三日月)に同じ。

しよ-はつ 初發【名】しよほつ(初發)に同じ。

しよ-ばつ 處罰【名】罪に處すること。科「罰。

じよ-ばつ 序跋【名】序文と跋文と。題跋。

しよ-はふ 書法【名】㊀文字の書方。書道。筆法。㊁『左傳の宣公二年の條に「子曰、董狐古之良史也。書法不レ隱」とあり』文章の書方。

書法の家【句】書道を家業とする家柄。世尊寺・持明院などの類。

じよ-はふ 助法【名】〔法〕けいしきはふ(形式法)に同じ。(主法に對して)

しよ-はん 所犯【名】犯罪。つみ。

しよ-はん 初犯【名】初めて罪を犯すこと。初ての犯罪。(二犯・三犯等に對して)

しよ-はん 初版【名】初度の印刷。第一版。初刻。原版。(二版・三版などに對して)

しよ-はん 初判【名】㊀はじめて分るること。㊁『日本書紀神代卷に「天地初判(アメツチハジメテワカルル)」とあるよりいふとぞ』物ごとの始。最初。

しよ-はん 諸般【名】いろいろ。さまざま。かれこれ。百般。萬般。

しよ-ばん 初番【名】㊀初の番。㊁はじ「め。最初。

しよ-はらみつ 諸波羅蜜【名】〔佛〕もろもろの波羅蜜。六波羅蜜・十波羅蜜など。榮花「諸波羅蜜を說くと聞ゆ」

しよ-ひ 諸費【名】もろもろの費用。諸入「費。

しよ-ひ 書費【名】書物を買ふ費用。

しよ-ひ 書皮【名】書物の表紙。

しよひ-あげ 脊負上【名】おびあげ(帶擧)に同じ。

しよ-びく【動四他】强ひて連れきたる。

しよひ-こみ 脊負込【名】しよひこむこと。し「ぶく。

しよひ-こむ 脊負込む【動四他】㊀多くの物を脊負ふ。㊁不必要なる又は價値なき物を引受く。

しよ-ひつ 初筆【名】しよふで(初筆)に同じ。

じよ-ひつ 敍筆・叙筆【名】敍述の筆づかひ。

じよ-ひつ 助筆【名】加筆して直すこと。「加筆。

しよひ-なげ 脊負投【名】㊀相撲(スマフ)の四十八手の一。相手の手を執り、その體を、わが脊に引載せて投ぐるもの。おひなげ。㊁相手を誘導して、安心を與へて置きながら、突然からき目にあはすこと。

しよ-ひん 諸品【名】多くの物品。諸物。

しよ-びやう 諸病【名】いろいろの病氣。萬病。

じよ-びやう 序病【名】疱瘡(シトウ)の未だ外部に發せざるもの。じよやみ。

じよ-びらき 序開【名】㊀昔、一日の興行の始に、まづ脇狂言を了へて、次に演ぜし一幕物。見習の作者これを脚色し、稻荷町の役者、これを演じたり。㊁しよっぱな(初端)に同じ。

しよ-ふ 諸父【名】父の兄弟たち、卽ち伯父・叔父等の總稱。をぢ。(諸母に對して)

しよ-ふ 脊負ふ【動四他】せおふ(脊負ふ)の訛。

脊負って立つ【句】自分一人に引受く。全部の責任を帶びて、從事す。

しよ-ぶ 所部【名】『部署する所の義』管轄の範圍。

しよ-ふう 書風【名】文字の書きざま。書「體。

しよ-ふく 初伏【名】三伏の一。夏至(ゲシ)の後三十日間。(中伏・末伏に對して)

しよ-ふく 書幅【名】しよぢく(書軸)に同「じ。

じよ-ふじん 如婦人【名】によふじん(如婦人)に同じ。

しよ-ぶつ 煮沸【名】しやふつ(煮沸)に同「じ。

しよ-ぶつ 庶物・諸物【名】もろもろの物。

しよ-ぶつ 諸佛【名】もろもろの佛。正法「三業(サンゴフ)に邪なくして、內外眞正なるを、諸佛出世の本懷とす」

しよぶつ-しゆうはい 庶物崇拜【名】『英Fetish』木片・石塊・石殼・羽毛等の庶物を、或はこれに神靈宿れりとし、或は神の標號なりとして崇拜すること。拜物敎。

しよぶつ-すうはい 庶物崇拜【名】前條に同じ。

しよぶつ-せうどく 煮沸消毒【名】物品を煮沸して消毒すること。

しよぶつ-るゐさん 庶物類纂【名】〔書〕博物を二十三屬に分ち、凡そ二千七百二十三種を收め、古今の群書に徵して、その名稱・異名・形狀・產地・性質・效用等を詳かに記せるもの。七百六十四卷。稻生若水の著。

しよ-ふで 初筆【名】㊀最初に書きしるすこと。筆頭。初筆(シヨヒツ)。㊁かきだし(書出)㊁に同じ。

しよ-ぶん 處分【名】『處(ワ)き分つ義』㊀物事を取りきむること。とりはからひ。處置。處理。㊁〔法〕『英Dispose』特定の場合に、特定の人に對して、法規を適用する行政行爲。㊂〔法〕或物又は事に對する私人の實際上の處置。

しよ-ぶん 所分【名】ちぎやう。家督。撰集抄「この人親のしよぶんを、故なく、人におしとられて」

じよ-ぶん 序分【名】〔佛〕さんぶんだん(三分「段)を見よ。

じよ-ぶん 序文・敍文【名】序の文章。はしがき。

しよぶん-かうゐ 處分行爲【名】〔法〕『英Act of disposition』或物又は權利を破毀し、拋棄し、讓渡する等の事をなす根本的行爲。(管理行爲に對して)

しよぶん-けん 處分權【名】處分をなす權利又は權限。

しよぶん-しよ 處分書【名】官廳が特定の人に處分を命ずる文書。

しよぶん-ちやう 處分帳【名】武家時代に、人夫の人數を記せる帳簿。

しよぶん-なげ 處分投【名】〔商〕證據金・追徵金等の延滯又は不納の場合に、取引所又は客の注文を受けて取扱ひたる仲買人が、その取引したる玉(ギヨク)を處分するために、市場に投出すこと。〔取引所の語〕

しよぶん-のうりよく 處分能力【名】〔法〕『英Capacity of management』處分行爲をなし得べき法律上の能力。(管理能力に對して)

しよぶん-れい 處分令【名】〔法〕命令の一。國家が處分を命令又は禁止すること。

しよ-へき 書癖【名】書を好むくせ。

しよ-へん 初篇【名】書物のはじめの篇。初卷。(後編・前編・中編などに對して)

しよ-へん 所變【名】〔佛〕『變化(ヘンゲ)したる所の義』けげん(化現)に同じ。謡曲(花月)「楊柳觀音の御所變にてましますかと、皆人手を合はせ」

しよ-べん 處辨【名】『處(オ)き辨(ワ)つ義』しよち(處置)に同じ。

しよべる (英Shovel)【名】しやべるに同じ。

しよ-ほ 書舖・書鋪【名】しよりん(書林)㊀に同じ。

しよ-ほ 初步【名】手はじめ。はじめ。初學。

しよ-ぼ 庶母【名】『爾雅に「父之妾爲二庶母一」とあり』父の妾。

しよ-ぼ 書簿【名】ぼしよ(簿書)に同じ。

しよ-ぼ 諸母【名】伯母・叔母の總稱。をば。(諸父に對して)

じよ-ほ 徐步【名】徐かにあるくこと。緩「步。

じよ-ほ 敍補・叙補【名】官に敍し、職に補すること。

しよ-ぼく 諸木【名】いろいろの樹木。萬「木。

じよ-ぼく 如木【名】『白張强(コハ)ばりて、木の如くなりとていふ』白張(ハクチヤウ)を著、履・傘などを持ちて公家(クゲ)の供をせしもの。

しよぼ-くさ【貌】雨・露などに濡れたるさま。じとじと。

しよぼく-なし【形一】しほたれたり。

しよぼ-しよぼ【貌】㊀小雨のゆるくつづけて降るさま。そぼそぼ。㊁雨などに濡れそぼつさま。㊂年老いて、目の衰へたるさま。㊃老衰のさま。

しよぼしよぼ-あめ しよほしよほ雨【名】しよぼしよぼ降る小雨。

しよぼ-たれる【動下一自】そぼたる(そぼたる)に同じ。

しよ-ほつ 初發【名】初り。おこり。最初。し「よはつ。

しよ-ほっしん 初發心【名】しぼち(新發意)に同じ。謠曲(熊坂)「この僧は、未だ初發心の者にて候ふが」
しよぼ-ぬる しよぼ濡る【動下二自】そぼぬる(そぼ濡る)に同じ。狂言(花子)「こけ猿めが、雨にしよぼぬれて」
しよ-ほふ 諸法【名】〔佛〕宇宙間のあらゆる物。森羅萬象。諸有(シヨウ)。諸行(シヨギヤウ)。萬法(マンボフ)。
諸法皆空(カイクウ)【句】〔佛〕諸法はもと因緣より生じたるものなれば、一も實性あることなし。即ち三諦(サンタイ)中の空諦。
諸法實相【句】〔佛〕『法華經の方便品に出でたる語』諸方は因緣より生じたる權(ケ)のものなれども、何れも佛性を具へたるものとして觀ずれば、又そのままに眞實の相なり。即ち佛教における究極の眞理を示す語にて、眞如・法性(ホツシヤウ)などの語も、畢竟これと同一の義に歸す。三諦(サンタイ)即是。三諦圓融。謠曲(芭蕉)「草木國土有情(ウジヤウ)・非情も、皆これ諸法實相の」
諸法は心の所作(シヨサ)【句】〔佛〕一切の諸法は、すべて主觀的產物なり。萬法唯心(マンボフユイシン)。三界唯心。〔諺語〕謠曲(放下僧)「明月・清風ただ同性の内にあれば、諸法を心の所作として」
しよ-ぼん 序品【名】〔佛〕一 經中、一部の序となる部分。二〔書〕法華經二十八品の中の第一。釋迦が法華經を說く序緣を述ぶ。榮花「法華經の序品は、五の御方と定めたまひて」
しよ-まい 糈米【名】くましね(糈米)に同じ。
しよ-まう 所望【名】ねがひ。このみ。希望。著聞「そもそも所望の事のさぶらふを、申し出さんと」
じよ-まく 序幕【名】一 くちまく(口幕)に同じ。二 事物のはじまり。しよっぱな。
しよ-みん 庶民【名】一 もろもろの民。市井の臣。庶人。人民。衆民。二 身分の無き民。庶人。衆庶。烝庶。烝民。
しよみん-けういく 庶民教育【名】しやくわいけういく(社會教育)二に同じ。

しよみん-ゐん 庶民院【名】『英House of Commons』兩院制度にて、庶民の公選したる議員を以て組織する議院。下院。衆議院。
しよ-む 所務【名】一 つとめむき。やくめ。二 所と名づくる役所の事務。三 しよやく(所役)二に同じ。
しよ-む 署務【名】署と名づくる役所の事務。
しよ-む 庶務【名】特別の名目なき事務。一般雜多の仕事。
しよ-む 處務【名】事務の處理、又は處理すべき事務。
しよむ-きてい 處務規程【名】處務上の規則。
しよむ-さいそく 處務細則【名】處務上の細則。
しよむ-ざた 所務沙汰【名】所領に關せる裁判。〔鎌倉時代の語〕
しよむ-し 庶務司【名】明治の初年、民部省に屬し、知司事・判司事・權判司事の職員ありて、戶籍・濟貧・養老等のことを掌りし役所。同二年に設置、同七年に廢止せられたり。
しよ-むづかし【形二】いやにむづかし。しちむづかし。浮世床「しよむづかしい事を云ったもんだらう」
しよむ-ぶぎやう 所務奉行【名】かんぢやうぶぎやう(勘定奉行)の舊稱。
じよん 絨【名】德川時代の舶來の毛織物の一。羅紗類の少し下品なるもの。
しよんがえ【感】『爲樣(シヤウ)が無いの訛』じれったく、又いまいましく思ふ時などに發する聲。〔德川時代の語〕
しよん-じり しよん尻【名】怪物などが出づとて、妄りに恐るること、又その人。怯懦。
しよんずゐ 祥瑞【名】『漢字の宋音』しやうずゐ(祥瑞)を見よ。
じよん-ぱらこ【名】〔動〕めだか(目高)を云ふ。〔羽後國最上(モガミ)の方言〕
じよん-ぶる《英John Bull》【名】『John Arbuthnotが西曆一七一二年に著しし書History of John Bull より出でしものといふ』英國人の綽號。
しよん-べん 小便【名】せうべん(小便)の訛。

しよんぼけ【名】小便をけ。小便所。〔駿河國・常陸國及び下總國の方言〕
しよんぼり【貌】極めてわびしくさびしげなるさま。悄然。川中島合戰「跡には夫婦しよんぼりと、身を悔みたるかこち泣き」
しよ-めい 署名【名】姓名を記すこと。署記。記名。
しよ-めい 書名【名】書物の名稱。
しよ-めい 初名【名】はじめの名。
じよ-めい 助命【名】命を助くること。救命。
しよめい-しや 署名者【名】署名せる人。署名人。記名者。
じよめい-てんわう 舒明天皇【名】〔人〕第三十四代の天皇。御名は田村(タムラ)。また息長足日廣額(オキナガタラシヒヒロヌカ)天皇。敏達天皇の皇孫。押阪彥人大兄(オシサカヒコヒトノオホエ)皇子の第一子。母は糠手姬皇女。在位十三年(紀元一二八九年—一三〇一年)にして崩ず。壽四十九。
しよめい-にん 署名人【名】しよめいしや(署名者)に同じ。
しよめい-ひろう 疏銘披露【名】祈禱の意趣を記したる文書に、願主の姓名を書きあらはすこと。
しよ-めん 煮麵【名】にうめん(煮麵)に同じ。
しよ-めん 書面【名】一 手がみの文面。二 てがみ。書狀。
じよ-めん 恕免【名】ゆるすこと。宥恕。
しよめん-けいやく 書面契約【名】〔法〕書面の作成を契約成立の要件とする契約。(口頭契約に對して)
しよめん-しんり 書面審理【名】〔法〕當事者の提出したる書面によりて行ふ裁判所の審理。(口頭審理に對して)
しよめん-ゐにん 書面委任【名】〔法〕『獨Schriftliche Vollmacht』委任者が、書面を以て、委任の意思を表示すること。(口頭委任に對して)
しよ-もく 書目【名】書籍の名目。
しよもく-たふもん 書目答問【名】〔書〕初學者の讀むべき書籍を、經・史・子・集の四部に分ち、更に細目に配屬せしめて、各書の卷數・著者及び刻本の善惡等を示したる漢籍案內書。四卷。支那淸朝の張之洞の著。
しよも-し【名】一 しやうもんじ(唱門師)の訛。二 古、正月に左儀長(サギチヤウ)をはやす時、赤熊をかぶりし役人。
しよ-もつ 書物【名】綴りて冊子としたる文書。ふみ。ほん。書籍。載籍。
しよもつ-ぐら 書物庫【名】しよこ(書庫)に同じ。
しよもつ-げい 書物藝【名】一 書物によりて習ひ覺えたる藝。二 實際の役に立たぬ藝。はたけすゐれん。
しよもつ-だな 書物棚【名】しよだな(書棚)に同じ。
しよもつ-ばこ 書物箱【名】ほんばこ(本箱)に同じ。
しよもつ-ぶぎやう 書物奉行【名】江戶幕府の職制の一。若年寄の配下にありて、文庫を管し、圖書の保管・出納を掌りし定員。初は四人、後に、五人・六人等に增員せり。かきものぶぎやう。
しよもん-じやう 初問狀【名】鎌倉・室町兩時代に、原告の最初に提出せし訴狀。本解狀(ホンゲジヤウ)。中狀(ナカジヤウ)。もんじやう(問狀)及び「三問・三答の訴陳狀」參照。
しよ-や 初夜【名】一 古は、前夜の夜半より今朝まで、後には、夕方より夜半まで。(後夜に對して) 二 六時の一。戌の刻。初更。甲夜。そや。(中夜・後夜に對して) 三〔佛〕前項の初夜に行ふ看經(カンキン)。そや。四〔佛〕尖條の略。凡董「黑谷の初夜聞く月の野川かな」
初夜の鐘【句】〔佛〕初夜の勤行(ゴンギヤウ)を報ずる鐘。著聞「初夜の鐘は撞きぬるか」
しよ-や 庄屋【名】しやうや(庄屋)の訛。
しよ-やう 初陽【名】あさひ。旭日。初日。
しよ-やく 諸役【名】一 種種の役目又は職。二 種種の雜稅、又は人夫に出づること。
諸役御免(ゴメン)【句】江戶時代、武家の御用を承りたるものが、課役一切を免ぜらるること。
しよ-やく 所役【名】一 役目とする事務。東鑑「如レ此所役者」二 田租以外の雜稅。所務。〔武家時代の語〕東鑑「御造營所役事」
じよ-やく 助役【名】一 市町村會に於て、一

定の年齡以上の者より選任せられて、市町村長を補助する市町村吏員。市のは有給吏員にして、市參事會の組成分子をなし、任期六箇年、定員は東京三人、京都・大阪各二人、町村のは任期四個年、定員は普通一人なり。二 鐵道の停車場に在りて、驛長を助け、又は驛長の代理をなすもの。
しよ-やくにん 諸役人【名】もろもろの役人。
しよや-わき 庄屋脇【名】しやうやわき(庄屋脇)の訛。嵯峨天皇甘露雨「森際の興義作、色も眞黑九郎右衞門、二人は庄屋脇ぞとて」
しよ-よ 鰌【名】〔動〕どぢやう(鰌)を云ふ。〔飛驒國の方言〕
しよ-よ 緒餘【名】『莊子の讓王篇に「道之眞以治レ身、其緒餘以爲二國家一、其土苴以治二天下一」とあり』殘餘。あまり。すゑ。
しよ-よう 所用【名】一 用ふるところ。用ふる物事。二 用むき。用事。大磯虎稚物語「掛川の宿所用あって下りしが」
じよ-よう 敍用・敘用【名】官職を授けて使用すること。擧用。太平記「不レ敍二用以往勅裁一」
しよよ-かん 薯蕷羹【名】自然薯を擂(ス)り、道明寺と饂飩粉と砂糖とを加へて蒸したる菓子。薯の羊羹。
しよよ-まんぢゆう 薯蕷饅頭【名】一 自然薯を擂(ス)り、餡を包みて蒸したる菓子。二 そばまんぢゆう(蕎麥饅頭)に同じ。
しよ-らう 所勞【名】いたづき。わづらひ。病氣。賴政集「大事なる所勞ありて、人して書かせてつかはしける」
しよ-らう 初老【名】四十歲の異稱。はじめのおい。
じよ-らう 助老【名】老僧坐禪の時、疲るれば臂を掛けて休むに用ふる脇息に似たる具。じよろ。平治「大師坐禪に、御胸痛きとき、これを以て押ふ。おさふれば止む。助老と、これをいふ」
しより 紕【名】織物の名。りゆうもんに似たるもの。
しより 書吏【名】一 庶務を取扱ふ屬吏。書記。二 王朝時代に、昔、四品以上の親王家及び三位以上の人に仕へて、文案の起稿・筆錄を掌りし役。大・少の二等に分れたり。

しよ-り 處理【名】『處(オ)き理(オサ)むる義』さばくこと。處置。處分。
しよ-り 胥吏【名】地位の低き役人。小役人。胥徒。
しよ-り 黍離【名】亡國の址(アト)に黍などの生ひ茂りてあること。
黍離の歎(タン)【句】『詩經王風の黍離篇に「彼黍離離、彼稷苗、行邁靡靡、中心搖搖、知レ我者、謂二我心憂一、不レ知レ我者、謂二我心何求一、悠悠蒼天、此何人哉」とあるに本づく』國亡びて、その城跡に、黍の離離たるを見て起す歎。
しよ-りう 諸流【名】一 多くの水流。二 多くの流派。
しよ-りう 庶流【名】一 庶子の系統。二 別家の家系。
じよ-りう 敍留・敘留【名】位のみ昇りて、官職はそのままに止まれること。〔鎌倉時代の語〕
じよ-りき 助力【名】じよりよく(助力)に同じ。
しより-しより【貌】しやりしやりに同じ。今宮心中「口中のしよりしよりしたる雀ずし」
じより-じより【貌】ぞりぞりに同じ。狂言(路蓮坊主)「さらば剃りませう、三歸・五戒を授けたり、南無歸依佛・歸依法・歸依佛、じよりじより」
しより-ま【名】〔植〕ひめしだ(姬羊齒)に同じ。
しよ-りん 書林【名】一『揚雄の「今朝廷純仁、遵レ道顯レ義、並包二書林一」とあるに本づく』書物を商ふ家。書店。書舖。二 書籍の多くある處。
じよ-りん 如輪【名】一 じよりんもく(如輪目)に同じ。二〔動〕頰白と同類の小禽。體の上半は主に茶・黑及び灰の雜色、下半は淡茶を帶ぶる灰色。喉の邊に多少の黑色あり。大・小二種ありて、大如輪は白色の頸環あり、小如輪は稍小形にて、頸に白環なし。腰は柿色なり。雄は夏季黑色に變ず。故に「なべかむり」ともいふあり。
じよ-りん【名】じよれん(鋤簾)の訛。
じよりん-もく 如輪目・如鱗目【名】年輪又は鱗の如き文をなす木目。じよりん。(欅・樟の材にいふ) 謠鑑道話「窓は下地(シタヂ)窓、ふみ板は欅のじよりんもく」
しより-やう 初涼【名】秋のはじめの涼しさ。新涼。

しよ-りやう 所領【名】領有せる土地。領分。領地。
しよりやう-やく 所領役【名】ちぎやうやく(知行役)に同じ。
しよ-りよう 諸陵【名】多くの陵(ミサザキ)。
しよりよう-がかり 諸陵掛【名】敎部省に屬して、御陵・墓地等の事を掌りし役所。
しよりよう-し 諸陵司【名】しよりようれう(諸陵寮)を見よ。
しよりよう-れう 諸陵寮【名】一 古、治部省に屬し、頭(カミ)・助・大允(ジヨウ)・大小屬(サクワン)・史生(シシヤウ)及び土部(ハシ)、使部・直丁(ヂキテウ)等の職員ありて、山陵・皇親外戚の墓を管し、陵の名籍を管し、置を祭り、喪葬等を掌りし役所。もと諸陵司と呼び、職員の名稱も正(カミ)・佑(ジヨウ)・令史(サクワン)なりしを、天平元年改稱したり。みささぎのつかさ。二 宮內省の一局。頭(カミ)(勅任)、主事(奏任)、陵墓名譽守長(奏任待遇の名譽職)、陵墓守長(准判任)、陵墓守部(名譽職又は有給にて、前者は准判任、後者は判任待遇)の職員ありて、歷代陵墓の管理・調査及び修營に關する事務を掌る。もと明治二年、神祇官中に設置せられ、同四年に廢止、十九年再び宮內省の一寮として設置せられ、頭(カミ)・權頭(ゴンノカミ)・助(スケ)・權助・守長・守部の職員これに屬せしを、後、現制に改めらる。
しよりよう-ろくじ 諸陵錄事【名】諸陵屬(シヨリヨウサクワン)の唐名。
じよ-りよく 助力【名】たすけ。すくひ。じよりき。加勢。
しより-り【貌】じやりりに同じ。俳諧新選(白芽)「麥の穗のしよりりと秋を含みけり」
しよ-るゐ 庶類【名】一 いろいろの種類。二 ぐんるゐ(群類)に同じ。
しよ-るゐ 書類【名】文字にて書記したるものの總稱。
しよ-れい 書例【名】しよしき(書式)に同じ。
しよ-れい 諸禮【名】一 種種の禮式。禮儀作法。二 昔、親王・攝家を初め、寺僧・社人・醫師等の贄(ニヘ)を獻じて、私かに行ひたる年始の禮。
しよ-れい 杵鈴【名】こんがうれい(金剛鈴)に同じ。

しよ-れう 庶僚【名】もろもろの官員。
じよ-れう 敍料・敘料【名】しやくれう(爵料)に同じ。
じよ-れつ 序列【名】一 順序を追ひて列ぶこと。二〔兵〕軍隊の各部隊が、作戰その他の行動のために定むる列位の順。三 次第。順序。
じよ-れん 如簾【名】簾の莖にて編みたる小さき簾。食器の上に覆ふもの。
じよ-れん 鋤簾【名】土砂を搔寄する具。竹にて箕の如く編み、その端に金具を添へ、長き柄を附けたるもの。

(じよれん)

しよ-ろ 諸漏【名】〔佛〕もろもろの煩惱。
じよ-ろ 助老【名】じよらう(助老)の訛。狂言(惡坊)「案じ柱のじよろといふ物ざや」
じよ-ろ 如露【名】庭園又は植木等に水を灌(ソソ)ぐに用ふる小具。主に鐵葉にて製し、蓮の實狀の撒水口を通して、水を撒くもの。じようろ。
しよ-ろう 書樓【名】一 讀書する場所と定めたる樓。書堂。書屋。二 しよこ(書庫)に同じ。
しよ-ろく 書簏【名】一 ほんばこ(本箱)二に同じ。二『晉書の劉柳傳に「右丞傅迪廣讀レ書、而不レ解二其義一、柳讀二老子一而已、迪每輕レ之、柳曰、卿讀レ書雖レ多、而無レ所レ解、可レ謂二書簏一矣」、また圓機活法に「李邕讀二貫古今一、然不レ能レ屬レ文、故時號曰二書簏一」とあるに本づく』ほんばこ(本箱)二に同じ。
しよろ-しよろ【貌】ちよろちよろ(一)に同じ。
しよろしよろ-がは しよろしよろ川【名】ちよろちよろがは(ちよろちよろ川)に同じ。賈古秋信七墓廻「絕えぬ淚のしよろしよろ川の、これぞ三途と一足に、飛田の墓にぞつき給ふ」
しよろしよろ-みづ しよろしよろ水【名】ちよろちよろみづ(ちよろちよろ水)に同じ。猿蓑「しよろしよろ水に藺のそよぐらん」
しよ-ろん 書論【名】一 書法の論。二 書籍に書きたる議論。
しよ-ろん 緖論【名】最初に書く議論。序論。

じよ-ろん 序論【名】前條に同じ。

じよろ-もく【名】〔植〕褐色藻類に屬する海藻。長さ七八寸乃至二三尺。扁平にして左右に分岐し、葉は深く羽狀に裂く。淺海に自生す。

しよ-わう 諸王【名】㊀多くの王。㊁皇子・皇孫の、親王の宣下をも得給はず、又、姓を賜りて、臣籍に入り給ふこともなきもの。正統記「唐の則天皇后は、…中宗・睿宗もわが生みたまひしかども、捨てて諸王として、自のやから武氏の輩を以て、國を傳へしめんとさへしたまひき」

しよ-わけ 諸譯・諸分【名】㊀こまごましき必要なる箇條。㊁込入りたる魂膽。〔德川時代の語〕一代女「身のまはりは、仕著(しき)の外、それぞれに知音を持つて、その人に貰ふこと、世間晴れての諸分なり」

しよ-ゐ 暑威【名】夏の烈しき暑さ。炎威。

しよ-ゐ 所爲【名】しわざ。ふるまひ。

しよ-ゐ 初位【名】㊀そゐ(初位)を見よ。㊁明治二年設けられたる最下級の位。大・少の二あり。同四年廢せらる。㊂〔佛〕しよち(初地)に同じ。

しよ-ゐ 書韓【名】書齋の出入口に用ふる幕。

しよ-ゐ 書帷【名】書齋のとばり。

じよ-ゐ 敍位・叙位【名】㊀位に敍すること。㊁古、正月五・六日頃、宮中にて行はれたる公事。五位以上の位を勅授せらるるもの。じよしやく(敍爵)・によじよゐ(女敍位)參照。拾遺「敍位の頃、ある所に、人人まかりあひて」

じよゐ-にふない 敍位入内・叙位入内【名】にふない(入内)に同じ。

しよ-ゐん 書院【名】㊀支那にて、講書・講學の場所。書齋。學校。學院。㊁寺院の學問所。もと支那風を傳へたるなり。㊂『武家にも、坐禪など行ふ者ありて、書院を設け、そこにて客に對面せしよりいふ』武家に於ける書院造の座敷。㊃しよゐんどこ(書院床)の略。

しよ-ゐん 署員【名】署と名づくる官署に勤務する人。

しよ-ゐん 所員【名】所と名づくる官署に勤務する人。

しよゐん-けぬき 書院鑷【名】昔、鑷にて髭を作る習なりし時代に、書院㊁の烟草盆に添へおきし鑷。御伽名代紙衣「書院鑷で、生えもせぬ髭ぬきながら」

しよゐん-し 書院紙【名】『もと書院の障子は、この紙にて張りしよりの名なるべしといふ』こなほし(小直)㊀に同じ。

しよゐん-すずり 書院硯【名】書院㊁に備へおく硯。一代男「四尺の長机に書院硯・筆掛・香箱さまざまの唐物(からもの)道具」

しよゐん-だな 書院棚【名】あかりどこ(明床)に同じ。

しよゐん-づくり 書院造【名】建築法の一樣式。梁間長くして、敷居・鴨居を取据ゑ、遣戶を用ひ、玄關・床の間・杉戶・雨戶・上段の間等を有する構造。寢殿造に次いで、武家以後漸次に行はれしものにて、現今の建築もその系統を引けるものなり。

しよゐん-どこ 書院床【名】〔建〕あかりどこ(明床)に同じ。

しよゐん-ばしら 書院柱【名】〔建〕明床の外方の柱。

しよゐん-ばん 書院番【名】江戶幕府の職制の一。小姓組番と併せて、兩御番と稱す。將軍に扈從(こじゆう)し、諸門の警衞、儀場の周旋を掌る。また府內を巡邏し、或は諸國巡視に派せらるる事あり、若年寄の管下に屬し、番頭及び組頭等の職を置き、番衆を統括せしむ。

しよゐんばん-がしら 書院番頭【名】江戶幕府の職制の一。書院番の長。

しよゐんばん-くみがしら 書院番組頭【名】江戶幕府の職制の一。書院番頭に次ぎしもの。

しよゐん-まど 書院窓・書院牕【名】〔建〕明床(とこ)の窓。

しよゐん-みの 書院美濃【名】『しよゐんし(書院紙)を見よ』こなほし(小直)㊀に同じ。

しよ-ゑ 初會【名】法會(ほふゑ)の初度。

しよ-ゑい 諸衞【名】ろくゑふ(六衞府)に同じ。

じよ-ゑん 助援【名】ゑんじよ(援助)に同じ。

しよ-をく 書屋【名】讀書のために設けたる家。書齋。書堂。

しよ-をり 初折【名】〔文〕連句にて、一卷を二折以上に分つ、その初の一折。その表を初表(しよおもて)、その裏を初裏(しようら)といふ。百韻にては、初表八句、初裏十四句、歌仙にては初表六句、初裏十二句となる。

しら 白【名】作り飾らぬこと。きぢ。まじめ。正氣。

しらを切る【句】知らぬ振をす。浮世床「すぐに、舞臺をぶんまはして、他行の分で、しらを切り」

しら【名】日本形漁船を濱邊に引揚ぐる時に使用する轉子(ころ)。ころ。

しら 白【接頭】㊀白き意。「しら玉」「しら梅」㊁木地のままにして、飾を加へぬ意。「しら木」

しら 知ら【句】しる(知る)の條下を見よ。

じら 盜【名】『しらなみ(白波)㊁の略轉か』ぬすびと(盜人)を云ふ。〔東海道・中國・四國及び美作國の方言〕

しら-あかげ 白赤毛・白騂【名】馬の毛色の一。薄色の栗毛の類。

しらあかげ-ざめ 白赤毛鮫・白騂魚【名】馬の毛色の一。白鹿毛の、兩眼白きもの。

しら-あしげ 白葦毛【名】馬の毛色の一。白毛の多くまじりたる葦毛。

しら-あへ 白齏・白和【名】胡桃(くるみ)の果と白胡麻と白味噌と、又胡桃の代りに、豆腐を擂(す)りまぜたるものにて、肉又は菜をあへたる料理。(黑齏に對して)

しらあへ-みそ 白齏味噌【名】白胡麻に白味噌・豆腐等を擂りまぜて製りたる料理。

しら-あや 白綾【名】白色のあやぎぬ。日本擬精拾「白綾の步障を中に押しいづれば」

しらあや-をどし 白綾縅【名】鎧の縅の一種。白綾を細く疊みて縅したるもの。太平記「白綾縅の鎧一領」

しら-あり 白蟻【名】〔動〕蟻の一種。體黃色をなし、木材の內部に巢を營みて、大害をなす。

しら-あわ 白泡【名】白き泡。續後拾遺「みよしのの瀧のしらあわおちたぎり吹けども風の聲もきこえず」

白泡嚙ます【句】馬の口より白き泡を出して勇むさま。

しら-あを 白青【名】うす青。あさぎ。

し-らい 子來【名】『子が親を慕ひて寄りくる如くに來る義。詩經の大雅靈臺篇に「經始勿レ亟、庶民子來」とあり』喜び慕ひて來ること。「子來の民」

し-らい 賜賚【名】らいし(賚賜)に同じ。

じ-らい 爾來【副】その時以來。爾後。

しらいし 白石【名】〔地〕磐城國刈田郡にある町。佐井・廣瀨二川の交會點。鐵道東北本線の一驛。伊達氏の家老片倉氏の舊領地。

しらいし-やき 白石燒【名】肥前國三養基(みやき)郡より製出する磁器。支那萬曆赤繪に摸倣せしもの。

しら-いと 白絲【名】㊀染めぬ、白きままの絲。㊁きいと(生絲)に同じ。〔江戶時代の語〕㊂しらいともち(白絲餅)の略。㊃さうめん(索麪)を云ふ。〔女の語〕㊄しらたき(白瀧)㊀㊁に同じ。

しらいと-さう 白絲草・鵜葱【名】〔植〕百合(ゆり)科に屬する多年生の草。高一尺位に達する長卵形の葉にて、地下の莖より叢生す。その中央より花莖を出し、上部に白色花を生ず。山地に自生す。

しらいと-ざき 白絲岬【名】〔地〕北海道後志國島牧郡に在る岬。

しらいと-ねぎ 白絲葱【名】葱の白根を輕く揉でて、細く割きたる料理。

しらいと-の 白絲の【枕】絲は縒(よ)りて作るものなるより、よりにかけていふ。後撰「ふしなくて君がたえにししら絲のよりつきがたきものにぞありける」

しらいと-の-たき 白絲瀑【名】〔地〕富士山西麓の瀧。駿河國富士郡白糸村大字原にあり、高さ八十七尺・幅四百尺の懸崖より落下す。

しらいと-の-はま 白絲濱【名】〔地〕あまのはしだて(天橋立)の別稱。

しらいと-もち 白絲餅【名】拌餅(ひきもち)の如く採りたるしんこの餅。しらいと。しらいともどき。

しらいと-もどき 白絲擬【名】前條に同じ。

しらいと-わっぷ 白絲割符【名】江戶時代に、輸入の生絲を專賣する許可證。

しらいとわっぷ-にん 白絲割賦人【名】江戶時代に、輸入の唐絲を專賣する許可を得たる商人。

しらいと-をどし 白絲縅【名】鎧の縅の一種。白き絲を用ひたるもの。狂言(ひめのり)「白絲縅の腹卷に、白柄の長刀かいこうで」

しらい-は 白岩【名】〔地〕羽前國西村山郡にある町。寒河江(さがえ)川に沿ひ、庄內地方に通ずる六十里越の要路に當る。

じらいや-がうけつものがたり 自來也豪傑譚【名】〔書〕草雙紙の一。支那小說の我來也より出でし、感和亭鬼武の「自來也說話」を飜案せしもの。初篇より十一篇迄は美圖垣笑顏の作にて、十二篇より四十二篇までは柳水亭種淸櫻筆せしが、完結に至らず。三すくみと云ふ蟲拳(むしけん)により、自來也は蝦蟇、勇婦綱手は括蝓(なめくじ)の妖術を使ひ、大蛇の術を用ひて、殘虐を逞くする山賊大蛇丸を退治すといふ趣向なり。

し-らう 私勞【名】公(おほやけ)ならぬ骨折。私のはたらき。

し-らう 死籟【名】しにがて(死粮)を見よ。

し-らう 四郞【名】しなん(四男)に同じ。

し-らう 司郞【名】せうべん(少辨)の唐名。

じ-らう 次郞・二郞【名】㊀じなん(次男)に同じ。㊁男・女に拘らず、二番目の子。㊂多くある物の中の第二位。

じらう-くわじや 次郞冠者【名】たらうくわじや(太郞冠者)を見よ。狂言(三本柱)「なんじを呼び出す事、別の事でない。少し言附くる事がある。次郞くわじや、三郞くわじやも呼べ」

しらうし 紙老鴟【名】たこ(紙鳶)の異稱。和名「辨色立成云、紙老鴟、此間云、師老之、以レ紙爲三鴟形一乘レ風能飛、一云紙鳶」

しらうちで-の-かさ 白打出笠【名】しろうちでのかさ(白打出笠)を見よ。

しらう-ちゆう 司郞中【名】ちゆうべん(中辨)の唐名。

しら-うと 素人【名】『しらびと(素人)の音便』しろうと(素人)に同じ。

じらう-ばう 次郞坊【名】天狗の一。謠曲(花月)「さて、京近き山山、愛宕(あたご)の山の太郞坊、平野の峰の次郞坊」

しら-うめ 白梅【名】㊀〔植〕梅の一種。白き花を開くもの。はくばい。(紅梅に對して)㊁ひとへうめ(一重梅)㊁に同じ。

しらうめ-かん 白梅羹【名】寄物(よせもの)の一。隱元豆をよく煮て裏漉(うらごし)にかけ、寒天に淡紅を加へて固めたるもの。

しら-うり 白瓜【名】〔植〕しろうり(白瓜)に同じ。〔古語〕小大君集「ありどころこまかにいづらしらうりのつらを尋ねてわれならさなん」

しら-うを 白魚・銀魚・鱠殘魚【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。長さ二三寸。嘴尖りて、身は圓く細長く、殆ど鱗なく、透明なり。二三月の候河川に溯り、淡鹹水の河底の砂礫或は藻に產卵す。一尾にて二千顆を產出す、稚魚は海に下り、一箇年にて、一寸餘に達す。しらを。

しらうを-めし 白魚飯【名】白魚に少し鹽を振りおき、飯の火を引く頃炊きまぜたる飯。淸汁(すまし)に青海苔、葵の香料を添へて食す。

しら-え 白柄【名】槍・長刀などの柄の、白木のままなるもの。繪本太閤記「しらえの長刀かいこんで」

しら-おい 白老【名】〔地〕㊀膽振國八郡の一。室蘭支廳の管轄。㊁膽振國白老郡の村。室蘭の東北約十一里。岩見澤・室蘭間の鐵道の一驛。

しら-か【名】『しらかみ(白髮)の略とも、しらかみ(白紙)の略ともいふ』ゆふ(木綿)の異稱。〔古語〕萬葉「白香(しらか)著け我が裳の裾にいはひて待たむ」

しら-が 白髮【名】『しらがみ(白髮)の略』㊀年老いて、白くなりたる頭髮。しろかみ。鶴髮。拾遺「年ごとにしらがの數をますかがみ見るにぞ雪の友を知りける」㊁しらがかつら(白髮鬘)の略。㊂昔、小供の髮置の祝に、その小供の長壽を祝すとて、頭に戴かしめし帽子。絓縧(くけ)・つみ綿・麻苧などにて、白髮の垂れたるさまに作りたるもの。祝の前日、髮置の親よりこれを廣蓋(ひろぶた)に据ゑ、紙に包める小松・山橘を添へて進むる習なりき。しらがわた。㊃婚禮の贈物に用ふる麻。〔志眞貴〕

白髮の役(やく)【句】「髮置の親」に同じ。

白髮は冥途の役【句】白髮の生ずるは、閻魔王より死期の近づけるを知らする使なり。〔諺語〕

しらが-あたま 白髮頭【名】白髮の生えたるあたま。しらがつぶり。

しらが-いと 白髮絲【名】すがいと(絓絲)に同じ。

しらが-おやぢ 白髮親父【名】白髮頭のおやぢ。老いて白髮の生ひたる親父。今國姓爺「あとな白髮親父の切られて惜しげもない年配」

しらが-かづら 白髮鬘【名】芝居の鬘の一。白髮なるもの。しらが。

しら-がき 白柹【名】㊀しろがき(白柹)に同じ。㊁熟しても、赤く色づかぬ柹の實。

しらが-くび 白髮首【名】白髮の生ひてある首。老人の首。

しら-かげ 白鹿毛・驃【名】馬の毛色の一。全體、帶黃淡褐色にして、四肢の帶黃白色なるもの。和名「驃、漢語抄云、驃馬、白鹿毛也」

しらが-ごけ 白髮苔【名】〔植〕しらごけ(白苔)に同じ。

しらが-こぶ 白髮昆布【名】極めて細く刻みて、恰も白髮の如くしたる昆布。

しら-がされ 白襲【名】襲の色目の一。表も裏も白きもの。上も下も白きかされ。古、四月と十月との更衣(ころもがへ)の時、及び冬より春にかけて著用したり。枕「すさまじきもの、八月のしらがされ」

しらが-さんばつ 白髮散髮【名】芝居の鬘の一。散髮にして、白髮なるもの。

しら-がし 白樫【名】〔植〕㊀ほそばがし(細葉樫)の異稱。㊁くろがし(黑樫)の異稱。

しら-かす 白糟・酵【名】白きかす。白酒の類にて、饅頭の皮を作るなどに用ふ。〔古語〕和名「酵、和名、之良加須、白酒甘也、今俗作二饅頭一所レ用、今人所レ飮甘酒當レ是」

しらかす 白かす【動四他】しらけさす。興をさます。氣をそこなふ。十訓「人をしらかし、その座をさますなり」

じらかす【動四他】じらすに同じ。

しらか-ぞめ 白髮染【名】毛髮を褐色又は黑色に染むる藥劑。

しらが-たらう 白髮太郞・楓蛾・樟蠶蛾【名】〔動〕鱗翅(りんし)類に屬する昆蟲。蛾の一種。體長一寸前後、翅大きく、前翅には灰色の半月形の紋一箇、及び雲紋一條、後翅には蛇目形の斑、及びこれを夾める三條の波線とを有す。幼蟲は淡綠色にして、一面に白き長毛生じ、透俵(すかしだはら)と呼び、黃色・龜形の繭を作る。蛾は樟・胡桃(くるみ)・栗等の害蟲なれども、天蠶(てぐす)の材料となる。てぐすてふ。てぐすむし。

しらが-づく 白髮附く【枕】木綿は、白髮に似たるより、ゆふ(木綿)にかけていふ。一說に、しらかみ(白紙)にて、白紙を添へ附くる木綿の意にて、枕詞にあらずと。萬葉「しらがづくゆふは花かもことこそはいつのまさかもつね忘られぬ」

しらが-つぶり 白髮頭【名】しらがあたま(白髮頭)に同じ。井筒業平河內通「あの組母樣の白髮つぶり」

しら-がなもの 白金物【名】銀の金具。謠曲(錦木)「しらがなもの打つたる絲毛の具足」

しらかね-し 白銀師・銀師【名】しろかねし(白銀師)に同じ。

しらが-の-すめらみこと 白髮天皇【名】〔人〕せいねいてんわう(淸寧天皇)に同じ。

しらかは 白河【名】㊀〔地〕古の陸奧國の舊郡の一。ほぼ今の磐城國の東白河・西白河・石川の三郡に亙りし地。㊁〔地〕磐城國白河郡にある町。阿部氏の舊藩地。古來、關東より奧州に入る一門戶として重要視せられ、その東南の古關(せき)村は白河關の遺址として知らる。㊂しらかはゆふき(白河結城)を見よ。㊃〔地〕京都の鴨川以東、東山との間の地域の古稱。六波羅などもその範圍に屬せしものの如く、また南白河・北白河の名も見えたれども、後世、北白河のみ白河の名を專にし、白河殿・六勝寺等の所在地として名高く、京・白河と連稱せらる。今はその滄域の一部に、白川村の名殘れり。方丈記「川原・白河・西ノ京、もろもろの邊地」平治「兵ども、京・白河に充滿ち

たり」

しら-かは 白川【名】〔地〕㊀肥後國にある川。水源は阿蘇山、西流して熊本市の東南を過ぎ、島原灣に入る。長さ約十五里。㊁筑前國にある川。水源は筑紫郡二日市村にして、御笠川に合す。後撰「年ふれば我が黒髪も白川のみづはぐむまで老いにけるかな」(一説には、この歌のは肥後國白川なりと) ㊂山城國愛宕(ヲタギ)郡にある嶽川。水源は比叡山の南白河越にして、如意の水を、合はせ、白川村に至りて南折し南禪寺の西より右折して、加茂川に入る。白川石の產出地にして、河底もこの石より成り、水色白きがごとく見ゆるより、この名あり。**しらかはよふね**(白河夜船)參照。古今「しらかはの知らずともいはじ底清み流れて世世にたえんと思へば」

しらかは 白川【名】㊀**しらかはいし**(白川石)の略。㊁〔地〕飛驒國大野郡の西北部に在る、加賀及び越中に境する一帶の村落の總稱。往時より、大家族制行はれしを以て名あり。㊂姓氏の一。本性源氏(華山)、代代神祇伯たりし家、また伯家といふ。その始祖延信王は華山天皇の皇子清仁親王の子。萬壽二年源朝臣の姓を賜はり、臣籍に列せしが、神祇伯に任せらるるに及んで、王の號を稱し、皇族待遇となる。明治維新後、子爵を授けらる。

しら-かば 白樺【名】〔植〕**しらかんば**(白樺)に同じ。

しらかは-あみだだう-ごしよ 白河阿彌陀堂御所【名】**しらかはのいづみどの**(白河泉殿)に同じ。

しらかは-いし 白川石【名】山城國愛宕(ヲタギ)郡白川村の山中より產出する花崗岩。色白く、質堅くして、橋又は敷石などに用ふ。しらかは。雍州府志「白川山、凡斯山之、地中悉白石也、世所レ謂白川石是也、村中石工以レ斧鑿レ斫之」

しらかは-おしのこうぢ-どの 白河押小路殿【名】美福門院の住み給ひし處。山城國愛宕(ヲタギ)郡に在りて、もと鳥羽法皇のおはせし處なり。

しらかは-おほひみかど-どの 白河大炊御門殿【名】次條に同じ。

しらかは-きたどの 白河北殿【名】保元元年崇德天皇の、源爲義以下の武臣を集めて事を擧げさせられし處。その址は、京都市下京區東丸太町熊野神社の邊なるべしといふ。別稱、白河大炊御門殿・千體阿彌陀堂の御所・棧敷殿。

しらかは-ぐち 白河口【名】〔地〕磐城國白河郡白河町より奥州への入口。

しらかは-ごえ 白河越【名】〔地〕**しがやま**(志賀山)を見よ。

しらかは-こじやう 白河古城【名】磐城國西白河郡大沼村字搦山(カラメ)にありて、白河結城氏の根據たりし城。正應二年結城祐廣の築く所。その子宗廣は、吉野朝の忠臣なりしが、興國中、孫親朝は、賊に降りて、鎭守府の兵を沮む。足利氏の末、白河結城氏、嗣絶え、支族小峰義親、小峰城(今の白河城)に居ながら、本宗を承けて、白河氏を稱す。別稱、からめ城。**しらかはじやう**(白河城)・**しらかはゆふき**(白河結城)參照。

しらかは-さいこ 白河柴胡【名】〔植〕**ほたるさう**(螢草)に同じ。

しらかは-じやう 白河城【名】磐城國西白河郡白河町の北方にありて、白河古城の結城氏の支族小峰氏の據りし城。結城氏、嗣絶ゆるに及び、その支族小峰義親、この城にありながら、本宗を承けて白河氏を稱せしが、天正十八年、豐臣秀吉の東征に會して、封を奪はれ、關一政代り封ぜられ、德川氏に至り、丹波・松平諸氏の易封あり。文政以後は、阿部氏世領す。別稱、小峰城。

しらかは-せんゐん 白河仙院【名】**しらかはどの**(白河殿)㊀を見よ。

しらかは-でん 白河殿【名】**しらかはどの**(白河殿)㊀に同じ。

しらかは-てんわう 白河天皇【名】〔人〕第七十二代の天皇。御名は貞仁(サダヒト)。後三條天皇第一の皇子。御母は贈皇太后藤原茂子。在位十四年(紀元一七三三年―一七四二年)。大治四年崩ず。壽七十七。

しらかは-どの 白河殿【名】㊀藤原良房以後の別業たりし處。歷朝の皇太后多くここにおはせしより、白河仙院ともいへり。白河天皇これを離宮となし(白河離宮、また白河ノ院)後、法勝寺とす。爾後、數朝の間に、尊勝・最勝・圓勝・成勝・延勝の諸寺、相ついで並び立ちて、壯觀を極め、併せて六勝寺と稱す。法勝寺は、應仁以後、廢滅し、他寺は、永久に燒亡す。白川御所。白河院。㊁〔人〕**ふぢはらよしふさ**(藤原良房)に同じ。

しらかは-の-いづみどの 白河泉殿【名】白河法皇の御所。山城國愛宕(ヲタギ)郡聖護院村にありしもの。白河阿彌陀堂御所。

しらかは-の-ごしよ 白川御所【名】**しらかはどの**(白川殿)㊀に同じ。著聞「法勝寺の西門より御車を挽入れて、花のもとに立てられけり。その後、白川の御所へ入御ありて、和歌を講ぜられける」

しらかは-の-せき 白河關【名】〔地〕古、岩代國白河郡古關(コセキ)村大字旗宿(ハタジュク)の邊に置かれし關。設置年代は承和二年の官符に、その年を距ること四百餘年と見えたり。**しらかは**(白河)㊀參照。拾遺「たよりあらばいかで都につげやらん今日白河の關は越えぬと」

しらかは-の-みささぎ 白川陵【名】**かさまやまのみささぎ**(笠間山陵)に同じ。

しらかは-の-みささぎ 白河陵【名】文德天皇の皇后藤原明子の陵。山城國愛宕(ヲタギ)郡上粟田に在り。

しらかは-の-ゐん 白河院【名】**しらかはどの**(白河殿)㊀に同じ。康平記「康平三年三月廿五日甲午、行二幸白河院一、爲朝覲二仙院一、便覽二林池勝槩一也」

しらかは-ばうふう 白河防風【名】〔植〕**やまにんじん**(山人參)に同じ。

しらかは-ゆふき 白河結城【名】姓氏の一。下總國の結城氏の支族。本家と區別するために、地名を冠らせて呼びしもの。**しらかはこじやう**(白河古城)・**しらかはじやう**(白河城)參照。

しらかはゆふき-もんじよ 白河結城文書【名】白河結城氏に關する古文書。林家の藏本。水戸光圀の大日本史修撰の際、家臣を遣りて寫さしめしもの十餘通(林家のと合せて約百通)、白河侯の文學廣瀨典・仙臺の白河氏所傳のもの二百餘通、秋田白河氏所傳のもの五十餘通、合はせて二百六十餘通の總稱。

しらかは-よふね 白河夜船【名】『京都の有樣を知りたるふりせし者の、白河はと問はれて、夜船にて通りしゆゑ知らずと答へきといふ故事(毛吹草に見ゆ)によりていふとぞ。問者の白河は**しらかは**(白河)㊂の意なるを、川の名と思ひ誤りて答へしなり』熟睡して、何も知らずに過すこと。小町踊(後篇)「雪の夜の月は白川夜船かな」 犬子集(重頼)「白河を通ふ夜船や空の月」

しらかは-らくをう 白河樂翁【名】〔人〕**まつだひらさだのぶ**(松平定信)に同じ。

しら-かはらげ 白河原毛・白駱【名】馬の毛色の一。河原毛の白きもの。太平記「白葦毛・白瓦毛」

しらかは-りきゆう 白河離宮【名】**しらかはどの**(白河殿)㊀を見よ。

しら-かひ 白貝【名】〔動〕蛤(ハマグリ)の一種。昔、大饗(オホイ)の時などに用ひしもの。

しらが-ひげ 白髮髭【名】白き口ひげ。しらひげ。平家女護島「齋藤別當實盛、白髮髭くひそらし」

しらが-ひろくにおしわか-やまとねこ-の-すめらみこと 白髮廣國押稚日本根子天皇【名】〔人〕**せいねいてんわう**(清寧天皇)に同じ。

しらが-ふ【接尾】目立つ。知らるるやうにす。〔古語〕 枕「常に見えしらがひてありく」 宇治「這ひしらがひて」

しら-かべ 白壁【名】漆喰(シックイ)にて白く塗りたる壁。粉壁。(立派なる構の家の形容にいふこと多し)「江戸中白壁」參照。俳諧古選(三都人)「見返れば白壁いやし夕がすみ」

しらかべ-づくり 白壁造【名】白壁に塗りたる建築、又その家。前條參照。浮世風呂「世界中が白壁造だ」

しらかべ-てんわう 白壁天皇【名】〔人〕**くわうにんてんわう**(光仁天皇)に同じ。

しらが-まじり 白髮交【名】黑き髮に白髮のまじりて生ふること。斑白。俳諧新選(里泉)「夕月の白髮まじりや絲すすき」

しらが-まつ 白髮松【名】〔植〕赤松の一變種。葉の半面粉白色なるもの。

しら-かみ 白髮【名】**しらが**(白髮)㊀に同じ。〔古語〕 萬葉「黑髮のしらかみまでと結びてし心一つを今解かめやも」

しら-かみ 白紙【名】㊀白き紙。㊁未だ物を書かぬ紙。しらつかみ。

白紙も信心から【句】「鰯の頭も信心から」に同じ。〔諺語〕

しらかみ-ざき 白神岬【名】〔地〕渡島國松前郡福山港の東に在る岬。津輕海峽の西口(一に松前海峽)を隔てて、陸奥龍飛(タッピ)崎に對す。

しらかみ-てがた 白紙手形【名】後日、適宜に金額を增加せんがため、金額・金主等を記入せずして、借用者の捺印のみを求むる手段に出でたる借用證書。江戸時代に、嚴禁せられしに拘らず、私かに行はれたり。

しらかみ-の-いそ 白神磯【名】〔地〕**しらさき**(白崎)に同じ。萬葉「由良の崎しほひにけらし白神の磯のうらみをあへて漕ぎとよむ」

しらかみ-やき 白上燒【名】石見國美濃郡白上より產出する磁器。長門國阿武郡小畑村野田庄太・同元藏の兩人この村に來り、硅石を發見し、雲石二州に磁器なきを以て、萬延三年新に創始せるもの。靑花磁器にして、釉料はこの國小畑より採取す。

しら-かんば 白樺・樺木【名】〔植〕樺木科に屬する落葉喬木。高さ六七十尺に達す。樹皮は白色にて脫落し易し。葉は卵形にて尖り、長き葉柄互生す。花は單性雌雄花共に同樣に生じ、穗狀花序をなす。木材は器具に、樹皮は燃料に供す。かには。かにはざくら。かば。かばのき。かんば。かんばざくら。しらかば。しろざくら。

しらかんば-くわ 樺木科【名】〔植〕顯花植物・雙子葉・離瓣花區の一科。喬木また灌木。北半球に分布し、有用のもの多し。白樺・赤楊(ハンノキ)・榛(ハシバミ)・いぬあさご・あさこ等、これに屬す。かばのきくわ。くわぼくくわ。

しら-かゆ 白粥【名】他の物を交ぜぬ白米のみの粥。(茶粥・餅粥などに對して) 仲文集「しら雪のふれるあしたのしらかゆはいとよくにたるものにぞありける」 俳家奇人談「中椀に白粥滿てり十三夜」

しらが-わた 白髮綿【名】**しらが**(白髮)㊂に同じ。

しら-き 白木【名】㊀あら皮を去り、白く削りたるままにて、塗飾らぬ材木。著聞「白木の御椅子」 ㊁大戟(タカトウダイ)科に屬する落葉小喬木。山地に自生す。雌雄同株にて、葉は殆ど全緣にして、銳尖頭を有する廣楕圓形もしくは廣卵形をなし、その色淡綠にして、托葉を有す。材は白色にして、輕く軟く、概ね燐寸の軸木に用ひられ、また種子よりは油を採りて、鐵器に塗るに用ひ、實は形圓くして、中に仁滿ち、熬(イ)りて食すべし。その他用途廣し。こくどのくわし。

白木の弓【句】漆を塗らず白木のままにて造り、藤にて三箇處を捲ける弓。射的用のには白弦を張る。又この弓の古びて赤ばめるを、色木とも呼ぶ。太平記「白木の弓の、ほこ短かには見えけれども」 去來「秋風や白木の弓に弦張らん」

しらぎ 新羅【名】〔地〕辰韓の一部。今の慶尙北道なる慶州より起りて、百濟(クダラ)・高句麗(カウクリ)を滅し、日本の勢力を半島より驅逐し、遂に朝鮮を一統して、隋・唐に恭事せしが、後、高麗起るに及びて、亡びたり。**てうせん**(朝鮮)參照。

しらぎ-がく 新羅樂【名】新羅國より傳はりし樂。

しらぎ-がくし 新羅樂師【名】古の雅樂寮の職員。學生に新羅樂を教授せしもの。

しらき-がふし 白木合子【名】漆を塗らざる、白木のままなる合子。

しら-ぎく 白菊【名】㊀白き花の開く菊。古今「心あてに折らばや折らん初霜のおきまどはせるしらぎくの花」 ㊁**きく**(菊)㊀に同じ。㊂名香の一。五人女「こぶくめの袖をかざしけるに、白菊などいへる留木(トメギ)のうつり香、どうもならぬに打惱み」 一代女「慣るれば、人燒く匂も、白菊といへる伽羅にかはらず」

しらぎく-すひもの 白菊吸物【名】豆腐を一寸四方に切り、後、十文字に細かに切りかけ、椀に入れて、清汁(スマシ)を注ぎ入るれば、開きて菊の花の如き形をなすよりいふ。

しらき-ごし 白木輿【名】㊀白木にて造りたる輿。昔、親王・攝家・淸華・大臣の用ひしもの。しろごし。㊁葬送に用ひし白木造の輿。しろごし。

しらぎ-ごと 新羅琴【名】『新羅國より渡來せしよりいふかといふ』箏に似て、すこし小さき樂器。十二絃を張り、これに甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸及び天・地の名目を附す。

しら-きじ 白雉・白鷴【名】〔動〕鶉鷄類に屬する一種の鳥。雉屬に似たり。南支那に產す。その形金鷄鳥に類し、稍大なり。顏部は不毛にて朱面を呈し、頭上に黑紫色の冠毛あり。尾は頗る長。羽毛美なるため、往往飼育せらる。

しら-きちやうめん 白几帳面【名・副】『**きちやうめん**(几帳面)㊁を强めていふ語』まじめなること。膝栗毛「しらきちやうめんの旅人だ」

しらき-づくり 白木造【名】白木のまま、漆など塗らずに造ること、又その物。

しら-きぬ 白絹【名】色を染めざる白色の絹。伊勢「石のおもてにしらきぬに岩を褁めらんやうになんありける」

しらぎ-ぶね 新羅船【名】新羅の國の船。

しらぎ-よぼろ 新羅仕丁【名】新羅國より貢せし仕丁なるべし。〔古語〕 紀「新羅仕丁八人」

しら-ぎり 白桐【名】〔植〕**きり**(桐)に同じ。

しら-ぎる 白ぎる【動四自】白みてあり。一說に、白く黃ばみてあり。〔古語〕 源氏「紫のしらぎり見ゆるあられぢの御小うちぎと、よき御ころもばこに入れて」

しらぎ-をの 新羅斧【名】新羅の國にて作れる斧、またその斧の形にならひて作れる斧。〔古語〕 萬葉「はしだての熊來(クマキ)のやらにしらぎをのおとし入れ」

し-らく 絲絡【名】**いとまき**(絲卷)㊀に同じ。

し-らく 刺胳【名】〔醫〕漢方にて、手足の動脈を刺して、惡血を取ること。

しらく 白く【動下二自】㊀白くなる。萬葉「黑かりし髮もしらけぬ」 ㊁貧色になる。しらむ。十訓「言うるはしく云はれけり。實方はしらけて逃げにけり」 ㊂興冷(サ)む。冥途飛脚「酒もしらけてさめにけり」

しらぐ 白ぐ・精ぐ【動下二他】㊀白くなす。磨きて麗しくす。金葉「よねしらげたり」 ㊁むちうつ。

しら-くきな 白莖菜・春菜【名】〔植〕白菜の一變種。葉の細長きもの。しろくきな。

しら-くし 白櫛【名】木地のままにて、塗らざる櫛。保元「白櫛をぞ差したりける」

しら-くじ 白鬮【名】**からくじ**(空鬮)に同じ。

しら-くち 白口【名】**かうぞうな**(楮綱)に同じ。

しら-くち 獼猴桃【名】〔植〕**しらくちづる**(獼猴桃)の略。

しら-ぐち【名】〔動〕『**くち**(鮸)㊀を見よ』鮸(ニベ)の稚く小きもの。おきあぢ。

しらくち-づる 獼猴桃【名】〔植〕獼猴桃科に屬する落葉灌木。山地に自生し、蔓莖を生じて、他物に纏ふ。葉は隋圓形又は心臟形にして、銳尖頭と鋸齒とを有し、初夏白色の花を開く。果實は漿果にして、甘味を有し、樹皮は繩となり、材は器具用に供せらる。いぬなし。しらくち。しらくちもも。こくは。どかご。さるなし。やぶなし。

しらくちづる-くわ 獼猴桃科【名】〔植〕顯花植物・雙子葉類・離瓣花區の一科。喬木・灌木又は草本にて、往往他物に纏ふ。獼猴桃・木天蓼(マタタビ)・枇杷葉木(ビハバ)等、これに屬す。さるなしくわ。一名、木天蓼(マタタビ)科。

しらくち-もも 獼猴桃【名】〔植〕**しらくちづる**(獼猴桃)に同じ。

しら-くび 白首【名】**しろくび**(白首)に同じ。

しら-くぼ 白くぼ【名】次條㊁に同じ。

しら-くも 白雲【名】㊀白く見ゆる雲。はくうん。㊁皮膚病の一種。原因は一種の黴菌にして、多くは小供の頭部に生ず。皮膚、紅色となり、痒くして、不快の臭氣を放ち、毛髮脫落し、傳染しやすし。白癬。白禿瘡。

白雲の宿【句】白雲のかかれる山中の宿。

しらくも-あたま 白雲頭・白癬【名】白雲

㊁の生じたる頭。 浮世床「白雲天窓の鄕在者のへちむくり野郎」

しらくも-ぐさ 白雲草【名】〔植〕まつ(松)の異稱。〔女の語〕

しらくも-の 白雲の【枕】㊀白雲は風に吹かれて、切れ切れに絶えやすきものなるより、**たえ**(絶え)にかけていふ。古今「風吹けば峯にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か」㊁白雲は峯などより立ちのぼるものなるより、**たつ**(立つ)にかけていふ。古今「をしむかな戀ひしきものを白雲のたちなん後は何ごころせん」㊂白雲はおぼつかなきものなるより、**おほ**にかけていふ。後撰「たえぬると見ればあひぬる白雲のいとおほよそに思はずもがな」

しらくも-やま 白雲山【名】〔地〕㊀山城國愛宕(オタギ)山の頂上の別稱。㊁常陸國筑波郡にありといふ山。 藻鹽集「しらくものやまべはるかにきこゆるをなどか目だかくいでたちをする」

しら-くら 白暗【名】ごまかし。曖昧。 潮來繪詞「勿體(モツタイ)ねえ。神まゐりに來て、そんなしらくらが、なるものか」

しら-くりげ 白栗毛・黃騮【名】馬の毛色の一。栗毛の色淡くして黃ばみたるもの。 著聞「白栗毛なる馬」

しら-げ 白精【名】㊀しらぐること。磨きて、麗しくなすこと。㊁すぐれたること。

しら-げ 白毛【名】『白き毛あるによりていふ』敷皮の下部。

しらげ-うた 後擧歌【名】『しりあげ歌の約といふ』太古の樂曲の名目。末の方を、高き節にてうたひしものならんといふ。〔古語〕 記「こは、志良宜歌(シラゲウタ)なり」

しらげ-かんな 精鉋【名】仕上に用ふる、刃の薄き鉋。

しらげ-がや 白毛茅【名】〔植〕禾本科に屬する多年生の草。舶來の牧草。莖の高さ二尺、柔毛密生して、淡綠色を呈す。葉は細長く、花は小穗狀をなし、夏季、淡綠色を呈す。

しらげ-しろ 精代【名】玄米を搗きて白くする手間代。〔古語〕 江次第抄「二合精代」

しらげ-つはもの 精兵【名】せいへい(精兵)に同じ。〔古語〕 紀「精兵、シラゲツハモノ」

しらげ-よね 精米【名】せいまい(精米)に同じ。 和名「粺米、之良介與禰、精米也」

しらこ 白子【名】〔地〕『四樂(シラク)ともいひ、もと**しらぎ**(新羅)の轉訛にて、天平寶字中、その歸化人を置きしに本づく』武藏國北足立(キタアダチ)郡にある町。板橋町へ二里。

しら-こ 白子【名】㊀頭髮・眉毛など、生れながらに白く、全身白色又は白茶色なる人。しろっこ。㊁魚の精液の、體內にありて、乳白色の塊狀をなせるもの。放出期には、流動體となりて射出せらる。

しら-ごかし【名】**おためごかし**(御爲ごかし)に同じ。〔元祿時代の語〕 心中二枚繪草子「捩ぢていだせし鼻紙の、しらごかしこそ笑止なれ」

しら-ごけ 白苔・白龍鬚【名】〔植〕地衣類なる松蘿(サルヲガセ)の一種。深山老樹の枝上に叢生す。色白くして、絲の如し。長さ二三寸、軟かにして切れやすし。しらがごけ。ほや。

しら-こし 白輿【名】木地のままにして、塗りなどせざる輿。

しらこし-や 白輿屋【名】棺を賣る家。

しら-ごしらへ 白拵【名】矢の造方の、白篦(ノ)に白羽を附けたるもの。 曾我「鶴のもと白にて矧いだる、しらごしらへの白矢、はず高に負ひなし」

しら-こそで 白小袖【名】しろこそで(白小袖)に同じ。

しらこ-ばと 白子鳩【名】〔動〕雉鳩の一種。頭頸及び下面は一體に灰白色にして少し赤味を帶び、脊は尾に至るまで灰褐色に近し。後頭に黑の半輪環あり、故に數珠掛鳩ともいふ。主に夏季に多く、冬季は南國に去るといふ。

しら-ごゑ 白聲【名】普通ならぬ聲。かなきり聲。 若風俗「風吹けば沖つ白聲にして謳ひ出して」

しら-さうぞく 白裝束【名】しろしやうぞく(白裝束)に同じ。〔古語〕 榮花「をかしきしらさうぞくども、さまざまなるは」

しら-さき 白崎【名】〔地〕紀伊國日高郡にある岬。由良灣の西北端に突出す。石灰石より成り、白色を呈す。由りてこの名あり。しらかみのいそ。

しら-さぎ 白鷺【名】㊀〔動〕羽色の白き鷺類の總稱。 萬葉「池上の力士舞かも白鷺のほこ喰ひもちて飛びわたるらむ」㊁かぶろ(禿)の異稱。〔江戸吉原の語〕 ㊂〔動〕**わかさぎ**(若鷺)を云ふ。〔出雲國の方言〕

しら-さぐも 白雲【名】**しらくも**(白雲)㊀に同じ。〔古語〕 夫木「天の原よこぎりわたるしらさ雲月にもまがふ早くけれかし」

しらさは 白澤【名】〔地〕羽後國北秋田郡矢立村の大字。鐵道奧羽線の一驛。大館へ二里餘。山間の僻地なれども、小坂(コサカ)鑛山の貨物の集積地として有名なり。

しらさは-ぎく 白澤菊【名】〔植〕**さはしろぎく**(澤白菊)に同じ。

しら-さめ 白佐目【名】さめ馬の白きもの。 太平記「白葦毛・白河原毛・白佐目、鴾毛(ツキゲ)なる馬」

しら-さや 白鞘・素鞘【名】白木のままなる刃物の鞘。

しらさや-まき 白鞘卷【名】金具などを銀にて包みたる鞘卷の刀。

しらし【名】**がふひやく**(合白)に同じ。〔大阪堂島の德川時代の語〕

しら-しげどう 白重籐【名】重籐の弓の一種。籐を卷きたる部分、即ち黑漆を塗らぬ部分の最も多きもの。

しら-しぼり 白搾【名】次條の略。(黑搾に對して) 俗曲(道行浮舟路)「お染とて、年は二八の細眉に、內の子飼の久松と、忍び忍びの寢油を、親達や夢にもしら搾」

白搾の油【句】白胡麻より製したる胡麻油。しらしぼり。しろしぼり。(「黑搾の油」に對して)

しらしめ 知らしめ【名】知らするための事柄。しるしとして現るる兆。 心中刃は氷の朔日「私が佛にうけられず、頤のかなはぬしらしめ」

しらし-めす 知食す【動四他】『四段活用の**しらす**(知らす)に敬語の接尾語**めす**の添へるもの』**しろしめす**(知食す)に同じ。〔古語〕 萬葉「あしはらの水穗の國をあまくだりしらしめしけるすめろぎの」

しら-しめぢ 白古地【名】〔植〕**しめぢ**(古地)に同じ。

しら-しら 白白【貌】あかるきさま。夜の明けゆくさま。 公任集「しらしらとしらけたる夜の月影に雪搔分けて梅の花折る」 著聞「夜もあけて、しらしらとなりにければ」

しら-じら 白白【貌】㊀興さめたるさま。㊁何げなきさま。そしらぬさま。

しらしら-あけ 白白明【名】しらしらと夜の明くる頃。拂曉。

しら-じらし 白白し【形二】㊀いかにも白し。明かなり。 重之集「よそにふるものとこそ見め白雪のしらじらしくもおもほゆるかな」㊁あらはなり。興なし。しらけてあり。 枕「いみじくびびしくをかしき君達も、ずゐじんなきは、いとしらじらし」㊂知りながら、知らぬさまを裝ひてあり。

しら-す 白洲【名】㊀白き砂の洲。〔白砂〕 萬代「ありあけの月かげ高みなにはがた沖のしらすに千鳥鳴くなり」㊁神社の廣前又は玄關の前などの、白砂を敷きてある處。(神社のには敬語の**お**を添へていふ) 芭蕉「貞享五年きさらぎの末、伊勢に詣づ。われ、御しらすの土を踏むこと、既に五たびに及びはべりぬ」㊂訴訟を裁斷し、又は罪人を糺問する場所。おしらす。御庭。

しら-す 白子【名】㊀〔動〕**いさざ**(魦)に同じ。㊁**たたみいわし**(疊鰯)に同じ。

しらす 白須・白洲【名】〔地〕甲斐國北巨摩(キタコマ)郡菅原村字臺ケ原驛の北に在る地。白砂・青松連なりて、恰も海濱の如し。

しらす 知らす【動四他】知りたまふ。治めたまふ。領したまふ。しろす。〔古語〕 續紀「神魯岐・神魯美命のあがみまの知らさむとす國あめの下と」

しらす 知らす【動下二他】㊀『**す**は敬語の助動詞』前條に同じ。〔古語〕 榮花「一條殿をば、今は女院こそは知らせたまへ」㊁『**しる**(知る)の使役形』他の知るやうにす。通知す。報告す。 榮花「立ちかされ見すべき樣も知らせねば鐘の音にて來つとしらなん」

じらす【動四他】氣をいらだたしむ。じるるやうになす。じらかす。

しらすか 白須賀【名】〔地〕遠江國濱名郡にある町。海に臨む。鷲津町の西南一里。舊東海道五十三驛の一。潮見(シホミ)坂の勝あり。

しらず-がほ 不知顏【名】與り知らぬさまを裝ふ容子。しらぬかほ。しらんかほ。(知顏に對して) 後撰「うらむれど戀ふれど君が世とともに知らず顏にてつれなかるらん」

しら-すぎど 白杉戶【名】木地のままにて塗らざる杉戶。

しら-すげ 白菅【名】〔植〕莎草(スゲ)科に屬する草本。高さ二三尺、葉は互生し、細長く尖り、三縱列に排列し、平行脈を有す。花は單性、穗狀花序をなし、莖の頂にある花序は雄花、下部にあるものは雌花なり。圓柱狀をなす。帶白色の柄を有す。

しらすげ-の 白菅の【枕】眞野といふ地は菅の名所なるより、**まの**にかけていふ。一說に、菅は節のあるものなるより、節と節との間の意にて、**ま**にかけていふと。 月詣集「むかしこれたがすみしともしらすげのまの萩はら秋は忘れず」

しらず-さんてん 不知三點【名】〔文〕俳諧の點附をなすに、意義不明の句ある時、三點にすること。

しらず-しらず 不知不識【副】考へずに。偶然に。おもはず。

しらす-たつくり 白子田作【名】〔動〕『魦の一名を**しらす**といひ、田作(タツクリ)即ち鱓(ゴマメ)に似たるよりいふなるべし』**いさざ**(魦)に同じ。

しら-すな 白砂【名】白き砂。しろまなど。 六帖「ももしきの庭にかきしくしらすなのされたりきとも思はざりしを」

しらず-ながら 不知乍【副】知らぬままに。わからぬながらに。 玉葉「橋柱それとばかりも見るべきに知らずながらも過ぎにけるかな」

しらす-ふご【名】〔動〕**いさざ**(魦)に同じ。

しらす-ばしご 白洲梯子【名】**さんだん**(三段)㊁に同じ。

しらす-ぼし 白子乾【名】㊀鰺(ヂャコ)の乾したるもの。ちりめんぼし。**たたみいわし**(疊鰯)參照。㊁白魚の乾したるもの。

しら-ずみ 白墨【名】胡粉を練固めたる白色の繪具。

しらず-よみ 不知詠【名】知らず顏にて歌を詠むこと。 伊勢「男、知らずよみによみけり」

しら-すり 白磨【名】銀にて造り磨りて、白く光らせたるもの。 太平記「白磨の銀簪の大中黑の矢」

しら-せ 爲知【名】㊀つげ知らすること。報知。通知。㊁きざし。前兆。㊂芝居にて、幕明の相圖に樂屋にて打つ木。

しらせ-がい【名】**こもち**(子持)㊃に同じ。

しらせ-ぶみ 爲知文【名】先方へ知らする書面。通知書。 賀古敎信七墓廻「今日の一座の知らせ文、明日を賴みの屆文」

しら-た 白木質【名】『白板(シライタ)の略なるべしといふ』**へんざい**(邊材)に同じ。(赤みに對して)

しら-だいす 白大衆【名】官位なき僧侶ども。 平家「神人・宮仕(ジシャ)・しら大衆・專當滿ち滿ちて、いくらと云ふ數を知らず」

しら-たいふ 白太夫【名】㊀北野天滿宮の攝社に祀られたる神。もとは、伊勢の神主渡會(ワタラヒ)春彥とて、菅原道眞と親しかりし者といふ。 謠曲(道成寺)「我れは、天神のおん使、名をば、誰れとかしら太夫の」㊁操人形の頭の品目。手習鑑の白太夫より始まるを以て、この名あり。

しら-たか 白鷹【名】〔動〕猛禽(モウキン)類に屬する鳥。身長二尺、上面は蒼灰色、下面は白色、黑き橫列點あり。極北に產し、我が國には稀なり。

しら-たき 白瀧【名】㊀白く見えて落つる瀧。白瀑。㊁蒟蒻の粉末を水にて捏ね、細くつきて、沸湯中に放ちて製したるもの。絲蒟蒻よりも細くして、色白し。

しら-たけ 白竹【名】磨きて白くしたる竹。

しら-たけおさへ 白竹押【名】白竹をわたして、物のおさへとすること。 鳩翁道話「戶は檜木(ヒノキ)の長へぎ、白竹おさへ」

しら-たけ 白茸【名】蕈の一。色白きもの。

しら-たち 白太刀【名】禮儀に用ふる太刀。目貫に家の紋などを附け、柄・鞘ともに、銀にて包みし太刀。菖蒲革の帶取を附く。

しら-たづ 白鶴【名】〔動〕**しろつる**(白鶴)に同じ。〔古語〕 金葉集「しらたづのあまの原より飛びつるは遠き心を知れるなるべし」

しら-たて 白楯【名】白木造の楯なるべし。 紀「白楯、シラタテ」

しら-たに 白谷【名】〔地〕丹波國にありといふ谷。 名寄「あやのひくしらたにみづの底ふかみながき千とせのはじめなりけり」

しら-たふぐ【名】〔動〕河豚の一種。近海に棲息し、背部は平滑にして綠色を帶び、側部も平滑にして銀色、腹部は白くして、夥多の小棘を生ず。

しら-たへ 白栲・白妙【名】**しろたへ**(白妙)に同じ。 紀竟宴「佛すらみかどかしこみしらたへの波かきわけて來ませるものを」

しら-たま 白玉【名】㊀白く美しき玉。**しんじゆ**(眞珠)に同じ。〔古語〕 紀「眞珠、シラタマ」㊁**あはび**(鮑)の異稱。㊂しらたまの粉に水を加へて捏ね、指頭大の丸として煮、更に水に冷して、砂糖を加へて食ふもの。㊃**しろもの**㊀に同じ。㊄〔植〕**しらたまつばき**(白玉椿)の略。㊅〔植〕稻の一品種。米質佳良。畿內・中國地方に栽培せられ、主に筑前地方に產す。芒なく、形圓く、大粒にして、腹白く、大形なるを以てこの名あり。

しらたま-こ 白玉粉【名】**しらたまのこ**(白玉粉)に同じ。

しらたま-さう 白玉草・鶴草【名】〔植〕石竹科に屬する多年生の草。近年舶來せるものにて、觀賞用に供せらる。莖の高さ二三尺。葉は卵形又は卵狀披針形にして、對生し、莖も葉も白色を帶ぶ。夏季に白色の花を開く。

しらたま-つばき 白玉椿【名】〔植〕椿の一種。花瓣白きもの。しらたま。 傀儡集「高砂のをのへに立てる白玉椿」

しらたま-の 白玉の【枕】白玉の美しきを、わが子をうつくしむに譬へて、**わがこ**にかけていふ。 萬葉「しらたまのわが戀ふる日はあかぼしのあくるあしたはしきたへの床のべ去らず」

しらたま-の-き【名】〔植〕しろものに同じ。

しらたま-の-こ 白玉粉【名】餅米六分と粳米四分との割合に雜ぜたるをよく洗ひ、寒中三十日間、毎日冷水を注ぎて洗滌し、日に乾して挽きたる粉末。白玉に製し、又は汁粉の實、餡ころ餅の心(シン)、餅菓子の皮に用ひて、食用に供す。

しらたま-ばうき 白玉箒【名】〔植〕**たむらさう**(田村草)に同じ。

しらたま-ひめ 白玉姬【名】**かすみ**(霞)の異名なりといふ。〔古語〕 綺語抄「春山にしらたまひめの立つときは見まくほしげに花をこそこめ」

しらたま-ゆり 白玉百合【名】〔植〕㊀百合(ユリ)科に屬する多年生の草。園圃に栽培し、地下の黃色なる鱗莖を食用に供す。葉は廣披針形、夏日白色の花を開く。いろかのこゆり。しろかのこゆり。㊁**かのこゆり**(鹿子百合)に同じ。

しら-たみ 疝【名】**せんき**(疝氣)に同じ。〔古語〕 和名「疝、阿太波衣、一云、之良太美、腹急痛也」

しら-ため 痁【名】前條に同じ。 名義抄「痁、シラタメ・シラタミ・アタハラ」

し-らち 仕埒【名】『仕は爲(シ)の義』とりかたづけ。處置。

しら-ち 白血【名】こしけの類。子宮より、無色の液の下る婦人病。

しら-ぢ 白地【名】㊀陶器又は瓦などの、未だ燒かぬもの。㊁紙などの、未だ何等の書畫を書かず、又は印章などを捺(オ)してあらぬもの。㊂『白地にて、素燒(スヤキ)なる物の義』**すりばち**(擂鉢)を云ふ。〔西國・下總國・常陸國の方言〕

しらぢ-うらがき 白地裏書【名】〔商〕『英 Indorsement in blank』裏書をするに、裏書讓渡人の記名・捺印(オウイン)のみありて、裏書讓受人の氏名・地名等を記載せざるもの。

しらぢ-こぎって 白地小切手【名】〔商〕『英 Blank cheque』振出の際、他日他人をして補充せしむる意思を以て、金額等の用件

をゑゐわ　ろれるりら　よゆや　もめむみま　ほへふひは　のねぬにな　とてつちた　そせすしさ　こけくきか　おえういあ

を記入せずして、振出人の署名のみある小切手。

しらぢ-さいさんゆづりわたし 白地財產讓渡【名】〔商〕『英Blank transfer』讓渡證書又は讓渡株券に、讓受人の氏名を記入せずして、財產の讓渡をなすこと。

しらぢしき-うらがき 白地式裏書【名】〔商〕しらぢうらがき(白地裏書)に同じ。

しらぢしき-てがた 白地式手形【名】〔商〕次條に同じ。

しらぢ-てがた 白地手形【名】〔商〕『英Blank signature』手形に記載すべき要件を、他日他人に補充せしむる意志にて、故らに記入せずして發行したるもの。我が商法に明文なきも、有効とするを通說とす。その効力發生の時期は、或は手形發行の當初に遡りて既に有効なりとし、或は手形要件の補充完備せる際、初めて効力を生ずと論ずれども、我が大審院は、後說を採れり。

しらぢ-ふりだし 白地振出【名】〔商〕後日、追記する意志にて、要件を具備せざるままの手形を署名して振出すこと。

しらぢ-むすめ 白地娘【名】きむすめ。しらぢ。處女。 風俗文選「白地の娘御も、傾國の風俗を見習ひ」

しら-ちや 白茶【名】㊀次條の略。 ㊁茶の上品なるもの。 尤草紙「大切なるものの品…白茶」

しら-ちや-いろ 白茶色【名】茶色の極めて淡くして、少し白ばめる茶色。白茶。

しらちや-うら 白茶裏【名】白茶色の綾物を、裏地に用ひたるもの。 天の網島「きやう縮緬の、あすは無い夫の命しら茶裏」

しらちや-ける 白茶ける【動下一自】褪めて、白茶色に變る。

しら-つが 白栂【名】〔植〕しらびそ(白檜曾)に同じ。

しらつか-ぐみ 白柄組・白欄組【名】よしやぐみ(吉屋組)に同じ。

しらつか-ばっぱ 白柄ばっぱ【名】白柄組の者どもの用ひし刀の、白柄卷にて花やかなるさまの形容。 俗謡(土手節)「白柄ばっぱの大小、よしや風の摑みざし」

しら-っ-かみ 白紙【名】しらかみ(白紙)の音便。

しら-つきげ 白月毛【名】馬の毛色の一。月毛の少し白ばめるもの。 平家「西樓といふ白月毛なる馬にぞ乘ったりける。」

しら-っ-こ 白子【名】しらこ(白子)に同じ。

しら-つち 白土【名】㊀色白き土。 和名「堊、白土也、之良豆知」 ㊁〔鑛〕色白く、土に似て堅く、碎きて粉なし、磁器を燒くに用ふるもの。いまりづち(伊萬里土)・みがきずな(磨砂)參照。 ㊂しっくい(漆喰)に同じ。

しらっ-ちやける 白茶ける【動下一自】しらちやける(白茶ける)の音便。

しら-つつじ 白躑躅【名】しろつつじ(白躑躅)に同じ。

しらっ-ぷ (英Syrup)【名】しろっぷに同じ。

じらっ-ふ (英Giraffe)【名】〔動〕きりん(麒麟)㊁に同じ。

しら-つゆ 白露【名】白く見ゆる露。

しらつゆ-の 白露の【枕】露は消えやすきものなるより、きえの約なるけにかけていふ。 萬葉「くれにおきてあしたは消ゆる白露の消(ケ)ぬべき戀もわれはするかも」

しら-つる 白鶴【名】白き翼の鶴。しらたづ。 壬二「霜がれのあしまに立てるしらつるの知らず幾世の年は經ぬらん」

しら-つるばみ 白橡【名】㊀あをしらつるばみ(青白橡)に同じ。 ㊁あかしらつるばみ(赤白橡)に同じ。 蜻蛉「青きしらつるばみのからきぬ重ねたる女のよそひ」

しら-と 白砥【名】淡白色を帶びたる砥石。合砥(アハセド)と粗砥(アラト)との間に用ふるもの。伊豫國宇和島產を上質とす。

しら-とう 白籐【名】弓を卷きたる籐の、漆にて塗らざるもの。(塗籐に對して) 曾我「鷹の羽にてはぎたりし、大の鹿矢、白籐の弓を持ち」

しらと-ほふ 志良登保布【名】をにひたやまにかけていふ。その意明かならず。一說に、ほふはほる(掘る)の訛にて、白砥を掘る義にて言ひつづけたるなりと。 萬葉「しらとほふをにひたやまのもる山のうらがれせななとこはにもがも」

しらと-ゆき 白雪【名】たき(瀑)の異名なりといふ。〔古語〕

しら-とり 白鳥【名】㊀毛色の白き鳥。白鳥(ハクテウ)。 ㊁〔動〕さぎ(鷺)の異稱。 ㊂〔動〕はくてう(白鳥)㊁に同じ。 ㊃羽毛の白き鷺。 平治「白箆(シラノ)に、白鳥の羽にてはぎたる箭負ひ」

しら-とりげ 白鳥毛【名】白色の鳥毛。 歷歌「獨樂形(コマガタ)の白鳥毛」

しらとり-の 白鳥の【枕】㊀鷺は翅の白き鳥なるより、さぎ(鷺)にかけていふ。 萬葉「しらとりのさぎさか山の松蔭に宿りてゆかな夜もふけゆくを」 ㊁鳥の飛ぶといふ意にて、とば(鳥羽)にかけていふ。 萬葉「しらとりのとば山松の待ちつつぞわが戀ひわたるこの月頃を」

しらとり-の-せき 白鳥關【名】〔地〕きのせき(紀關)に同じ。

しらとり-の-みささぎ 白鳥陵【名】日本武尊の御陵。尊伊勢國に薨じて、能褒野(ノボノ)に葬り奉りしに、白鳥に化して飛びゆき、大和國琴彈原(コトヒキハラ)に止まり給ひしかば、ここに陵を造りしに、又飛びゆきて、河内國古市(フルイチ)邑に止まり給ひしによりて、又ここにも陵を造りしに、白鳥天上に翔り去れりと傳へ、今も二箇所に分れ存す。琴彈原は今の南葛城(ミナミカツラギ)郡秋津村大字富田、古市邑は南河内郡古市村大字輕墓(カルハカ)にて、輕墓は即ち假墓の義なりともいふ。

しら-なは 白繩【名】鵜川などにて、魚の逃ぐるを防ぐため、周邊に曳きまはす繩。〔古語〕 散木「ますらをは鵜川の瀨瀨に鮎とると引くしらなはのたえずもあるかな」

しら-なみ 白波【名】㊀白く立つ波。銀濤。白波(ハクハ)。白浪(ハクラウ)。 萬葉「わたつみのおきつしらなみたつた山いつかこえなむいもがあたり見む」 ㊁『はくは(白波)の直譯』盜賊の異稱。〔白浪〕 太平記「沖の上には海賊多くして、舟人白浪の難を去りかねたり」 ㊂〔動〕えそ(鱛)を云ふ。〔女の語〕 ㊃きさみずるめ(刻鯣)に同じ。 ㊄紋所の一。下の圖を見よ。

(㊄みならし)

白波の俥【句】能(ノウ)の船辨慶の替(カヘ)の形(カタ)。金剛流にて祕事とす。

しらなみ-ごにんをとこ 白浪五人男【名】脚本の一。本外題は「青砥稿花紅彩畫(アヲトゾウシハナノニシキヱ)」。辨天小僧・南郷力丸・忠信利平・赤星重三・日本駄右衛門の五人の白浪の事を仕組めるもの。五幕中濱松屋見世の場、稻瀨川勢揃の場、最も人に知らる。河竹默阿彌の作。

しらなみ-の 白波の・白浪の【枕】白波は沖より岸に寄り、又寄せては返るものなるより、よる・かへるにかけていふ。 後撰「しらなみのよるよる岸にたちよりてねもみしものをすみのえの松」 同「住の江の松にたちよる白波のかへるをりにや音は泣かるらん」

しらなみ-もの 白波物・白浪物【名】脚本小說・講談等の盜賊を主人公とせるもの。

しら-に 白煮【名】醬油を用ひず、鹽にて煮たるもの。うしほに。

しら-にぎて 白幣【名】白きにぎて。穀(カヂ)の皮を織りて造る。(青和幣に對して) 記「白丹寸手、シラニギテ」

しらぬ-がほ 不知顏【名】しらずがほ(不知顏)に同じ。 榮花「いざいと知らぬがほなるはわろし」

しらぬ-が-ほとけ 知らぬが佛【句】しる(知る)の條下を見よ。

しらぬ-の 白布【名】しろぬの(白布)に同じ。 平家「弓袋の料にとて、白布五十端」

しら-ぬひ 不知火【名】舊暦七月晦日の夜、肥前・肥後の海上に無數に現るる火光。古來、海中龍神の出す燈明なりと言傳ふ。實は海中の動・植物より發する燐の閃火ならんといふも、詳ならず。筑紫の不知火。

しらぬひ-くわうゑもん 不知火光右衛門【名】〔人〕橫綱力士の第八世。肥後國菊池郡陣内村に生る。江戸に出て、力士となり、殿(シン)と稱し、肥後侯の抱となる。文久年間橫綱免許を受く。容貌美なりしために、人氣大なり。明治十二年歿す。年五十五。

しらぬひ-だくゑもん 不知火諾右衛門【名】〔人〕橫綱力士の第五世。肥後國宇土郡轟(トドロキ)村の人。肥後侯の抱力士たり。天保十一年橫綱免許を受け、安政元年歿す。年五十四。

しらぬひ-の 不知火の【枕】景行天皇筑紫におはして、海上を渡りたまへるとき、夜暗くして行く先知れざるに、今の肥前・肥後のあたりに火の燃ゆるを見給ひて、その國を火の國と名づけたまひし故事により、つくしにかけていふ。 萬葉「しらぬひのつくしの綿は身につけて未だはきねど暖かに見ゆ」

しらぬひ-ものがたり 白縫物語【名】〔書〕『九州地方の事蹟を材料とせしより、しらぬひ(不知火)と同音なる白縫を題號とせしもの』筑前領主菊池家の騷動より筆を起し、豐後臼杵(ウスキ)城主大友宗麟(ソウリン)の女若菜姫が蜘蛛の妖術を行ひて、父の仇を報ぜんとする事を作りたる草雙紙。天草一揆と黑田騷動とを混合して脚色せるもの。初篇より三十五篇まで柳下亭種員の作、三十六篇より二世柳亭種彥の作、六十六篇は種清の作にして、未完結のままに終れり。

しら-ぬり 白塗【名】銀を燒きつけたるものといふ。〔古語〕 萬葉「鷹はしも數多あれどもやかたをのあが大くろにしらぬりの鈴とりつけて」

しら-ね 白根【名】植物の根又は莖の、土中にありて、白色なる部分。 六帖「人知れず物おもふときは難波なる葦のしらねの知られやはする」

しら-ね 白寢【名】ひとりね。いたづらぶし。〔古語〕 夫木「つくし船うらみを積みて宿るにはあしやにねてもしらねをぞする」

しらね-あふひ 白根葵【名】〔植〕『白根山㊀に生ずるによりて得たる名』毛茛(キンポウゲ)科に屬する多年生の草。高さ二尺に達す。葉は壯大にして掌狀に分裂し、鋸齒を有し、莖に細毛あり。夏季花瓣無く、青紫色なる四片の萼を有する大なる美花を開く。我が國の特產にして、本州及び四國の陰地に自生し、觀賞用として栽培せらる。

しらね-が-たけ 白根嶽【名】〔地〕はくさん(白山)に同じ。 猿蓑(桜妖)「紙鳶(タコ)きれてしらねがたけを行くへかな」

しらね-さん 白根山【名】〔地〕㊀甲斐國の西境にある山。赤石山脈中、甲・駿・信三國の境界より東に向ひ、一條の分水嶺南に折れて、赤石山と平行するもの。最北の峰を北嶽(最高一〇三九五尺)と稱し、南に中嶽・南嶽相連なり、南北直徑四五里に達せり。一名、白嶺・甲斐ヶ嶺。 ㊁日光火山脈中唯一の活火山。高さ七五四四尺、舊時は屢噴火せしが、明治二十二年降灰せし以後、全く靜止す。一名、日光白根。 ㊂上野國吾妻郡と信濃國上高井郡とに跨る火山。高さ七四三五尺、山の東麓に草津溫泉あり。一名、草津白根。

しらね-せんきゆう 白根川芎【名】〔植〕やませんきゆう(山川芎)に同じ。

しらね-にんじん 白根人參【名】〔植〕繖形(サンケイ)科に屬する多年生の草。日光山・白山等に自生し、閑養して觀賞用に供せらる。葉は根生、二三回羽狀複葉をなし、夏日、白色の小花密集して開く。

しら-の 白箆【名】しろの(白箆)に同じ。

しら-は 白刃【名】はくじん(白刃)に同じ。

しら-は 白齒【名】㊀齒黑(ハグロ)せぬ齒。皎齒。 浦島年代記「閨の戶出づる小娘の、白齒の雪や振袖に梅の香包む年ばいも」 ㊁『昔女は、嫁入りせぬ内は、齒ぐろめせぬよりいふ』未婚の女。處女。〔俚語〕

しら-は 白羽【名】眞白なる矢羽。 太平記「白羽の矢、眞額(マツカウ)のはづれ、眉間(ミケン)の眞中にあたる」

白羽の矢が立つ【句】見込まれて、犧牲者と定めらる。

しらは-かうじ 白羽柑子【名】〔植〕蜜柑の一品種。遠江國濱名郡白脇村大字白羽の名產。

しら-はぎ 白萩【名】〔植〕㊀白き花を開く萩。 ㊁ぬまとらのを(沼虎尾)に同じ。 ㊂いぬはぎ(犬萩)に同じ。 ㊃こがんぴ(小雁皮)を云ふ。〔薩摩國の方言〕

しら-はぎ 白脛【名】肌の白き脛。

しらは-ぐさ 白葉草【名】〔植〕ちがや(白茅)に同じ。

しらば-くれる【動下一自】飽くまで知らぬふりを裝ふ。しらを切る。

しら-ばけ【名】じやうだん。戲言。

しら-はし 白箸【名】白木(シラキ)の箸。 醒睡笑「いや、しらはしなり」

しらはし-の-き【名】〔植〕めうりのきに同じ。

しら-はた 白旗【名】白き旗。昔は、主に源家の用ひしもの。今は降服の意を表すものとして、軍陣に用ひらる。白旗(ハクキ)。

しら-はだ 白肌【名】しろなまづ(白癜)に同じ。 和名「白癜、一名、白電、之良波太、人面及身頸、皮肉色變レ白、亦不レ痛痒ニ者也」

しら-はたけ 白癩【名】前條に同じ。 字鏡集「癩、シラハタケ」

しらはた-じやう 白旗城【名】播磨國赤穗郡赤松村の東方白旗山上に在りし赤松氏の城。創築の年代明かならず。赤松氏、平時は赤松村に居り、事あるに臨みて、この城に據るを常としたり。

しらはた-は 白旗派【名】〔佛〕ちんぜいは(鎭西派)を見よ。

しらはた-やま 白旗山【名】〔地〕㊀しらはたじやう(白旗城)を見よ。 ㊁相模國鎌倉の壽福寺の西にある山。その附近における最高の山にして、高さ三〇〇尺餘。源義家奧州征伐の途、この山に源氏の白旗を樹てて、戰捷を祈りしによりて得し名なりといふ。一名、源氏山・旗立山。

しら-はと 白鳩【名】〔動〕白き色の鳩。 源氏十二段長生島臺「一むら杉に、白鳩の群れゐて遊ぶもろつばさ」

しら-はひ 白灰【名】白き灰水。あく。 堀次「ははそばら露のしらはひさしつるは時雨の雨ぞ上染はする」

しら-はへ 白南風【名】㊀六月頃吹く西南風。〔畿內・中國邊の船人の語〕 ㊁五月雨の晴るる頃より吹く南の風。〔志摩國鳥羽及び伊豆國の船人の語〕

しら-はま 白濱【名】白き砂の濱。 萬葉「あり通ひ見ますもしるし清き白濱」

しらはま-じやう 白濱城【名】文安中、里見義實の安房國安房郡白濱村に築きし城。白濱郡は野島ケ崎の邊に在り。城趾の地、今も館別・大庭などの地名を存す。

しらはま-なみ 白濱浪【名】白濱の波。 萬葉「たくひれの白濱波のよりもあへずあらぶる妹に戀ひつつぞをる」

しら-ばむ 白ばむ【動四自】白くなる。白く色づく。

しらは-むすめ 白齒娘【名】鐵漿(カネ)を附けざる娘。未婚の女。處女。

しら-ばやし 白囃子【名】芝居にて、擊劍・相撲(スマフ)又は奴の水を打つ幕開(マクアキ)などに用ふる鳴りもの。みづうち。

しら-はり 白張【名】㊀糊をこはく仕立てたる白布の狩衣。官人の奴僕などの著用せしもの。布の淨衣(ジヤウエ)。はくちやう。しらはりしやうぞく。 ㊁しらはりぢやうちん(白張提燈)の略。

しら-はり 白針【名】縫方摘きため、縫目の表に絲のあらはるること。

しらはり-じちやう 白張仕丁【名】白張を著たる仕丁。はくちやう。

しらはり-しやうぞく 白針裝束【名】しらはり(白張)㊀に同じ。

しらはり-ぢやうちん 白張提燈【名】葬禮などの時に用ふる、白き提燈。しらはり。

しら-び 白檜【名】〔植〕㊀しらびそ(白檜曾)の略。 ㊁あすなろ(翌檜)に同じ。

しら-ひげ 白髭【名】㊀白色の鬚。白くなりたるひげ。〔白鬚〕 萬葉「ちちのみの父のみことはたくづぬのしらひげの上ゆ涙垂り」 ㊁謠曲の一。近江國なる白髭明神の緣起を作れるもの。

しらひげ-さう 白髭草【名】〔植〕虎耳草(ユキノシタ)科に屬する多年生の草。山地に自生す。葉は根生、夏日白色・五瓣の花を開く。花瓣の緣邊こまかに深裂して美なり。はくさんなでしこ。はなつづみ。はなでしこ。

しらひげ-じんじや 白髭神社【名】㊀しらひげみやうじん(白髭明神)に同じ。 ㊁東京隅田川の邊、寺島村に鎭坐せる神社。天曆年間近江より分祀せるものにて、祭神は猿田彥命なりといふ。

しらひげ-づら 白鬚頰【名】白鬚の生えたる頰。

しらひげ-みやうじん 白髭明神【名】近江國比良山の麓なる滋賀郡小松村大字鵜川にある神社。垂仁天皇の二十七年創建。祭神は猿田彥命。

しら-びそ 白檜曾・白檜・小瀧仙【名】松

杉科に屬する常綠喬木。我が國各地の山野に產し、高さ七八丈・周圍八尺に達す。樹皮平滑にして、黃褐色を呈し、灰色の斑點あり。葉は樅のに似たり。雌雄同株にて、圓柱狀の毬果を結び、材もその質樅のに似たれど、輕軟にして裂けやすく、器具又は製紙原料とす。えぞもみ。くろき。しらび。しらもみ。たけつが。あをひば。だけつが。あをつが。しらつが。こりゆうせん。たふのをもみ。りゆうせん。

しらび-たい 白檜帶【名】〔地〕我が國植物帶區分法の四帶の中、低き方より數へて第四位、卽ち、山毛欅(ブナ)帶の上に位するもの。中央山脈にては、五六十尺以上これに屬し、白檜・椴松(トドマツ)・蝦夷松(エゾマツ)・青森椴松等の自然林あり。椴松帶ともいふ。又この上に更に一帶を設けて、偃松(ハヒマツ)帶の名を與ふる區分法もあり。寒帶林。

しら-びと 素人【名】しらうと(素人)に同じ。〔古語〕 著聞「ただのしらびとが、强盜とみづから名のりて、命をまかせて參らせて、何のせんか候ふべき」

しら-びと 白人【名】しろなまづのある人。白はだなる人。しろびと。〔古語〕 祝詞「しらびと・こくみ、己が母犯せる罪」

しら-ひめ 白姬【名】冬を司るといふ女神。春の佐保姬、秋の立田姬の類。〔古語〕

しら-ひも 白紐【名】色の白き紐。白色の絲にて組みたる紐。 萬葉「春山のさきのたをりにわかなつむ いもがしらひも見らくしよしも」

しら-びやうし 白拍子【名】『白き水干を著用せしより白拍子の名ありともいへど、延年舞の唱歌にも、相亂拍子・水白拍子などの名目見えたれば、もと拍子の名より起りしなるべし』 ㈠遊女などの舞ひし一種の舞、又その遊女。もと水干に立烏帽子を著、白鞘巻の太刀を佩きて舞ひたる故、男舞ともいひ、後には水干のみにて舞へり。鳥羽天皇の御時、島の千歲・和歌の前の二人の遊女が舞ひそめしなりとも、又は藤原通憲の、磯の禪師に舞はしめしが始なりともいふ。 平家「白拍子の上手、妓王・妓女」 ㈡げいぎ(藝妓)に同じ。

(㈠しらびやうし)

しらび-わけ 白日別【名】〔地〕つくし(筑紫)に同じ。〔古語〕

しら-ふ 白面【名】酒に醉はぬ時。 浮世風呂「暮れ紅顏の醉客も、朝湯にしらふとなるが如く」

しら-ふ 白斑【名】白きまだら。 萬葉「枕つくつまやのうちにとぐらゆひ すゑてぞわが飼ふましらふの鷹」

しらふ【接尾】互に事をなしあふ意。しろふ。〔古語〕 和名「觝、豆岐之良比」 住吉「はぢしらひたる姿」

しらぶ【名】小さき鯢。〔土佐國の方言〕

しらぶ 調ぶ【動下二他】㈠音律の調子を合はせととなふ。 源氏「物のねどもをしらべあはせて、あそびたまふ」 ㈡音樂を奏す。かなづ。 ㈢言葉に調子をつく。 ㈣照らし合はせて考ふ。點檢す。調査す。 ㈤吟味をなす。糾(タダ)す。 ㈥さがす。たづぬ。搜索す。

じらふ (英Giraffe)【名】〔動〕きりん(麒麟)に同じ。

しら-ぶか 白鱶【名】〔動〕ふかの一種。色白きもの。

しら-ふくりん 白覆輪・白幅輪【名】しろふくりん(白覆輪)に同じ。

しら-ふぢ 白藤【名】㈠白色の花を開く藤。 ㈡襲(カサネ)の色目の一。表は薄紫、裏は濃紫なるもの。三・四月の頃用ふ。 ㈣かんざう(甘草)の異稱。

しらぶる (英Syllable)【名】〔語〕父音と母音との相合して成りたる音。綴音(テツオン)。合成音。音節。熟音。

しらべ 調【名】㈠音の調子を合はせととのふること。 ㈡詩歌・音樂などの調子。 六帖「ときはなる松のしらべにひく琴は緒ごとに君は千とせとぞなる」 ㈢照らし合はせて比ぶること。點檢。調査。 ㈣ぎんみ。せんぎ。 ㈣絲くり車の絃。 ㈤しらべのを(調緒)の略。 室町千番歌「浪の鼓のしらべもとけて、一筋ならぬ二筋・三筋」 ㈥しらべおび(調帶)の略。 ㈦つけたて(附立)㈡に同じ。

五箇(ゴカ)の調【句】〔音〕琴にて、搔手(カイテ)・片垂(カタダリ)・水宇瓶(スイウヘイ)・蒼海波(セイカイハ)・雁鳴(ガンメイ)の五種の調べ方。五箇の聲。 源氏「きんは五箇のしらべ」

しらべ-いと 調絲【名】紡錘にかけて、絲繰車の周圍に纏ひたる絲。車の廻轉に連れて、他の車輪に動力を傳ふ。はやいと。はやを。

しらべ-おび 調帶【名】『英 Belt』調車の回轉面と相觸れしめて生ずる摩擦によりて、その運動を傳達する帶狀の紐。皮革製・麻布製・綿布製等もあり。しらべ。

しらべ-がは 調革【名】『英 Leather belt』皮革(主として牛皮)製の調帶。前條及び次條參照。

しらべ-ぐるま 調車【名】『英 Pulley』調革によりて、動力を傳達する裝置の車。

しらべ-たい 白檜帶【名】〔地〕しらびたい(白檜帶)に同じ。

しらべ-なは 調繩【名】『英 Rope』調帶と同じく滑車・齒車などと併せ用ひて運動を傳達する繩。主に綿線を用ふれども、鑛山用には針金繩を用ふることあり。

しらべ-の-を 調緒【名】鼓の兩面の皮の緣に貫きかがり、胴に引附けて纏ふ紐。鼓を打つ時、手にて緩めつ締めつして、調子を助くるに用ふ。

しらべ-やく 調役【名】取調を行ふ役目。審查官。審問官。

しら-ほ【名】漉返(スキカヘシ)の白き紙。〔江戸の語〕

しら-ぼ 白穗【名】稻穗の病の一種。穗、帶白色となりて、秕(シヒナ)を結ぶ。

しら-ぼ【名】樹木に花の如く附きたる霜をいふ。〔東北の方言〕

しら-ぼし 白星【名】しらぼしのかぶと(白星兜)に同じ。

しら-ぼし 白乾【名】魚肉・野菜などを、そのまま干したるもの。すぼし。 徒然「鮎のしらぼし、なでふ事かあらん。鮎のしらぼしはまゐらぬかは」

しらぼし-の-かぶと 白星兜【名】兜(カブト)の鉢に打ちたる鋲(ビヤウ)の、銀又は白鐵(シロガネ)にて造れるもの。しらぼし。 平家「白星の兜に鍬形打ったるを」 保元「上折したる烏帽子の上に、しらぼしの兜を著」

(しらぼしのかぶと)

しら-ほね【名】鳥の羽の名所。

しらほね-ぐら 白骨鞍【名】白木のままにて、漆を塗らざる鞍。 七十一番職人歌合「いかにしてまつ人口に乘りぬらんしらほねぐらのぬる(塗る・寢る)夜なき身に」

しらほ-まつ しらほ松【名】〔植〕くろまつ(黑松)㈠に同じ。

しら-ほろ 白母衣【名】しろほろ(白母衣)に同じ。

しらまかす 白まかす【動四他】しらます(白ます)に同じ。〔古語〕 山家「山里の心の夢にまどひをれば吹きしらまかす風の音かな」

しらまき-ゆみ 白卷弓【名】黑塗の弓に白き藤(トウ)を卷きたる重藤(シゲトウ)。流鏑馬(ヤブサメ)に用ふ。しらまゆみ。

しらます 白ます【動四他】㈠白むやうになす。しらまかす。〔古語〕 平家(長門本)「これをしらまさじと、平家の方より」 ㈡勢を挫く。まけ色にす。興をさます。

しら-まなご 白砂【名】しろすな(白砂)に同じ。〔古語〕 萬葉「しらまなご清き濱邊はゆきかへり見れどもあかず」

しら-まゆみ 白檀弓・白眞弓【名】まゆみの白木のままにて造りたる丸木弓。

しら-まゆみ 白檀弓・白眞弓【枕】弓は弦を張り、引き又は矢を射るに用ふるものなるより、はる・ひ・いにかけていふ。 萬葉「しらまゆみ今はる山にゆく雲のゆきやわかれむ戀しきものを」 同「しらまゆみひだの細江のすがどりの妹にこふれやいをねかねつる」 同「しらまゆみいそべの山のときはなるいのちならばや戀ひつつをらむ」

しらみ 虱・蝨・衣蝨【名】〔動〕有吻(ユウフン)類に屬する昆蟲。極めて小さく、色白く、微毛體面に生ず。六脚と二つの觸角とあり。口器は刺螫部と吸收部とより成る。人體又は獸類に寄生して、血を吸ふ。一頭の雌は五六十顆の卵を產み、一週間ほどを經れば孵化し、十八九日の後は老成す。半風子。 和名「蝨、之良美、齧レ人蟲也」

虱に故鄕なし【句】虱は人より人に轉轉して、本居の知り難きこと。〔諺語〕

虱の息(イキ)も切利(トウリ)天【句】『切利に通るの意を兼ぬ』一念の力の恐るべきことの譬。蚤の息も天。〔諺語〕

虱の皮を槍で剝(ハ)ぐ【句】「雞を割くに牛刀を用ふ」に同じ。〔諺語〕

虱を捫(ヒネ)って、當世を論ず【句】『晉書の苻堅載記に「王猛字景略、隱=於華陰山=、桓溫入レ關、猛被レ褐而詣レ之、一面談=當世之事=、捫レ虱而言、旁若レ無レ人」とあるに本づく』旁若無人の態度をいふ。

口中の虱【句】『韓非子の內儲上篇に「以臨=東陽=、則邯鄲口中虱也」とあるに本づく。たやすくつぶし得るものなるよりいふ』極めて危く亡びやすきさまの譬。

しらみ-ごま 虱胡麻【名】〔植〕あま(亞麻)に同じ。

しらみ-ころし 虱殺【名】㈠片端より殘らず片附くること。 ㈡〔植〕とりかぶと(鳥頭)に同じ。

しら-みづ 白水【名】白く濁れる水。

しらみづ-あみだだう 白水阿彌陀堂【名】磐城國石城(イハキ)郡內鄕(ウチガウ)村にある寺。正曆元年國主岩城則通が後室德尼(藤原淸衡の女)のために、中尊寺の金色堂に擬して造りしものといふ。本堂の內部は剝落甚しきも、平安朝末期の極彩色裝飾を傳ふ。

しら-みね 白峯・白峰【名】〔地〕あやのまつやま(綾松山)を見よ。

しらみね-ぐう 白峰宮【名】京都市上京區飛鳥井(アスカヰ)町に在る官幣中社。祭神は淳仁・崇德の二帝。祭日は九月二十一日。

しらみね-じんじや 白峰神社【名】讚岐國白峰陵の側に在る縣社。祭神は崇德上皇。明治十一年同國金刀比羅(コトヒラ)神社の攝社として設置せらる。

しらみね-の-みささぎ 白峰陵【名】崇德天皇の御陵。讚岐國綾歌(アヤウタ)郡松山村白峯(シラミネ)寺の西北隅にあり。一名、讚岐の陵。

しらみ-ひも 虱紐【名】藥を塗り、虱を除くため、肌に締むる細紐。江戸時代より、日本橋小傳馬町幸手(サッテ)屋にて發賣せり。 江戸生艷氣樺燒「どこの女郎衆か、しらみひも、結ぶの神もあちらむかさんしよ」

しらみ-ぼん 虱本【名】『文字の細小なるより名づく』元祿時代江戶・京阪にて出版せし絵入の歌舞伎狂言本又は淨瑠璃丸本。半紙十枚乃至十六枚より成り、半紙に凡そ十六七行、全部假名にて書き、插畫三四葉を加へ、主として讀むために作りしもの。

しらむ 白む【動四自】㈠白くなる。明るくなる。 夫木「明けしらむ沖のはやてや强からし生田(イクタ)の磯に寄する友舟」 ㈡されて艷氣(ツヤケ)失す。 空穗「この琴どもをばいかで作りしぞ、手ふれて久しくなりぬるに、聲もしらまず」 ㈢勢衰ふ。しらく。 盛衰記「平家の大將これを見て、橋の手こそ白みて見ゆれ、返し合はせよ返し合はせよ、と下知しければ」

しらむ 調む【動下二他】しらぶ(調ぶ)に同じ。〔古語〕 枕「さやうの物をきりしらめたるにと宣はするに、又笑ひぬ」

しら-むし 白蝨【名】〔動〕しらみ(虱)に同じ。〔古語〕 續古事談「懷より、しらむしを取りいだして」

しら-むし 白蒸【名】小豆を入れずに、白く炊ぎたる强飯。

し-らん 紫蘭・朱蘭・白及【名】〔植〕㈠蘭科に屬する多年生の草。高さ一二尺、葉は廣披針形にて平行脈を有す。夏、葉間より花莖を抜き、總狀花序をなして、白又は紫紅色の花を開く。かがみ。蕙蘭。 ㈡『花の色紫なるよりいふ』ふぢばかま(藤袴)に同じ。

し-らん 芝蘭【名】靈芝と蘭(ラン)と。

芝蘭の室に入る【句】「善人と居れば芝蘭の室に入るが如し」を見よ。

芝蘭の契(チギリ)【句】『「善人と居れば芝蘭の室に入るが如し」を見よ』善き感化を受くる交。芝蘭の友。「金蘭の契」參照。 源平布引瀧「かの芝蘭の契の袂には」

芝蘭の友【句】前條を見よ。 右大將鎌倉實記「芝蘭の友も面を背け、笑の中に刃を研ぐ世の中」

芝蘭・玉樹・庭堦に生ず【句】『晉書の謝安傳に「玄答曰、譬如=芝蘭・玉樹欲レ使=其生=於庭堦=耳」とあり』人材多く一門に出づ。

しらん 知らん【句】しる(知る)の條下を見よ。

しらん-かほ 不知顏【名】しらぬがほ(不知顏)の訛。

しら-め 白目【名】重量二百三十匁の稱。江戸時代に、專ら藥舖にて用ひたり。輪目(ワメ)。

しら-め 白眼【名】しろめ(白眼)の轉。〔古語〕 竹取「御眼はしらめにて伏したまへり」

しら-も 白藻【名】白く曝したるおごのり。

しら-も 仙菜【名】〔植〕紅色藻類に屬する食用海藻。沿海に自生し、體は圓柱狀をなして、徑一分ばかり、黃綠色半透明にして、分枝す。

しら-もち 白餅【名】しろもち(白餅)に同じ。

しら-もみ 白樅【名】〔植〕しらびそ(白檜曾)に同じ。

しら-もも 白桃【名】〔植〕桃の一種。白き花の咲く。

しら-やき 白燒【名】魚肉を、鹽・醬油などを附けずに燒くこと。

しら-やま 白山【名】〔地〕はくさん(白山)に同じ。 古今「よそにのみ戀ひやわたらんしらやまの雪見るべくも知らぬわが身は」

しらやま-ぎく 白山菊・東風菜【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。山野に自生す。高さ四五尺に達し、葉は下部のものは廣くして、三角形をなし、上部のものは狹くして尖り、共に鋸齒あり。夏、頭狀花序の白花咲く。

しらやま-じんじや 白山神社【名】加賀國白山の絕頂御前(ゴゼン)嶽に鎭坐せる國幣小社。白山比咩(シラヤマヒメ)の神を祭る。舊稱白山本宮また妙理大權現と稱す。養老三年僧泰澄開山して、祠を此處に建立せりと傳ふ。壽永二年木曾義仲社殿を再建せり。

しら-やまどり 白山雞【名】白き羽毛を有する山雞。 起「白山雞、シラヤマドリ」

しらやまひめ-じんじや 白山比咩神社【名】加賀國石川郡河內村大字三宮に鎭坐せる國幣小社。祭神は白山比咩神。奧宮なる白山神社の位置の登拜に不便なるために設けしもの。五月六日を祭日とす。

しら-ゆ 白湯【名】さゆ(白湯)に同じ。

しら-ゆき 白雪【名】ゆき(雪)に同じ。

しら-ゆふ 白木綿【名】白きゆふ。 玉葉「見わたせば白木綿かけて咲きにけり神岡山の初櫻花」

しらゆふ-なみ 白木綿波【名】白ゆふの靡くさまを、波に譬へていふ語。 續後拾遺「卯の花の咲散る頃や初瀨川しらゆふなみも岸をこゆらん」

しらゆふ-ばな 白木綿花【名】ゆふにて造りたる造花。ゆふばな。 萬葉「山高みしらゆふばなに落ちたぎつたきのかうちは見れどあかぬかも」

しら-よね 白米【名】はくまい(白米)に同じ。

しら-よもぎ 白蒿【名】〔植〕しろよもぎ(白蒿)に同じ。

しら-らか 白らか【貌】白きさま。明らかなるさま。 名義抄「白晳、シララカナリ」

しらら-の-はま 白良濱【名】〔地〕伊勢國にある濱。 名寄「はるばるとしららのはまの白貝は夏さへふれる雪かとぞみる」

しらわ-かうじ 白輪柑子【名】〔植〕『遠江國敷智(フチ)郡白輪より產するよりいふ』柑子の一種。形、柑子よりやや大きく、薄黃色を呈して、光澤あり。味甘くして、蜜柑の如し。

しら-わらひ 痴笑【名】あざわらふこと。しれわらひ。嘲笑。

しらゐ-じやう 白井城【名】上野國群馬郡長國村大字白井に在りし古城。康元中長尾氏ここに築きて、子孫に傳へ、天正十八年豐臣秀吉のために陷れられたり。

しらゐ-なほかた 白井直賢【名】〔人〕京都の畫家。字は子齊、通稱は仲八郎、文擧と號す。圓山應擧の門人。よく鼠を畫く。寬政頃の人。

しら-ゑ 白繪【名】しろゑ(白繪)に同じ。

しら-を 白魚【名】〔動〕しらうを(白魚)の略。

しら-を 白雄【名】〔人〕かやしらを(加舍白雄)

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの はひふへほ まみむめも やゆよ らりるれろ わゐゑを

を見よ。

しらをきる 白を切る【句】しら(白)の條下を見よ。
しり 尻【名】㊀坐する時、踵にて支ふるところ。かくれ。おかま。ゐさらひ。ゐしき。けつ。〔臀〕 和名「尻、之利。臀也」 ㊁『「衣(きぬ)の尻」を見よ』衣の裾(すそ)。下襲(したがさね)の裾(きよ)。源氏「えび染の下がされ、しりいと長くひきて」 ㊂あと。のち。後方。 源氏「小君御車のしりにて、二條院におはしましぬ」 ㊃物のすゑ。末端。 ㊄物事の結末。くくり。餘波。 歌舞伎「御臺の難儀を救ふため、ぼつ散らすばかりでよいに、ああ、死んだりや、しりがむづかしい」 ㊅苦情。いひぐさ。
尻暖まる【句】永く同一の場所に奉職・奉公などして落付く。
尻出づる病【句】だつこう(脫肛)に同じ。〔古語〕 和名「脫肛、之利以豆流夜萬比、肛門脫出也。久痢、則大腸虛冷所ㇾ爲也」
尻重し【句】『しりおも(尻重)を見よ』 立ちはたらくこと、活潑ならず。
尻隱さず【句】「頭(かしら)隱して尻隱さず」を見よ。
尻から這入(はい)る【句】不義理のために顏むけのできぬ人の家に、怖づ怖づ入込むさまにいふ語。
尻が來る【句】過をしかけたるあとにて、先方よりいひぐさを言はる。
尻輕し【句】『しりがる(尻輕)を見よ』 ㊀立ちはたらくこと、活潑なり。 俳諧新選(之房)「からじりに尻輕き身の袷かな」 ㊁淫奔なり。多淫なり。(女にいふ) ㊂輕動かるがるし。ざつかけなし。
尻が据(す)わる【句】おちつく。安心す。(多くは打消の形に用ふ) 鬼貫「日南(ひなた)にも尻のすわらぬ猫の妻」
尻が長い【句】『しりなが(尻長)を見よ』 長居(ながゐ)をする癖あり。
尻が剝ける【句】包みかくしたること露顯す。
尻が早い【句】「尻輕し」に同じ。
尻から拔ける【句】『しりぬけ(尻拔)を見よ』 見・聞きなどしても、直ちに忘る。 鼎井「學問は尻から拔ける螢かな」
尻から燒けて來るやう【句】あわて騷ぐさまにいふ語。
尻が割れる【句】ひそかに行ひたる惡事露顯す。
尻こそばゆし【句】心とがめて、何となく落附かず。 春花五大力「龍虎の呼子(よびこ)、三五衞がお國で盜み所持すれば、今齊の騷動尻こそばゆく」
尻でも食(く)へ【句】「尻を食へ」に同じ。
尻に碾臼(ひきうす)【句】『尻に臼を附けたるがごとしとの義』 尻重(しりおも)なること。
尻に敷く【句】妻が夫を輕蔑す。
尻に附く【句】人の配下に附く。
尻に火が附く【句】事の切迫するさまにいふ語。
尻に帆を上げる【句】一散に逃去る。
尻に帆を掛く【句】逃げる仕度をす。 鳩翁道話「尻に帆掛けて、遊所がよひ」 世間娘氣質「辻駕籠打乘り、尻に帆掛けて、親里へ歸り」
尻に目藥【句】見當ちがひの事をなす譬。
尻全し【句】庬胸すわりたり。〔鎌倉時代の語〕 曾我「和田小太郎は、弓勢も矢束(やつか)もはしたなく、尻全く候ふ」
尻を食(く)へ【句】相手を罵りて、不承諾の意を示すにいふ語。
尻を据ゑる【句】容易に立ちあがらず。長居す。 神輿(みこし)を据う。
尻を突く【句】おだつ。煽動す。
尻を突(つゝ)く【句】前條に同じ。
尻を抓(つめ)る【句】尻をつまみ、又はつまみてねぢる。 道行く女に戲る時、又は忘れたることを思ひだすためといふ。 五人女「老いたる姿をかづかす白き帷子(かたびら)に、黑き帶の結び目を、當風にあぢはやれども、かりそめに我が尻つめる人もなく、女は若きうちの物ぞと、すこしは昔の思はれ、口惜しくて歸るに」
尻を拭ふ【句】『しりぬぐひ(尻拭)を見よ』 人の失敗の後を始末す。 八笑人「年中おれに尻をぬぐはせて居ながら」
尻を端折る【句】はしをる(端折る)に同じ。
尻を割る【句】秘密の惡事をあばく。
御尻の用心【句】眼前の事、又は他人の事などに鑑みて、將來に於ける自身の立場に注意すること。〔諺語〕
御尻の用心、御用心【句】小供の遊に「今日は二十八日、御尻の用心御用心」といひつつ、油斷をうかがひて、他の小供の尻をまくること。
しり 私利【名】わがための利益。自分一己の利益。
しり 梓里【名】『詩經の小雅小弁篇に「維桑維梓、必恭敬止、靡ㇾ瞻匪ㇾ父、靡ㇾ依匪ㇾ母」とあるに本づく』 ふるさと。故鄕。
しり 至理【名】至極なる道理。
しり 支離【名】工合よく合はぬこと。はなればなれ。
支離・滅裂【句】はなればなれになりて次第の立たぬこと。
しり 尸利【名】『禮記の表記篇に「事ㇾ君近而不ㇾ諫、則是尸利也」とあるに本づく』 事を勉めずして、利のみを主とすること。
しり 市利【名】市場にて獲る利益。
しり 司理【名】『白氏六帖に「則云、魏置二理曹掾一、蓋法曹也、即今司理之任、…主二禁繫訊獄一」とあり』今の司法官に當る。
しり 尻【助數】矢羽を數ふるに用ふる語。大鷲の尾羽は十四枚、小鷲の尾羽は十二枚を以て一尻とす。
じ-り 事理【名】㊀事のすぢみち。事のわけ。 ㊁しわざとその道理と。 ㊂〔佛〕事即ち諸法流轉(るてん)の有爲(うゐ)法と理即ち不生(ふしやう)不滅の無爲法と。事物の相と眞如の理體と。現象と本體と。
事理二ならず【句】〔佛〕 次條に同じ。〔諺語〕 徒然「事理もとより二ならず。外相(げさう)もしそむかざれば、內證かならず熟す」
事理不二(ふに)【句】〔佛〕 現象と本體とは、二にして一、實は差別なし。〔諺語〕
じ-り 自利【名】㊀みづから利すること。自己の利益。 ㊁〔佛〕聲聞(しやうもん)の行(ぎやう)、即ち自身の轉迷開悟を得たるのみにて、未だこれを他人に及ぼすまでの域に達せざるもの。 自行(じぎやう)。(利他に對して)
自利・利他【句】〔佛〕 諸佛・菩薩の行(ぎやう)、即ち自身の轉迷開悟を得たる上に、なほ他人をも敎化して、その域に進ましむるに至れるもの。自行化他(けた)。
しり-あがり 尻上【名】㊀しりの方のあがること。しりばね。(尻下に對して) ㊁語尾の音調を高めること。
しりあげ-むし 尻擧蟲【名】〔動〕『尾端を擧ぐる性あるが故に、この名あり』 鱗翅(りんし)類に屬する昆蟲。 幼蟲は、紫黑色を呈して、紫綠を交へ、黃毛を密生す。 尾端を擧ぐる性あり。 薔薇科植物の葉を食害す。
しり-あし 尻足・後足【名】あとあし(後足)に同じ。
尻足を踏む【句】しりごみす。躊躇す。二の足を踏む。 盛衰記「判官は組んでは不ㇾ叶と思ひて、尻足踏んでぞやすらひける」
しり-あて 尻當【名】衣服の、尻の當る部分の裏に、別に縫附けたる布帛。いしきあて。
しり-あひ 知合【名】知合ふこと、又その人。知人。
しり-う 支流【名】㊀枝ながれの川。分流。 ㊁分れの家系又は流派。分家。分派。
しり-う 士流【名】士人の社會。
しり-う 緇流【名】『緇は緇衣(しい)の義』 僧侶の社會。緇徒。緇林。
じ-りう 時流【名】『南史の蔡廓傳に「年位輕、而時流所二推重一」とあり』 當今一般の人人。 ㊁今日の風潮。當世の傾向。
しりう-ごつ 後言つ【動四自】しりうごとをいふ。陰にてそしる。〔古語〕 紫式部日記「昔は經讀むをだに、人は制しき、としりうごちいふを聞きはべるにも」
しりう-ごと 後言【名】『後(しり)言(こと)の音便』 かげにて譏ること。かげごと。かげぐち。〔古語〕 源氏「あなむくつけきしりうごとや、ほのきこしめしつらん」
じ-りう 磁流【名】〔理〕『英 Magnetic current』磁氣が磁路を傳はりて流動すること。
磁流の強さ【句】〔理〕 起磁力の作用によりて、磁路のうちに生ずる指力線の數。
しりう-せん 支流錢【名】寬永銅錢の一。寬永十三年後に鑄造せしもの。 徑約八分。

しり-うたぐ 踞ぐ【動下二他】『尻打上ぐの義』 尻を掛く。腰を掛く。箕踞。〔古語〕 紀「踞二坐胡床一、シリウタゲテ」
しりうち 尻內【名】陸奧國三戸(さんのへ)郡上長苗代(かみながなはしろ)村の大字。八戸(はちのへ)町の西方三哩半。鐵道東北本線の一驛。湊町への八戸支線の分岐點。
しりうち-まつり 尻打祭【名】越中國婦負(ねひ)郡鵜坂神社にて行ふ祭。一鄕の婦女を集め、神主神前に祝詞を奏するや、各その年に觸れし男の數を自白せしめ、その數程杖にて打つ。女これを隱せば、神罰ありと信ぜらる。
じりう-てっくわう 磁硫鐵鑛【名】〔鑛〕『英 Pyrrhotite』 鐵及び硫黃より成る鑛物。六結晶をなして產すること少なく、普通には塊狀をなす。 銅黃色乃至銅赤色にして、金屬光を有す。
しり-うど 知人【名】しりびと(知人)の音便。〔古語〕 枕「つき人のしりうどなどは、らうたくおぼえて」
しり-うま 尻馬【名】 次條を見よ。
尻馬に乘る【句】㊀人の乘りたる馬の後の方に乘る。 ㊁人のあとにつきて、物事をなす。
しり-えだ 尻枝【名】馬の後足。
しり-おし 尻押【名】㊀坂路を登りゆく時などに、前なる人の尻を押して助くること。 ㊁背後にありて助け又は煽(あふ)つること、又その人。
しり-おも 尻重【名】『「尻重し」を見よ』 ㊀たやすく立ちあがらぬこと。 ㊁動作の輕快ならぬこと。動作の鈍きこと。 ㊂せきり(赤痢)及びびやくり(白痢)に同じ。〔古語〕 和名「重下、之利於毛、今所謂赤白痢也。言令二下部疼重一故以名ㇾ之」
しり-がい 鞦【名】『次條の音便』 三がいの一。馬の尻より鞍の方に掛くる組緒。しりがき。
しり-がき 鞦【名】『尻掛の義』前條に同じ。〔古語〕 和名「鞦、之利加岐」

（しりがい）

しり-かくし 尻隱【名】己の過を隱しおほふこと。
しり-かけ 尻掛【名】次條の略。
しりかけ-づな 尻掛綱・後懸綱【名】㊀鞦の尾にかけて、鞍床(こし)に留むる綱。 をかけ。かちひかへづな。 ㊁てんまこみづな(傳馬込綱)に同じ。
しり-かせ 尻枷【名】唐鋤の名稱。牛馬に觸る枷をいふ。
しり-がな 尻假名【名】すてがな(捨假名)に同じ。
しり-かぶこ 尻かぶこ【名】しりたぶら(尻臀)を云ふ。〔豐後國の方言〕
しり-がほ 知顏【名】知りて居る顏つき。 十訓「知らざる事を、しりがほにもてなさす」
しり-からげ 尻紮【名】著物の裾を、帶にはさむこと。しりばしより。 一代女「やれ、この傾城町とや、見ずには通らじ、と尻からげをおろし」
しり-がる 尻輕【名】『「尻輕し」を見よ』 ㊀動作の活潑なること。 ㊁舉止動作のかるがるしきこと。 一代女「今どきの娵、さかしくなりて、なかうどをもどかしく、身ごしらへとり急ぎ、乘物待ちかね、尻がるに乘移りて」 ㊂女の婬奔なること。
しりがる-をんな 尻輕女【名】しりがるなる女。婬奔なる女。
じ-りき 自力【名】㊀他より助を借らぬ、自己のみの力。(他力に對して) ㊁〔佛〕自己の作善修行の効力(かうりき)によりて、悟道を得んとすること。(他力に對して)
じ-りき 事力【名】じりよく(事力)を見よ。
じりき-けう 自力敎【名】〔佛〕自己の力を用ひて、佛果を求むることを敎ふる法門。自力門。 聖道門。 難行(なんぎやう)道。(他力敎に對して)
じりき-しゆう 自力宗【名】〔佛〕自力敎を主とする宗門。即ち天台宗・華嚴宗・眞言宗・禪宗の類。(他力宗に對して)
じりき-ねんぶつ 自力念佛【名】〔佛〕念佛の功德を淨土に廻向(ゑかう)して、往生せんとすること。(他力念佛に對して)
じりき-ほふもん 自力法門【名】〔佛〕じりきけう(自力敎)に同じ。
じりき-もん 自力門【名】〔佛〕じりきけう(自力敎)に同じ。(他力門に對して)
しり-きり 尻切【名】しりきれ(尻切)に同じ。
しりきり-がうな 尻切寄居蟲【名】〔動〕『かうなはやどかりの別稱。その體の後半部瘦せて小さきより、尻切といふなるべし』やどかり(寄居蟲)に同じ。
しりきり-とんぼ 尻切蜻蛉【名】物事の始ありて終なき譬。
しりきり-ばんてん 尻切半纏【名】その裾が尻の邊に達するほどの短き半纏。
しり-きれ 尻切【名】次條㊀の略。 著聞「しりきれのやれたるはきて」
しりきれ-ざうり 尻切草履【名】㊀尻の方の切れたる如く造る藁草履。くつきり。しきり。しきれ。あしなか。 ㊁古くなりて、踵の方の切れし草履。
しり-ぐさ 尻草【名】〔植〕みつかど(三稜)に同じといへど、詳かならず。〔古語〕 萬葉「みなと葦にまじれる草のしりぐさの人みな知りぬわがした思ひ」
しり-くせ 尻癖【名】㊀大・小便をもらすなどの癖。 ㊁情事に關するわろき癖。みだらなる癖。 浮世風「もちろん、亭主の尻癖が惡いとは云ひながら」
しり-くち 後口【名】後方と前方と。うしろと前と。あとさき。しりさき。 枕「それに續きて尼の車、しり口より、するさうのずず、うすずみのけさ・きぬなどいみじくて」
しりくべ-なは 注連【名】次條に同じ。〔古語〕 和名「注連、之利久倍奈波」
しりくめ-なは 尻久米繩・注連【名】『しりは本(もと)、くめは籠(こ)の義にて、藁のもとを切らぬ意。一說に、著(しる)く見え繩の義なりと』 古、藁を引きわたして區劃とし、そのうちに入るを禁ずる標(しめ)とせしもの。又は後淸淨にする意にて、神前に引渡し、又は新年等の飾に用ふ。しめなは。しとたち。
しりくらひ-くわんおん 後暗觀音【名】『尻食(しりくらひ)觀音とも書き、本義明かならねども、一說に、藥師の緣日は八日にて、その前日は即ち七日、また地藏の緣日は二十四日にて、その後日は、即ち二十五日なるより、古の諺に、暗夜のことを、藥師の前、地藏の後といへり。さて尻暗いとは、地藏の後といふに同じく、六觀音の緣日を、十八日より二十三日までの日數に配當して、その緣日の後は暗夜にて、暗しといふことなりとも、また兎は前足短く、後足長きが故に、坂路の上りは易く、下りは困難なるが故に、下る時は南無觀世音と唱へ、上りは得手なれば、前の恩を忘れて、尻食らへ觀音と罵りつつ上るなりともいふ』 ㊀くわんおん(觀音)に同じ。 ㊁恩を仇にして返すこと。
しり-ぐらし 後暗【形一】うしろぐらし(後暗)に同じ。
しりくらひ-くわんおん 尻食觀音【名】しりくらいくわんおん(後暗觀音)を見よ。
しり-け 知氣【名】知りたる樣子。 著聞「我れを笑ふとは知りげもなくて」
しり-げ 尻毛【名】尻に生じたる毛。
尻毛を拔く【句】油斷に乘じて、からき目を見しむ。
しり-げた 尻下駄【名】うまげた(馬下駄)に同じ。
しり-げた 尻桁【名】尻の出張りたる部分。 一代女「時代(じだい)ればとて、今時の女、尻桁に掛けたる鍋紫(なべむらさき)の鹿子帶、目にしみわたりて、さりとてはいや風なり」
しり-けん 手裏劍【名】しゆりけん(手裏劍)の訛。
しり-こけ 尻轉【名】帶などを尻のさきの方へ結ぶこと。
しり-こし 尻腰【名】こし(腰)㊁に同じ。
しり-こそばゆし 尻こそばゆし【句】しり(尻)の條下を見よ。
しり-こだま 尻子玉【名】昔、肛門の蓋なりと想像したる物。河童(かつぱ)はこれを拔取る性ありと、言傳へたり。
しり-こぶた 尻小端【名】しりたぶら(尻臀)に同じ。 豐年俵田川「九寸五分するりと拔いて直と突出し、太股を突かうか…尻こぶたを突かうか」
しり-こぶら 尻臀【名】前條に同じ。
しり-ごみ 後込【名】しりごむこと。あとじさり。 大職冠「さしもの猛虎、毛を伏せて、

じりじりとしりごみす」

しりごむ　後込む【動四自】しりごみをなす。逡巡す。

しりごゑ　尻聲【名】あとを引く聲。聲のをはり。芭蕉「ひいと鳴く尻聲悲し夜の鹿」同「船頭の尻聲悲し秋のくれ」

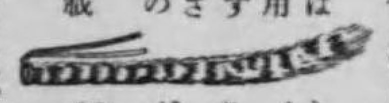
しりさがり　尻下【名】尻の方のさがること。尻の方へ下ること。（尻あがりに對して）國姓爺「尻さがりに引入る」

しりさき　後前【名】まへうしろ。あとさき。ぜんご。しりくち。撰集抄「人しりさきに立ちて、笑ひなぶりけり」

しりざし　尻刺【名】遣戸の尻に刺して、明かぬやうにするもの。しんざし。賴政集「聲ばかり通ふやりどのしりざしをなほたのまぬか無き心地する」

しりざま　後方【名】うしろの方。あとの方。しりへ。

しりざや　尻鞘【名】毛皮韋又は布にて製し、太刀の鞘を包むに用ふるもの。濕氣を防ぐために施すといふ。しんざや。しっさや。しざや。保元「三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞘入れ」


（しりざや）

しりざら　尻皿・後盤【名】盃を載する臺。和名「臺子、志利佐良」

じりしゆぎ　自利主義【名】〔哲〕りこしゆぎ（利己主義）に同じ。

じりじり【副】㊀徐徐に押進むさま。じりじりり。心中萬年草「九兵衞もじりじりと、門の方へあとしさり」㊁痼癪を起して悶ゆるさま。

しりすぼまり　尻窄【名】㊀尻の方の細くすぼみたること、又その物。㊁始に勢よくして、終に衰ふること。

しりすゑ　尻居【名】椀の下に据ゑおく小臺。形、平茶臺（ヒラチヤダイ）に似たるもの。明月記「已上椽器有二尻居一」

しりぞく　退く【動四自】㊀『後（シ）退（ソ）く』の義』後の方へひき下がる。下の方にのく。しぞく。しさる。㊁まかる。歸る。㊂職務などを辭す。源氏「しりぞきて、とがなしとこそ、昔のさかしき人もいひおきけれ」㊃へりくだる。謙遜す。

しりぞく　退く【動下二他】『後（シ）退（ソ）く』の義』㊀うしろへひき下がらす。引かす。㊁遠ざく。㊂追ひやる。おひかへす。「斥く」㊃現地位よりくだけて用ひず。おとす。「黜く」㊄ことわる。謝絶す。

しりたがひ　尻違【名】艪の一部の名。

しりだこ　臀胝【名】猿の臀部に存する、皮厚き無毛の部分。樹上に坐する際、その摩擦を防ぐ効あり。

しりだすき　尻縒【名】瘦せたるものをいふ語。

しりたたきまつり　尻叩祭【名】いはくらまつり（岩倉祭）を見よ。

しりだな　尻棚【名】げすだな（下衆棚）に同じ。

しりたぶら　尻臀・㞍【名】臀の肉。しりこぶた。しりこぶら。〔古語〕字鏡集「㞍、シリタブラ」

しりたむら　尻臀・㞍【名】前條の轉。〔古語〕和名「㞍片、之利太无良、今鳥獸之尻也」

しりつ　私立【名】『立の字の音、正しくはりふ』一私人にて設立し維持すること。（官立・公立に對して）

しりつ　市立【名】『立の字の音、正しくはりふ』市にて設立し維持すること。

しりつ　詩律【名】詩を作る規則。詩の音律。

じりつ　自律【名】みづから身を律すること。自己の欲情を制すること。自則。

じりつ　自立【名】『立の字の音、正しくはりふ』自力にて立つこと。いっぽんだち。

じりつ　而立【名】『論語の爲政篇に「吾十有五而志二于學一、三十而立」とあり。立の字の音、正しくはりふ』三十歳の異稱。

しりつかう　私立校【名】次條の略。

しりつがくかう　私立學校【名】一私人の力にて設立し維持する學校。私立校。（官立學校・公立學校に對して）

しりつき　尻付【名】尻の恰好。

しりつぎんかう　私立銀行【名】一私人又は團體の設立・經營する銀行。（國立銀行に對して）

しりつけ　尻附【名】しづけ（尻附）に同じ。

しりつけこうまのほそめ　尻付小馮の細目【句】ほそめ（細目）の條下を見よ。

しりっこけ　尻轉【名】しりこけ（尻轉）の音便。

しりつど　後戸【名】『つは領格の助辭』しりの方の戸。（前つ戸に對して）〔古語〕記「しりつどよいゆきたがひ」

しりづな　尻綱【名】さしなは（差繩）に同じ。

しりっぱしより　尻端折【名】しりはしをり（尻端折）の訛。

しりっぱね　尻跳【名】㊀しりあかり（尻上）に同じ。㊁履物（ハキモノ）の尻に附きたる泥などの衣服にはねあがること。「尻っ跳が上（アガ）る」㊂物價の相場が、後になるほど高値になること。

しりっぺた　尻邊【名】しりべた（尻邊）の音便。

しりっぽ　尻尾【名】『しりを（尻尾）の訛』しっぽ（尻尾）に同じ。

しりつみかど　後門【名】『つは領格の助辭』後方の門口。うしろ口。〔古語〕記「後門、シリツミカド」

しりつむじ　尻旋毛【名】こうさうもん（後喪門）に同じ。

しりつわ　尻輪【名】『つは領格の助辭』しづわ（後輪）に同じ。

しりど　尻戸・後戸【名】後方にある戸。

しりどう　尻銅【名】〔鑛〕銅鑛熔錬の際、爐の底部に殘る粗銅。殊に銅鈹（ドウヒ）再製煉の時、これを得るを常とす。

しりとり　尻取【名】多人數集り、順次に他人の語の最後の音を取りて、更に他の語に言ひつづくる遊戲。例へば、一人がたかといへば、他の一人がかめといひ、また他の一人がめじろといひつづくるが如し。

しりとりもんく　尻取文句【名】尻取にいふ文句。

しりなが　尻長【名】『「尻が長い」を見よ』長居（ナガヰ）すること。ながっちり。

しりながえ　後轅【名】とびのを（轅尾）に同じ。〔古語〕大鏡「殿上人は、御車のしりながえのかたに候ひたまふ」

しりぬく　知拔く【動四他】よく知る。よく明らむ。委しく知る。熟知す。

しりぬぐひ　尻拭【名】『「尻を拭ふ」を見よ』人の仕損じたるあとを治めととのふること。

しりぬけ　尻拔【名】『「尻から拔ける」を見よ』㊀見るもの聞くものにつけて、直ちに忘るること。㊁物事のまとまりのつかぬ事跡。仕末のつかぬ事。

鵜の鳥の尻拔（シリヌケ）【句】『尻拔とは、魚を呑込みても、ただちに尻へ拔け去る意』よく物忘れすること、又その人。

しりのほね　尻骨【名】腰部の骨。名義抄「髁、シリノホネ」

しりのやまひ　尻病【名】ぢ（痔）に同じ。

しりはしをり　尻端折【名】『「尻を端折る」を見よ』衣の裾をかかげて、帶に插むこと。しりっぱしより。

しりはな　尻鼻【名】尻と鼻と。一說に、尻のさきといふ意ならんと。宇治「その男がしりはな、血あゆばかり、必ず蹴たまへ」

しりばや　尻早【名】うしろの方より急（セ）き立てられて進むこと。落窪「さきなる車は尻ばやに追はれて、人人わびにたり」

しりはら　尻腹【名】あとばら（後腹）㊁に同じ。〔古語〕和名「新撰要方云、婦人產後腹痛、俗云二之利波良一」

しりばりぶろ　尻張風爐【名】茶道にて、湯を沸す風爐の一。

しりび　後火【名】㊀風上の方へ燒け移る火。㊁火災の燃えひろがりたる末。

しりび　後干【名】末の弱くなること。歌の結句の力弱きこと。〔古語〕源氏「すぐせのひく方にて、なほなほしきことにありありて靡く、いとしりびに、人わろきことぞや」

しりびかし　後引かし【形二】前へ押進むべき物を、反對にあとへ引きよせたく思ふ。〔古語〕萬葉「あしがりのあきなの山のひこ船のしりびかしもよここはこがたに」

しりひき　尻引【名】乘れる馬を後方へ引下らしむること。〔馬術の語〕

しりひきむし　尻引蟲【名】〔動〕あとびさり（後退）㊁に同じ。

しりびと　知人【名】知合の人。しりうど。「知人。」

しりびれ　臀鰭【名】魚類の肛門の後にあ

る鰭。

しりふかず　尻不拭【名】あと始末をせぬこと、又その人。

しりぶくら　尻膨【名】茶壺の一種。肩はやや肩衝（カタツキ）に似て、下部に至るに從ひて膨みたるもの。

しりぶさ　尻臀【名】灸條に同じ。〔古語〕字鏡「臀、尻不佐」

しりぶた　尻端【名】しりたぶら（尻臑）に同じ。〔古語〕字鏡集「㞍、シリブタ」

しりぶり　痔【名】りびやう（痢病）に同じ。〔古語〕字鏡「痔、痢病也。尻夫利」

しりぶり　後振【名】うしろ姿。うしろつき。〔古語〕萬葉「里人の見るめはづかしさぶる子にさどはす君がみやでしりぶり」

しりへ　後方・後【名】『尻方の義にて、日方（ヒヘ）の義なる、前に對せしめたる語なりといふ』あとのかた。うしろ。

後に瞠若たらしむ【句】『だうじやく（瞠若）を見よ』後方に引下りて、目を見張るほどに驚き感ぜしむ。

後の園【句】こうゑん（後園）に同じ。〔古語〕夫木「後園若菜。かたくなやしりへの園に若菜つみかがまりありく翁婆よ」

後の庭【句】こうきゆう（後宮）に同じ。〔古語〕赤染衞門集「すべらぎのしりへの庭の石こそは拾ふ心ありあゆがさで取れ」

後の政（マツリゴト）【句】後宮の政事。皇后のなしたまふ御しわざ。〔古語〕續紀「於二天下政宜一而、獨知倍伎物不レ有、必母斯理幣能政（シリヘノマツリゴト）有倍之」

後の宮【句】こうきゆう（後宮）に同じ。

しりへざま　後方【名】うしろの方。〔古語〕源氏「しりへざまにゐざりしぞきて」

しりべし　後志【名】〔地〕北海道十一國の一。小樽區及び久遠（クドー）・奧尻（オクシリ）・太櫓（フトロ）・瀬棚・島牧・壽都（スッツ）・歌棄（ウタスツ）・磯谷・岩内（イワナイ）・古宇（フルウ）・積丹（シヤコタン）・美國（ビクニ）・古平（フルビラ）・餘市・忍路（オショロ）・高島・小樽の十七郡よりなる。久遠以下の四郡は檜山支廳、島牧以下の十三郡は、後志支廳の所管とす。

しりべしがは　後志川【名】〔地〕北海道五大川の一。源を石狩・膽振兩國界の漁嶽（イサリダケ）山脈に發し、後志山の麓を繞り、後志國磯谷（イソヤ）郡尻別（シリベツ）村に至りて、海に入る。長さ三十六里半。一名、尻別川。

しりべしにっき　後方羊蹄日記【名】〔書〕安政五年蝦夷後方羊蹄に至りし時の地誌上の日記。一卷。松浦武四郎の著。

しりべしやま　後志山・後方羊蹄山【名】〔地〕膽振國虻田（アブタ）郡にある休火山。高さ六二四七尺。山容秀拔にして、蝦夷富士の名あり。

しりべた　尻邊【名】しり（尻）㊀に同じ。〔俚語〕蕪村「行く春の尻べた掃ふ落花かな」

しりべつがは　尻別川【名】〔地〕しりべしがは（後志川）に同じ。

しりへで　後手【名】うしろで（後手）㊁に同じ。〔古語〕參通「繩をつけて、しりへに縛り」

しりぼね　尻骨【名】尻の骨。宇治「碁盤の足のいかりさしあがりたるに、しりぼねを荒らつきて」

しりまひ　尻舞【名】人の後に立ちて、物事をすること。人のまねをすること。〔古語〕盛衰記「さしもの名人の、思ひかけず、尼公の尻舞して、晴の振舞こそ人ならぬ」

しりむた　尻むた【名】しりたぶら（尻臑）に同じ。〔古語〕

しりん　四鄰【名】㊀四方の鄰。あたり近所。㊁前後・左右の人人。

しりん　詞林【名】『林は數の多き譬』㊀詩文を集めたる書。㊁詩人文士の社會。文壇。文界。

しりん　士林【名】士たる身分の社會。

しりん　緇林【名】〔佛〕『林は數の多き譬』しりう（緇流）に同じ。盛衰記「凡そ緇林の乙甲をあらはすは、則ち是れ兄弟の諍なり」

しりん　私林【名】私有の林。

しりん　尸林【名】〔佛〕しだりん（尸陀林）の略。

しりん　支輪【名】〔建〕斜に上下をなせる二つの横木の間に、支柱として設けたる竪の木。

しりん　施林【名】〔佛〕やさう（野葬）㊁に同じ。

しりん《英 Cylinder escapement の略》【名】圓錐形の小銅鐵管の回轉によりて、齒車を規則的に進行せしむるもの。

しりん　絲綸【名】りんし（綸旨）に同じ。東鑑「殊被レ下二絲綸一畢」

しりん　四輪【名】〔佛〕大地下に在りて、世界を撐（サヽ）ぐといふ四種の大輪、即ち金輪（コンリン）・水輪・風輪・空輪。

じりん　字林【名】多くの文字を集め、又はこれに解釋を施したるもの。

じりん　辭林【名】『林は數の多き譬』じしよ（辭書）に同じ。

しりんぐ《英 Shilling》【助數】しるりんぐを見よ。

しりんさいえふ　詞林采葉【名】〔書〕萬葉集の中の名所・枕詞・故事等を註せるもの。十卷。僧由阿の著。

しりんしや　四輪車【名】四つの輪を有する車。

しりんだあ《英 Cylinder》【名】種種の機械の中に裝置しある圓筒。しりんどる。汽筩。

しりんどる《英 Cylinder》【名】前條に同じ。

しりんわう　四輪王【名】〔佛〕てんりんわう（轉輪王）を見よ。

しりめ　後目・尻目【名】㊀怨恨・輕蔑等の心を抱く時など、目尻の方に瞳をよせて見ること。ながしめ。源氏「いとねたげなるしりめなり」㊁目尻の方より見ゆる範圍に入りくること。今國姓爺「睨んでくれんと、頭の上に立ちかかり、睨む尻目に母の苦痛」

尻目に掛く【句】輕蔑の意にて、尻目に見る。醒睡笑「尻目に掛けて、さらぬ顔にて通りけるが」

尻目を使ふ【句】しりめにて物を見る。

しりめづかひ　尻目遣・後目遣【名】しりめをつかふこと。

しりもぐり　尻潛【名】一たび數へたる事などを、直ちに忘るること。しりぬけ。

しりもち　尻餅【名】昔、江戸の習俗に、小供生れて一歳に滿たずして步ける時、搗きし祝の餅。次條參照。

尻餅を搗（ツ）く【句】㊀喜びて小をどりする意ならんといふ。毛吹草「面白と尻餅つき（搗・月）の眺かな」㊁後方へ倒れて、腰をつく。

しりやう　思量【名】思ひはかること。思慮。

しりやう　資糧【名】道中の用に供するかて。

しりやう　私領【名】㊀私の領分。㊁大小名の領地。（天領に對して）

しりやう　死靈【名】死人の魂の、人に憑りて、祟するもの。惡靈。

じりやう　寺領【名】寺の領地。

じりやうち　寺領地【名】寺院の領せる土地。

しりやく　資略【名】天性才略あること。

しりやく　誌略【名】簡略に記したる記錄。

しりやく　史略【名】簡略に記したる歷史。

しりやけざる　尻燒猿【名】『「尻に火が附く」を見よ』落ちつかぬ人を嘲りていふ語。ちよこざい。

しりやざき　尻矢崎・尻屋岬【名】〔地〕陸奧國下北半島の東北角。津輕海峽の東口角たり。北北東に向ひて突出すること二里餘。

しりよ　思慮【名】かんがへ。おもんぱかり。思考。吉野忠信「元來浮氣の思慮なし者」

しりよ　志慮【名】おもんぱかり。こころざし。

しりよ　師旅【名】『師も旅も、支那古代の軍隊の人員の數を示す語』㊀へいえき（兵役）に同じ。㊁ぐんたい（軍隊）に同じ。

しりよく　士力【名】士の氣力。士氣。鎌田兵衞名所盃「其將の軍を統ぶるや、惠を推し、恩を施し、士力日日に新にして、戰ふこと風の發するが如く」

しりよく　死力【名】死をも厭はずして出す力。必死の力。

しりよく　資力【名】資本の金。財產の能力。

しりよく　視力【名】眼にて物を見る力。眼力。

しりよく　四綠【名】しろく（四綠）を見よ。

しりよく　事力【名】㊀古、太宰帥（ダザイノソチ）及び國守に對して、その職分田耕作の必要上、朝廷より貸與せし耕民。㊁王朝時代に、天皇より地方官に賜はりし舍人。

じりよく　磁力【名】〔理〕『英 Magnetic force』磁氣に基く力、即ち磁極の同名の者が相斥け、異名の者が相引く力。極に近づく

に從ひて大にして、そのCGS式絕對單位をガウスと呼ぶ。磁氣力。
磁力の强さ【句】〔理〕磁界內の一點において、單位磁氣に働く力。磁界の强さ。磁場の强さ。
磁力の場(ば)【句】〔理〕じちやう(磁場)に同じ。
磁力の變動【句】〔動〕「磁氣の嵐」に同じ。
じりよく-けい 磁力計【名】『英 Magnetometer』磁力の强さを計る器械。
じりよく-せん 指力線【名】〔理〕『英 Lines of force』磁場又は電場に於て、磁力又は電力の作用に依りて、物體の動くべき徑路。卽ち磁場又は電場の各點において、磁力又は電力の方向に引ける極めて短き線の相連なりて成すべき、想像上の曲線。次條及びでんきしりよくせん(電氣指力線)參照。
じりよく-せん 磁力線【名】〔理〕『英 Lines of magnetic force』磁場に於ける磁力の方向を示す線。卽ち磁力の指力線。棒磁石の近傍の各所に小磁石を置けば、各の磁針は各の點における磁力の方向に從ひて靜止し、また强き磁石の上に硝子板を藏せ、その上に鐵粉を散布して輕く板を叩けば、鐵粉は磁力の方向に連絡し、指力線とほぼ一致せる無數の曲線を作る等によりて、これを實驗的に知ることを得。磁氣指力線。じろ(磁路)參照。
じりよく-せんくわうはふ 磁力選鑛法【名】鑛物の磁氣に對する性質の差異に依りて選別する法。
じりよく-ほしようれう 資力保證料【名】〔商〕うりさきしりよくほしようれう(賣先資力保證料)の略。
しりより-くち-より-こく-やまひ 尻より口よりこく病【名】くわくらん(霍亂)に同じ。和名「霍亂、利興理久智興理古久夜萬比」
じりり-じりり【副】じりじりに同じ。雙生隅田川「じりりじりりとつけまはせば、身をひやし、身をちぢめ」
しり-わ 尻輪【名】しづわ(後輪)に同じ。保元「鎧の草摺の尻輪懸けて、矢先三寸餘りぞ射通したる」
しり-ゐ 尻居【名】尻餅をつくこと。著聞「高遠その轡を持ちながら、しりゐにまろびぬ」
しり-を 尻尾【名】しっぽ(尻尾)に同じ。
しる 汁【名】一物よりしみいで、又は物を搾りて、取りたる液。二酒。祝詞「甕の腹みてなべて、汁にも穎にも、稱辭竟へまつらむ」三すひもの。つゆ。四みそしる(味噌汁)の略。五しるこう(汁講)の略。
汁の汁【句】饗應の時、本膳の汁を吸ひて、直ちに二の膳・三の膳の汁を吸ふこと。
汁の物【句】しるのもの(汁物)に同じ。
汁を煮る【句】共にたくむ。〔俚語〕
旨(うま)い汁を吸ふ【句】他人と他人との間に立ちて、獨り竊に利益を占む。
しる 醨【名】『前條の語の意の轉』うすき酒。〔古語〕和名「醨、之流、一云二毛舍呂一酒薄也」
し-る 緇流【名】〔佛〕しりう(緇流)に同じ。
しる 知る【動四他】一さとる。こころう。みとむ。〔識る〕二交りて親しむ。千載「もとしりて侍りける男の、こと人に物申すとききて」三すべをさむ。つかさどる。統治す。領す。しらす(知らす)・しろす(知ろす)・しろしめす(知食す)參照。〔古語〕源氏「兵部卿の宮の北の方こそは、しり給ふべければ」
知った同志は涼しい【句】親密に交際して、氣心の知れたる人は、互に心もちがよし。〔諺語〕
知った中は涼しい【名】前條に同じ。〔諺語〕
知ら【句】「知らん」の略。「行ったかしら」「降るかしら」
知らざるを知らずとせよ、これ知れるなり【句】『論語の爲政篇に「子曰、由誨二女知一レ之乎、知レ之爲レ知レ之、不レ知爲レ不レ知、是知也」とあるに本づく』知らぬことは知りたるふりをせずして、知らずとするがよし。〔諺語〕
知らずば人に問へ【句】知らぬことは、恥づることなく、人に教を乞ふべし。
知らに【句】知らずに。知らずして。〔古語〕萬葉「いはむすべせんすべしらに」
知らぬ顔【句】心付かぬやうす。
知らぬが佛(ほとけ)【句】何事も知らざれば煩惱も起らず。見ぬ事淸し。〔諺語〕
知らぬ顔の半兵衞【句】なにげなき顔して取りすますこと。〔諺語〕
知らぬ神に祟(たたり)なし【句】何事にも初より關係せざれは、後に累(わざはひ)なし。さはらぬ神に祟なし。〔諺語〕
知らぬ京物語【句】「見ぬ京物語」に同じ。〔諺語〕
知らぬ米商(よねあきんど)より、知った糠商(ぬかあきんど)【句】次條に同じ。〔諺語〕
知らぬ佛より、馴染(なじみ)の鬼【句】馴染たるものは惡しくとも、知らぬものより善きことの譬。
知らぬ世【句】一見知らぬ世界。見知らぬ國。二見知らぬ過去の世。
知らん【句】知るの將然言。「行くかしらん」「降るかしらん」
知る所【句】所領の地。知行所。〔古語〕伊勢「津の國に知る所ありけるに」
知る人【句】しりびと(知人)に同じ。宇治「後は、常に行通ひつつ、知る人になんなりにける」
知る者は言はず、言ふ者は知らず【句】『老子に「知者不レ言、言者不レ知」とあり』能く知りたるものは猥りに多く語らず、知らざるものは却りて喋喋と語るものなり。〔諺語〕
知る由して【句】知る所(卽ち知行所)のある由にて。〔古語〕伊勢「昔、男うひかうぶりして、奈良の京春日の里に知るよしして、狩にいにけり」
素知らぬ【句】すこしも知らず。「そしらぬけはひ」「そしらぬ顔」
自(みづか)ら知るの明(めい)【句】『老子の第三十三章に「知レ人者智、自知者明」とあり』おのれを自覺する才識。
しる 知る【動下二自】他よりわが事を知らる。拾遺「春の野にあさる雉子のつまごひに己がありかを人に知れつつ」
知れた【句】たかの知れたる。恐るるに足らぬ。狂言(蟹山伏)「きやつは、しれた蟹ぢやは」
知れた事【句】說明するまでもなき事なり。鳩翁道話「△それは奇麗でよからうが、貸代はなんぼ取るのぢや。△しれた事、一度が八文よ」
しる【動下二自】たはむる(戯る)に同じ。〔豐後國の方言〕
しる-あめ 汁飴【名】みづあめ(水飴)を云ふ。〔畿內の方言〕
じるい【形】『しるしの訛』道路が乾かず。〔關西の方言〕
しるえっと(佛 Silhouette)【名】しるゑっとに同じ。
しる-がゆ 汁粥【名】かゆ(粥)に同じ。(かた粥に對して)〔古語〕和名「粥、之留加由、薄糜也」
しるく-はっと 絹帽(英 Silk-hat)【名】西洋風の男子の禮式用帽子。圓筒形にて、上部に至るに隨ひ、次第に開き、高さ五寸位に及ぶ。鍔(つば)の反(そり)には、圓緣・方緣等あり。地質は黑き絹絨の光澤あるものを用ふ。

（しるくはっと）

しるけし 著けし【形一】しるし(著し)に同じ。〔古語〕萬葉「かみなびのあさしぬ原のをみなへししぬべる君が聲のしるけく」
しるけっと 擬絹絲(英 Silket)【名】綿絲を苛性曹達液にて處理し、水洗したる後、更に硫酸の稀薄液に入れて濯ぎ、後又よく水洗したるもの。絹狀光澤を有し、染料(殊に直接染料)に對する吸收力增加するが故に、上等の綿(めん)織物の原料として用ひらる。英人マアサア(J. Mercer)の發明に係る。
しるけっと-いと シルケット絲【名】前條に同じ。
しる-こ 汁粉【名】しるこもち(汁粉餅)の略。
しる-こう 汁講【名】來客おのおの飯を面桶(めんつう)などに入れて携へ來り、亭主はただ汁一種のみを、鍋の儘に座敷に持出でて供する會食。平安朝中期に流行せし燒炙の餘風にして、質素を旨とせし時代に行はれたり。

じるこにうむ(英 Zirconium)【名】〔化〕稀有元素の一。ジルコンに含まるるもの。その弗素カリウム化合物をアルミニウムと共に高溫度に熱し、還元して製すれば、銀灰色葉狀結晶の金屬となりて出で、またナトリウムにて還元すれば、黑色非晶形の粉末となる。この粉末狀ジルコニウムは、水に入りて膠溶を作す性あり。然し結晶せるジルコニウムは溶解し難く、また化學耐性强く、高溫度にて、初めて他物と化合す。
しる-こぼし 汁溢【名】下掃除を運搬する船。こえとろぶね。八笑人「三國のがん木に、しるこぼしが一艘ついて居やす」
じるこん(英 Zircon)【名】〔鑛〕ジルコン土と硅酸とより成る鑛石。結晶は正方晶系に屬し、小柱狀をなす。硬度は七・五。透明又は半透明にして、灰色・褐色等を呈し、赤くして美しきは、裝飾用に供せらる。シイロン(Ceylon)島・ウラル(Ural)山脈等、また我が國にては臺灣基隆(キイルン)附近の河中に產すれども、極めて稀なり。
しるこ-もち 汁粉餅【名】餡を煮て、汁となし、それに餅を入れたる食品。しるこ。古今百馬鹿「汁粉餅を食ひに往かうと誘ふ」
しるし 印・標・徵【名】一見分くるための特異なる形象。めじるし。二證據となるもの。あかし。三紋所。徽號。徽章。又それを附けたる旗などの類。円田八島「しるしばかりを立てたるは、旗下の母衣大將熊谷殿の陣所なり」四物事の前兆。きざし。五そのやうす。けはひ。六ききめ。げん。七かひのあること。萬葉「み民われ生けるしるしありあめつちのさかゆる時にあへらく思へば」八くび。首級。
標の石【句】はかじるし。墓碑。續歌加留多「法名つけば死人なり、おもりの石はしるしの石」
標の帶【句】いはたおび(祝帶)に同じ。源氏「かのはぢたまふしるしの帶のひきゆはれたるほど」
標の烟【句】烽火の烟。のろし。狼烟。〔古語〕新紀撰「淡路島しるしのけぶりみせわびて霞をいとふ須磨の浦人」
標の棹【句】古、雪降る時、さしおきて、その積りゆく深さを測りし棹。〔古語〕山家「ねわたしにしるしのさをやたてつらんこひの持ちつる越(こし)の中山」
標の杉【句】『古今集の「わが庵は三輪の山本こひしくばとぶらひ來ませ杉立てる門(かど)」といふ歌より出でたる語』訪ひに行く家の門のしるし。〔古語〕狹衣「たづねみるしるしの杉もまがひつつなほかみ山に身やまどひなん」
標の鈴【句】鷹狩の時、鷹に結び附けて、標とせし鈴。
標の太刀【句】古、征討の折、天皇より大將軍に賜ふ太刀。標の劍。
標の劍【句】前條に同じ。
しるし 印・璽【名】一おして。印(いん)。二三種の神器の中の神璽。紀「跪上二天皇之璽一(みしるし)」
璽の箱【句】神璽を納むる箱。續古事談「しるしの箱のからげを解きて、明けんとしたまひければ」
しるし 記・誌【名】記すこと、また記したるもの。記錄。
しるし 著し【形一】明らかなり。きはだちてあり。あらはなり。いちぢるし。しるけし。萬葉「雲だにもしるくし立たばなぐさめに見つつしをらむただにあふまで」
しるし 泥し【形一】泥深し。ぬかりてあり。宗五大草紙「道のしるき時は、…沓をはくべし」
しるし 印【接尾】事物の名の頭の音に添へて、その事物を隱語的にいふに用ふる語。「まるじるし(金錢)」「きじるし(氣狂)」などの類。
しるし-がね 印金【名】昔、行はれし金と錢との空相場、又これを利用せし取引。
しるし-ちやう 首帳【名】くびちやう(首帳)に同じ。甲陽軍鑑「百七十二のしるし帳をもって、同じ子の時、勝時をとりおこなひたまふ」
しるし-づけ 印附【名】印を附くること。
印附の環(くわん)【句】帶胴金の所にありて、槍印を附くる環。植瑠島原蛙合戰「七郎は印つけの環をかけて握ったり」
しるし-ばかり 印許【副】いささか。すこし。わざとばかり。源氏「小島、しるしばかりひきつけさせたる萩の枝など、つとにして」
しるし-ばた 標旗【名】目じるしに立つる旗。
しるし-ばんてん 印半纏【名】紺木綿にて仕立て、襟には屋號又は會社名等を、背の中央には種種工夫を凝したる崩模樣を染拔きたる半纏。
しるし-ばり 印針【名】形、唐針に似て、それよりも品質良く、製作も丁寧なる縫針。專ら仕立屋にて用ふ。
しるし-ふだ 標榜【名】目じるしに用ふる「ふだ。」
しるし-もくろく 首目錄【名】くびちやう(首帳)に同じ。
しるし-もの 標物【名】證とすべき物。紀「表物、シルシモノ」
しるす 記す【名】一書きつく。記錄す。〔誌す・識す〕源氏「何事も、人にことなるけぢめをば、しるし傳ふべきなり」二心に覺えおく。記憶す。記す。
しるす 標す・徵す【動四他】一目じるしとす。名義抄「標、シルス」二前兆となる。兆候を示す。
しるす-つかさ 外記【名】げき(外記)に同じ。和名「大外記、於保伊之流須豆加佐」
しるたに-ごえ 滑谷越・澁谷越【名】〔地〕『山徑常に濕へるによりて、滑谷の名ありといふ』京都の五條橋より阿彌陀峯の北、淸水(きよみづ)の南なる山徑を經て、山科(やましな)に出づる通路。古稱、久久目路(くくめぢ)・苦集滅道(くずめぢ)。今は又訛りて、澁谷(しぶたに)越といふ。
しるたに-やき 滑谷燒【名】京燒の一種。滑谷にて燒きたるもの。世に稀にして、窯(かま)の所在も明かならず。
しる-へ 後方【名】しりへ(後方)に同じ。〔東國の古の方言〕萬葉「ゆこさきに浪なとゑらひしるへには子をら妻をら置きてらも來(き)ぬ」
しる-べ 導【名】『知方の義』一みちびき。指南。案內。源氏「うばそくがおこなふ道をしるべにて來(こ)ん世も深きちぎりたがふな」二行く道の案內、又その案內する人。みちしるべ。導者。嚮導。曾我五「この虎御前を組み、十郞樣へ申込み、御勘當の詫事のしるべのためとて逢初め」
しる-べ 知邊【名】知合の人。親しき人。
しるべ-がほ 導顔【名】案內せんとするがごとき樣子。十六夜「濱千鳥いと多く先立ちて行くも、しるべ顔なるここちして」
しるまし【名】怪しき前兆。〔古語〕紀「怪、シルマシ」
しる-もの 汁物【名】あつもの。つゆもの。汁の物。枕「もてくるや遲きと、しるものとりて、みな飯みて」
しるりんぐ 志(英 Shilling)【助數】『しりんぐの訛』英國の金額の單位。一磅(ポンド)の二十分の一。我が國の約四十八錢八厘に當る。
しるりや-き 志留利亞紀(英 Silurian period)【名】〔地〕『古、主として、英國の一部なる南ウエルス(Wales)に住せし民族シルレス(Silures)の名に基く名稱』地質時代の一。古生代中、寒武利亞(カンブリア)紀と泥盆(デボン)紀との中間に位す。次條參照。
しるりや-けい 志留利亞系(英 Siluriansystem)【名】〔地〕地質系統の一。シルリヤ紀に生成せる地層の總稱。粘板岩などこの紀に屬し、植物は海藻類のみにて、動物は軟體動物・珊瑚・筆具などあり。魚類もこの紀に始めて現れたるを認む。
しる-わん 汁椀【名】汁物などを盛るための椀。醒睡笑「ちご、しるわんに酒を受けられたり」
し-るゐ 士類【名】士人の一類。士人のなかま。
し-るゐ 支類【名】支族の一類。支黨。
し-るゐ 齒類【名】『齒は、よはひす(齒す)を見よ』なかま。同族。
しるゑっと(佛 Silhouette)【名】〔美〕『西暦一七五九年の佛國の大藏大臣シルエット(E. Silhouette)の名に基けるもの。當時同國の財政窮乏のため、氏は極端なる勤儉主義を鼓吹し、肖像畫の如きも、壁面に映じたる影を黑く染むるが最も經濟的なりと唱へ、一時流行せしによりていふ』一明るき地(ぢ)の上に、影法師のごとく黑く輪廓のみを現はしたる描畫、又は肖像畫。肖像畫にありては、その描法には側面

をあらはすが最も適當なるより、特にこれを用ふ。㊂光線を受けをる物體の投じたる陰の輪廓。

しれ 痴・癡【名】しれたること。馬鹿らしさ。落窪「その夜はしれも見えて、火のほのぐらきに」

しれい【名】〔植〕しびとばな(死人花)を云ふ。〔土佐國の方言〕

し-れい 指令【名】㊀さしづ。いひつけ。命令。㊁〔法〕上級官廳より下級官廳に發する訓令。

し-れい 司令【名】軍隊又は艦隊を指揮・統率すること。

し-れい 使令【名】指圖して使役すること。

し-れい 四靈【名】『禮記の禮運篇に「何謂二四靈一、麟・鳳・龜・龍、謂二之四靈一」とあるに本づく』麟・鳳・龜・龍の併稱。

し-れい 四禮【名】くわんこんさうさい(冠婚葬祭)に同じ。

し-れい 詩禮【名】詩と禮と。

詩禮の訓【句】『論語の季氏篇に「陳亢問二伯魚一曰、子亦有二異聞一乎對曰、未也、嘗獨立、鯉趨而過レ庭、曰學レ詩乎、對曰、未也、不レ學レ詩無二以言一、鯉退而學レ詩、他日又獨立、鯉趨而過レ庭、曰學レ禮乎、對曰未也、不レ學レ禮、無二以立一、鯉退而學レ禮、聞二斯二者一、陳亢退而喜曰、問レ一得レ三、聞レ詩聞レ禮、又聞三君子之遠二其子一也」とあり』子が父の教を受くるをいふ。

し-れい 齒齡【名】よはひ。とし。

し-れい 砥礪【名】『砥も礪も、物を研ぐに用ふるものにて、砥は礪よりも一層緻密なるもの』㊀といし(砥石)に同じ。㊁みがくこと。㊂學問・品性などを修養すること。

じ-れい 辭令【名】㊀ことばの言ひまはし。應對又は文章のあや。言葉づかひ。「辭令に嫺(ナ)はず」㊁じれいしよ(辭令書)の略。

じ-れい 時令【名】一年間の季節に應じて行ふべき政事・儀式などを、法令にて定めたるもの。年中の行事。月令。

じ-れい 事例【名】事の前例。

しれい-くわん 司令官【名】陸軍にては、平時は要塞・聯隊區・警備隊、戰時には一軍又は兵站部等、海軍にありては、要港部艦隊及び防備隊の司令に任ずる官職。

じれい-しよ 辭令書【名】官に任じ、職に補する時、また官吏の辭職を許す時などに交付する文書。辭令。

しれい-たふ 司令塔【名】『英 Conning tower』軍艦にて、戰時にその艦又は艦隊の司令者、及びその司令・運用・信號等の諸裝置を保護するため、厚き甲鐵を以て、周圍と頂とを鎧ひたる艦橋上の一室。大艦にありては、前後の兩艦橋に設け、前部を單に司令塔といひ、後者は、防禦やや薄弱にして、後部司令塔又は觀察塔と稱せらる。

しれい-ちやうくわん 司令長官【名】海軍にて、各鎭守府と各艦隊との指揮・統率を司る職。大將又は中將を以て親補せらる。艦隊にありては、その司令官の上に立ちて、更に廣き範圍の司令に任ず。

しれい-ぶ 司令部【名】陸軍にて、各種の司令官又は師團長・旅團長の、その事務を執りて、その所管を統帥する所。卽ち旅團司令部・師團司令部・軍司令部・要塞司令部・聯隊區司令部・兵站(ヘイタン)司令部等。

しれい-ふくくわん 司令副官【名】明治四年に、陸軍の各鎭臺に設置せし職員。

しれい-りう 司令旒【名】海軍旗章の一。驅逐司令又は水雷艇隊司令が指揮權を帶びて乘艇したる時、檣頭又は艇首の旗竿に揭ぐる燕尾開裂旗。紅地に白の日章と四筒の光線とを畫く。

し-れう 思料【名】考ふること。思ひはかること。思量。

し-れう 資料【名】主要なる材料。もと。もとで。原料。

し-れう 飼料【名】かひれう(飼料)に同じ。

し-れう 詩料【名】詩の材料。

し-れう 史料【名】歴史を編成する材料。

し-れう 使料【名】つかひれう。

し-れう 試料【名】試金用に供する鑛石。卽ち分析試驗を行ふ爲に使用する鑛石の一部分。

し-れう 紙料【名】紙の原料たる植物性纖維を煮沸して打碎き、搗きほぐし、直ちに紙を抄(ス)き得るまでになしたるもの。**ぱるぷ**參照。

しれう-へんさん-がかり 史料編纂掛【名】東京帝國大學文學部内に在りて、大日本史料・大日本古文書の編纂出版及び全國に在る史料の副本作製の事業をなす所。明治二十八年史誌編纂掛を復舊改名したるもの。史料編纂官・史料編纂官補・史料編纂書記を置く。

しれう-へんさん-くわん 史料編纂官【名】東京帝國大學文學部内・史料編纂掛の職員。大日本史料・大日本古文書等を編纂する高等官。

しれう-へんさんくわん-ほ 史料編纂官補【名】東京帝國大學文學部内、史料編纂掛の職員。史料編纂官の事務を補助する判任官。

しれう-へんしふ-こくしかうせい-きよく 史料編輯國史校正局【名】明治二年三月設け、史料の編纂及び六國史の校正を掌らしめし所。同年五月昌平校中に移し、翌月昌平校を大學と改稱するに及びて、その所管となる。同年十月國史編輯局と改稱し、漢文を以て國史を編輯する事となり、後廢止せられたり。

しれ-がまし 痴がまし【形二】痴れたる容子なり。おろかし。〔古語〕源氏「世の中のしれがましき名を取りしかど」

し-れき 私曆【名】中古、朝廷の頒曆の中絕せる時、民間にて編みし曆。伊豆の三島曆・武藏の大宮曆・奥州の南部曆などこれなり。

し-れき 司曆【名】れきはかせ(曆博士)等の唐名。

しれき-しやうほう 司曆正保【名】しれき(司曆)に同じ。

しれ-ごと 痴事【名】おろかなる事柄。ばかげたる出來事。著聞「かかるしれごとする者ども、かやうにためすぞ」

しれ-ごと 痴言【名】おろかしき言葉。たはごと。宇治「しれごといふかたゐかな」

じれ-こむ じれ込む【動四自】甚しくじれる。せぎこむ。

しれ-じれ 痴痴【貌】甚しく痴れたるさま。〔古語〕其「しれじれとうち笑みて、ともかくもいはで走りにけり」

しれ-じれし 痴痴し【形二】甚しく痴れたる容子なり。はなはだ愚からし。〔古語〕源氏「思ひもよらざりけることよと、しれじれしき心地す」

しれ-た 知れた【句】しる(知る)の條下を見よ。

じれ-だす じれ出す【動四自】じれて怒りだす。浮世風呂「じれ出しなさるだらうかと思って」

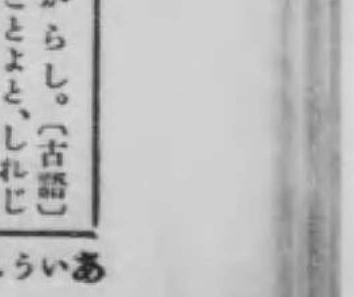
し-れつ 齒列【名】㊀齒のならび。齒なみ。㊁齒の並ぶ如くならぶこと。

じ-れつ 耳裂【名】〔植〕せんれつ(淺裂)に同じ。

じれっ-たがる【動四自】じれったく思ふ。

じれっ-たし【形一】『たしは接尾語』わが思ふままにならずして、腹だたし。

じれった-むすび じれった結【名】女の髮の結び方の一。町方の女の、髮を洗ひたる時などに、結ひしもの。


(じれったむすび)

しれとこ-ざき 知床岬【名】〔地〕㊀北海道北見の國の東北に突出せる半島の尖端の岬。㊁樺太の南端、太平洋に突出せる岬。亞庭灣を形成す。

しれとこ-はんたう 知床半島【名】〔地〕北海道北見國の東北に突出せる半島。長さ十五里餘。

しれ-ばむ 痴ばむ【動四自】愚からしく見ゆ。〔古語〕榮花「美しき御心ならで、うたて、ひがひがしくしればみて」

しれ-びと 痴人【名】愚かなる人。ばかもの。あはう。しれもの。

し-れん 思戀【名】戀しく思ふこと。

し-れん 試錬【名】試驗的に鍊ること。

しれん 師錬【名】〔人〕こくわんしれん(虎關師錬)に同じ。

しれ-もの 痴者【名】㊀しれびと(痴人)に同じ。源氏「中將なにがしは、しれもののものがたりせんとて」㊁油斷のならぬ者。平治「しれものかなとて、馬の口に取附くところを、同じ樣に斬りたまへば」

しれもの-ぐるひ 痴者狂【名】ばかものにて、氣ちがひじみたること、又その人。宇

治「えもいはぬしれものぐるひとは知れたりつれど」

しれ-ゆく 痴行く【動四自】次第に愚かになりて行く。〔古語〕源氏「子のおとなぶるに、親のたちかはりしれゆく事は」

じれる【動下一自】わが心のままにならぬを悶(モ)へ怒る。悶へ腹だつ。焦燥す。

しれ-わらひ 痴笑【名】痴れたる樣をなして笑ふこと。しらわらひ。〔古語〕義經記「あの法師、われらを打たんとて、こなたをまもらへ、しれわらひしてあるは、ただごとならず」

しろ 白【名】㊀白き色。雪の如き色。㊁碁石の色白き方。㊂しろがね(銀)の略。增鏡「しろの御太刀」㊃〔植〕しらびそ(白檜曾)の異稱。

しろ 代【名】㊀物事の材料となる物。紀「爲二禮幣(ヰヤシロ)一」㊁かはり。代理。拾遺「鶯の鳴かんしろにはわれぞ泣く花のにほひやしばしとまると」㊂品物の代りとして渡す金錢。あたひ。代價。代金。㊃田。田地。〔古語〕紀「田地、シロ」

しろ 城【名】敵の來襲に備へんが爲に設備せる建造物。近代のものは、主將の居所を本丸又は本城といひ、これに附隨せる建物を、近きを二の丸、それに次ぐを三の丸といひ、その間を垣・堀等を以て隔てて、防禦に易からしめ、更に全郭の周圍には、高き垣・深き濠(ホリ)を繞ふるを常とす。增鏡「正成は、金剛山千早といふところに、いかめしき城をこしらへて」

(しろ)

詰の城【句】ほんまる(本丸)に同じ。謠輪鑑「眞先に詰の城に攻入って」

しろ 質【名】ゐくわう。氣質。〔古語〕宇治「大太郎がとられて、武者のしろのおそろしき由を語りけるなり」

し-ろ 支路【名】本道よりわかれたる路。えだみち。岐路。

し-ろ 仕路【名】官職にありつく手順。

し-ろ 子路【名】〔人〕孔門の十哲の一。名は仲由。字は小路、一に季路ともいふ。剛勇にして信直なり。敬王の四十年その難に死す。

しろ 代【助數】田租の稻の束積、又は田地の單位。一代は卽ち一束にて、大寶令の制にては、一段卽ち三百六十步(令以前は一段を二百五十步としたり)につき、五十代の稻を穫るものと算定せり。〔古語〕萬葉「しかとあらず五百しろ小田を刈りみだりたぶせにをれば都し思ほゆ」紀「四萬餘頃(ヨロヅアマリシロ)之田」

しろ 白【接頭】㊀白き意。しら。「白砂糖」㊁飾なき意。しら。㊂銀にて造れる意。しら。「白覆輪の鞍」

しろ 代【接尾】その料となすもの、又そのために特に設け置く場所。「のりしろ」「鑄掛代」

じ-ろ 磁路【名】〔理〕『英 Magnetic circuit』磁力線の一束の通ずる全路。これをなす物質は通常鐵なれども、その一部分に空氣の間隙あることあり。磁氣の迴路。磁氣輪道。**でんろ**(電路)參照。

しろ-あうむ 白鸚鵡【名】〔動〕鸚鵡の一種。最も普通なるもの。全身白色にして、脚は灰黑色を呈す。嘴は閎大にして、上嘴は先端鉤曲し、頂上に毛冠ありて聳ゆ。よく人語を眞似るにより、籠鳥として愛玩せらる。

しろ-あかざ 白藜【名】〔植〕あかざ(藜)に同じ。

しろ-あしげ 白葦毛・白蘆毛【名】馬の毛色の一。葦毛の白みがちなるもの。

しろ-あぢさし 白鰺刺【名】〔動〕游禽(イウキン)類に屬する鳥。翼の長さ七寸ばかり。全體光澤を帶びたる白色にして、ただ眼の周圍黑く、嘴は灰色、脚は暗黑色にして、切込(キレコミ)深き黃色の蹼(ミヅカキ)を有す。

しろ-あづき 白小豆【名】〔植〕赤小豆の一種。實の色白きもの。菓子の白餡また洗粉とする故に、しやぼん豆ともいふ。

しろ-あと 城跡・城址【名】かつて、城の在りし處。

しろ-あぶみ 白鐙【名】鞍具(クラグ)より鳩胸までを銀にて薄く張りたる鐙。

しろ-あぶら 白油【名】白胡麻より取りたる油。

しろ-あん 白餡【名】菓子の餡の色白きもの。白小豆(シロアヅキ)・隱元豆などにて製す。

しろあん-じるこ 白餡汁粉【名】白餡にてつくりたる汁粉。

しろ-あんず 白杏【名】〔植〕杏の一種。花は白色にして、果實も成熟すれば、白色となるもの。

しろ-あり 白蟻【名】〔動〕白蟻科に屬する害蟲。その形體・生活狀態全く普通の蟻と酷似すれども、全く別科目に屬し、むしろ蜻蛉(カゲロフ)の如く翅あり。常に群棲し、木材の中に蝕入して、枯死せしむ。その他建築物を害する事大なり。我が國にても各地に產すれども、臺灣地方に多し。

しろ-あわ 白泡・白沫【名】㊀白き水の泡。㊁口中より出す白きあわ。

白泡嚙ます【句】馬の勇み立ちて白泡を吹く貌。太平記「手綱かいくり、馬に白沫かませ控へたり」

しろ-あゐ 白藍【名】㊀うすき藍色。みづいろ。㊁藍靛を還元して得る白色の結晶質。アルカリ液に溶解し、藍染に用ふ。

しろ-あを 白靑【名】㊀前條㊀に同じ。㊁襲(カサネ)の色目の一。表・裏共に薄花田なるもの。

しろ-あを 白襖【名】表裏ともに白き狩衣(カリギヌ)。著聞「なえらかなる白襖著て」

しろ-いし 白石【名】㊀白き色の石。㊁碁石の白き方。(黑石に對して)

しろいし 白石【名】〔地〕磐城國刈田郡に在る町。伊達氏の重臣片倉氏の舊城地。陸羽街道の要衝にして、鐵道東北本線の一驛。

しろいし-じやう 石白城【名】陸前國苅田郡白石町の西方に在りし城。白石氏の創築。のち蒲生氏・上杉氏に屬し、慶長七年片倉景綱入城し、子孫相繼ぎて維新に及べり。

しろいし-やき 白石燒【名】肥後國白石の地にて製する陶器。安政年間に初まりて今に及ぶ。圖樣の美を以て多く輸出せらる。

しろ-いただき 白頂【名】しろたてがみ(白鬣)に同じ。

しろ-いちじゆく 白無花【名】〔植〕無花果の一品種。樹枝短少、葉も小さく、實は熟して白くなり、食ふべし。

しろ-いと 白絲【名】白き絲。染めぬ絲。

しろいと-あかいと 白絲赤絲【名】次條に同じ。

しろいと-かたあか 白絲肩赤【名】しろいとわたあか(白絲肩赤)に同じ。

しろいと-さう 白絲草【名】〔植〕しらいとさう(白絲草)に同じ。

しろいと-つまとり 白絲褄取【名】鎧の白絲縅にて褄取りたるもの。

しろいと-わたあか 白絲肩赤【名】わたしろをどし(肩白縅)に同じ。

しろいと-をどし 白絲縅【名】鎧の縅の一。白き絲にてをどせるもの。

しろ-いぬ 白犬【名】白き毛色の犬。

白犬に嚙まれて、灰汁(アク)の垂滓(タレカス)に怖ぢる【句】「黑犬に咬まれて灰汁の垂滓に怖ぢる」に同じ。

しろ-いも 白芋【名】〔植〕薩摩芋の一品種。皮の色白く、又は微紅色にて、生(ナマ)の時は肉白く、煮れば黃色となる。

しろ-いもじ 白湯文字【名】しろゆもじ(白湯文字)に同じ。

しろい-もの 白物【名】『しろきもの(白物)の音便』おしろい(白粉)に同じ。〔古語〕榮花「額には、べに・しろいもの附けたらんやうなり」

しろいもの-うり 白粉賣【名】おしろいを賣りあるく商人。七十一番職人歌合「しろいものうり。懸すとや人の見るらんおしろいのき

はづくまでに流す涙を」
じ-ろう 耳漏【名】みみだれ(耳垂)に同じ。
しろ-うさぎ 白兎【名】〔動〕ゑちごうさぎ(越後兎)に同じ。
しろ-うすやう 白薄樣【名】㊀白き薄樣の紙。㊁『仙女の衣の透りて美しき樣は、薄樣の紙に似たるよりいふ』古、五節(ゴセチ)の舞の時、舞手をはやしたる語。右京大夫集「霜にさゆるしろうすやうの聲聞けばありし雲井ぞまづおぼえける」
しろ-うち 城内【名】城のうち。城中。城内(ジヤウナイ)。
しろ-うちで 白打出【名】『白とは、古きは白からざるよりいひ、打出は造り出すをいふ』新に作りたること。盛衰記「白打出の笠を著て、眉目(ミメ)もかたちも優なりけり」
しろ-うつぎ 白溲疏【名】〔植〕こごめうつぎ(小米溲疏)㊁に同じ。
しろ-うと 素人【名】㊀その物事に經驗なき人、又は未熟なる人。しろと。㊁その物事を職業とせざる人。しろと。(黑人(クロウト)に對して) ㊂藝妓・娼妓・賣春婦等に對して、普通の女。しろと。(商賣人に對して)
しろうと-ぎだいふ 素人義太夫【名】その專門家にあらざる人の語る義太夫。
しろうと-きやうげん 素人狂言【名】役者にあらざる素人の催し行ふ狂言。
しろうと-げい 素人藝【名】㊀本職にあらざる素人の藝。㊁未熟なる藝。つたなき藝。
しろうと-げしゆく 素人下宿【名】普通の家にて、食料・室料等を得て、他人を止宿せしむること、又その家。
しろうと-しばゐ 素人芝居【名】俳優にあらざるもののなす芝居。續膝栗毛「この宿(シユク)に素人芝居があると見えて」
しろうと-ばなれ 素人離【名】素人にてありながら、その伎倆は專門家に劣らぬほどに巧なること。「素人離のした藝」
しろうと-ひやう 素人評【名】げばひやう(下馬評)㊁に同じ。
しろうと-め 素人目【名】局外のものの見るところ。專門家にあらざるものの見地。若風俗「色色の模樣好み、素人目にはあだに見るらん」
しろうと-や 素人屋【名】堅氣(カタギ)の人の家。(商賣屋に對して)
しろうと-やど 素人宿【名】口入宿にあらずして、奉公人の周旋をなす家。〔江戸時代の語〕
しろうと-ゑ 素人繪【名】畫家ならぬ人の描きたる繪。一代女「幟は、紙をつぎて、素人繪を頼み」
しろうと-をんな 素人女【名】藝妓・娼妓にあらざる女。良家の女。しろとをんな。
しろ-うのはな 白卯花【名】〔植〕うつぎ(溲疏)に同じ。
しろ-うま 白馬【名】㊀白毛色の馬。白馬(ハク)。㊁にごりざけ(濁酒)に同じ。升鯉瀧白藏「白馬と聞いちやあ氣がわるいの、節分の御祝儀に、三合ばかりおくれな」
しろ-うんも 白雲母【名】〔鑛〕雲母の一種。硅酸鑛物にて、その用途最も廣し。煖爐の窓障子、瓦斯ランプの火屋、電氣絕緣體或はダイナマイト製造の際、粉末としてグリスリンを吸收せしむる用に供せらる。本邦にては、主に近江・甲斐・美濃・常陸・三河等に產し、外國にては、英・佛・米及び露に多く產す。(黑雲母に對して)
しろ-うり 白瓜・越瓜【名】甜瓜(マクハウリ)の變種。葉及び花は甜瓜に酷似す。果實は帶綠白色なる長楕圓形の漿果にして、疣(イボ)なく、甜瓜に比して、甘味少なし。秋の初に熟す。糟漬・鹽漬などとし、又、生にても食ふ。あさうり。あほしまうり。うり。〔越瓜・菜瓜〕 一代女「はあ、淺瓜(シロウリ)・淺瓜、見るも今年の初物」
しろうるり【名】徒然草の中に見え、世に無き物の名をことさらに口に任せて言出せる語。(或はいふ。白ら瑠璃にて、瑠璃玉に白きはなければ、かくいへるならんと) 徒然「この僧都、ある法師を見て、しろうるりといふ名を附けたり。しろうるりとは何物ぞと、人の問ひければ、さるものを我れも知らず、若しあらましかば、この僧の顏に似てん、とぞいひける」
しろ-うを 白魚【名】〔動〕しらうを(白魚)を云ふ。〔筑後國の方言〕
しろ-えび 白蝦【名】〔動〕しばえび(芝蝦)に同じ。
しろ-えんせう 白煙硝【名】せうせき(硝石)の俗稱。
しろ-えり 白襟【名】㊀白き色の襟。㊁襦袢・下著などの襟の白き服裝。白襟紋附(モンツキ)【句】前條㊁を著、なほ紋所の衣服を著ること。近代の婦人の正服とせらる。
しろ-おとり 白御鳥【名】きじ(雉)の異稱。〔女の語〕
しろ-かうぢ 白麹【名】米にて製したる白き色のかうぢ。
しろ-かき 代搔【名】〔農〕田植のための整地。耕起したる田に水を灌ぎ入れて、土壤を碎き、その地面をならすこと。
しろ-がき 白柹【名】ころがき(白柹)に同じ。
しろかき-うま 代搔馬【名】機械を附けて、代搔をなすに使役する馬。
しろかき-むし 代搔蟲【名】〔動〕まひまひむし(蝸牛)を云ふ。〔四國の方言〕
しろ-かげ 白鹿毛【名】しらかげ(白鹿毛)に同じ。
しろ-がし 白樫【名】〔植〕しらがし(白樫)に同じ。
しろ-がすり 白飛白・白絣【名】白地に紺又は黑の飛白をあらはしたる布。
しろ-がたな 白刀【名】金具を銀にて飾れる刀。鳴響合戰「白刀に白骨の扇さし添へて」
しろ-かつら 白桂【名】〔植〕かつら(桂)㊀に同じ。
しろ-かづら 白葛【名】〔植〕しらくちづる(獼猴桃)に同じ。
しろ-がね 銀【名】㊀〔鑛〕『白金の義。但し今は白金の文字、はくきんと音讀して、プラチナの譯名に用ふ』ぎん(銀)に同じ。和名「爾雅云、白金、謂二之銀一其美者謂二之鐐一之路加禰」 ㊁銀にて造りたる貨幣。冥途飛脚「一分小判や、しろかねに、翼のあるが如くなり」 ㊂しろがねいろ(銀色)の略。㊃ぎんでい(銀泥)に同じ。
しろかね-いろ 銀色【名】銀の如く光る色。「ぎんいろ。
しろがね-ぐつわ 銀轡【名】鐵にて造り、銀にて包める轡。
しろがね-ざいく 白銀細工【名】銀にて細工をなすこと、又その人。一代女「草臥る客の棒組、客は白銀細工の氣晴し、屋根葺の雨日和に申合はせて」
しろがね-さう 銀草【名】〔植〕毛茛(キンポウゲ)科に屬する多年生の草。山地に自生す。高さ數寸。根葉は長き葉柄を有し、花莖は葉間よりぬきんで、春夏の交、白色の花を開く。
しろがね-し 銀師【名】銀の細工をなすもの。
しろがね-づくり 銀作・銀造【名】銀にて製し、又は裝飾したるもの。ぎんづくり。ぎんごしらへ。
しろがね-の-たち 銀作の太刀【句】銀にて裝飾したる太刀。白太刀。銀劒。
しろ-かのこゆり 白鹿子百合【名】〔植〕しらたまゆり(白玉百合)に同じ。
しろ-かは 白革【名】白きもみ革。
しろかは-や 白皮屋【名】生皮を韋(ヲシカハ)に精製する職人。
しろ-かはらけ 白土器【名】白く燒きたるかはらけ。
しろ-かはらげ 白河原毛・白瓦毛【名】馬の毛色の一。白ばみたる河原毛なるもの。
しろ-がふ 代替ふ【動下二他】賣りて、金にす。賣上げたる錢にて買ふ。しろなす。風俗文選「柿の木、四十本あり。五とせ、六とせ經ぬれど、このみも持來らず、代替ふるわざも聞かねば」 同「出口の市に、米としろがへて、小袋の音を括る」
しろかべ-やき 白壁燒【名】肥前國三養基(ミヤキ)郡白壁村より產する陶器。寛政二年柳谷判平なる者、天草石を移入して開業すといふ。文政の頃、武富某大いに改良を加へ、明治初年に輸出品錦繪付を製せり。
しろ-がまへ 城搆【名】城をかまふること。城郭を築くこと。盛衰記「矢作(ヤハギ)河の東の岸に城構して、陣を取る」
しろ-かみ 白髮【名】しらが(白髮)㊀に同じ。〔古語〕 萬葉「黑髮にしろかみまじり生ふるまでかかる戀にはまたあはなくに」
しろ-かみこ 白紙衣【名】かみこ(紙子)を見よ。

しろ-かんざくら 白寒櫻【名】〔植〕寒櫻の一種。花の淡紅色又は殆ど白色なるもの。(緋寒櫻に對して)
しろ-かもめ 白鷗【名】〔動〕游禽(イウキン)類に屬する鳥。我が國中部以北の沿岸に產す。全身純白色。嘴は黃色、脚は淡赤色を呈す。
しろ-がよひ 城通【名】おしろかよひぶね(御城通船)の略。
しろ-からし 白芥子【名】〔植〕十字科に屬する一年生又は二年生の草本。粉末となし、香辛料に用ひ、又は藥用に供す。えどからし。きくばがらし。
しろ-からす 白烏【名】色の白き烏。ありえべからざることの譬。「烏の頭白く、馬角を生ず」參照。狂言(音曲聟)「天狗の蔭干、海の底の白烏」
しろ-き 白酒【名】大嘗會などに用ふる、一種白色の酒。(黑酒(クロキ)に對して)〔古語〕 萬葉「あめつちと等しきまでに萬代に仕へまつらむくろきしろきを」
しろ-ぎく 白菊【名】しらぎく(白菊)に同じ。探花「こがね・しろがね・きぎく・しろぎくにて二つなり」
しろき-くこん 白九獻【名】ねりざけ(煉酒)を云ふ。〔女の語〕
しろ-きす 白鱚【名】〔動〕鱚の一種。色白くして、形やや圓く、且つ肥え、長さ六七寸に及ぶ。味淡泊にして、美味なり。うみぎす。まぎす。
しろ-ぎつね 白狐【名】〔動〕我が國千島以北に棲息する狐。形狐に似て、夏期は灰色又は褐色を呈し、冬期に至りて、純白となる。北極狐。
しろ-ぎっぷ 白切符【名】汽車の一等の乘車券。
しろ-ぎぬ 白衣【名】㊀白き色の衣。びやくえ。㊁『こくえ(黑衣)を見よ』僧ならぬ人。〔古語〕 紀「緇素、シロキヌ」
しろ-きび 白黍・芑【名】〔植〕黍の一品種。その實、白色を呈す。
しろき-もの 白粉【名】おしろい(白粉)に同じ。〔古語〕 増鏡「しろきものつくる事やあるなど、ふるき人うちささめき」
し-ろく 四六【名】㊀四つと六つと。㊁四つと六つとの乘積、即ち二十四。㊂しろくばん(四六判)の略。㊃しろくぶん(四六文)の略。㊄しろくみせ(四六店)の略。柳樽「四六から鞍替二十四文なり」 四六の裏目(ウラメ)【句】『賽の四と六との裏面は三と一とにて、三一は「さんぴん」と讀むよりいふ。さんぴん(三一)㊁參照』貧乏侍の異稱。
し-ろく 四祿【名】九星の一。木星に配し、本位は巽(タツミ)、即ち東南。
し-ろく 史錄【名】歷史に關する記錄。史記。
し-ろく 尸祿【名】しゐ(尸位)に同じ。正秩記「君のみだりに授くるを謬擧とし、臣のみだりに受くるを尸祿とす」
しろ-ぐくり 白括【名】白く括りたる絞染。
し-ろく-さん 四六三【名】的の一種。その製詳かならず。伊勢貞丈が說に「四寸・六寸・三寸の三の的を三所に立てて射るをいふなるべきか」とあり。
しろくじ-ちゆう 四六時中【名】一晝夜二十四時間。にろくじちゆう(二六時中)參照。
しろくじ-ちゆう 四六時中【副】いつも。常に。始終。
しろ-ぐす【名】〔植〕つたうるし(蔦漆)に同じ。
しろ-くち 白口【名】しらくち(白口)に同じ。
しろ-ぐち 白ぐち【名】〔動〕しらぐち(白ぐち)に同じ。
しろく-ちやう 四六挺【名】にじふしちやうだて(二十四挺立)に同じ。
しろ-くぢら 白鯨【名】小鯨より取りたる鯨鬚。色白くして美しく、汗衫(カザミ)などに編む。
しろ-ぐづな 白ぐづな【名】〔動〕甘鯛の變種。東海及び西海の近海にて、波靜なる海底に棲息す。主に秋末より冬期に亙り、釣獲され、味美なり。
しろ-ぐつわ 白轡【名】白くみがきたる轡。平家「白ぐつわはげ、白泡嚙ませて」
しろく-でめ 四六出目【名】江戶時代に、年貢米四斗(即ち一俵)ごとに、更に六升の出目米を納めしこと。幕府の直轄地、特に上野國郡馬郡の各村に行はれたり。
しろく-にばいばん 四六二倍判【名】次條に同じ。
しろく-ばいばん 四六倍判【名】書物の大きさの、四六版の倍大のもの、即ち縱約一尺二寸・橫約八寸のもの。四六二倍判。
しろく-ばん 四六判・四六版【名】洋裝の書物の大きさの名。縱約六寸・橫約四寸のもの。又それを得べき大判の西洋紙、即ち縱三尺六寸・橫二尺六寸のもの、之れを三十二分して、四六版の大さを得。
しろく-はんさい 四六半截【名】『截の字の音、正しくはせつ』洋裝書物の大きさの名。四六版の半分の大きさのもの。
しろ-くび 白首【名】白粉をよそほひ、客に媚を呈する茶屋女、又は淫賣婦。
しろく-ぶん 四六文【名】〔文〕漢文の一體。主として、四字・六字の句を用ひて、對句を排列し、聲律を重んじたる綺麗なる文。六朝時代に盛んに行はれ、後世の謂はゆる時文もこれに依れり。四六駢儷(ベンレイ)體。駢儷文。四六。
しろく-べんれい-たい 四六駢儷體【名】〔文〕『駢は陣列、儷も偶(ナラ)ぶ義』前條に同じ。
しろ-ぐま 白熊【名】〔動〕熊の一種。大きさ八九尺に達し、毛は純白色にして、性勇猛、海獸・鳥魚の類を捕へ食ふ。牝(メス)は冬眠すれども、牡(ヲス)は然らず。寒帶地方の海岸に棲息す。北極熊。
しろく-みせ 四六店・四六見世【名】寛永・天明の頃、深川の佃(ツクダ)町・松代町邊にありし娼家。夜は四百文、晝は六百文にて遊ばしめたりといふ。あひるみせ。四六。しわうせ豐「おきやあがれ、ついぞ四六みせへも行った事がなくって、居續(ヰツヅケ)に日をくらすも、すさまじい」
しろく-めん-たい 四六面體【名】〔鑛〕等軸晶系の完面體。六面體の各面に、四箇の三角形の面を置きたる形體。
しろ-くら 代鞍【名】くさくら(草鞍)に同じ。
しろ-ぐら 白鞍【名】㊀白覆輪の鞍。銀の鏡鞍。平治「飛鹿毛といふ馬に、白鞍置いて」 ㊁しらほねぐら(白骨鞍)に同じ。
しろ-くりげ 白栗毛・黃騮【名】しらくりげ(白栗毛)に同じ。
しろ-ぐるま 代車【名】代搔に用ふる器。多數の車輪より成り、牛馬をして、田の中を引廻らしむ。
しろ-くれなゐ 白紅【名】半ば白く、半ば赤く、染分けたる水引。古は奧女中の用ひしもの。今は普通に用ふ。みづひき(水引)參照。
しろ-くろ 白黑【名】㊀白と黑と。白色と黑色。こくびやく。㊁是と非と。善と惡と。こくびやく。
白黑になる【句】物ごとの混亂するさまにいふ語。
しろ-ぐわゐ 白慈姑【名】〔植〕くわゐ(慈姑)㊀に同じ。(黑慈姑に對して)
しろ-げ 白毛【名】白き色の毛。
しろ-こ 白子【名】しらこ(白子)に同じ。
しろこ 白子【名】〔地〕伊勢國河藝(カハゲ)郡に在る町、船乘業者多く、當國物產の重要積出地なり。
しろ-ごし 白輿【名】しらきごし(白木輿)に同じ。
しろ-こ 汁粉【名】しるこ(汁粉)の轉訛。
しろ-こそで 白小袖【名】白き小袖。白無地の小袖。(色小袖に對して)
しろ-ごばう 白牛蒡【名】〔植〕もりぐちだいこん(守口大根)に同じ。
しろこ-ばば 白粉婆【名】〔動〕雨降らんとする時、出でて飛びまはる蟲。おしろいをつけたるが如しといふ。
しろ-ごま 白胡麻【名】㊀〔植〕胡麻の一種。實の白きもの。(黑胡麻に對して) ㊁ごま(胡麻)㊃を見よ。
しろ-ごめ 白米【名】白き米。しらよね。はくまい。
しろ-さ 白藜【名】〔植〕あをあかざ(青藜)に同じ。
しろ-さくら 代作鞍【名】くさくら(草鞍)に同じ。
しろ-ざくら 白櫻【名】㊀みやまざくら(深山櫻)に同じ。㊁〔植〕いぬざくら(犬櫻)に同

じ。㊂襲(ｶｻﾈ)の色目の一。表も裏も白きもの。また裏は紫ともいふ。春用ふ。

しろ-さくらがはさう 白櫻川草【名】〔植〕かのこさう(鹿子草)に同じ。

しろ-さけ 白酒【名】餅米を蒸して、味醂を加へ、碾(ﾋｷｳｽ)にて磨りつぶしたる飲料物。色白くして、甚だ濃く、多くは上巳(ｼﾞｮｳｼ)の雛遊に用ふ。山川・初霜等の銘あるもの、古來著名なり。

しろざけ-うり 白酒賣【名】白酒を商ふ人。 親鐵簑(文考)「朧夜を白酒賣の名殘かな」

しろ-さたう 白砂糖【名】純白に精製したる砂糖。三盆。(黑砂糖に對して)

しろ-さつき 白杜鵑花【名】〔植〕躑躅の一種。形杜鵑花に似て大きく、花の色は、白色又は淡紫を呈し、粘液を分泌す。

しろ-さつま 白薩摩【名】さつまがすり(薩摩飛白)を見よ。

しろ-さんご 白珊瑚【名】〔動〕うみやなぎ(海柳)㊁に同じ。

しろ-さんとめ 白棧留【名】純白色なる棧留革。

しろ-ざめ 白鮫・鰈鯊【名】〔動〕軟骨類に屬する魚。各地の沿海に產す。體長五六尺。全身淡灰色にして、吻頭尖りて伸長し、肉は食ふべし。しろぶか。まなぐ。むぎがらざめ。ほしざめ。まなぞを。

しろ-さやまき 白鞘卷【名】鞘・欛(ﾂｶ)などに銀の金具を施したる鞘卷。 平家「白鞘卷をさいて舞ひければ」

じろざゑもん-びな 次郎左衞門雛【名】雛人形の一。江戸時代の京都の人、雛屋次郎左衞門の造りたるもの。

しろ-し 白し【形一】雪の色の如し。白色なり。

しろ-し 著し【形二】しるし(著し)に同じ。〔古語〕 室町千疊敷「誰が目にしろきねりの下著」

しろ-じそ 白紫蘇【名】〔植〕えごま(荏胡麻)に同じ。

しろ-した 白下【名】『白砂糖の下地の義』甘蔗を搾りて滴らせたるもの。白砂糖の原料に用ふ。

しろ-しっくい 白漆喰【名】白色の漆喰、即ち二盤目にて篩ひし石灰・蠣灰・生布海苔及び上滷苆(ﾊｽﾞ)を混じ、これに鈴具を交へざるもの。上塗に用ふ。

しろ-して 白四出【名】〔植〕いぬしで(犬四出)に同じ。

しろ-じない 白じない【名】〔動〕しろはら(白腹)に同じ。

しろ-しぼり 白搾【名】しらしぼり(白搾)に同じ。

しろし-めす 知食す【動四他】『めすは接尾語』㊀知りたまふ。しろす。 源氏「ここにも、若ししろしめす事や侍りつらん」 ㊁占めたまふ。治めたまふ。しらす。しろす。 祝詞「よもつ國を、やすくにと、たひらけくしろしめすゆゑ」

しろじやう-え 白淨衣【名】純白なる淨衣。 盛衰記「白淨衣に立烏帽子著たる老翁」

しろ-しやうぞく 白裝束【名】白地の裝束。古は產室にて著用し、後世は多く凶時に用ふ。 榮花「しろしやうぞくども、さまざまなるは、ただすみゐの心地して」

しろ-しやくなげ 白石南【名】〔植〕はくさんしやくなげ(白山石南)に同じ。

しろ-しよゐん 白書院【名】〔建〕『書院造にて總て檜柾目材を用ひて造り、天井の棧・障子の緣に至るまで、一切塗物を用ひざるよりいふ』江戸幕府及び諸侯の城中の間席。江戸城のは本丸の表の西側にありて、中庭を隔てて黑書院に接し、上殿の間は連歌の間、下段の間の東は帝鑑の間とす。將軍宣下の大禮、その他表立ちたる幕府の儀式は、總て此所に於てせり。くろしよゐん(黑書院)參照。

しろ-じるし 白標【名】白色の目じるし。

しろ-じろ 白白【貌】いかにも白きさま。

じろ-じろ【貌】注目して見まはすさま。注意して繁く見るさま。じろりじろり。

しろ-す 白酢【名】うめず(梅酢)を見よ。

しろ-す 白醋【名】水氣を去りたる豆腐と、炒(ｲ)りたる白胡麻とを擂(ｽ)り混ぜ、醋にて延ばしたるもの。

しろ-す 知す【動四他】㊀しる(知る)㊁の敬語。しろしめす。〔古語〕 ㊁しる(知る)㊂の敬語。しろしめす。〔古語〕

しろ-ずみ 白墨【名】しらずみ(白墨)に同じ。

しろ-ずみ 白炭【名】えだずみ(枝炭)を見よ。 新可笑記「この人等は、池田山奥にて、白炭燒きてわづかの煙立てしが」

白炭の忠知(ﾀﾀﾞﾄﾓ)【句】〔人〕『「白炭や燒かぬ昔の雪の枝」といふ句によりていふ』神野忠知の異稱。

しろ-すもも 白李【名】〔植〕李の一種。果實成熟して、淡紅色に黃色を帶び、味美なるもの。

しろ-すゐくわ 白西瓜【名】〔植〕西瓜の一種。果實球形にして、大きさ中等、表皮白く、肉紅に、種子も赤色なるもの。

しろ-せきれい 白鶺鴒【名】〔動〕鶺鴒の一種。全身白し。北海道以北に繁殖し、秋に至りて、南方に移る。

しろ-ぜめ 城攻【名】城を攻むること。

しろ-ぜり 白芹【名】〔植〕芹の一種。莖の色白く、莖も葉も赤芹よりやや小さく、味劣る。はたぜり。をかぜり。(赤芹に對して)

しろ-ぞこひ 白內障【名】〔醫〕はくないしやう(白內障)に同じ

しろ-そね 白そね【名】〔植〕いぬしで(犬四出)に同じ。

しろ-たうがき 白唐柿【名】〔植〕いちじゆく(無花果)に同じ。

しろ-たか 白鷹【名】〔動〕しらたか(白鷹)に同じ。

しろ-たち 白太刀【名】「銀作(ｼﾛｶﾞﾈﾂｸﾘ)の太刀」に同じ。 太平記「白太刀一振(ﾋﾄﾌﾘ)聖(ﾋｼﾞﾘ)に與へて」

しろ-たてがみ 白鬣・銀鬣白玉頂・小台星【名】馬の鬣の色白きもの。しろいただき。

しろ-たなごひ 白手拭【名】白布の手拭。 盛衰記「赤さいて白たなごひに取替へて頭にしまく小入道かな」

しろ-たへ 白妙・白栲【名】㊀『白色なるよりいふ』たへ(栲)參照』穀(ｶｼﾞ)の木の皮の纖維にて織りたる布。[白栲] 萬葉「しろたへのあさごろも著てはたやすのみかどのはらに」 ㊁白き色。 萬葉「梅が枝に鳴きてうつろふ鶯の羽しろたへにあわ雪ぞふる」

しろたへ-ごろも 白妙衣・白栲衣【名】白きたへにて作りたる衣。白き衣服。 琴花「ひなづるのしろたへごろもけふよりは千とせのあきにたちやかさねん」

しろたへ-の 白妙の・白栲の【枕】㊀しろたへは白き布にて、普通の衣類の材料とせられしより、衣・袖・袂・紐・帶襷(ﾀｽｷ)・領巾(ﾋﾚ)などにかけていふ。 萬葉「春すぎて夏來たるらししろたへのころもほしたり天のかぐ山」 同「しろたへのたすきをかけまそかがみ手にとりもちて」 同「いざ子どもかしひのかたにしろたへのそでさへ濡れて朝菜摘みてむ」 同「白妙の袂をわかれにきびにし家ゆも出でて」 同「を垣つの廊をひきほし妹なれがつくりきせけむ白細(ｼﾛﾀﾍ)のひもをも解かず」 同「さねそめていくたもあらねば白栲の帶こふべしや戀も盡きねば」 同「かぎろひの燃ゆる荒野に白妙のあまひれがくり」 ㊁しろたへは衣類に緣あり、また古の衣に藤衣(ﾌｼﾞｺﾞﾛﾓ)また略して、單に藤といふものあるより、ふぢ(藤)にかけていふ。あらたへの(荒妙の)參照。 萬葉「しろたへの藤江のうらにいさりするあまとや見らむ旅ゆくわれを」 ㊂しろたへは白きものなるより、くも(雲)・ゆき(雪)にかけていふ。 壬二集「春といへば花かとぞ見るしろたへの雲にまかるる峯の松原」 新拾遺「ささ浪やうちいでて見ればしろたへの雪をかけたる瀨田の長橋」

しろ-だも 白だも【名】〔植〕樟(ｸｽ)科に屬する常綠喬木。暖地に自生す。高さ三四丈。樹皮平滑にして、葉は全緣、長卵形をなし、裏面に白色の細毛密生す。秋季、黃白色の小花むらがり開く。材は器具用又は薪炭用に供せられ、果實は燈火用の油を搾取す。くろつつ。

じろたらう-ばな 次郎太郞花【名】〔植〕さぎごけ(鷺苔)の異稱。

しろ-たれ 白垂【名】能(ﾉｳ)の頭裝の一。頭より垂るる白毛の、白髮に擬するもの。西行櫻・雨月なんどの仕手に用ふ。

しろ-ぢ 白地【名】㊀地質の白きこと、又その白き生地。㊁白き地質の織物。

しろ-ぢさ 白萵苣【名】ちさの一種。普通のちさに似て、葉の裏やや白ばみたるもの。

しろぢ-せきじふじき 白地赤十字旗【名】海軍の第二種旗章の一。海軍病院又は病院船又はそれに附屬する物品を運送する船。

車等に掲ぐるもの。この旗を掲げたる船舶は捕獲することを得ざるものとす。

しろ-ちや 白茶【名】灰汁(ｱｸ)に漬さず、蒸し熟して焙(ﾎｳ)りたる上等の茶。 卯月の潤色「但しは白の白茶か、風呂で燒(ﾀ)いた煎じ茶か」

しろ-ちやうちん 白提燈【名】白張(ｼﾗﾊﾘ)の提燈。

しろ-ちり 白縮【名】次條の略。 船頭深話「白綸子の長襦袢、白ちりのゆもじにて、樹守の紐を見せるなどは、至って鉾と見えて、五分もすかぬこしらへ」

しろ-ちりめん 白縮緬【名】白き色の縮緬。

しろ-つが 白栂【名】〔植〕しらびそ(白檜曾)に同じ。

しろ-つき 代附【名】『價の附きたる刀の義』刀劍の位附を定むる標準價格。黃金を以てすれば金何枚、錢を以てすれば錢何貫文と記す。

しろ-つき 白搗【名】搗きてしらぐること。 五人女「白突三升五合ほど、鰹節一つ」

しろ-つき 代突【名】『しろ(代)㊃を見よ』えぶり(朳)㊀に同じ。

しろ-つきげ 白月毛【名】馬の毛色の一。月毛の白みがちなるもの。

しろ-っ-こ 白子【名】しろこ(白子)の音便。

しろ-つつじ 白躑躅【名】㊀〔植〕ごえふつつじ(五葉躑躅)に同じ。㊁襲(ｶｻﾈ)の色目の一。表白く、裏紫なるもの。春用ふ。

しろ-っぷ 果蜜(佛 Sirop 英 Syrup 又 Sirup)【名】『しやりべつ(舍利別)と同一の語源より出づ』果實より製したる糖蜜。果物を、水氣を附けずに皮を剝き、ざらめ糖又は角砂糖を振りかけて、半日ほど置き、火にかけて浮ぶあくを去り、なほ一時間ほど煮れば、果物はジャムとなり、煮汁はシロップとなる。清涼飲料に香味を添ふるに用ふ。

しろ-っ-ぽし 白っぽし【形】『ぽしは接尾語』㊀白ばみてあり。㊁ありふれてあり。價値少なし。㊂しろうとくさし。 浮世風呂「眼ゑどりだけ古風で素(ｼﾛ)っぽい」

しろ-づめ 城詰【名】城中に詰め居ること。 堀川波の鼓「お國に居ては毎日の御城詰」

しろ-つめぐさ 白塡草【名】〔植〕『白とは花の色によりていひ、單に塡草ともいふ』豆(ﾏﾒ)科に屬する宿根草。莖は地上に匍匐し、葉は掌狀複葉にして、三小葉より成り、初夏白色の小蝶形花を開く、牧草又は肥料に佳し。おらんだげんげ。おらんだれんげ。

しろ-づる 白弦【名】藥煉(ｸｽﾈ)にて塗りて作れる弓弦。 今川大雙紙「ぬり弓に白弦をかけべからず」

しろ-づる 白鶴【名】〔動〕鶴の一種。全身白くして、形大きく、翼の端やや黑く、頂より眼の周圍、及び嘴・脚は淡紅色なり。繁殖地はシベリヤ東部地方にて、我が國へは東北地方にのみ來る。そでぐろ。そでづる。

しろ-て 白手【名】白き釉(ｳﾜｸﾞｽﾘ)をかけたる磁器。(錦手・金襴手・染附などに對して)

しろ-てふ 白蝶・粉蝶【名】〔動〕鱗翅(ﾘﾝｼ)類に屬する昆蟲、體細長にして、大なる白色の翅を有す。前翅の尖端に黑褐色の斑紋あり、外緣に近く二箇の黑點を有し、後翅に一箇の黑斑あり、その幼蟲を螟蛉(ｱｵﾑｼ)といふ。この幼蟲は、野菜の葉を食害す。

しろ-と 白砥【名】しらと(白砥)を見よ。

しろ-と 素人【名】しろうと(素人)に同じ。

しろ-どり 白鳥【名】〔動〕㊀しろとり(白鳥)に同じ。㊁ほととぎす(杜鵑)の異稱。

しろ-どり 城取【名】城をかまへ設くること。 甲陽軍鑑「殊更、城どり・陣取、一切の軍法をよく鍛錬いたす」

しろ-とりげ 白鳥毛【名】しらとりげ(白鳥毛)に同じ。

しろと-をんな 素人女【名】しろうとをんな(素人女)に同じ。 若風俗「女の風俗も、しろと女よりは見よげに」

しろ-な 白菜【名】〔植〕㊀あぶらなの一種。葉柄短くして白く、葉身は稍黃色を帶び、皺縮して匏葉狀をなすもの。㊁たうな(菘)に同じ。㊂いんげんまめ(菜豆)に同じ。

しろ-なす 白茄子【名】〔植〕しろなすび(白茄子)に同じ。

しろ-なす 代爲す【動四他】うりしろなす(賣代爲す)に同じ。 狂言(箕かづき)「わごりよが嫁入の時、持っておりやった手箱をしろなさしませ。わらはが手箱が、今までござらうか。それは、疾うしろなしました」

しろ-なすび 白茄子【名】〔植〕なすびの一種。實の色白くして、大なるもの。銀茄。

しろ-なでしこ 白撫子【名】㊀〔植〕撫子の一種。花の色白きもの。㊁襲(ｶｻﾈ)の色目の一。表は白、裏は蘇芳(ｽﾊｳ)。夏用ふ。

しろ-なまづ 白癜【名】皮膚病の一種。なまづの白色をなせるもの。しらばだ。しらはたけ。(黑癜に對して)

しろ-なまり 白鉛【名】㊀〔鑛〕すず(錫)に同じ。(黑鉛に對して) ㊁〔化〕しろめ(白鑞)に同じ。

しろ-なめ 白滑【名】次條の略。

しろ-なめし 白滑【名】次條の略。

しろ-なめしがは 白滑革【名】染色せざるなめしがは。白くやや黃色を帶ぶ。あらかは。しろなめ。しろなめし。

しろ-なんてん 白南天竹【名】〔植〕南天竹の一種。實の白きもの。

しろ-ならし 代均【名】『しろ(代)㊃を見よ』えぶり(朳)㊀に同じ。

しろ-に 白煮【名】醬油を用ひず、食鹽・鰹節・煮出汁及び味醂を加へて煮ること。

しろ-にぎて 白和幣【名】しらにぎて(白和幣)を見よ。

しろ-にせ 白似【名】しらじらしく似すること。 御伽名代紙衣「旦那の風を移せば、たれか、しろにせの大臣と思ふべき」

しろ-ぬし 代主【名】謠曲の一。葛城明神の神德を述べ作れるもの。古名、葛城鴨。

しろ-ぬの 白布【名】晒して、白くなしたる布。白布の布。 七十一番職人歌合「しろぬのうり。しろぬのめせ、なう、はたばりも尺もよく候ふは」

しろ-ぬめ 白絖【名】白色のぬめ。 一代男「白ぬめの著物(ｷﾓﾉ)給はり」

しろ-ぬり 白塗【名】白色に塗ること、又その塗りたるもの。

しろ-ね 白根【名】〔植〕㊀脣形(ｼﾝｹｲ)科に屬する多年生の草。高さ三四尺、方莖にして、葉は鋸齒を有し、銳頭長楕圓形。夏秋の頃、葉腋に小脣形花を叢生す。濕地に生じ、根莖は食すべし。㊁ねぎ(葱)を云ふ。「女の語」

しろ-ね 白根【名】〔地〕越後國中蒲原(ﾅｶｶﾝﾊﾞﾗ)郡にある町。新潟市の南約六里。三國街道の一驛。

しろ-ねぎ 白葱【名】〔植〕大葱を耕作法によりて、白き部分を極めて長大ならしめたるもの。

しろね-ぐさ 白根草【名】〔植〕せり(芹)に同じ。 藏玉集「淵瀨に立つ浪とて花よ白根草摘む我が袖に雪は降りつつ」

しろ-ねずみ 白鼠【名】㊀〔動〕鼠の一種。毛色の白きもの。ぎんねずみ。[銀鼠](黑鼠に對して) ㊁『主人を大黑に比し、大黑の使はしめは白色の鼠なりといふによりていふ。だいこくばしら(大黑柱)㊁參照』その家の役に立つ老功の人。くろねずみ(黑鼠)㊁參照。

しろ-ねり 白練【名】㊀著色せざる練絹。帷子などの裏地に用ふ。㊁能(ﾉｳ)の衣裳の一。翁などの著附に用ふ。

しろ-ねりやうかん 白煉羊羹【名】白寒天・白小豆・ざらめ糖などを煉合はせて製したる羊羹。

しろ-の 白篦【名】矢竹の、漆を塗らず、又焦しもせぬもの。 平治「白篦に、白鳥の羽にてはぎたる矢負ひ」

しろ-の-き【名】〔植〕しらびそ(白檜曾)に同じ。

しろ-の-たち 白太刀【名】銀にて作れる太刀。 増鏡「院の御分、御小直衣皆具、夜の御衾、しろのおんたち、御馬二疋」

しろ-のり 城乘【名】敵の城に乘入ること。

城乘三段【句】昔、城乘の軍功中、大手(ｵｵﾃ)の虎口乘を上とし、搦手(ｶﾗﾒﾃ)の虎口乘を次とし、下乘を下とせしこと。

しろ-はう 白保【名】紙の一種。石灰などを加へて漉きたる、色やや白き淺草紙。

じろばう-たろばう 次郎坊太郎坊【名】〔植〕『じろんぼ(次郎坊)を見よ』すみれ(菫)㊀を云ふ。[大和國・伊豆國の小供の語]

しろ-はえ 白映【名】小雨の降りながら、折折晴れんとする空模樣。(くろ映に對して)

しろ-はえ 白鮠【名】〔動〕はえ(鮠)に同じ。

しろ-はちまき 白鉢卷【名】白色の鉢卷。

(色鉢巻に對して)

しろ-ばな 白花【名】一種の植物の中、白色の花の咲くもの。

しろばな-いはな 白花岩菜【名】〔植〕いはたばこ(岩烟草)に同じ。

しろばな-えんれいさう 白花延齢草【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。陰濕の地に自生す。葉は廣卵形、夏季に白色の花を開く。果實は圓錐形の漿果。

しろばな-しもつけ 白花繍線菊【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する落葉灌木。我が國北部の山地に自生す。葉は長卵形又は楕圓形。緣邊に毛茸(モウジョウ)を有す。花は小さくして白し。

しろばな-すみれ 白花菫【名】〔植〕菫菜(スミレ)科に屬する多年生の草。山地に自生す。高さ三四寸。葉は長卵形又は長楕圓形、夏季、白色の花を開く。觀賞用に供せらる。

しろばな-ぜんこ 白花前胡【名】〔植〕のだけ(前胡)に同じ。

しろばな-たんぽぽ 白花蒲公英【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。原野に自生す。葉は根生、蒲公英に似て淡綠色、花の色白く、春開く。

しろばな-の-とめつつじ 白花米躑躅【名】〔植〕石南(シャクナゲ)科に屬する落葉灌木。深山に自生す。幹の高さ數尺に達す。葉は楕圓形、初夏に白色の小花を開く。

しろばな-の-はんしようづる 白花半鐘蔓【名】〔植〕毛茛(キンポウゲ)科に屬する多年生の草。山地に自生す。莖蔓にて、他物に纏はる。葉は三出複葉。四五月頃、白色の萼を有する花を開く。

しろばな-の-へびいちご 白花蛇苺【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する多年生の草。高山に自生す。莖は横臥し、葉は小三葉より成り、春夏の交、白色の花を開く。果實は食ふべし。

しろばな-の-むしよけぎく 白花除蟲菊【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。原產地は墺太利。高さ二三尺。葉は羽狀。五六月の頃、白色の花を開く。花は驅蟲劑に用ひらる。だるましやぎく。

しろばな-の-ゆふげしやう 白花夕化粧【名】〔植〕柳葉菜(アカバナ)科に屬する一二年生の草。原產地はメキシコ。高さ二尺。葉は卵形又は楕圓形。花は紅紫色にして、晝間開き、夜間閉づ。觀賞用とす。

しろ-ばむ 白ばむ【動四自】白く色づく。白色になる。

しろ-ぱん 白麵包【名】小麥粉にて製したる、普通の麵包。(黑麵包に對して)

しろ-はら 白腹【名】〔動〕燕雀(エンジャク)類に屬する鳥。鶫(ツグミ)の類。赤腹に酷似し、ただ胸部と腹部との灰白色なるもの。秋季我が國に來る。繁殖地はシベリア地方なりといふ。やぶつぐみ。ちやつぐみ。

しろ-びいる 白麥酒【名】普通の褐色なるものよりも、更に色淡き麥酒。多量の炭酸瓦斯を含有せるが故に、泡立つこと甚だ強し。(黑麥酒に對して)

しろ-びかり 白光【名】白く光る光彩。

しろ-びし 白菱【名】〔植〕はまびし(濱菱)に同じ。

しろ-びたひ 白額【名】ほしづき(星月)に同じ。

しろ-びと 白人【名】しらびと(白人)に同じ。

しろ-びは 白枇杷【名】〔植〕枇杷の一品種。幹の皮に白粉あるもの。

しろ-びより 白日和【名】四月の日より。おほせびより。

しろ-ぶ【接尾】しらぶに同じ。〔古語〕源氏「いひしろひ侍りかど、まことには、かはるべきこととも おもうたまへずながら」

しろ-ぶか 白鱶【名】〔動〕しろざめ(白鮫)に同じ。

しろ-ぶくりん 白覆輪【名】ぎんぷくりん(銀覆輪)に同じ。保元「連錢葦毛なる馬に、白覆輪の鞍置いてぞ乘られける」太平記「白覆輪の鎧」同「白覆輪の太刀」

しろ-ふくろふ 白梟【名】〔動〕梟の一種。形普通のに似て、冬期に入れば羽毛白色に變じ、紫斑點あるもの。主に北海道及びその附近に棲息す。羽は楊弓の箭羽などに用ふ。

しろ-ぶだう 白葡萄・水晶葡萄【名】〔植〕葡萄の一品種。その果實の淡白色を呈するもの。

しろ-ぶだうしゆ 白葡萄酒【名】白葡萄の果皮、その他の搾粕を除き、果液のみにて釀造したる、淡黃色なる葡萄酒。はくぶだうしゆ。

しろ-ふぢ 白藤【名】〔植〕しらふぢ(白藤)に同じ。

しろ-ぶち 白斑【名】白色のぶち。白きまだら。

しろ-ぶな 白橅【名】〔植〕殼斗(カクト)科に屬する落葉喬木。各地の山野に自生す。高さ七八十尺、周圍十尺に達す。葉は互生し、卵形にして、毛を有す。花は單性にして、雌花と雄花とは同樣に生ず。果實は堅くして、刺毛を有する殼斗內にあり。木材は器具・薪炭の料となり、種子は油を搾取して、食用及び燈用となる。(黑橅に對して)

しろ-べ【名】〔植〕しらびそ(白檜曾)に同じ。

しろ-べゑ 四郎兵衛【名】江戶吉原遊廓の大門の側に居りし番人。色男十人三文「花の巷の落花狼藉者と、四郎兵衛顏もせず、番所より出で、散散打擲するに」

しろ-ぼけ 白木瓜【名】〔植〕木瓜の一品種。花の色白きもの。

しろ-ぼたん 白牡丹【名】牡丹の一品種。花の色の白きもの。はくぼたん。浦島年代記「白牡丹の臺に紅牡丹の穗を接ぐに」

しろ-ぼや 白海鞘【名】〔動〕海鞘(ホヤ)類に屬する被囊動物。體やや細長くして色白く、觸手は分岐せず。

しろ-ぼり 城壕【名】城の周圍の堀。城濠(ジヤウガウ)。

しろ-ほろ 白母衣【名】白地のほろ。太平記「白母衣懸けて、鹿毛(カゲ)なる馬に乘つたる武者一騎」

しろ-まい 城米【名】城中に貯へたる米。城米(ジヤウマイ)。信長記「御城米を被出御商買の由」

しろ-まく 白幕【名】白地の幕。

しろ-まくは 白甜瓜【名】〔植〕ぎんまくは(銀甜瓜)に同じ。

しろ-まつ 白松【名】〔植〕くろまつ(黑松)(一)に同じ。

しろ-まなこ 白眼【名】しろめ(白眼)に同じ。字鏡集「眼、シロマナコ」

しろ-まめ 白豆【名】〔植〕豆(マメ)科に屬する一年生の草。大豆の一種。花は帶紫色又は白色にして、莖・葉に毛を有す。種子は食用に供し、味噌・醬油の原料となり、莖葉は家畜の飼料に供す。

しろ-まゆ 白繭【名】繭の色白くして、やや青味を帶びたるもの。(黃繭に對して)

しろ-み 白身【名】(一)しらた(白太)に同じ。(二)肉などの色白き部分。(三)卵の中の、黃身を包める白き液。蛋白。

しろ-み 白鑞・白味【名】しろめ(白鑞)に同じ。

しろ-みがき 白磨【名】(一)白く磨くこと、又その磨きたるもの。日本武尊吾妻鑑「白磨の轡、白泡に血を交ぜ」(二)犬追物にて、正式に射手の射樣を守ること。

しろみ-ぐさ 白見草【名】(一)『貌見草(カホミグサ)』の宛字『貌』の誤ならんといふ』あやめ(白菖)の異稱。〔古語〕(二)さといも(里芋)に同じ。

しろ-みそ 白味噌【名】色白くして、味の甘き味噌。その製法、常のに似て、ただ豆の皮を去り、米・麴を加へ、食鹽の量を少なくして釀製し、又は赤味噌に、多分の麴と甘酒とを加へても製す。鹽分少なきため、永く貯藏すること能はず。

しろみそ-じる 白味噌汁【名】白味噌にて調理したる汁物。

しろ-みつ 白蜜【名】『砂糖蜜と區別していふ』はちみつ(蜂蜜)に同じ。

しろ-みづ 白水【名】米をとぎたる水。色白く濁れり、物の垢を洗ひ去るなどに用ふ。

しろみ-ばしる 白味走る【動四自】しらばむ(白ばむ)に同じ。

しろ-みりん 白味淋【名】赤味を帶びざる味淋。(赤味淋に對して)

しろ-む 白む【動四自】(一)白くなる。(二)興さむ。たぢろぐ。躊躇す。狹衣「女郎花色かはり、尾花の袖もしろみわたりつつ」田舍懸想「左右なく討たれん樣もなし、雙方しろみて扣へたり」

しろ-む 白む【動下二他】白くなす。其「やがて常陸の介と附けたり。きぬもしろめず、おなじすすけにてあれば、いづちやりにけんなどにくむに」

しろ-む【動下二他】おししぼる。しめる。和名「油…胡麻熟、已收レ子、蒸レ之擣押、俗語云、之路無、然則乃得レ出レ油」

しろ-むく 白無垢【名】上著も下著も白色なる絹の衣服。また表裏とも白にて、他の色を雜へざる衣服。賀古秋信七墓廻「乙女櫻の小忌衣、肌に白無垢」

白無垢鐵火(テツクワ)【句】表面は溫和に見えて、心は殘忍猛惡なること。

しろ-むま 白馬【名】しろうま(白馬)に同じ。字鏡集「騗、シロムマ」

しろ-むら【名】〔植〕ときみづき(鐵辦花)に同じ。

し-ろん 至論【名】至極の論。

し-ろん 私論【名】わたくしの論。公ならぬ說。

し-ろん 史論【名】歷史に關したる論。

し-ろん 詩論【名】詩につきての論。

し-ろん 詞論【名】〔語〕『英 Analysis』文典の一部。單語の種類及びその各種の單語の性質などを論ずるもの。(文章論などに對して)

じ-ろん 時論【名】(一)時事に關する論。(二)その時の輿論。

じろん-ぼ 次郎坊【名】〔植〕『じろばうたろばう(次郎坊太郎坊)を見よ』すみれ(菫)(一)に同じ。

しろ-め 白眼【名】眼球の白き部分。しろまなこ。しろめだま。しらめ。

しろ-め 白鑞【名】〔化〕鉛と錫との合金。融解點低く、ブリキ・トタンの細工に鑞附をなし、又は銅製の食器の內面に塗りて、その酸化と臭とを防ぐなどに用ふ。しろみ。しろなまり。びやくらふ。はんだらふ(半田鑞)參照。

しろめ-せん 之呂女錢【名】江戶時代の錢貨の一。元文四年江戶深川の平野新田にて造りしもの。鉛・鐵を混和して鑄たりといふ。銅色白ばみ、徑八分・重さ八分。

しろ-めだま 白眼玉【名】しろめ(白眼)に同じ。

しろめ-まつ 白女松【名】〔植〕くろまつ(黑松)に同じ。

しろ-もぐさ 白艾【名】もぐさ(艾)(二)に同じ。狗狩飯本地「桑の杵は男を表し、柳の白は女を表し、陰陽和合に搗きぬく採みぬく白艾」

しろ-もじ 白文字【名】〔植〕樟(クス)科に屬する落葉灌木。枸橼(クロモジ)の類。山地に自生す。幹の高さ一丈餘。葉は全緣・廣楕圓形にして、通常三深裂す。春季、淡黃色なる雌雄異株の花を開く。

しろ-もち 白餅【名】搗き又は燒きたるままにて、醬油・餡などを附けざる餅。

しろ-もち 城持【名】次條に同じ。

しろもち-だいみやう 城持大名【名】領地內に、城を有せし大名。しろもち。城主。

しろ-もと 城本【名】城のある所。薩摩歌「御城本は但馬國、京の屋敷は千本通り」

しろ-もの 代物【名】(一)賣買する品物。貨物。商品。(二)貨物の代金。(三)人を卑しめていふ語。にんげん。たま。(四)むすめ(娘)を云ふ。〔信濃國・豐後國の方言〕

しろ-もの 白物【名】(一)さうふ(豆腐)を云ふ。〔女の語〕(二)しほ(鹽)(一)を云ふ。〔女の語〕

しろもの-かへ 代物替【名】(一)貨物と貨物との交換。物物交換。〔江戶時代の語〕(二)江戶時代、長崎に行はれし舶來品の交易。

しろ-もみ 白樅【名】〔植〕(一)いらもみ(刺樅)に同じ。(二)しらびそ(白檜曾)に同じ。

しろもんば-びやう 白紋羽病【名】桑樹に生ずる病。原因は菌類の寄生。根は白色線狀物に包被せられて腐蝕し、終に全樹を枯死せしむ。

しろ-もめん 白木綿【名】白の木綿絲にて織りたる織物。

しろ-もも 白桃・銀桃【名】〔植〕桃の一種。水蜜桃の晚種に屬し、實の形扁圓にして、中央少し凹み、皮は黃綠色に紅斑を交へ、肉は淡紅色にて、味頗る佳し。

しろ-やくもさう 白八雲草【名】〔植〕きせわたさう(著綿草)に同じ。

しろ-やしほ 白八汐【名】〔植〕ごえふつつじ(五葉躑躅)に同じ。

しろ-やま 城山【名】(一)昔、城砦のありし山。または岡阜。(二)〔地〕薩摩國鹿兒島市の西北にある山丘。懸崖削立し、島津氏の城地はこれを背にして築かれしものにて、山の背後なる岩崎谷は、藥研狀に凹みて、彈丸達せず、西南の亂に、賊魁西鄉隆盛等の最後に據守して、戰歿せし處なり。

しろ-やまぶき 白山吹・雞麻【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する落葉灌木。高さ四五尺。葉は卵形にして鋸齒あり。初夏白色の花を開く。觀賞用に供せらる。

しろ-ゆもじ 白湯文字【名】『素人(シロト)にて、密かに淫賣をなすものをいひしよりいふ。遊女の赤湯文字なるに對して、素人は多く白湯文字をなせしなり』京都・大阪にありし、下等なる淫賣婦。

しろ-よめな 白嫁菜・白雞兒腸【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。山野に自生す。莖の高さ二三尺。葉は廣披針形。夏日白色の花を開く。觀賞用に供せらる。

しろ-よもぎ 白蒿【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達す。葉は互生し、長卵形にして、羽狀に分裂す。下面に白色の毛を密生す。花は筒狀花冠を有し、頭狀花序に排列す。嫩葉は食用に供す。かはらよもぎ。和名「白蒿。一名、蘩蘵蒿、市路與毛木。一云、加波良與毛木」

じろり【副】眼を動かして一目見るさま。薩摩歌「お寢間の方をじろりと見て、ほんに切麥でさへこのお情」

しろ-れんぐわ 白煉瓦【名】たいくわれんぐわ(耐火煉瓦)に同じ。(赤煉瓦に對して)

しろ-われもかう 白地楡【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する多年生の草。水濕の山野に自生す。高さ三四尺。葉は羽狀複葉。秋季白色にして、微紅を帶べる花、穗狀花序をなして開く。

しろゐ-じやう 白井城【名】上野國群馬郡長尾村字白井にありし長尾氏の居城。天正十八年豐臣秀吉小田原征伐の時、政景據守して加越軍に抗せしも、城遂に陷り、長尾氏亡ぶ。德川家康江戶入國の初、本田廣孝に與へ、慶長六年その子康重三河岡崎に移封せしため、廢城となりぬ。

しろ-ゑ 白繪【名】しらゑ(白繪)に同じ。増鏡「しろゑの五尺のびやうぶ」

しろゑ-ぐるま 白繪車【名】『その物見板は、黑漆地に胡粉を用ひて白く畫きたればいふ』文車(フグルマ)の一。老人の乘るもの。

しろ-ゑんどう 白豌豆【名】〔植〕豌豆の一種。花の色の白きもの。(赤豌豆に對して)

しろ-を 白魚【名】〔動〕しらうを(白魚)に同じ。〔古語〕

しろ-をだまき 白緒斗菜【名】〔植〕緒斗菜(ヲダマキ)の一變種。花の色の白きもの。

しわ 皺・皴【名】皮膚・紙・布帛などの緩みて、折れ重なりたる筋目の縮みよれたるもの。和名「皺、之和、皮細起也」

皺かく【句】『皺寄る』に同じ。〔古語〕萬葉「くれなゐのおもての上にいづくゆかしわかきたりし」

皺伸ぶ【句】『皺を伸す』に同じ。〔古語〕

皺寄る【句】皺生す。しわむ。しわだつ。しわぐむ。

皺を伸(ノ)す【句】『しわのばし(皺伸)』を見よ』老人、氣ばらしをなす。

波の皺【句】さざなみ。波紋。古今「波の皺にやおぼほれん」曾我會稽山「用捨もなみ(無み・波)の皺腕も」

し-わ 詩話【名】詩歌に關する話。

し-わ 視話【名】しわはふ(視話法)に同じ。

し-わ 史話【名】歷史に關する話。

し-わ 私話【名】私事に關する話。ないしよばなし。

し-わ 私和【名】表沙汰とせずに、雙方示談にて、事を濟ますこと。和談。內濟。

しわ-あらめ 皺荒布【名】〔植〕かぢめ(搗布)に同じ。

し-わう 嗣王【名】世を嗣ぎたる王。

し-わう 四王【名】〔佛〕してんわう(四天王)に同じ。十訓「帝釋・四王・龍神・八部所も無く充ち滿てり」

し-わう 雌黃【名】(一)〔植〕金絲桃(オトギリサウ)科に屬する喬木。東印度・暹羅に自生す。高さ五六十尺に達す。葉は長卵形にて對生し、花は單性漿果を結ぶ。樹皮を傷けて得る黃色護謨の樹脂を、藤黃と稱し、峻下劑に用ふ。又、繪具に用ふ。きわう。『藤黃・海藤』(二)〔化〕硫黃と砒素との化合物。三硫化砒素の一。色黃にして、光あり。藥または、繪具などに用ふ。人工によりても製す

ること得。これに對して、天然のを石雌黄(ﾙｲﾊﾝ)といふ。きわう。石黄(ｾｷｵｳ)。雄黄(ﾕｳｵｳ)。和名「雌黄、一名金液、雌黄、俗音、之王」㊁日本繪具の一。鑛物の雌黄に似せて、前前項の樹脂より製出したる、黄赤色なるもの。草雌黄。㊃『古支那にては、書冊に黄色の紙を用ひしより、文字を寫して誤ある場合に、前項の雌黄にて塗抹して改めしよりいふ』文章を添削すること。

雌黄を加ふ【句】他人の詩歌・文章を添削す。朱を加ふ。

口中の雌黄【句】『支那、晉の王衍が古文を改竄したるを、世人の評せし語』古人または他人の文章を改竄すること。

し-わう 死王【名】〔佛〕『人の死命を司るよりいふ』えんまわう(閻魔王)に同じ。

し-わう 四王【名】〔佛〕しわうてん(四王天)の略。曾我五人兄弟「慾海の四王・切利天」

し-わう 使王【名】「四姓の使」を見よ。

しわ-うで 皺腕【名】老いて皺の寄りたる腕。曾我會稽山「用捨もなみ(無み・波)の皺腕も、共に折れよ、と打立て打立て」

じ-わう-てつくわ 磁黄鐵鑛【名】〔鑛〕成分は鐵の硫化物。青銅黄色にして、多くは塊狀をなし、微かに磁力を感ず。製鐵の原料には用ひられず。

しわう-てん 四王天【名】〔佛〕㊀してんわうてん(四天王天)に同じ。御文章「これ、人間の五十年をかんがへみるに、四王天といへる天の一日一夜にあひ當れり。またこの四王天の五十年をもて、等活地獄の一日・一夜とするなり」㊁してんわう(四天王)に同じ。

しわう-ゐん 四王院【名】さいだいじ(西大寺)㊀に同じ。

しわ-おやぢ 皺親仁【名】老いて皺の寄りたる老父。浦島年代記「七世の孫は、七十餘の皺親仁」

しわ-がしら 皺頭【名】老いて皺の寄りたる首。手習鑑「强慾非道の皺頭と、水もたまらず打落す」

しわ-かぶ 吝株【名】しはかぶ(吝株)の訛。四天王大通仕立「嗣は少少しわ株にて、茶屋へも行かず、ぶらぶらと、素見に紛れ歩きしが」

しわ-がる 皺枯る【動下二自】しはがる(嗄る)の誤。姫坂酒呑童子「身の程知らぬ高聲も、巽(ﾀﾂﾐ)上りに皺枯れて」

しわがれ-ごゑ 皺枯聲【名】しはがれごゑ(嗄聲)の誤。艶狩劔本地「臼挽く如き皺枯聲」

し-わく 仕分く【動下二他】『仕は爲(シ)の義』それぞれに別つ。區別す。分類す。類別す。

し-わく 思惑【名】〔佛〕證果を得るにつきての二つの惑の一。理智の上よりその正しからざることは悟りながら、感情のために容易に避くること能はざる惑。卽ち貪・瞋・癡の三惑など。見惑と相合して、煩惱(ﾎﾞﾝﾉｳ)の本質を成す。けんじ(見思)參照。

九十一品(ｸｼﾞﾌｲﾁﾎﾞﾝ)の思惑【句】〔佛〕思惑に三界の別を立て、欲界の一地、色界の四禪、無色界の四定、卽ち合はせて九地とし、この九地の惑を上・中・下の三品とし、更にその二に三品を分ち、都合八十一品の思惑ありと爲すことあれば、九十一は、八十一の誤なるべしといふ。鵜鷺合戰「九十一品のおもわく」

しわ-くた 皺くた【貌】次條に同じ。

しわ-くちや 皺くちや【貌】紙・布・絹布などの、甚しく皺の寄りてあるさま。しわくた。

しわ-ぐむ 皺組む【動四他】「皺寄る」に同じ。住吉「しわぐみ、にくさげなる顏して、ほほゑみて」

し-わけ 仕分・仕譯【名】『仕は爲(シ)の義』㊀しわくること。區分。區別。㊁〔商〕簿記にて、勘定科目を定めて、各種の取引を貸借に仕分くること。

しわけ-ちやう 仕分帳・仕譯帳【名】日記帳と元帳との間に使用する帳簿にて、日記帳に附込まれたる事項を、取引の勘定科目に仕分け、更にこれを貸借に振分け、その金額を、各貸借の部に記入して、元帳への轉記に便するもの。仕譯簿。

しわけ-にっきちやう 仕分日記帳・仕譯日記帳【名】日記帳と仕譯帳とを合はせたる一の帳簿。卽ち日日の取引を仕譯して、日記を附せるもの。仕譯日記簿。

しわけ-にっきぼ 仕分日記簿・仕譯日記簿【名】前條に同じ。

しわけ-ぼ 仕分簿・仕譯簿【名】しわけちやう(仕分帳)に同じ。

し-わざ 仕業【名】『仕は爲(シ)の義』するわざ。なすこと。所爲。源氏「いと心なき人のしわざにも侍るかな」

しわ-し 吝し【形一】しはし(吝し)に同じ。

しわ-じよう 皺尉【名】能樂の假面(ﾒﾝ)の尉の一種。眉間に八字の皺あるもの。「輪藏」・「老松」・「白樂天」・「遊行櫻」・「西行櫻」等の曲に用ふ。

しわ-しわ 撓撓【貌】物のしわるさま。

し-わたす 仕渡す【動四他】長く造り構ふ。蜻蛉大皇甘露車「野の宮近き黑木の御所、小柴垣仕渡して」

しわ-だつ 皺立つ【動四自】「皺寄る」に同じ。

しわ-だらけ 皺だらけ【名】皺の多きこと。

しわ-ぢい 皺爺【名】老いて皺の寄りたる爺。國性爺「この皺爺が命一つに仕損ぜしと言はれて」

しわ-で 皺手【名】老いて皺の寄りたる手。芭蕉「灌佛や皺手合はする數珠の音」

しわ-のばし 皺伸【名】『「皺を伸す」を見よ』老人の、氣晴しをなすこと。

しわ-はだ 皺肌【名】老いて皺の寄りたる肌。

しわ-はふ 視話法【名】『英 Visible Speech』言語を發する際に於ける口腔內及び喉頭等の狀態を、簡單なる圖式的符號によりて表はし、この符號に依れば、發音運動を實際に視ると同樣の効果を與へ、發音法の習得に便せしめんとする一種の記號組織。

しわ-はふ 指話法【名】『獨 Finger-sprache』啞又は聾と話をかはすために、指文字に代用する方法。

しわ-ばら 皺腹【名】㊀老いて皺の寄りたる腹。おいばら。㊁年老いて切腹すること。吉野忠信「これにて皺腹仕り、再び御所へは歸らじ」

皺腹を搔く【句】年寄りて切腹す。

しわ-ひとで 皺人手【名】〔動〕枝を五つに分ちたる狀、蔓の如くなるひとで。

し-わぶ 爲侘ぶ【動上二他】扱ひなやむ。爲すに苦しむ。〔古語〕宇治「あまりにまもられて、しわびて」

しわむ 皺む【動四自】「皺寄る」に同じ。〔古語〕萬葉「若かりし肌もしわみぬ黑かりし髮も白けぬ」

しわむ 皺む【動下二他】しわむやうにす。皺を寄らしむ。〔古語〕

しわ-よる 皺寄る【句】しわ(皺)の條下を見よ。

しわ-んぼ 吝嗇坊【名】前條の訛。

しわ-んばう 吝嗇坊【名】しはんばう(吝嗇坊)に同じ。鹿懸獸「餅つく臼・杵持たずに、晒し臼を兼ねるほどなしわんばう」

じわり【貌】じはりに同じ。

しわる 撓る【動四自】たわみまがる。たわむ。しなふ。俗謠「船頭かはいや音戶(ｵﾝﾄﾞ)の瀨戶で一丈五尺の艪がしわる」

し-ゐ 思惟【名】㊀思量し、分別すること。㊁〔哲〕『英 Thinking』精神の統一作用。卽ち經驗によりて學びたる事實を比較して、その間に存する關係を定め、これによりて未だ經驗せざる境涯に至らんとする作用。概念・判斷・推理の三作用を含む。思考。思考作用。しさう(思想)參照。

思惟の原理【句】〔哲〕『英 Principles of thinking』「思想の原理」に同じ。

思惟の三法則【句】〔哲〕「思想の三法則」に同じ。

し-ゐ 尸位【名】㊀古、支那にて、祖先を祭る時、その血統を受けたる者が、假に神のかたしろとなりしこと、又その人の座席。㊁『孝經の註に「見レ可レ諫而不レ諫、謂ニ之尸位一」とあり』その職にありて、その責任を盡さざること。才德無くして、位にあること。尸官。尸祿。

尸位・素餐(ｿｻﾝ)【句】『漢書の朱雲傳に「今朝廷大臣、上不レ能レ匡レ主、下無ニ以益一レ民、皆尸位素餐」とあるに本づく』役にも立たずに、その位に居て、祿を食むこと。

し-ゐ 施爲【名】しかう(施行)に同じ。

し-ゐ 師位【名】淳仁天皇の天平寶字四年に始めて設けられたる大法師位・法師位・滿位・修業位の四つの僧位。

し-ゐ 示威【名】威力を示すこと。威勢を張ること。

し-ゐ 四維【名】㊀乾(ｲﾇｲ)・坤(ﾋﾂｼﾞｻﾙ)・艮(ｳｼﾄﾗ)・巽(ﾀﾂﾐ)の四隅。太平記「東西南北・四維・上下に充滿して」㊁『管子に「何謂ニ四維一、一曰禮、二曰義、三曰廉、四曰恥」、同書の牧民篇に「禮・義・廉恥・白ニ之四維一、四維不レ張、國乃滅亡」とあり。維は國家を維持する者の義』禮・義・廉・恥の四つの德。

し-ゐ 四位【名】くらゐ(位)を見よ。

四位の諸大夫(ｼﾖﾀﾞｲﾌﾞ)【句】四位にて、昇殿を許されざる人。

四位の少將【句】四位に敍せられたる近衞の少將。

じ-ゐ 辭彙【名】じしよ(辭書)に同じ。

じ-ゐ 字彙【名】㊀じしよ(字書)に同じ。㊁〔書〕支那明の梅膺祚の編める漢字の字書。十二集に分ちて、順次に十二支を各集に題し、その外に首・尾二卷を添へたり。

じ-ゐ 次位【名】つぎの地位。二番目。

じ-ゐ 磁位【名】〔理〕『英 Magnetic potential』磁界內の一點に單位の陽磁氣を置き、磁界に影響なきものとしたる時、磁界が此の單位陽磁氣を無限遠距離の點に運ぶために磁界のなす仕事。

しゐ-うんどう 示威運動【名】『英 Demonstration』威力を示すための運動。

し-ゐぎ 四威儀【名】〔佛〕しぎ(四儀)に同じ。宇治「念佛・讀經・四威儀を破ることなかれ」

しゐ-しゆ 思惟修【名】〔佛〕ぜん(禪)の譯語。

し-ゐち 視位置【名】〔天〕『英 Apparent place』眞赤道に對する地心位置、卽ち歲差・章動・光行差及び恒星にありては、年週視差を算入せる天體の赤經赤緯。

し-ゐん 四韻【名】㊀韻の四つならぶ詩。律詩。源氏「博士の人人はしゐん、ただの人は、おとどをはじめ奉りて、ぜく作りたまふ」㊁しせい(四聲)に同じ。

し-ゐん 詩韻【名】詩の韻字。

し-ゐん 子韻【名】〔語〕しいん(子音)に同じ。

し-ゐん 子院【名】本寺に附屬する諸寺。寺中。塔頭(ﾀｯﾁｭｳ)。

し-ゐん 市尹【名】いちのつかさ。市長。

じ-ゐん 次韻【名】『韻に次する義』和韻の一。原詩の韻字と同一の韻字を、順序も變へず、そのままに用ふるもの。

じ-ゐん 寺院【名】てら(寺)に同じ。

しゐん-がんえい 詩韻含英【名】〔書〕佩文韻府を準據として、韻字を排列し、その熟語をも擧げ、古韻・通韻等をも示せるもの。十八卷。淸の劉文蔚の編。

じゐん-はふ 寺院法【名】〔法〕『獨 Kirchenrecht』宗教團體に關する公法。

じゐん-ます 寺院枡【名】寺院にて專用する枡。その寺寺に依りて一樣ならず。山門枡・正傳寺枡・長講枡及び鐵枡等の稱あり。

じゐん-れう 寺院寮【名】民部省の一寮。寺院に關する事務を掌りし所。明治三年に設置、同四年に廢止せられたり。

じゐ-りよく 自爲力【名】〔哲〕心意が、外物に對して、勢役し、且つその上に、作用を及ぼす力。

し-ゐゐん 市委員【名】市行政事務の一部を分掌する委員。市參事會員又は市會議員を以て、これに充つ。

し-ゑ 四衞【名】しゑふ(四衞府)に同じ。

じ-ゑ 慈慧【名】〔人〕りやうげん(良源)に同じ。十訓「慈慧この事を聞きて、憤りて起請を書きて、三塔に披露せられける」

じ-ゑい 自衞【名】自己の勢力・體力を以て、害を除き、防衞すること。

じ-ゑい 侍衞【名】貴人の側を守ること、又その人。

じゑい-けん 自衞權【名】〔法〕㊀國家がその力によりて、自己の存在・獨立を防衞する權。㊁人が自己の力によりて、その生命・身體を防衞する權。正當防衞權の類。

し-ゑい 四衞【名】しゑふ(四衞府)に同じ。

四衞二府【句】ろくゑふ(六衞府)に同じ。

じゑい-れんたい 侍衞聯隊【名】舊韓國の近衞兵。すべて傭兵なりき。

じゑ-だいし 慈慧大師【名】〔人〕じゑ(慈慧)を見よ。

し-ゑふ 四衞府【名】左右の近衞府と左右の兵衞府との併稱。

し-ゑん 四遠【名】四方の遠き所。

し-ゑん 紫鴛【名】羽毛の紫色なるをしどり。平家「紫鴛・白鷗逍遙す」

し-ゑん 私怨【名】私事に就きての恨。私のうらみ。

じ-ゑん 自園【名】自分の庭。自家の園圃。

じ-ゑん 慈圓【名】〔人〕じちん(慈鎭)を見よ。

しゑ-や【感】歎息する聲。ままよ。よしや。〔古語〕萬葉「たまちはふ神もわれをばうつてこそしゑや命の惜しけくもなし」

し-をさめ 爲納【名】事を爲すをはり。最後の仕事。しじまひ。淀鯉出世瀧德「御奉公のしをさめと存じ立ったる所に」

しを-しを 萎萎・悄悄【貌】氣を落して、勢なくなれるさま。

し-をに 紫苑【名】㊀〔植〕しをん(紫苑)に同じ。〔古語〕和名「紫苑、一名紫蒨、和名能之、俗云、之乎邇」㊁襲(ｶｻﾈ)の色目の一。表は薄色にて、裏は青。㊂奴袴などの薄紫色。秋に用ふ。

し-をん 四苑・四園【名】〔佛〕「帝釋(ﾀｲｼｬｸ)の「四苑」を見よ。

(㊀しをん)

し-をん 紫苑【名】㊀〔植〕菊科に屬する多年生の草。春、舊根より叢生す。葉は形細長く、表は粗く、夏七八尺の莖出でて、秋淡紫色の舌狀花と黃色の筒狀花とより成る頭狀花序の花を開き、觀賞用に供せらる。きをん。㊁しをに(紫苑)㊁㊂に同じ。

しをん-いろ 紫苑色【名】前條㊁に同じ。榮花「しをん色に朽葉の御衣(ｵﾝｿﾞ)など奉れり」

しをらし【形二】穩かにつつしみてあり。

し-をり 栞・枝折【名】㊀山に入る時、木の枝を折りかけて、歸路のしるしとすること。〔古語〕六帖「しをりしてゆかましものをあひづ山入るよりまどふ道と知りせば」㊁『西行法師の「吉野山こぞのしをりの道變へてまだ見ぬかたの花をたづねん」といふ歌より出づといふ』厚紙又は薄き木片などにて造り、讀みさしたる書物の隔に目じるしとして插むもの。けふさん(夾算)參照。㊂しるべ。案內。㊃城郭の名目の一。塊目ならんといふ。太閤記「追立て追立て、三の丸しをり際まで追入りしかども」㊄〔動〕まんばう(翻車魚)に同じ。㊅しをりど(枝折戶)の略。

しをり【名】くり(繰)㊁を見よ。

しをり-がき 枝折垣【名】木の枝を折りかけて造れる垣。をりかけがき。

しをり-ど 柴折戶【名】㊀木の枝又は割竹などにて造れる、假の扉。しをり。㊁神社の拜殿等に設けたる扉。

しをり-どめ しをり留【名】能(ﾉｳ)にて、泣く形として仕手の留むる形。「隅田川」・「景淸」の類にあり。

しをる 栞る・枝折る【動四自】しをり㊀をなす。しるべす。案內す。〔古語〕積松「うき世にはしをらで入りし奥山に何とて人の尋ね來つらん」

しをる 萎る【動下二自】㊀折れかがむ。ゆがみ曲る。撓む。萬葉「ことしげみあひとはざるに梅の花雪にしをれて移らはむかも」㊁氣を落し、力弱る。しをしをとす。

しをる 萎る【動四他】しをれしむ。撓ましむ。〔古語〕風雅「岡のべやなびかぬ松は雪をなして下草しをる山おろしの風」

しをる【動四他】『前條の語の意義の轉じたるもの』責め叱る。こらす。折檻す。〔古語〕落窪「この北のへやにこめてよ。物なくれそ。しをり殺してよ」

しをれ-あし 萎蘆【名】しをれたる蘆。堀太「霜枯の野べのほとりのしをれ葦は行きかふ駒もすさめざりけり」

しをれ-ば 萎葉【名】草木の萎れたる葉。夫木「みぎはなる蘆のしをれば吹きさやぎ氷もよほす眞野の濱かぜ」

す

【發音】㊀さ行第三の音。子音sが母音uに結び附きて發す。その發音の方法・位置に就きては、さ及びうの條下に於けるが如し。濁音ずに就きても、同樣、さ及びうの條下を見よ。㊁長音はすうずう又はすーずーと記す。本書は前者に依れり。㊂すの音、か・さ・た三行の淸音又は各種の促音の直前にありて、且つアクセントなき場合には、一部の方言を除き、通例、母音u脫落して、子音sのみとなる。例へば、すき(鋤)・すさのをのみこと(素盞男尊)・すとおぶ(暖爐)・すっぽん(鼈)の類。㊃東北地方の方言にては、し・じをす・ずに誤りて發音すると同時に、す・ずをし・じのごとく發音す。ゆゆしき誤謬なり。

【字源】平假名すは「寸」(漢・吳音共にソン、慣用音スン)の草體より出て、變體平假名は「春」(漢・吳音共にシュン)の草體、は「須」(漢音シュ)の草體、は「壽」(漢音ジュ)の草體より出づ。片假名スは「須」の略體。萬葉假名としては、淸音に、上記「寸」・「春」・「須」・「壽」の外、「輸」・「諏」・「珠」・「殊」(何れも漢音シュ)・「數」(漢音ス)・「州」・「洲」(何れも漢音シウ、吳音ス)・「周」・「酒」(共に漢音シウ、吳音シュ)「巢」・「棲」・「酢」・「醋」・「贄」・「僞」・「栖」(以上訓)等、濁音に「受」・「授」・「聚」(共に漢音ジュ)・「儒」・「孺」(共に漢・吳音ジュ)等を用ふ。

す 巢【名】㊀鳥獸・蟲魚などの構へたるすみか。和名「鳥巢、在レ穴曰レ窠、在レ樹曰レ巢、須、一云、須久不」 ㊁蜘蛛の尻より吐く絲にて、網のごとくに造りたるもの。い。蛛網。㊂物の群りて潛み居るところ。巢窟。「賊の巢」 ㊃野菜などを商ふ市。

巢を構(カ)く【句】『すがき(巢搔)を見よ』蜘蛛、網を張る。巢を懸く。すがく。〔古語〕 榮花「おはしましける御帳のうちに、蜘蛛の巢をかきたりければ」

巢を懸く【句】前條に同じ。

巢をくふ【句】鳥、巢を造る。 高光集「鶯の巢をくひそむる梅の花色もにほひもをしくもあるかな」

す 簀【名】㊀篠竹・葦又は割竹にて粗く編める席。㊁すだれ(簾)に同じ。〔簾〕 源氏「女のものやはらかにかきならしてすの內よりきこえたる」

青葉の簀【句】「青葉の簾(スダレ)」に同じ。

す 馬毛【名】㊀馬の尾の毛を細工に用ふるときの稱。㊁馬毛又は細き針金などにて、目を透かしてあみたるもの。

す 鬆【名】『すく(透く)の義』大根・牛蒡などの心、又は煮すぎたる豆腐などに生ずる無數の小さき氣孔。

す 砂・沙【名】すな(砂)に同じ。〔古語〕 山家「なにはがたしほひにむれていでたたんしらすのさきのこがひひろひに」

す 洲【名】海・川などの砂の高くもりあがりて、水の上にあらはれたる所。和名「爾雅云、水中可レ居者、曰レ洲、李巡曰、四方皆有レ水也、和名、須」

洲の先【句】すさき(洲崎)に同じ。〔古語〕 萬葉「大和戀ひいのねらえぬに心無くこのすのさきにたづ鳴くべしや」

す 酢・醋【名】酸味と一種の香味とありて、調味料として用ふる液體。我が國古有のは、玄米を蒸して、麴と水とを加へ、酒を釀すごとくして造り、その下品なるは、腐酒・澁柿などよりも製す。からざけ。

酢が過ぎた【句】程度を超えて利きすぎたることの譬。〔諺語〕

酢だの蒟蒻(コンニャク)だの【句】「酢の蒟蒻の」に同じ。

酢でさいて飮む【句】あたまごなしにこきおろすさまにいふ語。〔諺語〕

酢でも蒟蒻(コンニャク)でも【句】いかにしても度し難き形容。煮ても燒いても。

酢にあて、粉にあて【句】次條に同じ。 五人女「酢にあて粉にあて、一日この事いひやまず」

酢の蒟蒻(コンニャク)の【句】『四の五のを戲れていひしより、訛りしならんといふ』何かにつけて、物言ひをつくるさま。四の五の。すべったのころんだの。酢だの蒟蒻だの。酢にあて、粉にあて。

酢をかふ【句】殊更に事を仕掛く。

酢を譜ふ【句】前條の訛。 國姓爺後日合戰「明(ミン)朝の事構ふまいと思ふ所、らぬが方から酢を譜うて、御無用な奴等」

す 素・索【名】㊀生地(キヂ)のままにてとりつくろはぬこと。「素でゆく」 ㊁花骨牌の札の、一通りの繪模樣のみにて、短册などを畫きそへぬもの。價値は一にして、その數二十四枚あり。すふだ。すべた。

す 爲【動佐變他】なす。行ふ。いとなむ。 源氏「かかるわざは、人のするものにや」

す 爲【動佐變自】㊀おのづから然(シカ)なる。 著聞「和泉式部稻荷へ參りけるに、田中の明神のほどにて、時雨のしけるに、いかがすべきと思ひけるに」 ㊁思ふ。感ず。「ひやひやする」

得(エ)爲(ス)や【句】なし得るか。〔古語〕 萬葉「おもわすれだにもえすやと」 同「旅寢もえすや長きこの夜は」

爲(セ)っしやる【句】『「爲(セ)させらる」㊁の訛。させもらるも敬語の助動詞』なさる。爲(シ)たまふ。「火の用心さっしやりませう」

爲(セ)んす【句】『「爲(セ)られます」の訛。られもますも敬語の助動詞』なさる。爲(シ)たまふ。しやんす。

爲(シ)やんす【句】前條の訛。

爲(シ)さる【句】しなさる。したまふ。 膝栗毛「こりや、こりや、景太、どうしなさるのぢや」

爲(シ)知らぬ【句】爲(シ)馴れぬ。まだ例なき。〔古語〕 萬葉「みちのなか國の御神は旅ゆきもししらぬ君をめぐみたまはな」

爲(シ)て返す【句】しかへす(爲返す)に同じ。

爲(シ)て來(コ)ませう【句】なし來らん。なしに行かん。

爲(シ)て退(ノ)く【句】しおほす。解決す。處置す。

爲(シ)て遣(ヤ)る【句】㊀他のためになす。人のために行ふ。やってやる。㊁欺きおほす。思ふ壺にはむ。しすます。 世間手代氣質「さてこそしてやったと、手を突き、八十兩と申し上ぐれむ」 ㊂くらふ。食す。〔俚語〕

爲(エ)や【句】するか。

爲(セ)う事無し【句】『「爲(セ)う」は「爲(セ)ん」の音便』「爲(セ)ん方無し」に同じ。 浮世身持敗業「せうことなさに伊勢屋へおこしなされました」 膝栗毛「せうことがねえと、不承不承に錢を拂ふ」

爲(セ)さす【句】㊀『す(爲)の役動形』せしむ。爲(ナ)さしむ。〔古語〕 源氏「誦經(ズキャウ)などをこそすなれとて、その事どももせさせせん、願なども立てさせんとて」 ㊁す(爲)の敬語。〔古語〕

爲(セ)させらる【句】㊀『す(爲)の役動形の受動形』せしめらる。㊁前條㊁を一層敬ひていふ語。さっしやる。

せなふ【句】爲(ス)の打消「爲(セ)ぬ」の延。〔古語〕 萬葉「つくるよはすぐはゆけどもあもししが玉の姿は忘れせなふも」

爲(セ)まほし【句】したく思ふ。したし。 千載「包めども堪へぬ思になりぬれば問はずがたりのせまほしきかな」

爲(セ)んず【句】なさんとす。せんとす。 宇治「高名(カウミャウ)せんずる人は、その相(サウ)ありとも、おぼろげの相人の觀ることにもあらざりけり」

爲(セ)ん方【句】なすべきやう。手だて。

しかた。せんすべ。すべ。〔詮方〕 參通「思ひかへせども、せん方知らず覺ゆれば」

爲(セ)ん方無し【句】爲すべき方法なし。爲すべき手段なし。〔詮方無し〕

爲(セ)ん術(スベ)【句】前前條に同じ。〔詮術〕 萬葉「ひとりねてたえにし紐をゆゆしみとせむすべ知らにねのみしぞ泣く」

爲(セ)んずる所【句】しょせん(所詮)に同じ。

せろ【句】爲(セ)よ。なせ。〔東國の古の方言〕 萬葉「こま錦ひも解きさけてぬるがへにあとせろとかもあやに悲しき」

す 令【助動】『下二段の動詞と同樣に活用す』㊀役動の意を示す。しむ。さす。㊁『貴人は他人を使役して爲さしむるより轉じていふ』崇敬の意を示す。㊂『受動の形にて言ひあらはすを恥ぢていへるもの』る(被)㊀に同じ。〔武士の語〕 平治「父刑部丞これを見て、…俊綱擊たせて、命いきでなにかせん」

しやんす【句】『せられますの訛』せらる。たまふ。「行かしやんす」

しやる【句】『せらるの訛』前條に同じ。「行かっしやる」

す 數【接頭】すう(數)に同じ。「數萬の富」「數日」

す 素【接頭】㊀物事のつくらず飾らぬありのままの意。「素語(スガタリ)」「素燒(スヤキ)」「素裸(スハダカ)」 ㊁平凡なる意。「素浪人(スラウニン)」「素町人」 ㊂ただそればかりなる意。 浮世床「形はりうとしてゐるから、なかなか素一分のお客とは見えねえ」 ㊃何もせず、そのままなる意。「素通り」

す 子【接尾】漢語の物名に意味なく添ふる語。「金子」「扇子」「椅子」

ず【名】烟草のやに。〔大阪の語〕

ず 不【助動】打消の意をあらはす。

す-あう 素襖【名】『すあを(素襖)の訛にて、布の襖(アヲ)の意なるべしといふ。す(素)㊀參照』すあを(素襖)を見よ。

すあう 蘇澳【名】〔地〕臺灣東海岸なる蘇澳灣內の良港。東方に面し、東風を避くるに便ならざるも、その他の風向には頗る安全なり。

すあう-おとし 素襖落【名】すはうおとし(素袍落)を見よ。

すあう-ぬぎ 素襖脫【名】すあをぬぎ(素襖脫)を見よ。

すあう-ばかま 素襖袴【名】すあをばかま(素襖袴)を見よ。

すあう-びき 素襖引【名】すあをびき(素襖引)を見よ。

す-あがり 素上【名】引手茶屋の案內なく、直ちに女郎屋にあがること。〔遊廓の語〕

す-あし 素足【名】㊀履物をはかぬ足。はだし。㊁足袋をはかぬこと。 蓍の門松「なさけ口說の崩出づる、雪間に素足、伽羅かをる」

伊達(ダテ)の素足【句】伊達にわざわざ足袋をはかずに、冬の寒さを凌ぐこと。「伊達の薄著」參照。

す-あはせ 素袷【名】襦袢を著ずに、ただ袷のみを著ること。

す-あひ 牙儈【名】『牙は賣買を紹介する者、儈は市人を會合せしむる者の義』㊀物品賣買の仲買をなす行商。男のには牙人・牙儈、女のには牙婆・虔婆の文字を用ふ。〔足利時代の語〕 七十一番職人歌合「すあひ。月のきる雲のころもを賣物やさふらふといふ人も買はめや」 ㊁とりもちする人。なかうど。媒妁。

(㊀すあひ)

す-あひ【名】鳥銃の筒の中。銃腹。

すあひ-とり 牙儈取【名】賣買の取繼をなし、中間にて利益を得るもの。

すあひ-をんな 牙儈女【名】とりもちする女。媒妁女。

す-あへ 酢齏【名】食物を酢にて齏(アヘ)ふること、又その食物。

すあへ-もの 酢齏物【名】酢にてあへたる食物。 兒童「遲き日やすめるは昇るすあへもの」

す-あま【名】㊀すはま(洲濱)に同じ。㊁黃粉(キナコ)と飴とを和し、竹の皮にて包みて、縱に數條のすぢを押附け、斷面の洲濱形をなすやうにしたる菓子。

す-あを 素襖【名】室町時代より、直垂(ヒタタレ)より出で、下等の服として用ひられ、その末年よりは一般に行はれ、江戶時代に至りて無位・無官の士人の禮服と定まりしもの。もと直垂の少しく變化せるにて、ただそれと異なるは、地は布に限り、胸紐にも菊綴(トヂ)にも革を用ひ、菊綴の處に家紋を附し、袖のつゆを省ける點にあり。地色には定制無く、丈は膝までを通例とし、袴には長袴を用ひ、その上下同色なるを上下(カミシモ)といひ、異色なるを素襖袴といふ。すあを。すはう。こすあを(小素襖)・だいもん(大紋)參照。

(すあを)

厚き素襖【句】當の布の素襖を、透素襖(スキスアヲ)と區別して特にいふ稱。

すあを-ぬぎ 素襖脫【名】猿樂の能の時、觀客より纏頭として、役者に素襖をぬぎてとらすること。役者は翌日それを、與へたる人の家に持ち行きて返し、金を與へらるるなり。

すあを-ばかま 素襖袴【名】素襖を著たる時、下に著する長袴。すあを(素襖)參照。

すあを-びき 素襖引【名】古、宴會の時、人に盃をさして、我が著たる素襖をぬぎ、その盃さしたる人に引出物とすること。

すい【名】㊀〔動〕きひばり(木雲雀)の異稱。㊁すぎはらがみ(杉原紙)に同じ。㊂めばる(目張)を云ふ。〔奧羽の方言〕

すい-がい 透垣【名】次條の音便。〔古語〕 源氏「あなたにかよふべかめるすいがいの戶をすこしおしあけて」

すい-がき 透垣【名】『透(ス)垣の音便』向ふの見へすく樣に、竹又は板にて粗くくみたる垣根。四つ目垣等の類。 詞花「本院のすいがきに、あさがほの花咲きかかりて」

すい-がさ 透笠【名】『透(スキ)笠の音便』透きて見ゆるやうに編みたる網代(アジロ)笠。〔古語〕 攝世禮「雜仕は皆馬に乘りて、すいがさ、ただの笠など著て、幾らともなくこそ續きてはべりしか」

すい-ぎり すい切【名】三枚におろしたる魚肉等を、左の方より庖丁をねせ、すくひ切りにすること、又その切りたるもの。〔料理の語〕

すいぐき-な 梵菜【名】〔植〕十字花科に屬する二年生の草本。草は蕪に似たり。山城國加茂に產す。

すい-ぐさ 酸草【名】〔植〕『すいものぐさ(酸物草)を見よ』かたばみ(酸漿草)㊀を云ふ。〔出雲國の方言〕

すい-くち 白芷【名】〔植〕かたばみ(酸漿草)「㊀」に同じ。

すい-けん【名】鮑貝の死にたるもの。

すい-こ【名】〔植〕すいば(酸模)を云ふ。〔加賀國の方言〕

すい-こき【名】〔植〕すいば(酸模)を云ふ。〔上野國の方言〕

すいし 鏃【名】しいし(鏃)に同じ。

すいじ-ぐさ【名】〔植〕すいば(酸模)に同じ。

すい-すい【名】〔植〕いたどり(虎杖)を云ふ。〔關西の方言〕

すいすい-ぐさ【名】〔植〕うつぼぐさ(空穗草)に同じ。

す-いた 簀板【名】木又は竹にて造り、海船にては荷數(ニカズ)の上に、又川船にては航(カジ)に敷くもの。荷船にては、海船も河船も竹簀を用ふ。すべり。

すい-たて 筋立【名】すぢぼう(筋棒)に同じ。

すい-たらし 好いたらし【形二】好ましげなり。氣に入りしやうなり。

すいっちょ【名】〔動〕うまおひむし(馬追蟲)を云ふ。〔東國の方言〕

すいと【名】〔動〕前條に同じ。

すい-と【副】そのまま通り過ぐるさま。ずいと。ついと。

ずい-と【副】前條の轉訛。ずんと參照。

すい-どう【名】〔植〕すいば(酸模)を云ふ。〔畿內の方言〕

すいどう-ぐさ すいごう草【名】〔植〕前條に同じ。

すいと-ぐさ すいご草【名】〔植〕前條に同じ。

すいは【名】すぎはらがみ(杉原紙)を云ふ。〔女の語〕

すい-ば 酸模【名】〔植〕『酸(ス)き葉の音便』蓼(タデ)科に屬する多年生の草。水邊又は山

籬等に生ず。莖と葉とは往往赤ばみて酸味あり。高さ一二尺に達し、纖長にして縱溝あり。葉は槪ね根生にして、長楕圓・箭形をなし、緣邊捲縮し、上面は深綠色、下面は帶白綠色。花は雌雄異株にして、夏莖頂に紅色の花簇り開く。あかぎしぎ。あかじ。すかんぽ。すし。

(ばいす)

すい-ばこ 透箱【名】黃金にて彫りたる透しのある箱。落窪「こがれしてすい箱をころも箱の大さに縮べるに」
すい-ばら 杉原【名】すぎはら(杉原)㊁の音便。太平記「まづ杉原一枚を折りて」
すい-べら【名】〔植〕つるぼ(綿棗兒)を云ふ。〔九州の方言〕
すい-もじ 好文字【名】『文字は、女房言葉の接尾語』すいた人。情人。(專ら女より男に對していふ)
すいもの-ぐさ 酸物草【名】〔植〕かたばみ(酸漿草)㊀に同じ。
すい-らう 透廊【名】すいわたどの(透渡殿)に同じ。
すい-り 巢入【名】扇の要(カナメ)を、金銀又は象牙などにて作り、表裏より揷込みたる物。
すい-り 酢煎【名】酢を加へたる汁にて煮たる食品。すに。
すい-れ 酢煎【名】前條に同じ。
すい-わたどの 透渡殿【名】『透(スキ)渡殿の音便』兩側には柱のみにて、壁なく、勾欄ありて、簾を垂れたる廊下。すいらう。増鏡「それより下ざま、すいわたどの打橋などまで著きあまれり」

(のどたわいす)

すう 數【名】㊀かず(數)に同じ。㊁〔語〕『英Number』名詞又は代名詞に屬する性質の一。卽ち單數・複數の區別。各その條を見よ。㊂卜筮の變化。㊃物事のさだまり。天命。命數。「勝敗の數、未だ知るべからず」㊄ことわり。理。㊅算術。數學。
すう 樞【名】㊀くるる(樞)に同じ。㊁肝要のところ。樞要。
すう 据う【動下二他】㊀すわらしむ。置き定む。おちつかす。伊勢「そのかよひぢに、夜ごとに、人をすゑて」㊁設く。構ふ。㊂おす。捺す。灸點をなす。㊃淨瑠璃にて、節をうちつけて、改めて語り出す。
すう 數【接頭】一より九までのかず。す。
すう【感】氣息を吸込む聲。
すう-あう 樞奧【名】㊀物事の主なる所。蘊奧。㊁物事の祕密なる所。祕奧。
すう-いっち(英Switch)【名】すゐっちに同じ。
すう-えう 樞要【名】物事の最も大切なる點。かなめ。
すうえる(英Swell)【名】すゑるを見よ。
すう-か 數家【名】㊀五六軒前後の家。㊁術數を修めたる人。
すう-か 數個・數箇【名】五六箇ほどの數。
すう-が 趨賀【名】『趨の字の音、正しくはしゆ』急ぎ參上して賀すること。
すう-かう 數行【名】五六個前後ほどの幾つかの行(ギヤウ)。「涙、數行下る」「數行の過雁」
すう-かう 崇高【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』けだかきこと。尊嚴なること。
すう-かう 趨向【名】『趨の字の音、正しくはしゆ』おもむくこと。歸向。
すう-がく 數學【名】〔數〕『英Mathematics』數量及び空間に於ける圖形の性質を論ずる學問。算術・代數・幾何・三角術・微分・積分・測量等、これに屬す。
すうがく-いうぎ 數學遊戲【名】數學を應用せる遊戲。
すう-がくし 數學士【名】さんがくし(算學士)を見よ。
すうがく-ちり 數學地理【名】〔理〕すうりてきちりがく(數理的地理學)に同じ。
すうがくてき-きなふはふ 數學的歸納法【名】〔哲〕『英Mathematical induction』論理法の一。一定理を證明する際、その成立する特別の場合を攷究し、進みて一般に成立することを論定するもの。
すう-き 樞機【名】㊀戶のくるると弩弓の引金と。㊁かなめ。樞要。機樞。㊂樞要なる政務、又は事務。㊃大政。大權。
ずう-き 數奇【名】『命數の不偶なる義。すう(數)㊃參照』しあはせの惡きこと。不遇。不運。
すう-ぎ 雛妓【名】未だ一人前とならざる藝妓。はんぎよく。まひこ。おしやく。
すう-くわい 數回【名】五六回前後ほどの回數。數次。數度。
すうくわう-くわん 崇廣館【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』丹波國氷上(ヒカミ)郡柏原北町に在りし舊柏原藩の學校。元祿中すでに學校の設ありしが、規模のやや見るべきに至りしは、安政四年に本館を新築せしに始まれり。
すうくわう-せい 趨光性【名】〔生〕『趨の字の音、正しくはしゆ』生物が日光の刺戟に感じて、その方向に進行する性。
すうくわう-だう 崇廣堂【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』伊賀國阿山(アヤマ)郡上野町大字丸の內に在りし舊津藩の學校。文政四年藤堂高兌の所建。
すうくわ-くわん 崇化館【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』三河國西加茂郡擧母(コロモ)城內に在りし、舊擧母藩の學校。天明七年藩主內藤學文の創立。
すうくわ-せい 趨化性【名】〔動〕『趨の字の音、正しくはしゆ』バクテリア・精蟲などが、化學的刺戟に感じ、その刺戟物の方に進行する性。
すう-けい 崇敬【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』あがめうやまふこと。
すう-げい 趨迎【名】『趨の字の音、正しくはしゆ』急ぎて出迎ふること。
すうけい-ご 崇敬語【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』けいご(敬語)に同じ。
すうけい-すう 數係數【名】〔數〕『英Numerical coefficient』數字にて書きあらはされたる係數。例へば、3a+4bの3・4の類。數字係數。(文字係數に對して)
すう-げう 蒭蕘【名】すうぜう(蒭蕘)の誤讀。
すうげう-くわん 崇敎館【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』信濃國東筑摩郡松本城內に在りし舊松本藩の學校。寬政五年藩主松本光行創建す。
すう-げつ 陬月【名】『爾雅に「正月爲陬」とあり。陬の字の音、正しくはそう』陰曆正月の異稱。
すう-げん 數言【名】すこしの言葉。「數言を費す」
すうけん-もん 崇賢門【名】大內裡豐樂(ブラク)院の十七門の一。院の南面の門なり。すげんもん。
すうけんもん-ゐん 崇賢門院【名】〔人〕後圓融院の母。藤原兼綱の女。名は仲子。櫻町殿と稱す。應永五年薨ず。
すう-こ 數個・數箇【名】すうか(數個)に同じ。
すう-ご 數語【名】すこしの言語。
すう-こう 數口【名】五六人前後の人口。
すう-こう 趨候【名】『趨の字の音、正しくはしゆ』急ぎおもむきて伺候すること。
すう-こく 數刻【名】數時間。
すう-こん 鬚根【名】〔植〕しゆこん(鬚根)に同じ。
すう-ざい 數罪【名】三箇以上の犯罪。(一罪に對して)
すうざい-ぐはつ 數罪俱發【名】〔法〕同一人にして、二度以上罪を犯したる者の、同時に裁判所の審理に係屬する場合。
すう-さつ 蒭草【名】家畜の食料にする草。かひば。まぐさ。蒭秣。
すうさう-るゐ 蒭草類【名】〔植〕禾本科植物及び荳科植物に屬する牧草の一類。
すう-さん 趨參【名】『趨の字の音、正しくはしゆ』さんすう(參趨)に同じ。
すう-ざん 嵩山【名】㊀高き山。嵩岑。㊁〔地〕支那の五岳の一。河南省河南府登封縣の北十里にあり。伏牛山脈の一支脈。高さ七八〇〇尺。山中及びその附近には寺觀多し。一名、嵩嶽・中嶽。
すう-し 數詞【名】〔語〕數を表すに用ふる語。一・二・ひとつ・ふたつ・第一・第二の類。
すう-じ 數字【名】數をあらはすに用ふる文字。一・二又は1・2又はI・IIなどの類。
すうじ-あんがう 數字暗號【名】『英Figure code』電信暗號の一。少數の數字を種種排列して、多樣の意味を含ませたるもの。

すうじ-うちぬきき 數字打拔器【名】『英Cheque Perforator』ちえつくぱあふおれえたあに同じ。
すうじ-けいすう 數字係數【名】〔數〕すうけいすう(數係數)に同じ。
すう-じつ 數日【名】四五日。五六日。
すう-しん 嵩岑【名】高きみね。
すう-しん 崇信【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』崇敬して信仰すること。
すうしん-ゐん 崇親院【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』平安朝の時、藤原氏が、京都の東五條京極に設けて、その一門の子女の困窮者を收容せし所。貞觀二年藤原良相(ヨシミ)の創設に係る。
すう-しや 趨舍【名】『舍は舍(オ)き止むる義。趨の字の音、正しくはしゆ』その方にむかふと、むかはぬと。出處進退。向背。
すう-しやう 樞相【名】すうみつゐんぎちやう(樞密院議長)の異稱。
すう-じゆう 趨從【名】『趨の字の音、正しくはしゆ』馬に乘りて從ふこと、又その人。馬上の供。
すう-しゆく 蒭菽【名】まぐさと豆と。
すう-じゆつ 數術【名】じゆつすう(術數)に同じ。
すう-しゆん 崇峻【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』山などのたかくけはしきこと。高峻。
すう-しよく 崇飾【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』尊げにかざること。
ずう-ず 誦ず【動佐變他】ずす(誦す)の音便。〔古語〕枕「御前に、人人多くつどひ居て、物語り、よきあしき・にくきところなどをぞ定めいひしろひずうじ」
ずう-ずう【貌】音聲の鼻にかかるさま。
すう-すう【貌】㊀鼻息の細く烈しきさま。㊁すやすやに同じ。㊂隙間などより風の吹入るさま。
ずうずう-ことば ずうずう言葉【名】東北邊の人の用ふる訛り言葉。音聲すべて、鼻にかかりて、ずの音、ことに耳だつ。
すう-せい 樞星【名】北極星中の主要なる星。
すう-せい 數世【名】五六世內外ほどの世代。
すう-せい 趨勢【名】『趨の字の音、正しくはしゆ』向ひおもむくいきほひ。世上のなりゆき。
すう-ぜう 蒭蕘【名】㊀草を刈る人と柴を採る人と。十訓「聖人は蒭蕘にはかるといへり」㊁身分の賤しき者。
すう-そう 雛僧【名】をさなき年頃の僧。小僧。
すう-そう 趨走【名】『趨の字の音、正しくはしゆ』はしりおもむくこと。
すう-た 數多【副】あまた。多く。多數。
すう-だい 數代【名】子孫代代の五六回前後ほど重なりたること。すだい。
すう-たひ 素謠【名】樂器を用ひず、ただ扇拍子のみにて謠曲をうたふこと。
すう-ち 數値【名】〔數〕『英Numerical value』代數中の或文字が代表する數、又その文字を數に直して得たる數。例へば、$a=3$, $b=5$ なるとき、3はaの數値、5はbの數値にして、a^6-b^2の數値は$3^6-5^2=704$なる類。
すう-ちく 樞軸【名】物事の運轉作用の中心。
すうちく-くわんせつ 樞軸關節【名】〔醫〕くわいてんくわんせつ(廻轉關節)に同じ。
すう-ぢやう 蒭場【名】まきば。牧場。
すう-ちよう 數重【名】幾重にもかさなること。「數重の山」
すう-つう 數通【名】書狀又は文書の五六通前後なること。
すう-でん 崇傳【名】〔人〕禪僧。俗姓は一色、足利氏の名族。名は以心。南禪寺の長老。金地(コンチ)院の開山。德川家康・秀忠・家光の三代に近侍して、天海僧正と共に幕府の密議に參し、圓照本光國師の號を勅賜せられ、寬永十年寂す。年六十五。
すうとく-くわん 崇德館【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』越後國古志郡長岡殿町に在りし舊長岡藩の學校。文化五年藩主牧野忠精の創立。
すう-どら 首陀羅【名】すだ(首陀)に同じ。
すう-にん 數人【名】三四人。四五人。すにん。
すうにん-いちざい 數人一罪【名】〔法〕次條に同じ。
すうにん-きようはん 數人共犯【名】〔法〕犯罪の主體が二人以上なる場合。數人一罪。
すう-ねん 數年【名】四五年。五六年。
すう-はい 趨拜【名】『趨の字の音、正しくはしゆ』はいすう(拜趨)に同じ。
すう-はい 崇拜【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』あがめたふとぶこと。しゆうはい。そうはい。歸依(キエ)。
すう-はん 數犯【名】數回の犯罪。「前科數犯」
すう-はり【貌】しなやかなるさま。しとやかにうごくさま。すうわり。艷好劍本地「花の莖ほっそりすうはり、柳の間の廊下傳ひ、人中おめぬ摺足は」
すう-び 崇美【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』けだかく美しきこと。
すう-ふ 樞府【名】すうみつゐん(樞密院)の異稱。
すう-ぷ 肉汁・羹汁(英Soup)【名】動物の肉又は骨、或は荳科植物の種子などを煮出して製したる汁。西洋料理等に用ふ。そっぷ。
すうふく-じ 崇福寺【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』しがでら(志賀寺)に同じ。
すう-ふる【名】ずうふるを見よ。
すう-べい 蒭米【名】まぐさと米と。馬の飼料と人の食料と。
すう-ほう 崇奉【名】『崇の字の音、正しくはしゆう』あがめ戴くこと。
すう-ぼく 蒭牧【名】草を刈ることと牛を飼ふことと、又その人。
すう-まつ 蒭秣【名】かひば。まぐさ。蒭草。
すうまつ-しや 蒭秣車【名】軍隊にて、蒭秣類を運ぶに用ふる車。四輪を有し、無箱前車を附け、車體の緣を高くせるもの。
すう-まん 數萬【數】五六萬前後の數。すまん。
すう-みつ 樞密【名】物事の樞要にして、祕密なる點。
すうみつ-ごんせうし 樞密權少使【名】太政官內の正院の職員。樞密少使を補佐す。明治四年七月に設置し、同年八月に權少內使と改稱す。
すうみつ-ごんだいし 樞密權大使【名】太政官內の正院の職員。樞密大使を補佐す。明治四年八月に設置し、同年八月に權大內史と改稱す。
すうみつ-こもん 樞密顧問【名】樞密院に屬し、天皇陛下の諮詢したまふ重要の國務を審議して答へ奉る憲法上の機關。但し施政上には干與することなし。
すうみつ-こもんくわん 樞密顧問官【名】樞密院を組織して、樞密顧問の職を行ふ親任官。元勳及び國務に練達せる四十歲以上の者を任ぜられ、東京在住の成年以上の皇族男子及び各省大臣は、その身分上又は職權上より、又この地位を有す。
すうみつ-せうし 樞密少使【名】太政官內の正院の職員。機密の文案を草する奏任官。明治四年七月に設置し、同年八月に少內史と改稱す。
すうみつ-たいし 樞密大使【名】太政官內の正院の職員。機密の文案を勘し、位記・官記を掌る勅任官。明治四年七月に設置し、同年八月に大內史と改稱す。
すうみつ-ゐん 樞密院【名】『支那唐宋時代の官衙の名稱を襲用したるもの』天皇の諮詢したまふ重要の國務を審議する最高の顧問府。現制にては、議長一人、副議長一人、顧問官二十八人、書記官長一人、書記官三人を以て組織す。
すうみつゐん-ぎちやう 樞密院議長【名】樞密院會議の首席親任官。樞密院に關する一切の事務を統管し、樞密院より發する一切の文書に署名するを職とし、皇族會議に參列する權利を有す。
すうみつゐん-ふくぎちやう 樞密院副議長【名】樞密院議長の職務を補佐する親任官。議長及び樞密顧問官と共に樞密院を組織す。
すう-む 樞務【名】肝要なる事務。
すう-め 李【名】〔植〕すもも(李)を云ふ。〔美作國の方言〕
すうめい-たう 崇明島【名】〔地〕『崇の字の音、正しくはしゆう』支那江蘇省吳淞府崇